はてしない物語＝壬生川一族、かく戦えけり＝

みかみ　てれん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
はてしない物語＝壬生川一族、かく戦えけり＝

【Ｎコード】
Ｎ７９１０Ｗ

【作者名】
みかみ　てれん

【あらすじ】
「へぇ～、そうか……“死”って意外と柔らかかったのね」
神に力を与えられた彼らは、天界と鬼の争いに巻き込まれてゆく。変わってゆく彼ら一族は人か？　神か？　それとも鬼と成り果てるのか？　世代を変え、めまぐるしく人物を変え、彼らは生き続ける。コメディからシリアスに、時に涙し、そして抗い、燃え尽きるまで。

※こちらの物語は、２００５年7月より、ブログ『ｈｔｔｐ：／／ｍｉｂｕｋａｗａ．ｅｘｂｌｏｇ．ｊｐ』にて、約5年間に渡って

連載された“俺屍プレイ日記”に加筆修正を加えたものです

前書き

※こちらの物語は、
２００５年7月より、ブログ『ｈｔｔｐ：／／ｍｉｂｕｋａｗａ．ｅｘｂｌｏｇ．ｊｐ／ｉ１０』にて、
約５年間に渡って連載された“俺屍プレイ日記”に加筆修正を加えたものです

＝前書き＝

◇俺の屍を越えてゆけ、ってどんなゲーム？

プレイステーションにて１９９９年に発売された、ＲＰＧです
ＯＰで主人公の先祖がいきなり鬼に敗北しちゃいます
それで日本は滅亡する予定が、主人公母の色っぽい懇願（鬼大喜び）により、
京の都は主人公一族がふたつの呪いをかけられただけで、済むのです

その１、短命の呪い――主人公一族の寿命は長くても二年
その２、種絶の呪い――主人公一族は人とアレしても子供が出来ない

もう鬼ですね、まさに鬼
「この鬼！」とかなきり声で叫びたいです、いや鬼なんですけど

さらに同じく鬼にイジメられている神様たちのご加護で、
美女揃い（男神はカエルとかハニワとか擬人揃い）の神様と、子を為すことはかろうじてできるようになったのですが、その1、これがホント酷い
短命の呪いにより、0才でも喋ったり走ったり、刀で斬りつけたり天変地異を引き起こす術を使ったり、
……出来るんですけど、その寿命はたったの二年

生まれてから死ぬまで、二年間ぽっちの人生です

こんな呪いをかけられた一族は、復讐に燃えます

戦い、戦い、戦い抜いて、鬼の部下を倒し、強くなり、
強くなり、より強い子供を産んで、また戦って、戦って、咲いては枯れる花のような人生を過ごし……
いつの日か朱点童子を見事に打ち倒し、京の都を再興するのです

それが俺の屍を越えてゆけ、というゲームの概要です

この物語は、実際に作者がゲームをしたプレイ記録に基づき、作成されております
ゲームモード（難易度）は『しっかり』
※縛り内容は、初見プレイ&攻略サイト／リセット禁止です

お付き合いいただけましたら、幸いです

〜〜

＞僕がコミックの編集者なら　ｈｔｔｐ：／／ｐ．ｔｌ／ＦＹＹｑ
ここんちの小説を原作に、
＞Ｒの追加要素を上手く絡めて、俺屍のコミカライズの企画書をＳＣＥに出すな。
＞どこかやんない？タイトルの認知度は高いし、Ｒの発売に合わせれば、そうそう外れないよ　４／２１

Ｔｗｉｔｔｅｒより、桝田省治氏推薦済

第初話－1　「馬鹿」　1018年4月（前書き）

玄輝　8ヶ月
伊織　4ヶ月

第初話－1　「馬鹿」　１０１８年４月

ひとりの天女が人の男に恋をした
それが全ての、始まりだった

～～

光に包まれた彼は、奇妙な浮遊感を味わっていた
天も地もおぼろげで、自分の形が掴めなかった
「ここは、一体……」
つぶやきは、光に溶ける
いったい自分がなにものなのか、それすらもわからない

そこに、新たな光が産まれた
「お、おお……？」
先ほど現れた光が、ふよふよと漂いながら空から降りてくる
少年の眼前で止まると、光は広がって人の形を作った

それとともに、声
意思ある言葉
世界に意味が産まれる

「勇者の血を継ぐ子、玄輝（げんき）よ、目覚めなさい。あなたに大切な話があります」

そう、
名は玄輝（げんき）
彼の名は、壬生川玄輝（みぶがわげんき）だ

次の瞬間、光の線であった彼は、青年の姿となる

「……俺は、玄輝……」

思考がまとまらない
それもそのはずだ
なぜなら彼の正体は、いまだ赤子であったのだ
神の手により、身体だけが大人のものへと変わったことを、彼は知らない

そんな彼に為された説明
『朱点童子（しゅてんどうじ）』と呼ばれる、凶に仇なす大敵の存在
強者であった両親が朱点童子に立ち向かい敗北したことにより、
その子であった玄輝に与えられたふたつの呪い
“短命の呪い”と“種絶の呪い”
二年にも満たない寿命と、人の間に子を作ることができぬ運命も、彼にはまだ早い
悪鬼羅刹を打ち滅ぼす、などという使命も、あまりにも遠い
生後四ヶ月の彼の手には余った
恐らくそれは、彼よりもよほど神のほうが理解しているらしく、

「最後の希望の光は、あなたの血の中にしかないのですから…」

ああ、俺自身には期待されていない！？　と、幼心に衝撃を受けてしまう

「地上には平和と繁栄を、あなたの血で取り戻すのです」

血で、血で、と強調されてしまう
つまり彼の秘めたる力は途方もないのだが、それは彼ではなく、
その後の代によってようやく意味を持つものなのだろう
この物語では、いかに彼が窮地に陥っても、それを打開する力が
覚醒したりはしない

ただ死に、ただ朽ちる

しかし、そのままでは終わらない
彼が宿命を全うできなくても、子が、孫がそれを継ぐ
玄輝はまだ自分が、長い長い、一族と世界を巻き込んだ戦いの渦
に引きこまれたことを、知らず、到底理解できていない
目の前で浮かぶ光の形をした神の言葉を、飲み込むだけだ

そんな玄輝の前、神は乾いた手を打った

すると現れる、四柱の美女
女神である

「……え？」

唐突な展開に、思わず玄輝も半笑い
生後四ヶ月の青年に、選べ、という
『人とが無理なら、神と子を作ればいいじゃない？』と言ったかど
うかはわからないが、異国の姫の格言のような場面
これなんて卑猥遊戯？　である

いつまでも玄輝がまごまごとしていることに痺れを切らしたのか、歩み寄ってきたのはひとりの女神
赤い着物を気崩したささらノお焔は、竹を割ったような笑みで手を伸ばしてくる
「イイじゃない、タダでこんな良い女を抱けるんだからサ」
抱くとか抱かないとか、意味がまだわからない玄輝０さい
「あー、雲の上までつれてってあげるのは、アタシなんだから！」
と、玄輝の腕を取るのは、まさに天女
飛天ノ舞子だ
「え、いや、その！」
こちらの娘、胸が、その、あの、かなり大きい
一歩離れて余裕気な笑みを見せるのが、お地母ノ木実
「焦ることはないよ。自分に合った相手を選びなさいな」
その悠然とした笑顔は、大地を育む地母神そのものだ
そうして最後のひとりは、光の神よりも離れた位置に立ち、小袖で口元を隠している
「……がんばってください、玄輝さま」
奥ゆかしき女神、魂寄せお蛍
彼女だけは、暗雲立ち込める玄輝の未来に思いを馳せていた
一方、ささらノお焔と飛天ノ舞子に両腕を絡め取られた玄輝は、もうなにがなにやらわからない

「ヽ（。∀。）ノ」

刺激が強すぎた
結局自分で選べなかった彼は、ささらノお焔に押し切られる形となった

「ヽ（。∀。）ノ、ヽ（。∀。）ノ」

〜〜

ささらノお焔が傍らに座って「アンタなかなか良かったヨ」とか言ってる
火を司る神様だけあって、相当に布団の上でも積極的だった、と将来玄輝は語っていたという

〜〜

……あっという間に子は生まれた
人と神の尺度は違う
一瞬を永劫に為すこともできるのなら、その逆もまた然り
誕生したのは、かわいい女の子だ

名前は伊織（いおり）
伸ばした緑色の髪を頭の上でお団子に結った、と赤い目の優しそうな子だ

玄輝はその後、神様から様々な贈り物を受け取る
気取った『黒―青』の着物一式、両親の形見の品の武器防具に、道具
更には元気で明るく、働き者が自慢の女中

そこで彼は自分の両親について思い出そうとしたが、その記憶はおぼろげであった
両親ともに、高名な武士であったらしいが、それについては覚え

ていない
ただ、暖かな腕の感触がかすかに残っているような気がした
あるいはそれは、ささらノお焔の感触の印象があまりにも強すぎて、なにからなにまで塗りつぶされてしまっただけかもしれないが

とりあえず、玄輝は決意する

朱点童子さえ倒せば呪いも消えるそうなので、
難しいことは良く分からんが、頑張ってみるかー、（ﾟ∀ﾟ）ノ
と

＜それから四ヵ月後＞

壬生川玄輝　剣士　０才８ヶ月
伊織　薙刀士０才４ヶ月

両親の住んでいた屋敷に帰ると、玄関でメイド女中が待っていた
「今日から身の回りのお世話をさせていただくイツ花（いつか）です、よろしくお願いしまーす！！」

明るい栗色の髪を長く伸ばして、小さな眼鏡をかけている少女だ
言われた通り元気で明るく、桔梗の花飾りがよく似合っている

「とりあえず風邪を引かないだけが取り柄の私ですから！」

神様の下から派遣されたというイツ花は、神たちを束ねる大神、
大照天昼子（たいしょうてんひるこ）を祭った、由緒正しい神社の将来有望な巫女さんらしい
彼女はグッと拳を握って、斜め上に突き出す

「じゃ、バーンとォさっそく鬼退治にお出掛けください！」
「よし！　っていきなりかっ！？」

まだ家に着いたばかりである
四ヶ月差の娘、伊織なんて、喋ってもいないというのに
しかしイツ花は朗らかに、

「今は戦って戦って、とにかく力をつけること、それしかないンです！」

そんな風に押されたら、玄輝思わずうなずいてしまう
「そ、そうか！」
流されっぱなしの壬生川家初代当主である
「よーしそれじゃ当主さま戦っちゃうゾー！」

「え、あ、あの……」

ようやく口を開いた伊織
第一声は、父親への呆れの声である

「武器や防具なんて後回し、細かい事なんて後回し、出陣！　ヒャッホーイ！」

すっかり気分の乗った玄輝

中身は子供そのものなのだが、誰がどう見ても成人男性の姿をしているので、なおさら痛々しい

「突入場所は、勘と気合で決めちゃってください！」

「分かった、バーンとォ、（ﾟ∀ﾟ）ノ！」

ちなみに現在向かうことのできる迷宮は、

鳥居千万宮（とりいせんまんぐう）、相翼院（そうよくいん）、九重楼（くじゅうろう）、の三箇所である

それぞれに特色や仕掛けがあるのだが、それはまた後々

イツ花は思い出したように、指を立てる

「あ、でもその前にィ、武器や防具はちゃんと装備して、道具も選別してから行かないとダメですからネ、それに説明もパパパっとくらいでいいですから、目を通してくださ……あ、あれ？」

と振り返ったときにはもう、そこには伊織の姿しかなかった

肩を落としながら、娘はため息をつく

「父様なら……もぅ」

伊織が指した先には、『壬生川家最凶』ののぼりをつけた、玄輝の姿が

まるで馬鹿の看板だ

「……伊織さま、しっかり戻ってきてくださいね」

「……頑張ります……」

イツ花に堅く手を握られ、伊織は苦笑いを浮かべるしかなかった

～～

行き先も決めずに走っていった父親になんとか追いつき、伊織は『説明書』と呼ばれる書を広げる
「現在選べるのは、大江山（おおえやま）、九重楼、相翼院、鳥居千万宮の四箇所ですね」
「ヽ（ ゜∀ ゜）ノ」
「大江山は朱点童子の棲む鬼の総本山で、１１月と１２月しかその扉は開かないらしいです。今は４月ですので、三箇所のうち、どこかですね」
「バーンとォヽ（ ゜∀ ゜）ノ！」
「と、父様？」
「大江山に朱点童子がいるなら、大江山に突撃だッ」
「いやだから、まだ四月ですから！　話聞いてなかったんですか！？」
「えー」
「駄々っ子みたいな声！」
「よしじゃあこの、五重の塔の１．８倍高い、九重楼へ向かうゾ！ヽ（ ゜∀ ゜）ノ」
「わ、分かりました、バカと煙は高いところが好きと申しますものね」
「よっし行くゾー！」
ついに娘からも馬鹿認定の玄輝は、元気よく拳を突き上げた

九重楼へと入る直前、ふたりの前にふわふわと人影が下りてきた
「やっ、ボクの名前は――」

にやけた笑みを浮かべたその横を、
「突撃ィィィィ！！」
「父様待ってくださいいいい！」

ドダダダダダ……
砂煙をあげて走りさってゆく壬生川家の親子

残された影は、肩を竦めながら乾いた笑みを漏らす

「……キミたち一族を助けるように言われてきたんだけど、ね……
アハ、ハハ」

第初話－1　「馬鹿」　1018年4月（後書き）

出陣・九重楼（玄輝・伊織）

第初話－2　「却走」　１０１８年４－５月（前書き）

玄輝　９ヶ月
伊織　５ヶ月

第初話－2　「却走」　１０１８年４－５月

＜九重楼・玄輝＞

林の中を、中央の塔に向けて突き進む壬生川一家
首切り大将、鬼ワラ、手目坊主、ドーマン僧、雲霞のごとく湧いてくる魔物を総称して“鬼”と呼ぶ
塔へと向かう道に、無数の“鬼”が立ちはだかる

玄輝（げんき）の獲物は刀、伊織（いおり）は薙刀
どちらも戦などしたことはなく、鍛錬すらもわずかな日数しか費やしていないはずなのに、鬼と対等以上に渡り合うことができた
これこそが、ふたりの身体を流れる『神の血』の効力である
でたらめに振り回した刃すらも岩を断ち、力任せに叩きつけた柄が鉄を砕くのなら、武術など修めずとも戦い抜くことはできるのだ
それこそが、壬生川（みぶがわ）家
神と“交神（こうしん）”したものの御力である

～～

しかしいかに力が強かろうが、頭までよくなるわけではなかった
「傷を負ってしまったけれど、誰も回復を使えない！（。д。）」
道端に座り込んでいた玄輝が、この世の終わりのような顔をする
そこに、静かに道具袋を差し出す伊織

「……私が、いくつか丸薬を持って参りました。これで体力を回復できます」
「（ ゜д ゜）ウマー」
「……父様（ホロリ」
序盤の若葉ノ丸薬（わかばのがんやく）は、大事なのだ

～～

「奥へ進め進めー、ヽ（ ゜∀ ゜）ノ」
「と、父様……私の健康度（けんこうど）が損なわれる前に、退却してくださいね……？」
体力が減った状態で戦い続けると、“健康度”が減少してしまう
「ヽ（ ゜∀ ゜）ノ」
「健康度が減った状態で帰ると、下手したら私、死にますからね……？」
そして、健康度が一定以下の状態で帰還すると、死亡する可能性が生まれる
伊織の顔色は、少し青くなっていた
「ヽ（ ゜∀ ゜）ノ」
「き、聞いているのかな……？」
さすがにというかなんというか、玄輝と伊織を比べると、あらゆる面で玄輝の能力が優っているのだ
伊織は足手まといにならないようについていくので精一杯だ
「ぜぇ、父様、そんなに走っていったら、体力が……わ、わたしたち、×ダッシュするごとに体力が減るんですから……」
「ヽ（ ゜∀ ゜）ノ」
「体力がぁぁぁぁぁ」

～～

討伐の残り帰還も、あとわずか
ふたりは奥へ奥へと進んでいた

（六年坂ってココ、もしかして割と奥なんじゃ）
「よし伊織、帰ったらパパ子供作っちゃうゾー」
「え、あ……は、はい？」
突然の子作り宣言に、傷だらけの娘はどういう反応をすればいいのか
しかし、玄輝は至って真剣だ
「そのためにもたくさん戦って奉納点稼がなきゃナー」
奉納点をより捧げれば捧げるほど、高位の神と子を為すことができる
そうすれば、さらに強い子が誕生するのだ
一族は四人まで進軍することができるのだから、今は家族の数が多ければ多いほどが良いに決まっている
伊織は思わず玄輝を見返す
「え、父様がイノシシのように進んでいたのって、何も考えてなかったわけではなかったの……？」
そして、奉納点を手に入れる術は、鬼を狩るしかない
父は笑う
「当たり前サー、（ ゜∀ ゜）ノ」
（何て信じられない目をしているんだろう）
これには娘も半信半疑
「そして四人ＰＴを組んで、親子四人で朱点童子を討つ！　万事解決！」
「父様……」

しかしながら、半分は信じてしまう伊織であった

～～

再び、奥地

「七天門ー、（ﾟ∀ﾟ）ノ」

「次からは絶対、回復の術を覚えてこよう……そうしよう」

「む、かがり火が全部消えてしまう！」

「今月の探索は終了ですね。かばんの中ももういっぱいですし、帰りましょうか父様」

火時計が全て消えてしまうと、その月の探索は終了となる

帰還するか、さらにひと月残って探索を続けるかを選ぶことができるのだ

ただし月をまたいで探索を続けた場合、全ての能力が低下してしまう

玄輝は即座に決断をした

「うむ、続行、と、（ﾟ∀ﾟ）ノ」

「父様ぁぁぁぁっぁぁぁ」

～～

というわけで、１０１８年の５月である

林道を抜けると、ついにふたりは九重楼へと続く門の前に出た

「八起苑に着いたが、ここは一体」

「父様、アレはここに巣食う鬼ですよ！」

伊織が指さす先には、巨大な達磨のような化物がいた
今までの雑魚とは、そもそも大きさがまったく違う
となると、その身体から放つ重圧もだ

ふたりの意見がまっぷたつに割れる
「なにぃ、退治せねば！ヽ（ °∀ °）ノ」
「いやいやいやいや戻りましょう、私たちでは太刀打ちできませんって！」
となると当然優先されるべきは当主の意見
「覚悟ォォォ！」
「いやぁぁぁぁぁぁっぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
七天斎八起（しちてんさいはっき）「ファーッファッファッファ」

戦いが、始まる

鬼の一撃で、最大体力１５２の玄輝が一撃７２も食らう
「（ °д °）」
これにはさすがの玄輝も唖然
「だから言ったじゃないですかお父様ぁぁぁぁ！」
早くも漂う、『これは無理だろ』感
玄輝はすかさず指輪を空に掲げる
「ええい、必殺！　当主の指輪！」
一回の討伐ごとに、一度だけ使える、秘具である
先祖の英霊が今ここに蘇り、七天斎八起を乱切りするだが、しかし……
「き、効いてませんよぉ……」

そのダメージすら、門番の鬼の回復の術一回で、癒されてしまう！

かといって、退却できない以上、負ければ即、死が訪れる

諦めることは許されない

「こうなったら、持ってきたアイテム全部使って、総力戦だ！」

当主の指輪に続き、ナマズの符を惜しげもなく使うが、一向に体力の減る気配がない！

対する七天斎八起は、そんな微量なダメージすらも念入りに＜お雫＞の術で体力を回復させてゆく

「父様……」

もう、持ってきた癒やしの丸薬も尽きてしまった

「くっ、通常攻撃は通るんだけどナ……！」

そのとき、伊織はもう覚悟を決めていた

齢０才４ヶ月の少女が、

額から血を流しながら、前に歩み出る

「……父様、どうか、生きてください」

唯一七天斎の体力を奪える剣士・玄輝がやられては、と、

伊織は少ない体力で当主をかばう

「伊織！」

「もう、無茶ばかり、しないでくださいね……」

娘の覚悟を無駄にするわけにはいかないと、さすがの玄輝もここ一番に奮闘する

もし彼に秘められた力が眠っているのなら、ここでこそ開花すべきだろう

だが――

そういった“慈悲”は、ない

玄輝の心意気も叶わず、伏せる二人

敗走した壬生川一族、命からがら京へと逃げ延びたのであった……

＝１０１８年　６月　屋敷に戻り＝

「いやぁ、参った……最初からボスに挑むものじゃないな……」

一ヶ月の休養で何とか傷も癒えた玄輝

包帯だらけの肩を抱きながら、さすがに反省をしていた

「伊織が色々補助してくれねば、もっと早くに命を落としていたか……」

九重楼の門番の相手にもならなかったという現実

どうやら朱点童子を討つためには、まだまだ力が足りないようだ

それでも当主の玄輝はへこたれない

「しかし、新しい巻物も一本手に入った事で。実りのある良い旅だったとは言えないだろうか！ヽ（。∀。）ノ」

強敵の強さを知ることにより、今の自分の身の丈がわかる

それもひとつの収穫であった

居間に座する玄輝に、影が落ちた
見あげれば、イツ花
出陣の前に見た、あの笑顔は欠片もない
玄輝にすら、ただならぬ事態だと知れた

「玄輝様…！」
「ん、イツ花……？　そういえば、伊織の姿が見えないが……」
「玄輝様…！　命の炎が燃え尽きようとされている方がいらっしゃいます」
「え、」
「お気を強く持って、こちらへ……」

イツ花に連れられて、玄輝は娘の寝間へとやってきた
そこには、布団の上に横たわる伊織の姿があった

伊織「神様…　いい夢を、ありがとう…」

壬生川　伊織　享年五ヶ月

玄輝はしばらくジッとしていた
伊織の亡骸の傍で、呆けたように座っていた

初陣、娘の死
それらの現実を受け止めるには、玄輝はまだ幼すぎたのだ

第初話－2　「却走」　１０１８年４－５月（後書き）

出陣・九重楼（玄輝・伊織）　伊織・落命

第初話－3　「孤立」　1018年6月（前書き）

玄輝　10ヶ月

第初話－3　「孤立」　１０１８年６月

＜交神の儀＞

広い壬生川家に壬生川一族がたった一人

ぽつーん

「す、隙間風が……」

室内なのにびゅうびゅうと風がなだれ込む、そんな雰囲気に途方に暮れる玄輝

伊織がいなくなってから、ぼんやりと佇むことが多くなった

だが、いつまでもこうしているわけにはいかない

彼は自らの頬を張って気合を入れる

「え、ええい、交神の儀だ、子孫繁栄だ！」

ちなみに平均寿命2才というと、ネズミとほぼ同程度ということになる壬生川家

つまり、飢え死がないにせよ、ネズミのような早さで子供を産まないと滅亡してしまう計算になってしまう

というわけで、早くも壬生川家滅亡の危機に、今月は子作りに励むと決めた玄輝

料亭のおしながきのような神様一覧表と、お家の奉納点を見比べる

「どの神様と交わるか、迷ったら時間が惜しいです」

「いやでも、これだけいるとなぁ」

うーんと腕組みする
「ならこの際、顔で決めちゃいましょ！」
「よしじゃあ顔で決めるかっ、ヽ（ ゜∀ ゜）ノ」
というわけで、玄輝は奉納点ギリギリの女神を選ぶ

「よしじゃあ、水母のくららさんだ」
言われた通り顔で決める玄輝
水色の髪に、伝来した陶磁器のような肌、奥ゆかしそうな瞳が色っぽい

「おしとやかな方が好みなんですね！」
笑顔で了承するイツ花（いつか）
玄輝とささらノお焔の間になにがあったか、彼女は知らない

水母のくらら「はい、承りました…」

というわけで、あっという間に交神の儀は終わり……

「お子様に会えるのは、今から1ヶ月後ですから」
「なるほど、ガチャガチャみたいにポンと出てくるわけではないのか」
「いや一応神様にもご準備がありますから……」

第初話－3　「孤立」　１０１８年６月（後書き）

交神の儀・玄輝×水母ノくらら

第初話－４　「有縁」　１０１８年７月（前書き）

玄輝　１１ヶ月

第初話－４　「有縁」　１０１８年７月

＜続・交神（こうしん）の儀＞

「さて、今月は」
「よーしきょうも結ばれちゃうゾー」
「ヤッてばっかりですね、当主様」
さらりととんでもないことをつぶやくイツ（いつか）花
聞き流す玄輝（げんき）
なにはともあれ、人、である

「……福招き　美也、ってこれ、倫理的に大丈夫なのか」
擬人化した黒猫のような容姿
「どこからどう見ても、中学生ぐらいじゃないか？」
「神様ですから、容姿とご年齢は関係ありませんって！」
「そ、そうか」
「それを言ったら、当主様とかまだ生後十ヶ月じゃないですかァ」
「本来ならまだ赤子か、俺は……」

福招き　美也「にゃははは」

交神の儀も三度目、さすがに慣れてきた玄輝である

＜第二子誕生＞

「当主様、先月交神の儀を結んだ水母ノくらら様より、お子様を預かってますよ！」
「おお」
「洗濯とお掃除が大好きな男の子で、助かってますっ」
「人の息子に何をさせているんだっ！？　女中！」

「さ、名前と職業をお選びになりましょ」
「お、おう」

委任で命名、名前は臥蛇丸（がじゃまる）だ

「なんともまぁ、勇ましい名前だな」
鬼を対峙する一族にはふさわしいだろう
「職業はどうなさいますか？」
「そうだな、薙刀士がいいなー」
「当主様……」
「何だか後ろに薙刀士が控えてないと、背中がスースーしてなぁ、（。∀。）ノ」
一瞬ほろりとするも、その何も考えてなさそうな玄輝の顔に思い直すイツ花だった

「よろしく御願いします。お父様」
恭しく一礼する、臥蛇丸（がじゃまる）
長身で、緑色の髪を後ろに流している赤目の美男子だ

「さすが水母ノくららの息子、言葉遣いが丁寧なっ」
「玄輝様に似てませんね、素晴らしいです！」
「……イツ花」
ジト目でにらむが、イツ花は気にしない
頬に手を当てながら、まじまじと臥蛇丸を観察する
（なんだか、伊織さんの面影が残ってますねェ）
火系と水系、正反対の女神の子供なのに、不思議なものだ

玄輝はやってきた息子に向けて、笑みを見せる
「よーしそれじゃあ、早速薙刀の修行だ！　なにはともあれ、強くなきゃいけないからな、ヽ（。∀。）ノ」
ひゃっほう、と庭に降りると、臥蛇丸も慌ててついてくる
「は、はい、お父様」

そんなふたりの姿を、イツ花は暖かく見守る
「玄輝様、ようやくお元気になられましたね……」
微笑むイツ花であった

第初話－４　「有縁」　１０１８年７月（後書き）

交神の儀・玄輝×福招き美也　臥蛇丸↓薙刀士・初見

第初話－5　「双美」　1018年8月（前書き）

玄輝　　1才

臥蛇丸　1ヶ月

第初話－5　「双美」　１０１８年８月

＜お買い物＞

「じゃあ今月は、売買で道具などを購入しておくか！」
庭の縁側で右手を空に突き上げて、決意表明する玄輝（げんき）
いつもの突飛な行動に、洗濯板で肌着を洗っていたイツ花（いつか）がビクッ
「ど、どうしたんですか突然？」
玄輝はしたり顔
「いやホラ、丸薬とかないと困るかもしれないと、気づいてな！」
携帯鞄の中の道具は、前回の死闘でスッカスカになったのだった
遅すぎる当主の決断にも、できた娘のイツ花は笑顔
「当主様はここで指示するだけ、イツ花がお使いに走りますよ」
「いやぁ、家にいても臥蛇丸（がじゃまる）の訓練だけだし、京の町とやらも見てみたいんだよな」
ぞんざいに扱われる臥蛇丸の訓練
だが、そわそわと落ち着きのない辺り、やはりまだまだ子供なのだ
イツ花は額の汗を拭い、よいしょっと立ち上がる
「はいはい、それじゃこれを干したら、一緒に参りましょうネ」

「年に1度はお蔵の肥やしを景気よく売っちゃって、スッキリするのも良いですよ」
かっぽかっぽと町を歩きながら、世間話に興じるふたり
「一回の出陣で、ずいぶん持ち物が溜まるもんなー」
玄輝は頭の後ろで腕を組む

「あーでもぅ、お買い物のほうはかなり投資してあげないと、ゼ～ンゼンお話にならないんですよー」
「何ぃ」
「朱点（しゅてん）のおかげで都は荒れ放題！　まともな品揃えのお店なんか１軒もありゃしないンですもん」

そうしてお店に入るも、イツ花が言ったような散々な現状とは思えなかった玄輝

「でも、結構にぎわっていないか？」
「あ、これは、復興のおかげですネ」
「復興？」
「復興は朱点童子に荒らされたこの都に、美しさと賑わいを取り戻すための投資です！」
身振り手振りを交えつつ解説するイツ花
「ほほー、立派な奴もいたもんだナァ」
「お金をつぎ込んでェ、店が増えれば商品も増える！　腕のいい職人さんも集まってきます！って、あのー」
「うん？」
「お店に復興のお金を援助してくださったの、その、伊織（いおり）様なンですよ」
おずおずと切り出すイツ花
「ははぁ」
「帰ってきてからです、怪我で床に伏せながらも、これからのために、って……」
「なるほど」
武器屋や防具屋を、目を細めて眺める玄輝
「器量のよい娘だったなぁ」
「……」

その後、玄輝は一ヶ月間、臥蛇丸の薙刀の訓練を行った
臥蛇丸はその素質を、メキメキと伸ばしていくのであった

＜賑やかになる壬生川家＞

「当主様、福招き美也様の下より、双子をお連れしました！」
「双子！」
「奉納点がお得ですね！」
「ヒャッホーイ！」

いつも以上に楽しそうなイツ花の笑顔に、玄輝も膝を叩いて喜ぶ

「それに、おふたりとも、女のお子様です！」
「なにぃ！　でかしたぞイツ花！」
「別に私が産んだわけじゃありませんけどネ！」
「なら今度はお前が産んでみるか！？　なんつってな！」
「アハハ、当主さま！　私が身ごもっても産まれる前に当主さま死んじゃいますよ！」

軽いセクハラに対する返しは、壮絶なブラックジョークであったと、それはともかく、

本来なら駆け寄って赤ん坊を抱きかかえるのだろうけれども、あいにく短命の呪いにかかっている壬生川家の稚児は、来る頃にはもう常人で言う、5歳くらいの背丈の子供だ
というわけで、双子は堂々と襖を開けて、父の前に顔を出してきた

緑の髪、茶の目を持つ、後ろで髪を結い上げた凛々しい娘が夏海（なつみ）
ふわふわの水色の髪、紫の目に、のんびりとした娘がのの（ののか）の香

「よし第一印象から、夏海（なつみ）は剣士、のの（ののか）の香は弓使いだ！」
「はーい、お父上」
「はぁ～い、パパ」
見た目に反して、軽い口調のふたり
特にのの香は、ずいぶんと間延びしている
「ぱ、パパ！？」
玄輝もさすがに驚いた
イツ花も感心する
「さっすが美也様に似て、ご奔放ですネェ」
「……そのうちニャとか言い出すんだろうか」

生まれてから屋敷に来るまでの教育は、神様がするのか
これから交神相手は慎重に選ぼう、と心に決める玄輝であった

その後、玄輝とイツ花は町へ復興の支援へと向かう

＜屋敷にて、臥蛇丸ｖｓ双子＞

屋敷に残った臥蛇丸は、年長者として双子に挨拶をする

「僕は臥蛇丸（がじゃまる）、ふたりとも宜しくね」
伸ばした手を一瞥する夏海

「私たちにお兄上がいると聞いて、どんな方か思っていたら……なんか、普通ね」
「な！？」
ののの香がくすくすと笑う
「それに影薄そう～」
「なな！？」

会ってそうそう手加減のないちびっ子の双子だ

「こんなのが当主になったら、きっとお決まり事やしきたりにうるさそうな、お家柄になりそうねー」
「17時門限になっちゃったりぃ～」
「ケータイメール勝手に見られて『おい夏海、この男の名前はなんなんだい！？』とか」
「さいて～」

良く分からない事を言い出すふたり
臥蛇丸はたじろぐ

「き、君たちは、お母様からどんな教育を受けてきたんだ……？」

自分の母親くららとのギャップに、臥蛇丸は思わずたじろぐ

「別に？　普通よ、ねえ、ののの香」
「にゃは」
笑顔だけは無垢な童のそれだというのに

「と、とりあえず宜しくお願いするよ、これからも……」
懲りずに握手を求める臥蛇丸だったが、やはり夏海も応じない
代わりにずばっと言い放った

「言っておくけれど、次期当主の座はあなたには上げませんからね」
「な！？」

後ずさりする臥蛇丸
自分の胸元ほどしかない背の妹に、気圧される気弱な兄の図である

「のの香が当主になったらぁ、毎日絵師さん呼んでぇ、美人画にしてもらったりぃ～……きゃ」
「ああ、それも面白そうね。じゃあ行きましょう、のの香」
「はぁ～い、なっちゃん～」

ばいばいも言わずに立ち去ってゆく双子たち
そんな妹の衝撃に、臥蛇丸はがくがくと震えだす

「が、臥蛇丸、しっかりせねば……あの二人が当主になったら、壬生川家が終わってしまう……！」

生後２ヶ月にして、臥蛇丸は長男としての責任と、壬生川家の未来に怯えてしまうのであった

第初話－5　「双美」　１０１８年８月（後書き）

訓練・玄輝→臥蛇　夏海→剣士／のの香→弓使い・初見

第初話－6　「独力」　1018年9月（前書き）

玄輝　　1才1ヶ月
臥蛇丸　2ヶ月
夏海　　1ヶ月
のの香　1ヶ月

第初話－6　「独力」　１０１８年９月

夏の終わりを感じさせる、小雨の降る朝

「あの、お忙しい中、宜しいでしょうかお父様」

当主の間

正座して襖を開く臥蛇丸（がじゃまる）

「おー臥蛇、どうした難しい顔をして」

父――玄輝（げんき）が寝転びながら読んでいるものが、週刊『京美人の落とし方』だとは知らない臥蛇丸が、かしこまって現れる

「いえこの顔は生まれつきですが……」

「そうかそうか、そういえばお前はそんな顔をしていたな、（。∀。）ノ」

「はあ……」

適当にもほどがある

しばらく黙り込んだ後、臥蛇丸は顔をあげた

「あの、お父上の跡継ぎは、もう決まってらっしゃるのですか？」

もやもやしているよりは聞いてしまった方が早い、と一気に尋ねる

玄輝は間髪入れずにうなずいた

「うむ、決まっているゾ」

予想外の答えに息を呑む臥蛇丸

「！……迷いがないとは、さすが、お父様だ……あの、ご僭越なが

ら、どなたが次期当主に抜擢されるのでしょう？」
「そりゃぁ普通は長男がなる、って決まっているんだろうけど、俺の場合は一味違う」
本を閉じて、玄輝はにやりと笑う
（まさか……！？）
臥蛇丸の脳裏に、角の生えた双子の顔が浮かんでは消えてゆく
その直後、玄輝が親指を立てた
「一番強い奴が当主になる！」
「……へ」
それはまだ決まっていない、ということでは
「そして絶えず強い血を残していくのだ、一刻も早く朱点童子（しゅてんどうじ）を討つためにな」
玄輝は目をギラリと輝かせて、剣士の顔になる
「そ、そうですか……なるほど……」
臥蛇丸は生唾を飲み込む
（お父様も、鬼退治の事を真剣に考えていたのか）
普段は脊髄反射で生きているような父を見て、考えを改める
だが……
「朱点童子さえ倒してしまえば、一日中ゴロゴロして、寝て食って寝ていいんだろう？　いいなあ、俺も朱点童子を倒したい！　役目を終えて、だらけたい！　ラクしたいぞ！」
「……」
改めた考えを、さらに改めようかと思う臥蛇丸だった

＜二度目の出陣と父子＞

陣羽織を着込んで、刀を腰に差す玄輝
「よしそれでは、行って来るぞ！」

生後２ヶ月の臥蛇丸と１ヶ月の夏海（なつみ）との（ののか）の香はまだ戦場には出られないため、玄輝たったひとりでの出陣となる

「気をつけてねー」
「お土産に術を取ってきてくださぁ～い」
「お、お父様おひとりで、大丈夫ですか……？」
皆で屋敷の外までお見送り、である

子供たちは三者三様の表情
普段通りの夏海に、ニコニコとしたのの香、かたや臥蛇丸は心配そうに父を見つめている

そんな臥蛇丸を、夏海たちが冷やかす
「えー臥蛇丸兄上ってば、お父上が信用出来ないんですかー」
「できないんですかにゃ～」
嫌な笑みで兄のわき腹をつつく妹ふたり
「そ、そのような意味ではない！　ただ、お父様は無茶をしすぎるきらいが……」
「大丈夫大丈夫、最近勉強して、＜泉源氏＞の術も覚えたしな！、（ ゜∀ ゜）ノ」
泉源氏とは、最下級の回復術のことである
「これさえあれば、いくらでも戦えるんだろ？　無敵！　俺無敵！

丶（ °∀ °）ノ」
（心配だ……）
思わず胸を抑えてしまう臥蛇丸

「そうそう、忘れるところでした」
「無敵当主チョウゲンキー！丶（ °∀ °）ノ　って、ン？」
夏海が臥蛇丸の横を過ぎ、玄輝の前に立つ
「お父上、せめてもとこちらをお持ちください。＜引波の御守＞と言って、危険な戦闘からすぐに撤退することができます」
ニッコリ
臥蛇丸が一度も見たことのないような笑顔で、父に御守りを渡す
夏海
玄輝も喜びながら受け取る
「おお、そいつは便利だ、良いゾ良いゾ」
思わぬ娘の贈り物に、玄輝は夏海の頭をくしゃくしゃと撫でる

（あ、あんなもの、いつの間に持っていたんだ……！？）
臥蛇丸が訓練に明け暮れている間、夏海は遊び歩いているものだとばかり思っていたのに

「パパ、元気で帰ってきてね～」
今度は、どさくさにまぎれて抱きつくのの香
「うむ、ありがとう夏、のの」

（え、僕の名前は！？）
世渡り上手な妹を眺めながら、途方にくれる臥蛇丸であった

＜途中道＞

黄川人（きつと）「やあ！」

ふわふわと漂ってくる幽霊に、思わず刀を向ける玄輝

「え、誰！？」

「今日は黄川人くんの戦闘初級こうｚ……って、前にも一度会った、よね？」

「いや誰」

「……ほら、緑の髪の女の子と一緒に、九重楼に行ったじゃないかァ」

「とっつげーきぃ！、ヽ（ ゜∀ ゜）ノ」

「いやだからちょっと人の話を聞きなさーーい！！」

こうして剣士・玄輝のひとり旅が始まった

＜鳥居千万宮（とりいせんまんぐう）＞

『赤青黄緑の４色の鳥居のうちの１色が、本道へ続く唯一の道です
季節によりつながりが変化するので、ややこしそうなンですが、
規則を覚えてしまえばカンタン！！
お稲荷御殿にはキツネに取り付かれて、
鬼に変じたかわいそうな女の人の幽霊が出るってウワサです
土と火の属性が高い鬼や妖怪がやや多いようです』

イツ花の渡してくれたメモを見ながら、首をひねる玄輝
「土と火の属性が高い鬼って、だからどうなんだ……？」
もっとわかりやすく書かなければ玄輝が理解できないことは、イツ花の想定外だったようだ
次は漢字もなるべく少なくしてもらわねばならない
「ま、いいか、ヽ（。∀。）ノ」
急くものも止めるものもいない一人旅だ
とりあえず玄輝は、先に進むことにした

「どんな雑魚を倒すのにも同じだけターンがかかるって、ひどいな！」

「こりゃ、泉源氏が使えなくなったら、すぐさま撤退だな……」

「ちくしょう、全部独り言か……」

イツ花や娘たちの作ってくれた握り飯を食べながら、なお頑張る父

「疲れたヨー」

「あら当主様、わたくしが癒してさしあげてよ」

「え、お前は……？」

「誰だって良いじゃない……ホラ、こちらへいらっしゃい……」

「まぁ、一人芝居なんだけどナ」

「ふぅ……さ、帰るか……ゝ（ ﾟ∀ ﾟ）ノ」

３００ほど奉納点（ほうのうてん）を稼ぎ、玄輝は五体満足で帰路へ着いたのであった

第初話－６　「独力」　１０１８年９月（後書き）

出陣・鳥居千万宮（玄輝）

第初話－7　「水練」　１０１８年１０月（前書き）

玄輝　　１才２ヶ月
臥蛇丸　３ヶ月
夏海　　２ヶ月
のの香　２ヶ月

第初話－7　「水練」　１０１８年１０月

勢いよく、父の部屋の襖を開く
「お父様、今月から僕も戦えます！」

勇んで鉢巻まで締めた臥蛇丸（がじゃまる）の前、パチッ、というのん気な音が聞こえてきた

「お父様……？」
玄輝（げんき）の正面に夏海（なつみ）が座している、ふたりはどうやら囲碁をしているようだ
「おー、お前ももうそんな年か」
パチと玄輝が指し、間髪入れずに夏海が返す
「え、ええ、ですから！」
「おっし、それじゃ一ヶ月待って、来月から出陣だ。夏ののも戦えるようになるしな……って、どうした臥蛇」

玄輝の横目、床に崩れ落ちる臥蛇丸

「い、いえ……何でもありません」
パチ、とようやく玄輝が指したが、再び夏海が即打ち返す
「む、むぅ……」
「お父上、意外と弱いのね……」
困った顔の夏海に、玄輝が顔を赤らめる
「ば、バカな！　こっから世紀の大逆転イン壬生川家だ！」

２ヶ月の娘に良いようにあしらわれる玄輝

父がうなりながら打った手も、すぐに夏海に見切られて勝敗は決したようだ

「いやー参った、どうやら夏は戦術の才能があるんだろうナァ」
額を叩いて悔しがる
「そうなのかなぁ、自分では良く分からないんだけど……」
「うむ、俺があっという間に負けるなんて、それが証拠だ！」
（……アテにならない）
夏海がうなる
玄輝は立ち上がり、さっさと碁盤をしまう
それから首を鳴らして、臥蛇丸に向き直った

「よしそれじゃ、俺は飯の後でののを訓練するから、臥蛇は夏を指導してくれな」

「え、えええ」
「えーーーー」
同時に声が上がった

「ん、どうした？」
なにも知らぬは父ばかり
「臥蛇のが一個年上だろう？　薙刀相手だからこそ、結構な訓練になると思うぞ？」
夏海が父にすがりつく
「お、お父上、囲碁の続きしよう！　して！」
「いやだから俺はののを」
「うー」
「ううう……」
口を尖らせる夏海と、その隣で諦めムードを漂わせる臥蛇丸であった

～～

庭に出て、夏海とふたりっきり
なぜだか、すごく空気が冷たかった
「……」
素振りをする夏海の隣で、身を切るような寒さに凍える
（……おかしい、まだ１０月だというのに……）
「……」

あまりの緊張に、思わずいらぬ言葉をかける臥蛇丸

「……ええと、脇が、甘い、ですよ？」

何故か敬語の臥蛇丸

「……ああ、こう？」
「……え、あ、はい」
「……」
寒風が吹きすさぶ

（な、何て息が詰まる訓練なんだ……！）

顔には出さず涙する臥蛇丸であった

～～

一方、玄輝のお部屋ではののの香が術を覚えるために、読み書きの勉強をしていた

「いろはにほへと〜」
「うむ、早くののの香も一人前にならないとな」
「のの香頑張るをわかよ〜」
「混ざってる混ざってる」

進み具合を眺めながら、玄輝は思わずうなる
「ふぅむ、のの香は弓も達者だが、それ以上に術の才があるのかもしれないな」
「新しい術を覚えるのって大好きぃ」

にっこりと言う

「何だか、術をいっぱい覚えていると頭良く見られそうだからぁ」
「なっ――なるほどォ！！」
それ自体もあまり頭の良い発想ではなかろうに
玄輝は目を輝かせた
そしてのの香の横、玄輝もまた術の書にかぶりつく
「パパ、一緒に頭良く見られようね〜」
「おう！」
娘よりも必死な父ここにひとり
そんな父親を見て、のの香は楽しそうに微笑んでいた

第初話－７　「水練」　１０１８年１０月（後書き）

訓練・玄輝↓のの　臥蛇↓夏海

第初話－8　「四始」　１０１８年１１月（前書き）

玄輝　　１才３ヶ月
臥蛇丸　０才４ヶ月
夏海　　０才３ヶ月
のの香　０才３ヶ月

第初話－8　「四始」　１０１８年１１月

一家四人、居間に集合する

それぞれが雄雄しい黒と青の羽織を着て、戦衣装での登場だ
「というわけで、お父上」
「今月からぁ、よろしくお願いしまぁ～す」

剣士の夏海（なつみ）と弓使いののの（ののか）の香も、なかなかに似合っていた

「これで初めての、全員出撃隊だな、ヽ（ ゜∀ ゜）ノ」
「ええ、この刀、お父上のために振るいたく存じ上げます」
「ふつつかものですけど、術でしっかりさぽーとしますにゃ！」
「いやぁ心強い、しっかり頼むゾ」

勇ましい姉妹に、当主玄輝（げんき）もご満悦だ
負けてはならぬと、臥蛇丸（がじゃまる）も声を張り上げる

「ぼ、僕も、命を賭けて、お尽くします！」
それまでボケボケだった玄輝がゆっくりと首を振り、
「……臥蛇丸、そんな事は言うものじゃないゾ」
諭すような声だ
「ホントホント、ありえないわよね」
「さいてぇ～」
嬉しそうにはやし立てる夏海とののの香

（どうして僕だけ……）

なにが父親の癇に障ったのかわからない
るるるーと心で涙を流す臥蛇丸だった

「それでは、初陣行くぞー！」
『おー！』

ようやく四人揃った壬生川（みぶがわ）一族の、これが新たな一歩であった

～～

黄川（きつと）人「やあ！　今月はここの探索かい？　さすが目の付け所がいいね！」

「うわ誰だ！？」
「お化け！？」
「きゃぁ、のの香こわぁい～」

黄川人の背中がすすけて見える
薄れているのは間違いないのだが

「え、えっと、こんにちは」
「やあ！！」
臥蛇丸が声をかけると、すごく嬉しそうに顔を向けてくる
「は、初めまして、僕は壬生川臥蛇丸と申します」
「ボクの名前は黄川人、なんだか君とは友達になれそうだよ！」
「え、ええ、何だか僕もです」

「ありがとう、臥蛇丸くん」
「いえ、こちらこそ……って、アレ……？」

臥蛇丸が目を向けると、周りには黄川人の姿しか見えなかった
玄輝も夏海ものの香も、どうやら先に行ってしまったようだ

「……本当に、君とは友達になれそうだ」
「ハハ……」

～～

＜相翼院＞

「あら、兄上どこに行っていたの？」
「いや、うん、あの、もう良いんだそれは……」
疲れ果てた顔で抗弁を諦める臥蛇丸
「さって、突撃ィィィヽ（ ゜∀ ゜）ノ」
「とつげきぃぃぃ～～」

水の上に立てられたこの院には、その名の通り水妖たちが無数に巣食っていた
朱点童子（しゅてんどうじ）を倒す足がかりとして、とりあえずの奉納点（ほうのうてん）兼経験値稼ぎに、一行は奥へと足を踏み入れた

さすがに二世代目の力は強く、向かってくる尻子玉大将らの軍を、次々に打ち破る

「ハハーン、超余裕ー」

「はぁはぁ、なかなか疲れるものですね……」
「だらしなぁ～い」
「あなた方だって、お父様の陰で守ってもらっているだけだろう！
というか夏海、剣士なのに後列とか意味がわからない！」
「こ、攻撃するときは、ちゃんと前に出てるわよ！」

息を切らしながらもにらみ合う臥蛇丸と夏海

「お前ら仲良いな、（。∀。）ノ」
「なっちゃんとお兄ちゃん、仲良しぃ～」
玄輝とのの香は、のほほんと眺めている

「誰がですか、汚らわしい！」
「……次に変な事言ったら、のの香の弓へし折ってやるからね」

どうやら本気で言っているであろう臥蛇丸と夏海に、さすがの玄輝もそれが嘘ではないことに気づく
（……何でお前らそんなに、仲が悪いんだ？）

それでも一度戦場に立てば、いがみ合う暇もなく、一心不乱に戦うのだ
こうして一ヶ月を丸々戦い抜く壬生川家

「フフーン、ま、こんなところよね」
「お父様、見ててくださいましたか僕の戦いを！」
「のの香の癒しの術も、役に立ったでしょ～」
自らの働きを強調するのも忘れない三人
当主である父上に詰め寄る

「うむ、これで奉納点もバッチリ集まったなヽ（ ゜∀ ゜）ノ」
玄輝は満足気に笑う
その後の言葉に、一同は騒然とした
「これで跡継ぎ候補の、立派な五人目の子供が作れそうだナ」
えー？　との香が甘えたような声を出す横
『え、えええええええええええええええええ！？』
絶叫が、響いた

第初話－8　「四始」　１０１８年１１月（後書き）

出陣・相翼院（玄輝・臥蛇・夏海・のの）

第初話－9　「鶴首」　１０１８年１２月（前書き）

玄輝　１才４ヶ月

臥蛇丸　５ヶ月

夏海　４ヶ月

のの香　４ヶ月

第初話－9　「鵺首」　1018年12月

＜交神（こうしん）の儀＞

「みどろ御前様でよろしいですネ？」
「おー、よろしくお願いします、御前さん」

みどろ御前「今は……何もかも忘れて……」

～～

玄輝（げんき）が次期当主作りに励んでいる頃
稽古場で、落ち込んでいる娘がいた

「父上ももう一才と五ヶ月というお年……跡継ぎは絶対、私たちの誰かに決まると思っていたのに」

端っこで「の」を書いていじける姿からは、普段の気丈な面影も見えない
夏海（なつみ）だ

「なっちゃん、どうしてそんなにショックなのさ～」
朗らかに声をかけるのの香（ののか）は、対照的に普段通りだ

夏海はがばっと起き上がる
「ショックに決まっているでしょううう！」
双子の妹に、獣のように襲いかかってゆく

「ちょ、ちょっと、そんな、掴まないで、何その静と動っ」
姉のご乱心に、さすがに慌てるのの香
「分家と宗家じゃ身分もお墓も全然違うのよ！？　私とのの香が差別されてもいいの！？」
目が恐い、超恐い
「ど、どこの知識なのぉ……」
「私はちゃんと勉強しているのよ！」
「そ、そうなんだ～……」
というか、明確な理由があったことにまず驚いた
（なっちゃん、あの人を当主にさせたくないだけじゃなかったんだ……）
冷や汗を流すのの香
墓も身分も、二年も生きられない自分たちには、なにも関係のない話のように思えたのだ

～～

一方で、庭で薙刀の素振りをしながらも悶々としている人がいた

（次期当主、か……）

臥蛇丸（がじゃまる）は素振りしながら考える

自分が選ばれないことに関しては、特に異論はない
夏海かのの香でないのなら、でしゃばるような真似はすまい
考えていたのは、男か女か、どちらか、ということだ
現在の戦力バランスは非常に悪い

（もし男の次期当主が生まれれば、男女比は2：2……）

仲間ができたら、これであの姉妹の横暴にも少しは歯止めが利くかもしれない
臥蛇丸の願望がそこはかとなく入っていた

（そうだ、あのふたりの性格も落ち着くかもしれない……）

夏海は稽古では、待ったと言っているのに執拗な小手ばっかり攻めてくるし、のの香なんて「寝る前の水菓子は太りますよ？」と忠告しただけで、翌日、臥蛇丸の部屋の障子が全て破かれていた、しかも破け目で「アホー」と書いてあった
おかげで雪焼けしてしまったため、今の臥蛇丸の顔は、アホーとだけ黒くなっている
イツ花にも、大笑いされてしまった……

（お父様には、何としてでも男子を産んでもらわねば……っ！）

再び、素振りを続ける
だがしかし、とも思う
このまま女子が産まれれば……？
ゾッとしてしまった

「い、いやいや！　良くないことばかりを考えるのは、僕の悪い癖だ！」

そうだ、楽観的な方向に考えを修正しよう
例えば生まれてきた子が、すごく可愛くて、あの姉妹とは全然違う優しい子だとしよう
それで、知的で思慮深い臥蛇丸に懐いてくれて、お兄ちゃんお兄ちゃんと慕ってくれるとする
それならどうだろう、その子が当主になっても、やっていけるかもしれない……！
瞬間、夏海の嫌な笑顔が脳裏をよぎる

「……ありえないこと、か……」

どっちみち、男の子でも女の子でも、すぐに夏海に懐柔される気がしてならなかった
あの子はとにかく要領と外面が良い
どちらも自分にはないものだ
「……生まれてくる子が、一番可哀想だ」
せめて自分は強くなって末の子を守らねば、と素振りを続ける

もし伊織（いおり）が生きていたら「一番可哀想なのは間違いなく臥蛇丸さんですから！」と、勢いよくツッコミをいれてくれたに違いない

第初話－９　「鵠首」　１０１８年１２月（後書き）

交神の儀・玄輝×みどろ御前

第初話－１０　「新風」　１０１９年1月（前書き）

玄輝　　１才５ヶ月
臥蛇丸　５ヶ月
夏海　　４ヶ月
のの香　４ヶ月

第初話－１０　「新風」　１０１９年１月

元日、玄輝（げんき）が真剣な顔で刀を研いでいた
「よし」
磨きあがった刀を見て、満足気にうなずく

「イツ花（いつか）、出陣の用意を頼んだ！」
「はぁい承りましたァ！」

しばらく後、玄関に集合した面々に、玄輝は告げる
「きょうは、ちょっと久々に無茶をするかもしれないので、みんなよろしくぃ（ ゜∀ ゜）ノ！」

あの父親がそんな言い方をするだなんて、よっぽどのことじゃないか
夏海（なつみ）と臥蛇丸（がじゃまる）が思わず顔を見合わせた

「……裸に刀一丁で戦う、とかですかお父上？」
「いやそれは、全力で止めますよ……」

～～

＜九重楼（くじゅうろう）＞

三度、九重楼に突撃をする四人
壬生川家は息の合った戦法で、近づく鬼たちをバッサバッサと斬り捨ててゆく

さすがにもはや、首切り大将の軍勢には苦戦をしなくなっていたそれでも物量に物をいわせた鬼の攻勢に、徐々に技力を削られてゆく

先へ先へと進みたがる玄輝をいさめる臥蛇丸
「お父様、そんなに急いで進軍すれば、すぐに体力がなくなりますよ……？」
「だから言ったではないか、無茶をする、と、（ﾟ∀ﾟ）ノ」
「言いましたけど、言っておけば許される、というものではないです！」
「皆もう泉源氏の術を使えるのだから、バーンとォ、行くぞぉー、（ﾟ∀ﾟ）ノ」
「ひー」

「ねぇ、お父上なんだか、焦ってない？」
隣ののの香に、ひそひそと話しかける夏海
「え、そぉ？」
「うん、なんだか、あのいつもの、その、馬鹿顔のお父上が……」
（ど、毒舌だなァ相変わらず……）
言いよどんではいるものの、ハッキリとした表現を突きつけてくる夏海に冷や汗
「……でもなっちゃんって、それだけパパのこと良く見ている、ってことだよね～」
「え！？」

と、振り返ってきた夏海の顔が、赤い
「だってのの香ぁ、そんな風に気づけなかったしぃ～」
「そ、そんなの、別に、いつもお父上のそばにいれば誰でも……」
「のの香、そんなにパパにべったりしてないし～」
「っ――って、ほ、ほら、お父上、足を止めたわよ！」

「来た」
玄輝は、大きな門の前でゆっくりと息をついた
「お父様、ここは……？」
「うむ、今回の目的だヽ（ °∀ °）ノ」

「八起苑、と書いてあるわね」
「ってもしかして、のの香たちのお姉ちゃんが……？」
夏海ものの香も、上にひとりの姉がいたという話を、イツ花から聞いていた

「さて、ちょっとしんどいと思うけれど、頼むぞ皆ヽ（ °∀ °）ノ」
「……分かりました、そういう事ならこの命、お父様にお預けします」
「私たちの姉上の弔い合戦ってわけね、上等よ」
「のの香も頑張るよぉ～」
「突撃ィィィィィィィィィヽ（ °∀ °）ノ」

七天斎八起（しちてんさいはっき）「ファーッファッファッファ！」

先制した七天斎八起の攻撃で、前列の体力が1／3ほど削り取られる！

「ちょ、お父上、この鬼強いわよ!?」

さすがに夏海が悲鳴をあげながら、一旦後列へと下がる
玄輝は自分に武人をかけて攻め続け、息子娘たちはその援護に回る

「だ、ダメだ、僕たちの武器じゃ刃が立たない……!」
「術で併せるにゃ!」

のの香の＜赤玉＞に、続く夏海、臥蛇丸!
3人併せて威力五倍の＜赤玉＞がほとばしるが、それも回避されてしまう

「なっ!」

どうしても防戦が続く壬生川二世代目たち
このままでは技力が切れて、追い詰められてしまう……!
特に前列で刀を振っている夏海の体力が、もう限界に近づく

「当主の指輪!」

指輪を掲げるが、それも決定打にはならない
＜お雫＞で回復する鬼の体力を、一族は削りきれない
あの時の悪夢が蘇ってしまう
どうしても玄輝は焦ってしまう

そこで再びのの香が術を紡ぐ
「＜風車＞の併せ、行きますにゃ!」
すかさず、加わる面々

「臥蛇丸乗った！」
当主もまた
「玄輝、続くゾー、（ ゜∀ ゜）ノ」

そうして風車の３人併せが発動した
三人の背後から吹き抜けてゆく風が刃となりて達磨の身体を滅多に斬りつける

七天斎八起に１４５のダメージ！

その瞬間、悪鬼の身体が光ったかと思うと七天斎八起の身体が崩れ始めた
黒い影となりながら揺らぎ、地面に吸い込まれてゆく

七天斎八起を、討ち取った！！

全身から力が抜けてゆく
壬生川家は、初めてボス戦に勝利を収めたのだ
フッと息をつく玄輝
「……やった」
抱き合って喜ぶ娘や息子たちを眺めて、ニッコリと笑う
「伊織（いおり）……これで俺も、胸を張ってそっちへ行けそうだ、（ ゜∀ ゜）ノ」

一段落する玄輝とは裏腹に、夏海はまだ余力が残っているようだ
「じゃあお父上、中に入って探索しましょうよ！」
「お、おう」

引っ張られて、楼閣の中へと立ち入る

壬生川家は意気揚々と楼閣の中の探索をするものの、鉄クマ大将のあまりの強さにビビって、すぐに逃げ帰ったのであった
ひとつの壁を越えたら、またひとつの壁が立ちはだかる
朱点童子への道のりは、長く険しいものであった

第初話－１０　「新風」　１０１９年１月（後書き）

出陣・九重楼（玄輝・臥蛇丸・夏海・のの）　幸四郎→剣士・初見

第初話－１１　「門出」　１０１９年2月（前書き）

玄輝　　１才６ヶ月
臥蛇丸　６ヶ月
夏海　　５ヶ月
のの香　５ヶ月
幸四郎　１ヶ月

第初話－11　「門出」　1019年2月

＜みどろ御前の元から＞

「みどろ御前さまから、お子様を預かってまいりましたァー！」
イツ花が喜び勇んでやってくる
「おお、元気な男の子か」
「はい、長い髪も黄金色で、当主さまによく似ておりますネ！」

当主の間の障子に耳を当てていた夏海が、ボソッとつぶやく

「お父上に似たら、大変なコになるわね……」
「良いじゃないか、それも……」

隣には臥蛇丸もいた
隙間から伺う夏海の目は、まるで水揚げされた魚を物色する板前のようだ

「顔はお父上より引き締まっているけれど、やっぱり母上のおかげなのかしら……」

（あのコも、いきなりこんな姉が出来て大変だろうに……）
末っ子の運命を、障子に耳を当てながら憂慮する臥蛇丸だった

名前は幸四郎

金髪赤眼の将来有望な、新たな剣士の誕生だった

～～

「初めまして！　僕の名前は幸四郎（こうしろう）です、よろしくお願いします！」
幸四郎は居間で元気いっぱいに挨拶する
はつらつとした若武者に、玄輝（げんき）の頬も緩む
「うむ、来てくれて嬉しいぞ幸四郎」
「はい！　僕の力を壬生川（みぶがわ）家のために、役立ててください！」
一体どんな教育を受けてきたのか、まったくすれていない模範的な笑顔だった

「僕が長男の臥蛇丸だよ、よろしくね幸四郎」
「はい、臥蛇丸兄さん、色々とご指導よろしくお願いします！」

（……な、何だか良い子そうだ！）

新しくやってきた弟に、クラッと来る臥蛇丸
そうだ、これこそが年少者の正しい反応ではないか？
ちらりと夏海、のの香（ののか）を見る臥蛇丸
「なによ」
「にゃ？」
視線に気づいた双子が眉をひそめる
あいつらは間違っているのだ

幸四郎はキラキラとした瞳で、臥蛇丸を見つめる
美少年だ、なんて愛らしいんだ
「こ、これから共に学んでいこう！」

「はい！」
しかしあまりにもできすぎた子に、一抹の不安が芽生える
（いや、でも……期待してはいけないぞ、もしかしたらこのコもとんでもない一面を隠し持っているかもしれないのだから……！）
夏海のの香の前例は、そこまで臥蛇丸を毒しているようだ

「私は夏海、こっちが妹ののの香よ、よろしくね」
「のの香で～す、よろしっくぅ～」

ぶすっとしている夏海と、えへらぁと微笑む対照的なのの香

「幸四郎です！　お姉さん方、これからよろしくお願いします！」
純白の笑顔を前に、夏海も鼻白む
（どんな次期当主が来るかと思ったら……何だか、憎めないわね……？）
なんだか毒気を抜かれてしまう
「幸四郎くんは、みどろ御前様の元で育てられたんだね～」
「はい、お母さんから壬生川家はとってもステキな場所だと教わってきました！」
その若々しさが、何だか夏海には眩しい
年は半年も離れていないというのに
「そっかぁ、とっても優しいお母様だったんだね」

膝を曲げて、目線を合わせて喋るのの香に、幸四郎は照れ笑う

「はい、お母さんも『玄輝さんには久々に熱くされました……』ってよく言ってました！」
口笛を吹く玄輝
相手も四人目となれば、もはや手練なのかもしれない
父親の情事など聞き流す双子

「……うんまあ、これから鬼退治のために、一緒に頑張っていきましょうね」
「はい！」
そのあまりの素直さに、思わず眉尻を下げる夏海であった
～～
＜出陣＞
「それでは本日も、奉納点（ほうのうてん）を稼ぎに、あるいはお宝をかっさらいに行くか！」
玄輝の号令に、次々と腕を突き上げる子ら
「新しい術を探しにぃ～」
「より強くなるために、ね」
「それでは、行って来るからな、幸四郎」
出陣する四人と、それを見送る幸四郎とイツ花
「はい、お父さん方、いってらっしゃい！」
「幸四郎さまのことは、このイツ花にバーンとォ！　お任せくださいッ」
「うむ、それでは壬生川家とつげきぃぃぃぃ、（ﾟ∀ﾟ）ノ」
『おー！』

～～

＜鳥居千万宮（とりいせんまんぐう）＞

「何このワープゾーンだらけ！」
迷宮に立ち入った途端、夏海が悲鳴をあげる
「どうやら何かしら規則性はあるよう、ですが……」
首をひねる臥蛇丸
夏海はあっという間に考えを切り替える
「まっ、手当たり次第入ってみましょうか！　きっと何とかなるわよね」
（何だかなっちゃん、豪放なところが最近パパに似てきてないかな～……）

そんな姉を苦笑半分、不安半分に眺めるのの香

鳥居の色は四種類、赤、青、緑、黄色

「あっ」
突然声を上げるのの香
「ど、どしたの？　のの香」
「もしかしてこれって、季節をあらわしているんじゃないかにゃ？」
四季を色に当てはめてみれば、見事に合致する
「……そうか、今は2月だから青色の鳥居をくぐっていけば、奥に着くってことか？」
「そうそぅ～」
「すっごーい、さすがのの香っ」

「うん、どうやら合っているみたいだ」

いくつかの鳥居を覗いて、うなずく臥蛇丸

「えへ、でもあんまり奥に行き過ぎて、この前みたいなボスに会わないようにしなきゃ……」

「強いのが出たら、それもそれよ！」

拳を固める威勢の良い夏海の後ろで、ひそひそ声

（なあ、のの香……最近、夏海のやつ……）

（だ、大丈夫だよぉ～、た、多分……きっと……）

遺伝というものは恐ろしい

改めて感じる臥蛇丸とののの香であった

道中を突き進もうとするが、予想以上に耐久力の高い紅こべ大将たちの軍勢に阻まれて、一同は思うように迷宮を探索できていなかった

「風の車か……風車の術を連発されると、なかなか厳しいね……」

「しかもあの紅こべ大将っての、仲間がいなくなるとお宝を持ち逃げして逃げるし！」

きぃぃっと刀を振り回す夏海

「今回は、ここらへんで探索終了かな～……」

「火時計も残り少ないし、仕方ないわねー」

そういえば、と気づいて夏海は先頭にいる玄輝の袖を引っ張る

ずっと静かにしていた父を見つめる

「お父上？」

「……ん？」

玄輝が足を止めて振り返る

「そろそろ帰ろうって話してたんだけど、どうする？」

「あー……そうだな、帰ろうかヽ（ °∀ °）ノ」

その身体は切り傷や打ち身だらけの様子で、陣羽織もところどころが擦り切れていた

「ええ、じゃあ早速、」

と、夏海が振り返った瞬間、玄輝がその場に片膝をついた

「パパ！？」

「お、お父様！」

「ん、あ、あれ？　何だ……？」

自分でも驚く

笑う玄輝

「おかしいな、急に、何か、ちからが抜けてきて……」

立とうとしているのに立てず、何だか風呂の中に入っているように意識がとろけてゆく

その耳に、夏海の悲鳴

「は、早く、屋敷に戻るのよ！——早く！」

～～

＜玄輝の部屋＞

玄輝はイツ花ひとりを残して、子供たちを退出させた
「ふぅ……」
「玄輝さま……」
そばに控えるイツ花が、痛ましげな顔をしていた
「何かな、気が抜けちまったんだな……伊織（いおり）の仇を討って、幸四郎を産んで、」
天井を見ながらぽつりぽつりと話す玄輝
「臥蛇も、夏も、ののもみんな、みんな強くなって……安心したのかもしれないナー」
ふっと息をつく
「俺の代では朱点童子を倒せないことも分かって、気が抜けてナ……」
まだまだ先は長い、長すぎる
初めての戦で娘を亡くしてから、出来る限りの事はしてきたつもりだったのに
自分の生は、たかが千里の道を一歩歩んだに過ぎないのだとわかったのだ
一年と数ヶ月
なんと短い一生であろうか
結局、玄輝は“大人”にはなれなかった
伊織が戦死しても、彼の本質は変わらなかったのだ
だが、そんな自分を見て、少しでも次の世代が慎重になってくれればいい

ひとつの失敗が、多生の後悔を生むこの人生
それでも、精一杯生きて、前に進むしかないのだから

「次の当主様は、幸四郎さまでよろしいですね……？」

イツ花の言葉に、玄輝は床でうなずく
「うむ、まだ若いが、あの三人が傍にいてくれれば、大丈夫だろう
……」

ふふふと口元から笑みが漏れる
この家の誇りは、臥蛇丸が守ってくれるだろう
この家の鋭気は、夏海が満たしてくれる
この家の温もりは、のの香が受け継いでくれる

そして壬生川家の血筋は、幸四郎へと繋がれるだろう

少しの沈黙が部屋に訪れる

「玄輝さま……」
「……ん？」

まどろみに、陽だまりのような声

「長い間のお勤め、ご苦労様でした」

「おう」

心地良い虚脱感に、全身が満たされてゆく

「イツ花も、ありがとさん……（ ﾟ∀ ﾟ）」

娘を戦場で亡くして、それでもこんな風に床の上で逝けるとは思わなかった
安らいだ顔で、目を閉じる

翌日、イツ花は玄輝の机を片付ける際、
鳥居千万宮の出陣前に書いたとされる、各子供宛ての置手紙を発見した
どの文字も下手で読みづらかったが、
その結びに、格別にデタラメな筆跡で書かれた一行があった

「子供たちよ……俺の屍を越えてゆけ、（ ﾟ∀ ﾟ）ノ」

壬生川　玄輝　享年1才6ヶ月

第初話－１１　「門出」　１０１９年２月（後書き）

出陣・鳥居千万宮（玄輝・臥蛇・夏海・のの）　玄輝・老死

第二話－1　「振起」　1019年3月（前書き）

臥蛇丸　7ヶ月
夏海　6ヶ月
のの香　6ヶ月
幸四郎　1ヶ月

第二話－1　「振起」　１０１９年3月

皆の前で幸四郎（こうしろう）は、第二代目当主を襲名した

「まだまだ未熟ですけど、僕、お父さんを越える立派な当主になります！」

玄輝（げんき）が亡くなって、数日ほど泣きじゃくって過ごした幸四郎も、その日にはもう屋敷に来た時のような、明るい笑顔を取り戻していた

「はぁ……」

一方、自室にて臥蛇丸（がじゃまる）

「お父様が亡くなって……いつの間にか最年長が僕か」

もう自分のことを僕だなんて言わない方が良いのかもしれないな、とも思った

「そして、予定通り二代目当主は幸四郎……」

雪も溶けてきたというのに、心は大雪山だ、遭難が相次ぎそうだ

「何ウジウジしているのよ！」

襖を蹴り倒して入ってきたのは、玄輝が亡くなって以来人一倍凶暴になった妹――夏海（なつみ）だ

倒れた襖が、臥蛇丸の頭を突き破って、何だか襖から生えた竹の

子のようになる

「ちょ、何するんだいきなり夏海！」

「てぃ！」

鞘で臥蛇丸の頭を強打する

目から星が出た

「――おぁぁあぁぁ」

転げまわる臥蛇丸の前で、夏海は偉そうに腕組みをする

「お父上が亡くなったから何よ、月日に関守なし！　私たちには足踏みしている時間はないんだからね！？」

「うっ、く……そ、それは分かってるけれど、現当主があれじゃ、なにも決められないし、まだなにもできないじゃないか！」

いまだ幸四郎は生後1ヶ月、戦場に出れるような年ではない

しかし夏海は目を釣り上げる

「じゃあ、私たち三人で戦いに出れば良いじゃない」

「三人で、か……？」

確かに夏海は玄輝の筋を継いで、良い剣士になった

ののの香も術士としての資質は高く、安心して背中を任せられるだろう

自分たちを今引っ張っていくのは、夏海のような積極さかもしれない

「ていうか、今すぐ行くわよ！？」

積極的すぎる

「ちょ、ちょっと待ってくれよ、まだ、支度が……！」

夏海は猫を捕まえるように、臥蛇丸の襟首を持ってずるずる引っ張る

「いい？」

臥蛇丸の顔にぐいっと顔を近づける夏海
「な、なんだい……？」
「私はお父上の遺書で、皆の面倒を見るように頼まれているの」
「め、めんどうって……」
僕は1ヶ月年上なのに……、と思う
「のの香もめそめそして、アンタは腑抜けになって……、もう、父上が亡くなったくらいで何よ！」
ぎっと歯を食いしばった顔に、うっすらと涙が見えた
「夏海……」
「さぁ、早く準備して、鬼退治に行くわよ！」
「あ、ああ、分かった」
どうしてだか、素直に頷く臥蛇丸
肩をいからせながら廊下を歩いていく夏海を、襟を整えながら見送る

「そうだよな……」

臥蛇丸は自らの頬を張る

「僕は……、俺は、皆の兄なんだからな」

夏海の空元気を無駄にしないためにも、臥蛇丸は出陣の支度を急ぐことにした

＜出陣前＞

臥蛇丸と夏海が玄関で待っていると、少し遅れてののの香がやって

きた
「支度できましたぁ～」
「お、のの香、もう良いの？」
「あ、うん、色々と……もう大丈夫」
のの香は頬をかき、力なく微笑む
「そっか、弓を乱して私に当てたりしないでよ」
べし、とのの香の頭にチョップする
うぅと額を押さえて後退するのの香
「じゃあなるべくお兄ちゃんの方を向いて撃つことにするぅ」
「それならおっけ」
何がおっけなんだ！、臥蛇丸は心で叫ぶ
だが、のの香が少しでも前向きになってくれたことはなによりだ

それよりも、臥蛇丸はひとつだけ納得出来なかった
「あの、夏海」
「うんー？」
「どうして部隊の隊長が、夏海なんだ……？」
「え？」

素で聞き返す夏海

「いや、そんな意外そうな顔されても、だってここは普通は俺が……」
「お父上の遺言よ、遺言！」
「そ、そうなのか……？」
「ええ、夏海が一番可愛かったから、夏海のしたいことをさせよ、って」
（絶対ありえないだろう）

とは思うものの、あの父親だからもしかしたら、とも頭をよぎっ

てしまう臥蛇丸だった

「やっぱり、パパはなっちゃんを一番可愛いと思ってたのかぁ～」
素直に信じ込んだのの香が、夏海に賞賛の笑みを見せる
どうしてその笑顔が、兄に向けられることはないのだろう
「フフン」
胸を張る夏海

（何だか俺は、一生この妹には勝てない気がする……）
臥蛇丸が遠い目をして、もたもたしていると、
もう遠くにいって、こちらに手を振ってくる夏海
「はーやーくー」

「……はいはい」
ため息をつきながら、臥蛇丸は彼女の後に続く

「やっぱり、これ言わないと雰囲気出ないわよね」
「これ……？」
息を吸って、駆け出す夏海
「壬生川家、突撃ぃぃぃぃぃぃぃぃ！」
「お、おお！？」
「そんなところまで似せなくてもっ」
慌てながら、臥蛇丸、のの香が後を追う

父がつけていた壬生川家最凶ののぼりは、父親の亡骸と一緒に火葬して良かった、と走りながら臥蛇丸は思った

＜相翼院（そうよくいん）＞

ひたすらに走り続けて、一気に院まで駆け抜ける三人
天女の小宮に入るまで、合計で２００近い体力を消費していた

「ぜぇ、ぜぇ……着いた、わね……」
「お父様のような無茶だな！」
「つ、疲れたぁ～～～……」
のの香が水筒の口を開けて、呼吸を整える
それから＜泉源氏＞の術で、とりあえず全員を全回復させた
「さ、本番はこっからよ！」
「お、おー！」
「がんばろぉ～」

相変わらず燃え髪大将の軍は強い
一方的に健康度が（臥蛇丸だけ極度に）減ってゆく

というわけで、一ヶ月がむしゃらに戦い抜き、
一人大怪我をしたものの（臥蛇丸だけ健康度２０）全員ご無事に戻る事ができた

「お父様の亡くなった翌月に、俺も逝くところだった……」

部屋に見舞いにきた妹たちは、手ぬぐいを冷やしながら、

「お父上も、寂しがっているのかもね」

「臥蛇やーぃ、こっちこーぃ、なんて～」
生死の境をさまよった臥蛇丸としては、笑い事ではなかった

第二話－１　「振起」　１０１９年３月（後書き）

二代目当主→幸四　出陣・相翼院（夏海・臥蛇・のの）

第二話－2　「若枝」　1019年4月（前書き）

臥蛇丸　8ヶ月
夏海　7ヶ月
のの香　7ヶ月
幸四郎　2ヶ月

第二話－２　「若枝」　１０１９年４月

庭の桜も咲き誇る４月
臥蛇丸（がじゃまる）の元服の儀が、厳かに行われた

「これで臥蛇丸さまも、立派に成人なされましたネ！」
「はは、ありがとうございます」

まだ全身に負った火傷や打ち身は癒えていないため、包帯だらけの儀式だ
そういえば、と思い出す

（父上が初めて鬼退治をなさった時と、俺は同い年になったんだな）
その初めての戦場で、父上はご子女を亡くされたのだ
（もし俺に子供がいて、そのコが自分の無鉄砲さにより失われたら……）
きっと自分は立ち直れないだろう、と思う

父様は強かった
ともすれば滅入ってしまうようなこの境遇で、最期まで明るさを絶やさなかった
……なにも考えていなかっただけだったのかもしれないが

「これでやっと、臥蛇丸さまもお子を残せられますネ！」
不意をつかれて、思わず臥蛇丸はお神酒を噴き出した
「え！？」

0才8ヵ月、それは交神の儀が可能になる年でもあった
身近にあんな妹がふたりもいる臥蛇丸は、女性に対してウブだった

～～

「おー」
「お～」

夏海(なつみ)とのの(ののか)香は実戦部隊に入った幸四郎(こうしろう)の、晴れ姿を見に、庭にやってきていた

「えへへ」
照れ笑いの幸四郎を品評する双子
「うん、なかなか様になっているじゃない、ねぇのの香?」
「うんうん、こうちゃんカッコイイねぇ～」

幸四郎の頭をなでなでするのの香、されるがままの幸四郎
年の離れた弟ということで、目に入れても痛くないような可愛がりようだ
さらに現当主で美少年、京の都で壬生川(みぶがわ)家人気投票があったら一位間違いないだろう

「そうしたら今月はね、二代目当主の初陣と行きましょうか」
「お～」
「うん!」

幸四郎が幼顔で胸を叩く

「お姉ちゃんたちは、僕が守ってあげるからね！」
「うっわ、生意気」
夏海は笑いながら、幸四郎の伸びた金髪を引っ張りまわす
「ちょ、ちょっとお姉ちゃん！」
「そんなのアンタ、６ヶ月早いっての」
「いた、いたいたいいいいい」
「な、なっちゃん～！」
途中から本気で嫌がる幸四郎と、慌てて止めに入るのの香

そこをたまたま、成人の儀を終えた臥蛇丸が通りがかった

（当主をイジめる姉……）
壬生川家はやっぱりダメかもしれない、と思う

＜出陣＞

「それじゃ、行くわよー！」
「お～！」
「おー！」

出かける三人と見送る一人

「どうか気をつけるんだよ、幸四郎」
「あれ、アンタは来ないの？」
「ああ、先月に受けた傷がまだ癒えていなくて、満足に薙刀も振れないんだ」

包帯で巻かれた左腕は痛々しく、確かに動かせそうもない

夏海はぼそっとつぶやく

「情けないこと……」

「思いっきり聞こえているから」

さすがにばつが悪いのか、臥蛇丸は咳払いをして、

「それまで、しばらく町の復興作業に協力しようと思ってね」

「あ～、それナイスだね～」

「ああ、商業部門を中心に、図面を引いてお手伝いしてこようと思っている」

「いつの間にそんな勉強をしてたの？　アンタ」

「俺たちには足踏みしている時間はないんだもの、だからね」

恥ずかしいセリフをさらっとはく臥蛇丸

「はいはい、そーですねー」

夏海は手をぴらぴらと振りながらも、臥蛇丸が無事立ち直ったことに、まんざらではなさそうな表情をしていた

＜鳥居千万宮（とりいせんまんぐう）＞

「それじゃ、幸四郎のためにも、あんまり無茶はしないでおきましょうか」

「うわ、なっちゃんがマトモだぁ」

「うわってなによ、うわって！」

ののの香の耳を弄り倒す夏海

「ちょ、や、悪かったからやめて～っ」

そんな二人のやり取りに緊張をほぐされたのか、幸四郎もほっと息をつく
「お姉ちゃんたちは凄いなぁ、やっぱり戦場慣れているんだね！」
顔を見合わせる、夏海とのの香
「でもそういえば、この屋敷に来てから、すっごいペースで戦っている気がする」
「そういえば今月で、臥蛇お兄ちゃんの討伐回数を上回っちゃったにゃ」
指折り数えるのの香
「すごいやお姉ちゃん！　僕も頑張らなきゃ！」
「あんまり頑張りすぎて、今頃屋敷にいる誰かさんみたいにならないようにね」
夏海とのの香はそんな若き剣士を、苦笑しながら見守っていた

三人はそれから順調に鬼を狩り続け、意気揚々と凱旋したのであった

第二話－２　「若枝」　１０１９年４月（後書き）

元服→臥蛇　出陣・鳥居千万宮（夏海・のの・幸四）

第二話－3　「藤花」　1019年5月（前書き）

臥蛇丸　9ヶ月
夏海　8ヶ月
のの香　8ヶ月
幸四郎　3ヶ月

第二話－3　「藤花」　１０１９年5月

屋敷の庭では、幸四郎（こうしろう）がひとりで素振りをしていた
「あれれ、当主さまおひとりですか？　他のみなさんは？」
イツ花（いつか）が歩み寄ると、幸四郎は素振りをやめて額の汗を手でぬぐう
「分かんない！　みんな難しい話があるから、僕はひとりで訓練でもしてなさい、って夏海（なつみ）お姉ちゃんがー」
ないがしろにされて、ぷくぅと拗ねる
幼い当主を微笑ましく見守るイツ花

「あれぇ、当主さま、その訓練刀は前当主さまの？」
「あ、うん、僕のもうちっちゃくなっちゃったから」

手に持っている刀は大きくて、幸四郎の背丈には不釣合いの代物だったが、幸四郎はそれを、ブンブンと振り回してみせる
年の割に大きな手のひらなのかもしれない、それは基礎を固めた訓練により培ったものだった

「これはこれは、将来有望な剣士さんですねェ」
その元気な様子に、目を細めるイツ花
「それにしても残念ですねェ……せっかくみなさんで、夏海（なつみ）さまとのの香（ののか）さま元服のお祝いに、お花見でもしようと思ってたのに」
お庭の木々を見上げて口を尖らす

そこには雨のように、満開の藤の花がなだれていた

～～

一方その三人は、空き部屋となった元玄輝（げんき）の私室で、難しそうに顔を見合わせていた

「それじゃ、第一回壬生川（みぶがわ）家、家族会議を始めるわよ！」

外の『元当主の間』と書かれた板は、上から筆で『会議の間』と乱暴に殴り書きされていた

「当主抜きで開催するなんて、なんて大胆な……」

「そっちのほうが、話が早いからです」

（どうしてなっちゃん、ですます口調なんだろう）

のの香がお茶をすすりながら疑問に思う

「じゃあ本日の議題だけど……何か、のの香はともかく、兄上は気づいてなさそうね」

「？　一体何が？」

先々月に燃え髪大将に食らった傷もすっかり癒えた臥蛇丸が、オウム返しに尋ねる

「ようやく、三人とも交神（こうしん）の儀が出来る年になったわけだから、奉納点（ほうのうてん）の使い道よ」

「あー、そうか、俺たちも子供を作らなきゃいけない代になったのか」

早いもんだと思うのも当たり前の話だ、まだ臥蛇丸は生後９ヶ月

なのだから

「今、２０００とちょっとだよね、あるの」
ぺらぺらと台帳をめくるのの香
「ええ、ちなみに幸四郎の母上のみどろ御前さまは、６９２点よ」
「なんと……すごい、幸四郎並の子供を、三人も産めるのか！」
臥蛇丸が仰天する

幸四郎の剣術は、３ヶ月にして、亡くなった父様に迫るか、それと同等の実力をつけていた
もう数ヶ月すれば、夏海とて、追い抜かされるだろう

「ええ、そしてこれは決まりごとなのだけど、朱点童子（しゅてんどうじ）が住む大江山（おおえやま）の門は、１１月と１２月しか開かれない」

現在５月だから、最低でもあと６ヶ月後という計算になる

「子供が戦場に出られるようになるまで２ヶ月、つまり、この４ヶ月の間に、３人の子を為さなければならない、と」
「そういうことね」

でも、とのの香が声を上げる

「奉納点を集めた子をふたり産んで、わたしたちの誰かが大江山に行くというのはどぅ？」
６ヶ月後なら、臥蛇丸でも１才３ヶ月、戦えない年ではない
「それが上策なのは分かるけれど、」
夏海は思わず声を上げた
「でも、それだと……」
視線を左右に迷わせる夏海

「……ひとりが、子孫を残せない？」
ののの香がうつむく夏海の顔を覗き込んで、尋ねる
小さくうなずく夏海

６ヶ月も経てば、幸四郎が成人する
道義からも効率からおいても、その時点で３人の誰かが交神するのは無駄なのだ

「そっかぁ夏海……３人交神するより、２人に良い血を集中させた方が、朱点童子を倒すのは早くなるんだね」
臥蛇丸も、ののの香の意見に同意する
しかし、夏海が断固として異を唱える
「嫌よ！」

思わず刀を抜こうとする夏海を、押しとどめるののの香

「な、なっちゃん、どうどう……」
「嫌なの、私は、子を遺したい！　当主になれなかった以上、それだけは叶えたいのよ……」

幸四郎と同じ『剣士』という職業の以上、大江山の戦いに夏海が選ばれることはない
６ヶ月後の大江山選抜は、臥蛇丸かのの香、幸四郎、それにふたりの新たなる子供たちだろう

「よし……分かった」
臥蛇丸が重々しくうなずく
ここは最年長者として、決断をしなければならないと思ったのだ
夏海とのの香の目が、臥蛇丸に向く
彼は言った

「誰が外れるか、くじ引きで決めよう」

「くじ引き!?」
思わず叫んだのの香だったが、
「……良いわよ」
「良いんだ!?」
左右へと突っ込む

「俺たちの悲願は、朱点童子を仕留める事だ。そのために、私情を挟むわけにはいかない。そうだろう?」
「……そうよ、その通りよ、当たり前じゃないの!」
弱みを見せてしまった悔しさと子を遺せないかもしれない恐怖を押し殺し、しっかりとうなずく夏海
先ほどの気弱な表情はもうそこにはなく、瞳には確かな決意が宿っていた

「のの香も、それでいいのね?」
「うん、わたしは……なっちゃんがいいなら、それでいいよ」
のの香もまた、了承する
臥蛇丸もうなずいた

「それなら、くじ引きを今から作るから、当たった人は今月に交神の儀をして、1ヶ月の出陣後、再び交神の儀だ」
「ええ、良いわ」
「誰が外れても、恨みっこなしだからねぇ~」
「のの香こそ、当たったけど奉納点ギリギリの神様がハニワしかいなくて、やり直しぃ~とか叫ばないでよ」
のの香をからかう夏海の声は、いつも通りで、
「ひっど~ぃ」

玄輝の部屋には、再び穏やかな空気が流れていた

～～

くじ引きが終わり……

「それでは、交神の儀を始めてよろしいですかァ？」
巫女姿のイツ花がやってくる

「あ、ああ、よろしく頼む」
多少緊張した面持ちの臥蛇丸が、儀式の間に正座していた
「やだァ、臥蛇丸さま、リラックスリラックスですよッ！」
「そ、そうは言っても……なにぶん、こういうのは……」
儀式の間の隣の部屋から、ちらりと敷かれた布団が見える
臥蛇丸の思考はパニック寸前だ
「お、お相手の人は、どんな方かな、ハ、ハハ」
「……臥蛇丸さま、笑い声が乾いてます」
臥蛇丸は神様一覧の巻物も見ず、全てイツ花に『お任せコース』だ
「はぁ、それではですネェ、二つ扇ノ前さまなんていかがでしょ？」
「ど、どどどんな方だ！？」
ウマのように襲い掛かって、イツ花の手から巻物を奪い取る臥蛇丸

「きゃっ、も、もう臥蛇丸さまッ」
「ふ、ふむ……俺の母様の水母ノくららさまとはまた違った、なんていうか、こう……夏海みたいな顔の神様だな」
「火の神様ですからネェ」

「ふ、ふむ……い、いいだろう、この方を、頼む……」
「何だか半死人みたいな声になってますけど、大丈夫ですかァ？」
「だ、だいじょうぶ、だ……少し、緊張しているだけだ」
本当に少しかな、と思いながらもイツ花は言われた通りに神様を呼び出すことにした
「それじゃ、いきますヨォ」
「あ、ああ……」

二つ扇ノ前「まッ、気軽にいきましょ……♪」

こうして、臥蛇丸の交神の儀は、無事終了したのだった

第二話－3　「藤花」　１０１９年5月（後書き）

元服↓のの夏海　交神の儀・臥蛇×二つ扇ノ前

第二話－４　「恋火」　１０１９年６月（前書き）

臥蛇丸　１０ヶ月
夏海　　９ヶ月
のの香　９ヶ月
幸四郎　４ヶ月

第二話－４　「恋火」　１０１９年６月

あれほど咲き誇っていた藤の花も散り、
すっかり青々とした葉が茂る庭

夏海（なつみ）とののか（ののか）の香は、縁側に座って、空を眺めていた

「ねぇ、ののか香ぁ」
「はーぃー？」

そのいつもの間延びした声に、夏海は心地よさそうに目を閉じる

「藤の花、散っちゃったね」
「うん、ゆっくり見る暇も、なかったねぇ～」
「もう、見れないよね」
来年の今頃、自分たちはもう
その声ににじむ侘しさを知ってか知らぬか、ののかはのんびりとうなずく
「そうだね、もう、見れないねぇ～」
「二度と、見れないんだよね……」

ののかは膝元で寝転がる夏海の頭を、優しく撫でる

「なっちゃんは、藤の花、可哀想だと思う？」
「え？」
「藤の花、ののかたちの寿命よりもっと短い時で枯れちゃったけれ

ど、可哀想かなぁ？」
「……どう、かな、藤の花の気持ちなんて考えたことないや」
「のの香はなっちゃんと違って、お家のこととか、難しいこと良く分からないけれど……っていうか、分からないからそんなことばっかり考えているんだけどぅ」
「うん……」

夏海は縁側で猫のように横になりながら、のの香の言葉の続きを待つ

「藤の花は、たぶん、自分の事を誇りに思っていたよ」
「誇り、に？」
「うん、だって花を咲かせたんだもん、それが藤の役目でしょう？立派に果たしたんだから、偉いもんだよぉ」
「誇りに、ねぇ……」
「だからのの香は、藤の花を可哀想だなんて全然思わないんだ、むしろ逆に羨ましいくらいだよ、あんなに綺麗だったんだから」

立派な樹木を笑顔で見つめるのの香

「だから、うん、なっちゃん」
「んー」
「なっちゃんのこと、のの香尊敬しているし、大好きだし、羨ましいんだ」
「私が何かしたかしらねぇ……」
照れ隠しに、のの香のわき腹やらそこらを突っつきまわす夏海
「ちょ、やぁ、やめてっ」
「お花とお話出来たらよかったのにね、のの香！」
「あ～それいいなぁ、イツ花さんだったら出来たかなぁ～」
「まあ藤の花が本当はどう思っているのか、こっちが勝手に想像し

ているだけだしね」
「そうなんだよねぇ～」
「羨ましいんですのの香、藤の花さんのこと、って言ったら『じゃあテメェが花になってみっか？　ケッ』とか言われたり」
「藤の花さん黒いよ！」
「血の花咲かすカァ？とか」
「何でチンピラみたいになってるの！？」
「私に聞かれても」

夏海はよいしょと立ち上がって、伸びをする

「さ、そろそろ出陣の準備しましょうかー」
「ん、それじゃあ、一花咲かせますかぁ～」

ののの香も立ち上がって、それから夏海の手を取って握手する

「何よ？」
「なっちゃんの血はののの香の血、ののの香の血はなっちゃんの血、だよぉ？」
「……どういうことよ」
「どうでしょ～」

遠くで臥蛇丸（がじゃまる）の声が響いた

「さ、ホラ、出陣行くわよ」
「は～い」

顔も性格もまったく似てない双子は、それぞれの支度へと向かう

＜出陣＞

「さ、行くぞー皆ー」
「おーおー、さすがパパさん、気合入っているねぇ」
「子供が出来ると違うんだねぇ～」
「いやいやきっとアレは、＊＊を卒業したからよ」
「は、オトナへの階段登っちゃったんだっ」
「そこの妹うるさいぞ！」

顔を真っ赤にして怒る臥蛇丸

「オトナへの階段？」
幸四郎（こうしろう）が首を傾げると、臥蛇丸が眉間にシワを寄せる
「幸四郎も、そういうのを尋ねてくるんじゃない……」
すかさず夏海が耳打ち
「オトナへの階段ってのはね……ごにょごにょ……」
「まだ教えなくて良いいいいい！！」

怒鳴った後に、からかわれるネタがこれで一個増えたと、どっと疲れが増すのを感じる臥蛇丸であった

＜白骨城（はっこつじょう）＞

夏の三ヶ月間だけ姿を現すと言われる城

大江山で朱点童子に敗れ、成仏できないお侍さんの魂が行き場もなく集まっているとか……

「しかも、その日屋敷には誰もいなかったハズなのに……」
語っているのは夏海、手を握り合って震えるのがのの香と幸四郎
「ごくっ…」
「ガクガクブルブル　」
「聞こえてきた音は、死んだはずのお婆さんが包丁を研ぐ、しゃーしゃー……って音だったの、そうして、こちらに気づいたお婆さんは……」
「ひっ」
「あぅぅぅ」
「ひとりじゃ寂しくて、戻ってきたんだよお前のもみ上げをよこせェェェ！！」

「いやあああああああああ」
「ひいいいいいいいいい」

「うるさい！」
すぱこーんと夏海の後頭部を叩く臥蛇丸
「それは白骨城の伝説と、全然関係ない！」
出陣中にはしゃいでいる夏海に、怒声を飛ばす
不機嫌げに後頭部を抑えていた夏海が、気づく
「……は、兄上に叩かれた」
「……なっちゃんの初体験」
頬を赤らめるのの香
「無理矢理そっちに話を進めるんじゃないよ……」

幸四郎が臥蛇丸に笑いかける
「何だか臥蛇お兄ちゃん、ちょっぴり力強くなったね！」

「そう、かな？」
「うん、何だか女の人に対して免疫がついてる感じがする！」
無邪気で的確な批評に、思わず黙り込む臥蛇丸
「よ～し、それじゃ突撃ぃ～にゃ～」
というわけで、ショックを受けている夏海に代わって、のの香が人差し指を元気良く空に向かって突き出すのであった
～～
中に入ってみると、意外にもというわけではないが、前半は低級な妖怪が辺りをうろついていた
「何だ、白骨城の妖気に集まってきた物の怪どもか」
「へへーん、一網打尽ー」
実際に幸四郎の腕はすでに3人に肉薄しており、油断さえしなければもう誰の助けも要らないだろう
そんな折、のの香が目ざとく妖怪の落とした術を拾う
「あ～術ぅ～」
「お、でかしたのの香、えっとこれは……二つ扇の術？」
ボッと臥蛇丸の顔が赤くなる
ちなみに術法については、開発者の名前がつけられるそうで、当然この術を開発したのは二つ扇ノ前
先月、臥蛇丸と交神の儀をした女神だ

「な、ななんだって？」
「炎の術だよねー？」
「妖怪だけじゃなくて、誰かの胸も熱くすることが出来る術ねー」
にやにやと笑う夏海
「な、ななんで夏海が僕の――」
「お兄ちゃん、口調が僕に戻ってるぅ～」
「こ、この……！」
「二つ扇ねぇ、よぅし、帰ったらこの術何が何でも覚えようっと」
「な、なんだって？」
「そうして戦闘になったら、二つ扇ーっ、って何度も叫んでやろうっと」
発想が幼すぎる夏海
「ちょ、ちょ、それは、夏海っ！」
それに見事におちょくられる臥蛇丸
術書を取り返そうと手を伸ばすも、夏海はひらりと避ける
「わー面白そう～」
「イッけぇー、二つ扇ーっ！」
「おいっ！」
先ほど叩かれた仕返しか、妖しく繰り返す夏海
「二つ扇ー！」
「二つ扇～」
幸四郎やのの香までも真似をする
「みんな……」
「二つ扇ー、好きだー！」
「おいいいいいいいいい！」
「二つ扇、僕は、キミじゃなきゃダメなんだ……！」
「いい加減にしないか夏海！」

陰りを帯びるのの香

「え、でも、臥蛇丸さま、そんな……私たちは身分違いの恋……」
「良いんだ、人間と神の差だなんて、僕は死ぬまでキミを愛し抜く……！」
夏海がのの香に手を伸ばし……
「お前らあああああああああああああ！」
臥蛇丸が爆発

～～

そうこうしているうちに、一同は何と白骨城を登りきってしまった
白骨城の上部である六階に近づくと、途端に禍々しい気配に襲われる

いち早く気づいたのは幸四郎
「みんな、これって！」
さっきまで騒いでいたはずの3人も、真顔で頷く
「似た感じを、九重楼で味わったよねぇ」
「ああ、間違いない……これは、鬼だ」
「どうするの？　引き返すなら今のうちだけど、って」

言うよりも早く、臥蛇丸は薙刀を構えていた

「俺たちは、足踏みしている時間はない、んだよな」
「……もちろんよ！」
「鬼、成敗するよー！」
「無事帰って、二つ扇習得なきゃ！」

壬生川家一同は、白骨城内部へと突撃する
その途端、巨大な鬼――恨み足が襲い掛かってきた！

力をためる恨み足
対して武人で当主幸四郎の力を高める一同
力をためた恨み足の一撃が、幸四郎の体力を六割削り取る！

「ひえええ」
一瞬にして体力が黄色になる幸四郎

「＜泉源氏＞～！」
「＜泉源氏＞！」

臥蛇丸とのの香が、剣士ふたりを援護するという形が続く
しぶとく抗戦を続ける恨み足だったが、回復の術を上回る打撃を
壬生川に与えることはできなかった
ついには年長者3人の＜赤玉＞の併せ術により、崩れ去る！
奉納点を７００も獲得し、一同は喜びに手を合わせた
「何よ、たいしたことないじゃないっ」
夏海が凛と刀を鞘にしまう
「えへへ、僕たち強いよね！」
「いや顔色が悪いからな、幸四郎……」
健康度が減っている幸四郎を気遣う兄
「うん、でも、傷は深くないみたいだね～」
その場の応急手当で、何とか動き回れるようにはなったようだ

四人での戦いにも慣れてきた壬生川一族

一家はそのまま白骨城の探索を続けて、たくさんの宝と二つ扇の術書を持って、凱旋したのであった

第二話－４　「恋火」　１０１９年６月（後書き）

出陣・白骨城（夏海・臥蛇・のの・幸四）

第二話－5　「孫祝」　2019年7月（前書き）

臥蛇丸　11ヶ月
夏海　10ヶ月
のの香　10ヶ月
幸四郎　5ヶ月

第二話－5　「孫祝」　１０１９年7月

＜第三世代＞

「臥蛇丸（がじゃまる）さまー、二つ扇ノ前の下より新しいご家族が――きゃっ」

風よりも早く駆け抜けてきた臥蛇丸が、イツ（いつか）花の前にずざざざーっと滑り込む

「そ、それで、子供は!?　手はあるか、耳は、目はちゃんとついているか!?」

「は、はい、元気な女の子ですよォ」

「そ、そうか……なっ、女の子、女の子か!?」

安心したのもつかの間、みるみるうちに顔色が青ざめる

「ど、どうなさいましたか……？」

女の子、夏海（なつみ）とののか（ののか）の香に似てしまうようなら、大変なことになる……！

しかし、いやいやと思い直す

あのふたりも今や１０ヶ月、昔の辛らつな性格もだいぶ丸くなってきた頃だ、たぶん

自分のことを『兄上』と呼ぶようになるなんて、来たばかりの頃は想像できなかった

それにもしもの場合は、反面教師だと言いくるめれば良い

「よ、よし……それにして、お子は？」

「はい、いらっしゃってますよ」

名前を考えるのに臥蛇丸が数時間かかったというのは、置いといて……

委任で決まった名前は、巻絵（マキエ）

「初めましてー、お父しゃんー（ˊ・ω・ˋ）」

まん丸の顔に、にっこりと笑ったおめめ

父に似た緑色の髪を、両耳の上でお団子にしている

「お、おお……巻絵、か」

何とも縁起の良さそうな顔をしている

「はい、これからお世話になりますー（ˊ・ω・ˋ）」

「うむ、うむ……宜しく頼むよ、巻絵……」

その小さな身体をぎゅっと抱きしめる臥蛇丸

ふたりを微笑ましく見てから、イツ花は次の用事に取り掛かることにした

玄輝（げんき）の息子・臥蛇丸の薙刀術を受け継ぐ第三世代、その登場であった

～～

「さて、と」

巫女姿に着替えたイツ花が、その娘の前に現れる

「それでは、交神の儀を始めましょうネ」

「はい、よろしくお願いしますぅ～」

ぺこりと頭を下げるのは、白無垢に着替えたのの香だった

「あれ、先ほどまで夏海さまがいらっしゃいましたよね？」

「あ、ええ、でもなっちゃん、悪態つきながら出てっちゃいました」

「あ、悪態ですか……」

「ひとりヤるのもふたりヤるのも一緒でしょーが神様よぉ、とか何とか」

声真似をしつつ再現するのの香

「あ、あはは、そういうわけにもいかないみたいですネェ」

何て罰当たりな、と冷や汗を流すイツ花

「まッ、それじゃ始めちゃいましょっか、お相手は選びましたか？」

「はい、このぉ、根来ノ双角って神様でお願いします～」

何だか強そう、との理由で決めたのの香だった

「もしなっちゃんが好きなお相手がいたら、わたしはその人でも良かったんだけど」

夏海は結局、交神の表も見ずに出ていってしまった

「はーぃ、それでは参りますッ」

根来ノ双角「拙者、未熟者ゆえ、不手際をご容赦あれ……！」

もしこの場に夏海がいたら、未熟者と不手際の部分をしつこく問い詰めていたに違いない、とのの香はこっそり思った

第二話－5　「孫祝」　１０１９年7月（後書き）

交神の儀・のの×根来ノ双角　巻絵→薙刀士・初見

第二話－６　「都路」　１０１９年８月（前書き）

臥蛇丸　１才
夏海　１１ヶ月
のの香　１１ヶ月
幸四郎　６ヶ月

巻絵　１ヶ月

第二話－6　「都路」　1019年8月

＜初めての交神の儀を終えて＞

「お疲れさん、ののの香（ののか）」

「あ、うん、ありがとうなっちゃん」

布団に横になっていたのの香の元に、見舞いに現れる夏海（なつみ）

「やーねぇもう、幸四郎（こうしろう）と稽古してたらさ、3本に1本は取られるようになっちゃった、私も年かしらねぇ」

大げさに首を回す夏海の様子に、のの香はくすくすと微笑む

「それで、交神（こうしん）の儀は巧くいったの？」

「うん、あ、いや、あんまり巧くなかったかなぁ……でもうん、巧くいったよぉ～」

「前半のが気になるけれど、まぁいいとして、あれ、お腹膨らんでないの？」

「あ、うん、不思議だよねぇ、なんか神様が持ってっちゃったみたい」

「……深く考えない子なのね」

「えへ」

「全然褒めてないから」

ため息をつく

「あはは、でも、生まれてくる子は、のの香となっちゃんの子だからね」

のの香は柔和に微笑む
「お母さんがふたり、か……臥蛇丸（がじゃまる）じゃないけど、大変そうねぇ」

その臥蛇丸は、予想通り親馬鹿街道まっしぐら中だ
箸の上げ下げまで注意して、残命中に、全ての知識と経験を叩き込みかねない勢いであった

「うん、でもパパみたいに、のの香たちはたくさん子供を遺すのがお仕事じゃないもんね、それだけひとりひとりに構ってあげられるよ」
「そうね、父上は何かとお忙しい人だったから……」
考えてみれば、今一家が分担して行っていたようなことを、父はたったひとりで担っていたのだ
幼少の頃、と言っても数ヶ月前だが、父と遊んでもらった記憶は夏海には、囲碁を打ってもらったことくらいしかなかった

「でもまぁ何にせよ、元気そうだね」
「うん、もう疲れも取れたし、パワフルだよ～」
「それなら良かった、都で面白い催しがあるみたいなんだけど――」

＜御前試合＞

「えっ、都で選考試合が！？」
腕試し、その単語に全力で興味を示す幸四郎
「うん、あるらしいの、だから幸四郎も腕を磨く良い機会かな、っ

て――」
「いくいくいくいく、絶対行くっ！」
「ちょ、そんなイヌみたいに引っ付いてこないのっ」
夏海の腕にかぶりつく二代目当主
「いやぁわくわくするなぁ、僕の刀がどこまで通用するかな！」
ところ構わず刀を振り回す幸四郎に、うーんとこめかみを押さえる夏海
「力、有り余っているわね……」
「まぁ正確に言うと、大江山（おおえやま）に討伐に向かう隊を選考する、そんな試合らしいけどな」
あら兄上、と夏海がつぶやく
「そうかぁ、僕らみたいなのがたくさん出てくるんだね！」
「幸四郎には楽しいかもしれないし、俺たちにも良い機会だろう」
「ええ、八月しか開催されていないっていうし、討伐よりも価値があるかもね」
「燃えてきたあああああ、僕、一足先に行っているね！」
「ちょ、待つんだ幸四郎っ」
「ホント、元気ねぇ……」
「いや元気ねぇ、じゃなくて、おーいっ」
夏海は幸四郎を追って駆け出した臥蛇丸に、いってらっしゃーいと手を振る
それから遅れてやってきたのの香と一緒に、巻絵（まきえ）をイツ花に任せて、のんびりと後を追いかけるのであった

＜出場＞

『正々堂々の悔いなき戦いを出場者全員に希望するぞよ』

都には、京の町の全土どころか地方からも出張してきたと思われる、さまざまな格好をした武士たちが勢ぞろいしていた

「うわー、すっごいすっごい！」

会場に到着して、目を輝かせてはしゃぐ幸四郎

夏海と臥蛇丸が見定めるように辺りを眺める

「……でも、思ったよりは人数が少ないな？」

「出場者を選抜しているとか？　さすがにごろつきみたいなのは出れないでしょうしねえ」

「それにしても、俺たちを合わせて１６組とは……存命している猛き者は、もしかしたら相当少ないかもしれん」

「そうかもねぇ、あ、勝ち進んだら賞金と奉納点（ほうのうてん）がもらえるんだ」

「なるほど、討伐よりも割が良いかもしれんな、毎年８月は予定を空けるように、幸四郎に言っておこうか」

その幸四郎はと、首をきょろきょろ振るが、近くにはいない

「幸四郎……？」

夏海が頭を抱えながら指差す、その方向には、

「何その木槌、すっごいすっごい！」

他の出場者の持っている武具に見とれて、大興奮している壬生川家二代目当主の姿があった

「何ていうか……」

「無邪気、だな……」

田舎者とは言わないよう、思いとどまる

「ふたりとも～、みんなの分買ってきたよ～」
ニコニコとやってくるのの香
「のの香、あんたはどこに行ってたの、っていうか、それは？」
「お土産屋で売ってた、選考試合団子ぉ」

手提げに下げて、そのうちの一本を食べながら微笑む
「うわ美味しいっ、そうだイツ花さんにもお土産買ってきてあげなきゃっ」

ぱたぱたと、再びお土産屋さんに戻るのの香
先行きが非常に不安な夏海と臥蛇丸であった

～～

『ではこれより夏の朱点童子（しゅてんどうじ）公式討伐隊選考試合第五回を開催する！』
組み合わせが発表され、すぐに壬生川家の試合が開始された
『三十三間会（さんじゅうさんげんかい）の試合を執り行う！　両者参られい！』

初戦の相手は三十三間会、弓使いが３人の徒党だ

「よーし、僕頑張る！」
刀を構えた幸四郎のその姿に、炎のような気迫が見え隠れする
相手は武人や防人で、大将をひたすらに強化する作戦のようであったが、
壬生川家剣士ふたりの鋭い剣技の前では、その自慢の援護の術も、形無しのようで、前半を押し切った壬生川一家が、判定勝ちという結果となった

調子に乗って、続く二回戦
その相手は本願院選抜（ほんがんいんせんばつ）、一撃の威力が極端に高く、防御も侮れない壊し屋3人の僧兵団だ
「ああいう連中には術が一番よ、防人後、併せから入って六手で詰むわよ！」
大将である幸四郎に、防御力上昇の術をかける夏海
それでも皆の体力は削り取られる、短期決戦はこの場合最上の手だろう
「併せって、一体何の術を……」
「それじゃのの香いきま～す」

4人の中でもっとも術を得意とするのの香が、土台となって術を紡ぐ

「＜二つ扇＞！」
思わず臥蛇丸が、崩れかける
「はい、＜二つ扇＞！」
2人併せで、威力三倍
「乗っかるわよ、＜二つ扇＞！」
3人併せで、威力五倍
「ふ、二つ、扇！」
頭の中に何かの光景が思い浮かぶが、4人併せで威力は七倍
「ちょいや～」
火炎の術を完成させたのの香が、そのまま本願院選抜衆を焼き尽くす

本A「ギャー」
本B「く、苦しいー」

本C「もうだめだー、ひー」

台本通りのようなやられ役の台詞を発しながら、ばたりばたりと倒れる僧兵たち
こうして壬生川一家は、二回戦も突破したわけだったが

三回戦の京阪傭兵組合（けいはんようへいくみあい）という徒党に、
そりゃもうボッコボコに、グウの音も出ないほどにやられる

戦闘不能に追い込まれたのは、臥蛇丸と幸四郎
ふたりは回復力を信じられながら、翌月を迎えるのであった……

第二話－６　「都路」　１０１９年８月（後書き）

選考試合（夏海・臥蛇・のの・幸四）

第二話－7　「夏茜」　１０１９年９月（前書き）

臥蛇丸　１才１ヶ月
夏海　１才
のの香　１才
幸四郎　７ヶ月

巻絵　２ヶ月

第二話－７　「夏茜」　１０１９年９月

まだ先月の傷も癒えないまま幸四郎（こうしろう）は、庭で木刀を振るっていた
「……」
井の中の蛙と思い知らされるには、十分過ぎた敗北だった
幸四郎は今や7ヶ月、来月の元服を傷ついたまま迎えることになる
（……僕は、壬生川（みぶがわ）家、二代目当主なんだから！）

前回の選考試合が終わって、幸四郎は夏海（なつみ）とのの香（ののか）に猛烈に怒られた
無茶をして傷を負うということは、それだけで人生の数割を棒に振ることになるのだ
人生生きて１才６ヶ月
その中で戦場に出られる回数は８回か１０回か
当主が一ヶ月戦場に出られない事の意味は、酷く重かった

「僕は、うん、もう負けない……父さん！」
大江山（おおえやま）の門が開くまで、あと二ヶ月
幸四郎は決戦に備え、その決意を固めていくのだった

＜二人目の第三世代＞

「お喜びください、根来ノ双角さまより、お子様を預かってきましたァー！」
最近めっきり陰が薄くなったイツ花が、喜び勇んで登場する
「わーぃ」
のの香手を叩いて喜ぶ
「神秘的な瞳の、女のお子様です！」
壬生川家はもしかして、女性が産まれやすい家系なのかもしれない
のの香は、やってきた女の子に佐和と名づけて、弓使いの道を歩ませた

「はーぃ、佐和デスー！」
「はーぃ、ママですよ〜」

ニコニコと佐和を抱くのの香

「……えー、ママ二号でーす」
手を開いて、赤子をあやすようにぎこちない笑みを佐和に向けるのは、いつの間にか隣にいた夏海だ

「え、え、え、お母さんがふたり？」
「そうなの〜」
目を白黒させる佐和の髪は、のの香と同じ水色だが、その強気な瞳は、確かに夏海と同じ金色のモノだった
こんなことをして戸惑うかと思ったが、佐和は意外にも早く受け入れた
「何かトクした気分！　でもまぎらわシイネ！」

「そっかぁ」
顎に指を当てて、うーんと考える

「じゃあ、パパ」
「指差すなっ」
　のの香の頭をぺしりと叩く夏海
「ハーィ、お父さんー」
「呼ぶな佐和っ」

　こうして、一家は過去最高の六人家族となったのだった

＜動けるのは、3人＞

「今月から実戦部隊に入りました、よろしゅーお願いしますー（、・ω・´）」
　ぺこりと小さく頭を下げる巻絵（まきえ）
「あらぁ、兄上に比べて、ずいぶん素直そうねぇ」
「箱入り娘みたいねぇ～」

　双子ふたりして、よしよしと巻絵の頭を撫でる

「く、どうしても、行くのか……！」
　その和やかな3人に近づく、全身傷だらけの男
「あらあら、前回の試合でまたまた大怪我をした兄上じゃありませんか」
　夏海は手を口元に当てて、いやらしく笑う
「せっかく、なっちゃんに食べられないように、大切に育てたのにねぇ～」
　巻絵の頭を撫でながら、残念そうに言うのの香
「この……鬼、め……」
　行くなら俺を倒してから行け、と言わんばかりの臥蛇丸（がじゃまる）

夏海はさすがに、この扱いは一体、と悩む

「でもお父しゃん、いっつも『あの人みたいに強くなれ』とか、言ってるじゃないですかぁー（´・ω・`）」

「へー」

「ほー」

「いやそれは違う！　断じて違うぞ！」

声をがなり上げて、むせる

そこまで否定しなくても、と思う双子

「まぁでも、実際出陣できるのは、私とのの香と巻絵ちゃんの3人だけなんだから、兄上と幸四郎はお留守番よ」

「さーちゃんのご教育、お願いしま～す」

佐和を一流訓練師の臥蛇丸に託す

「く……わ、わかった……」

傍から見て心配になるくらい青ざめた表情の臥蛇丸

「そこまで心配なのね……」

「着いていってやりたい……」

このまま話していたら、何だか泣き出しそうだったので、さっさと出かける事にする

「そういえば、こうちゃんは？」

まだ戦えない年でも必ずお見送りにきていた、あの戦い大好きッコの姿が見えず、思わず気になる

「幸四郎なら、庭で一心不乱に稽古をしていたな」

「そう、まぁ悔しかったんでしょうね」

「最近顔つきが精悍になってきて、やっと当主に相応しい姿になってきたよ」

臥蛇丸は、そこでやっと、本日初の笑みを見せた
「それじゃ、行って来るわね」
「さーちゃんのこと、よろしくぅ～」
「お父しゃん、いってきます～（、・ω・、）」

「生きて帰ってこいよぉぉおぉぉぉ」
風車のように見境なく手を振る臥蛇丸に、やれやれとため息をつく娘たちであった

＜相翼院＞

「初めての戦場なんで、どきどきします～……（、・ω・、）」
薙刀を持って、初々しい反応をする巻絵
「誰だって、最初の戦場はそんなもんよ」
（なっちゃんは最初から堂々としていた気がするけど）
妹は人知れず思った
「でも～、夏海おばしゃんは、昔っから強かったってお父しゃんが（、・ω・、）」
「お、おばさん……」

夏海は急にガクッと膝をついた

「え、ど、どうしたんでしゅかっ（、・ω・、）」
「い、いえ、何でもないのよ……そうよね、もう1才だものね……」

「あはは～」
どことなく年を取って見える夏海の隣で、壬生川家に来てから一

貫して性格が変わらないのの香が笑う
「もぅ、良いからさっさと行くわよ！」
そうして、奥まで進み、天女の小宮に足を踏み入れる
「もうこんなとこまでやるんだぁ」
「だって、尻子玉大将じゃ、相手にならないんだもの」

大将の夏海が、燃え髪大将に斬りかかる
巻絵も何とか奮起して、そんな夏海のあとを着いて回る

「うくっ、」
燃え髪大将の放った渾身の花乱火の術が、夏海の体力の五割を奪う
「なっちゃん！」
白波の術の併せを結んでいるのの香は、泉源氏で援護することができない
巻絵はそもそも泉源氏を覚えていない

「ま、大丈夫よコレくらい、体力が黄色になっても、もう一発来なけりゃ――」

夏海が見たのは、再び術の詠唱に入っている燃え髪大将だった

～～

「当主さま、出撃隊が帰還されました…」

「あれ、まだ9月の中頃じゃない？」

「それが、あの……」

「え、夏海お姉ちゃんが！？」

ののの香が血相を変え、巻絵が泣きじゃくっていた
臥蛇丸とイツ花が、全身の大火傷を治療したが、

その命のともし火を復活させることは、ついに叶わなかった

「みんな、何を集まっているの…？　出陣の準備は、できたの…？
ホラ、早く……！」

壬生川　夏海　享年１才０ヶ月

ののの香が夏海の手を握って、首を振った

１才０ヶ月の生涯、８度の戦場に赴いた夏海の、最期だった

第二話－７　「夏茜」　１０１９年９月（後書き）

出陣・相翼院（夏海・のの・巻絵）
佐和→弓使い・初見　訓練・臥蛇→佐和　夏海・落命

第二話－8　「秋分」　1019年10月（前書き）

臥蛇丸　1才2ヶ月
のの香　1才1ヶ月
幸四郎　8ヶ月

巻絵　3ヶ月
佐和　1ヶ月

第二話－8　「袂分」　１０１９年１０月

「なっちゃん、そんなそんな！」

「夏海（なつみ）おばしゃんは、巻絵（まきえ）をかばって……」

「く、どうして、どうして目を覚まさないんだよ夏海！」

「夏海お母さん……？　どうしたの、ねえ……」

～～

……幸四郎（こうしろう）はゆっくりと目を覚ました

紺色の着物に着替えて、冷たくなってきた井戸水で顔を洗い、居間を訪れる

西方より伝来した兵法書をいつも広げていた夏海の姿は、そこには無い

囲碁に興じる夏海の姿も、もう無い

つい先日まで響いていた姉の声も、もう聞こえる事は無い

幸四郎の元服の晴れ姿を、夏海は見ることは出来なかったのだ

「大江山（おおえやま）への出陣は、１２月にしようと思います！」

玄輝の間もとい、会議室に集まる壬生川御三方、幸四郎、臥蛇丸（がじゃまる）、
ののか（ののか）の香だ

「再来月か、でも一体どうしてなんだ？」
「今月出陣して奉納点（ほうのうてん）を稼ぎ、そうして来月、僕が交神（こうしん）の儀を行います」

現在の奉納点は１６００、このままでは中途半端な位の神様としか交えない、幸四郎はそう判断したのだ

「ふむ……なるほど、それもひとつの手かもしれないな」
「もし僕たち大江山討伐隊が帰らなかったら、その時はそのコを次期当主にします」

皆の前でさらっと次期当主を宣言する幸四郎

「……わかった、さーちゃんにも、そう言っておくね」

夏海が亡くなって、変わったことがひとつ
ののの香の語尾から幼さが失われた

「そして、大江山討伐隊の参加者は……僕、巻絵、佐和（さわ）ちゃん、それにののの香お姉ちゃん、お願いします」
「うん、覚悟は出来ているよ」

ののの香も瞳を閉じて、しっかりと頷く
一族の仇を、夏海の仇を討つために

「俺は……置いてけぼり、なのか」

臥蛇丸は思わずつぶやいた
それが、生まれた頃から続いていた役割、のような気もした
だとしても――

「お兄ちゃんは、もし僕が戻らなかった場合……どうか、僕の子供を、よろしくお願いします」
「酷いな」
たまらず苦笑する

「自分の娘と兄弟たちを死地へ行かせて、その上で俺は屋敷で赤子を抱いていろというのか」
「ごめんなさい……！」
「佐和ちゃんじゃなくて、俺じゃダメなのか？　あるいは、巻絵の代わりに俺とか……」

臥蛇丸は食い下がる

「あの二人は、来年の大江山があるかもしれないんです、そのために、見てもらうのも悪くないと思うんです」
「来年の、大江山……のの香の代わりに俺でも、いや、それはダメか、術でも武芸でもののの香にはもう俺は勝てないか……」
かぶりを振る
「お兄ちゃん……」
「もしかしたら今月が、俺にとって最後の出陣になるかもしれないんだな」
臥蛇丸はそうして、外を眺めた

「巻絵に遺してやらなきゃいけないな、死ぬ前に」

臥蛇丸の父、玄輝は幸四郎と共に戦場を駆け巡ることはできなか

った
夏海もまた佐和に何も遺すことができなかった、それが彼女にとって心残りだっただろう
「同じ想いでも、悔いを遺すわけには、いかないものな」

＜出陣＞

「それじゃ行ってらっしゃーい」
土間で手を振るのの香
「のの香おばしゃん、一緒に行かないの？」
「うん、わたしは佐和の指導をしなきゃいけないの」

今月出陣できない佐和は、来月は交神の儀で潰れてしまうことから、大江山が初陣ということになる

「初陣の際に、＜泉源氏＞くらいは覚えておかないとね」
そう言って、佐和の髪を指で梳く
ニャフ、と奇声を発する幼い佐和
「3人での出陣か」

そのうちのひとりは、まだ幼く、前回もほとんど戦えていない巻絵だ
雰囲気を察して、当主が声を張り上げる
「じゃあ、僕が二人分頑張りますって！」

「不安だが、もうお前も元服したわけだしな……」
口では戒める言葉をはきつつも、何だか幸四郎の背中が頼もしくなったように思える
「よーしそれじゃー」
いつもは夏海がしていた儀式を、幸四郎もまた繰り返す
「とつげきぃぃぃ！」

＜再び相翼院（そうよくいん）＞

「のの香がいたら、ここには絶対に来たがらなかっただろうな……」
火の粉の幻影が、いまだまぶたの奥に焼き付いているのかもしれない
彼女が負った心の傷は、簡単には癒えないだろう

しかし今月は、相翼院の討伐が奨励されている期間だ
たくさんの妖怪を狩れば、それに応じた銭金が支払われる
京の都に資財を投げ打っている壬生川家は、いつだってお金がないのだ、強い武具を購入するために、機会は活かさねば
川から奇襲してくる物の怪を斬り捨て、臥蛇丸が先導する
その後ろを、おっかなびっくり着いていく巻絵だ

「お父しゃん……（、・ω・、）」
「戦場は怖いか？」
「うん、すごく、怖いでしゅ（、・ω・、）」

父の玄輝も夏海も、二代目当主の幸四郎も、戦場所を怖いと言っ

たことはなかった
妖怪と戦うのも、定めと受け入れていたのだった

「でも、一家にひとりくらい、そんな役目の奴が居るべきだよな……」

幼い頃から、無茶な父や妹に囲まれて暮らしていた臥蛇丸の役目だったのだ

「おまえは、幸四郎や佐和が無理をしたら、止めるんだよ」
「は、はぃ……」
「それはおまえにしか出来ない、立派なお務めだからね」
「戦場は怖いでしゅけど、それなら、出来るかも、しましぇん……（、・ω・´）」

巻絵は優しい子だ、大事に育てたかいがあった

「俺がしたように、巻絵は治癒の術を大切にするんだよ」
「はぃ（、・ω・´）」
巻絵の頭を撫でる臥蛇丸
「みんなにおっかなビックリ着いていって、暴れる子をなだめて、張り切る子に癒やしの術を唱えて……みんなを頼んだよ、巻絵」
「お父しゃん……」

遠くで幸四郎が叫んでいた

「鬼が何だか変な書物を落としたよーーー！」
臥蛇丸は巻絵の手を引かずに、幸四郎に駆け寄っていった
巻絵はその後ろから、ひょこひょこと、くっ付いていくのであった

第二話－8　「袂分」　１０１９年１０月（後書き）

元服→幸四　出陣・相翼院（臥蛇・巻絵・幸四）　訓練・のの→佐和

第二話ー9　「穂先」　1019年11月（前書き）

臥蛇丸　1才3ヶ月
のの香　1才2ヶ月
幸四郎　9ヶ月

巻絵　4ヶ月
佐和　2ヶ月

第二話－９　「穂先」　１０１９年１１月

＜槍使いの指南書＞

「ふぅむ……」

臥蛇丸（がじゃまる）は部屋でひとり、首をかしげていた

「どうやら、先人によって書かれた武芸書のようだが……難解だ」

指南書から目を上げ、眉の間を指で揉みほぐす

先月相翼院から入手した槍の指南書を、何時間もかけて読み解いていたところだった

「夏海（なつみ）が生きていれば、もっと詳しいことが分かったかもしれんが……」

臥蛇丸ものの香（ののか）も、さらには幸四郎（こうしろう）も京の武術に精通しているとは言いがたかった

常に新たな知識を得ようと努力をしていた夏海ならば、あるいはといったところか

もはや考えたところで、詮ないことではあったが

「お父しゃん、お茶をお持ちしました～」

襖を開けて入ってくる娘、巻絵（まきえ）

「ん、すまないな」

熱くて渋いお茶が、胃の中に染み渡る

「そうだ巻絵、おまえならこれ分かるか？」
巻物を差し出す

「うーん、こういうのはちょっと……光源氏とか、耽美なお話なら大好きでしゅけど」

「そ、そうか」
少し引く臥蛇丸
「まぁ仕方ない、のの香と佐和（さわ）に見せて、あとは蔵にしまっておくか」
それがダメなら、自分たちの代では復活させられない、ということだろう
「ま、こういうのを次の世代に託す、というのは何だか無責任な感じがするものだな」
相変わらずの気難しそうな表情で、ため息をつく臥蛇丸であった

＜交神（こうしん）の儀＞

一方その頃、

「幸四郎さまも、本当に立派になられましたネ！」

交神の部屋に、正装した幸四郎が参上する
その晴れ姿に、思わず目をうるうるとさせるイツ花（いつか）だった
「うん、おかげでこうして子供を遺すことも出来るよ、みんなイツ花のおかげだね」

「そんな、イツ花は何もして無いですよ、壬生川家の皆様の尽力があったからこそ！　です」
「そうだなぁ……特にのの香お姉ちゃんの術には、ずいぶん助けられたっけ」

幸四郎は恥じらい、頭をかく
そんな幸四郎も９ヶ月、そろそろ子供の頃のヤンチャは鳴りを潜め、大人の色香と貫禄が備わってきた頃であった

「でもホント、幸四郎さまは格好良くなられましたネ！」
「そっちの方は分からないけど……でも、武芸は昔とは比べ物にならないくらい、成長したと思う」
昔から夏海のの香姉妹の玩具であったため、身なりに気を使うのは性分になってしまったらしい
「僕は末の子だったから、早く早く強くなりたいって、ずっと思っていたんだ」

そう言って、はにかんだ笑みを見せる
歴代当主好感度の中でも、上位に居続けるであろう微笑みだった、姉妹の教育の成果はこんなところにも現れているらしい

「さ、さって、それじゃ始めますかッ」
「うん、そうだね」

目録の中から、お目当ての神様を選び出す幸四郎
「現在の奉納点（ほうのうてん）から、ええっと、木曽ノ春菜さまか、陽炎ノ由良さまが丁度良いのかな」
木曽ノ春菜は土の神であり、奉納点は１９１８点
対する陽炎ノ由良は火を司る神様で、奉納点は２０３０点だ
「そうですねェ、幸四郎さまのお子様は次期当主なんですから、慎

重に決めませんとネェ」

「でもやっぱり、当主たるもの積極的で勇猛果敢な方が良いよねー」

カラカラと笑う幸四郎

母親が水神（みどろ御前）だというのに竹を割ったような性格の幸四郎を見ると、大事なのは遺伝より育った環境という気がするイツ花だった

「それじゃあ、陽炎ノ由良さまでよろしいですネ？」

幸「うん、よろしく！」

陽炎ノ由良「あーら、良い男ネェ」

後に陽炎ノ由良が二つ扇ノ前に語ったところによると、

なぜだか壬生川（みぶがわ）家二代目当主は女性の扱いが妙に手馴れていて、

壬生川家遊び人説が流れることになるのだが……それはまた別のお話

第二話－９　「穂先」　１０１９年１１月（後書き）

交神の儀・幸四×陽炎ノ由良

第二話－１０　「天来」　１０１９年１２月前編（前書き）

臥蛇丸　１才４ヶ月
のの香　１才３ヶ月
幸四郎　１０ヶ月

巻絵　５ヶ月
佐和　３ヶ月

第二話－１０　「天来」　１０１９年１２月前編

その日は、奇しくも初雪が壬生川家に天来していた

「雪だぁ……そういえば、僕が壬生川家に来たときも、雪が積もっていたなぁ」

二代目当主・幸四郎は縁側に立って庭を眺める

「何だかこれが最期のうちの景色だとしても、納得できそうだなぁ」

名残の雪を見て育ち、初雪が終雪となる、何となくみやびじゃないだろうか

縁起でもないことを考えて、カラカラと笑う

本日は、大江山へ出陣する日だ

＜倉庫の蔵出し品出し＞

その日の壬生川家は、朝から騒がしかった

「ちょっと佐和、ちゃんと自分の弓手入れしたのぉー？」

「わーもう、今やっているからお母さんー！」

「戦場で弦が切れたら、大変なことになるんだから、よく油を塗っ

ておくんだよぉ」
「はーぃはいはいはいはい、もうそれ耳タコだってばぁ！」
「何を言うの、佐和ってば初めてのいくさなんだから、念には念だからねっ！」
（まったくもぅ、お母さんってば臥蛇丸（がじゃまる）オジサンみたい）
「何か言ったぁ？」
「何でもないからナイカラ！」

居間では、親子が弓の手入れをしている真っ最中だった

（どうして居間で）
幸四郎は思ったが、恐らくこれが最期になるかもしれないと感じているから、一番馴染みの深かった場所で支度をしたいのだろうとはいえ、油まみれの居間を見渡して、うぅーんとうなる

一家で蕎麦をすすった居間、いつも幸四郎は食べるのが遅くて、姉妹にからかわれていた
夏海（なつみ）には囲碁の相手もしてもらった、まったく歯が立たなかったけれど
お腹が空いて仕方なかった稽古後、夕餉の前にイツ（いつか）花に握り飯を作ってもらったこともあった
臥蛇丸とはよく壬生川家の事を話し合っていた、町の発展がいかに鬼退治の助けとなるのか、幸四郎は教えてもらった

あの頃父親の背は、見上げるほど高かった

いつか届きたいと思っていた、幸四郎の背は今では晩年の玄輝（げんき）を越えていた

「あれ、こうちゃんどうしたの、ボーっとしてぇ」

「え、ああいや、居間を見てたんだ」

正直に答える幸四郎

「そっか」

1才3ヶ月となったのの香は特に追求しない、何となく感じているのだろう幸四郎の感慨を

「僕、もう準備が終わったから、お兄ちゃんと巻絵(まきえ)ちゃんの様子を見てくるね」

「はーぃ、こっちはもう少しかかるかもぉ」

「ん、分かった」

幸四郎は居間に背を向ける

後ろからのの香の「佐和、それが終わったら次は戦衣装にお着替えだからねぇー」と「ハーィ！」という元気の良い声が聞こえてきた

～～

「すまん巻絵、この槍はそっちに立てかけておいてくれ」

「ふぁーぃ」

「まったく、こんなに時間がかかるとは思わなかったな……」

「もう出発の時間が迫ってましゅぅぅ（´・ω・、）」

臥蛇丸親子は、なにやら倉庫でドタバタとしていた

「お兄ちゃん、大丈夫？」

庭にまで埃が噴き出している、幸四郎は中を覗き込んで、少しむ

せた
「おお幸四郎、すまんな準備が遅れて」
「それは大丈夫だけど、何をしているの？」

倉庫の中では、顔に手ぬぐいを巻いて割烹着を着た臥蛇丸と巻絵が、荷物を整理しているようだった

「なぁに、倉庫の中がごちゃごちゃしていたもので、今イツ花さんに頼んで町へ売却してもらってきているのだ」
「倉庫の整理……全然思いつかなかった」
「古い弓や、もう錆びた刀なども、砥ぎ屋に頼んでから仕出しをな」

夜通し掃除をしていたのか、臥蛇丸は全身煤だらけのようだ

「まぁこれで支度金も出来たし、ついでにいくらか上等な鎧も買えるだろう、ハハ」
「お兄ちゃん……ありがとう」
「なぁに、俺に出来るのはこんなことくらいだ、ほら巻絵、もうおまえは出陣の準備をするんだ」
「はーぁい」
「ありがとうな、手伝ってくれて」

臥蛇丸は黒ずんだ手を割烹着で拭いて、巻絵の頬を撫でた

「行って、幸四郎を守ってやるんだぞ」
「あぃ（、・ω・´）」

僕は守られるのか、と苦笑する幸四郎
とたたたと走っていく巻絵の後姿を、臥蛇丸は目を細めて眺める

「そうだ、俺に出来るもうひとつの事があったっけな」
「ええ、どうかお願いします」

幸四郎は頭を下げる

「ああ任せておけ、おまえの留守中、子供は俺が守る」
「僕が帰らなかった時は、そのコを当主に……よろしくお願いします」
「……名前はもう、決めているのか？」
「そうですね、帰ってきたら決めることにします」

幸四郎はにっこりと微笑んだ
「ハハハ、そうだな、それが良い、それが一番だ！」
臥蛇丸も男臭く笑う

「それじゃあ、行ってきますね、お兄ちゃん」
「ああ、奮って来い！」

～～

「さって、みんな集まったかな」
「お～」
「おー！」
「はい、わたし頑張りますでしゅ（、・ω・´）」

四人は外に、ひとりは玄関に

「どんな結末になっても、俺は待っているからな」

死地へと赴く、四人を眺める臥蛇丸

「それでは、壬生川家、出陣！！」
刀を抜いて、叫ぶ

「目的地は大江山山頂、朱点童子（しゅてんどうじ）の首ひとつ！！」

見送られる側と、見送る側
「さ、イツ花、居間に戻って片付けでもするか」
「……そうですネ」
「あの油まみれの部屋じゃ、皆が帰ってきた時に、くつろぎにくいだろうからな」
「はい、おっしゃるとおりです、臥蛇丸さま」

すっかり掃除夫と化している臥蛇丸であった

第二話－11　「去来」　1019年12月後編

＜大江山（おおえやま）＞

かつて神が降臨した聖地との伝承もありますが、とにかく現在は宿敵朱点童子（しゅてんどうじ）のいる　鬼の総本山です
当然　ここに巣くう鬼や妖怪は他の迷宮に比べて、ケタ違いに強い！

イツ（いつか）花の書き置きが強い風に揺れている
幸四郎（こうしろう）は紙をしまって、山を見上げた
鬼の総本山――大江山

緊張した面持ちで、四人はその入り口までやってきた
「うわ～、おっきぃねぇ～」

と思ったら、緊張していたのは3人だけだったようだ
見上げて口笛を吹くのは、ひとりのんきなののか（ののか）の香

「この山登るのかぁ、疲れそぅ」
うぇ～って顔をするまだまだ現役、一児の母だ
「途中で腰抜けたら、ウチがおぶっちゃるヨ、もう年だしねっ！」
「うっわ生意気っ」

頬を引っ張り合う仲の良い母子

「緊張、緊張感が……」
山から吹く風に、吹き散らかされてしまったようだ
「ま、まぁまぁみなしゃん、そろそろ……（´・ω・`）」
「行かないと日が暮れちゃうからね、今月中に到達できなかったら
……次の挑戦は来年、だものね」

壬生川家にとって、一年はとてつもなく、長い
しかし、比較的若いメンバーで構成された現出撃部隊
１才３ヶ月ののの香は例外としても、１０ヶ月の幸四郎、５ヶ月
の巻絵はまだ可能性があり、３ヶ月の佐和は確実に来年の主力だろう
来年の、その次の挑戦のためにも、この四人は山頂を目指すべき
なのだ
誰かひとりでも生きて帰れたら、そのときの経験を活かして、来
年に繋げるためにも

「じゃあ……参りましょう」
「お～」
「ホイヤー」
「はぃ（、・ω・´）」
四人は山を駆け登ってゆく
打倒・朱点童子の旗を掲げて

～～

それが佐和にとっての、初戦闘となった

壬生川家において現在最高の戦闘経験を持つのの香は、驚いた
大江山の一合目にうろつく妖怪ですら、他の地では中腹に位置す
るような大物ばかりなのだ

「これは、手ごわいなぁ」
佐和を援護しようと、幸四郎や巻絵が動く
ところが当の本人はというと、
「ひー、ヤバイ、ヤバイィィィ」
怪異たちからひょいひょいと逃げ回る佐和

（ひょいひょい……？）

身軽だ、とても弓使いとは思えないほどに
「ちょっと、佐和ちゃん」
射った矢が、幸四郎の方にビシバシ飛んでいく
「佐和しゃん、何て荒れ矢……」
ばら撒いている本人はすこぶる楽しそうだ

「ビャー」

幸四郎も慌てて避ける、矢をつがえるまでも非常に早く、その威
力もまた痛快だ
３人は思わず息を呑む
（滅多矢鱈……！）
注・めったやたら――考えもなく手当たり次第に何かをしたり、
数量・度合いなどがむやみに多かったりするさま
外れなかった矢は、妖怪の胴体を一撃で貫く

「タノシー！」
壬生川家の三世は、その頭角を徐々に現してゆくのであった

〜〜

一同は傷つきながらも、二合目に達する

「泉源氏（、・ω・′）」

臥蛇丸から受け継いだ、見事な技力で、皆の傷を癒やす巻絵

「いやぁ〜、みんな泉源氏の術を覚えてて良かったねぇ〜」

均等に技力を使っていけば、強敵が現れたときにも併せの術が使えるというわけだ

「僕らはまだ、回復量の少ない＜泉源氏＞しか使えないから、常盤ノ秘薬は残しておかなきゃね」

そうして道具を節約して、強敵――朱点童子との戦いに備えるのだ

「イヤッハッハ、１０月にさんざんお母さんにシゴかれましたからぁ〜」

「酷い言い方」

ののの香がすぱーんと佐和の後頭部を叩く、佐和はぎょふぅと呻く

「こんなところで体力使わないでくださいよ……」

「泉源氏（、・ω・、）」

一同の薬箱、巻絵

「さ、二合目に入って新たな妖怪が現れるよ、気を引き締め直そう」

短い休憩は終了だ、一同はさらに雪山を登る

一ヶ月で登頂するため、体力を消耗しつつも壬生川一家は駆け足

で急ぐ

そこへ、突如として巨大な鬼が襲い掛かる

「デカッ！」

「な、何この鬼ぃ！」

巨大な鬼の正体は、夜叉という獰猛な怪物だった

避けきれず夜叉の横薙ぎを受け、体力の三割を持っていかれる幸四郎

「うっわ、痛いな」

まだ二合目だというのに、こんな化け物が出てくるなんて！

「早めに大将を倒して、撤退させよう！」

ここであまり技力を消費するわけにはいかない、そう思っていた矢先だった

＜花乱火＞の炎が、幸四郎を襲った

幸四郎とのの香は知らなかったが、それはかつて夏海を沈めた術と同等のモノだった

「くあああ！」

「幸四郎しゃん！」

慌てて回復に駆け寄る巻絵、その後ろからのの香と佐和が援護をする

「相手の番が来る前に、沈めるよ！」

「ヤバイ、お母さんと術を併せる方が緊張するぅぅ」

温存なんて言っている場合ではない、＜白波＞の術印を結ぶののの香、続く佐和

家族の中でもっとも速さに長けている弓使いふたりの、高速連携が夜叉ごと大将を押し潰す！

怒号の響く白波が去った後、その場に残っている妖怪はいなかった

「ふぅ……これでゆっくり、治療できるよね」

（お母さん、ケッコー無茶だ）

母の意外な素顔を垣間見た佐和だった

「それにしても、あちち……二合目でこんな相手なんだね」

「泉源氏の術じゃ、回復が追いつかないでしゅね（´・ω・`）」

上位回復の術の必要性を痛感する

「僕が回復したら、先を急ごうか」

健康度の減少が気に掛かるが、幸四郎たちは進まなければならないのだ

～～

三合目に到達した時、もう残りのともし火は半分だった

幸四郎の提案で、ここから先は時間短縮のため、出来る限り敵を避けていこうという事になった

四人は気配を消してちょこまかと登り、そのまま四合目に達した

四合目に立ちふさがる鬼は、今までに見たことがないほど凶悪だった

悪羅大将、夜叉を従えるほどの上等な鬼

それらが、あちこちを跋扈しているのだ

さらに四合目から先は、壬生川一家から笑顔が消えるほどの豪雪だった

歩くのも辛い積雪の中、四人は走り続ける

～～

五合目にたどり着いたとき、前線に立つ当主・幸四郎の健康度は、69まで低下していた
防御をあげる防人の術を重ねがけても、悪羅大将の力を溜めた一撃は軽々しく幸四郎の体力を持っていく
「いやぁ、さすがに大江山は高いねぇ」
あははと笑うが、その顔も少し強張っている
「とりあえず応急手当はしておきましたけど、怪我はおうちに帰って養生しないと……」
「ううん、僕たちは、先に進まないといけないよ」
やんわりと否定するが、佐和がその場にへたり込む

「えー、でも、まだ来年もぅ」

ふふと笑って、佐和を立たせるのの香
「のの香には、来年なんてないんですからね」
「お母さん……」
身体が疲れきっていても、母親の想いを知ると進む力も沸いてくる
「さ、みんな、もう時間が少ない。進まなきゃ」
一番の深手を負っている幸四郎が、先陣を切る
それが当主の役目だと言うように

一同はついに終合目を越えた

〜〜

大きなつり橋を渡って、大江山の中へと足を踏み入れようとする時、
法螺貝のような声が行く手を塞いだ
「大江山仁王門の、門番……！？」
刀を抜く幸四郎と、その横に巻絵、少し後ろにのの香と佐和が武具を構える
仁王門の両側に飾られていた、巨大な木仏像が、そして動き出した
痩せ仁王（におう）・太り仁王（におう）「ウォオオオオオオオオオオオオオオ！」
「壬生川家が当主、壬生川幸四郎、参る！」
幸四郎が雄叫びを上げて、斬りかかる
二匹の仁王は先制攻撃をし、続けざまに術を放った
＜光無し＞の術で巻絵、のの香、佐和の術が封じられ、＜夢子＞の術で幸四郎は大幅に命中力を下げられる
「拓け、当主ノ腕輪！」
先祖を呼び出すも、その一撃が避けられてしまう
「そんな、当主ノ腕輪が……！？」
今までの相手とは次元が違うと、否応もなく思い知らされる
のの香は神仙水（しんせんすい）――ステータス異常を治癒――を飲み、術を復活させた
「お母しゃん……お願いします！（、・ω・´）」
術を封印されたままの巻絵が、七光ノ御玉（ななひかりのみたま）を掲げ、二つ扇ノ前の

力を召喚する
二つ扇ノ前の放った火の鳥は、仁王らに威力を発揮した！
「巻絵ちゃん、てぃ」
巻絵の頭に神仙水をぶっかける佐和、濡れ鼠と化した巻絵は、とりあえず術の封印が解けた
そうして相手の攻撃
痩せ仁王と太り仁王は、剣撃を二代目当主に集中させた！
二発の攻撃で、最大３００のうち、２００もの体力を奪われる
「僕がやられたら、一家は退散だよね……」
へろへろになりながらも、防人で自らの防御を上げる
巻絵も同じく防人で、幸四郎の防御を援護する
ののの香や佐和も続こうとしたところ、仁王は再び＜光無し＞の術を唱えた
「えぇぇぇ、術がぁ～～～」
「うーわー、弓での攻撃が一桁しか通らないよ！」

防戦一方の壬生川一家に、仁王らの弱体術が次々と効力を発揮する
＜みどろ＞の術により敏捷性まで減らされた四人では、回復が追いつかない

「うー、丸薬まで尽きました……」
巻絵の元へ、仁王の一撃が繰り出される

「何だか、お役に、立てなかったでしゅね……（，・ω・、）」

吹き飛ばされて、そのまま地に伏せる巻絵

「巻絵ちゃん！」
「こっのぉ～～～～！」
ののの香は叫びながら、七光ノ御玉を掲げる

「ママ～～～、なっちゃんの分まで力を貸して！」

福招き美也を呼び出すのの香、がってん承知と美也は竜巻を作り出す

神様の唱えた術の力は凄まじく、あの仁王にも浅くない傷をつけた

「どうだっ」

そんなのの香にも、仁王の鉄刀が振り下ろされる

「や、お母サンッ！」

のの香をかばう佐和

「佐和ちゃん！　どうして！」

かばったまま仁王の攻撃を受け、その場に倒れこむ佐和

「だって、ウチの弓、全然効かないんだモン……お母さんが倒してヨネ……きゅぅ」

「佐和ちゃん……」

歴然とした力の差の元、遺された幸四郎とのの香

「うあああああああ！」

がむしゃらに刀を振るう幸四郎

神仙水ももう切れてしまった以上、のの香もひたすらに矢を射る

武人と防人の効力も薄れゆく中、幸四郎は仁王たちの攻撃を受け止め、その剛剣を叩きつける

「僕らの力は、こんな、こんなものなのか！」

叫びが、ほとばしる

「僕の刀は、大江山の、門番にさえ勝てないのか！」

人生を賭けて臨んだ、大一番の勝負だったというのに

「こんなに届かないなんて、くっそぉおおおおおおお！」

死ねえええええと刀を振り回す
そのすぐ後ろ、のの香が倒れた

「こうちゃん……強くなったよね、とっても……」
仁王の攻撃、たった二発での撃沈だった
「パパが見たら、絶対驚くのに……でも、こんなことって……」
雪の中に倒れこんで、そのまま意識を失っていく

「あああああああ！」
幸四郎の渾身の一閃――クリティカルが、仁王を薙いだ
太り仁王の身体が、ゆらりと揺れ、そのまま巨体が倒れこんだ

「ハァ、ハァ……くっそう、くっそう……！」
だが、残る痩せ仁王が、両手を振り上げ――

「朱点童子めがぁあああああああああああああ！」

大江山仁王門内、二匹の仁王によって壬生川家は壊滅させられた

そして１２月が終わり、大江山の戸は再び閉じられたのであった

……

第二話－１１　「去来」　１０１９年１２月後編（後書き）

出陣・大江山（幸四・のの・巻絵・佐和）

第二話ー12　「雪遊」　1020年1月（前書き）

臥蛇丸　1才5ヶ月
のの香　1才4ヶ月
幸四郎　11ヶ月

巻絵　6ヶ月
佐和　4ヶ月

第二話－１２　「雪遊」　１０２０年１月

＜大江山（おおえやま）での激戦の翌月＞

壬生川（みぶがわ）家は、居間を家族で囲み、餅を肴に盛り上がっていた

「そうだ、今から雪合戦しよう～！」

手を挙げてはしゃぐ、半死人

「お母さん、全身包帯だらけデショーガー！」

そう言う佐和（さわ）も、掘りごたつに隠れて見えないが、右手を包帯で吊っている

「えー、じゃあまきちゃんとやるから良いしぃ～」

「ふぇえぇ（´・ω・、）」

突然話を振られた巻絵（まきえ）は、困惑する

「おまえら、怪我人は怪我人らしく落ち着いてなさい……」

臥蛇丸（がじゃまる）が眉間にシワを寄せる

ピカピカにお掃除した居間で、思い思いくつろぐ壬生川一家

「でもまぁ、何だろう」

みかんを剥きながら、ごちる幸四郎（こうしろう）

「何か、みんな無事で、良かったよね、本当に」

あははと笑う、前回の死闘から一ヶ月

奇跡的に、壬生川家決死隊は、誰一人として死者が出なかった

「死にぞこないの体で戻ってきた時は、誰が生きているのかも分からない有様だったがな……」
渋いお茶をすする
「あのときのことは、もう思い出したくないぞ……」
本当にひどかったのだ

「えー、じゃあ幸四郎オジサンと組むー」
今度は雪合戦のメンバー決めで、争っているようだ
佐和が幸四郎の腕に抱きつく
「え、僕も？」

「幸四郎は当主の上怪我をしているからな、それなら代わりに俺がやろう」
心なしか嬉しそうな臥蛇丸

「エー、臥蛇丸オジサンかー」
怪我ならウチもしてるしぃ、と露骨に嫌な顔をする佐和、なぜだか臥蛇丸には人望がないようだ

「いいね～、親子で別チーム対決だね～」
のの香はきゃいきゃいと嬉しそうだ
「お父しゃんと敵同士でしゅか（´・ω・、）」
「うむ、手加減はせぬぞ、はっはっは」
ボソリと年だから身体ダイジョブかなと言った佐和が、のの香と臥蛇丸に殴られていた
幸四郎はそんなやり取りを、みかんを頬張りながら眺める

壬生川家には、ひと時の平穏が戻っていた

＜新職業＞

「当主さまー、新たなお子様がいらっしゃいましたァー！」
「やぁやぁ、嬉しいなぁ」
一時は二度と会えないことも覚悟していたのだ
幸四郎は頬を緩めて、その子を迎え入れる

「とにかくよく笑う女のお子様です！」
「女の子、かぁ」
このまま何事もなくいけば、三代目当主は初の女性当主ということになる
「それにしても、壬生川家は、女の子ばっかりだなあ」
これで巻絵、佐和と、三人連続で女子が産まれたことになる

一月に生まれたということで、名前は（委任で）初子（はつこ）
職業は壬生川家初めての、槍使いだ

「あははー、よろしくお願いしまーす♪」

元気良くやってきた初子は、父譲りの橙色の髪に、茶色の瞳を持っていた

「これから頼むね、初子」
「はい、お父さま♪」

幸四郎に似て、笑顔が眩しく、人を惹きつける何かがある女の子だった

＜四人が大怪我＞

「それじゃ、今月はみんなで休養するよー」
初子を連れて、幸四郎は庭で雪合戦に励む一同に声をかける

はーいという声が、あちこちから上がった

「ていうかみんな、先月大怪我したんだから、運動はほどほどにねー」
遊んでいる人たちの中には、マジになっている人もちらほら

「雪合戦も、合戦よ～！」
雪玉を臥者丸や佐和に投げつけ、のの香

「く、こうなったら、やじりに雪玉を固メテ……」
弓を引っ張り出す佐和
「いやそれは人死が出るぞ！」
臥蛇丸が叫ぶ
雪玉ならぬ、雪矢だ

「お、幸四郎」
ふと気づいた臥者丸が雪合戦をやめて、幸四郎を向いて――
投げつけられた大きな雪玉を頭に食らって、雪に倒れ込む
「ああっ、お父しゃんごめんなしゃいいい」

慌てて臥者丸に駆け寄る、雪を投げつけた娘

それはともかく、のの香と佐和が幸四郎の元へとやってくる
「わ～、その子が？」
「うん、僕の娘、さ、挨拶するんだよ」
幸四郎は初子をうながす

「はーい、初めまして、わたし初子と申します♪」
ぺこりと頭を下げて、黄金色の三つ編みを揺らす

「うわ、可愛～っ」
幸四郎に似て、品の良さそうな顔立ちに、仔猫のような愛らしさがある
間違いなく壬生川家きっての美少女だ

「オー、ウチは佐和、よろしくねっ」
「はい、初めまして♪」
のの香はそのふたりを見て、うっとりとつぶやく
「玄輝パパの孫なのに、どうしてこんなに違いがあるんだろぅ……」
「ウチ負けてないし！？」
母の素直な感想に、たまらず叫ぶ

「ねぇねぇお父さま、わたしも雪合戦してみたいですっ♪」
幸四郎を見上げて、ねだる初子
「んーでも、まだ初子はちっちゃいからなぁ」
庭の積雪を眺めて、雪に埋まってしまわないかと悩む
「大丈夫っ、できるもん！」
「そう？　埋まらない？」
「埋まったら、雪なんて食べちゃいます！」
それはお腹を壊すからやめてほしいな、と思う幸四郎

「んーそうだね、僕もやろうかな」
「ワーィワーィ、やろうやろうー！」

佐和とのの香が手を叩いて喜ぶ

「相手を動けなくするまで雪玉をぶつけた方が勝ちですよね、本で読みました♪」
「イヤそんな恐ろしげな遊びじゃ……」
まだ幼い初子に、じわりと汗ばむ佐和

「だがなぁ、ちょっとコレは、気を抜きすぎじゃないのか？」
雪合戦に興じる壬生川一家を見て、幸四郎につぶやく雪まみれの臥蛇丸
「まぁ何ていうか、僕たちの技量ではまだまだ朱点童子には届かないのも、分かったし」
「ふむ……」
討伐までの期限は残り１０ヶ月

「ま、気長にやろうよ」
幸四郎はニッコリと微笑んで、壬生川家にとても似合わない言葉で締めくくった

こうしてそれぞれは、短い休暇を存分に楽しむのであった

第二話－１２　「雪遊」　１０２０年１月（後書き）

休養　初子↓槍使い・初見

第二話―13　「狐罠」　1020年2月（前書き）

臥蛇丸　1才6ヶ月
のの香　1才5ヶ月
幸四郎　1才

巻絵　7ヶ月
佐和　5ヶ月
初子　1ヶ月

第二話－１３　「狐罠」　１０２０年２月

半分まで減らされた健康度（けんこうど）は、ほぼ全員が先月の休養で完治していた

ただ一人を除いて……

＜ののの香の部屋にて＞

ののの香（ののか）はきょうも床に伏せっていた

先月の雪合戦のあとから、どうも身体の不調が続いている

「お母さん、ナッカナカ良くならないねぇ～」

「そうねぇ、わたしももうそろそろ年なのかしらねぇ～」

布団から身を起こして、力なく微笑む

その顔は熱に浮かされ、桃色に火照っていた

「イツ花（いつか）サンが、鬼たちが市中に悪しき病をばらまいて、もしかしたらののの香さんもそれにかかっているんじゃないか、って言ってたヨォ」

「え～、でもわたしは病気じゃないもの、怪我の治りが遅れているだけよ」

外見は未だ２０台前半に見えるのの香が、ビシと佐和（さわ）のオデコを突っつく

「そうだよネー、しぶといモンねー、じゃあうちはちょっくら出陣してくるよー」

「はいはい、こうちゃんやまきちゃんに、あんまり矢を当てないのよ」

あんまりで済ますのの香

「ハーイ」

元気良く出てゆく、５ヶ月の佐和

のの香は、ふふと微笑みながら、手を振った

＜出陣＞

「それじゃ、のの香お姉ちゃん、行って来るね」

「はーぃ、はっちゃんはのの香に任せなさーぃ」

玄関まで見送りに来たのの香が、どんと胸を叩く

「のの香お姉さま、よろしくお願いします♪」

一撃でのの香の心を鷲掴みする初子（はつこ）

お姉さま、という言葉にクラッと来てしまった

「うわぁ、良い子だねこの子ぉ」

よしよしするのの香の横、佐和がぼそっと「オバサン」と呟き、

のの香に弓で殴られたりする

（元気じゃないか……）

幸四郎（こうしろう）は口に出さずつぶやいた

薙刀を背負った臥蛇丸（がじゃまる）が、庭からやってくる
「おーぃ、俺も一緒に行くぞ」
「お父しゃんって、大丈夫でしゅか（´・ω・`）？」
「なんてったって、もう三ヶ月も屋敷で図面を引いているからな…
…身体がなまって仕方ない」
そう言って笑う臥蛇丸
「でもお兄ちゃん、もしかしたらこれが最期の出陣になるかもしれ
ないよ……？」
丁度臥蛇丸の1才6ヶ月は、幸四郎たちの父・玄輝が亡くなった
のと同じ歳だった
「ああ、それでこそ、床の上では死ねんよ」
「そっか、分かったよ」

幸四郎、臥蛇丸、巻絵（まきえ）、佐和の部隊が結成される

「それじゃ初子、のの香お姉ちゃんとしっかりやるんだよ」
「はーぃ♪」
「ん、いい返事だね」
初子の頭を撫でる幸四郎
「それでは、壬生川（みぶがわ）家突撃！」

＜鳥居千万宮（とりいせんまんぐう）＞

「それにしても、もうここもだいぶ慣れてきたな」
青の鳥居をくぐって、どんどんと先に向かう臥蛇丸

「そうだね、お兄ちゃんとお姉ちゃんの経験は、壬生川家にとってすごく大事なものだよね」
年長者を敬う幸四郎
「身体は衰えてきても、短命の呪いでは頭まで老いてはいかないようだな」

臥蛇丸の外見も、せいぜい２０台の前半にしか見えなかった

「ウワー、鳥居をくぐると見たことがない景色が！」
初めて鳥居千万宮を訪れた佐和は、おおはしゃぎだ

「あやかしの術なんでしょうかねぇ」
「あやかし！？　何ソレ、使えるの巻絵ちゃん！？」
「え、ええ、私は使えましぇんけど（´・ω・`）」
「ハーン、鳥居以下ね、巻絵ちゃん」
「……（´・ω・`）」
よく分からないとぼし方をする佐和
巻絵はしょんぼり顔

あやかしの術は使えないけれど、一同は＜速瀬＞の術の高速移動でサクサクと進んでいく
途中に出現する、狐の嫁入りの火炎系の術に苦戦しつつも、皆はこれまでとは変わった場所に到達する

――暗黒大鳥居

「今までとは違った、邪悪な気配が感じられるね……」
「どうする、この先に進むか戻るか？」
臥蛇丸の問いに、少し考えた後、答える当主
「そうだね、挑戦しよう」

「分かった」

みんなの体力をすばやく回復して、陣形を整える

「ワクワクしてキター！」

矢をばら撒く佐和

「落ち着いて、佐和しゃん……」

どうしてあの淑やかなのの香から、こんな娘が生まれたのか、疑問に尽きない巻絵だった

だが一方、臥蛇丸は思い出す、あんな感じの暴力的な女性が、かつてののの香の姉として君臨していたことを

（再来……）

何となく、巻絵の先行きが不安になってしまう

「さ、来たよ！」

その時、どこかから狐の雄叫びが響いてきた

稲荷ノ狐次郎（いなりのこじろう）「ケェエエエエエエエエエエエエエエエン！」

根元から三匹の狐が枝分かれして生えている化け物だ

真ん中の狐が口に咥えた鎌で攻撃してくるが、一撃７０ほどであまり痛くはない

「良かった、何とかなりそう！」

先々月に戦った仁王に比べたら、打撃は大した威力ではない

いつもの通り、前衛にガッチガチに＜防人＞を重ねがける巻絵と

佐和
　すかさず稲荷ノ狐次郎に＜矛折り＞の術を掛けられるが、巻絵が用意した神仙水（しんせんすい）によって効果が消される

「サー、幸四郎兄ちゃん、発進！」
「はいはい」
＜武人＞の術によって強化された幸四郎の一撃が、狐に深手を負わせてゆく
　途中、相手の＜花乱火＞によって１７５ものダメージを受ける臥蛇丸
　それでも怯まない
「く……＜白波＞の術の併せ、行くぞ巻絵、佐和！」
「はいぃ！」
「オウー（印、どう結ぶんだっけ！）」
　三人併せ五倍の＜白波＞で、１８０ダメージを与える
　しつこく臥蛇丸が狙われるが、それよりも早く幸四郎の刀が狐を切り裂く！

　光が瞬き、その瞬間、稲荷ノ狐次郎が霞になってゆく

「……ふぅ」
　ホッと息をつく幸四郎
　稲荷ノ狐次郎を討ち取ったのだ

　一方、疲労困憊の臥蛇丸
「大丈夫だ、巻絵、そんな焦って泉源氏を唱えぬども」
「お父しゃん……（´・ω・、）」
　健康度が低下している
　戻ろう戻ろうと主張する巻絵に、幸四郎と臥蛇丸は先に進もうと説得する

先のお稲荷御殿には、もうお馴染みの強敵、悪羅大将たちが跋扈していた

稲荷ノ狐次郎を倒して力が抜けたのか、気の入ってないところを襲われた一同は、悪羅大将の先制攻撃で、幸四郎が倒されてしまう

「ひいい！」

「幸四郎しゃん！」

その場に沈み込んで、気を失う幸四郎

「撤退だ、隊長がやられた、屋敷に戻るぞ！」

臥蛇丸が迅速に指示をする

一同は倒れた幸四郎を背負って、京に敗走していくのであった……

第二話－１３　「狐罠」　１０２０年2月（後書き）

出陣・鳥居千万宮（幸四・臥蛇・巻絵・佐和）　訓練・のの→初子

第二話－１４　「御三」　１０２０年3月前編（前書き）

臥蛇丸　１才７ヶ月
のの香　１才６ヶ月
幸四郎　１才１ヶ月

巻絵　８ヶ月
佐和　６ヶ月
初子　２ヶ月

第二話－１４　「御三」　１０２０年3月前編

「幸四郎様！　これからはもう少し慎重に行動されますよう、イツ花からのお願いです！」

イツ花が目を吊り上げて、幾度となく繰り返したお小言を再度放つ

「いやーうん、ツメが甘かったみたいだな僕、ごめんねイツ花」

桜のつぼみが膨らみだす頃、布団に寝転んで、幸四郎が微笑んだ

その爽やかな笑顔に、イツ花ですらつい怒気を弱めてしまう、まさに年上殺しの幸四郎

「もう、幸四郎様ってば……あまり家の皆さんにも心配かけないでくださいネ」

「何だか僕、常勝無敗にはほど遠いよねぇ」

連敗続きだ

あははーと笑う

「あれ、そういえば、家がずいぶん静かなような」

いつもなら、ののの香にちょっかいを出された佐和の悲鳴や、巻絵を叱る臥者丸の怒声が、聞こえてくるものだが……

きょろきょろと見回す幸四郎に、イツ花が沈うつな表情で続ける

「それが――」

臥蛇丸とのの香が、京の都で流行っている病にかかったと聞いた

臥蛇丸1才7ヶ月、のの香1才6ヶ月の初春だった

＜巻絵の元服＞

「いやぁ、申し訳ないな、寝込んだままで」
寝巻きのまま、薄く笑う臥蛇丸
臥蛇丸の部屋には布団が一枚があり、巻絵はその近くに正座していた

「お父しゃん、わたし、きょうで元服致しました（、・ω・、）」
「うむ、おまえの晴れ姿、もっとよく見せてくれ、ああ、でも近寄るとマズイのか」

口元を押さえる臥蛇丸

「ううん、イツ花さんが、健康的な人ならうつることはないって言ってましたから、平気でしゅ」
「そうか……おまえのその子供っぽい言葉遣いも、そろそろ直した方が良いな」
笑いながら、巻絵の頭を撫でる臥蛇丸
「（、・ω・、）」
「早いところ、泉源氏より上位の治癒の術を覚えて、一家の皆を守ってやれよ」
「はぃ（、・ω・、）」

「……何だか少し疲れてきたな、ちょっと寝かせてもらうぞ」
そう言って、心配そうな巻絵が見守る中、臥蛇丸は再び眠りについた

＜のの香の部屋にて＞

「ネーネー、お母さんまだ良くならないのー？」
布団にかぶりついて、口を尖らせる佐和
「そうねぇ、今年の風邪はちょっとしつこいねぇ」
のの香は横になったままで、うふふと笑う

「それよりさーちゃん、ちゃんときょうのお稽古は済んだの～？」
「もう！　しっかりしているってばっ、いつまでも子供扱いシテー！」
もう６ヶ月なんだから、とぷんすかと頬を膨らませる
「そっかぁ～、もうオトナなのねさーちゃん、うふ」
「う、何かソレ、お母さんが言うとアヤシイ」
目をそらして、お盆の上にあるお茶を一口含む佐和
「好きな人でもできた？」
「ブフゥ！」
噴き出す

「あらあら、確かにこうちゃんは良いオトコだけど、ああでも叔父だから結婚はできないのかぁ」
現代社会の法律が混ざってきている
「は、なるほどそうか、初子ちゃんの方か」
「ナニが！？」
「佐和の想い人？　しかも従妹だから結婚可だよね～」
「色々間違っているカラ！」

あんなに可愛いのに、と漏らすのの香の前で、佐和が慌てて話題を変える

「そうだ夏海(なつみ)サン！　なんか猛烈に夏海お母さんのお話が聞きたいナー！」

「なぁに急に」

「イイカラ！」

そうねぇ、とのの香は布団から身を起こす

心配そうな顔をする佐和に、きょうは具合が良いから、と笑顔で応える

「夏海お母さんは、とってもステキだったわねぇ……」

ぽぅとした瞳で、どこかあらぬ方向を見つめる

そういう関係だったのだろうカ、と少し疑ってしまう佐和

「玄輝(げんき)おじいちゃんの亡くなったあとも、灯の消えたような壬生川家を、ひとりでずっと支えてきたのよ、夏海ママは」

「幸四郎オジサンより強かったって、本当？」

「うん、当時は臥者丸お兄ちゃんも、夏海ママには歯が立たなかったんだからね」

美化１２０％の笑顔で思い出されているようだ

「そんな夏海ママの娘でもあるんだからね、佐和」

ぽんと頭に手を置く

「でも臥者丸オジサンが言うには、ウチは夏海お母サン似だって」

「うん、そうなるように教育したから」

「そうナノ！？」

今明かされる、佐和への教育方針

「だって格好良かったんだもの夏海ママ……（顔はなっちゃんに似てくれなかったけど）」
「何かスッゴイ失礼なことを思われた気がする」

お母さんは、ふふ、と笑ってごまかす

「さ、そろそろ出陣の時間ね」
「エー、もうー？」
「何だか最近甘えん坊じゃない？」
「違うし！」
「続きのお話は、帰ってきてからね」
「……ハーィ、今月もめいいっぱい戦ってキマース」
名残惜しそうに、そう言って佐和はお部屋を出てゆく

＜出陣＞

「今回の出撃隊は、わたし、佐和しゃん、それに初陣の初子しゃんでしゅね」
「よろしくお願いしまスー♪」

えへと微笑む、初子

「三人娘ダっ」
嬉しそうな佐和
幸四郎がすまなさそうに告げる
「お兄ちゃんとお姉ちゃんはご病気だし、僕も大怪我で、申し訳な

いね」
「隊長の任、引き受けたでしゅ（、・ω・´）」
巻絵がきりっと眉をあげる
「初子は初めての戦なんだから、あんまり無理しないようにね」
「お父さまみたいにならないようにしますね♪」
「言うね」
じゃれあう幸四郎と初子を、何となく羨ましそうに眺める佐和
「それじゃ、行ってきますでしゅ（、・ω・´）」
マイペースな巻絵が携帯袋を担いで、先頭を歩く
「それじゃ、がんばってねー」
「ハーィ」
「はーい♪」
第三世代の三人娘はこうして、相翼院（そうよくいん）へと進撃するのであった

第二話－１５　「飛散」　１０２０年３月後編

＜相翼院（そうよくいいん）＞

薙刀士、弓使い、槍使いの三人娘が双翼院を＜速瀬＞で駆け抜ける
「今回は、何としてでも＜お雫＞の術を持ち帰るでしゅ（、・ω・´）」
使命感に燃える巻絵（まきえ）
「オオ、上級の回復術でシュネ！」
「佐和（さわ）さん、口癖が」
頬を赤らめて、控えめに突っ込む様が初々しい初子（はつこ）

槍使いとは剣士に似た職業ではあるが、槍の特性上、横一列の敵を貫ける便利な職業である

「オオー、ソレが槍使いかぁー！」
戦う様を初めて見る佐和が、大興奮する
「薙刀とは異なるのですね～」
巻絵の戦いを横目で見ながら、感心する初子
初戦だというのに緊張もなく、非常に落ち着いている
「薙ぐか貫くか、でしゅね（、・ω・´）」
つまり攻撃範囲が、横か縦かの違いなわけだ
「ちゃーんと、巻物でお勉強したんですよー♪」

本来親から子に伝わるはずの武芸だが、初子の場合は書物から古来の武術を復活させたのだった

「でも、幸四郎しゃんが教えてくれたんでしゅよね、槍使いの技」
「うんっ、お父さんも手伝ってくれましたよ♪」
「えええええ」

独学で、槍使いの技法を復活させたという初子
佐和が目を丸くする

「お父さんが、女の子のわたしは力がないから、刀より槍を使った方が良いって、一緒に勉強しよう、って♪」
「一緒に、って……」
「のの香お姉さんに手伝ってもらったりもして、わたしいっぱい学習したんですよー♪」

父親譲りの朗らかな笑顔で、語る初子
そんなまだ生後2ヶ月の戦の天才を見て、自分たちとは格の違いを感じてしまう巻絵と佐和であった

～～

「出ましゅたー（、・ω・´）」
突然大声を上げて喜ぶ巻絵
「え、ナニナニー、鼻血ー？」
「温泉でも出ましたかー♪」
「（´・ω・、）」
「いちいちしょげないの巻絵チャンっ」

父上同様、皆の玩具と化している最年長者が、巻物を掲げる

「これでしゅ、＜お雫＞の巻物でしゅ！」
「オオー」
「おおー♪」

やんややんやと手を叩く

「ヨーシ、そんじゃ――」
「残る期間精一杯奉納点稼いで、凱旋しましょー♪」
「イヤソレ、ウチのセリフだかｒ」
「はい？」
「いや良いけどイイケドッ！　カワイイし！」

なぜだか拗ねる佐和
それはともかくとして、壬生川三人娘は、一ヶ月を戦い抜き、
ついに悲願である中級回復の術を土産に、帰還したのであった

～～

ただいまー、と三人娘の明るい声が屋敷に戻ってくる
屋敷が一気に華やぐ

「ん、おかえりみんな」

出迎えたのは、いつもと変わらない笑顔の当主だ

「タダイマー、幸四郎（こうしろう）オジサンー！」
「お雫取れましゅたー（、・ω・、）」

「それは凄いや、あとで僕にも読ませてね」
ニコニコとした幸四郎の着物の裾を引っ張る、初子
「あの、お父さん？」
「うん、何だい？」

「何か、あったんですか？」

「んー、そうだね」
どう言おうか迷っているようだ
少しの間の後、
幸四郎は、頭をかいて、ゆっくりと口を開く

「臥蛇丸（がじゃまる）お兄ちゃんとののの香（ののか）お姉ちゃんが、倒れたんだ」

三人娘が息を飲んだ

幸四郎によれば、市中のはやり病は鎮まったが、
とうとう臥蛇丸とののの香の熱は下がらなかったという

「さっきはずいぶん苦しそうだったんだけどね、今はもう意識もハッキリしてて、落ち着いているみたいだよ」
峠を越えたわけじゃあない
巻絵と佐和を親子ふたりっきりにさせて、幸四郎と初子は居間で待機していた

「何ていうか、最後の力、なのかな。巻絵ちゃんと佐和ちゃんが帰るまでは死ねないって気迫が伝わってきてね」

いつに増して饒舌の幸四郎

「お父さんも、何だか疲れてますよ……」

先ほどは気づかなかった、目の下のクマが痛々しかった

「ちょっと、僕も看病が過ぎたかな、またイツ花に身体を無理させて……って怒られそうだ」

口元を歪ませただけで、幸四郎は笑い声は上げなかった

「次に死ぬのは僕で良かった」

初子を抱き寄せて、幸四郎は少しだけ目を閉じた

「もうこんな想いをしなくて、済むもんね」

「わたし、絶対忘れません……臥者丸叔父さまの事も、のの香お姉さまの事も……わたしの子にも、伝えます、絶対……」

初子は声を殺して、泣き出した

初子を抱いたまま、幸四郎は疲労の眠りへと落ちていった

程なくして、臥蛇丸が亡くなった

その生涯で三度の大怪我に見舞われながらも、最期は娘に見守ら

れながら、布団の上で眠ることが出来た事に、とても感謝していた
という

臥蛇丸「今、みんなで、鴨川のほとりを散歩している夢を、見たよ」

それを追いかけるように、数分後、のの香も永眠した
佐和が言うには、とても人生が終わる人とは思えない、安らいだ
笑顔だったらしい
今際に、自分は幸せ者だった、とも言っていた

のの香「あなたたちが大好き。それ以上でも、以下でもないよ……」

巻絵が泣きじゃくり、佐和も赤ん坊のように声を上げて泣いた
初子もしゃくり声を上げて泣いたが、幸四郎は泣かなかった

臥蛇丸　享年1才7ヶ月

のの香　享年1才6ヶ月

明日からも、壬生川家は生き続ける
臥者丸やのの香の居ない屋敷で、彼らの屍を乗り越えて

壬生川家が涙に満たされたその日、
庭には満開の桜が咲き誇っていた
新しい時代が訪れていた

第二話－１５　「飛散」　１０２０年３月後編（後書き）

元服→巻絵　出陣・相翼院（巻絵・佐和・初子）
臥蛇・のの・病死

第二話－１６　「黒狼」　１０２０年４月（前書き）

幸四郎　１才２ヶ月

巻絵　９ヶ月

佐和　７ヶ月

初子　３ヶ月

第二話－１６　「黒狼」　１０２０年４月

臥蛇丸（がじゃまる）とのの香（ののか）が居なくなった屋敷では、静かな風が吹いていた

あの日以来、巻絵（まきえ）と佐和（さわ）、初子（はつこ）は前以上に仲良くなっていた
居間に三人で書き物や、戦術に関する論、好みの神様に関する討論などをしている様を、幸四郎（こうしろう）は良く見かける

「やっぱり、土の神様が良いでしゅ（、・ω・、）」
「エー、頭堅そうー」
「しっかりものじゃないでしゅか（、・ω・、）」
「ウチは絶対風の神様！　独創的で、自由で、愛嬌があってェ～」

佐和は視線を上げたまま、でへへと笑う

「佐和しゃんと風の神様とか、大変な組み合わせでしゅね」
「どうして!?　ウチめっちゃ良い奥さんになるって、肩も揉むよ!」

イマイチ巻絵は基準が分からない
巻絵の好みも佐和の好みも、どちらも性格的には親の影を追っているようだ

「で、で、はっちゃんはダレが好み?」
でででーんと、交神（こうしん）の儀に使う神様一覧表を、初子に突きつける
「うーん、そうですねぇ～……」
初子は真剣に悩む

「でもわたしは、交神の儀は、ちょっと不満かなぁ」
パタンとメニューを閉じてしまう
「どうしてでしゅか？」
「だって、神様って、結婚するわけじゃないから、ずっと傍にいてくれないじゃないですかぁ」
「マァ、一回アレしちゃうダケだもんネェ」
「わたしはやっぱり、いつも傍に居て、眠たい朝の稽古の相手になってくれたり、ノドが乾いた夜中に、一緒に井戸まで行ってお喋りしてくれたり、出陣の際に背中を守ってくれたりする人がいいなぁ……♪」
夢見る初子の長セリフ
「はっちゃんは可愛いでしゅね」
思わずなでなでしてしまう巻絵
「朝の稽古……一緒に井戸マデ……」
なぜだか赤くなってしまう佐和

とまぁ、壬生川（みぶがわ）家の母親と父親を失っても、子供たちは元気に過ごしていた
６００日にも満たない人生で、そう悲しみに暮れる日々は続かないというわけだ

＜家族会議＞

もはや玄輝の部屋だった名残もない壬生川家会議室
そこには、新御三方の幸四郎、巻絵、佐和が向かい合っていた

「それじゃ、今後の方針について、再確認しようか」

口火を切ったのは、幸四郎だ

「大江山討伐まで残り7ヵ月、お雫の術も手に入った事だし、これから万全の準備をして、朱点童子との決戦を迎えたいと思う」

「あの～」

おずおずと手を挙げる巻絵

「初子しゃんは、会議に参加しないんでしゅか？」

「あー、えっとね」

情けなさそうに頭をかく

「初子がね、壬生川家の方針を決める会議は、これから三人で話し合った方が良い、って言うのさ」

「エー、娘の言いなり！？」

茶々を入れる佐和に、苦笑いの幸四郎

「いやぁ、偶数だと意見がまとまらないかもしれないし、親子の縁が入ると、情にほだされて、公正な結果が得られないからという事らしいよ」

「ナルホド、言いなりだ」

「僕の話聞いていた……？」

もっともらしく腕を組んでうなずく佐和に、幸四郎は汗ばむ

「でも、しっかりしてましゅねぇ……初子しゃん」

「本当にね、7ヶ月後には僕はおそらくもう居ないだろうけれど……それでも、気が楽なんだよね」

幸四郎はからからと笑う

「子供かぁ……」

「どんな気分なんでしょうかぁ」

ふたりは先ほどの居間での会話も混ぜて、それぞれ思いを巡らせる

巻絵が9ヶ月、佐和が来月元服と、もう子供も作れるお年頃なのだ

「そうそう、それ7ヶ月の配分なんだけれど」

幸四郎は巻物を床に広げる

「大江山まで巻絵ちゃん、佐和ちゃん、初子がそれぞれ交神して、残る三回を戦闘、それに8月の選考会に出ようかと」

後半部分を娘たちは聞いていなかった

「こ、こ、こ、交神（´・ω・`）！？」

「ヒャー」

慌てふためく巻絵と、なぜだか照れまくる佐和

「ど、どうしたの……？」

そんなふたりを、幸四郎はビックリして眺める

女の子たちの動揺には気づかない

「え、だ、だって……そんな、その……（´・ω・`）」

「ウチらほら、男の人と全然話したコトないし、ないし！」

そういえば壬生川家は現在、男ひとりに女性三人の家族となっている

「そういえば、年の近い男の子がいないんだね、ふたりとも」

「う、ウン……」

いつも騒がしい佐和が、大人しくなってうなずく

「大丈夫大丈夫、ふたりとも可愛らしいから」

あははーと笑う幸四郎の無邪気な言葉に、真っ赤になるふたり

「そ、そんなっ（´・ω・`）」

「幸四郎オジサンのバカー！」

「さ、というわけで」
幸四郎は予定表を閉じて、巻絵に笑いかける
「巻絵ちゃんから、今月、交神の儀をしようか」
「は、はぅぅうぁ（´・ω・、）」
今にも逃げ出しそうな表情の巻絵は、交神の儀を行うことになった

＜交神の儀＞

「それでは、交神の儀を始めますよー」
ニコニコとしたイツ花（いつか）の前、涙目の巻絵がいた
「は、はぃ……（´・ω・、）」
「大丈夫ですか、巻絵さま……？」
「は、は……ぃ……（´・ω・、）」

ロウソクの炎よりも頼りない顔で、うなずく
そんなところまで父親に似なくても、と思いつつも、精一杯励ますイツ花
「そんなに怯えなくても、目を閉じていればスグですって！」
「は、はぃ（´＝ω＝、）」
もはやされるがままの巻絵
「え、えと、お相手は決まってますか？」
「お、お任せ、で……あ、でも、なるべく土の神様が良いでしゅ…

…」

早くしないと消えてしまいそうな様子でつぶやく

「そ、それじゃ、安いけれど遺伝子が良いと評判の神様をお呼びしますネ！」

こくこくと首を縦に動かす巻絵、もうすっかり言いなり状態だ

そうして、呼び出された神様は……

十六夜伏丸「血が滾りそうだ……」

二足歩行の黒狼、獣の王、十六夜伏丸参上

「ひ、」

巨大な狼の化身が、暗がりから巻絵におぶり重なって……

「ひやあぁぁうあぁ；あがああｑｗせｄｒｆｇｔｙふじこｌｐ！！」

～～

「交神の儀って……怖イ……？」

「いや僕は、そんなことなかったけど」

「佐和お姉さま……よしよし」

居間にまで響いた絶叫は、佐和に大きな不安を残すこととなったという

第二話－１６　「黒狼」　１０２０年４月（後書き）

交神の儀・巻絵×十六夜伏丸

第二話－17　「庭藤」　1020年5月（前書き）

幸四郎　1才3ヶ月

巻絵　10ヶ月

佐和　8ヶ月

初子　4ヶ月

第二話－17　「庭藤」　1020年5月

＜佐和（さわ）の元服＞

藤の花が見守る中、佐和の元服の儀が滞りなく終わった

「アリガトウ、ありがとうー！」

咲いている藤に向かって、笑顔で手を振る
その様子がなんだかいつもと違っている気がして、幸四郎（こうしろう）は思わず尋ねる
「どうしたの佐和ちゃん？」
「アレ、お母さんなんですヨー」
「え？　藤？」
少しだけ大人びた笑顔で、佐和はうなずいた
「お母サンずっと、わたしは生まれ変わったら藤になる、って言ってたんですヨ、だからきっと、今年はウチの元服の日に花を咲かせてくれたんデス」
「そっかぁ」
幸四郎は風に揺れているピンクの花を見上げた
思わず笑みがこぼれる
「お姉ちゃんらしいな、それ」
「ウン、こんなトコでも、でしゃばりなんだカラー」
ののか）の香の元服から丁度1年が経ち、こうして佐和もまた8ヵ月となった

＜出陣前、控え室にて＞

手早く着替えた幸四郎が、女子控え室に声を掛ける

「じゃあみんな、準備ができたら出てきてね」

中から三人娘それぞれのハーィという声が聞こえてくる

「何だか、ホントに、そろそろ男の子が欲しいな……」

キャイキャイとはしゃぐ女の子たちの声に、少し照れる幸四郎

昔は姉に弄られて、当主になってからは姪っ子たちに頼られて、

つくづく女性と縁があるものだと思う

幸四郎は控え室の前で待ち、もやもやとした時間を過ごす

「ネーネー、まきちゃんサラシ巻くの手伝ッテー」

ずっとのの香にやってもらっていた佐和が、ひーんと声を上げた

「実はわたしも、お父シャンにやってもらってて……（´・ω・、）」

「あ、わたし手伝いますか？」

「オオ、すごいゾはっちゃん」

「のの香お姉さまに、色々と教わりまして……」

2月の件を思い出して、なぜか頬を赤く染める

「あ、僕がお手伝いする？」

一同の会話を聞いて、少し遅れて控え室を覗き込む幸四郎

目が合った初子（はつこ）に、なぜか睨まれた

「お父さま、エッチ……」
胸を手で隠したまま、冷ややかにつぶやかれる
「ど、どうしてさ！」
「はいはい、良い子ですから外で待っててくださいねー」
娘にていよく追い出される一家の当主

「夏海(なつみ)お姉ちゃんにも、のの香お姉ちゃんにも僕が手伝ってたのにな……」
閉められた扉の前で、年頃の娘の扱いの難しさに、思わずぼやく
幸四郎であった

＜相翼院(そうよくいん)＞

「よし、鳥居も九重楼(くじゅうろう)も中ボスぽいのは倒したから、次はやっぱり相翼院に行こう」
最近連日通っている相翼院へと進軍する
「はぃ、よろしくお願いしましゅ（、・ω・´）」
＜お雫＞も習得し、すっかり壬生川家の薬箱・巻絵(まきえ)
「アイアイサー、ウチの矢で妖怪のハートを射抜きマスッ」
性格はともかく、のの香譲りの術師に成長した佐和
「あはは、お父さまにカッコイイとこ見せてあげますね♪」
壬生川(みぶがわ)家随一の矛、次期当主の初子

今こうして、壬生川家の主力が勢揃いする

相翼院に着いてからも破竹の勢いで、次々と敵を蹴散らす壬生川家
非常にバランスの取れた構成で、歴代最強の出撃隊であることは

間違いないだろう
「初子、なかなか良い動きをするね……」

「槍は刀の三倍強いって、書いてましたから！」
さすがにいつもの笑顔を引っ込めて、槍で妖怪を薙ぎ払う初子
幸四郎はそんな娘の妙技に、思わず唸る
（これは、敗退した大江山（おおえやま）の仁王（におう）も、今年こそは……）
このまま巻絵や佐和も経験を積んで、雪辱戦と行きたいものだが
（僕が間に合いそうにないのが、何よりも……悔しい、ね）
歯を食いしばって、刀を振るう

奥の院では悪羅大将の軍勢にぶち当たったのだが
「やぁぁぁ！」
鬱憤を晴らすように、斬りかかる幸四郎
（幸四郎オジサン、戦場では別人ダヨネ）
（頼もしいけど、ちょっと怖いでしゅよね（´・ω・`））
どちらが鬼か分からない猛将ぶりを、後衛から援護する娘たち

そんな父親に続いて、初子も前線に躍り出る
「初子、危ないよ！」
「ううん……わたしももう、やれるもん！」
巻絵や佐和に向かう悪鬼たちを、身体を張って止める
「それにのの香お姉さま言ってましたもの、お父さまは昔から前線で戦っていた、って」
「そりゃ、僕は剣士だから」
後列から攻撃できる槍使いと違って、前に出ないと刀が当たらないのだ
「わたし、臥者丸お兄さまやのの香さまに病気を撒いた鬼を、絶対許さない」
戦場なのに、思わず幸四郎は初子を見た

幼子には似合わない迫力が、顔に張り付いていた

「……悪羅大将は手ごわい、絶対に気を抜かないように」

「はい！」

幸四郎は生まれて初めて、こんな小さな子すら鬼気に染める我が血の宿命を呪っていた

第二話－17　「庭藤」　1020年5月（後書き）

元服→佐和　出陣・相翼院（幸四・巻絵・佐和・初子）

第二話－１８　「鬼子」　１０２０年６月（前書き）

幸四郎　１才４ヶ月

巻絵　１１ヶ月

佐和　９ヶ月

初子　５ヶ月

第二話－１８　「鬼子」　１０２０年６月

大江山（おおえやま）の出陣まで、あと半年ということで
佐和（さわ）と初子（はつこ）が木刀を持って対峙する、壬生川（みぶがわ）家の庭

「佐和ちゃん、負けたらオヤツ抜きね」

審判・幸四郎（こうしろう）の声に、高らかに返事をする佐和
「ハハーン、余裕デスヨー！」
「ふふ、余裕、ね」
幸四郎の見立てでは、ふたりの実力は切迫しているようだ

「佐和お姉さま、お胸を借りますね♪」
「ウン、あんまりナイケド」
そう言って、駆け寄った佐和が木刀を横薙ぎに振るう
ガキャンと受け止められ、ガキーンと弾かれて、バッシーンと面を決められる佐和

試合時間、約3秒で一本

「ギャー痛いー！」
のた打ち回る
「あ、ああっ、ご、ごめんなさいっ」
「ズルイ、チョット、＜速瀬＞の術使った、使ったでしょう！？」
佐和は審判に講義する
「使ってない使ってない」
「意義アリ！　娘だからって黙認しているんだーウワーン、ウチは

苛められてる、イジめられているんだーー！」
佐和は泣きながら、屋敷の中に逃げてゆく

「あの子は、まったく……」
ののか
ののの香の血筋だけに、どうしたものかと思う
「ええとあの、どうしましょうお父さま……」
残された初子が、おろおろする
まきえ
「巻絵ちゃんは……ああそうか、イツ花さんのところか、じゃあ僕
と稽古を続けようか、初子」
「は、はーぃ」

＜第四世代＞

「十六夜伏丸さまより、新しいご家族がいらっしゃってますー」
「は、ははは い（、・ω・´）」
その名前を思い出して、ブルブルと震える巻絵
「ど、どうしたんですかｗ　あの、女のお子様だそうです」
「女の子……」

狼の神様から生まれた、女の子……
巻絵の頭の中に、何やらとてつもない化け物が連想される

「で、でもわたしの子でしゅから、が、頑張りましゅ（、・ω・´）
」
「ええと、その、将来の夢は当主になることだそうです、楽しみで
すネ！」
「えええええ（、・ω・、）！」

我が家には、初子という正統な次期当主がいるのに
そう思っていると、襖が乱暴に開かれた

「初めまして母、十六夜伏丸の元から参った。宜しく頼む」

浅黒い肌、緑の目を持つ少女が深く礼をする
巻絵にも十六夜伏丸にも似ていない、炎のような赤髪を持っていた

名前は蘭(らん)
初子とはまた違った種の、刀のような美少女だ、将来は素晴らしい美人になるだろう
職業は代々続く、薙刀士だ

「よ、よろしくでしゅ（´・ω・`）」
「言っておくが」
幼い顔から、重々しい口調で言葉が発せられる

「俺は鬼を討つ使命を持つこの家で、次期当主になる」
「えええええ！」

「そして俺の代で朱点を斬る、締めて、これからも宜しく母」

宿敵のような響きの「母」に、巻絵は冷や汗をかく
「え、えと、あの、これからもよろしくでしゅ……（´・ω・`）」
終始押されっぱなしの巻絵だった

＜出陣＞

いつものように、幸四郎、巻絵、佐和、初子の現時点最強の、四人組である

そこへ見送りに来る、蘭とイツ花

「それじゃ、イツ花しゃん頼みましゅた（、・ω・´）」

一児の母がふにゃけた口調で、子を預ける

「はい、お任せくださいネ！」

「それじゃ、行ってくるね、蘭ちゃん♪」

ニコニコとした初子を睨む蘭であった

＜白骨城（はっこつじょう）＞

「でも蘭ちゃんでしたっけ、綺麗なお顔立ちでしたよねー♪」

ドクロの軍団を斬り捨て、休憩中に初子が機嫌良さそうに思い出す

「そ、そうでしゅね（、・ω・´）」

「でもサー、何だかはっちゃんのこと睨んでなかっタ？」

佐和の洞察にビクッと震える巻絵

「そ、そそそうでしゅたか！？」

万引きがバレた子供のように動転する巻絵

まさか、初子が次期当主だと教えたから、敵意を持っているのではないだろうか

空気を気にしない当主が、あははーと笑う

「初子があんまり可愛いから、照れているんだよきっと」
「エエッ！」
脅威の親バカ発言に、佐和が反応する
「そんな、ダメダッテ！」
「どうしたんですか、佐和お姉さま？」
「え、あ、イヤ、ハ、ハハハー」
なぜだか狼狽する佐和

「それにしても、恨み足を倒して、ずいぶんと奥までやってきたね」
白骨城の宝物庫を越えて、壬生川一家は広間へとやってきた
「は、何だかヤな気配がしましゅ（、・ω・′）」
薬箱・巻絵が、薙刀を高く構えて辺りを警戒する
「骨！？」
左右から迫ってきたのは、巨大な骨の手だった

左カイナ・右カイナ「シャアアアアアアアアアア！！」

迫り来る二匹の骨を、一同は迎え撃つ！

武人に強化された幸四郎の刀によって、バラバラに砕かれる左カイナ
「ラクショーじゃーん！」
「……様子がおかしい、かな」

右カイナがすぐに、左カイナを蘇生させる

「エエー、ズルイ！」
「いやズルいて」

攻撃力も防御力も大したことはないが、両方を同時に砕かないと、決着がつかないようだ
「それでは参ります、＜業ノ火＞！」
印を結ぶ初子
「そうだね、全体攻撃の術で、一気に押しつぶす、併せ２人目！」
「併せ３人目ー！」
次々とのっかかる
「併せ４人目、参りましゅ（、・ω・´）！」
回復を中断して、術に集中する巻絵
いち早く印を結び終えた術師・佐和が、再び業ノ火を詠唱する
「業ノ火の併せ、５人目！」
二つ目の詠唱に入る、壬生川家きっての術師

五人併せ業ノ火、９倍撃の炎がカイナを襲う！

が、砕けたのは左カイナのみで、右カイナは未だに生きていた
「もしかしてこれ、右カイナが本体……？」
「そ、そうかも」
たらりと汗を流す
「ジャー、壬生川家右カイナに突撃ー」
一度やってみたかった号令をかける佐和

「斬り崩す、奥義……！」
蘇生される前に決着をつけようと、幸四郎の刀が瞬く
「疾風剣（しっぷうけん）――！」
振り上げた刀が、骸骨の指をぶったぎる

「ウワ、カッコイイ！」
「お父さま、奥義を編み出したのですね！」

砕け散る右カイナ
「ふぅ……」
補助に治癒に大活躍していた巻絵が、息をつく

奥義とは、俺の屍を越えてゆけの世界において、極めて強力な物理攻撃を放つ必殺技
ただしその代償として、健康度を犠牲にしてしまう
つまり、連続で撃ち過ぎると死に至ってしまう、諸刃の技だ
奥義の反動に、幸四郎は肩を抑えてうずくまる
「いたた、でも……何だかちょっと強くなった気がするな僕も」

「わーいわーい♪」
無事に勝利を収めた壬生川家が、歓声を上げる
「カッコイイ……奥義、ウチも次までに考えよう！」

こうして壬生川家は、大怪我することもなく、今月も無事戦い抜いたのであった

第二話－１８　「鬼子」　１０２０年６月（後書き）

出撃・白骨城（幸四・巻絵・佐和・初子）　蘭→薙刀士・初見

第二話－１９　「恋風」　１０２０年７月（前書き）

幸四郎　１才５ヶ月

巻絵　１才

佐和　１０ヶ月

初子　６ヶ月

蘭　１ヶ月

第二話－１９　「恋風」　１０２０年７月

＜奥義の説明＞

「奥義は一子相伝の技能にして、伝えられるのは同じ職業についた実子ひとりのみ！」

壬生川家の居間、セミの鳴き声が聞こえる

イツ花（いつか）に講習を受けているのは、幸四郎（こうしろう）と初子（はつこ）のふたりだった

「奥義を修めた者は子供を作り、その子が実戦部隊に入る前に奥義伝承の訓練を行ってください、これが叶わぬ場合、その奥義は再び自力で修得する方が現れる日まで幻となるでしょう」

眼鏡をかけて、黒板にカツカツと字を書き込むイツ花先生

「すごい、イツ花が物知りだ」

「本当に昼子神社の巫女さんだったんですねぇ、イツ花さん……」

「ただの家政婦だと思ってたんですかッ！？」

すっかり思っていた

「な、なので、せっかくのすっごい奥義が消えてしまわぬよう、お急ぎくださいませ！」

そうは言われても、

「僕は剣士だしなぁ」

「わたし、槍使いなんですよねぇ……」

「ま、マァ、そうですねぇ……」
遠くでししおどしが鳴る音が、聞こえた気がする
かぽーん、と

＜母子の訓練＞

「さ、きょうは出陣がないでしゅから、訓練するでしゅよ（、・ω・、）」
元臥蛇丸（がじゃまる）の部屋であり、現・巻絵（まきえ）の整った部屋に、親子が向かい合う

「そうか、ならば当主になるにはどうすれば良いか教えろ」
ちびっ子のくせに、いきなり高圧的な口調の蘭（らん）

「当主になるには……」
考えた事もなかった巻絵は、いきなり困った
「でも初子（はつこ）しゃんが当主でしゅものね……」
「初子が死ねば良いのか」
「いやいあいあやいやあいやいや」

ブンブンと首を振る巻絵
「だ、だめでしゅよそんな、暗殺とかっ（、；ω；、）」
「……鬼を根絶やしにする前に、何故自分の一族を殺してしまわないといけないんだ」
蘭は冷ややかに母を眺める

巻絵は自分の娘に、そんなこともしそうな雰囲気があるから、とは言えない

「ならば、初子よりも強くなれば良いのだな」
「え、ええ、そう、なんでしゅかね……（´・ω・`）」
「俺が強くなって、そして初子が認めれば良いのだろう？　次期当主に俺が相応しい、と」
「そうかも、しれま、せんでしゅけど……」

確かに初子の性格なら、自分より明らかに優れていたものが現れたら、あははーと笑いながら譲ってしまいそうだ
でも、幸四郎が死ぬ前に、あの槍の名手・初子を越えるなんて事が……
（できるんでしゅか……？」）
実の娘に無理とは言いたくないが、限りなく難しいだろう

「でも、どうして蘭しゃんは当主になりたいんでしゅか？」
「約定だ」
迷うことなく言い切る
「やく、じょう（´・ω・`）？」
「ああ、まだこの屋敷に来る前、お天道様の上で父上に会った」
「父上……伏丸しゃんに！？」

生まれてきた子供は、すぐには下界には来ず、人年齢で６－８才になるまで神様たちに育てられるのだ

「父上は、俺を作ったのは暇つぶし、と言った」
暇つぶしに身体を弄ばれた巻絵が、少し泣きそうになる
「俺が次期当主になって朱点童子（しゅてんどうじ）を斬れば少しは退屈紛れにはなるから、そうなれ、と言った」

「退屈紛れ、って……（´・ω・`）」
「俺は当主になって朱点を斬ると言った、親と初めて交わした約束だ、守りたい」
蘭は淡々と話した
「そうでしゅか……（´・ω・`）」
「さあ、稽古をつけろ、母」
「ううん、せめてお母しゃんって呼んでくだしゃい……」
そうして巻絵は、蘭に一ヶ月精一杯、薙刀の稽古をつけたのだった

＜交神（こうしん）の儀＞

「イツ花さん、よろしくお願いしマース」
佐和（さわ）が緊張した面持ちで、儀式の間へと現れる、が
「佐和さんも、わたしが巫女だって忘れてましたか！？」
いきなりイツ花に捕まった
「え、エエ？」
佐和は突発的な事態に弱い

「良いんです良いんです……うう、わたしはどうせ、元気しか取り得がありませんから……」
「ウンまぁ、ソレは良いから、交神の儀を」
「ええ、ええ、どーせわたしなんて、どうでも良いんですッ！」
佐和は神様の奉納点表（ほうのうてん）を眺める
「ウーン、風の神様がいいな……風の神様……イケメン……」

ずらーっと見ていく
神様の持っている遺伝子（能力値）には目もくれず、ひたすら顔だけ
「ン、ンンン！」
ビビビと来るものがあったらしい

「この人、この人にする、イツ花サン！」
「はい、どうでも良い人は、さっさと神様をお呼びしますネ」
拗ねイツ花

「うう、緊張してキタ……」
いざ呼び出される段階に来ると、あちこちが赤くなってきたようだ

鳳あすか「今度ふたりだけで、お茶でもどう？」

佐和が選んだのは、神様きっての美男子・鳳あすか
ニッコリとした笑顔に、胸を高鳴らせてしまったり……

その日の壬生川（みぶがわ）家には、一日中佐和の変な声が響いたが、
優しい家族の面々は、聞かなかった事にして、翌日も佐和に普通に接してあげたという

第二話－１９　「恋風」　１０２０年７月（後書き）

交神の儀・佐和×鳳あすか　訓練・巻絵→蘭

第二話－２０　「遊山」　１０２０年８月（前書き）

幸四郎　１才６ヶ月

巻絵　１才１ヶ月

佐和　１１ヶ月

初子　７ヶ月

蘭　２ヶ月

第二話ー２０　「遊山」　１０２０年８月

「幸四郎しゃんー」
「んー？」

居間で書き物を勉強していた幸四郎に、巻絵が声をかける

「あのー、蘭しゃん見ませんでしゅたか？（´・ω・、）」
「蘭ちゃん？　ああ、蘭ちゃんがどうかした？」
「薔薇」の字に苦戦する筆使い幸四郎

「いえ、あの、何でも、ないんでしゅけど……（´・ω・、）」
蘭の姿が見えないと不安になってしまうだけだ
「そっか、巻絵ちゃんももう立派な母親だねー」
あははーと笑う幸四郎の思っているような感情ではない、と巻絵は思う
もしかしたら蘭が初子をその手にかけるのではないか、と

「ほら、蘭ちゃんなら」
幸四郎が庭を指差す
薙刀使いの蘭と、槍使いの初子が、木製武器を持って対峙していた

「ぽげりゃー！？（´！ω！、）」
佐和のような叫び声を上げる巻絵

「まぁ、さっきから僕がちらちら見ているから、大丈夫大丈夫」
恐ろしがる巻絵を押しとどめる幸四郎

蘭が打ち込み、初子が薙刀を叩いてかわし、間合いを放し、実戦稽古のようだ
巻絵が見ても蘭の筋は良い、自分の子供の頃と比べたら一目瞭然だ

それでも、
「初子しゃん、すばやいし、振りが速いでしゅねぇ……」
戦場ではなかなか見る機会がないが、こうして訓練をマジマジと見てみると、やはり第三世代の中でも頭ひとつ抜けている
「でも蘭ちゃんも、よく食らいついているよ」
弾かれても避けられても、薙刀で飛び掛る
「良い薙刀士になるね、蘭ちゃん」
「そうでしゅねぇ……」

親たちが見守る中、激しい稽古で握力を無くした蘭が薙刀を落として、その場で片膝をつく
「きょうは、ここまでにしましょうか」
顎から汗をたらして、初子はにっこり微笑む
「……分かった」
「お疲れ様でした♪」
頭も下げずに、蘭が屋敷へと入ってゆく

その様子をハラハラしながら見守っていた巻絵の横で、書道具を片付けた幸四郎が声を上げる
「初子ー、これから京に行くから、湯浴みして着替えておいでー」
「あ、はい、では少し汗流してきますね」
パタパタと走って、初子が自分の部屋の方に戻ってゆく

「さ、巻絵ちゃんも、これから京に行くからね」
「ふぇ（、・ω・、）？」

「今月は、選考試合があるからね」
そう言って、幸四郎は微笑んだ

＜京の都＞

「ギャー、人が多いー！」
辺りをぐるりと見回す佐和が、奇声を発する
蘭はお留守番のため、いつもの幸四郎と三人娘での出陣だ

「うわぁうわぁ♪　これが京の都なんですねー♪」
「こらこら、はぐれるんじゃないよ」
幸四郎があちこちフラフラしたがる初子の手を掴む

「あ、ごめんなしゃい、あ、ごめんなしゃい（´・ω・`）」
遅れ気味なのは、人にぶつかっては謝る巻絵

「あ、お父さま、あちらにお団子屋さんが♪」
「ちょっと、僕の手をあんまり引かないで……」
「はっちゃん、あっちにお土産屋があったヨ！」
「わぁい行きます行きますー♪」

幸四郎の手を離して、初子が佐和の方へ走ってゆく

「ああもう、ちゃんと戻ってくるんだよー」
「ハーィ」「はーい♪」

幸四郎はやれやれ、と笑顔でため息をつく

去年の自分を見ているようで、相当恥ずかしかった

「変な男に捕まらなきゃ良いけど……」

佐和と初子のきゃあきゃあした声が、遠くの通りからでも聞こえてくる

「ふぅふぅ、あれ、二人は？（´・ω・`）」

ようやく追いついた巻絵が、周りを見回す

「観光中、かな……はは」

結局、佐和と初子が両手に袋を抱えて戻ってきたのは、御前試合（ごぜんじあい）が始まる直前だったという

＜御前試合＞

組み合わせが発表された

「京阪傭兵組合（けいはんようへいくみあい）は、反対のブロックか……」

「え、何ですか？」

「去年、臥蛇丸お兄ちゃんやのの香お姉ちゃんたちとも、出たんだよね御前試合に」

控え室にて、幸四郎が珍しく思い出話にふける

「勝ったんですかお父さま？」

「いやぁ、三回戦で負けちゃったんだ、京阪傭兵組合にね」

キラキラした娘の目に、照れ笑いで応える

「アレが僕の初敗北だったけど、悔しかったなぁ」

防具を装備して、そのときの想いを振り返る

「じゃあ、きょうはお父さまにとっても、雪辱戦なんですね♪」
「……ん、そういうことだね」
微笑む幸四郎の体からは、すでに戦いの気が発せられていた

決勝まで当たらない京阪傭兵組合を目指し、一同は一回戦を迎える
一回戦は茶屋町自治会（ちゃやまちじちかい）、薙刀部隊が三人いたが、一瞬で勝負がつく
二回戦は三十三間会（さんじゅうさんげんかい）、弓使いが三人、連携に多少苦しめられたが、
それでもすぐに勝負がついた

去年敗退した準決勝の、相手は戻橋警護隊（もどりばしけいごたい）
京阪傭兵組合は、勝ち残っている、ここで負けることは出来ない
「壬生川家、突撃ー！」
相手は、剣士、薙刀、弓使い、手練の三人だった
術で攻められ続け、壬生川家は思うように戦うことが出来ない
「＜お雫＞！」
巻絵が一生懸命治癒の術を唱えるが、回復は追いつかない
佐和もまた、＜お雫＞の術で、幸四郎や初子を援護する
だが、壬生川家の頑張りも届かず、時間切れとなり、判定負けを
食らってしまった

鬼退治と御前試合の勝手の違いに、戸惑った三人娘だった

「うーん悔しい……でも、仕方ないね」
そうしてきびすを返そうとした幸四郎に、役人が声をかける

『それでは、これから三位決定戦を行う、壬生川一族は舞台に！』

「あれ、三位決定戦？」
きょとんとする幸四郎に、解説書を読んだ巻絵が付け足す
「なんだか、三位決定戦で勝つと、特別公認討伐隊に任命されるみたいでしゅね（´・ω・`）」
「何だろうそれ」
学問には疎い幸四郎
「よく分かんないケド、ガッキャーンとやって勝てばイイんじゃない！？」
「がっきゃーん？」
「いやソレは気にしないデ」

そんな軽いノリで三位決定戦、先ほどの敗北でコツを掴んだのか、壬生川家の動きは軽快だった
そうして無事三位に入賞した壬生川一族は、たくさんの支度金と三位の賞品を授与したのであった

第二話－２０　「遊山」　１０２０年８月（後書き）

選考試合（幸四・巻絵・佐和・初子）

第二話－２１　「天人」　１０２０年９月前編（前書き）

幸四郎　１才７ヶ月

巻絵　１才２ヶ月

佐和　１才

初子　８ヶ月

蘭　３ヶ月

第二話－２１　「天人」　１０２０年９月前編

＜俺屍に本当にある祭り１＞

「討伐隊選考試合でのご活躍、おめでとうございます！」
イツ花（いつか）がやんややんやと出迎えてくれる
「都での壬生川（みぶがわ）家の評価は、まさにウナギのぼりか鯉のぼりといった具合でございま～す！」
「評価もなんも……」
「おめでとうございま～す！」
何だか打楽器でも鳴らしかねないイツ花だ

「僕はそういうの、あんまり気にしないんだけどなぁ」
さすが１才数ヶ月の男の子、世間の噂話とは無縁の世界に生きている

忘れちゃいけないとばかりに、イツ花が手をポンと叩く
「そうそう幸四郎（こうしろう）さま、今月は途絶えていた京の４大祭りのひとつ、豊年ムキムキ祭りが、今年から復活するそうです！」
あまりの名前のセンスに目が点になる幸四郎

「豊年、ムキムキ……祭り？」
自分の二の腕を、何気に見てしまう

「豊年ムキムキ祭りは秋祭り！　幸四郎さま、秋と言えば！？」
「え、何だろう、イチョウ？」
「何そんな、好感度アップを狙ったような綺麗な答えをッ！」

ツッコミが激しいイツ花

「というわけで、秋と言えば？　で、壬生川家にアンケートを取ってきました」

（イツ花、暇なんだろうか）

最近初子や巻絵に家事まで奪われているイツ花は、したり顔で懐から巻物を取り出す

「まずH子さん、秋といえば実りの秋」

「いやそれ、全然隠してないから！」

「続いてS和さん、食欲の秋」

「明らかじゃない！？」

「M絵さん、体育の秋、ちなみにRンさんにはアンケートは断られちゃいました」

「う、うんまぁ、そんなものじゃない？」

しゅるしゅるしゅると巻物を閉じるイツ花

「と、いうわけで、今年の豊作と健康を神様に感謝し……」

「感謝し？」

「その喜びを若い男性たちが肉体で『あらわ』に表現する！　それが豊年ムキムキ祭り！」

ぽかーんとしてしまう幸四郎

「あ、あらわに……？」

「あらわに、ってトコが、何だかドキドキしませんか！？」

「い、いや、僕は……」

「ここでアンケート2、あらわにでドキドキする否か、S和さんはハイ、H子さんはどちらとも言えない、M絵さんは……」

「もういいからっ！」

イツ花の巻物を片付けさせる幸四郎

「いやあ、来月が楽しみですネ！　一緒に行きましょうねムキムキ祭り！」
「はいはい……」
幸四郎は苦笑いで、頷いたのだった

＜子供＞

「鳳あすか様の下より、新しいご家族をお連れいたしました！」
佐和（さわ）の待つ部屋、巻物を懐にしまいつつ、イツ花が笑顔で現れる

「え、エート、男の子？　女の子？」
「お喜びください、賢そうな女のお子様です！」
「オー」
幸四郎以来、五人連続女の子の誕生だ
壬生川家はついに、男女比が１：５になってしまった

「女の子カー、どんな子カナー」
ワクワクしながら待ちわびると、礼儀正しく襖を開いて、女の子が入ってきた

名前は夢見（ゆめみ）、のの香の代から続く弓使いの血を受け継いだ少女だ
のの香や佐和と同じ水色の髪を長く伸ばし、猫のような金色の瞳を持った利発そうな顔立ちだ

「初めまして……お母様」
ふんわりと微笑む、柔らかな涼気を感じさせる笑顔だ

「ウワ、誰の娘」
「鳳あすか様のお嬢様ですよ」
「ああ、ナルホド」
ものすごく納得する佐和

「うふふ、可笑しな方ですねお母様は」
「良く言われル」
幸四郎とか、初子（はつこ）とかに
そうして、イツ花が用事があるからと、先に去ってゆく

「まぁウン、これからも宜しくネ、夢見」
「はぁい、ユメちゃんって呼んでくださぁい」
「誰！？」
利発そうな顔立ちが、一瞬で崩れる
「鳳あすかパーパから言われたんですぅ、女の子は愛嬌だ、ってぇ」
「な、え、エエ、じゃあさっきの登場シーンはナニ！？」
「こっちの方がぁ、壬生川家の当主さまぁとかにぃ、印象が良いかなぁ～って」

夢見の後頭部をバシッと殴る佐和

「ちょっ、いたぁ～いっ、何するんですかぁママぁ～」
「なんだかムカついた」
「え～んえ～ん」

その場で泣き真似を始める夢見に、今度は弓の弦で横っ面をバチーンと叩く

「みぎゃ」

「今月は、ウチが礼儀を叩き込んでジャル！」
「え～～～暴力反対ですぅ～」

逆襲にと、佐和を蹴り返す暴力反対の夢見
佐和はお返しと、その頬にビンタをする
夢見は頬を押さえたまま、佐和の髪を引っ張る
佐和もまた、夢見の耳を無言で引っ張って……

「佐和お姉さま、そろそろ出陣の時間ですよ……って、何しているんですか！？」

元服の儀を終えた初子が呼びに来る頃には、佐和母子は取っ組み合いのケンカに発展していたという

＜出陣＞

今月の相翼院討伐に出陣するのは、幸四郎、巻絵（まきえ）、初子、蘭（らん）の四人だ
「あ、何だか親子×2だね」
一家の兄貴・幸四郎が、ぐるりと皆を見回してつぶやく

「そ、そそうでしゅね、蘭しゃん、ちゃんとお弁当も持って、薙刀も研いでありましゅよね……？」
「出陣の準備は万全だ……何故、そこまで心配する」
「だってっ、自分の子供の初陣でしゅものっ（´・ω・`）」
「ふむ……」
憮然とした表情の蘭が、巻絵に好きに世話されているのを見ると、

少し笑みがこぼれる幸四郎だった
何だかんだ言って、良い母子の気がする

「あれぇ、佐和お姉さまは出陣なさらないんですか？」
初子が小首をかしげて、娘の手に縄をつけている佐和を見る
「う、ウン、チョット、この屋敷での生き方を訓練しようと思ッテ」
「ユメ、そんなヘンなコト言ってないじゃないですかぁ～～っ」
じたばたと暴れる夢見を押さえつける佐和
「助けてくださぃ～、初子さまぁ～、蘭さまぁ～、虐待ですぅ～～」
「ああモウ、ソノ間延びした喋り方が腹立つ！」
のの香もこんなしゃべり方だったような、と幸四郎は思う

「ユメ、これから京に行って、お化粧品の新作買いに行かなきゃいけないんでうぐっ！」
佐和が夢見の首根っこを掴んで、廊下の奥へと引っ込んでゆく
「じゃあ頑張ってネー、幸四郎オジサン、まきちゃん、はっちゃんー」
「いやぁぁ～～～、ユメ弓よりお琴とか弾きたいぃぃぃ～～～～…
…」
何だか強烈な娘が入ってきたなぁ、と唸る幸四郎であった

第二話－２２　「天女」　１０２０年９月後編

＜相翼院（そうよくいん）前＞

「やあ！」

空からふよふよと降りてきたのは、懐かしのパシリ・黄川人（きっと）だった

首を傾げる幸四郎（こうしろう）

「あ、ええと、何だっけ、もしかして初めまして？」

「違うよ！　ボクは黄川人、神様から言われて君たちの手助けをする、アドバイザーのような役目だよ！」

１０１８年の１１月以来出番のない、不遇の人間・黄川人その人である

「え、でも、僕って初対面じゃないのかな……それに、何だか影が薄いような」

「えー……」

何だか寂しそうな黄川人

「でも、わたしは良く話してましゅよ？　突入前とかに（´・ω・`）」

「わたしも初めて見ました……」

初子（はつこ）は珍獣を見るような目つきで、黄川人くんを見つめる

「今月初めて出陣する俺とは初対面だな、宜しく、黄川人」

「体も透けてりゃ、印象も透けてる、なんてネ、ハハ、ハ……」

黄川人は、自分で言って涙を流す

「そうか、臥蛇丸(がじゃまる)お兄ちゃんの血筋には見えるんだ」

「ボクは霊か！？」

「なるほど、巻絵(まきえ)お姉さまは霊感が強いんですねぇ」

「違うからッ！」

ぜぇぜぇと息を切らす黄川人

「そ、それで、きょうはどうしましたか黄川人しゃん（´・ω・`）？」

「あ、ああうん、今日はね可哀想な天女の話を仕入れてきたけど、聞くかい？」

嬉しそうに問いかける黄川人に蘭(らん)が応える

「興味無いな」

「……すっごい面白いよ？」

「要らん、俺たちは先を急ぐ」

「……聞くと、みるみる背が伸びたり」

「間に合っている」

蘭はすでに身長で初子を抜かしていた

「き、聞いてくれたら……奉納点(ほうのうてん)、１０点」

懐から、光る玉を取り出す黄川人

「黄川人しゃん……（´・ω・`）」

よっぽど独りぼっちが寂しいのだろうか

黄川人の手から、蘭は奉納点を受け取る

「ならば、言え」

そんな態度の3ヶ月の少女に、うわぁと同時につぶやく幸四郎父子

「……ハイ」

自分のこの扱いは何なんだろうと思わないでもない

「昔……天女のくせに、地上の男に恋した女がいた……」
「わぁ♪」
ロマンティックな始まりに、目を輝かせる初子
「よせばいいのに、そいつの子供まで産んだんだ、だけど、それがバレちゃって天界に戻れなくなったんだとサ……」
ふぅ、と息をつく
「たかが色恋で、一生棒に振るかねェ、女ってサ……しょうがない生き物だよねェうべらっ！」
蘭と巻絵と初子に突かれて、どこかに吹き飛ぶ黄川人くん
そんな女性陣の横で、たらりと汗を流す幸四郎であった

＜相翼院＞

というわけで、蘭を加えての初出陣である
「きょうは後列にいて、あんまり無茶をしないようにね」
「承知した」
身の程をわきまえている、謙虚な蘭
「次期当主となる俺は、こんなところで倒れるわけにはいかないからな」
そうでもなかった
「ん、蘭が僕の生きている間に、初子に勝てたらね」
巻絵がひやひやして見守る中、幸四郎はさらりとかわす
「三本試合で完全勝利すれば良いのだろう」

「それも、術アリの実戦方式でね」
蘭が幸四郎に以前直訴したときに、そう言われたのであった
「俺はすぐに強くなる、時間の問題だ」
「あ、はは……」
蘭に睨まれて、冷や汗を流しながら笑う初子

（幸四郎しゃん……本当に良いんでしゅか？）
（んーまぁ、ほら、切磋琢磨って言うじゃない？）
あははーと笑う幸四郎
それよりも、屋敷で訓練をしている佐和と夢見の方が気になる幸四郎だった、家で大怪我してなければいいけれど
四人は通いなれた相翼院で、鬼たちを蹴散らしながら進んでゆくのだとか

「ハァ！」
伏丸の面影を残すように、力強く薙刀を振り回す蘭
幸四郎はまだ見ていないが、母親から受け継いだ術力も相当なものだとか

（大人しい性格の巻絵ちゃんより、戦いには向いてそうだなぁ）
薙刀を掲げて全体攻撃の術を唱える蘭は、もしかしたら今年の大江山討伐にも間に合うかもしれない
「お父さま、あらかた片付いたようですよー」
「じゃあ進撃しようか」
槍を持って幸四郎の元へとやってくる初子に、指示をする
今月で元服した初子は、もうどこに出しても恥ずかしくない立派な武芸者だ

「どうかしましたかぁ？」
小首をかしげる小さな娘に、ため息をつく
「僕が槍使いだったら、疾風剣幸四郎を伝授できるんだけどなぁ」

「あらお父さま、お父さまが槍使いでしたら、奥義を閃いてませんでしたよ♪」
ニッコリと微笑む初子に、そうだね、と相槌を打つ幸四郎
一同は迫り来る鬼を薙ぎ倒して、天女の小宮へと進んでいった

＜天女の小宮＞

「そうそう！」
行く手を阻むように突如として出現する黄川人
「うわ出ましゅた（´・ω・、）」
「出たな鬼」

「いやボクは違うから、違うから！　薙刀を構えない！」
後半必死になってゆく
「さっき言った、天界を追ン出された天女の話、続きがあるんだよ」
わざわざ語りに来てくれたなんて、ずいぶん律儀な神様だ
「奉納点、もう１０点くれるのか？」
「……ハイ」
後輩をカツアゲしているような少女、蘭

「それでね、天女の話、これが聞くも涙、語るも涙の物語！」
両手を前に出して、でろでろでろ～と演出する
「わが子を守るために、人間になぶり殺しにされちまったらしいんだよ」
「そんな、わが子を守るために、って……どうして、襲われていた

んでしょう」
「さァね、人間ってのは弱くてズルくて、意地汚いからね、やられる前にやれってサ」
「神に目も合わせられないような奴だったんだろうな」
ぼそりとつぶやく蘭

「実はサ、今もその天女の怨念が、この先のお宮のどっかに封じられてるそうなんだよ……」
相槌を貫ったことが嬉しいのか、くくくと語る黄川人
「鬼に……なってしまったのか」
思わず鳥肌が立つ幸四郎
「子供なんてまた作りゃあいいのに、イチイチ自分の命と引き換えて……みっともないよね、母親ってヤツは！」
「（´・ω・`）」
なぜだか語気を強めて、黄川人が去ってゆく

「わざわざ愚痴るために来たのか……」
「あの人って、お暇なんでしょうか……」
落ち込む母親の巻絵に比べて、新世代はのん気なものだった

＜奥の間＞
壬生川（みぶがわ）家一家は、相翼院を駆け抜けてゆく
初戦で悪羅大将に挑む蘭も大怪我もなく、順調に奉納点と経験値を稼ぐ
そうして一同は、奥まった場所にたどり着いた

「鬼子母の間……って書いてあるね」
酷く奇妙な光景だった
薄暗い室内の一面に、蝋燭が点っていた
見渡す限りに蝋燭が、数千本、数万本の炎が揺らめいていて、幻想的と言えば聞こえは良いが、何か怨念めいた気配が漂っていた

「何だか、気分が……」
いつでも笑顔の初子が、苦しそうに顔をゆがめていた

「……空気が腐っているようだな」
袖を口に当てる蘭

「何だか、泣き声が、聞こえましゅよ……？」
一同を引っ張って、幸四郎が先導する
そこに居たのは……天女だった
緑の長い髪を持つ美しい女性の姿をして、一目で風の女神と分かった

「捕らえられている、神様？」

だが、様子がおかしい、幸四郎の剣士としての嗅覚が、禍々しい気配を感じ取っていた
天女は泣いていた
何万本の蝋燭に照らされて、泣き続けていた
「え、君は？」
無防備に近寄ってゆく幸四郎

「私の首にまた縄をつけたいんでしょ？」
幸四郎がえっ？と聞き返す
「お父さま、ご様子がおかしいです！」

「いいわよ、見世物小屋の天井を何度だって飛んでみせてあげる……」
天女が顔を上げて幸四郎を見た
その瞳は悲しさを称えて、言いようの無い絶望に満ちていた
「もう逃げたりしないわ、だから……だから！」
「お父さま、お戻りください、お父さま！」
「だから、子供を返して！　私の子供を返してよ！　返してよ！　返してよぉぉ！」
天女が幸四郎にすがりつき、幸四郎は凍りついたように身動きが取れない
その瞬間、初子が天女の右肩を槍で貫いた
片羽ノお業（かたはのおごう）「イヤャアアアアアアアア！」

幸四郎が正気を取り戻す
「お父さま、この人はもう……鬼です！」
天女が宙に浮かび上がった
長くて美しかった緑の髪は屍鬼のように乱れ、その両眼は不気味に輝き、蝋燭は狐火のように燃え上がる
「そんな、そんなことって……」
幸四郎が刀に手をかけるが、どうしても抜けない、鯉口が切れない
少しの逡巡の間、お業の術が完成した

「返してよぉおおおおおおおお！」

風系最強の術＜芭蕉嵐＞が壬生川家を切り刻む！
平均体力３００の壬生川家のうち、全員に２００弱のダメージを食らい、一瞬にして半壊する一同

これまでに食らった中で、もっとも凶悪で無慈悲な術だった

「何て、術だ……」

「＜お雫＞、雫でしゅ！（，・ω・、）」

連続で二発受けたら、壬生川家は全滅してしまう

「こんな、相手って……くっそぅうう！」

刀を抜き、歯を食いしばりながら斬りかかる

初子もその隣に続き、波状攻撃を仕掛ける

巻絵が大急ぎで全員を回復させたところで、再び芭蕉嵐の直撃を受ける

常に体力の表示が真っ赤だ

「……やかましい！」

七光ノ御玉（ななひかりのみたま）を掲げる蘭

「ふ、伏丸しゃん！？」

しかしその呼び出した神様の一撃も、お業の羽の守りを崩せない

「ごめんよ、＜光無し＞！」

幸四郎の結んだ印は、お業の術技を封じ込める！

「＜お雫＞！」

あまり術が得意ではない初子も、今のうちに全員の回復を手伝う

「あああああああああああああ！」

声にならない叫びを上げ、幸四郎の術の封印を引き剥がす片羽ノお業

「く……」

三度目の芭蕉嵐により、ついに蘭が倒れた

「あああああっ、蘭しゃん！（，；ω；、）」

「槍が、あれ、あれ……？」

初子が手に力を込めるが、まるで鉛のようで、槍が持ち上がらない

「こ、この……＜光無し＞！」
再び唱えた光無しの術は、空を舞うお業に避けられてしまう
そしてやってきた、四度目の＜芭蕉嵐＞！
生き残った三人の壬生川一家が、嵐の中の羽虫のように、吹き飛ばされた
「私の子供を返してよォ！！」
こうして、壬生川家は全滅した
＜壬生川家＞
幸四郎がゆっくりと目を覚ます
「……ん、」
自分はどうやら、布団に寝かされているようだった
「……誰が連れてきてくれたんだろう」
全滅すると誰が屋敷に運んでくれるのか、ずっと気になっていた
「当主さま……」
「……どうしたの、イツ花、そんな顔をして……庭の藤が散ったかい？」

イツ花は静かに言った

「当主さまの、命の炎に、ついにかげりが見え始めました……」
ああそうか、と思う
どういう意味かはすぐに理解できた
「そう、か……だから、こんなに、眠いんだね」
あははといつもの笑おうとしたが、乾いた声しか出てこなかった

女性に振り回され、最期は女性にトドメを刺されるとは……
笑うしかないのに、笑い声が出ない

「……当主さまの名を継ぐにふさわしい者は、初子さまでよろしいですね？」
「そうだね……参ったな、遺書なんて気の利いたものは、用意できてないよ……」
部屋の中にいるのは、イツ花だけであった

イツ花は、幸四郎の手を抱くように繋ぐ
「おそばにお仕えできたこと、イツ花は生涯忘れません」
人間の生涯は長いから、忘れても良いよ、と少し思う

「他の、みんなは……無事？」
「はい……皆様酷い怪我をしておりますが、命に別状はありません」
「……それは、良かった」

なによりだ

ああ、笑えた、と思った

「長い間、お世話になりました……」

イツ花の声が、遠ざかる
どこかから、初子や家族の泣く声が聞こえる気がする

……お父さん、僕、結構頑張ったよ

玄輝（げんき）の声が、胸に響く
『生きてて良かった、死ぬ前にそう思えるような、一家にしやがれ、（。∀。）ノ』
玄輝の遺した遺書には、そう一行だけ書いてあった
父が死んでから、その言葉を胸に、刀を振ってきた

どうだろう、僕、出来たかな
良い家族、作れたかな

答えは、自分の中にあった
だから、死ぬ前に思う

声が、驚くほど、素直に出た

「うん、僕にしては上出来だった……満足だ、ありがとう……」

壬生川　幸四郎　享年1才7ヶ月

翌日、初子の当主就任の儀が、幸四郎の葬式と合同で行われた

幸四郎の最期の言葉をイツ花から聞かされた三代目当主・初子は、
「こちらこそ、ありがとうございました」と深々と頭を下げ、その
場でしばらく泣いたという

第二話－２２　「天女」　１０２０年９月後編（後書き）

元服→初子　出陣・相翼院（幸四・巻絵・初子・蘭）
訓練・佐和→夢見　幸四郎落命

第三話－1　「水神」　1020年10月（前書き）

巻絵　1才3ヶ月
佐和　1才1ヶ月
初子　9ヶ月

蘭　4ヶ月
夢見　1ヶ月

第三話－1　「水神」　1020年10月

幸四郎（こうしろう）の死から一ヵ月が経過し、壬生川（みぶがわ）家の雰囲気も元通りになって来た頃

「チョ、チョットはっちゃん！」

ガバッと初子（はつこ）の部屋（元幸四郎の部屋）の襖を開く

「聞いて見てコレ聞いて見テ！」

「は、はぃ？」

目を丸く初子の前に、立て札を突き出す佐和（さわ）

「……ていうか、これどうしたんですか？」

杭の部分に土がついている

「引っこ抜いてキタ」

「返してきなさい！」

初子の言葉に、とりあえず佐和は立て札を庭に放り投げておく、あとで薪にでもする気だろうか

「それより、ムキムキ祭りダヨ！　ムキムキ祭り！」

「何を剥くんですか……？」

「それもある意味エロイ！」

ひとりで身をくねらせる、最近めっきりののか（ののか）の香に似てきた一児の母、佐和

「じゃなくて！　豊年ムキムキ祭り、秋祭り！」

ノリツッコミで我に返る

「あ、はい」
放置して着替えようとしていた初子が、ちょっと静止する
「男たちが、半裸のふんどし一丁で筋肉を誇示しながら、町を練り歩くそうダヨ！」
（何のためにだろう……）
思わず考え込んでしまうが、祭りに意味など無いのだろう、きっと
「イツ花も、アレをこれから毎年見せられると思うと、少々気が滅入りますって言ってたほどのお祭り！」
「嫌がっているじゃないですか！」
打てば響くようなツッコミの初子
「わたしは行けませんよ」
「ブー、じゃあ巻絵ちゃんでも誘って行って来ようカナ」
「それに、わたしは今月予定あるんですもん」
「え、何、豊年ムキムキまつｒ」
「行きません！」
もう、と息を落ち着かせてから、初子はキッパリ言う
「私は今月、交神の儀をするんです」
「エエエエエ！？」
なぜか佐和が大声を上げた
＜交神の儀……の舞台裏＞
「ちょ、どうしよう、はっちゃんが交神の儀をスルッテ！」
交神の間の障子に耳を当てた佐和が、声を殺して叫ぶ
「どうしようって、順番じゃないでしゅか（、・ω・、）」

引っ張ってこられた人１

「え、でも、何か、こう、はっちゃんの純潔が……」
巻絵は、蘭を片手で軽くあしらう初子と純潔という言葉が、結びつかない

「……前から疑問だったのだが」
引っ張ってこられた人２が直球を投げる
「佐和は、初子が好きなのか」

「エ！？」

「そんな、今更でしゅよ」
「イヤイヤイヤ！」
首をブルブルと振る佐和だが、その耳が真っ赤だ
「はっちゃんは、良いお友達デシュヨ！」
ただのお友達にそんな反応、と思う巻絵母子

三人は交神の儀を行う部屋の隣、廊下に固まっていた

「そ、それを言うなら蘭ちゃんだって、最近何かはっちゃんを見る目つきが違うジャン！」
「……俺の場合は、倒すべき目標だからだ」
話を振られた蘭が、静かに語る
「そして四代目当主には俺がなる、それだけだ」
「ホントーに！？」
じーっと蘭の目を見つめる佐和
「……ああ」
目をそらす蘭
「ちょっと頬赤いシ！」

「……もう10月か、寒くなってきたな」
わざとらしく、着物の袖口に手を入れる

「ていうかエエ、好きですヨ！　好きだから何ヨ！」
ついに逆ギレが始まった

「……男の人が、ついに居なくなってしまいましゅたものねぇ……」
どこか達観しているのは、最年長の巻絵だ
「ていうかウチのユメも、何か初子さまって格好カワイーとか言っているシ、何その格好カワイーて」
ちなみに発音は、カッコカワイ、だ
巻絵がうーんと腕組みをする
「モテモテでしゅねぇ……初子しゃん……」
幸四郎が亡くなってから、すっかり気品と風格が出てきた従妹を思う

そのとき、中からイツ花の声が聞こえてくる
「え、ホントにこの方でよろしいんですかッ！？」
中から驚いた声

「どなたデスカー！？」
障子を蹴り破る佐和

ものすごくビックリしている初子の首根っこを掴んで、ガクガクと前後に振って問い詰める
「はっちゃん、チョット、誰とエロイ事する気！？」
壬生川家ナンバー2の実力者に渾身の力で揺さぶられ、あうがうあがあぐ、と声にならない声を上げる初子

「やかましい」

後ろから佐和の首を締め上げ、一瞬でオトす蘭
脳をシェイクされて目を回す初子の隣で、事態に着いていけなかった巻絵が呆気に取られていた
「いたた……な、なんですかァ」
障子の下から、下敷きになったイツ花が這い出してくる

「な、なんなんでしゅかね……（´・ω・、）」
「あれェ、どうして皆様がいらっしゃるんですか？」
「なぜでしゅかね……（´・ω・、）」
自分でも答えが分からなかったりする

蘭が代弁した
「散歩だ」
「よそでやってください！」
起き上がった初子が、たまらず叫ぶ
「え、ええっと……それより、ホントに良いんですかァ、この方で」
耳が象になる皆にも気づかず、初子が楽天的に応える
「はい、だって……優しそうじゃないですか♪」
あははーと太陽のように微笑む
「それに、わたしって水の遺伝子が不足していて、体力が低いんですよねぇ～、だから、これも運命です♪」
その笑顔を見て、なぜだか蘭があさっての方を向く
「蘭しゃん？」
「……何でもない」
微妙に声が上ずっていたり

「それじゃあ分かりました、この方をお呼び致しますね」

「いや、あの……恥ずかしいから、ちょっと皆さん、お外に出てもらいたいんですけど……」

白無垢姿の初子が、照れながら頼む
「あ、はい、ごめんなさいでしゅ（´・ω・`）」
代表して謝る巻絵

「ハ！」

蘭が佐和の足を引っ張っていこうとしたら、突然意識を取り戻す
「ていうか誰と交神するの！？」
佐和がイツ花の手から神様表を奪い取り、プライバシーを侵害する
ちゃっかりその後ろから覗き込む巻絵と蘭

優しそうで、初子の運命の人……

カッパだった
正真正銘の、ぬめぬめとしたカッパそのものだった

白波河太郎「顔はオイラに似ないと良いネェ」

……

佐和は夢見の訓練もサボって、三日間寝込んだという

第三話－１　「水神」　１０２０年１０月（後書き）

交神の儀・初子×白波河太郎　訓練・佐和→夢見

第三話－2　「前夜」　1020年11月前編（前書き）

巻絵　1才4ヶ月
佐和　1才2ヶ月
初子　10ヶ月

蘭　5ヶ月
夢見　2ヶ月

第三話－２　「前夜」　１０２０年１１月前編

＜佐和（さわ）の部屋＞

旧ののか）の香の部屋、佐和と夢見（ゆめみ）が正座で対面していた

「ユメ、ウチは奥義を編み出しタ」

「え～、枝毛を綺麗に刈り取る奥義ですかぁ～？」

髪の毛をいじる夢見に、こめかみを一瞬だけピクとさせたが、佐和が続ける

「弓術の奥義で、ウチの人生最高傑作ジャ」

「な～んだぁ～、つまんなぁ～ぃ」

ぴくぴく

「……その名も、連弾弓（れんだんきゅう）、ウチの特技を最大限に発揮した必殺技ジャ」

「ユメ、お外に遊びに行きたいなぁ～」

正座を崩してぺたんと座り、窓を眺める夢見

天晴れな秋晴れが広がっていた

夢見の顎を掴んで、無理やりこっちを向かせる佐和

「フミャー！」

「この奥義は、一瞬の間に三発の矢を相手に叩き込むノジャ」

トトトンと、夢見のオデコを三回つつく
「幸四郎（こうしろう）オジサンに教えてもらったウチの技を、全部つぎ込んだみたいナ」
「そ、それを、ユメが覚えろって言うんですかぁ？」
「ウン、これから教える」
（うぅ～～、疲れそぉ～～～）
「デモ、連弾弓佐和はあんまりにも身体に負担をかけるノデ、乱発できないノジャ」
「ど、どれくらい疲れるんですかぁ～？」
佐和は目を逸らして言う
「健康度、４０」
「え～～～～～～～！」
健康度１００のうち４０、使用後は大怪我人
寿命近くの人が使ったら、死すら招きかねない奥義だ
「そ、そんな無茶な技、ユメいらないですよぉ～」
「ダメ、教えてヤル」
「いやぁ～～～、助けて初子（はつこ）さまぁ～～～～～！」
「こんな技でも使わないといけない場面が、あるかもしれないノ！」
ジタバタ暴れる夢見の手を掴んで、佐和は夢見を道場に引っ張ってゆく
「いやぁ～～、ユメ実家帰るぅぅ～～、アイドル辞めて普通の女の子になるぅぅ～～～……」
よく分からない声が響いていた

＜巻絵（まきえ）の部屋＞

「蘭（らん）しゃん、コレは、京の都復興図でしゅ」
「何だこれは」
巻絵の部屋には、ほぼ京の都全都市を描いた図面集が保管されていた
素人の出来ではないそれらを、蘭は珍しそうに眺める
「ほう……母が書いたのか」
「わたしの分もでしゅけど、半分くらいは蘭のお爺ちゃんが書いたんでしゅよ（、・ω・´）」
「臥蛇丸（がじゃまる）、と言ったか」
京の都に私財を投げ打ち、たった一人で都の治安を復興させた男と聞いていた

「とっても立派な人だったんでしゅ（、・ω・´）」
「……で、それが何だ」
一方、早く薙刀の修行に行きたい蘭
「今月、大江山（おおえやま）に出陣しましゅ（´・ω・、）」
「知っている、俺も部隊の一人だ」

初子、巻絵、佐和、蘭の四人組だ

「わたしは、もう1才4ヶ月でしゅ……（´・ω・、）」
泣きそうな顔で、語りだす
「商業区も、まだまだ復活させたくて、装飾品店にも、綺麗な装身具を並べさせたいでしゅ……（、・ω・、）」
「……」
退屈そうに外を眺める蘭

「京都の町では、まだまだ鬼に男の人を殺された人も多くて、働けない人も、餓死者も多く出ているんでしゅ……」
巻絵は蘭の手を握る
「わたしの後を継いで、どうか、京都に生きる人たちを、助けてあげてほしいんでしゅ（、；ω；、）」
蘭は巻絵の手を振り解く
「そんなの、元を絶てば良いだけだろう」
「それは、そうでしゅけど……」
蘭はすっくと立ち上がる
「でも、じゃあせめて、この図面は蘭しゃんが職人さんに指示だけでも……」
「悪い」
蘭は障子に手をかけると、巻絵に背を向けたまま、つぶやく
「俺には……親の願いを二つも背負えない」
そうして部屋を出てゆく蘭だった

＜初子の部屋＞

幸四郎が亡くなって以来、初子には一人での時間が増えた
読書の時も、早朝の稽古にも、そういえば父は付き合ってくれたんだなぁ、と初子は思う
身辺整理、というわけではないが身の回りのモノを片付けている時、初子は幸四郎の日記を発見した
それには、大江山討伐前の緊張した心情がつづってあった

少し、ほっとした

去年の１２月、幸四郎が大江山を登ったのは１０ヶ月……つまり、自分と同い年の頃だったのだ
去年の大江山が初戦の佐和、さらに登頂経験のある巻絵が、我が家にはまだ生きている事に安心する

「あ、そうだ」
手をポンと叩いて、書道具を取り出す
「遺書とか、書いておいた方が、良いのかなぁ」
あんまり死ぬ気もなかったが、戦術家のさがで、どうしてもあらゆる事態を想定したくなってしまう

「生まれてくるコのためにも、何か記しておこうかな……」
引き出しから手紙を取り出す
だが筆を持ったまま、初子はすぐにうーんと考え込んだ
「こういうのって、書き始めるまで時間かかっちゃう……」
しばらく、頭を悩ませる

「お母さんは旅に出ます、探さないでください……ダメだ、イツ花さんとかが本気にしちゃったらどうしよう」
帰る家がなくなってしまう
「お母さんは月に帰ります……私は竹から生まれたわけじゃないし」
しばらく考え込んでいると、蘭が部屋の外から声をかけてきた
「初子、そろそろ出陣の用意をしろ」
「あ、うん、今行くー」
「いや、ゆっくりでも良いだが……」
キレの悪い声が、遠ざかってゆく

「……よーし、決めたっ」

一筆入魂

「遺書なんて、やっぱりまだ早いもん、あははー」

朗らかに笑う

「っていけないっ、早くお支度しなきゃ」

初子は筆を置くと、手紙を机の上に置いたまま、パタパタと駆け出した

机の上の手紙が、初子の開いたままの障子の隙間から差し込む風に揺られて、音を立てる

そこにはこう記してあった

「おかえり初子ちゃん　初子より」

壬生川（みぶがわ）家の第二回目大江山討伐が、今まさに始まる

第三話－3　「通夜」　１０２０年１１月後編

＜大江山（おおえやま）＞

昨年に比べ、著しく強くなったメンバーで挑む大江山
巻絵（まきえ）、佐和（さわ）、初子（はつこ）、蘭（らん）の四人は雪山の登山口に立っていた

「いよいよ……ですね」
珍しく緊張した面持ちの初子だったが、彼女にとっては巻絵の存在は非常にありがたかった

「それでは、先導お願いします、巻絵お姉さま」
「はい、わたしは二回目でしゅから（、・ω・，）」
「チョット、ウチも二回目なんだけど！」

いや佐和お姉さまは弓使いですから、とやんわり遠慮される

「……山頂は、吹雪いてそうだな」
目を細めて見上げるが、けぶっていて見えない
「てか、どうして１１月と１２月しか門が開かないんダロウ」
素朴な疑問を口にする
「門を閉めて、鬼に攻め込まれないように守っているとか？」
「……雪山を越えられない程度の武士では、とても朱点には太刀打ち出来ない、とかな」

たどり着くまでに、遭難したり凍死する人も多そうだ、と誰かがつぶやいた

「ま、行きましょうかぁ」
初子が口火を切る

「それでは壬生川(みぶがわ)家、第二回目大江山討伐隊……突撃！」
一同はこうして、鬼の総本山へと行軍を開始した

～～

昨年辿った道を繰り返す
巻絵の道案内もあり、雪山を迷うことなく突き進んでゆく
「こっちでしゅ（、・ω・´）」
「巻ちゃん、記憶力イイんだネ……」
一緒に登ったはずの佐和なんて、ほとんどが記憶から抜け落ちていたのに

「まぁ佐和しゃんは、初陣でしゅたから……（´・ω・、）」
矢をあちこちに笑いながらばら撒いて、道なんてすっぽり忘れているのだろう
先導する巻絵のおかげで、一同は一合目二合目を簡単に越えてゆく
当初の計画では、大江山の門が開いている二ヶ月間をめいいっぱい使って、登頂する予定だったのだが

いつの間にか壬生川一族は、五合目まで到達していた

悪羅大将のうろつくこの山道を越えれば、次は終合目だ
「去年は、ここらに着くまでに相当消耗していたそうですよね？」
幸四郎(こうしろう)の日記を見た初子が、経験者に尋ねる

「そうでしゅた、幸四郎しゃんの顔色もずいぶん悪くなっていて……」
対する初子、佐和は、まだ息も切れていない
「……」
さすがに出陣二回目の蘭は、疲労が蓄積しているようだ
「終合目を越えたら、すぐ仁王の門ですよね」
「でしゅ」
「そこまで着いたら、少し休憩しましょう」
皆の体調を気遣う三代目当主
「……承知した」
そんな蘭を、さりげなく支える巻絵

～～

さまざまな場所で悪羅大将の相手をしてきた壬生川家にとって、終合目はさほど問題のある場所ではなかった
一同は仁王の門前にたどり着く

「去年の武録を読みました、こちらの術を封じつつ、弱体化をしてくる二匹一組の鬼みたいですよね」
円陣を組んで立案するのは、この日のために作戦を練ってきた初子だ
「ですから、こちらとしては……短期決戦で仕掛けます」
地面に槍の柄で、陣形のようなものを描く
「……これは、」
「……どれが何か、全然分からナイ」
「わ、わたしに絵心がないのは、放っておいてください！」
棒人間が棒を持ってたり、棒人間が棒を持っていたりする、おそ

らくは薙刀と槍のつもりなのだろうか
顔を赤らめながら、初子が取り繕う
「そ、それでですね……時間が経てば経つほど、術を封じられるこちらは不利になるんですよね」
「こちらは、神仙水（しんせんすい）の量が決まっているからな」
携帯袋に入っている、状態異常回復の妙薬だ
「ですです、なので、短期決戦で行くというより、短期決戦しかないんです」
壬生川家で唯一術封じの術＜光無し＞を覚えていた幸四郎は、数ヶ月前に亡くなってしまった
「ですから、巻絵お姉さまと蘭さんは、後列から生命線をお願いします」
「はいでしゅ」
「任せろ」
しっかりと頷く
「わたしと佐和お姉さまで、一気に畳み掛けます」
「あ、アイヨー」
「以上です、頑張りましょう」

残り時間はあと半月、まだまだ余裕がある

「朱点打倒、壬生川家突撃！」
初子が槍を掲げ、門へと突き進んでゆく
その時、不気味にくぐもった声が響いた

両仁王「通さぬ……通さぬぞ！」

戦いの先手は、仁王が取った

術を封じる＜光無し＞に、こちらの命中率を下げる＜夢子＞、敏捷率を低下させる＜みどろ＞を重ねてくる
対する壬生川家は状態異常を物ともせず、前衛の痩せ仁王に攻撃を集中させる
＜お雫＞のおかげもあるだろうが、去年に比べて壬生川家の防御力が格段に上がっているため、致命傷を貰わず攻撃に専念できていた
「ハッ！」
槍使いの一撃は、前衛の痩せ仁王を貫通して、後衛の太り仁王にまで届く
名実共に壬生川家一の武人を中軸に、それを他の三人がサポートする

「……く」
ところが、仁王たちが狙いを定めたのは後列の蘭だった
体力が未成長の蘭へと、仁王は攻撃を集中させる
「蘭しゃん！」
術を封じられていた巻絵は、常盤ノ秘薬（ときわのひやく）を蘭に振りかける
「ああっ、そろそろ神仙水が切れちゃうでしゅ！」
あたふたとうろたえる

初子の猛攻により、そろそろ痩せ仁王は仕留められそうなのだがその前に蘭がやられるかどうかは、賭けだった

「ハ、ひょっとしてコレが！」
弓を構えた佐和が、屋敷での事を思い出す
こんな技でも、使わないといけない場面！
佐和の視界が狭まり、周囲の音が遠くなる
「奥義、連弾弓佐和（れんだんきゅうさわ）！」
一拍に打ち出された三本の矢が、痩せ仁王の胴体を貫通した

苦悶のうめきを上げて、鬼はその場に崩れ落ちてゆく
「佐和お姉さま、すごいっ！」
「ど、ドウダ、見たかっ」
頭がくらくらする、これが奥義の反動だろうか
残る太り仁王を初子が突き刺し、こうして一家は仁王の門を乗り越えたのだった

～～

佐和と蘭の体調が芳しくなかったが、それでも壬生川家は先へと進んだ
仁王の門を抜けた先には、京の都を模したような通りが延びていた
朱雀大路と言い、平安宮へと続く中央通りと同じ名前だ
そこは、あちこちを天狗が飛び回っていた
「つ、強そう……」
悪羅大将より、五割増しで凶悪そうに見える
その上、狭い道に密集しているため、避けて通るのも骨が折れそうだった
「でも、なるべく迂回して、先を急ぎましょう」
何かが乗り移ったような、初子の真剣な表情
平時であれば、佐和も蘭も顔を赤らめるような凛々しさだが、今はさすがにそんなことを言っている場合ではない
朱雀大路を抜けて、呪殺の碑へと入り込む
「ヤな名前だ……」
少しずつ顔色が悪くなって来ている佐和が、ぞっとしたようにつぶやく

雪の降り積もる通りを進んでゆくと、ついに見つかってしまった

崇奈鳥大将が、見たことのない妖怪を引き連れて、壬生川家に襲い掛かる！

合計七匹の妖怪を相手に、一同は苦戦を余儀なくされる

ひょっとしたら、仁王よりも強いかもしれない雑魚相手に、一戦で半壊にされる壬生川家

荒い息をつく一家だったが、そこは密集していた大路、治癒するヒマもなく、次の天狗が襲ってきた

「う……！」

相手の先制攻撃の術＜太刀風＞により、初子と蘭が切り裂かれる

「蘭しゃん！」

「はっちゃんんん！」

その場に倒れ込むふたりを背負って、壬生川家は敗走していった

大江山、通算二度目の敗退だった

＜壬生川家＞

結局、去年に比べて二歩ほど前に進んだだけだった

大怪我を負った初子は自室の布団に横になり、少し落ち込む

０才１０ヶ月の自分には、もう大江山に行くチャンスは残されていないのだ

「当主さま、ご加減はいかがですか？」

「あ、イツ花さん、ありがとう、もう良くなってきました」

さすが元服すぐの少女だ、傷の治りも早い

「それで、あの、」

イツ花が珍しく、視線を伏せる

「お迎えが近づきつつある方がいらっしゃいます……お気を強く持ってこちらへ」

初子の頭が真っ白になった

布団に臥せっていたのは、蘭だった

いまだ0才5ヶ月の蘭の、命のともし火が消えようとしている

初子、佐和母子、イツ花が沈痛な面持ちで、苦悶の表情を浮かべる蘭を見守っていた

「蘭ちゃん……」

「蘭さまぁ……」

一番年少の子が亡くなってしまうだなんて

頭痛に襲われていた初子を、イツ花が廊下に呼ぶ

「当主さま」

「何でしょう……」

少し疲れた顔で、初子が微笑む

「反魂の儀（はんこんのぎ）を志願される方が、いらっしゃいます」

「反魂の、儀……」

反魂の儀――

自らの魂を差し出し、相手の魂を救う呪法

魂を与えた者に訪れるのは、死

初子は居間に呼ばれていた
そこに座していたのは、正装の巻絵だった

「巻絵お姉さま……」
「初子しゃん」

正座して、頭を垂れる

「子の蘭しゃんなら、わたしなんかの何倍もこれから先、働くと思いましゅ！（、・ω・´）」
「でも、巻絵お姉さま……」
「どうか、反魂の儀……お許しくだしゃい」

初子は胸の前で、ぎゅっと手を固める

「でも、そうしたら、巻絵お姉さまは……」
初子の声が震える
「……わたしは、もう、十分生きたんでしゅ」
「そんなことって……」
初子の目から涙がこぼれたが、巻絵はにっこりと微笑んでいた
決断しろと言うのだ、彼女は
自分に――

そんなことって、あるだろうか

「これも、当主が決めないと、いけないんですね……」

「わたしは、もう……疲れちゃったんでしゅ、鬼を斬るのも、痛い思いをするのも……」
「そんな……壬生川家の生き方を、否定するような事……おっしゃ

らないでください」
「だから、わたしは、ここで引退でしゅ」
巻絵はもう一度、頭を下げた
「蘭のこと……よろしく、お願いしましゅ（´・ω・`）」
初子の嗚咽の音だけが、屋敷に響いていた

翌日、蘭は目を覚ました
蘭は初子から巻絵の想いを聞いて、一言「……そうか」とだけつぶやいた
蘇った蘭の髪は、炎のような赤から、母親譲りの緑髪へと染まっていた

壬生川　巻絵　享年1才4ヶ月

「自己満足かもしれないでしゅけど……私なりに　一所懸命やったつもり……ほめて、くだしゃい……」

蘭の枕元で、初子は反魂の儀を行った昨夜、見た夢を蘭に話した
鴨川のほとりで、臥蛇丸と巻絵が散歩している夢だった

無言で聞いていた蘭に、初子はぽつりと誓った

「こんな想いを味わうなら、私は、もう二度と負けません」

その日壬生川家に満ちていたのは、とても苦い煙のような空気だった

第三話－３　「通夜」　１０２０年１１月後編（後書き）

出陣・大江山（初子・巻絵・佐和・蘭）

第三話－４　「蘭契」　１０２０年１２月（前書き）

佐和　１才３ヶ月
初子　１１ヶ月

蘭　６ヶ月
夢見　３ヶ月

第三話－４　「蘭契」　１０２０年１２月

夢見（ゆめみ）は戸口から左右を伺っていた
「右よ～し、左よ～し……」
壬生川（みぶがわ）家は豪邸だが、京の外れにあるため、人通りは滅多にない
「さ、ユメちゃんの大冒険が、今始まるんですぅ……」
門から足を踏み出す

ガコン

「ひ――」
足首に縄が巻きつき、表の木に引っかかった数百キロの重石が落下すると同時に、夢見の身体が数メートルほど吊り上げられる

「いやあああああああぁ～～！」
着物の裾がはだけないように、必死に押さえる夢見

「ちょ、これ、え、何ですかぁっ！　え～～ん！」
手の端から巾着がこぼれ、それを誰かが受け取る

「……ふむ」
「ら、蘭（らん）さまぁっ！」
逆さになった視線で、上空から蘭を見上げる夢見
「ちょっとぉ～、降ろしてくださいぃぃ」
「……佐和（さわ）が、な」
「びくっ」

遠い目でつぶやく蘭

「自分の巾着がなくなった、って先ほど騒いでいたのだが……こんな模様だったな」

「お、お母様ぁから、お下がりもらっちゃったんですぅ～」

「……中身も、か」

封を開くと、子供が持つには少々多すぎる金額が入っていた

「……しばらく、そのままにするんだな」

「え～～～～ん！」

髪が逆さになったり、今にも裾がほどけて生足があらわになったりで、もういっぱいっぱいの夢見

「ユメ、もっと遊びたい～～～、京の都でお祭り行きたいのにぃ～～～！」

叫び声を後ろに浴びながら、蘭はつぶやく

「……京の都を再興するなら、要所要所に罠は必須だからな……もっと改良せねば」

何かが間違っている蘭だった

＜初子（はつこ）の子＞

初子と佐和が並んでいる中、イツ（いつか）花が満面の笑みでやってくる

「初子さま、白波河太郎さまから、新しいご家族を預かって参りました！」

「わーぃ♪」

「ひぃっ！」

反応が対照的なふたり

「出てきたのがまんまカッパだったら、ウチは、ウチはどうすればッ」

「いや、弓を構えないでください……」

だから具足姿なんですね……とつぶやく初子

「良い事思いついた！　仮面だ、鉄仮面だヨ！」

かぶって一生暮せば！と主張する佐和

「酷いこと言わないでください！」

「だって、だってぇ……」

しくしくと泣き出す佐和

「何で泣くんですか……」

自分の好きな人は、そこまで言われるほどか、と少し悩んでしまう

「で、あの、続けてもよろしいでしょうかァ」

袖で待っていてくれたイツ花

「あ、はい」

子供にすごく会いたい初子と、会うのがすごく怖い佐和

「おめでとうございます、かわいい男のお子様です！」

幸四郎（こうしろう）以来、六人目の子供でついに男の子が産まれた

「可愛いってアレか！　小さなカッパみたいなコを指して、ほら可愛いデショってか！」

やわらイツ花に掴みかかる

「きゃッ」

「お、落ち着いてください！　お姉さま！」

初子がふたりを引き剥がす

「ど、どちらかと言えば、母君似のようですよ！」

「どちらかと言えばって何だッ、違いは明らかジャナイ！　イツ花

の目は節穴か！　あるいははっちゃんの腐った好みが乗り移ったか！」

最後に少し本音が出た

「佐和お姉さまっ！」

力いっぱい引き剥がしたら、佐和が転がって、そのまま頭を障子に突っ込ませて停止する

「まったく、もう……」

さすがは壬生川家一の膂力を持つ女傑である

「……何の騒ぎだ」

蘭がふと部屋を覗き込む

「ちょっと、佐和お姉さまが暴走しちゃって……」

「いつもの事か」

納得する

「それより……この小僧が、部屋の前でビクビクしていたのだが」

首根っこを掴んで引き上げると、そこには子羊のように震える男の子がいた

○「ひ、ひぃぃ……」

蘭の仏頂面に怯えているのか、半泣きだったが、その端正な顔立ちにはどこか壬生川一家の面影があった

「ん……？」

目を細めて、少年の顔をマジマジと見つめる

食われるんじゃないか、と思う少年

「こいつは、もしや……？」

「は、白波河太郎さまから預かってきたお子様！」

部屋の前で呼ばれるのを待っていたところを、蘭に捕獲されたら

しい
「ええっ」
カッパに似ても似つかない、可愛らしい顔立ちをした男の子だ
「ほれ」
首根っこを掴んだまま、初子に息子を手渡す蘭
ネコか何かですか、とイツ花は思った

名前は以蔵（いぞう）、初子の素質を受け継いだ槍使いの少年だ
緑色の長い髪の毛を、藍色のリボンで後ろで縛っている

「それは……もしかして、私の飾り布？」
以蔵の後ろ髪をまとめてあるリボンを見て、初子は尋ねる
あの交神の時に髪が乱れて、両房を縛っていたリボンがどこかに行ってしまったのだ
父親に貰ったものでしばらく探したのだが、布団の近くからは出てこなかったため諦めていた

「あ、うん、お父さんがお母さんの思い出だからって、とても大事にしてて……でも、これは地上の物だから、お前が身に着けていろって」
「そっかぁ」
初子は以蔵の髪を撫でる
「それじゃあ、それは以蔵が持っていてね、お守りなんだから」
「うん、大事にする！」
話自体は良い話なのだが、蘭やイツ花の頭に浮かんでくるのはあのカッパ男のため、どうにも感情移入が出来ない

「あいたた……もう、はっちゃんってばカゲキ……」
頭を振りながら起き上がる佐和
「あ、何か丁度良いから、みんなを紹介するね♪」

息子に微笑みかける初子
「こちら、一家最年長1才3ヶ月で弓の使い手、佐和お姉さま」
「ウン、母親になったはっちゃんも良い……じゃなくて！　ヨロシク！」
以蔵と握手を交わす佐和
「あ、何だかすぐ友達になれそう！」
「それはウチの精神年齢が同じくらいだって言いたいのかｇなｇ，あ！」

後ろから半笑いの初子に羽交い絞めにされる佐和
「佐和お姉さま、暴れないでください！……こ、こちらは0才6ヶ月の蘭さん、頼りない一家を支えてくれる頼りになる人です」
「ふむ……宜しく」
差し出された手に、怯えながら握手する以蔵
「ど、どーも」
なまじ美人であるがためか、怖ええ、と以蔵はこっそり思う

「それでこちらが、一家のお手伝いさんこと、イツ花さん……ずっと私たちを見守ってくださる方よ」
「初めまして、よろしくお願いしますッ」
「よろしくです！」

元気よく挨拶する以蔵

「えーと、後は、きゃっ」
佐和を羽交い絞めをしたままだった初子が、突然手を離して悲鳴を上げる
「へ、ヘンなとこ触らないでくださいよ！」
「（；゜∀゜）＝3」

「何ですかその顔は！？」
初子が照れ隠しに佐和を突き飛ばし、転がった佐和が再び障子に頭を埋める
「……障子の張替えが大変だな」
気に食わないのか、助けない蘭
「……お、お母さん、こええ」
ぽつりとつぶやく
「あれ？」
周囲を見回して、イツ花が怪訝そうな声を上げる
「そういえば、あの……夢見さまは？」
「は……」
蘭が珍しく驚いた顔をした
「忘れ……ていた」
夢見が吊り上げられてから、すでに二時間が経過していた
「う、うーん……」
夢見がくらくらした頭を押さえて、目を覚ます
「……気がついたか」
「ひっ」
蘭を見て怯える夢見
どいつもこいつも……とは思うが、実際悪いのは自分なので何も言えない蘭
「あ、あのぉ、ここはどこでしょぉ……？」
「俺の背の上だな」
「はひっ！？」

夢見は蘭におぶさられていた
「オー、気がついたか、ユメちゃん」
「あ、あれ、ここどこですかぁ？」
寝ぼけた目をこすりながら、蘭の背中で揺られる夢見
周りはどうやら、屋敷ではないようだが……？
「九重楼（くじゅうろう）だ」
「はひっ！？」

というわけで――

＜九重楼＞

「な、なんでユメちゃんこんなところにいるんですかぁ！？」
「鎖帷子付きの夢見は、さすがに重かった」

夢見を降ろして、首を回す蘭

「今月は、ウチと蘭とユメの三人で出陣なのダヨ」
先月大怪我した初子は、以蔵の訓練のために屋敷に残っていた
「いやそうじゃなくてぇ」
「初出陣で、緊張しているのか」
「違ーいーまーすぅー！」
「ユメのために、比較的楽そうな九重楼にしたノニー」
「いや場所が問題じゃなくてぇ！」
夢見の衣装は、誰が着替えさせたのか分からないが、頭からつま先まで、完全武装が整っていた
弓の手入れも万全だ

「ユメ、全然こんな話聞いてませんのにぃ！」
「初出陣は、誰でも緊張するものだ」
「きょうは気楽に頑張ろうネ」
「ああっ、誰か会話できる人を連れてきてくださいぃ！」
夢見の叫び声も、壬生川家待機中の初子の元には届かない

「ユメ、ここで帰りますぅ……」
意気消沈した夢見が、すごすごと後ろを向く
「ふむ……しかし」
夢見の前に幾匹もの妖怪が立ちふさがる
「ひっ――い、いやぁぁぁぁ～～！」
「俺たちとはぐれるのも、危険だと思うが」
「助けてぇ、お母様ぁ～～」
佐和の胸に飛び込む夢見
「……死にたくなければ、戦うんだな」
「うぅぅ～……」

「サー、壬生川家、突撃ー！」

こうして三人は、夢見を宥めつつ、扱いつつ、九重楼を進撃し、多数の戦利品を持って凱旋したのであった

第三話－４　「蘭契」　１０２０年１２月（後書き）

出陣・九重楼（佐和・蘭・夢見）
以蔵→槍使い・初見　訓練・初子→以蔵

第三話－5　「雪景」　2021年1月（前書き）

佐和　1才4ヶ月
初子　1才

蘭　7ヶ月
夢見　4ヶ月
以蔵　1ヶ月

第三話－5　「雪景」　１０２１年1月

明けましておめでとうなその日、壬生川家は一面銀世界に包まれていた

「ゆ～～き～～～～～～♪」
喜んで庭を駆け回る犬……こと、三代目当主・初子
あちこちをばたばたと走っては、真っ白な雪に足跡をつけてゆく

その様子を居間から、コタツにもぐって眺めている佐和や蘭たち
お茶をすすりつつ、雪の中で戯れる美少女を鑑賞するという風流な光景だ
「平和デシュねぇ……」
「……冷えるな」
コタツにすっぽりと埋まる蘭
「ねぇねぇ、雪合戦やろうよー！」
手を頬に添えて皆を呼ぶ初子
「おー、やってみるー！」
「わ～ぃ～、ユメちゃんも仲間に入れてくださぁぃ～」

初子に飛びつく以蔵、夢見の若い衆

「雪合戦だってヨ」
「……俺は、寒いのは苦手だ」

かたや居間でゴロゴロする、年寄りふたり（佐和1才4ヶ月、蘭7ヶ月

「佐和お姉さまも、蘭さんも一緒に一緒にー♪」
こちらに手を振ってくるが、曖昧に微笑む佐和
「ウチは、一番好きなの秋だしナァ」
「……すまんな」
つまりは、ふたりとも寒い外に出たくない、と

「ふーん、いいですよーだ」
それならばと背を向けて、初子は以蔵や夢見たちと雪合戦を楽しむ
置いてけぼりにされた感のある、佐和と蘭
しかし寒いなら障子など開けなければ良いのだが、初子の遊ぶ姿は見たいらしい
「あーソウダ、蘭ちゃん」
「……ん」
今にも眠りそうな蘭
「この前、蘭ちゃんやユメと一緒に九重楼（くじゅうろう）に行ったときに、何個か術法の巻物を見つけたんダケド」
コタツの上みかんの隣に、コトリと巻物を置く佐和
「……むにゃむにゃ」
「起きろナサイ」
蘭の頬を引っ張る
「……起きている、少し気を失っていただけだ」
そっちのがヤバくないか、と佐和は思う

「デ、コレ、＜お地母＞」
「ふむ」
誰もが忘れている事実だが、いまや壬生川（みぶがわ）家一の術士となった佐和が、効果を蘭に解説する
「治癒の術なんだケド、なんと隊全員の体力を８０前後回復するのダ！」

「ほう……」
蘭が億劫そうにコタツから手を出して、巻物を広げる
「母が生きていれば、大層喜んだろうにな」
「ウチはもう覚えたカラ、次は蘭ちゃんが読むとイイゾ」
「ん……預かる」

治癒の術には、これまでの戦況を一変させる可能性が秘められている
臥蛇丸や巻絵がずっと大事にしていたそれらの術を、こうして蘭もまた、受け継いでゆくのだった

～～

しばらくすると、初子が夢見と以蔵を引っ張って、居間に戻ってきた
「あー楽しかった♪」
あははーと快活な笑みを見せる初子
「ちょっとやりすぎちゃって、ゴメンね、夢見ちゃん、いっくん」
「う、うぅん、ユメちょ～楽しかったですぅ～」
夢見にぎゅ～～っと抱きつく初子
その様子を、佐和がとがめる
「チョット、ユメ、あんまり引っ付いてはっちゃん嫌がっているジャナイ」
「え～、初子さまぁ、お嫌ですかぁ～？」
胸元から初子を上目遣いに見上げる夢見
「ううん、別に嫌じゃないよ」
「良かったぁ～～～、初子さま良い匂いがしますぅ～～」
「あ、あはは」

母よりも真っ先に初子に甘える夢見に、佐和の拳がぷるぷると震え出す

「何だか、お母様より柔らか～ぃ……胸元とか」

「コラー！」

一気に夢見を引き剥がす佐和

「弓使いには胸なんて邪魔ナンダ！　大きいと引くときに引っかかるんだぞ！　引っかかると痛いんダゾ！　ウチは引っかかったことないケド！！」

最後の方は涙交じりだった

（必死な……）

蘭はコタツにもぐって＜お地母＞の書を読みながら、横目に思う

「そ、それじゃぁ～、お母様は無くて良かったですねぇ～～」

皮肉たっぷりの夢見の笑顔

「ホントにネー、ってこのッ！」

「きゃ～～、きゃ～～～～」

夢見を追い回す佐和

親子は居間をぐるぐると回る

「な、何か、母さんってすっごい人気者だよね」

屋敷に来たばかりの以蔵が、異常な光景に目を奪われる

慣れっこの初子は、あははーと笑うだけだ

「そうそう初子……これなのだが」

「え、どうしました？」

蘭が初子の横に座り直し、＜お地母＞の書を広げる

「俺は母と違って、新たな術を覚えるのが苦手でな……良ければ、

初子も一緒に訳してほしいのだが」
「うーん、わたしも術得意な方じゃないですからねぇ……」
眉を可愛らしくしかめて、巻物の古語を拾う初子
その横顔を見つめながら、さりげなく蘭が初子の肩に腕を回すが、巻物を読んでいる初子は気づかない

「……初子」
さりげなく抱き寄せ……ようとして、見つかった
「チョット、何やってんの！」
「いくら蘭さまでも、それはダメですぅ！」
「――！」
母子が蘭の両手を掴んで一気に持ち上げ、そのまま庭に思いっきり放り投げる
ズボッと音を立てて頭から雪に埋まり、動かなくなる蘭

「皆様、三月に行われる春の選抜試合の出場要請の使者が、壬生川家にお見えになりました！」
イツ花が居間に顔を出した時には、初子が巻物に夢中になり、佐和と夢見が取っ組み合いのケンカをしつつ、蘭が庭の雪に埋まっていた
「春の選抜大会は参加するだけで栄誉、運良くいい成績を残せれば、一気に名家に仲間入りです……って、何だか様子が変ですネ」

「な、何なんだ、この人たち……」
早くも未来に不安を抱える以蔵であった

結局使者にはイツ花が対応したため、壬生川家の現状を知られることはなかったという

＜出陣＞

「それじゃ、行って来ますねー♪」
イツ花と以蔵に手を振るのは、先ほど＜お地母＞の術を習得したばかりの初子だ
「うぅ、ユメちゃん本当は戦いたくないんですけどぅ……初子さまと一緒なら、頑張りますぅ……」
「イチイチ引っ付かないノ！」
こうして、すぐに親子喧嘩が始まる

「えと、母さん……気をつけて」
何やら含みをはらんだ以蔵の声に、あははと笑顔で応える初子
（オレの言葉の意味、本当に分かってんのかな……）
美少女の母を持つ一人息子の心配は募る

「あ、そうそう蘭さま」
「……ん」
ダルマのように着膨れしている蘭が、鼻をすする
「投資の結果ですけど、国中から職人さんが集まって、復興も順調に進み、すっごく斬れる刀とかすっごい丈夫な鎧とか、お品が揃ったみたいですッ」
「……そうか」
嬉しい報告を聞いても、仏頂面のままの蘭
「え、蘭さんも、投資なさってたんですか？」
「……ああ、１００００両ほどだがな」

「いちまんりょーぅ！？」
夢見が驚いた声を上げる、それだけあれば美人画を何枚書いても

らえるか

「オー、蘭ちゃんも巻ちゃんの後を継ぐんダネ」
「……鏡を見るたび、鬱陶しくて叶わんからな」
反魂の儀によって、巻絵の緑色の髪を受け継いだ蘭は、性格もどこか温和になった気がする初子だった
「それじゃあいっぱい戦って、いっぱいお金稼いできましょうね、京の皆様のためにも♪」
おー、と掛け声が上がった

鳥居千万宮（とりいせんまんぐう）に出陣した初子、佐和、蘭、夢見の四人は、一部（初子を巡る）トラブルがあったものの
年が明けて復活した中ボス狐次郎（こじろう）を打ち砕き、無事一ヶ月を戦い抜いたのであった

第三話－5　「雪景」　1021年1月（後書き）

出陣・鳥居千万宮（初子・佐和・蘭・夢見）

第三話－6　「決闘」　1021年2月前編（前書き）

佐和　1才5ヶ月
初子　1才1ヶ月

蘭　8ヶ月
夢見　5ヶ月
以蔵　2ヶ月

第三話－６　「決闘」　１０２１年２月前編

＜蘭（らん）の部屋＞

「……今月で俺も、元服、か」
鏡を見ながら思う
「子供を遺す事が、出来る年になったとは言え……」
鏡の中の緑色の髪の自分は自分のようで、誰かに操られた化身のようにも思える

「……ふぅ」
壬生川（みぶがわ）家において元服は、望めば正装して冠を被り、髪を結い直す儀式があるのだが、特に強制されてはいなかったため蘭は辞退していた
珍しく億劫そうに、息を吐く

と、そこへ、
「ちょ、ちょっと蘭姉、匿って！」
「えーん」
障子を開けて、ばばっとちびっ子ふたりが蘭の部屋の中に入ってくる

「……何だ？」
今月でようやく実戦部隊入りした以蔵（いぞう）はともかく、夢見（ゆめみ）はもう５ヶ月になるのだがどうにも幼さが抜けないな、と蘭は思う
そんな幼いふたりは、蘭の部屋の押入れにどたどたと潜り込んだ
「……隠れん坊、か？」

しばらくして、部屋の前を熊のような足音が走り抜ける
「……？」

いぶかしんでいると、すぐに戻ってくる
「チョット！　蘭ちゃん！」

「……やかましいぞ」
巨木も打ち抜けそうな大弓を担いだ佐和（さわ）が、息を切らして蘭につめよる
「ココに、ユメが来なかった！？」
「……いや、見てないが」
「あのコドモ！　ウチの大事な大事なはっちゃんに描いてもらったウチの絵をッ」
「絵を……どうかしたのか？」
「あろうコトか、ラクガキだと思って、矢の的に使って遊んでたノヨ！」
蘭は無意識に押入れを見ようとしたが、自制する
「初子（はつこ）の絵は確かに……」
「きぃぃぃ、お前の頭を代わりに矢の練習代にしちゃるデシュ！」
「……殺すなよ」
蘭の制止も聞こえたのか聞こえなかったのか、佐和は再び走ってゆく
確かに、自分もそんな真似をされたら激怒するかもしれない、と思いつつ、押入れに声をかける

「……鬼は行ったぞ」
「ホッ……」
「ううん、痛いってば夢姉……」
転げるように出てくる夢見と、鼻を押さえている以蔵
「だってぇ、暗闇にまぎれてユメにいやらしいことしようとしない

でくださぁい～」
「しねーってば、夢姉には……」
「なんですかぁそれ、酷いぃ蘭さまぁ～～」
がしっと蘭に引っ付く夢見

「……それより、何でお前らあんな事を」
「ユメは反対したんですけどぉ、いっくんが『何この汚い画、今日はこれで遊ぼうぜ』ってぇ～」
「いっくんは止めろ……つか、それ全部まんま夢姉のセリフだろう！」
「ユメは『ぜ』なんて言いませんしぃ～」
「語尾を変えただけじゃねーか！」
要するに、ロクな理由があるわけではないのか、と蘭は納得する
確かに初子の絵は言われて見なければ、ただのうねうねにしか見えまい

「ていうかぁ、どうしてママって初子さまのことになると、羽が取れちゃった矢みたいに飛んでっちゃうんですかぁ？」
「……羽が付いていても、佐和の射る矢はそんな感じだが」
うーむと唸る

「オレの母さん美人だからじゃない？」
「え～、だって女性が女性をなんてぇ～」
夢見には何やら理解できない部分があるらしい
「ていうかぁ、蘭さまもですよねぇ？　どうしてですかぁ？」
エサをねだる猫のように、蘭の裾を引っ張る
「佐和は、二人の生まれた時期が近かった事もあるのだろうが……」
あの二人に蘭の母・巻絵（まきえ）を加えた三人が、当時の親友同士だったとは聞いたことがある
「俺の場合は……そうだな、」

何か例えようとしたが、言葉が出てこない
想いが宙をさまよう
「……まぁ、初子は良い」
「それじゃぁ～分かりませぇん～」
夢見はぶーぶーと蘭の周りをじゃれる

「あ～でもぉ、初子さまの笑顔は良いですよねぇ～」
ぱっと手を離して、天井にキラキラとした目を向ける
「あれは確かにぃ、ユメちゃんもこう、頭がぽーっとしちゃいますぅ～」
「夢姉は、普段からだろ」
「きぃぃ、そういういらないツッコミは、いりませぇん～！」
むきーと遠慮なく怒る夢見を見て、蘭はその将来がまるで佐和になるんじゃないだろうかと不安に思えた
夢見の怒声が響いたその瞬間、蘭の部屋の戸がバッと勢いよく開かれる

「はひっ！？」
「う」
恐る恐る振り返る夢見と以蔵だったが……
「……初子？」

「蘭さん」
キッと初子は蘭を見る
「交神の儀をなさらないって、どういうことですか」
初子が当主の部屋に置いてきた直訴状を、蘭の顔の前に突きつける
蘭は、静かにため息をついた

＜旧・玄輝（げんき）の部屋＞

「……鬼退治の時にしか見せない顔で乗り込んでくるものだから、夢見と以蔵が怯えていたぞ」

場所を移して、ふたりは会議の間に対面していた

「お話をはぐらかさないでください、どうして交神（こうしん）の儀をなさらないのですか」

まるで槍のような目をする初子

「……俺の勝手、ではないか？」

「じゃないです、これは壬生川一家の問題です」

「……一家の問題なら、当主の権限で介入してくるのか」

「はい介入します、わたし当主ですもん」

怒っているのか何なのか分からない、初子のセリフだ

「というか、どうして交神の儀をなさらないのですか」

というわけで、ここにお話が戻るわけで

「……面倒だ」

「嘘です」

斬り捨てる初子

「……俺のひいお婆様の遺言で」

「ありえないじゃないですか！」

蘭はチッと舌打ちをする

「子供が戦死すると、母親は反魂の儀を行わなければいけないのだろう」

少しだけ、無表情を崩した

「そのような事は面倒だ……俺にはそこまでの覚悟はない」

「そんな、重く考えすぎです！」
「8ヵ月も生きれば、自分の性分というものは曲げられなくなるものらしい」
「何でもかんでも、自己完結しちゃうんですからぁ」
不満げに口を尖らす

「大体、いっつもいっつも一人で何でも決めちゃうから、蘭さんのそういうとこ、わたし好きだけど嫌いです」
「どっちなんだ……？」
危うくコケそうになる蘭
「でも、蘭さんはわたしが言っても、自分の意見を曲げませんよね」
「……そうだな」
実際子供を作る気は毛頭なかった
「わたしも、絶対蘭さんには子供を作ってほしいです、それを変える気はありません」
「……平行線だな」
「ええ、ですから、こういう時は賭けです」
初子のまっすぐな視線には、自信が宿っていた
「賭け……賭けだと？」

蘭は思う、自分は初子のこんな目に弱い、と

「以前にお父さまがおっしゃってました、三本先取の方法です」
「……ほう」
何て真剣な目をするのだろう、壬生川家という絶望的な現状を過ごし、どうしてそんな目が出来るのか
「わたしが先取した時は、蘭さんに交神の儀をしてもらいます」
「……ならば俺が勝った時は、四代目当主の座は貰う」
「はい、構いません」
「良かろう」

最後に戦ったのは幸四郎が死んだ翌月、去年の１０月、今から４ヶ月前のことだ
あの頃から蘭は体も大きくなり、力も技も付いた、あの頃の自分とはまったく違う
お互いの武器は薙刀と槍、条件はもはや互角

「……初子」
５ヶ月年上の初子を、蘭は睨みつける

お前のやり方では、甘すぎるのだ初子
ひとつの家に三つの血では交神する神の質は下がってしまう、自分の代でひとつの家を潰し、その後濃い血筋を引き継いでいけばいいのだ
幸せな家族も、そこに生きる人々の想いもいらない
全ては朱点童子（しゅてんどうじ）を倒すために、それ以外のものは不要だ

「俺は勝つぞ、初子」
「はい、でもわたしも負けません」
二人の少女の想いが、こうしてぶつかりあう

第三話－7　「血統」　１０２１年2月後編

審判も呼ばずにひっそりと、ふたりは道場で対峙していた
壬生川家の指針を決める戦いが、今始まる

「……冷える」
不満げにつぶやく蘭
「冬の道場に裸足で入れば、それは……」
「……これが嫌で、俺はずっと朝の稽古を手を抜いていたのだ」
「手を抜いていたんですか！？」
衝撃の事実発覚だ
「……術はそういえば、有りだったな」
「ええ、たぶんそんな暇ないと思いますけど」
初子が剛の槍だとすれば、蘭の薙刀は守りの技に秀でていた
治癒の術と、多くの術法、さらに身のこなしに優れている蘭

「……では、行くぞ」
「はい」

蘭が勝利すれば、壬生川家でひとつの血が絶たれ、初子が勝利すれば、壬生川家の歴史は変わらず皆は普段通りに過ごす事となる
後世の人間にとっては、自分は酷い女に思われるだろう、と蘭は自嘲する

蘭は薙刀を上段に構え、初子を強襲した
「――双光斬」
「え、奥義！？」

蘭の目が見開いて、その身体がゆらりと揺れる
道場に激烈な打ち込みの音が、響き渡った

やがて、ふたりの三本勝負に決着が付く

～～

「はぁ……はぁ……ズルイですよ、蘭さん……奥義だなんて……」
「……ふざけるな、一体、健康度を……いくつ使うと思うのだ……」
道場に横になっているふたり

たった三本の勝負に、かかった時間は数時間
板の間敷きの道場の壁は、四方のうち一方が非常に風通しが良くなっており、オマケに板の間や壁も何十という箇所が斬り裂かれていた

「この……化け物、が……」
蘭は毒づく

４ヶ月前と結果は同じ、三本中一本すら取れなかった
こちらの振りは全て叩かれ、相手の振りを弾こうとすると手に痺れが残る、技の威力の差が如実に現れた勝負だった

「鬼子め……」
寝転がっていた初子が、蘭の手を掴む

「……約束は、約束、ですからね」
初子が満面の笑みを見せる

畜生、と思った

蘭は手を振り解くと、右肩を押さえて立ち上がる
そして、つぶやく
「……交神をするなら、初子が良い」
「え、何か言いました？」
初子の問いかけが届くが、あえて無視をする
道場を出て、イツ花にでも手当てをしてもらおうかと思った
初子に打たれた場所がひどく熱を持ってもはや感覚がない上に、
奥義を放った両腕は少しでも動かすと悲鳴が出そうなほど痛い
回復術で治そうにも、術力は＜速瀬＞や＜武人＞＜防人＞に使い切ってしまった
散々な一日になった
本当に、散々だ

「ちょっと、何ですかー？」
黙って出ていこうとする蘭に、初子が座ったまま尋ねた
蘭は少しだけ振り向くと、無防備そうに首を傾げている初子に聞こえないように漏らした
「……俺が男なら、今この場で襲ってやるものだが……口惜しい」
今はそれだけが悔やまれた

＜交神（こうしん）の儀＞

というわけで、手当ての済んだ蘭が憮然とした表情で、交神の間

に座る

「それでは、きょうも元気に交神の儀をいたしましょうッ！」
「……」

今にも舌打ちしそうな目つきの蘭

「ほらほら蘭さま、どなたになさいます？」
「いやまぁ……どいつでも良いのだが」
「それでは、お任せコースですか？」
「ああ」
「イツ花（いつか）の気まぐれコースとか、いかがですか？」
「いやそれは」
少しお茶目がすぎるイツ花に、いやいや、と首を振る
「当主さまに頼まれたんですから、ちゃんと蘭さまが交神なさるように、って」
「よく手を回すものだ……」
暇なんだろうかと思ってしまう
「ほらほら、誰になさるんですかァ」

「じゃあ、コイツだ」
自分に足りない筋力を補うため、火の神を適当に指差す
「は、はい、承りました」
そのあまりのやる気の無さに、イツ花が少し引く
もっとも蘭にしてみれば、目的の人と交神出来なければ、誰でも同じと言ったところだろう
それにしたって、蘭の選んだ神様は……

蘭の耳に、何かの獣の雄叫びのような奇声が聞こえる
うなり声のような、数台の馬車が走り回るような……

「……なんだ？」
障子を突き破って、鉄の雲に乗った火の神が、蘭の前に出現する
蘭もさすがに目を丸くした
テメェか俺様の交神相手ってのはよ、良い女じゃねーか、との声
に、思わず呆然としてしまう

三ツ星凶太「全開バリバリで、ぶっ飛ばすぜ！」

まるでチンピラのような神を前にして、
蘭の頬に、一筋の汗が流れる
……やっぱり、散々な一日だったな、と蘭は思った

第三話－7　「血統」　１０２１年２月後編（後書き）

元服→蘭　交神の儀・蘭×三ツ星凶太

第三話－8　「制勝」　１０２１年3月（前書き）

佐和　１才６ヶ月
初子　１才２ヶ月

蘭　９ヶ月
夢見　６ヶ月
以蔵　３ヶ月

第三話－8　「制勝」　１０２１年3月

春の兆しが見え始め、徐々に暖かくなってきた毎日

「うわ何このツボ」
以蔵(いぞう)が佐和(さわ)の部屋で、何か面白そうなモノを発見する
「わかんなぁい、ママがある日洞窟から拾ってきたのぉ～」
以蔵は夢見(ゆめみ)の部屋によく遊びに来るようになっていた
自分の部屋（初子(はつこ)の部屋）に居るとどこからか佐和や蘭(らん)が来るのだ
それに佐和の部屋には面白そうなものもいっぱいある

「洞窟から……でも何か、良いツボだな」
「何か、持っていると偉くなった気がしますぅ」
以蔵と夢見は、とりあえず床の間に飾られているツボを拝む
やっぱり、面白そうというより変なモノばっかり置いてある気がする

「オーイ、ふたりとも、準備準備ー」
「あれ、佐和さん」
「初子さまのトコで、イチャイチャしてたんじゃないんですかぁ？」
「いやイチャイチャは終わったケド、ていうか明日もスルシ」

それはいいとして、と佐和は話を戻す

「ホラ、今から京に行くヨ」
「ええっ！？」
夢見の目がキラキラと輝く

「京の都に……マジで！？」
以蔵と夢見が手を取り合って喜ぶ
夢にまで見た、花の都だ

＜春の御前試合＞

騙された、と以蔵がつぶやいた
「あれ、どうしたの夢見ちゃん？」
「なんでもありませぇん……」

帝の前で、よよよと涙を流す夢見

（……まさか、京都観光だとでも思っていたのだろうか）
蘭が腕組をしながら冷ややかな目で見る
「つーか、完全武装で京の都に行く時点で気づくべきだったよな……」

初めての都に浮かれていた自分を恥じる以蔵

「壬生川（みぶがわ）一族ー、特にはっちゃんー、ガーンバーガンバー！」
「皆様頑張ってくださいネー！」
応援席で手を振る、のんきな二人

「ママ変わってくださいですぅ～」
「ウチ、今忙しくテ」
「お団子食べているだけじゃないですかぁ！」
あーん美味しいと悶える佐和を見て、夢見の弓を持つ手がぷるぷると震える

「ほらほら、佐和お姉さまが見ててくださるんですから、しっかりしないとね♪」
「ぅ～……」

ほどなくして、帝の挨拶があった
そうして、舞台が始まる

「ここに集めたものはいずれもその道の達人！
日ごろ鍛えし腕前、存分に競い合うがよかろう
では第九回春の「朱点童子(しゅてんどうじ)公式討伐隊　選考試合」
開催を宣言する！！」

場所を変え、控え室に待機する四人
夏の御前試合に出場した人で残っているのは、今では初子と佐和のみ
今回の参加者は、初子、蘭、夢見に、初陣の以蔵だ

「以蔵も、不平は言うが訓練はサボった事がないしな」
「いっくんなら、緊張せずにいけるいけるって♪」
大きいのと小さいのから、肩をぽんと叩かれる

「……何かオレ、この家に来てから、初めて人に期待された気がする」
3ヶ月の槍使いの性格は、すでにずいぶん捻じ曲がってしまっているようだ
「うぅ、ユメ帰りたいですぅ……」
「終わって時間余ったら、一緒に京都の町を見て回ろ？」
「う……それなら、ユメ、何とか頑張りますぅ……」

初子にしがみつく夢見

「……そうだな、俺も、京都の町も視察せねばな」

つぶやく蘭の頬が、少し赤くなっていた

その後、呼びに来た使者に促され、第一回戦の準備を整える一同

～～

第一回戦の相手は、前々回に苦渋を舐めさせられた京阪傭兵組合（けいはんようへいくみあい）だった

傭兵隊長「おや、アンタ……夏の試合に出てきた、お嬢さんか？」

「はい、去年はお世話になりました」

傭「そうかいそうかい、にしても……少し見ない間に、でっかくなったもんだなァ」

いぶかしそうに初子を見つめる

傭「それは良いとして、あの人の良さそうな剣士さんはどうしたい？　戦いたかったが、去年は当たらなくて」

「父は……夏の戦いのすぐ後に、命を落としました」

傭「そうかァ……まァ、人生色々あるもんだよな、今回はお手柔らかに頼むぜ」

「はい、こちらこそ」

ぺこりと一礼する初子

第一回戦が始まる

その中で特に善戦したのは、前回初子に負けた鬱憤を晴らそうと

気を張る蘭だった

「――双光斬(そうこうざん)！」

相手の前列をまとめて薙ぎ払う奥義によって、致命傷を次々と与えてゆく

「うわぁ～……」

「蘭姉、こええ……」

「下郎が！」

段々とテンションの上がってきた蘭

初子と蘭が次々と相手の連携を破ってゆく中、怯えるちびっこたちは後衛から支援に徹する

「……えい！」

槍の一突きで、傭兵隊長が後ろに吹っ飛んでゆく

○「それまで、一本！」

緊張の糸が途切れて、夢見と以蔵がワッと声を上げる

こうして壬生川一族は、京阪傭兵組合を見事に打ち負かしたのであった

～～

その後、第二回戦の大原野魔術団(おおはらのまじゅつだん)を軽くあしらった壬生川一家は、続く決勝戦ぽんと自警団(ぽんとじけいだん)を、一本で制した

「最後までよく戦ったぞよ！

では第九回　春の「朱点童子公式討伐隊　選考試合」最終結果の発表じゃ！

最後にシ烈な試合を制し、頂点を極めし者に、惜しみない拍手を！
優勝は……！
壬生川一族じゃ！！
そちたちの力で今年こそ京に平和を取り戻してくれい！！頼むぞ
「壬生川一族」筆頭公式討伐隊の任を命ず！」

三代目当主・初子率いる壬生川家が、京都最強の称号を手に入れた瞬間であった

その後、一同は支度金２１２３０両と多くの宝物を貰い受け、京都の観光を楽しんで、屋敷に帰還したのだった

第三話－8　「制勝」　１０２１年3月（後書き）

出陣・選考試合（初子、蘭、夢見、以蔵）

第三話－9　「残春」　1021年4月前編（前書き）

佐和　1才7ヶ月
初子　1才3ヶ月

蘭　10ヶ月
夢見　7ヶ月
以蔵　4ヶ月

第三話－９　「残春」　１０２１年４月前編

初子（はつこ）が蒼白の表情で、佐和（さわ）の部屋から出てくる
その様子を目ざとく見つけた人がいた

「あれぇ、初子さまぁ？」
「あ、な、なに？」
その様子にむしろ夢見（ゆめみ）が驚いてしまう
「いや、ママの部屋から、どうしたんですかぁ？」
「ううん、何でもないの……ただ、佐和お姉さまの具合を見に、ね」

初子はいつものように微笑むと、自分より背の高い夢見の頭を撫でて去ってゆく
少し様子がおかしかった気がする、と夢見は首をひねった
「謎ですぅ」

自分の部屋に戻ると、佐和が術の勉強をしていた
「ただいまですぅ」
「オカエリー」
どこも変わった事はないように思える
「ママって元気ですぅ」
「どうしたノイキナリ」
夢見はたたみの上にごろりと転がる
「だってぇ、もう1才7ヶ月なのにぃ、寝込んだりしないで机の前で学問しているんですぅ～」
「ハッハッハ」

少し誇らしげな佐和

「そらウチは８０才まで生きるコですカラ」
「壬生川（みぶがわ）家でそんなことが起きたら、化け物ですぅ……」
夢見がたらりと汗を流す

「……マァ、はっちゃんには見抜かれちゃったケド」
ぽつりとつぶやく

佐和の前にある書物の頁は、先ほどから一枚も進んではいなかった

＜蘭（らん）の子供＞

「三ツ星凶太さまの元より、お子様が参っております！」
「来たか……」
蘭は口をへの字に結んだままだ
「何で嬉しそうじゃないんですか、蘭さま」
「どうしてだろうな……」

賭けに負けて産んだ子だから、とは言えない蘭

「それはそうとォ……お喜びください！」
イツ花は笑顔でパチパチと拍手する
「膝がしらとくるぶしの形がまん丸で可愛い、もちろん女のお子様です！」
「……女か」

あまり男女の優劣がない壬生川家ではあるが、戦の面で言えば少々不満な蘭だった

○「初めまして、母上」
髪を後ろにまとめた凛々しい少女が入ってくる

名前は鈴鹿（すずか）、蘭の家の伝統を受け継いだ薙刀士だ
枯れ葉色の髪を後ろで桃色の飾り布を使ってまとめた、碧眼の凛々しい少女である

「お前の母だ、よろしく」
「よろしくお願いします、母上」
かしこまって正座する鈴鹿
「ふむ……しっかりしているな」
蘭がうーむと見た感想を言う
「はい、私はしっかりしています」

少し……違和感を感じる

「……いや俺は、お前と夢見を比べて、そう思ったのだが」
「そうですか」
不思議な沈黙が訪れる
何だろうこの間は、と思う

「……俺は、あまり人の親にはふさわしくない人物だ」
蘭がぽつりとつぶやく
本来産む気もなかったしな、とはさすがに言わない
「だから親らしいことを、俺に期待するな、そういうのは初子に頼め」

「はい、一切期待しません」
鈴鹿がバカ正直にうなずく
「……まぁ、屋敷の皆に紹介するか」
蘭はダルそうに腰を上げて、鈴鹿を手招きした

＜居間＞

「……居るか、初子」
「母さんなら居ないぞー」
居間でだら～っと座っていたのは、以蔵（いぞう）ひとりだった
「何か、イツ花の知り合いにお医者さんがいるみたいで、良い漢方薬を貰ってくるってさ」
「漢方薬……？　安いものではなかろうに、なぜだ」
「さー、母さん長生きする気なんじゃねーの？」
「ふむ……まぁ、初子は長生きしてほしいな」
それよりさ、と以蔵が話を変える
「その子誰よ」
以蔵が尋ねたのはもちろん、蘭の後ろにいる鈴鹿のことだ
まさかどこかから孤児でも拾ってきたとか、と言う以蔵に、蘭は首を振る
「俺の娘だ」

「はい！？」
「鈴鹿です、よろしくお願いします」
「え、マジで蘭姉の娘さん！？」

生真面目そうな少女を見て、愕然とする以蔵

「蘭姉と交尾するなんて……なんて勇敢な神がいたもんだ」
「……」
以蔵はぺこりと頭を下げる娘に、したり顔で話しかける
「いやでも大変だな、鈴鹿も」
「大変なんですか？」
首をかしげる鈴鹿に、以蔵はうなずく
「ああ、この家は短命、種絶の呪いだけじゃなくてーな、他にももうひとつ呪いを抱えているんだ」
「そんな話、父上からは聞いてませんが」
「いいや、神様たちは知らねーんだ、壬生川（みぶがわ）家の伝統みたいなものだからな」

蘭が見守る中、以蔵は調子に乗ってどんどん続ける

「それはな、年の差は絶対の呪い、ってーヤツだ」
「年の差は絶対の呪い……」
顔をこわばらせて恐怖する鈴鹿
「ああ、コイツは曲者でな、自分の年上の人には何があっても逆らえない、長く生きるまで下が来るまでは、地獄のような日々だ……」
「地獄のような日々……」
鈴鹿が反芻する
「夢姉には玩具にされ、蘭姉には疎まられて、母さんには相手にされず、佐和姉には邪魔者扱いされる始末……」

その場で泣き真似をする以蔵
ここ数ヶ月の鬱憤を晴らすように喋る

「以蔵兄上、可哀想に……」
「しっかーし！」
急に復活する
「そんなオレの位置もきょうまでだ！　これからはその最下層は、鈴鹿が引き継ぐんだ！」
ビシッと指差す

「そ、そんな……私にそんな奴隷なんて大役が、務まるでしょうか……」
わなわなと震える鈴鹿
そこで以蔵は、ん？と我にかえる
「何かこのコおかしくねーか、蘭姉」
ツッコミを放棄して、以蔵の読んでいた年上に好かれる魅力作り！の続きを眺めていた蘭が、顔を上げる
「どうやら……」
と前置きして、話しを続ける
「鈴鹿は、人を疑うということを知らないのか覚えていないのか……バカ正直らしいな」
「ええっ」
あまりにも突拍子も無い話に、引く以蔵

「私はただ……人を疑ってはいけない、と教わっただけです」
「しかし、限度というモノがあるだろう」
「誰とでも拳を交わえば分かり合える、と父上は申しておりました」

お前は壬生川家全員と拳を交えるつもりか、と以蔵が思う

「これは、佐和姉や夢姉には会わせないほうが良いんじゃねーか、蘭姉」
「……むしろ、お前にも会わせたくなかったなと、今思ったが」
やはり鈴鹿の面倒は初子に見てもらおう、と誓う蘭であった

第三話－１０　「懺悔」　１０２１年４月後編

蘭（らん）の鈴鹿（すずか）箱入り計画は頭から崩れた
「蘭さん、準備整いましたかぁ？」
「……ああ」
衣裳室から出てくる蘭
当然というか何と言うか、今月も出陣はあるのだ

＜出陣＞

「それじゃ、鈴ちゃんはウチが預かった！」
後ろからがばっと鈴鹿を抱きとめる佐和（さわ）
玄関に立つのは、初子（はつこ）、蘭、夢見（ゆめみ）、以蔵（いぞう）の四人
「頼みましたね、佐和お姉さま♪」
「フハハー、返して欲しくば代わりにはっちゃんを置いてけー」
蘭が初子の首根っこを掴んで引っ張ってゆく
「要らん」

「ああっ」
佐和が名残惜しそうな声を上げる

「それでは、行ってらっしゃいませ」
恭しく礼する鈴鹿に、以蔵や夢見が手を振る

＜九重楼（くじゅうろう）＞

壬生川（みぶがわ）家は、慣れた九重楼を上へ上へと登ってゆく
七天斎八起（しちてんさいはっき）も開放したため、道を阻む敵は居ず、順調に奉納点を稼いでゆく

「今頃……」
戦いの合間、初子がふっと顔から力を抜く
「佐和お姉さまは、何を考えていらっしゃるんでしょうねぇ……」
「……何故、佐和の話題が」
蘭は不満そうな顔で尋ねる

「鈴鹿ちゃんがいて良かったです」
「……待て、何の話だ」
「わたしだったら、大事な時間を一人で屋敷で過ごすなんて、とっても耐え切れないと思いますから……」
初子らしくない薄い表情に、蘭は違和感を覚える
「ちょっと待て、それでは……まるで」
蘭の脳裏に、佐和の笑顔が思い浮かぶ

佐和は今月で、1才7ヶ月になるのだ

「わたしもお父様のように、最期は戦場で過ごしたいです」
そう言って初子は、着物の裾を払って立ち上がった
「母さん、なかなか拳法家の指南書出ねーよー」
「ユメ、もうくたくたですぅ～……」
「えー、九重楼にあるって都の人が言ってたもんー」
子らに振り返る初子
その表情は、すっかりいつもの当主・初子のものへと戻っていた

その後壬生川家は、一ヶ月九重楼で善戦を続けるも、結局目的の指南書は出ないままであった

＜壬生川家＞

戻ってきた初子を迎えたのは、曇った表情のイツ花だった

「当主さま、あの」

「覚悟は出来ております」

初子はイツ花のその顔で、全てを察する

「……命の炎が燃え尽きようとされている方がいらっしゃいます」

目を閉じて歯を食いしばる初子

足にしっかり力を込めないと、崩れてしまいそうな身体を支える

「お気を強く持ってこちらへ」

「……はい」

＜佐和の部屋＞

「ママ！」

「佐和姉！」

戦場から帰ってきた家族が、佐和の部屋を訪れる
「オー、オカエリぃ」
布団に横になったままニコリと笑う佐和
隣で看病していた鈴鹿がぺこりと頭を下げて、退室してゆく
「イヤァ、鈴ちゃんは飲み込みが早いネ、良い術師になるヨ」
「……そうか」
「佐和お姉さま……そんな、最後まで」

夢見が佐和にすがって、ママ大丈夫ママ大丈夫？と何度も尋ねる

「いや何か、もうダメみたいダワ」
「そんな……」
「ユメはあんまりワガママ言って、はっちゃん困らせるんじゃないゾ」
そう言って、佐和は夢見の頭を撫でようとするが、腕に力が入らなくて撫でられなかった
そんな力ない佐和を見て、蘭が目を伏せる
「……いつも騒がしくて、鬱陶しい女だと思っていたのだがな」
「ウチ自身もこんな日が来るなんて、思ってなかったヨ」

ハハハ……と笑う

「こんなに若くてお綺麗なままなのに……」
「……何か遺言があるなら、聞いてやるぞ」
蘭が同じ人を好きになったよしみとばかりに、佐和に尋ねる

「……はっちゃんの全てが欲しイ」
「他の遺言にしろ」
死にゆく人に対しても、キッパリと断る蘭
「もう、何を言っているんですかこんなときに……」

「じゃあ済まナイケド、はっちゃんと二人きりにさせてチョーダイ」
蘭を見上げて、そうつぶやく
「……変なことをするなよ」
佐和にすがって泣く夢見を立ち上がらせて、以蔵と共に部屋を出る蘭

初子は立ち上がって、佐和の枕元に座り直す
「ネー……はっちゃん」
「はい……」
佐和が勇気を出して、初子を見つめる
「あの、その……お願いが、あるんダケド……」
「わたしにできることでしたら、なんでも」
「いやあ、でもナア……うーん……」
この期に及んで逡巡する佐和

顔色が悪いのに、潤んだ瞳で上目遣いにちらちらと初子を覗く
その姿は、まるで恋する童女のようだった

「あの、あのネ……もしかして、もしかしてだけど……はっちゃんが、ウチのことを、忘れないようにって、サ……」
「そんな、忘れるだなんて」
「モシモの話だから、ね、それで……」
そこで咳き込む佐和
「お姉さまっ」
「だ、ダイジョウブ、まだ平気……それで、その」
あれほど普段、自由でいた佐和がここまでためらうことなんて
初子は佐和のお願いを待つ
「い、一度でいいからその……ウチに」
下唇を噛み、目を閉じて、佐和が言った

「あの……ウチに、口付け、してもらってもイイ……？」

言ってしまった直後に、佐和がかぶりを振った

「あ、いや、ソノ、コレは変な意味じゃなくて……あくまでも、その、思い出ってコトで……」

慌てて言葉を続ける

「べ、別にウチそういうんじゃなくて、そういうんじゃないけど、はっちゃんも、多分そういうんじゃないって知っているケド……その……」

「お姉さま」

初子の真剣な瞳が近づいてくる

「……は、はっちゃん、その」

少し暗い部屋で、初子と佐和の影が一瞬だけ重なる

部屋の前で待っているであろう蘭たちに聞こえないように、佐和はう～～、と唸る

「こんなに簡単だったナラ……もっと前から、頻繁におねだりしておけば良かった……すっごい後悔ダ」

「そんなことしたら……照れて、翌日なんてまともに顔見られませんよ……」

口元を押さえながら、初子がつぶやく

「……蘭ちゃんにはナイショだからネ」

「言えませんってば……」

うふふぅと漏らす佐和

「ウチホント、はっちゃんと同じ年代に生まれて……ホント感謝ダ

ヨ」
「佐和お姉さま……」
初子は枕元に座って、佐和の手を握る
「……ごめんなさい、こういう大事な時に、何て言えば良いか分からなくて……」
生まれた時からずっと傍にいた親友との別れ
初子は佐和の手をさすって、必死に涙をこらえていた

「お母さんとか、幸四郎オジサンは、死ぬ前に笑ってたんだヨネ」
佐和はそんな初子を、ずっと見つめていた
「ウチも死ぬ前になれば、そんな気持ちになるのかナ……って、思ってて……でも」
佐和の息が細くなってきた
初子はまるで引き止めるように、佐和の手を強く握り締める

「でも……全然分からないよ、ウチ」
佐和の大きな瞳から、涙がこぼれた
「格好悪くて、無様だけど……分かんない、死にたくナイよぉ」
「佐和お姉さま……そんな、格好悪くなんて無いです……」
精一杯最後まで生を願う人を、そんな風に言える人なんているはずがない
「……ウチ、死にたくない……死にたくない、いきたくないよ……はっちゃん……」
ノドを震わせて、かすれ声を上げる
「こわいよ……こわいよ、もっと壬生川家にいたいよ……はっちゃんたちと、あそびたい……あそびたい……」

段々とその声が、小さくなってゆく
佐和の手首から、力が抜けてゆく

「はっちゃん……だいすき……もっと、もっといっしょにいたかった……だいすき……」

「わたしも……佐和お姉さまのこと、大好きです……」
初子が、佐和の手をさする
ほとんど聞き取れないほどの声で、佐和がつぶやく
「はっちゃん……」

こうして佐和は、淡く恋心を抱いていた人に看取られて、この世を去った
無念をその身に抱えて……

佐和の手を握ったまま、初子は泣いた
想いは言葉にならず、感情は涙となって溢れた

大好きだったのに救えなかった、初子はそう言いながら泣き続けた

壬生川　佐和　享年1才7ヶ月

「ウチのてをしっかりにぎってて……からだが、どこかへ……とんで、いきそうなの……」

こうして初子は一家の最年長になり、
少しだけ、大人になった

第三話－１０　「懺悔」　１０２１年４月後編（後書き）

出陣・九重楼（初子、蘭、夢見、以蔵）
鈴鹿↓薙刀士・初見　訓練・佐和↓鈴鹿　老死・佐和

第三話－11　「婿探」　1021年5月（前書き）

初子　1才4ヶ月
蘭　11ヶ月
夢見　8ヶ月
以蔵　5ヶ月
鈴鹿　1ヶ月

第三話－１１　「婿探」　１０２１年５月

佐和が亡くなった翌月、落ち込んでいた夢見も初子の元に引き取られ、
壬生川家は、代わり映えのない平安な日々を送っていた

「アレ、元服の儀？」
「はい、たった今終わりましたァ」
寝坊した以蔵が居間を訪れたとき、後片付けをしているイツ花と出会った
「今月誰か元服したの？」
あれと首を傾げる
「何をおっしゃってるんですかァ、以蔵さま」
軽く笑いながら、イツ花は片付けを終えて去ってゆく

取り残された以蔵は、腕を組んだ
オレはまだだし、蘭姉はこの前やったしなぁ、と考え込む

唐突に、以蔵の視界が柔らかなものによって塞がれた
「だ～れだぁ～」
「……お前、いくらなんでも同じ家で暮らしていて、間違えねーよ」
以蔵は顔に当てられた手を外しつつ、振り返る
「まったく、白波河太郎の親父だろ」
「家に居ないですぅ！」
そこには夢見が髪を結って、藍色の儀礼服を身にまとっていた

「何だか、テンション高いな夢姉」
「ふっふぅん～」
その場でくるりと回って見せる
「どーした」
「きょうのユメ、何だかオトナっぽいと思いませんかぁ？」
以蔵は真顔になって、考え込む
「……すまん、時間をくれ」
「え～」
「来月までには考えておくから、な」
「長すぎますぅ！」
夢見がポカリと以蔵の頭を叩く
いつもと違ったノリの良さに、違和感を覚える以蔵

「……何か、機嫌が良いな夢姉」
「そりゃぁ、元服したんですものぅ～」
「なッ――」
以蔵は絶句した後、何かに気づいたように指折り数える
「ってことは夢姉……蘭姉と、3ヶ月しか年が変わらねーのか！」
「そっちにビックリするんですかぁ！？」

現在、蘭11ヶ月、夢見8ヵ月、以蔵5ヶ月である

「信じられねぇ……こんなにちっこいのに」
夢見の頭に手を置く以蔵、三つの血筋で一番背丈が小さい家系の以蔵だが、すでに夢見を越えている
「ふふぅん、もうユメちゃん交神だってできるんですからぁ～」
「カッパと？」
「しませぇん！」
ぼす！と以蔵の腹を強打する夢見
「もぅ、最近いっくんナマイキですぅ」

夢見がぷんすか怒りながら部屋を出てゆく中、その場に崩れ落ちた以蔵が腹を押さえてうめき声をあげる

「……訓練はサボりまくりのくせに……良いパンチじゃねーか」

調子に乗ってからかいすぎた以蔵に、訪れた罰

以蔵はその後、初子が出陣を誘うまで、床を転がり続けたという

＜出陣＞

「それじゃぁ、出陣しましょうー♪」

元気よく手を挙げる初子に夢見と、やる気のない以蔵

「あれぇ、どうしたんですかぁ、いっくん～？」

「腹が痛いんだが……」

つーかいっくん言うなよ、と続ける

「痛いの痛いのとんでけー？」

「いやそんな笑顔より、もっと実益のある＜お零＞とかが……」

こんな能天気な母親から、どうして自分のような枯れた息子が生まれたのか、未だに理解できない以蔵

「あれぇ、蘭さまはお出かけなさらないんですかぁ？」

夢見は、土間にいる蘭と鈴鹿に首を傾げる

「……今月は、俺は出陣せずに鈴鹿を訓練する」

以蔵がぽつりと、あんなに戦大好きな蘭姉が、とつぶやく

「……鈴鹿（すずか）に訓練できるのは今月で終わりだからな」

「つまり、今月を逃すともう奥義が伝承できないんですねぇ」
「……初子には通用しなかった技だがな」
蘭は拗ねたようにそっぽを向く

鈴鹿が蘭の袖を引っ張って尋ねる
「母上は、当主さまより弱いんですか？」
「……」
思わず沈黙する蘭

「でも、そんな蘭姉も、オレたちよりはずっと強いけどな」
「ですぅ」
図式に表すと、初子＞蘭＞夢見≧以蔵という形だろう

「ううん、いっくんも夢見ちゃんも、最近めっきり強くなっているじゃないですか♪」
幸四郎が亡くなって以来、壬生川家最強の座を守り続けている初子が謙遜する
「まー夢姉からは一本取れるようになったしな」
「ユメはぁ、武道なんて野蛮なことしませんもぉん～」
「じゃ、どーするんだよ」
こんな壬生川家で、とつい口走りそうになる

「ユメ、子供を産んで、引退しますぅ！」
小さな握り拳を天に掲げる夢見
「え、えーっと、あはは……」
初子が困ったように微笑む
「よしじゃー、旦那さんでも探しに行くか、夢姉」
「え、京の都ですかぁ！？」
宝石のようなキラキラした瞳で、以蔵を見つめる、が
「いや九重楼（くじゅうろう）」

「いやぁぁぁぁ～～、そんなところにユメの未来の旦那さまはいませぇぇぇん～～～～」

蘭と鈴鹿のお見送りを背中に受けながら、夢見を引っ張って、初子と以蔵は出陣したのだった

＜九重楼＞

「しくしくしくしく……」
「ほらほら、いつまで泣いているんですか」
初子が少女を宥める中、かたや以蔵はさっさと先に行ってしまう
「お」
何かを発見したように、振り向く
「おーい、夢姉、未来の旦那さま発見したーぞ」
「ぐすっ……ど、どれですかぁ？」
「コレ」

紅こべ大将を夢見の前に突き出す

「はひぃぃぃぃぃぃ！？」
大慌てながらも、バスバス、と至近距離から矢を連射する夢見
「あーあ、旦那さま穴だらけで昇天、ひでーな、ドメスティックバイオレンスだよ」
「ど、どっちがひどいんですかぁ、うわぁぁん初子さまぁぁぁぁ！」

ビックリしたためか、当主の胸に飛び込んでわんわん泣き出してしまう

「もぅ……いっくん、あんまり意地悪しないのー」
相変わらず怒っているんだか怒っていないんだか分からない初子のふくれっ面に睨まれて、以蔵はむむぅとつぶやく
「朝の仕返しのつもりだったんだけど、何かこれ以上やると、嫌われちまいそーだな……」
「いっくんなんてぇ～、き～らい～ですぅ～～」

お世話にも、後ろから援護射撃が飛んでくる

「むぅ」
「まったくもぅ、ケンカするほど仲が良い、もほどほどにするんですよ二人とも」
初子に撫で撫でされながらも、夢見は仲良し違いますぅ～～と首を振る
以蔵が少し離れて、やりすぎちまったかな、と思いながら先に進む
「……ん」
と、先ほど以蔵の倒した鬼から、淡い光がにじみ出てきて……

「オイ、夢姉」
「なんですかぁー」
「本当に、お前の未来の旦那さまが出てきたかもしれねーぞ」
「ふぇ……」

巨大な妖怪の身体の中から、神気が発せられ、神々しい御姿が浮かび上がる

○○「助かったぞ、人の子らよ……！」

その光は天に昇り、そして火の粉を振りまいて見えなくなった

「未来の、旦那さまぁ……？」

ぽーっとした表情で夢見が、小さくつぶやいた

その後三人は九重楼を上へ上へと登り、大量の奉納点（ほうのうてん）を手土産に、

壬生川家へ帰還したという

第三話－１１　「婿探」　１０２１年５月（後書き）

元服→夢見　出陣・九重楼（初子、夢見、以蔵）　訓練・蘭→鈴鹿

第三話－12　「空嘘」　1021年6月（前書き）

初子　1才5ヶ月
蘭　1才
夢見　9ヶ月
以蔵　6ヶ月
鈴鹿　2ヶ月

第三話－１２　「空嘘」　１０２１年６月

以蔵（いぞう）がブラブラしていると、居間で術のお勉強をしている鈴鹿（すずか）が目に入った

「きょうは蘭（らん）姉と一緒じゃないのか」
「母上なら、稽古場で当主さまと一緒のはずです」
そう言って鈴鹿は、再び＜お雫＞の術書へと目を落とす

以蔵は、そういえば夢姉は今月交神の儀だった、と思い出す
暇つぶしにでもなるかな、と以蔵は鈴鹿に声をかけた

「そういえば鈴鹿、知っているか？」
唐突に告げる
「はい？」
「蘭姉って、男なんだぞ」
「そうなんですか！？」

すごい勢いで食いつかれた
ちょっと引く以蔵

「あ、ああ、だからほら、うちの母さんのことが好きなんだよな」
「なるほど……それは、気づきませんでした」
あんなに女性用のお着物が似合ってらっしゃるのに……とつぶやく鈴鹿

「あんなに腕っぷしが強いのも、納得だよな、うん」

「え、でも、当主さまの方が強いんですよね？」
「ああ、母さんはイカ人間だからな」
「イカ人間だったんですか！？」

信じるのかよ、と思いつつも続ける以蔵

「槍で突くときに、間接を外して微妙に距離を伸ばしたり、イカみたいに身体を和らげて遠心力をつけて威力を倍増させたりするんだ」
「すごい……それも、魚介類の力なんですね」
「ああ、ピンチになると二本のお下げからスミを吐くからな」

もはや止まらない以蔵

「そんな人のお子様なんですね、以蔵さま」
「……」
思わず黙る以蔵
すなわちイカ人間とカッパの混血、以蔵
「ま、だからこの家でマトモに強くなろーなんて、バカらしいってことさ」
「な、なるほど……」
「蘭姉は男で、母さんはイカ人間だしな」
「凄いですね……あ、母上、当主さま」

以蔵の動きが硬直する

後ろから、何か、強烈なオーラを感じて、冷汗がだらだらと流れる
「……男、か」
以蔵の右腕が万力のような力で掴まれる
「うふふ、イカ人間、ですかぁ」
以蔵の左腕が鎖で締め付けられるように、握られる

「まぁ何だ、鈴鹿……今のは全部ウソだから、信じるなよ……は、ハハ……」

蘭と初子の、稽古しましょ稽古しましょの掛け声に引きずられて、以蔵はどこかへと連れて行かれていった

「……？　ウソ？」

きょとんとした鈴鹿を置いて

＜交神（こうしん）の儀＞

「それでは、張り切って参りましょー」

今月は夢見（ゆめみ）の交神の儀である

「あのぉ、イツ花（いつか）さぁん」

もじもじして、照れながら夢見がイツ花を上目がちに見つめる

「はいはい、神様表はここにキッチリ用意してますよォ」

「先月ぅ、九重楼（くじゅうろう）から開放された神様って、ご存知ですかぁ……？」

「あー、えっと待ってくださいネェ」

ぺらぺらとメニューをめくるイツ花が、新、と振ってある神様を発見する

「居ました居ました、ひとつめ入道から開放されたタタラ陣内さまですネ！」

「タタラ陣内さま……」

ぽーと熱い瞳で天井を見つめる夢見
「あ、あの、どうしましたァ？」

「そ、その方でお願いしますですぅ！」
「ちょっと奉納点が低い神様ですケド、よろしいんですか？」
「運命の人なんですぅ、構いませぇん！」
勢いに押されて、思わず頷くイツ花

「で、ではお呼びしますね」

タタラ陣内「俺を選ぶとは、見る眼があるぞ」

～～

やがて夜も更け、交神の儀が終わり……

「あの……タタラ陣内さまぁ？」
「……何だ、人の子よ」
「あの、あの……ユメを、タタラ陣内さまの奥様にしてもらえませんかぁ……？」
「……そうだな、お前が朱点童子を倒せば、考えてやろう」
「……約束、ですよぉ……」

その後、ぽーっとした夢見が部屋に戻ろうとして、
ボロ雑巾のように廊下に倒れていた以蔵を思わず踏みつけたのは、

関係のない話

第三話－１２　「空嘘」　１０２１年６月（後書き）

交神の儀・夢見×タタラ陣内

第三話－１３　「身重」　１０２１年７月（前書き）

初子　　１才６ヶ月
蘭　　１才１ヶ月
夢見　　１０ヶ月
以蔵　　７ヶ月
鈴鹿　　３ヶ月

第三話－１３　「身重」　１０２１年７月

夏の暑さにも負けない活発な少女が、壬生川（みぶがわ）家を駆け回っていた

「……出陣の準備は整ったか？」

分厚い袴を着ていながら、汗ひとつかいていない涼しげな表情で、部屋を巡る

寒さに弱く、暑さに滅法強い、爬虫類系少女こと蘭（らん）だ

「蘭姉、みんな整ったら起こしてくれぃ……」

一方、夏バテの代わりに１年中バテている風貌の以蔵（いぞう）が、居間の机に寄りかかって居眠りを始める

「……出陣前に眠れるとは、図太いのか、バカなだけか」

「……いや一応、まだ聞こえてっから」

以蔵のつぶやきは気にせず、初子（はつこ）の部屋に向かう蘭

「……整ったか、初子」

障子をがらりと開ける

「あ、ちょ、ちょっと待って」

丁度下着姿でさらしを身体に巻きつけている初子がチラと見えた

「……細いな」

「な、なんですか」

なめらかな背中を向けつつ、初子は顔だけ振り返って尋ねる

その頬がわずかに紅潮している

「いや……その身体から、どうしてあんな力が出るのか、と思って

な」
「だ、だからって着替え中にマジマジと見つめなくても！」
「……ほら、出陣の時間だ、早く着替えろ」
「じゃあ閉めてくださいっ」
分かった……と、しぶしぶと障子を閉める蘭
「……何故、女同士なのに照れるのだろうな」
誰かがその場にいたなら、なぜ女同士なのに蘭の顔が赤いのかと、問い詰めていただろう

それはそうとして、最後に夢見の部屋に向かう蘭
「……夢見（ゆめみ）、出陣だ」

相変わらずの無表情の蘭の顔が、障子を開けた途端にポカンと呆ける
夢見が布団に寝転んでいた、大きなお腹を抱えて

「あ、蘭さまぁ」
「……夢見、それは何の真似だ？」
「うふふぅ～、ユメぇ、ママになるんですぅ～」
自分の膨らんだお腹を撫でて、幸せそうに微笑む夢見
「ほらぁ、先月交神（こうしん）の儀をしちゃいましてぇ……えへへぇ～」
「……ふむ、では出陣はどうする」
「あんまり動くとぉ、ユメ、子供のために悪いですかｒ――」

蘭は持っていた薙刀で、夢見の腹を一閃する

「はひぃいいいいいっぃ！？」
夢見の膨らんだお腹の切れ目から、羽毛が溢れる

鳥の羽だらけになった夢見の部屋で、蘭が憮然とした表情でつぶやく
「これで戦場に出られるな」

「ひぃぃぃ……」
「……まったく、腹に布団を丸めていれて、何をしている」
「うぅぅ～～……」

その場でぐずぐずと泣き出す夢見に、蘭はため息をつく、と

「ちょっと、蘭さん何をしているんですかっ」
慌てて着物を身なりを整えたためか、珍しく髪を下ろした初子が蘭に駆け寄る
厄介なところを見つかってしまった、と蘭はチッと舌打ちする
「ちょっと、何ですかこの部屋……鳥……？」
「……ああ、サギが１００羽ほど来て、夢見の部屋で暴れていたから、薙刀で追い払ったのだ」
「うわぁ、それは大変でしたねぇ……ってそんなわけないじゃないですか！」

見事なノリツッコミを披露しつつ、夢見に駆け寄る初子

「ユメちゃん……普通の女の子になりたかったんですぅ……」
「夢見ちゃん……」
ぐすぐすと布団の中で泣く夢見に、初子が悲しそうな表情を見せる
戦いが得意ではない夢見にとっては、子供も産めず、好きでこんなところに生まれついたわけではない、ということだろう

横から蘭が告げる
「……無理だ、諦めろ」

「ら、蘭さん！」
「この家で戦いたくないと言うなら、死ぬしかない……他に生きる道はない、なんだ初子」
「だからって、言い方ってものがあるでしょう！」

うっ、と引く蘭
徐々に怒気を宿してきた初子の闘気に、部屋の羽毛がぱらぱらと舞う

「……だからと言っても、俺の言い分が間違っているわけではあるまい」
少し揺れた声色で弁解する
初子を怒らせるのは色々な意味で怖い
「蘭さんの意見は正しすぎるんです、それ以外の意見を封じ込めちゃいます」
初子は夢見を抱きしめながら、優しい声で慰める
「ほらもう、こんなに怯えて……」

（……何故、俺が悪いみたいな雰囲気になっているんだ）

出陣をサボろうとしていた夢見が初子に慰められ、かたや蘭は初子に睨まれる立場になってしまっている
「そんなやり方じゃ、四代目当主なんてあげられません、まだ以蔵のが頼りになりそうですもん」

「……な」
その言葉には、さすがに絶句する
（俺の何が悪いというのだ……）
理不尽に感じる
各人の嗜好を尊重したからと言って、身体能力や術の威力が急に

伸びるわけでもあるまいに

「分かりました、夢見ちゃんは今月お休みしましょうね」
「初子さまぁ……」
「初子……」
ぽんと手を叩いて、蘭に振り返る初子
「そうだ、代わりに鈴鹿（すずか）ちゃんを連れて行きましょう？　今月から実戦部隊に入りましたもんね」

つまり、初子、蘭、以蔵、鈴鹿での四人部隊ということになる

「……それは、甘やかしているだけじゃないのか？」
「自分の人生くらい、自分で歩み方を決めてもらいたいです」
蘭の非難する視線を、初子は真っ向から受け止める
「良いじゃないですか、戦わなくたって、夢見ちゃんの人生ですもん」
部屋に散らばった羽毛を集めながら、初子ははっきりと言う

「……初子のそういう甘いところは、俺は好きだが、やはり嫌いだ」
蘭はそう残して、鈴鹿を呼びに自分の部屋へと戻っていった

＜出陣・白骨城（はっこつじょう）＞

というわけで、やってきました白骨城

「夏だけにしか出ない、幻の城なんだぞ鈴鹿」
「へー、不思議ですね……」

鈴鹿を引き連れた以蔵に叱責する蘭
「……以蔵、毎度毎度ウソを教えるんじゃないぞ」
「これはホントのことじゃねーか！」

その二人の間で鈴鹿は、え、ウソなの？　と挟まれる

「さぁさぁ、行きましょうー♪」
ズンズンと進んでいく初子の後を追う三人
「鈴鹿は初出陣だからなー、オレらの後ろで引っ込んでるんだぞ」
「はい」
生真面目な顔で頷いて、後方から＜泉源氏＞で援護する鈴鹿
「いやだからって、たまには薙刀で攻撃しても」
「はい」
3回泉源氏の後、1回攻撃という、まるで機械のような正確さで戦う鈴鹿
「……ま、まーいいが」

鈴鹿の動きは悪くないのだが、身近で蘭と初子という熟練者を見て育った以蔵にとっては、将来有望なのかどうなのか今ひとつ分からない

「鈴鹿のキレってどーなの」
蘭に聞いてみた
「……今の初子には遠く及ばないな」
「いや当たり前だから」

アンタは母さんしか見てないのか、と思わず言いそうになる

「じゃあ母さん、鈴鹿の動きってどーなの」

今度は前線をゆく母親に聞いてみる
「あ、見てなかった」
どうしようこの家族、と以蔵はふいに不安になるのであった

かたや戦績の方は、初子・蘭タッグにより、恨み足と左右のカイナを撃破し、
白骨城の１７階まで登ったところで、今月の進撃は終了したという

第三話－１３　「身重」　１０２１年７月（後書き）

出陣・白骨城（初子、蘭、以蔵、鈴鹿）

第三話－１４　「次期」　１０２１年８月（前書き）

初子　１才７ヶ月

蘭　１才２ヶ月

夢見　１１ヶ月

以蔵　８ヶ月

鈴鹿　４ヶ月

第三話－１４　「次期」　１０２１年８月

＜夢見（ゆめみ）の子＞

そわそわしながら待つ夢見の元に、ニコニコ笑顔のイツ花（いつか）が現れる

「タタラ陣内さまより新しいご家族を預かって参りました！」

「わ～ぃわ～ぃですぅ～」

夢見が待ち望んだ自分の子だ

「おめでとうございます！　男のお子様ですよ！」

「男の子ぉ、やりましたですぅ～～」

手を叩いて喜ぶ

「あらァ、夢見さまは男の方が良かったんですか？」

「はいですぅ、だってぇ、女の子に女親だとあんまり言うこと聞いてくれないかもしれないじゃないですかぁ」

親が夢見ならどっちでも同じだろ、と以蔵がいたなら言ったかもしれない

「口元が母君にソックリなんですネェ、それではお呼びいたしますよー」

がらりと障子を開けて入ってきたのは、派手な赤い髪に白い肌の少年だった

鼻の上に大きな傷のようなアザがあり、どことなく不敵な面構えをしている

○「初めましてお母さん！　よろしくっす！」

名前は門司（もんじ）、のの香（ののか）から代々続く弓使いの家系に生まれた初の男子だ

「よろしくですぅ、門ちゃん～」

「俺っち、お母さんの力になれるよう、頑張るよ！」

「え～、別に力にならなくても良いですぅ～」

「へ」

ニコニコと微笑む夢見に、気の抜けた顔を見せる門司

「ユメ、自分の子供が出来ただけで、十分幸せですぅ～」

「は、はぁ？」

小さな門司を抱きしめて、頭をよしよしとする母

「しいて言えばぁ、元気な子でいてほしいですぅ」

「げ、元気な子っすか……そうだ、じゃあ俺っち、特技を披露するよ！」

「わぁ、特技ですかぁ？」

ぱぁっと顔が明るくなる夢見・母子

「あ、ああ！　俺っち人を驚かせるのが大好きで、よく天界でやってて何度も殺されそうになってたんすよ！」

「うわぁすごいすごい、見せて聞かせてぇ～」

何だこのバカ親子は、とでも言いたげなイツ花の冷めた視線も気にせず、盛り上がる二人

「ワハハ、俺っち、実は夢見お母さんの子供じゃないんですよ、お父さんが浮気して別の女にうませｔぐぇ、ちょ、おかあＳ――」

「何ですってぇぇ〜〜〜〜、ユメぇぇ、門司を殺してユメも死にますぅぅぅ〜〜〜〜〜」

夢見が渾身の力で門司の首を絞めるのを、その場に残っていたイツ花が助けを呼び、慌てて駆けつけた鈴鹿（すずか）が夢見を止めたのだった
それ以来、当たり前だが門司にはドッキリ禁止令が出たという

＜以蔵（いぞう）の元服＞

長い後ろ髪を結び直した以蔵が正装で、儀礼の間から退出してくる
誰もいなかった

「いや……予想通りだけどな……」
屋敷を通り抜ける夏風が、以蔵の心の隙間に吹きすさぶ
「何だろうな、オレのこの家での扱いって……」
なまじ当主の息子に生まれてしまったことが、よりいっそう寒風を立てるのかもしれない

思えば幼児の頃から、母を周囲の大人に取られて、遊び道具は槍のみ
唯一の話し相手の夢見は浮かれきった幸せな性格だし、ツッコミ以蔵の枯れっぷりはますます増していったという
そんな、壬生川（みぶがわ）家にしては珍しく消極的な少年、以蔵
あるいは壬生川家に育った男は、皆不幸になるという呪いでもあるのだろうか

以蔵は人知れず、ため息をつく

居間を訪れると、そこには初子（はつこ）、蘭（らん）が難しい顔をして対面していた

「ん……」

またこの前のような言い争いだろうかと思い、早々に立ち去ろうとした以蔵を初子が呼び止める

「そうそう、いっくんこっちこっちー」

「何さ」

初子が座布団を叩いて、以蔵を導く

その軽い口ぶりに、多少安心して輪に入ってゆく

「さ、というわけで、」

押し黙っている蘭の前、何となく気まずさを感じている以蔵の隣で、初子がニッコリと微笑む

「四代目当主でも決めましょうか♪」

「……」

「母さん!?」

明るっ、とツッコミを入れる間もなく、初子はさっさと話を進める

「わたしはお二人の方で、やりたい方がやれば良いと思います」

「……なら、俺がやる」

「早いですね蘭さん」

初子はそれから以蔵に顔を向ける

「いっくんは、どうなのー?」

「……蘭姉がなるんだろ？　じゃあオレは何も言わねーよ」

「そっか、いっくんはやりたくないんだ」

「誰もやりたくねーとは言ってないけど……」

以蔵は蘭の強面な顔を見て、ため息をつく

そんな以蔵の脳裏に、ふいに泣いている夢見が映し出される

（何で、夢姉が……）
戦場に出たくないと、駄々をこねて、いつも笑っていて、変な喋り方で
「……夢姉も、戦に？」
「え？」
「夢姉も、戦に連れて行くのか、蘭姉」
「当然だ」

少しも迷わずに、蘭は言い切る

「……夢見には実力がある、佐和譲りの弓の腕に、その技力だ」
蘭は夢見を嫌っているわけではない、その能力を買っているだけだ
初子や以蔵ほどの矛性能はないが、技力、守りの術は佐和以上の
素質を見せている夢見を、出陣させないのは惜しいと考えているのだ

表情を見せない蘭だが、その分かりやすいほどの実利主義は以蔵にも分かっていた
今年の大江山（おおえやま）はもはや三ヵ月後に迫っている
やってきたばかりの夢見の子供では、経験が豊富な夢見の代わりは務まらない以上、出陣するのは夢見でなくてはならない

理屈では分かっているのに、この胸のモヤモヤは何だろう
「……もーちょっと、時間とかもらえねーかな」
「良いけれどでも、あんまり、ないんだよね」
初子の前には、飲みかけの漢方薬が置いてあった
「母さん……もしかして、身体、」
以蔵を見て初子は、あははと笑った
少年の心に、その笑顔が染み渡る
迷わない蘭や、一生懸命な初子が、羨ましかった

「……そーか」
以蔵は立ち上がって、そのまま部屋を出て行った
今月は夏の選考試合がある、その準備をするために

＜選考試合＞

京の都に行くというのに、夢見は門司の訓練に勤しむと励んでいた
それ自体は大変結構なことなのだが、どうにも夢見の言動なだけに蘭と以蔵は信じ切れなかったが
とはいえ、その申し出をあっさりと受け入れた初子は、蘭、以蔵、鈴鹿の三人と共に選考試合に出場した

壬生川家の出場三度目となる夏の選考大会にて、
初子率いる、剛守の蘭を中心とした壬生川一族は、初めての優勝を遂げたという

春・夏の選考試合連覇により、
ついに壬生川家は、京の都に並ぶ者無しの武勇を手に入れたのであった

第三話－１４　「次期」　１０２１年８月（後書き）

元服→以蔵　出陣・選考試合（初子、蘭、以蔵、鈴鹿）
門司→初見・弓使い　訓練・夢見→門司

第三話－15　「死期」　1021年9月前編（前書き）

初子　1才8ヶ月

蘭　1才3ヶ月

夢見　1才

以蔵　9ヶ月

鈴鹿　5ヶ月

門司　1ヶ月

第三話－１５　「死期」　１０２１年９月前編

幸四郎（こうしろう）が努力の剣士なら、初子（はつこ）は壬生川家槍術の創始者であり、天才だった
２ヶ月になった初子が実戦部隊に入った当時、その突きの速度は父親の幸四郎をすでに超えていたとも言われている

初子の朝は早い
日の登る頃に目を覚まして、井戸水で顔を洗い、同じく早起きのイツ花（いつか）が作る料理のお手伝いをする
それから槍の素振りをして、朝食の完成する時間になったら、皆を起こしに回るのだ
それが初子の日課であったが、この日は一層早く起きてしまった

むっくりと布団から起き上がる
隣には最近めっきり上背がついて、頭を撫でるにも背伸びをしないと届かない以蔵（いぞう）が寝ていた

「……どうしよ」
最近、毎日少しずつ早起きになってきている気がしていたのだが
「……仕方ないなあ」
以蔵を起こさないよう静かに寝巻きを脱いで、洗い立ての稽古着に着替える
そろりそろりと部屋を出て、初子は顔を洗ってから、居間に向かった

誰もいないと思った居間に人の気配があった

「……イツ花さん？」
「あらァ当主さま、お早いですネェ」
微笑むイツ花が、居間の柱を磨いていた
「こんな暗いうちからお掃除なんて、いつ寝ているんですか？」
「巫女ですから、日の出前に起きて、昼子さまにお祈りするんですよォ」
胸を張るイツ花

「それにしては……イツ花さん、よくお昼寝してますよね」
「巫女だって眠くなるんですよッ」
その言い方が面白くて、初子はあははと笑った
「当主さまこそ、どうしたんですかこんな朝早くに？」
「うーん、どうしたんでしょうねぇ」
首をひねる初子が着替えた格好をしているのを見て、イツ花はあーあー、と声を上げる
「ダメですよ当主さま、いい年しておねしょなんてェ」
「し、してませんって！」
間髪入れず叫ぶ初子
「もう……それじゃイツ花さん、からかった罰として、温かい渋茶を淹れてきてくださーい」
「からかったわけじゃないんですケド……」
「本気で言ってたんですか！？」
早朝とは思えない声で突っ込む初子に押されて、イツ花は台所に消えてゆく

まったく……と息をついて、初子は縁側に座り込んだ
明け方の涼気がひんやり心地良くて、つい気持ちが高まってくるとても静かな壬生川家で、初子は空を見上げる
言葉に表せないさまざまな思いが浮かび、消えてゆく

とても綺麗だと思った

白む空に光る星も、朝露に濡れる葉々も、藤のつぼみも、橙色に光る日の出も
いつの間にか茶を載せたお盆を持って傍に来ていたイツ花が、初子に微笑みかける

「当主さまは、ホントに泣き虫ですね」
その時初子は、自分が泣いていることに初めて気づいた

〜〜

また初子は、学問熱心な戦術家でもあった

玄輝（げんき）、幸四郎と続く男系当主が個々の力量を重視した戦法を取っていた事に比べて、女性当主・初子は一家での連携の和を重んじ、特に回復の術を愛していた
彼女自身打たれ強い娘ではないことが、用心の芽を育み、やがて彼女はただのひとりも重傷者を出さない戦い方を体得した

老いるということは、昨日出来たことがきょうは出来なくなる、その繰り返しだ
少しずつ、そうして初子の見ていた人は老いて、亡くなっていった

〜〜

お昼、稽古場で汗を流していた初子の下へ、蘭（らん）が駆け寄る

「初子、先月の選考会で頂戴した１３３２０両の使い道なのだが…」

「はーい？」

「……全額、京の商業に投資しても良いだろうか」

「うん、良いと思いますよー♪」

あまりにも簡単に引き受けられたため蘭はたまに、初子が何も考えてないんじゃないか、と思ってしまう

「……それはそうと、ちゃんと昼の漢方は服用したか？」

「千金人参の粉末なら、いただきましたよー」

あんまり美味しくありませんでしたけど、と舌を出す

「……それならいいがな、四代目当主の件は決まったか？」

「あー、うーん」

槍を持ったまま腕を組む初子

「……やはり初子も人の親、自分の息子を当主にしたいと思うか？」

「いえ、それは全然」

キッパリと否定する

「でもいっくんは、ああ見えてみんなのことをちゃんと考えてくれてますから」

蘭の印象では以蔵は、何を考えているのか分からない地味な少年、としか思ってなかったのだが

「ふむ……では初子、あの時の賭けはまだ有効か？」

「賭けって、当主のことですか？」
「無論だ」
蘭は稽古場の壁に立てられている薙刀を取る
「そうですね、丁度良い機会ですし、構いませんよ」
初子はニッコリと笑って、槍を構え直す

蘭は初子に対峙して、その力量に改めて驚嘆する
１才８ヵ月という高齢でありながら、その覇気に衰えはなく、未だに蘭を圧倒している
「道場を壊したら、またイツ花さんに泣かれちゃいますね」
半身に構えた初子が、冗談っぽくつぶやく
「……行くぞ」
蘭は薙刀を振り回し、けん制に払う

絶え間ない蘭の薙刀を槍で押さえ、後退しながら避ける初子
上段に構え、蘭は裂帛の気合と共に初子の肩に打ち下ろす
「……ハァ！」

初段を受け止められ、翻す二段目――
初子の手から、槍が跳ね飛ばされていた

「あ……」
初子は困惑したようにつぶやく

蘭は初子に突きつけていた薙刀を、無言で下ろした
「あはは、負けちゃいましたね……」
「……初子は稽古の後だからな、疲れていたのだろう」

薙刀を床に放り投げて、蘭は道場から退出してゆく
初めての勝利だというのに、少しも嬉しくなかった

何故こんなにも苦いのか、蘭は自分でもその理由は分からなかった

残された初子は道場に寝そべって、天井を仰ぎ見た
稽古場はとても静かだ
最近自分が早起きになってきたのは、とても綺麗な朝焼けを一日でも多く見たかったからだった、と初子はようやく気づいた
以蔵が出陣の呼びかけに来るまで、初子はそのまま寝転んで、天井を見上げていた

第三話－１６　「志貴」　１０２１年９月後編

＜相翼院（そうよくいん）＞

「さ、それでは参りましょう♪」
蘭（らん）、以蔵（いぞう）、鈴鹿（すずか）を引き連れて槍を掲げる初子（はつこ）

「つーか、母さん身体大丈夫なのか？」
「うん、漢方薬も飲んだし、バッチリ！」
「本当かよ……」

そのＶサインが何よりも信じられない、とでも言いたそうな以蔵

「え、じゃあウソ」
「ウソ！？」
あははーと笑う初子の横、鈴鹿が心配そうに見つめる
「でも、先月より動きが僅かですが、鈍ってます」
「……お前の目には、スカウターでもついているのか」
カラクリ鈴鹿を見て腕を組む蘭
「いえ、付いてません」
「見れば分かるから」

そんな光景を眺めて明るく笑う初子を、蘭も気遣う

「初子……体調が悪いなら、今月の出陣はこれまでにしても」
「わたし今朝ね、夢見ちゃんと、もしわたしたちが壬生川（みぶがわ）家に生ま

れてなかったらどうしたかな、って話してたんですよ」
先に進んでゆく以蔵と鈴鹿を眺めながら、初子は蘭に語る
「そうして考えたのが、わたし、夢見ちゃんと違って、京の町でやりたいことが何もなかったんです」
「……」
槍に体重を預けて続ける初子の声に、静かに蘭は耳を傾ける
「わたしはやっぱり、鬼を斬って生きていたかったんです、だから、最期の時も父と同じように、戦場に向かいたかったんです」
初子は蘭に微笑みかける
「相翼院に向かったのも父の倒れた場所で、これってやっぱり公私混同ですよね？」
「……そうだな」

蘭は遠くを見つめたまま、ふと漏らす
初子はきっと、その目は幸四郎（こうしろう）の面影を探しているのだと思った

「……佐和や夢見がお前を慕った理由が、今、初めて実感として理解できたよ」
「ふぇ」
「……何のことはない、お前は今まで……俺よりずっと難しい道を選んできたのだな、勝てなかったわけだ」
「勝てなかったって、一本取ったじゃないですかぁー」

悔しいのか、口を尖らせる初子に蘭が笑う

「今度は健康度が万全のときに、また一勝負な」
そう言って、蘭は以蔵や鈴鹿の様子を見に、駆けてゆく

その背中を見つめながら、初子は気丈に微笑んだ
「その約束は、守れそうにないですけどね」

その後壬生川家は相翼院で一ヶ月戦い抜き、鈴鹿と以蔵は、母親たちに匹敵するほどの実力を身につけてゆくこととなる……

＜壬生川家＞

「当主さま、お帰りなさい」

帰るなり、イツ花（いつか）がにっこりと初子たちを出迎えてくれた

「ただいま、イツ花さん」

以蔵があー疲れた……とつぶやき、鈴鹿が蘭に連れられてゆく、きっと戦場での汚れを取りに湯浴びにゆくのだろう

「ってあのォ、当主さま、ちょっとお顔の色が……？」

「嫌ですねぇ」

自分で可笑しくなって、つい微笑む

「いくらお勉強したからって、自分の事まで当たらなくても良いのに」

「当主さま……当主さま！」

初子はその場に倒れこみ、屋敷にはイツ花の悲痛な声が響いた

＜初子の部屋＞

「最期には、雪が見たかったですね……」
布団に横になりながら、初子がつぶやいた
「雪……ですかぁ？」
交代で看病していた夢見が、その声を拾う
「ええ、雪……わたしが壬生川家に来たときに初雪が降っていて、だからわたし、初子って言うんですよ」
「雪……」
「あーあ……あとたった3ヶ月だったんですけどね」
あはは、と微笑む初子の顔は青ざめていて、夢見にはその笑顔が痛々しかった
「初子さまぁ……」
「どうしたの、夢見ちゃん」
夢見は初子の手を握って、涙目で言う
「初子さまぁが居なくなっちゃったら、ユメが壬生川家に居たい理由が、またひとつ無くなっちゃいますぅ……」

元服しても泣き虫な夢見の頭を、初子は静かに撫でる
「門司（もんじ）くんが生まれて、理由がひとつ増えたでしょう？」
初子は子供に言い聞かせるように、優しく語り掛ける
「何事もね、順番なの……だから、これで良いの」
泣く夢見の頭を撫でて、初子は微笑んだ
それから間もなく、初子は少しの眠りに落ちていった

初子が次に起きたとき、部屋にはイツ花が待っていた

「当主さま、お目覚めですか……？」

「うん、おはよう……？」
部屋が暗い、夜になっているようだ
「当主様、お別れのときが近いようです……」
「みたいですねぇ……」

夜明けまで生きていたいと思ったけれど、それまで起きていられる自信はあまりなかった

「最後のお務め、新当主ご指名の任、責任をもって全うなさいませ」
「……壬生川家四代目当主は、蘭さんでお願いします」
「かしこまりました」

初子は安心したように息をつく

「長い間のお務め、ご苦労様でした」
「イツ花さんも、ずっとありがとうございました」
「……これからも近くから一族の行く末を見守っていてくださいませ」

イツ花の声に、初子はにっこりと微笑む

「はい」

初子の目に、光が差し込む
朝になったのだろうか、いやこれは、もっと暖かくて……

声が聞こえる

臥蛇丸（がじゃまる）さん、のの香（ののか）お姉さま、お父さま、巻絵（まきえ）お姉さま、
そして、佐和（さわ）お姉さま……
短い人生を頑張って生きてきたわたしを、祝福してくれているのだろうか

そうだったら、喜んで良いんだよね……、と初子は誰にでもなく尋ねる

６００日の人生において、１３回の戦場に出陣し、
大江山（おおえやま）以降の全ての戦いにおいて、無敗を貫いた稀代の知将が、
そっとまぶたを閉じる

光は天から伸びている
これを辿ってゆけばいいんだね、と初子はつぶやく

冷たい刺すような感覚に、光が遮られた
「雪だぞ！」
以蔵の声だ
初子の手に、とても冷たいモノが押し付けられていた
「い、以蔵さま」

「母さん、雪だ、雪が降ってきたんだよ！」
初子がうっすらと目を開けると、泣いている以蔵の顔と、その後ろに夢見が見えた
「いっくん……」
「なぁ、今年の初雪だよ、気の利かねー神様が頑張った母さんにって、こんなギリギリまで勿体ぶりやがって……畜生」

初子は手に当てられた冷たいモノを握って、頬に持ってゆく

「ああ……」
顔が綻んで、自然と声が出た
「つめたい……」

氷を千切りにした塊を持ったまま、初子は微笑んだ

「ありがとう、いっくん……あなたは、本当に優しい子だったよ……」
自分のために、こんな季節、どこまで行って氷を取ってきたのかあんなに慌てて、大変だったろうに
「母さん、庭にはもっと雪が積もってて……だから、ほら、オレと一緒に、庭に……おい、母さん！」
以蔵が初子の手を握って、怒鳴るように声を上げる

その以蔵の背中を夢見が抱きとめて、「もうやめなよぉ……」と

涙声でつぶやく
「でも……思いつめるところがあるのは、やっぱりわたしに似たのかな……あはは」

初子は最期の間際に、本当に嬉しそうな顔で微笑んでいた

「わたしは幸せだったって……ちゃんと思ってるから平気だよ……」

壬生川　初子　享年1才8ヵ月

その顔はまるで雪のように白く、綺麗だったという

第三話－１６　「志貴」　１０２１年９月後編（後書き）

出陣・相翼院（初子、蘭、以蔵、鈴鹿）
訓練・夢見→門司　老死・初子

第四話－1　「風鈴」　1021年10月（前書き）

蘭　1才4ヶ月
夢見　1才1ヶ月
以蔵　10ヶ月

鈴鹿　6ヶ月
門司　2ヶ月

第四話－1　「風鈴」　１０２１年１０月

以蔵が交神の間に向かおうとしていると、どこかから笑い声が聞こえてきた

「ん……？」

初子が亡くなって以来、少しだけ活気のなくなった我が家で、突き抜けたような明るい声が響く

何だか頭が痛くなってくるが、ちらりと庭に目をやる

「うふふぅ、そ～れぇ～」

「ワハハー、行くぞお母さんー」

１０月だというのに羽子板に興じるバカ親子（夢見と門司）を見て、以蔵は顔を押さえた

「門司は羽子板もお上手ですぅ～」

「俺っち実は、世界羽子板選手権で、優勝したんすよ～、前世だけど～」

「わぁ、門司はすごいですぅ～」

パコーンパコーンという音が響く

テンション高いふたりに突っ込むのも面倒で、以蔵は静かに後ろ手に障子を閉めた

＜交神の儀＞

「それではァ、今月は以蔵さまの交神の儀ということでェ」
「ああ、よろしく頼む」

以蔵の前、ちょこんと鈴鹿（すずか）が座っていた
イツ花（いつか）の頭が、何故、の二文字で埋め尽くされる

「お相手は……鈴鹿さまですか？」
「ちげーよ」
以蔵は鈴鹿の頭にチョップをかます

「……いたい」

本当に思っているのかどうか分からない無表情で、頭を押さえる鈴鹿
「お前、蘭（らん）姉と一緒に京の都の復興手伝いに行ったんじゃなかったのか」
「母上が、心配だから家に居ろ、って言ってました」

俺はそこまで信用されてないのか、と思う

「で、何でこの部屋にいるんだ」
「……交神の儀、ってどんなものなのかな、って」
淡々と喋る鈴鹿に、以蔵は眉をひそめる
「どんなものか、って……お前、交神の儀って何をするのか知らねーのか？」
「はい」

参ったな……、と頭をかく以蔵
どう説明すればいいのか、分からない

「蘭姉は、何か言ってなかったのか？」
「母上は、試練だ、とおっしゃってました」
あの人らしい言い方だ、と思う
「でも夢見さんに聞いたら、お琴と演奏者のお戯れです、とおっしゃりまして」
「……それで、どっちが本当か分からねーから、自分の目で見にきたってことか」
「はい」

以蔵は鈴鹿の頬を引っ張る

「痛いです」
「……じゃあ、いっそオレとするか鈴鹿」
枯れた以蔵の口調に、鈴鹿は、えっ、と珍しい反応を見せる
「初子さんは、交神の儀は好きな人とするものだ……とおっしゃってました」
その頬がぽっと赤くなってゆく

ありえない反応に、以蔵は戸惑ってしまう、ちょっと待て、ちょっと待て鈴鹿

「ですから、以蔵兄上とはちょっと……謹んで、お断りさせていただきます」
「……そんなオチだろうとは思ったが」
以蔵はうなだれた
見抜けなかった自分が、ふがいなく思える

「じゃあほら、さっさと出てけ出てけ、邪魔だ邪魔だ」
鈴鹿の背中を押して、シッシッとする以蔵
「でも、そんな私を兄上は好いてくださるのですね、光栄に思います」
「言葉のアヤだ」
そう言い切って、ぴしゃりと障子を閉める

「……それに、お前よりかはナンボか夢姉のがマシ、だ」

それまで事態を眺めていたイツ花が、ぽつりとつぶやく
「何だかそれ、フラレ男の言い分みたいですね、以蔵さま」
「……放っておいてくれ」

それから以蔵は、己の弱点を補強するために、水の神との交神を選んだ

白銀の髪飾りをつけた、眉目秀麗な美女の神様であり、
奉納点にして１３０００を越える、天界でも中堅に位置する女性だ
「よろしくお願いするよ、神様」

鳴門屋渦女「さぁ、わらわの渦にお入り……」

そういえば、とカッパと交神した母親を思い出し、
とりあえず今だけは、男に生まれたことを感謝する以蔵であった

第四話－1　「風鈴」　1021年10月（後書き）

交神の儀・以蔵×鳴門屋渦女

第四話－2　「晶晶」　１０２１年１１月前編（前書き）

蘭　　１才５ヶ月
夢見　１才２ヶ月
以蔵　１１ヶ月

鈴鹿　７ヶ月
門司　３ヶ月

第四話－2　「晶晶」　１０２１年１１月前編

道場で以蔵（いぞう）の打ち込みの掛け声が響く

「破！」

木の槍を振るい、藁人形の頭部を一撃で吹き飛ばす
荒く息をつく以蔵に、後ろから声がかかった

「……悪くない」
「蘭姉（らん）？」
気づかなかった
以蔵は手の甲で頬の汗を拭う
「……最近、以蔵は訓練ばかりをしているな」
「あー、うんまぁ、暇だしな」

初子（はつこ）が亡くなって以来、ひとりで居る時間が増えた以蔵は、その空き時間のほとんどを道場か庭で槍を振ることに費やしていた
蘭がいつもの無表情でつぶやく
「夢見（ゆめみ）を息子に取られたからか」
「ちげーから」
そっぽを向いてつぶやく
「……その夢見は先ほど、門司（もんじ）と鈴鹿（すずか）と一緒に、被って叩いてジャンケンゲームで遊んでいたぞ」
一緒に叩いて、額でも割ってやれば良かったのに、と以蔵は思う

「蘭姉も、お喋りになったじゃねーか」

「……対外交流というものは、なかなか面倒なものだからな」
よく見れば他所行きの着物を羽織っている、先ほどまで京の都を訪れていたのだろう
あの蘭が、だ
初子の生きていた頃からは想像もできない
「……誰もが我々を奇異の視線で見る、鬼の一族、とな」
蘭は疲れたように上着を脱ぐ
「俺は良い……鬼のようなものだからな、だが……かつて壬生川（みぶがわ）家に生きた巻絵（まきえ）や初子（はつこ）に、鬼の異名は少々物々しすぎる」
「……そーだな」
壁に立てかけてある薙刀を取り、蘭は袖をくくる
「少し、身体を動かさせてもらうぞ」
「ああ」

以蔵は槍を水平に構えて蘭と対峙する
かつてあれほどに届かないと思っていた蘭の薙刀が今はただの木の棒に見えていた

「なぁ蘭姉、蘭姉は母さんのライバルだったんだろ」
「……俺が初子に勝てたことなぞ、術法とにらめっこくらいなものだった」
その真面目くさった言い方に、以蔵は少し吹き出してしまう
「二番目のは何だよ、それ」
「何が面白いのか、初子はな……俺の顔をじっと見ると、すぐに笑い出すのだ、困ったよ」

今思えば、何て失礼な人なんだろう、と以蔵は思う
それから以蔵と蘭は数合ほど打ち合った
道場に、乾いて澄んだ、気持ちの良い音がこだまする

木の棒を打ち合わせながら、以蔵は蘭に尋ねる
「全盛期の母さんと、今のオレ……どちらが上だった？」
「初子だ」
蘭は迷うことなく断言する
「ひいき目じゃねーだろうな」
「失礼な」

１才５ヶ月の蘭が、０才１１ヶ月の以蔵を目を細めて眺める

「お前はまだ若い青年期だろう……成熟期の初子には、まだ届かない」
「……そーか」

以蔵は蘭に稽古をつけてもらいながら、その言葉を噛み締めていた
大江山（おおえやま）への出陣は今月であり、恐らく自分にとって来年はない

蘭の去っていった道場で、顎を伝う汗を拭きながら、以蔵は必死に考えていた
戦うことでしか役に立てないのなら、初子に及ばない自分は一体なんなのか

生きている意味があるのか？

以蔵は道場の床を拳で叩く
痛みはなく、衝動は発散もされない

「朱点を……討つ」

結局はそれが、母親にしてやれる唯一の恩返しであり、名誉を手にする唯一の道なのだ
それしかないのだ

＜夢見の部屋＞

騒がしい部屋の前に立って、以蔵は障子をがらりと開けた

「……夢姉、入るぞ」

夢見が琴を弾いて、門司が歌っていた
「はなァー、はなァー、どんなはなァァァーーー！」
どこかで聞いた曲だったが、そんなにコブシは効いていない、と思う以蔵

ぽろろんぽろろんと弾いている夢見に、声をかける
「夢姉」
「ぽろろ～ん？」
「喋れよ」
どこで覚えたのか知らないが、夢見は琴を横に置いて、以蔵と向かい合う
「どうかしましたかぁ、いっくん？」
「いっくんは止めろって、ずっと言ってるだろーよ……」

「だってぇ、いっくんはいっくんですぅ」
変わらず微笑む夢見を見て、ため息をつく以蔵
「悪いけど門司、ちょっとあっち行っててくれ」
「はなァー？」
舌を引っこ抜いてやろうか、と思う
「えー、じゃあ暇だから遊ぼうっちよー以蔵っち兄さんー」
「良いぞ」

うなずくと以蔵は、夢見の部屋に転がっている鞠を掴んでがらりと障子を開き、庭に向かって思いっきり投げる
凄まじい速度で、林に吸い込まれていった鞠の方角を指差す

「取ってこい、門司」
「俺っち、こんな無茶な命令を受けたのは壬生川家に来て初めてだ！」
泣きながら、走っていく

やれやれ、と以蔵は障子を閉めて、再び腰を下ろした
「ユメに遊んでもらえないからってぇ、門司に八つ当たりしちゃダメですよぉ？」
「ちげーから！」

思わず声を荒げる以蔵
どいつもこいつも、だ

「ユメは教育ママなんですからぁ、もう遊んでばっかりいられないんですぅ、子供が一番大事なんですぅ、良い学校出てぇ、良い大学に入ってぇ」

「少し黙れ……うん、元気そうで何よりだ、ハハ」
睨まれたので、軽くフォローを入れておく

そういえば、門司が生まれて以来、久しぶりの会話らしい会話だ
以蔵は槍術に、夢見は子育てに夢中だった
改めて問う
「今月、大江山に出陣するんだが、夢姉はどーすんだ？」
「どうするもなにもぉ、蘭さまに拉致されるに決まってますぅー」

口を尖らせる夢見に、どうかな、と呟く

「今の蘭姉なら、きっと、オレと鈴鹿と三人で行く気さ」
「そんなことどうして分かるんですかぁ」
ユメを二時間も逆さ吊りにしてたくせにぃ、と意外に根に持つ夢見
「どーして……んー、どーしてだろーなぁ」
「説得力が全然ありませぇん～」

頬を膨らませたり、そんな風な振る舞いをしていると、とても1才2ヶ月の一児の母には見えない

「でも、蘭姉はもう無理に夢見は引っ張っていかない、門司もだ」
「むぅ……」

もし、無理矢理連れ出そうとするなら、オレが……と言いかけて、以蔵は口をつぐんだ
その途端、夢見が弾かれたように叫ぶ

「わっかりましたぁ！」
「な、何がだ？」
「ユメ、大江山に出陣しますぅ！」

「なにぃ！？」

何を思ったのか夢見は突然立ち上がり、目を輝かせる

「すっかり忘れてましたぁ！　夢見家族計画を完了させるためにはぃ、朱点童子を討たなきゃいけないんですぅ！」

タタラ陣内さまと約束したのだ、朱点を討てばお嫁さんにしてくれる、と

「ユメ、初子さまとお喋りしたんです、朱点を倒したら京の都におうちを建てて、そこで、子で暮らすんだ、って……」

手を組んで、キラキラ目で天井を見つめる

もはや以蔵は幼年期のように、黙って聞くしかできない

「は、はぁ？」

「お庭にはお犬を飼ってぇ、門司とお犬が競争してぇ……門司とお犬が芸を磨いて、門司とお犬がコンクールに出てぇ」

「門司はお前のペットか」

「それで、ユメはタタラ陣内さまとぉ、幸せに過ごすんですぅ……あ、いっくんもたまになら遊びに来てもいいですよぉ」

思い出したように付け加える

「たまに、なのか」

軽く傷つく

「毎日こられたらぁ、ユメとタタラ陣内さまの営みがぁ……」

ぽっと頬を染める夢見に、以蔵は呆れた顔をする

「でも、ま……楽しみにしているよ、お呼ばれするのも」

以蔵はそう言って、立ち上がる

「はぁぃ、そのために打倒・朱点童子（しゅてんどうじ）、ですぅ！」

握り拳を突き出す夢見に、以蔵は思わず笑った

打倒・朱点……、夢姉には、なんて似合わない言葉なんだろう

「今月、頑張ろーな」

「はいですぅ～」

そう言い残して、以蔵は夢見の部屋から出てゆく

＜蘭の部屋＞

蘭が静かに部屋に戻ると、暗がりの中に鈴鹿がいた

「……驚いたぞ」

「おかえりなさい、母上」

蘭に背を向けて、鏡を見つめながら、ぶつぶつとつぶやいている

鈴鹿

怖すぎる

「何をしていたのだ鈴鹿」

「しりとりです」

「……ひとりで、か」

背中を向けたまま、鈴鹿はこくりとうなずく

「自分の語彙がどれほどあるのか、時間はかかりますが、検索できます」

する意味はと聞きたかったが、おそらく蘭には理解できないのではないかと思う

「私の語彙の中では、日常身の回りの物が1割7分で、もっとも高

い比率でした」

記憶しているのか……、何だか身の毛がよだってきたので、蘭は話を変えることにした

「そうだ鈴鹿、これより出陣するぞ」
「出陣……大江山、ですか？」
「ああ」

鈴鹿がこちらに振り返る
その目はいつもと変わらぬようで、なにかを言いたそうにしているようにも見えた

「どうした、鈴鹿」
「母上は、ウソつきでいらっしゃいました」
「……何の話だ？」

鈴鹿は蘭の目を見て、淡々と続ける

「母上は、屋敷に来たばかりの私に、自分は人の親にふさわしくない人物であるから、親らしいことを期待するな、とおっしゃいました」
「……ああ、確かに言った」
「ですが、私は母上の薙刀のご指導を受けて、感じました」
鈴の青い目が、わずかに燃え上がる
「母上は、人の親にふさわしくない人物ではありませんでした、私は母上から実に色々なことを教わりました、術、薙刀、作法、様々なことをです」
「……」
「ですから私、鈴鹿は母上をウソつきだと申し上げています」

「……そうか」

蘭は袖口に入れていた手を、鈴鹿の頬に当てた

「……ありがとう、鈴鹿」

「いえ……これまでの人生、ありがとうございました、どうか立派な最期を」

少し、違和感を感じた

「……まるで、俺が死ぬような言い草だな」

「え、違うのですか？」

「……」

蘭は押し黙る

「母上は死ぬ気だと、以蔵兄上は申しておりました」

「……あのバカ者」

余計な事を言って、とつぶやく

「俺はただ……大江山で朽ちても、悔いはないと思っているだけだ」

「それは、どう違うのですか？」

素直に聞かれて、つい黙り込んでしまう

「……そう、だな、違わないかもしれないな」

蘭は思わず、ふふ、と微笑を漏らしてしまった

「だが俺はウソつきだ……大江山で朽ちて悔いが残らないなど……やはり、ウソだ、帰ってきたいな」

「そうですか、安心しました」

鈴鹿は相変わらずの無表情のまま、うなずいた

こうして、四者四様の決意を込めた、大江山への出陣が始まる
幸四郎（こうしろう）の大敗より二年、巻絵（まきえ）の死より一年が経過していた

〜〜

少年は倉庫の門を開いて、一番奥のつづらの中に目当ての物を探し当てた
つい最近に九重楼で入手したものだった
家族で一番にも、英雄にもなれない少年は、その選択を選んだ
自分の運命をある日突然変えるような、そんな雷鳴のような出来事を信じて

最奥に封じられているそれは、身につけたものをことごとく鬼へと変えてしまう異形の魔具だった

「……朱点を倒せば、全てが……終わるんだ」

力が欲しかった

それさえあれば、皆が救われて、皆が幸せになれるのだ
夢見が戦わずに済み、蘭も鈴鹿も穏やかに暮らせるようになる

だから――
震える手で、鬼の秘宝を取り出す

「オレはオレ自身の栄光のために……朱点を、討つ」

朱の首輪（しゅのくびわ）を、以蔵はゆっくりと装着した

第四話－3　「登頂」　１０２１年１１月中編

＜出陣＞

最後に以蔵（いぞう）がやってきた

「遅いですぅ～」

玄関でもう草履を履いて待っていた夢見（ゆめみ）が、ぷんすかと怒る

「うんああ、悪い」

そんな以蔵の首に巻かれた朱色の首輪を見て、蘭（らん）がつぶやく

「それは……朱の首輪（しゅのくびわ）か？」

「……まぁ、そーいうことだ」

朱の首輪――技の能力値を著しく上昇させる代わりに、呪われ、使用者は正気を失うという諸刃の剣だ

「……ゲーム内で装備すると忠誠心が下がり、下手すれば付けたものは、屋敷から居なくなってしまうという危険な品だな」

「母上、何を言っているんですか」

鈴鹿（すずか）が突然意味不明なことを口走った蘭を心配する

「え～～、ダメですぅ～～～」

話を聞いていた夢見が、以蔵の首輪をバッともぎ取る

「お、おい、なにするんだよ夢姉」

「そんな、こんなのダメですぅっ」

間近でぶんぶんと首を振るから、以蔵の顔に夢見の長い髪が当たって痛い
「普通に止めろ、痛いから」
「まっすぐ立ってくださぁい」
疑問符を浮かべながらも、その場で直立する以蔵に、夢見がにこっと笑う
カチャリ
以蔵に首輪をつける夢見、小さな手を出して実に嬉しそうに告げる
「お手」
「咬みちぎるぞ」
出された手に犬歯を剥く以蔵
「何だか、いっくん凶暴ですぅ」
鈴鹿の背中に隠れる夢見
「ふむ……どうやら朱の首輪には、暴力性を高める効用があるらしいな」
それならばと、鈴鹿は以蔵の耳の後ろをくしゃくしゃと撫で回す
「……なんだよ」
「イヌを馴らすときにはこうするものだと、文献に書いてありました」
「お前も咬まれたいのか、つか何だ、お前らそーいうプレイがお望みか」
くだらないことを言ってないで、と口を開く蘭

「……そろそろ、出発するぞ」
「はぁぃ」
「はい」
「あいよ」

あまりやる気のない声が続く

「それではイツ花、後のことはよろしく頼む」
蘭は屋敷に残るイツ花を見て、告げる

「はァい、まっかせてくださーい！」
どんっと胸を叩くイツ花
「皆様と門司さまがバーンとォ無事に戻ってこれるよう、昼子さまのプロマイドに祈ってますからッ！」

そう笑うイツ花の言葉に、以蔵と夢見は顔を見合わせた

「……ま、まだ帰ってきないんですかぁ？」
「オレたちが戻るのと、どっちが早いだろーな……」
以蔵がボールを遠投してから、ゆうに数時間は経過していた

＜大江山＞

「やァ、壬生川家の皆サン！」

大江山の登山口に立っていると、何かがふよふよと降りてきた

「おや……」

その非常に懐かしい顔に、目を細める蘭

「奉納点(ほうのうてん)をくれた男」

「そんな覚え方しかしてないのかいッ！」

まるで近所の暇なオジサン呼ばわりされる、へらへら幽霊こと黄川人(きっと)

鈴鹿が首を傾げる

「どなたですか？」

「おっと、今回も初お目見えの人が多いネ、ボクの名前はこの世とあの世の境目のォ、黄色い川を泳ぐ人、黄川人さ」

「この世とあの世の境目のォ黄色い川を泳ぐ人さん、初めまして」

「……黄川人、でいいよ」

「はい、黄川人さん」

そのやり取りを横から、不気味そうに見つめる以蔵と夢見

「お、おい、誰と喋っているんだ……？」

「怖いですぅ、蘭さま鈴鹿さまぁ……」

「ボクが見えないの！？」

そりゃ景色が透けて見えるような体だけどサ！、と黄川人が叫ぶ

「あっ、何か聞こえるよーな……」

「目を半開きにして、焦点をあわせるとうっすら見えるようなぁ……」

「ボクってどんな存在！？」

もはや半泣きの黄川人

「それはいいとして……また奉納点でも持ってきてくれたのか？」
「この体でかき集めるのも、骨が折れてネェ……きょうは、ちょいとマジな話なんだ」
黄川人は、寂しそうに蘭に微笑む
「……そうか、では行くか」
大江山に薙刀を掲げる蘭
「いいかい鈴鹿ちゃん、これをたかりと言って、犯罪行為の一つだからね」
「はい、覚えておきます」

るるるーと泣きながら黄川人、蘭に奉納点の光る玉を渡す

「今回は5点か、少ないな……」
壬生川家四代目当主がまるで取立て者のような台詞をはく
「……あのね、君たちの重荷になると思って今まで隠してたけど……ボクも君たちと同じようにあの鬼の呪いを受けてるんだよ」

蘭と鈴鹿のリアクションは、ふーん、だった

めげそうになりながらも黄川人は続ける
「たぶんだけど！（。д。）　あいつを倒せばボクの体が、この世に戻る！」
オーバーアクション気味に身振り手振りで演出するが、なかなか食いついてくれない
「そ、そうすれば君たちと戦え……」
「朱点を倒したら、戦は終わりですよね？」
「ハ……う～ん、そりゃ残念、ボクこう見えて意外と強いんだけどね、アハハ」

ふわふわ浮きながら、手を頭の後ろで組む黄川人

「……奉納点を5点稼ぐのもやっとのくせにか」

「いやホント、ホントだってば！（ｉДｉ）」

それだけは譲れない、と必死で否定する

「……それなら、そうだな」

蘭は大江山の山頂を見上げて、ふっと顔から力を抜いた

「もし朱点を討ち、お前の体が戻ったのなら……共に手合わせをしてやっても、良い」

「……今の君たちなら、きっと勝てる、それだけの苦労をしてきたこと、ボクは知ってる……ずっと見てきたんだ、信じてるからね！」

黄川人はそう言って、ニコリと笑った

ふふ、と蘭は口元だけで笑みを浮かべる

「鈴鹿……ああいう男を、ストーカーと言うのだからな」

「はい、覚えておきます」

何とも言えない表情を浮かべながら、去ってゆく黄川人

「それでは……行くか」

「……ああ」

以蔵の声に合わせたように、朱の首輪が赤く光る

「……壬生川家、突撃」

百兵を率いる英傑のように、蘭は低くつぶやいた

第三回大江山討伐隊が、山を駆け上がる時が来た

〜〜

一合目から五合目まで、一同は＜速瀬＞の術を使って全力で進軍した
かつての討伐隊が苦戦した積雪の獣道を、風の加護を受けた壬生川家は、まるで滑るように走り抜ける
去年の大江山にも出陣した蘭の術力はもはや、巻絵（まきえ）や佐和（さわ）と競っていた頃の比ではなかった

終合目、その果てが見えてきた

〜〜

蘭が思い出すのは、去年の戦いだ
初子（はつこ）が戦術を立て、その通りに巻絵や佐和が動き、何とか双仁王を相手に勝利を収めた
しかし、今度もまたそう巧くゆくだろうか

仁王の門が視界に入り、一同はその前で休憩を取ることにした

「あれが母上の言っていた、痩せ仁王と太り仁王ですか？」
「……ああ、去年の俺が死にかけた相手だ」

あの時の失敗以来、人一倍防御のすべを磨いてきた

「……鈴鹿、俺をかばったりするなよ」
「はい、絶対かばいません」
「……」

そこまでキッパリと断られると、思わず返す言葉のなくなる蘭

「ですが、今そう思っていても、実際戦場でどう動いてしまうかは、やってみないと分かりません」
「……そうか」

夢見の声が、ふたりを緊張に引き戻した

「いっくん！　危ないよぉ！」
蘭が気づくと、以蔵が仁王たちの前に立っていた
「バカな、いつのまに」
ついさっきまで隣にいた、気づかないはずはなかったのに

痩せ仁王・太り仁王「通さぬ……通さぬぞ！」

両仁王が以蔵に向け、その刀を振り下ろす
蘭は薙刀を担いで加勢に向かうが、とても数瞬は間に合わない
「以蔵！」
槍を持つ以蔵の後ろ姿が、初子と被って見えた

次の瞬間、痩せ仁王が空洞となった胸を押さえてその場に倒れた
続けざま、崩れ落ちてゆく鬼の背後にいた太り仁王の頭部を、以蔵の槍が吹き飛ばす

声をかけるのも忘れ、蘭は絶句する
三発、たったの三発だった

「以蔵……お前は、」

風に吹かれて黒煙となって崩れ落ちる仁王の骸に槍を突きつけたまま、以蔵は動かない
蘭の横を通って、二体の仁王をたったの三撃で仕留めた以蔵に夢見が駆け寄る

「きゃぁ～、いっくんすごぉぉい～～！」
そのままの勢いで、夢見が以蔵に抱きつく
何か嫌な予感を感じて、蘭は叫ぶ
「待て夢見、危険だ！」
夢見に抱きつかれた以蔵の体が、ふるふると震え出す

「……朱の首輪の光が、増してきています」

蘭の横に並んで冷静につぶやく鈴鹿
「夢見、戻れ！」
「……だ、か、ら、」
振り返った以蔵の瞳が、赤く輝いた

「オレをいっくんて呼ぶなぁあああああああああああああ！」

べごっ

「はひっ！？」

槍の柄で側頭部をぶっ叩かれて、真横に吹き飛ぶ夢見

「……」
「……暴力性が、増していますね」
蘭は熟考して、つぶやいた
「……仁王を葬ったのも、自分より大きくて偉そうだったから、とかではないだろうな」

～～

朱雀大路に入っても、以蔵の凶暴性は留まるところを知らなかった
「うぜーー！」
昨年初子たちが包囲された崇奈鳥大将の軍勢を一撃で消し飛ばしながら、叫ぶ
「オレは以蔵だーー！」
まるで修羅のようだ
「いっくんだったら、イツ花もいっくんじゃねーーかーーー！」

「……いや、いっちゃんだろう」
蘭がぼそりと突っ込むが、聞こえていないのか声が届かないのか、どんどんと先にゆく

「というか、気にしていたのですね、兄上」
「うぅ～、痛いですぅ……もうぜったいぃ、いっくんなんて呼んであげませぇん……」

目を血走らせて鬼を始末する以蔵のあとを、のんびりと追う三人
呪殺の碑に入り、段々と以蔵の怒りパワーにも疲れが見え始めていたため、＜みどろ＞で鬼の速度を鈍くしつつ、回避して奥へと侵

入する

「がー、がるるー！」

「……もはや獣だな」

5×7は？と聞いてみるも、反応がない

「朱の首輪を長くつけていると、この状態が戻らなくなるのですね」

己の心に身を任せてしまい、理性のタガが崩壊してしまうのだろう

「……家出というか、我を忘れ、帰る家が分からなくなるのだな」

冷静に観察する親子

「は、ユメ、良いこと考えましたぁ」

嬉しそうにぽんっと手を叩いて、夢見は以蔵の朱の首輪に手近な縄を繋ぐ

「どうですかぁ、これで我が家に一匹ぃ、鬼っぽいイヌぅはふぃ！？」

以蔵に横っ面を叩かれて、再び吹っ飛ぶ夢見

「……あの夢見に手を上げるとは、本当に我を失っているのだな」

（でも、夢見さんもどうして懲りないのでしょうか……）

鈴鹿の疑問が増えてゆく

順調に進んでいった四人は、朱点閣猿橋へと足を進めた

～～

「……ここまで来れば、残りの鬼はせいぜい一匹かニ匹だ」

最後の鬼が眠る天守閣へと続く大橋の前、蘭が皆を見回す

「ゆくぞ」

鈴鹿がしっかりとうなずく

「はいぃ！　ユメの未来の旦那さまのためにぃ！」

「がー！」

気合の入った雄叫びが続いた

蘭が先頭に立ち、大橋を進んでいると、突如城門が開く

「……ん」

こちらを迎え撃つつもりか、と蘭が暗がりを睨みつける

門の中から圧倒的な威圧感を持つ、巨大な影が進み出てきた

その姿は仁王をニ体合わせたよりも大きな巨躯に、四本の腕を持つ化け猿だ

二対の腕にはそれぞれ、投げ輪、中華刀、巨槍、錫杖を持ち、知能は低そうだがその怪力は侮れそうにない

石猿田衛門「ウキイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！」

甲高く、猿が鳴いた

獰猛そうな雄叫びを上げ、以蔵が真っ先に猿田衛門へと飛びかかる

「がるぁあああああああああああ！」

猿田衛門はその凄まじい速度の奇襲を中華刀で受け止め、体重の軽い以蔵を、木片のように地面に叩きつける
「いっくんっ！」
思わず叫ぶ夢見に、同時に猿田衛門の放った円月輪が襲い掛かる
「ひ」
「……ぼさっとするな」
地獄の投げ輪を蘭が代わりに受け止め、以蔵にすかさず鈴鹿が＜お零＞を唱えた
「ぐ……雑魚が、なめやがって……！」
起き上がった以蔵が、低い体勢で槍を構え、牙を剥く
「やれやれ……俺はこいつも庇いつつ戦わなければいけないのか」
猿田衛門の長い手足をかいくぐり、以蔵と蘭が攻めに回る
放たれた必殺の突きを蘭が薙刀で弾き、その猿田衛門のがら空きの腹に、以蔵は渾身の力で槍を突き刺す
猿田衛門「ギイイイイイイイイイイイイ！」
三桁のダメージを受け、猿田衛門は苦しみに刀を振り回す
「夢見、鈴鹿……以蔵に＜武人＞を集中させろ！」
刀の軌跡を目で追いながら、蘭が叫ぶ
「でも母上に＜防人＞は、」
「……必要ない！」
以蔵が猿田衛門の肩の肉をそぎ取り、そのまま後方へと飛び退く

三人を背にまとい、蘭はたったひとり前列として巨躯の大猿の前に立ちはだかった

「さぁ……貴様なぞに後れを取るものか」

蘭は薙刀を構えて、壮絶に口の端を釣り上げる

猿田衛門が四方八方から立て続けに四つの腕で、蘭を激烈に攻め立てる

迫り来るうなる刀、地獄の投げ輪、必殺の突きを蘭はその身に受け止め、いなし、捌き続けた

そのたびに＜武人＞により筋力を強化された以蔵が、猿田衛門の体を深くえぐってゆく

猿田衛門「ウギッ、ギッ、ウギイイイイイイイイイイイ！」

杖を振りかざし、猿田衛門は自らの防御力を強化する防人上位の術＜石猿＞を唱えた

「……根競べだ」

蘭は見上げるほどの化け猿相手に、一歩足りとも引かない

壬生川家当主の横を以蔵が跳躍して、猿田衛門に挑みかかった

「が……ぐるぅ！」

が、＜石猿＞によって岩盤ほどに硬くなった猿田衛門の皮膚に、以蔵の槍が突き刺さってしまう

猿田衛門の肩甲骨の上に乗って、槍を引き抜こうともがく以蔵を、猿田衛門がぎょろりと睨み、虫を払うように、猿田衛門が以蔵を吹き飛ばす

「がっ！」

猿田衛門が以蔵に追い討ちの投げ輪を掲げたところで、夢見と鈴鹿の術の併せが完成した
『＜花連火＞！』
巨大な火の玉が猿田衛門の顔面に着弾し、その視界を奪い尽くす
猿田衛門「ウッ、キ、キイイイイイ……！」

火炎に悶え苦しむ猿田衛門の横を走り抜け、蘭は以蔵の傍で回復の術をかけた
「平気か、以蔵……？」
追い討ちは夢見と鈴鹿が寸でのところで阻止したが、ここで以蔵が倒れてしまっては、とても朱点まで届かない

以蔵は頭を振りながら身を起こす
「……あのサル、もう中華料理の具じゃ済まねー…」
「お前、」
以蔵の朱の首輪は、なおも赤く輝き続けている
「……斬り落とす！」
蘭に＜お零＞を貰い、以蔵はゆっくりと立ち上がった

猿田衛門の首に突き刺さったままになっている自分の槍を、睨むように見上げる
体の火を振り払った猿田衛門が、蘭と以蔵に向けて、激怒と共に四つの腕を振り上げた
猿田衛門「ウッキイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！」

瞬間、以蔵と蘭は全速力で突進する

「……初子ほどの槍さばきでは、無い！」
蘭は槍の穂先を斬り飛ばし、返す薙刀で以蔵に放たれた投げ輪を叩き落す
以蔵が中華刀の刃先を跳び抜け、首の根元に突き刺さった槍を渾身の力で引き抜く
「あらァァァッァァァァァァッァァア！」
会心の一撃は――猿田衛門の首をぶった斬った
満身創痍の一同は、全身に治癒の術をかけ合うと、最後の門をくぐった
大江山最奥、朱点閣（しゅてんかく）
ついに壬生川一族は辿りついたのだ

第四話－４　「撃攘」　１０２１年１１月後編

四人は朱点閣（しゅてんかく）に、足を踏み入れた

ひんやりとした空気が、熱くなった体を覚ましてゆく

「ついに……朱点か」

口に出すとここまで来たのだな、という実感が湧き出す

「おっよめっさん～、おっよめっさん～」

妙な歌を口ずさむ夢見（ゆめみ）が、邪魔で邪魔でたまらない

「……」

「本当にこんな場所に住んでいるのでしょうか」

がらんとした大きな空間だ、その奥にぽつんと巨大な寝台が置いてあった

一同が朱点閣の中央まで進んだとき、太い声が響いた

○「おンやァ！？」

寝台が揺れ、その赤黒い身体が四人の前に姿を現せる

ぶよぶよとした体格が揺れ、乱食い歯の伸びた下品な顔が壬生川（みぶがわ）家をぐるりと見回す

「うぁ……」

悲鳴を上げて、口元を手で押さえる夢見
「ひ、酷いですぅ……朱点童子（しゅてんどうじ）があんな顔だなんてぇ、ユメ、もっと美系の人かと思ってましたぁ！」
「確かに……小悪党って感じですね」
「……漫画なら、出てきた瞬間に死亡フラグが立ってそうな顔だな」
容赦ない評価を下す女性陣

「ずいぶん前に男と女が来て以来、誰も俺を訪ねてくれねェから、ちょっと寂しかったゼ、しかもこんなべっぴんさん揃いでナ」
げへへと下卑た笑いを浮かべる朱点童子に、いーっと歯を剥く夢見

「がる……油断すんなよ……」
そんな三人の前に、以蔵（いぞう）が身をかがめて立ちふさがる

「やる気マンマンだナ……おンやッ……！？　その額の光は！？」
朱点童子が目を見開いて、一族の額に埋め込まれた壬生川家の象徴とでも呼ぶべき緑の結晶を睨みつける

思わず額を押さえて、嫌そうな顔で後ずさる夢見
「まさか、あの時のガキ……？　ククク…そういうことか！！」

今にも飛びかかりそうな以蔵を手で制しながら、蘭（らん）が眉をひそめる
「……何を話している？」
「分かりません、けれど……私たちの呪いと何か関係があるようですね」
朱点童子は巨大な口をめいっぱい広げて、豪快に笑う
「またあいつら、こっちの世界にチョッカイ出したのかい！？　懲

りねぇなぁ……！」

やれやれ、と蘭は首を振った

「父と母に誓い、貴様を斬ると決めていたが……」

薙刀を手に、ため息と共につぶやく

「何だかどうでも良くなってきた……こんなヤツのために、母も初(は)子(つこ)も死んだとはな……フフ」

思わず笑みがこぼれた

「……俺は、俺のために貴様を討つ」

決めたところで、夢見と鈴鹿(すずか)がでしゃばる

「ユメは旦那様のためにぃ！」

「じゃあ私は、家内安全のために……ご利益があるとは思えませんが」

それぞれが宿敵に武器を構え、突きつける

朱点童子は大きく伸びをして、叫んだ

「たとえ鬼でもなあ！？　一度生まれりゃ、命はてめェのもんだ、そっちの勝手な都合で死ねるかよ！」

ぎょろりとした両眼が、壬生川家ではなく、その先を見据えてドス黒く光った

蘭は以蔵を解き放つ

「ぐるるる……がああああああああ！」

目を血走らせて、以蔵が槍を振るう

それらは朱点童子の硬い皮膚を深く貫いた

「以蔵の槍は……朱点にも通用するのだな」

先ほどと同様、＜武人＞を以蔵に重ねがける夢見と鈴鹿

「痛ェなあ！　痛みってのも久々だゼ！！」
以蔵の胴ほどもある腕を振り上げ、朱点童子は拳骨を蘭に叩きつける
「が……！」
「気丈だなあ、良いね良いねェ！」
「……ほざけ！」

蘭が注意を引いている隙に、以蔵が朱点童子の死角から槍を突き刺した

「あ痛ェ！」
無茶苦茶に腕を振り回すが、もはや獣と化した以蔵を朱点童子は捕らえきれず、朱点閣の柱が何本か崩れ落ちてゆく
巻き込まれまいと蘭が走り回る中、剛腕が柱を砕きながら真横からヌッと出現した
避けきれず、朱点童子の一撃まともに受ける蘭

「がはっ……！」

蘭は体力の半分を奪われ、朱点閣の地面を転げまわる
柱を砕きながら姿を見せた朱点童子が、瓦礫に足を取られる以蔵を叩き潰した
「あああっ」
夢見が慌てて全体回復の＜お地母＞を詠唱するが、今追撃されたら間に合わない！

巨体を現した朱点童子がニタニタと笑いながら、蘭の上に足を乗

せる
「ど、どいてくださぃーぃ！」
「言っても無駄です」
鈴鹿は薙刀を水平に構えて、朱点に駆け出した
「――双光（そうこう）、蘭斬（らんざん）！」
母親譲りの奥義――
朱点童子の足を二連続で切り裂き、痛みに思わず足を引いた朱点童子の下から、鈴鹿は蘭を引き抜いた

「相変わらず、恥ずかしい名前だと思います」
「……なら、叫ぶな」

夢見の＜お地母＞により意識を取り戻した蘭が、鈴鹿につぶやく
「すっごい鈴鹿ちゃんっ！」
手を叩いて喜ぶ夢見の奥、朱点童子が牛も丸呑みに出来そうな口蓋を広げる

「これでも食らいなあ！」

その大きく開いた口から噴出される硫黄色に染まった息に、壬生川家の四人が包まれ、手足がわずかに重く感じられる
「……なんだ？」
「臭い息、味方全体攻撃力ダウンの技みたいですね」
まるで他人事のような鈴鹿の発言に、蘭は口元を手で押さえる
「以蔵に引き続き＜武人＞をかけておけ……」

蘭が前に出てくるやいなや、朱点童子はその場で力を溜め始めた

「クク……今度は一撃でぶっ飛ばしてやるぜえ！」
蘭が薙刀を構えると、後方から蘭に＜防人＞が届く

「……鈴鹿め、＜武人＞にしろと言っていたのに」
「現在、アレな状態なもので」

鈴鹿の指差す先、以蔵が瓦礫の中から姿を現した

「ぐるあああああああああ！」
その目は完全に理性の光を失っている
朱点の首輪に飲み込まれようとしているのか、とにかく危険な状態のようだ
「うわ生きてたぁ」
叫び声をあげる夢見

以蔵は槍を振り回し、朱点に向かって再び突撃する
「……開け、当主ノ指輪（とうしゅのゆびわ）！」
以蔵の猛攻を支援しようと、蘭は左手の指輪を高々と掲げ、先祖の英霊を召喚する
その源太の闘気が、朱点童子を圧倒し、その身を滅多に切り裂いた

「ぐ、が……おらあ！」

存分に力を溜めた朱点童子の拳骨が、蘭に迫る――
――が、蘭は半身をずらしてその豪腕をひらりと避けた
蘭の頬がその拳圧によって裂ける中、以蔵が叩きつけられた朱点童子の腕を駆け上り、槍を耳に突き刺して、振り落とそうと振り回した朱点童子のうなる拳を避け、蘭の真横に着地した
「観念しろ、朱点……もう終わりだ」
「ぐるる……」
蘭と以蔵が長柄を朱点童子に突きつける

「……俺だって生きてェんだ！　＜円子＞！」

自らに上位治癒の術をかけ、一気に傷を癒やしてゆく朱点童子
「……もう思い残すことなど何もあるまい、やれ」
蘭、鈴鹿、夢見三人からの＜武人＞に包まれた以蔵が、術を唱える朱点童子の正面に立ち、高々と吼えた
「あああああああああああああ！」
視界が白く弾け、槍一閃、４８３のダメージが朱点童子を貫いた！
「うがあぁぁ…」
朱点童子が口から大量の血を吐き、その場に膝をつく
「ククククク…とうとう鏡を…割っちまいやがった…」
その瞬間、まばゆい光が朱点童子の身体から発せられる
数柱、十数柱の神が、一斉に解放されてゆく光だ
「……最後に何を言っていたのだ？」
蘭が薙刀を下ろし、ぽつりとつぶやく
夢見が鈴鹿に抱きついて、大声で歓喜の声を叫んでいた
壬生川家は、朱点童子をついに討ち取ったのだ

～～

傷を癒やした一同が、荒れ果てた朱点閣を背にした時、
朱点童子の遺体がぴくりと痙攣した
その口の中から、二本の手が現れる

「……何だ？」

服を脱ぐように、よいしょ、と朱点童子の皮の中から現れたのは、
どこかで見たような顔だった

○「ああ～ぁ」

引き締まった裸体を見せ付けるように少年はニッコリと微笑むと、
片手を挙げて壬生川家に声を掛けた

○「アハハ…こんちわ！」

夢見が弾かれたように叫ぶ
「だ、誰ですかぁ！？　見たこともありませぇん！」

○「まだ引っ張るのか！　ボクだよ、黄川人（きっと）だよ！」

黄川人は両手を広げてアピールをする

「そうか……そういうことだったのか」

蘭は歯を噛み締めたまま、つぶやいた

「こいつの中からボクを助け出してくれるのは、やっぱり君たちだった、ボクはね、これでも皇子なんだ！」

「あの、どういうことですか？」

鈴鹿は暗い顔の蘭の袖を引っ張る

「昔、ここに小さいけど都があったんだ、ある日、悪い奴らが来て、火をつけて燃えちゃったけどね…」

「ストーカーかと思ったら……正体は露出狂だったのだな」

「それはもう良いよ！」

堂々と腰を突き出した姿勢の黄川人を、汚いモノを見るように言う蘭

「……みんな殺されたよ、父さんは女に化けたヤツに後ろから斬られた……母さんは自分から身を差し出したんだ、ボクと姉さんを助けるためにね……」

さすがに蘭の目が気になったのか、黄川人が手を振ると、その身体に一瞬で着物が巻きついてゆく

「ヤツらは母さんをさんざん弄んだ後で、ボクに呪いをかけた…ボクの力を封印するためにね、それでボク、鬼の中に入ってたってワケさ……酷い話だろ？」

酷いですぅ、と同意する夢見の後頭部を叩く蘭

「はぅ」

「バカか……あれは恐らく、俺たちの先祖のことだ」
ええっ、と驚く夢見に、黄川人が声を荒げて続ける
「だから！　同じお返しをしたくらいじゃ、ゼンゼン足りない！！」
朱点閣に散らばっていた瓦礫が舞い上がってゆく

「ボクはあの日誓ったんだ、奴らと奴らの家族、子孫までひとり残らず呪い殺してやるってね！　ボクは君たちを断じて許さないッ！　生まれ育った都を焼き払い！　両親を殺した！　あいつらと京の人間どもをね！」

黄川人が吼えた瞬間、その地面に巨大な魔方陣が出現する

「貴様……」

「アハハハハ…そうそう、君たちには感謝してるよ！　あのカッコの悪い鬼の姿のまんまじゃ、ボクの力は半分も出せなかったんだから」

蘭は再び薙刀を構え、歯を食いしばる
「お前が本体、なのか……この呪いすら」

朱点童子「さあ！　復讐の本番はこれからだ！！」

黄川人ならぬ朱点童子は床に生まれた魔法陣の中に飛び込む
その中央から顔だけ出して、ニッコリと微笑んだ

「また会おうゼ、兄弟」

蘭が手に持った薙刀を投げつけるが、朱点童子の入り込んだ魔法陣が消え去り、薙刀は硬い地面を転がってゆく

「……大変なことになりましたね」

鈴鹿が無表情でつぶやく

「え、えええ、って、短命の呪いは消えないんですかぁぁぁ!?」

パニックに陥る夢見の横、蘭はため息をついた

「そうだな……とりあえず」

蘭は横で低くうなっていた以蔵の朱の首輪を、パチンと外す

その瞬間、気を失ってその場に倒れこんだ以蔵を見て、蘭は鈴鹿と夢見に告げた

「とりあえず、屋敷に戻るか……以蔵をこのままにはしておけない」

どうしてどうしてぇ、と叫び続ける夢見を鈴鹿が押さえて、蘭は以蔵を背負い、

……壬生川一族は、大江山（おおえやま）をひっそりと下山していった

第四話－４　「撃攘」　１０２１年１１月後編（後書き）

出陣・大江山（蘭、以蔵、鈴鹿、夢見）

第四話－5　「変異」　１０２１年１２月前編（前書き）

蘭　　１才６ヶ月
夢見　１才３ヶ月
以蔵　１才

鈴鹿　８ヶ月
門司　４ヶ月

第四話－5　「変異」　1021年12月前編

＜壬生川家＞

先月の遠征が終わり、壬生川家には重苦しい雰囲気が残っていた

「……12月、雪か」

居間から外を眺めると、今年の初雪が降り出していた
寒い季節が苦手な蘭は、コタツに潜って首を縮める

「母上、」
「……鈴鹿か、夢見の様子はどうだった？」

覇気のない蘭の声に、鈴鹿は静かに首を振る

「ダメです、布団に潜り込んで……門司さんが付いていますけれど、少なくとも今月は休養を取ったほうが良さそうです」
「……そうか」

蘭はぼんやりと、夢見はもう戦えないかもしれない、と思う
あの朱点童子を打倒したというのに、新たな朱点童子が現れ、夢見は精も根も尽き果ててしまった

「……雪を見ると、思い出す」

まぶたの裏に、初雪が降って喜びに駆け回る初子の姿が、走馬灯

のように浮かぶ
母と友の仇は討てなかった、と悔やまれた

「母上、どうかしましたか？」
「……ああ、いや、少し眠りそうになっていた」
結局は、蘭も少し疲れてしまったのかもしれない
「そういえば、以蔵兄上の容態ですが……」
「……目覚めたか」

朱の首輪（しゅのくびわ）の多用で昏睡していた以蔵に、先月のことを伝えなければいけないな、と蘭は立ち上がる

「先月起こったことは、全て伝えておきました」
「……そうか」

あの朱点童子を討つために、その身を犠牲にした以蔵の気持ちを思うと、心苦しくなる

「……どうかしたか、鈴鹿？」
僅かにぎこちない鈴鹿の表情に、蘭は少しだけ違和感を感じて尋ねる
「あ、いえ……それで、兄上は今交神の間にいます」
なぜか慌てて首を振る鈴鹿に、蘭は聞き間違えたのかと思った
「交神の間に？」
「はい、お子様がいらっしゃっております」
「ああ……なるほど、以蔵の子か」

自分が死んだ後の当主は恐らく以蔵になるだろうと思っていた蘭は、それならばと居間の障子を開く

「……少し、顔でも見に行くか」
「はい」
蘭と鈴鹿は、連れ立って儀式の間へと向かった

＜以蔵の子供＞

「ぱんぱかぱーん！」
イツ花は手を叩いて喜ぶ
「新しいご家族を預かって参りましたー！」

「ん」

以蔵はぼーっとしたまま、イツ花の話を聞いていた
「あらァ、以蔵さま嬉しくないんですかァ？」
「嬉しくないっつーか、嬉しいっつーか」

以蔵は首を傾げる

「なんかこう、朱の首輪の影響が残っているのか知らんが……あんまり心動くことがなくてな、よくわからねえんだ、自分の考えていることが」
「大変ですネェ」
イツ花はすっごい他人事そうに慰める
「まぁいーや、呼んでくれよイツ花」
「はいそれではー、とにかくよく笑う女のお子様の登場ですー」
女の子なのか、と以蔵は反芻する

すると障子を開いて、髪を短く刈った少女が入ってきた

○「初めまして、お父さん！」

ちゅーっす、っと元気良く挨拶する朗らかな娘に、以蔵は伽子（とぎこ）と名をつけた

草色の髪に紫煙色のつぶらな瞳を持つ、槍使い第三世だ

「よろしくっすっ！」

ビッと手を挙げる

「……髪の色も目の色も、以蔵に良く似ているな」

「とてもかわいらしいと思います」

「どっから入ってきた母子」

蘭は、その幼い容姿を目を細めて眺める

何となく、その笑顔が持つ雰囲気に、見覚えがあるような気もした

「……名前は、伽子か」

「はーい、どうもよろしくでっす！」

太陽のような輝く笑顔で、伽子は蘭に元気良く挨拶する

「……何だか、初子（はつこ）さまの面影がありますね」

鈴鹿の漏らした言葉に、雪の日に来たしな、と同意する蘭

「ああ、ついでだ伽子、こっちの着膨れダルマが蘭、壬生川家の四代目当主だ」

「……寒いのだ」

着物の上からちゃんちゃんこを三枚羽織っている蘭が、不機嫌そうにつぶやく

「で、こっちの表情の一切変わらないのが、壬生川家お手伝いロボ、鈴鹿だ」

「ロボットじゃありません」

一字一句をしっかりとした発音で、キッパリと否定する

「りょーかいです、ランランにリンリン！」

妙な間があった

（ランラン……？）

（リンリン……？）

物怖じしない少女のつけたパンダのような名前に、思わず戸惑う親子

「二人合わせて、鈴蘭？」

「花になったな」

無口で無愛想で無表情なのか、と以蔵が思うんー、とその場でくるっと回って伽子は、今度は父親に笑いかける

「じゃあ、以蔵お父さんは、イトウさん？」

「他人かよ」

そのツッコミがツボに入ったのか、あははははははと笑い転げる伽子

物静かな三人組は、そんな表情豊かな少女を見つめながら、

「こういう童が生まれると……まだまだ、俺たちも生き続けないと

な、とつくづく思わされる」
悔やんでいる暇などないと、蘭は自分に言い聞かせる
「まったくだな、ランラン」
「呼ぶな」

こうして、以蔵の娘・伽子がお天道様のような笑顔と共に、壬生川家の一員となったのだった

第四話－６　「奇矯」　１０２１年１２月後編

＜居間にて＞

伽子（とぎこ）への屋敷案内を鈴鹿（すずか）に任せ、蘭（らん）と以蔵（いぞう）は居間でイツ花（いつか）の話を聞いていた

「当主様、まさに青天のヘッきれきィです！」

イツ花の心から嬉しそうな顔に、白けた目を向ける以蔵

「ん」

「腰を抜かす用意はいいですか！？」

「よくないが、続けてくれ」

横目で蘭を見ると、コタツにもたれてうとうとしていた

（寝やがった）

「実はですね、朱点の中に封じられていたたくさんの神様が天界に戻っていらっしゃったンです！！」

「……あー」

そういえば鈴鹿から、朱点童子（しゅてんどうじ）の中に本物の朱点童子と共に、おびただしいほどの神が閉じ込められていたと聞いていた

正気を失っていた以蔵は、そのこと自体をうっすらとしか覚えていなかったが

「何と、２０柱もの神様でーす！」

「……そりゃ凄いな」

「この騒ぎで天界は連日連夜、もォ飲めや歌えの大宴会！！　お酒を召した太照天夕子様と昼子様のおふたりがあられもないお姿で舞

をまわれたとか…」

私も見たかったと言わんばかりのイツ花に、はぁ、と相槌を打つ以蔵

「いえ、そりゃもォ、大ウケ！…という雲の上の話はこれくらいにして……何ですけど、あのォ、以蔵さま当主さま」

急に声のトーンが下がって、イツ花が恐る恐る上目遣いで見上げてくる

「当主寝ているけどな」

「……寝てなどいない」

明らかに寝息を立てていた蘭が、細目で偉そうにつぶやく

「あの…本物の朱点童子について何も知らされてなかったコトで、天界に不信感をお持ちなのでは？」

「……ずいぶんとぶしつけだな、さすがイツ花」

「えへ」

何を勘違いしたのか、頭に手を当てて微笑むイツ花

「不信感か、それは持つ……当たり前だ」

蘭が歯に衣を着せずに告げる

「私の頭じゃ難しいことはよくわかりませんけど……」

イツ花がうーんとうなる

「朱点を解放する危険を冒しても捕らわれていた神様を今奪い返しておくことが……先々壬生川（みぶがわ）家の力になると、昼子様が判断されたのだと私は思います！」

神の解放と朱点の釈放、天秤にかけて前者を選んだということなのだろう

「神を奪い返すのは良い……だが、それを黙っているのは解せぬ」
いつもの蘭の重い口調を、以蔵が受け取る
「……神様たちはあくまでも、オレたちの復讐に手を貸してくれている立場だったしな、十分な見返りがなけりゃそんなことしねーだろ」
「朱点を釈放しても、俺達ならば滅ぼせると読んだのか……迷惑な」
「そ、そうですよ、きっと壬生川家への期待はそれだけでっかいンですよ！　だからもっと自信を持って！」

そんな風に以蔵や蘭を励ますイツ花を見て、ふたりはため息をついた

「……しかし、イツ花に言っても仕方のないことなのだな」
「半人前の巫女だもんな」
「しっかり一人前ですッ！」

それから以蔵と蘭は、鈴鹿と共に出陣の用意を整えるのだったやることはこれからも変わらず、鬼を斬り、奉納点を稼いで、一族を強くすることなのだ

真なる朱点童子を倒すために――

＜出陣＞

「初・出・陣！」
ぴっかーんと小振りの弓を掲げる門司（もんじ）
「これがかの朱点童子1を打ち倒した、伝説の弓か！　すげぇ！」
その夢見さんの弓は朱点に二桁のダメージでしたけど、と鈴鹿が

ぽつりとつぶやく
「……しかし、弓を譲ったということは」
蘭は、四人を見送りに来た夢見を見つめる
「それじゃユメぇ、皆様のお帰りをお待ちしてますぅ」
ぺこと頭を下げる、割烹着姿の夢見
「……何だその格好は」
「ユメ、壬生川家のお手伝いさんになったんですぅ！」
三食に昼寝つきですぅ、と言い張る夢見に、それは羨ましいとつぶやく以蔵
「……そうか」
あまり深く追求しない
「じゃあ伽子、夢姉に色々教えてもらってな」
「ちゃーっす」
元気よく手を挙げる伽子に、夢見がニコニコと微笑む
「じゃあ、屋敷の抜け出し方とかぁ、親のサイフからこっそりお金をくすねてもバレない方法とかぁ」
夢見の頭をぎりぎりと掴む蘭
「頼んだぞ」
「あぅあぅあぅあうぅ～」
そうして四人は不安ながら夢見に伽子の訓練を任せ、壬生川家を後にしたのであった
～～

行き先を決めながら街道に向かう一行を追いかけてきたのは、イツ花だった
「一大事でございます！」
「……どうしたイツ花、血相を抱えて」
「突如、都の四方に新たな鬼の巣窟が三つも出現したとのこと！」

がーんと頭を抱える門司
「おにのすくつがだって！？」
誰も何も言わず流した

「遠征の折、ご自身の目でお確かめください……ご油断なきようお願いします！」
「うむ……わざわざありがとうイツ花」
頭を下げて、イツ花が屋敷に戻ってゆく
その後ろ姿を眺めつつ、槍を抱えた以蔵が言う
「……行ってみてーな」
「ですが、門司さんは初陣です」
無理です、とキッパリ言う鈴鹿に、門司が声を張り上げる
「大丈夫！　俺っち、世界タフな男選手権で2年連続一位を取った男だから！」
「2年生きたことが快挙だな、我が家」
面倒そうに突っ込む以蔵

考え込んでいた蘭が、顔を上げる
「そうだな……朱点討伐隊が三人も揃っている以上、この目で見に行こう」
「分かりました」
「ん」
「俺っちやりますよー！」

叫ぶ門司を鬱陶しそうに見る以蔵の肩に手を置き、鈴鹿がささめく

「殺すのは、重犯罪です」
「何かすげぇこと言われてる！？」
バカ、やんねーよ、と抗弁する以蔵は、
「……でも鬼の仕業に見せかければ」
「以蔵っち兄さん！？」
「そうですね、それなら出来るかもしれませんが……」
鈴鹿もともに、顎に手を当てて考え込む
「……もうそこらへんにしておけ、以蔵、鈴鹿」
「ああ、やっぱり当主姉さんだ、ありがとっす……」
仏を見るように拝む門司
「……あまりやかましいようなら、俺が黙らせる」
「この三人怖いっすよ！」

叫ぶ門司に蘭が冷たい視線を向けると、ヒィッと怯え声が上がる

「では、行くか……」
こうして、四人は新たな迷宮へと足を進めていった

＜親王鎮魂墓（しんのうちんこんぼ）＞

三箇所のうちひとつ、親王鎮魂墓

「ここは……古代の都の王の、墓か」
「そうみたいですね、相当深いようです」
新たな洞窟の地下一階に降り、一同は鉄クマ大将の縄張りを進ん

でゆく
　夢見から息が長い指導を受けただけのことはあり、門司は性格からは思えないほど丁寧な弓の腕をしていた
「ビシッ、バシッ！」
　初陣でさすがに緊張している門司の横、以蔵が世間話を始める
「いちいち叫びながら射るヤツって、すごくバカそーだな」
「そうですね」
「うおい、俺っちのことじゃないですか！？」
　聞いていたのか、とつぶやく以蔵
　初めて潜る巣窟で、慣れない地形に多少苦戦しながらも、一同は地下二階に降り立った
「……指南書？」
　すると、たまたま撃破した相手から武芸の書を入手することが出来た
「やはり……新しい場所に行くのが、良いのかもしれませんね」
「ふむ、そうだな」
　妖怪たちが落とす道具の中にも、初めて見るものが多く混ざっていた
「以蔵兄上、なんだか、楽しそうですね」
「え？　オレが？」
　槍を振るう以蔵が驚いたように振り返る
　その頬には、鬼の血がこびりついていた
「はい、イキイキとしています」
「……ジョーダンだろ？」
「さすが、武芸者ですね」
　以蔵は自分の手のひらをじっと見つめて、それから首を振る

「……なに言ってんだよ、鈴鹿、鬼を殺して楽しいやつがいるかよ」

不本意そうな以蔵の態度は、いつもと同じく淡々としている

「……そう、ですね」

なぜだか不安そうに鈴鹿がうなずく

蘭がその様子を無言で眺めていた

本当はもう、以蔵も気づいていたのかもしれない

～～

「じゃあ、そろそろ戻るか」

新たな化け物・軽足大将に、初めて悪羅大将を見たときのような苦戦をしつつも、さすがに朱点を打倒した三人は健康度を減らされることなく無事だった

「……門司は、どこだ？」

「どこでしょう？」

「さて、どこだろーな」

三人から離れたところ、軽足大将についばまれる門司の姿があった

「あ」

体力が全快の状態から、二発で戦闘不能にされていた

「ギャーーーーー！　門司ここに眠るーーー！」

断末魔のような声が墳墓に響く中、以蔵は何事もなかったかのように告げる

「……じゃあ、そろそろ戻るか」

「そうですね」

こうして三人は無事なまま、新たな指南書を得て帰還したのであった

重傷を負ったが、一応門司は生きていたらしい

第四話－６　「奇矯」　１０２１年１２月後編（後書き）

元服→鈴鹿　出陣・親王鎮魂墓（蘭、以蔵、鈴鹿、門司）
伽子→初見・槍使い　訓練・夢見→伽子

第四話－7　「住劫」　1022年1月前編（前書き）

蘭　　1才7ヶ月
夢見　1才4ヶ月
以蔵　1才1ヶ月

鈴鹿　9ヶ月
門司　5ヶ月
伽子　1ヶ月

第四話－7　「住劫」　１０２２年１月前編

＜新年の壬生川家＞

「明けましてぇ、壬生川家ぇ～」
（おめでたくはないんだな）

お正月の挨拶に、エプロン姿の夢見が頭を下げる

「うおー、旨い食事に暖かい家族、幸せだー！」
右腕を包帯で吊った門司が、満面の笑みで叫ぶ
「みんなで食べると、美味しいよねー！　お腹すいたすいたー！」
箸で茶碗をチャンカチャンカ叩く伽子と門司

「んー、蘭姉がまだ来てないけど、先に食べるか」
「そうですね、私も訓練で……今にも倒れそうです」

野鹿のように細く締まった身体を持つ鈴鹿が、ぽつりとつぶやいた

「お前、たまには間食とかしろよ……」
先月無事元服を果たした鈴鹿にそう言いながら、吸い物をすすって、以蔵は噴き出した
「辛ぇ！」
「甘いんすけど！？」
「苦ぁいっ！」

被害が流行り病のように拡大してゆく

「あー……夢姉」
口元を拭いながら、思い当たった
「はぁい？」
ニコニコと微笑む夢見に、以蔵（いぞう）が告げる
「お前、お手伝いクビな」

「がーん」
衝撃を受けたように夢見が頭を揺らす

「がーんじゃねぇ、お前この味付け自分で食ったのかよ、七色に味が変化するって何だそれ、七味唐辛子ってそういう意味じゃねーから」
「うぅ～～、せっかくイツ（いつか）花さんに教えてもらって作ったのにぃ～～」
「さ、伽子、夢姉が作ったモンは全部どけるぞ」

ごっめんなさーい！と言いながら、せっせと端に寄せてゆく伽子

「ちょ、いくら以蔵っち兄さんでも人の母さんの作ったものを、そんな風に扱わないでくださいっすよ！」
ぐすぐすと泣きそうな夢見を、門司が格好良くかばう
「よし伽子、全部それ門司の皿に乗っけろ」
「りょ、りょーかぃ」
「え」

冷や汗を流す門司の皿に、元は食べ物だったものが次々と盛り付けられる

「その出し巻き卵っぽいものも、夢見が作ったやつだな伽子」
「隣のおにぎりも、ユメが握りましたぁ～」
「だそーだ、そのおにぎりっぽいものもゴミ処理場行きだぞ伽子」
「いちいちぃ、っぽいものって言わないでくださぁぃ！」
ツッコミながら、自分はイツ花の漬けたお新香をパクつく夢見
「良いことを思いついた、後で蘭姉に一個食わせてやろーか、あの顔が崩れるかもしれんぞ」
と、そこで以蔵は鈴鹿を見て、
「……って思ったが、何だか効かなさそーだな」
「なんですか」

夢見のものを普通に食す無表情の鈴鹿を見て、以蔵は考えを改めた

「うぐぐ……俺っち、頑張る、っす……」
「おお、よく持つな、まだまだあるぞ頑張れ」
「何だか、顔色が悪くなってきましたね」
「漢方薬の対極のよーな食事だな」
口々につぶやく以蔵と鈴鹿
「ああもうっ、ユメ怒りましたぁ！」

きぃぃと夢見はその場で立ち上がる

「いやいや、だったらちょっと一口食ってみろよ、健康度下がるぞコレ」
「もうそこまで言われたらぁ、ユメお手伝いさん辞めますぅ！」
「だから食えよ、ホラ、ホラ」
「お手伝いさんやめて、メイドさんになるんですぅぅ！」

以蔵の突き出した黒豆を手で弾いて、夢見は泣きながら去ってゆく

「どう違うのでしょうか」
「……食べ物を粗末にしやがって」
黒豆を拾って、湯飲みの中の茶で洗ってから、門司の皿に丁寧に乗せる
泣きながら皿の上のモノを片付けていく門司をよそに、以蔵と鈴鹿、伽子は穏やかな新年を迎えたのであった

＜蘭の部屋＞

その頃蘭は、先月、親王鎮魂墓（しんのうちんこんぼ）で入手した指南書の解読を進めていた

「……分からぬ」
大筒と呼ばれる、新兵器を使った戦略が記入されているらしいのだが……
その機械構造、原理、戦術に組み込んだ場合の運用方法、事細かに書かれたそれらは、蘭には少し高度過ぎた

「……寒い」
途端にコタツが恋しくなってきた
指南書を後で蔵にしまおうと思いつつ、蘭は自室を出て居間に向かう
「うわぁぁぁん……！」
その横を泣きながら夢見が過ぎていった
「……」
あまり気にせず、蘭は一家のくつろぐ部屋に立ち入る

「あ、母上、いらっしゃいませこんにちはー」
「ん……？」
鈴鹿が両手を広げて出迎えてくれた
「お風呂にしますか、それとも私とですか？」

いつもと変わらない鈴鹿の声色が、何だか艶を帯びているような気もする

「……以蔵、鈴鹿に何をした？」
オレかよ、とつぶやく以蔵の着物の前がはだけている
彼は足を崩して座っていた
「イツ花の持ってきた甘酒だよ」

肩をすくめる以蔵の横、門司が泣きながら皿の上食事を平らげていた

「そいつも酔っているのか」
「いや……まぁこれは気にするな、それより鈴鹿がな、甘酒を飲んだ途端にぽぅっとしやがって、故障か」
「……ネジが外れたのか」
ぎゅぅと蘭の腕にしがみつく鈴鹿
「……母上、母上はどうして母上なのですか？」
上目遣いに見つめられ、蘭は少し困る
「何故と聞かれてもな……」
「それはな、コウノトリの仕業じゃなくて、男と寝ｔ」

蘭に蹴られて転がる以蔵

「……もう1才7ヶ月のくせに、まだまだ元気な」
逆さで足を屏風に突っ込ませたまま、以蔵がつぶやいた

傍らでは、同じく甘酒を飲んで桜色に頬を染めた伽子が、あははははと笑い続けていた
「お父さんとランラン、超ウケるー！」
あははははははははと伽子がその場で床を叩く
「……」
鈴鹿に抱きつかれ、伽子に思いっきり笑われ、蘭はふと庭を眺めた
こんな空気が、何だか懐かしく思えた

「そうだな……体力が有り余っているようだ、皆で雪合戦でもするか」
「やるー！」
真っ先に手を挙げる伽子
「母上、雪合戦とは何ですか？」
春生まれの鈴鹿が、蘭に問いかける
「も、もちろん俺っちも！」
「それ全部食ったらな」
以蔵の非情な言葉に、さめざめと泣く門司

新雪が積もる庭に行こうとする皆の前に、戻ってきた夢見が立ちふさがる

「ふっふーん、話は全部聞かせてもらいましたぁ！」
「……寒いな」
それは気温なのか夢姉の演出がなのか、とつぶやく以蔵
「蘭さまの弱点は寒さですぅ、ユメがぁ思いっきり雪玉をぶつけてやりますぅ～」
うふふぅと嬉しそうな夢見の顔に、そういえば、と蘭は思い出す

「……去年の一月だったか、夢見は借りがあったな」

「え、えええぇ、まだ覚えていたんですかぁ……？」
悪役のように口元を吊り上げる蘭に、少し怯える夢見
唯一蘭が夢見に土をつけられた件だ
「……では、俺と鈴鹿、門司の組と、夢見に以蔵、伽子の組に別れるか」
「こっちは二人かよ」
「絶対ユメのこと数に入れてませぇん！」

夢見がきぃぃと、以蔵の後頭部をぽかぽか殴りつける

激動の年末を過ごした壬生川家の新年は、
一家全員での、熾烈だが平穏な雪合戦で始まったのだった

第四話－8　「呪言」　１０２２年1月後編

＜出陣＞

一同は、雪合戦の後に玄関に集まる

「あー楽しかった！」

「結局、全然遊べなかったっす……」

明暗のはっきり分かれた若いふたりだ

「じゃ、そろそろ出陣すっか」

槍を担いだ以蔵（いぞう）が皆を見回して、おや、と怪訝な顔をする

「あー……そーいえば、今回は出陣するのが俺と蘭姉（らん）と鈴鹿（すずか）だけなのか」

伽子（とぎこ）はまだ戦場に出られず、門司（もんじ）は先月大怪我を負ったのだった

夢姉は……と思いついて、以蔵はすぐに考えを打ち消した

見送りに来ないで、夢見は居間のお掃除をイツ花としているのだ、

わざわざ戦いに巻き込むこともない

「まぁ、なんとかなるだろ」

いまだに健康度が１００から減らない当主に、矛能力に特化した

以蔵、さらに支援も攻撃も万能にこなす鈴鹿

朱点討伐隊の名は伊達ではない三人だ

「……それは良いのだが」

黙っていた蘭が、重くつぶやく

「……大丈夫なのか、鈴鹿」
さっきからずっと自分の腕にしがみついている鈴鹿に、酔いは醒めたのかと問いかける
「すこぶる大丈夫です」
「いやお前、蘭姉が何を心配しているのかも分からねーだろ」
「軒並み例年にも増して平気です」
顔色も表情も変わらないだけに、本気で心配だ

「……まぁ、いきなり後ろから斬りつけてくるような真似はしまい」
そこまでしたら返品だな、と思う以蔵
「それでは行ってくる……伽子は、夢見から術と武芸をしっかり教わっていろよ」
「りょーかーい！」

ビッと敬礼のポーズをする幼子に、蘭はうなずき、その様子を見ていた以蔵が注意を入れる
「いくら母さんの孫だからって、人の娘に手をつけるなよ」
「……くだらないことを言ってないで、ゆくぞ」

さっさと道なりに出発する蘭に、はいはいと言いながらついてゆく以蔵だった

＜忘我流水道（ぼうがりゅうすいどう）＞

ここは、新たに出現した三つの迷宮のうちひとつ、古い上水道で

ある

「天界でも最高クラスの実力がある神が、人間のために造った上水道ねぇ」

膝まで漬かる水をじゃぶじゃぶかきわけながら、三人は奥を目指す

「……来なければ良かった」

震えながら自分の肩を抱く蘭

「冬に来る場所じゃねーな……」

寒さには強い以蔵だが、珍しく泣き言をつぶやく

突き刺さるような水の冷たさに、徐々に足の感覚が麻痺していった

「……」

押し流されそうな水の流れに逆らって、三人は何とか上流を目指す

そんな三人に、初めて見る、金トラ大将が一同に襲い掛かった

鉄クマ大将によく似た姿をしている

「……鉄から金はともかく、クマからトラは、強くなっているのか分かんねーな」

以蔵が足を取られる川の中で、そうつぶやく

「極東ロシアでは、食料難の際にヒグマが若いトラを狩っていたという記録が残っているそうです」

「何でそんなこと知ってるんだ」

そんなことを言っていると、全体攻撃の＜血火弾＞により、１０００強のダメージを受ける壬生川（みぶがわ）家

「強いじゃねーか……」

「……油断しているからだろう、馬鹿者が」

以蔵の横を駆け抜けた蘭が、薙刀で金トラ大将の首を刎ね飛ばす

「……さぁ、先に進むぞ」

息も乱れぬ様子で、蘭が先陣をゆく

「……あいつ、1才7ヶ月だったよな」

「お元気ですね、母上」

呆れたように二人はささやきあった

～～

大疎水（＝給水・発電などのため、土地を切り開いてつくった水路）上流を抜け、一同は人魚の滝布と呼ばれる地に足を踏み入れた

「……こんなところに、滝が？」

「人魚の滝布ってからには、人魚がいるんだろーな」

疑いの半眼で、あちこちを眺める以蔵

「……不老長寿の象徴である人魚か……俺達には何ら関係ないな」

その肉を食べれば、人は永遠に死なない身体になると言われているが、それが本当だとしても、肉程度であの朱点童子の呪いを打ち破れるとは思えなかった

「跳ねました」

突然鈴鹿が、滝の左側を指差した

「どーした鈴鹿、まだ酔ってんのか」

「いえ、何か……とにかく、何かが潜んでいます」

珍しく歯切れの悪い言葉で、執拗にその辺りを指差す
「ふむ、先に進む道もない……調べてみるか」
蘭はそう言って、以蔵の肩を叩く
「オレかよ」
「……寒いのは苦手なのだ」

知ってっけどさ、と言いながら、以蔵は腰まで漬かりながら滝つぼを調べようと、水面に目を凝らして、

○「あら、こんにちは、この私……敦賀ノ真名姫（つるがのまなひめ）に何かご用？」

人魚を見た

「……本物か？」
情の深い笑みを見せながら、人魚はぼちゃんと水面から顔を出す
「……人魚、なんでしょうか」
「……」
蘭が眉をひそめた、この匂いはどこかで嗅いだことがある……

スタイルの良い身体を見せた人魚が可愛らしく微笑みながら、以蔵に尋ねる
「ウフフ…どうせあなたも、私の肉がお目当てなんでしょ？」
「……そんなお伽話に、付き合っている暇なんてねぇよ、お前は何者だ」

一歩引いた以蔵に、人魚が一歩迫る
「みんな最初はそう言うのよ、でも人間なんて結局同じなの」

さらに一歩下がった以蔵に、まるで抱きつくように近づく真名姫

「おおぜいの人間が永遠の命を求めて、私の体をむさぼったわ……
でも効果がないとわかると、それを黙って私を他の人に売るの」
「……不幸自慢なら、よそでやれ」
以蔵は真名姫の身体を押し返し、蘭の前まで下がった
「最後のヤツなんてだまされたと知って、私を犬の群れにほうり込んでくれた…」

黙って、真名姫の肌に触れた自分の手を見る以蔵

「……なんだ、お前」
肉ではなく……その感触は、まるで岩のように硬かった
「ウフフ…こんな私でよけりゃ…いいわよ、どこからでも食べて…」
真名姫は再び頭を下げて、水中に潜ると、勢いをつけて飛び出してきた

「さあ、この私の体！　むしゃぶりついてごらんなさいよ！！」

その身体が無残に変貌していた
眼球のない目、海草のようにゆらゆら乱れた髪、
銛を構えた白骨死体のようなその身体には、肉の欠片も残ってはいなかった

「……そうか、あの時の……！」
先々代当主・幸四郎（こうしろう）が殺された時の記憶が蘇る
一同は得物を構え、真名姫に向かって構え、
「＜真名姫＞ェェェェェェェエ！」

くぐもった声が、滝を爆発させた

以蔵に見えたのは、荒れ狂う水流に、蘭と鈴鹿が押しつぶされてゆく光景だった

左右の水が手足をちぎるほどに暴れ、その術に以蔵は壁の端から端まで流された

途切れた意識が戻った頃には濁流が引き、全身がめちゃくちゃに打たれた痛みが残り、鈴鹿の姿はなかった

「……なんだって」

槍を持つ手が真っ赤だった

隣で薙刀に寄りかかる蘭を見て、それは自分の血なのだと気づく

「……しまったな」

蘭が淡々とつぶやいた

「……俺達には、まだ早かった……今さら言っても、どうしようもないか……」

全身から噴き出した血によって青い羽織を深紅に染めた蘭が、触れてはいけないものに手を出してしまった愚かさを呪う

そして、真名姫から二発目の＜真名姫＞が轟音を立てて、壬生川家を強襲した

全員に４００のダメージを受け、かつての朱点童子討伐隊は一蹴された

「あなたたちは死ねるんでしょ？　うらやましいわね……」

真名姫の狂気を帯びた声は、人魚の瀑布にいつまでも……響いていた

＜壬生川家にて＞

壊走した三人の中で、ただひとり、致命傷を受けた者がいた

蘭は一度目の死を思い出す

光も希望もなく、ただ全身が蝕まれ、焼けつくような熱さがあり、手足を微塵も動かすことは出来なかった

少しずつ、死んでゆこうとしていた蘭を救ったのは、巻絵だった

「……母から貰った命も、ついに尽きたか……」

呆気無いものだ、人の身というのは

たかが全身が千切られそうになっただけで、死んでしまうのだから

布団に横になって、蘭は熱い息をはいた
あの日と同じく、熱い……、全身が熱を持って、あの日から寒さが苦手になったのだ

「当主さま……」

傍にイツ花がいた
視界が濁ってよく見えなかったのだろう、と蘭は思う
「当主さまに残された時間は、もうわずかしかありません……」
その言葉の意味は、熱に侵された蘭の耳にも届いた
「最後に新当主ご指名の任、立派に果たされますようお願い申し上げます」
「……俺は、夜明けまで、生きられるか？」
蘭は見えない目で天井を見つめたまま、尋ねた
「……恐らくは、もう」
その言葉で、全てを察する

「……わかった」

鬼に殺されるのは、自分の運命だと受け入れられた
だが、蘭にはまだ果たすべきことがあった

「……以蔵を、呼べ」

「えっ、鈴鹿さまではなくて、ですか？」

「早く……以蔵を、ここに呼べ！」
蘭は力を振り絞って叫ぶ

「はッ、はいただいま！」
その後で苦しくせきをして、蘭は再び短い昏睡に落ちていった

～～

「……人が来たのに、寝てんのかよ」
「……起きて、いる」

全身に包帯を巻き、当て木で右足と左腕を固定している以蔵が、蘭の枕元に座り込んでいた

「……次の当主は貴様だ、以蔵……手を貸せ」
手を伸ばして、以蔵を見上げる蘭
「無茶すんなよ」
以蔵に引っ張られ、四肢が千切れてしまいそうな強烈な苦悶に顔をゆがめながらも、蘭は身を起こす

「ぐっ……！」

「おいおい……」
「……構わない、あのままでは眠ってしまう」
蘭は以蔵の胸元を掴み、自分の口元に引き寄せた
「……蘭姉、接吻でもするのか」
「神に頼るな」
短く、誰にも聞かれないように小さく放った
「……なんだって？」
「奴等を利用しろ……それが、壬生川家の生き残る術だ……わかっ

たな」
「……どういうことだよ、蘭姉」
布団に座り、蘭は荒々しく胸を締め付けていた包帯を剥ぎ取る
「……以蔵、鈴鹿を頼む」
少し呼吸が楽になり、声が通るようになった
もう延命の必要などない、伝えたいことは伝えた
「……ああ、出来る限りのことはする」
蘭のもう何も見えなくなった目に、以蔵の夜叉のような槍さばきが映る
「……お前はもう、初子を超えた……これからも、鬼を斬り続けろ」
熱が全身を、脳を焼き尽くす
「……朱の首輪に喰われて、何も感じなくなったその心で……鬼を殺し、砕き、屠り続け……鬼の屍の上で死ね」
蘭は呪詛のように言う
「……知っていたのか、オレのことを」
以蔵の驚きの声
彼の身体はもう、とっくに変異していたのだ
「……見ていれば、わかる……あれは朱点童子の作った魔具だ、貴様はただでは死ねんだろうな……」
全身を永続的に苛む業火の痛みに、蘭の口元が釣りあがる

「それを知った上で……オレに呪いをかけるんだな」
「……そうだ、呪いだ……夢見のような者はもう出すな……何の疑いもなく、鬼を殺せ、それがこの家の宿命なのだ……」

蘭の口からうめき声のような笑みが漏れた
もし蘭が今の自分の顔を鏡で見たならば、かつて出会った相翼院の天女や、白骨の人魚と同じような形相だったと気づいたろう

「願いが叶わず、呪いが叶うなら……いくらでも呪うとも……呪いこそが相応しい！」

ぷつん、と、世界が閉じた

蘭は、ついに耳が何も聞こえなくなったのだ、と理解した
熱が逃げてゆく
蘭の身体を侵し続けていた熱が、指先から、髪の先から、首の裏から去ってゆく

「……俺の呪いだ、以蔵……この怨み、憎しみ……必ず、伝えてゆけ……！」

誰かに届くように、手を伸ばす
痛みが遠のく
吼えるように、蘭の中から激情が抜けて消えた

暗闇の中、光はない
初子（はつこ）も、巻絵（まきえ）も、誰も、誰一人として蘭を迎えには来ない

孤独の闇に蘭は堕ちてゆくが、蘭の心中は晴れていた

願いではなく、祈りでもなく、純粋な憎しみがその身に満ちていた

誰よりも壬生川家を想い、誰よりも気高く生きた猛将は最期に、
託すように、呪いの言葉を発した

「真っ暗だ……俺にはもう、明日が見えない……貴様が、代わりに、
見ろ……壬生川家の明日は、貴様が……以蔵！」

そう叫んで、
壬生川の戦鬼は、生涯ただの一度も涙を見せず――絶命した

壬生川　蘭　享年１才７ヶ月

葬儀の際、寒さが嫌いな彼女のために、
鈴鹿は土葬の土を多く盛り、その上に一杯の茶を線香代わりに乗
せたという

第四話－8　「呪言」　１０２２年1月後編（後書き）

出陣・忘我流水道（蘭、以蔵、鈴鹿）
訓練・夢見→伽子　討死・蘭

壬生川家家系図―四代目まで―

＜壬生川家　家系図＞

玄輝――伊織

臥家――臥蛇丸――巻絵――蘭――鈴鹿

　　――夏海

香家――のの香――佐和――夢見――門司

幸家――幸四郎――初子――以蔵――伽子

初代　玄輝
二代目　幸四郎
三代目　初子
四代目　蘭

男子・五名
女子・十名

老衰・玄輝　幸四郎　佐和　初子
戦死・伊織　夏海　蘭

病死　臥蛇丸　のの香
反魂　巻絵

〜〜

＜閑話休題＞

『俺の屍を越えてゆけ』は、本当に良いゲームですね

猛将の死と共に、物語は中盤戦へ突入してゆきます

登場人物全員に思い入れがあると言えばその通りなのですが、
その中でも第三次大江山討伐隊の四人は、特に気に入っています

母の死によって新生した蘭、
壬生川家に生まれながらも、普通の女の子として生きたがる夢見
完全に主人公のポジション、以蔵
そして、無表情なツッコミ、鈴鹿

これから彼らはどのように生き、死に、あるいは子を遺していくのでしょうか
よろしければ今しばらく、壬生川一族の波乱に満ちた物語に、お付き合いお願いいたします

伽子ちゃんかわいいよ伽子ちゃん！

……ええと、感想など、お待ち申し上げております
それでは

第五話－1　「鈴奏」　1022年2月（前書き）

夢見　1才5ヶ月
以蔵　1才2ヶ月

鈴鹿　10ヶ月
門司　6ヶ月
伽子　2ヶ月

第五話－1　「鈴奏」　1022年2月

＜夢見（ゆめみ）の部屋＞

修行やお勉強がない時の伽子（とぎこ）の遊び相手は、もっぱら夢見だ

「メミぃー、お手玉しよー」

夢見に引っ付く伽子は、がうーがうーと遊んで攻撃を仕掛ける

「でも伽子ちゃん、きょうのお勉強は終わったんですかぁ？」

「うん、ちゃんと＜お雫＞も半分くらい覚えたよ！」

「全部覚えないと使えませんよぉ」

これから覚えるもの！と胸を張る元気な少女を見て、夢見はよしよし、と頭を撫でる

「やっぱり、女の子は良いですぅ……ユメもホントは女の子が欲しかったんですよねぇ」

今月戦闘部隊に入ったばかりの伽子を見て、はふぅと息をつく夢見

「ちょっと母さんん！？」

部屋の隅、＜お地母＞の書をめくっていた門司（もんじ）が、ありえない言葉に思わず叫ぶ

「何かねー、メミぃはお姉ちゃんって感じー！」

「うふふ、伽子ちゃんは、可愛い妹って感じですぅ」

下に物怖じしない鈴鹿を持つ夢見は、なおさら伽子が可愛らしいのだろう

「ねぇねぇ、メミぃ、そういえばこの前からお父さんの元気がないんだよね」

伽子が言っているのは、以蔵（いぞう）が五代目当主の名を継いでからの話だ

「いっくんも、偉くなりましたしねぇ」

「ねぇねぇ、メミぃ」

夢見の袖を引っ張って、伽子が無垢な目で尋ねる

「やっぱり、お父さんってランランのこと、好きだったのかな」

聞き耳を立てていた門司が、ぶっ、と噴き出した

「え～～～、それはないですよぉ～～～」

全力で否定する夢見

あれだけ貴様やら無表情女やら呼び合っていたふたりのことだ、万が一もそんなことは、と夢見は思う

「あーじゃあ、もしかしてリンリンの方ー？」

「それならまだぁ、あるかもしれませんねぇ」

女性の話に花が咲く

（俺っち、この部屋にいても良いんだろうか！）

門司は気まずさを感じながら、黙って読書を続ける

「あたしも良いなぁ、そういう恋してみたいなぁ」

伽子は両手を胸元で組んで、夢見る少女のまなざしで天井を仰ぐ

「あ、でも伽子ちゃんのおばあちゃんは、ユメのママとラブラブだったんですよぅ」

「ええっ、マジですか！？」

大げさに驚く伽子に、夢見は続ける

「そこになんと蘭さまも加わってぇ、伽子ちゃんのおばあちゃんを挟んだ三角関係が出来ていたんですからぁ」
「うわー、修羅場マーチー」

初めて聞くはっちゃけ話に、伽子は瞳を輝かせる

「初子おばあちゃん、モテモテだったんだねー！」
「強くてぇ、格好可愛くてぇ、とーっても優しかったんですよぉ…
…よく笑う人で、ぽっ」
あははは一と笑う伽子が、邪気なく言う
「でもお父さんが笑ったとこ、あたし見たことないやー！」
「昔はよく笑っていたんですけどねぇ、いっくん」
夢見はちっとも深刻に見えない顔で、うーんと思い出す

「顔は悪くないんですけどぉ、たまに、何か怖いっていうかぁ、人を人とも思わないていうかぁ、冷酷残忍、極悪非道って感じぃ？」

以蔵の話題になった途端、大江山で何度か殴られた怨みが再発したらしい

「えーでもでも、お父さん超ウケるよー？」
「そうなんですぅ、鈴鹿ちゃんにも優しいんですぅ、もぅ、うちでユメにだけ嫌がらせをしかけてくるんですぅぅ！」
きぃぃと歯噛みする横、門司が「え、俺っちは？」という顔をしている

夢見が散々以蔵をけなすのを、伽子はあははは一と笑いながら聞き、そんな女性二人を門司は「女ってこ、こわいっす……」と思いながらビクビクと勉強を続けていたという

＜交神（こうしん）の儀＞

先月鈴鹿（すずか）と以蔵は大怪我を負ったため、休息の意味合いも兼ねて、
今月は交神の儀に励むことになった

「それでは、よろしく頼みますイツ花（いつか）さん」
巫女装束に着替えたイツ花に、深々と頭を下げる鈴鹿
「はァーい」

その横で、以蔵が憮然と座っていた

「何故、オレがここに……？」
鈴鹿に引っ張ってこられたのだ
「交神の儀が、どうやるのか分からなくて」
「……分からなくて？」
何か嫌な予感がして、以蔵は静かに尋ね返す
「だから、教えてもらおうと思います」
「付きっ切りで、か……？」

鈴鹿はこくん、と無言でうなずく
以蔵は鈴鹿の頬をベチと叩いて、黙って去ってゆく

「……どうして」
叩かれた頬を押さえて、鈴鹿は不満げにつぶやく
「モノを知らないっていうのも、罪なものですネェ」
イツ花が自分のことを棚上げにして、そう感想した
「では、イツ花さんが教えてくれませんか？」

「え、いやァ、あはは……そ、そう！　それじゃ神様にバーンとォ教えてもらいしょう!?　ネ?」

ふむ、と鈴鹿は口元に手を当てて、
「そうですね、神様ならウソをついたりはぐらかしたりしなさそうです」
得心したようにうなずく

「アハハ、じゃあ、この表からお目当ての神様を選んで選んでェ」
イツ花の差し出した神様一覧表から、鈴鹿が選んだのは土神だった
「……私に足りないのは、体、技ともに土の遺伝子です、ですからこの方でお願いいたします」
鈴鹿が合理的に選んだのは、ダルマこと七天斎八起だった
たらりと汗を流すイツ花
「こ、この方で良いんですネ?」
「この方ですと、何か不都合があるんですか?」
きょとんと尋ね返す鈴鹿に、イツ花は笑いながら後頭部に手を当てる
「あ、イヤイヤ全然そんな!　そ、それではァ、楽しんでくださぁい!」
イツ花は神様をおよび立てして、廊下に下がって襖を閉じる

部屋の中から、神様の「人生七転び八起きじゃ……」という低い声が聞こえてくる

「うぅ、何だか私、すっごい悪いコトした気分ですッ……」
イツ花は廊下で、交神の間に背を向けながら、そうつぶやいた

〜〜

翌月、以蔵が鈴鹿に、交神の儀はどうだったんだよ、と尋ねると、鈴鹿は「……やはり、よく知らない方とは……もう、やりたくないです」と、珍しく弱音を吐いたのだった

第五話－1　「鈴奏」　1022年2月（後書き）

交神の儀・鈴鹿×七天斎八起

第五話－2　「空涙」　1022年3月（前書き）

夢見　1才6ヶ月
以蔵　1才3ヶ月

鈴鹿　11ヶ月
門司　7ヶ月
伽子　3ヶ月

第五話－2　「空涙」　１０２２年3月

＜庭にて＞

「それでは、初めです」
鈴鹿（すずか）が手を振り下ろすと、門司（もんじ）と伽子（とぎこ）の間に緊張感が走った

「へへっ、相手が悪かったっすね、何てったって俺っちは世界・神術選手権で第二位を記録した――」

門司の台詞の途中で、伽子の結んだ術が完成する
「ええーい、死ねモンチー、＜お焔＞！」
小さな火球が、門司の足元で弾けて火の粉を撒き散らす
「熱いっ、熱いっすよっ、てか死ねって何っすか！？」
わたわたと慌てる門司に、鈴鹿がぽつりと、
「口上が長かったですね」

そこへ、いつも眠そうな眼をした以蔵（いぞう）が通りかかる

「……何やってんだ？」

庭に距離を開けて対峙する門司と伽子、その手前に鈴鹿が赤と白の旗を持って立っていた
「兄上、模擬戦です」
振り返って、鈴鹿がそう言う
門司が印を描いて＜白波＞の術を唱え、その衝撃波を伽子がひらりと避ける

「……術のみでか、夢見（ゆめみ）に師事した門司に、伽子が勝てるとは思わねーけどな」

現在、壬生川（みぶがわ）家を分別するのは、以蔵、鈴鹿、夢見それぞれの家系だ

術に秀でた弓使いの家が夢見、門司の血筋なのに対して、以蔵の流派は剣技・槍術に重きを置いている根っからの仕留め役だった

先々代の当主である初子が、夢見の母で４ヶ月年上の佐和に武芸で勝っていたのも、そういう遺伝子の特化によるものだ

「でも、伽子さんの術力は大したものです」

文武両道を志した蘭（らん）の血を引き継ぐ鈴鹿が、やんわりと以蔵の危惧を否定する

門司が＜業ノ火＞の術を唱えている間に、伽子が＜暴れ石＞を早口で結ぶ

「傍若無人に今し方・古今東西の荒石こぞり……ああっ、続きなんだっけ!?」

伽子が途中で頭を抱えて、印を中断してたところで、門司がにやりと笑う

「ワーハハ、勝ったっ、まだちっちゃい伽っちには負けるわけにはいかないっす！」

ビシッと伽子を指差す門司

鈴鹿が冷静に告げる

「門司さんも、術中断ですが」

「しまったっす！」

以蔵がこそこそと伽子に囁く

「荒石こぞりて、削岩突起寄り合わせ、喧々諤々大崩し、だ」
「3秒ルールです、まだ間に合いますね」
鈴鹿も伽子にうなずく
「ありがとーっ、古今東西の荒石こぞりて……削岩突起寄り合わせ・喧々諤々大崩し！」
きゅぴーんと伽子の指が光り、周囲の砂岩がざわめく
「もう3秒とか、とっくに過ぎているじゃないっすかー！」
「術なんて適当でも大体発動するからな」
「夢見姉上がよく間違っているのに無理矢理放ったりしてましたね」
のんきな言葉に、門司が何やら納得できないとわめきたてる
「＜あーばれーいーしー＞！」
門司の叫び声は、怒号を立てて押し寄せる岩々に一緒になって押し潰されていった
その光景を眺めて、以蔵は鈴鹿にぽつりと漏らした
「こりゃ、ダメだ」
「……何がですか？」
「何回やっても……相手が門司だったのが、勝因になっちまう」
「……そう、ですね」
鈴鹿も同意する
伽子の放った＜暴れ石＞が去ると、そこには伸びてぴくぴくと痙攣する門司の姿が残されていた
「ぶい！」
嬉しそうにVサインをする伽子に、以蔵と鈴鹿は頭を抱えていた

＜選考試合前・京の都＞

あちこちを包帯で結んだ門司を、伽子が引っ張ってゆく
「ねぇねぇモンチー、あたし水あめ食べたいっ」
門司が呆れながら返す
「あのっすね、そういうのは以蔵っち兄さんに頼めば良いじゃないっすか」
「えー、じゃあ、あたしがモンチーに、買った水あめを少し分けてあげるってのでどう？」
「でもそれ俺っちのお金っすよね！？」
そんなふたりを、以蔵と鈴鹿が遠くから眺める
「なんだかんだで仲良いな、あいつら……」
「以蔵兄上が門司さんをからかうのを、すっかり覚えてしまいましたね伽子さん」
鈴鹿が冷静に分析する
「そーか、門司の存在が教育上良くなかったんだな」
「曲解し過ぎです」

それよりも、と以蔵は話を変えた

「夢姉の様子、変だったな」
いつもなら、あれほどはしゃぐ京の都だというのに夢見は着いて来なかったのが、以蔵は不思議でならなかった
「門司も来るんだし、家に居る理由なんてねーのにな……」
夢見の様子を思い起こすと、家を出る自分たちに向けた言葉はそっけない「行ってらっしゃいですぅ」だけだった
「何でだろーな鈴鹿」

「分かりません」
「……あっそ」
「人の気持ちは、その本人にしか分かりません」

まぁそりゃそーだわな、と以蔵がため息をつく

「あっ、何かそうやっていると、夫婦みたい！」
いつの間にか戻ってきていた伽子が、頭に狐のお面をつけたまま
以蔵と鈴鹿を指差す
思わず顔を見合わせる年長者ふたり

「……鈴鹿と、か」
「……以蔵兄上と、ですか」
ほぼ同時につぶやいた

「何でそんな嫌そうな顔するの！？」
突っ込む伽子の後ろ、荷物持ちと化した門司がよろよろと歩いてくる
「俺っち、一応怪我人なんすから……」
両手に出店の菓子やら、京土産の羅生門ちょうちんやらを重そう
抱えたまま、るるるーと涙を流す門司
伽子はきょとんと目を丸くさせる
「え、モンチー怪我しているの？」
「あなたが怪我させたんすよね！？」
ごめんごめんあははは一、と笑う伽子に鈴鹿がうなずく
「やはり、以蔵兄上のお嬢さんですよね」
「……さ、そろそろ会場に行くか」
聞こえなかったフリをして、以蔵は先に進んでいった

＜選考試合＞

伽子の初陣となる春の選考会で、壬生川家は当主・以蔵による圧倒的な強さを見せつけ、堂々の夏・春連覇を果たした
その伸び伸びと戦う伽子の幼い姿が、京の町でも密かな人気を博したのは、壬生川家の知るところではない話だった

＜壬生川家＞

「ただいま」
選考試合の疲れも少なく、槍を担いで戻ってきた以蔵が屋敷に戻る

いつもなら真っ先に出迎えて来るはずのイツ花の姿が見えない
「……まぁ、夢姉のお迎えとかは期待してなかったけどな」
そう言いつつ何となく虫の知らせを想い、様子のおかしかった夢見の事が気にかかって、ひとりで早く帰ってきたのだ
「当主さま！」
玄関に座り込んで足袋を脱いでいた以蔵に、イツ花のただ事ではない声が届いた
「イツ花……どーした、そんな慌てて？」
血相を変えたイツ花が、以蔵の目を見据えて、ただ一言つぶやいた
「夢見さまが……お倒れになりました」

以蔵はその瞬間、槍を投げ捨てて駆け出した

＜夢見の部屋＞

遅れて鈴鹿が夢見の部屋に着いたとき、以蔵が夢見の布団の前でうなだれたように座っていた
寝ている夢見は顔色が青く、一目で弱っているのが見て取れた

「以蔵兄上……」
「夢姉は、きっと死ぬよな」

以蔵は夢見の手を握ったまま、そうつぶやいた

「……夢見姉上は1才6ヶ月、そろそろ難しいかもしれません」
「門司はまだか」
鈴鹿は以蔵の隣に腰を下ろす
「先ほど早馬を手配しましたが……なにぶん、門司さんは伽子さんと一緒ですから」
伽子の荷物を背負い、歩幅の短い子供のお守りをしているのだ、壬生川家に帰ってくるまでまだ少し時間がかかるはずだった

「目、覚ますかな、夢姉」
以蔵の声は穏やかだった
「分かりません」
「……お前そこは、ウソでも、覚ますって言う場面だぞ」
「そんなウソは、つけません」
鈴鹿は静かに、そう答えた

「イツ花が教えてくれたんだ、夢見の言葉、何だと思う？」
「分かりません」
淡々と以蔵は続けた
「ごめんなさい、だってよ……わたしでごめんなさい、ひたすら、ごめんなさいだとさ」
「そうですか」
「……夢姉をこんな風にしたのは、やっぱりオレたちなんだよな」

鈴鹿は首を振る

「私には、分かりません……」
以蔵は枕元にあった濡れた手ぬぐいで、うなされている夢見の額の汗を拭き取る
「……ただ、私が母上から聞いた話があります」
「蘭姉の言葉か……」
「……生まれてくる赤ん坊は、天界の神にくじ引きを引かされて……当たりに当たったが最後、壬生川家に生まれ落ち、死ぬまで、神の退屈しのぎに鬼を殺し続けるそうです……私には、意味が分かりかねましたが……」

くじ引きで決まった罰か、と以蔵がつぶやく
少しの間があり、
ふたりの前、夢見がうっすらと瞳を開けた

「う……うぅ……」

「……夢姉」
以蔵が夢姉の手を強く握る
「わたし、ごめんなさい……誇れることが何もなくて、こんな娘で……ごめんなさい、ママぁ……」

夢姉の目から、涙がこぼれた
「夢姉……お前は良く頑張ったよ、もう……ゆっくり、寝るんだ」
「親不孝ものでしたけど……許して、ください……ママ……」
その震える唇を見て、以蔵が強く首を振る
「……夢姉は良くやった、オレたちと朱点を討ったんだからな……誰にも出来なかったことを、成し遂げたんだよ……」
泣きながら、夢見は最後の力を振り絞り……かすれ声でつぶやいた
「私、もうダメみたい……しょうがない、ですよね……ごめんなさい……」

壬生川　夢見　享年1才6ヶ月

以蔵はいつまでも、夢見の手を握っていた

「なぁ……鈴鹿」

呼ばれて向いた鈴鹿は、以蔵の表情を見て、驚きを隠せなかった
夢見の手を握る以蔵は、まるで能面のような無表情だった

「おかしいだろ、オレ……何も感じねーんだ……」

彼は呆けたように、夢見の亡き顔を見つめていた

「夢姉の死を、ただ受け止めていて……悲しくもねーし、寂しくもねーし……ただ、あった事を事実として、受け止めているんだ、オレ……大切な、家族だったのにさ……」

「以蔵、兄上……」

鈴鹿が痛々しいと思ってしまうほど、以蔵の声は普段と何も変わってはいなかった

「オレ、好きだと思ってたんだけどな、夢姉……弱虫だったオレをいつも、引っ張り回して……いなくなったら、泣けるって、どっかで信じてて……それが、最後の望みだったんだけどな」

屋敷から騒がしい声が聞こえてくる、門司が到着したのだろう

「オレ、狂っちまったのかな、何も感じなくなって、このまま死ぬんかな……」

夢見の亡骸を前に、以蔵は恐怖すらも感じることができない
朱点（しゅてん）の首輪に喰い尽くされたこの心は、もう枯死しているに違いない

蘭はこの世を呪いながら死んでいった、あれはきっと、自分の行く末なのだ
だから蘭は、鈴鹿ではなく以蔵を呼んだのだと、以蔵は今になってようやく理解した

ただこの心が波打つのは、鬼を討ったその時だけ――
以蔵は己の胸を強く握る

「そうだ、オレは……失った心を取り戻そうとあがくたびに……鬼を殺し、砕き、屠り続けて、最期には鬼の屍の上で死ぬんだな……」

以蔵は幽鬼のように音もなく立ち上がると、黙って部屋を出てゆく

入れ替わりに、泣きながら門司と伽子が入ってきた

「兄上……！」
鈴鹿は部屋を出て、以蔵を追いかける
だが、その以蔵の背中から立ち上る鬼気を見て、息を呑んで足を止めてしまった
鈴鹿はふいに、選考試合で彼の情け容赦ない強さを妬んだ者から囁かれていた、以蔵の二つ名を思い出していた

鬼斬り以蔵

壬生川五代目当主は、こうして一族の最年長となった

第五話－2　「空涙」　1022年3月（後書き）

選考試合（以蔵・鈴鹿・門司・伽子）　老死・夢見

第五話－3　「臥家」　1022年4月前編（前書き）

以蔵　1才4ヶ月
鈴鹿　1才
門司　8ヶ月
伽子　4ヶ月

第五話－3　「臥家」　1022年4月前編

夢見(ゆめみ)が亡くなって、門司(もんじ)は読書をすることが多くなった

元服した門司は広い部屋をひとりで持て余しながら、術の勉強をしていた

「モンチー、暇ー？」

ただ、そのほとんどの時間は、屋敷をうろちょろする伽子(とぎこ)に邪魔されていたが

「伽っち、鈴っち姉さんのとこに遊びに行ったんじゃなかったんすか？」

書物の上に頭を乗せて門司を見上げる伽子が、口を尖らせて言うまるで読書を邪魔する猫のようだ

「何だかね、きょうリンリンの子が来るみたいで、お父さん引っ張ってっちゃった」

「はぁ、いつも一緒っすねあの二人」

「もう夫婦だよね、夫婦」

あんな父親とあんな母親を持つ伽子に、思わず同情してしまう門司

「で、何やってたのー？」

門司の背中に乗っかって、伽子は肩越しに教本を覗き込む

「いたた、ちょっと重いっすよ、＜くらら＞の巻物っす」

「え、もしかしてあたしに教えてくれるために予習？」

「どんだけポジティブなんすか！？」

ちゃうわっ、と伽子を振りほどく門司

「なーんだ、せっかくモンチーにお兄ちゃんっぽいことをさせてあげよーと思ったのに、優しいお伽ちゃんが」
「それが教えられる立場の言い分っすかね！？」
あははははーと笑って伽子は話を変える
「それはそーと、モンチー暇ー？」
「俺っちの声聞こえてたっすか！？」
げしげしと門司のわき腹を突きながら、伽子は一方的に話を進める
「もし暇なら、お花見しなーい？　お花見ー」
そういえばと、門司も＜くらら＞の書から目を上げて、外を眺めるなんだかんだで、伽子のペースに乗ってしまうのだ
「もう桜の季節っすかぁー」
「世界でもっとも綺麗なお花なんだってよ、七色に輝いて、夜になると自ら輝いて、さらに見る角度によって色が変わったり、花びらの大きさが3メートル強だったりするのかな」
いまだ桜を見たことのない伽子が、勝手に想像する
「何かもうそれ、花の妖怪っすね」
「えっ、花の妖怪なの桜って！？」
「へ？」
血相を変えた伽子に、門司が嫌な汗を流す
「そんなまさか、壬生川（みぶがわ）家の敷地内にまで妖怪が入り込むなんて…
…この正義の槍使い、お伽ちゃんが成敗ー！」
そう言って猛ダッシュで部屋を出て行った伽子を、慌てて追いかける門司
「ちょ、俺っちが悪かったっすから！」
父子ともに、以蔵（いぞう）の家系からは振り回され続ける門司だった

＜鈴鹿の子＞

儀礼の間に腰を下ろして、鈴鹿はイツ花の言葉を聞いていた

「鈴鹿さま、七天斎八起さまより、新しいご家族を預かって参りましたァ！」

心持ち嬉しそうに正座する鈴鹿の横、以蔵が憮然とした顔であぐらをかいていた

「……何でオレはいつも、お前のお守りをせにゃいけねーんだ」

「一家を守るのは、当主の務めだと母上は常日頃から言ってました」

子供を迎え入れる作法がわからなくて不安だからついてきてほしい、と鈴鹿が頼んできたのがつい先ほどのことだ

「……それは蘭姉の信条で、ってまーいいか……来るのは、臥家の五代目、だったか」

「がけ？」

聞きなれない言葉に、鈴鹿は首を傾げる

「ああ、そろそろ三つの家も特徴が明確になってきたし、ここらで呼称でも考えよーと思ってな、初代が臥蛇丸だから、臥家」

「臥家二代目が巻絵さんで、三代目が母上、四代目が私ですか」

代々の薙刀士の家系である

「そういうこと、門司んとこは香家、んでオレが幸家だ」

鈴鹿は、分かりました、とうなずく

「でも、兄上の家は幸家ではなく、本家でも良かったと思いますが」

「母さんの代ならともかく、現当主がオレじゃ、おこがましいよ」

そう言って、以蔵は肩をすくめて、イツ花を見る

「悪い、話し込んじまったな、続けてくれ」

「はァーい」

ニコニコとイツ花が続ける

「おめでとうございます、男のお子様です！」

「男、か、増えたもんだな我が家も」

壬生川家に来てから門司が生まれるまで、ずっと一家で男ひとりきりだった以蔵がつぶやく

「なんだか、ただ者じゃない眼の輝きをお持ちです！」

鈴鹿がちょっぴりだけ嫌そうな顔をしたのを、以蔵は見た

「ただ者で、良いのですが……」

「それでは、お呼びいたしまーす！」

「よろしくお願いしまーす！」

障子を開けて現れたのは、派手な金の髪を持つ、肌の黒い少年だった

愛嬌のある顔立ちの子に、鈴鹿は英雄（ひでお）と名づけ、薙刀士の道を歩ませた

「なかなかの美少年だな」

ふーん、と以蔵が感想を口に出す

「よろしくお願いします、英雄さん」
自分の息子に対しても敬語で頭を下げる、バカ丁寧な鈴鹿
「ぼ、ボク、頑張りますっ」

そう言って、英雄ははにかみながら微笑む
「最近の壬生川家にはいらっしゃらなかった、まともそうな方ですネェ」
「いやせめて、伽子はまともでもいいだろ」
イツ花の感想に、あれくらいの笑い上戸勘弁してやれよ、と以蔵がつぶやく
「英雄さんもどうか……この壬生川家で、まっすぐに育ってください」
「お母さん……」
鈴鹿が英雄の頭を良しと撫でる
「ありがとう、お母さん、ボクもこんな美人な人がお母さんで良かったっ」
「美人だなんて……そんなこと言われたの、初めてです」
ちらりと以蔵を眺めながら頬に手を当てる鈴鹿
なんとなく面白くなさそうにしている以蔵が、横からしゃしゃり出る
「でもな、この壬生川家に生きる以上、何か特技は必須だからな」

まっすぐなだけじゃダメだぞ、と付け加えて以蔵は鈴鹿を指差す

「例えばこいつは、どんなにマズイものでも顔色ひとつ変えずに食べれる化け物だ」
「人をそういう風に言わないでください」
聞こえないフリをして、以蔵は続ける
「オレなら、どんな相手にも揺るがない、淡々としたツッコミ」

「え、特技だったんですか？」
そこで以蔵は、さあ、と小さな子供に詰め寄って、
「さ、英雄は何があるんだ」

「え、ええっ！？」

以蔵の無表情に、英雄は思わず大きな瞳に涙を浮かべる
「怖がっているじゃないありませんか、兄上」
「そ、そんな……ぼ、ボク、特技なんて……ぐすっ」
鈴鹿が英雄を抱き、非難するように以蔵を見る
「オレは昔っから女に優しくするよう、母さんや夢姉にしつけられたが、野郎はそれに該当しねーもんでな」
「そうでしたか、門司さんを虐めていたのは、てっきり夢見姉上を取られたからだと思っていましたが」
「なかなか言うじゃねーか鈴鹿、よし表に出ろ」
「もしかして英雄さんにも、そういう感情を抱いていらっしゃるんではないでしょうか？　と思っただけです」

以蔵と鈴鹿の口論をイツ花が横で、夫婦喧嘩は犬も食いませんからネェ、と傍観していた

「も、もうやめてっ」
そこに、涙をいっぱいに浮かべた英雄が、ふたりの間に割って入った
「よ、よくわかんないけど……でも、け、ケンカはダメだよっ」
潤んだ瞳で見つめられ、以蔵と鈴鹿は何となくそっぽを向く
すると、英雄が突然ニッコリと微笑んだ

「ボクの特技、こんなのでどう？」

「……え？」
「……は？」
呆気に取られて、二人がつぶやく
「天界でも、ボク結構みんなに可愛がられてたんだー、えへへ」
愛らしく微笑む英雄を前に、以蔵が思う

（……なんてガキだ）

「……？」
鈴鹿はそんな息子に、しばらくきょとんとしたままであった

第五話－４　「轟駆」　１０２２年４月後編

＜出陣＞

「それじゃ、行って来るか」
身軽な装備に槍を担いだ以蔵（いぞう）が、眠そうな目で辺りを見つめる
「英雄（ひでお）は今月自習か……訓練要員も、いなくなっちまえば不便だな」
「それ、誰のことですか？」

鈴鹿（すずか）の問いかけに以蔵は何も言わず、ひとりで先に行ってしまう

「もう……あの人はまったく」
「頑張ってね、鈴鹿お母さん」
まるで天使のような笑顔で、英雄は鈴鹿に抱きつく
「わ、可愛い！」
目を輝かせる伽子（とぎこ）に驚いて、鈴鹿の後ろに隠れる英雄
「あ、ごめんごめんびっくりさせちゃったかな、あたし伽子、よろしくね！」
「あ、あの……よろしく、お願いします、お姉ちゃん」

もじもじしながら、英雄は伽子の差し出した手を掴む

「おー、俺っちは門司（もんじ）だ、よろしくっす！」
「あ、うん、よろ」
ぼそぼそとつぶやく英雄
「何すかその態度の差は！？」

いきなり怒鳴りだした門司に、伽子と鈴鹿が怪訝そうな目を向ける
「何ですか、門司さん？」
「ど、どうしたのモンチーいきなり、顔が良い子が気に食わないの？」
女性陣から奇異の視線を浴びせられ、門司は口をもごもごしながら英雄を指差す
「い、いや、その子がっすね……」
門司から指差された英雄は、再び鈴鹿の陰に隠れる
「ぼ、ボク……あの、何も……」
「ちょっとちょっとー、何イジめているのモンチー、この世界心狭い選手権一位めっ」
目を吊り上げる伽子に、門司はあうあうと口をぱくぱくさせた後に、
「う、うわぁぁぁん！」
泣きながら走っていった
「何だったの……？」
「何でしょう……」
鈴鹿と伽子に頭を撫でられながら、英雄はこっそりと勝者の笑みを浮かべていた
＜紅蓮の祠＞
以蔵、鈴鹿、門司、伽子という選考試合に出場した四人が訪れた

のは、灼熱の洞穴だった

火山に繋がっているのか、あるいは冥府への入り口なのか、洞窟にはマグマが噴き出し、進軍は困難を極めた

「……暑いですね」

「お前が、言っても……説得力が、ねーよ……」

以蔵のツッコミも、心なしか冴えない

現れる妖怪は強敵の上、全体回復の術＜お地母＞を使えるのが、経験豊富な以蔵と夢見（ゆめみ）の術力を継承する門司のふたりだけという有様

鈴鹿は土の遺伝子が極端に欠落していたし、伽子は今回が出陣二回目だ

そういうわけで治癒の術に苦労しながらも、以蔵を中心とした圧倒的な攻撃力により、壬生川（みぶがわ）家は何とか奥へと進んでいった

「目的は奉納点（ほうのうてん）を稼ぐことと、新しい洞窟の探索、それに門司さん伽子さんのご成長です」

「履き違えてはねーよ」

槍を振り回し、火妖の腹に次々と風穴を空けてゆく以蔵が、呼吸を整えながら返事をする

以蔵は口元に手を当てていた

油断すると、顔が笑みを形作ってしまいそうで

そんな顔を娘に見られてしまいそうで恐ろしかったのだ

「あまり先に行かないでくださいね、兄上」

「……分かってる」

鈴鹿の言葉で気負う気持ちを抑えると、以蔵は若人たちと歩調を合わせて、共に先へと歩む

炎奏廊（えんそうろう）と呼ばれる回廊を抜け、一同は熱波の中を奥へと辿ってゆく

「あっつーーい！　お父さん脱いでも良い！？」
もう我慢できないと言った顔で、伽子が以蔵に尋ねる
「ちょ、伽っち」
たしなめようとした門司を手で押しのけつつ、以蔵が短くつぶやく
「門司が喜ぶから、やめとけ」
「あー……うん、そっか、じゃあガマンする」
「ちょ、どういうことっすか！？　何でそれで納得するんすか！？」
心持ち伽子は、門司から距離を取った
そんな気全然ないのに……と、涙を流す門司

「水分が勿体無いです」
顔色ひとつ変わっていない鈴鹿に、さらにトドメを刺された

～～

４ノ宴、５ノ宴……と一風変わった名前の横穴を抜けてゆき、
強力になった妖怪により健康度を削られながらも、一同は開けた空間に出た

四人がたどり着いたのは、炎舞廊（えんぶろう）という名の広間だった
「嫌な……臭いがするな」
以蔵が眉をひそめて、槍を構える
「私には感じられませんが……」

「いや……背中が、ピリピリしやがるんだよ」

周囲を警戒してろ、と以蔵は言いつけると、ひとり一歩前に踏み

出した
　並の人間なら気づかない、わずかな振動が足に伝わった
「お父さん、何か来るっぽいよ！？」
「……伽子も、か」
　地面から伝わってくる音は、どこかで聞いたことがある、以蔵は記憶を巡らせる

「鈴鹿はオレと前へ、門司と伽子は後ろでいつでも術を撃てる準備をしておけよ」
「りょーかい！」
「うっす！」
　元気の良い声を流しつつ、脳裏をよぎる音を照らし合わせる
（これは、そうだ、京の都で……？）
、以蔵の中で段々大きくなってくる音と記憶が一致した

「……これは、車輪、か！」
　以蔵はその瞬間槍を放り、隣で薙刀を構える鈴鹿を抱いて、右後方に大きく跳んだ
　直後、岩盤を砕いて出現した一騎の車が、先ほどまで以蔵のいた位置に突っ込んでいく

　その荷車は、体長が壬生川家の蔵ほどはありそうな、化け物だった
　跳ね飛ばされていたら一撃で葬られていただろう

「……は、ありがとう、ございます」
「気づくのがおせーよ……」

　鈴鹿を抱いて着地した以蔵の前に、壁に突進して停止した車――
　燃え盛る火炎の車が方向転換してその正面を向けてきた

火車の上に、巨大な蛇の胴体を持つ燃える髪を生やした男が乗っている

「え、人間？」
「なはずがねーだろ……」

鈴鹿を降ろして、以蔵は投げ捨てた槍を拾う
炎の車に乗った益荒男は、荒々しく怒鳴った

鳴神小太郎「燃え尽きよ！」

小太郎は大きく叫び、火炎系全体術＜双火竜＞を発動させた
竜の尾を模した二本の熱線が暴れ回り、伽子や門司、以蔵や鈴鹿の身体を薙いでゆく
全員に１５０ほどのダメージを受ける壬生川家

「ひい……＜お地母＞っす！」
間髪入れずに門司が治癒の術を唱える
「……門司さんだけじゃ、回復が追いつきません」
「チ……＜お地母＞！」
以蔵が下がって印を結び、代わりに鈴鹿と伽子が前に出て、小太郎に飛びかかった

「壬生川正義の一番槍、参りまーーーっす！」

小太郎が縦横無尽に振り回す灼熱の髪の毛を避け、切り落としながら、鈴鹿と伽子がその懐に潜り込む
だが真っ先に飛び込んだ鈴鹿の薙刀では、その身体に引っかき傷

程度のダメージしか与えられない
伽子も続くが、同じく表皮を傷つけただけで、肉まで届かない
小太郎「稲妻よ！」
それどころか、十分にひきつけられたところで小太郎の＜雷電＞をまともに浴びてしまう
ぼて、と後方に倒れる伽子と、身を守ったまま以蔵の横に着地する鈴鹿
「無茶すんなよ……＜お雫＞！」
「……普段と何だか逆ですね」
以蔵が振り返ると、伽子に門司が駆け寄って＜お雫＞を唱えている場面が見えた
「鈴鹿、＜武人＞何回で行けそうだ？」
「……そうですね、五回六回……遠そうです」
敵一列を攻撃する特性上、弓以上にボス戦には不向きな武器が薙刀なのだ
「ホント我が家は、全体攻撃を持つ敵に弱いな……」
少し距離を離した途端に、＜双火竜＞と＜雷電＞の猛攻撃が放たれてくる
溶岩を撒き散らしながら飛来する熱光線と雷に、壬生川家は翻弄され、直撃は避けつつも１５０と２００を与えてくる全体攻撃術の威力にジワジワと体力を削られてゆく
回復の術で手一杯になり、どうにも反撃の糸口が掴めない！
「このまま俺っちの技力が尽きたら、終わりっすよー！　＜お地母

＞！」
「ひーん」
あまりの消耗の激しさに、伽子も後方から＜お雫＞の援護に切り替えた
「兄上、このままでは……！」
暴れ狂う炎によってあちこちに火傷を負っている鈴鹿が、果敢に小太郎に挑みかかりながら、以蔵に怒鳴る
「……術は面倒だな、糞」
軌道の読めない雷撃に、以蔵もまた手足からボタボタと血を流して、それでも何とか槍を構えていた
せめて近づければと歯噛みをしている中、ついに伽子が膝をついた
「うわぁん……もう、ダメ……」
「伽っち！」
門司が駆け寄ろうとした瞬間、伽子の姿が、放たれた火炎に覆い尽くされる
それどころではなく、続いて鈴鹿までも小太郎の＜雷電＞に捕らえられた
「……土の遺伝子の欠乏による、術抵抗力の不足、ですか」
虚ろな目をして、その場に倒れこむ鈴鹿
「うわぁぁ、もうダメっす！」
伽子だけではなく、蘭（らん）の血を引く守りに秀でた鈴鹿が倒れたことにより、門司は頭を抱える
門司の前、以蔵が小さくため息をついた

「……やりやがったな、お前」

唱えていた＜お地母＞を中断し、槍を水平に構えて、以蔵は小太郎を睨んだ

「蘭姉の次は鈴鹿か？　ざっけんなよ、殺すぞ」

口角を吊り上げて犬歯を剥く

小太郎「散れェ！」

小太郎が傷ついた壬生川家当主に向けて、幾重もの火炎の螺旋を吐き出す……が、以蔵はそれらを振り回した槍で弾きながら、小太郎へと詰め寄る

「え、え、以蔵っち兄さん!?」

鈴鹿や伽子があれほど苦労していた間合いに、以蔵は三拍子で入り込んだ

一瞬の出来事に戸惑う小太郎の眼前で、以蔵は槍を振るう

鈴鹿の狙っていた、小太郎の眼球に向けて

――突き刺した

小太郎「ぐおおおおおおおおお」

苦悶に震え、怯む小太郎を、以蔵は滅多刺した

頭を、腹を、手を、胸を、耳を、肩を以蔵は刺し貫く

その容赦のない猛攻に、門司は息を呑む

童子が虫を解体するように、以蔵が鬼を細切れに斬り裂いてゆく

小太郎「燃え尽きよォオオオ＜花乱火＞！」

血まみれの小太郎の絶叫が響き、以蔵は至近距離で火炎球の直撃を受けたように門司には見えた、が、以蔵は信じられない行動に出た
小太郎の腹の肉を槍でえぐり、その蛇の胴体の中に身を潜め火炎をやり過ごすと、以蔵はそのまま渾身の力で背中を突き破った

小太郎「あああああああああああああああああああああ」

空気を振るわせるほどの叫喚が響き渡り、背中から這い出た以蔵はその小太郎の頭部に槍を打ち下ろす
凄惨な音と共に火の粉となって散ってゆく小太郎

相手は鬼とは言え、姿を変えられた神に対するあまりの仕打ちに、門司は絶句する
「い、以蔵っち、兄さん……？」
鬼の血を浴びて、全身を真っ赤に染めた以蔵がゆっくりと振り向く
「ひっ」
思わず門司は短く悲鳴を上げた

「……ん」
以蔵は自分の頬に手を当てる
「……どーした、門司」
「い、いえ……な、なんでも、ないっす」

とても口に出すことなど、できるはずがない
一瞬、以蔵が鬼に見えてしまったなどと
爛々とした赤い眼に、耳まで裂けた口が笑っているように見えたのだ――

以蔵は、倒れた鈴鹿、うつ伏せでぴくぴく痙攣している伽子を介抱してから、髪を縛っていた藍色の飾り布を解き、再びため息をついた

「……汚れちまった、な……」

もはや赤紫に染まった飾り布を再び髪に巻きつけ、以蔵は撤収の指示を門司に出した

こうして一同は鳴神小太郎を撃破し、二名の重傷者を出しながらも大量の奉納点（ほうのうてん）を稼ぎ、紅蓮の祠から帰還したのであった

第五話－４　「轟駆」　１０２２年４月後編（後書き）

元服→門司　出陣・紅蓮の祠（以蔵・鈴鹿・門司・伽子）
初見・英雄→薙刀士

第五話－5　「門人」　1022年5月（前書き）

以蔵　1才5ヶ月
鈴鹿　1才1ヶ月
門司　9ヶ月
伽子　5ヶ月
英雄　1ヶ月

第五話－5　「門人」　1022年5月

＜鈴鹿（すずか）の部屋にて＞

「ちょっと……兄上……」
「馬鹿野郎、じっとしてろっての」

部屋の中から、押し殺した声が聞こえる

「強く……しないでください……」
「……細いよな、お前」
「ん……っ」

くぐもった声が、空気を震わせる
その外、たまたま前を通りかかった怪我人・伽子（とぎこ）が、障子を耳にぴたりとつけていた

（ちょ、そんな、えっ……！）

中の囁き声に、思わず聞き耳を立ててしまう

「ほら、ジッとしてろ……すぐ終わっから」
「やめて……ください……」

衣擦れの音が聞こえてきて、伽子は思わず喉を鳴らした
（ど、どうせこんなの、絶対、オチがあるに決まってるねっ！）
ぷるぷると震える手で、障子に指をかける伽子

中から聞こえてくる艶のある声に、思わず尻込みするが、えええいっと手に力を込める
バシーンッ
「お父さん、リンリン、何を、し、て」
上半身裸で嫌がる鈴鹿の上に、以蔵(いぞう)がまたがっていた
父と目が合う伽子
伽子は無言で障子を閉めようとする
「ご、ゆっくり～……」
「待て」
素早く伽子の襟首を掴んで、以蔵は中に引きずり込む
「まったく、このエロ娘……」
腕組みをする以蔵の奥、鈴鹿が顔を赤らめてそっぽを向いていた
「え、え……あの、アレ終わった、の？」
「なにがだ、なにが……」
わたわた慌てる伽子にため息をつく以蔵
「良い教育をされましたね、兄上」
「……いやここらへんは、夢姉の領域だと思うんだけどな」
鈴鹿の皮肉に、以蔵は頬をかく
「……鈴鹿の火傷の手当てをしてただけだぞ、オレは」
手のひらで顔を覆いながら、指の隙間からこっちを見ている伽子に、一応釘を刺す以蔵
「えー……そう、だったんだ」
安心なのか期待ハズレなのか、複雑な年頃の伽子だった
「お前は、自分の父親が義妹に手を出していたら、面白かったのか

「……」

そう言いながら、以蔵は包帯を握り締めたまま、鈴鹿に近づく

「さ、そろそろ観念しろ鈴鹿」

「……大丈夫です、ひとりで出来ます」

鈴鹿の身体にはまだ、先月に受けた火傷の跡が色濃く残っていた

「お前、両手も満足に使えず、自分にどうやって自分で包帯を巻くんだ」

「……く、口で」

「馬鹿野郎」

以蔵は嫌がる鈴鹿を押さえつけて、その身体を手ぬぐいで拭きつつ、包帯を巻いていく

「……」

「そんな嫌そうな顔するなよ……門司（もんじ）にされるよりはマシだろ」

どこらへんが嫌そうな顔なんだろう、と伽子が鈴鹿の様子を観察するが、彼女の目にはいつもの無表情にしか見えない

「……いたいです」

「傷なんだから当たり前だろ……」

「兄上は、乱暴です……」

「それなら、蘭（らん）姉はもっと優しくしてくれたか」

「母上の治療は……」

何かを思い出したように、鈴鹿の動きが停止する

「……そうか、大変だったな」

鈴鹿の心中を察しながらも、以蔵は手早く療治を続ける

「切り傷だらけだな、お前の身体も」

鈴鹿の滑らかな肌を拭きながら、以蔵がつぶやく
「……それは、兄上も同じです」
「オレなんかと鈴鹿は違う」
「……」
「全然違う」
「……そうですか」

丹念に手当てされながら、鈴鹿はそういえば、と口を開いた
「伽子さんも、包帯をお取替えしなくてよろしいのですか？」
「……あーそうか」
手を休めて、顔を上げる以蔵
先月重傷を負ったのは伽子も同じだったが、あまりにも元気だったために以蔵はすっかり忘れていた
「あはは、あたしもー？」
「薬箱はここに揃っているしな、ついでに伽子もやっちまうか」
「はーぃ」

以蔵は伽子にバンザイさせて、その薬液に染まった包帯と新品のものを取り替えていく
父親に珍しく構ってもらえて、心なし嬉しそうにする伽子

「でも、やっぱり傷の治りが全然違うんだな」
伽子の弾力のある肌を眺めて、以蔵が感心する

「私ももう、1才1ヶ月ですから」
「オレはもう1才5ヶ月か……お互い老けたよな」

和やかに鈴鹿の部屋で介抱を行っていたところ、先ほどまでイツ花と遊んでいた英雄が戻ってきた

「お母さん、ただいまー」
障子を開いて……英雄は笑顔のまま固まる
そこには、敷かれた布団に座って、半裸の鈴鹿と伽子に囲まれている以蔵の姿があった
英雄は真顔で、とことこと以蔵に近づいて、
「師匠！」
「誰がだ」
以蔵は何かを勘違いしている英雄の頭に、拳骨を落とした

＜交神（こうしん）の儀＞

一方その頃、こちらは儀式の間
「何だかさっきから、屋敷の方が騒がしいっすね……」
ぼんやりと鈴鹿の部屋の方を眺める門司は、この部屋で待たされてから一時間近くが経過していた
「それではァお待たせしました、交神の儀やりましょうかー」
先ほどまで門司のことを完璧に忘れて、英雄とあやとりで遊んでいたとは言えないイツ花が、そそくさと現れる
「色々準備とか大変なんすねぇ」
「そ、そうなんですよォ、アハハ」
冷や汗を流しながら、イツ花は神様一覧表を門司に渡す

「さッ、どなたになさいましょーかッ」
「俺っち、一度で良いからおしとやかな人に会ってみたかったんすよね！」
おしとやか、という言葉の意味を反芻するイツ花
「そういえば……初子（はつこ）さま以来、そのような方は長らく見ていらっしゃらないですネェ」

鈴鹿はどちらかというと、淑やかというより機械的だ

「ですから、水の遺伝子を補充するためにも、この方をお願いしまっす！」
門司が選んだのは、髪の長い美人の女神だった
「えーと、泉源氏お紋さま、でいらっしゃいますネ」
「俺っちたちが散々お世話になった＜泉源氏＞を作った神様なら、きっと慈悲深くて優しくて、女性的に違いないっす！」
最近手厳しい周囲のツッコミに、癒しを求める門司である
「それではァ、お呼びいたしますね」
「お願いしまっす！」

部屋に湿り気のない幻のような霧が立ち込めたかと思うと、門司の後ろ、寝屋の部屋を開いてひとりの女性が登場した
うおう！とビックリして振り返る門司に、女神はニコリと微笑みかける

泉源氏お紋「こちらの準備は出来ててよ」

「は、はいっす！」

その自信の込められたお姉様言葉に、門司は思わず犬のように返事をしてしまう

も、もしかしてこの人って……、と門司が思っていると、その手を引かれて、門司は寝床へと連れ込まれてゆく

「よ、よろしく……お願い、するっす」

「ふふ、悪いようにはしないわよ……」

結局、その後門司がお紋に癒されたかどうかは、定かではなかった

第五話－5　「門人」　1022年5月（後書き）

交神の儀・門司×泉源氏お紋　訓練・鈴鹿→英雄

第五話－６　「過刻」　１０２２年６月前編（前書き）

以蔵　　１才６ヶ月
鈴鹿　　１才２ヶ月
門司　　１０ヶ月
伽子　　６ヶ月
英雄　　２ヶ月

第五話－６　「過刻」　１０２２年６月前編

＜壬生川（みぶがわ）家の居間＞

以蔵（いぞう）はどこでもよく眠る
自室でも稽古場でも、居間でもすぐにうとうとするが、その代わりに眠りは浅く、野良猫の気配ですら目覚めてしまうほどだ

暇になるとすぐ眠ってしまう以蔵がきょう選んだのは、居間だった
大きなちゃぶ台に寄りかかって寝ていた以蔵の肩に、そっと毛布がかけられた

「……ん」
寝ぼけ眼を擦りながら、以蔵は辺りを見回した
「ずいぶん、深くお眠りでしたね」
すぐ近くに、鈴鹿（すずか）がいた
いくら慣れ親しんだ相手と言っても、この距離まで気づかなかった自分に少し戸惑う

「……鈴鹿、ここ2、3日姿を見せなかったな、工場で修理でもされていたのか……って」
以蔵はそこで、鈴鹿の格好を改めて眺めた
普段は飾りっ気のない無地の藍色の装束をまとっている鈴鹿が、きょうは艶やかな緋色地に藤の花をあしらった着物を身に着けていた
おまけに髪も結い直し、まるでどこぞの公家のお嬢様のように見えた

「どうか、いたしましたか？」
耳にかかる髪をかき上げながら軽く首を傾げる鈴鹿に、以蔵は腕組みして考え込んでから、告げる
「……鈴鹿、バージョンアップか？」
「意味がまったく分からないのですが……」
困ったような鈴鹿に、以蔵は問いかける

「でもそんなに馬子にも衣装して、どこ行くんだお前」
「これ、母上のお着物なんです」
「……って、蘭姉（らん）の？」
以蔵の疑問に、鈴鹿はこくんとうなずく
「お婆上が母上に作ってくださって、結局母上は着なかったのですけれど、イツ花（いつか）さんが私に持ってきてくださりまして」
相変わらずの無表情だが、以蔵の目には鈴鹿がほのかに母恋しくしているように思えた
「蘭姉の着物か……格段に防御力が上がりそうだな」
「ただの布ですから」

何だか嫌そうに眉をひそめる鈴鹿が、それに、と続ける

「これから行くのではなく、もう行って来ました」
鈴鹿は軽く息をついて、以蔵の右隣に腰を下ろす
「んー……京の都に、蘭姉の後を引き継いで復興支援とか、か？」
「ええ、英雄（ひでお）さんと伽子（とぎこ）さんもご一緒に」
眠っていた以蔵は、全然気がつかなかった
肩にかかった毛布が何だか重く感じられ、以蔵はうつらうつらしながら、違和感を感じていた

「ちょっと待てよ、もう、行ってきた、って……」

思考に靄がかかって、上手に考えられない
「兄上……？」
「オレは一体……何日寝ていた、んだ？」
まぶたが閉じられ、飛びそうになる意識の中、鈴鹿の声が聞こえる
「……きっと、お疲れなんですね……ごゆっくりおやすみください、兄上」

そうして以蔵は再び、深い眠りへと落ちていった

＜門司（もんじ）の部屋にて＞

門司が訓練を終えて自分の部屋に戻ろうとすると、部屋の中から笑い声が聞こえてきた
「へ……」
なぜ自分の部屋からと思って障子を開くと、そこには二人の人影があった
「それで、その時ボクの前で茶屋のお姉さんがさ」
「あはははは」

よそ行きの格好をして、自分の部屋で談笑するふたりに、門司が叫ぶ

「ちょ、俺っちの部屋で何をしているっすか！？」
伽子は、門司を見て気さくに手を振る
「あ、モンチー、ただいまー」
「帰ってきたのは俺っちっすけどっ」

部屋の中には茶菓子が散乱して、何だかもう、汚れ放題

「違う違うよ、京の都からあたしたちが、だよ」
「あ、おかえりっす……って、京の都！？」
見えない金棒で頭を殴られたように、足元をふらつかせる門司に英雄が声をかける
「うんっ、ボクと伽ちゃんとお母さんとー」
「がーん、なぜ俺っちだけ屋敷に……」

自分の部屋の前で、両膝をついて落ち込む

「どこでもそんな風な役割の人っているよねー」
朗らかに笑う邪気のない？　声が門司をさらに、ビシバシ攻める
「モンチーのお部屋借りてたのも、ちょっと居間でお父さんとリンリンが良い感じだから、通りにくかったんだよねー」

ねー、と顔を見合わせる伽子と英雄

「そ、そうっすか……」
英雄が現れてからより一層、なんだか自分の扱いが低くなったように感じる門司、もうすぐ一児の父であった

＜出陣＞

鈴鹿が集まった四人を眺めて、うなずく

「それでは、参りましょうか」
玄関に集結したのは、鈴鹿、門司、伽子に、初実戦の英雄だ
「ボ、ボク……ちゃんと、戦えるか心配だよぉ」
伽子の細い腰辺りに手を当てながら、すがりついて泣く英雄に、
「だいじょーぶ、何かあったらおねーちゃんが守ってあげるから」
あははと微笑みかける伽子

集まった家族を見て、門司がもっともな質問をした
「それはそうと……以蔵っち兄さんはどうしたんすか？」
「兄上は……」
視線をさまよわせながら、鈴鹿は答える
「兄上は、あの、今月は京に美人画を買いにいく、と飛び出して……」
「明らかにウソじゃないっすか！」

門司のツッコミに「男の方は、みんな大好きなものじゃないのですか……」と何だか落ち込む鈴鹿

「鈴鹿さまァ、当主さまならお部屋の方にお運びしておきましたヨォ」
そこにニコニコと笑うイツ花が登場する
「あ、そ、そうですか」
鈴鹿は門司から目をそらす
「お部屋の方って、どうかしたんすか？」
きょとんと尋ねる門司
鈴鹿はイツ花を見て、口元に人差し指を当てる
「当主さまぁ、先々月に負った火傷が、ゼンッゼン良くなってないんですネェ」

口止め効果はゼロだった

「えええ、お父さん大丈夫……？」
「あの、鬼みたいな強さの義父さんも、怪我するんだ……怖いよぅ……」
さりげなく義父さん呼ばわりしたり、結構余裕がありそうだ
「なるほどっす、だから今回この四人なんすね、合点がいったっす」
でもどうして、と門司は鈴鹿に聞く
「何で鈴鹿っち姉さんは、怪我のこと隠してたんすか？」
門司の問いに、今月の出陣隊隊長が憮然と答える
「……兄上が黙っていたのなら、それは意味のあることだと思いました」
「健気ですネェ」
うんうん、とうなずくのはバラした張本人
「今回ご療養している兄上のためにも、たくさん奉納点を持って戻りましょう」
鈴鹿が皆を見回して、そう言う
おー、という声の中、当主を欠いた討伐隊は出陣していった

第五話－7　「鬼哭」　1022年6月後編

＜白骨城前・合戦場跡＞

新しく登場した三箇所の迷宮は全て試してみたので、一同は改めて白骨城へと立ち入っていた

「ここは、夏だけにしか出ない幻の城なんですよ」

去年初陣の時に教わった話を、そのまま伝える鈴鹿

「英雄さんは初出陣ですから、私たちの後ろにいてください」

「は～い」

ひしっと鈴鹿の腕にしがみつく英雄

「少々戦いづらいですが」

○「お楽しみのところ失礼するよ」

白骨城を前にじゃれあう壬生川家の元に、ふよふよと影が降りてくる

「こ・ん・に・ち・はッと」

ニッコリと微笑む朱点童子の幻を、鈴鹿は真一文字に切り裂く

煙のように薄らいだ後、再び何事もなかったかのように朱点童子は空中に姿を見せた

「いきなり酷いなァ……っと、何だか見た顔が少なくなっちゃったね、ボクを討伐したときの人たちは死んじゃったかな」

「な、なんですかこの人……？」

鈴鹿は皆を下がらせて、ひとり朱点童子の前に立ちふさがる

「何の用ですか」

「そんな怖い顔せずに、ちょっときょうは君らのためになりそうなお話をしようと思ってね」

朱点童子はへらへら笑いながら、鈴鹿の周囲を飛び回る

「どう、この城の鬼たちは？」

「なにがですか」

相変わらず薙刀を構える鈴鹿に、朱点童子がにっこりと笑う

「けっこう、骨があるだろ？」

「うわぁ」

ぽかーんと口を空ける英雄に、朱点童子がせきをする

「……なにしろ元が、ボクを倒しに来て大江山（おおえやま）で果てたツワモノたちだからね」

そういう意味ではないんスよ、とそっぽを向きながらフォローする朱点童子

「それにしても神の仕打ちは酷いよ、勇気を振り絞り、平和のために命を落とした彼らに、天界の門は今も閉ざされたままだ」

肩をすくめる朱点童子に、鈴鹿が薙刀の切っ先を向ける

「だから、何だというのですか」

「だから……ボクが代わりに安息の場所を彼らに与えてやった、それが、この場所というワケさ」

薙刀の先端を掴んで横に向けながら、朱点童子はアハハと笑う

「神に見放された者の気持ちが誰よりもわかるのは、ボクだからね！」

「だからってスネなくても、お兄ちゃん」

「違うッ！」

英雄の言葉に思わず反応してしまうが、朱点童子は髪をかきあげて落ち着きを取り戻す

「ま、作るのは簡単だったよ……材料は彼ら自身の骨だ、いくらでもある！　それに」

朱点童子は意味ありげな視線を、鈴鹿に送る

「もしかしたら君たちの仲間にも、成仏できない魂となって……この中でさまよっている人がいるかもしれないね、アハハ……」

鈴鹿の薙刀を避けて、そのまま朱点童子は上空に飛び去っていく

「不吉な」

「何か、くらーいお兄ちゃんだったね」

物怖じしない英雄が、鈴鹿の腕にしがみつく

そのやり取りをずっと眺めていた伽子（とぎこ）と門司（もんじ）が、恐る恐るふたりに話しかけてきた

「リンリンとひーくん、さっきから誰と喋っていたの……？」

「俺っち、突っ込んでいいものかと迷ってしまったっす……」

鈴鹿と英雄は顔を見合わせて、お互いに首を傾げていた

朱点童子、その力を取り戻しても、未だに臥家（がけ）以外の人には見えないようだった

＜白骨城内部＞

以蔵が欠けた四人は、白骨城を先へ先へと進んでゆく
前回、左右のカイナを撃破し、１７階まで到達した経験を持つ鈴鹿が先頭に立ち、その後ろに門司や伽子、初出陣の英雄が続く形だ

「今回は制覇を目指します、ですから一刻も早く城を昇りましょう」

そう言うと＜速瀬＞の術を唱え、鈴鹿たちは駆け足で上階を目指していく

「うへぇぁ、お母さん、ちょっと速いよぉー」
「そうですか？」

英雄が肩で息をしながら、ゼェゼェと追いかけてくる

「ひーくんは、だらしないなぁ」
階段の上から英雄を、伽子があっはっはと呼びかける
「何であんなに元気なんだろ、伽ちゃん……」
「我が家は女性陣が、ホントたくましいっすね……」
その一方、だらしない男性たち

「そろそろ最初の相手、恨み足が現れる頃ですね」
一度も妖怪と戦闘せず、八分割の火時計の一つ目が消えた状態で、その大広間に立ち入った鈴鹿
後ろでは、荒い息をはく男たちを、伽子が覚えたての＜お地母＞を使って癒しているところだった
鈴鹿は周囲を確認しながら、破損した骨だらけの広間に人影を見

かけた
人の言うことを素直に信じる鈴鹿は、基本的に見たものと聞いたものも簡単に信じてしまうという傾向にあった
だが、この時ばかりは鈴鹿すらも自分の目を疑った
「……母上？」
鈴鹿の母、蘭（らん）が瓦礫の山の中で、ひとり佇んで天井を眺めていたたそがれたように虚ろな目で、こちらに横を向けて立っていた
「そんな、母上……？」
鈴鹿が蘭に一歩近づく
どうして、そんな、こんなところに
鈴鹿は朱点童子の言葉を反芻した
「代わりに安息の場所……成仏できない魂……この中に……？」
蘭はその手に薙刀を持って、疲れきったように立ちすくんでいた
鈴鹿は、顔を両手で押さえた
成仏もできないで、鬼となってまで、鬼を斬り続けているなんて……！
「鈴鹿っち姉さん、危ないっす！」
大粒の涙を零している鈴鹿の上に、巨大な影が降りそそぐ
伽子が身をていして鈴鹿を突き飛ばして、自分も転がる
先ほどまで鈴鹿が立っていた地点に、恨み足の圧倒的な重量が激突した

「ちょ、リンリンもう、何しているの！？」

あたしの反応が一瞬遅かったら死んでたよ！？　と叫ぶ伽子の手を振り払って、鈴鹿は恨み足を睨みつけた

手にした薙刀に、うっすらと青白い闘気が立ち上る

「……朱点童子、許しません」

薙刀を振り回し、正面に構え直す

「り、リンリン……？」

「ボク、お母さんが怒っているの初めて見た……」

声を掛けるのがためらわれるくらいに、鈴鹿の周囲には圧力のようなものが発生していた

「私たち一族を嘲るだけではなく、数多の人の命を奪っただけではなく……この期に及んで、母上の魂を弄ぶだなんて……」

叫んで、鈴鹿は駆け出す

「絶対に……許せません、双光蘭斬（そうこうらんざん）！」

鈴鹿の薙刀は恨み足の骨に当たり……しかし、刃が滑るように弾かれた

「え、」

去年よりも格段に実力の上がった鈴鹿の一撃が、まるで効果がなかった

「そんな……貴様！」

何度挑戦しても＜武人＞で強化しても、ダメージが伸びず、鈴鹿だけではなく門司の矢や伽子の槍もまったく歯が立たなかった

恨み足は矢を慌ててつがえる門司を、勢いよく蹴り飛ばした

「うあああああああああ」

壁に激突して気を失う門司を見て、鈴鹿は信じられないようにつぶやいた

「そんな、何故……？」

以前に一度、あしらうように撃破した鬼なのに！

鈴鹿の脳裏に、再び朱点童子の言葉が浮かんだ

”あのカッコの悪い鬼の姿のまんまじゃ、ボクの力は半分も出せなかったんだから”と朱点童子は言っていた

「まさか、鬼たちの力も、呼応するように……？」

伽子と英雄が叫んだが、鈴鹿の耳には声は届かなかった

次の瞬間、鈴鹿の視界は巨大な骨によって押しつぶされた

＜壬生川家＞

帰りを待っていた以蔵（いぞう）は、イツ花（いつか）の報を聞いて玄関まで出迎えた

「隊長が帰還されましたが……誠に残念でございます」

傷だらけの四人が屋敷に戻ってきた

イツ花がそれぞれを寝室に運び、目の前で母親が倒れたショックに呆然とする英雄を、伽子が居間に連れていった

その後で、以蔵はイツ花に呼び出された

「当主さま……お倒れになった方がいらっしゃいます」
以蔵はうつむいたまま、尋ねた
「……どっちだ、門司か、鈴鹿か」
重傷者はその二人だ、どちらも子供が出来たばかりだというのに
以蔵に、イツ花は沈痛な表情で首を振った
「……お二方、です」
以蔵は奥歯を噛み締めた
同時に二人の戦死者が出るのは、初めての事態だった
～～
門司の部屋の障子を開き、以蔵は布団に寝ている門司を見下ろす
「のんきなモンだ……」
枕元に腰を下ろして、オイ門司、と頬を叩く
「ぐ……あぁ、以蔵っち兄さん……？」
門司のその顔は、普段の柔らかいものとは豹変して、凄まじい苦痛に満ちていた
「冥土の使者が、こんなので悪かったな」

以蔵は普段と変わらない表情で門司を眺め、その腹部の傷を見て少しだけ眉を上げた
「……なるほど、これじゃ助からねぇな」
「酷いっす……そんな、言い方……」
笑おうとして、門司が咳き込んだ
「悪い門司、鈴鹿も死にそうで後がつっかえてんだ、言い残したことがあんなら、さっさと言ってくたばっちまえ」
「以蔵っち兄さんは……最期まで、そんなんっすか……」
門司は口元だけで笑みを浮かべて、天井を見つめた
なにかを考えようとしても思いがまとまらず、雲のようにほどけてゆく
「わは……俺っち、やっぱりダメっす……こういうの、似合わなさすぎっす……」
「……そうだな」
「ただ……子供には、会いたかったっすけど、俺っちには似ない方がいいっすよね……もう、ああ、すっげぇ苦しいっす……もう、楽になりたいっす……うう……」
あまりの痛みで目から涙を流す門司に、以蔵は酷薄なまでの無表情で尋ねた
「……介錯、してほしいか？」
「ああ、それ良い、最高っす……以蔵っち兄さんの腕なら……安心っすよ……」

以蔵が夢見の部屋に飾ってある刀を取ると、門司は心底穏やかな表情になった

「ありがとうございまっす……あと、こんなこと頼んで、すみません……」

「……次の言葉が最期で良いな」

以蔵は刀を抜くと、肩に担ぎ上げ、中腰の姿勢で固まった
門司は静かに頷いて、頬を緩めてから、そっとつぶやいた

「うちの家族は日本一っす……みんな、本当に、ありがとうございました……」

直後に門司の部屋に響き渡った刀の音は、まるで以蔵の悲鳴のようだった

以蔵は廊下に出て、刀に付いた血を懐紙で拭き取ると、舌打ちをしてから鈴鹿の部屋に向かった

～～

「よぉ」

以蔵は無遠慮に中に入りながら、声をかける
「……兄上」
布団に横になっていた鈴鹿が、以蔵を見つめた
「まだ、故障してなかったか」
「どうやら、まだ少しは生きていられそうです」
鈴鹿は手を伸ばして、腰を下ろした以蔵の膝を突っついた
「……何だよ」
「手、握ってください」
「……何を甘えているんだ、今更……」
そう言いつつ、以蔵は鈴鹿の指先を握った
柔らかい指先だと思い、そういえば鈴鹿の母親も手だけは柔らかかったと思い出す
「……もう、疲れたよ、鈴鹿」
鈴鹿の手を握りながら、以蔵は呻いた
「……俺も一緒に、そっちに行って良いか」
「一緒に来てくれたら、私は嬉しいです」
鈴鹿は以蔵を見つめながら、答えた
「でも、もう少しの辛抱ですよ」
「辛抱、か……」
「こちらこそ……勝手に出陣して、勝手に怪我をして、申し訳ございません」

バカ野郎、と以蔵は言った

「まったくだよ……門司も、鈴鹿もいなくなって……どうしろって言うんだ、オレに」

以蔵が拳を震わせる

「泣きたくても泣けなくて、叫びたくても叫べなくて、苦しいのに苦しめなくて……鬼への憎しみだけを胸に……こんなオレに、あと何ができるってんだ」

「兄上……」

鈴鹿は以蔵の拳の甲を撫でながら、そっと微笑んだ

「兄上は、泣いていらっしゃるじゃないですか」

「……鈴鹿？」

それは以蔵が初めて見る、甘くてとても暖かい、鈴鹿の笑顔だった

「私の目には……兄上は、泣きじゃくっているように、見えます……うれしいです」

「……バカ野郎」

あまりにも素直な鈴鹿の言葉に、以蔵はそうつぶやいた

「……兄上、もうそろそろお迎えが近づいているようです」

「行くな、鈴鹿」

以蔵は鈴鹿の手首を握って、そう言った

「……兄上がそんな顔で泣くのだと、最期に拝見できて良かったです」

「頼む、行かないでくれ……もう昔のオレを知っているのは、お前だけなんだ……！」
「……母上が、白骨城にひとりでいて、寂しがっていますから……わたしがお傍に行ってあげませんと……」
「蘭姉が、白骨城に……？」
鈴鹿は小さくこくんとうなずいた
鈴鹿は以蔵の頬を撫でて、それに、と微笑んだ
「あなたがどんなに変わっても、皆あなたのことを慕っています……あなたは優しい方です、みな、それをわかっています……」
「鈴鹿……っ」
押し殺したように叫ぶ以蔵に、鈴鹿はゆっくりと、お先に失礼致します、とつぶやいた
「もしも、わたしが死んで……鬼に変じるようなら、迷わず斬ってくださいね……お願いします、兄上……」
鈴鹿の最期の言葉を、以蔵はせせら笑った
「お前が、鬼になんてなるかよ……お前みてぇな、堅物がよ……！」
以蔵はそう言って、鈴鹿の冷たくなってゆく手を握りながら、大きな声で笑った
泣くことの代わりに、それしかできなくて、以蔵は笑い続けた

壬生川　門司　享年１０ヶ月
壬生川　鈴鹿　享年１才２ヶ月

朱点童子討伐隊はこうして、以蔵ただ一人が遺された

第五話－7　「鬼哭」　１０２２年６月後編（後書き）

出陣・白骨城（鈴鹿・門司・伽子・英雄）　戦死・鈴鹿　門司

第五話－8　「筒咲」　1022年7月前編（前書き）

以蔵　1才7ヶ月

伽子　7ヶ月

英雄　3ヶ月

第五話－8　「筒咲」　１０２２年7月前編

伽子（とぎこ）は一番の友達を、英雄（ひでお）は母親を失った戦いから、数週間が経った
多少広く感じるようになった屋敷で、それでも伽子と英雄はノリが合ったらしく、毎日を明るく過ごしていた
「あーっもうあっついぅぅぃ！　ひーくん、ちょっと庭に池作ろう、池！」
「え、ちょ、ボク？」
「さ、ほら、薙刀の代わりにスコップ持って！　あたしちょっと表の川から水運んでくるから！」

妙に楽しそうに張り切る伽子と、疲れているけれど断らない英雄の顔色が対照的であった

「でもちょっと待てよ……池……水浴び、素敵なお遊び、か」
一瞬だけ、邪悪な笑みを浮かべる英雄は、次の瞬間に表情を変えて楽しそうに伽子に着いて行く
「よーしお姉ちゃん、ボク頑張るよっ」
「やる気になってきたのねー、よーしゃ気張ろうー！」

おー、と二人で手を挙げて庭に走っていく

「……ホント、いいコンビだよ」
居間で難しそうな顔をして座っていた以蔵（いぞう）が、ため息をつく
「……どーっすっかな、マジで」
机に広げていたのは、家系図だった

先月門司が亡くなった、それは仕方のない、今更どうしようもない
そして、もうひとつどうしようもない事があった

「……参ったな」
今月、門司の子供が、来る

「……何て言やぁ良いんだよ、生まれてきたばかりのガキによ」
父親が死んだと告げるのか、それは自分の役目なのか
「……イツ花に頼めば、ものすっごく軽く伝えてくれそうではあるが」

それはしてはいけない気もする、何となく、やってしまったら鈴鹿の幻に怒られる気がする

「そういうことは当主の役目です、って言われそーだな……何て正論大好きな女だ……くっそう、もっと楽して生きてぇな」
頭を悩ませて、再び家系図に向かう

門司が遺したものは何一つなかった
あの年で死ぬとは想定外だったのか、遺書も残していなかったため、名前も以蔵が決めなければいけないのだ

「……これだから、香家の連中は」
これから伽子と英雄には、毎月遺書を書かせることにしよう、と以蔵は心に誓った

能天気な笑顔で庭を掘り返している英雄と、そこのちっこい穴へと嬉しそうに桶で水をぶちまける娘を見て、以蔵は再び深いため息をついた

＜門司の子供＞

「ぱんぱかぱーん、当主さま、お子様がいらっしゃいましたァー！」

「何が嬉しいんだお前は」

舞い踊るように現れたイツ花に、以蔵は白い目を向ける

「泉源氏お紋さまより、新しいお子様を預かってきたんですよ？家族が増えるんですよォ、嬉しいじゃないですかァ！」

「分かった分かった……続けてくれ」

諦めるように首を振る以蔵、この女に理屈は通用しないのだ

「なーんっとォ、女のお子様でーす！」

「げ……英雄に妹ができるのか」

心底嫌そうにつぶやく以蔵

「それではお呼びいたしますね、どうぞー」

障子を開けて現れたのは、太陽のように輝く赤い髪に、狐の面をかぶった少女？　だった

○「こーん」

棒読みで、鳴く

「……」

「こーん」

「いや二度も言わんで良いから」

以蔵は少女の面を剥ぐ

「こりゃ、伽子が春に京で買ってきたやつじゃねーか」

「ついさっき、ものすっごいテンション高いお姉さんに貰いましたわ」

間違いない

「で、お前は？」

「初めまして、わたくしは泉源氏お紋お母様の元から来ました」

恭しく、少女は一礼する

門司から受け継いだであろう赤い髪に、鈴鹿のような知的な青い瞳が印象的であった

「名前はまだございません」

「知ってっから」

絹のように繊細で白い肌を持つ、目鼻立ちが整った、相当な美少女だ

壬生川家の歴史の中でも、かなり上位に位置する美人に育つのではないかと思わされる

少女の名前は翠（みどり）と名づけられた

「わたくしの名前は、翠です」
「いや今つけたからな」
翠はニコリと微笑んで、以蔵にお辞儀する
「よろしくお願いします、お父様」
「あー……いや、それがだな、翠よ」
青い目に見つめられ、何ともやりにくそうに以蔵は告げる
「お前の父親は……戦死したんだ」
迷った挙句、以蔵は真実を伝えることにした
「マジでございますか！」
目を剥いて驚愕する翠
「ああ、先月な……悪いが、元服するまではうちのイツ花が母親代わりに世話させてもらうからよ」
「了解ですわ」
「……立ち直り早いな」
驚いたことがウソのように、すっかり元の涼しげな佇まいに戻っていた
「わたくし、天才ですから」
そう言って、ちびっ子は何となく誇らしげに胸を張る
「少々のことでは動じません、粗末な定規をわたくしにあてがわないでくださいまし」
「……お前が母親にどんな教育を受けていたのか非常に気になるが、

次はお前の職業だ」
本来なら、お前も門司と同じ弓使いになるべきなんだろうが……
と続けた以蔵の言葉を遮って、翠は以蔵に尋ねた
「何でございましょう、この……大筒士、と申しますのは」
「さーな、よく分からん」
にべもない以蔵
「じゃあわたくし、大筒士になります」
「バカだろお前」

自分の腰ほどしかない身長の幼児に、容赦のないツッコミを浴びせる以蔵に、心外とばかりに翠は首を振った

「いいえ、すごく天才です」
「……そーか」
「だって、一番面白そうではありませんか」
以蔵は、そうだな、とだけつぶやいて、儀式の間を後にした

何だか、真剣に考え込んでいた少し前の自分を、思いっきり殴りつけてやりたい気分だった

～～

以蔵がその後、蔵の整理整頓をしようと裏庭に行こうとしたところ伽子と英雄の横、何やら小難しい言葉を使いながら「竹を二つに割った半筒を繋いで、池から簡易水路を引いた方が早いですよ」と理論を披露する翠の姿があった

「すっかり、馴染んでやがる……」

このままでは明日、もしくはあさってまでにため池が完成していそうな勢いだ

「……ツッコミが、オレだけじゃ足りねーよ、鈴鹿……」

以蔵には、当分……死ぬまで、落ち込んでいる暇は無さそうだった

第五話－９　「御先」　１０２２年７月後編

＜出陣＞

「じゃあ、いっとくか」
以蔵（いぞう）は槍を担いで、面々を眺める

「ご無事をお祈りしておりますわ」
（……まともな挨拶だな）

丁寧にお辞儀する翠（みどり）に、軽く驚く以蔵

「おー、えいえいおー！　頑張るぞー！」
短い髪の元気娘が、槍を掲げて嬉しそうに叫んだ
「伽ちゃんって、何でいつもそんなに楽しそうなんだろ」
薙刀をダルそうに立てる英雄（ひでお）が、不思議そうに伽子（とぎこ）を眺める
「あったりまえじゃない！　悪をあたしの正義の槍でブッ刺すのよ、素敵！」
「……師匠、お宅の娘さん思想が危険ですよ」
英雄がささやく台詞に以蔵は頭を抱える

「……誰に似たんだろーな、ホント」

０才７ヶ月になる娘を見て以蔵は、絶対に夢姉だ、と確信していた

＜相翼院（そうよくいいん）＞

以蔵は相翼院に立ち入るのは二回目だったが、その雰囲気のあまりの違いに驚いた

「……これが、朱点童子（しゅてんどうじ）の邪気か」

口元に袖を当てたくなる臭気に、以蔵は顔をしかめる

かつては鬼が支配していながら、明媚な自然も色濃く残っていたのだが……

「なーんか、尻子玉大将とかの目が、ギラギラしているようなぁ」

「ハツラツとしているねー、そうこなくっちゃ！」

腐臭に満ちた相翼院で、伽子のワクワクした声が響き渡る

そんなイキの良い人間の声に反響して、周囲から獣や鬼の唸り声が低く伝わってきた

「やる気満々ね、でも全員ブッ殺してやるんだからこの槍が輝く限り！」

悪役のように笑う伽子の襟首を掴む以蔵

「……さっさと行くぞ」

「ちょっと、犬じゃないんだからお父さんっ」

以蔵は二人と共に、一層凶悪になった鬼たちの群れに突撃していく

1才7ヶ月という高齢ながら、衰えぬ一流の武芸者・以蔵を中心に、次期当主の名に恥じぬ槍捌きを見せ付ける伽子が次々と敵を始末してゆく

「こりゃーボク、楽出来て良いなぁ」
後方から、ほくほくした顔で英雄が術の印を結ぶ

水の上に立てられた橋を突き進みながら、次々と鬼を抹殺してゆく以蔵親子とその家来である

～～

一同は相翼院入り口の手前まで突き進む
「ふえぇ、つっかれたぁ……」

少し前のお気楽な表情とは違い、パワフルな親子に付いていくのがやっとだった英雄が、ぐったりと石像に寄りかかる

「あははは、ひーくんはだらしないなぁ」
槍を抱えて大笑いする伽子に、英雄は愛想笑いを浮かべる
「……伽ちゃんって……怪物？」

そんな英雄の前、本物の化け物・以蔵が眉間にシワを寄せながら、周囲を見回した

「……何の臭いだ……」
じゃれあう子供たちを背に、以蔵は注意深く槍を構えて、神経を高ぶらせる
その瞬間、象を模った石像の表面に亀裂が入った
「しまった……っ」
三人の周囲、東西南北に設置してあった石像それぞれに、ヒビが入り、その下の地肌が現れた

「え、ええ？」
「うわ、何か暖かい、生きてる！？」
石像にもたれかかっていた英雄が飛びのいて、以蔵の近くに避難する
「……囲まれて、やがる」
三人を取り囲むように正体を現した四匹の象が、一斉に泣き叫ぶ
歓喜の舞×四『パオーーーーン！！！』
「チッ……生涯石像のままでいりゃ、生きれたのにな」
以蔵は正面の赤い歓喜の舞に突進していく
「正義の一番槍、伽子いっきまーす！」
父親に背を任せて、伽子もまた前方の黒い歓喜の舞に駆け出す
残された英雄は、え、え、と戸惑ってしまう
「ちょっと、ボクはどうすればっ」
英雄の見る限り、象たちの個々の能力はそれほど高くはなさそうであったが、如何せん以蔵はともかく、伽子は正面を相手にするだけで精一杯のようだ
「正義も良いけど、たまには身の程をわきまえて行動してくれよね……！」
英雄は考えるまでもなく、伽子の支援に動いた
「……チィ」

四本の腕を持つ象の拳を避け、その片腕を槍で吹き飛ばしながら、以蔵は舌打ちして視線を巡らせる
伽子と英雄がふたりで歓喜の舞の一体を相手にしているのは、正直彼らの成長度を考えれば驚異的な事であったが、それを喜んでいる暇は無い
歓喜の舞は合計四匹、では残りの二匹は……
左右、以蔵を挟み込むように立って、術を結んでいた

「マズ――」

振り返って娘たちに声をかけようとした以蔵の腹を、腕を落とされて怒り狂った歓喜の舞が殴りつけ、以蔵の呼吸が止まる
次の瞬間、左右の歓喜の舞が唱えた＜雷電＞と＜牛頭丸＞が、壬生川家を巻き込んで炸裂した

瓦礫の山に吹き飛ばされた以蔵が、頭から血を流しながら起き上がる
「……槍はどこだ」
戦いの最中に手放してしまうとは、とんだ失態だ
以蔵の傍には、目をぐるぐるに回した伽子が倒れていた
まだ傷は浅い、癒やしの術を唱えれば戦闘行為に復帰できるだろう、が、果たして三人の出撃隊でそんな暇があるのか、と

以蔵は目を細める

英雄が四匹の歓喜の舞の前に立ち、両手を天に掲げていて、それにかしずくように象どもは微動だにしない

「……どういうことだ……？」

以蔵の目の前、天空にひとつの影が伸びて、消えていった
英雄が掲げていたそれは、七光の御玉であった

「お父さん……」
召喚された七天斎八起が何らかの技で、息子の窮地を救ってくれたのだと、以蔵はようやく理解した
「それにしても、一体……？」
以蔵は伽子の槍を拾うと、警戒しながら象に近づいて……
呆れて、つぶやいた

「……コレ、寝てんのか？」

歓喜の舞たちは大きな鼻から鼻ちょうちんを膨らませて、完全に熟睡していた
「みたいです」
四匹の象は、七天斎八起の＜寝太郎＞の術の強化版によって、全員が全員、深い眠りに落ちていったのであった
何だか拍子抜けして、がっくりと力が抜けるのを何とか押しとどめる

「……とりあえず、砕いとくか」

ボスにも睡眠の術が通用するとは、以蔵はよいしょと槍を振り上げた
「ねぇ、ラクガキしてもいい！？」
「……するなら、伽子にしとけ」
目を輝かせる英雄にそう答えて、以蔵は四匹の歓喜の舞を打ち倒していく
無防備な相手を殲滅するのは初めてだったが、今更鬼相手に感慨

など沸かず、ただ面倒臭いだけだった

「もう、酷いなあ師匠は、女の子にそんなことできるわけないじゃないですかー」

横で頬を膨らませる英雄を見て、以蔵はことさら大きなため息をついた

その後壬生川（みぶがわ）家の三人は、奥の間で飛空大将たちを相手に、一ヶ月戦い抜いて帰還した

伽子と英雄は少ない人数のため、より密度の高い実戦経験を積むことが出来たという

第五話－９　「御先」　１０２２年７月後編（後書き）

出陣・相翼院（以蔵・伽子・英雄）　初見・翠→大筒士

第五話－１０　「根切」　１０２２年８月前編（前書き）

以蔵　１才８ヶ月

伽子　８ヶ月

英雄　４ヶ月

翠　１ヶ月

第五話－１０　「根切」　１０２２年８月前編

以蔵（いぞう）は滅多に夢など見ない
しかしこの日、そんな以蔵が珍しく眺めていたのは、ある雪の日の夢だった

以蔵は屋敷のみんなと、雪合戦をして遊んでいた
自分を客観視して見つめる以蔵は、何て楽しそうにしているのだろう、と他人事のように思う
青い長い髪をした女性をからかいながら、母親に叱られながら、男のような女性に雪玉を投げながら、枯れ葉色の髪の少女を追い回し、嫌がられながら……

遠い、もう二度とは帰ってこない過去の記憶だ

自分はいつまで、こんな思い出にすがっているのだろうか

鬼の力に手を出した時点で、人として生きた自分はとっくに死んだのだと、まだ認めないつもりだろうか、この若造は

以蔵は弁解するように叫ぶ

こんなことになるなんて思わなかった、こんなに沢山の想いを失ってしまうなんて！

彼は怖くて仕方がなかった

日々、感情を失い、鬼へと変わってゆく自分がたまらなく怖かった
何百の鬼を葬っても、自分は鬼とは違うと信じてみても、人として生きるには彼は多くを失いすぎたのだ

「……ん」

以蔵は感覚の中に気配を察知して、目を覚ました
居間で机に寄りかかって眠っていたら、寝汗がすごくて、思わず顔をしかめる
「……暑いな、きょうも」
廊下の先で聞こえた足音が近づいてきて、やがて顔を出したのは翠（みどり）だった
「ごきげんよう、当主さま、こちらは当主さま宛てにお手紙です」
「……オレにか、誰だろーな」

小さいくせに何を考えているか分からない翠が、手紙一通と茶を二つお盆に乗せて運んできた

「こちらにお置きしておきますわね」
「……悪いな」
翠は以蔵の横に腰を下ろして、お盆をちゃぶ台の上に乗せる
「それはそうと、古来から、暑い日には更に熱いものを飲むべきだ、と考えが尊重されていましたわ」
「……聞いたことはあるな」

こと、と煮えたぎるような茶を以蔵の前に差し出す

「でも、暑い日には冷たいお茶が良いと思うのです、わたくしは」

もう一方のお茶はどうやら冷や水で淹れられたらしく、涼気が立ち上っていた

「……で、なんだ」

「本当はどちらが良いか、実験してみませんか？　何事も実際やってみないと分かりませんもの」

「……何でオレが、熱湯の方を担当するんだ」

翠が微笑んだ

「だって、こんなに熱いものをお口に入れたら、いくら天才のわたくしと言えども火傷してしまうではありませんか、当主さまったら」

「……」

以蔵は黙って湯のみの上部を持って、それをお盆に戻した

「当主さま？」

「……英雄（ひでお）に頼め」

好奇心の強い青い瞳が、以蔵を不満げに見つめた

「イツ花（いつか）さんにも断られて……わたくし、どうしていけなかったのでしょう」

「その目はやめろよ……お前、誰かの生まれ変わりか」

以蔵の中に、同じく青い目を持つ無口な少女が浮かんで、すぐに消えた

「誰かって、誰だったかな……まぁいい、英雄に持ってってやれ」

「分かりましたわ」

お盆を持って再び立ち上がる翠が、冷めてしまったかもしれませんから淹れ直さないと……と不穏な発言を残して去ってゆく

以蔵は再びちゃぶ台に体重を預けて、まぶたを閉じようとして、
ふと思い出した
「……そういえば、便りか」
署名は無い、怪しいものだ
以蔵は懐紙に包まれた文を開け、以蔵は軽く内容に目を通して、
「……朱点童子（しゅてんどうじ）から、オレに……？」

誰にも聞こえないような小さな声で、うめくようにつぶやいた

～～

再び眠りに落ちていた以蔵を起こしたのは、十里先からでも分かりそうな伽子（とぎこ）の足音だった

「……相変わらず騒がしい歩き方だ」
薄目を開けて廊下の方を眺める
「おっとうさーん？　あ、いたー」

嬉しそうにパタパタと以蔵に駆け寄る伽子が、その父親の腕に絡みつく

「……何だ、英雄と術の訓練してたんじゃないのか」
「それなんだけどー、何かミドりんの差し入れ貰った途端に、ひーくんぴくぴくして動かなくなっちゃって」
暑い日に熱いものは、やはり良くないらしい
「……そーか」
しらばっくれる以蔵

「ミドりんが＜泉源氏＞で介抱してくれてるから、あたしは抜け出してきちゃった」
（さすがに、自分のやったことには責任を持つのか、翠）
「それでさ、お父さんー」
別のことを考えていると、伽子が以蔵の膝の間に腰を下ろす
「……お前、今月で元服済んだんだろ」
そんな娘の人懐っこさに、以蔵は反発する
「いいのー、いくつになっても娘は娘でしょー」
幸せそうに自分の膝の上に座る伽子に、以蔵はため息をついた
「ねぇねぇ、お父さんってさ、好きな人、いた？」
藪から棒に、伽子が肩越しに振り返りつつ、尋ねてきた
「なんだよ、唐突に」
「ねえ、いいでしょ、答えてよー」
甘えるような声色の伽子に、顎をさすりながら答える
「……ああ、いたよ」
照れもしないで、まるで他人のことを伝えるように以蔵は返す
「うっひゃー、ねぇ、誰々、やっぱりリンリン？」
「やっぱりって何だ……特に誰、ってわけじゃねぇよ」
伽子の視線から逃れるように、そっぽを向く
「えーえーえー、何それー、あたしの正義的にダウトな答えー」
「……オレは、この家に生きるみんなが好きだった」
娘を胸に抱いたまま、以蔵は遠くを見つめてつぶやいた
「優しい人がいて、強い人がいて……とても弱い人もいて、可愛いやつも、良いやつもいた」

以蔵に寄りかかったまま、伽子も黙って聞いていた
「でもな、みんな死んじまったんだ、もう、この家には居ない」
その寂寥な声に、伽子が自らを恥じるように肩を落とす
「お父さん……あの、変な質問してごめんなさい」

淡々と事実を話す以蔵に、切なそうな声をかける伽子

「……どうしても朱点を倒したかったんだよな、朱点の首さえ獲れば……全てが終わって、夢に見ていた毎日が、ずっと続くと思っていたんだ」

まるで夢の続きを見ているようだ
以蔵は自分が昔そう考えていたのだと、その時に初めて聞いたように思い出していた

「そうだった……オレは、みんなと、生きたかったんだ……」

もしあの時、全てが終わっていたら……

「でも」
伽子の押し殺したような声で、以蔵は我に返った
伽子は振り返って、以蔵の胸に自分の顔を押し付ける
「何も終わってないよ、みんな居なくなっちゃったし、京の都は荒れ果てたまま！」

「……そうだな、何も終わっていない」

元服したばかりの伽子が、以蔵にすがりつくように叫ぶ
「あたし、鬼が憎い！　リンリンも、モンチーも、あいつらが……絶対、絶対朱点はブッ殺してやるんだ……あたしが、あたしが！」

「……鬼が憎い、か」
以蔵は復唱する
「伽子、これだけは忘れんな」
穏やかな声と共に、以蔵は伽子の頭を撫でた
「鬼は全て殺せ、だが、憎むのは無駄だ」
「な、なに、それ？」
以蔵は少しずつ朱色に近づいていく空を見上げながら、静かにつぶやいた
「……お前の貴重な生を、憎しみなんてモノで埋めるのは勿体無い」
その以蔵の目が赤く染まっていたのは、夕焼けの光が差し込んだからだったのだろうか

第五話－11　「鬼斬」　1022年8月後編

＜翌朝＞

布団をふっ飛ばしながら、伽子がむにゃむにゃと転がる

「がーうー」

父親の所有する領域まで侵害しつつ、そこに投げ出された布団を抱いて、いつのまにか以蔵（いぞう）の寝床に収まる

「当主さまァ、伽子（とぎこ）さん、朝ご飯ですよー」

エプロンで手を拭きながら、イツ花（いつか）が朝っぱらから元気な笑顔を見せる

「うもらぁ……」

イツ花が笑いながら伽子の抱いている掛け布団を引っ張る

「ほらほらァ」

「ぎにゃー」

だが伽子も離さず、しばらく布団の応酬が行われてしまう

それ引っ張れ引っ張れ、やっせやっせ、と両者譲らない

「も、もう、早く起きてくださいよォ……」

やがて引っ張り疲れたイツ花が、額に汗をかきながら、その場に倒れこむ

勝者の笑みで心地良さそうに、再び眠りにつく伽子

「何をしているんですか……？」

ひとりでキチンと起きるお利口さんの英雄（ひでお）が、障子の中からこちらを控えめに眺める

「あ、英雄さん……ちょっとォ、伽子さんが起きなくって……」

「ははぁ、ボクがバーンとォ、起こして見せれば良いんだね」

ニッコリと笑う英雄、我に秘策アリと伽子の傍に近寄る

「とーぎーちゃーん……」

ふふふ……と甘い笑みで、伽子の横に寝転んで、そのふくよかな耳たぶに熱い息を吹きかける

「お姉ちゃん……起きて……」

「ひぎゃ！」

驚いた伽子は布団を抱いたまま、英雄のみぞおちに渾身の力で肘を食らわせた

悲鳴も上げる暇なく白目を剥く英雄

「ちょっとォ、英雄さんまで寝てどうするんですかァ！」

「そういった意味で寝たのとは、少し違うと思われますが」

まるで影のように、フッと翠（みどり）が出現する

「あらァ、翠さんまだ小さいのにお偉いですネェ」

「わたくし、寝てませんから」

「ええッ！？」

うふと前髪を払って、翠は以蔵の部屋に立ち入る

「この天才が、ふたりを起こしてごらんに入れましょう」

翠は後ろ手に持っていた巨大な鉄の筒を前に構え、その先を伽子に向けた

「へ」

イツ花が何かを言うより早く、翠が筒の折れ口付近で指を弾く
その瞬間、落雷のような轟音と共に、鉄の玉が伽子に向かって発射された
「ぎゃあああ！」
飛び起きた伽子が布団を前に突き出して、その毛布の中に鉄球がめり込む
「……と、止められました……」
「ちょ、え、何コレ、敵襲！？」
布団の中で回転する鉄球を覗き込んで、伽子が仰天する
「……次こそは、伽子さんに防がれないものに仕上げなくては、ありませんわね……では、ごきげんよう」
「ちょっと、何悔しがっているんですか翠さん！」
ぎりぎりぎりぎりと拳を握り固めながら、翠が去ってゆく

「え、え、何、何なの……？」

しゅ～～……と音を立てて回る鉄球が煙を上げる中、伽子は煙に巻かれたように呆然とする
「あ、ちょっとどうしたのひーくん、もう朝だよ起きなくちゃ！？」

イツ花が冷や汗を流す中、伽子が熱心に横に倒れている英雄を揺さぶる

「もう、自分の部屋と間違えちゃダメだからね、ってどうしたの顔色が悪いよ！？　病気！？　ちょっと、ちょっとひーくん！？」

伽子の大慌てな声が響く中、イツ花はふと机の上に置手紙を発見する
「あらァ……何でしょう？」
拾い上げて、表裏を眺める

その顔色が一変した

「あの、伽子……さま、これ……」

署名は以蔵、題は遺書だった

＜白骨城（はっこつじょう）前・戦場跡地＞

以蔵はひとり、人骨の散乱する戦地を歩んでいた

「……選考試合、サボっちまったな……暑い」

槍を持っていつものように無表情で、夏の太陽に照り付けられながら、進む

「やあ、おはよう良い天気だね！」

その横をふわふわと、朱点童子（しゅてんどうじ）が着いていく

「……お前、本当暇だよな」

「アハハ、でも来てくれると思ってたよ」

「そりゃ、あんな手紙出されたらな……」

読み終えてから＜お焔＞で焼いた手紙には、キミの家族が白骨城に居るよ、とだけ書かれていた

「悪いけど今回はボクは何もしてないからね、白骨城に来たのはキミの大事な人の意志だ、アハハ」

「……お前って、嫌がらせ以外やることねーのかよ」

深いため息をつく以蔵に、朱点童子は実に嬉しそうに声を掛ける

「キミたちが苦しむ姿を見るのは、実に何よりも楽しいからね、だからこうやって手紙まで出して伝えてあげたんじゃないか」
「……そーか」
楽しそうな朱点童子に、以蔵がぽつりと漏らす
「……だけど、死出の旅がお前となんて、似合いすぎだよな」
「ねえ、キミ」
朱点童子の囁き
「ボクと一緒に、こんな目に合わせた奴らに復讐しないかい？」
朱点童子が以蔵の前に回りこんで、ニッコリと微笑む
「何てったって、キミはボクをあの格好悪い鬼の姿から助け出してくれた恩人だからね、フフフ」

以蔵は何も言わずに、朱点童子の顔を払う

「どう、もうキミと一緒に戦った人はみんな死んじゃったんだろ？どうせみんな不幸な死に様しかしなかったんだろう？」

ざく、ざく、と以蔵は草を踏みしめて歩く
新鮮な肉の臭いに釣られて、以蔵の後を多くの鬼が着いていくが、朱点童子を恐れているのか、一定以上は近づいてこない
鬼が囲む道を、以蔵は往く

「ホラ、一緒にめちゃくちゃにしてやろうよ、キミのその憎悪をチョッピリ人間に向けるダケ！　キミにはその素質があるもんね」
「……おい朱点、アレが蘭(らん)姉か」

以蔵は白骨城の前で、薄い人影を見つけて、槍で指す

「どれどれ、っと……ああうん、そうかもしれないねー」

「何やってんだかこんなとこで……あのバカ野郎」

この世に強い未練を残して死んだ武士たちの成れの果て、白骨城で、その人物は空を見上げて立っていた

「……鈴鹿（すずか）は、来れなかったんだな」

朱点童子を置いて、以蔵は淡く光る魂の元へと近づく

「……蘭姉、お前の呪いは解いてもらわなきゃ困るんだよな」

以蔵は手ごろな石の上に腰をかけた
何も言わずに青空を眺めている蘭の影に、囁く

「憎しみも怨みも、ここで終わらせてもらうよ……悪いな、約束守れなくて」

もう、伝えることは出来ない、憎しみも怨みも伽子には似合わない
蘭の想いは、自分が終わらせる

「それを言いたかっただけだ……お前ももう行けよ、あっちに待っているやつがいるんだろ、この、大バカ野郎……」

蘭だけは、天で待つ鈴鹿の元へ、送り出してあげなければならない

家族を手にかけたその業により、自分がどうなるとしても

屋敷で朽ち果てるより、自分にとってはここがよっぽどお似合いだ、と以蔵は思う

この、あの世とこの世の境の白骨城が

「そういえばオレ……誰かに好きだとか、愛しているとか、一度も言ったことなかったな」

槍にもたれて立ち上がる以蔵に、朱点童子がつぶやく

「つまんない人生だね」

「……お前にだけは言われたくねぇが、まぁそうだったな……」

瞑目すれば、数々の思い出が流れて消えてゆく
この両手に残った数少ない記憶は、もうほとんどがおぼろげだ
出会いと別れを繰り返した人生で、ほとんどの時間を鬼殺しのために費やしてきた

だが、空虚な時間だけではない、大切な人たちがいたのだ
その人たちと一緒に、笑って、泣いて、生まれて、精一杯生きてきた
朱ノ首輪に呪われてひとりになっても、独りだったことは一度もなかった

以蔵はかぶりを振る

「いや、そんなことはねぇな、良い人生だった」

以蔵は立ち上がり、槍を蘭の幻影に向ける

「……成仏しろ」

以蔵はその魂に槍を突き刺し、一瞬にして霧散させた

「あーらら……ついにお仲間さんまで、その手にかけちゃったね」

「……かけちゃったな」
「もう人間には戻れないよきっと、それでもボクと一緒には来ないかい？」
「……バカ野郎、鬼なんて大嫌いだよ」

今まで、沢山の事があった気がする
短い人生だったが、きっと、悪くはなかった

以蔵は天を仰ぐ
空は晴れていた

「……君が為、尽くす心は、水の泡……消えにし後は　澄み渡る空、ってな」

「キミっていうのは、お偉い神様のことかい？　それとも、壬生川（みぶがわ）家の皆様？」
「……さぁ、どっちかな、きょうは良い天気だ」

疲れたように呼吸をする以蔵に、強い声が飛んだ

「お父さん！」
「師匠！」

伽子と英雄だ
息を切らせて、今にもこちらに駆け出そうとしていて――

以蔵は赤い眼で、家族たちを見つめ、叫んだ

「……近寄るな！」

その叫びに、慌てて出陣準備を整えて追いかけてきた伽子と英雄は、びくっと止まる

「ちょ、お父さん、何なの遺書って、早く帰るよ！」

「……そこで、見ていろ……伽子、憎しみに心を埋め尽くされた人間が、どうなるかを……」

伽子と英雄は、真っ赤に輝く猛禽のような以蔵の眼に射竦められ、その場から身動きが出来なかった

朱点童子が口笛を吹く

「……良いか、必ず……オレのようには、なるな……お前はオレとは違う……！」

以蔵が羽織を脱ぐと、その全身傷だらけの上半身があらわになった

刀傷や熱傷、到るところに怪我を負った身体の傷が、徐々に薄くなって、消えていく

「どういうこと……お父さん！」

以蔵の全身の傷が癒え、そしてまるで別の生き物のように、肩の筋肉が盛り上がって来る

自然と以蔵の髪を縛っていた飾り布が解け、風も吹いていないのに長髪が振り乱れた

伽子と英雄の見ている前で、以蔵は人ならざる異形の姿へと変貌してゆく

「……眼をそらさずに見ろ、これが……壬生川以蔵の最期だ」

かつて以蔵と呼ばれた人間は槍を引き抜き、周囲の妖怪たちに獣のように吼えた

「こっちで鬼を斬るたびに……あの世の鬼が、増えてるとしても……オレがまた斬るだけよ！」

朱点童子が笑いながら姿を消し、その瞬間、無数の魑魅魍魎が一斉に以蔵に襲い掛かる

血飛沫を撒き散らしながら、以蔵は魔王のような形相で槍を振り回し、その姿が数多の鬼に囲まれてすぐに見えなくなった

「お父さん、ヤだっ、お父さんッ！」

伽子が槍を抱えて助けに行こうとするのを、英雄が後ろから抱きしめて止める

「もう、無理だよ伽ちゃん！」

「いやぁぁぁ！」

伽子の叫び声と共に、蜃気楼のように目の前の景色が揺らいでゆく

「白骨城が、もう、消える……逃げなきゃ、伽ちゃん！」

「お父さん、お父さぁぁぁぁぁぁん！」

絶叫が響き渡り、その声が途切れる頃には、ふたりの目の前には
何も無い野原が広がっていた

壬生川　以蔵　享年１才８ヶ月

夏の間にだけ姿を現す不思議な城に、一本槍を振るう夜叉が棲む
果てる事無く鬼を屠るは、かつて高名な武士だったという

彼が何故鬼に成り果てたのか、諸説は様々なれど
果てる事無く鬼を屠るは、その名、鬼斬り以蔵

ある夏に偶然白骨城に迷い込んだ歌人が、
悪鬼修羅と化した武士を見て、詠んだ歌より抜粋

第五話－１１　「鬼斬」　１０２２年８月後編（後書き）

元服→伽子　出陣・白骨城（以蔵・伽子・英雄）　憤死・以蔵

第六話－1　「炎威」　1022年9月（前書き）

伽子　9ヶ月
英雄　5ヶ月
翠　2ヶ月

第六話－1　「炎威」　1022年9月

＜壬生川（みぶがわ）会議＞

新当主に就任した伽子（とぎこ）が、居間のちゃぶ台の上に立って、天井に槍を突き上げて叫ぶ

「六代目当主・壬生川伽子、この世にはびこる悪を抹殺するため、正義の豪槍推して参ります！」

天井の板に槍が刺さって、木片がボロボロと落ちてきて居間を汚す

（なんの見世物かしらこれ）

当主命令という名目で呼び出された翠（みどり）が、正座したまま神妙な顔を続ける

「わー、パチパチ」

当たり障りの無い笑顔で、伽子に拍手する英雄（ひでお）

「今、京の都は荒れ果てています！　そこで、父・以蔵（いぞう）の意思を引き継いだこのあたしが、世直ししてみせます！」

背中に夕日が見えそうな勢いで、庭を指差す

「伽ちゃん燃えているなぁ」

「というわけで、今壬生川家がやるべきことは！」

そうですわね、わたくしが思うに……と口を開く翠を遮って、伽子は天井から槍を引き抜き、何かかっこよさげなポーズを取った

「京の都の治安維持ッ！」
「いやそれは違うよ！」

握り拳を固めて明日を見つめる伽子に、英雄が思わず立ち上がって否定する

「都の人が、最低限文化的な生活を保障できるように、今こそ立ち上がれ壬生川家！」
「ちょっと落ち着こうよ伽ちゃん」
「あたしは夢でお父さんと誓ったの、きっと鬼から都を守ってみせるって……！」
「今月やることは、あの……」
聞いちゃいねぇ、と英雄は冷や汗を浮かべる
「というわけで、今月の壬生川家は京のパトロールっ！　あたしに続けっ！」
「そんなコマンドないっ！」

しゅつじんー！と槍を抱えて庭に下りていく伽子に、翠が手に持っていた包みを開き、
「……着火」
爆音と共に高速で筒から打ち出された鉄球が、伽子の背中を襲い
――瞬間、振り返った伽子の槍に弾かれた

「おわー！　え、敵襲！？」
槍で鉄球を弾いた姿勢のまま、左右を見回す伽子に、翠が舌打ちする
「この威力でも通用しないとは……」
「何しているの翠ちゃん！？」
「これはもうちょっと、口径を大きくして威力を向上しないと……まぁ、それは良いとしまして」

「いや全然良くないけど、今奇襲の瞬間を目撃しちゃったんだけど」
未だに周囲を警戒している伽子に、翠が声をかける
「伽子さん、現在の壬生川家には、もっと他にやるべきことがありますわ」
「え、何、もっと規模を大きくして、義勇軍の結成？」
「ゲームが違うよ伽ちゃん」
翠は煙の出る大筒を布包みにしまいつつ、伽子を見た
「平安京の守護は、能無しの検非違使たちにどうぞお任せくださいませ」
鉄球によってちょっぴり曲がった槍を庭に投げて、再び居間に戻ってきて、翠に詰め寄る伽子
「そんなっ、じゃああたしは村を守るの！？　モヒカンでトゲ肩パットをつけた人から！？」
「いやそれ世界も違うよ」
英雄は笑顔でやんわりと否定するが、そのこめかみがピクピクと痙攣していた
「現在、壬生川家に一番必要なのは人手ですわ」
「え、雇う？」
「良いね、お仕事に困っている素直で働きモノの女の子をどーんと数百人ほど」
翠が大筒を包みから取り出して、ドーン！！　と天井に向けて空砲を発射した
とっさに耳を押さえた伽子に対して、英雄が至近距離で爆音を浴び、白目を剥く

「違いますわ、交神（こうしん）の儀です」
「ええっ、子作り!?　すごい、ミドりん頭良い！　あたし思いつきすらしなかった！」
すごくもっともな意見に、伽子は大げさに驚く
突っ込んだら負けだと自分に言い聞かせながら、翠は真っ当に話を続ける
「……現在三名しか居ませんし、出陣するにも戦力不足でございますわ、これからは元服した順に子供を作る、くらいの意気込みでいきませんと」
「出来るようになったら、ドンドンしちゃうのね！　やーもう、ミドりんってばおませさんっ」
伽子に背中を思いっきり叩かれて、翠がちゃぶ台に激突した
「と、とにかく……今月は、げほ……伽子さんの番ですからね」
もしかしてこれは、大筒の仕返しなのだろうか、と少しだけ翠が疑う

「うん、任せてよ！」

ドンと思いっきり自分の胸を叩くが顔色ひとつ変えない伽子に、翠が何なんだこの人は、と表情を曇らせる
「……とにかく、壬生川家の務めは朱点童子（しゅてんどうじ）を討伐することです、そのことをゆめゆめ忘れないでくださいませ」
「あはは、分かってるってやだなーもう」

絶対に忘れていたくせに、とむすっとしている翠の横、太陽のように伽子が笑う

「……いや伽ちゃんも伽ちゃんだけど、翠ちゃんも絶対２ヶ月才には思えないなぁ」

いつの間にか縁側に避難していた英雄が、女の戦いを眺めながら口元だけで笑う
変わらぬ神に祟りなしを心がける英雄も、とても6ヶ月とは思えない処世術を身につけているようだ

＜交神の儀＞

というわけで、交神の間にやってきた伽子を、何だか落ち込んでいるイツ花(いつか)が出迎える
「ようこそぉ……」
「おわあ、ハナハナどうしたの」
「うぅ、以蔵さまが……」

ぐすぐすと涙ぐむイツ花を、伽子が慰める
「……お父さんのこと、そんなに思っていてくれたなんて、ハナハナ」

「以蔵さまが、書いた遺言の中に……わたしの名前だけなかったんですよぉぉ！」
突如、うわぁぁんとジタバタ暴れ出すイツ花
「そ、そうかぁ……」
何とも言葉が出てこない伽子だった
「酷い、酷すぎますぅ！　わたしってそんな地味ですかァ！？　インパクト無いですか、出番もドンドン減っていきますかァ！？」
「ちょっとハナハナ、叩きつけてるそれ神様一覧表！　暴れない暴れない、巫女服が破れるよ！」

とても外部にお見せできない映像が流れること、数十分

「つ、つまり、お父さんは決してハナハナのことを忘れていたわけじゃなくて……」

「そうですかやっぱり！　つまり、一家の土台ってことなんですネェ！」

「そ、そうそう……一番信頼しているんだよ……」

必死で説得を完了して、荒い息をつく伽子の肩を揺さぶりながら、イツ花が嬉しそうに笑う

「アハハ、それじゃ交神の儀を始めましょうかァ」

「何かあたし……ことをする前からくたくただよ……」

今まで生きてきた中で、一番言葉を考えたかもしれない

色んな意味で当主は大変だ、と伽子は思う

「さ、お相手はどの神様ですかァ？」

「どうしようかな、もう……何だか誰でも良くなってきた……」

「じゃあ、この人なんてどうですか、八坂牛頭丸さまって神様ですけど」

そう言ってイツ花が指したのは、人の身体に牛の頭を持つ、どこぞの神話で地下迷宮に閉じ込められていそうな神様だった

「あ、いいかも」

「うっそォ」

「え、今ハナハナなんて言った！？」

口元を押さえて、いえいえ、とイツ花が微笑む

「いやーでも良いんじゃなーい？　格好良くない？」

「そ、そうですかァ」
「それに、ちょっとお父さんに何だか似ているよねー」
「そうですかァ！？」
年頃の少女は、イツ花にニッコリと笑って、じゃあこの人でお願いしまーすと頼む
「わ、分かりましたァ……」

イツ花が神卸しの舞を始めると共に、部屋が徐々に暗くなってくる
その中で、静かな部屋に波紋のように、神の声が届いた

八坂牛頭丸「ウッシッシッシッシ……！」

ダジャレじゃないですか！！　と怒鳴りたい気持ちを抑えて、イツ花が静かに部屋から退出すると、中から「うあー！」とか「すごーい本物だ！」とかいう、はしゃいだ声が響いてくる

「……もしかしたら、何でも楽しめる伽子さんは、ホントはすっごい方なんじゃないでしょうか」
藤のつぼみが膨らみ出す季節、壬生川六代目当主の初仕事は、こうして無事済んだのであった

第六話－1　「炎威」　1022年9月（後書き）

交神の儀・伽子×八坂牛頭丸

第六話－2　「守護」　1022年10月（前書き）

伽子　10ヶ月
英雄　6ヶ月
翠　3ヶ月

第六話－2　「守護」　１０２２年１０月

＜平安京＞

真夜中、朱雀大路の南端、都の表玄関として名高い巨大な門に、静かに黒い影がうごめいていた
いまや盗賊の住処と化している、荒れ果てた羅生門である

その門の陰から今まさに、痩せこけた赤ん坊のような一匹の鬼が出現した
真っ赤な鬼はよろよろと通りを歩き、その姿に気づいた何人かの町人が悲鳴を上げた

検非違使（けびいし）Ａ「ちょ、お前アレ鬼だぞ！」
検Ｂ「お、鬼、鬼……」
検Ｃ「た、退治しないと！」

騒ぎを聞きつけた兵隊が、提灯と槍を持って、鬼を形だけ取り囲むしかし、鬼が闇の中で輝く真っ赤な目をぎょろりと動かすと、思わず検非違使の何人かが怯えた声を出した

検Ａ「以前は、人里まで鬼が降りてくるなんてなかったのに、今じゃ平気でやってきやがる……！」

それが朱点童子（しゅてんどうじ）・黄川人（きっと）の完全復活後の影響だということを、一兵士は知るよしも無い
鬼の口元には、まだ真新しい人間の血が付着していて、提灯の明

かりに照らされててらてらと光っていた

その時、鬼を取り囲んでいた検非違使たちが、さざなみのように割れた
一本の道から、まだ成人にも達していないと思われる少年が、使い込まれた薙刀を持って姿を見せる
栗色の髪に、黒と青の羽織を身に着けていた、それは京でもことさらに有名ないでたちであった

「壬生川（みぶがわ）一族だ……」
誰かが呟いた

「半神の、壬生川の武人……」
「鬼殺しの家系か……」

検非違使の作った道を悠々と歩き、少年は鬼に近づき、すれ違い様にその首を刎ねた
瞬きの間に化け者を葬った少年に、検非違使が戦々恐々と漏らした

「俺達から見たら、どっちが鬼か分からねぇな……」

少年は薙刀に付いた鬼の血をふき取ると、ため息をついて、そのままどこかに歩き去っていったという

＜出陣＞

居間に、出陣支度を整えた伽子（とぎこ）が凛々しく立っていた

「よーし、今月はバリッバリ戦闘するよー！」
「えー」
ちゃぶ台にもたれながら、昨晩屋敷に帰ってきたばかりの英雄（ひでお）が、少し嫌そうな顔をした
「ボク、京の都に行ってきたばかりなんだけどなぁ……」
「おー、パトロールご苦労様！　ご褒美、ひーくん！」
英雄の髪をわしゃわしゃとかきまぜる伽子
「痛いから痛いから、ていうかパトロールじゃなくて、復興支援なんだけど」
「えー、じゃあご褒美返してよ！」
「か、返す……？」
少し考えてから、英雄は自分がやられたように伽子の頭をぐしゃぐしゃにする
「ひゃぁん」
（……先月一ヶ月交神（こうしん）の儀をして、感度が上がっているのかな）
英雄は邪なことを考え出す
「出来ましたわぁぁぁ！」
その時、屋敷を揺さぶるような大きな声が聞こえてきて、思わず伽子と英雄は目を合わせた
「え、なに？」
「翠（みどり）ちゃん……でも、キャラが違うような」
バターンと思いっきり障子が開き、目の下に大きなクマを作った翠が二人の前に姿を現した

「伽子さん、あなたもこれでお終いですわ」
「物騒だよ！」
あちらこちらがはだけた着物を身にまとった翠は、枕大の大きさの筒を伽子に向けた
「完成しました、名づけて……十寸砲火！」
翠が完全武装の伽子に向けて、巨大な筒を発射した
轟音と共に打ち出された弾を、伽子は寸で避けるが、その避けた場所に翠のニ連射が強襲する
「うわあ！　い、いたた！」
ニ発の鉄球を両手で受け止める伽子に、翠がニヤリと笑った
「さすが伽子さん……ですが、これでトドメですわ、二寸機銃火！」
十寸砲火を投げ捨て、腰に下げていた比較的小さな大砲を構え、着火すると同時に、無数の小さな円球が視界を埋め尽くすほどに散布された
「え、えええええええええ！」
さすがに度肝を抜かれた伽子は、みぞれのような鉄球を浴びて、その場に倒れる
壁にも障子にも弾が突き刺さり、床には節分後のように弾丸が散乱している中、翠は拳を握り締めた
「……ついに、伽子さんを超えることが出来ましたわ……天才と呼ばれるわたくしの、才知の勝利……うふふ、自分で自分が恐ろしくなりますわね」
「ボクは翠ちゃんが普通に恐ろしいよ」
翠の足元にいて散弾を免れた英雄が、冷や汗を浮かべながら呟いた
不気味な笑みを浮かべる翠に、伽子がむっくりと起き上がった

「み、ど、りーん……」
「うふ、ふ、ふふ……ハッ！」
ゆらゆらと迫る姉に向けて再び二寸機銃火を構える翠の腕から、伽子は筒を叩き落す
「……散弾は単発に比べて、一撃一撃の威力が劣っているとは言え……木の枝をまとめて叩き落すほどの破壊力だと言いますのに……化け物……」
「さすがに怒ったぞおおおおおおお！」
顔中に丸い赤アザを作った伽子が、きしゃーと翠に飛び掛った
「ちょっ、わたくしは、大筒士なんですから武芸は……あ、ちょっとっ、痛っ、痛いいいい！」
「ちゃんとお部屋も片付けなさいよおおおおお！　伽子ちゃんパーンチ！」
「痛い、痛いですってば！　やめてっ、大筒の実験じゃないですか何が悪いって言うんですかぁぁ！」
悲痛な絶叫から耳を塞ぎながら、英雄は居間から転がるように逃げていく
「痛ーいいいいい、この天才のわたくしにこんなことをするなんて、覚えてなさいよおぉぉぉ！」

〜〜

それから三人は紅蓮（ぐれん）の祠（ほこら）に出陣した
大筒士・翠の初陣であったが、彼女は二寸機銃火を取り上げられたため、結局十寸砲火で一ヶ月戦ったのだが、その桁外れの威力に

英雄は目を丸くしたという

「これが翠ちゃんの作ったものなんて……すごいよこれ、戦術がまるっきり変わるよ」

後衛にいながら、相手の後衛を狙い撃ちができて、威力も高いという革命的な発明だ

「……本当は、二寸機銃火もあれば、相手一列も攻撃できるのですが」

「今月は反省しなさい！」

伽子が翠の頭をぽかりと叩く

「ま、まぁまぁ伽ちゃんも……」

翠が伽子に見えないように、べーと舌を出した

「翠ちゃんも、さすがにあれは自粛した方が良いと思うよ……」

「凡人に天才の考えは分からないのですわ」

何をーと再び伽子が翠に向き直り、英雄がはは……、と乾いた愛想笑いを浮かべた

帰ってきてから、英雄はイツ花にポツリと漏らした

「鬼より、味方が怖かった」

伽子と翠の仲を取り持った英雄に、イツ花は静かに胃に優しい漢方薬を差し出したらしい

第六話－２　「守護」　１０２２年１０月（後書き）

出陣・紅蓮の祠（伽子・英雄・翠）

第六話－3　「男子」　1022年11月前編（前書き）

伽子　11ヶ月

英雄　7ヶ月

翠　4ヶ月

第六話－3　「男子」　1022年11月前編

＜翠（みどり）の部屋＞

翠は滅多に部屋から出てこない

壬生川（みぶがわ）一家が行っている、朝と夕、それに夜の武道の稽古の時間のほとんどを、部屋で過ごしていた

机の上に紙を広げ、一心不乱に図面を描く翠

「前回の出陣で、十寸砲火が鬼に通用するのは分かったから、次は精度を落とさずに威力を……」

新型大筒の開発に取り掛かる翠は、うーんと唸る

「……十寸砲火の口径を広げて球を大きくしても、でも火薬の爆発力では十分な運動エネルギーを与えられませんし……」

何度も計算式を書いては、その紙をくしゃくしゃに潰してしまう

手元には大筒士の指南書がある

もう何度読んだか分からず、内容はほぼ暗記してしまっていた

ただ“面白そうだから”と思って始めた大筒士であったが、それは翠の知的探究心をくすぐるには最高の職業だった

現在はほとんど大筒製造士と化している翠であったが、彼女は満ち足りていた

何よりも、すぐさま鬼や姉相手に、威力の結果が出るのが手っ取り早くて良い

制作費は壬生川家の資財が山ほどある、まさに翠にとっては理想

の環境だった

「にしても、ボクがいることにも気づかないほど集中しているんだねぇ」

「ハッ」

翠が振り返ると、部屋の片隅に書物を持った英雄(ひでお)が横になっていた

「英雄さん、いつのまに……なにをしに来たのです」

伽子(とぎこ)ほどではないが、得体の知れないこの兄も翠は苦手としていた

「そんなに邪険に扱わないでよ、この前の出陣以来、姿が見えないから心配していたんじゃないか」

ボクの可愛らしい妹だしね、と言って、本をそこらへんの山に投げて近づいてくる英雄から、翠は少し距離を取る

「……お食事ならイツ(いつか)花さんが持ってきてくださりますし、詰まった時は身体も動かしてます」

「ずいぶん大人びた4カ月才だなぁ、顔も何だか煤だらけだし」

翠の格好はもう鼻の頭や頬に煤がついて、目が赤く、髪なんてぼさぼさに伸びきってしまっていた

「……火薬を取り扱っていますから、それは仕方ないですわ」

英雄は自分の着物の袖で、翠の色白な頬をごしごしと擦る

「なにをなさるのですか……」

「翠ちゃんも、せめて整った格好をすれば、十分美少女なのに勿体無いなぁ、いやぁボクは残念だ」

「どうして英雄さんがガッカリなさるんですか」

翠の不信気な声に、英雄はそうだ、と一本の櫛を取り出した

「へへーん」
「な、ちょっと、何をなさるのですか……」
英雄は翠の細い背中に寄りかかって、その赤い髪を優しく梳かし始めた
「ま、ジッとしててね、何なら足でも揉んであげようか？」
「要りませんってば」

身をよじって逃げようとする翠を捕まえたまま、英雄はべっ甲の櫛で髪先から徐々に梳いて、柔らかな髪を整えていく

「……わたくしは英雄さんと違って、京の都の復興支援などはしませんから、人前に出るわけでもなく、容姿を整える必要などありませんから……」
「じゃあ、ボクのためにオシャレしてよ」
「それこそどうして！」
ははは と笑う兄に髪を弄られ、気恥ずかしさを感じながらも翠はその行為を受け入れてしまう
「……英雄さんも、伽子さんと同じくマイペースですわね」
「いやボクからすれば、翠ちゃんも相当我が道をゆくタイプだけど……」
先ほどとは違った乾いた笑い声を上げる英雄
「でも、女の子と二人きりのときは、確かにスイッチが入っちゃうかも」
「なんのスイッチですか、なんの」

英雄に触れられている付近の首筋辺りに、急にチクチクした嫌な気配を感じてしまう

「まぁでも、伽ちゃんとはあんまりケンカしないでね、ボクが怖いから」

「さっきから自分のことばかりではないですか！」
英雄は急に、耐え切れなくなったかのように、くくく……と忍び笑いを漏らす
「くく……はは、いくら天才天才言っても、やっぱり翠ちゃんも可愛いなぁ」

その明るい声に、翠は眉をひそめる

「……もしかして、今、わたくしをからかってましたか？」
「あ、分かっちゃった？　つい思ったことが口に出ちゃったか、反省反省」
英雄さん、と怒鳴ろうとして翠が振り向いたところに、英雄がにかっと微笑んだ
「はい、完成」
どこから持ってきたのか、小さな手鏡を英雄は翠に突き出した
「どう？　ボサボサだった髪も、ずいぶん綺麗になったでしょ」
「……そう、ですわね……」
少し赤い顔をする翠に手鏡を持たせて、英雄は翠の前髪を指でかきわける
「んー、何かちょっと前髪邪魔そうだよね、髪も切っちゃおうっか」
「いや、あの、わたくしは……」
「じゃあ天気も良いし、庭に行こうよ、ボクが散髪してあげるから、ね？」
英雄の笑顔に翠は断りきれず、立ち上がらされてしまう

（何だか、英雄さんがイキイキとしていますわ……）
大筒の改良が行き詰っていたのが、ついつい了解してしまった原因、と翠は自己分析する
その一方で、英雄は笑顔で翠の手を引いたまま、独り言のようにつぶやいた

「どうして、一対一だと二人ともこんなに巧くいくんだろうなぁ……」
英雄、7ヶ月にして、その女性相手の素質を開花させつつある頃合であった

＜伽子の子＞

「ぱんぱか――」
「パーンパカパーーーン！」

両手を掲げて拍手する伽子に、イツ花が口を尖らせる

「お子様がいらっしゃいましたよォ、八坂牛頭丸さまからァ、へーん」
「どうしてそんなに投げやり！？」
台詞を取られたからだ、とは気づかない伽子
「まァそれは良いとしましてェ、おめでとうございます、男のお子様です！」
「おー」
パチパチ、と意味もなく拍手する
「これで、壬生川家がついに男女比1：1になったね……は、つまり合コンが出来る」
「合コン！？」
「何だかひーくんが、すっごく楽しい催しですっごい夢中になれるって語ってて、面白そうだなぁって」

それ騙されてます騙されてます、とイツ花が手をパタパタと振る
「じゃ、じゃあお呼びいたしますよ？」
「はーい」

障子を開けて現れたのは、栗色の髪の少年だった
不機嫌そうな表情の瞳は青く、口元は堅く引き締められて、どことなく勇壮な印象を受けた、将来は良い武人になるだろう
伽子は息子に力斗（りきと）と名づけた

「強くなるように、ってね！」
「……」
「あだ名はどうしようかな、強そうなの……リキト……リッキーマーティン」
いやそれはどうかと、と控えめに突っ込むイツ花

「……母ちゃん、俺が来たからには、もう安心だから」

幼い力斗は伽子の両肩に手を置く
座っている母親に、立ってようやく目線が並ぶ少年だったが、その視線は何か決意を秘めたように頼もしかった

「安心？　何が安心なの？」
「俺、父ちゃんから今まで、ずっと母ちゃんの話を聞いてきたんだ」
力斗の真剣な目に、思わず息を呑む伽子
「女でいながら壬生川家で戦う健気な人だって……だから父ちゃん、辛いだろうから俺が行って楽させてやれ、って」
「良い話ですネェ……」
涙ぐむイツ花に、でもなぁ、と伽子は口を開く

「でも別にわたし、無理しているわけじゃないし、楽しくやっているよ」
「え……」
「だから、その気持ちはありがたく受け取っておくね、ありがとう、よしよし」
息子の頭を撫でる伽子に、なぜか力斗は怪訝そうな声をあげた
「おかしいな……」
「え？」
「女って弱くて、男が守ってやるものじゃないの？」
伽子とイツ花は顔を見合わせた
「だから俺が守ってやるから、安心してよ母ちゃん！」
声高にそう言って胸を叩く威勢の良い少年を、イツ花が哀れみの視線で見つめる
「壬生川家にそんな思想の持ち主がやってくるなんて……なんて、哀れな……」
「何で！？」
違った意味で涙ぐむイツ花の背中を、伽子がバシッと叩き、その場に倒れるイツ花
「とにかく、そんな意気込まなくて良いからね、力斗」
あだ名を思いつかなかった伽子が、息子をそう諭す
「ああ、鬼退治は任せてくれよな、母ちゃん！」
「だーかーらー」
「屋敷にいる女たちも、みんな俺が守ってやるから！」
「ちーがーうー！」

その後、母子の押し問答の後、力斗は「俺剣士になる！」と張り切って腕を上げた

理由を伽子が聞いたところ「一番強そうだから！」と、力斗は自信満々に答えたという

こうして、幸家（こうけ）の跡継ぎ・力斗は、幸四郎（こうしろう）の代で途絶えていた壬生川一刀流を復活させることとなった

第六話－４　「門手」　１０２２年１１月後編

＜出陣＞

「それじゃ、今月も三人揃っての出陣でござーるー！」

玄関で槍を掲げる伽子（とぎこ）の横で、翠（みどり）が戦衣装をまといながら、しきりに前髪を気にしていた

「何だかわたくし、変な心地がいたしますわ……」

「ちょっと切りすぎちゃったかな？　まぁでもそんなもんだって、うん可愛い可愛い」

肩にかかるくらいまでの長さで揃えられた翠の髪を、嬉しそうに指で引っ張る英雄（ひでお）

「うん、ボクも結構巧いもんじゃないか」

「この天才には敵いませんけれど」

「いやそこ、張り合う場面じゃないよね？」

そのふたりのやりとりを見て、伽子が疑惑のまなざしを向ける

「なーんか、ひーくんとミドりん、仲が急接近してない？」

「あれ、妬いているの？　伽ちゃん大丈夫だよ、ボクはみんなの英雄くんだからね」

嬉しそうに伽子の肩に手を回す英雄

そんな英雄の手に、がぶりと噛みつく少年がひとり

「いだっ、ちょ、なにこれ、誰？」

手の甲にすっぽんのように食いついている栗色の髪の少年を見て、

英雄がさすがにビビる

「ちょっと、何をしているのリキ！」
「だって母ちゃん、こいつ今明らかに女の敵って顔してたぞ！」
伽子を庇うように両手を広げる力斗（りきと）を見て、英雄が目を丸くした
「え、じゃあこれが伽ちゃんのお坊ちゃんかい」
上から下まで眺めて、フーンとうなずく
「でも伽ちゃんのお子さんって、こう、見ると……」

犬歯を剥く力斗を見て、それから伽子を眺めてから、英雄はすごく納得した
頭の悪さも遺伝ですわね、と翠が内心つぶやく

「なるほど……ふぅん、でも残念、ここから先はオトナの時間だよ」
英雄はくすっと微笑んで、力斗の頭を掴む
「ここから先は出陣、オトナの時間は生後2ヶ月後のことですわよね」
「うわミドりんすごい」
翠の訳に感心している伽子の横、英雄が少しずつ指に力を込めていく
「悪いけどボク、男には子供でも老人でも容赦しないんだよね」
「お、お前……なかなかの殺気、を……」

向かい合う少年の間に割って入った伽子が、ふたりを引き剥がす

「ちょっともう、仲良くしないとダメなんだからねー！」
キッと伽子が両者を睨むと、
「な、仲良くって俺は」
「ヤだなぁ伽ちゃん、ボクが本気で言っているわけないじゃないか、アハハ」

その瞬間、英雄は伽子に対して、実に爽やかな笑みを見せる
「ね、力斗くん？」
（な、何コイツ……）
力斗は掴みどころのない英雄に怯えて、少しずつ下がっていったそのコントをつまらなさそうに眺めていた翠が、そろそろと口を挟む
「早く向かいましょうよ、わたくし、知識の成果を披露したいですわ」
十寸砲火を背中に背負って、二寸機銃火を腰に下げた翠がふたりをせかす
「あーそうだよ、もう、ひーくんも準備良いの！？」
「ボクはいつでも」
「よーしそれじゃ……壬生川家、突撃ー！」
槍を高く掲げて、力斗をイツ花に任せた伽子は、花火のように叫んだ

＜鳥居千万宮＞

先月に続いて槍使い、薙刀士、大筒士の三人組は、鳥居千万宮に進軍した

鳥居の入り口付近を進みながら、英雄は手元の台帳をめくる
「凄いね……手記を見ると、最後に鳥居千万宮に出陣したのは１０２１年の１月だ、今から二年近くも前じゃないか」
「それは、壬生川家記録集『実録壬生川戦史』ではありませんか」

翠が薄く目を細める、ちなみに名づけ親は初代当主玄輝だ

「いやさすがに写本だよ、こんなこともあるかなと思って、先月に写しておいたんだ」

さすがは、自称マメでよく気が付く男・英雄

「そうでしたか、英雄さんも少しは知恵の欠片があるのですわね」

「……褒められたと思ってくよ」

苦笑いを浮かべる英雄の肩越しに、伽子が戦史の記録を覗き込む

「うわー、あたしのおばあちゃんに、ひーくんとミドりんのおばあちゃんも参戦していたんだ」

「この頃は、五人家族で男がひとりか……やるな師匠」

ふつふつと敵対心を燃やす英雄

奥へ進んでいく三人の前には、四色の鳥居が並んでいた

「へー……今は秋なので、黄色の鳥居をくぐっていけば、奥へ進めるというわけですわね」

「どうして分かったの!?」

「先ほど記載されていた冬の事例を読みましたわ、恐らくこれは五行説ですわね」

伽子は初めて聞く単語にキョトンと目を丸くする

「ゴギョウ？　何か強そう」

「……春は緑、夏は赤、冬が黒で、秋は本来なら白なのですが、季節が移り変わるという意味で黄色が指す場合もありますわ、填星、太白、白虎の守護する西方ですわね」

「宇宙語だ」

翠はそんな伽子を鼻で笑う

「学のない伽子さんには、微塵も理解できませんでしょうけど」

「あ、何かカチーン、今の言い方悪意を感じたぁ」

ピリピリとした空気を感じて、すかさず英雄が場を離れた

「あら、天才のわたくしとお比べになる方が間違いでしたわね」

「ふっふっふ……ミドりんは頭が良いもんねぇ、なでなでしてあげようかぁ……」

手をにぎにぎさせながら迫る伽子に、翠が涼しく微笑む

「遠慮致します、お優しくなさそうですし」

見つめ合う視線で火花を散らすふたりに、英雄がやや遠くからお声をかける

「さ、ほら、今月も短いんだし、戦わなくっちゃね！？　おふたりさん？」

戦場で完全武装の伽子と翠を恐れてか、心なしか必死だ

「ああそっか、こっちは家でも戦えるもんね」

さらりと凄いことを言う伽子

「……大筒を持っている時なら、いつでもお相手致しますわ」

素手では絶対に敵わない翠が、口を尖らせてつぶやいた

～～

三人はそれから黄色の鳥居をくぐり、慣れてしまえば単純な作りの鳥居千万宮を進撃していった

初陣では多少緊張していた面もあった翠も、今回は二丁の大筒を手にしてご機嫌なのか、時々散弾を伽子の後頭部にぶち当てながら、景気良く大筒を連射していた

そのたびに笑顔で振り返る伽子が、英雄は怖くてたまらなかったという

そして壬生川家は大江山制圧後にして、三つ頭の大鬼、稲荷ノ狐次郎と再戦する事となった

壬生川家の記録と翠を頼りに、暗黒大鳥居までやってきた三人は鳥居に乗る巨鬼を見つけた

「イヤだなあ、強そう」

守り神のように鳥居の上に座って瞳を紅く輝かせる三尾の狐に、英雄は顔をしかめる

「あれ、何だか、お父さんみたいな雰囲気が……不思議な感じ」

「……朱ノ首輪、のせいかな」

ケーンと鳴く狐次郎の首に鈍く光る朱ノ首輪は、朱点童子・黄川人によって付けられた品なのだろう

「じゃあやっぱり、成仏させてあげなきゃ！　昇天！」

「……せめて解放って言おうよ」

翠が大筒・十寸砲火を構えて、鋭く呟く

「右前方、来ます」

狐次郎が大鳥居から飛び降り、三人に牙を剥く！

散開した三人を狐次郎の巨大な尾がまとめて薙ぎ払い、槍で受け止めた伽子、薙刀で流した英雄に対し、経験の浅い翠がまともに腹に浴び、後ろに吹き飛んだ

「きゃあっ」

「翠ちゃん！……＜お地母＞！」

全体回復の術を唱える英雄の横から、伽子が狐次郎を恐れず果敢に突撃する

「こんの、正義の一番槍その身に味わえー！」

新世代となってから、父の面影を追いかけ人一倍奮闘してきた伽子が、鎌槍で狐次郎の分厚い毛皮を引き裂いた

「うりゃっ、はっ、たぁぁ！」

血の雨を撒き散らしながら戦う少女に、狐次郎の三本の尾が迫撃し、その一本が一人で飛び出していた伽子のわき腹を貫いた

「ちょ、伽ちゃんあんまり無茶しないでよ！」

傷を負いながらも二本を弾き返した伽子が、慌てて英雄の元に避難してくる

「うわーん、ひーくん守ってー」

ふたりの少女が傷ついた姿に、英雄は仕方ないなぁと立ち上がる

三人で臨む初めての強敵相手に、英雄の瞳の色が変わった

「ふたりとも、門陣（もんじん）のやり方は知っているよね」

薙刀を構えて英雄は、伽子によって手負いとなった狐次郎の前に進み出る

「怖いなぁもう……最期の見せ場にならないことを祈るよボク」

祖母に当たる蘭が生み出した、ひとりが前列に立ち、門手となって強敵の攻撃を阻む陣形――狭門陣（きょうもんじん）

それの門番が、果たしてわずか7ヶ月才の英雄に務まるのか

苦笑いを噛み殺しながら、英雄は薙刀を振り回す

「来いよ、双光蘭（そうこうらん）――斬（ざん）！」

英雄が注意をひきつけている間に、伽子らはせっせと傷を癒やす

「……＜円子＞！」

「＜円子＞……！？」

術技がからっきしの翠は、伽子の唱えた水の術に驚嘆した、それは＜お雫＞の三倍の効用がある高等術ではないか
術の名手であった鈴鹿（すずか）と門司（もんじ）が早死したため、壬生川家でもまだ使い手が居なかった上位回復術によって、伽子の傷が瞬時に回復する

「……ただの力バカではなかったのですわね」
「んし、あたし大・復・活！」
その間にも、ひとり前列に立ち三本の尾を薙刀で弾き続けている英雄の着物が、徐々に血に染まってゆく
「ちょ、もうダメかも……」

集中力が長続きしない英雄に、狐次郎が飛びかかり、空中でその身体が鉄球によって吹き飛ばされた

「……十寸砲火！」
「チッ、ミドりんには、負けられないっ！」

伽子の槍雨と翠の砲撃が、競うように狐次郎の体力を削り取っていく

「いやあの、ボクに＜円子＞とかくれないのかな……」
あちこちから血を吹く英雄が、蒼白の笑顔でつぶやく

伽子の槍が狐次郎の尾を吹き飛ばし、翠の大筒が手足を潰していく
本日一番の功労者が死に絶えそうな中、伽子と翠の猛攻がついに狐次郎を押し切り、咆哮を上げながら稲荷ノ狐次郎は黒い影の中に消えていった

喜びに抱き合った伽子と翠が、はたと気づいて、そそくさと離れたその横で、血が足りなくなった英雄がばたんと倒れ、ふたりは慌

てて彼を介抱する

こうして伽子率いる壬生川新世代は、朱点討伐後の中ボスをようやく退治し、これからのとても長い道に一筋の光明を見出す事となった

第六話－４　「門手」　１０２２年１１月後編（後書き）

出陣・鳥居千万宮（伽子・英雄・翠）　初見・力斗→剣士

第六話－5　「春菜」　1022年12月（前書き）

伽子　1才
英雄　8ヶ月
翠　5ヶ月
力斗　1ヶ月

第六話－5　「春菜」　1022年12月

＜壬生川家・居間＞

冬にしては暖かく過ごしやすい日であったが、天気はあいにくの雨

伽子はひとりで居間にいるより、誰かの部屋に遊びに行く事が圧倒的に多かった

「……だからといって、何でわたくしの部屋に来るのかしら」

「だってー、ヒマじゃなーい、雨降りだしー」

（どこの子供よ……）

翠の枕を抱いたまま身体を左右に振る伽子を、冷めた目で眺める

「力斗さんか、英雄さんと遊べばよろしいじゃないの」

どんな心境の変化か、伽子に対してだけ敬語を止めた翠が、冷たく突き放す

「ほら、ひーくん今月交神の儀だし」

「ああ……」

だから朝から「この世は天国、憂い無しだね！」なんてハツラツとしていたのか、と翠は思い出す

現金な男だ

「あたし、伽ちゃんきょうも可愛いね、なんて言われちゃったよあははー」

「……そう」

適当に聞き流して、翠は目の前の十寸砲火の解体点検を続ける

「それにリキは、先月からずっと道場で素振りしているし、あたし

が見てもなー、あんな短い武器のこと良く分からないしー」
（それが一児の母の言うことなのかしら……）
ついつい反応してしまいそうになるのを、押しとどめる
相手にしたら負けだ、負け
「だから、遊ぼうミドりん」
「わたくしが、何をしているように見えるかしら」
「ぱずる？」
伽子にしてはなかなか巧い答えだ、と翠は思った
そんな当主の言葉に気のない相槌を打っていると、やがてパズルが完成した、十寸砲火に問題なし、だ
「……よし、それでしたら、少し動作テストと行きますか」
大筒を持ち上げて、翠は伽子を振り返る
「え、反撃アリなら良いよ？」
「……ええ、良いでしょう」
伽子がにやりと笑い、翠もそれに応える
「そこらの鬼相手よりも、伽子さん相手の方が、身が入りますからね」
「どういうことよ！」
念入りに大筒に火薬を詰め込む翠に、伽子が怒鳴った
〜〜
ぱらぱらと雨が降る庭に出て、伽子と翠が向かい合う
伽子は穂先を取り外した素槍を構え、翠は軽装で二つの大筒を抱

えていた

「そういえば、不意打ちじゃなくて、実際に勝負するのは初めてだね」

「そうだったわね」

翠は蛇のように目を細めて、伽子を見つめる

「それじゃ行くよー」

素槍を低く構え、伽子が間合いを詰める

「この天才の才知に、ひれ伏しなさい……着火！」

大筒を胸の前で構えて、翠は駆け出した伽子に向け、二寸機銃火を着火して、

ぷすっ、と音を立てて、二寸機銃火はやる気のない煙を吐き出した

「……へ」

思わず目が点になる翠に、伽子の振り回した槍が迫り――

カコーンと良い音を立てて、ものの見事に翠の身体が真横に吹っ飛び、庭を越えて居間の障子を突き破って、鞠のように台所まで転がっていった

「え、あ、あああっ、ミドりん！？」

あまりにも当たりが良すぎたのは、翠がほぼ棒立ち状態だったからだ

屋敷の奥から返事はない

一瞬の静寂がとっても恐怖だ

「ちょ、＜円子＞！　＜円子＞ぉぉぉ！」

今月翠が得た教訓は、火薬は雨に濡れると使い物にならなくなる、

という実に貴重な発見と、伽子はヤバイ、という警報めいた事実であった

＜交神の儀＞

「というわけで、今月はボクが交神だね」
「妙に嬉しそうですね英雄さま」

いまだかつて、こんなに幸せそうに交神の儀に挑んだ家族がいただろうか、と思うイツ花

「それじゃイツ花さん」
英雄はニッコリと微笑んだ
「奉納点が１０点の神様から、順番に呼び出してもらえるかい？」
「ひとりまでですよ！」
「ええっ」

そんなバカなっ、と英雄がうろたえる

「良いじゃない！　奉納点が低い神様から、片っ端じゃんじゃん持ってきてよ！　おかわり、おかわり！」
「何様のつもりですか！」
「くっそう、そんな……予想外だ……」
冷めた目で舌打ちする英雄に、イツ花が冷や汗を流す
「仕方ない……でも、この中からひとりを選ぶなんて、ひとりきりだなんてボクには選べないッ！」

神様一覧表と頭を抱えて苦悩する英雄に、天罰が当たらないか思わずイツ花は心配してしまう

「参った……ボクはきょう、知恵熱を出して、消耗死してしまうかもしれない……」

英雄は神様の顔写真を眺めながら、下唇を噛んでつぶやいた

「世界一情けない死因ですネ」

「ああもう今話しかけないでくれる！？」

黒いオーラを背負いながら、神様一覧表を吟味する英雄

（何だかこの人怖いですよォ昼子さま……）

イツ花はそんな英雄を和ませようと、軽いジョークを飛ばしてみた

「あ、孔雀院明美さまなんていかがですか？」

英雄は、イツ花にニッコリ微笑んだ

「イツ花さん、殺すよ」

「必死すぎますよォ！」

ただオカマの神様をオススメしただけなのにー、とイツ花が泣くそして、頂点にあったはずの太陽が沈んだ頃、英雄は顔をゆっくりと上げてつぶやいた

「よし……決めた」

「何でそんな、悟ったようなお顔に……」

その間に家事を片付けてきたイツ花が、思わず突っ込む

「ボクのお相手は……木曽ノ春菜ちゃんで、お願いします」

「案外マトモですね」

色白で黒髪の正統派美人を指差す英雄に、イツ花が尋ねる

「でも、あの、奉納点が……その、相当低くないでしょうか？」
「ああ、この神様一覧表、奉納点も書いてあったんだ？」
英雄が自らの家の宿命を全て無視した言葉をはく
「あの、ちなみに、どなたと迷ってたんですか？」
「んー……最後まで残ってたのは春菜ちゃんと、」
まるで友達感覚で神様を呼びつける
「それか、葦切四夜子ちゃん」
「うわ」

外見年齢１２才前後ほどの少女に、イツ花が少し引く

「ウブそうで良いかなって思ったんだけど、これででも、手練手管とかだったらちょっと興ざめだよね……いやむしろ、逆にアリかな？」
「同意を求められても知りません！」
「というわけで、教え込むより、むしろ対等にお互い気持ちよくなれそうな、春菜ちゃんで」

理由を聞かなければ良かったと思いながら、イツ花は神様を呼び出す

「はいはい……それでは、お呼びいたしますからね」
「はい、お願いします」

いつもの笑顔に戻った英雄に、突然、暖かくて芳醇な風が吹きつける
そこに春の新芽を思わせるような、柔らかな女性が現れた

木曽ノ春菜「暖めてあげるわ……きゃっ！」

若葉のような手を引いて、英雄が微笑んだ
「やぁ春菜ちゃん、きょうはよろしくね」
「あ、あなたがお相手ですのね……ってあの、何を、やっ」
イツ花が静かに退出する中、春菜の戸惑うような声が響く

「ちょっと、あの、そんな……いきなりっ」
「大丈夫大丈夫、きょうはボクに任せて？　フフ」

含み笑う英雄が、春菜のまとっている着物を手早く脱がせてゆく

「こ、こんな、お話が、違います、わ……あああっ！」

翌月ふらふらで天界に戻った木曽ノ春菜は、
「人間って……人間って……」と、友人の若草山萌子に涙ながら語ったというが、それはまた別のお話

第六話－５　「春菜」　１０２２年１２月（後書き）

元服→英雄　交神の儀・英雄×木曽ノ春菜　訓練・伽子→力斗

第六話－6　「昼夢」　1023年1月（前書き）

伽子　1才1ヶ月
英雄　9ヶ月
翠　6ヶ月
力斗　2ヶ月

第六話－6　「昼夢」　1023年1月

＜元旦の壬生川家＞

「1年の計は元旦にあり！」

久々に家族勢揃いした居間で、伽子がちゃぶ台を叩く

「俺は修行がしたいのだが……」

無理矢理引っ張られてきた力斗が、下座に座る

「というわけで、今年の計画表を作ってきましたあたし、控えおろう！」

「伽ちゃんが作ってきたのか……」

「うむ」

重々しくうなずく伽子の持っている計画表を、翠がちらと見て、

「……酷い」

ため息と共につぶやいた

「えー！　これが最高のプランだって、あたしの槍もつくづく言ってたもの！」

「いや今の発言ちょっとおかしいから、ほら、どれどれ」

英雄が横から、伽子の考えた最良の計画というのを覗いてみる

一月　鳥居千万宮討伐　完全制覇　ワーイ！

二月　九重楼討伐　もちろん完全制覇　ヨッシャー！

三月　相翼院討伐　当然完全制覇　キター！

四月　何とかかんとか墓討伐　華麗に完全制覇　あと少しー！

五月　勢いに乗って忘我流水道と紅蓮の祠を一挙に制覇　真名姫なんて怖くないー！

六月　ついに残る白骨城に攻め入る！

お父さんの仇を見事に討ち、怒って泣きながら挑みかかってきた朱点童子を、

ものの見事にスコーンと撃破、世界は救われる、完

最後のページには、へたくそな絵まで書かれていた

「これが計画表かぁ……」

さすがにフォローの言葉が出ない英雄だった

「まぁ痴れ言は良いとしまして」

そこで翠が、伽子の描いた計画表をビリビリにちぎる

「ギャー、ちょっと何するのミドりん！」

「こんな意味の無いものは、お部屋の掛け軸の裏にでも書いてなさい、それにゲームをやってない人が、一ヶ月に二箇所も出陣できるのか！と勘違いするかもしれませんし」

後半よく分からないことを言う香家の天才

「あの計画表どおりに事を進めないと、あたしの寿命が！」

「あー……そっかぁ」

伽子は今月で1才と1ヶ月となり、余生はもう、三割ほどしか残っていない

「あたしだって、朱点倒したいしぃー！」

「じゃあほら、このお盆を朱点童子だと思って、ハハ」

英雄が差し出した漆塗りの丸盆を伽子が受け取り、せんべいでも割るようにパリと折る

「朱点撃破」

「……おめでとう」

「おめでたいことがあるかー！」

半円のお盆を英雄に手裏剣のように投げつける

英雄が避けてその後ろにいた力斗にお盆がぶち当たり、そのまま息子が気絶するが、誰も特には気にしない

「伽子さんが朱点童子を倒したいかどうかは、この際問題じゃないわ」

肩を竦めて、翠は伽子を眺める

「天才のわたくしが思うに、少しずつ奉納点を稼ぎながら、多少なりとも上位の神と交神し、一家を徐々に強めていくべきでしょう」

「まどろっこしい！」

「思い上がらないで」

真っ向から意見が対立するふたりの少女

「伽子さんがどれだけ強くても、まだわたくしと英雄さん二人がかりにも、敵わないでしょう」

「何でボクが入っているの！？」

そそくさと障子に手をかけていた英雄が、思わず振り返った

「うーん……ひーくんがいたら、難しいかも」

「いややらないよボクは！？」

眉間にシワを寄せて見つめてくる伽子に、思いっきり首を降る英雄

「確かに伽子さんは、矛としての力も、術力も当家で今もっとも優れてます、それは認めますわ、でもそれだけでは鬼を打ち破れません」

「じゃああと何が必要なのさー！」

「補助術です」

翠がキッパリと言い切った

「力強く、足が速くても、所詮わたくしたちは人間、鬼には太刀打ちできません、武装で補っても、まだ足りません」

「そこで、補助術、というわけだね」
仕方ないので元の席に戻った英雄が、うんうんとうなずく
「かつて、第一朱点童子を討伐した時の記録にも、＜武人＞と＜防人＞が多く出典してます、つまりこの天才に言わせれば」
いちいち一言多い翠に、伽子が口を開く
「つまり……壬生川家は、この代、討伐よりも術集めに専念？」
「……そうです、チッ」
「何で舌打ちするの翠ちゃん！？」

それでもまだ伽子は微妙な顔をする

「でも何だか、ちょっと、地味ぃ……？」
「別に、おひとりで各拠点を制圧しに行きたいならどうぞ、止めませんわよ……その間、わたくしたちは宝探しに参りますから」
「宝探し！？　楽しそう！」
火が点いたように明るくなった顔に、翠がため息をつく

「……バカとハサミは使いよう、かしらね」

一転して宝探しー宝探しーと、はしゃぐ伽子に、翠はそう漏らした

＜出陣・相翼院＞

「初陣だぜー！」
燃えてきたー、と猛る力斗の前に、水の上に建てられた通路が延びている

「何でもここには、クリアに必須と言われている巻物が封じられているとか言われてまして」
濡れないように大事に大筒を抱えながら、翠が解説する
「年度を明けて復活した歓喜の舞を討伐しながら、その巻物を探しに行きましょう」
「宝探しだね！」
「……そうね」
やかましい伽子に、翠は半笑いを浮かべる

「っていうか、力斗くんは初陣なんだから、後ろにいなよ」
「うっせー、女が前で戦ってるってのに、俺だけ後ろにいれっかよ！」
ぶんぶんと刀を振り回しながら、果敢に尻子玉大将たちに斬りかかってゆく
「気合入ってるねリキ！　でも後ろにいた方が良いと思うよ」
「へっ、鬼なんて怖くねーもん」
初陣とは思えない思い切りの良さで鬼を切り裂く力斗が、そう言って胸を張る
「いやそうじゃなくて」
その瞬間横に飛びのいた伽子の、先ほどまで立っていた場所――つまり今力斗がいる位置に、雨のような弾丸が降り注いだ
「ぐはぁ！」
「チッ」
翠の放った二寸機銃火の散弾が、まともに力斗の全身を殴打する
「て、てめぇどこ見て撃ってやがるんだこのアマ！」
自らに＜泉源氏＞を唱えつつ、威勢良く怒鳴る力斗に、翠は涼しげに応えた
「……伽子さんを狙って」

「狙われてたのあたし！？」
「て、てめぇこのブス……！」
思わず刀を抜く力斗の背中を、英雄がひょいと持ち上げた
「ハハ、ダメだね、女の子に暴言なんて吐いちゃ」
ニコニコと笑いながら、ぽーんと力斗を川に投げ捨てる

「英雄さん、意外と力持ちですね」
「女の子を守るときには、特にね」
手すりに寄りかかって談笑する翠と英雄の前に、力斗が死に物狂いで川の中もがく
「ギャー、死ぬ、てめ、うおおお今足に何か噛み付いたぞ！？引きずり込まれるぅぅぅぅ！」
必死な力斗を眺めながら、口元に手を当てて上品に笑う英雄と翠
「ちょ、何笑っているの、今助けるからね！」
伽子が手を伸ばして槍で力斗をすくおうとするが、その間にも力斗はどんどん沈んでいく
「あああ、リキぃぃぃぃぃ！」

こうして力斗は初陣にして、（家族の手によって）生死の境をさまようこととなった

その後一家はキサの庭で歓喜の舞を打倒し、天女の小宮に進んだが、肝心の巻物を手に入れることはできなかった
そして、力斗の越えるべき目標第一に、英雄の名前が刻まれた刻まれなかったとか

第六話－６　「昼夢」　１０２３年１月（後書き）

出陣・相翼院（伽子・英雄・翠・力斗）

第六話－7　「出逢」　１０２３年２月前編（前書き）

伽子　１才２ヶ月

英雄　１０ヶ月

翠　７ヶ月

力斗　３ヶ月

第六話－7　「出逢」　１０２３年2月前編

壬生川（みぶがわ）の屋敷の前に、ぽつーんと立ち尽くしている少女がひとり
学のない彼女にとって、京の都の外れにあるその家は、どこか違和感があって恐ろしかった

「ウチぃ、ここで何日待っとったらいいんやろかぁ……」

自分が到着する頃にはいつも、愛嬌のある親しみやすそうな女性が出てきて、自分が四時間かけて村から運んできた根野菜を受け取り、割高なお駄賃と一個のおはぎをくれるのだ
だが、この冬の日は、なかなか頭に花のつけた女性は出てこなかった

「おなか減ってきたなぁ……」
カゴを置いたまま、大きめのはんてんを背負った少女が、ぶるぶると身体を震わせる

○「こんなところにいて……風邪を引くんじゃないのか」
その足元にちょこんと、幼い少年がいつの間にか現れていた

「ああ、それはそうなんやけど……でも、中の人が出てこんことにはなぁ」
「お前は、屋敷の人間に用があるのか」
少し困ったように、少女は少年に微笑む
「人間かどうか、分からんへんけどね……何でも聞いた話じゃ、この屋敷ん人、仙人みたいな強さなんやけど、すぐ死んでしまうんや

って、けったいやわなぁ」
「ほほう」

同年代の話し相手ができたことが嬉しいのか、少女は少年の方を見てお喋りを続ける

「あ、ウチゆねって言うんやけどぉ、何かすっごい宿命っての背負ってるみたいで、おてんとさまの上の人みたいやなぁ」
舌足らずのお喋りをするゆねに、少年は黙って耳を傾ける
「何や粗相したら、すぐ切られてしまいそうで、おっそろしいよなぁ……ウチ、山道を歩くとき、早く着け早く着け思っとるんやけど、でもこのお屋敷に近づくと、帰りたい帰りたいのう、って途中で思うんよ」
ゆねの話を聞きながら、少年はカゴの上に盛り積もっている芋を手に取り、少女に差し出した
「何やの？」
「腹減ってるんだろ、一本くらいバレない」
「ちょっと、そういうのはあかんのよー、何事もズルしたらあかんっ」
ゆねに叱られて、少年はむぅと口を閉ざす
「……そうか、それなら、僕が中の人に言っておく、良いだろ？」
「うわぁ、ちっこいのに坊やぁ勇気あんなぁ」

芋をゆねの胸元に差し出して、少年は照れ隠しに長い髪をかいた
「お、なかなか男前やねんかぁ……ありがとね、名前なんてゆーの？」
少年は門を押し開いて、肩越しに振り返って、ゆねにつぶやいた

「これから、付けてもらってくるんだ、じゃあな」

手を振りながら去っていく少年に、取り残されたゆねはタヌキに化かされたのではないかと、思わず自分の頬をつねってみた

＜英雄（ひでお）の子供＞

英雄と伽子（とぎこ）の待つ部屋に、イツ花（いつか）が輝くような笑顔で現れる

「ぱんぱっかぱかーん、ぱんぱんぱん、ぱんぱぱぱーん！」

「うわ、いつもよりファンファーレが長い！」

手を叩きながら、イツ花が開き直って言う

「寝坊しました、ハイ！」

「ヤケクソだ！」

「おかげで英雄さまのお子さまが、見当たりません！」

「おおーい！」

英雄がイツ花に思わず掴みかかる

「ちょっと、ボクの大事な娘に何かあったら、どうするんだい！？」

「まだ娘だと決まったわけじゃあ！」

「ボクは自分の娘でも、真剣に愛する自信があるよ！」

「英雄さま、交神（こうしん）の儀関連でキャラ壊れすぎですからァ！」

と、突っ込むイツ花はイツ花で、伽子に責められる

「っていうかホント、どこいったのよひーくんの子供！」

「わたしに聞かれても分かりませんよォー！」

「ボクの愛娘ぇぇぇ！」

「ちょ、わたしだって女ですよォ、首絞めないでくださいィィィ！」

どったんばったんと暴れる儀礼の間を、戸の前に立って冷ややかに眺める翠（みどり）

「……なにやっているんですか」

理解できないという目つきに、部屋の騒ぎが一瞬だけ止まり、三人が翠を見つめる

「寝坊してしまって！」

「まだ娘と決まったわけじゃ！」

「ボクはあくまでもクール系だよ！？」

三人まとめて散弾で吹っ飛ばしてやろうか、とふと翠が思う、家も平和になりそうだ

「コホン……それは良いとして、ちょっと聞きなさいバカども三人」

『ちょっと！』

まとめられてしまった三人に、翠が小さな男の子を紹介する

「英雄さんのご子息です、髪の色こそ違いますが、この屋敷の門前で戸惑っていたのでお連れしましたわ」

「初めまして」

長い赤髪を後ろにまとめた美少年が一礼する

「この中の誰が親でも嫌でしょうが……強く生きるのですわよ」

翠が少年の頭を撫でて、励ます

「キミが、ボクの息子かぁ」

顔を美系に戻した英雄が、上から下まで少年を見つめて、ふーん

とうなずく

情熱的な赤髪に、浅黒い肌を持つ少年だ
名前は道明（みちあき）、職業は壬生川家の守護者である、臥家（がけ）の若き薙刀士だ

「……よろしく」

「ふむぅ……シャイそうだけど、ふぅん、良いんじゃない？」
父親に何かを認められた道明が、はぁ、と適当に返事する
「おー、ひーくんと顔は似ているけど、性格が全然似てなさそうだね、良かった」
「……お風呂とか覗いて来なさそうな、マジメそうな人で良かったわね」
「英雄さま、そんなことしてらっしゃるんですかァ……」
女性陣の冷たい視線に刺され、英雄が道明の肩を抱く

「さ、道明、きょうは屋敷を案内しよう、ボクに着いておいで」
「はい、父上」
三人の前からそそくさと逃げ出すように、英雄は道明を連れ出していった

その様子を庭で刀を振りながら見ていた力斗は、冬だというのに汗だくの顔でつぶやく
「……英雄兄貴の子供か、負けるわけにはいかねぇな……」
力斗はそう言って、木からどさりと落ちた雪を、十字に切り裂いた

第六話－8　「気合」　１０２３年２月後編

＜出陣＞

「さぁって今月、どこ行っこうー」
伽子（とぎこ）がそう言いながら、各迷宮の名前が記してある立方体を、よいしょと転がす
庭石ほどもある大きさの立方体が転がりながら、上になった面に書いてあったのは、今月のオススメスポット

「おーラッキー面だ、今月のオススメスポット、略してー？」
「こんぽー」
はしゃぎ回る伽子を、横になって微笑ましく眺めている英雄（ひでお）が、掛け声を上げる
「でも、オススメってどこだろう」
「水着でも持って、忘我流水道（ぼうがりゅうすいどう）とかどう？」

居間でくつろぐふたりに、翠（みどり）ががらりと障子を開く

「ごきげんよう、バカども」
英雄が笑顔を引きつらせる
「開口一番になんて事を……」
「ところで伽子さん、今月はどこに出陣する気だったのかしら」
伽子は誇らしげにサイコロを抱えて、翠に今月のオススメスポット、と書いてある面を見せる
「……」
「ちょ、ちょっと大丈夫、翠ちゃん？」

立ちくらみを起こした翠の身体を支える英雄

「……誰か、わたくしを養子にしてくださらないかしら……」
「な、なんてこと言うの！」
悲劇のヒロインのように崩れ落ちる翠だが、部屋で大筒を乱射するような娘は、どこも貰ってくれないんじゃないかと英雄は思う

「……今までは確かに、そんな風に出陣の場所は大雑把でしたわ、でもこれからはどこを攻めるかも計画的に参りましょう」

ハトが豆鉄砲を食らったような顔で妹を見つめる伽子に、翠が咳払いをして説明を始める
「……つまり、年が明けたら中ボスが復活するという条件を利用するのです」
「え、えっと、その、つまり、来年の事を言えば鬼が笑う、みたいな……？」
英雄が伽子に、伽ちゃん分からないんだったら無理して答えなくても良いんだよ……、と囁く

「1年で七箇所を巡り、それぞれに巣食う鬼を倒し、効率良く奉納（ほうのう）点（てん）を稼ぎます、それに交神（こうしん）の儀三回、選考試合を二回含めれば、丁度1年ではありませんか」

おおー、英雄が拍手する
伽子は、はいせんせー、と手を挙げた
「何かしら、伽子さん」
「でもそんなにカッチカチに決めたら、面白くないじゃないですかー」
「面白い面白くないの問題ではありません十寸砲火！」
どこに隠し持っていたのか、至近距離で翠の大筒を浴びて、伽子

は後ろにひっくり返る
「い、威力が上がってる……」
素手で鉄の球を受け止めた伽子が、こわごわとつぶやく
「……近々、新型が登場する予定ですわ」
手ごたえを感じたのか、ニヤリと笑う大筒士
「で、結局今月はどこ行くんだよ」
出陣の準備を整えてきた力斗が、三人に尋ねる
「そうですね……それでは、」
「ハイハーイ、何とかかんとか墓が良いです！」
「……まぁそこでもよろしいですわ」
一同を眺めて、伽子はしっかりと頷き、叫んだ
「よーしそれじゃ、壬生川家、墓探しに宝荒しだー！」
翠が深いため息をついたのを、英雄は見逃さなかった

＜親王鎮魂墓＞

「今月こそ、俺様の力を十二分に魅せしめてやるぜえええええ！」
戦場に出ると燃える少年、力斗がやかましく叫ぶ
屋敷で人一倍訓練に励む彼だからこそ、輝く場面なのだ
地下二階まで一気に下り、軽足大将を相手に一同は果敢に攻め入った
敏捷度の順番により、壬生川三代目槍使い・伽子が先頭に立ち、突撃する

「正義の一番槍以下略！」
後ろにいる鬼まで貫通するほどの豪槍に負けじと、翠が大筒を構えて発射する
「二寸機銃火！」
つぶてのような弾丸を浴びた軽足大将たちに、英雄が躍り出た
「はい成仏っ」
舞うような薙刀の刃によって、鬼の姿が掻き消えてゆく

「おおおい、俺の出番は！？」
そして、行動順が一番遅い力斗が輝けず、思わず怒鳴る
伽子率いる出撃隊はそんなことを繰り返しながら、奥へと進んでいった

「実はあたし、すっごい事聞いちゃったのよ！」
「誰からよ」
翠の問いを無視して、伽子が続ける
「このお墓には、＜お地母＞を越える上級全体回復術が埋もれているとか！」
自信満々に言う伽子に、翠は疑いを隠せない
「まぁまぁ翠ちゃんも、まだウソと決まったわけじゃないし……ハハ、それでその術の名前って？」
「＜春菜＞」
「何としてでも持って帰ろう」

きりりと表情が引き締まった英雄に、冷たい眼差しを投げつける翠

「何でも＜お雫＞が味方全体にかかるみたいよー」
「よしじゃあ、五人くらい連れて帰ろう春菜ちゃん」
「巻物ですから、英雄さん」

古墳を先に歩みながら、力斗が伽子に話しかける

「じゃあ俺がぱっぱっと倒してやるから、誰が落とすんだ母ちゃん？」

「えーっと、聞いた話じゃ、黒スズ大将っていう……」

「……アレですわね」

四人の前方にいたのは、緑色の肌を持つ一つ目の巨鬼であった

異質な迫力を持つ巨人に、力斗がごく、とツバを飲み込む

「お、俺がぱっぱっと倒して……！」

「お待ち」

追い詰められたネズミのように力む息子の襟首を捕まえる

「いかにも堅そうですわねぇ……ここは＜くらら＞を使いましょうか」

「くららちゃんがどうかした？」

「……動きを止めて背後から奇襲し、先手を取った隙にもう一度＜くらら＞を唱え、大将だけ眠らせてしまいましょう」

久々に戦術家っぽい手腕を発揮する翠が、皆に指示する

「時計の火もあと半分ほど残っています、大将に集中攻撃で、何としてでも術を持ち帰るわよ」

「あいあーい」

「うん、了解、お持ち帰りだね」

いちいち言動が妖しい英雄を軽やかに無視して、翠は＜くらら＞を唱える

「行きますわよ」

壬生川四人が集中攻撃をしても、なかなか黒スズ大将は沈まない

分厚い皮膚に阻まれて、槍や砲撃が致命傷を与えられない中、強敵との戦いで健康度を減らしながらも、新たな術のため一同は戦い続けた

そうして、残る火がひとつになったところで、ついに＜春菜＞が出た

「いぇーい！」
「やりましたわね、この天才の作戦勝ちです！」
ハイタッチを交わして喜ぶ伽子と翠の横、英雄が面白くなさそうにつぶやく
「……術か」
「いやこの女ボケ、さっきから言ってただろ」

首を絞められる力斗と締める英雄に、翠が声を掛ける

「それでは、もう今月が終わりますし、奥を少し見ていきましょう」
すっかり仕切っている翠が先頭に立ち、さらに地下へと潜る階段に近づいて、そこで地鳴りを感じた
「……何、かしら」
階段の前で立ちすくむ翠に、巨大な影が襲来した
「きゃあ！」
二つの影を伽子と英雄がそれぞれを弾き、翠を庇うように戦闘態勢を取った
「中ボス、かな」

「いきなり襲ってくるとは、何て卑劣な！　ブッ刺してやる！」
先ほどまで散々バックアタックを仕掛けていた伽子が、闘気を露に叫んだ

「うわ、何だコイツら！」
四人の前に姿を現したのは、合計で四器の土偶だった
遮光器式土偶に良く似たその四体は、まるで土とは思えない光沢を放ち、眼の部分を赤く光らせて迫ってくる

「これも、鬼に取り憑かれたのかな」
土偶の一器が、英雄に勢いよく体当たりを仕掛けてくる
「――って」
「おい、＜お雫＞！」
凄まじい重量のぶちかましを受けて、英雄の視界が赤く染まり、力斗が慌てて援護する

その後方、一器の土偶が仲間たちに＜石猿＞を唱え、その術の詠唱を止めようと翠が十寸砲火を発したが、効果がない
「堅い……！」
その間に、伽子は二体の土偶器に付け狙われ、体力を削り取られてゆく
「この、ハニワのお化けが……＜円子＞！」
槍を風車のように回転させ、土偶器の攻撃を凌ぐ伽子の後ろで、英雄と翠が同時に七光ノ御玉（ななひかりのみたま）を掲げた
「お父さん！」
「母様！」
七天斎八起と泉源氏お紋が、全体防御の術と津波を呼び寄せる！
しかし津波は土偶に傷をつけられず、七天斎八起の術も焼け石に水のようなものであった

「何コイツらぁぁぁぁ、ああもう、当主の指輪ー！」
総力戦とばかりに、手の内を全て出し尽くす壬生川家に対して、土偶器たちは未だ一体も倒れない
それでも必死に耐え抜く四人をあざ笑うように、一器の土偶が＜

春菜＞を唱える
「……十寸砲火！」
翠の大筒で少しずつ与えた傷も、その一回で癒やされてしまう
「うぅ……まる、こ……」
伽子の術は発動しなかった、技力が切れたのだ

追い詰められた伽子に土偶の突進がめり込み、伽子は壁に叩きつけられ、そのまま意識を失ってしまう

「伽ちゃん！」
「く……ここは、退きます……！」
「てめぇ……！」
力斗が怒りに身を任せて斬りかかるが、その刀では傷ひとつ付けられなかった

英雄が伽子を担ぎながら暴れる力斗の腕を掴んで、翠が追っ手に散弾を撒き散らし、こうして壬生川家は撤退していく

自分たちが強くなってきたと思っていた矢先、壬生川家最強の当主の敗北だ
惨めな思いを噛み締めながら、三人は屋敷に戻っていった

英雄とイツ花の献身的な介抱により、伽子が容態を回復させたのが、不幸中の幸いだった

第六話－8　「気合」　１０２３年２月後編（後書き）

出陣・親王鎮魂墓（伽子・英雄・翠・力斗）　初見・道明→薙刀士

第六話－9　「才媛」　1023年3月（前書き）

伽子　1才3ヶ月

英雄　11ヶ月

翠　8ヶ月

力斗　4ヶ月

道明　1ヶ月

第六話－9　「才媛」　1023年3月

＜壬生川（みぶがわ）家・居間＞

元服が済んで、堅苦しい着物を脱いだ翠（みどり）の前に、一着の贈り物があった

「……何かしら」

壬生川家でこんなキザな真似をするのは、ひとりしかいない

翠がその衣を広げると、中からぱらりと一枚の手紙が落ちた

「直接口で言えば良いものを……」

思いながら手紙を読む

“ボクがコツコツやってきた投資結果が身を結び、市場には新たな品が並びだした

キミが欲しがっていた、より純正な火薬や木材も部屋に送っておいたからね　貴女の英雄（ひでお）”

「……へぇ」

その続きに、これは最も防御力の高い、加護のある着物だと書いてあった

大筒を担いで戦うため、どうしても重い鎧をつけることが出来ず、普段は薄衣二枚だけを身にまとっている翠にとっては、嬉しい配慮だった

「……今月ボクは忙しくて屋敷には帰れないから、道明（みちあき）をよろしくね、って、英雄さん……」

一緒に連れて行けばよかったのに、と思いながらも、部屋に届いているという資材のおかげでそれほど怒りが沸いてこない

「どうも、お世話になります」
「あら、道明さん」
居間に翠の姿を見つけて、少年がやってきた
「何か父上が、今月は京女を堪能するのが忙しいそうで」
「……どうせそんなことだろうと思ってたけれど、道明さんは、何とも思わないのかしら」
翠の問いに、道明は短く考えて、
「まぁ……父は僕ではありませんしね」
「何だか、達観しているのね」
「まだ未熟な僕に、父上の行動を咎めることは出来ません」

1ヶ月才とは思えないほど礼節をわきまえた言葉に、少しだけ翠の頬が上がる

「……道明さん、あなたは、良いですね」
「……なにがですか」
「ところであなたは、伽子(とぎこ)さんのことをどう思うかしら」

企み顔で微笑む翠に、道明は返す

「はぁ……もう少し、落ち着いてくれたらと思いますが、」
あれはあれで魅力があるのではないでしょうか、と続ける道明を遮って、翠が叫んだ
「良いですね、あなたは、わたしの後継者に成り得る存在です！」
「……え？」
「わたくし、あなたを気に入ったわ」

翠の言葉に、道明は思わず妙な表情になる

「……いやあの、話が見えないんスけど」

「あなたが将来この家を引っ張っていくのよ、道明さんには、わたくしの全ての知識を教えて差し上げます」

「いや翠さん、まだ元服したばっかりじゃないスか」

「さあ、まずは基礎教養として、火薬の取扱い方法から教えて差し上げましょう」

強引に翠に手を引かれながら、道明は思った

（この家ホントに、変な人ばっかりだな……）

道明もまた、臥家（がけ）の宿命には逆らえないようだ

＜伽子の部屋＞

布団に寝転がる伽子と、その傍らに息子の力斗（りきと）が座っていた

「まったく……母ちゃん、女のくせに無茶しすぎだっての」

「良いじゃないの、あたしが戦うの好きなんだからっ」

べーっと舌を出して、伽子が力斗に笑いかける

「まだあたしに勝てないくせに、偉そうなことを言うんじゃないよ、ほほ」

「てめぇえええええ……」

先月の雪辱から、日々血の滲むような思いで訓練している力斗を、

伽子が軽くあしらう
「大体ね、男とか女とか関係ナシに、あたしは背負ってるものがリキとは違うのよ」
「背負ってるもんなら、俺だって、壬生川家の血を、」
「甘いね、チョー甘いね」
大怪我していながら伽子は偉そうに語る
「あたしは鬼を殺す、でも鬼を憎んだりはしないよ、絶対に」
「何だぁそれ？　矛盾してるんじゃねーか！？」
「ふふーん、あたしたちみたいに短い人生で、鬼を憎んでるヒマなんてありゃしないのよ」

伽子の視界に、父の最期がフラッシュバックする
忘れっぽくて、物覚えが悪い自分でも、これまでただの一度も忘れたことはなかった

「だから、あたしは……お父さんみたいにはならない、他の人にこんな想いを残したりはしないんだから」
そっぽを向いて、力斗はつぶやく
「……でも俺ぁ、やっぱり女が戦う姿を見ているのは嫌だ、もっともっと強くなって、母ちゃんや翠姉ちゃんが戦わなくても良いようにする！」

「……ふふふ、あたしが生きている間は無理でしょーけどね」
伽子は珍しく母らしい笑みを浮かべて、拗ねる力斗の頭をよしよしと撫でた

＜交神の儀＞

元服した順から交神すると言った手前、避けること叶わず、翠がイツ花の待つ儀礼の間に訪れる

「……もう少し、道明さんとお話していたかったのに」

「あらァ、お嫌なんですか翠さま」

道明に術の学問を言いつけて、一応外面を整えてきた翠が、イツ花の前に座り込んだ

翠は物憂げにつぶやく

「わたくしの分、英雄さんがもう一度交神なさればいいのに」

「大喜びしそうですね英雄さま……」

翠はため息をついて、続ける

「家系なんて、わたくしには無縁のものですわ」

「でもォ、一応それは先代先々代の方々が守ってきたものですしィ……」

「……だから、誰もやらないとは、言ってないじゃありませんか……愚痴くらい言わせてくださいよ、これから望まぬ営みをするのですから……」

「なるほど……翠さまも、緊張されているんですネェ」

「緊張というか……何事も経験とは申しますけれど、こういうことはもっと、星の巡り合わせとか、運命にお任せしたいですわね……」

何だか乙女のようなことを言う翠に、イツ花が笑いかける

「翠さまも女の子ってことですネェ、もしよろしければ、わたしがお相手を決定しましょうか？」

しかしそんなイツ花の気遣いを耳から耳へ通して、翠は鋭い目つきで神様一覧表をめくる

「あ、あの、翠さま……？」
態度の変わった様子に、恐る恐る声をかける
「……わたくしの遺伝子で足りない部分を補って、さらに奉納点（ほうのうてん）が間に合う神様で、誰が一番かしらね……」
どうやら翠は、女の子であることよりも先に、壬生川家の一員らしい

「それじゃあ……この方でお願いしますわ」
少しの時間がたって計算を終えた翠が、名前を書いた紙をそっとイツ花に渡す

「はい、えーッと、火車丸さまですね、ただいまお呼びいたします」
少しだけ緊張して待つ翠に、神の声が響く

火車丸「俺かよ……しょうがねェなァ……」

（……そう言われても、わたくしだって嫌なんですから）
翠は相手に身体を委ねながら、この時だけは何も考えてない伽子や邪な英雄が羨ましかったという

第六話－９　「才媛」　１０２３年３月（後書き）

元服→翠　交神の儀・翠×火車丸　訓練・英雄→道明

第六話－１０　「侍養」　１０２３年４月（前書き）

伽子　１才４ヶ月

英雄　１才
翠　９ヶ月
力斗　５ヶ月

道明　２ヶ月

第六話－１０　「侍養」　１０２３年４月

＜屋敷の増築＞

力斗（りきと）が朝目覚めると、屋敷が豪華になっていた

「……はあああ？」

呆気に取られた力斗が居間に行くと、柱が何本か増えて、いつものちゃぶ台も木の豪勢な食卓へと変わり、庭すら広々と改築されていた

「何じゃこりゃあああああ！？」

「見ての通りだと思うが……」

「む、道明（みちあき）」

目の下にクマを作った道明が、よろよろと居間の座椅子に座り込む

「何かお前、元気ねーな、メシ食ってないのか？」

「……先月ずっと、なぜか翠（みどり）先生の大筒作りを手伝わせられて、そういえばあまり食べる暇もなかったかもしれない」

「道明、お前、あんな女なんかの言いなりに……つか先生て」

道明の肩をぽんぽんと叩く力斗

「男なんだから、もっとしゃんとしろよ、しゃんっと、ほらガハハって笑え！」

「力斗さんじゃないんだから……」

「何だよ水臭ぇな、俺のことは力斗、で良いからよ」
そう言って、力斗がガハハと笑う
道明もうなずいた
「そうか、力斗、分かった」
「おう、それよそれ、ガハハ」

力斗と道明が話しているところに、ひょっこり英雄（ひでお）が帰ってきた

「やあただいま、ちゃんと出来上がってるじゃない」
白木の丸柱を満足そうに叩く
「あ、父上、京からお戻りになられたのですね」
「うんホント、あっちこっちに引っ張りだこでさ、疲れたよハハ」

そう言って妖しく笑う英雄だが、力斗と道明はその笑みの意味するところが分からない

「うん、やっぱり熊五郎さんは、お酒さえ飲まなければ良い腕だね……」
そう言って、英雄が頷いた
「部屋も増やしたから、新しく四人住めるようになったからね道明、誰かを連れ込んだときはそっちでするのだよ」
「はぁ」
曖昧に相槌を打つ
「出来ました……」
「ひっ！」

まるで幽鬼のようにぬっと現れた翠（みどり）に、声も上げられず驚く力斗

「出雲産の砂鉄で筒身を作り上げ……良い、粘り気のある鉄としなりのある木材を使った、威力向上型の新作……」

ぬふふ、と翠は地震のように笑う
「その名も、国友銃……そして、流星参号！、一号と二号は安らかに！」
散弾式大筒の改良型を抱えて、周囲を見回り、眉をひそめる
「……伽子さんがいらっしゃいませんね」
「いても打たないでよ、お願いだから……」
大筒を下ろす翠を、英雄が諭す
「居間の柱なんて、もう少しで倒壊するところだったんだからね……翠ちゃんの散弾で」
「この天才は、そんな些細なこと気にしていませんのよ」

なぜか誇らしげに言う翠に、少しは気にしてよ……、と英雄が呆れる

「ああ早く、この大筒の力を試したいですわ……」
うずうずしている翠が、大筒をついつい英雄に向ける
「えーっと伽ちゃんどこいったのかなぁ、ボク探してこようかな！」
さっさと逃げてゆく英雄に、翠がちぇっと舌打ちする
「……仕方ない」
大筒をそうして、力斗に狙いを定める
「翠先生、それもはや人間相手にする威力じゃありませんから」

製作を手伝った道明が、翠を控えめにたしなめる

「そうですか……やっぱり、人間外の伽子さん相手にしなければならないですわね」
「ったく、銃口向けんなブス！」
「……着火」

道明が目を閉じて耳を塞いだ瞬間、新型大筒の咆哮と力斗の悲鳴

が屋敷に轟いた

～～

英雄が伽子（とぎこ）の部屋の前を通りがかる

「仔猫ちゃんは、ここかなー……？」

なぜだか自然と足音を消していた英雄が、がらりと障子を開けた

「伽ちゃーん？」

部屋の中にいた伽子が、とっさに何かを隠したように見えた

「あ、ひ、ひーくんごきげんよう！」

「はいはい、ただいま」

「きょ、きょうは良い天気よね！　春って最高だね、だって春だもの！」

そうだね、と頷きながら、英雄は伽子に近づく

「なぁに隠したの？」

「な、ななんのこと！」

おたおたと慌てる伽子のわき腹に手を当てる英雄

「出さないとこうだよ？」

「ちょ、この何するのスケベ、いやらしいセクハラ魔ぁぁ、あ、あはは、はひゃははあはははははははは！」

英雄のくすぐり攻撃の前に、笑い上戸の壬生川（みぶがわ）家当主はなす術もなく降参してしまう

「さって、何を持っていたのかなー、コケシかなー、おっきな張り

型かなー」
実に嬉しそうに、笑い転げる伽子の懐を漁る英雄
その手が包み紙を掴んだ
おや、と首を傾げる英雄が取り出したものは、粉末状の漢方薬だった
「あ、それほら、最近なんか疲れ気味でさ、徹夜でアレコレするミドりんはやっぱり若いよね、あっはっは」
英雄が伽子の着物を剥く
「ちょ、おおい！」
下腹部、先々月に大怪我を負った箇所に、真新しい包帯が巻きつけてあった
英雄は眉をひそめて、傷口を撫でる
「ふぅん……まだ痛む？」
「いやそりゃ押されりゃ！　痛い痛い痛い」
伽子の着物をぽんぽんと整えて、英雄がつぶやく
「……じゃあ、伽ちゃん、今月は一ヶ月おやすみかな、道明も戦えるようになったし」
「えーーー！！」
サイレンのように叫ぶ伽子
「ちょっと、あたし絶対出陣するからね！　何のためにこんなとこでコソコソ美味しくないお薬飲んでたと思ってるのひーくん！」
早口で怒鳴る伽子の頬を、英雄がぴしゃりと叩いた
少しだけ、部屋が静まった
「何でボクに黙ってたのさ健康度のこと、伽ちゃん」

伽子は英雄の真顔を、初めて見たかもしれない
「……だ、だってあたし当主だし、みんなに心配かけないで、いつも大きな樹みたいにしているのが当主の役目かな、て……」
父親に叱られた子供のように、伽子が言い訳を口にする
「バカだなもう……あのね、何で考えるの苦手なくせにひとりでそう勝手に、結論しちゃうわけ？」
「いやだって、ひーくんもミドりんも、何か、その、鬼退治マジメに考えてないんじゃないかなー、とか思っちゃって……」
伽子の逆側の頬を、英雄がまた叩く
「うん、ボクは実はあんまりマジメに考えてない、京の復興だって半分の目的はお姉ちゃんたちと遊ぶことだし、今が楽しければハッピー」
「じゃあ今何で叩いたの！？」
「でも、伽ちゃん（や他の女の子）のことを、真剣に考えなかった日はないよ、ボクを甘く見ないでほしいな」

誇らしげに微笑む英雄の頬を叩き返す伽子

「いいよいいよあたしが悪かったよ、でも出陣はするからね、あたしが戦わないで誰が戦うの！」
笑顔で英雄が、先ほどより少し強めに伽子に仕返しする
「ひとりで思いつめたら、また師匠みたいなことになるんだからね、約束してよ、もう隠し事はしないって」
三度も平手されて、伽子がついにグーで英雄のこめかみを殴る
「あたしはお父さんみたいにはならないもの！」
「いやちょっと、今のかなり本気で痛かった……」

続いて、伽子の拳が英雄の顎に決まった

「悪かったよ、思いつめるなって言いたいんでしょう！　バカで悪

かったね！　あたしだってもうすぐ死ぬんだから出陣するよ！　モンチーやリンリンもいなくなって、取り残されるのは嫌！　嫌なの！」

叫びながら、テンションの上がってきた伽子が、次々と英雄に鉄拳を叩き込む

「い、いや、ボクがその、悪かったから、もう、殴らない、で……」

その怒声を聞いて何事かと駆けつけた翠は、

英雄を延々と殴りつける伽子を見て「そろそろ出陣なので、早く支度してください」とだけ告げたという

＜出陣・紅蓮（ぐれん）の祠（ほこら）＞

伽子、英雄、翠、力斗の四人は今月、紅蓮の祠に攻め入った

「……ふふ、はは、素晴らしい……良いですわ、良いですわ、溶岩が立ち込めるこの洞窟でも、わたくしの作った流星参号は、火薬が暴発することなく運用できていますわ！」

あははははと高らかに翠は笑いながら、大筒を辺り構わずブチ込む

「何が三号なんだ、何が」

その散弾の流れる様は、確かに流星と呼んでも過言ではないほどの美しさであった

だがそんな翠の新装備の服装が、力斗には違和感だった

（何で巫女服……）

大筒を乱射する巫女服を着た翠が、何だかいつも以上に恐ろしい者に見えたのは、先ほど砲撃を身体に食らったからだろうか
女性専用胴体軽装備・巫女の衣を着た翠を嬉しそうに、英雄が眺める

「やっぱりうん、ギャップが良いね……おっと、伽ちゃん、今月は大怪我しないようにね」
「言われなくても分かってるってばー」
頭に包帯を巻いた英雄が、伽子に念を押す
翠が笑いながら大筒を噴かせ、一同は奥へ奥へと進んでいく

炎舞廊での鳴神小太郎戦は、＜春菜＞を入手していなければ勝てなかっただろう
小太郎の＜雷電＞と＜双火竜＞によって、まず力斗が戦闘不能に陥る
そこで壬生川家は英雄が門となり、先頭に立って相手の攻撃を避けながら、＜春菜＞を唱え続けた
時には＜円子＞で英雄を援護しながらも、伽子と翠が徐々に小太郎を追い詰めていく
英雄が倒れるよりも早く小太郎を討ち取る、戦いはまさに時間との勝負となり、最後には伽子の槍が見事に小太郎の腹を貫いた

「正義、完・了！」

伽子が華麗に小次郎の背後へと着地する

小太郎「ぐおおお

「相変わらず、お強いですわね……」
手柄を奪われた翠が、面白くなさそうにそっぽを向いた

決して楽な相手ではなかったが、それでも壬生川一族はかつての以蔵率いる討伐隊より、着実な進歩を実感した戦いであった
その後は取り置きしておいた養老水（微量の健康度を回復する）を力斗に使い、死地を脱した彼と共に１３ノ宴まで進軍し、たくさんの戦利品を持って凱旋したのであった

第六話－１０　「侍養」　１０２３年４月（後書き）

出陣・紅蓮の祠（伽子・英雄・翠・力斗）

第六話－１１　「鼓吹」　１０２３年5月前編（前書き）

伽子　　１才５ヶ月
英雄　　１才１ヶ月
翠　　１０ヶ月
力斗　　６ヶ月
道明　　３ヶ月

第六話－１１　「鼓吹」　１０２３年５月前編

＜壬生川（みぶがわ）家前＞

「おや……お前は」
屋敷の周りを走って身体を動かしてきた道明（みちあき）が、正門の前で自分と同じくらいの少女を見つけた
「あぁ、あんたぁは？」

野菜籠を置いて、こちらをぼけーっと眺めてくる

「前に、ここで出会った、」
「……あーあーあー、あの芋くれた子の兄さんかー？」
お兄さん？
言われて道明は思わず胸に手を当てた
今の自分の背丈は、この屋敷に来た当時と比べても、数十センチは伸びている
思うところはあったが、少女の言葉を受け入れてしまう
「……そういう事にしても良い」
なぜだか、目の前の少女に悪印象を与えたくなかったのかもしれない

頬の汗を拭って、道明がゆねの横に腰を下ろす

「お前は、毎月我が家に来ているのか」
「毎月っちゅぅか、十日にいっぺんは来とるよぉ」
「そんなに食ってたのか、僕たちは……」

確かに壬生川家の皆は大食漢が多く、特に伽子（とぎこ）と翠（みどり）は痩せの大食いとして、壬生川家でも人一倍よく食べる

「ねぇ、ウチはゆね、あんたは何て言うの？　見た感じウチと同い年くらいやよなぁ」

「僕は道明だ、恐らくこの家で……一番まともだ、と思う」

「でもそういうん、自分で言うんはどうかと思うよー」

そうだな……、と道明が反省する

「でもねでもね、ウチ思ったんよ、ここの家の人怖い人もおるんやろうけど、もしかしたら、京で暮らすウチらのこと守ってくれとるんやないかな、って」

「……どうしてそう思う？」

「芋、くれたから」

あっけらかんと笑うゆねに、道明が思わずうなる

それは僕だ、とは言えなかった

人はそんな早さで成長はしないからだ

「ほら、こんなちっぽけなウチのことも気にかけてくれるなんてぇ、優しい人やんか、なぁなぁ」

「はぁ」

道明はその後も、しばらくゆねの声に耳を傾け、久々に平和な時間を過ごしていた

＜翠の子供＞

儀式の間で待つ翠の前に、ひとりの少年がイツ花に連れられてやってきた

「その子が、わたくしの……」

「はい、火車丸さまの元より新しいご家族をお連れいたしました！」

一時期は女性のみの家系となった壬生川家で、ついに三人連続で男子が生まれたことになる

髪は栗色だが、その目は翠と同じく、気が強そうに尖っていたというか早い話、かなり目つきが悪かった

「初めましてお母様……ククク」

「何かしらその笑い」

「癖なんですよ……クク」

こめかみを押さえて、翠が頭痛を抑えるようにつぶやく

「今すぐやめなさい……」

香家に生まれた少年の名前は貞光と名づけられた

貞光がふと翠の腰に下げている流星参号に目を向ける

「お母様、それは何ですかね……？」

「これはわたくしの作った、散弾式二寸口径対鬼用機銃火、三期改良型“流星参号”よ」

舌を噛みそうな名前に、貞光が眉を上げる

「ほほう……たくさんの鬼を、楽に、仕留められそうですね」

「……それだけの知識と頭脳があれば、だけれどね」

くすくすと笑う貞光は、翠に頭を下げる

「それでは、どうか私に……大筒士の業を教えてください……ククク」

「……良いでしょう」

悪の幹部が悪巧みをしているように見えてきて、何だかイツ花まで暗くなってくるようだ

楽に鬼を仕留められる、という言葉が気になったが、こうして貞光は翠の後を継ぎ、大筒士の道を歩むこととなった

＜作戦会議＞

貞光を力斗（りきと）に押し付けて任せて、年長者三人は家族会議に移っていた

「今月は、忘我流水道（ぼうがりゅうすいどう）に出陣しましょう」

かつての初代当主玄輝（げんき）の部屋で、久々に三人が集結する

「あたしはどこでもいいよー、強い相手なら望むところ！」

「でも中ボス……敦賀ノ真名姫、だったよね……ボクのお婆ちゃんが倒された相手、気が進まないなぁ」

暗い顔で英雄（ひでお）がつぶやく

「ぴちぴちの人魚ちゃんかと思ったら、全身骨だらけの化け物だったなんて……！」

ぐっと拳を握り固める英雄を無視して、翠が話を続ける

「『実録壬生川戦史』を見ると、真名姫の放つ＜真名姫＞は全員が４００弱のダメージを受ける、恐ろしい術です」

「どうしても、あたしたち三人で＜春菜＞連打になっちゃうよねぇ」

現在＜春菜＞を唱えられるのはこの三人でいて、＜円子＞はその

中でも伽子と英雄しか使いこなすことが出来ない
「更に我が家は、春菜を入手したからと言って、補助術は武人に防人、あとは祭り系、葬系、それに速瀬くらいしか無いのが、現状ですわ」

そこで、と翠が高らかにあるものを掲げた

「こちらの品です、京の都に新たに出回った秘薬、“力士水（りきしすい）”！」
ぴっかーんと輝く翠の勢いに、わけも分からず拍手してしまう伽子と英雄
「何と、味方全員に攻撃力上昇・大の加護！」
「すごっ」
「ふふ……というわけで、金庫のお金を持ち出して、買い溜めしておきましたわ」
得意げに言う翠に、英雄が尋ねる
「どれくらい買ったんだい」
「９９個」
「バカがいるっ！」
翠が伽子に大筒を向けるのを、まぁまぁ、と英雄が押しとどめる
「じゃ、じゃあその秘薬を持って、打倒真名姫を目指すんだね、今回は」
「……そういうことですわね、というわけで」

ふたりを見て、翠はすっくと立ち上がって、告げた

「その気は無くても、遺書は用意しておくのですわよ、おふたり」

「嫌だなぁ……」
「気が重いね……」

思わず苦笑がこぼれてしまう
物語はそして、後編に続く

第六話－１２　「火水」　１０２３年５月後編

＜出陣＞

壬生川御三方の前に、すらっとした若い薙刀士が登場する

「おー、なかなかカッチョイイじゃーん」

「まぁボクの初陣の時ほどではないけど、良いね」

「……さすがわたくしの後継者」

好き勝手言われている道明が、頬をかく

「初めての戦なもので、至らない点もあると思いますが、よろしくお願いします」

そんな少年の前で、伽子が考え込む

「道明くん、道明くん……ミッチーとアッキー？」

「増えてるからそれ」

英雄が道明にささやく

「……ああ見えてもね、ふたりは恐ろしいよ、戦場だとね」

「……これ以上、ですか」

なぜか自分のあだ名について話し合っている伽子と翠に、畏怖の念を持ってしまう

「よし、決定しました！　ドーメイくんでーす！」

「……えー」

相当嫌そうに顔をしかめるが、伽子はあまり聞いてくれない

「さ、力士水もたっぷり持ちまして、大筒の防水準備は大丈夫です、万全です、絶好調ですわ」
腰に布袋を提げて、背中に二本の大筒を背負った巫女服の翠が、ふたりに尋ねる
「おふたりは、遺書、ご用意いたしましたか」
「えへ……実は書いてない、死ぬ気もないし」
「ボクは一通じゃ足りないから、京都の子に宛てたラブメールをイツ花さんに頼んでおいたよ、ハハ」

その会話を道明が聞きとがめる

「え、何スか、遺書って」
「よし、それなら行こうか、勝てなくても良いけど……ボクは死にたくないな」
「父上、遺書て何ですか、今からどこ行くんですか」
壬生川家の三人が先に進んでいくのを、道明が不安な顔で追いかける
「ちょっと、僕の初陣に何と戦わせるつもりですか!?　父上！当主！　翠先生ー!?」

＜忘我流水道＞

防水処理を施した翠の大筒は、上水道の中でも問題なくその力を発揮していた
伽子と翠が鬼を散らし、残党を英雄が引き裂く

「……さすが、強い」

息の合った三人の連携に、道明は遅れまいと必死に着いていく
途中、一休みしながら、翠が伽子に尋ねた
「そういえば伽子さん、こんな時に聞くことじゃないかもしれませんけれど」
「ん、なーにー？」
「お次の当主って、決まっているのかしら」
「ううん、全然」

てへへと笑う伽子

「……力斗（りきと）さんや、道明さん、あるいは貞光（さだみつ）さんになるのかしら」
「貞光くんはないでしょ、いくらなんでもちっちゃすぎだよ」
横から英雄が口を出す
「リキはね、最近下が出来たからかもしれないけど、面倒見がよくなったねあのコ」
「……そうですね、僕もよく、稽古をつけてもらっています」

伽子に話を振られて、疲労困憊の体で俯いていた道明が顔を上げる

「そうですわね、貞光さんの訓練をお願いしても、特に嫌な顔はしませんでしたわ」
「生まれながらの、アニキ気質なのかも、女の子に冷たいのはちょっとアレだけど」
「では、次の当主は、やはり力斗さんに？」
「……ふっふっふ、それはどうでしょう」

にたりと微笑む伽子に、何だか嫌な予感を感じる

「もしかして、」

翠の目が、自然と少年に向く
釣られて、伽子と英雄も、若い薙刀士を見つめた
「……ぬ？」
視線が集まっているのを感じて、道明が三人を見返す
「え、ちょっと、あの……嫌ですよ僕、当主なんて！」
立ち上がって、思わず両手を振る
「……そうね、道明さんなら安心ね」
「いやいやいやいや、何が安心なんですか先生、それに僕まだ3ヶ月ですよ？」
「そういえば、伽ちゃんのご先祖の幸四郎（こうしろう）って人は、生後1ヶ月で当主になったらしいよね」
「時代が違うでしょう、時代が……」

肩を落とす道明に、伽子が笑いかける

「大丈夫大丈夫、まだドーメイくんって決まったわけじゃないから、この中の誰もが当主になる可能性があるんだよ」
「ボクは辞退したいけどねぇ」
気軽に京に遊びにいけなくなるし、と頭の後ろで手を組む父に道明がつぶやく
「……自分が嫌だからって、息子に押し付けるんですか」
「わたくしが、当主になるかもしれないのですね……何だか、面倒ですわね」
「ていうか、何でみんな嫌がるのさ！」

1才5ヶ月の現当主が叫ぶ

「みんな伽ちゃんの頑張っている姿を見ているから、自分にはそれが重荷だと感じてしまうんだよ」
微笑みかけてくる英雄に、伽子が口を尖らせる

「いいものいいもの、最期にアッと驚く当主を任命してやるんだから、覚えてなさい！」
「イツ花さんが当主とかにされたら、どうしましょう」
「結構ノリノリでやるかも」

そんな三人を道明は眺めながら、やっぱり仲良いよな、と思っていたのであった

＜真名姫戦＞

1ヵ月の終わり近く、一同は人魚の瀑布へと足を踏み入れた

「ひろーいっ」
「……皆さん、あれを」
長い緑の髪を伸ばした浅黒い肌の美しい女性が、滝に打たれているのが見える
記録にあった通り、あの後姿こそが敦賀ノ真名姫だろう
「おやぁ、なーんだ、可愛いじゃない」
ニコニコしながら、英雄が滝のふもとに近づく
「やぁ、ボクの名前は英雄、貴方の英雄さ、キミは――」

振り向いた真名姫の身体が、全身白骨の化け物へと変貌した
道明が口を半開きにしたまま、真名姫を見つめる

「生きたまま、肉を食いちぎられたことなんてないでしょ？」
「う、うん、無いね」
ツカミの会話として物凄く重い話題を髑髏に振られて、英雄が乾

いた笑みを浮かべながら後退する
「メッチャクチャ痛いのよ、でも人魚ってそれくらいのことじゃ死ななないのね、これでも神だしね……だからここへ来るまで、毎日が地獄」
カタカタと顎が揺れ、どうやら笑っているのだと翠は思った
「ウフフ……せっかくだからどれくらい痛いか、あなたにも教えてあげるわ！」

勢い良く滝つぼに潜る真名姫

「ひーくん残念、可愛い子ちゃんじゃなかったね！」
真名姫の狂気にも動じない伽子が、バンバンと英雄の背中を叩く
「……女性の胸のサイズも、騙されたままでいたい人なんだけどなボク」
ため息をつき、英雄は前を見据えて、薙刀を構えた

伽子と英雄が前、翠と道明が後衛
そして、銛を持った真名姫が浮上してくる

「人間なんて、みんな死んじゃえええええええええええええええ！！！」

伽子が先頭に躍り出た
突き出された真名姫の銛を、伽子がＬ字型の鎌槍で受け止める
「あなたには同情もするけれど、こんなところで鬼の手下になってどうなると言うの！」
「黙れ、人間め！」
鬼の豪腕から繰り出される槍を、伽子は真っ向から相手し、二人

の間に火花が散る
「あなたにも天界で大事な人がいるなら、怨みなんて捨てて家にお帰りなさいよ！」
「うるさい、うるさい、うるさい！」
白骨鬼のような真名姫に、一瞬だけ口元をきつく結んだ綺麗な人魚の顔が浮かび上がる
「バカじゃないの！　怨みで人を殺めたからって、残るのはあんなにも苦いだけの想いなのに……！」

伽子の胸の中に、鬼へと変わってゆく以蔵（いぞう）の姿がふっと浮かんだ
何千という鬼を殺してもなお、以蔵はいつも苦しそうにしていた
今の真名姫は、あの時の以蔵と同じなのだ、伽子は槍を握りながら奥歯を噛んだ

「黙れ＜水祭り＞ィィィ！」
真名姫が宙に浮いて、術を唱えた
「……周囲の水が」
「……真名姫の周りに、集まっていきますわね」
力士水を皆に降りかけていた英雄と翠が、目を剥いた

膨大な量の水が巻き上げられ、竜巻のように真名姫の周囲に吹き上げられている

「これはちょっとシャレにならないな……無理矢理連れてきて申し訳ないんだけど、道明は後ろで防御しててね」
「……っ」

真名姫は＜水祭り＞を二回連続で詠唱する
圧倒的な力を持つ化け物を見て怯える道明を後ろに下げ、英雄は＜春菜＞の術を唱える

「良いかい、ボクが気を失ったら、すぐに逃げるんだよ」
「……見逃してもらえるとは、思いませんが」
洞窟に浮かぶ鬼を見上げながら、翠がつぶやく
「……でも、大丈夫、ひーくんならきっと、あたしたちを守ってくれる」
「……ヤな信頼だね、それ」

ため息をついて、英雄は目を細めた

「そんなこと、女の子に言われたら……格好悪いとこ、見せられないじゃない」

そして、真名姫が叫んだ

「＜真名姫＞ェエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！」

烈震のように四方八方から押し寄せてくる水流が、壬生川出撃隊を押し潰す！
英雄はその場に薙刀を刺し、流れに逆らって大地を踏みしめながら、＜春菜＞を唱え続けた

「想像以上だよ……コレ、＜春菜＞！」

全身を淡い光で包まれながら、伽子が濁流の中から跳躍する

「正義の一番槍、力士水バージョーン！」

「ギャアアアアアアアア！」
その槍が真名姫の右腕を吹き飛ばし、続いて、端まで流された翠

がその洞窟の石壁を支えにして、渾身の国友銃を放つ
「砲火！」
うなりを上げて発射された鉄球が、真名姫のわき腹を貫通した
「ア、ガ、ガガ、ガガガガガ」
真名姫の赤い瞳の光が、徐々に弱まっていく

「何だ、この人たち……」
津波を浴びて、全身を打撲しながら、それでも戦い続ける三人に、
道明が恐れを抱く

「＜真名姫＞エェェェェェェェ！」
再び、水流が一族を飲み込む
しかし、水が去った洞窟の中央にて、英雄は立ち続けていた

「……ボクたちに力を、＜春菜＞……！」
「バカ、ナ……ソンナ」
くぐもった呻き声を上げる真名姫に、飛び上がった伽子が槍を縦
一文字に振り下ろした
「成・仏、しなさいバカー！」

真名姫の身体が、左右に分断された

「ソンナ……人間、ガ……！」
その真名姫の骨を、翠が散弾で粉々に打ち砕く
「……わたくしたち一族は、鬼などには、負けませんわ……」
血塗れで笑う翠の口の端が、わずかに釣り上がった

真名姫の身体を黒い光が包み込み、その場にこの世のものとは思
えないほど恐ろしい絶叫が響き渡る
「……これで、ご先祖さまの仇は、討てたかな……」

ただの一度も意識を途切れさせることなく、術の印を結び続けた本日の影の功労者が、そう言って微笑んだ

「人間なんて、みんなあの子たちに殺されちゃえばいいのよ！」
滝の流れ落ちる音に紛れて、真名姫の悲痛な声が聞こえてきた気がした

伽子は槍を片手に、真名姫の消滅した方を眺めていた
「……本当は、あの人も人間を怨みたくて怨んでいるわけじゃないんだよね……きっと」
「……そうだね」
「……あたし、この世に強い怨念を残して、お父さんや真名姫さんみたいに苦しんでいる人がいるのなら……ひとりでも多く、成仏させてあげたいよ」
英雄が伽子の肩に手を回して、笑いかけた
「大丈夫……伽ちゃんは頑張ってるよ、ボクが見てるから」

「……さすがのわたくしも、今月は疲れましたわね……そろそろ、戻りましょう」
ふらつく翠の肩を、道明が支える
「……翠先生、僕……」
役に立たなかった、と道明は己の恥を思い知らされる
２ヶ月みっちり訓練を積んできたのに、三人はあまりにも遠かった
「……初陣にこれほどの相手と向き合えば、怖いことなどもう何もないわ、その悔しさを忘れないようにね」
「……はい、先生」

こうして一族はついに蘭に果たせなかった真名姫討伐を完遂し、重傷者をひとりも出さず、たくさんの奉納点（ほうのうてん）を入手して、帰路に

着いたのであった

第六話－１２　「火水」　１０２３年５月後編（後書き）

出陣・忘我流水道（伽子・英雄・翠・道明）
初見・貞光→大筒士　訓練・力斗→貞光

第六話－１３　「異能」　１０２３年６月前編（前書き）

伽子　１才６ヶ月

英雄　１才２ヶ月
翠　１１ヶ月
力斗　７ヶ月

道明　４ヶ月
貞光　１ヶ月

第六話－１３　「異能」　１０２３年６月前編

＜道場にて＞

道場に打ち込みの音が響いていた

「……ッ」

力斗（りきと）が木刀を持って、母親に挑みかかる

「てぃ」

しかし近づこうとしたところで、伽子（とぎこ）の素槍が力斗の足を払った

「いてぇ！　この……！」

「ちょいや！」

伽子が一歩下がって槍を振るい、前に出た力斗の小手を叩く

近づく力斗と離れる伽子、その距離は縮まらずに、打たれ続ける

力斗の手足が腫れてゆく

「こんの……疾風剣（しっぷうけん）！」

痺れを切らした力斗は、ついに奥義を放つ

一足飛びに伽子の懐に潜り込んだ力斗の視界いっぱいに、白い素足が映った

「ぬあ！？」

槍を軸にした伽子の飛び蹴りが、力斗の顔面にめり込み、手加減の無いその一撃によって力斗は道場の端まで吹っ飛んでいった

「くっそ……いてて、なんてバカ力だ……」

広間の真ん中で腰に手を当てて、伽子は笑っていた

「ハッハッハ、見たかねリキくんよ、カッカッカ」
来月に元服を控えた力斗ですら、1才6ヶ月の槍使いの母親の力には、遠く及ばなかった
「天狗かよ……てめぇ」
「リキもずいぶん強くなったけど、まーだまだだね、ほほ」
そう言って口元に手を当てて笑う伽子に、力斗は再び立ち上がる
「……戦う男が、女に負けてたまっかよ、クソッ！」
「口と根性だけは良いんだから、もう」
にやりと笑う伽子に、再び力斗が木刀を持って挑みかかった

快音の響く道場に、翠（みどり）と英雄（ひでお）がやってくる
「……これは、また一段とやっていますね」
「楽しそうだね、伽ちゃん相変わらず」
身体を動かしているときが一番嬉しそうな伽子を見て、英雄も顔をほころばせる
しばらく並んで稽古を見学していたふたりの間に、力斗が勢いよく飛ばされてきた
避けずに、その頭を肘打ちで打ち落とす翠
「ハァッ！」
「何で！？」
その一撃によって道場の床にめり込んだ力斗が、ぴくぴくと身体を痙攣させる
「あれれ、ミドりんにひーくん、来てたんだ」
「……ずいぶんと、調子がよろしいようで」
「うん！　今のあたしは、きっと日本一強いわよ！」

太陽のように笑う伽子が、翠に槍を向けた

「そういえばミドりん、前にあたしじゃふたりに勝てない、って言

ってたよね」
「……ええ」
翠が静かにうなずく
「もしかしたら、今なら勝てるかもしれないの、試してみて良い！？」
「ええっ、ボクもかい……？」
完全に巻き込まれた形の英雄
好物を目の前にした幼児のようにはしゃぐ伽子に、翠は腕組みしたまま答えた
「……良いですわ」
「やったー！　じゃあほらほら、早く稽古着に着替えてきてよっ」
「道場を壊すといけないので、庭に参りましょうか」
「超おっけー、先行っているね！」

テンションの高い伽子が、一足先に素槍を持って走っていく

「参ったなぁ、ボクもかぁ……でも翠ちゃんのご命令だしなぁ」
道場の壁にかかっている木製の薙刀を見定めながら、英雄がため息をついた
そんな英雄に、翠がつぶやく
「……今回ばかりは、本気で行かないと、負けるかもしれませんね」
「え？」
「……流星参号では、あの人にはもう通用しないかもしれません」
翠の自信無さそうな声に、英雄は思わず息を呑んだ

＜壬生川（みぶがわ）家前＞

「こんにちわッ、と」
「……うちの軒先には、まこと、変なのが集まるんだな」
習慣となった、屋敷周辺のランニングから帰ってきた道明（みちあき）は、家の前でフラフラしている多彩な着物をまとった少年を見て、そうつぶやいた

「ねぇねぇ、キミってば壬生川家の子？」
「……そうスけど、誰」
「アハ、やっぱり！　ボクの名前は黄川人（きっと）、よろしくネ」
「はぁ」

やたら馴れ馴れしい少年に握手を求められ、道明は何だかよく分からないまま応じる
黄川人はニッコリと笑う

「ねぇねぇ、キミたち今月、あの鳥居千万宮（とりいせんまんぐう）に出陣するんだって？」
「そうなんスかね、僕は分からないんだけど」
「鳥居千万宮で面白い話があるんだけど、聞くよね？　モチロンだよね！」
ひとりで勝手に盛り上がる黄川人に、道明がふと閃く
「……アンタもしかして、旅芸人の琵琶語りかなんかか？」
「ああ、比較的好意的な解釈！　キミとは良い友達になれそうだ！　さあお立会い！」

ひらりと舞って、黄川人は詠い出す

「今日は“お稲荷御殿”と呼ばれているあのお山の、古い社にまつわる話をしよう！」
突然始まった芝居に、石に腰掛けたまま拍手する道明

「今じゃ　見る影もないけど、かつてあの神社は民の信望も厚く、境内は参拝客であふれていた」
「あの、妖怪たちの薄暗い住処になっている神社が、か」
「うんそう……あの忌まわしい事件が、起きるまではね……」

ヒヒヒ、としのび笑いながら黄川人が続ける

「子供の出来ない女房がお稲荷さんに願かけて、１００と1日、1神社の前で赤ん坊を拾った……それからというもの、女房は、ウソのように！　ツキに付く！」
良い神社じゃないか、と道明が思う
「お礼参りでたまたま買った富クジで、1等１０００両当てたのさー！　なんとそれが続くこと、3回！　ドッヒャー！（。д。）」
最高潮の盛り上がりらしい場所で、黄川人が飛び上がって、そこでコホンと真顔に戻り、静かに続けた
「でもそれがケチの付き始め、あとは一気に転がる地獄坂……」
「ふむ」
「ってことで、この続きはまた今度ね！」
「……ぬ？」

黄川人はそう言うと、突如として道明に背を向け、走り出した

「おい、どう転がったんだ！　何が地獄坂だ！」
続きが気になる道明に、黄川人が叫ぶ
「ハハハ、この続きはお稲荷御殿でね！　ボクは先に行って、ボスを配置しておかないといけないのサー！　アハハ！」
「うお」

そう言って、ふわりと飛び上がって姿を消す黄川人、その残光が霧となって散る

「……最近の旅芸人は、不思議な術を使うもんだな」
道明は感心したように、そう漏らした

＜庭にて＞

貞光（さだみつ）が仕上げた大筒に塗った漆を乾かせようと、庭にやってきた

「ククク……美しい、この大筒……鬼の背骨も草の茎のように折れそうですね……」

何か狂気染みた笑みを浮かべる貞光の横を、人影が過ぎた

「む」

ビクッと貞光が振り向いた先には、額から血を流したまま、えへらぁと笑う伽子がいた

「当主さま……何だか、怪我をしているよう見受けられますが……ククク」

「うふ」

含み笑いをしながら、伽子が槍を持って、よろよろとお部屋の中に入っていく

「むむ……当主さま、いかがしたのかな……」

草の中からガサッと物音がして、再び貞光は固まる

「ふ、不審者……？」

「……」

翠が不機嫌のオーラを身にまとい、そこに立っていた

「お母様ではありませぬか……どうですか、この大筒……クク、美しいでしょう?」

前に立ちふさがる貞光の頭を叩き落し、翠はそのまま屋敷へと去っていった

庭の片隅で、藤の木の根元にもたれかかっていた英雄が、誰にも聞こえないようにぽつりとつぶやく

「やれやれ……トンでもないコが、ボクらの当主になっちゃったもんだ……」

そのままこてり、と横に倒れる

成熟した壬生川六代目当主はついに、英雄と翠のふたりをも破るほどの実力となったのであった

第六話－１４　「縦痕」　１０２３年６月中編

＜出陣＞

「それじゃーみんな、いってらっしゃーい」
ニッコリと手を振る英雄（ひでお）に、翠（みどり）が突っ込む

「また懲りもせず京の都の復興、ですか」
「ボクがいないと寂しいだろうけど、ゴメンね翠ちゃん」
さりげなく、英雄が翠の肩に手を回す
翠は英雄の手を叩いて、懐から台帳を取り出し、すらすらと読み出した
「投資の内訳、ですが、まず商業部門の５万３４００両」
「各地から良い職人を引き抜き、あちこちから資材を調達して、街道を整備し、流通ルートも確保、それに良い道具も揃えなきゃいけないし、今ボク、１３の大工衆と契約しているんだよね」

伽子（とぎこ）が力斗（りきと）の袖を引っ張る
（何言っているか分かる？）
（俺が分かるわけねぇ）
脳が筋肉で出来ていそうな親子が、ぼそぼそと囁きあう

台帳を英雄に突き返して、翠が腰に手を当てる
「ちなみにこの、交際費８００両って何かしら」
「いやー最近ボクも世渡りというのを覚えてさ、良いお酒、良い女性がいると、職人さんも良いお仕事してくれるんだよねー、摩訶不思議ってやつ？」

爽やかに笑う英雄が、翠の頭を撫でる
「でも翠ちゃんも、最近屋敷のことに熱心で、ボクは嬉しいなー」
「……我が家でマトモな頭脳を持っているのが、わたくしとまだ幼い道明(みちあき)さんだけですから、仕方が無いというものですわ」

(なんで僕)
道明は自身が買いかぶられていると思う

ため息をついて、英雄の腕を捻りながら翠が告げる
「それはともかく、貞光(さだみつ)のことお願いしますわよ」
「痛い痛い……もう、じゃあ一緒に京に連れていっちゃおうかなー」
へらへらと笑うダメ人間に、翠がグッと握り拳を固める
「……この人は、昔はこんな風じゃなかったのに!」
「……いや先生、僕はこんな父上しか見たことないんですけど」
翠のため息が道明にも伝染してしまう

それはそうと、伽子が先頭に立って、槍を高く掲げる
「さ、正義の壬生川(みぶがわ)一族、今月も張り切って突撃ー!」
「おー!」
「はぁ」
「……行きますか」
笑顔で英雄が見送る中、四人は鳥居千万宮(とりいせんまんぐう)へと進撃していった

＜鳥居千万宮＞

「うおらあああ!」
鋭い太刀筋で鬼をぶった斬っていく力斗の後ろで、伽子が周囲を

きょろきょろと見回す

「えーと、今は何か最近暑いし、大体夏ってことでぇ……」
「暦は春よ」
「えー、じゃあ緑、は、ミドりんの翠ね！　おもしろーいあっはっは」

緑色の鳥居を探しに走っていく伽子に、大筒をぶち当てようかと考える翠

「まったく……英雄さんがいないと、＜春菜＞の使い手がわたくしと伽子さんのふたりになってしまいますわね」
今月はあんまり大筒を放つ機会がないかもしれない、と暗い顔をする

あー、と道明が思いついたように声を上げた
「＜春菜＞なら、先月に僕も」
「え……覚えたのかしら？」
「覚えたというか、父上に叩き込まれたというか……お前が覚えないとボクが遊びにいけないんだからね？、っていうか」

生後４ヶ月で＜春菜＞を覚えた少年を、翠が少し複雑そうに見つめる

（やはりこの人は、素晴らしい才能を秘めていますわね……）
「な、何ですか？」
ジロジロと眺められて、道明は蛇に睨まれたカエルのように硬直してしまう

遠くから呼び声が響いた

「緑色の鳥居あったよー！　早くおーいでー！」
ブンブンと手を振る伽子にせかされ、一同は鳥居を辿って先へと進んでいく

～～

迫り来る低妖を粉砕し、バランスの良い四人組はあっという間に狐次郎の棲む暗黒大鳥居までやってきた
「他には、どんな術を覚えたのかしら？」
「いやあの、翠先生……他には、ええと、」
道中、翠に問い詰められ、居心地の悪さを感じながらも道明が答える

「母ちゃん、これ槌の指南書だってよ」
「槌の指南書……何コレ何コレ、どこにあったの？」
「知らねぇよ、鬼が持ってたんだ」
ぶっきらぼうに喋る力斗から指南書をひったくって、ぱらぱらと眺める伽子
「見えない筋肉の付け方……重いものを簡単に持ち上げる丹田法……超食事法……な、何これ」
「……見なかったことにすっか！」
ふたりは布袋に指南書を押し込む

それから稲荷ノ狐次郎を相手に、歴戦の兵、伽子と翠は例外としても、力斗も道明もその成長を見せ、四人は中ボスを難なく打ち倒した

「道明お前、二戦目だってのに落ち着いてやがるな！」

力斗にバシバシ背中を叩かれて、道明は返す
「……真名姫って鬼を見た後だったからな」
あの狂気の人魚姫を目撃した後では、何も怖いなどない、という気にさせられる

一同は拝殿の中に立ち入り、六つの提灯を吹き消して、最深部へと到達した
「よーし、今月はついに鳥居千万宮を制覇ね！」
神社の境内のような風景はなくなり、まるでアリの巣のような三本の洞穴が伸びていた
ところどころに、柱のようなものが並び立つが、明らかに人間の建築したものとは思えず、禍々しい気配が立ち込めている
「……洞窟の制圧も、伽子さんの頭の中みたいに、単純に済めばよろしいわね」
「きょうのあたしならイケる！　あたしは世界一つよーい！」
騒ぎながら女性ふたりが先に進み、その後を不本意そうに力斗が着いていく
三人から少し離れて、道明は人影を見つけた
「……ん？」

こんな洞窟の下層に、人間の少年が見えた

「やッ」
「驚いたな……旅芸人は、こんなところまで来るのか」
暗い大玉殿（立派な御殿）の中、柱に寄りかかって微笑む黄川人（きっと）に、道明は目を丸くした
黄川人は薄く笑うと、道明に語る
「約束通り来てくれたね、この前の話の続き……ここで不思議な赤子を拾って、３０００両当てた女房の顛末を詠おう！」
「いやしかし今は」

三人は黄川人に気づかないのか、先に行ってしまう
そんな道明の焦りも気にせず、黄川人は続ける

「女房ってくらいだから、もちろん亭主がひとりいた、こいつがどうしようもない男、借金残して金だけ持って、若い女とトンズラと、トントン拍子の三拍子！」

仕方あるまいと、道明は黄川人の話に聞き入る
悪羅大将の動きを＜くくらら＞で止め、＜速瀬＞で追いつけば良い

「ふむ……」

黄川人はニタリと笑り、不気味な調子で詠う

「まッ、世間にゃ五万とある話、思い余った女房は……ほれ、そこの大鳥居……縄をかけて、首吊ったんだと」

「……なるほど、転げ落ちた地獄坂、か」

薄暗い御殿の中に、黄川人の笑い声が響く

「そゆこと……フフ、それ以来出るらしいよ、キツネみたいな女の鬼がね……」

「また、鬼か……」

真名姫の怨嗟の声を思い出し、道明の表情が曇る

「ちなみに、件の赤ン坊……こっちのほうは、誰に聞いても行方や知れず……まッ、これも世間にゃ5万とある話、信じるも信じぬもあんたの勝手の、コーンコーンチキ……ってわけサ」

その時、道明の耳に女の悲鳴が聞こえた
コーン、コーンとまるで狐の鳴き声のような泣き声が

「……狐、いや、女？」

声に気を取られた道明が振り返ると、もう黄川人の姿はなかった

「……まことに、怪しいな……むっ」

続いて聞こえてきたのは大筒の咆哮で、道明は弾かれたように駆け出した

最奥の扉が開いていて、道明は迷わず飛び込む

“狐美姫（くびき）の間”と、そこには記されていた

第六話－１５　「遺書」　１０２３年６月後編

＜狐美姫（くびき）の間＞

提灯に照らされた広間、一匹の女……いや、鬼がいた

半人半狐の女はこちらに背を向けたまま、長い九本の尻尾をゆったりと動かして、すすり泣きを続ける

女狐「……どうして、あたしの人生っていつもこうなんだろ？」

道明（みちあき）が追いついたそこには、大筒を構えた翠（みどり）が鋭い目をして立っていた

「……流星参号が、全て弾き返されました」

「見てた見てた、凄いねあの尻尾、あたしも欲しい！」

「一体何が……？」

先頭に立って刀を正眼に持つ力斗（りきと）にも、女狐の発する殺意が霧のようにまとわりつく

「バケモンか、このアマ……」

汗が滲み、滑り落ちそうになる刀を、両手ですがりつくように掴む

女狐「目立たぬように、恨まれぬように、あたしなりに一生懸命やってきたよ、なのに……やんなっちゃうよ！」

この世の全てを憎んだような目つきが、四人を縛った

女狐「亭主が嫌いだ！　あの女が嫌いだ！　世ン中が嫌いだ！　人間が嫌いだ！」

九尾の狐が絶叫するたびに、部屋の提灯が爆発するように割れる
熱を伴なった風が吹きすさび、出撃隊は吸い込まないように口を押さえた
女狐の目が真っ赤に燃え上がり、九本の尻尾が大蛇のように膨れ上がる

九尾吊(くびつ)りお紺「コーン！　コーン！　弱虫のあたしがイッチ番嫌いだあああああ！」

お紺が発した火炎全体攻撃の最強術＜赤地獄＞が、壬生川(みぶがわ)一族を焼き尽くす！

みぞれのように降り注ぐ火炎球を振り払いながら、力斗が駆けた
「あっちいいいい、このアマァァァァ！」
刀を抜いて立ち向かう力斗の身体が、あっという間に巨大な尻尾に叩き潰される
「力斗お前、頼むからもうちっと落ち着けよ……」
断続的に四方八方から襲い掛かる尾を、薙刀で舞うように弾きながら、道明は器用に＜春菜＞の印を唱える
「あー面倒臭いですわね！」
手足のように自由自在に降ってくる尻尾を、一本一本国友銃で撃ち落としているが、とても間に合うものではなく、少しずつ身体に傷が増えてゆく

「ヤバイ……ヤバイよ！　あたし絶好調！」

それまで、珍しく後方で＜春菜＞を唱えていた伽子(とぎこ)が槍を振り回

しながら、前に躍り出た

「正義の狭門陣（きょうもんじん）、いっくよー！」

いちにっさんしっごー！と槍を大回転させ、迫り来る尾をまとめて薙ぎ払う

翠は目を見張る、今の伽子の動きが見えなかったのだ

お紺「コーーーン！」

一瞬にして九本の尾を切り裂いた伽子が、お紺に突撃した

伽子の槍をお紺は扇で受け止め、ふたりの力が激突し、周囲に稲妻が走る

「正義は勝つぅぅぅ！」

お紺「お前みたいな強い人間は嫌いだあああ！」

力負けしたお紺を、伽子が切り裂く

「こんなとこで泣いてないで、あの世にお帰り！」

お紺「いやだあああああ！」

「人を羨むのはもうおしまい、あなたの居場所はもうこの世にはないのよ！」

泣き叫び暴れるお紺を、伽子の槍が追い詰める！

「まったく、ひとりで戦っている気なのかしら……！」

翠の唱える＜お甲＞（防人の上位術）が、伽子を守り、舞う扇の一撃も彼女を傷つけられなくなる

今、三人を守りながら戦う伽子の背中が、翠にとってこれほど頼

もしく見えたことはなかった

お紺「コーン、コーン、コーーーン！」

ノドが裂けるような絶叫と共に、お紺は＜赤地獄＞を吐き出す
火山弾のように降り注ぐ火炎を前に、道明の術が完成した

「……＜七・天・爆＞！」

壬生川家でいまだ誰ひとりとして扱うことが出来なかった火炎系最上級術が、赤地獄の雨をも押し返す！

光が瞬いた

お紺「いやあああああああああああああああああ！」

九尾吊りお紺の四肢が火の粉となり、霧散してゆく

「ゆっくりと……おやすみなさいね」

切なげに顔を歪める伽子の前、お紺の悲鳴が部屋に響いた

九尾吊りお紺「誰かあたしを成仏させとくれよォォォォォォ！」

壬生川家は４０１５の戦勝点を得て、見事、鳥居千万宮（とりいせんまんぐう）の主を下したのであった

～～

疲労困憊の体だった道明が、その先に続く鳥居を発見した
「これは……？」
「あれ、まだ奥があるのかな」
そう言って、伽子はさっさと鳥居をくぐって先に向かってしまう
「何か嫌な予感が致しますが……って、聞いてませんわね、伽子さん」
しぶしぶと言った様子で、翠もその後を続く
「ふん、たいしたことない狐だったよな！」
「いや力斗、ずっと気絶してたから」
最後に男子ふたりが追いかける

そこはとても鳥居の中とは思えないほど、広々とした空間が広がっていた
京の町の最も大きな屋敷の庭よりも大きいと思われる半球状の広間に、巨大な魔方陣が敷かれていた

○「前から聞きたかったんだけど……」
「お前は……」
「あんたはッ！」
道明の声を遮って、伽子が叫んだ
間違いない、やつは父をたぶらかし、白骨城に呼び寄せた鬼たちの頭領だ
「朱点童子（しゅてんどうじ）！」
「な……！？」
道明が驚愕する

同じ顔をしているはずなのに、彼の雰囲気はまるで違っていたのだまるで、人と鬼のように――

名を呼ばれた朱点童子・黄川人（きっと）は口の端を釣り上げて笑うと、構わずに続けた

「神々はどんな理由を付けて、キミたちに力を貸すと言ったのかな？」

翠の放った国友銃を一瞥だけで受け止め、朱点童子は語る

「あいつらのことだ、その類い稀なる血を絶やすのが惜しいとでも、恩着せがましくやったのかい？」

きょとんとする伽子を押しのけて、翠が前に出る

「そんなの、わたくしたちが選ばれし一族だからに、決まっているじゃありませんか」

「ふぅん……そのおかげでどーだ！？」

高らかに笑う朱点童子

「君たち一族は安らかに眠ることもかなわず、無限に続く悪夢の中を延々とさまよい続けている」

「……人を、まるで鬼のように」

「鬼、ふふ、それどころか、まるで神々がお作り下さった人間の歴史……あるいはご本人たちの歴史、そのままにね」

朱点童子がふっと宙に浮かび上がる

「逃がさないよ！　ここで倒してゲーム終了！」

槍を構えて飛び上がる伽子に、朱点童子が指を鳴らす

その瞬間、魔方陣から赤い光と共に巨大な大蛇が高波のように出現し、伽子の小さな身体に喰らいつく！

「えええええ！」
「な……！」
小さな神社なら丸ごと呑み込んでしまいそうな蛇の化け物は、伽子の身体を弾き飛ばし、その後に緑眼で壬生川一族をねめつけた

「そうそう、ボクの作った庭に入るカギは、この髪の毛！　ちゃーんっと7本集めないと、ボクとは戦えないからネ！　じゃッ、後はよろしく、三ツ髪（みつがみ）」

朱点童子は凄惨な笑みを浮かべ、指を鳴らし、その姿が陽炎のように薄れてゆく
「黄川人……お前は……」
道明がその残光を見つめているのも束の間、三ツ髪という忌み名のオロチが壬生川一族に牙を剥いた

力斗の＜お零＞により、少しばかり体力を回復させた伽子が、豪槍構えて塔のような大きさの大蛇に挑みかかる

「デカけりゃ良いってモンじゃないんだからねこのバカー！」

決して怯まない伽子の槍が巨大な鱗を引き裂き、青い血を撒き散らす

「僕もご助力します……双光蘭斬（そうこうらんざん）！」
道明が大蛇に十字の傷跡を刻み込む

皆にありったけの力士水を振りまき、援護する力斗の横で、翠が裂帛の国友銃を乱射し、全員が全員、満身の力を込めて三ツ髪に立ち向かってゆく

しかし大蛇はそれでもびくともせず、その圧倒的な巨体で、一同を押し潰す

一撃で体力の八割を奪われ、再び伽子が膝をつく

「そんな……この……正義は必ず、勝つのに！」

気力で槍を構えるが、足元がふらつき、視界が霞む

狐次郎、お紺に続く三連戦により、もう翠や力斗の技力は尽き始めている

「……当主さまを、援護しないと……！」

そうつぶやいて＜春菜＞を唱えようとする道明の動きが止まった、神気が手のひらに集まらず、霧散してしまう

ついに術力が尽きたのだ

「……ハァ、ハァ……あたし、あたし、負けたくない！」

一族の運命は、伽子に託された

「七本の髪を集めれば、朱点童子と戦えるなら、集めてやる！　これがその一本目よ！」

大蛇の腹に槍を深く突き刺し、伽子は吼える

「壬生川一族は、絶対、鬼なんかには負けないよ！　諦めたりしない！」

巨大な身体を震わせて、伽子を槍ごと振り落とし、三ツ髪はその

まま伽子に頭部を叩きつけた
「がっ……ま、円子……！」

他の三人が伽子を庇おうと前に立ちふさがるが、それも大蛇の尾の一薙ぎによって砂岩のごとく吹き飛ばされる
三ツ髪は緑色に光る眼を細めて、壁を背に槍を構える伽子の前に這い寄った

「……あたしが死んでも……いつか、お前は、あたしたちの子らが討つ！　必ず討つんだからね！」
毅然と叫ぶ伽子の右半身に、大蛇が貪りついた

当主を失い、哀れ壬生川一族は京に敗走する

鳥居千万宮での死闘から翌日、
壬生川の屋敷は日ごろの騒ぎがウソのように、静まり返っていた

＜壬生川家＞

翠は半ば放心状態で、伽子の部屋に座っていた
目の前には、伽子が穏やかな顔で目を閉じて、布団に寝そべっていた

「……」

耳を澄ませても、寝息は聞こえてこない、呼吸回数が極端に少ないのだ

大蛇の口から吐き出されて、地面に酷く叩きつけられた時から、伽子の意識不明の重傷は続いていた

伽子の意識はもう戻らないかもしれない、とイツ花が言っていた

「勝ち逃げですわよ……伽子さん……」

結局、翠は一度も伽子を越える事はできなかった、膝の上で固めた拳が震える

「ただいま」

京の都から戻ってきたばかりの英雄（ひでお）が、翠の横に腰掛ける

力斗と道明は、術力の使いすぎによる疲労で、泥のように眠っていた

太陽の消えた壬生川家は、まるで月明かりが届かない森のように、静かだった

「ひとつだけ伽子さんに、謝らなきゃいけないことがあるのよ」

「……ん」

「わたくし、一度……他の家の誰かが、養子にしてくださらないかしら、と言ったことがあるの、伽子さんの目の前で」

そういえばそんなこともあったかな、と英雄は思い出す

「……冗談でも、言うべきではなかったわよね、そんなことは……わたくしも、バカだったのよ、結局……何でこんなときに、思い出すのかしら……こんなこと」

翠が仏に罪を告白するように、つぶやいた
英雄が穏やかに翠の頭を撫でる

「……笑って許してくれるよ、きっと、伽ちゃんなら」
「わたくし、きっと嫌われていましたわ……でも、ずっと、そんなの気にしてないはずだったのに……わたくし……」

伽子は目を覚まさない
自責の念に満ちた翠の声を聞いて、英雄はそっとつぶやいた

「去年の七月から、伽ちゃんが毎月欠かさずに、遺書を書いていたことは、知っていたかい」
「……今、初めて、聞きましたわ」
「だよね、先月も真名姫討伐の際に、書いてない、って言い張ってたし……ま、これが今月の、鳥居千万宮に出陣する前に書かれたものさ」

英雄は懐から一通の手紙を出すと、翠に手渡した
戸惑いながら翠は受け取る

「まったく……毎月毎月ボクに預けてくるんだもの、こっちは良い迷惑だったよ」
「読んでも……よろしいの？」
「キミ宛てでもあるからね」

英雄に促されて、翠はゆっくりと遺書を開く
そこには、意外に達筆な字で、伽子の想いが綴られていた

『遺書　１０２３年　６月版

この手紙をみんなが読む頃には、あたしはもう生きてないでしょう……毎月同じ始まり方だと、やっぱりワンパターンかな、まぁ良いや

今日はご飯が美味しかったです、おなかいっぱいで今すごく幸せです

最近暑くなってきて、稽古のあとの水浴びが気持ち良いよね、生まれ変わるみたい！

こんなにもあたしは壬生川家で生きています、あ、いや、生きていました！

だからこの手紙を読んでいる頃、あたしがいなくても、

いや、たぶん泣いたりしないだろうけれど……でも悲しまないでください

あたしは、精一杯、最期まで後悔のないように、過ごしてしましたから……きっと！

ひーくんへ

いつも傍にいてくれてありがとう、次は屋敷のみんなをよろしくね！

あんまり女の子女の子言わないよーにね、バカみたいだから！

あと、あたしの下着が一枚なくなったの、ホントーにひーくんじゃなかったのぉ？

ミドりんへ
一緒になって遊んでくれてありがとう、天才さん！
その頭の良さで、これからも屋敷のみんなを助けてあげてください
そうそう、実は一度で良いから大筒撃ってみたかったです

リキへ
元気に育ってくれてありがとう、早く母ちゃん抜かすくらい強くなってね！
でもミドりんとか、これから生まれる女の子を、イジメちゃダメだからねー
ケンカもほどほどに、ちゃーんと寿命を全うしてね、お願いよ

ドーメイへ
いっつもみんなのことを心配してくれてありがとう、尊敬します！
言われたことはなんでもすぐにできるようになって、本当にすごいよね
その調子で、リキやまだ小さなさだみっちゃんを、守ってあげてね

さだみっちゃんへ
生まれてきてくれてありがとう、一日一日を大事にしてね！
今はまだ小さいかもしれないけど、すぐに大きくなるんだから
壬生川の未来を作るのはキミたちだよ！　なーんてね

イツ花さんへ
お世話になりました、ありがとう！

とにかく、
あたしは毎日、いつ死んでも良いくらい楽しかったです
ホントにみんな、こんなバカ当主に着いてきてくれて、心から、
ありがとうございました！

だから大丈夫！　化けて出たり　しやしないってば……たぶんね！

壬生川伽子　享年1才6ヶ月でした！』

翠は手紙を閉じ、俯いた

「最期まで、バカなお人……」
そう一言、つぶやく
英雄がその時々しゃくり上がる肩を抱くと、翠は嗚咽を漏らすよ
うに言う

「……大筒が撃ちたかったなら……そう、言えばよろしかったのに
……ほ、本当に、バカ、よ……」

かすれ声を上げながら涙をこぼす翠の肩を、英雄は優しく抱き続けた

伽子が目を覚ます事は、なかった

葬式が終わって、英雄は京の町にも遊びに行かず、無口な日々を過ごしていた

懐には、いまだ持ち主の定まっていない当主の指輪が収まっている

（次期当主……か……）

様々、思うところはあるけれども、英雄は答えを出せずにいたのだ

そんな折、英雄が伽子の部屋の後片付けをしていると、偶然に発

見した
「……おや？」
以蔵の遺影の裏に貼り付けてあった
「何だろう……手紙、伽ちゃんの……？」
そこには、次期当主に関する遺言が記されていた

『次期当主に関して　１０２３年　６月版

うふふ、みんながあたしを忘れたくても忘れないように、
ひとつおーっきなイタズラをしておきます、七代目当主は……

サイコロを振って、１が出たらひーくん、２が出たらミドりん、
３が出たらリキで、４が出たらドーメイくん、５が出たらさだみっちゃんで、よろしく！

ああ、６が出たらやり直し、あるいはあたしが化けて出ちゃうかもよぉ？　あっはっはー』

その手紙を読んで、
英雄は額に手を当てて、思わず笑みを漏らした

「やられたよ……伽ちゃん、さすがだよ、キミは……」
おかしくっておかしくって、英雄は口元を押さえて笑い出す

次期当主をサイコロで決める子なんて、もう二度と現れるはずがない

「忘れたくても、確かに忘れられないよ……くっくっく、もうダメ、面白いな……あはは！」

壬生川家には、突き抜けたような明るい笑い声が、久方ぶりに響く

太陽は、夏の到来を知らせるように、さんさんと輝いていた

第六話－１５　「遺書」　１０２３年６月後編（後書き）

出陣・鳥居千万宮（伽子・翠・力斗・道明）
訓練・英雄↓貞光　討死・伽子

第七話－1　「襲名」　1023年7月前編（前書き）

英雄　1才3ヶ月
翠　1才
力斗　8ヶ月

道明　5ヶ月
貞光　2ヶ月

第七話－1　「襲名」　1023年7月前編

伽子（とぎこ）が戦死してから一ヶ月、壬生川（みぶがわ）家は相変わらずの喧騒に包まれていた
刀傷が塞がるように、怪我を負った屋敷の雰囲気も、少しずつ癒えてゆくのである

＜壬生川家居間＞

「だからさ」
英雄（ひでお）が居間の机に、ずらっと美人画を並べる
「……よくこんなに集めてましたね父上」
「いや何だかさ、ボクがこういうの好きだろうって、都の公家人がくれるんだよね、タダで……まぁボクは、本物のが断然良いんだけど」
そう言いながら、鶏太夫の絵を手にとって、うっとりと眺める
英雄はニッコリと振り返った
「で、力斗（りきと）くんはどれが一番好き？」
「あ？」
奥で道明（みちあき）に負けじと＜春菜＞の書を熟読していた力斗が、顔を上げる
「ああ、女の絵か、ンなもんに興味ねぇよ」
「えー」

英雄が隣にいる息子に囁く
「気をつけた方が良いよ道明、あの人ホモだから」
「はぁ」
「ちげえええええええええええ！」

貴重な＜春菜＞の術書を後ろに放り投げて、力斗が吼える

「俺ぁそんな、美人画みてぇなチャラチャラしたもんに好きも嫌いもねぇっつってんだ！」
「はいはいまたまた」
激昂する力斗に、英雄は肩を竦める
「ちなみに道明はどれが良い？」
「僕は……そうスね」
道明は仏頂面で考えて、紫の長い髪を一房掴んで撫でている少女の絵を取る
「この、菊水太夫って人が」
「ああ、確かにあの百姓の子に顔似てるよね」

ブッと道明は噴き出す

「げほ、げほ……何で、父上がそれを……」
英雄は口元を釣り上げて笑い、何も言わない
「つーか、女なんて男の後ろを一歩下がって着いてきて、どいつもこいつも変わんねぇだろよ」
「なーんで力斗くんはそう、捻じ曲がっちゃっているのかなぁ」
「オヤジがずっとそう言ってたんだよ、ったく……」

英雄と道明は、ああ、あの牛男、と思い出す

「それでも母ちゃんは武人として尊敬するぜ、でもな、何だあのけ

ったいな武器使う女は」
「先生のことか」
「まったく、何でよりにもよってあの女が、この家の！」
ドーン、という空砲が屋敷を揺るがした
「……わたくしが、いかがいたしましたか？」
正装した翠（みどり）が、大筒を背負って、ゆっくりと現れる
慣れた英雄や、道明は耳を押さえていたものの、力斗がその音量で口から泡を吹く
火薬の臭いに、壬生川家居間が包まれた

「もっと普通に出てこれないんですか先生」
道明が皆の気持ちを代弁した

「ごきげんよう、これからは七代目当主として、よろしくね」
翠はその場で、優雅に一礼してみせた

＜七代目当主・翠＞

「この天才が当主になったからには、これからはわたくしの好きにさせていただきます」
「怖いことを言うね翠ちゃん」
「とりあえず、今月は白骨城（はっこつじょう）へ攻め込み、来月選考試合に出場、再来月は力斗さんの交神（こうしん）の儀で行きましょう」
その言葉に、英雄が苦笑する
「白骨城かぁ」
「どうかいたしまして？」
「いや、別に」

横から力斗が口を出す

「でもよ、貞光ももう実戦部隊入りしたろ、出陣できるヤツが五人になっているぜ天才さんよ」

「今ここでひとり減れば、丁度四人ですわね」

大筒をぴたりと力斗の額に向ける

「このアマ……」

「先生、今殺してしまうと、幸家が断絶してしまいますから」

「……それでは、交神の儀の後にしますわ」

「そうですね」

「ちげえだろその会話！」

英雄がハーイと手を挙げる

「じゃあボクが、今回居残りするよー」

「ダメです、京の都に遊びには行かせません」

「ハハ、ボクにどうしても来てほしいってかぁ……モテる男は辛いなぁ、ボクの体はひとつしかないってのに」

あさってを眺めながら、英雄が髪をかきあげる

「ならば、私が家に残りましょう……まだ大筒の精度が上がっていませんので……」

「うおう！」

いつのまにか力斗の隣に座っていた貞光が、忍び笑いをしながら立候補する

「いつのまに、貞光……」

「何をおっしゃいますか……私、初めから居ましたよ……クク」

そうだったかなぁ、と首をひねる英雄、力斗、道明たちであった

こうして、翠当主率いる四人は、今月、因縁深い忌まわしき城・白骨城へと出陣することとなった

第七話－2　「黎明」　1023年7月後編

＜白骨城（はっこつじょう）＞

夏だけ姿を現す幻の城に、一陣の風が通り抜ける

「なーんか、ヤな雰囲気だなぁ」

不気味にそびえ立つ白骨城に、英雄（ひでお）が苦笑いする

「何を言ってらっしゃいます、わたくしたちの実力なら、もう攻略できるはずですわ」

「ここには、あんまり思い出したくない記憶があってね……」

英雄と翠（みどり）が、並んで城を見上げる

「わたくしの父は、ここで亡くなったと聞きましたわ」

戦場跡に、湿った風が吹きすさぶ

「……そっか、実際門司（もんじ）さんとは会ったことが無いんだったね、翠ちゃん」

力斗（りきと）と道明（みちあき）へ先に進むよう言いつけ、ふたりは白骨城の手前で一休みしていた

翠が珍しく、感傷的な言葉を口に出す

「わたくしの父は、どんな方だったのかしら」

「そ、それはボクの口からは何とも……」

「最近、母になって、ようやく分かったこともあるの」

遠い目をする翠に、英雄は内心冷や汗をかく

「親にとって、子供を見ないで死ぬのは、どんなに辛いことか……

お父様もきっと、お辛かったのよね」
「そ、そうだね、優しい人だったから！」

たぶん、と心の中でつぶやく

「でもわたくしのお父様なんですから、きっと、お強い人だったのよね」
「そ、そりゃあもう、伽ちゃん三人並！」
「もちろん、術もバッチリで」
「いやー門司さんの＜お焔＞強かったなぁ！　山がひとつ消えるなんて」

ハッハッハと無理して高らかに笑う英雄

「顔もすごくカッコよくて、振り向き王子なんて言われてたしね！」
「……写真の顔は、そうでもありませんでしたけれど」
「まぁそれは良いとして」

英雄は急にマジメな顔つきになると、翠の白い手を引いて、ささやく

「というわけで、きょうは翠ちゃんのお父さんの、仇を討たないとね」
「それはそれ、コレはコレ」
翠は英雄の手を振り解く
「私怨なんてバカバカしい、わたくしはわたくしの作った大筒の成果を発揮したいだけですわ」

そう言って、翠は巫女の衣を翻し、スタスタと白骨城へと入っていく

翠のその背中を眺めながら、英雄はぽつりと漏らす
「達観しているなぁ……いやでも、現実主義者な翠ちゃんらしいけど……」
相手が翠なら、振り回されるのもそう悪くは無い、と思えた
英雄は曇り空を眺めて、それから、白骨城へと足を踏み入れた

～～

その後、大筒士、薙刀士、薙刀士、剣士という四人は、群がる敵を斬り捨ててゆく
対複数戦闘に優れた一同は、あっという間に恨み足の待つアシゲの祭壇まで到着した

かつて鈴鹿（すずか）と門司を圧倒した恨み足も、新世代の前には一歩及ばなかった
「真空（しんくう）――源太斬（げんたざん）！」
元服したばかりの力斗の刀が、恨み足を切り裂いた
そして、＜萌子＞によって強化された道明の振るう風の薙刀・カマイタチにより、その骨が粉々に砕かれる
「仇を、孫が討つ、ねぇ……なにやら感慨深いねぇ」
「……何スか」
英雄から温かい眼差しを向けられ、なぜか寒気を感じる道明
「さ、奥へと向かいましょう」
煙を噴かせる大筒を吹いて、翠は堂々と告げた

～～

軽足大将のはびこる階を通過して、四人はテウチの祭壇を訪れた
左右カイナの強力な攻撃を英雄と力斗で受け流しながら、力士水をふんだんに使った翠と道明が攻撃に回る
「……強いことは強いんだが」
一撃２００も与えてくるカイナを二匹同時に相手しながら、道明がボヤく
「先月、あんな化け物を見た後じゃ、負ける気はしないな」
道明の＜七天爆＞が完成し、左カイナが木っ端微塵に爆砕する
「言うじゃねぇかよ道明！」
翠の散弾で動きが止まっている右カイナへと、力斗が切り込む
その様子を後ろから眺めながら、英雄がつぶやいた
「やれやれ、戦闘中に張り合わなくても……」
「本当よね」
「いやそれ、翠ちゃんは言えるかな……？」
素早く国友銃に持ち替えて、大型の鉄球をカイナにブチ込む翠に、首を傾げる英雄
その後、力斗と道明の猛攻に耐え切れず、右カイナもまた砕け散った
若き世代の成長目覚ましい一戦を終え、
壬生川（みぶがわ）一家は久しぶりに無傷、時登りの笛二個を宝箱から取得す

るオマケつきで、屋敷に帰還してゆくのであった

第七話－２　「黎明」　１０２３年７月後編（後書き）

元服→力斗　出陣・白骨城（翠・英雄・力斗・道明）

第七話－3　「美称」　1023年8月（前書き）

英雄　1才4ヶ月
翠　1才1ヶ月
力斗　9ヶ月

道明　6ヶ月
貞光　3ヶ月

第七話－3　「美称」　１０２３年８月

＜壬生川家・居間＞

壬生川一家が勢揃いしている中、イツ花が声を張り上げる
「イツ花主催、第一回壬生川家ネーミング大会ィー！」
神楽鈴（交神の儀の時に使う鈴がたくさんついたジャラジャラ）を振り回しながら、変なテンションで叫ぶ
「……大筒作成の続きに取り掛かりますか、道明さん、貞光さん」
「はい」
「クク……畏まりました」
「待ってくださいぃぃぃぃ！」

お供を引き連れて帰ろうとする壬生川家の女帝を必死に引き止める
「久しぶりの出番がァァァ……じゃなくて、そう、橋、橋ですよ！　ネッ、英雄さまッ」
週刊京美人の自らのコラム記事を、力斗に見せていた英雄が、ん、と顔を上げる
「ボクがどうかした？」
「ほ、ほら、橋の名前、名前！」
「ああ、先月完成した加茂川大橋のこと？　そういえば、まだ名前付けてなかったっけ」
「ですよ！　それで、壬生川家で名前をつけちゃおうじゃありませんか！　と、京の人からお願いされているんです！」

再び、神楽鈴をしゃらんしゃらん鳴らす
翠（みどり）は席に戻り、そういうことか、とうなずく

「まぁそういうことなら、わたくしもお手伝いしようかしら」
「わーい」
珍しく乗り気な翠に、イベントごとやお祭り好きなイツ花が手を叩いて喜ぶ
「わたくし以外に、この家でネーミング付けできるようなセンスのある人、居ませんものね、仕方ありませんわ」
「で、橋の名前考えりゃ良いのか？」
「はぁい、最近家の前にこっそりお野菜が届いてたりする高名な壬生川家の、さらなる繁栄のため、お願いしまーす」
それ食ってるのか、と道明が眉をしかめたのは良いとして、イツ花が各人に紙を配る
「皆様の中で一番良いと思ったのを、イツ花がバーンとォ！決めさせていただきますので、頑張ってー！」

ぱちぱちぱち、とひとりで拍手する

「……僕はこういうの苦手何だけどな」
「……ククク」
頭を抱えるふたりの横で、にこやかに英雄が手を挙げる
「はいできたー」
「早っ」
英雄が自信満々で差し出してきた紙を受け取ったイツ花
読み上げる
「一条戻り橋……」
「斬新でしょ」
「もうとっくにありますから！」
ヘッ、と力斗が笑い飛ばす

「ったく、ざまーねぇな、英雄兄貴は！」
「いやなんかもう、考えるの面倒で」
アハハと笑う英雄に、力斗が見てろよ、とイツ花に紙を渡す

読み上げる

「男気橋」
「シンプルイズベストだぜ」
「自分の好きな言葉をくっつけただけじゃないですか！」
きいいと破り捨てるイツ花に、てめぇ何すんだこの野郎、と力斗が叫ぶ
「ククク、出来た……」
「おお、貞光さま、どうですかッ」
「ザ・カモリバービックブリッジ」

無言で、貞光の紙をくしゃくしゃに丸め、庭にポイする

「さ、あっという間に残りおふたりになってしまいました！」
「そうですわね、こういうのはどうかしら」
翠が見事な達筆を走らせる
「大翠橋」
（この家の人は、みんなバカなんでしょうか昼子さま）

思わず天を仰いで、祈ってしまう

残るは最後のひとり、道明だ
「あまり自信がないのですが……」
「もう何でも良いですよ……」
自分で言った手前、この中から選ばないといけないのか、と頭につけた三本花の飾りもしぼんでしまう

「駆けると、架けるを語呂合わせで……“未来へ駆けるゼ　壬生川大橋”とか」

うわぁ、という声が波風のように広がる

「お前、それなら俺の男気橋のがまだマシだろ」

「ダジャレじゃないの」

相次ぐツッコミに、道明は耳を赤くして答える

「……こういうのは、苦手なんスよ」

「良いですネ！」

ところが、紙を握り締めていたイツ花が、突然叫ぶ

「それで行きましょう！」

誰よりも本人が一番嫌そうな顔をした

「いや、あの、」

「それじゃイツ花は、一足先に京の職人さんの下へ頼みに行ってきますね！　未来へ駆けるゼ壬生川大橋！」

妙に気に入ったらしいイツ花が、興奮した顔で走っていった

取り残された五人

「……まぁそれじゃ、そろそろ選考試合に向かおうか」

「そうですわね」

動じないふたりが席を立ち、残された道明の肩を力斗が叩く

「ま、そんな落ち込んでないで、お前も未来へ駆けろよ、な」

「……もう言わないでくれ」

「……ククク」

壬生川家は、きょうも平和だった

それから、英雄、翠、力斗、道明の四人は夏の選考試合に出場し、決勝戦で京阪傭兵組合（けいはんようへいくみあい）を打ち破った

翠の改良した流星参号はもはや、人間相手には無敵の代物と化していた、誰一人として避けられる者はいなかったのだ

そうして天才大筒士・翠と、京にその武勇を轟かせる薙刀士・英雄のふたりが率いる壬生川家は、圧倒的な力で見事に優勝を勝ち取ったのであった

ちなみに、翌日の祝“未来に駆けるゼ　壬生川大橋”の開通式には、道明は欠席し、代理として英雄が挨拶をしたらしい

第七話－3　「美称」　1023年8月（後書き）

出陣・選考試合（翠・英雄・力斗・道明）

第七話外伝前編　「畏友」　１０２３年８月下旬

これは壬生川家では語られる事がなかった物語の発端
京都で生きることを決めた少年のお話

選考試合が終わった８月、英雄はひとり京都に留まっていた

こちらはその、選考試合の会場にもなった二条大路沿いにある寝所である
「アハハ」
夜の戸張にロウソクの火が揺らめくと、屈強な傭兵、僧兵、武士ら数十人に、何人かの太夫や渡り巫女が浮かび上がる
ささやかな宴会場で蛮人のような髪を持つ少年が一人混ざっていた
京で虎と呼ばれた少年は中央に座して、杯を傾ける

「いやぁ、今回の選考試合、お疲れさん」
あどけない笑みを浮かべる英雄の隣に座るのは、京阪傭兵組合の組長だ
「へ、おめェらが出てきちゃ、年に2回の金稼ぎがナシのつぶてよ」
「やだなぁ、だからこうして大盤振る舞いしているんじゃないか」
宵闇の寝所には、三十三間会、ぽんと自警団、戻橋警護隊、毘沙門会など、京都を守護する名うての猛者たちが集まっていた
「それに、こっちはせいぜい3回くらいしかチャンスがないんだから、それくらい見逃してよね」
「は、違えねェ」

小さな笑い声が上がる

母・鈴鹿（すずか）をわずか2ヶ月の時に亡くした英雄は、幼い頃から人生の数割を京の都で過ごしていた

壬生川一族の宿命を知る数少ない武人たちの間で英雄は育ち、その愛嬌のある容姿と人懐っこい性格も合わさって、すっかり彼らに受け入れられていた

「ったく、よくそんな細肩があんなバカデケェ薙刀を扱えるもんだ、夢か幻かよ」

壁に立てかけられた英雄の愛刀・大風車を横目で眺めて、熟年の傭兵組長は杯の酒を飲み干す

「重いと思うから重いんだよ、軽いって思い込めばそれほどでもないさ」

受け入れられるどころか、その武力により英雄は今や、京都守護団の中で主導的な存在にすら担ぎ上げられていた

「それに、壬生川家の人たちの中には、ボクより強い子もふたりいるしね」

どこかで、くわばらくわばら、と冗談めいた声が聞こえる

「おめェら、帝のしとねン中にでも越してきたらどうだ？　鬼もぜってェ近寄らねぇな」

「誰よりも先に、ボクが自堕落になりそうだな……」

つぶやきながら、英雄は酒をすすった

戻橋警護隊の隊長が、そろそろ、と腰を上げる

「さ、莫迦騒ぎはこのくらいにしろ、もうすぐ跳梁跋扈の逢魔が刻だぞ」

「逢魔が刻ってのは夕暮れのことだろ、最近鬼が殊更手ごわいからって、頭震えてんじゃねーのかアーホ」

立命冠三本槍（りつめいかんさんぼんやり）の筆頭が揚げ足を取る

英雄が手を叩いた
「はいはいそこまで、んじゃー、そろそろ見回り行こうかみんな、あ、もちろん女の子たちはボクが送るからね」
よく通る声で、広間の皆に笑顔を振りまく
もちろん女性陣に送る笑顔は、異なる種類のものだ

「あれ、きょうのボクの持ち場はどこだったかな」
平安京図を眺める、英雄の担当は八条から九条までの朱雀大路であった
「やーれやれ……またボクが中央通りの一番長いトコか……」
槍使いの女性が、英雄の後頭部を小突く
「ホラホラボヤくんじゃないの、みんなあんたにゃ期待してるんだからネ、壬生川の坊や」
「えー、誠心女子有志のお辰さん、坊やは止めて欲しいなぁ」
笑顔で頭をかく英雄に、誠心女子有志の女大将がカラカラと笑う
「なァに言ってんだい、1才半なんてまだロクに口も利けない赤ん坊じゃないか、ウチの悪たれなんて十になったってのにまーだオネショしてるよ、かっかっか」
適度に相槌を打ちながら、母親には敵わないなぁ、と英雄は苦笑する
英雄は荒廃していながらも、迫り来る鬼に力を束ね、生きようとする意志で溢れた京の武士が好きだった

寝所から出て、薙刀を担ぎながら空を見上げると、三日月が浮かんでいた
「……翠ちゃんは今宵も徹夜かな」
屋敷でたった一人でも戦っている妹を思う
「英虎、どしたァ？」
「ん、良い月だな……ってね」

ニコリと微笑み、英雄は離れていても繋がっていると思いながら、配られた提灯に火をつけた

先々代の当主が鬼と化した光景を目の当たりにして尚、英雄は人として生きようと決めた

世間の風評ゆえ、受け入れられるためには苦労もしたが、その結果として、人の世でも短い人生を謳歌出来るのだと、英雄はその身を賭けて証明してみせようとしていたのだった

暗い路に提灯が浮かぶ

「えー、本当かい？」

ゆったりと、数人の女性を引き連れながら、英雄が歩いてくる

「初代の臥蛇丸も良い方だったケド、あの人はウブだったからネ、わたしはやっぱり英虎様が好みカナ」

うふふと笑いながら、お鶏が英雄の腕に絡みつく

「え～、英虎さまは私のモノよ……こんな美少年！」

芦刈が英雄の反対側の腕を取って、イーっとお鶏に犬歯を剥く

女性に挟まれて、英雄は苦笑する

「芦刈ちゃん、鶏ちゃん、ボク薙刀に提灯も持っているから危ないよ……」

あまり聞いてないようだ

「あたしは臥蛇丸さま派だったかなー、あの頃はまだお客さんの相手も不慣れで、酔っ払いに絡まれていたのを、あの方が助けてくれて……」

綾傘が思い出す横で、お鯉が頬を赤く染める

「私は……蘭さまが……ぽ」

そう言って、みんなに突っ込まれていたりする

深夜の都を騒がしく歩きながら、一同は目的の宿まで到着した
「じゃ、ボクはここまでね」
花街の入り口に立って、英雄が微笑む
きょうはあんがとなぁ、と手を振る太夫たちの中から、木賊(とくさ)が進み出てくる
「ありがとね英坊、見ての通り、すっかりあたしらのシマも寂れちゃってさ、今時お大臣やってくれるのなんてあんたくらいだよ」
「なぁに、これも投資、投資、決して私欲じゃないんだよハハ」
あははと笑う英雄に、木賊が目を細める
「みんなあんたたちの境遇は知っているからさ、一日でも長く生きるんだよ」
「ふふ、どういたしまして」
その人間味に溢れた温かい眼差しに、英雄は肩をすくめる

が、その瞬間、闇の中から咆哮が響いた

「――!」
英雄が弾かれたように振り向き、提灯を掲げてその暗がりを照らすと、女性たちの中から悲鳴が巻き起こった
夜に紛れて、そこには緑色の目をした悪鬼が潜んでいた、人間を見つけてジリジリとにじり寄ってくる
「みんな、早く中へ」
提灯をその場に置いて、英雄は両手で薙刀を構える
年長者の木賊が太夫たちを花街の中へと誘導してゆく
さすがは手練手管の色町の住人だ
鬼は低い唸り声を上げながら、英雄の方にゆっくりと迫ってきた
「……紅こべ大将？　こんな人里まで降りてくるのかい」
これも朱点童子の影響力なのだろう
京都守護団の話では、ここ数年で現れる鬼の数が爆発的に増大したという

「……春眠をむさぼりて悔なかりけり、水母の袂にて暁を覚えず……くくらら！」

素早く結んだ英雄の印が、紅こべの怒声によってかき消される

紅こべは人間の頭蓋骨で出来た棍棒を掲げて、英雄に襲い掛かってきた

「残念、食べるならボクだけは止めたほうが良かったのにね！」

薙刀の柄で棍棒を弾き、返す刃で英雄は、胸元から足までを一気に切り裂く

「ぎえええええええええええええ！」

赤鬼は血を噴き出して転がりながら、血走った目を近くで怯えている少女に向けた

「あ、やっ」

元服にも満たない錦天神（にしきてんじん）は、慌てて木賊らが手を招く花街の入り口へと駆けてゆく

「ちょっと、女の子を襲うなんて卑怯だよ！　このロリコン鬼！」

紅こべが己の飢えを満たそうと、錦天神に組みついた

巨大な口蓋を開け、錦天神の頭を飲み込もうとした紅こべが、突如として白目を剥いた

「え、あ、あぅぅ……？」

苦しむ紅こべを振り払って、錦天神が泣きながら木賊の元に逃げおおせる

鋭い爪をがむしゃらに振り回す鬼に、英雄が不敵な笑みを浮かべた

「“猛毒刃（もうどくじん）”、ボクの薙刀に触れたコは、例えどんなタフな鬼でも、一様にコロリ、さ……翠（みどり）ちゃんの開発した毒だけどね、かなりクルでしょ」

離れた場所で、先ほど薙刀の近くでじゃれていたお鶏と芦刈が叫び声を上げるのが聞こえたが、英雄は気にしない
最期の力を振り絞って英雄に噛みつこうと口を開いた紅こべを、英雄の薙刀が両断した

何度もお礼を言ってくる錦天神の頭を撫でて、英雄は後始末を木賊たちに任せ、自分は周辺を見回ってくると告げた

「……まったく、ついに紅こべまで出現するなんて」
提灯を拾って、再び見回りに戻る英雄がつぶやく
「……ボクももう1才4ヶ月、これはそろそろ、ウカウカしてられなくなってきたなぁ」
意識を澄ませば、鬼の気配が2，3ほど感じ取れた
見上げれば、月は雲に隠れている
近々何か悪い事が起きる予感がして、英雄は眉をひそめた

「他のみんな、無事なら良いけど」
そう願う英雄の想いは、叶わなかった

その夜、京都守護団には17人の重軽傷者と、誠心女子有志の女大将を含む4人の死者が出た
そして、鬼が出現した一帯に住む町人の姿が消えた

京都に住む人々が枕元に刃物を置かずとも眠れる夜は、まだ来ない

第七話－４　「初蝶」　１０２３年９月（前書き）

英雄　１才５ヶ月
翠　１才２ヶ月
力斗　１０ヶ月

道明　７ヶ月
貞光　４ヶ月

第七話－４　「初蝶」　１０２３年９月

いつも通り、壬生川（みぶがわ）家の屋敷門前に座り込んで、道明（みちあき）とゆねがお喋りに興じる初秋の午後
藤の花びらが、晴れやかな空に舞う

「そんね、なーんか今年の風邪はタチ悪い悪い言われて、毎年言っているやんっ、ってなー」
そういえば英雄（ひでお）が言っていた、悪しき鬼が都に疫病をばら撒いているとか
よもやとは思ったが、道明はゆねの腕を取る
「ゆね、平気なのか」
「や、ゲホ……な、何すんのいきなり」
道明の手を振り解いて、いやいやをする
「いや、僕は……ただ、流行り病にかかってないかと」
「平気よぉ、ウチらもあんたらと一緒で、身体が基本やもーん……て、あんたらとウチを一緒にしたら、怒られちゃうかな」
笑って、舌を出す
「……元気ならそれで良い」
道明は照れた頬を隠すように、そっぽを向いた

＜翠（みどり）の部屋＞

図面に線を引いていた翠の手が、ぴたりと止まった
「……」

カンナではめ込み式の大筒の部品を作っていた貞光（さだみつ）が、何やらプルプルと拳を振るわせる母親を見る
「……いかがしましたかな、お母様」
やたら喋り方が時代かかっている3ヶ月才の貞光

翠はきえええいと設計図を敷いていた机をひっくり返す

「何やっているのわたくしはー！」
貞光は一緒に吹っ飛んだ、ところどころ擦り切れてボロボロになっている大筒士の指南書を受け止める
「わたくし、当主になってから大筒しか作ってないじゃないの！」
今更重大なことに気づいた、と震える翠
部屋には、大中小の用途に合わせた大筒が所狭しと並んでいた

その中心で翠は、頭を抱える

「クク……でも楽しそうですよ、お母様」
「楽しいは楽しいけど、これではわたくしが当主を任された意味がないわ！　もっと、歴史に残るような偉業を達成しないと……！」
「……では、いかがなさるおつもりで」

翠は締め切っていた部屋の障子を開くと、久方ぶりに見た太陽に目を細めながら、つぶやく

「……そうね、伽子さんに出来なかったことを成し遂げるのが、一番早いわね！」
翠、1才2ヶ月、心身ともにもっとも充実している年齢であった

＜交神（こうしん）の儀＞

憮然とした表情で待つ力斗（りきと）に、イツ花（いつか）が恐る恐る話しかける

「あのォ……力斗さまぁ？」

「何だ？」

一見、男尊女卑に思われがちな力斗ではあったが、一家のお手伝いとして働くイツ花のことは、尊敬もしていたし、慕ってもいた

彼は何のことはない、男女で仕事を作業分担することに美徳を感じるだけなのだ

「交神の儀、なさる、ンですよね？」

「ああ……ったく、みんな、イツ花みたいに気立てが良くて家事の巧い女だったら良いんだけどよ」

力斗の口癖である

「あはは……最近はわたしも、あんまりお皿割ってませんからね……」

最近は、という辺りで少し声が小さくなった

「じゃ、とっとと済ませちまおうか」

「でも本当に、力斗さまって女の人がお嫌いなんですネェ」

「いや嫌いじゃねぇが」

あっさり首を横に振る力斗に、イツ花がしみじみとつぶやく

「本当に、根っからの男色家なんですねぇ……」

「ちげえええええええええええ！」

暴れだす力斗

「あのな、俺の好みに合う女がこの世には、とりわけこの家には少

ないだけだ！　そこを勘違いすんな！」
「ムキになるとこが妖し……さ、どの神様が良いですかね！」
力斗の瞳に、鶏を絞める前の料理人のような光が宿ったのを見て、イツ花が慌てて神様一覧表を取り出す
「この世に、一歩下がって男を立てて、三つ指ついてお出迎えするような淑女は、もう残ってねぇのか……」
グチりながらメニューをめくる力斗を、若いですネェ……と温かく見つめるイツ花
英雄と違った意味で悩む力斗が、おずおずと選んだのは水の神様だった
「……この人とかなら、まだ」
その名は、魂寄せお蛍、奉納点（ほうのうてん）１０の女神だ
確かに気立てが良さそうな顔立ちをしていて、慈しみ深く、優しく包み込んでくれそうなのだが
「力斗さま……」
「……ただ言ってみただけだぜ」
所詮、今の壬生川家に１０点の神と交神するなど、マジメな力斗には叶わぬ恋だ
「どいつもこいつも、アクが強そうだぜ……」
「男と女なんて、デコボコしているくらいが丁度良いんですよォ」

イツ花が横からささやく

「ああ面倒臭ぇ、じゃあイツ花が決めてくれよ」
「わ、わたしですか！？」
ぽいと投げられた神様一覧表を受け取り、イツ花がそれならば、と選ぶ

やがて、力斗に足りない土の遺伝子を補う女神が、百合の花びらと共に下りてくる

金色の髪をたなびかせて、女神は淑やかに微笑んだ

百合唐　蝶子「どんな悲しみにも負けぬ子を……」

白百合の香りが、力斗を包み込む
蝶子は固まる力斗を、優しく抱き寄せた

翌月、力斗はボーっとしながら、道明に「女って柔らかいんだな……」と語りかけたという

第七話－４　「初蝶」　１０２３年９月（後書き）

交神の儀・力斗×百合唐蝶子

第七話－5　「使命」　１０２３年１０月前編（前書き）

英雄　１才６ヶ月
翠　１才３ヶ月
力斗　１１ヶ月

道明　８ヶ月
貞光　５ヶ月

第七話－5　「使命」　１０２３年１０月前編

＜道場＞

薙刀士の道明（みちあき）と、剣士の力斗（りきと）が向かい合う
稽古の最中だと言うのに、力斗はポーッとした顔で天井を見上げていた

「なぁ……道明……」
「どうした力斗」
薙刀を正面に向けながら、道明が相槌を打つ
「……居たんだな、理想の天女さまって」
「……そうか」

ここ一ヶ月、力斗の様子が明らかにおかしい

（……今、攻めかかっても良いのだろうか）
軽く悩んでしまう
相変わらず、力斗は遠くを見つめている
「俺ぁ知ったね、この世に生まれたたったひとつの意味を」
「鬼を退治することだろう」
「そうだ道明、恋だよ、俺の周りには愛があったんだ、愛が！」
「恥ずかしいから連呼するな……」
「惚れた女を命がけで守る、それが俺の生きる道だ！」
「いやだから、天女だろう相手、どう守るんだ」
ついに木刀を投げ捨てて、力斗が道場を出てゆく

「蝶子ぉおおおおおお！」

ひとり残された道明が、渋い顔で薙刀をつく

「そんな顔で先生に会ったら、球打ち込まれるぞ……」

忠告をしてみたが、届きそうにもない

入れ違いに、貞光（さだみつ）が入ってきた

「おや道明さん……クク、稽古の途中でしたか」

「……貞光が外を歩いているところを、久々に見たよ僕」

「また、ご冗談を……」

口の端を釣り上げて、猫背で近づいてくる

引きこもりの弟に、ふと気づいて道明は尋ねてみた

「そういえば道場に……貞光も打ち込みとかするのか？」

「ご冗談、私は武道はからっきしですからね……その代わり、クク、私には愛しの妻たちがおりますから……」

「はぁ」

道明が頭をかく

「お前もか、貞光……力斗みたいにはなるなよ」

「クク……私の最愛の妻は、この子たちですから……例えば、“くりすてぃーぬ”！」

バッとどこに隠し持っていたのか、貞光が巨大な大筒を抱きしめるように構える

「他にも、まだまだありますよ……流星参号改良型乙“おふぃーりあ”！　国友銃発展型甲“しゃーりー”！　自雷火後期型丙“べる”！」

貞光があちこちから取り出した大筒を、道場に次々と並べてゆく

「……」

何だかもうおなか一杯な道明

「クク、私の美しい娘たちを見て、声も出ないご様子か……ちなみに既存の大筒に“上質木材”“鬼亜鉛”“出雲鉄粉”の三種を合成したものである、攻撃力も１３ほど上昇」
「あたかも俺屍が自分で合成できるゲームのように言うなっ、未プレイの人が混乱するだろっ！」
よく分からないことを叫び出す道明

「まぁそれはそうと……お母様が呼んでおりましたよ、これから出陣されるそうで」
「わ、分かった、すぐ行くって先生に伝えておいてくれ」
ひょいひょいと大筒を胸元にしまう貞光を見て見ぬフリをして、道明は薙刀を道場に立てかける
「……そういや、力斗を呼びに行ったのは、先生か？」
「いえ、私が仰せられたのは、道明さんをお呼びすることだけですよ」
「そうか」
その瞬間、屋敷の方から巨大な爆音が響き、道場が少しだけ揺れた

ぱらぱらと埃や木片が舞う

「ああ……流星参号、きょうも良い音してますね……クク……」
「いや待て、気にするところはそこなのか！」

＜壬生川（みぶがわ）家・居間＞

英雄（ひでお）と翠（みどり）を除く一家三人、少年たちが集合した居間

「く、ふふ……」

犯罪者のような顔であらぬ方向を眺めるのは、手足に包帯を巻いた力斗だ

呆れながらも、道明は癒しの術を唱えてやる、最も本人は怪我すら気づいていないようだが

「いやはや、恋は人を変えると申しますが……これは、何ともはや、面影もありませんな」

翠の渾身の流星参号を間近で浴びて、意識が戻らないなら、頬をつねったくらいでは無理だろう

「＜仙酔酒＞の術とかで治らないものか……」

全体ステータス異常回復術である

「昔から、恋に効く薬は天界にもないと有ります……ここは、時間が解決してくれるのを望むより、他あるまいに」

「そうか、ってかお前本当に僕より3ヶ月才年下なのか」

現在恐らく4ヶ月才の貞光を、7ヶ月の道明が問い詰める

三人がくつろいでいる？ところに、翠が遅れてやってきた

「お待たせしたわね」

短い髪を櫛で結って、薄く紅を引いた七代目当主の御姿に一瞬だけ、居間の騒ぎが止まる

長いうぐいす色の着物が粋で、彼女の涼しげな目元によく似合っていた

その後ろから、イツ花が感涙を流しながら現れる

「うわぁぁん、翠さまお綺麗ですよぉぉ」

「な、何ですのイツ花さん！」

「この家で女性を美しく着飾らせるなんて、鈴鹿さま以来で、わたし嬉しくてェェ」

そう言って抱きついてくるイツ花を、よいしょと引き剥がす翠

「……これも、伽子（とぎこ）さんはしなかったことの一環ですわ、天才ですから何でも出来ますの、わたくし、出陣前の気合い入れとでも思っていてください」

慣れない衣装に頬を赤らめながらも、翠は偉そうに言い放つ

「いや先生……ホント見違えましたスよ」

あの薄汚れた翠が、ここまで化けるものだとは思わず、道明は思わず唸る

「まるで無骨な鉄筒が、鉄粉ヤスリで隙間なく磨き上げられたようですな」

他にもっと良い例えはなかったのか、と道明が横で思う

「やぁ嬉しいなぁ、ボクのためにそんな格好してくれるなんて♪」

うにょっと出現した英雄が、翠に突如抱きついた

「きゃっ」

「うーん綺麗綺麗、いやぁ京でもこれほどの美人にはお目にかかれないよアハハ、ボクは幸せものだなぁ」

嫌がる翠を、ぎゅっぎゅっと何度も抱きしめる

「ちょ、ちょっと英雄さん、なんなの、ってお酒臭いですわよっ」

「アハハ良い香りでしょー、ハハ、翠ちゃんも良い匂いするねぇー」

そんなダメ人間を、道明と貞光が白い目で見つめる

きっと二人も、将来ああはならないよう、心の中で誓っているだろう

「ああもう、止めてくださいっ」

ふにふにと頬を撫でられていた翠が、英雄を投げ飛ばす

「これからわたくしたちは、出陣するんですから、もう」

わずかに上気しながら、翠は乱れた着衣を押さえる
「もう、何ですか久々に帰ってきたと思ったら、こんなことを……
あなたには壬生川家のひとりとしての自覚が無いのですか……！」
まるでダメ亭主と苦労妻の会話だ、と道明は思った

怒られている間もずっと微笑みを絶やさなかった英雄が、立ち上がってニッと笑う
「いつも心配かけてゴメンねミドりん、そうそう、ボクは家を出るから、きょうは別れの挨拶に来たんだ」
「ちょっと、ミドりんって言わないでくださいます……って、ええええ！？」
動揺する翠が思わず持ち上げた大筒を片手で英雄は下ろしながら、ニッコリと続ける
「後のことは頼んだよ、七代目当主、翠ちゃん」
「ちょ、ちょっと、どういうことなの英雄さん！　あなたはそれで良いの！？」
「ボクも、もう老い先短いし、老兵は戦わず去るのみ、さ」

英雄は翠の頭をポンポンと撫でながら、道明を振り返る
事態に着いていけてない道明に、英雄は静かに語りかけた
「道明、確かに伝えたからね“双光蘭斬（そうこうらんざん）”」
「……父上、本気スか」
「本気も本気さ、ボクがいないと死んじゃうぅ～、って言ってくれた女の人がいてねぇ、ハハ」

そう言って快活に笑う

「貞光も、うちの道明の面倒をよろしくね、力斗は……何か飛んでるみたいだからいいや、イツ花（いつか）さん、お世話になったね」

英雄はイツ花の手を握って、感謝の言葉を告げる
「い、いいえぇそんな……でもそういうことなら、仕方ないですネェ」
頬に手を当てて、妙に物分りの良いイツ花も困ったように微笑む

そんな中、平手の音が居間に響いた
翠が思いっきり英雄の顔を張ったのだ

腫れた横顔を押さえながら、英雄は肩をすくめる
「あなたは、最後まで壬生川家を見守っていてくれると思っていましたのに……！」
「ボクはもう十分遺した、あとはボクの人生さ」

英雄は翠の肩を抱く
耳元で囁いた

「ゴメンね、翠ちゃん」
「……七代目当主の名において、命じます……あなたはもう、二度とこの家の敷居をまたぐことを許しません」
翠は俯いたまま、玄関の方を指した
英雄はもう一度翠を抱きしめて、そして離れた

別れ際に一言、つぶやく

「あの世で会っても、ボクが幸せそうなら声を掛けなくても良いよ、ボクも、そうするからね」

薙刀を担いで去ってゆくその背に、翠は涙声で怒鳴った

「あなたにとって、壬生川家はそんなに辛い物でしたか！　伽子さ

んが居なくなったこの家には、そこまで価値がありませんか！？
もう……わたくしをからかっては、くれませんか！」
壬生川一族が見守る中、英雄は何も言わずに歩んで行った

こうして、壬生川英雄は1才6ヶ月にして、壬生川家から出奔した
手紙の一つも残さず、女を泣かせたまま、英雄は薙刀だけを持って、姿を消した

「ふぅん……あーんな仲良しな壬生川家にも、色々あるんだねェ……」
その様子を朱点童子（しゅてんどうじ）が空から見ていた事を、皆は知らない

第七話－6　「悲鳴」　1023年10月後編

＜九重楼（くじゅうろう）＞

「……」

全身から不機嫌のオーラを立ち上らせ、壬生川（みぶがわ）家当主が我が道をまい進する

横道から飛び掛ってくる首切り大将を、巫女服の翠（みどり）は見もせず大筒で吹き飛ばす

轟音が鳴り響き、六年坂の地形がその火力によって荒地に変えられてゆく

（……空気が重い……）

次々と鬼が爆砕されていく中、冷や汗を流す道明（みちあき）

先ほどまで英雄英雄（ひでおひでお）うるさかった翠も、戦地についてからはグチる代わりに、大筒を噴かせているようだ

「何か知らねえが、気合入ってんな翠！」

屋敷での一切合切を覚えていない様子の力斗（りきと）が、妖怪を斬り捨てながら叫ぶ

「ククク……」

初陣の貞光（さだみつ）は、三人を後ろから追いかける

そんな協調性のまるでない壬生川出撃隊は、九重楼の入り口前まで到着した

「来ましたわね……貞光！」

「御意……ククク」

翠が指を鳴らすと、貞光が九重楼の裏へと駆けていった

「あの、先生、どうしたんスか」
「さっさと中入らないのかよ」
二人が問いただすと、翠は分かってない、とばかりに首を振る
「これだから素人は……」
「何のだ、何の」
「わたくしたちがここに、何をしに来たか、覚えているのかしら」
「はぁ？　鬼退治だろ、大筒巫女女」
刀を肩に担ぎながら言う力斗の元に、貞光が戻ってきた
「クク……完了いたしました」
「ご苦労」

母子の間の空気だけが、まるで悪の組織のようだ

翠は大仰に塔を指差す
「これより、九重楼を倒壊させますわ」
「は！？」
「そんな！」
驚愕する二人を見て、我が意得たりとばかりに、翠は嬉しそうに笑みを浮かべる
「そう、これこそ、誰もが思いつかなかった、一網打尽作戦……名づけて“蟻の巣に水”！」
「もっとマシな呼び名はなかったのかあああ！」
「さあ、九重楼の周りには火薬を撒いておきましたわ、道明さん、トドメよ！」
もはや道明は何も言わない
「……＜七天爆＞」
必死で覚えた必殺技が、こんなことに使われるとは思っても見なかった

道明が放った巨大火球は九重楼に着弾し、その周囲を一気に燃え上がらせた

「アハハハ、燃えろ、燃えろ！」

「先生……」

火に照らされて、壮絶な笑みを浮かべる翠に、道明はほろりと涙する

燃え盛る炎が九重楼を取り囲んだ時、風がざわめいた

「んあ？」

林が鳴き出し、突如強風が吹き荒ぶ

「……これは、」

巫女服の裾がはためき、翠は顔を抑える

突然の烈風が炎を散らし、その後に幾本かの稲妻が炎を消し飛ばした

声が響く

○「俺らの寝床まで奪おうってのか、これも人間の業ってヤツか！」

○「それとも新しい血の為せる技かい、おっそろしいねェ」

天から降る大声に、翠は歯を食いしばって、九重楼最上階を見上げる

「……昇って来い、ということなのね、良いわ、受けて立ちましょう！」

「……どう考えてもダメでしょう、こんな作戦ゲーム内にありませんし」

そんな翠に、ひとり冷静な道明がつぶやいた

〜〜

群がる悪鬼を二丁の大筒で吹き飛ばしながら、壬生川家は九重楼を駆け上る

「それにしても、ここだけはハナッからあるってダンジョンなのに、一度も最上階って見たことねえよな」

「……先ほどの声聞いたろ力斗も、相手は恐らく二匹だぞ」

舞うように薙刀を振るいながら、道明がつぶやく

「先生が、焦っていなければ良いが……」

と、前に向き直る

「ほほほ！」

「ククク……」

屋敷での鬱憤を晴らすかのように、翠が暴れまわる

前列で放たれる散弾は鬼たちを一掃してゆく

「何か、段々俺ら見てるだけでも良くなってきたな！」

「……そうだな」

剣士と薙刀士は、そんな大筒士たちの後を着いていくことにした

〜〜

そして黒スズ大将たちを押しのけ、辿りつくは最上階

九重楼終階、雷風の間へと一同はやってきた

「先ほど、わたくしの“蟻の巣に水”を邪魔したのは、ここの鬼ですわね……」
産毛が逆立つような雷気を感じながら、翠が先頭を進む
足場が不安定な塔のてっぺんに、大声が響いた

○「フハハハ！」
○「よく来たな坊主ども！」

その朗らかな声に翠は眉をひそめる
「……何者？」
疑問に答えるように二体は姿を現した

「俺の名は雷電五郎！」
「俺の名は太刀風五郎！」
空に浮かぶのは、巨大な袋を持った緑色の鬼と、太鼓を担いだ紫の鬼だ
いわゆる絵巻にある“風神雷神”のモチーフになったと思われる神なのだろう

雷電「よく来たな、今日は俺たちの話をしてやろう！」
雷電五郎は四人を偉そうに指差す
太刀「幾星霜、誰も来なくて暇だったのだ、さあ語れ五郎！」
雷電「お前も五郎だろう！」
太刀「そうだったな、ガハハ！」

道明が力斗の脇をつつく
「あれ、お前の友達か」
「ちげえええ！」

それはそうと、まだ戦う意思を見せない鬼たちは、何やら語りだす

雷電「まだ雲が低く、天と地が近かった時代、俺たちが雲の上から下界を覗いていたら、人間どもがバタバタ死んでいくではないか！」
太刀「冬の寒さのせいだ！　だから俺たちは、火の作り方と風の卸し方を、人間にそっと教えた！」
雷電「すぐに夕子にはバレたがな、ガハハ！」
　いちいち笑わないと話せないのか、と思う翠
太刀「勝手に人間どもに知恵を授けた俺たちは、すぐにこの九重楼に閉じ込められた！」
雷電「悲しかった！」
太刀「寂しかった！」

　あなたたちの心理描写はどうでも良い、と翠がつぶやく

雷電「しかし俺たちは後悔こそはしなかった、苦しむ声の替わりに人の笑い声が聞こえてきたからな！」
太刀「しっかーーし！」

　太刀風五郎が怒鳴った瞬間に、九重楼最上階に＜芭蕉嵐＞にも似た風が吹き荒れた

太刀「それもこれも、人間たちが火と風を使って殺し合いを始めるまでの1年、俺らは悲しかったあああ！」
雷電「でも人間が好きだあああああ！　嫌いになれないんだあああああ！」
　うおおおと抱き合って二人は涙を流す

　力斗がぼそっと言う
「……切ねえ話だな」
「え、嘘、どこが」

何やら泣き続ける鬼たちを見て、翠がため息をつく
「それで、どうするの」
自分たちは髪を退治しにきたのだ、戦う気がないなら退いて欲しい

雷神と風神は泣くのを止めて、こちらを睨みつける
雷電「さーてと、無駄口はここまでだ！」
雷電五郎が拳を合わせると、彼の周囲に火花が散り出す
太刀「お前ら朱点と戦う気なら、まだまだ力不足だな、鍛えてやるからかかって来い！」
太刀風五郎が竜巻のような雲を身にまとう

翠は大筒を持ち上げて、叫んだ
「良いわ……まずは貴方たちで、試させてもらいますわ！」
九重楼風雷の間に、衝撃が走った

先手を取ったのは、風雷鬼たちだった
太刀「うおおお、来たれ竜巻！」
太刀風五郎が袋の中から、巨大な空気流を発生させる！
「ク……！」
それは四人のまとっている防具がズタズタに引き裂かれるほど鋭利な刃であった
雷電「うおおお、起きろ落雷！」
続いて雷電五郎が背負っている連太鼓をバチで打ち鳴らすと、巨大な落雷が四人の頭上に降りそそいだ
「がはっ……何だこいつら、＜春菜＞！」

一瞬にして半壊状態に追い込まれた壬生川一族は、必死に治癒術を連打する

「鬼と化した神は、これほどまで……しかし、それが何だと言うの！」

翠は流星参号の散弾をばら撒くと、すぐに国友銃に持ち替え、反動を押さえ込みながら引き金を引く

太刀「届かぬ届かぬわ！」

気流を発生させ鉛玉を逸らす太刀風五郎を無視して、すぐさま雷電五郎に狙いを移す

流星参号に火薬を詰め、押し込み、無数の球を充填して、角度を調節し狙いをつける、計1．8秒の早業にこの世で彼女以上の大筒士はいない

「流星参号！」

雷電「連太鼓、轟け轟けェ！」

雷電五郎はその散弾に稲妻をぶつけ、空中で相殺した

太刀「ガハハハ、どおれカマイタチ！」

太刀風五郎が空気を溜めて、一気に吐き出す！

「ぬあああああああ！」

巨大な真空刃を、力斗は両腕を交差して受け止めると、太刀風五郎がほほうと声を上げた

その隙をついて道明が跳躍した、薙刀が光る

「双光（そうこう）、蘭斬（らんざん）！」

二本の軌跡が太刀風五郎の身体に裂傷を負わせたが、着地した道明に雷電五郎が待ち構えていた

雷電「やるなお前！」

雷電五郎の豪腕から振るわれた鋭い爪が、道明を鎧ごと切り裂いた

貞光が援護する流星参号の散弾も気にせず、雷電五郎はそのまま道明を蹴り飛ばす

「がは……」

「……おのれ、国友銃！」
翠の速射が雷電五郎の頭にめり込み、さすがに鬼はよろめいた
「てっめぇぇぇぇ、唸れ俺の刀！　巻き起これ愛の刃！」
掲げられた力斗の刀に闘気が集まり膨れ上がる、力斗は力士水によって高められた渾身の一撃を放った
「真空源太斬（しんくうげんたざん）！」
力斗の奥義が、雷電五郎を見事にカチ割った

雷電「ぐあああああああああああああ！」

肩から背にかけて、雷電五郎の身体がずれて、黒い影となって消えてゆく
その場に刀を突いて、力斗はかすれ声でつぶやいた
「どうだ……道明、お前の仇は討ったぜ……」
「死んでねえよ……」
頭から血を流しながらも、道明はよろよろと立ち上がる

「……どうかしら、後はあなた一人よ」

落雷によって両腕がほぼ焼け焦げている翠が凛と強がるが、あまりの暴風により弾丸が届かないのは承知の上だった
太刀「ガハハハハ、面白かったぞ、小僧たち！　まさか雷電五郎が負けるとは、だらしない！」
太刀風五郎が紙切れのように揉みくちゃになった貞光を、三人の足元に放る
「……貞光！」

太刀「次に会うときを楽しみにしているぞ！」

「バカ野郎、てめぇ、まだ終わって、」

太刀風五郎は風袋を開き、烈気流を発生させた

太刀「ガハハハハ……！」

三個の竜巻が壬生川家の希望と共に、立ち続けていた三人を吹き飛ばした

後には、太刀風五郎が九重楼の最上階で笑い続けていた

風神と雷神の猛攻に回復が間に合わなかった一族は、こうして敗退した

＜壬生川家＞

壬生川家の屋敷に戻った時、意識は朦朧としていて、どこをどう歩いて帰ってきたのかも覚えていなかった

次に気がついたときにあったのは、動かない身体とイツ花（いつか）の泣きそうな顔だった

「……ここは、そう、家なのね」

起き上がろうとするが、どうしても手足が言うことを聞かなかった

「……大怪我を負ってしまったとは、早く……大筒の点検をしなきゃ」

殊更頑丈に作っているとは言え、あれほどの死闘にヒビくらい入っているかもしれない

だが、どうしても身動きは取れなかった

「……何かしら、布団が……重いのかしらね……」
翠が薄く目を開けると、イツ花が近くに座っていた
「イツ花さん、悪いけれど……わたくしの流星参号を、持ってきて」
「……当主さま」
「……何かしら、イツ花さん……」
イツ花は、完全に炭化してしまった翠の真っ黒な手に、自分の手のひらを添えた

「……お別れの時が、近いようです」

翠はその言葉をゆっくりと噛み砕く
視界はぼやけて、つい笑みがこぼれた

「なによ……それ」
何度も身を起こそうとするが、首すら動かない

「当主さま、無茶です！」
「……ふざけないでよ、あの妖狐を打ち倒したわたくしたちが、どうして、九重楼なんかで……ふざけないでよ！」

翠が血を吐くように叫ぶ

「わたくしは、天才なのに……そんな、こんなことって！　まだ、何も為していないのに、当主になったばかりだというのに！」

彼女の目の前が真っ赤に染まる
脳裏に、屋敷に来たばかりの時の、以蔵の顔が蘇った
伽子（とぎこ）の笑顔がいつでも輝いていたこと
大筒を作っていた時、英雄に髪を切ってもらったこと

伽子と戦い、そして何度も何度も負けたこと

「何よこれ……何で、何でこんなの、今思い出すの……！？」
記憶が巡る
グルグルと
当主・伽子を傍で支え続けた日々
力斗がやってきて、道明がやってきて、貞光が生まれて、賑やかになった壬生川家

「やめてよ、こんなの……まだ、わたくしには……！」
翠が懇願しても、走馬灯は回り続ける
伽子と三ツ髪の激闘、そして眠るように死んだ伽子
去ってゆく英雄の背中

誰にも出来なかったことを成し遂げようとしたのに、結局自分はただの凡人だったのか
天才は伽子であり、自分ではなかったのか

そこにはかつての自信に満ちた武人の面影はなく、押しつぶされそうな恐怖に助けを求める少女があった

「いやあ、誰か、助けて、伽子さん……！」

何も音が聞こえない、あれほど騒がしかった壬生川の屋敷に、声ひとつない
あまりの恐怖に、唇が震えた

「みんな、黙り込んじゃって……まるで、わたくしが……もうすぐ死ぬみたいじゃないの……！」

人気のない河原で、伽子が、英雄が、力斗が、道明が、貞光が、イツ花が、みんなが目を伏せていた
その中で、翠がひとりだけ声を枯らして、叫んでいた

「バカ言わないでよ……わたくしには、やりたいことが、まだ山ほど、あるのに……！」

壬生川　翠　享年1才3ヶ月

うなされるようにして苦しんでいた翠が、やがて息を引き取る
その最期の言葉は「助けて」だったという

彼女の遺言状により、八代目当主は後継者・道明に譲り渡された
葬儀の場にて、貞光でも泣くのだと、道明は霧に包まれたような頭で思った

第七話－６　「悲鳴」　１０２３年１０月後編（後書き）

元服→道明　出陣・九重楼（翠・力斗・道明・貞光）
出奔・英雄　戦死・翠

第七話外伝後編　「英雄」　１０２３年１０月下旬

これは、壬生川（みぶがわ）家では語られることのなかった物語
時は英雄が出奔する一ヶ月前にさかのぼる

九月に入って、鬼たちの襲来は、一旦は鳴りを潜めているようだった
だがそれは武士が鬼を駆逐したのではない
大敵が組織的な動きを見せ、近いうちに一斉攻撃があるのだろうと、都ではもっぱらの噂であった

お昼時、英雄（ひでお）は都の外れを歩いていた

その際に荷車に家財道具を積んで、京を離れる親子連れとすれ違う、母が台車を引き、咳をしている娘が荷車に乗り、兄が後ろから車を押していた
親戚のところにでも引っ越すのだろうか
知人がいる人は良い、と英雄は思う
花街に入り、笑顔で通りすがる遊行女婦たちに手を振る

「きゃー、英虎さまー！」
「私たちのとこに遊びに来てくださーい！」

身寄りのない若い女婦たちが英雄の元に駆け寄る

「ハハ、春になったらね、ボクの発情期はまだだからさ」
危険な笑顔で少女たちの頭を撫でる
ここに残っているのは、もうどこにも行けない、この都以外では暮らせない人たちだ

「こんにちは、今ヒマかい？」
英雄はいつも通り、ひいきにしている娘のいる宿を取る
「あらァ英虎様、例え葬式の最中でも、京都一の武人に声を掛けられたら暇になるサ」
「そりゃ光栄だなぁ」
ウフフと笑うお鶏（とり）に連れられて、英雄は宿の二階へと上がる
「今日は何の御用ー？」
お鶏が障子を開けて、英雄が布団がひとつだけ敷いてある部屋に入る

悠々と英雄は布団に倒れこんだ
「あー疲れた、気持ちいー……」
家のものと同じだ、太陽の匂いが染み込んでいる

「もう、何しに来たのよォ」
お鶏が英雄の脇や肩やら、頭やらを突つく
「あー……ボクお昼寝するから、傍にいてくれれば、それで……」
「膝枕？」
「ううん……良い……それより、お鶏ちゃんも一緒におやすみよ」
寝転がっている英雄が子供のような笑みで、お鶏の袖を引く
「もう……いっつもそればっかりなんだから……」
「きょうは、芦刈（あしかり）ちゃんはー？」
幼児のように母親の着物の掴んで離さない英雄が、お鶏の顔を覗き込む

お鶏は急に目つきを鋭くして、顔を渋くした
「ああ、あのアマ、旅に出たわよ」
「旅に！？」
「渡り巫女の集団にくっついて、大宰府参りに行くんだってサ、あの顔で巫女かい……ひとりで逃げやがって……！」
「お鶏ちゃん、恐い顔恐い」
お鶏の持っている櫛が、手の中でバキバキと音を立てて割れる
「わたしは結局、どこにもいけないし、この花街で骨を埋めるんだい」
拗ねたようにつぶやいて、お鶏は英雄の腕を取る
「わたしには、英虎様がいるもんネェ」
「ハハ、ボクの身体はキミらのものだからね……」
一組の男女が、布団の上に固まってうずくまる

昼間でも騒がしいはずの花街に、風の音が通り過ぎた
すると、すぐに英雄の腕に絡み付いていたお鶏が、寝息を立てる

「……」
ぼんやりとした目で英雄はお鶏を眺める
普段はこれほど真剣に女性を見つめたことはない
お鶏の目の下には、白粉で隠しきれないほどのクマが出来ていた
花街にはまだ小さな女の子も沢山いる、働ける成人は女でも貴重なのだ
お鶏の口が、小さく動いた

「英虎……さま……」

英雄はお鶏の手を握る

「……あなたがいないと……この都は、もう……」

やがて、英雄も目を閉じて、静かに眠りについた
数時間の睡眠を取って、英雄は花街の皆に手を振り、再び京の都の見回りへと戻った

翌月、英雄は壬生川の家を出た

＜１０月下旬＞

京都守護団の仮本陣となっている寝所に武人が集結する

「それじゃみんな、きょうも張り切っていこうね」
ここ一ヶ月間ずっと花街に寝泊りを続けている英雄が、皆に笑顔を振りまく
なるべく考えないようにはしていたが、こうして見ると、京都守護団の人数も一時期の半分以下にまで減っている
田舎に帰るもの、志半ばにして命を落とすもの……いまだ残っているのは選りすぐり、精鋭の兵たちだ
「オウ、きょうの持ち場は一条から四条の西区か」
「ウチは左京、高陽院付近だね」
立命館三本槍（りつめいかんさんぼんやり）とぽんと自警団の隊長たちが地図を受け取る

必然的に、残されたものへと負担は大きくなっていた
それでも誰も不平も不満も言わずに黙々と警備を続けてくれる

ボクも頑張ろう、と英雄がうなずくと、その背中がバシッと叩かれた

「英虎ぁ、お前きょうは休め」
京阪傭兵組合（けいはんようへいくみあい）の組長が、英雄の肩に手を回してくる
「えー、そんな顔色悪いかなぁ？」
いつも懐に携帯している鏡を開いて、頬を引っ張る英雄
「もう1才6ヶ月だろ、聞いてンぞ、お前昼間は色街で引っ越しの手伝いまでしてンだろ、鬼殺せよ、鬼、ったく」
いやぁ、と英雄は照れたように笑みを浮かべる
「女の子に泣きつかれると、断りきれなくて……ああ、ボクってばダメ人間……あの子たちの笑顔が何よりも報酬……」
「さ、行くか」
芝居がかった口調で天井を仰ぐ英雄を置いて、京阪傭兵組合の長が皆を引っ張ってゆく

ぞろぞろと出ていく武士たちに押しとどめられて、英雄は口を尖らせてその場に腰を下ろす
「だいじょーぶだって言っているのになぁ」
そう言いながらも、ここ2ヶ月は散発的な襲来しかなかったため、気が緩んでいたのかもしれない
絹を裂くような悲鳴に、うつらうつら揺れていた英雄は飛び起き、側に立てかけておいた薙刀を掴む
「なに、鬼？……南西南、八条の方角！」
慣れ親しんだ京都の地図が英雄の脳裏に浮かび、その中で声の発生源が思い当たる
英雄は青くなりながら、足を速めた

「……花街の、方向じゃないか」
京の各地に、火の手が上がっていた

壬生川家の少年は、鬼たちを斬り伏せながら、真っ直ぐに花街へと向かう
血煙を巻き上げながら英雄が花街の入り口にたどり着く

「みんな！」
ニ匹の紅こべ大将を薙ぎ払い、英雄は猛進する
花街の一角から火の手が上がり、泣き叫ぶ声、崩れ落ちた柱は黒く焼け焦げていた
これまでにない大規模な鬼の襲来に、英雄は驚愕する
「どうして今更何だ、朱点童子……！」
本日英雄が見回りを休んだため、京阪傭兵組合は二倍の持ち場を受け持っていて、ここまで手が伸びない
他の守護団はそれどころか、自分たちの周辺で手一杯だろう
英雄の来訪に、遊行女婦たちがざわめく
「英坊！　来てくれたのかい！」
「世界の果てからだって飛んでくるさ、みんなは無事かい？　逃げ遅れた子は？」
「それは大丈夫だけど……クソッ、あたしたちの家が！」
子供たちが泣き、皆が英雄にすがり付く

これから冬が来る
風雨を凌げる場所がなくなれば、備蓄していた食糧が燃え尽きてしまえば、生き残ることは出来ない

英雄は下唇を噛んで、叫ぶ
「おい鬼！　女の子の家に手を出したら、その百倍を斬り殺してやるよ！　自慢の〇〇なんてなます裂きにして賽の河原にバラ撒いて

やるぞ！　おいコラ、出て来い赤ヅラ！」
指を鳴らして、＜雷電＞を天に撃ち出し、その注意を惹きつける
その効果は十分だった

まず花街の一軒を潰しながら、巨大な数珠を身体に巻いた緑鬼・
黒ズズ大将が現れた

「……ホントに出てきちゃった、みんなはどこかに隠れてて、木賊
ちゃんみんなをお願い」
「ああ……生きるんだよ、坊」
「うん、だから待っててね」
ヒシと薙刀を構える
衰えたとは言え、それでも自分なら黒ズズの一匹を下せるだろう
という自信があった
通路の端から一匹、花街の入り口からニ匹、合計四匹の黒ズズ大
将が現れるまでは

「……待ち合わせ、生まれて初めていけないかも」
体長3メートルほどの鬼が、英雄を取り囲むようににじり寄って
くる
京都守護団の面々が束になっても敵わないほどの軍勢に、英雄は
観念した

「やれやれ……壬生川家でゴロゴロしてた方が、楽だったよコレ」
己に＜萌子＞と＜お甲＞を掛けて、英雄は覚悟を決める
牙を剥いて、壬生川の虎は吠えた

「色男の死出の道……女の子を連れるわけには行かず、ひとりじゃ
寂しいからね、せめてキミら、鬼に参列してもらおうかな！」
絶望的な戦力差を前に、英雄はたったひとりで立ち向かう

屋敷の屋根に座って騒乱を眺めていた朱点童子（しゅてんどうじ）は、微笑みを噛み殺した

「……アハハ」

朱点童子の見ている前、英雄はその命を散らせていった

～～

そして、長い夜が明ける

崩壊を免れた花街の入り口に、少年がひとり、倒れていた

大小悪鬼たちの屍に埋もれながら、折れた薙刀を掴んで、伏せっていた

「やぁ……こんなことなら……家なんて、出なきゃ良かったよ……

今まで、要領よく生きてきたのになぁ……」

もう技力も空っぽだ、泉源氏ひとつ唱えられやしない

英雄は沈みゆく意識の中で、壬生川家を思った

「……ま、翠ちゃんに、道明……巧く生きるんだよ、ボクには無理だったみたいだけど……」

英雄は最期の力を振り絞って、空を仰いだ
しかし、その瞳はもう青空を映してはくれなかった

「……今日は日が暮れるのが　早いなあ……もう真っ暗だ……」

壬生川　英雄　享年1才6ヶ月

英雄の死後、京の都にはパタリと鬼が姿を見せなくなり、人はそれを壬生川家に生きた英雄の英霊が守護してくれるのだと語った
何人かの太夫が英雄の後を追って服毒自殺や入水を計ったというが、それはまた別のお話

第八話－1　「壊物」　1023年11月（前書き）

力斗　1才
道明　9ヶ月
貞光　6ヶ月

第八話－1　「壊物」　1023年11月

八代目当主を道明(みちあき)が継いだことに対して、貞光(さだみつ)は何も言わなかったが、力斗(りきと)は翌日に道明に真剣を持ち出し、物言いを申しだててきた

「道明……！」
「……力斗、何をしに」
「すまねぇが、代々幸家(こうけ)を受け継いできた者として、お前に当主を任せるわけにはいかねえ……！」
「任せるわけには行かないと言われても、先生のお言葉だしな……ってお い！」

力斗が真剣を振りかざし、道明に斬りかかる

「俺も残念だがここで死ね道明！」
「お前自分が何をやっているか分かってるのか！？」
「うるせえええ、次の当主は俺が受け継ぐ！　幸家の恥さらしになるわけにはいかねえんだああ！」

ザッシュンザッシュンと振るわれる真剣を、身をよじって避ける道明

「お前、本気で僕を殺す気か！」
「問答無用だ！！」

モノが片っ端から切り裂かれていく中、居間にイツ(いつか)花の明るい声

が響く

「力斗さまぁ、お子様がいらっしゃいましたよォ」
「おおおお来たかあああああああ」

真剣を放り投げて、力斗がイツ花に満面の笑みで駆け寄る

「蝶子の子供……男でも女でも、俺は最高に愛してやるんだ、待ってろ蝶子おおお！」
「さ、それでは儀礼の間に行きましょうォ」
「おう！　名前は息子なら蝶子、娘なら蝶子だな！」

ひとり残された道明は、その場にへたり込む
「……助かった……？」

バカに助かったというべきか、
それとも、バカに殺されるところだったというべきか

＜力斗の子供＞

○「初めまして、お父さん」
その部屋にちょこんと座っていたのは、緑の髪を黄色の飾り紐で結った子供だった

「無作法者ですが、よ、よろしくお願いします」
ぺこりと頭を垂れる
そのそぶりを見て、イツ花が微笑んだ
「あらァ、可愛らしい女のお子様ですネェ」

名前はどうしましょうか？とイツ花が振り向くと、ぷるぷると震えていた力斗が叫ぶ
「まさに蝶子に瓜二つ！」
その大声に娘がヒッと怯える

「ゼンッゼン似てませんよ！？」
「蝶子に似た茶色い目！　蝶子に似た緑色の髪！　蝶子に似た健康的な肌！」
イツ花の後ろに隠れて涙目で震えている娘を見て、力斗ははたと気づく
「蝶子に似た――あれ、この子……俺様にどこも、似ていない……？」
「さ、名前をお付けしましょうか！」

翠以来の壬生川家の女性として、力斗の娘は柚子と名づけられた

「は、はぃ、よろしくお願いしますっ」
微妙に目を赤くして、柚子は再三頭を下げる
「職業は、男なら剣士にしようと思っていたのだが」
力斗は幾分か落ち着いて、柚子の向かいに腰を下ろす
嬉しいが困ったような顔で、力斗は唸った

「女の子か、じゃあ職業は姫だな」

「姫！？」
「対外交渉に出したりはせず、家で大事に育てるぜ柚！　お前は花だ、咲き誇って幸せに咲き誇るんだ！」
しかしそんな父親に、顔をうつむかせてつぶやく柚姫
「でも、わたしも戦いたい……」

「駄目だ」
「わたしも、みんなの、お役に立ちたいのに……」
柚子の泣き出しそうな顔に、力斗はうっと引く
「剣士なら……」
「ま、前に出るから駄目だ駄目だ、却下だ」
「槍使い……」
「女の子が槍なんて、もっての他だ！　卑猥な！」

途端に頑固オヤジへと変身する

「じゃ、じゃあ薙刀士や弓使いなら、後ろで……」
「それはうちの家系じゃない、だからな、女の子が戦うなんて諦めろ柚」
「うぅ……これじゃ、まるで囚われの……」
落ち込む柚子にイツ花が助け舟を出す
「まぁまぁここは、“姫”とか職業ありませんから、何かに決めてもらわないとォ」
「大筒士は……」
「言語道断」
「やっぱりぃ……最後に残っているのは、え、と……こわしや？」

そんなのあったか？　と力斗が聞き返す

「壊し屋ぁ？　何だそれ、何すんだイツ花？」
「えーとですね、何やら、色々と壊すみたいですよ」
「土木建築系か……？」
ふむ、と力斗は思いなおす
「まぁでも、刃物とか危ねえし、この槌とかなら、まだ安心かもな……ほほう、衣装もこざっぱりとして良いな」

壊し屋の指南書をさらっと眺めて、よしと頷く

「柚はきょうから壊し屋だ！　合わせて壊し姫だ、お前は壊し姫になるんだ！」

「ど、どういうこと……？」

「そうと決まったら俺様について来い柚！　目指すからには世界一の壊し姫だ！」

「は、はぃ……お父さん、がんばります（；д；）」

力斗に手を引かれて、柚子が来た早々道場へと連れられてゆく

その後ろ姿を見送って、イツ花はつぶやく

「……さァ、わたしは交神（こうしん）の儀の準備をしなきゃ」

自然と合掌のポーズを柚子の方に向けていたのを気づいて、イツ花は慌てて立ち上がった

＜交神の儀＞

イツ花が遅れて部屋に入ると、道明が先に待って、神様一覧表を開いていた

「遅れましたァ」

「それは良いけれど……力斗の子、娘さんだったってな」

「え、ええ」

「……大変だな」

「……そう、みたいですネェ」

ふたりは自然と道場の方を向く、先ほどから力斗の叫び声のようなものが聞こえていた

「まぁ、力斗も丸くなったもんだな」
「せめて男の子だったら、あんなに親バカにはならなかったでしょうに……」
それはそうと、道明は一覧表をイツ花に返す
わけも分からず受け取るイツ花
「僕は神様に恋愛感情を抱く気はないし、イツ花が決めてくれ」
「あらァ、クールですねぇ」
受け取った一覧表を抱いて、イツ花がうなずく
「あるいは、道明さまは一途なんですねぇ……」
「どういうことか、分かりかねるな……」

「よーしじゃあ、この方をお呼びいたしますネ、それでは頑張ってくださーい！」
早々に退出してゆくイツ花
道明の元に、何やら白い塊が落下してきて、身をよじって避ける
「な、何だ!?」
家にいたというのに、一日に二度も死にかけた
白い煙を上げてむっくりと起き上がったそれは、ニッコリと微笑む

苗場の白雪姫「いってみよ～、ぽよよ～ん♪」

（地蔵じゃなかったのか）
天井から降りてきた女神に向かって、道明は不謹慎にもそう思った

第八話－1　「壊物」　１０２３年１１月（後書き）

交神の儀・道明×苗場ノ白雪姫
初見・柚子→壊し屋　訓練・力斗→柚子

第八話－2　「鏡返」　1023年12月（前書き）

力斗　1才1ヶ月
道明　10ヶ月
貞光　7ヶ月
柚子　1ヶ月

第八話－2　「鏡返」　１０２３年１２月

＜庭＞

雪が降り積もる壬生川家の庭に、力斗の掛け声が響いていた
遠目に、真冬だというのに上半身裸で娘を指導している力斗が見える、風邪でも引かないのだろうか

「おらー、そこでハンマーを持ち上げろー！」
「は、はぃ……んんん……ッ」
顔を真っ赤にして冗談ほどの大きさがある大槌を、柚子は一生懸命持ち上げる
「おお、上がった上がった！　やったな柚子、これでどんな家の壁もブレイクだぜ！　壊し屋の丹田法ってのはすげえな！」
力斗が柚子の背中をポンと叩いた拍子、柚子が「あ」と短く声を上げる

庭石ほどの大槌が柚子の手から滑り、力斗の足に落下した

「ああっ、ごめんなさいごめんなさい（；д；）！」
カニの殻をへし折るような音が屋敷中に響き、力斗の顔色が真っ青になる
「ふ、フ、ふん、こんなの何でもねえけどな！」
大槌を足の上に乗っけたまま、力斗は腕組みをする
「え、お、お父さんすごい……」
思わず後ずさりする柚子
「あったりまえよ！　女の柚子とは鍛え方が違うからな、ガハハ…

…まぁ、そろそろどけてくれないか」
「あ、は、はぃ」
柚子が大槌の柄を掴んでわずかに持ち上げ、そしてまた手を滑らせた
「あ」
雪粉が舞った
「あｑすぇｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ;@:！！」
何やら言葉では表せない叫びが発せられる
「あああ今持ち上げますから、今持ち上げますからぁ！」
道明（みちあき）はその光景を居間で眺めながら、茶をすすった
「……あの子は、使い物になるんだろうか」
壊し屋という職業が、イマイチ分からない道明だった
＜出陣＞
「それじゃあ、２３年最後の出陣だ」
薙刀を担いだ道明が先頭に立つ
「柚、お父さん頑張ってくるからな！」
「は、はぃ、頑張って……ください……」
肩で息をする柚子の手をぎゅうと握る力斗、その足に巻かれた包帯が真新しい
「まぁ生きて戻ってきたいよな」
「今月はどこ行くんだ？　三ツ髪か、やっぱり三ツ髪か」
「ひとりで行け、僕はまだ命が惜しい」

道明はそう言って、そうだな、とつぶやく

「……唯一中ボスを撃破していないのが親王鎮魂墓（しんのうちんこんぼ）なんだよな、今回動けるのは三人だし、そこに向かおうかとな」

「あの土偶どもか、良いぜ」

１０ヶ月前に挑んで敗退した経験を持つ力斗が、思い出して拳を固める

「四身一体の強化術を得意とする鬼ですな……クク、長期戦は不利、力士水を使い、一気に押し切るのが要かと」

「……貞光（さだみつ）がいきなり喋りだしても、もう驚かなくなってきたな」

口元を押さえて驚愕している柚子を横目に、道明は達観する

こうして、壬生川家の男たちは、親王鎮魂墓へと足を進めた

＜親王鎮魂墓＞

「うお、男三人きりか！」

薄暗い墓を歩きながら、先頭の力斗がワクワクと振り返った

「……まぁ、翠（みどり）先生もいなくなったからね、今は柚子くんが姫扱いされているけれど」

壁に手を当てながら道明が力斗に、はよ歩けと先を促す

「手ェ出すなよ」

「君を義父さんなんて、死んでも呼びたくないからな」

なにやら盛り上がっている力斗に、ため息をつく道明

「クク……でもああいう子は、可愛らしいですな」

力斗と道明が吹き出した
会話に参加してきた貞光を、一斉に見る
「おま、貞光!?」
「……貞光、捉えどころのない男だとは思っていたが」
「てめ、この、俺の娘をそんな目で、」
ここで死人を出すわけにはいかない、と力斗を羽交い絞めにする
道明
「待て、殺すな、すぐ抜くな!」
「ががが」
力斗は呻きながら、道明ごと引っ張って貞光に迫る
「貞光も、あまり迂闊なことを言うなよ! 力斗がショック死するだろ!」
「私が“可愛らしい”というのは、迂闊なのですな……」
自嘲するようにつぶやく
「てっきり、貞光は大筒にしか興味がないと思っていたのに」
貞光は悠々と先頭を進みながら、こちらの姿を見つけて襲い掛かる鬼に、大筒を放つ
「銃器も女性も同じこと……クク、言うことを聞くのが一番です、使い勝手が良ければなお良」
「ああ……それなら何だか納得だ」
「俺ぁ納得できねえ! つか使い勝手って何だこのエロ野郎!」
仲が良いのか悪いのか分からない三人は、こうして古墳の奥へと進軍してゆく
〜〜

炎時計の火も残りひとつとなった時、三人は四面の階段へ乗り込んだ

四方向から迫る人間大の土偶を、壬生川一族が迎え撃つ
「あの頃はまだガキだったが……俺ぁ同じ相手に二度も負けねえぜ！」
力斗が刀を抜き、威勢良く土偶器に斬りかかる

すると動かなかった一匹の土偶の目を模した線が緑色に鈍く輝き、鬼たちの体がみるみる硬化してゆく
「1ターン目からいきなり＜石猿＞……クク、嫌らしいですな」
「力斗、援護する！」
力士水を振り掛けられた道明が、力斗の背を守ると、そこに三器の土偶が迫り来る
正面から来た土偶を押し返し、力斗が吼える
「オラァァァ！」

重量級の体当たりを正面から受け止め、蹴りで間合いを離して、強烈な一太刀を浴びせると土偶の腕が藁のように吹き飛ぶ
挟み込むように力斗を押しつぶそうと、左右から突撃してくる土偶の一器に、貞光が国友銃を撃ち込む

「……土を焼き固めたものが、鉛に果たして敵いますかな」
その一撃が土偶の頭を木っ端に砕いた
道明は力斗をかばいつつ、薙刀を縦に構える
「翠先生……先生から教えてもらった極意、試させていただきます」
弓の弦のように張り詰められた集中力が、ぷつんと途切れ、翠の言葉が蘇る

……弾丸それのみに威力はなく、火薬の推進力により初めて威力が生じるという考え方
土偶は火薬、己は弾丸、柔は剛を制す、道明は地面を強く踏み、薙刀を振るった
突撃してきた土偶が、道明に重なる
「……臥流薙刀術奥義・鏡返(かがみがえ)し！」

交叉の瞬間、土偶の突進は威力を失い、真一文字に薙刀の痕が刻み込まれた
「出来た、出来たぞ、薙刀の返し技！」
道明は土偶の攻撃を次々と返してゆき、やがて先に耐え切れなくなった土偶が頭部を砕かれ停止した
「うおお、熱いな道明！」
力斗が叫びながら、＜春菜＞を唱え掛けていた残る一匹を斬り払う
「ほほう……さすがは、八代目当主……」
「しかも健康度を使わないんだな、鏡返し」
道明が自分の手を見つめて、拳を握る

当主が倒れるとその月の探索は終了となってしまう出陣において、相手の物理攻撃を自動的に打ち払い反撃するこの技は、まさに薙刀術奥義に相応しい
「すげえな、“道明鏡返し”！」
「その名で呼ぶなっ」
創始者の名前を頭につけられて、思わず道明は叫んだ

こうして三人は、伽子(とぎこ)の代で果たせなかった土偶器討伐を見事成功させ、２３年の出陣を無事終了させたのであった

第八話－２　「鏡返」　１０２３年１２月（後書き）

出陣・親王鎮魂墓（力斗・道明・貞光）

第八話－3　「小町」　１０２４年1月前編（前書き）

力斗　１才2ヶ月

道明　１１ヶ月

貞光　８ヶ月

柚子　２ヶ月

第八話－3　「小町」　１０２４年1月前編

柚子(ゆずこ)はいつもの言いつけ通り、冷え切った道場で素振りを続けていた
ふと、人の気配を感じて戸口を見ると、そこには道明(みちあき)が巾着の中身を摘みながら立っていた

「あ、当主……さま」

何だか冷たい印象を受ける長身の道明を見て、少し緊張する
「続けてて構わないよ、壊し屋ってどんな事をするのか、少し興味があるんだ僕」
「……はぁ、あの、何を食べているんですか」
「ああこれ、若葉の丸薬さ、苦いんだけどな、その代わり頭が冴えてくるんだよ、食べる？」
「あ、いえ……結構、です……」
見られていると何だかやりづらくて仕方ない

柚子はイツ花(いつか)が作ってくれた巨大な木槌を肩に担いで、えい、と振り下ろす、それの繰り返しだ

「……本当に重そうだな、貸してくれないか」
「あ、はぃ」
近寄ってきた道明が、巾着を床に置いて木槌を受け取る
柚子の見ている前で腕に力を込めて持ち上げ、道明は歯を食いしばった
「重ッ……何だこれ！」

「あの、確か……米俵ふたつ分だったような……あれ、三つ分だったかな……」
「凄いな……威力は恐ろしそうだけど、でも、本当に役立つのかこれ」
道明は何度か大槌を振ってみるが、どうしても緩慢な動作になってしまう
「伽子（とぎこ）さんも身の丈以上の大槍を抱えて戦場を駆け回っていたんだし、孫娘に当たる柚子ちゃんもその素質はあるんだろうが……」
「あの、何でしょう……？」

道明は柚子に大槌を返し、顎に手を当てる

「……君は今月初陣するのだけど、どうしてそんなに何かに怯えているのだ」
「え……あの」
柚子は思わず頬に手を当てる
「そんな風に……見えてますか？」
「何だか怖がられているようだよ」
「いえ、そんな……あの、わたしってドジですから、その、知らず知らずに失礼をしちゃったりしないかな、とか……」

大槌を持ったままモジモジと俯く柚子

「……何だか君は、僕が初めて見るタイプの女性だな」
「えっ、それは……？」
伽子や翠（みどり）、イツ花の顔を思い浮かべて、道明は頭を振る
「いや何でもない、気にしない、素振りはもう終わりそう？」
柚子は道明に言われて、指折り数える
「あれ、今、３２０だっけ……あ、お父さんから言われていたのは、３００回だった」

「そうか、じゃあ居間に行って、イツ花さんにお茶でも淹れてもらおうか、僕も喉が渇いた」

道明が柚子の手を引っ張る

「あ、」

柚子が思わず手を離して、ん？　とこちらを振り向く道明に頭を下げた

「あ、あの、わたし木槌を部屋に置いてきて、くるので、あの……お先に、失礼します！」

「あ、ああ」

そうして、柚子は木槌を抱えて、たったと走り去ってゆく

「……意外と足は速いんだな」

若葉の丸薬をポリポリとかじりながら、残された道明がそう呟いた

＜壬生川（みぶがわ）家・居間＞

“壬生川家の元旦は絶対に賑やかにすること”

急遽居間に飾られている掛け軸を見て、先に到着した柚子は首をひねった

「これは、何でしょぅ……」

そこにパタパタと慌しく廊下を往復していたイツ花が、あら柚子さまと声をかけてくる

「あ……イツ花お姉さん」

「それはですネェ、先々代の当主さま……柚子さまのお婆様が書き残したものなんですよォ」

「わたしの、おばあさま……」
ふわふわ、としわくちゃのお婆ちゃんの曲がった背中が浮かぶ
「いやいや、若いままだから」
そんな妄想を振り払うように、道明が居間に現れる
「あ……当主さま、明けましておめでとうございます」
「まあさっきも会ったけど、そうだな、おめでとう」

ぺこりと頭を下げる少女を一瞥して、道明はイツ花に尋ねる

「イツ花さん、力斗（りきと）と貞光（さだみつ）の姿が見えないスけれど、知っていますか？」
「ああ、あのおふたりなら、ちょっと京にお買い物を頼んだんですよォ」
「……また、変な取り合わせだ」
しかし変人は変人同士で、気が合うのかもしれない
道明は話が一生平行線を辿るであろう力斗と貞光を思い、ううむと唸る

「あ、それじゃあ、おふたりには違うことをお頼みしましょ、そうですね、じゃあスコップで雪を一箇所に集めてください！」
「何スか」
「えっえっ」
イツ花は戸惑うふたりに、無理矢理大きめのスコップを手渡す
「さ、頑張ってー！」

道明と柚子は、顔を見合わせる

「温まりにきたはずなのにな……」
「頑張り、ましょうかぁ……」
基本的に根がマジメなふたりは、庭に積もっている雪をスコップ

で掻き分けていく

しばらく経って、そこへ騒がしい声が聞こえてきた

「うおおーさみいいい、帰ってきたぞー！」

「……」

唇を青くさせてガクガク震えている力斗と、何だか冬山遭難者のような表情で貞光が手荷物を抱えて、居間に入ってくる

「京都中を走り回ったが、きょうはお祭りなのか？　すげえ騒がしかったぞ」

「そうなんですよォ」

力斗と貞光から大量の紙包みを受け取って、イツ花がにんまりと微笑む

「今月は“餅と白雪祭り”が催されているんです！　壬生川家の宗教部門への投資が実ったんですよォ！」

「もちとしらゆきまつりぃ？」

イツ花が紙包みを解くと、京都中から集まった菓子や甘味が、色鮮やかに居間の机に並べられ、貞光が持ってきた包みからは大量のおはぎが現れた

「この祭りでは、家内安全、商売繁盛、夫婦円満、合格祈願、恋愛成就などなど、まとめてお頼みしても大丈夫！」

「そりゃ大奮発だな！」

「ええ……なにしろ“餅と白雪祭り”の祭神は餅乃花大吉さまと、苗場ノ白雪姫さまのおふた方ですもの！」

スコップを出来た小山に突き立てて、全身に雪を被った道明がつぶやく

「苗場ノ白雪姫……」

「あ、当主さまの交神相手、でした、よね……？」
「ああ、抱き心地がまるで、真綿のようだった」
「えっ、あ、いや、あのわたしは……雪かきしなきゃ……」
何やら慌てた柚子が遠のき、道明は思わず咳き込む
「いや、そういう意味じゃ……そ、そうだ、今月僕の子供が来るんだった」
道明は雪を払って、居間に上がる
「ああ、駄目ですよォ、ちゃんと大きな雪だるま作らないと！　ご利益が当たりませんよ！」
「こ、この集めた雪は、そのためだったんですか……」

一部屋分くらいのかまくらなら作れそうな雪塊を見て、柚子が額の汗を拭う

「いや雪だるまは良いんだけど、イツ花さん、僕の家の子供は……？」
「ああ、そろそろ来るお時間なんですけどネェ」
イツ花が辺りをきょろきょろ見回すと、その途端、居間に影が飛び込んできた
悲鳴を上げて仰け反るイツ花を押し退けて、嬉しそうな顔で赤髪の子供が、居間の上のお菓子をぐわしと掴む

○「きゃー、おいしそー！」

その背をひょいと捕まえて、小さな手からおはぎを叩き落すのは力斗
「ぐわ」
「何だこいつ……おいガキ、どこから入った？」
「……クク」
貞光の意味ありげな含み笑いを見て、道明がふと思い当たる

力斗が捕まえている子供、その少女の赤い髪、肌は白いが赤い瞳、火の属性が強く現れている証拠だ

「……君は、もしかして、苗場ノ白雪姫さんの？」

「あ！　あなたがあたいのパパさんね！」

「パパ……まぁ、違いないが」

力斗に首根っこを掴まれて、ぶらーんぶらんと揺れながら少女はやったぁと笑う

「ママの言ってた通り、男前だ！　やったわ大金星！」

「……そうか、君が、か」

道明は何やら複雑な表情を浮かべる

家族全員揃った居間で、少女は瑞穂（みずほ）と名づけられた

臥家の薙刀士に、鈴鹿以来久しぶりとなる女性だ

瑞穂と力斗が並んで席に付き、しゃもじをマイク代わりにイツ花が叫んだ

「それでは毎年一月恒例、壬生川家伝統の大食い大会です！」

「嘘だ！」

イツ花のナレーションに異議を申し立てるのは壬生川家当主

「そんなの毎年やってないだろう！？」

「やってましたよォ、おはぎ早食い大会、ちなみに現在の壬生川家最高記録は１０２０年ののの香さま、記録は４３個です！」

「そんな昔からやってたのか！？」

驚愕する道明の横、瑞穂と力斗が視線で火花を散らす

「うふふふ、あたいの大好物だわ、おはぎ、おはぎ、ママと一緒に

どれだけ食べたか……！」
「はん、所詮は女子供、この俺の早食いに着いてこれるか！」
京都で買い漁ってきたおはぎをどさどさと積むと、何だか黒い巨塔が完成する
大きなお皿をふたりの目の前に置き、イツ花が笑顔で手を叩く
「それではバーンとォ！　はじめー！」

イツ花が合図した瞬間、ものすごい勢いで瑞穂と力斗がおはぎを口に詰め込む

「いやァ、これはちょっとレベルが高いですネェ」
毎年眺めてきた（らしい）イツ花がその熱戦を誉める
「しかし見物ですな……甘いものが大好物で、しかしまだ体が小さい瑞穂殿……それに、何でもよく食べるが、あまり甘いものが好きではない力斗殿……これはもつれますぞ」
「お前はいつから解説者に！」
道明がひとり、この異常な事態にツッコミを頑張る

一方外では、柚子がひとり、一生懸命雪だるまを製作していた
「うぅ……寒いぃ……手が冷たいです……うぅ（；д；）」
涙も凍ってしまいそうな風が、柚子に吹きつけてゆく

大食い大会の勝敗結果は、すぐに出た
「……ぐ、もう、食えねえ……」
おはぎを手にして、蒼白の表情で机に倒れこむ力斗
「うふふ、やったーやったー！　見てたパパ？　あたいやったよ！」
その一方、まだまだイケるとばかりにVサインを突き出す瑞穂、
その口元を慌てて拭いて、微笑む

「これからよろしくね、皆様ぁ！　うふふ」
あどけないながらも、幼い色気の漂うその笑みに、道明は冷や汗を流した
……普通の子で良かったのだが、と

この日、瑞穂は新記録おはぎ５７個の記録を打ち立て、訪れたばかりの壬生川家に、新たな歴史を刻んだのであった

第八話－４　「攻玉」　１０２４年１月後編

＜出陣＞

寒空の下、壬生川家が集合する

「さて、今月の出陣場所なのだが」

吹きつける吹雪に身を擦りながら、道明が皆の顔を眺めると、力斗と貞光が同時に手を挙げた

「決まってらあ！」

「決まってますな……クク」

いつもの不敵な表情も、歯の根を鳴らしていると間抜けで仕方がない

「……まぁ、そうか」

ひとり、きょとんと首を傾げる柚子を除き、満場一致で出陣場所は決まった

＜紅蓮の祠＞

「あったけえええええ！」

溶岩から噴き出される熱気を浴びて、水を得た魚のように力斗が潤いだす

真冬にも関係なく、洞窟の中は変わらずの火炎が渦巻いていた

「かーっ、こんな厚着なんてしてられねえな！　気合入るぜえええ

え！」

「脱ぐな脱ぐな……」

防寒具をあちらこちらに脱ぎ捨てる父親を見て、帰りはどうするんだろう、と人知れず思う柚子

彼女が背負っているのは、父親が京から取り寄せた“緋色の金槌”だ

その名の通り、槌の面部分が金で覆われて、全体部分は退魔で名高いエンジュの木で製作、さらに達人の描いた朱墨文様で霊的加護まで高められた一級品の大槌である

父親から説明されたが半分も分からなかった柚子は、何だかすごいトンカチなんだなぁ、と納得していた

「しかも今回は宝具“時登りの笛”まで用意したからな！」

「……それは確か、時間を巻き戻す、というあの、胡散臭い奴か」

「ガハハ、これで今月は柚子のために、一ヶ月めいっぱい戦えるってもんだ！」

力斗が持っていた角笛のような笛を眺めて、道明が腕を組む

「しかし……時が遡るとは、何て面妖な」

悩む道明を置いて、力斗が柚子の手を引いて奥へと進んでゆく

その横を貞光が通りすがりに、ささやく

「ロウソクの火も……吹いてやれば、再び勢いを増しましょうぞ……火時計とて同じ事……クク」

「いやそれと時間が逆行するのとどんな関係が！」

言うべきことは言ったとばかりに、貞光が含み笑いながら先に行く

道明は首を傾げながらも、そんな三人の後を小走りで追っていった

～～

一同は、あっという間に鳴神小太郎の待つ炎舞廊まで足を進める
「え、えええぃ！　やっ、ああん」
ブンブンブンと大槌を振り回すが、柚子は見事に空振りを連発する
「は、話に聞いてはいたが……これほどとは、壊し屋」
「……三回連続ミス、しましたな今……クク」

柚子は半べそをかきながら、鳴神小太郎に向かってなおも大槌を振るい続ける
「うっうっ、どうしてですかぁぁぁ（；д；）」

小太郎「ええい！」

いい加減鬱陶しくなったのか、小太郎が腕の一振りで火竜を呼び寄せ、柚子の半身を焼き払う
「うっうぅ……」
その様子を眺めて、父親が激怒する
「てめえええええ俺様の柚子に！！」
太刀を抜き放ち、一瞬にして小太郎の胴を斬りおとす
その様子を遠くから眺めていた道明と貞光は、思わず顔に手を当てた
「あーあ……柚姫の実戦修行が」
「クク……大変な爺やを持ったものですな……」

黒い霧に包まれて蒸発してゆく鳴神小太郎の前、力斗が柚子に一生懸命＜お零＞を唱えていた
確かに、姫とお付きの侍、という表現がピッタリ当てはまるふたりだった

～～

「え、えっと……＜春菜＞！」

奥に進み、紅こべ大将や天魔大将たちと戦いを繰り広げる皆に、柚子が治癒術を唱える

「何だああの＜雷獅子＞って術は、反則じゃねえのか！　いってて」

全体に３００前後という、＜真名姫＞に勝るとも劣らぬ稲妻の術を一介の鬼に放たれ、危うく全滅しかけたところだった

「出来る限り＜くらら＞で背後を取り、１ターンで決着をつけるしかないな……」

道明も同様にボロボロになっていた

周囲がぐつぐつと煮えたぎる紅蓮の祠では、あまり悠長に休んでいるわけにもいかず、手早く回復して、一同は次の戦闘へと移る

先制したことによって、テンポ良く天魔大将を倒せるようになってきたところで、ふと道明が気づいた

「おや……そういえば柚子ちゃん」

「み……あ、は、はぃ！？」

初陣の疲労でついうとうとしていた柚子が、慌てて顔を上げる

「君は、もう＜春菜＞が使えるのか……」

「あ、あの……はい」

何だか叱られた犬のように耳を垂れる柚子に、貞光が意味ありげに笑う

「たった２ヶ月で使いこなすとは……どうやら、素質は伽子殿似の

ようですな」
「テメエ！　どうせ俺は＜春菜＞も＜円子＞も使えねえよ！」
ククと笑う貞光を真剣振りかざして追い回す力斗
「……あと少し休んだら、再び戦いだ、君は休んでおくんだよ」
「は、はぃ……」
奇声を上げる力斗と貞光が暴れまわる横、道明と柚子は束の間の休息を得るのであった

＜赤年の間＞

計１１の炎の時を戦い抜いた一族は、奥まった空洞にたどり着いた
「ここが奥かぁ？」
「そう、だな……匂いを感じるよ」
道明が目の奥を刺激するような、そんな既視感に襲われる

それは今まで何度となく体験した、強烈な憎悪を抱いて堕ちたものたちの発する、禍々しい瘴気だ、感覚が鋭敏な道明にはそれが感じ取れた
溶岩流が流れる広間に石柱が立ち並び、その中央に、一匹の白い影が落ちていた

白い影はもぞりと起き上がり、一声鳴く
○「にゃぁ～ご……」

不用意に近寄ろうとした力斗を手で制し、道明は鋭く睨みつけた
「お前が、この祠の主か」

道明の詰問に、白い影は反転し、ひとりの女性へと変化した
「……ふふ、ウフフフ」
燃える赤髪を長く伸ばした、白い小袖姿の美しい女性だが、その耳は人間のものではなく、猫の姿を模していた
いつしか見た女狐と同様の類である、化け猫変化だ
猫娘「……ウフフフ、知っているかい、あたしには九つも命があるんだよ」
「いや……初めて聞いたが」
火の玉をまとった猫娘は、ぺろりと爪を舐める
猫娘「腹いせに屋敷に火をつけてやっただけなのに……畜生に変えられて、地上にドン！よ……ウフフ、火、綺麗だったわぁ……何もかも灰に、灰になぁれ……」
その迫力に、柚子が泣き出しそうな表情で力斗の陰に隠れる
猫娘「九回の命を使い切れば、天界に戻れるらしいんだけど……ウフフ、ウフフ……一回目は子供に川へ投げ込まれ、石つぶての的にされて死んだの……息の根止めた人がいっとーしょー……ウフフ」
（アイツも元は神なのか……何て根性悪そうな）
（……何だかあの子の笑顔が、貞光に被る）
年長者ふたりが前列に立ち、思い思いにささやく
猫娘「二回目は魚屋に捕まって、油をかけられ、火だるまにされたっけ……いわしニ尾ぽっちだったのに……」

「か、かわいそう……（；д；）」
柚子の涙腺が潤む
猫娘「……あんがと、あんた、優しい子ね……」
そんな心優しい柚子に、猫娘は微笑んだ矢先、いーっと牙を剥く
猫娘「なんて言うとでも思ったのかいこのうすらバカ！　善人は早死にしろ！　この赤猫お夏もう御免だよ！」
「性根腐ってるなお前」
力斗が冷や汗を流しながら、つぶやく
猫娘「この先何度もあんな痛い目に遭うくらいなら、おもしろくもない天界になんか戻れなくたっていいサ！　こ、ここだって、何かシミを数えたり、白骨死体の頭蓋骨を眺めて生前はどんなヤツだったのかなーとか妄想して時間潰せるし！」
やけっぱちでまくし立てる娘が手を払い、火炎の中から数匹の黒猫を召喚する、どれも凶悪そうな面構えをしている筋金入りの化け猫揃いだ
強烈な殺気を感じ、壬生川一族は各々武器を構える
赤猫お夏「それに……この世でたたりまくってやるほうがずっと楽しいし、あたしの性分に合ってるよ！」
お夏が放った黒猫が炎をまとい、道明に向かって飛びかかり、激

突して爆ぜる
「……＜夏狂乱＞、なのかこれ」
１５４のダメージを受けて、道明がつぶやく
「何だ、大したことはねえな！」
飛来する黒猫を剣撃で叩き落としつつ、力斗がお夏に斬りかかる
が、与えられるダメージは二桁

「大したことがないのはどっちかな、そんなナマクラじゃあたしに
傷なんてつけられないサ！」
「じゃあ試してみるか！」
力斗が力士水を頭から被る
「くぅぅ、効くぜえええ！」
「な、にゃぁぁ！？」
特攻してきた力斗の刀を爪で受け止め、お夏は夏狂乱の猫を力斗
にけしかけるが、力斗も深追いはせずにすぐに離れて、猫共を斬り
裂く

「……いよいよ力斗も、戦い方が手馴れてきたな」
そう言って道明も皆に力士水を振りまく
「うー！　うらめしやー！」
叫びながらお夏は、後ろに控えていた柚子に食らいつくが、その
前に力斗が躍り出た
「おおっと、俺様の娘は連れていかせねえぜ！」
「お前は邪魔にゃあああ！」
力斗の力士水で倍化された剣閃に押されて、お夏が後方に飛びのく

「お前らの家にも火を点けてやるううう」
その瞬間、お夏の猫目が輝いた
前列に立っていた力斗と柚子が途端に、棒立ちになってしまう
「な」

お夏がニタリと笑う
「さぁお前ら……家族同士で髪の毛をむしりあうが良いサ！」
一列に効果がある混乱の術だ、正気を失った目で力斗と柚子がこちらに向き直る

ぶつぶつ呟いていた貞光が、印を結び終えて叫んだ
「＜仙酔酒＞！」
力斗や柚子を覆っていた緑色の膜が泡のように弾け、やがてふたりはすぐに意識を取り戻した
お夏が地団駄を踏んで悔しがるが、貞光の表情は晴れない
「……しかしこれで、力士水の効力も無効となってしまったわけですな」
「決定打とならなくても、いずれは決着がつくだろう」
見れば、最初に与えた力斗の傷は深く、お夏の息が切れ始めている

お夏はしつこく混乱の術を多用するが、間髪入れずに＜仙酔酒＞を唱え、こちらに被害は出ず、お夏の傷が徐々に積もってゆく
貞光の大筒、力斗の刀が二桁のダメージを与え続ける
道明の双光蘭斬（そうこうらんざん）がお夏を薙ぎ、そろそろ撃破できるだろうか、と思った頃だった

「ああもう、痛い痛いこのオタンコナス……ぺろ、ぺろ……」
お夏が腕についた裂傷を舐める
最初は何をしているのかと思っていたが、次の瞬間にはその傷口が完治していたのだ
道明が呆気に取られている隙に、お夏は自らの身体を舐めて、あっという間に体力を全回復させてしまった
「な……やりやがった、このアマ」
「ウフフフ……これであたしは全快、さあお前たちがどこまで持つかにゃぁぁ」

力士水はもう切れてしまっているため、一撃１００がやっとの力斗たちでは、お夏の２０００もの体力を削りきれない
さらに言えば、このまま技力が切れてしまえば、混乱を治せずに一家は総崩れとなってしまうだろう
実に嬉しそうに笑うお夏に、力斗が怒鳴った

「は、勝ち誇んなよ！　こっちにはまだ秘密兵器が残っているんだぜ！」
力斗は威勢良くタンカを切って、娘に目を向ける
「柚、お前がやるんだ」
「え、え、ふぇえええ！」
夏狂乱黒猫を必死で避けていた柚子が、思わず悲鳴を上げた
「そ、そんなっ、わたしは……そんな、何の役にも……」
「柚の大槌なら、あんな猫なんて当たりゃ一ひねりよ……道明、貞光！　柚子に＜萌子＞を集中させやがれ！」

力斗の指示が飛び、貞光はすぐさま詠唱に入る

「……信じても良いんだな？」
「しくじったら、柚子の次に大事な右腕をくれてやらあ」
「……いらないよ、＜萌子＞！」

ふたりの攻撃力倍化の術が柚子に折り重なってゆく

「そ、そんな……わた、わたし……」
「信じろ、柚子」
力斗は怯える柚子をかばいながら、優しく言い聞かせた
「で、でも！　そんな、来たばっかりで、信じろって、言われても……」

「自分の血を信じろ」
柚子の身体に、次々と＜萌子＞が重ねがけられる
「血……って、」
「お前の中には、壬生川が歩んできた歴史が、全て刻まれているんだ！　出来ないはずがねえんだよ、血が覚えているはずだぜ！」
「わた、わたしの……血、が……」

柚子が両手で大槌を握り締める
道明と貞光の想いが、父の想いが、柚子の中に伝わってゆく

「う、うっ……柚子、参ります……（ｉДｉ）」
「こんな顔が良いだけの小娘に何が出来るにゃー！」
お夏は夏狂乱を力斗に浴びせて、自らの爪で柚子を引き裂く
「うっ、痛い……痛いぃぃ……」
二度三度引き裂くが、柚子は倒れない

柚子は泣きべそをかきながら、大槌を思いっきり振り上げた

「……悶（もん）・絶（ぜつ）・圧（あつ）ぅ！」
強烈な打撃音が、赤年の間に響く
緋色の大槌がお夏の右腕に命中し、その腕が膨らませすぎた水風船のように破裂した
「にゃ、にゃあああああ！？」
一撃で８６４のダメージを受け、お夏は慌てて傷をなめる
その痛そうな光景を見て、柚子がまたしゃくり上げた

「てめ、やすやすと回復させるかあああああ！」
力斗がその傷なめを阻もうと、夏狂乱を浴びながら、お夏に挑みかかる
「さ、さすがに焦ったサー……」

お夏が気を持ち直した時には、失われたはずの右腕までも復元が完了していた
それでも道明と貞光は、力斗の言葉を信じ、柚子に＜萌子＞を唱え続ける
「可能性があるとすれば、今はこれだけだ……！」
やがて柚子に対する倍化の術が強化限界に達し、その機を逃さずお夏が叫んだ
「ほーら混乱ー！」
緑色の目に正気を奪われたのは、後列にいた道明と貞光だった
思わず＜仙酔酒＞を唱えようとする柚子を、力斗が押しとどめた
今ステータスを戻したら、これまでの＜萌子＞分の技力が消えてなくなってしまう、それにもう何度もチャンスはないのだ
「……柚子、もう一回だ！」
「え、えっ……でも、当主さまと、貞光さん、が……」
「そのまま死ぬが良いサ、ウフフ……」
ヘラヘラと笑うお夏に、力斗がついにキレた
「もう一回っつってんだあああああああああ！」
「は、はいっ！（；д；）」
喉が張り裂けるような力斗の命令に突き動かされて、柚子は再び大槌を構えた
力斗は道明と貞光をけん制しつつも、柚子に向かってさらに＜萌子＞を唱えた
「さ、さっきはビビったけど、所詮小娘の力じゃあたしは倒せないにゃ！」

ニタリと笑うお夏に、柚子は大槌を振り上げた
「見れば、すっごい顔色が悪くなっているし、そんな極意、連発は出来ないんでしょ、せいぜいあと一発ってとこね！」

壊し屋奥義、悶絶圧は確かに健康度を２４から２９も消費する大技中の大技であった
それを知ってか知らずか、柚子は泣きながら、限界まで強化された大槌を振るう

「悶絶圧ぅぅぅぅ！」
泣きながら叫んだ柚子の大槌が、お夏の右腕に的中して、白い閃光が弾けた

２０４１ダメージ、二発目の奥義はお夏の全身を完全粉砕した

空中にお夏の灰が舞い散り、どこかから声が響く

赤猫お夏「どうせあたしゃ死なないんだ、アハハハハ……ハァ……」

放心した顔で、地面にへたり込んでいる柚子を、皆が取り囲む
「すごいな……アレが、壊し屋の技なのか」
「……クク、まさに壊しましたな」
柚子からの返事はない
「いやあすげえ、さすが俺様の娘だ！　お前は宝物よ、ガハハ！」

力斗がバンバンと柚子の背中を叩く

やがて、家に帰る頃になって気がついた柚子は、誰にも聞こえないように、ぽつりと呟いた

「……お夏さんより、お、お父さんが、怖かった……」

こうして壬生川家は、紅蓮の祠のボスを見事撃破したのであった

第八話－４　「攻玉」　１０２４年１月後編（後書き）

元服→貞光　出陣・紅蓮の祠（力斗・道明・貞光・柚子）
初見・瑞穂→薙刀士

第八話－5　「厳父」　1024年2月（前書き）

力斗　1才3ヶ月

道明　1才
貞光　9ヶ月
柚子　3ヶ月

瑞穂　1ヶ月

第八話－5　「厳父」　1024年2月

＜壬生川（みぶがわ）家・居間＞

居間のコタツに並んで座り、道明（みちあき）は瑞穂（みずほ）に術書の読み取りを教えている最中であった

「つまり、一滴流して花の為、二滴零して蝶の為……で、意識を眉間に集中させてだな」
「ぐがー……」

道明は突っ伏して寝る瑞穂の頬を、無造作に引っ張る

「いひゃ、いひゃいい」
「……で、みつるその雨嬉しかし、正五芒星を水の星から順に結び、＜お雫＞だ」
「おひひゃ、おひひゃってふぁあ」

何を言っているの分からないので、仕方なくパッと手を離すと、瑞穂が赤くなってヒリヒリと痛む頬を一生懸命さする

「もォ、おたふくになったらどうするの……あたい、せっかく綺麗に生まれたのに」
（そうなっても、自業自得じゃないのか）
自分が教えている真横で寝るなんて、一体今の若い娘は、という気持ちが沸いてくる

しかし一方で、先月作った巨大な雪だるま残った庭に目を向けると、そこには力斗(りきと)が柚子(ゆずこ)に相変わらず稽古をつけていた

「じゃあ次は、俺の投げる雪玉を大槌で打ち返すんだ！」
「こ、これは……い、一体ぃ、何の訓練なんですか……（；д；）」
泣きながらも、文句も言わずにこなしている
とそこで、道明はついつい自分の娘と柚子を比べてしまっている
自分に気づき、軽く反省する

「いけないな……君は君、あの子はあの子だったよな」
「くかー……」
「……」
よく食ってよく寝る、それ自体は大いに結構な事だとは認める

「だからと言ってな、やるべき事があるなら、まずそちらに集中するべきだと、僕は思うんだ、義務を果たしてこその自由じゃないのだろうか」
「いひゃ、いひゃいってふぁあああ！」
道明は瑞穂の頬を再び引っ張りながら、このまま力を込めて、さっそく＜お雫＞を自分自身の身体で覚えさせるのも悪くないかな、と思いつつあった

はたして今月中までに、薙刀術の修行まで終わらせられるかどうか、母譲りのマイペースな娘に、道明の憂慮は募っていくばかりであった

＜交神(こうしん)の儀＞

多少間隔が早いと思わないでもないが、春の選考試合を目前に控えているため、予定を繰り上げ今月は貞光（さだみつ）の交神の儀となった

イツ花（いつか）はニッコリと、貞光に神様一覧表を差し出す

「いやァでも、ビックリしましたよォ」

「何がですかな」

メニューを受け取り、貞光は思案しながら頁をめくる

「力斗さまが、俺ァ貞光の野郎、てっきり愛する大筒と交神するのかと思ってたぜガハハ、とか何とかおっしゃられまして、そんなわけないじゃないですかネェ？」

「クク……」

さすがに貞光も微笑を漏らす

「……なるほど、その手が」

「ありませんからそんな手！」

目を伏せて考え出した貞光に、イツ花が念のため突っ込む

「しかし、技術師としては……己の最高傑作が何よりも愛しいと思うのは、仕方のないこと……クク」

「だからって、何で交わるなんて発想が！」

「まあ、そのためにはまず……人型の大筒を作らねばなりませんな……クク」

「貞光さま、段々と変な方向にいってますから、あのォ」

さすがは、鳴かぬなら鳴かせてみせるタイプのお人だ、とイツ花は冷や汗を流す

そのまま貞光のペースにハマってしまう前に、イツ花はせっつく

「さ、ささ、お相手はどなたにしましょうかッ！」
「そうでしたな……ふむう」
ぺらぺらと紙をめくり、貞光は唸る
「どなたも、同じような顔に見えますな」
この人はひょっとして、人間じゃなくて人型の大筒なんだろうか、
とイツ花は一瞬だけ思った
貞光の身長が変わらなければ、半分以上信じてしまっていたかも
しれない、いや、それすらも翠（みどり）の作った進化する完成品なのかも……

「それでは……遺伝子の方から、決めさせていただきました」
「は、はいッ！」
良からぬ妄想に耽っていたイツ花が、その言葉で現実に戻る
「お相手は、月寒お涼で……クク」
「あ、は、はい、わっかりましたァ！」
イツ花はそそくさと離れ、神卸しの舞を手早く踊る

やがて2月の雪が部屋の中に散り、青白い肌の氷像にも似た美し
い女神が降臨する
雪の女神は貞光の肩を撫で、微笑を浮かべた

月寒お涼「頑張ってね……坊や」

こうして冬が過ぎ、若葉萌える春へと舞台は移ろいゆくのだった

第八話－５　「厳父」　１０２４年２月（後書き）

交神の儀・貞光×月寒お涼　訓練・道明→瑞穂

第八話－６　「騒動」　１０２４年３月（前書き）

力斗　１才４ヶ月

道明　１才１ヶ月

貞光　１０ヶ月

柚子　４ヶ月

瑞穂　２ヶ月

第八話－６　「騒動」　１０２４年３月

＜壬生川家・居間＞

お昼の食事を終え、うららかな日差しの下、柚子は午後一のお勉強に取り掛かっていた

道明は京に、力斗はイツ花の手伝いで蔵の掃除、貞光が何をしているかは柚子は分からない

瑞穂はというと、道明がいないので堂々と術の勉強をサボり、コタツにもたれて昼寝をしていた

隣で幸せそうに眠る妹を、ぼんやり眺める柚子

あとで怒られるのが分かっているのに、何でこんなにおおっぴらに眠れるんだろう、と小心者の柚子は思う

途端、瑞穂が起き上がった

びくっと震える柚子に、据わった目を向ける瑞穂

「……あと少しで、食べれたのに」

「わた、わたしに言われても……」

瑞穂はため息をはいた後に、寝ぼけ眼で柚子を見た

「柚子、ってさ」

「う、うん？」

「美味しそうな名前、よね」

瑞穂の目が光った、ような気がした

～～

「ただいま……って、何」
帰ってきた早々自分の背に隠れてくる柚子に、振り返って冷たい目を向ける道明
「瑞穂、さん、が……寝ぼけて（；д；）」
「はぁ」
またうちの娘か、と思ってしまった

屋敷のどこかから、果物ー！という叫びが聞こえてきたり
見れば、柚子の二の腕辺りに、くっきりと真新しい歯形が残っていた

（食べられそうになったのか……）
道明の後ろで子犬のように震える柚子は、力斗の娘で、先々月あの赤猫お夏を一撃で粉砕した壊し屋と同一人物にはとても見えない
「君も、なんと言うか……瑞穂は二ヶ月年下なのだから、ハッキリ言ってやったらどうなんだ」
「た、食べないでください、って……？」
「……まあ、別に言葉は何でも良いのだけど、ようは自分から意思を主張しないと、一生このまま瑞穂にかじられ続けるぞ」
「そ、それは……いやです、けど……うぅ」
すぐに涙を浮かべる柚子に、人知れずため息をつく

この性格は、幼い頃から父親に厳しくしつけられ、必要以上に過保護に育てられた産物だろう、と道明は思う

「確かに、柚姫だな……まあ僕が付いているから、居間に戻ろう、玄関で立ち話もなんだしな」
「は、はぃ……」

しっかりと道明の裾を握りながら、後ろをひょこひょこ付いてくる

カルガモの親子か、と口走りそうになり、ついツッコミの血が騒いでしまった

居間に戻る途中、裏庭の蔵の片づけを終えて一っ風呂浴びてきた力斗が、上半身裸に袴を履いて縁側で涼んでいた

「おー、道明帰ってきたか」

「今月は春の選考試合だから、また出向くことになるけれどね」

障子から居間を覗くが、そこに瑞穂の姿は無かった

道明は首をひねりながら、柚子を力斗に返し、自分の部屋を見てきたが瑞穂はいなかった

「おかしいな」

一仕事終えた顔をして、柚子の淹れた茶をすすっていた力斗の元に戻り、尋ねてみる

「力斗、瑞穂を見なかったかい」

「ああ、あの能天気娘なら」

力斗が指差した方に目を向けると、庭の大木にさるぐつわをくわえさせられてむがーむがー唸っている瑞穂が、縛り付けられていた

「おおおおい瑞穂!?」

「うちの柚を喰らおうとしていたんでな、一仕事しちまったぜ……」

「2ヶ月才の人の娘に縛りプレイするとは、お前、この親馬鹿バカめっ」

柚子も気がつかなかったのか、急須を傾けたままポカーンと固まっていた

慌てて道明は庭に降り、瑞穂の縄を解く

「大丈夫か瑞穂……？」
「ま、まだあたいには、早いよこんなハードな……」
錯乱しているようだ
「お前力斗、やりすぎだぞこれは！」
瑞穂を抱いて力斗に怒鳴る道明に、力斗が逆切れする
「うるせえ！　その女、薙刀持って“柚食べたい、柚食べたい”ってつぶやいてたんだぞ！　そら縛るだろ！」
「縛るなよお前！」
「俺の宝物に手を出すやつぁ、男も女子供も容赦あしねえ！　最近何か懐かれてるお前も同罪だ、死ね道明！」
「話が変な方向に逸れているぞ！」

力斗に真剣で斬りかかられ、道明は常に携帯している短刀で受け止める

「お前ちょっとこれ、僕も怒って良い場面だよな……お前んとこの教育方針は、前から気に食わなかったんだよ、柚子くんが可哀想だ！」
「テメエんとこみてえに、放任よりはよっぽどマシだぜ！」
斬り合う父親たちを前にして、柚子がどうしようどうしようと大慌てする
すると、洗濯物を抱えたイツ花が丁度通りかかり、柚子はまるで女神のような表情で見つめる
「あ、あの、イツ花さんっ」

勇気を出して大声で呼ぶが、イツ花はアハハと笑うばかり

「大丈夫ですよぉ、そういうこともありますって、怪我しても治癒の術がありますし」
「そ、そういうことって、真剣で斬り合っているんですよ！？（；

д;）」
打刀を振るう力斗に押されつつも、鉄鞘と小刀の二刀流で受け流し、道明は炎の術で反撃を狙う

道明の放った＜花乱火＞が、力斗に弾き返され、先ほど瑞穂を縛っていた木が大炎上した

「うあああああ、これってひょっとしてあたいのせいなの！？」
「ど、どうしよう、どうしよ……そ、そうだっ」
柚子はふたりのケンカを止めるべく、心当たりを見つけて、走り出す

少し離れた場所にある貞光の部屋の障子を開き、中に呼びかける
「さ、さだみつさんっ」
開いた瞬間、中から大小の木箱がどさどさどさと倒れてきて、柚子は思わず仰け反る
「え、え、あの、さだみつさぁん！？」
物が高く積まれているため薄暗く、中がよく見えない
どこにいるのかと一生懸命呼びかけるが、一向に返事が無い

「……クク、柚子殿、いかがしましたかな」
「ひっ！」
突然首元から声をかけられて、身をすくめて、振り返る
「少し蔵を見てきたのですが……その様子ですと、大変な事があったようですな」
「あ、あの、お父さんと道明さんが！」
説明する間もなく、柚子は貞光の手を引っ張って、居間に連れてゆく
庭では引き続いて、力斗と道明が乾いた音を打ち鳴らしながら、戦い続けていた

「ははぁ……なるほど」
居間では、瑞穂がその様子を前に、何も出来ずにおろおろしていた
「さだみつさんなら、止められ、止められますか！？」
「とは頼まれましても、おふぃーりあは部屋に置きっぱなしですしな」
「あ、あの、わたし取ってきますからっ、」
「まあ……無くても、あの場所なら……クク」

瑞穂と柚子が貞光の意味深な笑みに、少しだけおののく

「かつて……壬生川家に、ひとりの罠師がおりました……その者は京の四面に配置された門の三つを、怪異には不可視にさせ、残る一つの門……朱雀門に、大量の罠を仕込み、多くの鬼を爆死させたと言われております……クク」

何やら物騒な物語を語りながら、貞光は嬉しそうに笑う

「わたしもその人の居た時代に生まれたかったのですが……まあそれは良いとしまして、その方はどうやら、壬生川屋敷のあちこちで試作品として、罠を配置していたらしいのですよ……そのほとんどは、今は眠っておりますがね、こう、刺激を与えてやれば……」

貞光は庭に右手を当てて、左手の指を唇に添え、つぶやく

「＜地鳴り＞……」
地面に微弱な振動が伝わると同時に、地中の中からカチッという音が庭に響いた

「……その方が書いた、“蘭（らん）罠全集”が残ってないかと倉庫の整理を頼んだのですが、なかったようですな……クク」

庭の中央でツバ競り合いを繰り広げていた力斗と道明の足元に、閃光が瞬いた
「ん……！？」
「な……？」

次の瞬間、壬生川家を揺るがすような爆発が起こり、庭の近くの道場が倒壊した

～～

春の選考試合に英雄の息子が出場するということで、京都中から見物に来るものがあったが……当の道明は全身に包帯を巻き、愛想ひとつない仏頂面で黙々と戦い続けていた

出場した一族は男性二人、少女二人であり、前回猛威を振るった男剣士の姿は無く、変わりに壊し屋の少女がぎこちないながらも、健闘していた

その後、
壬生川一族は春の選考試合を三戦連続一本勝ちで優勝し、なぜか京都中の大工に声を掛けて、足早に帰還していったという
何だか一族の仲が悪そうに見えていたと、京の都で噂になり、帝の暗殺から政権交代までを狙っているのではないかと、しばらく影ながら囁かれていたらしい

第八話－６　「騒動」　１０２４年３月（後書き）

出陣・選考試合（道明・貞光・柚子・瑞穂）

第八話－７　「蛍火」　１０２４年４月前編（前書き）

力斗　１才５ヶ月

道明　１才２ヶ月

貞光　１１ヶ月

柚子　５ヶ月

瑞穂　３ヶ月

第八話－７　「蛍火」　１０２４年４月前編

＜壬生川（みぶがわ）家・居間＞

壬生川の居間に、ふてくされたように二人の男が向かい合って、杯を交わしていた

上半身裸で爆撃を受けたため、選考試合に出れなかった力斗（りきと）と、選考試合には出れたが、全身の火傷のために無様な姿をさらしてしまった道明（みちあき）だ

「ったく……貞光（さだみつ）のヤロウ……」

「いや前回のアレは、５００％力斗が悪かったけどな」

「何でだよ！　俺ぁ教育に熱心で、だからついカッとなっちまうだけだろ！」

力斗が苛立だしげに机を叩くのを、道明が呆れたように眺める

「人間が出来ていないのに、どうやって人に何かを教えることが出来るんだ……」

「はン、それをテメエが言うかよ」

「……何だって？」

道明が急須から乱暴に杯に茶をそそぎ、据わった目で聞き返す

ふたりが持っているのは朱の杯だが、飲み物はほうじ茶であった、一口含むと芳醇な香りが鼻腔に広がる

「テメエだって、瑞穂（みずほ）に何を言えば良いか分からないから、何もしないだけだろ、一生懸命な分、俺のがマシだぜ」
「そんなことは……そう、だな、あるかもしれないな」

図星を当てられて、道明の気勢が削がれる
時々力斗が鋭い洞察力を発揮するのは、やはり代々当主を担ってきた幸家（こうけ）の血筋だからなのだろう

「親がいなくても子は育つ、というのは……こちらの勝手な言い分だろうな、やはり先生は強かった」
道明が庭に目を向けると、そこには力斗の母親や道明の父親がかつて作った溜め池があり、その付近ではイツ花（いつか）に作ってもらった水着を着た柚子と瑞穂が、水遊びに熱中していた

瑞穂が嫌がる柚子に水を浴びせたり、嫌がる柚子を無理矢理沈めたり、まだ水が冷たい時期だろうと道明は思うのだが、若い少女たちはそんなことはお構いなしなようだ

「ああ、そうか」
「……あン？」
春の風に乗った桜の花びらが壬生川家の居間に舞い込んできて、道明は目を細める
「いや……あのふたりは、まだ“夏”を経験していないんだな……ってな」
「……ああ、そうだな」

柚子は11月、瑞穂は1月生まれだ、それなら春の風はさぞかし暖かいだろう
何となく白けてしまい、ふたりは姿勢を崩す

「なんというか……こんな時に、母親がいればな、って思ってしまうよ」
道明の脳裏に、ませた農民の娘が思い浮かぶ、そういえば最近見かけていない
「ホントな……弱音を吐くわけじゃあねえけど、蝶子がいりゃ、俺だってもっと優しくしてやるんだけどよ……」
ため息をつく力斗の気持ちは、今の道明には良く分かる
「俺ぁ、もう1才5ヶ月だぜ……柚子が心配で、心配で、どうしようもねえよ」
愛しているからこそ、ひとりで生きられるように、過剰に押し付けてしまうこともあるだろう
「……そうだな、柚子くんは特に、頼りないな」
瑞穂にからかわれ、う～と唸っている柚子を助けないのは、そういうことだったのかと合点する

「……なぁ、変なことを言うけどよ」
「力斗が変なのは、今更、だろ」
と、振り向く道明に、力斗が妙な真剣な目をして、見つめ返してきた
「……笑うなよ」
「聞かないと分からないだろう、どうした?」

「……俺が先に死んだら……柚子の事、お前に頼んでも良いか?」
いくつかの桜の花びらが、道明と力斗の前をよぎる

「ああ、お前の居ない後も、僕は八代目当主としての命を全うする」
「……いや、そういうことじゃあねえんだ、なんだ、その」
珍しく歯切れが悪い
「何だよ、力斗らしくもない」
柚子と瑞穂の声が聞こえ、力斗は道明から目を逸らし、娘たちを

眺めながら、ぽつりとつぶやいた

「……柚子を、嫁に貰ってくれねえかな、なんてよ」

「は！？」

道明のあまりの大声に、少女たちが何事かとこちらに目を向ける

力斗が赤面し、咳払いをしながら去っても、しばらく道明は固まったままであった

＜貞光の子供＞

儀礼の間で座して待つ貞光に、イツ花が喜び勇んで駆け寄る

「おめでとうございます！　新しい子供を預かってきました！」

「クク……楽しみですな」

心の底から嬉しそうにほくそえむ貞光に、イツ花は一瞬だけたじろぐ

本当にこの人に子供を渡して平気だろうか、改造されないだろうか、と不安になる

「だ、大丈夫ですよね、貞光さまも壬生川の子！」

「……クク」

口の端を釣り上げる

「え、えっと……膝がしらとくるぶしの形がまん丸でかわいい、もちろん女のお子様です！」

「ほほう……面白い」

「お、面白っ、それではお呼び出しますね！」
イツ花が声をかけると、静かに障子が開き、小さな女の子が現れた
長い金髪を結んで、二本の三つ編みにした、焼けた肌の少女だ
顔立ちこそ貞光に似ているが、全体的な雰囲気は穏やかで、その顔は優しげな微笑を浮かべていた
「名は……そうですな、“ほたる”　暗闇を照らす、一匹の蛍と名づけましょう」
小さな女の子は、まさに清楚に微笑む
「はい、お父様……ほたるは、この命で壬生川家の明日を灯しましょう……」
よく似た顔の親子を見つめて、イツ花はぽかーんと口を開けたままつぶやく
「うわァ……何だか貞光さまから、不穏な言動と、怪しい口調と、気味の悪い笑顔と、引きこもり特性と、マッドサイエンティスト気質を引いたような方ですネェ……」
何が残るのだろう
貞光は上品に座るほたるに、三枚の指南書を差し出す
「クク、この中から自分のやりたい職業を、選ぶが良い……」
ほたるが受け取ったそれらは、剣士、槍使い、弓使いの三種であった
「薙刀士と壊し屋は、もうおりますからな……それ以外から、ですな」

「お父様の職業は……大筒士、でしたよね？」
「クク……そうですな」
ほたるが裏表を眺めるが、三枚の指南書は三枚のままだ
無垢な瞳に尋ねられて、貞光は不敵な笑みで答える
「まあ、大筒士は……もう、よろしいでしょう」
「何故……ですの？」
「……クク」
貞光が静かに笑う

イツ花とほたるにじっと見つめられ、ゆっくりと口を開いた
「……ついに、大筒士の指南書を、紛失してしまいましてな」
「部屋が汚すぎですよ！！」

うーんと下唇に手を当て、ほたるはそれでは、と弓使いの指南書を手に取る
「それでは……私は、弓使いを志します、あまり前に出るような性格ではありませんので……」
「クク、良いでしょう」
ほたるは貞光に一礼したあと、にこりと微笑んで、父親の腕を取る
「それではお父様……本日から、私もお世話になるのですから、これよりお掃除に参りましょう？」
「クク……今からは、少し用事がありましてな、それは難しいご相談というものですな」

ほたるは笑顔を崩さず、貞光を引っ張る
「さ、参りましょう、お部屋のお掃除ですの」
「……良いでしょう」

その後、部屋に戻る途中で道明と鉢合わせした貞光が、当主に娘

を紹介したが、

「……最近の大筒士は、そんなものも作れるのか」

と、清楚に佇むほたるの事を、しばらく娘だと信じられなかった

という

追記

結局大筒士の指南書は見つからず、こうして翠が築いた大筒士の歴史は、二代目で終焉を迎えることとなった

以後、壬生川一族に大筒士が誕生したという記録は、残っていない

第八話－8　「計較」　１０２４年４月後編

＜出陣前・玄関＞

大の大人が三人揃って、真剣な顔を付き合わせる

「じゃあ俺ぁ、グーを出すぜ？」

「……ならば私は、それを柔軟に包み込む、パーでお相手しましょう」

「おっとそいつぁ危険だな、じゃあチョキにすっかな？」

「……クク、私とて本当にパーを出すとお思いか」

「どうでも良いよ！！」

道明（みちあき）が無意味な腹の探りあいを続ける兄弟の間に割って入る

「出陣するから、ほら、どっちが留守番かとっとと決めてくれ」

「じゃあ道明が留守番すりゃ良いんじゃね？」

「……そうですな」

力斗（りきと）と貞光（さだみつ）に白い目を向けられ、道明はいやいや、と手を振る

「ほら、さっき京の都から買い込んできた“仁王水”な、味方全員の防御力を大増加、僕はこれの試作を実戦で試してこないといけないから」

紐を掲げて、妙薬の詰まったひょうたんをふたりの目の前で揺らす

「それ言うならお前、俺だって柚子を守らなきゃいけねえしよ」

「クク……私とて、愛する大筒たちに、血を吸わせてあげねばなりませんしな」

うっ、と道明が引く

ここで当主権限、とか言えば納得するだろうか、いいやそんなタマではない

「……仕方ない、僕もジャンケンに加わろう」
そんな、親父三人を、玄関に座り込んで眺める瑞穂（みずほ）
「あたいの初陣なのに、別のところで盛り上がっているよねぇ……」
「瑞穂さんは、余裕、ですね……」
瑞穂の傍に立って、大槌を持って礼儀正しく立っている柚子（ゆずこ）が、
曖昧な笑みを浮かべる

柚子が今回携えているのは、赤猫お夏が落としたほのかな熱気を発する大槌、不動ノ大槌である

突如、ギャーという声が聞こえ、振り向くと力斗が頭を抱えて膝をついていた
「……それじゃ力斗、留守番よろしくな」
「ほたるへ、訓練のほど、宜しくお願い致します……クク」
「ゆーずーこぉー」
暴れようとする力斗に、準備していた道明と貞光が＜寝太郎＞を瞬時に重ねがける
「……クク、どうせそう来るとは思っておりましたよ」
眉間にシワを寄せて眠り出す力斗を、イツ花に引き渡す
「それじゃイツ花、後は任せた」
「はァーい、さ、ほたるさん参りましょうー」

そんな壬生川（みぶがわ）家のやり取りを微笑ましく見ていたほたるを連れ、
力斗の足を引っ張ってイツ花が屋敷の奥に引っ込んでゆく

「ぐが……ゆず、ゆずこぉ……いきてかえってこいよぉ……ぐがー

かくして、瑞穂の初陣は、力斗を除いた四人組となった

＜相翼院（そうよくいん）＞

初陣だからと先ほどまで張り切っていた瑞穂が、羽休め台で大の字になって休んでいた

そんな瑞穂を、貞光が扇でパタパタあおいでやる

道明が柚子のお守りを頼まれたため、もしかしたらさりげなく気を遣ってくれているのかもしれない

壬生川家では誰でも来た当初、文字を覚えると同時に『実録壬生川戦史』を読ませられる

これは決まり事の少ない壬生川家の中でも原則であり、壬生川三代目当主が定めた心得の一つであった

「……寝言でまで」

道明が頬をかく

「僕は、ひとつ決めた事があるんだ」

腰を下ろしている道明の横で、柚子が首を傾げる

「え、何を、ですか？」

「……僕の代では、朱点童子（しゅてんどうじ）の手下・髪には挑戦しないように、な」

「あの……わたしの、お婆ちゃんが倒された、っていう……？」

「……お婆ちゃん……そうか、そうだよな、伽子（とぎこ）さんはもうお婆ちゃんか……」

伽子の顔を思い出しながらちょっとした世代の差に戸惑う道明が、心配そうに見つめてくる柚子に何でもないよ、と手を振る

「まあそのお婆ちゃんが……今の僕と力斗のふたりでも、勝てるかどうか分からないほどお強い方だったんだけど、三ツ髪という大蛇には歯が立たなかったんだ」

その光景を思い出し、道明は歯を食いしばる、あの時自分の技力がもう少しあったならば、伽子は死ななかったのかもしれなかったのだ

「だから……僕の代では髪には挑まない、例え臆病者と後世に評されようとも、僕は無茶をして死人を出したくない」

臥蛇丸（がじゃまる）の家から出た二人目の当主として、道明は柚子に尋ねる

「どうだろう、僕は少し慎重になりすぎているだろうか」

「いえ、そんなことは！」

柚子は自分の声に驚いて、口元に手を当て、ゆっくりと言い直す

「道明さまは、お優しい……と、思い、ます」

「……優しい？　僕が？」

意外な言葉だった

壬生川家で慎重になるというのは、下手をすれば自分の孫やその子孫の代に、不幸を背負わせてしまう、ということだ

急いては事を仕損じる、という言葉がある

しかしゆっくりになり過ぎれば、いつまでも呪いは解けず、悲しみは繰り返されるままなのだ

道明はこの考えは、下手をすればただ自分が戦死者を見たくないがための、私情を挟んだ結論なのかもしれない、と自ら疑っていた

「え、あの……わたし、何か妙なお言葉を口走りました……？」
上目遣いでこちらを伺う少女に、道明は首を振る
「いや……そんなことはない、ただ、肯定してもらえるとは思っていなくて」
「わたしは……短くても、人生ですから……たぶん、あの、慎重になるのも、壬生川家に生まれた人なら、理解、してくれると思います……」
柚子はおずおずと続けた

「……君は、僕が思っているより、ずっと聡明で利口なのかもしれない」
「え、えっ」
滅多に人に誉められることのない柚子が、狼狽するのを見て、道明は薄く笑う
「さ、キサの庭だ、行こうか」
道明は立ち上がり、皆を集めて進軍の号令をかける
「あ、あの……は、はいっ」

今はまだ頼りない柚子だが、意外と将来は壬生川家を引っ張っていく存在になるかもしれない、と道明はふと思った

〜〜

キサの庭に到着した四人は、歓喜の舞を一瞬にして打倒し、その奥に進んでゆく
天女の小宮に立ち入り、入り組んだ構造の部屋を走り抜け、奥の院へと突入した

襲い掛かる悪羅大将たちを跳ね返し、道明たちは奥の院で１ヶ月間をめいっぱい戦い抜いて、とうとう初陣の瑞穂すら４００の体力を超えるほどの経験点を稼いだ

風の薙刀“カマイタチ”を振るう瑞穂を見て、道明は確信を得る
「これなら、大丈夫だろう……僕の初戦は真名姫に怯えていただけだったというのに、みんな凄いな」

前線で薙刀を振るい、初陣ながら伸び伸びと戦う瑞穂に、自分の出来る事を精一杯果たそうとする柚子、二人の今後が楽しみになる戦いぶりだ

「ククク……それでは、向かいましょうか」
貞光が砲撃を止めて、道明の元に戻ってきて、それを見たふたりの少女も帰ってきた
「ああ、赤猫お夏を倒せた僕たちなら……大丈夫なはずだろう」
不安はある、当たり前だ
だがそれ以上に、ここまでなら出来る、と思う

線引きを間違えれば、待っているのは悲惨な結末だが、挑まねば何も得られはしないのだ
道明が“鬼子母の間”と書かれた扉を、ゆっくりと開いた

よどんだ風が中から吹き、道明の髪を揺らす
無数のロウソクが点った異質な空間を進むと、その中央に片方の翼を失った天女がうずくまっていた

ニ代目当主がかつて敗れ去った相手、片羽ノお業だ
その醜聞を聞き及んでいた道明は、怯える娘たちを貞光に任せて、

ひとりでお業の元に歩み寄る
鬼となった天女は、顔を上げた

「ウフフフ……姉さんね、私たちにもう一度やり直す機会をくれたのは？」

その表情がロウソクに照らされて、道明の目に飛び込んでくる
まるで何か……懐かしいものを見るような暖かい表情に、道明は違和感を感じた

「じゃあ次は私の番ね、あなたたちに黄川人（きっと）を正気に戻す力があるかどうか、試してあげる」

「黄川人……それではまさか、あの童子は、お前の……？」
お業は返答の代わりに微笑み、そして翼をはためかせた
このものは鬼ではなく、まさか神としての意識が残っているのだろうか、道明は薙刀を構える
ロウソクの炎が燃え盛り、暴風が室内に吹き荒れ、驚いた柚子が後ろで悲鳴を上げていた

片羽ノお業「さァ、かかってらっしゃい！」

お業の姿が見る間に変貌してゆく
緑色の綺麗な長い髪は炎のたてがみに化け、その四肢は鳥のように鉤爪が伸び、まるで伝説上の生き物、火喰い鳥のようだ

「……試してあげる、か……悪いが、僕たち一族のために、お前の屍も越えさせて貰う！」

空を飛び回るお業の急降下に、道明は薙刀で弾きながらも、強烈な衝撃によって吹き飛ばされた
「パパ！　＜お雫＞！」
「……ちゃんと覚えてるじゃないか」
瑞穂に介抱される道明の横、貞光が流星参号を取り出し、散弾を放出する
「片方の翼で、よくそれほど飛びますな……クク」
全身につぶてのような弾丸を浴び、お業の動きが一旦停止した瞬間、柚子が飛び上がった
「え、ええいっ！」
「くッ……！」

柚子の大槌を胴に受け、お業は真横に吹き飛び壁に激突したが、空中で体勢を整え、どうにかして墜落を免れる

「強くなったわね、本気で行くわよッ　＜芭蕉嵐＞！」
お業の周囲に発生した小型竜巻が寄り集まった一本の竜が、一同に襲いかかるかと思われた直前、道明がお業に立ちふさがった

「死地堕つろ、天災此処に、白旗紅染まりけり……」

道明が目を見開き、その髪が赤く輝いた

「＜七天爆＞！」

竜巻のような風と、道明の作り出した巨大炎球が正面から激突し、鬼子母の間に衝撃と熱風が走った
周囲のロウソクが次々と倒れ、あちこちに飛び火してゆく

「うわ、パパ……すご……っ」
思わず息を呑むような光景に、瑞穂が圧倒された
「道明殿の技力、これほどまでとは、凄まじいですな……」
神をも上回る炎に、貞光すらただただ見入ってしまう

「う、おおおおお！」

京の都をも焼き尽くせそうな火炎の塊が、竜巻を押し返し、ついにお業の身体を丸ごと飲み込んだ
焼き尽くされたお業は、力なく地に落ちた
血を吐くお業の元に、柚子が近づく

「あの、ごめ、ごめんなさい……！」
大槌を振りかぶり、柚子は謝罪の言葉を投げかけるが、お業は静かに首を横に振った
「優しさじゃ、誰も救えないのよ……早くそれを、振り下ろしなさい……」
「……っ」
その確かな声に、柚子が涙ぐむ

この人は本当の鬼ではない、ちゃんとした意識が残っているのだ、だというのに、自分にはどうすることも出来なくて

「……悶絶圧ッ！」
柚子の大槌が、苦しむお業を粉砕した

相翼院のボスを撃破したというのに、なぜだか泣き続ける柚子の頭に、道明は手を置いた
そして、囁く

「……あの人はきっと、こうなることを望んでいたんだ、君が気にする事はない、やらなければこちらがやられていた」
「……でも、でもぅ……」
道明は柚子の肩を抱いて、貞光や瑞穂の下に帰る
「……参ったな、どうやったら泣き止んでくれるんだ」
背中をさすってみるけれど、あまり効果は期待できそうになかった
「……帰ったときに君が泣いていると、僕が力斗に斬られるんだよな」
「えっ、そ、それは……ダメ、ですよね、ごめんなさい、うぅ（；д；）」
「……まぁ、何とかするさ」

その時、お業が消えた付近から、静かな声が聞こえた

「いつか、きっと……願いは叶うのよ……」

道明はしばらく呆けたようにその方向を見ていたが、瑞穂に呼ばれて、帰路に着くことにした
そして案の定、道明は力斗に猛烈に怒られたのだった

第八話－8　「計較」　１０２４年４月後編（後書き）

出陣・相翼院（道明・貞光・柚子・瑞穂）
初見・ほたる→弓使い　訓練・力斗→ほたる

第八話ー9　「借銀」　1024年5月前編（前書き）

力斗　1才6ヶ月

道明　1才3ヶ月
貞光　1才
柚子　6ヶ月

瑞穂　4ヶ月
ほたる　1ヶ月

第八話－９　「借銀」　１０２４年５月前編

＜壬生川家・居間＞

「やっぱり世の中、お金だわぁ……」
午後の自習中、瑞穂がそんなことを口走った

「は、はぃ……？」
近くに座っていた柚子が、怪訝そうな表情をする
「いや柚姫みたいに、上流階級の娘さんには分からない悩みなんだけど」
「上流階級……」

壬生川家内にも、上だの下だのがあるのだろうか

「え、えと……瑞穂さん、お父さんから、お小遣いもらってない、ってこと……？」
「そうよ！　不服だわプンプンッ」
（あれ……？　でも、わたしも、貰ってないなぁ……？）

そもそも壬生川家に居る限り、お金で困ることはないと柚子は思うのだが、道明にくっついて京にちょくちょく向かう瑞穂は色々目移りもしてしまうのだろう

「だから、年頃の女の子は身だしなみにも、絹のお着物とかとっても綺麗で……って柚聞いてる！？」
「あ……うん、聞いて、ます」

「ハァ、これだから何もしないでも可愛い子は……余裕しゃくしゃくねホント、果物め」
「果物じゃ、ないよぅ……」
瑞穂にぶんちんで突かれて、柚子はうぅと唸る
とりあえず柚子をつつき倒して満足したのか、瑞穂は術書に向き直った
「だから、あたい自活することにしたの！」
「え、えぇ……お商売でも、するの……？」
「ううん、ここだけの秘密よ？」
瑞穂が周りを見回してから、声をひそめる
「おうちの蔵から、こっそりお金を持ち出したの」
「も、持ち出し！？」
ああもうっ、と瑞穂は柚子を押し倒し、その口を塞ぐ
「ちょ、声が高いわよ！」
それを偶然通りがかったイツ花が、裁縫セットを抱えたまま明るい表情で尋ねてくる
「何を持ち出すんですかァ？」
「あ、え、」
「も、もちだしってのは……そ、そう、餅出汁！　餅で作った汁のお出汁よ！　ちょ、ちょっと食べてみたいなぁってさ！」
ヌハハハと笑う瑞穂に、それはちょっと苦しいんじゃと柚子が冷や汗をかく
「瑞穂さまってば、変なのが好みなんですねェ……あんまり美味しくないと思うんですけど」
イツ花は何の疑いもなく、苦笑しながら瑞穂を眺める
「いやあもう、普通の食べ物じゃ満足できなくなってそういう一風

変わったのに手を出したく……」

弁解しながら、何で自分はこんなことを言っているんだろう、と瑞穂がふと思う

「じゃ、じゃあ今夜のお夕食は、餅出汁にしますね」

そう言って、イツ花はそそくさと行ってしまう

「なんとか……ごまかせた、ね」

「あたい、かんっぺき変な人に見られた……果物のせいで……」

大きなため息をつく瑞穂に、柚子が慌てて尋ねる

「あ、でも……そのお金、どうしたの……？」

「ああうん、持ち出した１０８９０両ね」

「いっ、一万！？」

柚子の口元を殴打してその発言を無理矢理押し留める瑞穂

「またなんだから！　危ない危ない」

「い、いたぃ……うぅ、でもそんなお金、一体何に……」

一万両といったら、京の都にも一軒屋が建つほどの金額だ

「相場屋よ」

「そうばや……って、な、なに？」

「米や麦などの半年後の相場を予想し、上がりそうなモノに投資して、買ったときより半年後の相場が高くなっていればその差が儲けになるのよね！　つまり、高くなった分だけあたいのお小遣いになるわけ！　時代は塩よ、時代よ！」

え、でも、と柚子は思案する

「相場より安くなって、たら……？」

瑞穂は無言で柚子の髪を引っ張る

「いた、いたいよ瑞穂さん……（；д；）」
「あたいたち一族は、前しか見ちゃいけないのよ、お子様の果物には分からないでしょうけどね」
何やら急に良いことを言い出した瑞穂が、柚子の髪を引っ張りまわしながら、遠くを見つめる
「うぅ……」
そういうわけで、瑞穂の半年後の運命はいかに

＜夕食＞

『いただきまーす』
一家が一度に勢揃いする、一日で唯一の時間だ

笑顔で皆が食卓を囲む中、食事時はいつも満面の笑みの瑞穂がさめざめと泣いていた

「瑞穂さま、餅出汁がそんなに美味しいんですかァ」
「瑞穂さん……」
泣きながら、瑞穂は味のない汁をすする
「あたいの、一日で一番の楽しみが……」

その様子を、ほたるが意味ありげにふふと微笑んで眺めていたりする

「つか貞光（さだみつ）よ、お前今月留守番な？」
たくわんを箸でつまみながら、力斗（りきと）が端っこでもぐもぐしている
貞光に命令する

「……クク、何故私が」
「テメェほたるの訓練もしてねえだろ」
力斗が茶碗を差し出すと、柚子が米桶からご飯を大盛りにして、返す
「……ふむぅ、確かに、一理ありますな……それは道明殿より私が残るのが、道理でしょう」
意外と簡単に引き下がる

「道明さん、あの、今月はどこに行くんですか？」
柚子が道明の湯飲みに、急須で熱い湯をそそぐ
「そうだな、そろそろ暑くなってきたし……今月は、忘我流水道（ぼうがりゅうすいどう）にいこうかと思っている、とりあえず大ボスまで行ってみたいかな」
「……なるほど、だからか貞光」
何も言わず微笑する貞光だが、本心は火薬が濡れてしけってしまうのが嫌なのだろう

ほたると並んでいると、親子だというのに、その笑顔は善と悪という風に見える

「じゃあ、次回は僕、力斗、柚子くんに瑞穂で忘我流水道で良いね？」
「おうよ」
「は、はぃ」
「ふぁ～ぃ……」
こうして、壬生川家の何でもない一日は過ぎていくのであった

第八話－１０　「氷釈」　１０２４年５月後編

＜忘我流水道（ぼうがりゅうすいどう）＞

「下に水着を着てきて良かったぁー」

嬉しそうに忘我流水道に飛び込み、水をかきわけながら進む瑞穂（みずほ）の後ろで、柚子（ゆずこ）が踏ん切りがつかないように、足を少しだけ入れたり出したりしている

「どうした、柚子くん」

「いや、その、あの……」

スイスイと泳ぐ瑞穂を羨ましそうな目で見つめる

「なぁんだ、泳げねえのか柚、大丈夫だ俺も泳げねえよガハハ」

力斗（りきと）が柚子の腕を引くが、柚子はかたくなに首を振る

「そうじゃ、なくて……水が……その」

「別に僕らは海の近くに住んでいるわけじゃないから、泳げなくても恥では……ってもしかして柚子くん、水が怖い、のか？」

道明（みちあき）に尋ねられて、柚子は静かにうなずく

「何だぁそれ、参ったな、俺がずっとおぶってやるわけにもいかねえしなぁ」

道明は力斗が肩車したまま戦う柚子を想像してみた、大槌を間違って力斗の頭に叩きつけてしまいそうだ

「うぅ……」

何度も何度も、入れたり出したりする柚子の足を、瑞穂が水面か

ら掴んだ
「習うより慣れろ、でしょ？」
「ひ――」
瑞穂がククと微笑み、柚子を水中に引きずり込んだ
「あぅぅあぅぅぅ（；д；）」
必死にもがく柚子の頭を、瑞穂が押さえ込む、水の中にいるため柚子は腕力を発揮できず、瑞穂に翻弄されてしまう
「ぬふ、ぬふふふ！　どうだ、普段から腕相撲で連戦連勝しやがって、この小娘め！」
「あぅ、ゆる……ゆるしてぇ……（；д；）」
「ぬふふふ、水の中なら思うように動けまい！　果物がいなくなれば、夕食の量は二倍に！　三時のおやつだって、二個も食べれちゃうぬふふふ！」
力斗と道明が、同時に瑞穂の頭を引っぱたいた
「いだだ……うぅ」
後頭部を押さえて歩く瑞穂の後ろで、力斗が毒づく
「ったく、テメェんちはどんな教育をしてやがるんだ」
「うん、返す言葉もない」
帰ったら薙刀の稽古を一日みっちりつけてやろう、と道明は心に決める
一方、水責めの刑に処されていた柚子は力斗におぶられていた
不動の大槌は道明が持っている
「……水が、お水さんが……」
時々うめいて、そのたびに力斗が瑞穂を睨みつける

一同はなるべく鬼に接触しないよう、人魚の瀑布までやってきた
初陣以来、二度目となる道明が皆を置いて、ひとりで周りを見回すと、滝の近くの岩盤に真名姫（まなひめ）が寝そべっていた

真名姫はこちらに気づき、手を振ってくる
「あら、また来たの？　けっこうしつこい性格なんだ」
「そうなんだよ、コイツしつこいっつうか因縁深いっつうか」
気がついた柚子をその場に下ろして、力斗が後ろから口出しする
「黙ってろ力斗……まあ、今回は素直にそこを通してくれないだろうか、もう君では僕たちには敵わない」

「……腐っても朱点（しゅてん）用の秘密兵器に、私たちみたいな古の神が太刀打ちできるはずはなかったのね、そのへんが人間の血ってヤツかしら」

どうやら正気の真名姫は、美しい人魚の姿のまま、あーあと肩をすくめる
「やっぱり昼子（ひるこ）ちゃんもあなたたちと似てるんでしょうね、あーあ、でも残念、あの子との約束だもの」
「約束……あの子？　朱点童子の、ことか？」

「うん……っと、いっけない、あんまり話すとあの子が拗ねちゃうわね」

そう言うと、真名姫の体が白骨の怪物へと変貌してゆく
化け物のような醜い姿で、真名姫はぽつりとつぶやいた

敦賀ノ真名姫「私、あなたたちのこと……何だか、そんなにキライじゃないかもね」

モリを構えて突きかかってくる真名姫の一撃を、道明が弾き飛ばす
「……致し方ない、倒させてもらうよ」
道明が薙刀を振り回して、真名姫の骨を竜巻のように切り刻み、
その後ろから力斗が懐に飛び込んだ
「くっ……真名、ッ」
「ぬおあっしゃあああああ！」

力斗は力任せの二連撃で真名姫の術詠唱を止めると、そのまま胴
を払い抜け、再び道明が真名姫を攻め立てる
信頼する者同士の間断無い連携攻撃に、真名姫の体が徐々に崩れ、
その矛がひび割れてゆく

「あっ、く、あああ！」
力斗が正面から、道明が背後から真名姫の身体を一刀両断した
斜め十字に斬り裂かれ、真名姫の体がチリと化す
「あ、あたい……何もやることがなかった……」

瑞穂があまりにも速い攻防劇に目を回す、柚子は違った意味でま
だ目を回していた

「道明がヤバイヤバイ言ってたから、どんなヤツかと思ってたがな」
力斗が刀をくるりと回して鞘に納める
「……僕たちも成長した、ということかな」
そう言って立ち去ろうとした四人に、姿無き声が届く

「……特別に忠告してあげるけど、ケガしたくなかったらここから
先には行かないほうが良いわよ」

穏やかな女性の声だ
「……真名姫、か？」

「器は年明けまで治ってくれないんだけどね、この先にいらっしゃるのはかつて天界一の美丈夫とうたわれ、最も人間を慈しみ愛したお方よ」

真名姫の声が、四人にささやくように届く

「その心は常に熱く、その力に至っては、朱点の半分近いと言われているわ……いくら強いと言っても、あなたたちの敵う相手では……いや、分からないわね、もしかしたら」

迷いを帯びた真名姫の声に、道明は凛と返す

「……朱点童子の半分か、僕らにはそれくらいが丁度良いのかもしれないな」

「言うと思った、ま……頑張ってらっしゃい、って私がこんなことを言うのも変ね、訂正するわ」
笑い声を上げてから、真名姫は言い直す

「皇子に、どうぞ殺されてらっしゃい……ウフフ、じゃあね」

真名姫の気配が消え去り、人魚の瀑布には再び静寂が戻る
先ほどまで聞こえていた滝の爆音は無く、見れば今まで滝のあった場所の奥にぽっかりと洞窟が広がっていた
「……真名姫は、どうして朱点などに肩入れしているんだろうか」
敵対する自分たちにまで警告してくれるその慈悲深い声に、道明は思慮を巡らせる

だが例え朱点童子がどんな男でも、自分たちの呪いを解くために、情け容赦をかけるわけにはいかないのだ
道明は皆に振り返り、そしてうなずく
「行こう、皆」
「ああ」
力斗が何の心配もない、とばかりに道明の肩にその太い腕を回す
「天界一の美丈夫か、面白え」
そうして四人は、永久氷室（えいきゅうひむろ）の中へと足を踏み入れた

＜永久氷室＞

そこはつららが並び、地面も壁も水面も全てが凍りついた洞窟だった

「さ、寒いいいぃぃ」
小さな火の玉を呼んで、慌てて暖を取る瑞穂
「濡れたままで入ったら、凍死するなこれ……」
道明もまた、火炎の術を唱える
「紅蓮（ぐれん）の祠（ほこら）の翌月に来たら、いくら俺でも風邪引くなこれ」
「力斗でも、か」
「今なんで繰り返したテメエ！」

そんな三人を眺めながら、調子の戻った柚子が大槌を抱きしめる

「いや柚、何をしているのそれ」
「え、あの……この大槌、何だか、ポカポカして……」

「……そうか、属性装備にはそんな活用法もあるのか」

不動の大槌
赤猫お夏が地上に落とされたときに腹いせに天界からくすねてきた、炎属性の武具である
とりあえず衣服を乾かした一同は、一本道の通路を先へ先へと進んでゆく

途中の道には紅こべ大将がうろついていたが、今の壬生川家にとっては障害にもならない
細長い通路を抜けると、そこには上下に駆動する氷の床が設置されていた
「おお、エレベーターだ！　すっごーい！」
臆面もなく現代語を使う瑞穂が乗り込むと、床は浮遊しながら徐々に降下してゆく
「ほほう、さすが美丈夫さまはちげえな、最新テクノロジーってヤツか」
（せめて、何かの術とか言えないものか）

四人を乗せた床は、やがて地下二階に下ったところで、停止する
そして目の前には、赤い色をした黒ズズ大将が仁王のように待ち構えていた

「ひっ」
一本角に一つ目の巨人、その名もおどろ大将
戦ってみればその怪力は凄まじく、黒ズズ大将の純粋な上位鬼といったところだろう
「ほおお、ようやく戦いがいがある敵がきやがったな！」
嬉しそうに刀を抜く力斗の後に、厳しい表情をした道明が続く
「何でお前はそんなに戦いが好きか……」

周囲の雑兵を薙ぎ払う道明に、力斗が返す
「知れたことよ！　見える範囲の鬼を全部殺しゃあ、柚を狙うようなヤツぁもういねえ！」

おどろ大将の胸を切り裂き、返り血を浴びる力斗が、鬼の軍を目前に言い放つ

「俺ぁ強いヤツと戦うことが好きなんじゃねえ……強いヤツをぶち殺し、そしてまた強くなった俺が、より柚を守れるようになるのが、嬉しくてたまらねえんだよ！」

力斗の剣技の冴えは、今まで道明が見てきた中で今が最も凄まじい
「柚子くんを背後に背負った時の力斗は、化け物染みているな……」

戦闘経験の浅い瑞穂を支援しながら、時々力斗を眺めるが、その戦いぶりはまるで戦鬼のようだった

やがて、襲い掛かってきた鬼たちを退治すると、その足元に一枚の巻物が転がっていた

「これは……石猿、の書ぉ？」
「な！」
道明が瑞穂の後ろから肩越しに見ると、それは防御術の一級品＜石猿＞の術書であった
「おお、やったじゃねえか、道明は術得意だもんな」
柚子から渡された布で顔についた血をふき取っている力斗に、道明が叫ぶ

「じゃあ僕が今月、出陣前に買ってきた仁王水９９個は一体！」

「腐りゃしねえなら、取っとけばいいじゃねえか……」
「どうせ湯水のごとく使うだろうと、予備も発注済だったのに！」

頭を抱えて悶える道明を、珍しそうな目で見つめる柚子

「道明さんが……あ、あんな大声で」

「ああ、まあアイツの父親だからな」

そう言って瑞穂を指す父の言葉に、柚子は思わず納得してしまった

降りた地下三階を進み、一同はついに永久氷室の最深部へと到達した

＜冷泉の間＞

何もかもが凍りついた広間に、痺れるような冷気が渦巻いていた

それはどんなに隠そうとも隠しきれない、下界の生き物が持ちえない鋭気だった

「……格別に冷えるな、ここは」

白い息を吐き出す道明の横に、力斗が並ぶ

「今までで見た中で、一番つええな……アイツは」

氷の柱が立ち並ぶ間の中央に、ひとりの男が座っていた

男は、久しく訪れた侵入者に対して、薄目を開く

「絶望した人間を見つけるたび、熱い心や血や肉を与え続けた……

ふと気づくと、我が心身は氷に変じていた……」

氷ノ皇子の声を聞いて、瑞穂が頬に手を当てる
「うわぁ……かっこいい……」
ため息を漏らす瑞穂の声に、慌てて力斗が娘に振り返ると、少しだけ耳が赤くなっていた
「あ、うん……かっこいい、ですね」
「テメッ、この野郎！　うちの娘をたぶらかすたあ良い度胸じゃねえかああ！」
耳が赤いのは寒いからだろう、と道明が思う
氷ノ皇子は力斗に刀を向けられても動じず、淡々と続ける

「こんな愚か者に今さら何用じゃ……おまえたちに与えてやれるものは、もう何ひとつ残っておらぬはず……」

「別に僕たちは、あなたから何かを奪いに来たわけじゃない」
道明の声が聞こえないように、氷ノ皇子は立ち上がる

「それでもまだ奪えるものがあると言うなら……」

氷ノ皇子が声を荒げると、強烈な冷気が四人に襲いかかる
「……マズい、初めて会ったときの真名姫のように、会話が通じないのか！」
「良いじゃねえか、もともとこっちもそのつもりだったんだ！　奉納点のために奪っていくだけよ！」
力斗を先頭に、各々が臨戦態勢を取り、氷ノ皇子が持っていた水晶球を掲げた

氷ノ皇子「望むところじゃ！　力ずくで持って行くがいいわ！」

力斗が斬り込み、道明が仁王水を振りまつつその一歩後ろから援護する
「砕けろやあああああ！」
氷ノ皇子はその鋭い斬撃を半歩下がって避け、続く道明の薙刀も凍りついた腕で受け止める
「これほどの実力で、この私に挑むか……哀れよな」
「うるせえ！」
力斗の刀を軽々と素手で弾き、氷ノ皇子は一族を鼻で笑う
「ほーら、美味しい水よ！」
瑞穂が力士水をばらまき、攻撃力を強化された柚子が大槌を氷ノ皇子に叩きつけると、そこでようやく氷ノ皇子の表情が変わった
「……ほう、やるではないか女」
柚子を片手で払い飛ばすと、けだるく立っていた氷ノ皇子は呪印を結びだす
「させっかよ！」
「……いつまで余裕ぶっているつもりか、神が！」
力斗と道明の連撃をその身に受け止めながらも、氷ノ皇子は冷気を解き放った
次の瞬間には、まだ若い瑞穂の身が彫像のように凍りついていた
「え、ええっ、み、瑞穂さん！？」
氷の棺に閉じ込められた瑞穂は、名前を呼んでも身じろぎ一つしない
「……すぐに助ければ、命までは奪わぬ」
「この……＜七天爆（しちてんばく）＞！」
「させぬぞ」
火炎の術を唱え出す道明に、氷ノ皇子が迫るが、力斗が道明の前

に立ちふさがり、氷ノ皇子の拳を刀で受け止める

「黙ってろこの冷凍人間！」

力斗が力の限りを尽くして、氷ノ皇子を弾き飛ばし、そこへ道明の＜七天爆＞が着弾する

炎に包まれる氷ノ皇子に、柚子が飛び込んだ

「……も、悶絶圧(もんぜつあつ)です！」

大槌は空を切る

「え、え」

氷ノ皇子は戸惑う柚子を突き飛ばし、そして力斗に冷凍の呪を浴びせた

「が……て、てめ……」

足元から凍りついていく力斗を見て、氷ノ皇子がつぶやく

「ほう、変わったな、人は……これは私も、本気で挑まねばならぬということか」

七天爆を受けても涼しい顔を続けている神に、道明はこれが天上一位かと実力の差を痛感する

その一方で柚子は、生まれて初めて奥義が避けられた事に対して、動揺を隠しきれない

「う、うぅ……（；д；）」

氷ノ皇子がわずかに眉根を寄せた

「ほう……氷が、もう溶けるか」

瑞穂を見れば、それが壬生川一族の潜在能力なのか、氷ノ皇子にかけられたまじないが徐々に薄れ、永久氷室の中だというのに封じる氷が消えてゆく

氷ノ皇子はそこで初めて、拳を握った

「まさか、お前――！」
道明が叫ぶより早く、二条の光が瑞穂を貫いた
「み、瑞穂さん！」
その瞬間、瑞穂を覆っていた氷は消え去り、その代わりに少女の胸から血が噴き出した
「瑞穂！」
「……脆いものよ、心も体もな」
氷ノ皇子は、その目を完全に凍った力斗へと向けた
「や、やだ……お父さんは、さ、させない！」
震える手で大槌を抱えて、涙をいっぱいに浮かべた目で柚子は凍りついた力斗の前に立ちふさがる
「その者も、呪が薄れつつあるな」
「だ、ダメ……だってば……悶絶、圧！」
柚子が力斗を守るため、高く跳躍し、本日で二度目の奥義を放った
しかし大槌は、またしても地を叩いた
氷ノ皇子は哀れむような顔で、柚子を打突で吹き飛ばし、それから力斗に二連打を叩き込むと、力斗もまた壁に叩きつけられ意識を失う
その隙に道明が＜不動明＞の術を氷ノ皇子に当てるが、氷ノ皇子は少しだけ身をよじっただけで、その炎も消え去ってしまう
「……くっ、もう、打つ手はないのか！」
道明の火炎の術が効かず、柚子の奥義は二回連続で避けられ、残る一族はあと二人、力士水の重ねがけもそろそろ切れるだろう
それでも諦めずに、道明は氷ノ皇子を見据える
「……良い目をする人よ、ここで摘むには惜しいな」

「僕はまだこれから咲くんだよ！」

道明が斬りつけるが、その動きも氷ノ皇子に見切られてしまう
砕かれた大小の氷の破片の中から、柚子が身を起こした

「うっ、うっ……お、お父さん……っ」

泣きじゃくる柚子がもう一度立ち上がって、そして大槌を正眼に構える
「う、うぅ……やだ、道明さんまで、死なせない……！」

この柚子の番が終われば、次の氷ノ皇子の攻撃によって道明か柚子が討たれ、どちらが倒されてもこの戦いは終わってしまう
氷ノ皇子に順番を回す事無く、柚子が確実に仕留めなければいけない
そして柚子が導き出した結論は、命を削る三度目の奥義だった

「……己の身を賭してまで、仲間を救おうとするか、女よ」
「だ、だって……道明さんは、私たちの、私の、大切な……！」
柚子の手が震えて、目が涙ににじんで、巧く狙いが定まらない
「うっ……うっ……」

自分がもう一度外したら、全てが終わる
もう自分に余力はない
その緊張と重圧が、柚子の身を縛りつける

薙刀を構え、最後まで望みを捨てない道明が叫んだ
「……泣くな柚子！」
道明の声に、柚子が顔を上げる
「泣けば手が震え、敵が見えなくなる……歯を食いしばれ！　目を見開け！」

「み、みちあき、さん……わた、わたし……！」
その瞬間、柚子の視界が氷ノ皇子を中心に弾けた
柚子の大槌から火炎が噴き出し、凍りついた広間を一瞬赤く照らし出す
「あああああああ！」
「ぬ……！」
柚子が飛び上がり、猛る大槌を振り落とす
命を振り絞った三度目の奥義は、氷ノ皇子の身体に当たり、そして大きな亀裂を作った
「……ふむ」
自らに＜円子＞を唱えながら、道明は奥歯を噛み締める
「そんな……ダメだったというのか……」
柚子は氷ノ皇子の眼前にしゃがみこみ、荒い息をつく
「もっと強うなれ」
氷ノ皇子の声に、柚子は顔を上げる
その指先が、髪が、水晶球が、そして表情に至るまで全ての箇所にヒビが入ってた
氷ノ皇子「そうすれば、おのずと糸口は見えてくるわ……！」
氷ノ皇子の身体が、無数の氷片となって砕け散る
道明は、ぺたんと座る柚子の頭に手を置いた
「……凄いな、君は……本当に」

自分の想像を遥かに超えて、柚子は強い女性だった
「わた、わたし……あの、早く帰って、みんなの、手当てを……」
「……そうだな」

こうして、壬生川一族は死闘の末に、見事氷ノ皇子を撃破したのであった

＜壬生川家・力斗の部屋＞

布団に横たわる力斗の傍で、道明が事のあらましを伝えていた

「……だから、あの子は、本当によく頑張ったよ」
「そうかぁ……」
道明を除く三人が重傷を負うという、大変な討伐になってしまった

「僕は……当主としては、まだまだだよな」

「本当だよ……テメェ、俺はまだしも、柚子まで危険な目に会わせやがってよ」
遠くで、コマドリの鳴き声がした
これから暑くなるのを感じさせるような、そんな良い天気の昼だった

「柚子くんも、瑞穂も、とりあえず命に別状はないようで、イツ花が面倒を見てくれているよ、貞光が怪しい薬を飲ませようとしたのを、止めてくれたり」
「……そういや、柚子はどこだ」
「さすがに重傷者をふたり並べて寝かせるのは、感染症の恐れがあるから、今は使っていない離れに置いたよ」
またの名を、初代当主玄輝の間とも言う

「そうかぁ……」
「まあ、何だか、こういうことを言うのは、照れくさいが……早く、良くなってくれよ」
「……道明ぃ」
力斗の穏やかな声に、道明は何だい？　と聞き返す

「……柚子もお前を慕ってるからよ」
「またそれか……」
「……俺も、お前が柚子を貰ってくれんなら、心配いらねえんだよ……なあ、頼む」
「力斗に頼み事をされるなんて……明日は季節外れの雷か」
親友の言葉に、道明は思わず笑う

「ああ……柚子の花嫁姿……綺麗なんだろうな」
「相手は僕じゃないだろうな」
「お前は……良い男だったぜ……貞光にも、そう伝えておいてくれ

よな」
「……力斗？」
力斗は薄目を開けたまま、微笑を浮かべた
「娘を遺すってのは、辛いな……娘に先立たれることの、次に辛い……絶対泣くだろうからな、あいつは……辛いなぁ」
「おい、力斗……何の真似だ、力斗！」
道明は力斗の肩を掴んで揺さぶる
「俺ぁ、蝶子に会えて……柚子に会えて、みんなに会えて、それに、お前に会えて……良かった……お前がいるなら、もう心配はいらねえや……」
「おい、何だそれ……唐突過ぎるぞ、待てよ！」
「頼んだぞ……道明、柚子を……あいつ、ホントすぐ泣くけど、泣かせんなよ……」
「ああ、分かったから、だから……そうだ、せめて今柚子くんを呼んでくるから、それまででも……！」
焦る道明がおかしいのか、力斗は笑ったまま、目を閉じた
「腹減ったなあ……今、腹の虫が鳴いたら、さぞ格好わりいだろうなあ……」
壬生川　力斗　享年1才6ヶ月

最期まで武人らしく戦死した力斗の亡骸は、本人たっての希望により、
火葬され、その灰は道明が摘んできた一輪の白い百合の隣、庭の片隅に埋められたという

翌日その花に、一匹の珍しい白い蝶が止まったのは、ただの偶然だろうと道明は思った

第八話－１０　「氷釈」　１０２４年5月後編（後書き）

出陣・忘我流水道（力斗・道明・柚子・瑞穂）
訓練・貞光↓ほたる　戦死・力斗

第八話－１１　「露命」　１０２４年６月前編（前書き）

道明　１才４ヶ月
貞光　１才１ヶ月
柚子　７ヶ月

瑞穂　５ヶ月
ほたる　２ヶ月

第八話－１１　「露命」　１０２４年６月前編

＜柚子（ゆずこ）の部屋＞

力斗（りきと）が亡くなってから一ヶ月
相変わらず道明（みちあき）は家を空けがちで、貞光（さだみつ）は部屋に篭りっぱなし、
屋敷の雰囲気は今までと代わりないが、柚子ひとりだけが沈み込んだままであった

きょうも部屋で、力斗の位牌に手を合わせて、線香を焚く
「……お父さん」
つぶやいたら、また何だか泣けてきてしまう

そんな柚子の横で、瑞穂（みずほ）が塩の割符三枚でお手玉しながら、何やら語っている
「いやー今回は相場変わらず、だったけどね！　これはアレよね、嵐の前の静けさね！　ここからグーンと上がるわよ！　来月は割符一枚５万両ね！」

柚子は思う、これからわたしはどうすれば良いんだろう、と
力斗が居なくなってしまい、幸家の跡取りとなっても、自分はまだまだ頼りないままだ
もし次代の当主に自分が家系で選ばれたとしても、その時は謹んで辞退しよう、と柚子は密かに決めていた、自分はそんな器ではない

「一枚５万両になったら……差額は４９９万両！？　うわあ京の都も買えちゃうわ！　甘味屋なんて買ったら、毎日、毎日……ちょっ

と聞いているの果物！」
瑞穂に髪を引っ張られながら、柚子はぼんやりと線香の煙を見つめていた

＜壬生川（みぶがわ）家・軒先＞

その一方、軽い約束をしてしまったな、と道明は少しだけ後悔していた

都に赴いて、東部地区の復興具合を視察に行ってきた朝帰り、道明は壬生川家の軒先に座り込んでいた

「……どうしたもんだかな」
一年前のあの日のように、ここにいると、何だか昔に戻ったようだ
託された親友の娘を、自分はどうすればいいのだろう、導いてやることは出来るが、結婚はまた別の問題のように思えた
そういえば昔から道明は、何事も自分で率先して決めたことはなかった気がする
翠（みどり）の弟子となったのも、当主となったのも、全て巻き込まれて、それからは自分の出来る事をひたすらに走ってきた

そんな時、素っ頓狂な声が聞こえた
「おやぁ、誰かと思ったやねんなぁ」
道明はハッとして、顔を上げた
そこには、あっけらかんと微笑む農民の娘が、記憶の中と変わらぬ笑顔で重い籠を抱えて、立っていた
「……ゆね？」

道明の心臓の鼓動が、一瞬高鳴った
「うん、ゆねやよぉ、いやー相変わらずここは遠いなぁ、病み上がりには辛いわぁ」
どっこいしょ、と籠を置いて、ゆねは婆臭い仕草で肩を叩く

その様子がおかしくて、つい道明は吹き出してしまった
「……やはり流行り病だったのか、言えば医者を手配したのに」
「うん？　あれぇ～」
ゆねは道明の顔をマジマジと見つめた
「……どうした？」
「いやぁ……は、ってウチなんか失礼なことして、すんません、旦那ひょっとして、あの、道明くんのお父さんですかぁ？」
顔色を伺うように、上目遣いでゆねはこちらを見つめる

道明は思わず言葉に詰まった
ノドがひりつく
短命の呪いを背負った我が家の成長速度は、人間のそれとは異なるのだ

「あ、あの……何や、ウチみたいに農家の娘が仲良くさせてもらって、でも、ウチが悪いんです！　都の名家のお抱えだからって、自分らが特別みたいな勘違いして、前もだから、それで病をおして、山道歩いてきたり……」
険しい顔をした道明に怒られると思ったのが、ゆねが弁解を続ける
「だから、その……あんまり、道明くんを怒らんでくださいな……じゃウチ、これで失礼しますっ」
逃げるように籠を置いて、駆け出そうとしたゆねの手を道明が掴む
「待て」
「あ、ああぅぅ」
怯えたように振り向くゆねの手に、道明は賃金を握らせる

「……まだ代金を渡していないだろう、それに、僕は怒っていない」
「あ……あ、でも、こんなに多く」
道明はゆねの手首をゆっくりと離して、彼女に背を向けた
「……道明は今、訳あって屋敷にはいないが直に戻る……それまで、ちょくちょく来て、僕に、道明の話でもしてくれ」
返事を待たずに、道明はゆねの置いていった籠を軽々と担ぐと、屋敷の中に入っていった

ああそうか、僕たちはもう人間ではないのだ、と道明の胸に乾いた風が吹いた
彼女の中の自分はもうこれで三人目なのだ
どうすればいいのだろう
全てを打ち明けてしまえば気持ち悪がられるだけだ

――もう、会わないほうがいいに決まっている

道明は少しだけ立ち止まって、奥歯を強く噛み締める
それでも僕は人間が好きなんだな、と道明は諦めたように思った

＜出陣＞

翌日の早朝、玄関に今回の出撃隊が集合した

「それじゃ今回は、三人でも攻略できそうな……そうだな、去年に奥まで攻め入った鳥居千万宮（とりいせんまんぐう）に出陣しよう」

柚子と瑞穂は先月大怪我を負ったため、留守番だ
「ククク……良いでしょう」

ふたりの後ろから、今月初陣となるほたるが現れる

「今月は、どうかご指導ご鞭撻のほど、よろしくおねがいしますの」
かしこまって礼をするほたると、その父親を思わず見比べる道明
「……貞光の遺伝子は、全部淘汰されたんだな」
「……」
「うふふ……そんなことはございませんわ」
笑顔でほたるがフォローする
「ひとつのことに熱中してしまうところは、私もお父様似だと思いますの」
「……おかげで部屋は、だいぶ綺麗になりましたがね……クク」
そのふたりを見ていると、何だかほたるが貞光をリードしているようにも思える

貞光の初めての天敵か、と思いながら道明は、ふと首の後ろ辺りに視線を感じて、振り返った

「……ん、柚子くん？」
「あ、あの……えと、出陣に行かれる、って聞いて」
両腕に包帯を巻きつけた柚子が、急いで見送りにきたのか、息を切らして赤い顔で玄関に駆け寄ってきた
「そうだが、今回は三人で行くからな、怪我人は連れていけない」
「いえ、そうじゃ、なくて……あの、これ、を……」

柚子が差し出してきたのは、赤い巾着袋に入ったお守りだった

「……お守りか」

「あ、は、はぃ……あの、きっと、効くと思います……」

それは力斗が蝶子と交神した際に、翌月枕元に散らばっていた天上の百合の花びらを集めて、中に詰めた力斗の宝物であり、柚子が初陣の際に父から譲り受けたものだった

「あんまりこういうのは信じないタチなんだが、ありがとう……それじゃ、行ってくるよ」

道明はお守りを首から下げて、ぎこちない笑みを見せる

慕ってくれているという彼女のその思いが、こそばゆかった

「……はい、どうか、お気をつけて……」

こうして、道明、貞光、初陣のほたるの三人は、鳥居千万宮へと出陣したのであった

第八話－１２　「梅雨」　１０２４年６月後編

＜鳥居千万宮（とりいせんまんぐう）＞

荒れ果てたかつての神社を、壬生川の三人が突き進む
虫のように押し寄せる鬼たちを、道明（みちあき）は前列で防ぎながら、ふと思った

「これ、前列が僕しかいないじゃないか！」

鬼に囲まれる道明を、少し離れた場所から涼しい顔で眺めるのは、香家（きょうけ）の親子
「クク……何を今更」
笑う貞光（さだみつ）が、道明ごと鬼を散弾で吹き飛ばす
「ぜ、絶対そうなると思った……お前、そんなところまで先生の教えを引き継ぐなよ！」
狙いの中央にいながらも、鳥居の柱に隠れて難を逃れた道明が、荒い息をつく
「そうか、力斗（りきと）も柚子（ゆずこ）くんも、瑞穂（みずほ）もいないんだよな……」
迂闊だった、まさか自分が気づかないとは、それほどまでに柚子とゆねの事が気にかかっていたのだろうか
「クク……何をおっしゃりますか、これは“オトリ”というれっきとした戦術にてございますぞ……道明殿に鬼が群がり、その中心部を私が爆砕、一度の攻撃で最も大打撃を与える手段ではありませんか」
「その場合、僕の命はどうなるんだ……」

貞光がクク、と笑う

「回復の術が、あるではございませんか……クク」

「痛いのはゴメンだ！」

道明が叫びながら、やはり貞光だけは苦手だ、と再認する

そこで、貞光の娘が横から口を出した

「ほらもう……お父様も、あまり無茶なことばかり、おっしゃらないでくださいませ」

ほたるが忠告するが、出来るなら最初に散弾を放つ前に言ってほしかった、と道明は思った

「ククク……仕方ありませんな、それなら今回は私も前に出ましょう」

貞光の体力はこの時点で、道明の５５０を１００も上回る、６５０を有していた

もともと水全般に優れている香家であったが、貞光のそれは、多少の防具の差も覆してしまうほど飛び抜けている

「なら、最初からそうしろよ……」

そのやりづらい弟相手に、道明は出陣したばかりだというのに疲れが増すのを感じていた

～～

一同はそうして、もはや見慣れた暗黒大鳥居へと立ち入った

鳥居の上に座して、こちらを見下ろしている稲荷ノ狐次郎を、貞光は指差す

「ククク……ほたる、ひとりでアレが仕留められますかな」

「はい、お父様」
父親からの命令に、ほたるは恭しく一礼する
だがそんなスパルタの父親に、道明が止めに入った
「貞光、さすがにそれは無茶じゃ」
「クク……柚子殿は、赤猫お夏を初陣の際に撃破致しましたな」
「だけどあれは、お夏も油断して……それに柚子くんの素質は、一般のそれとは激しく異なる」
道明と貞光が言い争う前で、少女が流麗な仕草で弓を構えた
弓全体が濡れているように霧を放っている、それはいつか訪れる弓使いのためにと代々保管していた水の属性武器“雨切り弓”だ
「クク……ほたるの技の水、どれほどかご存知か」
「いや、分からないが……」
狐次郎が雄たけびを上げ、鳥居の下にいるほたるに向かって、その牙を剥く
降りてくる狐次郎に向かって、ほたるは強く弓を引いた
水滴が地面を叩く音が聞こえ、少女の放った矢が狐次郎の尾を貫通した、狐次郎の巨大な尾に丸い穴が空く
「な……」
「クク……素晴らしい、さすがは清水から成る形無き矢を放つ、退魔の弓……ほたるの技の水は、生後2ヶ月の時点で今の私を越えていますよ」
ほたるが水で出来た矢を次々放つと、狐次郎の体がまるで豆腐のように崩れてゆく

唖然とする道明の前で、ほたるは特別巨大な矢を作り、狐次郎の顔面を木っ端微塵に吹き飛ばす

「……良く出来ました、私の予想通りですな」

戦い終わったほたるの頭を貞光が撫でると、ほたるは弓を背に担ぎ直し、嬉しそうに頬を赤く染める

「うふふ……お父様、ありがとうございますの」

その時道明は、化け物のような姉と妹に囲まれた我が娘を、父親ながら不憫に思ってしまっていた

ほたるの躍進ぶりは、凄まじいものだった

水の属性に弱い敵ならば、生後わずか2ヶ月で父親の放つ国友銃に勝るとも劣らない攻撃力を見せつけ、大将殺しの役目としてすでに十分な実力を発揮していた

道明が守り、貞光が散弾で敵を吹き飛ばし、残った大将にほたるがトドメを刺す

そんな三位一体の役目により、一同は＜梵ピン＞なる術まで入手し、再び狐美姫（くびき）の間を訪れることとなった

＜狐美姫の間＞

道明が以前来たときと同じように、お紺は広間の奥ですすり泣いていた

お紺「亭主がいて、子供がいて、あたしがいて……みんなでご飯食べて……」

道明が前に歩み出て薙刀を構える
朱点童子（しゅてんどうじ）が語っていた話を信じるなら、この者は己が弱さを祟って鬼となった女性なのだ
お紺をこの世に縛りつけるものは一体何なのか、自分たちがその呪縛を解き放ち、成仏させねばならない、それが出来るのは鬼殺しの宿命を持つ自分たちだけなのだから

お紺「人様と同じに泣いたり笑ったりしてさ……普通でよかったのに……」

女狐の血走った目が、三人を睨みつけた
一同の間に緊張が走る

「来る――」

九尾吊りお紺「コーン！　コーン！　なんであたしだけいつもこうなんだよォ！！」

一度倒したとは言え、今度は三人、そして初陣のほたるを抱えている身、道明は呪印を結びながら前に出る
「伽子さん、父さん、先生……力を貸してください、＜石猿＞！」
壬生川家においてただひとりの＜石猿＞使いが、お紺の九本の尾を弾き返しながら、全員に防御強化の術を唱える

「……ほたる行きますぞ、狙うのはあの尾ではなく、狐女本体です

な」

「はい、お父様……ご助力いたしますわ」

道明の背後から放たれた砲火・水矢が、お紺の身体を直接貫いた

お紺「痛い！」

厚い九本の尾の鎧を、伽子のように力ずくで破壊するのではなく、その隙間をかいくぐる、実に貞光らしい姑息な戦術だ

泣きながらお紺が放った＜赤地獄＞の火流を、道明が＜七天爆＞で真っ向から受け止める

「それは……去年に一度、もう浴びているんだ！」

二大火炎術が正面からぶつかり合い、広間の温度は一瞬にして急上昇する

熱流を引き裂くように、ほたるの矢がお紺の肩を刺し貫いた

お紺「ひッ！」

ほたるの矢が次々とお紺に刺さって水に溶けてゆき、お紺は苦し紛れに扇を道明に投げつける

七天爆の術印を結んでいた道明はとっさに動けず、二枚の扇によって身体を切り刻まれ、辺りに血煙が舞った

「道明殿……！」

道明の肩にお紺の放った鉄扇が食い込んでいた、思わず貞光が声を上げる

「……僕は良い、お紺にトドメを……」

道明の顔から血の気が失われてゆくが、ほたるは回復の術を唱えはしなかった

「……かしこまりました、連弾弓佐和（れんだんきゅうさわ）、参りますの……！」

九本の尾が道明の体に迫り、その直前にほたるの手から三本の刃が射られ、それらはお紺の腹に突き刺さった

お紺「あああああああああ！」

その瞬間、九本の尾が道明を叩き潰す直前に、日に溶ける雪のように、空中に飛散してゆく

お紺の四肢が薄れ、その指先が霧へと消えていった

ほたるの奥義は、九尾吊りお紺を討ち取ったのであった

戦い終わって、貞光とほたるが急いで道明の治療に当たる

「……大丈夫、致命傷では無いよ」

腕の深い傷がふたりの＜円子＞によって癒されていく

そういえばほたるは、初陣でこの術を覚えていたのか、と道明は今更のように気づいた

「道明様、先ほどはご無礼を……」

「無礼？　何のことだろう」

殴勲に頭を下げるほたるに、道明は尋ねる

「治癒術よりも、鬼の打倒を優先してしまいました……」

「ああいや、それは、僕がやれと言ったことだし」

「でも決して、当主様の命を軽んじたわけではございませんの……」

心配そうに顔を覗き込んでくるほたるに、何て良い子なのだろう、と軽く感動してしまう

「ただ……あの狐女に弓を射るのが、思いのほか楽しくて……」
「……」
やはり、間違いなく貞光の娘だ、と思う
その時、壁一面に狐火が燃え盛った
「何だ！」
思わず薙刀を掴む道明の前、狐火の中に何やら映像が映し出される
それは、赤子をあやす母親の姿だった
母親はつぶやく
音はなく、その口元が動いた
お紺『きっと……それじゃあ、ね』
母親は眠っている赤ん坊を抱いたあとに、その首をゆっくりと締めつける
「これは……まさか、お紺の」
「……今、黄川人（きっと）、と申しましたな」
赤子の首を折った後に、母親は鳥居の上から首を吊った
あのお紺が、朱点童子の母親、だというのか
「ということは……朱点童子は、産みの親があの相翼院の片羽ノお業であり、育ての親が人間の母親、お紺なのか……」
「……二度も母親を失った、というわけですな」
三人が見つめている狐火が大きくゆらめいて、その後に立ち消えた
「今のは、お紺の作り出した鬼火ですかな……」
そうつぶやく貞光だったが、道明にはひとつだけ気にかかること

があった

「……片羽ノお業は、子供を返して、と言っていたが……それならば、どうして朱点童子は、稲荷神社に捨てられていたのだ、誰かにさらわれたのではなかったのか……？」

それはとても重要なことに思えたが、一同はとりあえず探索を終え、鬼の巣食う鳥居千万宮を後にしたのであった

屋敷に戻ってから、道明が柚子から預かったお守りを彼女に返したとき、お守りは肩から流れ出した血に汚れ、白百合の花びらは真っ赤に染まってしまって赤百合となっていた

狼狽する道明に柚子は「でも、道明さんが……無事で、よかった、です……」とだけ、つぶやいたという

第八話－１２　「梅雨」　１０２４年６月後編（後書き）

出陣・鳥居千万宮（道明・貞光・ほたる）

第八話－１３　「稚気」　１０２４年７月前編（前書き）

道明　１才５ヶ月
貞光　１才２ヶ月
柚子　８ヶ月

瑞穂　６ヶ月
ほたる　３ヶ月

第八話－１３　「稚気」　１０２４年７月前編

＜柚子の部屋＞

蝉の声が辺りに響く、夏の朝

「え、えええっ……」

「いやいやホント、パパってば軒先に座って、ほたるくらいの子とお喋りしてるのよ！」

瑞穂（みずほ）が柚子（ゆずこ）の着物を掴んで、前後に揺らす

「やっぱり、やっぱりパパってロリコンなの！？　だからママみたいな童顔の人を選んだの！？　ねえ柚答えなさいよ！」

「う、う、うぅ……」

柚子の部屋に、瑞穂が血相を変えて飛び込んできたのはつい先ほどのことだった

門の前で、農民の娘と父親がお喋りをしていたのを見て、声をかけようとしたが思わずためらってしまい、その鬱憤を柚子にぶつけているのだ

「いやぁでも、妹くらいの年なのに、あたいはママって言わなきゃいけないのかあ」

「え、えええ！」

形勢が逆転し、今度は柚子が瑞穂を押し倒す

「ま、まま、ままままって……あの、ど、どういう！？」

柚子の顔が真っ赤で、まるでリンゴのようになっている

「どういうも何も、すっごい仲良さそうだったもの、あれは完璧にパパ、惚れているわね……」
頭を殴られたように、柚子がぐわんと揺れた
そこで瑞穂はハタと気づく
「あ、そういえば柚ってば、パパのこと好きなんだっけ、あーららごめんなさいね、あたいってばデリカシーがなくてぇ」
何やら急にイキイキとした表情に変わった瑞穂が、にやりと微笑む
「でもやっぱりぃ、パパも同じ屋敷で過ごす人より、遠くても自分にはないものを持った人が良いのねぇ……」
柚子が、うっうっ、と涙を目一杯に溜める
「大体さぁ、柚ってば泣き虫じゃない？　パパ、正直泣き虫嫌いなのよね、もしかしたらすごく鬱陶しく思っているかもよぉ？」
「あ、あぅぅ……（；д；）」
獲物を弄ぶ猫のように笑う瑞穂の前に、すっと影が現れた
「……うふふ、それはどうでしょう」
二人の間に入ったほたるが、ニッコリと笑う
「ありゃ、ほたる」
「まだ諦めるのは早いですの、柚子様」
ほたるは涙を浮かべた柚子の肩を抱いて、清楚に微笑む
「同じ家にいて、同じ戦場に立つ者同士……チャンスは、柚子様の方が、圧倒的に多いのですわ」
「うっ、うっ……でも、でも、泣き虫はダメだって……（；д；）」
「他に打つ手はいくらでもありますわ……例えばこの雑誌に書いてある、この項目」
ほたるが袖口から雑誌を取り出し、コラム・年上に好かれる魅力

作り（著者・英雄（ひでお））に書いてある一文を読み上げる

「年上の人は健気で、従順な可愛い子に弱い……ズバリその母性本能をくすぐるべし、とありますわ」

ほたるは柚子に優しく微笑みかける

「これから、私と瑞穂様が……柚子様に、恋の必勝法を教えてあげますわ」

「え、え、え……」

「うふふ……私たちを、信じてくださいませ」

ほたるは微笑みながら、柚子の手を握る

瑞穂がそっと耳打ちした

「……ちょっとほたる、どういうことなの？」

ほたるは瑞穂に、小声で返す

「だって……お屋敷中のお片づけが終わりまして……やること、なくなってしまったんですもの」

「……なるほど、ね」

瑞穂も笑い返す、このほたるという女、さすがは搦め手の香家の娘だ

妹ふたりは、柚子に微笑みかける

諦めさせるより、玉砕する現場を見るほうが何倍も楽しいのだ

「さ、柚子様……これから、私たちの言うことを、しっかりと聞いてくださるのですよ」

「……これを守れば、パパも柚にぞっこんになるからね？」

勢いに押されたように、思わず柚子はうなずいた

～～

「え、えええええ！？」
「良いですか、必ず守ってくださいませ」
「そ、そんなの、む、無理……恥ずかしくて、死んじゃう……（；д；）」

情けない顔で弱音をこぼす柚子に、瑞穂が怒鳴る

「そんなことで、女が男を勝ち取れると思ってんの！？」
「べ、べつに……勝ち取れなくても、いいよぉ……わたし、遠くから見てるだけでも……」
「何言ってんのよ！　壬生川（みぶがわ）の人間が、普通の子と恋をして幸せになれると思っているの！？」

瑞穂が割合まともなことを叫ぶ

「そ、それは……思わない、けどぅ……」
「でしょ！？　これは柚のためだけじゃなくて、パパのためにも言ってるのよ！　あたいは……パパと柚に、幸せになってほしいの、よ……」

わざとらしい仕草で俯く瑞穂を、ほたるが慰める

「あらあら……瑞穂様ってば、何てお優しいお方……」

目元に布を当てるほたる

「う、うぅ……分かったけどぅ……でも、絶対変な人って思われるよぉ……」
「それでも渋るなら、仕方ない」

難しい顔で、瑞穂は小さなお守りを掲げる

「あ、そ、それっ……お父さんの、お守り！？」
先月道明（みちあき）から返してもらったものを、どうして瑞穂が持っているのか
「ねえほたる、＜お焔＞ってどういう呪歌だったっけ、小さな火の玉で布くらいなら燃やしきれる、あの＜お焔＞の呪歌」
「あらあら、瑞穂様ってば、お忘れになったのですね……では、私が代わりに歌ってみせましょう」

「待ってぇぇぇぇ（；д；）」
人質を取られて、柚子が泣きながら叫ぶ

「ううん、やるって……やります、やりますからぁ……」
「それでこそ次期当主♪」
「頼もしいですわぁ……」
瑞穂とほたるが、泣きべそをかく柚子を見て、嬉しそうに微笑み合った

＜壬生川家・居間＞

京から戻ってきた道明は、先月に入手した＜梵ピン＞という術の解読を急いでいた

「……どんな神が、これほど緻密で複雑な術を思いつくものか」
道明は眉間を寄せて、それから目元を指で押さえた
かれこれ数時間格闘しているが、異国の文字で書かれたようなその呪言の発音は、思ったより容易ではなさそうだ

「参った……これは勉強よりも、天性の素質の問題かもしれないな」
壬生川家の誰もが解けなかった七天爆の術書を、わずか生後3ヶ月で読破した道明だからこそ、諦めることは容易かった

その時、居間の障子から、柚子が顔を覗かせてきた
「ああ、柚子くんも見るか？　梵ピンの術書」
「あ、えっと……あ、はい」
ゆっくりと現れた正装の柚子は、今月元服が済んだためか、少女から大人になりかけの姿で、正直道明も柚子は綺麗になったな、と感想を抱くほどであった

道明はお盆に急須を載せてやってくる柚子に、術書を差し出す
「ああ悪い、お茶を淹れてきてくれたのか、すまないな」
「あ、いえ……」
何だか柚子の様子が変だ、やたらよそよそしい

空気が重いのを感じながら、道明は柚子から茶を受け取り、軽く口をつける
「あの、新茶って言うらしいんですけど、お味は、いかがですか……“あなた”」
道明が盛大に茶を吹き出した
「あ、あああ、ごめんなさい、ごめんなさい！」
ふきんで長机を拭く柚子に、道明が目を白黒とさせる
「い、いや、今なんて……？」
「ご、ごめんなさい……あ、あの、お口に合いませんでしたか“あなた”」
「どうして僕が君の亭主なんだ！？」
まさか力斗（りきと）の遺言が柚子にも知られたのか、と道明は内心ですご

く動揺する

「あ、いえ、そうじゃ……あの、な、なんとなく……」
「何となくだって！？」
道明が声を張り上げると、柚子がううっと涙を浮かべる
頭になぜか力斗の声が響き、道明は咳き込むフリをして、そっぽを向いた

「君はそんなことをするような子ではないと思っていたが……ま、まぁ……別に、それは良いけど、ほ、ほら、梵ピンを見てごらん」
「あ、はぃ……“あなた”、見せてもらいますね」

その様子を、縁側から顔だけ出して眺めているのは、瑞穂とほたるだ
「あまーーいいいいーっひっひっひ」
身をよじって悶える瑞穂の横、ほたるが微笑を浮かべながら観察を続ける
「あらあら……こうして見ると、何だか学者先生とその奥さんみたいですねぇ……」
道明に寄り添いながら、柚子があれこれと術書について質問しているのが見えた

「そ、そうです、あの……“あなた”」
「……何だい、柚子くん」
柚子はもとより、道明の顔色も全体的に赤く染まっている
指先をもじもじと動かして、それから柚子は道明の顔を見つめた
「あの……わたし、のこと、も……柚子、って呼んで、ください」

「な！」
普段の柚子から及びもつかない積極的な行動に、道明の思考が追いつかない
「あ、いえ……おまえ、でも、結構です、けど……」
「こ、これは、夫婦ごっこか何かかな……？」
それともタヌキに化かされているのだろうか
「あの、お、お願いします……も、物のように扱って、ください……」
いつもより強い口調の柚子に押されて、道明もつい口走ってしまう
「わ、分かったよ……“柚子”」
「……“あなた”」
柚子の潤んだ大きな瞳に見つめられ、道明はつい力斗の言葉を思い出す
『柚子も、お前を慕っているからよ』
いやこれはそういうことでは、と頭の中で弁解しながらも、親友の娘はじっと道明の目を捕らえて離さない
力斗の遺言が耳に残って離れない
「……“あなた”」
柚子のか細い声に、現実に引き戻された
目の前に、柚子の桜色の唇がある
「……柚子」
道明の頭が白くなり、やがてふたりの距離が徐々に近づくかと思われた時、
庭からイツ花ののん気な声が聞こえた

「あらあら、お二人とも、そんなとこで何やっているんですかァ？」

道明は素早く柚子から離れ、立ち上がる

「イツ花さん、そこに誰かいるのかい！？」

「え、瑞穂さまとほたるさまがいらっしゃいますけどォ？」

イツ花の声に、隠れていた瑞穂とほたるが愛想笑いを浮かべながら姿を見せた

「あ、あはは、パパこんにちはぁ」

「うふふ……ごきげんよう、当主様」

「……君たちは、そんなところで何をしているんだ」

押し殺した道明の声に、ふたりの少女は冷や汗を浮かべる

「……まさか、今までの……君たちが柚子にやらせていたのか……」

うっ、と引きながら、瑞穂が叫ぶ

「ち、違ッ、ちょっと柚！　パパに違うって言ってよ、お守りがどうなっても良いの！？」

「あ、う……」

瑞穂が掲げたお守りを見て、イツ花があらぁと声を上げた

「あ、それ門司さまの学問のお守りじゃないですかァ、懐かしい」

「え、誰」

固まる瑞穂に、イツ花が嬉しそうに解説する

「いやァ、門司さまが前に無くなった無くなったってずいぶん叫んでて……やっぱり、伽子さまがお部屋に取っていったんですネェ」

「え、じゃあ……お、お父さんのお守りは……？」
「百合の花びらのお守りなら、確か戸棚の上から二番目の一番左に、入っているはずですよォ」
「あ、そう、なんだ……」
ニコニコと微笑むイツ花

つまり先月道明が持たされたのは、形は似ているが、ただの学問のお守りだったというわけだ

「何よそれ！　キイイイ、こんなものぉ！」
瑞穂はお守りをビリビリに破いて、地面に叩きつけて、何度も踏みつける

「う、うぅ……そうだったん、だ……思い出したら、恥ずかしくて死んじゃいそう……」
その場にへなへなと座り込む

「……瑞穂、ほたるくん、僕は八代目当主として、仕置きすることにしよう」

髪を揺らめかせる道明の迫力に、瑞穂とほたるが思わず背を向けて走り出す
「ちょ、お仕置きなんて受けてたまるかっ、パパのバーカ！」
「うふふ……ごめん遊ばせ、ですわぁ」
悪ガキふたりに、道明の術が完成した
「……＜七・天・爆＞！」
道明の放った巨大火球が、庭とふたりを飲み込んで爆砕した

第八話－１４　「血槍」　１０２４年７月後編

＜白骨城（はっこつじょう）＞

貞光の部屋にあった書置きには、一言「しばらく留守にします」とだけ書かれていた

「そういえば……お父様、出雲の鉄を自分で選定したいと、常々から申しておりましたの」

「……あいつは、出雲まで行ったのか」

なんてバカ野郎だ、と内心で毒づく

というわけで、今回は道明（みちあき）、柚子（ゆずこ）、瑞穂（みずほ）、ほたるの四人での出撃である

「いだいよぉ……うぅ」

あちこちに包帯を巻いた瑞穂の泣き言を、道明が切って捨てる

「自業自得だ」

瑞穂と道明の間で、柚子がおろおろとしていた

「さ、それでは参りましょう」

ほたるが皆にニッコリと微笑む

どうしてほたるは無事なんだろう、と思わずにはいられない瑞穂であった

～～

一同は戦場跡を走り抜け、城内に突入し、もはや迷う事無くアシゲの祭壇へと向かう

恨み足に、柚子が大槌を叩きつける
「え、えええい！」
昔に比べれば、度重なる激闘の末に、柚子の大槌もそれなりに当たるようになっていた、道明の見立てでは命中率7割強というところだろう
柚子の大槌を正面から受けた恨み足は、砂の塔のように崩れ去る

一撃で巨大な骨を粉砕した柚子を見て、ほたるが目を丸くした
「あらあら、まあまあ……」
コンコンと柚子の大槌を叩いて、ほたるは感嘆の声を上げる
「ふぇ……？」
「柚子様って……本当に、壊し屋だったんですのねえ」
「え、えええ……？」
しみじみとつぶやくほたる

「ああそうか、ほたるくんは、柚子くんの戦いを初めて見るのか」
「ええ、術がお出来になるのは存じておりましたけれど……屋敷の印象から、箸も持ち上げられない方かと」
米俵のような大槌をひょいと担ぐ柚子を眺めながら、ほたるがため息をつく

「そうと分かっていましたら……この前、柚子様にあんな無茶は表立って実行しませんでしたのに……瑞穂様に、後ろからこっそりと指示だけ」

「聞こえてるわよほたる！」
一応叫んでから、瑞穂は先に進んでいく壊し屋の背を睨みつける
「まったく、本当にね……普段はどんくさいくせに、あの果物め……」
知らず知らず爪を噛んでいることに気づいて、瑞穂は慌てて指を離す、爪の手入れが無駄になってしまう、危ない危ない
それにしても、本当に、柚子は凄いのだ
「どうした瑞穂、行くぞ」
父親の声に引かれて、瑞穂はふてくされたように返事をした
「……はぁ～い」
何となく面白くない、はっきりとした気持ちではないけれど
～～
四人は＜速瀬＞を重ねかけつつ、＜寝太郎＞を駆使し、必要最低限の戦闘に留めるように突き進む
白骨城は高い
道明は本気で一ヶ月でこの城を攻略するつもりだった
テウチの祭壇に入ると、例によって例のごとく、中央に青いつづらが設置してあった
道明はふと、このつづらって冒険者が来るごとに、鬼が用意しておくのだろうか、などと準備する現場を想像してしまいそうになる、あまりにも情けない
今更こんなものに、戦史を読んでいる壬生川（みぶがわ）家が引っかかるはず

が、と向き直ると、我が娘が箱に飛びつくところが見えた

「きゃー、お宝、お金、おまんじゅうう」

道明が顔に手を当てると同時に、瑞穂が左右から迫る巨大な腕骨に悲鳴を上げる

「えええ何これええ！」

右のカイナを道明が防ぎ、左のカイナを柚子が受け止めた、それを見て瑞穂が頬を膨らませる

「ちょ、ちょっと、何で果物がかばうのよ！」

「え、え、えぇ」

「こんなの、あたいでも避けられたのに、余計なことを」

舌打ちして薙刀を構える瑞穂に、柚子が思わず頭を下げる

「あ、それは、その……ごめんなさい」

少し離れたところで、ほたるが素っ頓狂な声を上げた

「あらあら……骨型の鬼が相手では、私の弓は突攻撃ですので、半減してしまいますのね」

「え、じゃあ……私の大槌は、打属性だから、1．25倍……？」

「ふたりとも、それはゲームが違うよ！」

※俺屍にはそういった武器によるダメージの差はありません

それはそうと、道明が＜石猿＞を唱え、瑞穂が皆に力士水を振りまき、強化された攻撃力で柚子とほたるのふたりが積極的に左右のカイナを攻め立てる

「うふふ……面白いくらい削れますわね」

ほたるの雨切り弓がうなりを上げ、左のカイナを貫いた

「……何て威力」

腕力では瑞穂よりも非力なほたるだが、属性弓のおかげでそのダメージは柚子に迫るほどの威力と化していた

瑞穂のカマイタチは、もうボス級の相手には通用しない
再生の暇も与えず、柚子が残った右のカイナを叩き潰す
薙刀士という職業上の理由かもしれないが、大打撃を与えられない瑞穂は、そんな姉妹に挟まれて、わずかな居心地の悪さを感じてしまっていた

～～

左右カイナ撃破後、少し休憩して、一同は更に奥を目指す
その途中で黒ズズ大将を倒しつつ、たまった経験値を消化している途中、小さな巻物を入手した
「……＜速鳥＞の術」
軽く流し読みをすると、どうやら速瀬の上位術が手に入ったようだ
「そういえば、古墳の土偶たちが使っていた気がするな」
「というわけで、早く覚えて楽にしてよね、果物」
戦闘中に通常攻撃ばっかりするので、いつしかマップ上での回復・支援術は柚子の役目となっていた
技力を利用し、腕力や身体能力を向上している壊し屋の極意だが、それでも素質の段階で柚子の技はズバ抜けている
「う、うん……頑張る」
「頑張ります、でしょ？」
「な、なんで、敬語……は、はぃ、頑張り、ます……」
瑞穂に冷たい目で射抜かれ、ついつい頷いてしまう柚子だった

～～

白骨城を進むこと、17階層
ついに壬生川一族は、英霊の間と呼ばれる最上階へと昇りつめた

＜英霊の間＞

死者を弔うように、ロウソクが周囲に灯っている中を、四人は進む

「城と言っても、所詮は朱点童子の作り出したもの……天守閣も殺風景だな」

「何だか、怨念の渦巻いている場所ですわねぇ……」

「ほたるの声だと、緊張感が無くなるわね」

その大広間の中央、死者たちの骸骨がうずたかく積まれ、小さな山が作られていた

「死んでまで朱点に利用され……さぞかし無念だろう」

道明が近づいたその時、

○「そんなことはねえぜ、永遠の命ってのは悪くねえ気分だ」

カタカタカタと音を立てて、白骨化していた頭蓋骨が突然声を上げた

「ひっ」

柚子が泣き出しそうな顔で、一歩下がる

やがて骸骨は頭だけ浮かび上がって、忍び笑いを漏らす

「俺様は悪党の中の悪党、大江ノ捨丸よ」
「捨丸……？」
道明が眉根を寄せる
「ご存知なのですか？」
「……ああ、京都で朱点の名が聞こえ始めた頃、都で変死した武士の名だ……いや、公家の養子だったかな」

「何でえ、知られちゃってるたあ俺様も有名人になったものだナ」
ケタケタケタと笑う捨丸は、調子に乗ったのか辺りをふわふわと漂う
「確か、朱点童子（しゅてんどうじ）の故郷……大江山京（おおえやまきょう）を滅ぼした頭領の名も、捨丸」
「物知りだな兄ちゃんよ、ケケケ、だがありゃ帝さまぁのご命令で、俺様はただの使いっぱしりよ……まあ、好き勝手やらしてもらったけどナ、ケケケ」
捨丸が浮遊して柚子に近づくと、柚子は悲鳴を上げながら捨丸を手で払い落とす
「きゃぁぁ」
「いてえっ……ったく、これだから女ってやつぁ……」
回りながら去ってゆく

「ところが、だ！」
「まぁ……捨丸さんの顔がパッと明るく」
「いや表情なんて分からないでしょガイコツ」
さらにぐるぐる周りながら、嬉しそうに捨丸は叫ぶ

「どういう風の吹き回しか知らねェが、俺たちにもあの世の門を開いてくださるらしいんだ、神様がよォ」
「……何だと、君のような奴に……？」
大江山京を滅ぼした男ということは、朱点童子を生み出す遠因に

なった男ではないのか
神は一体何を……？

「その条件ってのがなあ……“おまえたち一族と戦うこと！”ときなすった、てっきりあの方はおまえたちの後押しだと思ってたゼ」
高速回転しながら訳の分からないことを言う捨丸に、道明は薙刀を構える
「まッ、自分の子供を１０人も産んだ女房でも、心の底のよどみの色までは亭主にゃ見せねェだろうけどよ」
「お前は何を、何を知っている……？」
捨丸はそこで回るのを止め、口を大きく開いて笑った
その目が鈍く緑色に光り、捨丸の体が突然巨大化してゆく

大江ノ捨丸「女心はわからねぇもんだナ、ケケケっ……悩みながら死になッ！！」

正体を現した捨丸は、見上げるほどに巨大な頭蓋骨となり、その上部に二本の巨大な角が生え、さらに奇怪なのは本来耳のつく場所に赤と青の人面が付着していた

「怪物め……！」
何度も化け物と対峙したことはあったが、捨丸のその全形はあまりにも異形だ
捨丸はその巨大な口を開く
「喰らいやがれ！」
噛みついてくるのかと守りを固める四人に、捨丸の眼窩が緑色に輝いた
その瞬間、捨丸は骨片を口から吐き出した

「な！」
「えええ！」
土砂のように押し寄せる骨片に全身を強打され、四人は体力を削り取られてしまう
「＜春菜＞！」
慌てて回復の術を唱える道明と、皆に力士水を振りまく瑞穂
柚子とほたるはそれぞれ散開して、捨丸の本体を取り囲むが、その時右側に張り付いていた赤い人面が力を溜め始めた

「え、えええぇ、左右も動くんだっ」
「力溜めされると、怖いですわねぇ……」
柚子とほたるは狙いを捨丸右に移し、その体力を一気に奪う
「こ、これで……相手の番が来る前に、次で仕留められる、かな……？」

「ケケケ！」
その時、中央の頭部が＜円子＞を右側に唱え、４２０を回復させる
「……瑞穂、＜石猿＞を修得したって言ってたよな」
それを見て、道明が次手に向けて備えるため、隣にいる娘に声をかける
「う、うん……一応」
「よし、行くよ」

道明と瑞穂の周囲に、土の神気が渦巻いてゆく

「……涼かさや・我に弾ける鬼の爪！」
「岩となり・矛も剣も折れにけり……！」
親子の技力が併される

『＜石猿＞！』

四人の周囲に強力な鎧が形成された瞬間、右側の頭部が溜めた力を打ち放った
その相手は運悪く、壬生川家の中でも最も防御力の低いほたるだった

「あらぁ」

赤い頭部が口から放った石柱のような角が、＜石猿＞の甲冑を破り、ほたるの胸に突き刺さっていた
にこり笑って、ほたるは血を流しながら、ゆっくりと倒れた

「少し……調子に乗りすぎでしたわね……」

「く……！」

道明は引き続き＜石猿＞の術を唱え続けるが、瑞穂には分かっていた
今の一手は瑞穂が術の詠唱の手順を一個抜かしてしまったため、不完全に発動した結果だ、道明はそれに気づいていたはずだが、何も言ってこない

瑞穂は奥歯を噛む、情けなくて涙が出そうだ
若いほたるや泣き虫の柚子ですら頑張っているのに、自分はこのザマか、何かに突出したくて必死に覚えた＜石猿＞の術も、中途半端なままなのか

「瑞穂、手が止まっているぞ！」

父親の怒声に我に返ったとき、瑞穂の目の前に捨丸が迫っていた

「死ねやアマァ！」

急速に迫った鬼に対し、その前に柚子が躍り出た
突撃してくる捨丸を、柚子は大槌で打ち返す

「柚……」
思わずその場でへたり込む瑞穂を背中にかばい、柚子は大槌を高く構えた

右と左の捨丸と中央の捨丸、頭蓋骨は三匹、もしかして同時に倒さなければ左右のカイナのように、復活する可能性も考えられる

柚子は、大槌を掲げる
そんな柚子に降りかかる骨片や角を、道明が前に進み出て弾き返す、そして柚子の準備が整った

「壊し屋奥義その参……大地震(だいじしん)！」
柚子が不動の大槌を地面に叩きつけると、衝撃が広がった

朱点が力を結集して作り出した白骨城の広間に軋みが入り、大地から伝わった波動が、捨丸の左右をその瞬間に破砕させた

「ギャー、何だてめえ！」
怒りに我を忘れて突撃してくる捨丸に、柚子が大槌を持ち直す

瑞穂は柚子の目を見た、泣きはらしても、真っ赤になってもいない、それは戦うことを決めたひとりの武人の目だった

捨丸と柚子の影が交わる瞬間、柚子が叫んだ
「奥義――悶絶圧(もんぜつあつ)ッ！」
乾いた木を打ち合わせるような澄んだ音が響いた
柚子の放った奥義の残炎が薄れゆき、大江ノ捨丸はその異形の体躯を砂に変えた

深呼吸するようにゆっくりと息をはいて、柚子はその場にしゃがみこむ
「……大丈夫か、柚子くん」
「え、あ……はい、何とか……」
道明が柚子の肩を抱いた

今でこそ奥義の連打に慣れているかもしれないが、柚子は確実に命をすり減らしているのだ

「……ありがとね、柚」
瑞穂もまた、柚子に手を貸す
「あ、うん……瑞穂さんが、無事でよかった……」
そう言って、柚子は力なく微笑む
瑞穂は照れ隠しに怒ったような顔で柚子の手を引いて、ふと気づいた
「あれ、ちょっと柚、血がだらだら出てるじゃない！」
「え、あ……」

技力が尽きていた柚子に代わり、瑞穂が＜円子＞を唱える

「ホントだ……血だ」
瑞穂は気づかれないように、こっそりと肘の先をつねってみたが、柚子の顔色は変わらない

腕の感覚がなくなっているのだ柚子は、それが奥義の打ちすぎかあるいは普段からかは分からなかったが
瑞穂はその時本能的に、この少女が背負っているものの重さの片鱗に触れてしまった気がした、そして、この姉には一生敵わないという劣等感もまた、背負い込んでしまった

「そこまでだ！」
捨丸の叫び声が、広間に響いた
そこには、人間の姿となった捨丸が、気絶しているほたるの首を掴んで、その胸元に小刀を当てていた
「貴様、まだ生き残っていたのか！」
術印を結ぼうとする道明の前、捨丸が小刀を振り上げる
「ヘッ、俺は魂だけの姿だけどよ、この刀は本物だゼ……良かったら、試してみるかい！」
生前と思われるその下卑た表情を見て、道明が歯噛みする

「ハナから俺はおまえたちの肥やし代わりだったのよ、そんなことは分かってらあ、どうせ捨て犬人生だ！」
ほたるを見下す捨丸の目が細まる
「息があんな……まだ、この小娘」
「何をする気よ、このオヤジ！」
捨丸は底冷えのするような気味の悪い目で、瑞穂を見返した

「ケケケっ…あんなかわいい顔して、鬼の俺たちを手玉に取る女神だ……朱点よか恐ろしいゼ、手土産のひとつやふたつ持っていかねえと、本当に働いたかどうか分からねェだろ！？」
この距離で捨丸の腕から小刀を弾き飛ばせるかどうか、道明は計算する
懐刀を抜き、投げ飛ばし、確実に捨丸の手首に突き刺さなければならない

「くわばら、くわばら…！」
「や、やめて……ッ！」
柚子の悲鳴に合わせて、道明が腰の裏から短刀を抜き、打ち出そうとした瞬間、

一本の槍が凄まじい速さで飛来し、小刀を振り上げた捨丸の右肩から先を吹き飛ばした
槍は背後の壁に突き刺さり、踊るように揺れる

英霊の間の誰もが、呆然とした

「げ、ゲエエエ！？」
その中で、捨丸だけが恐ろしいものを見た表情のように顔を歪ませ、叫ぶ

「ンな、バカな、テメエは、テメエは……！？」

柚子が思わず振り返るが、そこには誰もいなかった
ただ、懐かしい香りだけが残っていた
瑞穂がほたるを救い出し、道明が捨丸の首を刎ねると、広間に声が響いた

大江ノ捨丸「ケ、ケケケ……せいぜい残り短い人生を、楽しむんだな……ケケケケ！」

大江ノ捨丸の魂が、天上に召されていくのが見えた

柚子は壁に突き刺さった槍をしばらく眺めていたが、道明の声に呼ばれてその場を離れた
ほたるは養老水により一命を取りとめ、壬生川家は辛くも死者を出さずに、夏の白骨城を後にしたという

第八話－１４　「血槍」　１０２４年７月後編（後書き）

元服→柚子　出陣・白骨城（道明・柚子・瑞穂・ほたる）

第八話－１５　「疑心」　１０２４年８月前編（前書き）

道明　１才６ヶ月
貞光　１才３ヶ月
柚子　９ヶ月

瑞穂　７ヶ月
ほたる　４ヶ月

第八話－１５　「疑心」　１０２４年８月前編

捨丸を白骨城で撃破してから一ヶ月が経ち、まさに夏は盛りを迎えた

ふらりと帰って来た貞光は、すっかり夏バテ気味で、ほたるの看病も忘れて昼間から水風呂に浮かんでいた

屋敷では、相変わらずイツ花が精力的に動き回っていたり、常に気だるい表情の道明が都と壬生川家を往復する毎日を過ごしていた

そんな中、柚子とほたるはまだ先月の大怪我を引きずっていたのだった

＜道明の部屋＞

蒸し暑い部屋、道明が柚子の両腕に包帯を丹念に巻きつける

あいにく真昼で、お互いに着衣しているので、アレなムードは微塵も出ていなかった

「よし、これで良い」

堅結びにして、その両腕の端を首の後ろへ回し、あて木で固定する

柚子は、直角に固定された自分の両腕を眺めて、つぶやいた

「あの、これ……道明さん、ご飯、食べられません……？」

「君の怪我で一番酷いのは、両腕だ、奥義を打ちすぎた反動で、骨がボロボロになっている」

柚子は袖の部分をたすきでまとめ、二の腕から先を包帯によって固められていた

「だから、京の都で常盤ノ秘薬に浸けこんだ白布を買ってきたのさ、お医者様も、これを巻けば半日で治るって言っていたしね」

「あ、なるほど……きょうだけ、なんです、ね」

不自由な両腕を見下ろす、指一本も動かせなさそうだ

詳しく聞かないまま両腕を縛られていた柚子も柚子だが、それはともかくとして道明が告げる

「僕はまた、都に戻らなきゃいけないから」

「え、ええ……」

このまま置いてけぼりにされるのだろうかと、不安な顔つきになる柚子に道明がフォローを入れる

「イツ花さんは、ほたるの看病や家のお仕事があるし、僕が傍にいて上げられたら良いのだけどな……まぁ、柚子くんのお世話は任せたよ」

道明が外に声をかけると、障子を開いてゆっくりと少女が現れた

「うん、任せて、パパ」

瑞穂（みずほ）がニッコリと微笑んだ

＜壬生川家・居間＞

道明が出て行って、ふたりは居間に移動した

「でも……先月は、本当にありがとうね、柚」

「え、えぇ……？」
今までにない慈しみに溢れた表情で柚子の頬を撫でる瑞穂に、柚子は少し後退する
「あのね、あたい……今までずっと素直になれなかったんだけど、でも、柚に命を救われて、改心したの……」
「か、かいしんって……」
瑞穂はそこで、柚子にゆっくりと頭を下げた
「ごめんね、柚……ずっと、酷いことしてたけど、あたいを許して」
「そ、そんな、許すも、許さないも、ないよぉ……」
ありえない態度の瑞穂に、思いっきり狼狽する柚子は、手を振れないので何度も首を振る
「許してくれてありがと、それじゃ塩の相場も１８両上がったし、心を入れ替えてあたい、一生懸命柚のお世話をするからね」
ニカッと笑う瑞穂に、柚子は塩の相場は関係ないんじゃ、と思いながらも口を出せない
あまり人を疑うのを良しとしない柚子ではあるが、それでも小動物の防衛本能さながらに感じる、瑞穂がおかしい
それから瑞穂は穏やかな口調で、柚子を介護していった
両腕の使えない柚子のために、先導して障子を開けてあげたり、本を開きページをめくってあげたり、イツ花が作ってきた粥を、レンゲでよそい、吹いて冷ましてから口元に運んであげたり
手馴れた仕草で看病してくれる器用な瑞穂は、柚子にはとても心強かった
そのたびに瑞穂が何かを手帳に書き込んでいたのが、引っかかったが

「ね、ねぇ、瑞穂さん……さっきから、何を、メモっているの？」
お昼飯時、柚子は思い切って瑞穂に尋ねてみた
「んー？」
「さっきから大事そうに……手元の紙に何か書き込んでいるけど、その、お術の、お勉強？」
「ううん、これは“柚に対する貸し手帳”よ」
「な、なにそれ！？」

背中が戸棚にぶつかるほど後ずさりする柚子に、瑞穂は微笑む

「ほらあたい、先月柚に命を救われたじゃない、あれはさっきのやり取り、ってかあたいの話術でチャラにしてもらったけど」
「チャラ……」
「でも、またいつあんな事態が起こるかわからないから、そのときとってもお強い柚姫に身体を張って助けてもらうときのために、今のうちにたくさん貸しを作っておこうと思って」
「貸し……」

引っかかるキーワードが何個も登場する

「だからとりあえず、２０個ほど貸しをと、さっきからメモっているのよ」
瑞穂が突き出したメモ帳には、事細かに文章がつづられていた
「とりあえずほら、“十六：果物の口に粥を突き出してやる、普段なら熱いまま食べさせて火傷した焦げ果物を見てあざ笑うところだけど、貸しを作るために冷ましてあげた、あたい優しすぎ”」
「よ、読み上げないでっ（；д；）」
「“十七：読み上げないでと泣きながら懇願する果物のために、あたいはしぶしぶ止めてやる、思うように出来ずストレスがたまる、

あたい優し姫”」

柚子は次々と増えていく項目に、愕然とする

「あ、あとたった、みっつ……」

もしかしたら、あと三項目を終了したら、普段のあの瑞穂に戻るのではないだろうか

“普段なら熱いまま食べさせて火傷した焦げ果物を見てあざ笑う”の声が、柚子の中に反芻する

「う、うぅ、うぅぅ……」

「あれあれぇ、どうしたの柚、何かしてほしいことあるぅ？」

瑞穂の微笑む顔が、柚子の中でまるで般若の形相と化す

「な、ななにも、ないよっ（；д；）」

「あらぁそう……ご飯、もういいの？」

「え、あ、う、うん……」

二口食べただけの湯気立つ梅粥を、瑞穂が持ち上げる、その目が光ったように思えた

「じゃあこれは……あたいが片付けて“あげる”ね」

「は、あ、あああ待って片付けないでぇぇぇ（；д；）」

あからさまに瑞穂が舌打ちして、柚子の前に器を乱暴に戻す

ホッとする柚子に、瑞穂が微笑む

「はいそれじゃ、せっかく片付けようと思った茶碗を、わざわざ柚の懇願で戻してあげたからね、十八個目」

「ず、ずるいよっ（；д；）」

「それじゃ柚は、どうやって食事するのかしら……両手使えないの

に、どうやって、ウフフ、見ものね」
半泣きの柚子の顎を撫でる瑞穂、その笑顔はどう見ても悪女そのものだ
「う、うぅ……犬、食い……？」
「あらら……麗しき幸家のお嬢様が、そんなはしたない真似を、とんだ牝犬よね、これはパパに報告しなきゃ」
「し、しないから、み、道明さんには、報告しないでっ（；д；）」
瑞穂が素早く筆を走らせる
「はい、報告しないようにして“あげました”、十九個目」
「うぅぅ……」

残り一個、仕方ないので柚子は貝になることを決めた
粥から少し遠ざかって、居間の端っこに体育座りをする

「が、がまん……あと、半日……」
「うふふふ」
瑞穂の口車にさえ乗らなければ……、と柚子は目を閉じる、耳は塞げない
「ねぇ柚姫さぁん、なにかしてほしいことはありませんか？」
悪魔の囁きに、目をつむりながら柚子は首を振る
「あらぁそう、残念」
そう言うと、瑞穂はやけにあっさりと部屋を出て行った

しばらく経って、柚子が顔を上げる
「あれ……お部屋に、帰った、のかな」
柚子が辺りを見ると、居間の机に冷めた粥が置いてあるだけだった
今は夕方、半日まであと数時間だ、このまま何事もなければ良いが

何で自宅でこんなに怯えなきゃいけないのか知らないが、柚子はお粥をもったいなさそうに見つめてから、立ち上がって、障子を足

でたどたどしく開く

「イツ花さんに、ごめんなさいしなくっちゃ……お粥、残しちゃって……」

イツ花を探して、夕暮れの差し込む屋敷を歩いていると、庭の池に浮かぶ貞光の姿が見えた

「あ、あの、貞光さん……イツ花さん、見ませんでした、か？」

貞光はぷかぷか浮かびながら、どうやら眠っているようだった

「風邪引かないのかな……」

確かに暑い、包帯を巻いている場所から汗がにじんでいる

ふと、声が聞こえた

「イツ花さんなら、裏庭で薪を集めていたわよ」

「あ、ありがと――」

振り返って、柚子は固まった

「二十個目、ね」

瑞穂が柚子に、ニッコリと笑った

第八話－１６　「暗鬼」　１０２４年８月後編

＜壬生川家・居間＞

瑞穂（みずほ）の前、ガタガタ震えながら両腕を吊った柚子（ゆずこ）が正座していた

「それじゃーどうしよっかなー♪　貸し二十個作り終わったもんねぇ、もうあたいは自由に生きれるもんねぇ」

満面の笑みを浮かべて、瑞穂が柚子の肩に手を置く

「ねえ柚、あたい、今月お金もう少ないのよね、べっ甲の髪飾りに、金糸刺繍の巾着袋を買っちゃって」

「は、はぃ……」

恐喝かと思いながらも、柚子は怖くて逆らえないが、勇気を出して抗弁してみた

「で、でもぉ、わたし……お金、もって、ないよぉ」

壬生川（みぶがわ）家で代々お金を自由に扱えるのは、当主と京復興責任者だけだ

「分かってる分かってる、無い袖は振れないもんね、それはともかくとして、お風呂、入りたくない？　タダじゃないけど手伝ってあげるわよ」

「ふぇ……？」

確かに全身が汗ばんできたのは、気になってはいたが

柚子が上目遣いに見つめると、瑞穂は相変わらずの笑顔だ、必ず何か裏がある

裏どころか、表も真っ黒な瑞穂は堂々と小型写真機を見せてきた

「お金ないのよね、お風呂、入りなさいよ」
「ど、どどうするつもり!?」
「あ、お手洗いでも良いわよ、でもどっちが良いのかな」
「どっちもいやぁぁっ（；д；）」
逃げ出す柚子を、瑞穂の術が縛りつける
「させないわよ……＜みどろ＞！」
両足を泥に取られて、柚子が転倒した

手を動かせないため、受身を取れずまともに顔から廊下に激突して、柚子は泣きべそをかく

「う、うぅ、うぅぅ……（；д；）」
その首根っこを掴みながら、瑞穂はうつ伏せに倒れている柚子の上に馬乗りになる
「両腕が使えないのに、あんまり激しい行動するからよぉ……果物ってば、文字通り青いわね」
「は、はぅぅ……（；д；）」
「またどこか痛めちゃったら、怪我が伸びるわよ?」
蛇のように笑う瑞穂に、柚子は泣きながら尋ねる
「ど、どうして、瑞穂さん、わ、わたしを、苛めるの……?」
「……なんかあたいが、悪者みたいな言い方ね?」

瑞穂は片眉を上げて、悠然と尋ね返した

「じゃあ逆にあたいが聞きたいよ、何で果物は、家族は無償で助け合うのが当然、みたいな考え方をするのか」
瑞穂は柚子の前、仁王立ちして腕組みをする
「え、だ、だって……それは、家族、だから……」
瑞穂の顔ははっきりと見えなかったが、その雰囲気が豹変するのは分かった

先ほどまでの冗談交じりの声色ではない、瑞穂の本音が漏れた
「家族だから何なのよ！　自分のことは自分でするしかないでしょ、頼ってもいつ死ぬか分からないのよ家族なんて！」
その声が屋敷に響く

柚子にとってそれは、考えた事もなかった言葉だ
瑞穂は少し調子を押さえた声で、つぶやく

「どうせまた泣くんでしょうけどね、良いわよ、言ってあげるわよ、あたいがあんたを苛めるのはね、あんたが嫌いだからよ」
「う、うぅ……」
うるうると涙を浮かべる柚子に、瑞穂の毒舌が続く
「何でも泣けばうやむやになるとでも思っているの？　事態が進展するの？　みんなあんたに呆れて、モノも言えないだけでしょうが」
瑞穂の拳が震えだす、こうなったらもう止まらない

かたや父親に何不自由もなく育てられた少女、かたや父親に自分ひとりの力で生きられるよう教育された少女、その考え方はあまりにも違っていた

「全部周りの人が何でもしてくれるのが、当たり前とか思ってて、だからあんたは姫って呼ばれているのよ、何も自分ひとりじゃ出来ないくせに」
「そ、そんな、ことはぁ……」
イライラしてくると急に甘いものが恋しくなる、今は手近な菓子を持っていなかったため、その代わりを柚子に当り散らす
瑞穂は不快そうな表情を隠すことなく、柚子に言葉をぶつけた
「じゃあ聞かせてもらうけど、どうして交神しないのよ柚、とっくに元服したんでしょ」
「そ、それは……あの、その……」

目を合わせようとしない柚子に、苛立ちを隠しきれない瑞穂

「もう、だからバカで果物なのよ……パパなんて、あんなのただ主体性がなくて、周りのみんな全員に優しいだけなのに、ひとりで勘違いして！」

廊下で向かい合う柚子と瑞穂に、場違いな穏やかな声が届いた

「これはこれは賑やかな……何の騒ぎですの？」

うふふと微笑みながら、ほたるが寝巻きで姿を現した

「ほたる、あんたも柚をかばうのね、どうせみんな果物の味方なんだから」

「これはこれは、ずいぶん拗ねてますのねぇ……」

ほたるが頬に手を当てて、困ったように瑞穂に告げる

「先ほどの声、私の部屋まで届きましたよ、家族がいつ死ぬか分からないとは、ずいぶんな言い方ですのねぇ」

「だってホントじゃないの」

瑞穂は、座って何も言えずに俯く柚子を見下ろす

こんな欠点だらけの小娘が、どうして自分を遥かに凌ぐ素質の持ち主なのか、神様がいるなら教えてほしかった

柚子のみに気をとられて、廊下の向こう側から京帰りの父親が、こちらの姿を見つけて近づいているとは露も知らず、瑞穂は叫んだ

「この子は、自分の父親を自分で殺したようなものでしょ！　当たるか当たらないか分からない奥義にあたいの命を賭けるなんて、貸しが二十あってもやっぱり嫌よ！」

柚子が弾かれたように顔を上げた、その瞳は愕然と開かれ、真っ直ぐに瑞穂を見つめていた

ほたるがまるで飢えた犬を見るような哀れみの目で、瑞穂を眺めていた
言いすぎた、と思ったときには、もう遅かった
瑞穂は言葉に詰まって、思わず駆け出す
ほたるの後ろで道明（みちあき）が顔に手を当てて、深いため息をついていた

翌日、道明と瑞穂と貞光（さだみつ）は、夏の選考試合に出場し、見事優勝を果たして帰ってきた
柚子の両腕やほたるの怪我も良くなり、９月には健康度も１００に戻りそうだ

８月の終わり、柚子は道明に、来月交神の儀をさせてほしいとの旨を伝えた
道明は少し迷ったが、結局はそれが屋敷のためになると思い、柚子の交神の儀を許可した
あの日以来、柚子と瑞穂は口を利いていない

第八話－１６　「暗鬼」　１０２４年８月後編（後書き）

出陣・選考試合（道明・貞光・瑞穂）

第八話－１７　「幽念」　１０２４年９月前編（前書き）

道明　１才７ヶ月
貞光　１才４ヶ月
柚子　１０ヶ月

瑞穂　８ヶ月
ほたる　５ヶ月

第八話－１７　「幽念」　１０２４年９月前編

＜回想＞

冬の山道に、ひとりの少女が臥せっていた
真っ白な雪の上に彼女の必死で走った足跡が赤く焼きついていたが、すぐにそれも吹雪に覆われてしまうだろう
誰の目から見ても、少女の息がないのは明らかだ
彼女の魂がこの世に留まったのは、不条理な死に対する底知れぬ疑問と悲哀からだった

どうして、黒い鎧の武士たちはこの都を襲ったのだろう
遠くで雷鳴が鳴った
どうして、自分は羽虫のように殺されてしまったのだろう
何年も、何年も考え続けた

どうして、自分たちの家族があんな風に蹂躙されなければいけなかったのか
都が燃え、焼け落ち、風化して、その名が忘れ去られた頃になっても、少女は考え続けた

そしてついに、その答えが与えられた
○「悪いヤツらのせいさ」
きょとんとして空を見上げると、そこには少年がいた
○「自縛霊さん、ボクと一緒に復讐しよう、ボクらの町をこんな風にした悪い奴らに！」

少女の中でくすぶっていた火が、一気に燃え上がった
簡単なことだった、自分たちは何も悪いことなどしていなかったのだ
攻めてきた武士が悪い奴らだったから、彼女の父も母も妹も、友達も都も大切な宝物も、まるで家畜のように屠殺されたのだった
少女は少年の手を取って、小さく頷いた

「する」

＜壬生川家・道明の部屋＞

道明（みちあき）は自室に篭り、筆を走らせていた
歴代当主に代々引き継がれてきた仕事は、いくつかあり、そのうちの一つが戦史の記述であった

「これで……8月分は終了、か」
毎月の終わりに、自分が見て聞いた事を、一切の漏らし無く記すなるべく私情を挟まないよう、そうして出来上がった書は壬生川（みぶがわ）家を導く光となるのだ

道明は戦史をぱらぱらとめくる
もう相当な量だ、１０１８年の４月に玄輝が記し始めてから、自分の代で、はや６年と半年
それから幸四郎、初子、蘭、以蔵へと引き継がれ、六代目当主の筆跡がところどころ違うのは、書くのを忘れた伽子に時々英雄（ひでお）や翠が代筆していたためだろう
翠の細くて綺麗な字が続き、そして自分

「……今頃瑞穂、巧くやっているだろうか」
今月瑞穂が元服したため、道明は京復興の任を娘へと受け渡した
「不安だが……まぁ、あの子に勝てる人間なんて、早々いないだろうし、京では敵なしだろうし……」
敵なし、の辺りで何だか、都の人間たちが心配になってきた
暗くなってきた道明の部屋を、貞光が開く
「……道明殿はおりますかな、ククク」
「珍しいな貞光」
相変わらず顔色の悪い貞光が、猫背で道明の部屋に入ってくる
「涼しくなってきたので、屋敷の中くらいは歩き回れるようになりましてな……ククク」
「そ、そうか……」
謎の生態系を持つ弟に、冷や汗を流す道明

「実は、折り入って頼みがあるのですな……道明殿に」
「僕に？　お前が、か」
「ええ……私を、次期当主に任命しないで頂きたいのですよ……ククク」
貞光の頼みに、道明は眉根を寄せる
「……やはり、その気はないか」
「無理ですな、私はこの壬生川家に尽くすことが出来ませぬ」
道明は深いため息をついた

「いよいよ時期当主に困るな、柚子(ゆずこ)くん、瑞穂(みずほ)、どちらがなっても角が立つ……たまに思うんだよ、貞光」
「何ですかな」
「もし、この家に、たった独りだけ遺されたときの事を」
道明は再び手元の戦史をめくる

「一家が皆死んで、家に僕とイツ花(いつか)さんだけ取り残されたとしたら、僕はその時、復讐なんてことが出来るだろうか、いや、呪いが解けてしまうなら、いっそそのまま死を選んでしまうかもしれない」
八代目当主の静かな声を、貞光は正座して静かに聞いていた
「僕には、壬生川家の歴史が重いんだ、どうして僕が当主になってしまったのか……僕は、未だに分からないんだよ、僕は臆病者なんだ」
「……道明殿は、完璧主義者であらせられますからな」
「みんなが僕に求め過ぎるだけだよ」
道明は本を閉じると、筆とすずりをしまいながらつぶやく
「でも、もうすぐ、それもこれも全てが終わるんだな、何だか長い夢を見ていたようだよ」
「年を取ると人間、感傷深くなるものです」
微笑する貞光に、道明も少しばかりの笑みを見せる

「力斗がいなくなって、次は僕の番……当たり前だけど、寂しいな、僕がいなくなっても、変わらない日常を続けてくれるかな」
「杞憂でしょう、まあそう言い切れない方も、中にはいらっしゃいますが」
「貞光の飾らない性格、僕は嫌いじゃないよ」
道明は貞光に振り返り、静かに尋ねた
「貞光は7月、僕らが白骨城(はっこつじょう)に出陣したあの月、何をしていたんだい」
「……」

「出雲に鉄を探しに行ったなんてバカな事があるか、自分の部屋からも出たがらない貞光が」
道明の言及に、貞光は肩を竦める
「大体、君は去年そんなに暑さに弱かったか？　２ヶ月前に何があった？」
「クク……」
その問いにも、貞光は笑みを浮かべるだけだった
「モノを頼みに来て、用が済んだらそれか、自分勝手も良いところだな……」
貞光は答えず、ただ去り際に呟きを残した
「私は、本当の事を知りたいのですよ……大筒士は大筒に命を託し、命を預けます……私は何に命を託し、何と戦っているのか、真実をね……クク」
そうして、再び道明の部屋に嘆息がひとつ生まれた

＜交神（こうしん）の間＞

柚子の前に、イツ花が神卸しの衣装で現れる
「お待たせしましたァ！」
さぞかし震えているだろうと、イツ花が柚子の前に腰を下ろすと、柚子は普段通りの弱気な顔をしているだけだった
「え、あ、あの……どうしました？」
「あ、いえ、何だか予想と違っていて」
ついついマジマジと見つめてしまっていた
柚子はそこで、落ち込んだように肩を落とす

「い、良いんです……自分でも、分かってますから、どうして、わたしが交神前に怯えて、泣いてないんだろう、って思っているんですよね……」
「それもありますしぃ」
イツ花はにこにこと微笑みながら、柚子に続ける
「好きな人と結局最後まで結ばれずに、全然顔も知らない神様としなきゃいけない、背徳感っていうんでしょうか、乙女心ボロボロ、みたいな、てっきりそういう状態なのかとぉ」
「うっ……（；д；）」
柚子のまつげの長い瞳に、ぶわっと涙が浮かぶ

その瞬間、室内に妙な音が聞こえてきた、ぴこーんぴこーん
がらっと障子が開き、登場したのはほたるだった、その手に持っている丸い黒い塊から音が発せられている

「あらあら……もしかして今、柚子様泣きそうでしたの？」
清楚に尋ねるほたるに、柚子は全身全霊で否定する
「そ、そ、そんなことはないよぉ！」
「でもおかしいですわねぇ……今、何だかゲージが“涙”の方に動いていたのですが」
ほたるの持っている小さな磁石には、東西南北の代わりに、恥涙哀楽の四つの方角が記されていた
「お父様のお作りになった、この感情計が故障したのかしら……」
首をひねるほたるに、イツ花が愛想笑いを浮かべながら尋ねる
「な、なんですかァ、それ……」
イツ花に、何故だか妙に嬉しそうにほたるが答えた
「柚子さんの泣き虫を直すカラクリですの」
「な、泣き虫を、直す……？」
「ええ」
感情計によれば哀１００％で落ち込んでいる柚子の隣で、ほたる

が穏やかに続ける

「この方角が涙を指すと、柚子様の首につけられた首輪から電流が流れる仕組みですの、自然と泣かなくなりますよね？」

笑顔の皮をかぶった悪魔を、家政婦は見た

「うぅ……泣き虫を直したいとは言ったけど……そんな、電流なんて……」

道明には恥ずかしくて言い出せなかったため、ほたるに手伝いをお願いしたのだが、まさかほたるがこんなサディスティックな発想を思いつくとは

「大丈夫ですわ、柚子様……」

ほたるは柚子に良い子良い子をしてから、その黒い首輪を指す

「泣き虫が直る頃には、電流も気持ち良くなってますの」

「や、やだよぉ……」

柚子がぐすっと鼻をすすった途端、ほたるの笑顔から異様な気を感じてしまい、柚子は慌てて笑顔を取り繕った

「あ、あは……さ、さ、イツ花さん、交神の儀、しましょぅ……」

「……柚子様って、本当に根っからの……」

思いっきり首を振る柚子に、イツ花は交神表を差し出す

ほたるが出てゆき、少し静かになった部屋で、柚子は神々の顔を眺めていたが、やがて一人の神に覚悟を決めた

「あ、あの……決まり、ました……」

柚子は開いた写真を、イツ花に差し出す

「ハーイ、鎮守ノ福朗太さまですネェ」

「あ、はぃ……あの、わたしに足りない体の風の素質を沢山持ってらっしゃいますし……それに、その……」

柚子はうつむきながら、ぼそぼそっとつぶやいた

「顔も、何だか……道明さん、みたいで……」
ボンッと、爆発するように柚子の顔が真っ赤になった

「それじゃ、お呼び立てしまァす」
自分から言っておきながら固まってしまった、初々しい柚子に苦笑しながら、イツ花は部屋を出て行く

やがて強い風が吹き、それと共に一匹の白い梟が部屋の中に入ってきた
驚く柚子の前、梟は身を翻すと一人の白い毛皮をまとった青年となり、一礼をしてから、告げた

鎮守ノ福朗太「安心しな……俺が守ってやるよ」

結局柚子は、交神の儀により、合計十七回もの電流を浴びたという

第八話－１８　「無念」　１０２４年９月後編

＜壬生川家＞

道明の容体が急変したのは、９月の半ばだった
家族の勧めにも関わらず、道明（みちあき）は漢方薬を飲まず、医者にもかからなかった
京の復興を瑞穂（みずほ）に任せ、道明は壬生川（みぶがわ）家で静かな余生を送っていた

居間にて、道明と柚子（ゆずこ）が机越しに向かい合っていた
真剣に術法を唱える柚子に、炎の気が集まってゆくのが感じられる
「そこまでで良いね」

手を叩く道明の前で、自然と息を止めていた柚子は、ふぅと緊張を解く
「よく出来たね、頑張ったよ柚子くん」
目を細めて微笑む道明の前で、交神（こうしん）の儀を終えたばかりの柚子も照れたように笑顔を見せた
柚子の前には、二冊の術書が置いてあった、どちらも道明が得意とした術だ

「は、はぃ……ご指導、ありがとうございました」
「＜七天爆＞と＜石猿＞、どちらも後継者が見つかって良かった」
こうして、道明の秘術はついに柚子へと伝承された

〜〜

柚子がほたるに連れられて謎の稽古に出かけたので、道明はひとり居間に残っていた
道明が庭を見て時々思い出すのは、伽子（とぎこ）、英雄（ひでお）、翠（みどり）の三人が揃っていたあの頃の壬生川家だった
壬生川家は誰でも、時が経てば責任を背負い込まなければならない
本当はゆねのことを、ずっと子供のままでいられる彼女のことを、たまらなく羨ましく思っていたのかもしれない

戦史を書き終えて、次期当主も決めた
道明は片付いた部屋を見回して、手元の項目を眺める
蔵も修繕したし、当主にしない代わりに貞光に家と三人娘の世話を押し付けた、彼なら自分よりも巧くやるだろう
ついにやることが何も無くなってしまった
時間が余るなんて、初めての感覚だな、と思いながら、道明は門の前に腰を下ろしていた
秋風は少しずつ冷たくなってきて、これから冬が来る、また季節が巡るのだ
季節に取り残されたままの道明は、壬生川家の前で、少女を待っていた
紅葉に包まれて、かつての少年は変わらない少女を待ち続けていた

〜〜

鈴の音のように、その声は道明の琴線に触れた

「こんなとこで寝とったら、風邪引きますよぉ」

少女は思い出のままの笑顔で、道明の顔を覗き込んでいた

「……そうだな、最近寒くなってきたよな」

「うん、めっきり、秋の温度計はつるべ落としですやもんね！」

「いや、それは違うと思うが……」

道明は手ぶらのゆねと目を合わせられずに、空を仰いだ

冷たい風が、火照った体には心地良かった

「なあ、ゆね」

大きな雲が浮かんで、良い天気だ

「なんですの？」

ゆねの無垢な声に、言葉がつまる

「……いや良い、何でもないんだ、些細な事だったよ」

「そうですかぁ」

道明は頭をかく

鬼を殺し続けた自分のようなものが、どうしてこんなにも、この少女に惹かれてしまうのだろう

あまりにも早く変わり続けてしまうからこそ、変わらないものに憧れてしまうのかもしれない、と思った

「道明のことを、覚えているかい」

「えっ」

ゆねはその大きな瞳を丸くした

「道明くんが、どうかしました……？」

少女の頬がわずかに上気する
「なにか、言ってましたかぁ？」

覚えているに決まっている
彼女にとっては一年の前の出来事ではない
道明は顔を手で覆いながら、彼女につぶやく

「残念だが、彼とはもう会えないんだ」
「え……？」
少女は思わず籠を取り落としていた
「彼は、遠くへ行ってしまった」
ゆねが息を呑む気配が伝わってくる

「……うち、あたま良くないですけど、そういうことの意味、わかります」
「……」
「……おとんも、おかんも、遠くへ行ってしまいました」
「そうか……」
道明は立ち上がった

これでいいのだ、なぜもっと早くこうしなかったのだろう
彼らにとって、壬生川の人間は異形
ただ、家族たちがあまりにも優しすぎて暖かくて、道明は忘れていたのだ

立ちすくむゆねに、背を向ける

「さあ、もうお帰り、山道には気をつけるんだよ」
「……あ、あの」
「……うん？」

振り返ると、彼女は目に涙を浮かべていた
道明は思わずその表情に釘付けとなる

「うち、もうこの屋敷に来れません……ずっと、とおくに、村ごと引っ越すみたいで……」
「……そうか」
それは良かった、と思う
京の周りは、いつ妖怪に襲われてもおかしくはないから
「そんで、その……」
ゆねは着物の胸元をぎゅっと押さえて、下唇を噛んでいた
それから、告げてくる
「あっ、ありがとうございましたっ」

「……え？」
「そ、その、あの、うちみたいなもんに、いっつもやさしくしてくれましてっ」
「いや、それは……」
参ったな、と頬をかく
ゆねはついに泣き出してしまった
泣く子の扱いには慣れているはずだったのに、なかなか言葉が出てこない

「……きっと、道明は君に気があったんだよ」
目を背けながら、そんなことを言ってしまった
「ふぇ……？」
「だから、君が気にすることはない、あいつは君に色目を使っていただけだからな」
「え、え、えぇ……」
戸惑いながら、ゆねは笑う
目を赤くしながら、笑っていた

「えへぇ……そ、そうやったんですかぁ……えへへぇ……」
籠を抱きしめながら、くしゃくしゃの笑顔
「それやったら、早く言ってくれればよかったですのに……もったいない……」
「ああ、そうだな」
道明は微笑して、空を仰いだ
夕焼けに染まりつつある秋空だ
「僕もそう思うよ、本当に」

ゆねががいなくなった道の先を、道明はずっと見つめていた
その背がすぐに見えなくなっても、面影を追うように、道明は霞む目で眺め続けていた

「あ、あのっ……」
戸口から柚子がやってくる
いつものように、逃げ出しそうな表情で
「道明さん、あの……」
「……どうかしたか？」
そばに立って、こちらを見上げてくる壬生川の少女に目を向けるすると彼女は視線を逸らして、うつむいてしまった

「いえぇ、その……なんでも、ない、です……」
「……そうか」
道明は彼女の頭に手を伸ばす
その翡翠のような黒髪を撫でた

本当は彼女がなにを言いたいのか、なにを言いに来たのか、そん

なことはわかっているつもりだった
だが道明は知っていた
成就してゆく願いが、必ずしも幸せを呼ぶわけではないことを
だから道明は、これでいいと思ったのだ

「もう風が冷たくなってきたよ、早く、家に戻ろう」
「えっ、あっ……」
道明は返事を待たずに、先に歩いてゆく

無念こそが力となり、後悔が足を前に進ませる力となる、そんなことだってあるのだと
いや違う、壬生川の原動力はいつでもそれだった
全ては復讐から始まった物語なのだから

「柚子くん、早くおいで」
「……あっ……は、はいっ」
道明が手招きすると、少女はまるで犬のように自分の後ろをついてくる

戸が、ばたんと閉められた

〜〜

道明が亡くなったのは、その翌日の冷え込んだ夜だった

「朱点には、本当にいろんなことを教わったよ……
勝つために　何をすべきか……どれほどのものを捨てねば　ならないのか……」

壬生川道明　享年1才7ヶ月

その寝顔は安らかで、
まるで辛く苦しい重荷から解放されたようにも、柚子には見えた

第八話－１８　「無念」　１０２４年９月後編（後書き）

元服→瑞穂　交神の儀・柚子×鎮守ノ福朗太　老死・道明

壬生川家家系図―八代目まで―

＜壬生川家　家系図＞

玄輝――伊織
　―
臥家――臥蛇丸――巻絵――蘭――鈴鹿――英雄
　―道明――瑞穂
　―
　―夏海
　―
香家――の香――佐和――夢見――門司――翠
　―貞光――ほたる
　―
幸家――幸四郎――初子――以蔵――伽子――力斗
　―柚子

初代　玄輝
二代目　幸四郎
三代目　初子

四代目　蘭
五代目　以蔵
六代目　伽子
七代目　翠
八代目　道明

～～

＜閑話休題＞

『俺の屍を越えてゆけ』は、本当に良いゲームですね

髪切戦への不戦を誓った道明の死とともに、物語は後半戦へと移ります

伽子、英雄、翠の三姉兄妹編が終わり、徐々にシリアスめいてきた壬生川家
三人の父親から産まれた三人の娘
次代からは新三人娘が主役となり、九代目の話が始まります

これから彼らはどのように生き、死に、あるいは子を遺していくのでしょうか
よろしければ今しばらく、壬生川一族の波乱に満ちた物語に、お付き合いお願いいたします

柚子ちゃんかわいいよ柚子ちゃん！

……ええと、感想など、お待ち申し上げております

それでは

第九話－1　「譲受」　1024年10月（前書き）

貞光　1才5ヶ月
柚子　11ヶ月

瑞穂　9ヶ月
ほたる　6ヶ月

第九話－1　「譲受」　１０２４年１０月

＜9月下旬の壬生川家・居間＞

八代目当主の葬式から二日後のことだった

壬生川家の居間に、家族全員が集合する中、イツ花が一枚の手紙を持って現れた

「コホン……では、バーンとォ！　読み上げさせていただきます！」

次期当主が発表された瞬間、柚子と瑞穂が同時に悲鳴を上げた

「え、えええええええ!?」

「何ですってぇぇぇぇぇ!?」

柚子と瑞穂が勢いよく机を叩いたため、ケヤキの木目に亀裂が入り、ミシミシと音を立てて机が崩壊してゆく

「“当主の座は我ら臥家ではなく幸家に返還させて頂き奉る”、それが道明様のお言葉です」

「パ、パパァァァ！」

机の欠片を握り締め粉々にする瑞穂の横で、ほたるが机が壊れる前に拾い上げた茶をひとすすりする

「だ、だからって……わ、わた、わたし……」

先祖の名を出されては、柚子に断ることは出来ないではないか

「ちょ、ちょっと！　ほたる、いいの果物なんかが当主で!?」

「私は、どなたでも……ふふ、私でなければ」
「あたいは納得できないいいいい！　よりにもよって家柄で相続されるなんて、あんまりだわ！」
じたばたをわめく瑞穂の隣、柚子はもう自分はどうすればいいのかと半泣きの状態だ

そんな中、助け舟を出したのは意外な男だった

「ククク……瑞穂殿、よくお考えあれ」
冷水のような貞光（さだみつ）の声に、瑞穂がうっと身を引く
「な、なんですか貞光さん」
「道明殿の多忙さをご存知無いのですな……あの方の、当主と京復興支援を両立させていた道のりが、どれほどの艱難辛苦に満ちていたか」
（分かっていたのに手伝わなかったなんて、さすがお父様ですの）
微笑むほたるの横、瑞穂が貞光の脅しに少しだけ怯む

「道明殿は、幼少の頃より我が母に厳しく鍛えられていたようですが、果たして瑞穂殿がその器かな……クク」
「な、何が言いたいのよ……じゃなくて、言いたいんですか」
「クク……当主と京復興頭、天秤にかけさせて頂きましょう」
貞光の微笑に、なぜか瑞穂が冷や汗を流す
「う……当主になったら気軽に京都で美味しいモノが食べられなくなる……！」
「お着物も買えなくなりますのねぇ」
「うぅ……食べ物、食べ物、食べ物……」
香家親子の術中にハマり、頭を抱える瑞穂
「では、瑞穂殿は復興頭、柚子殿が当主で異存はありませんな」
「私はもちろんありませんの」
「くぅ……！」

何だか決着がついたらしい三人の隣、途方にくれた柚子が思った

（……わたしを当主だなんて、道明さんも、どうして……）

＜そして１０月＞

「あ、あぁっ、よろ、鎧どこっ！？」

今月は出陣である

一家をあわただしく駆け回り、転び、そしてまた駆け回るのは壬生川家九代目当主・柚子だった

「あ、あのイツ花さん、わたしたちの鎧、見ませんでしたかぁ！？」

台所で米を研いでいたイツ花を見つけて、柚子が飛びつく

「いいえェ、武具防具の類は全て道明様が取り仕切ってましたからネェ……」

「そ、そんなぁ……」

出陣一時間前だというのに、まだ一家の装備すら整っていなかった

「う、うぅ……大槌と、初陣の着物で、戦いにいけるわけないし……」

思わず立ちくらみを起こしてしまうが、そんなことをしている場合ではないと、柚子が我に帰る

「つ、次はとりあえず、裏の蔵を見てきて……あぅぅ、携帯袋も準備しないと、何が、どこにしまっているのかさっぱりだよぅ」

涙を浮かべながら、柚子は屋敷を走り回っていた

当主になって一つだけ良いことがあったとしたら、それは毎日の忙しなさに背を押され、亡くなった道明を思い出す暇がないことだろう

ただでさえ人一倍のんびりしている柚子にとって、三代目当主が制定した“壬生川家当主・十七箇条の責務”を果たすのは、尋常ではないほどの仕事量に思えた

そのうちのひとつ、出陣前の支度の時点でここまで苦労しているのだから、道明の働き具合は確かに常軌を逸していたのだろう

「うぅ、鎧、鎧……」

廊下で走る柚子に、足が差し出された

「……ふぎゃっ！」

顔から板の間にぶつかる柚子の前に、瑞穂が腕組みをして現れる

「まったく……ちょこまか鬱陶しいわね……」

「み、みずほさぁん……」

鼻を押さえて立ち上がる涙目の柚子に、瑞穂がため息をついた

「こんなのが当主だなんて、壬生川家の歴史もここで終わりね……まったく、何を言葉責めで顔赤くしてんのよこの牝犬」

「これは床にぶつかったからだよぅ……」

柚子の胸元に、瑞穂が携帯袋を押し付けた

「ふぇ、こ、これは……」

「力士水六瓶、仁王水三瓶、祖霊丹二包、有寿ノ宝鏡、緊急用に七光の御玉、大甘露、万金露、引波の御守、神仙水を一個ずつ、さらには用心の時登りの笛一本、養老水二つ、それに貞光さんの大筒、あたいの予備の薙刀、しめて２１個、空きは９欄、パパの用意していた通りよ」

「み、みずほさん……」

うるうるした瞳で見つめてくる柚子の額に、瑞穂がチョップする

「別にあんたのためにやったんじゃないんだからね……早く出陣してたくさんお金稼がないと、あたいも復興できないでしょうが」
「で、でも……ありがとう、ございます……」
瑞穂をそっぽを向きながら、ため息をつく
「あんたひとりじゃ、心配すぎて見てらんないからよ……てか出陣の準備はまだなの」
「はっ、そ、そうだよっ、鎧ぃぃ」

柚子はこうして、再び屋敷内を東奔西走することとなった

＜九重楼（くじゅうろう）＞

「というわけで、壬生川家総員出撃ですの」
「出陣、ね」
ぽかぽかとした笑顔のほたるを、瑞穂が訂正する

九重楼の近くまでやってきたのは、貞光、柚子、瑞穂、ほたるという四人組だ

「ククク……ついに、私以外は皆女性ですな」
大筒を担ぎながら、貞光が感慨深くつぶやく、男三人だけで出撃したのがついこの前のように思えた
「ふふ、お父様、変なこと考えてますの？」
「いやいや……私には、この新オフィーリア、クリスティーヌ改があれば他には何も」
商業レベルが上がったことによって、新たに開発した大砲轟き丸、緋筒アラシを抱えた貞光が笑う

ある意味で、とても幸せな男だが、実は不幸な男なのかもしれない

～～

九重楼を昇っている最中で、一同はついに黒ズズ大将から拳の指南を入手した

「そういえば、まだ手に入れてなかったのよね……」

「これで、残るは、紅蓮（ぐれん）の祠（ほこら）にある指南書だけですのね」

最初期は三つしかなかった職業が、ついにこれで倍以上に増えた事となる

「大筒士の指南書をなくしてしまいましたから、職業は相変わらずの六種ですけどね、ねお父様」

「……クク」

娘の微笑みを背に受け、貞光はかつて最上階まで上りつめた九重楼を、先頭に立って散弾を噴かせてゆく

＜風雷の間＞

そして、壬生川家は再び九重楼終階、風雷の間までたどり着いた

「クク……去年ぶりですな」

貞光が単発大筒を肩に担ぎながら、一対の神の前に進み出た

太刀「しかしおめェら……アレの効き目とはいえ、むやみに強くなりやがンなあ」

去年とは見違えるような気合を秘めた貞光に、太刀風五郎が呆れたようにつぶやいた

雷電「挑んできた三人の男どもの娘ッコかぁ……強くなりやがったなあ」

貞光の後ろに勢揃いした三人の少女たちを眺めて、去年打倒された雷電五郎が顎を撫でる

太刀「わしらが勝手に人間に火や風の使い方を教えたのを、みんなが責めたわけがよーくわかったゼ……」

雷電「加減とか余裕がもう少し身につけば、わしらも安心なんだがなあ……まッ、今さらグチっても遅いけどよぉ」

何だか去年に比べて、少しだけ老けて見える風神雷神を貞光が笑う

「クク……それが人間というものでありますな……お母様の通用しなかった大筒を越える、私にとってこんなに嬉しい事はありますまい……ククク、打倒させていただきます」

嬉しそうに、貞光は大砲轟き丸を担いだ

雷電五郎「さてと、しょうがねェから戦のけいこだ！」

太刀風五郎「かかってきな！」

風袋を開く太刀風五郎、連太鼓のバチを手に取る雷電五郎に、壬生川家のめいめいも武器を構えた

雷電「起これ落雷！」

雷太鼓を打ち鳴らす雷電五郎に、貞光が散弾をばら撒く
「クク……二度目はありませんぞ」

雷電「な、わしの放った雷撃が鉛玉に吸い取られる！？」
太刀「ならば、わしが竜巻で吹き飛ばしてやろう！」

巨大な白袋を開いて、風を起こす太刀風五郎に雨の矢が突き刺さった

太刀「げ、げぇ、わしの風袋に穴が！　これでは竜巻が出せん！」

「うふふ、お父様のおっしゃられた通り、口を開いた瞬間は無防備ですのね」

力士水を振りまかれた柚子が、雷電五郎に向かって飛び上がった
「や、やぁぁぁ！」
紅蓮の大槌によって頭を殴りつけられた雷電五郎が、ふらふらとよろめく

雷電「お、おっそろしいねェ」

太刀風五郎を貞光がけん制している間に、三人娘の猛攻撃によって雷電五郎を徐々に追い詰めてゆく
「うふふ……連弾弓（れんだんきゅう）ですのよ」
三本の矢が雷電五郎の体を刺し貫く

雷電「こ、これが人間の業ってヤツかい……っとっと」

柚子の一撃を寸でで避けた雷電五郎を待ち構えるように、瑞穂が

薙刀を振り上げながら口の端を吊り上げて笑った
「果物にしては、上出来じゃないの、こっちに追い込んでくれるなんて……双光蘭斬（そうこうらんざん）！」

雷電「ほ、ほォ……な、なかなか筋がいいぞ！」

十字に裂かれた雷電五郎が、雷となって空中に四散する
残る一人は、太刀風五郎のみ

太刀「おっとっと、だけどなァ、前回はこっから逆転したんだゼ？」

太刀風五郎の前で、貞光がゆっくりと右手を空に掲げた
その手から、緑色の光が放たれ、壬生川家の体を包み込む
「クク……大甘露、全員の体力も大回復ですな……」

太刀「やれやれェ」
太刀風五郎はやけっぱちになったように、大きく笑った
太刀「ガハハハ、お前らその意気なら、朱点もそのうち倒せるかもしれんな！」
そうして風袋からカマイタチを発射しようとする太刀風五郎の腹に、貞光の放った弾丸がめり込んだ

九重楼に神の声が響いた

太刀「こりゃ参った！　降参！　降参！」

見事に両五郎を討伐した四人は、意気揚々と凱旋した
翠の仇を討った貞光の顔が、ほたるには心なしか、いつもより笑みが深く見えたという

第九話－1　「譲受」　１０２４年１０月（後書き）

出陣・九重楼（柚子・貞光・瑞穂・ほたる）

第九話－２　「天竜」　１０２４年１１月前編（前書き）

貞光　１才６ヶ月
柚子　１才

瑞穂　１０ヶ月
ほたる　７ヶ月

第九話－２　「天竜」　１０２４年１１月前編

＜壬生川家・居間＞

「あああああ」
壬生川家の居間の隅で頭を抱えて、何やら瑞穂が呻いていた

「え、み、瑞穂さん……？」
奇怪な瑞穂に、柚子は少し引く
「割符が一枚、割符が二枚……割符が三枚……ああ、一枚足りないい……」
「み、瑞穂さん、どうしたんですか……？」
「うぅ、塩なんてもう、塩なんて……」

返事をせずに、割符をジェンガのように積み上げてゆく瑞穂
食べ物が絡まない限り常識人なはずの瑞穂を、柚子がどうしたんだろうと思っていると、そこへほたるが現れた

「あらあら、瑞穂様ってば……」
「あ、ほたるさん、あの、瑞穂さん、ど、どうしたんですか……？」
おろおろする柚子に、ほたるは微笑む
「どうやら、相場屋のお塩で損なさったみたいですの」

なぜだかほたるが持っていた清算書には、塩は１９両下がりの８１両で決算され、手数料込みで２８７１両の損を出したと書いてあった
ちなみに今年の５月、小遣い稼ぎに瑞穂が始めた投資のことである

「で、でも別に、京都復興金を管理している瑞穂さんなら、そんな、２８７１両くらい」
当主になって、すっかり金銭感覚が狂ってしまった柚子が、ほたるにつぶやく
「うふふ、そうですのね」
ほたるは微笑みながら、瑞穂の耳元に何やらをささやいた
その途端瑞穂の顔色が変わって、うわああと悲鳴を上げる

「あああごめんなさい、お金持ち出してごめんなさいパパ！　だから……だから＜七天爆＞だけは許してぇぇぇ！」

頭を抱えて絶叫する瑞穂を、にこやかに眺めるほたる

「面白いですわねぇ……クク」

「ほ、ほたる、さん……？」
「あらあら嫌ですわ、忘れてましたの」
一瞬だけ見えた邪悪な笑顔から、パッと普段のひまわりのような表情に戻ったほたるに、冷や汗を流す柚子
「柚子さまの、お子様がそろそろお見えになる頃みたいですの」
「え、わ、わたしの……？」
「ですので、イツ花さんが呼んでらっしゃいましたのよ」
「あ、うん、分かりました……」

どんな子が来るのだろう、と柚子の胸中を不安が包む
それは、こんな自分に母親が務まるのだろうか、という心配でもあった

＜柚子の子供＞

「ぱんぱかぱーん！」
イツ花が嬉しそうに手を叩く

「いやぁ久々に、礼式に乗っ取った登場の仕方が出来て、私は本望ですッ！」
「は、はぁ……」
やけに本望の敷居が低いイツ花が、それではァ、と続ける
「鎮守ノ福朗太さまのもとより、新しいご家族をお連れいたしました！」
「は、はぃ……」

身をこわばらせて緊張する柚子

「お喜びください！　女のお子様です！」
「お、女の子……」
これで柚子から、連続四人の女の子誕生だ

「いやァ、あんなに弱虫でドジで泣き虫だった柚子さまが、今は当主で一児の母！　何だか感慨深いですネェ……」
「弱虫でドジで泣き虫は、あんまり変わってない気がしますけどぅ……」
「さ、それではお呼び立てしましょうか」
ほたるがニコニコと現れて、イツ花の台詞を横取りする

ルルルーと涙を流すイツ花の横の障子が開き、ひとりの少女が姿を見せた

○「……初めまして」

無愛想に挨拶をするのは、緑の髪を真っ直ぐに長く伸ばした美麗な少女だ
冷たい輝きを放つ碧色の瞳が、部屋の中にいる三人をすっと見据えた

新たな幸家の少女は竜子（たつこ）と名づけられた

「……ふぅん、妙な名ね」
腕組みをして唇を尖らせる竜子に、柚子がうっと涙目になる
「へ、変、かな……や、やっぱり、ほたるさんに付けてもらった方が……」
「なにをおっしゃっるんですの」
ううぅと唸る柚子に、各指南書を手渡すほたる
「さ、さ」
「う、うん……で、あの、竜子ちゃん、職業、なんだけどぅ」

なぜだか怯えている母親から指南書を受け取り、竜子は一瞥する
「お母さんは壊し屋だったっけ」
「あ、うん……でも、壊し屋は、出来ることなら、なってほしくない、かな……」
「どうして？」
娘におずおずと答える
「だって、その……身体に悪い、から」
奥義の打ちすぎでガタが来ている自分の腕をさすりながら、柚子がつぶやく

「……ふぅん、じゃあ剣士か槍使いか、拳法家ね」

「そ、そうなるかな」
「じゃ私、拳法家になる」
ぱらぱらと指南書をめくっていた竜子に、えええっ、と柚子が声を上げた
「ダメ？」
「だ、だめじゃないけど、でも、何だか……ちょっと、意外で……」
自分の娘とは思えないくらい、上品な顔立ちをしている少女を見つめて、柚子が言う
「でも、どうして、拳法家に……？」
「お父さんも言ってたんだもの、今の時代やっぱり自分を鍛えて、身一つで戦えるようにならなきゃ、て」
「そ、そっか……なんだか、壊し屋でごめんなさい……」
大人びた少女の立派な言葉に、なぜか謝ってしまう柚子

「だから、そういうことで」
拳の指南書を抱える竜子から、一枚の紙切れがパラリと落ちた
「あらそれは」
素早く反応した竜子よりもさらに早く、ほたるが紙を抜き取った
「ほたるさん、それは……？」
「私と瑞穂さんが拳の指南書を眺めていたときに、丁度関連した記事が雑誌にあったものですので、挟んでおいたんですの」

ほたるが見せた紙には“２５年に流行る最先端、美脚な生脚・女拳法家事情！”と見出しが書かれていた

「……ああ、そんなものもあったの」
「た、竜子ちゃん……」
そっぽを向く娘の顔が、何やら赤かった

それからほたるは落ち込んだイツ花を連れて、洗濯物を取り込みに行き、部屋には柚子と竜子が残された
「じゃ、じゃぁ……えっとぅ、屋敷の、案内するね」
「う、うん」
柚子は竜子の手を引き、廊下に出る
「あの、お母さん……その」
「うん？」
見ると、まだ背の低い竜子が柚子を見上げていた
「さっきはごめんなさい……でも、その、私、“竜子”って名前キライじゃないから……」
「え、そ、そう？」
「う、うん……さっきは恥ずかしくて、ついあんなこと言ったけれど……だって、お母さんが付けてくれた名前だもん」
先ほどとは打って変わって、柔らかい年相応な口調で、竜子が柚子の裾を掴んだまま、はにかんでつぶやいた
「そ、そっか……ありがとうね、竜子ちゃん」
「うん……私、優しそうな人がお母さんで良かった、えへ」
初めて笑顔を見せた娘に、柚子は心が温かくなるのを感じる

きっと、初めての対面で緊張していたのだろう、きっとこの子は本当は素直で良い子なのだ、と思われた

柚子は竜子の髪を、おそるおそる撫でつけた
この子と母親を頑張ってみよう、柚子は静かにそう決めてみた

その後、瑞穂に竜子を紹介した時のことだった
「こ、この子が竜子ちゃん……わたしの、娘なん、です」
何だか気恥ずかしい紹介だ
「ああ、そう……果物に似てないわね」

力なくうなずく瑞穂に、竜子も同意する
「ええ、似ずに良かった」

「え、えええっ！？」

思わず娘を振り返る柚子
「結構口も悪いわね、良いじゃないの、竜子って名前がちょっとセンスないけど」
「私もそう思う、妙な名」
「え、えええええ！？」
綺麗な澄まし顔で告げる娘の言葉に、思いっきり振り回される柚子であった

第九話－3　「我流」　１０２４年１１月後編

＜出陣＞

「それではお父様、竜子様をお願いいたしますね」
「ク……承知」

玄関で談話する香家の親子を眺めながら、思うふたり

（すっかりほたる、父を尻に敷いているわね……）
（あれ、どうしてほたるさんが、話を進めているんだろう……？）

親には頭の上がらなかった瑞穂と、現当主の柚子が、そんなほたるを見て少し考えてしまう
そんなことは気にせず、ほたるが首をひねる
「でもお父様、拳法家の訓練なんて、大丈夫ですの？」
むすっと無言で柚子の傍に立っている竜子に目をやって、貞光が笑う
「案ぜられるな、ク……伽子様に比べられれば、可愛いものであろう」
「そ、そっか……貞光さんって、わたしのお婆ちゃんの代から生きているんだ……」
「……そういえば、あたいのお爺ちゃんのことも、知っているのよね……」

見た目も口調もまったく変わらない貞光、今月で1才６ヶ月の長老であった

＜親王鎮魂墓（しんのうちんこんぼ）＞

今年の迷宮巡りの最終地点、七箇所目の親王鎮魂墓にやってきた三人

「お父様がそういえば申しておりましたわ、以前の討伐で土偶器を撃破したから、封印が解けて、入ったばかりのところにある突き当たりのワープゾーンが使えるようになった、と」

「ホント、何でも知っているわね、ほたる父……」

一同は地下一階から二階へと、大きくショートカットをすることが出来た

「とにかく、今月は何がなんでも＜卑弥子＞を取ってこなきゃ！」

瑞穂が握り拳を固める

「あら、親王鎮魂墓に術書があるんですの？」

「ぬふふ、京の町を練り歩くとね、色々なお話が聞こえてくるもんなのよ、くくく」

口元に手を当てて、貞光の真似をする瑞穂

軽足大将や黒ズズ大将を蹴散らしてゆく道中、ほたるがそういえば、と気づいた

「前回は私たちのお父様方三人で出陣で、今回は、その女の子三人組で出陣ですのね、うふふ」

「わ、わたし、もうお母さんなのに……女の子……」

「果物は、いつまで経ってもお子様だからね」

瑞穂が肘で柚子の頭をつつく
「そ、そんなこと、ないもん……わ、わたしだって……」
「あら何よ、何か言いたいことがあるなら言ってみなさいよ」
鼻で笑う瑞穂に、柚子が頬を膨らませる
「わたし、だって……」
成り行きを見守っているほたるが、うふふと微笑んだ
「わたし、もう、こ、交神(こうしん)の儀(ぎ)もしたから、大人だもんっ」

は、と気づくと、瑞穂が生まれて初めて尊敬するような目で柚子を見つめていた

「そ、そういえば、あたいたちのよりも早く……」
「あ、いや、あの……その」

とんでもないことを口走ってしまった気がして、柚子が徐々に顔を赤く染めてゆく

「で、で、ど、どうだったのよ……あの、アレは」
「あ、アレって……」
瑞穂が柚子の肩に手を回して、古墳の柱の陰に連れていく
「決まっているじゃないの……この、大人しそうな顔しやがって……」
「ちょ、ちょっとっ、ど、どこに連れていくのぅぅ」

ほたるがニコニコと見守る中、柚子が暗がりに引き込まれてゆく
静かなお墓の中に、しばらく少女ふたりの嬌声が響く

「ちょ、ちょっと、それからどうしたのよ……！」
「え、も、もっとぉ……？」
「当たり前でしょ、全部よ全部！　あたいも来月交神の儀なんだか

らね！」
「うぅ……は、恥ずかしいよぅ……」
照れまくる柚子から、根掘り葉掘り聞き出す鬼の瑞穂

小一時間ほどしばらく話し込んでから、瑞穂と柚子が戻ってくる
「ふ、ふぅん……あ、あんたも、なかなかやるじゃない」
「うぅぅ……」
心身とも汚された柚子が、耳まで赤くして顔を押さえていた
「さ、それじゃエロい話はそれまでにして、奥に進みましょうか、火時計も相当減ってしまいましたし」
パンパンと手を叩くほたる
しっかりと話は聞いていたらしい
瑞穂もゆっくりと首を振る
「ええ本当、果物があんなにいやらしい子だとは思わなかったわ」
「え、えええぇ……（；д；）」
「まったく、私も柚子様のセクハラ発言に、赤面モノでしたの」
「正直ビックリよね、想像を絶したわ、良いのかしら壬生川家の当主がこんなエロ当主で」

口々につぶやきながら、ほたると瑞穂が柚子の手をそれぞれ掴んで、引っ張ってゆく

「う、うぅ……わたし、そんな、そんな違うのにぃ……」
ずるずると引きずられながら、柚子は何度も何度も首を振っていた

～～

唸ったままの柚子を引っ張って、ほたると瑞穂は土偶器の待つ四面の階段へと到達した
現れた土偶器四匹相手に、力士水を二本使ってから、三人は一気に攻勢へと転じ、畳み掛ける
「滴っ」
ほたるが叫ぶと、その構えた雨切り弓から、水で作られた矢が幾本も放たれる
「て、てーぃっ！」
戦闘に入って少しだけ落ち着きを取り戻した柚子が、紅蓮の大槌を振り回して、次々と土偶を潰してゆく
「ぬふふ……行けっ、ミケっ、ポチっ」
そして、後方で瑞穂が何やら指示を飛ばしていた
「み、みけ、ぽちって……」
思わず力が抜けそうになって、膝に力を入れる柚子と、笑顔で返事をするほたる
「みゃー」
「ミケなんだほたるさん！　え、て、てゆうかじゃあわたしが犬！？」
「物分りが良くなったようね、果物も」
後ろで適当に＜石猿＞を唱えながら、高みの見物としゃれ込んでいる瑞穂が笑う
「犬って、犬って……」
土偶の頭を叩き潰しながら、何だか落ち込む柚子
「とってもお似合いですのよ、柚子さん」
「う、うれしくないよぉ……」
最後の一体を砕き、肩で息する柚子に、瑞穂が微笑む
「あらあら、喜ばないなんて、まだしつけがなっていないようね……果物め」
「ひっ……」
「あらあら」

ほたるが向けた感情計の針が、一気に“涙”へと振り切れるほど高ぶる
「あらぁ一瞬で……やっぱり、柚子様の天敵は、瑞穂様なんですねぇ」
「うぅぅ、痛いのは嫌だよぅ……」
何か不吉な過去を思い出したのか、再びその場にしゃがみこむ柚子を引きずって、瑞穂とほたるはその先を目指すのであった

～～

地下三階に降りた瞬間、三人の前に広がっていたのは、圧巻の迷路だった
三人は誰ともなく、うわぁ、とつぶやく

「これは……見事な迷宮ですわねぇ」
「色々なダンジョン荒らしてきたけど、こんなにあからさまな迷路は初めてね……」
現在地と周辺地図を確認出来る道具・有寿ノ宝鏡を使ってみても、捉えきれないほどの巨大な迷路である
「……仕方ないですの」
「……そうね、まともに攻略したら、時間かかっちゃうしね」

不穏な視線を感じて、柚子が顔を上げると、妹たちが笑顔を浮かべて柚子を見ていた

「え、な、なぁに……？」
「頑張ってくださいなの」

ほたるが柚子に＜萌子＞を唱えた
「あたいの命令だからね、張り切りなさいよ牝犬」
瑞穂が柚子に＜速鳥＞を唱えた
「な、なんなの、え……？」
壊し屋としての柚子の本業が、ついに披露される時が来たのである

「さ、頑張ってくださいな、出口は右上ですの」
「紅蓮の大槌、ＤＡＤＡＤＡ、よ！」
ふたりに監視され見守られて、柚子が汗だくで大槌を振るっていた
「は、はぁぃ……うぅ」
次から次へと壁を打ち壊してゆく
その後には、壁のど真ん中に人が通り抜けられるような穴が、同じように空き続けていた
三人が選んだのは、まともに迷路を抜ける方法ではなく、柚子の大槌によって障害を破壊し、直進する手段であった

「こ、こんな裏技……いい、の、かな……」
手を少しでも休めると、瑞穂の叱咤が飛んでくる
「う、うぅ……ゲーム内には、こんなこと、できないのにぃ……」
涙目のまま、柚子はまるで犬のようにせっせと本業を続けるのであった

～～

途中で四匹の土偶器が合体した鬼、アガラ封印像を撃退し、三人はようやく三階の迷路を抜け出すことに成功した
「結局、時登りの笛も使っちゃったじゃない」

「う、うぅ……」
土壁を壊し続けるよりも、中ボスを退治する方が何倍も楽だった、と思う柚子
そんな中、じゃれあう?柚子と瑞穂を眺めながら、ほたるが微笑む

(うふふ……何だか、瑞穂様、京都で人の使い方を学んだのか、以前よりも仲が良さそうですの……三人で親王鎮魂墓に出陣して、良かったですわ)

壬生川家で見つけられなかった自分の居場所を、きっと京の都で見つけたのだろうと思う
そんなほたるの想いを露も知らず、柚子と瑞穂はズンズンと先に進む

「あ、大きな門ね、果物ちょっと開けなさいよ」
「はぁい……」
すっかり主従関係が出来上がっている

道明が亡くなって、瑞穂も柚子を頼りにしなければならなくなり、彼女の資質の高さを羨んでいる場合ではなくなったのだろう
それどころか、今はその戦力が頼もしくてならないはずだ
これまでのことがあるから、素直には態度に示せないだけで
(ああ、麗しい信頼関係ですの……)
微笑みながら、自分の行なった仲直り作戦の見事な成功に、思わず潤む目頭を押さえるほたるであった

＜金色館＞

「よし、＜卑弥子＞はここね！」
「恐らくそうだと思われますの」
見れば、だだっ広い空間に、のっしのっしと黒ズズ大将の色違いが歩き回っている
「確か、おどろ大将だったわね……ようし、鬼退治は腕の見せ所よ、果物」
瑞穂が、戦闘に土木工事にと重労働で、へとへとになっている柚子の手を引く
「当主様、頑張ってくださいなの」
ほたるが無責任に手を叩く

「……うぅ、道明寺（みちあき）さん……当主って本当に、大変、なんですね……」
紅蓮の大槌と責任の重みに千鳥足になりながらも、柚子は真っ赤な肌のおどろ大将に挑みかかる
待望の＜卑弥子＞は、なんと二戦目のおどろ大将を撃破した時点で、入手することが出来た
「おお、やったじゃない果物！　帰ったら骨上げるからね、骨！」
「よ、よかったぁ……え、えへへ……」
瑞穂に頭を撫でられて、もう何も抵抗が出来なくなっている柚子を見て、恐らく百合唐蝶子か鎮守ノ福朗太辺りが、天運に気を利かせてくれたんですね、とほたるは密かに思った

～～

しかしそれから一同は、金色館の中を走り回ったが、一向に奥へ進むことは出来なかった
「何よここ、どうなってんのよ！」
「うーん……進み方が分からないまま、時間が来てしまいますのね

ぇ……」

似たような広間に宝箱が点在している限りで、それらしき階段が見当たらなかった

瑞穂と二人で、宝鏡を覗き込みながら考え込む

「……仕方ないわねぇ、まぁ、今回は＜卑弥子＞も取れたし、良かったとするかあ」

「そうですのね、柚子様も頑張ってくれましたし」

うふふと微笑むほたるが振り向くと、柚子は柱に寄りかかってうつらうつらと頭を揺らしていた

「……まぁそうね、少しは幸家らしくたくましくなったんじゃない、昔に比べたらだけどね」

瑞穂が小さな声でそう呟いた

「うふふ……お疲れさまですの、柚子お母様」

こうして、壬生川家は二体の中ボスを打倒し、最後の全体回復術＜卑弥子＞を獲得して、親王鎮魂墓から凱旋したのであった

＜一方その頃＞

「それにしても、人間は無茶をするなあ……」

アハハ、と思わず乾いた笑みが出てしまう

「昔の偉い人が作ったお墓を、ぶち壊して進むんだもんなあ……」

親王鎮魂墓の地下三階はガレキが散乱し、締め切り前の作家の部屋のような酷い有様であった

「こんなんだから、あの家の人を放っておくと、素直におネンネな

んかできっこないんだよね……アハハ、ハハ」

この後片付けを一人でやるのかと思うと、笑わずにはいられない黄川人（きつと）であった

第九話－３　「我流」　１０２４年１１月後編（後書き）

出陣・親王鎮魂墓（柚子・瑞穂・ほたる）
初見・竜子→拳法家　訓練・貞光→竜子

第九話－４　「太山」　１０２４年１２月前編（前書き）

貞光　１才７ヶ月
柚子　１才１ヶ月

瑞穂　１１ヶ月
ほたる　８ヶ月
竜子　１ヶ月

第九話－４　「太山」　１０２４年１２月前編

＜壬生川家・居間沿いの廊下＞

ほたるの元服の儀が済んだ朝早く、外を除くと一面が白く染まっていた
「あらあら……これが雪なのですのねぇ……」

微笑みながら、廊下から手を出すと、その手のひらに白い粉のようなものが降ってくる
少し見つめていると、すぐに体温によって解けて、水滴へと変わっていった
春生まれのほたるが初めて見る雪は、とても頼りなく、儚いものだった

「強く打ち付ける雨も好きですけれど……可憐な雪も、また良いものですのね」
ひらひらと降り積もった、純白の雪に包まれた庭を眺めて、ほたるは頬を緩めた
壬生川（みぶがわ）家の先祖たちが雪を尊んだ理由も、よく分かるものだ
「……後で、雪合戦というものも、してみたいですの」
しばらく廊下に立って、寒い中で雪を眺めていたほたるの横を、貞光が通る
「……ククク」
「あら、お父様……どうしたんですの、その格好は？」
ほたるが見ると、貞光（さだみつ）は真冬だというのに薄衣一枚を着ただけの、まるで寝巻き姿だ

「もう……あんまり横着しちゃダメですのよ」
「……いえ、そういうわけでは」
貞光はほたるに背を向けて立ち止まり、真っ白な冬の空を見上げて、つぶやいた
「……何だか、本日は暑いですな」
いつも自信に満ちている不敵なその顔が、普段よりも青ざめていることに気づいて、ほたるは思わず眉根を寄せた

＜交神の間＞

「さァ、今月は瑞穂さまの交神の儀ですネ！」
巫女の衣装に着替えたイツ花の前で、瑞穂が震えながら座っていた
「そ、そそそうね！」
「……どうしたんですかァ、瑞穂さま」
「何でもないわよ！　あーきょうはさむいわねー、さむいさむーい！」
わざとらしく呟きながら、瑞穂がイツ花の手から、神様交神表を奪い取る

「ど、どの神も、た、たいしたことなさそうじゃない！」
「……瑞穂さま、ひょっとして緊張しているんですか？」
「何バカ言っているの！？」
瑞穂が怒鳴りながら、イツ花の頬に平手をお見舞いする
「あ、あたいがそんな、き、緊張とか、昨日眠れなかったとか、あるわけないじゃない！　こ、こんなの、一発ヤっておしまいよ！　ポイよ、ポイ！　遊びよ所詮！」
倫理上相応しくない表現が飛び交う

「そ、そうですかァ……そ、それであの、どなたをご指名します？」
「そ、そうねぇ……べ、別に誰でも良いんだけど……」
瑞穂が時価と書かれたお寿司屋のお品書きを見つめるように、非常に慎重な眼差しで、神様をひとりひとり吟味してゆく
「べ、べつにだれでも、良いんだけどね、だれでも……何食べても、どうせ、一緒でしょ……」
言葉とは裏腹に、その視線は鷹のように鋭い
「それじゃ、わたしがお選びいたしましょうかァ？」
「何バカ言ってるの頭花女！」
再びビンタが炸裂する

頬を押さえて泣き濡れるイツ花を置いて、瑞穂は再び交神表を睨み続ける

「よ、よぅし……そ、それじゃ、この人で良いわよ」
瑞穂が指差したのは、不動明王のような風貌をした火神、不動泰山であった
「うう……玄輝さまにもぶたれたことなかったのに……って、あらあ、何だか瑞穂さまの好みとして、意外ですネェ……」
「え、そ、そう？」
「もっとこう、Mっぽい嘗祭り露彦さまみたいな神様を選ぶのかと」
歯に衣を着せない物言いのイツ花に、瑞穂はそっぽを向いてつぶやく
「いや、なんか……パパに似てたから、この怒りの表情とか」
「似てませんよ！」
イツ花の渾身のツッコミが、部屋の中に響いた

その後、室内の火鉢の炎が突然燃え上がったかと思うと、その火

炎の中からひとりの神様が姿を現した
赤黒い肌にまるで鬼のような表情が張り付いている

不動泰山「お相手致そう！」

こうして瑞穂もまた、柚子（ゆずこ）に負けずと大人の階段を登っていったのである

第九話－5　「勝算」　1024年12月後編

＜貞光の部屋＞

貞光（さだみつ）は自らの人生を、常々から幸せだと思っていた

彼の持論の中、人生で尊ぶべきは探究心、そして好奇心であり、自尊心だった

自分は自分、他人は他人だと思えるからこそ、彼は娘を自らの後継者にしようとは思わなかった

「……しかし、私の研究も、完成致しませんでしたな」

紙の束に紐を通しながら、貞光はひとりごちた

時間が足りなかったことが何より悔やまれたが、その一方で思う

何事にも終わりが来るからこそ、生きるのは面白いのだと

「神ですら計り知れない存在……これこそが、人間に与えられた価値なのでしょうな」

貞光はゆっくりと立ち上がり、部屋を出て、壬生川（みぶがわ）家の蔵に向かう

廊下に出ると、裸足の裏から伝わる板の間の熱が、貞光の足を焼く

「……熱い」

思わず声が漏れた

道場から騒がしい声が聞こえてくる

柚子（ゆずこ）が竜子（たつこ）の訓練をしているのだ、先ほどから姿が見えない娘も、おそらく一緒なのだろう

貞光はほたるに気取られないよう、急いで蔵へと向かう
こんな薄着で外に出たことが知れたら、また何か小言を言われるに決まっているのだ
訪れた裏庭の蔵の戸を開けると、暗闇の蔵内に光が差し込んでゆく
その灯りはまるで、自分の人生に現れた蛍のようだとも思った

「……その命で、壬生川家の明日を照らしましょう、でしたかな」
貞光は誰も知らない、蔵奥にある地下室への階段を開いた
道明(みちあき)に頼んで二重構造にしてもらったのをこの家で知っているのは、もう貞光しかいない
地下室のつづらに、貞光は持ってきた書をしまった
その表紙の題に、我ながら苦笑を禁じえない

表の歴史である“実録壬生川戦史(じつろくみぶがわせんし)”にかけた、もう一つの裏の壬生川家の真実
“壬生川家秘聞録(みぶがわけひぶんろく)”と名づけた著書を蔵の地下に隠し、貞光はもう一度苦笑した

「……それと、この部屋の物も処分しないといけませんな」
部屋に収まりきれず、地下室に収納された大筒の残骸と、同じだけ積み重なったそれらの品を少し眺めてから、貞光は背を丸めて蔵を出て行った

〜〜

冬が深まると共に、貞光の身体はますます冷たくなっていった

色々理由をつけてはみたが、結局娘には隠し通すことが出来なかった

「お父様、どうしたんですか、一体……」

ある晩香家の部屋にて、ほたるは貞光の手を取って、驚愕していた

これが人間の体温なのだろうか、と

「まるで……氷のようではありませんか、お父様」

日ごとに食の細くなる貞光を、怪しんでいたのだろう

「……クク」

その症状が加速したのは、やはり、あの秘聞録を書き始めてからだった

呪いは、まるで狙いを済ませたように、まず最初に指の感覚を奪ったのだ

「あの……どういうことか、説明して、くださりませんの……？」

「出来ませぬな」

貞光は口の端を吊り上げながら、首を振った

「お父様……」

ほたるの大きな目が、心配そうに伏せられる

「……気に病むな、これは私の選んだ道よ……クク」

貞光の血肉は、そうして徐々に氷へと変貌していくのだった

坂道を下るように死へと近づいてゆく貞光を、ほたるは放ってはおかなかった

「……」

先に見える死を、しかるべきモノとして甘受する貞光に、ほたるは容赦がなかった

「そんな潔い最期など、私は許しませんの、しっかり生きてくださいな」

静かに眠ろうとする貞光の口におかゆをねじ込み、頭から熱湯を

かけたりもして、その体の冷化を止めようと、ほたるは必死にあがいた

「……ほたる殿、死は避けられるものではない」

貞光の静かな声に、ほたるは首を振った

「一日でも長く生きてもらいたいのです、これは親として、最後の子孝行ですの、立派にお務めくださいね？」

いつだってほたるは明晰なのだと、貞光は思わず黙り込んだ

～～

十二月も下旬に入り、雪も積もる頃、貞光は廊下に腰掛けて外を眺めていた

「もう、お父様、あまり動いてはなりませんの」

「雪」

貞光は手を伸ばし、揺れる雪粉を掴む

「……これほどまでに美しいのなら、大筒から雪を発射する装置を、作ってみたいですな、クク」

「お父様ってば、本当に発明が大好きなんですのね」

うふふと微笑み、ほたるは持ってきた毛布を貞光の肩にかける

「私も雪が好きです、しばらく眺めていましょうか」

「……そうですな」

親子は縁側に座り込んで、何を話すでもなく、ただただ雪の降る様を見つめていた

ほたるは貞光の奇病のことを、他の人間には一切言わなかった

「ほたる殿……この家は熱いですな」
「でも養生しないとダメですのよ」
毛布を押し付けてくるほたるに、そうではないと首を振る貞光
「ククク……熱いですな、皆、私もかつて、そうであったのであろうな」
「みんな……？」
「ククク……」
外を眺めるふたりの前に、雪が降り積もる
ほたるは白い息をはきながら、かじかむ手をさする

「冬の風は、格別に冷たいですのね」
「そうですな……」
「乾燥していますし、火の取り扱いには、十分注意しないといけませんの」
「左様ですな、火薬もしまった方がよろしいでしょうな……」
静かな屋敷に、雪の舞う音なき音が聞こえる

「……ほたる殿、私の傍にいると、風邪を引きますぞ」
「厚着しているから、もう平気ですの」
微弱だが冷気を発している父親の横に座り、ほたるはニコリと微笑む
「それに、これは子から返す親への礼ですから、素直に受け取ってくださいの」
「……ありがとう、ほたる殿」
「何をおっしゃいますの、早く良くなって、また怪しい工作をしてくださいね」
「……クク」
雪は止む事無く、降り続く

貞光は瞳を閉じて、つぶやいた

「……楽しかったな」
貞光は口の端を吊り上げて、まるで黒幕のような顔で笑った

「志、潰えぬ限り、勝算は我が掌にあり」

「……お父様」
しばらくほたるは、貞光の横に座っていたが、
やがて貞光の全身が完全に凍りついた事に気づくと、しばらく泣いたという

壬生川　貞光　享年1才7ヶ月

愛した大筒と一緒に埋められた貞光の顔は、笑顔だった

＜それから三日＞

「暗いとこは嫌いだよぅ……」
「良いから！　倉の鍵持ってんのって、五代目当主の取り決めで当主のあんただけなんでしょ！」
「そ、そんなの、今じゃ瑞穂さんも貞光さんもカギ持ってるし、ただの、建前、じゃ……」
「良いから、とっとと早くお願いしますのよ」
「ちょ、ちょっと、ほたるさん目が怖いよぉ……」
「てか、貞光さんの遺言に倉の地下にあるものをしまったから、絶対に開けるなって書いてあったんでしょ？」
「開けちゃダメは、開けろと同義ですのよ」
「そ、そんなことはぁ……」

騒がしい三人娘が、倉へと侵入してゆく

「く、暗い……」
「＜赤玉＞！」
「火薬もしまっているんだよ瑞穂さん！？」
「大丈夫、引火しないわ」
「根拠は一体何！？」

「あら……これですのね、地下への入り口」
「ほら、開けてよ果物」
「は、はぃ……んしょ…」
「ご苦労」

柚子を地下へと蹴り込む瑞穂

「みぎゃっ」
「よいしょ、と」
「あら、足元が何だか不安定ですのね」
「ふ、踏んでる……踏んでますぅ……（；д；）」

地下室の中、瑞穂は一面を火の玉で照らす
すると、モノだらけの狭い地下室がパッと明るくなった
「こんなの、大筒だらけじゃない」
金目の物を期待していた瑞穂が、眉をしかめる
「そうですのね……開けてはダメっていうのは、大筒の失敗作が発見されるのが、嫌だったのでしょうか……」
ほたるも、辺りを見回しながら悩む
「でも普通、途中で失敗しちゃったら、そのまま埋めたり捨てたりしない？　ご飯は途中で失敗しても食べられるけど、大筒って暴発しちゃったりするんでしょ」
「うーん……お父様は大筒を自分の娘のように愛してましたから、捨てられなかったんじゃないでしょうか」
自らの作品に名前までつけていた父を思い出す
「自分の娘より、可愛がってたもんね」
「そうですね」
瑞穂の指摘に、ほたるが思わず苦笑する

「たぶん……あの、見られたくないものって、これだったんじゃな

いかなぁ」
柚子の声は、梯子を挟んで反対側から聞こえてきた
「なになに、今度こそ宝!?」
瑞穂の嬉しそうな声に、柚子は答えない

（何かしら……？）
ほたるが首を傾げながら、柚子の方へと歩いていく
瑞穂が先に行って物が崩れたため、後ろのほたるは落ちた箱を積み直す係になった
柚子に追いついたらしい瑞穂から、ほぉー…という、ため息が聞こえてきた
あの瑞穂が感心するものとは、一体何だろう
急いで見たいと思うが、崩れる荷が気になってしまう性格のため、なかなか前に進まない

「ちょっと、ほたるさん、早く」
「そうよ、これあんたのでしょ、早く来なさいよほたる、ああもう整理整頓なんて後で良いからっ」
「私の……？」
瑞穂に強く手を引かれた
「あ、でも」

ほたるの前、視界が急に開けた
三人娘がいるところには、畳が敷かれ、その前には小さな机が置いてあった

「あ……」

子供用と思われる机の上に、木で作られた玩具がいくつも並べてあった

ダルマ落とし、けん玉、積み木、木琴、木で作られた動物の玩具、どれも綺麗に磨かれ、色が塗られていた
机の隣には木馬が置かれ、その取っ手の部分には二丁の小さな石火矢が取り付けられていた
その他にも、机の上に乗りきらなかった玩具が、所狭しと棚の上、引き出しの上、床の上に並べられている
まるでその空間は、子供のためだけに作られた夢のような箱庭だった

ほたるは口元を押さえて、目を細めた
「やるじゃないの、貞光さんも……」
「手先が本当に器用だったんだなぁ……すごい、すごいなぁ……」

「ああ……」
昔一度だけ、一度だけ、父親から小さなけん玉を貰ったことがあった
記憶が蘇る
自分はその時、部屋の掃除に夢中で、余計な荷物を増やさないで欲しいと突っぱねたのだ
それ以来父親は、ほたるに何も言わなかった、それが自分の作ったものであることも、まだまだ倉にそれらが残っていたことも
数え切れないほどの玩具を前に、ほたるは自分の顔を押さえた

ほたるは目元を指先で拭いながら、微笑んだ
「……お父様、最期まで偉そうな娘で済みません、でも、本当に、ありがとうございました」

勝算が我が掌にあると言った父の言葉を信じ、
ほたるはこれからも戦い続けることを、新たに生まれた沢山の宝

物の前で誓ったのだった

第九話－５　「勝算」　１０２４年１２月後編（後書き）

元服→ほたる　交神の儀・瑞穂×不動泰山
訓練・柚子→竜子　病死・貞光

第九話－6　「草々」　1025年1月前編（前書き）

柚子　1才2ヶ月

瑞穂　1才
ほたる　9ヶ月
竜子　2ヶ月

第九話－６　「草々」　１０２５年１月前編

＜新年＞

明けましておめでたい壬生川家、“お正月は毎年賑やかに過ごすべし”という六代目の遺言通り……かどうかは知らないが、屋敷には明るい声が響いていた

雪の着物で覆われた庭、ほたると竜子が楽しそうにけん玉で遊んでいた

「あらぁ、竜子様はお強いですのねぇ」

貞光が作ってくれたけん玉を片手に、耳当てをしたほたるが微笑む

「ふふ、任せて」

まるで少年のような格好をしている竜子もまた、白い息をはきながら笑顔を見せる

そんな和やかなふたりの前に、庭の雑木林に面している方から、瑞穂が現れた

「あんたたち、この寒い中よくやるわねぇ……」

「瑞穂様、どうして林から……？」

さすがに驚くほたる

「京の帰りで、玄関まで回るのが面倒だったから、裏の垣根を飛び越えてきたのよ」

「ははぁ、お人に見られなくて良かったですねえ……」

多少着膨れ気味に厚着しているとは言え、仮にも名家で年頃のお嬢様が、背の高さほどもある垣根を悠々と飛び越える様など、人に見せられるはずもない

「まあね……うう、今は一杯のお茶が怖い……」
自分の身体を抱きながら、居間の方へと向かう瑞穂が、何かを見つけた
「って、おやや、けん玉じゃない、懐かしいわねー」
ほたるの手からけん玉を奪って、頬をほころばせる
「昔、よく力斗おじさんと遊んでいたんだよね、こんなに小さかったっけかな、これ」
思わず童心に返って、ヒモの先に結んである赤い玉を、けん玉の先端の先に入れようと四苦八苦する
「それがですね、竜子さんがけん玉とてもお上手なんですのよ」
「へぇ」

瑞穂が片眉を上げる

「でもお生憎様、あたいはかつて下町で剣玉小町って呼ばれたものよ」
胸を張る瑞穂に、ほたるが手を叩く
「それなら、勝負いたしましょう」
「ええ、良いわよ」
微笑むほたるに、一もニもなく同意する瑞穂
「竜子様は、いかがですの？」
「構わない」
臆することなく、竜子は瑞穂に向き直る

「それでは、試合方法を説明しますの」
けん玉を持つふたりに、ほたるが告げる
「ルールは簡単、けん玉の先端部を使い、糸に繋がった自分の玉を守りつつ、相手の玉を突いて、先に一本先取した方が勝ちですの」
「ちょっと待ちなさい！」
いきなり瑞穂がダウトを叫ぶ

「赤い玉を突けば有効、さらに相手の玉の穴の部分を自分のけん玉の先端部に入れれば一本、ちなみに相手の腹部や目を突くのは反則で、って、どうしました瑞穂さま？」
「どこの世界のけん玉よそれ！」
瑞穂のツッコミを聞いて、ずっとそれをけん玉の本当の遊び方だとほたるに教わっていた竜子が、えっ、という表情をした
「古来より伝わる武術、剣玉道です」
「あるかそんなもん！」
瑞穂はけん玉を地面に投げ捨てる
「瑞穂様ってば、お父様のけん玉を……」
ほたるが少しむくれて言う

「でしたら、瑞穂様は不戦敗ということになりますのね」
「えっ」
「さ、竜子様、再び剣玉道の続きを致しましょう」
「え、ええ」
何だか腑に落ちない竜子を連れ、ほたるが庭の中央に戻ろうとし、それを瑞穂が引き止めた
「ちょっと待ちなさいよっ、良いわよ別に、身体能力でしょようは、やってやろうじゃない！」
雪にまみれたけん玉を拾い上げる瑞穂
「うふふ、それでは始めましょうか」
「けっ、あたいが果物の娘なんかに負けるもんかっての」
けん玉を半身に構える瑞穂に、竜子がぴくと反応する
「……瑞穂ってでも、そんなこと言って口だけだったりね」
「あ？　今なんて言った？　てか呼び捨てしたァ？」
火花を散らし合うふたりを、わくわくと見つめるほたる

「では、れでぃーごーですの」
振り子のように玉を揺らしながら、瑞穂が突きかかる

「ていや！」
その突きを手首の動きだけで避けた竜子が、三段突きによりカウンター狙うが、対する瑞穂は優雅に先端で弾き、受け流す
「ぬふふ、筋力に頼っているようじゃ、まだまだ青いわね」
赤い玉をワザと前に出し、竜子を誘い出そうとする瑞穂が、嫌らしく微笑む
竜子のこめかみに、怒筋が浮かんだ

「あら良い香り」
屋敷から漂うお雑煮の匂いに惹かれたほたるが、後ろを振り向いた瞬間に、竜子が瑞穂の脛を蹴りつける
「な、なっ！？」
「……」
竜子はその隙に、瑞穂の玉を思いっきり突く
「あら、竜子様有効ですのね」
「ちょっとほたる！」
「はい？」
見ていなかったほたるが、首を傾げる

物言いを申し立てようとする瑞穂を、竜子は果敢に攻め立て、喋らせようとしない
「こ、この、なんて汚い女……！」
拳法家の足技も交えつつ、一転して竜子の優勢が続く
そこへ、ひょっこりと何も知らない当主が顔を出した
「あ、なぁに、お遊び？」
初夢で縁起の良い夢を見て、機嫌の良い柚子（ゆずこ）が、ほたるの元にやってくる
その前には、けん玉片手にガッキャンガッキャン突き合う瑞穂と竜子がいた
「え、な、なに……？」

その光景に、柚子が少し引く
「あら柚子様、おはようございますの」
「な、なにしているの……？」
「さあ、私も面白いから見てるんですの」
「アンタがやらせてるんでしょーが！！」
けん玉を握り締めて、瑞穂が怒鳴る

「……は、お母さん」
ずっと蹴りのタイミングをうかがっていた竜子が、顔を上げて柚子を見つめる
柚子が眉をひそめて、竜子を見ていた
竜子はしばし、けん玉を構えたまま、己の姿を客観的に眺めてみて、
「……ッ！」

脱兎のごとく林に逃げ出した

「あらあら」
「た、竜子さん……？」
柚子の見つめる先へ、瑞穂も駆け出す
「ちょっと、待ちなさいよバカ！　まだ勝負は終わってないんだからね！」
竜子の逃げ出した方へ、瑞穂もまた跳躍する

静かになった庭に、一陣の風が吹く
ほたるは呆気に取られている柚子の手を掴んで、微笑んだ
「さ、お部屋に戻りましょう、柚子様」
「う、うん……」
自分が当主になった1年がこんな風に始まるのは、何だかとてもらしいような気がしないでもない柚子であった

＜壬生川家・居間＞

屋敷に戻ると、イツ花がお雑煮を作って待っていてくれた

「温まりますね、柚子様」

「う、うん、そうだね」

ほたるの笑顔に、何だか素直に同意できない柚子

「あらァ、瑞穂さまと竜子さまは一緒じゃなかったンですか？」

「あ、うん」

何て答えて良いのか分からない柚子の代わりに、ほたるが返す

「瑞穂様はきっと、今月はお祭りの準備でお忙しいですし」

「ああ、そういえば“餅と白雪祭り”」

「そ、そっか……瑞穂さん、祭神さまの娘なんだ……」

何だか身近にそういう存在がいるのだと思うと、少しだけ照れてしまう

食事も終わって、イツ花がお雑煮の鍋を片付ける際、鍋敷き代わりに使っていた本の表紙がちらりと見えた

昔の言葉で“卑弥子”と書いてあった

「こ、これ、＜卑弥子＞の術書じゃ！」

「あら、本当ですのね」

「無いと思ったら、なんでこんなとこに……」

「でも頑張って取ったのに、誰も覚えられないんですものねえ……」

表紙をぽふぽふと叩いて埃を払い、ほたるがそうだ、と思いつく

「それじゃあ、私たちだけしか居ませんし、今年は書初めをしましょう」

手を叩いて微笑むほたる

「書初めかぁ……うん、良いね」
平和そうで
「じゃあ、私が先に書き初めしますから、次は柚子様の番ですのよ」
「う、うん」
先とか、次は柚子様の番だとか、何だか似つかわしくない言葉が
飛び出す

居間に書道の道具を持ってきて、ほたるが気合いを入れる
「初めての書初め、楽しみですの……」
「いや、新年の抱負を、紙に書くだけじゃ……？」
「あら？」
ほたるが柚子を見て、きょとんとする
「新年の抱負を、順番にしりとりで書く遊びでは？」
「ち、違うよっ」
「おかしいですの……お父様が、そうおっしゃってましたのに」
貞光さんのせいだったのか、と柚子が頭を抱える
「でも楽しそうだから、しりとり書初めに致しましょう」
対照的に、ニコニコと笑うほたる
「う……わたし、そういうの苦手なのに……」

「ちょ、ちょっと待ってくださいッ」
そんな和やかな空気を、食事の後片付けを済ませたイツ花がぶち
壊した
「どうしましたの？」
「ど、どうしたのイツ花さん、変な板持って……」
「どうもこうもないですよォ！　新年イベントは決めてたンです！」
何やら先走っていたらしいイツ花が、ドンと机を叩く
「今年は、せっかく一家全員女性なんですから、ミス壬生川家投票
をするってバーンとォ決めていたんです！」
「え、えええええ！」

「あらあら」
「せっかく、こんなプラカードまで作ったんですから！」
イツ花が持っている立て札には、
“新年特別イベント、壬生川家人気投票、ご応募先はこちら”と書いてある

「まあそれはともかく、私から行きますね、書初め」
「一言で片付けられたァ！」
うわーんと泣きながら、イツ花がどこかに走り去ってゆく
「い、イツ花さん……」
「うふふ……出来ました、はい、弓使いらしく……“一発必中”ですの」
和紙を持ち上げて、ほたるは嬉しそうに微笑む
「ひっちゅう……う、かぁ……」
柚子が頭を悩ませながら、筆を動かす
そうして出来上がったのが、
“うさぎ”」
「……うう、思いつかなかった……」
ひらがなで書かれた“うさぎ”を見て、ほたるが目を細める
「柚子様らしいて、可愛らしいじゃないですの」
「……うう」

続いてほたるは、“逆取順守”と達筆で書いた
「道理に反した方法で天下を取り、正道に順じた方法でそれを守ること、という意味ですのよ。壬生川家も勝つためには手段を選んでられませんものね」
「しゅ、しゅ……」
微笑むほたるに、柚子は“宿題”と書いた
「……うぅ」
「い、ですのね、それなら」

さらさらと“意趣返し”とつづる
「今年の目標……？」
「うふふ」
口元に手を当てて笑うほたるに、柚子は“屍”と返す

このやり取りがしばらく続き、終わった後には、柚子がどーんと落ち込んでいた
「うふふ、“うさぎ”、“宿題”、“屍”、“リューマチ”、“みかん”」
「復唱しないでよぅ……」
「丁度、ん、で終わっているのが、また味がありますのね」
「ううう……」
「是非、廊下に飾っておきましょう」
「やめてえええええ」
柚子が顔を真っ赤にして叫ぶ

それはともかく、後日、本当に廊下に張り出された柚子の“みかん”を見た竜子は、何か言わなきゃいけないと思い、母親に「お、おいしいですよね……」と、つぶやいたという

第九話－7　「葬送」　１０２５年1月後編

＜出陣＞

お正月気分も抜けきらないまま、現在の壬生川家の全員が玄関に勢ぞろいする

「ふぁぁ……こんな朝っぱらから、かったるいわねえ」
「まあまあ、今月は竜子様の初陣ですし」
微笑むほたるの前、竜子が憮然と立っていた
「それにしても……何その衣装」
「何が？」
胡散臭いものを見るような目で、瑞穂が竜子の全身を眺める
「何がって……ねえ、果物」
「わ、わたしに、言われても……」
少し影の薄い現当主が、頭をかく

「……何か、おかしいの？」
自分の格好を見直す竜子
女性拳法家の衣装は、上半身こそ胴着の形を取っているものの、鋭い蹴りを放つための下半身に至っては前当てがついているだけで、ふとももは丸出し、見た目なんて半裸だ

「若いって良いですのねえ……」
「ムカつくわね、ちょっと顔が良いからって……」
（……キックしたら、パンツ見えちゃうんじゃ……）
「？」

母や姉たちの想いをよそに、竜子は首を傾げる
そうして、壬生川家は出陣するのであった

＜鳥居千万宮＞

竜子の初陣のため、ボスも倒し慣れている感のある鳥居千万宮へと一同はやってきた

「あの、え、えと、瑞穂さん……？」
「何よ果物」
えっこらえっこらと、先頭に立って風呂敷包みを担いでいる瑞穂に、声をかける柚子
「その手荷物は、何……？」
ほたるはスルーしていたが、気になるものは気になるのだ
「お祭りで配られた菓子よ」
「お、お菓子……？」
戦場にオヤツを持ってきている瑞穂が、なぜか胸を張る
「だって、今月中に食べないと腐るのよ!?　イツ花ひとりで食べられないし、あたいも食べたいじゃない！」
「で、でも、そんな、手荷物……」
「うるさいわね、あたいが持っているんだから良いでしょ！　誰にも迷惑かけてないんだし！」
「は、はぃ……」
思わず勢いに押されてしまう柚子（ゆずこ）
迷惑をかけてないのなら、この携帯袋の隙間にも詰め込まれている大福は一体何なのだろうと密かに思う、道具が粉まみれだ

戦場にお菓子を持ってきている瑞穂を先頭に、壬生川家は鳥居千万宮を突き進む
「突撃ィー！」
瑞穂が掲げているのは、薙刀ではなく水あめであった

～～

暗黒大鳥居に入って、瑞穂が言った
「果物の娘、あんたあれ一人で倒せる？」
顎で指した先に居るのは、三本尾の中ボス稲荷ノ狐次郎だ
「え、ちょ、ちょっと無茶だよぅ」
「まあまあ、柚子様はこちらへ」
ちょっと何するのや止めてぇと叫ぶ柚子の首根っこを掴み、ほたるが笑顔で境内の方に進んでゆく
「どう、出来る？」
瑞穂の挑戦的な眼差しに、竜子は仏頂面のままで頷いた
「造作も無いわ」

初陣の娘が、両手にはめるのは“燃える拳”、火属性の篭手だ
赤熱に燃える拳を振り回しながら、竜子は緑色の長い髪を尾引かせて、鳥居の上へと跳躍する

「……行くわ」
狐次郎の咥えている鎌をすり抜け、その顔面に強烈な拳を叩き込んだ

その様子を境内から見ていたほたるが、感嘆の声を上げた
「本当に……素手で戦うのですのねえ……」

達人の武術を見たというよりは、何か大道芸の妙技を拝見したような目で、宙に舞う竜子を眺める
「すっごいわねえ……鬼を蹴りで吹っ飛ばすとか、人間やれば何でも出来るようになるのね……そのうち、扇で踊りながら戦うような職業も、出るんじゃないの……」
さすがの瑞穂も、呆れ気味だ
「う……すごいや、竜子さん……」
一方、初戦の中ボス相手に一撃も入れることが出来なかった柚子が、情けない声を出した
「六代目の当主様も、ずいぶん拳術に通じてらっしゃったようですが、やっぱり幸家の血ですのねえ」
運動音痴で、未だに腕相撲以外の体力勝負で瑞穂に勝てたことのない柚子が、それはないと泣きそうな顔で首を振る
「あ、お賽銭箱」
稲荷ノ狐次郎と格闘戦を繰り広げる竜子に背を向け、神社を探索していた瑞穂が賽銭箱を発見した
「あらあら、ちょうど新年ですものね、お参りしましょうか」
「今一応戦闘中だよ!?」
柚子の声を気にも留めず、瑞穂とほたるが財布を片手に、参拝しに行こうとする

その二人の前に、竜子が上空から音もなく着地した
「……御参り、私も行きたい」
穴の空いた銭玉を顔の前に掲げる竜子
「……あんた、狐次郎はどうしたのよ」
「倒した」
親指で後方を示しながら当然のように言い放つ竜子に、瑞穂が少しだけ怒筋を浮かべたのを、柚子は見逃さなかった
稲荷ノ狐次郎の姿は遠くに、わずかに黒い霧の欠片が残っているばかりだ

「あ、あんたも、可愛くないヤツね……」
幸家はこんなんばっかりか、と憤る瑞穂に、ふっと表情を緩ませて、竜子がつぶやいた
「顔は、瑞穂よりは可愛いわ」
空間にヒビが入る音が聞こえた

～～

よく分からない言語を叫ぶ瑞穂を宥めること、数時間後
一同は悪羅大将たちの群れを蹴散らしながら、拝殿の奥、三本に枝分かれした暗闇を進んでゆく
「チッ、金、金、金に金か」
つづらを開けて舌打ちする瑞穂は、機嫌もあまり直っていないようだ

「時登りの笛がもう切れてしまいましたものねえ、残念ですの」
「まあ、金はありすぎて困るもんじゃないし、別に良いけど……」
昔はお金が大好きだった瑞穂も、今ではすっかり物の価値が変わってしまったようだ
「私たちは、時間が欲しいですのにねえ……」
和やかにお喋りをする傍ら、竜子は悪羅大将相手に実戦経験を積み重ねていた

「貫……！」
自分の数倍の大きさのある悪羅大将の分厚い鎧を手刀でブチ抜き、その巨体を軽々とふっ飛ばす竜子
「……流々に」

残心し、竜子は襲い掛かってくる次の鬼を迎え撃つ

「うわあ、早いなあ竜子さん……」

誉められて調子に乗った竜子が、闘気と共に三連打を打ち出す

「……乱――連――臨――！」

右、左、回し蹴りの連携が悪羅大将を徹底的に叩きのめす

その猛攻の総合ダメージは初陣にして、クリティカル時の柚子にも引けをとらない威力であった

「すごい、すごいや！」

柚子が竜子の手を取って、わが子の活躍を大いに喜ぶ

先ほどまで巨大な鬼をボコっていた竜子が、急に動揺しながら、そっぽを向く

「べ、別に……ていうか」

「うん？」

「あの二人、何食べてんの」

竜子が見る先には、つづらの前で菓子折りを広げている瑞穂とほたる

「ちょ、ちょっと何しているの！？」

「飯」

「うふふ、お菓子がいっぱい詰まってて、食べないとつづらのお金を持っていけないんですのよね」

「ど、どれだけお菓子持ってきたの！？」

脇で叫ぶ柚子の声を聞き流しながら、瑞穂とほたるはピクニック気分を満喫していた

「はぁ……腹が立った時は、やっぱり馬鹿食いが一番よねー！」

「美味しいですの……白雪屋の、胡麻団子」

時間を貴重だと言いながら、その一方で浪費もする壬生川の女性たち

四人が最奥にたどり着いたのは、火も残り一個となった一月の暮れであった

＜孤美姫の間＞

三度訪れし御殿、九尾吊りお紺の住処である
去年の6月にも来たことのあるほたるを先頭に、一同はゆっくりと中に立ち入る

「……」
周囲に渦巻く陰気を感じ取ったのか、竜子が無言で柚子の腕にしがみつく
部屋の中心に、花魁姿の女狐が横たわっていた
俯いて、顔を伏せたまま、すすり泣いていた

「これが……お紺、さん」
竜子を連れたまま、柚子が前に進み出る

子供を自らの手で殺さなければいけないほどの不幸、柚子にとってそれは、人が鬼に変わるには十分すぎるほどの出来事のように思えた
顔を上げたお紺は、壬生川の母娘を睨むように見据えて、うめく
お紺「子供さえできれば、亭主も家に戻ってくると思ってたよ……」
お紺の背後に、以前ほたるが見たものと同様の、巨大な炎の幕が

揺らめいた
火の壁のように燃え上がる狐火に、白黒の輪郭が浮かび上がる
お紺を殴りつけ、少ない金を奪って家を出てゆく亭主の映像
お紺「お金さえあればすべてが元通り、うまくいくと思ってた……」
泣くお紺を尻目に、若い女と家を出てゆく亭主
赤ん坊の黄川人（きつと）を前に、死んだような目をするお紺
お紺「あたしのことだって、少しは構ってくれると思ってたンだ！
なのにひとつもだめッ！」
お紺の生涯が、走馬灯のように、万華鏡のように炎上する幕に流れ続ける
一つの不幸が起こり、さらに不幸が重なり、不幸が連なり、不幸が巡ってゆく
お紺「コーン！　コーン！　どうしてあたしだけよ！？　みんな不幸になればいいんだよォ！」
子引きの母親は、泣きながら叫んだ
その瞬間、炎の幕が爆ぜて、壬生川の四人に降り注いだ
「げっ」
完全に虚を突かれた瑞穂は、薙刀を払うが、何本かの火の槍を浴びてしまう
ほたるや柚子も手傷を負う中、竜子ひとりが＜赤地獄＞を抜け、お紺に肉薄した
「……」
お紺の頬を殴りつけた竜子が、そのまま元の位置に戻ってくる

「ちょっと、あんたさっきの連続攻撃はどうしたのよ！」
「……テンションが上がらなくて」
「あんたは気分で戦闘しているのかあ！」

そんな掛け合いをする瑞穂と竜子を、お紺の九尾が薙ぎ払う
暴れ尾は地面を走り、部屋中を破壊しながら、四人の体力を奪ってゆく

お紺「亭主が嫌いだ！　あの女が嫌いだ！　世ン中が嫌いだ！　人間が嫌いだ！」

孤美姫の間の中心でお紺が泣きながら、壬生川の面々をかき回す
木片が飛び散り、埃が舞い上がり、竜巻が起きているような部屋の中で、瑞穂が薙刀を地面に突き刺し、必死に踏みとどまっていた
その気迫が、お紺を睨む
「嫌い嫌いうるさいわね……女々しいっての、あんたは昔の果物か……！」
「……瑞穂さん！」
尾を大槌で振り払っていた柚子が叫んだ、お紺が自ら扇を振るい、瑞穂にトドメを刺しに行ったのだ

お紺「お前に何が分かるのさ！」

「あんたにも、あたいたち一族の苦しみなんて分からないでしょうが！」
瑞穂は扇を薙刀の柄で打ち払い、踊るように薙刀を振るった
奥義・道明鏡返しが、お紺の三本の尻尾を斬り飛ばした

「うふふ、例えどうしようもない人生でも、肩の力を抜けば、見方

も変わるものですのよ」
　微笑みながらほたるが放った、枝分かれする雨の矢が、悪鬼のようなお紺の尾を三本貫いた
お紺「く……嫌いだ、嫌いだよ……弱虫のあたしが　イッチ番嫌い、だよ……」
　苦悶の表情を浮かべるお紺の尾を、三本叩き潰した柚子が、眉根を寄せてつぶやく
「今、成仏させて、あげますから……」
　全ての尾をもがれて、お紺はもはや丸裸も同然になった
　いつの間に、こんなに圧倒的な実力の差がついていたのだろうか、とお紺は再び自らに絶望した
　これまで、何度絶望して、何度人生を怨んだろうか、自分よりも不幸な人間はこの世には居ないと思っていた
　だというのに、何故だ
　不幸に打ちのめされたお紺は、たった二年も生きられない一族を見て、激しく思った
お紺「何で……あんたたちは……」
　何故、そんなにも、未来を信じられるのか！
　その時、お紺の首元に、朱ノ首輪が浮かび上がった
　鈍く赤い光を放ちながら姿を見せた負の結晶を見て、竜子は跳躍した
　噂にだけ聞いていた、人や神を鬼に変え、縛りつける首輪
「……飛天脚（ひてんきゃく）――！」
　竜子の放った必殺の一撃が、お紺の朱ノ首輪を蹴り砕いた

お紺の体が、四人の前で光の粉と変わってゆく

お紺「……ああ……」

ひとりの綺麗な女性は瞳を閉じて、深く息をはいた

お紺「どうして、あんたたちは……そんなに、未来を信じられるんだい……」

消えつつあるお紺に、柚子が告げた

「……運が回ってくるのを、悠長に待てるほど、人生は長くはないから……だから、回らないなら、自分で回すしか、ないって気づいたから」

一言一言を噛み締めるように、壬生川家九代目当主が言った

お紺は瞳を閉じたまま、少しだけ微笑んだ

鳥居千万宮で赤ん坊を見つけた時、心から暖かくなった

自分は、あの時に拾った運を、目減りして使い、そして乾き死んでしまったのだ

もし、生まれ変われるのなら、今度こそは……

お紺「黄川人……母ちゃんを、許しとくれ……」

１０２５年１月　九尾吊りお紺　解放

四人の前で、お紺は完全に消え去った
最後まで残っていた狐火の一粉に映っていたのは、赤ん坊を抱いて微笑む母親だったと、柚子にはそう見えた

＜続・孤美姫の間＞

「まさか、こんな形で役に立つとは思いませんでしたの」
ほたるがいつものように微笑みながら、墓に手を合わせた

粗雑に作られたお紺の墓の前には、残っているだけの京菓子が全て供えられていた
「……まあ、捨てるよりはマシよね」
「瑞穂に食べられるよりは、よっぽど幸せよね」

竜子を追い回す瑞穂を横目に、柚子が目元を指で拭う

「それにしても……うふふ、柚子様も、言うものですのね、格好良かったですの」

「……うん」

柚子は茶化すほたるの声にも動じず、お紺の墓を前に涙を浮かべたまま、つぶやいた

「わたし、未来を信じてるから……信じられるんだ、みんなとなら」

その赤く目を腫らした横顔は、ほたるが思わず産毛立つほど、力強さに満ちていた

第九話－7　「葬送」　１０２５年１月後編（後書き）

出陣・鳥居千万宮（柚子・瑞穂・ほたる・竜子）

第九話－8　「妹分」　１０２５年2月前編（前書き）

柚子　　１才３ヶ月
瑞穂　　１才１ヶ月
ほたる　１０ヶ月
竜子　　３ヶ月

第九話－8　「妹分」　１０２５年2月前編

＜柚子の部屋＞

柚子（ゆずこ）の部屋で、僅かに甘い声が漏れる

「ふゅぅ……」

寝転がりながら、身をくねらせる竜子（たつこ）

「竜子さん、さっきから声が……」

「だってぇ……」

柚子に膝枕をされ、耳掻きをしてもらっている竜子が、微笑む

「……きもちいいんだもの、お母さんのお膝」

「あ、はは……何だか、恥ずかしいなあ……」

「えへへ……」

頭を撫でられて、照れ笑う

（竜子さんは、可愛いなあ……）

二人になると途端に甘えん坊に変身する娘に、柚子は目を細める

自分よりもずっと綺麗で、頼りになる竜子を持って、自分は何て幸せなんだろう、と思う

「ねぇ、お母さん……」

「なぁに？」

娘に柔らかく微笑む柚子

「お母さんって、瑞穂（みずほ）に苛められているの？」

「え、ええ？」

「ねぇねぇ、苛められてるの？」
膝元に頭をぐりぐりしながら、子供の無邪気さで尋ねる
「そ、そんなことは、ないよ……」
「本当に？」
「う、うん……瑞穂さんは分からないけど、わたしは、ずっと瑞穂さんのこと、好きだし……」
「本当に？」
「う、うん……」
苦笑しながらうなずく柚子をじっと見つめて、竜子は起き上がり、ニッと笑う
「もし瑞穂が今度何かやってきたら、私が殺してあげるからね！」
「あ、はは……だいじょうぶ、だよ……」
突然の殺人予告に、乾いた笑いを上げる柚子だった

＜瑞穂の子供＞

「くしゅ！」
「あら、どうしましたァ瑞穂さま」
「何かしらね……ちょっと冷えるわね」
身体をさすりながら、鼻をすする瑞穂
ここは交神（こうしん）の間、今月は瑞穂の子供がやってくるのだ
「まあ良いわ、それで、あたいの子は来てるの？」
「はい、もういらしてますよォ、今お呼びしますネェ」
イツ花（いつか）が去って、静かになった部屋で瑞穂はふと思いに更ける

「あたいも母親か……パパが聞いたら、きっと驚くわね」
ふふと笑う
「どうぞドメスティックバイオレンスは、柚子様だけに留めてくださいましね」
「どこから入ってきた！」
いつの間にか瑞穂の隣に座っていたほたるが、口元に手を当てて微笑む
「うふふ、新しくいらっしゃる方を、早くこの目で見てみたくて」
「……あんた、ホントに自由よね」
瑞穂のジト目を笑顔でかわし、ほたるはしれっと言う
「面白そうな事は、見逃せませんの」
「あんたも退屈なら、貞光（さだみつ）さんみたいに、発明でもすれば良いじゃない」
「そうですのねえ……そういえばこの前、イツ花さんと壬生川（みぶがわ）家の障子の張替えも終わりましたし、おうちの事はいよいよやることがなくなってきましたの……」
こめかみを押さえて顔を伏せるほたるに、瑞穂がつぶやく
「じゃあ次は料理でも習えば良いじゃない、あたいに作ってよお菓子」
「あらあら、それはそれは牧歌的で良いですのね、お料理、お料理良いですの」
「……あんた、ホントに平和よね」
それだけで、プレゼントを貰った子供のように顔を輝かすほたるに、瑞穂も思わず釣られて笑う

暖かいムードに包まれる部屋に、突然叫び声が響いた

○「ダメですー！」

障子を開け放れた

心配そうな顔をするイツ花の足元に、小さな子供が立っている
まだほたるが作った庭の雪だるまよりもずっと小さな体で、キッと瑞穂とほたるを睨む

「何言っているんですか！　お料理とかお掃除とかそんなの家政婦の仕事でしょ！　もっと他にやることがありますよねっ！？」
「誰このガキ」
「たぶん……」
目つきを鋭くする瑞穂と、頬に手を当てて苦笑するほたる

「まったくどうなっているんですか！　たるんでます、あなたたちはたるんでますよ！」
「あ、あんたッ、あたいのお腹のどこがたるんでるって言うのよー！」
むきゃーっと幼児に掴みかかる瑞穂に、ほたるが、そういえば最近瑞穂さん……とつぶやく
「ま、まぁまァ、ほら、子供の言うことですし瑞穂さまァ」
ちびっ子の髪を引っ張りまわしていた瑞穂を、慌てて止めるイツ花

「はぁはぁ、そ、そういえばそうね……」
瑞穂は肩で息をつきつつ、白目を剥く子供をぽいっと投げ捨てる
「で、誰よ、コイツ」
「読者の方の九割は分かっていると思いますの」
「ああん？」
目を吊り上げる瑞穂に、イツ花が紹介する
不動泰山から預かってきた、赤い髪をした瑞穂の娘であった

母親に良く似た、赤い髪、白い肌を持つ少女月見（つきみ）は、居間の中央に座りながら、プンスカと怒る
「大体、どうなってるんですか！　来た早々にボクを締め上げるな

んて、秩序が崩壊しているんですかこの家は！」
「また女か、チ」
「どういうことですかそれは！　お母さん！」
キャンキャンとわめくツーテールの月見に、瑞穂が眉を寄せる

「ねえほたる、あんたこいつ要らない？」
「あらまあ、お母さんによく似てますねえ」
話を振られたほたるは、月見の髪を撫でて微笑む
「ちょっと！　武家の娘の頭をたやすく触らないでください、馬鹿にしているんですか！？」
ほたるの手を振り解いて、月見は犬歯を剥く
「元気ですのねえ」
「不動泰山の野郎、どんな育て方をしたのよあいつ……」
月見は凛々しい瞳を大きく開いて、告げる
「何はともあれ、ボクが来た以上！　朱点（しゅてん）の命は明日にもありません！　ハハハ！」
「いや無理よ、あたいの娘のくせに」
「どうしてそういうことをおっしゃるんですか！　あなたがそんなだから――！」

ギャーギャーとわめき合う親子を横目に、ほたるとイツ花は静かに部屋を退出してゆく

「今月は……たぶん、私と柚子様と竜子様の三人で出陣ですのねえ……」
「ううん、何だかまたモノが壊れる予感がしますぅ……」

こうして、壬生川家に新たな薙刀士が加わったのであった

第九話－9　「秘文」　1025年2月後編

＜出陣＞

柚子（ゆずこ）、ほたる、竜子（たつこ）の三人が軒先に集合する

「あ、今月はわたしたち三人なんだね」

「そうですの、瑞穂（みずほ）様は今頃」

ほたるが振り返ると、壬生川の屋敷から強烈な火の神気が立ち上るのが見えた

それと共に、巨大な火球が庭の中央に飛来してゆく

「あらあら……瑞穂様も、ついに＜七天爆＞を修得したのですのねえ……」

「実家で七天爆を使わなきゃいけない事態って何!?」

感慨深くつぶやくほたるに、柚子が突っ込む

二人を横目に、竜子が静かに拳を挙げた

「……壬生川（みぶがわ）家、出陣」

こうして、久々に臥家（がけ）を欠いた壬生川一族は、忘我流水道へと出陣していった

＜忘我流水道（ぼうがりゅうすいどう）＞

「う、水が冷たい……」

恐る恐ると水につま先をつける柚子が、顔をしかめる
「そういえば柚子様は、お水が苦手なのは、治りましたですの？」
「う、何故それを……」
「うふふ」
2月だというのに嫌な汗をかく柚子に、笑みを作るほたる

1才3ヵ月になる九代目壬生川当主は、去年と同じように足を水につけたり出したりしながら、つぶやく
「だって……何だか、吸い込まちゃいそうなんだもん、いっぱいの水って……ああ、眩暈がしてきそう……ううう」
「だからって、壬生川家の当主が、水が怖くて洞窟の奥に行けないのは」
「そ、そうだよね、うん……うん、頑張る、行く、い、行くからね……」
自分で自分に気合を入れつつも、なかなか踏み込めない
「行く、行かなきゃいけないって、分かっているけど……う、うぅ、ううう……」
水面を覗き込んで目元を押さえる柚子を、後ろから竜子が持ち上げる
「わわ」
大槌ごと柚子を軽々と、お姫様抱っこした竜子が、そのまますいすいと上水道を進んでゆく
「す、すっごい……竜子さん、力持ち……ありがとうね、竜子さん」
「べ、別に、お母さんのためじゃないんだから……」

その様子を後ろから眺めていたほたるが、ポツリと漏らす
「ああ瑞穂様……何だか私、お邪魔ものみたいですの、ご一緒に来られれば良かったのに」
「な、なに言っているの！？」

娘に抱きかかえられたまま叫ぶ柚子
「ああ、独り身は寂しいですの……」
「ほ、ほたるさんだって、もうすぐ交神（こうしん）の儀じゃないっ」
香家（きょうけ）の壬生川ほたる、現在乙女真っ只中１０ヶ月である
「そうでしたのね、うふふ、楽しみですの」
「も、もう変なこと……そ、そうだ、竜子さんって水平気なんだね、すごいねっ」

慌てて話を変えようと、柚子は竜子を見上げる

「……あ、いや、私もこういうところは嫌い」
澄まし顔の竜子が、わずかに頬を赤らめながら、首を振る
「え、そ、そうなんだ……」
竜子さんに苦手なものがあるなんて意外、と、３ヶ月の娘に思う母親
「や、やっぱり、何か吸い込まれそうな薄暗い雰囲気とか、足元が見えない怖さとか、あるよねっ」
本気で怖がりながら話す柚子に、竜子は一言だけ返す
「いや、髪が濡れるから」
見れば、竜子の腰まで伸びる綺麗な緑色の髪が、水面に広がっていた

「そ、そっか……」
何だか年長者としてとても負けた心地がして、柚子は羞恥に赤くなった表情を見られないよう、がっくりと顔を伏せた

＜人魚の瀑布＞

人魚の瀑布に着いた時、真名姫（まなひめ）は自慢の長い髪を滝の飛沫で洗っている最中であった

「あら、今年は早いのね、ウフフ」
何故だか笑みまで見せてくる始末
「ま、まなひめ……さん？」
水道を抜けた洞くつにたどり着いたため、自分の足で立って幾分元気を取り戻した柚子が、首を傾げる

「……フレンドリーな人ね」
「え、いや、こんな人だったかなぁ……？」
去年の記憶が何だかおぼろげだ、誰かに水の中に引きずり込まれたからだ

真名姫は洗い終わった髪を指で梳くと、薄く微笑む
「だって、あなたたち本当にしつこいんだもの、一度コテンパンにしてあげたのに、まだ挑みかかってくるし……もう私じゃ足止めにもならないし、気を張ったところで仕方ないじゃない」
「あらあら、では雨の話でもしましょうか」
「気を抜きすぎだよ！」
名案、とばかりに手を叩くほたるに、勢いよく叫ぶ柚子
「雨……夏の土砂降りは良いわね、あれは、面白いわ」
「はい、私も好きですの、うふふ」
「の、乗っちゃうんだ真名姫さんも……」
香家のほたるを、改めてすごいと感じる

「やっぱり、あなたたちって私とどこか似てるわね、ウフフフ」
真名姫は微笑んでから、姿を豹変させる
木の幹が剥がれるように、生身から白骨の姿に移り変わり、背骨

のような槍を持って、くぐもった声でつぶやく
「だから、殺してやりたくなるのよ！」
矛を突き出して、真名姫がトビウオのように襲い掛かってくる
柚子を狙ったその一撃は、寸前で竜子によって捌かれた
「それは、許可出来ないわ……乱――！」
矛の先端を掴んだまま、竜子は無数の連打を真名姫に叩き込む、
燃える拳による火炎の牙が、真名姫の白骨の身体を徐々に崩してゆく
「……必死ね」
真名姫が、骸骨の口を開いて、笑う
ほたると柚子の＜萌子＞を身にまとった竜子は、臆面もなく言い返した
「必死よ」
竜子の熱い拳が、真名姫を打ち砕く

＜永久氷室＞

真名姫を水葬した一同は、その奥の氷の迷宮へと足を踏み入れた
「寒いですのねえ……」
「……真名姫戦で、動いてなかったからじゃないのかしら」
竜子が身を震わせるほたるに、冷静にツッコミを入れる
「違いますの、柚子様も竜子様も、炎の属性武具をお持ちですの」
「あ、そういえば……」
紅蓮ノ大槌を知らず知らずに抱きしめていた柚子が、ほたるを見た
「ほたるさん、雨切り弓……」

「これでは、氷切り弓になってしまいますの」
弓の弦からぽたぽたと漏れる雫の量が、徐々に少なくなってゆくのが見える、凍っているのだ

「そうですの、竜子様、その手袋を片方貸してくださらない？」
「嫌、寒いわ」
口を尖らせて、竜子が拒否する
「えー……子供じゃありませんし、良いじゃないですのー」
「いや、私はまだ子供だけど」
「むう……仕方ありませんの」
ほたるはくるりと向きを変えて、柚子に抱きつく
「ひゃ、冷たいっ」
雨切り弓を柚子の首筋に押し付けつつ、紅蓮ノ大槌で暖を取るほたる
「うふふ、人肌で暖めるのは、いつの時代もセオリーですの」
「や、ひゃん、つ、冷たいよぉ」
「うふふ」
「やぁ……」
「……」
竜子が手袋を脱いで、ほたるに投げつける

「あら、貸してくださいますの？」
「……」
竜子が無言のまま、すたすたと前に進んでゆく
（い、今、絶対手袋叩きつけた……）
「うふふ……照れ屋さんなんですから、もう」

燃える拳を拾い上げ、頬に当てて幸せそうに微笑むほたるの横で、柚子だけが娘の真意に気づいて、戦々恐々としていた

～～

紅こべ大将やおどろ大将を相手にしていると、柚子はすぐに重大な事実に気がついた

「全員、単体攻撃だ……気づかなかった」

壬生川家をまとめ上げるべきその当主のつぶやきを、優しいほたると竜子は静かにスルーしてあげた

「確かに、瑞穂様がいないと、ちょっとお時間かかっちゃいますねえ……」

「……あんなの、居なくても」

ぷい、と顔を背ける竜子

「うん、やっぱり、瑞穂さんには……居てほしいな」

竜子の燃える拳の炎がその瞬間に猛り狂い、周りを取り囲んでいる鬼たちがざわめく

「あらあら、柚子様ってばやっぱり、瑞穂様が良いんですのねえ……」

「え、良いって何が？」

「お互い、弱点を知り尽くしている仲ですものねえ」

「わたしは

何だか含みを持った言い方に、竜子が鬼をちぎっては投げ、ちぎっては投げてゆく

「何だかね、最近」

鬼にとって地獄絵図と化す永久氷室の中、柚子の声が小さく漏れた

「道明さんの面影が、瑞穂さんに見えるんだ……それがちょっと、嬉しくて、安心できて」

竜子は道明と直接の面識がない

「……うふふ、可愛いですのね、柚子様は」

ほたるがよしよしと柚子の頭を撫でる

そのふたりの間を邪魔するように、ぬっと竜子が出現した

「……全滅させた」

何もそんな狭いところに現れなくても、と思う柚子に、長柄を差し出す竜子

「おどろ大将が落としたわ、私は武器のことはよく分からないけど」

「あれ、これ、薙刀じゃ」

逆方向に向かって、全力で奥津ノ薙刀を振りかぶる竜子に、柚子がはしゃぐ

「すごいすごい、うちに良い薙刀がないって嘆いていたから、これならきっと瑞穂さん喜ぶよ！」

「……く」

ブン投げようとしている体勢のまま、捨てようとする右手を左手で押し留める、何やら激しい葛藤が巻き起こっているらしい

「良かったですのねえ」

「うん、ありがとう、竜子さんっ」

「……どう、いたしまして」

竜子は押し殺した声で、ゆっくりと薙刀を携帯袋にしまう

こうして、一同は新たな属性薙刀と、ついでに何か落ちていた＜真名姫＞を入手した

多重構造となっている永久氷室の地下三階まで到達したときには、もう火時計はほぼ消えかけていた

＜冷泉の間＞

「うー寒いですのねえ……燃える拳、また貸してくださりません？」
「素手で戦えって言うのかしら……」
明らかに拳法家の衣装の竜子の方が寒そうなのに、それでもねだるほたるは、本当にマイペースだと柚子は思った
それはともかくとして、冷泉の間の中央にはまるでそれが彫像のように、以前とまったく変わらぬ姿で、男が座していた

氷ノ皇子、かつて天上界にその人有りと謳われた美丈夫であり、昨年の5月、柚子の父である力斗（りきと）を死に追いやった張本人だ

柚子はぎゅっと紅蓮ノ大槌を抱きながら、氷ノ皇子の下へと近づく
薄氷を踏み砕く音に、氷ノ皇子は薄目を開いた
「……来おったか」
氷ノ皇子は壬生川一族を眺めて、頷いた

「……やはり何も語らずじゃな、あの男は」
「一体何ですの？」
首を傾げるほたるに、氷ノ皇子はつぶやく
「未だ娘が生きているのが、その証拠であろうな」
分厚い氷壁のようなその重い声に、柚子も眉をひそめた

「娘って……？」
「……もしかして」
近づくだけでも冷気を感じられるその体、ほたるには見覚えがあった

ほたるを見る氷ノ皇子は、まるで花を労わるような目をしていた
「……知らぬというのは、哀れなことじゃ」
その時柚子は、慈しみ深い神の姿を垣間見た気がした

氷ノ皇子はゆっくりと、口を開く

「壬生川貞光（さだみつ）にかけられた呪いは、朱点の手によるものよ」

「……っ」

口元に手を当てて息を呑むほたるに、氷ノ皇子は語る

「いつだったか……私がおまえたちに移し身を破壊された後、あやつはたったひとりで、この永久氷室の最奥までやってきたのじゃ」

正気を保った氷ノ皇子の言葉に、ほたるが動揺を隠しえない

「お父様が……？　変なお方だとは思ってましたが、まさかこんなところにまで一人で来るなんて……」

なんて物好き、とつぶやくほたる

「……貞光は、私に問うた、天地創造と神と鬼と人と、朱点と、全ての事を」

諳うように、氷ノ皇子は続ける

「私は応えた、熱き人間に、知りうる限りの総てを教え聞かせるため、七日七晩語り明かした」

いつしか、柚子もほたるも竜子も、氷ノ皇子の話に聞き入っていた

氷が軋む音がした

「しかし、その時、すでに呪いは朱点の手によって埋め込まれていたのじゃ」

氷ノ皇子の表情が、わずかに曇る

「私とて気づかなかったわ、よもや、紡がれた言葉による物語の中に呪が潜まれていようとは……」

「呪い……？」

「凍りつく、身体も心もな」

一同は思わず顔を見合わせた
それは、まさに貞光の死に方そのものだった

ほたるは七代目当主から教えられた言葉を思い出す
父は、道明にこう言っていた
“私は、本当の事を知りたいのですよ……大筒士は大筒に命を託し、命を預けます……私は何に命を託し、何と戦っているのか、真実をね……”
貞光は真実を解き明かしに来たのだ
誰のためでもなく、恐らく、自分自身の探究心のために

「貞光がおまえたちに話を語って聞かせれば、その呪が今頃、壬生川の血を凍らせていたじゃろう……しかし、朱点（しゅてん）があそこまで己の過去に念を入れるとは、まさかおまえたちも同じなのか」
氷ノ皇子は、顔を歪める

「昼子はこわい女よなあ……つくづく不憫な姉妹よなあ……」
そして、氷ノ皇子は体に積もった氷霜を振り払いながら、ゆっくりと立ち上がる

「まあ、あのふたりのせっかくの趣向、この私がむげに断るのも無粋というものか……」
ほたるが氷ノ皇子の前に歩み出る
「一体どういうことですの……お父様は、どうしてあなたの前に、あなたは一体なにものですの！？」
「娘よ、それを教えることはできぬ、もしそうすれば、呪いがおまえの身にも降り注ぐぞ」
「私は、それでも……」
うなずきかけて、ほたるは唇を噛む
高齢の父とは違う

まだほたるは、交神の儀すらしていないのだ
「ほたるさん……」
心配そうに見つめてくる柚子に、ほたるはゆっくりとかぶりを振る
「……確かに、そのお話は気になりますけど、お父様と違って、わたしはここで死ぬわけにはまいりませんものね」
「……うん！」
柚子が紅蓮ノ大槌を握り締めながら、大きくうなずく
壬生川の三人を前に、氷ノ皇子は吼えた

「おまえたち！　恨みはないが訳あって邪魔だていたす！」

氷ノ皇子を中心に、吹雪が巻き起こる
「ゆくぞ、覚悟せい！」
開幕と同時に、氷ノ皇子の拳が後列一列を薙ぎ払う、避けきれずにほたるのこめかみから鮮血が噴き出した

「お父様の仇はとりあえず置いて、勝たせてもらいますの」
ほたるが雨切り弓を乱射し、氷に穴を空けながら、霧を作り出す

氷が舞い散り、光に反射して輝く中、柚子と竜子が同時に術を唱え始めた
「……神代木の・楠一隻我ら乗せ……・瀬戸往きて・飛ばば七風……！」
「……涼かさや・我に弾ける鬼の爪……岩となり・矛も剣も折れにけり……！」

朗々と術歌が流れる冷泉の間
その中央で、氷ノ皇子は驚嘆した

「……ほぉ」
雨切り弓によって作られた霧と粉雪で視界が覆われ、氷ノ皇子はその場に立ち尽くす
たちまち広間は、一歩前も見えぬ明るい闇と化した

三方向から、同時に三種の強化が流れる
「……＜速鳥＞！」
「……＜石猿＞！」
「……力士水、ですの」

氷ノ皇子は、その妙手に思わず唸った
「……面白いぞ、以前見た時とは雲泥の差じゃな」
何もさせず、氷ノ皇子を押し切るための手段であった
「しかし……」
氷ノ皇子がふっと息を吹いた

その瞬間、霧の隙間から姿が見えたほたるの体が、足元から凍結してゆく
「あらあら……」
頬に手を当てながら、困ったように固められるほたる
それがきっかけとなり、雪煙の中から幸家（こうけ）の親子が飛び出した

「……む！」
赤い炎を巻き上げながら、柚子と竜子が攻撃した直後で油断している氷ノ皇子へと、同時に奇襲をかけたのだ
「ごめんなさい、でも、負けられないんです……悶絶圧（もんぜつあつ）！」
「……――飛天脚（ひてんきゃく）！」
二線の軌跡が、氷ノ皇子を貫いた
奥義の二連打、これにはさしもの氷ノ皇子もひとたまりもないだろう

勢いのまま氷上を滑りながら、竜子が振り返る
「手ごたえはあったけれど……って！」
氷ノ皇子が、眼前にいた
「さすがじゃ！」
拳の二連打を腹に受けて、竜子は真後ろに吹き飛んだ
「竜子さん！　うぅ、＜円子＞！」
軽装の竜子が一撃でやられなかったのは、ひとえに序盤重ねがけした＜石猿＞の効力だろう

「氷室よ！」
氷ノ皇子の手から放たれた青の光が、倒れこんだ竜子を包み込む
「あ、ああ……」
三人で攻めていたはずが、一転して劣勢に回ったことを知り、柚子は愕然とする

序盤に氷ノ皇子に攻撃をさせないようにして、補助術と力士水を重ねがけ、ひとりが冷凍されたと同時に、残るふたりが氷ノ皇子を一気に討ち取る
前年の決戦直後に、故・道明（みちあき）が立案したその策は、見事に敗れ去った
「……う、ううん」
否、まだ敗れ去ってはいない
ひとりになって、柚子は大槌を構えなおした

「前回も、このような立ち合いじゃったな」
「……うん」
ほたると竜子が冷凍され、柚子には二種類の手があった

ひとつは今すぐ＜仙酔酒＞を唱えてほたると竜子を復活させ、氷

ノ皇子の番をしのぎ、再び強化をかけて改めて撃破する
もうひとつは、この番、力士水の効力が残っているうちに、決着をつける事
今は誰も柚子に指図をしてくれない
柚子が自分で決めなければならない

「……いきます」
柚子は覚悟を決める
「ほぉ……先ほどは不意を打たれたが、悶絶圧は過去に二度避けておる、今のところ命中する確率は五割と言えるが？」
「……」
柚子の手に汗がにじむ
「それで、良いのじゃな」
「……五割、良いんです」

あの時、泣いていた少女は、もう居ない
柚子は氷ノ皇子を、当主の瞳で見た

「いつだって……五割だったんですもん！」
柚子は叫んで、飛びかかる
紅蓮ノ大槌が、炎を噴いた

砕け散った氷ノ皇子の欠片を眺めながら、柚子はつぶやく

「……お父さん、わたし……強く、なったよ」

拳を握り、当主は今は亡き先代に誓う

「……道明さん、わたし、やってみます……大丈夫、ですよね、見守っていて、くださいね」

こうして壬生川家の長い一ヶ月は、終わりを迎えることとなった

第九話－９　「秘文」　１０２５年２月後編（後書き）

出陣・忘我流水道（柚子・ほたる・竜子）
初見・月見→薙刀士　訓練・瑞穂→月見

第九話－１０　「都参」　１０２５年3月（前書き）

柚子　　１才４ヶ月
瑞穂　　１才２ヶ月
ほたる　１１ヶ月
竜子　　４ヶ月
月見　　１ヶ月

第九話－１０　「都参」　１０２５年３月

＜京の都＞

「どう？　最高でしょここの抹茶焼き餅！」
瑞穂（みずほ）の前には、漆塗りの器が高々と積み上がっていた
「うーん、さすが餅乃花堂……神様の名前を冠しているだけのことはありますのねえ……」
京でも有名な和菓子屋に集まって、三人はのんびりと束の間の幸せと甘味を満喫していた

噛み締められない人も一名
「どしたの竜子（たつこ）、そんな気難しそうな顔して、虫歯？　食べないならあたいが貰うわよ？　良いの？　よし良いのね！」
上機嫌で瑞穂が竜子の碗を奪う
「……私、甘いモノ苦手なんだけど」

今月、春の選考試合の前、少し時間が余っているからとやってきたのは、瑞穂行きつけの甘味屋であった
舌鼓を打つ瑞穂とほたるの向かいに座り、竜子が頬杖をつく
「……」
ふたりの最高に幸せそうな顔を見ているだけで、何だか胃がもたれそうだ、と思う

「仕方ないじゃありませんか竜子様、柚子（ゆずこ）様が月見（つきみ）様の訓練をなさっているんですから」
「……だ、誰も、お母さんのことなんて、何も言ってないわ」

横を向く竜子に、瑞穂がにやけながら言う
「いやー、家で月と二人で留守番なんて真っ平だからねぇ、果物に訓練押し付けて正解だったわぁー」
「あなたの差し金か……」
拳を握り、瑞穂を睨む竜子
「や、やぁねえ、今のはアハ、ついうっかり、白玉団子で口が滑って」
言いつつ、横目で奥津ノ薙刀の場所を確認する瑞穂

まるで犬猿の仲のふたりの間に、ほたるが割り込んだ
「まあまあ、それじゃあ私が柚子様の代わりをしますの」
「何を冗談を……」
ほたるが袖から何かを取り出し、手にはめる
それは柚子の顔をしたぬいぐるみだった
「……一体何を」
「柚：た、竜子さん落ち着いてぇ……」
指を動かして口をパクパクしながら、腹話術を披露するほたる
「割と似てるわね」
「自信がありますの」
ほたるの意外な特技に、瑞穂は箸を咥えながら感心する
一方竜子は、不機嫌そうに睨む
「なによ、そんな人形……」

しかし、見れば見るほど人形は柚子に似ていた
くりっとした小動物のような瞳、小振りな唇、ふっくらした頬
だんだんと竜子の想像力も合わさって、それが柚子にしか見えなくなってくる

「……な、何よ」
叩こうとするが、思わず手が止まる

「柚：ほ、ほらほら竜子さん、瑞穂さんとも仲良く、ね……？」
「……は、ハイ」
こうして、猛獣は大人しくなる
曲者の飼い慣らし方には定評のあるほたるだった

～～

三人が勘定を済ませて外に出ると、瑞穂が知り合いを見つけて、声をかけた
「あ、鉄」
呼ばれた男は、のっそりと振り返る
「……あ？　ああ、瑞穂の嬢ちゃんか」
後ろでまげを結んだ男は、腰に下げた刀を揺らしながら、眠たそうな目で瑞穂を向く
「……なんでぇ、噂にゃ聞いてたが、壬生川ってのはべっぴんの家系なのな」
「バカね、あたいを見れば一目瞭然でしょうが……ああ、こいつは毘沙門会（びしゃもんかい）の大将のオッサン、鉄衛門（てつえもん）ね」
後半の台詞は、ほたると竜子に言ったものだ
「よろしくお願いしますの、ほたると申しますの」
「……竜子」

礼する少女たちに、鉄衛門も名乗る
「俺ぁ鉄衛門だ……ってああ、そうか、春の選考試合か」
「そうよ、当然あたいたちが優勝でしょうけどね」
小振りな胸を張る瑞穂に、鉄衛門が顎をさする
「……まあ、今回はそうだろうな」
「何よ今回はって、負け惜しみ？」

嬉しそうに言う瑞穂に、鉄衛門は空を見上げて、つぶやく
「……都から離れて、鬼を狩っていた一派が、近く、戻ってくるという噂だ」
「へ、へぇ……」
少しだけ引きながら、瑞穂が相槌を打つ
「……どうして、都が今まで鬼の手に落ちなかったか、知ってっか」
「何よそれ、年の功？」
「……ま、お前らは近々分かるだろ、頂点争いなんて俺には興味ねぇしな」
そうして、鉄衛門は追いついてきた他の門下と共に、先に行く

残された三人は、互いに顔を見合わせた
「どうして、都が今まで鬼の手に落ちていなかった、ですかぁ」
「そんなの、性の悪いあの朱点小僧が、獲物を弄ぶようにしてたからでしょ、あたいたちの時と一緒じゃない」
頬を膨らませる瑞穂の横、竜子もまた空を見上げた
「……陰陽の術」
広々とした京都の空は、まるで一つの憂いもないかのように、澄み切っていた

壬生川一族はそうして、春の選考試合でも優勝し、四連続での制覇を成し遂げた
当面、筆頭公式討伐隊の座を譲ることは、なさそうだった

第九話－１０　「都参」　１０２５年3月（後書き）

出陣・選考試合（瑞穂・ほたる・竜子）　訓練・柚子→月見

第九話外伝前編　「秘語」　１０２５年３月～

＜２４年９月　京の都＞

幼い頃は、世界が敵と味方の二種類に分かれていた
父親は味方だけど自分を見てくれない
柚子(ゆずこ)は敵、力斗(りきと)が敵、美味しいものだけが味方
瑞穂(みずほ)はそんな風に、自分で自分の周囲を歪めて生きてきた
それは、瑞穂が柚子を思いっきり叱りつけた、翌月の事であった
秋晴れの広場、元服した瑞穂が、京都武士詰め所前で道明(みちあき)に背中を押され、正面に進み出た
少し、圧倒されてしまう

（人……多っ）

道明の父が京都守護団を纏め上げているうちよりは、それでもだいぶ少なくなった方ではあったが、８ヶ月になったばかりの瑞穂の眼前には、多くの武将が立っていた
長身の父より背の高いものもいるし、筋骨隆々で鋭い眼光を発しているものもいる
男だけではない、女も皆精悍な顔つきをしていて、誰も彼も一筋縄ではいかなさそうだ

「じゃあみんな、知っていると思うが、僕の娘、瑞穂だ」

道明の下で、数ヶ月前から補佐的な事務をこなしていた瑞穂は、

息を呑む
きょうから、自分が彼らの長、自分が頭になるのだ
総勢１２６名の目が、瑞穂を見つめた
瑞穂は気を静まらせ、声を張り上げる
「……壬生川（みぶがわ）、瑞穂です、よろしくお願いしますね！」
舐められるわけにはいかない、負けるわけにはいかない
同じ京の町を守る同志とは言え……！
「今月から僕の任を引き継ぐ、まだ未熟だから色々と迷惑をかけると思うが、僕以上の素養はある」
道明が少しだけ口元を綻ばせて、瑞穂の肩を持つ
先頭にいた剣士が、腕組みしながら声を上げる
「女性か……蘭（らん）小町の再来にならなきゃいいが」
「大丈夫だ、瑞穂は優しいからな」
道明が屋敷の中では滅多に見せることのない微笑をする
「……巻絵（まきえ）様も、自分の娘をそんな風に言っていた気がする」
生真面目そうな薙刀士が、うめく
毘沙門会の紋をつけた男が、瑞穂に笑いかけた
「ま、こんなむさくるしい連中だが、勘弁してくれよ嬢ちゃん、俺の名は鉄衛門ってんだ、仲良くしてくれや――」
鉄衛門が手を差し出そうと瑞穂に歩み寄ったその直後、鉄衛門が横に吹っ飛ばされた
「俺様は立命館が三本槍筆頭、小五郎だ、よろしくよ瑞穂！」
「ああコラテメ！　何抜け駆けしてんだゴラ！　……失礼、私は伏見道場代表、師範の由一です、どうぞ宜しく……」

「は、はあ」
槍使いの小五郎を突き飛ばして、颯爽と現れた妙に優雅な青年に、瑞穂は生返事を返す

「はは、やはり壬生川の娘はこうなる運命か」
「……都で今、一番面白ェ奴らだしな、ここに残ってンのは、最前列で祭りを見たい馬鹿共揃いだ」
離れたところで、道明と京阪傭兵組合の壮年の武士が笑っていた

「ちょ、ちょっと……パパ……！」
京の武芸者たちに囲まれて、花や酒や何やらを差し出されている瑞穂は、父に助けを求めるが、道明は目を細めて楽しそうにその光景を眺めているだけだ

「ぽんと自警団のこずえです！　同じ薙刀士なもんで、色々技パクらせて手本にさせてもらうけど、食べるためなの、ご勘弁！」
「比叡山僧兵軍高僧、大尾山高であります、拙僧……このような、このような可憐な女子……生まれて初めて見るでありますウオオオオ！」
山高が突然吼え、小五郎と由一に飛び蹴りを食らっていた

初めての感覚に、瑞穂は戸惑う
自分がこんなにまで、手放しで求められ、認められたことなんて、今まで一度もなかった
一生、柚子の陰に隠れて、浮かばれない一生を過ごすのだと、ずっと思っていた

「……みんな、よろしく……よろしくね！」
訳も分からず流れる涙を手の甲で拭い、瑞穂が微笑んでみると、守護団の面々は何故だか感極まったように叫んだり、刀を抜いたり

と、喜んでいた
訳も分からず、瑞穂は笑った
そこに、彼女の敵はいなかった
世界は、壬生川家だけではなくなったのだ

その翌月、道明が他界し、瑞穂は本格的に京都復興頭の肩書きを得、京都守護団の団長に就任した

瑞穂は真っ先に、都の慢性的な食糧不足の解決から取り込む事にした
人死の原因は、鬼よりも病よりも何よりも、まず先に食べ物がないという現実なのだ

瑞穂は反対する一部の武士を抑え、京都守護団の活動の幅を広げた
それは、仕事がなく放浪する元町人や、捕らえた盗賊たちを片っ端から集め、給金と寝る場所を与え、雨期のたびに氾濫を引き起こす鴨川や、高瀬川を整備させた上で、その肥えた盆地に大農場を築くという大それた計画であった
町の外へ出かける危険が伴うため、その護衛は常に守護団が交代で行うように施した

しかしその奇策が、実行される事は無かった
計画開始まで三日と迫った１０月の下旬、集められた人々はあまりにも鬼を恐れ、都の外へ出ることを極端に嫌がり、脱走者が激増した
怯える彼らを見た時、瑞穂は計画の中止を告げた

（……次代に残すより、今は我が身……そうよね）

瑞穂が自分たちと人間たちの生き方の違いを実感したのは、この時であった

食料問題については結局、市街地の田畑を現在の倍から三倍を目処に規模拡大を目指す方向で落ち着き、京の人口を考えると到底補い切れるものではないが、その辺りが現実的な案であり、瑞穂は巧くいかない悔しさに数日眠れない夜を過ごした

相変わらず守護団の人員は不足し続けていたが、それでも皆は瑞穂を信じ、彼女に付き従っていた

それから、時が流れた

＜２５年３月　守護団詰め所＞

「まあ、ここが京都守護団のアジトなのですのね」

春の選考会が済んだ帰り、ほたるが何やら詰め所にやってきた

「……遊びに来ているんじゃないんだから」

二人とも外行きの色鮮やかな着物をまとっているため、遠目には公家の姉妹に見えるだろう

復興頭となりもう半年近く、すっかり慣れ親しんだ瑞穂が正門を抜け、自室へと向かう

その背を追いかけながらほたるはというと、すれ違う武士たちに柔らかな微笑みを向け、頭を下げて回っていた

（……絶対、アレ勘違いされるわよ）
屋敷の誰に言っても今更信じないだろうが、瑞穂ですら、来た当時は愛らしい美少女で通っていたのだから

やがて陣屋（※軍勢が駐屯して宿営している所）の中の離れにある小屋に到着すると、中にはふてくされた由一が待っていた
「おかえり瑞穂小町、今月の田畑の報告書、持ってきてるぜバーロー」
「あら、由一は選考試合見に行かなかったのね」
その途端、由一が意気消沈する
「俺さ、三国一の不運者、御前試合の開催期間としるこノ畑の寝ずの番がモロ被りよ……はぁ、見たかったな、壬生川の娘さんたち……」
そう言って、落ち込む真似をする
「ああ、ひとりなら、遊びに来てるわよ」

「あらあら、お初お目にかかります、ほたるでございますの」

笑顔のまぶしい、綺麗に着飾った少女が一礼すると、由一が瞬時に姿勢を正した
「やや、私の名前は由一……フフ、お美しいお嬢さん、ささ、こちらに」
声色の変わった由一の顔面を、瑞穂が蹴りつける
「ギャ……な、何をするんですか私の美顔に！」
「なーんか腹立つのよね、それにこのほたる、決勝戦で立命館三本槍の三人を、＜雷獅子＞の一撃で葬り去ったやつだけど、良いのね？」
「なっ……」
絶句する由一の前で、ほたるがなぜか照れる

「あらやだ、瑞穂様ってば、もう」
「ち、チキショウ！　せっかく英虎様亡き後、俺の時代が来たと思ったのにヨォ！」
由一はそう言って、泣きながら走り去ってゆく

「ちっこい男ね……」
あれが伏見道場の師範なのだから、門下生は大丈夫なのだろうかと思う
小屋の中は壬生川家の瑞穂の部屋より狭く、あちらこちらに報告書や明細書、和菓子の包み紙が散乱しており、足の踏み場もない状態であった

「ああ適当にそこらへん座ってて、あたいちょっと寝所に顔出してくるから」
「はいですの、いってらっしゃいませ」
面白そうなものが散らばる部屋を眺めるほたるを残して、瑞穂が道場の方に歩いてゆく

ふとほたるはつい癖で、部屋を掃除している自分に気づく
「あらいやですの、でも、瑞穂様本当にお忙しいのですねえ……」
何だか柚子を思い出し、ついひとり屋敷でブラブラしている自分が恥ずかしくなってきてしまう
「まあでも、人は人、私は私ですものね」
机の上におかれた報告書には、それぞれの田畑の様子が詳細に明記されていた
「そういえばさっき、しるこノ畑って……」

ふと眺めると、全部で17の項目があり、おはぎノ畑、羊かんノ畑、きんぎょくノ畑、おこしノ畑
、栗きんノ田、せんべいノ田……京の都内に新たに作られた田畑全

てに、菓子の名前が付いていた、別に菓子を作っているわけではないらしい

「な、なんて瑞穂様らしい区別……」
しばしほたるが小屋を片付けていると、瑞穂はすぐに戻ってきた
「ふぅ……着替えてちょっと一息ついたわ、っておや、片付けてくれたの？　悪いわねえ」
「いえいえ……あら、そのお召し物」
瑞穂の着ていたのはいつも見かける、壬生川の黒一青の小袖であった
「これじゃないと調子出ないのよ、ちょっとそれ取って」
「あ、はい」
ほたるはついつい読んでいた報告書を、瑞穂に返すと、すぐにその顔色が曇った
「桜もちノ田、また脱走者、か……」
なんて緊張感のない名前だろう、と思うほたる

「脱走者？　どうしてですの？」
「畑と違って、田んぼは鴨川の近くに作らないと水引けないのよね……その中でも、桜もちノ田は一番都の外側にあるから、警備が厳重なのだけど、その代わり鬼の襲撃も一番多いのよ」
「なるほどですの……」
柚子がいたら決して理解できないであろう説明を述べ、瑞穂は頭を抱える
「参ったわね……このまま、桜もちノ田は放棄するしかないのかしら、でもあそこより中央には、もう土地は余ってないのよね……成功すれば、さらに田畑を拡大できるかもしれない、要だったのに」
そんな瑞穂を見てほたるは、ちゃんと復興頭やっているんですねえ……、と変なところで感心する
「てか何なのよもう、根性見せなさいよ……まったく、無駄に長生

きばっかりしくさって！」
「まあまあ、人様の寿命は私たちとはまったく違いますし……」
「分かってるわよ、あんたの前でもなきゃ、こんなこと言わないわよ」
そうして、瑞穂は盛大にため息を付く
「どうにかして、京のみんなが勇気を出すような策、ないかしらねえ……」
瑞穂の口から勇気なんて言葉が出たのがおかしくて、ほたるはついクスと笑ってしまう
「何よほたる」
「いえいえ、あ、ほら、勇気なら壬生川家のあの方を参考にしてみてはいかがですの？」
「壬生川家の……？」
瑞穂の脳裏に、泣きながら悶絶圧（もんぜつあつ）を放つ少女が浮かぶ
「え、果物！？」
「そうですの、ほら……たとえば、柚子様の戦記を書いて、公表するとか？」
「は、あたいが！？」
「だって瑞穂様、柚子（ゆずこ）様のこと、よく見てらっしゃるじゃないですの」
「冗談でしょ、勘弁してよ、なんであたいがあんな果物のことなんて手間暇かけて書き残さないといけないのよ！」
瑞穂の拒絶反応に、ほたるが口を尖らせる
「えー……でも、柚子様の、戦史で読んだ幼少の頃からのご活躍や、成長などを皆様が読めば、こんな風に頑張っている子もいるんだ、私も頑張ろう、ってなると思いませんの？」
「お、思わないわよ、全然」
「私は、ずっと柚子様を見て、励まされてきましたから、そう感じ

ますのに……」
「うっさいわねえ……あ、そろそろ夕稽古の時間だから、あんた先に帰りなさいよ、きょうの夕飯は残しといてよね」
手をパタパタと振って厄介払いをしようとする瑞穂に、ほたるが表情を輝かす
「あらあら、瑞穂様が京の皆様に稽古をつけますの？　うふふ、私も見てみたいですの」
「あんた……本当は、面白ければ、何でも良いんじゃ……」
瑞穂は疲れたように、つぶやくのであった

その後、壬生川の屋敷に戻り、一家で夕飯を取りながら瑞穂は柚子の顔を眺めていた

「え、あ、あの……どうか、した？　瑞穂さん」
「……うんにゃ」
自室に戻って、幼い月見と布団を並べて目を瞑っても、なかなかその考えは消えなかった
（果物の物語……か）
なぜこんなに引っかかるのか、自分でも分からない
「むにゃむにゃ……お、お母さん、天誅ぅ……」
娘の物騒な寝言を聞こえなかった振りをしながら、瑞穂は少しだけ、書いてみようかな、と思った
もしそれで、自分の育てた田畑が守れる可能性があるなら、行動してみるのも良いかも知れない
不安要素は、ひとつだけ
（あの果物が……京のみんなに勇気を与える、ねえ……）
まさか、そんなことがあるのだろうか

瑞穂は考えを巡らせながら、いつしか静かな眠りに落ちていった

第九話－１１　「月桜」　１０２５年４月（前書き）

柚子　１才５ヶ月

瑞穂　１才３ヶ月

ほたる　１才

竜子　５ヶ月

月見　２ヶ月

第九話－11　「月桜」　1025年4月

＜壬生川家・居間＞

春になり、桜が庭に咲き誇る屋敷
今や京でも有数の名家となった壬生川家には、怒鳴り声が日夜響いていた

「何を昼間から、茶を飲んでお菓子とか食べているんですか！　太りますよ！？」
２ヶ月になる月見である

「だーもう、うるさいわね！」
声と眉をひそめる月見
「……大体そんなに糖分を摂取してどうするんですか、何に備えているんですか、飢饉ですか、飢饉対策ですか？」
「別にあたいは、声量のことを言ったわけじゃないわよ」
生真面目そうな月見の頭に、瑞穂が笑いながらこめかみに怒筋を浮かべ、チョップを食らわせる
額をさすりながら、月見が口を尖らせる
「ボクはですね、真剣にお母さんのことを心配して言っているのですよ！　ただでさえ短い寿命が短くなったら、どうするんですか！」
「甘いモノ食べられない人生なら、死んだ方がマシだっての！」
顔と顔をつき合わせて、歯を剥き合うふたりに、柚子が冷や汗を流す
「あの、ふたりとも、そんなに、親子でケンカしなくても……」

ここは、居間であった
三人で並んで、術の勉強をしている最中、月見が爆発したのである

「柚子さん、ボクはケンカをしているわけじゃありません！　叱っているんです！」
「何であたいが娘に叱られなきゃいけないのよ！」
どう見てもケンカしているように見えた

先月、一ヶ月間月見に訓練をして、柚子は思った
月見はとてもマジメで、自分にも人にも厳しくて、今までの壬生川家にはまったくいなかったタイプで、さらに言えば柚子が音読した術を聞いて、間髪要れず間違いを指摘するような賢い子なのだ

「あのですね、あなたたちは少し家に閉じこもりすぎたおかげで、世間の常識とかそういうのが抜け落ちているんですよ！　一日１３食も食べて、１３食ともお菓子だなんて、そんな人どこにだっていませんよ！？　バカですかあなた！」

柚子が言おうと思っても言えないことを、ズバズバと斬り込むだが間に挟まれる柚子としては、胃が痛くなる光景だ

「何の騒ぎ」
がらりと戸を開けて、すっかり身長も柚子を越した竜子が、居間を覗き込む
「あ、竜子（たつこ）さん……」
「ああ、何だお母さんは無事か」
わずかに頬を緩めて、竜子は柚子の隣に腰を下ろす
「た、竜子さん……せ、狭くない？」
「別に」
１．５人分の隙間に、身を寄せて入り込む幸家（こうけ）の親子

その目の前で、臥家（がけ）のケンカは続いていた
「良い！？　お菓子はあたいの水なのよ！　パンがあってもお菓子を食べるのよ！」
「それは観念的なものじゃないですか、砂糖は栄養素的にも水の代わりにもパンの代わりにもなりません！」
なぜ間食をやめるかやめないかの話で、腕と腕を組み合って、力比べをしなければならないのだろう、と柚子は思う、もっと平和的な解決方法がいくらでもあるのに、なぜ力比べ

竜子がぽつりと呟く
「別に、食べ物なんて、その人の好きにすれば良いんじゃ」
月見がギロリと竜子を見た
「どうしてですかお姉様！？」
その瞬間、瑞穂がまさに驚愕した
（お、お姉様……？）
いつの間に！？　瑞穂が思わず竜子を向く
竜子はため息をつきながら、長い髪をかきあげる
「短い人生だもの、その人の好きにすれば良いじゃない」
「そういう刹那的な考え方が――」
「遺言が“アレが食べたかった”とかじゃあ、浮かばれないわ」
その横で、瑞穂が柚子の首根っこを掴んで引き寄せる
（ちょっと、どうなってんのよアレ！　あたいの娘が、なんで竜子なんかに！）
（え、えーと……）

しばらく月見は眉間にシワを寄せていたが、やがて手を叩く
「分かりました！　ボクはお姉様のおっしゃることを、全面的に信頼していますから、そういうことにしましょう！」
「そ、そう」

月見は瑞穂を見て、舌打ちする
「チッ、運が良かったですね、お姉様がこうおっしゃってくださって、感謝してくださいね」
瑞穂がさらに強く柚子の身体をがくがくと揺らす
「ちょっと、何なのアレ、どうなってんのよ！」
「う、あうがうあうあう、喋れないぃ」
「こういうときにしたり顔で解説するほたるは交神の儀の最中なんだから、あんたが言わないと話が進まないのよ！」
竜子が瑞穂の手を叩いて、柚子を引っぺがす
それから柚子の背中をさすり、水を差し出し、懐から出した櫛で髪を整え直し、気分が落ち着いてきた頃に一歩後ろに下がった
「付き人か！」
「娘よ」
「分かってるわっ」

しばらく咳をしていた柚子が、呼吸を整えて、語り出す

「え、えっと……この前、訓練してたときのことなんだけど……何だか、こう、わたしが苛められた、って思ったんだよね」
「選考試合から走って帰ってきたら、月見がお母さんに怒鳴ってたから」
竜子が語り手を引き継ぐ
「……怒鳴ってたから？」
竜子が何の含みもなく、当然のように言い切った
「投げたわ」
瑞穂の脳裏に、力士の上手投げの図が浮かんだ
「いやあ、目が覚めました！」
すごく爽やかに笑う月見が、照れながら続ける
「ボク、お父さんに言われたんです！　信念を持って生きよ、日々努力せよ、壬生川家を救え、って……でも、それ以上に大事な事が、

たった一つだけある、って、お父さんはおっしゃってました！」
そこで真顔に戻り、大声で告げる
「所詮この世は力！　力を持つものが正義！　よって、一族でもっとも強き者に従うべし、って、昼子様のプロマイドを持って、言ってました！　ボク、全力でお姉様に従います！」
「何寝ぼけた事言ってんのよ！」
「真剣です！」
「なおさら悪いわ！　じゃああたいにも従いなさいよ、このチビ！」
月見はゆっくりと首を振った
「なんだか、お母さんには、普通に勝てる気がします！」
この声がきっかけに、瑞穂が暴れだし、再び臥家の親子喧嘩が勃発する

竜子は柚子を居間から連れ出しつつ、一言漏らした
「……私、お母さんの娘で本当に良かった」
これぱっかりは柚子も、無言で同意した

＜交神の儀＞

「なんだか、居間が騒がしいですの」
頬を膨らませて、ほたるが拗ねた声を出す
「ほらほらァ、ほたる様はこれから交神の儀なンですからァ」
「私だけ、仲間外れな気がしますの」
「じゃあチャッチャとすませちゃいましょ」
イツ花から差し出された一覧表を受け取り、ほたるはページをめくる

「変わった人が、よろしいですのねえ」
「ええ、ええ、ほたる様ならそう言うと思ってましたッ」
「あら……何だか、付せんがついてありますの」
「あらかじめ、変わった神様をイツ花なりに抜き出してみました！　半日も悩んじゃいましたァ！」
どうでもいいことに人生を賭ける巫女が、胸を張る

「ええっと……三位、大江ノ捨丸様……」
「普通の女性なら絶ッ対に嫌でしょうけど、ここはあえて選んでみました！」
「い、いや、私も一応、女ですから……」
笑顔で遠慮するほたるが、さらに紙をめくる

「二位、は……仙酔エビス様……」
「大本命！　奉納点も少し頑張って、ほたる様に足りない火を補うオマケつき！」
「つ、謹んでお断りいたしますの」
赤ら顔のおじいちゃんと自分が色々する図がまったく思い浮かばず、ほたるは最後の付せんを探る
「栄えある第一位は、何と、白波河太郎さま！　そのキモ可愛さに渋谷で人気沸騰中！」
「あの人だけは、ありえませんの」
ほたるは笑顔でぴしゃりと言い切る

「そうですよね、河童ですものネェ……」
「河童ですものねえ……」
イツ花の選んだ神様が全滅し、失った半日を少しだけ後悔するイツ花の前、ほたるがさてと、と神様を選びなおす

「それでは私は、この方になさいますの」
「……はい、ではお呼びいたします」

凹み顔のイツ花が舞を踊りだすと、ほたるの前の柱が徐々に膨らんできた
柱はやがて枝を伸ばし、葉をつけ、見る間に成長してゆく木にほたるが目を奪われていると、木は人の形となる
水墨画のように、すぐに木はひとりの神に変化した

木霊ノ寝太郎「すべては夢の中のこと……」

微笑む木霊ノ寝太郎に、ほたるもまた笑顔を返す
「うふふ、ロマンチストですのね……」
こうしてふたりはしばし、夢のような一時を過ごすこととなった

第九話－１１　「月桜」　１０２５年４月（後書き）

交神の儀・ほたる×木霊ノ寝太郎

第九話－１２　「戦術」　１０２５年５月前編（前書き）

柚子　　１才６ヶ月
瑞穂　　１才４ヶ月
ほたる　１才１ヶ月
竜子　　６ヶ月
月見　　３ヶ月

第九話－１２　「戦術」　１０２５年５月前編

＜壬生川家・会議の間＞

壬生川家では、増築の際に新たに三つの部屋と倉が一つ建てられた
離れにあるそれらは、今や女性陣の衣裳部屋その２だったり、主に瑞穂が使う来客接待用だったり、茶の間だったり、どれもこれもロクな使われ方はしていない

元々改築前の壬生川の屋敷には、合計で九つの部屋があった
幸家の部屋、臥家の部屋、香家の部屋、イツ花の部屋と、個人の住まいで四つ
さらに、居間に台所、交神の儀などを司る儀礼の間、更衣室兼衣裳部屋で、四つだ
では、昔からあった部屋のうち、最後のひとつは何なのか
答えは、かつて当主・玄輝が住んでいた床の間、現・会議の間である

会議の間には、久々に三人娘が揃っていた
右からほたる、中央に柚子、そして瑞穂である
「まさかあんたから、やりたい、なんて言うなんてねぇ……」
瑞穂が腕組みしたまま、口を一文字に結んでいた
そうしていると、不機嫌そうな雰囲気はまるで道明そっくりだ

「あら、私は良いと思いますの」
真っ先に柚子に賛同するのは、子作りを終えたばかりのほたる・

1才である

「うん、ありがとうほたるさん……でも、瑞穂さんは、やっぱり、反対？」

「……反対はしないけど、まあそうよね、あたいも1才4ヶ月、果物なんて1才6ヶ月、来月どうなっちゃうか分からないものね」

年だけは取りたくないものね、とため息をつく瑞穂

「うん、月見（つきみ）さんが育つのを待っていると……たぶん、わたしも、瑞穂さんも間に合わないかな、って……」

「認めたきゃないけど、果物が抜けると絶対キツいわよね……頃合いとしては、今か来月しかない、良いわよ、分かったわよ」

腕組みを解いて、瑞穂は柚子の淹れた茶を一口する

「でもその代わり」

「う、う？」

瑞穂の鋭い視線に、柚子はまた無茶を入れるんじゃないだろうかと縮こまる

「必勝の作戦、決まっているんでしょうね」

「あ、私もそれは、お聞きしたかったですの」

ふたりの妹の視線にさらされて、柚子は目を泳がせた

「え、えーっと……」

瑞穂が強く机を叩くと、柚子はひっと短い叫び声を上げる

「あんた……まさか、ね」

「あの、その……」

ほたるも段々怪訝そうな表情になってゆく

柚子が額の前で手のひらを合わせて、勢いよく頭を下げた

「ご、ごめんなさい、全然です、わたしって頭良い方じゃないし、ひとりじゃ全然思い浮かばなくて……」

「あんたね――」
「だから……」
瑞穂の怒鳴り声を遮って、柚子が済まなさそうな顔をしながら、真剣にふたりを見つめた
「お願い、一緒に、考えて……今月の“髪”の、攻略法」

～～

三人寄れば文殊の知恵とは言うが、女三人寄ればかしましい、とも言う
竜子（たつこ）は会議の間の戸にもたれかかりながら、目を閉じていた
中に入って討議に参加したかったのだが、瑞穂に締め出されたのだ
時折中から聞こえてくる各人の叫びに、ついつい聞き耳を立ててしまいそうになりながらも、竜子は瞑想するように佇んでいた

一方、室内
「戦史による記述を参考にして、通常攻撃の、ニ撃で私たちの誰もが倒れる、と仮定するわよ」
いつしか、話の主導権は瑞穂に移っていた
「相手が先攻、先手を取った状態で、あたいらが一撃受け、誰かが＜春菜＞を使い、もう一撃だけは耐えられる、そうして相手の番が回って髪の攻撃、これで次に髪の攻撃が回って誰かが倒れるまで、あたいらが稼げた時間は？」
指折り数える柚子に対して、ほたるが紙で計算し、手を上げる

「髪、私たち三人と春菜役、髪、私たち四人の順番ですから、順当に行っても、自由に動けるのは七人ですのね」
「三回力士水を最初に使っても、攻撃できるのは良くて四回か……ダメね、条件が悪すぎ」
瑞穂が舌打ちをする
「やっぱり、石猿は欠かせないよぉ」
「三回唱えて、髪の攻撃力が半減するとしたら、必須ですのねえ」
「……状態異常術を使ってくる髪だったら、どうするのよ」
今度は柚子が腕組みをする
「それなら、石猿だけは常時唱えるようにして、力士水や梵ピンは無しにするのはいかがですの？　それなら仙酔酒を使った時のデメリットも、最小限に抑えられますの」
「何ターンかかるのよそれ、こっちの一撃何とか三桁だとしても、少なくとも３０ターン以上よ、髪から１０回以上の攻撃を受けて、アンラッキーヒットが一発も出ないなんて思えないし」
「ううん、当主が一番体力少なくてごめんなさい……」
ちなみに現在、柚子が５５０、瑞穂が６７０、ほたるが７００の体の水である
ついにほたるまでも頬に手を当てる
「……難しいですのねえ、戦術って」
「まったくだわ……」
「ううん、道明さん……」
今この場に、初子（はつこ）や蘭（らん）、翠（みどり）や道明寺（みちあき）等が居たら、八面六臂の活躍をしていただろう
それでも三人は投げ出さずに、再び顔を突き合わせる
「良いわ……それじゃ今度は、最初に石猿三回と春菜をかけた時の

場合ね？」
ほ「初撃に半分を削られるのは変わってませんから……ええっと、次撃は春菜一回分で帳消しできそうな威力ですのね」
「これなら、巧く行きそうだね」
希望が見えたことにより、柚子の顔が綻ぶが、瑞穂は突き放す
「ダメよ、ああもう、フローチャートにしてやるっ」
「え、ええ……」
瑞穂はほたるの手から紙と筆を奪うと、凄まじい速さで何かを書き込んでいく

そこには“初回に石猿三回と春菜を唱えた場合”と書かれていた

＞？髪は初回に必ず先制攻撃をしてくるものとする
＞？髪が連続攻撃をしてこないものとする
＞？髪が会心の一撃を行わないと仮定する

＞以上を踏まえ、石猿三回と春菜一回後の髪の行動による、こちらの対応策

＞髪が引き続き攻撃をしてきた場合、力士水三回と春菜一回をし、再度髪が攻撃を行ってきた場合、二人の全力攻撃と石猿・春菜を一回ずつ、その後何らかの奇手を打たれるまでコレを繰り返す事

瑞穂は書き込んだ紙を、ほたると柚子に見せる
「これがこのまま実行できるなら、楽に倒せるでしょうね」
「ははぁ……なるほどですの」
ほたるが感心している横、柚子が瑞穂にうなずく
「このまま、相手の行動次第で、わたしたちの取る戦法も随時選ん

でいけばいいんだねっ」
「ま、そゆことね」
「よっし、それじゃ次は相手が状態異常術を使ってきた時の場合かな」
「それが終わったら連続攻撃や会心の一撃の場合も考慮しなきゃね」

腕まくりして意気込む二人に、ほたるがおっとりと指摘する
「でも……状態異常と言いましても、寝太郎と光無しや、美津乳などでは仙酔酒を使うタイミングも、優先順位も違うと思いますの」
瑞穂と柚子の勢いが、あからさまに消沈する
「そういえば、そうね……」
「う、うん、そうだよね……」
「私たちの生死がかかってますもの、慎重になりすぎて悪いことはないと思いますの」
突っ走りやすい瑞穂、流されやすい柚子の立てた戦術を、マイペースなほたるが批評する

三人はこうして知恵を総動員して協力しながら、対髪攻略の案を練ってゆくのであった

～～

日も暮れて、会議の間の戸が開く
「はぁ……疲れましたの……」
ぐったりと脱力して、まずほたるが姿を現す
「あ、はは……と、とりあえず、休憩、お茶、飲もうっか……」
同じく疲れた様子で、柚子が出てきた

竜子は母親の元に駆け寄ろうとして、ぬっと現れた瑞穂と衝突してしまった
「痛っ……ちょっと、何してんの竜子」
長身の竜子にぶつかられて、瑞穂は額を押さえる
「別に」
その間に、ほたるも柚子も先に行ってしまった

「あんたねぇ……まさか、ずっと果物を待ってたって言うわけじゃないでしょうね」
そっぽを向く竜子に、瑞穂は殊更大きなため息をつく
「困った女ね、あんたも……」
「なにが、私をのけ者にした癖に」
「……そういうガキっぽさが、困った女だ、って言ってるのよ、あたいは」
むっと眉根を寄せる竜子に、瑞穂は胸を張る
瑞穂は指を、竜子の鼻先に突きつけた
「良い？　あんたはまだまだガキでしょ？」
「もう６ヶ月よ」
「ガキよ」
竜子の抗弁を、瑞穂は切って捨てる

「あたいらがこれから挑もうとしているのは、今まで壬生川家で誰も勝てたことがない、現時点で最強の敵なのよ」
「望むところよ」
「参加面子は、果物、あたい、ほたる、そしてあんた」
「蹴り殺してやるわ」
はぁ、と瑞穂は再びため息をついた
「何も分かってないの？　あんたに何が出来るのよ」
「……私には、鍛えたこの拳があるわ」
「お粗末じゃないの」

「試してみましょうか」
竜子の挑発に、瑞穂は空を見上げる
「……まだ暗くなるには時間があるわね、良いわ、道場にいらっしゃいよ、稽古つけてあげる」

＜壬生川家・道場＞

柚子とほたるが居間で新茶をすすっている頃、瑞穂と竜子は壬生川家道場で相対していた
「月見は部屋で術の読み書きね、丁度良いわ、ずっと座りっぱなしだったから、これくらいしなきゃお腹空かないものね」
胴も篭手もつけない普段着のまま、木製の薙刀を振り回す

その前で、竜子が不機嫌な顔で手甲を身に着けていた
（一体何様なの）
日々学問を励む自分を、年のせいだけで会議から外したり、何かと子供呼ばわりしたり
竜子はもう、瑞穂の横暴を許すことは出来なかった
「……少しくらい痛めつけられれば、目を覚ますでしょう」
竜子のつぶやきに、瑞穂が同意する
「そうね」
あくまでも、瑞穂は余裕ぶっている

「行くわ」
一体瑞穂に何が出来るのか、いつも後ろで援護の術を唱えているだけではないか！
武道着の竜子は、瑞穂に向かって一足飛びに跳躍する

「――迅！」
間合いを詰めた竜子が拳を突き出した瞬間、瑞穂の薙刀が光った
「……鏡返し」
次の瞬間、竜子と瑞穂の立ち位置は逆転していた
腕に激しい痛みが走る
竜子は慌てて振り返りつつ、腕を押さえる
「今、何を……？」
まるで、柳を殴りつけたような錯覚に陥ったのだ
瑞穂は何も言わずに、一歩前に足を踏み出す
「……乱――連……！」
竜子の連撃は、しかし一撃目で先ほどと同じように弾かれた

それから先は何度繰り返しても同じことであった、竜子がどんなに速く拳を打ち出そうとも、瑞穂は的確に払い落としてきた
徐々に手足が腫れて重くなり、竜子の髪が汗で張り付く
「どうして」
いつも屋敷で寝転んでいるような、こんな怠惰な女に、どうして自分の拳が一切届かないのか
「あんた、自分がどれだけ強いって思ってたのよ」
瑞穂が薙刀を上段に構え、じりじりと迫ってくる
「たった二回の出陣と、一回の選考試合で、何調子に乗ってんの？何様？」
竜子の目には、瑞穂の間合いがまるで線を引いたように映っていた
その中に一歩でも踏み入れば――例えばこれが戦場なら、確実に腕を落とされる

「果物も、ほたるも、あたいも、何度も死線を越えてきているのよ」
瑞穂が半歩間合いを詰める
竜子は半歩身を引く
頬に汗が流れた

「……壬生川家に生きている以上、私だって覚悟の上だわ……！」
竜子は瑞穂に回りこむように駆け出し、その真横から大きく跳躍した
もし瑞穂に通用する技が残っているとしたら、これしかないはずだ
「飛――天――脚――！」
竜子の必殺の蹴りは、まるで獲物を狙う鷹のごとく瑞穂に襲来し、対する瑞穂は身を翻しながら薙刀を振るう
「双光蘭斬（そうこうらんざん）！」
迎え撃つ十字の剣閃が、竜子の意識を奪った

＜壬生川家・会議の間＞

瑞穂が会議の間に戻ると、ふたりはもう先に来ていた
「やっぱり一番心配なのは、柚子様の一撃死ですのねえ……」
「うぅ、当主のくせに一番体力が低くてごめんなさい……」
作戦表と書いた紙を覗き込んでいるふたりの間に座り込んで、瑞穂は告げる
「まぁそれは、あたいに考えがあるわよ」
「えっ、ホント！？」
「まあ、何ですの？」
瑞穂は食いついてきたふたりに、事もなく言った
「髪戦では、あたいが狭門陣（きょうもんじん）の門手を務めるわ」
――狭門陣
それはかつての四代目当主・蘭（らん）が大江山（おおえやま）の朱点（しゅてん）を葬り去るときに使った、門役としての前列ひとりが相手の攻撃を受け止めきる、鉄壁の陣形であった

＜再び・道場＞

瑞穂が会議の間に行き、道場には竜子だけが残された

「……」

拳を握り締める

身体中痛くて、一切手加減無しの瑞穂に腹が立ち、それ以上に自分自身に苛立ちが募る

竜子は思いっきり振りかぶって、道場の床を叩こうとして、寸前で拳を止めた

「この怒り、散らすわけにはいかない……」

出撃隊の中で、一番未熟なのは自分なのだ

そんな自分が、壬生川家のために出来ることと言ったら……

竜子は手甲を脱ぎ捨てた

「……＜梵ピン＞と＜石猿＞の術書は、裏の倉だったわね」

竜子は悔しさに奥歯を噛み締めながら、早口言葉の練習もしよう、と心に決めた

＜翌日・庭＞

本格的に作戦も決まったので、一同は竜子も含めて、摸擬戦を開催することにした

「仮想・髪戦……？」

「そりゃ、やっておくに越した事はないけど……」

疑いの眼差しでほたるを眺める二人

「壬生川家のためだって頼んだら、快く承知してくださりましたの」
ニコニコと笑うほたる
竜子は皆からひとり離れて、＜石猿＞の暗唱を何度も繰り返していた

そんな四人の前に現れたのは、獅子舞だった
裏庭からやってきた獅子舞は、普段京の都で見かけるものよりも一回り大きく、額に紙で“髪”と札が貼り付けられている
呆気に取られる柚子と瑞穂の前、獅子舞は大きく口を開いた
「きしゃー！」
瑞穂が嬉しそうに木製の薙刀を構えた
「身が入りそうね」
「み、瑞穂さん……」
そんな不穏な発言を聞いて、獅子舞の後ろ足に入っていたイツ花が顔を出す
「ちょ、ちょっとォ、私もいるんですから、お手柔らかに頼みますよォ！」
「なんだ、イツ花もいるの……チェ」
「まあまあ、それじゃ、始めましょうか」
ほたるが間を取り持って、手を叩く

「髪の攻撃です！　後列一列は体力半減！」
「え、えっと、じゃあ＜春菜＞！」
「じゃああたいは、力士水ね」
「……力士水」
「あらあら、私は何をすれば良いのでしょう？」
こうして壬生川家は、今月の終わりにやってくる髪戦に向けて、着実に練習を積み重ねていくのであった

第九話－１３　「戦陣」　１０２５年５月中編

＜壬生川家・居間＞

確実に髪を打倒するためには、勿論、攻め入る場所の考察も必要であった

三人娘は場所を居間に移して、再び協議を続けていた

「攻め入れる場所は七つ」

居間の机の上には、京都周辺を描いた地図が広げられている

そのうち、今年制圧した箇所（鳥居千万宮、忘我流水道）には×印が振ってあった

「そのうち、まだ鬼が残っているのが……九重楼、紅蓮の祠、相翼院、親王鎮魂墓、それに今月はまだ見えないけれど、白骨城ね」

朱墨を使い、地図に直接書き込んでいく瑞穂に、柚子が「もったいない」と思わずつぶやく

「とりあえず、白骨城はもちろんペケ、この中なら、九重楼と親王鎮魂墓も消しちゃって良いわよね」

九重楼のボスは強敵だし、親王鎮魂墓に至ってはいまだにボスに会ってもいない

「そうですねえ、そのふたつは難易度から見ても、ありえませんの」

豪快な筆さばきで、地図に斜め十字を記す

「残るは、紅蓮の祠か、相翼院か」

「ね、ねえ」

おずおずと手を上げるのは、端で見ていた柚子だ
「ま、前に討伐したところなら、安心して髪まで進めるよね」
「……そうね」
「どっちが良いのかしら」
判断が難しいところであった
「うーん……」
「そっか、そうすると、一ヶ月行けないところが、出てきちゃうのかぁ……」
翠がかつて唱えた、十二ヶ月をフルに使う討伐スケジュールでは、同じ所に二度攻め入れば、どうしても空きが出来てしまう
「白骨城の鬼さんは解放されてますし、今回は同じ箇所にでも、構わないかもしれませんのねえ」
「うーん……」
しかし、柚子と瑞穂は共に渋い顔をしている

「でも、相翼院なら……大丈夫、だと思う」
「……珍しく意見が合うわね」
「紅蓮の祠のあの猫さんを、奥義抜きで倒すのは難しそうだけど、でも、相翼院の人なら、奥義ナシで押し通して、時間も間に合うと思う……」
感触を思い出すように机の上に視点を落とす柚子の背中を、瑞穂が強く叩いた
「いたっ」
「言うじゃないの、果物の癖に」
そんな二人を眺めながら、ほたるが微笑んで頷いた
「それでは、今月は相翼院に出陣ですのね」
地図の南、相翼院には、こうして朱色の丸が大きく記されたのであった

＜早朝＞

出陣の日当日、竜子（たつこ）が目を覚ますと隣の布団に母の姿がなかった

かすれ目を擦りながら、竜子が振り向くと、姿見を覗き込んでいる柚子がいた

「……お母さん、おはようございます」

「あ、た、竜子さん、おはよう」

ビックリした、とつぶやく柚子の頬が赤い

「朝、早かったんだ」

「うん、何だか、ドキドキしちゃって……全然、眠れなかった、小心者だから」

恥ずかしそうに、柚子が笑うのを、竜子は座りながら見つめていた

「でも……これが、わたしたちの呪いを解くための、第一歩だから……絶対に成功するんだ、って思って、そんなことずっと考えてたら、ね」

はにかむ1才6ヶ月の母親を、竜子は黙ったままぼんやりと眺めるあと何度、この人とこんな朝を迎えられるのだろうか……

「わたし、当主だものね、しっかりしなきゃ……道明（みちあき）さんに、笑われちゃうよね」

竜子は柚子の頭に手を伸ばして、柔らかくその額を撫でた

「……しっかりしなくても良いよ、私が、しっかりするもん」

ずっと傍にいたいけれど、それは出来ないのだ

だから、一緒に生きている今だけは、絶対にこの人を死なせるわけにはいかない

本日は出陣の日、イツ（いつか）花の朝食を告げる声が屋敷に響いた

＜出陣＞

朝食を終え、まず最初に玄関にやってきたのは、何事も手際の良いほたるであった

「あらあら、また私が一番ですのね」

当主は携帯袋の準備があり、瑞穂は復興場所の手はずを月見（つきみ）に伝えているため、余計に時間がかかっているのだろう

慌しい気配が伝わってくる屋敷の中で、ほたるはふと思い、懐から手紙を取り出した

宛名はイツ花、差出人はほたる

「……来月いらっしゃる、私のお子様のためですの」

腹を痛めて産んだ子ではないが、それでも名前だけは決めてあげたい、と昨夜綴ったものである

ほたるは困ったように微笑む

「……柚子様ばかり、ご無理をさせるわけにはいきませんものねえ」

髪を討ち取ることが出来るとすれば、それは柚子の奥義、そして自分の連弾弓（れんだんきゅう）に他ならないとほたるは確信していた

「いつまでも、楽をしたまま生きてはいけませんものね……」

自由気ままに生きたと思っていた父親ですら、最期まで家族の事、そして自分の事を気にかけていたのだ

壬生川（みぶがわ）家の使命から背を向けたままでは、きっと父に軽蔑されてしまうに違いない

門役に志願した瑞穂に、もしものことがあれば、その時は自分が代わりになろうとほたるは決めていた

その後に、瑞穂と月見がやってきた
「あら、果物親子はまだなのね、急いで損したわね」
「全然急いでなかったじゃないですか、小腹が空いたって休憩ばかり」
目でけん制し合う親子を眺めながら、ほたるがくすくすと笑う

それから少し遅れて、柚子、竜子、それに携帯袋を持ったイツ花が現れた
「ご、ごめんごめん、お待たせっ」
「良いわよ別に、あんたが遅れるのすっかり慣れちゃったわよ」
薙刀に持たれて、瑞穂が憎まれ口を叩く

「イツ花さん、ありがとう」
「いえいえぇ～」
竜子がイツ花から携帯袋を受け取り、頭を下げる
「私は、お屋敷で皆さんのご武運を祈ってますからッ！」
イツ花が眉を上げて、拳を握る
「……本当なら私もお供したいのですが、初陣でほぼ初挑戦の髪に挑むのは得策ではないですものね！　仕方ありません、譲ってあげますよお母さん！」
月見が腕を組んだまま、口をへの字に結ぶ

それから、ほたるがイツ花に何かを渡すと、玄関が少しだけ静かになった
誰ともなく、視線を交わして、うなずき合う
口火を切ったのは、珍しく柚子だった

「……それじゃあ、行こう」
瑞穂も緊張しているのか、短く、ええ、とだけ返事をした

玄関を出ると、春の太陽が四人を出迎えた
先頭の柚子が、眩しさに目を細める
「壬生川家、出陣！」
いまだかつてない強敵を先に見据え、臆する事無く九代目当主は叫んだ

＜相翼院＞

目的地に着いてからは、一同はほとんど言葉を交わさないまま、風のように進撃していった

時たまに接触してくる鬼を、瑞穂が奥津ノ薙刀の一振りで蹴散らす
道明が不髪挑戦を誓った羽休め台を走り抜け、キサの庭の象を模した四匹の鬼を、四人は物ともせずに打ち砕いた
普段なら歓喜の舞の顔の破片を踏みつけて「雑魚ね」と微笑むはずの瑞穂も、きょうばかりは＜お地母＞の詠唱に取り掛かっていた

「……ここまでで、まだ炎は一個しか消えてませんのね」
あのほたるすら、表情が堅い
冷静に皆を眺めていた竜子は思う
「……鬼気迫る、とはこの事ね」
これは緊張しているのではなく、一族の血が高ぶっているのだ、自分にも身体の中から産毛立つような感覚が先ほどから渦巻いていた
柚子が＜速鳥＞を唱え終わり、皆を振り返る

「……行こっか」
一同はうなずき、さらに奥へと向かってゆく

天女の小宮の中央を通り、一同は近道を使って奥の院へと進入した
それから動きの速い悪羅大将を、柚子が＜寝太郎＞を使って止め、
十二分に時間を残したまま、最奥へと辿り着いたのであった

＜鬼子母の間＞

一族が扉を開くと、暗闇の中に数多の蝋燭の灯りが揺れていた
前に一度訪れたことがある柚子と瑞穂を先頭に、注意深く進んでゆく

「……あれね」
瑞穂が目を凝らすと、薄ぼんやりと天女の姿が見て取れた
去年よりも身体が小さく見えるのは、自分が成長した証なのだろうかと思う
「門陣、用意してなさい」
そう後ろに指示して、瑞穂は薙刀を構えたまま、お業の元へと歩み寄る
お業が顔を上げる、目元の泣きボクロが印象に残り、瑞穂は純粋に「綺麗な人だな」と思った

お業「朱点童子（しゅてんどうじ）を産んだのは私、あの子や姉さんの気持ちも知らず、三人目の秘密をばらしたのも私……だって黄川人、ひとりぼっちで

不憫だったから…」

「三人目の秘密……？」

後ろで、お業の言葉を柚子が繰り返した

「……どういうことかしら」

「私にはちょっと、お父様なら、何か分かったかもしれませんけれど……」

口々につぶやく壬生川一族に、お業はくっと歯噛みする

お業「そうよね、何も、何も知らないのよね……あなたたちの呪いは私のせいなのよ、恨むには十分な理由でしょ！？　それを力に変えなさい！」

すると、お業が緑の長い髪を振り乱し、浮かび上がる

片羽ノお業「行くわよ！」

開幕一番、＜芭蕉嵐＞の渦が壬生川一族を襲う

「……恨みはともかく、力には変えさせてもらうわよ！」

前列一列を中心に大ダメージを与える風系術を、ひとり先頭に立つ瑞穂がその被害を最小限に食い止める

目にも留まらぬ速さで、幾何学の印を結ぶのは竜子

「ボンシャラヌサ、ピンヴダラ、シャザリワプラヌ……＜梵ピン＞！」

かつて誰もが使うことのできなかった＜梵ピン＞を、彼女は壬生川一族で唯一習得したのだ

その攻撃力の上昇率は、力士水を遥かに凌ぐ

帯状の光を身にまといながら、柚子が跳躍する
「でええい！」
「……ッ！」
火を噴く大槌が、空を飛ぶ片羽ノお業を強く打ち据えた
ふらつくお業に、ほたるの放った矢が次々と突き刺さる
「……やる、わね！」
水の矢を蒸発させながら、お業が本来の姿に戻ってゆく
鳥のような鉤爪を輝かせ、柚子の元へと襲い掛かる

「あらよっと！」
横から現れた瑞穂が、爪に薙刀を食い込ませ、仲間を庇いながらもお業の動きを封じ込めた
「くっ……！」
「でやあ、奥津ノ薙刀一本釣りィ！」
離れようともがくお業の首根っこを捕まえ、瑞穂はそのまま地面に引きずり込む
そこに柚子が待ち構えたように、飛び込んだ
「やあああ！」
振り下ろされた大槌が、暴れるお業の背を叩き割った

「いつか……きっと……願いはかなうのよ」

お業が消滅すると共に、周囲を取り囲む蝋燭の炎が絶える
「ふぅ……何とか、奥義も使わずに勝てたね」
額の汗を拭う柚子の側頭部を、瑞穂がひっぱたく
「いたっ」
「ナイスタイミング」
先ほどのお業戦のことである

「え、あ、うん……え、何で叩かれたの!?」
瑞穂は何も言わず、先を見据える

初陣の相翼院戦から1年と1ヶ月が経ち、自分も相当に強くなった
お業のいた先、奥の屏風の先には魔法陣が出現していた
薙刀を構えながら、瑞穂が歩む
六代目が無残にも破れ去った髪を相手に、自分が門陣を実行する
こととなるのだが、不思議と恐れはなかった
「……」
命を削り、柚子が奥義を放つというのなら
強くなった自分に出来る事は、命を賭けて、柚子を守る事
決して口に出して、感謝したりはしないけど
これまでの借りを、返すための戦い――門手

瑞穂は知っていた
臥家(がけ)の女――巻絵(まきえ)、蘭(らん)、鈴鹿(すずか)の誰もが、寿命を全うできていなかったことを
だがそれでも、怯んだりはしない
自分は七代目当主の娘であり、京の都を護る薙刀小町なのだから

「行くわよ」
瑞穂を先頭に、壬生川一族は奥の魔方陣へと足を踏み入れた

第九話－１４　「戦火」　１０２５年５月後編

暗闇の中、赤い両眼が浮かび上がる
徐々に輪郭が見えてくると、それは人の形をしていながら、わずかに浮遊していた

壬生川家の宿敵にして、鬼の頭目
「あたいたちの前に姿を現すのは、初めてね……朱点！」
薙刀を掲げ、朱点童子の方に向かって突きつける瑞穂

迷宮の奥底にあるはずの空洞だというのに、そこはまるで壬生川の屋敷がすっぽり納まるほど巨大な広間であった
「最近ボクの方も忙しくてね、そろそろ京を落とす手はずを整えなきゃ」
「そ、そんなっ」
あけすけにものを言う朱点童子に、柚子が悲鳴を上げる
「なんとまあ……噂通りのお方ですのねえ……」
初めて見る純粋な悪に、さすがのほたるも笑うことができない

「にしてもまあ、今年の壬生川家は女の子だらけだね、せっかくここまで来たのに若い身空で可哀想に可哀想に」
「私は死なない、死ぬのは貴公だ」
手を合わせる朱点童子に、竜子が拳を見せ付ける

壬生川の四人を前に、朱点童子は笑む
「こんな伝説を聞いたことがあるかい？　ボクたちが生まれるずっと昔、地上に最初の人間が生まれた」

両手を広げて、朱点童子は謳うように物語を紡ぐ
「彼らは気の遠くなるような時間を費やし、とうとう永遠の命を得ることに成功した」
「始祖の神々……」
ほたるが心ここにあらずとばかりに、呟く
「え、ど、どうしたの、ほたるさん……？」
心配そうに顔を覗き込んでくる柚子に、ほたるは首を傾げる
「いえ、確か寝太郎様が、そんな昔話をおっしゃっていたような……原初の、九人の神様のお話を……夢枕で、ですの……」
何かが引っかかるほたるに構わず、朱点童子が続ける

「不老不死となった彼らには、成長も子供も意味がなくなった……そして、すべてが、止まったんだ」
まるで見てきたかのように、朱点童子は声を上げる
「そう！　つまり愚かな彼らは永遠の命を得たつもりで、実は永遠の死を迎えて　いたのサ」
「だから何なのよこの悪ガキ！」
威勢良く腕まくりする瑞穂に、朱点童子は肩をすくめる
「ククク……そいつらに比べれば、君たちはずっと幸せだよね？　もっとボクに感謝してほしいなあ」
「冗談じゃない」
「冗談じゃないわよ！」
血気盛んな竜子と瑞穂が、がなり立てる

「やれやれ……それじゃそろそろボクは退散するよ、こう見えても色々やることが多くてね、はぁ、嫌われたもんだね」
女性たちに犬歯を剥かれて、黄川人（きつと）は寂しそうに首を振る
「今までしてきた事を、顧みなさい」
「もっともだね、それじゃ、ばいばーい」

悪びれず朗らかに手を振りながら、朱点童子は広間の中央にある魔方陣の中へと消えてゆく
朱点童子が消え、広間は再び暗闇となり、静寂が降りてきた
眠った湖に走る波紋のように、少年の声が響いた

「不の印……出でよ、二ツ髪」

広間の周囲を取り囲むように、一斉に青い炎が燃え盛った
そして、地中から突如として巨大な影が出現する！

「来るわよ……！」
「……うん！」
魔方陣の中から、勢いよく飛び出したのは、身の丈巨木ほどもある大蛇であった
六代目当主・伽子（とぎこ）の敗北から約二年、壬生川一族は再び“髪”に戦いを挑む

紫色の身体をくねらせながら、二ツ髪は巨大なあぎとを開き、四人を威嚇する
先制を取ったのは、二ツ髪であった
おろちはその巨体で、後列に立つ柚子、ほたる、竜子を踏み潰す
「ひゃ、ひゃああ」
「ちょ、あんた何してくれてんのよ！」
せっかく自分が狭門陣（きょうもんじん）を仕掛けているのに、後列一列攻撃をしてくるとは一体何様か

大蛇の身体から逃れながら、その体当たりで体力の半分を削り取られた柚子が＜石猿＞を唱える
「ううん、まだ、大丈夫……だから」
続いて、竜子が＜春菜＞を詠唱する、これで次のターンでの死はないはずだ
ほたるも同様に＜石猿＞を唱え、順当に回ってきた瑞穂が仁王水を振りまき、石猿三回、春菜一回を終了する

「ここまでは、作戦通り、ですのね」
二ツ髪は再び瑞穂を無視し、後列一列に一列攻撃を行ってきた、三人の体力が大きく削り取られるが、重ねに重ねた＜石猿＞の効力か、まだ持ちこたえられる
「……あくまで、お母さん狙いなのね」
後列に立つ三人の中でもっとも傷が深い竜子が、前衛に移動しながら＜梵ピン＞を唱える、このまま三人が後衛にいても被害が重なる一方と判断したのだ
「それじゃ、回復……大甘露！」
柚子が壬生川家に二つしか残っていない秘具を、大盤振る舞いするまだ＜卑弥子＞を誰も使うことが出来ない壬生川家にとって、味方の体力を３００前後回復する大甘露は、まさに劇薬であった
「負けるわけにいかないものね、力士水！」
「力士水ですの」
こうして、瑞穂、ほたるを合わせて、全員の体力が全回復の上、＜石猿＞三回、＜梵ピン＞三回の効果がかかった事となる

現状、ここまでは万事が予定通り
巧く行き過ぎて、大蛇を目前にした柚子の手のひらに汗がにじむ
二ツ髪の三回目の攻撃、再び後列を狙ってきた列攻撃は、＜石猿＞の鎧に阻まれて致命傷とはならない
「……＜梵ピン＞！」

四度目の＜梵ピン＞が全員にかかり、計画では次は柚子の行動だ

そこで、二ツ髪の目が鈍く光った
開いた口から雷の息吹が、四人に嵐のごとくぶち当たる
予想外の連続攻撃に、壬生川一族の体力が一瞬で奪い去られる

「……それくらい、仮定済みよ……！」
瑞穂は最後の一個の大甘露を、一族に振り掛けた
「さすがに、驚かされましたの……ですが、もう、あなたの番にはなりませんのよ」
ほたるの雨切り弓に、＜梵ピン＞四倍の威力が上乗せされ、一本の水の矢は渦潮へと変わる
二ツ髪がほたるを睨むが、ほたるは怯まない

「……連弾弓（れんだんきゅう）・佐和！」

放たれた三本の爆流が、大蛇を刺し貫く
１２００の三回攻撃は、二ツ髪の岩盤のような鱗を抉り取り、洞穴のような三つの空洞を作り上げた

広間に、熱風が吹く
柚子の掲げた紅蓮ノ大槌が火炎を立ち上らせ、周囲を赤く赤く照らし出す
「……行きます」
竜子の、瑞穂の、ほたるの強化を背負い、柚子が大槌を掲げる

柚子の身体を包む術の柔らかな光が、一瞬だけ槍を抱えた勇壮な少女の形を作り、そして柚子の神気に合わさるように燃え上がった
柚子が大槌を、二ツ髪に振り下ろす

「壊し屋奥義、悶・絶・圧ッッ！」
大蛇の額に叩き込まれた大槌は、３７９４の威力と共に、二ツ髪の巨躯を完全粉砕した

＜五月の終わり＞

朝日が昇り出すと共に、イツ花は起き出し、身支度を整えて門に向かう

壬生川家の家政婦としてやる事はいくらでもあるのだけれど、これは誰かが出陣しているときの日課であった
小さなメガネで、当主の出陣した先を眺め、時々方向を間違える事が多々あるけれども、手のひらを合わせる
「……当主様、ご無事でありますように」

小さく、声に出してつぶやく

ふと、朝日の中、長く伸びた影が見えた
イツ花は目を凝らして、そして口元を押さえる
遠めからでも、黒一青の衣装が見えた、壬生川一族の帰還だ

誰もが鎧を傷だらけにして、あちらこちらに包帯を巻いていた
先頭にいるのは、ほたるだ、いつものように目を細めて楽しそうに微笑んでいる
その隣に竜子がいた、端正な顔は相変わらず気難しそうにしているが、頬が緩んでいた
瑞穂は怪我しているらしい柚子をおぶっていた、苦笑している
そして、瑞穂に抱えられて、柚子は笑っていた、今までで一度も見たことのないような、とても素直で可愛らしい、満面の笑顔だった

九代目当主の初めて見せる屈託のない笑顔にしばし見惚れて、イツ花ははっと我に帰る
それから、弾かれたように手を振り、叫んだ

「みなさまお帰りなさいませェ！　ご飯にしますか、お風呂にしますかァー！？」

朝日に包まれて、彼女らが笑い、
嬉しくなったイツ花も思わずつられて、一緒に笑った

二ツ髪を討ち取った！
髪は残り6本！

第九話－１４　「戦火」　１０２５年５月後編（後書き）

出陣・相翼院（柚子・瑞穂・ほたる・竜子）
二ツ髪・打倒

第九話－１５　「神子」　１０２５年６月前編（前書き）

柚子　　１才７ヶ月

瑞穂　　１才５ヶ月

ほたる　１才２ヶ月

竜子　　７ヶ月

月見　　４ヶ月

第九話－１５　「神子」　１０２５年６月前編

壬生川家が髪を撃破してから、一ヶ月が経った

庭の木々は青々と茂り、初夏のお天道様が天下は太平と言わんばかりに、気持ちの良い日差しを振りまいていた

そんな平和な天気だ、思わず壬生川一族の気も緩むというもの

居間沿いの廊下に寝そべりながら、日向ぼっこをしているのは瑞穂だ

「ああ……お日様って良いわよね……」

枕元に置いてある大福をつまみながら、瑞穂が感極まった声でつぶやく

その足元に座る柚子が、柱にもたれて言う

「何だか……平和だよねえ……」

えへへとだらしない顔で微笑む柚子

髪との戦いが決着してから、柚子はよく笑うようになり、以前よりも貫禄が出て、ずっと当主らしくなった

そんなボケボケの様子を、居間から眺める竜子

「……お母さん」

頬杖をつきながら＜梵ピン＞の術書を開いているが、その視線は柚子に向かって一直線に伸びていた

そんな視線にも気づかず、柚子は伸びをする

「何だか、こうも静かだと眠くなっちゃうね」

寝転びながら、雑誌“週刊京美人＝デキる京の女特集＝”をめくっていた瑞穂が、大福を食べながらうなずく

「そうねぇ、何かきょうは、うっさいチビもいないしねぇ」

「あ、そういえば確かに、ほたるさんも月見さんも、姿が見えないね」
辺りを見回す柚子に、瑞穂が自分の特集ページを自慢げに見せる
一方その頃、ほたるは交神（こうしん）の間にいた

＜儀式の間＞

「ぱんぱかぱーんッ」
満面の笑みで、イツ花（いつか）が部屋の中で花火を鳴らす
「うふふ」
「今月は、木霊ノ寝太郎様の下より、新しいご家族が参ってます！」
防火、と書かれたバケツの中に花火を突っ込みつつ、イツ花が続ける
「ほたるさま、今の心境はどうですか！？」
「とっても楽しみですの」
いつもより慈愛深い笑みで、心底嬉しそうに言う
「まったくもゥ、ほたるさまも頭の中平和なんですからァ！」
「うふふ、イツ花さんこそ」
波長が合うふたりは、しばし笑い合う

それから役目を思い出したイツ花が、声を張り上げた
「お喜びください！　男のお子様です！」
「まぁ」
手を合わせたほたるが、瞳を丸くした
五人連続で女が生まれた後の、ようやく念願の男子である

「六人目が男の子だなんて、まるで五代目当主様のようですのねぇ」
壬生川家の中でも人気高い、鬼朱点を退治した槍使いの幻灯絵を思い浮かべ、ほたるがうっとりとする
「そうですの、男の子ですから、ご先祖様にあやかって、槍使いになさいましょうの」
ニコニコ微笑みながら、勝手に決めてゆくほたる
「後衛も攻撃できる槍使いなら、私のように大将狙いも出来ますし、問題ないですの」

「それでは、お呼びしますネ！」
イツ花が障子を開くと、少年が腕組みをして立っていた

少年はほたるを指し、偉そうに告げる
○「お前が母親か！　余は神の子じゃ！　この壬生川大明神にひざまずくが良いぞ、カッカッカ！」

壬生川大明神に、ほたるが満足そうに微笑む
（ああ、また変な人が増えますの……）
これでほたるの秘蔵、壬生川家変な人名鑑が一層充実する事だろう
変な人ランキング三位の瑞穂、二位の貞光（さだみつ）、一位の柚子にも順位変動が巻き起こるかもしれない
目を丸くするイツ花の前で、少年は臆さずに胸を張る
「余の名は偉い人と書く、偉人（いじん）じゃ！　心得よ！」

少年の名は虚空（こくう）、香家初の前衛職業であり、壬生川家では久しぶりの槍使いとなった

「ふん、虚空か、まあ良かろう」
「え、偉そう……」

「うふふふ、ではこれからもよろしくお願いいたしますの」
緑色の髪を持ち、青色の瞳、白い肌をした虚空が頷く
「カッカッカ、余が当主になった暁には、六十八秒で呪いにケリをつけてやるぞ！　任されよ！」
黙っていれば涼しげな風貌の美形にも見えそうな虚空を眺めながら、ほたるは良い事を思いつく
「そうですの、せっかくだから月見様を呼んできてくださいます？　イツ花様」
「は、はい……」
月見と虚空を引き合わせたら、とっても楽しい事になるんじゃないだろうか、とほたるは思ったのだった

それからまもなくして、月見がイツ花に連れられてやってきた
「……呼びましたか？　ほたる様」
道場で薙刀の打ち込みをしていたのか、稽古着を着ており、手拭いを肩から提げていた
「こちらが、私の息子、虚空ですの、本日はお屋敷のご案内を月見様にお願いしたく思いまして」

「ふうむ」
鼻を鳴らす虚空に、月見が眉をひそめる
「……初めまして、臥家が八代目薙刀士・月見です、共に力を束ね、朱点童子を打ち倒しましょう」
「余の名は虚空じゃ、虚空様、あるいは神様と呼ぶが良い」
「ひょっとしてこの人バカな子ですか！？」
すごい勢いでほたるを向く月見に、ほたるは何も言わず微笑む
「余を愚か者扱いするのか！　何と無礼な！」
「初対面の人に、それも同じ家の姉である私に、神様と呼ばせる人が愚か者以外の何ですか！？　この愚か者！　変人！　コクワガタ！」

「こ、こくわ……」
口をパクパクと動かす虚空に、月見が容赦なく罵詈雑言を浴びせる
「まったく、親の顔が見てみたいとはこの事ですね！　あなたは天界で一体どんな教育を受けてきたのですか！？」
その時、交神の間の柱から、にょきっと顔が生える
木霊「全ては夢の中のこと……」
「あら寝太郎様」
突如現れた人面疽に、イツ花と月見が呆然と柱を注視する
何だか凍りついてしまった壬生川家で、ほたるだけがニコニコと微笑んでいた
木霊ノ寝太郎がいなくなってから、こほん、と月見が咳をする
「と、とにかく……な、なんだか驚いてしまいましたが、壬生川家で過ごすなら、それなりの礼節を守ってもらいたいですね！」
そこで虚空が反撃に出た
「ふん、何をきゃんきゃん抜かしていると思えば、そのような話であるか」
「何ですか、コクワガタさん」
月見の中で、呼び名が決定してしまったようだ
「我ら鬼神の血筋に、礼儀など何の価値がある、この世界において最も尊ぶべきは義ではなく力よ、そなたは強いのか？　娘」
ツーテールの月見の髪が、まるで笹の葉のように逆立つ
「ええ！　強いですとも、少なくともこの屋敷に来たばかりのあなたよりは、全然強いですよ！　そうですよね、そうですよねほたる様！？」
「いえわたしは何とも」
初陣前の月見に、素直に首を振るほたる

「試してみるか？　カッカッカ、余の頭に触れることが出来たらそなたの勝ち、そなたの頭に触れたら余の勝ちじゃ」
「そ、そ、そんなの楽勝に決まって！」
月見よりまだ一回り小さな虚空が、不敵な笑みを浮かべながら、月見に歩み寄る
身を硬くしながら半身の体勢を取る月見に、虚空がぐいっと顔を近づける
「ちょっ――」
そのまま、虚空は月見に口付けをした

＜壬生川家・居間＞

穏やかな壬生川家の居間を、文字通り月見が踏み荒らしてゆく
「うわぁぁぁっぁあぁん！」
「ぎゃっ」
寝そべる瑞穂の腹を踏みつけてから、月見は居間の竜子にしがみつく
「お、お姉様ぁ、うわぁぁん、コクワガタが、コクワガタがぁぁぁ！」
「な、夏だもんね、月見さん、クワガタ苦手なんだ……」
ただならぬ様子の月見を、心配そうに柚子が眺める

「……ん」
気の無い竜子をがくがく揺らしながら、月見はわんわんと泣き崩れる
「も、もう、何なのよ一体、何があったのよ月見」
むくりと体を起こしながら、安息の時を邪魔された瑞穂が不機嫌

そうにつぶやく
　そこへ、頬を赤らめたほたると、してやったり顔の虚空がやってきた
「ドキドキしちゃいましたの……うふふ」
「カッカッカ、まだまだ青いのう月見よ」
　香家の親子の登場に、瑞穂と柚子がげんなりとする

「……また、あんたなのね、それがあんたの息子か」
「き、来た早々、問題を……」
「虚空と言いますの、なかなかの男前ですよね」
　誇らしげに息子を紹介するほたる
　腕組みした悪ガキといった風貌の虚空を見て、瑞穂がつぶやく
「……なんか、悪そうなところが貞光さんに似てるわね」
「うふふ」
「え、いや今誉めてないような……？」
　なぜか嬉しそうな顔をするほたるに、柚子が冷や汗を流す

　そうして和む？三人娘から少し離れて、月見が袖で口元を何度もゴシゴシしながら、竜子の腕を取って叫ぶ
「その人が、ぼ、ボクの唇をぉ！」
「はぁ、別に良いじゃないキスくらい」
　大騒ぎする娘に、事もなく言い放つ百戦錬磨の母親
「え、瑞穂さん何でそんな軽く……」
「なーに言ってんの、この薙刀小町、自慢じゃないけど京の都じゃ相当人気があるのよね、そりゃー相手の男の十人や二十人」
「そ、そうなんだ……でも、どうしてそんな、口付けなんて……？」
　瑞穂の自慢を聞き流しながら、柚子が少年に尋ねる
「知れたことよ、先に一本を取った方が勝ちと言ったのでな、隙を作らせてもらったのよ、まあ幼稚であったが、効果はあったようじゃな」

カッカッカと笑う虚空に、月見が子供っぽく舌を出して嫌悪する

「ふーん、まあ良いんじゃない、目的のためには手段を選ばない感じで」

「カッカッカ、それならばそなたも余の事を虚空様か、神様と呼ぶ権利を与えよう、光栄に思うが良い、女よ」

笑顔のまま、瑞穂の表情が固まった

「それからそこの壬生川九代目当主よ、今すぐ余に当主の権限を譲渡し、そなたは隠居するが良い、これまで大儀であったな」

「え、ええ……？」

「カッカッカ、さあほたるよ、今すぐ当主交代の儀式に取り掛かるぞ、支度せい！」

瑞穂が虚空の襟を掴んだ

「何じゃ、着物が曲がっておったか？」

虚空が周りを見ると、柚子、瑞穂、ほたる、それに竜子と月見が皆、虚空を睨んでいた

壬生川の女性たちに見つめられ、虚空はきょとんとつぶやく

「何じゃ？　余の顔に何かがついておるのか？」

代表して、瑞穂が告げた

「あんまり……調子に、乗るんじゃなあああああああああああい！」

襟を掴んで、そのまま庭に虚空を放り投げ、転がってゆく虚空目掛けて素早く印を結ぶ

「＜花乱火＞！」

さすがに理性が残っていたのか、＜七天爆＞よりも一ランク弱い術を唱えた瑞穂の温情だったが……　続く竜子と月見の三人併せによって、五倍の威力となって虚空を大炎上させる結果となった

こうして、壬生川家には久方ぶりに男子が加わることとなった
この壬生川一族女子衆の洗礼によって、虚空が懲りたかどうかは
定かではない

第九話－１６　「母娘」　１０２５年６月中編

＜壬生川家＞

壬生川家の風呂場は武家の屋敷としては、手頃な大きさだろう
例えば、ひとりで入るなら十分に脚を伸ばせるし、無理をすれば三人同時に入浴することも可能だ
気を許したもの同士であれば、一緒に入る事もある
というわけで夕方、風呂から上がった柚子と竜子は、居間にやってきた

「はぁ、いいお湯でした、次良いよほたるさんー」
湯上りで髪をまとめている柚子を、ほたるが手招きする
「柚子様、ちょっと夏には早いのですけれど、カキ氷食べますの？」
「わぁ、もらうもらうー」
ほたるの差し出したさじに、喜んで飛びつく柚子
「竜子様は？」
「……私はいい、甘いモノ苦手だし」

竜子はそう言って、廊下の縁側に座って涼みながらカキ氷を食べている瑞穂の横に腰を下ろした
風に濡れ髪が揺れる

「果物の様子、どうだった？」
瑞穂に聞かれて、竜子は髪を押さえながら答える
「……もう、腕は自由に動かないみたい、着物を脱ぐのも、苦労し

てた」
「ふーん、手伝ってやったのね？」
壬生川家で、なぜか一番風呂の権利を持っている瑞穂が、色々どばどばかけた氷を口に運ぶ
竜子は風にかき消されそうな声で、つぶやいた
「……私が壊し屋だったなら、お母さんの腕になれたのに」

居間の方から、ほたると柚子（ゆずこ）の明るい声が聞こえてくる

「……どうして私は、拳法家になったのかな」
柚子の前でしか見せない柔らかな声色で、竜子は膝を抱く
瑞穂は目を瞑って、答えた
「たとえ、果物が拳法家だったとしても、きっとあの子は奥義の使いすぎで身体をボロボロにしてたわよ、そういう奴よ、バカなのよ」
「……そっか」
「そうよ」

瑞穂の言葉に、竜子が面白くもなさそうに言った
「……まさか、瑞穂に慰められるなんて」
「べ、別にあんたを慰めたわけじゃないわよ……ただ、そうやってウジウジされると、鬱陶しいのよ」
そっぽを向く瑞穂に、竜子は再び尋ねる
「……お母さんに、わたしができることって、もう何もないのかな」
死期が迫ってきた、と頭につけようとして、竜子は言葉を飲み込んだ
柚子の健康度は間違いなく低下している、それなのに、彼女は出陣しようとしていた

瑞穂は、つぶやく
「……子供が親に気を遣うなんて、一年早いわよ、心配も憂慮もひ

っくるめて、あんたらしくしてりゃ良いじゃないの」
竜子はちらりと居間に目をやった
ほたるが、柚子に何かを突きつけていた
「え、えっと……どうしてカキ氷の中から、こんなものが……？」
「うふふ、漢方薬“東方淫羊根”ですのよ、効果抜群なんですから」
満面の笑みで、柚子に棒状のモノを差し出すほたる
「あ、あの、その……口、に、しなきゃ、だめ……？」
「ほら、あーん」
「う、ううう……そ、そんなおっきいの、無理だよぅ……」
「ほらほら、下のお口もあーん？」
「ちょ、ちょっとほたるさん！？　む、むぐうぅ……」
無理やり口の中に突っ込まれている柚子を見つめながら、竜子は
瑞穂の言葉を反芻する
そして、ため息

「……一年か、長いわね」

＜出陣＞

翌日、出陣の日
玄関には予定時刻二時間前から、初陣の娘が完全武装で居座っていた

「遅いですよ皆さん！」

そうして無茶を言う
「や、やる気満々だね、月見（つきみ）さん……」

竜子に身体を支えられながら、柚子は冷や汗を流す
「当たり前じゃないですか！　ボクの初陣、きょうは歴史に残る働きをさせてもらいますから、よく見ててくださいね当主さま！」
えっへんと胸を張る月見は、確かに3ヶ月才にしては頼もしく見えた
「遅くなりましたの」
最後に微笑みながら、ほたるが追いついてきた
「あれ、今月はお母さんは出ないんですね？」
「ええ、瑞穂様は家に残って、虚空（こくう）さんの訓練みたいですの」

噂をすれば何とやら、準備を整えた四人の前に、瑞穂がやってくる
縄でぐるぐる巻きになって、口に短刀の鞘が突っ込まれた虚空の足を引っ張りながら

「……うわぁ」
「……」
「あら、瑞穂様」
あんぐりと口を開く柚子、目を丸くする月見、普段と変わらないほたるの前で、瑞穂は窮屈そうに肩を回す
「まあしゃあないじゃない、そろそろ月見は出陣だし、柚子とほたるは外せないし、ここはあたいが残るっきゃ」
虚空の事は誰も何も触れない
「〇＊□×☆！！」
「ま、そういうわけで、あたいに気にせず戦ってらっしゃいな」
凄い勢いで何かを喚いている虚空の足を引きずりながら、瑞穂が去り際に「祖霊丹も用意しておかなきゃ」とつぶやくのが聞こえた

ほたるが、ぽつりと漏らす
「帰るおうちが、残っていれば良いですのねえ」

こうして一同は、屋敷に大きな不安と火種を残したまま、出陣してゆくのであった

＜紅蓮の祠＞

やってきたのは、すでに一度攻略したことがある迷宮、紅蓮の祠であった

先月に選んだ相翼院を無事攻略できたので、今度はその次だ

「今月も、髪の攻略を目的にするんだね」

「うん、出来ればやりたいんだ」

その言外に竜子は、わたしが生きているうちに、という言葉を読み取ってしまう

「……うん、頑張ろ、お母さん」

髪を倒さなければ呪いは解けないが、髪と戦わなければ柚子は奥義を打つこともないのだ

思わず目先の幸せを優先してしまいたくなり、竜子は唇を噛み締める

「どうしましたの、竜子様？」

一同から少し遅れて歩いていた竜子に、ほたるが声をかけた

「……いや、何でもない、大丈夫」

拳を握り締めながら首を振る竜子に、ほたるがささやく

「竜子様は、本当に柚子様のことが、お好きなのですのね」

「……うん」

竜子は思わず、無防備にうなずく

「竜子様のような娘を持って、柚子様は、本当に、幸せですのね」

「……前に、お母さんにもそんな事を言われたわ」

暗い顔で、竜子は下唇を噛む

「……でも、分からないの、私、そんな……何もしていないのに」
そんな竜子の頭を、ほたるはよしよしと撫でつける
少し考えて、ほたるは竜子にゆっくりと語りかけた
「それでは、柚子様は、竜子様に何かしてくださいましたの？」
「お母さんは……」
竜子は顔を上げて、前列で月見に何かを指導している柚子の笑顔を見た
胸が高鳴る

母は一緒にいてくれた、ずっと、ずっと一緒にいてくれた
甘えさせてくれたことより、術を教えてくれたことより、稽古をつけてくれたことより、昔話をしてくれたことよりも、それが一番大事なことだった、ただ一緒にいてくれたことが
「……」
大切なことに気づいた、竜子の心に灯火が生まれた

「もしも……」
小さな声に、ほたるが耳を傾ける
一言一言噛み締めるように、竜子はつぶやく

「もしも、私の心が満たされたように、お母さんも、私と居たことによって、日々が満ちていたのなら、それ以上もう、何も望むことは出来ないんだ……」
だって、それよりも大事なことなんて、何もないのだから
ほたるは竜子の肩を抱きながら、にっこりと微笑む
「柚子様が幸せだと言った言葉を、お疑いになりますの？」
「……そんなことは出来ないわ」
笑うほたるの腕を解いて、竜子は燃える拳を装着する

「……私と同じほどの強さで、一緒に居たいと思ってくれているお母さんに、それ以上に大事な事があるのなら……」

他の事を望むのは、自分のワガママなのだと、気づく

少しだけ、吹っ切れることができた

柚子の腕はもう、いくつもの大事な想いが刻み込まれて満足には動かないのだけれども、それは決して悲しいことではない、それを悲しむのは柚子にとって無礼だ

子として、その想いを引き継ぎたいと竜子は思った

柚子が死に、その悲しみも、憤りも、切なさも、不安も、憎しみも、腕に刻み付けなければいけない、と思った

いつしか自分の腕も重くなり、威力を増し、そして石のようになってしまっても、そのときはきっと、幸せなのだろう

「……瑞穂の言う事は嘘ばかり、一年はかからなかったわ」

竜子の瞳に、力が戻った

こうして壬生川一族は、初陣の月見をかばいながら、紅蓮の祠を奥へ奥へと進んでゆくのであった

第九話－17　「絶後」　1025年6月後編

＜炎舞廊＞

奥津ノ薙刀を振り回しながら、月見(つきみ)が果敢に叫ぶ
「えい、やあ、てやあ！」
振り回しながら、嬉しそうに言ってくる
「どうですかボクの薙刀さばき！　修行の成果が活きているでしょう！」
「い、いいや、当たってないよ……？」
鳴神小太郎から離れた後列で演舞を行う月見に、柚子(ゆずこ)が冷や汗を流す
「……打――突！」
そうこうしている間に、竜子(たつこ)とほたるが畳み掛けるように鳴神小太郎を退治してしまう
「さすがお姉様！　その力があれば髪なんて恐るるに足りませんね！」
（これは、わたしが突っ込まないとだめなのかなあ……）
目を輝かせる月見を見て、柚子が悩む
瑞穂(みずほ)の不在は大きかった
徹底的に後衛に居座る月見を引き連れて、一同はさらに奥へと目指す
「破――！」
「雫ッ！」
歴戦の猛者である柚子とほたるが次々と邪魔立てする敵を打ち倒し、ついに皆は赤年の間にたどり着いた

＜赤年の間＞

中央には、真っ白な仔猫が一匹寝転んでいた
「うわあ可愛いですね！」
手を叩いて喜ぶ月見に、ほたるが意外そうに言う
「あら、月見様、猫がお好きなんですのね？」
「可愛いものは良いです！　それだけで存在が許されますよね、世界の役に立っている感じです！」
「にゃー」
「わあ鳴いた鳴いた！」

ふらふらと白猫に近づこうとする月見の横を、凄い速さで何かが通り過ぎる
投げつけられた小石は猫の前で、壁に阻まれるようにジュッと炎上した

「あ、あ、危ない！　しかも石つぶて!?　何をするのさ！」
目を丸くする月見の前で、化け猫は正体を現す
真っ赤な髪を振り乱し、牙を剥く化け猫に、竜子が小石を手のひらで遊ばせながらつぶやく
「そんなに発音正しく鳴く猫とか、怪しすぎるから」
「た、確かに……」
やがて化け猫は、赤猫お夏へと変化する

お夏「きー！」

「うわ可愛くない！　何かお母さんみたいですね！」
仰け反る月見の前に、竜子と柚子が歩み出る
お夏は手の甲を舐めながら、四人を睨みつけてきた

お夏「あたしを下界に落としたのは、“太照天　昼子”って性悪女さ！」

「いや別に聞いてませんよ！」

「まあまあ……きっと構ってもらいたいんですのよ」

何だかレベルの同じ月見とお夏の間に、ほたるが微笑みながら割り込む

「さあどうぞ、お夏さん」

お夏「……天界に知らない顔が現れたと思ったら、あっという間に力をつけて、今じゃ女王さま気取り……」

釈然としない顔で、お夏はぶつくさ漏らす

お夏「あたしゃあの手のカマトト女は首を絞めたくなるんだよ！！みんなあの姿にだまされてんのサ、そこの大槌女と一緒さ！　なにさ悶絶圧って！」

「うわ、根に持たれてる……」

お夏「だからあのカマトト女への仕返しに、朱点のアバズレ母ちゃんを焚きつけて、あいつの計画をお釈迦にしてやった！！」

アーッハッハッハと高笑いをするお夏

そんな中、ほたるだけが顎に手を当てて考え込む

「……昼子様の計画、そんなこと誰かおっしゃってた気もしますねえ」

お夏「あっ、その大槌あたしのじゃないの！　返しなさいよこの泥

棒猫！」

お夏が柚子に怒鳴る

「え、でも、これは戦利品……」

お夏「人様の物を取っちゃいけないのよ！　返せ返せ返せ！」

「うう、何か、あの、ごめんなさい」

なぜか差し出そうとする柚子の腕を、竜子が掴む

「いや……言いくるめられないの、お母さん……」

頭を抱える竜子に、お夏ががなりたてる

お夏「きー、何も巧くいかない！　こうなったら、み～んなみ～んな、焼けちまえッ！！」

お夏の周囲に、無数の火の玉が浮かび上がる

赤猫お夏「あたしの撒いた火種はねェ、地上から天界に燃え広がるサ！」

先手を取ったのは、竜子だった

「＜梵ピン＞！」

悪いけれど、お夏に構っていられる時間はそう多くない

「力士水です！」

娘たちが、一気に攻撃力を高めてゆく

お夏「だ～れにしようかな～！」

そんな中、お夏が獲物を見定めるように、爪を舐め、その目が初陣の月見の前で留まった

お夏「お前だァ！」

「わ、わわわわ」

その鋭い爪で、月見の着物をビリビリに破ってゆく

「な、な、何するんですか！　破廉恥な！」

お夏「アーッハッハ、どうせ勝てないなら、せめて一匹道連れにしてやるにゃあ！」

「ひ、ひえええ」

嬉しそうに月見を追い回す器の小さいお夏の前に、柚子が立ちふさがる

「ご、ごめんなさい猫さん」

その大槌から立ち上る神気に、お夏がうっと後ずさりをする

お夏「ず、ズルい！　四対一だなんて！」

「何を言っているんですの」

柔らかく微笑むほたるが、お夏に弓を向ける

支援術によって強化された奥義が、お夏の身体を貫いた

「あなた方は神ではありませんか……うふふ、クク」

連弾弓佐和（れんだんきゅうさわ）の一撃によって砕かれたお夏は、るるると涙を流しながら、黒いもやとなって散ってゆく

お夏「ど、どうせあたしゃ死なないんだ……だから、もう、来年は来なくて良いからにゃ……アハハ……」

お夏の消えてゆく様を眺めていたほたるが、ぽつりと「可哀想なことをしちゃいましたでしょうか」とつぶやく
「ほたる様……」
だがその横顔は、周囲の溶岩の明かりに照らされて、何だか笑っているように見えて、月見の心に微妙にトラウマとして残ったという

＜非の印＞

やがて周りの炎が消え、奥の間へと続く道が現れる

ほたるが養老水を飲み、傷ついた月見に治癒術を施して、一同は奥の間へと乗り込んだ
「いよいよ……二本目」
地下へと続く道のりを歩みながら、柚子が腕をさする
（まだ、動いていてくれるよね、大丈夫……）
自分に言い聞かせるように、紅蓮ノ大槌を握り締める

鍾乳洞のような地下に、少年の声が響いた
「いつだったか、永遠の命を得た浅はかな一族の話を聞かせたよね、実はアレには続きが――」
「出ましたね！　朱点童子黄川人（しゅてんどうじきつと）！　ここで会ったが三年目、このボク、壬生川月見が退治してあげましょう！」
朱点童子の言葉をさえぎって、月見が薙刀を持ち上げる
「……何だか、元気な子が来たね、なに、強いのこの子？」
「え、ええっと……」
壬生川家を代表して、柚子が言葉を詰まらせる

馬鹿にされたと思ったのか、月見が騒ぐ
「当たり前じゃないですか、強いですよ！　ボクはかの不動泰山の娘ですよ！」
なるほど、と朱点童子は手を打つ
「ボクの一ツ髪にも、歯が立たなかったあの火神の子供かあ、それはそれは強いだろうねえ、確かにあの人も威勢だけは良かったっけかな」
「な、な……！」
にやにやと笑う朱点童子に、月見の毛が逆立つ
「ボクのお父様を、バカにしないでください！」
月見の放った二本の剣閃が朱点童子に向かって伸びる
だが朱点童子は、その衝撃波を一瞥しただけで消し去ると、息を吹いて月見の身体を吹き飛ばす
「ひぇっ、痛っ……！」
「月見さん！」
壁に当たって意識を失う月見を、柚子が抱き起こす、大丈夫、大した傷ではない
「ええっとどこまで話したっけか、ああそうそう、浅はかな一族の話の続きだね」
殺気立つ壬生川一族の前で、朱点童子は相変わらずの調子で続ける
「彼らの見込み違いはさらに続いた、肉体は永遠ではなかったんだ、絶望した彼らは地上を去った……」
朱点童子が手を上げると、空中に九人の神の顔が浮かび上がる
それらは、交神（こうしん）の儀で使う神様一覧表に名のある神々であった
「ところが彼らは根っからの大ウツケ！　地上に未練もあったし、自分たちが偉大だとまーだ信じてたのサ」
「見たことのない方も、お二柱混ざってますのねえ……」」

ほたるが、空中に浮かび神々の絵を見ながら、つぶやく

「勝手に地上の人間を自分たちの後継者と決めつけて、事あるごとにいらぬおせっかいを焼き始めた」

周囲に映し出される、天変地異の数々……大地震、雷、洪水、疫病

「で、最後にはそれも面倒になって、たまたまできた“自分たちの子”を人間の指導者に据えることを企てた、まったく、迷惑なこったよなあ……バカにつける薬なしってやつサ……」

それだけ言うと、朱点童子は余韻を残して消え去る

毎回毎回奇妙な物語を謳っては去ってゆく朱点童子に、さすがのほたるもため息をつく

「はぁ……何をおっしゃっているか、全然分かりませんのねえ……」

「自称、壬生川家の知恵袋も、さっぱりなのね」

壬生川家の頭脳労働担当ふたりが、共に暗い顔をしたその瞬間、溶岩の中に埋もれていた魔方陣から、巨大な化け物が飛び上がった

「わ、わわ！」

地震に驚いて、月見が起き上がって目を覚ます、と天を突くほどの大蛇が視界に入った

「ひ、ひいい！　お姉様ぁ！」

竜子が月見を掴んで跳躍した直後、月見がいた場所に“髪”が炎を噴き出した

「だらしないわよ、月見」

「……お、お姉様、ずっと付いていきます！」

非の印から出現した一ツ髪が、壬生川一族に牙を剥く

たてがみまで炎で出来た、まさに火炎の化身と呼ぶべき龍であった、溶岩の中から出現しただけあって、全身が烈火に包まれている

「……竜子さん、あれを殴るんですのね」

「必要があれば」
恐らく燃える拳は通用しない
竜子は代わりに大極ノ拳を装着する
「う、わたし紅蓮ノ大槌しか持ってきてない……」
「柚子様の力なら、問題はないと思いますの」
「何にせよ、この戦いの肝は水の属性武器を持つほたるね」
灼熱を噴き出す一ツ髪を前に、ほたるが少しだけ苦笑いを浮かべる
「頼られるのは、苦手なのですけれど……」
やるしかないのだ

戦いが始まる

最初に行動が回ってきたのは、何とほたるであった
「仁王水ですの」
作戦は変わらない、三回＜石猿＞を唱えるのが最優先だ
「……＜石猿＞！」
「仁・王・水！」
必殺技のように叫ぶ月見の番が終了し、一ツ髪が目を光らせた
一ツ髪がうなり声を上げながら、爆炎を前列の柚子と竜子に噴出する
寸前で避けた竜子が、逃げ遅れた柚子に叫ぶ
「お母さん！」
だが柚子は紅蓮ノ大槌を振り回し、炎の息吹を防ぎきっていた
「あっつううぃ、けど、効かないもの！」
道明（みちあき）から＜七天爆＞をいち早く受け継いだ柚子の技の火は、臥家（がけ）のそれをも凌駕しているのだ、生半可な炎で彼女を焼き尽くすことは出来ない
だがそれは、一ノ髪も条件は同じだ

「力士水！」
そして、柚子から再び壬生川一族の番が回る
「＜梵ピン＞！」
竜子が＜梵ピン＞の術を高速で結んだ直後、再び一ノ髪が動いた
今度は後列に炎を吹きつけ、ほたると月見が一瞬炎に包まれて見えなくなる
「あああ熱いです！　くうう、もう許しませんよ！」
着物をあちこち燃やしながらも、初陣の月見は気絶せずに踏みとどまった
「連続攻撃をしてくるから、油断は出来ないわ……」
「＜春菜＞ですの」
ほたるが全体回復術を唱え、何とか危機を脱する
その直後、柚子が動いた
このままでは、いずれ初陣の月見が倒れてしまうかもしれない、うかうかしていられない
「炎に炎で挑むなんて……前のわたしでは、考えられなかったな……！」
一ツ髪に向かって、柚子の紅蓮ノ大槌から猛火が飛び出す
「悶絶圧――！」
一ツ髪を覆い尽くすほど、ほとばしる炎

しかしその炎は、一ツ髪の寸前で爆ぜて消えた

「え、えええ！」
皆に力士水をかけながら、月見が叫ぶ
壬生川一族で最強の威力を誇る、柚子の悶絶圧が回避されたのだ、さすがにほたるも表情を曇らせる
「やっぱり、お強いですのねえ……」
動揺しなかったのは、竜子だ

「お母さん焦らないで、時間は私たちが稼ぐわ」
気合を高める竜子の髪が、ゆっくりと揺らめく
「う、うん……竜子さん……分かった！」
柚子は今一度悶絶圧（もんぜつあつ）のため、全身の力を紅蓮ノ大槌に注ぎ込む
本当は先ほどの一撃の後で、両腕の負担が限界に近づいてきたことはわかっていた
だが、柚子は己への不安を振り払う
（もう一度……出来る、わたしなら、出来る……）
痛みはもう、気にならなくなっていた
壬生川家当主をギロリと睨む一ツ髪に、竜子が構えた

「……拳術奥義、恐らく時間稼ぎにしかならないけれど、でも、これが今の私の全力の技よ」
竜子の身体が陽炎のように薄らぐ
次の瞬間、一ツ髪の眼前に出現した竜子は、その力を解き放った
「――百――烈――拳！」
拳が見えざる光と化し、髪の竜鱗に襲いかかる
竜子の細腕から繰り出された無数の乱撃は大蛇の身体を揺るがし、溶岩溢れる広間の天井がわずかに崩れた

一ツ髪は暴れながら炎を吐き出し、それらが竜子の後方にいる、月見とほたるを直撃した
「ひいい」
逃げ回る月見の横、みつあみを少し焦がされたほたるが、堂々と矢を番える
「……本当に、素手であんなのを殴りつけるなんて」
壬生川家の面々は、凄まじい早さで成長している

「――連弾弓、佐和！」
ほたるの弓から射られた三本の水の杭が、一ツ髪を後方の岩盤に

繋ぎとめる
「やった、これで当主様の準備が整いますね！」
必死にもがく一ツ髪であるが、ほたるの矢はどんなに暴れても剥がれない

「……＜春菜＞」
念のために、竜子が治癒術を唱え、これで全員の体力はほぼ全回復する
竜子とほたるが稼いだ時間で、柚子の気力が充填する

「……ありがとう、竜子さん、ほたるさん、それに月見さんも」
炎に対して炎、たとえ一度効かなくても、柚子は諦めたりはしない
その瞬間、一ツ髪の血走った目が、赤く輝いた
「――あれは」
思わずほたるが息を呑む
一ツ髪の目の前に今まで見た中で最大級の火球が形作られてゆく
道明のそれを上回るほどの、山をも吹き飛ばすほどの＜七天爆＞だ

その大蛇の眼は、一点、柚子を見ていた

「……っ！」
一ツ髪の最後の力を振り絞った＜七天爆＞が、うなりをあげながら柚子を飲み込む

「お母さぁぁぁん！」
５５３ダメージの火柱が爆風となり、壬生川一族を吹き飛ばした

爆心地の中心で、柚子の大槌に炎が吸い込まれてゆく
「お、お母さん……」
「……凄いですの」
柚子は生き残っていた
後ろでくくっていた長い髪がほどけて、吹き荒れる熱風によって、なびいている
柚子はゆっくりと、黄金色の瞳を開く
「……さすがにもうダメだと思ったけど、ここで倒れたら、怒られちゃうから……」
岩が崩れ、瓦礫が散乱し、溶岩が溢れる広間の中央で、柚子の周囲だけが無事なまま残っていた
「え、ええ、神様……？」
神々しい光を発する柚子を、月見が目をこすりながら、何度も見返す
もう、神と壬生川一族の間には、それほどの差はないのかもしれない、とほたると竜子は思った

「この勝負、わたしの勝ちだね」
炎と炎の対決を制した柚子が、歯を食いしばりながら告げる
「これが正真正銘……最後の、わたしの奥義……受け取って……！」
もうきっと腕は動かなくなる、ここで死ぬかもしれない
それでも良かった、本望だと思った
ただ、あと一撃の奥義が放てるのなら、もう柚子にとって惜しいものは何一つない
「奥義……――悶絶圧（もんぜつあつ）！！」
全てを粉砕する究極の奥義が、燃え盛る一ツ髪を灰へと還した
ひび割れた大槌を落とし、その場に倒れ込んだ柚子を、取り置きしておいた最後の養老水を持って竜子が抱き起こす
「お母さん！？　お母さん！？」
竜子の声に、柚子は薄目を開く
「……うぅ、ん、たつこ、さん」
竜子の涙が柚子の頬に落ち、柚子はにこりと微笑んだ

「……帰ろう、おうちに」

まるでその笑顔は、天女のように美しく見えた

「うん！」

こうして、出陣隊は壬生川家に帰還した

――だが、

翌7月、柚子の健康度は17に下がったまま戻らなかった

一ツ髪を討ち取った！

髪は残り5本！

第九話－１７　「絶後」　１０２５年６月後編（後書き）

出陣・紅蓮の祠（柚子・ほたる・竜子・月見）　一ツ髪・打倒初見・虚空→槍使い　訓練・瑞穂→虚空

第九話－１８　「柚姫」　１０２５年７月（前書き）

柚子　　１才８ヶ月

瑞穂　　１才６ヶ月

ほたる　１才３ヶ月

竜子　　８ヶ月

月見　　５ヶ月

虚空　　１ヶ月

第九話－１８　「柚姫」　１０２５年７月

『昔々あるところに、ひとりの少女がおりました
鬼を退治する家に生まれた彼女は、だけどとっても弱虫でした
その弱虫の名前は、柚姫（ゆずひめ）と言いました』

＜京の都の帰り＞

7月の頭の出来事だった
「まったく……どうして屋敷で寝てないのよあんた、あたい一人で十分だって言ったのに」
「ご、ごめんなさい……」
夏色に輝く木漏れ日を浴びながら、瑞穂（みずほ）が悪びれる柚子（ゆずこ）に娘を叱る母親のような表情を見せる
ふたりは、時の帝との謁見を済ませて、屋敷に帰る途中であった

「大体、御車も断るなんて、どういうつもりなのよ、あんた自分の身体のこと分かってんの？」
「だって、歩いていたかったんだもん……」
首の後ろで結んだ包帯で、両腕を吊っている柚子は、屈託のない笑みを浮かべる
「夏の風って、気持ち良いね、何だか元気になってきそう」
普段より顔色がよく見える柚子に、瑞穂が口の端を上げてつぶやく
「柚の花は大半が６月に散るのよね」

「う、うぅ……瑞穂さんの意地悪……」
「何を今更、てか、あんたMなんだから喜びなさいよ」
じゃれてくる子犬を振り払うように、瑞穂が肩をすくめる

「Mじゃないって言っているのにぃ……そ、それにしても、どうしたんだろうね、帝さんは、わたしたちと一回話してみたかった、なんて」
「選考試合で、前から気になってたって言ってたわね、でもこんな犬当主が珍しいのかしらね」
「うぅ……また話を戻すぅ……」
怪我人に対しても容赦ない毒舌を発揮する瑞穂に、柚子が唇を尖らせる
そんな街道を歩く騒がしい二人の元に、どこからか青い実が転がってきた
「あ、瑞穂さん、瑞穂さん、あれあれ」
「あたいはあんたの腕じゃないんだけど……」
瑞穂は小石大の実を拾い上げる、眼前に掲げると、柑橘系の良い香りがした
「ありゃ、夏ゆずじゃない、今年は早いわね、うちの当主の生まれ変わりかしら」
「まだ生きてるよ！」
夏ゆずの小さな実の向こう側に、日焼けした農民の少女が見えた
「ん？」
「あ、これあなたのかな？」
自然な笑顔を見せる柚子に、少女は少しだけ怖気づく
怖いものに遭遇したような怯えた目で、柚子たちを見る
「あ……そっか、そうだよね」
柚子の笑顔が、少しだけ寂しそうなものに変わった

でも仕方ないと思う
「まあ、あたいたちは壬生川（みぶがわ）一族だしねえ」
瑞穂がそっけない態度で、少女に向かって青い実を放る
少女は受け止めきれずに、地面を転がってゆくゆずを追いかけ拾い上げて、それからこちらを振り返った
「それじゃね、来年もいっぱい実るといいね」
微笑む柚子に向かって、意を決したように少女は走り寄ってきた

そして、真ん丸い瞳で、柚子を見上げる
「これ、あげる！」
差し出されたゆずを見つめて、柚子は目を丸くする
「え、ええっと……」
腰辺りまでしかない女の子相手に、どうしようどうしようと途端に挙動不審になる柚子を見て、瑞穂が呆れながらつぶやく
「……もらってあげなさいよ」
「え、で、でも手が」
柚子の両腕は吊り上げられている
少女はその包帯の隙間に、ゆずを押し付けた
「あげる！」
「あ、うん、あ、あの、ありがとう」
戸惑う柚子に、少女は頭を下げ、叫ぶように甲高く言う

「ありがとう、柚姫様！」

そうして、少女は頬を真っ赤にしながら、あっという間に去ってゆく
突然の出来事に残されたふたりは、口々につぶやく

「柚姫様て……」
「な、何で、わたしのこと、知っているのかなあ……？」

「まあ、落とすと困るし、あたいが持っててあげるけど……って、何で果物泣いてるの！？」

え、と柚子は顔を上げる

「な、な、泣いてないもん、泣き虫はもう卒業したよ！（；д；）」

「思いっきり泣いているじゃないの！」

「あ、う、うぅ……うぅう……」

涙を隠すことが出来ない柚子は、そのまま唇を震わせて、泣き続ける

「だ、だって……嬉しくて、泣くなんて……初めて、だもん……あ、ああっ、ダメっ、ゆずはわたしが持つぅ！」

「あんた……落とすでしょ……」

「お、落とさないよっ！」

大事そうにゆずを抱えながら珍しく意地を張るを柚子に、瑞穂が呆れて腕を組む、いつまで経っても子供なんだから、と

結局、屋敷に着くまでの間、柚子はずっと泣き続け、帰りを待っていたほたるにも、すっかり瑞穂が苛めたものだと誤解されてしまったのという

～～

『柚姫は毎日泣いてばかり
大人になっても、毎日泣いてばかりでした
そんな柚姫を見かねたのは、同じ家の女の子でした』

＜壬生川家・居間＞

京都に出向いて以来、柚子の体力は立ち上がるのも難しくなるほど、一気に落ちていった

両腕の使えない彼女は、それでも一日のほとんどを、居間で過ごした

賑やかな壬生川家の皆と、ずっとこうしてお喋りをしながら余生を過ごしたいと

家族の皆も、彼女の最期を見届けたいと望んでいただろう

しかし、いつまでもそんなことは、出来ない

セミの鳴き声が居間に響く、よく晴れた天気の良い日だった

「お母さん」

「……うん？」

ぼんやりと眠ることが多くなった柚子の髪を、今月元服を済ませた竜子（たつこ）が撫でる

「今月、出陣してくるね」

「うん」

誰かが言わなければいけないことだった

居間の座椅子に座ったまま、柚子は微笑む

「待ってるよ、信じてる」

かつての勇将の声に、竜子は小さくうなずく

「……頑張るね」

竜子は立ち上がり、髪を揺らしながら、柚子から背を向ける

居間から廊下に出たところで、ほたるが立っていた

「竜子様」

セミの鳴き声が、遠ざかった気がした
全てを見透かしたような表情で、ほたるが竜子を抱きしめる
「……何の真似」
「柚子様の代わり……では、余計なお世話、ですか？」
「……おせっかいよ……」
もう柚子は、誰も抱きしめることは出来ないのだ
竜子は瞳を閉じる
「でも……今は、このままでも、良い……」
ほたるの着物を握り締め、竜子は震えるように目を瞑る
しばらく経って、ほたるの胸元には少しだけシミが出来ていたが、
ほたるは何も言ってこなかった
ただ竜子を子供扱いして、暖かく微笑んでいた
今の竜子には、それが嬉しかった

『柚姫は弱虫のままでいることは、いけないことだと教わりました
同じ家の女の子に、力がなくても必死で前向きに生きている都の
人たちの話を聞いたのです
このままではいけないと、柚姫は変わろうとしました』

＜出陣＞

玄関に、壬生川家の全員が集合する

「いやーすっかりもう暑いですね、今年の夏は一段と暑いですね！」
「いやあんた、去年体験してないでしょ」

手で自分を仰ぐ月見（つきみ）に、今回の出陣隊長である瑞穂がジト目を向ける
「うふふ、実はこれからもっと暑くなるんですのよ」
「そ、そうなんですか！？」
「ええ、８月、９月、１０月と上がり続けて、１２月になれば、自然とお水が沸騰しますの」
「えええええ！」

ほたるにコロリと騙される月見を眺めながら、イツ花（いつか）に支えられている柚子がくすくすと微笑む
「そんなわけないじゃないですか……もう」
「なっ、ボクを謀りましたね、ほたる様！　許しませんよ！」
「私の新しい玩具ですの……うふふ」
瑞穂に似ず、背が伸びない月見の頭をよしよしと撫でるほたるに、月見はそれを嫌がって必死に振りほどく
前の玩具、柚子はその様子を見て、月見に同情する
「月見さん……頑張ってね……」
「何で諦めているんですかもう！？」
辺りを見回して、瑞穂がふと気づく

「バカガキがいないわね、そういえば」
「それは虚空（こくう）さまのことですかッ！？」
イツ花が思わず尋ね返す
あまりにもあまりな呼び名も、母親のほたるは普通に受け止める
「虚空さんは、協調性ありませんからねぇ、お部屋で一心不乱に何かしてますの」
「母親として、良いのかそれは……」
欠点も個性の一つというほたるのおおらかな考え方に、瑞穂が頭を抱えるが、瑞穂自身も母親としてはどうだろう、と人知れずイツ花は思う

「さ、そろそろ向かいましょう」
携帯袋を背負った竜子が皆に号令をかけた
今は一刻が惜しいのだろう

「それじゃ、行って来るわよ柚子、あたいらが帰ってくるまで死なないのよ」

「瑞穂様……」
「お母さん！」
瑞穂がさらりと言った内容に、思わずほたると月見が聞きとがめる
しかし、柚子は慣れっことばかりに、笑って受け止める
「うん、だから早く帰ってきてね、みんな」
「……ええ、白骨城（はっこつじょう）の髪、私たちが討ち取ってみせるわ」
竜子が新武器・バサラの拳を見せながら、頼もしく告げた

こうして、柚子とイツ花が見守る中、四人は白骨城へと向けて出陣してゆく

～～

皆が居なくなった方向をしばらく眺めていた柚子は、肩を貸してくれているイツ花に言う
「みんな、行っちゃいましたね」
「……そうですねェ」
気丈な方々だ、とイツ花は思う
「わたし、元気良く見えたでしょうか……」
柚子の声が、かすれていた

「え、あの……当主さま、あのォ、ちょっと顔色が…あああッ！！」
平和だった壬生川家の日常にも、終わりが訪れていた

『柚姫は恋もしました
好きだった人を亡くして、その後を継いで鬼退治の家の当主となりました
柚姫はたくさん落ち込んで、たくさん笑って、たくさん戦いました
いつしか柚姫は、もう弱虫ではなくなっていたのです』

＜白骨城＞

蜃気楼のように揺らめく白骨城内を、四人は突き進んでいた
迫りくる亡者たちを、瑞穂と竜子が獲物を飲み込むように、一撃の下に砕いてゆく

「す、すごい迫力……」
「……目の色が、変わってますのねえ」
ただ一人、柚子に負けずとも劣らない素質を持ったほたるが、感心しながら頬に手を当てる

四人は捨丸を開放したため空っぽとなったアシゲの祭壇を抜け、奥へと突き進む
テウチの祭壇にももう鬼はおらず、倒し慣れた黒ズズ大将を葬り去りながら、ついに一族は終ノ丸を向かえた

英霊の間の奥に、ぽっかりと穴が開いていた
「……陣形は、あたいと竜子が前、ほたると月見は後列、月見、あんたはほたるを死守しなさいよ」
「任せてくださいよ！　もう前回で髪のパターンは見切りました！」
力強く胸を叩く月見が、不安でたまらない

すでに柚子を大幅に上回り、６５０もの体力を誇る竜子が前に進み出る
「朱点童子……」
宙に浮かぶけばけばしい衣装をまとった少年を見据え、竜子は拳を握り固める

もしこの男がいなければ……母と自分は人間として生まれ、生きていたかもしれないというのに……！
怒りが竜子の身を焦がす

「この者たちは正真正銘の神の遣い、本日只今から人間の王様である！　従うように！」
朱点童子（しゅてんどうじ）はそんな壬生川一族の怒りを涼やかに流し、物語をつむぐ
「ある日突然出てきたこんなご神託に、本気で従うヤツがいたとしたら、そいつの頭のほうがどうかしてる、ましてその王様ってのが、年端もゆかない女の子と、生まれて間もない赤ン坊のふたり」
話は前回の続き、神が人間の世界にちょっかいを出すため、“自分たちの子”を人間の指導者に据えることを企てたという物語だ
「だけどね、どうかしてるのが人間ってモンさ、けっこうな人間がだまされてるとも知らず、集まった」
神の言葉は、人間にとってはそれほどに影響力が強いということだろう
「黙ってられないのがときの帝、子供相手に送った兵隊、なんと十

万！……やっぱ人間ってどうかしてるよ」

「……あたいもそう思うわよ」

半神として、京の都でもてはやされ、好奇の視線にさらされ続けてきた瑞穂が、静かに同意する

「だからって何なのよあんた！　話を小出しにしてイライラするのよ！」

「アハハ、そういえば今回はあの壊し屋さんはいないんだね、ご愁傷様」

「……そんなのは関係ない」

怒気をあらわにする面々に対して、朱点童子は声を上げて笑う

「それじゃまたね……おいで、四ツ髪」

その瞬間、白骨城が揺らいだ

「わ、わわわ」

立っていられなくなった月見がその場に膝をつく

薙刀をその場に突き刺した瑞穂と、その腕にしがみつくほたる、その横で平然と直立している竜子が白銀に輝くバサラの拳を固めた

「……今回だけは、負けられない」

もしここで負けたら、柚子は安らかに眠ることができないだろう

母親の死に顔を曇らせるわけにはいかない

「私たちだけで、倒す……！」

白骨城の天守閣に敷かれた蒼い魔方陣から、見慣れたとは言え、やはり怯えるほどに大きな龍が現れる

対峙して、その巨大さと柚子がいない不安から、竜子の身に震えが走る
だが、竜子は熱い心で、叫んだ
これからの人生、負けてなどいられない

「砕く！」

全身が白骨で作られた四ツ髪を見据えながら、竜子と瑞穂が同時に詠唱を始める
「涼かさや・我に弾ける鬼の爪……岩となり・矛も剣も折れにけり……！」
「……涼かさや・我に弾ける鬼の爪……岩となり……！」
詠唱速度はすでに竜子が瑞穂をわずかに上回っていた
竜子は印を結びながら思う
柚子がいない今、この戦いは長期戦となる

四ツ髪は後列のふたりに、その長大な尾を叩きつけるが、月見は薙刀を掲げて耐えていた
「骨が、何、ですか……カルシウム足りないんじゃないですか！」
一方、一族で一番の打たれ弱さを持つほたるが、尾の一撃に少しよろめきながら＜春菜＞を唱えた
「もう、私ばかり……」
月見も＜石猿＞を唱え、こうして三回の防御術が皆にかかった

それから通常攻撃を繰り返す四ツ髪に対して、一族は着々と強化術を唱え、何度か狙われたほたるが瀕死の重傷を負ったが、すぐに竜子の＜円子＞で危機を脱し、＜梵ピン＞三回まで手順を終了させた

相変わらず暴れる四ツ髪に対して、竜子と瑞穂は自分の身を守り

ながらも支援術を無事に唱えきる
「竜子、やるじゃないの！」
「瑞穂もね」
迫りくる尾撃を瑞穂は薙刀で打ち払い、竜子は転がりながら避ける、地面に大きな亀裂が走った
「それでは、そろそろ行きますの」
「ええ」
ほたるに飛びかかる骨片を、前に立つ月見が叩き落す
「さ、やっちゃいなさい！」

ほたると竜子が、同時に神気を高めると、白骨城に少しだけ振動が響く

「……拳術最終奥義……貴公に叩き込んでやるわ……」
襲来する尾を跳躍して避け、四ツ髪のうねった体躯を駆け上りながら、竜子が拳を振るう
「――百烈拳（ひゃくれつけん）！」
加速した竜子の幻影が尾を引く
その一撃一撃が、白骨の蛇の身を砕いてゆく
暴れ、竜子を振り払った四ツ髪に、今度は三匹の水の龍が食らいついた
「連弾弓佐和（れんだんきゅう）！」

轟音を立てながら、四ツ髪が倒れてゆく
砂埃が舞い上がり、一同は勝利を確信した

「……お母さん、待っててね」
「何よ、果物なんかいなくたって、余裕じゃない！」

笑い合う竜子と瑞穂

粉塵が立ち込める天守閣に、淡い緑色の光が輝いた

「……なんですの？」

それは倒れた四ツ髪から、発せられているように見えて、その正体を見極めたときにはもう遅かった

水術＜円子＞の上をゆく、最高の完全回復術＜壱与姫＞

完全に砕かれた骨が合体し、四ツ髪は再びその身を再生した

「……この……！」

竜子は疲れた顔で歯噛みする

百烈拳は健康度を４４－５６ほど使う、奥義中の奥義、一度の戦闘で二度放つことは出来ない

「ふ、ふざけんなこの……やってやろうじゃないの！」

瑞穂が顔を真っ赤にして叫ぶ

戦いは、延長戦へともつれ込んでゆく

＜壬生川家・柚子の部屋＞

7月の終わりになっても、壬生川出陣隊は帰ってこなかった

命の灯火が燃え尽きようとする柚子の世話をしながら、イツ花は少しだけ涙ぐむ
もしかしたら、もうこのまま……

「……ん、イツ花、さん」
「当主様、お、おはようございますッ！」
イツ花は涙を見えないように拭ってから、柚子に笑顔を向ける

「家事……しなくても、良いんですか」
「私の心配はいいンですよォ、まったくもう、当主さまってば」
「でも、なんだか、悪い気がします……」
力なく、柚子が微笑む
その頬がこけていた、もう限界かもしれない
むしろ、ここまでよくもったと賞賛されるべきだろう
日毎増す苦痛に耐えながら、ただ再会だけを夢見て家族の帰還を待ち続けていたのだ

「……あの、当主さま」
「……はい」
柚子の声は、とても落ち着いていた

「当主さまに残された時間はもうわずかしかありません……」
「そう、ですね……」
真夏の部屋は、とても静かだった
柚子は諦めたように、つぶやく

「……仕方ない、ですよね、みんな」

「最後に、新当主ご指名の任、立派に果たされますよう、お願い申し上げます……」

待っていられなかったな、と柚子は思う
意識が浮遊しそうだ
目を閉じれば、いつだって飛んでゆきそうだった
柚子にどこからか、声が届く

いつも頑張ってきた柚子に、もう我慢しなくていいんだよ、とどこかで聞いたことのある声が

力斗だったか、道明だったか、その声が柚子の意識を穏やかに運ぶ

「十代目、壬生川当主は……」

柚子の唇が、わずかに動く
風に乗って届いてくる穏やかな声に被さって、「待ちなさい」という鋭い命令が柚子の耳に聞こえたような気がした

〜〜

『いつしか柚姫は、泣かなくなりました
たくさん鬼を退治して、すごく強くなり、都の平和を守るのです
命を削りながら、柚姫は都をずっと守り続けます

ずっと、ずっと』

～～

「何勝手に死のうとしてるの、この、果物……」
息を切らして、汗だくになって、瑞穂が柚子の顔を覗き込んでいた
柚子は泣きそうな顔で笑う
「やだ……瑞穂さん、ひどい顔……」
「……遠かったのよ、案外……」
遅れて、ほたるが襖を開く
「竜子様は、イツ花さんに頼んできましたの」
「え……竜子さん、どうしたの……？」
瑞穂が呆れたようにつぶやく
「あの一途バカ、百烈拳の後に飛天脚（ひてんきゃく）まで使ったのよ、死ななかっただけマシよ、月見が看病してくれるでしょ」
「そっか……みんな、無事だったんだね……」
柚子が眩しいものを見るような目でつぶやく
「……みんな、やっぱり、わたしなんかより全然強いもんね」
嬉しそうに、そして寂しそうに微笑む
「……何バカ言ってんの、あんたより強いやつなんて、早々いないわよ」
生涯で１２回の出陣をし、１３回の奥義を放ち、２本の髪を下した勇将の息が、段々と細くなる

「ううん、わたし……最期まで、弱虫だったんだ」
瑞穂が柚子の髪を撫でると、柚子は嬉しそうに目を細めた

瑞穂が、すぅっと大きく息を吸った
「……ほたる、ちょっと、あっち向いてなさい……あと、耳も塞いでいて」
「……わかりましたの」
瑞穂の言葉に、ほたるは素直に従った
柚子が怪訝そうに聞き返す
「……瑞穂さん……？」
瑞穂は柚子の手を握り締める
強く、強く
「パパがいなくなって、あんたが当主を継いだときには、もう壬生川家も終わりだと思ったわ……」
いつでも美しかったその声が、しゃがれていた
「あんた、いつだって泣いてばっかりで、自分からはなにもしようとしないで、それなのにあたいより素質が高いなんて許せなかった」
「そ、そんなぁ……」
こんな今際の際に言わなくても、と柚子は涙目で瑞穂を見上げる

「でも」

瑞穂が柚子を睨むように見た
その目の端に、光るものがあった
別涙だ

「あんたは、変わった……当主ノ指輪にふさわしい女になっていったわ……自分の命を賭けて、家族を導いていった……だから、だから……ずっと、言おうとしていたのよ……ずっと……」
「……瑞穂さん……」

瑞穂は唇を噛み締める
「柚子」
八代目当主の小さな手を胸元に抱き寄せながら、告げる
「ありがとう、柚子……あんたがいたから、あたいたちは前に進むことができたわ……だから、ありがとう」
彼女に精一杯の謝辞を

柚子はくしゃっと顔を綻ばせる
「ああ、手、暖かいよ……」
なにも感じなくなった手のひらが、まるで人肌のぬるま湯に浸けられているようだった
「瑞穂さんに、そう言ってもらえるなんて……うれしいなぁ……」
「……もう、二度と言わないわよ」
「すごく、うれしいなぁ……」
「も、もういいわよ、ほたる！」
目の端を拭いながら怒鳴る瑞穂に、こちらにやってきたほたるが微笑む
「でも、お礼は言っても、謝らない辺りが、すごく瑞穂様らしいと思いますの」

瑞穂の顔が真っ赤になった

「ちょ、ちょっとあんた！　耳塞いでなさいって言ったでしょうが！」
「でもさすがに、瑞穂様がなにをしでかすかわかりませんからね……あるいはトドメを刺して、自分が次期当主を狙うだとか、うふふ……」
「半死人にそんな真似するかぁ！」
ほたるに掴みかかる瑞穂を見て、柚子は花咲くように笑う

ああ……、と思う
わたしは、なんて幸せだったんだろう……、と

「ねえ、一生のお願い……って、今、使ってもいいかな」
「な、何よ」

それから、柚子が目を閉じる
しばらく待っていたものの、柚子はなにかを言い出そうとしなかった
安らいだような表情で眠ろうとする柚子に、思わず瑞穂が怒鳴ろうとして、ほたるに口を塞がれた

「……もう、良いではありませんか、瑞穂様」
「……最期に休みたいって？　それが一生のお願い……？　冗談じゃないわよ……！」

瑞穂が拳を握る
ふたりの前で、違うよと言うように、柚子が口元を綻ばせた……ような気がした

「短い間だったけど、ありがとう……みんなに会えて、本当によかった……」

照れたように柚子が微笑む

いたずらっ子のような表情で、柚子が告げた

「瑞穂、ほたる……本当に、ありがとう」

瑞穂とほたるは驚いたように柚子を見た
柚子に名前を呼ばれたのは、初めてで、そして最期のことだった

ふたりは互いに顔を見合わせて、少し、笑う

それから柚子は、ようやく意識を取り戻した竜子や、月見たちにも見守られ、永い眠りについた
八代目当主は涙を見せることなく、旅立ったのだった

壬生川柚子　享年1才8ヶ月

『柚姫はある日、いつも守ってくれてありがとう、と小さな女の子に感謝されました
その時です、柚姫はまるで雨のような涙をボロボロとこぼしたのでした
柚姫は弱虫ではなくなりましたが、何度も何度も、嬉しくて泣きました
柚姫はやっぱり、いつまでも泣き虫のままでしたとさ』

後に広く京の町で愛されることとなるこのお話は“柚姫物語”と呼ばれた
作者の名を、壬生川瑞穂という

四ツ髪を討ち取った！

髪は残り四本！

第九話－１８　「柚姫」　１０２５年７月（後書き）

元服→竜子　出陣・白骨城（瑞穂・ほたる・竜子・月見）
訓練・柚子→虚空　老死・柚子　四ツ髪・打倒

第九話外伝後編　「姫語」　１０２５年７月～

＜２５年４月　守護団詰め所・小屋＞

瑞穂は詰め所にやって来て、各報告に関する回答を示した後、守護団の怪我人の具合を見回ってから、自室へと戻ってきた
そして、おもむろに冊子を開く

（……昨日は、どこまで書いたんだっけか）

確か、柚子が紅蓮の祠で赤猫お夏を打倒したところまで（想像で）記したのだった
あれから１ヶ月、瑞穂はただでさえ少ない自由時間を削って、柚子の戦記を綴っていた
物語の書き方など分からないから、自分の視点から見た柚子という少女を、一切誇張せず書き続ける

とはいえ、

「……本当に面白いのかしら、これ」

読み返すと、柚子という人間が本当に弱虫で、とてもちっぽけで、すごく情けなく思えてくるような物語であった
水が苦手で、頭から水をかぶるといつも泣き出したり
子供の頃は暗いところが怖くて、夜中にひとりでトイレにいけなかったりして（結局、力斗や道明に付き添ってもらう
このままじゃただの、罵詈雑言ノートにも見える

「壬生川家の現当主の実情、こんなのでいいのかしら……」
ダメな気がする
だが、何と言ってもあの柚子だ、ノーと言えず命令すれば何でもやるあの柚子だ、どんなに美化しても英雄譚になるわけがない
（題材、間違えたかしらね……）
せめて彼女の娘・竜子なら華もあり、それなりに物語にもなるかもしれないし、先祖様にも良いお話になりそうな人はたくさんいるなぜよりにもよって柚子なのか
（一番、年が近いから……？）
確かに、書きやすさではナンバーワンだろう
何から何まで知り尽くしている
得体の知れない妹・ほたるではこうもいかない
決して仲が良いわけではないが、からかったり無理難題を押し付ければ、暇つぶしにもなる
あとは……そう、最近、少しだけ、格好良い
仕方なくお菓子を摘まみながらも、黙々と手を動かす瑞穂に、声がかけられた
「お母さん！　皆様に挨拶してきました！」
今月、京都に行く瑞穂に同行してきた未来の復興頭、月見である
その両脇に、ぐったりとした顔の大人が二名、鉄衛門と由一だ
「いやあ、元気な嬢ちゃんなこって」
「やれやれだ……」
「ん、子守ご苦労さん」
瑞穂の前で月見が、興奮した面持ちで言う

「いやあすごいですね！　皆様勤勉で、何だかボクまで誇らしくなってきます！　真面目であるということは、何て素晴らしいんでしょう！」

きらきらとお星様を飛ばしながら、両手を組み合わせる月見を、疲れたように見守る大人が三人

「瑞穂の嬢ちゃん、将来は大物になりそうだな……」

「えー、こいつがぁ？」

「ちょっと、こいつって何ですか、こいつって！」

がるると牙を剥く月見を、瑞穂は面倒臭そうにあしらう

「そうだ鉄、月見に京の都と、その巡回ルートを案内にしてやってよ、今から行くんでしょ？」

鉄衛門は苦笑する

「あ、ああ、まあ良いぜ、お嬢ちゃんがいりゃ百人力だしな」

「あたい、きょう薙刀持ってきてないから、月見に一番堅い薙刀持たせてやって」

「一番堅い？　長さはどうでも良いのか？」

尋ねる由一に、瑞穂は再び紙面に向かい合いながら、適当につぶやく

「すぐ折れんのよ、そこらの薙刀だと……」

「そ、そうか、分かった」

「よし、それじゃ京都の治安維持活動ですね！　楽しみです！」

鉄衛門が再び月見を連れて、守護団の詰め所へと戻ってゆく

残った由一が、瑞穂の手元を覗き込んで、尋ねてくる

「って小町、何やってんのかと思ったら、それ、何だぁ？」

「ああこれ？　あたいが書く、壬生川家の実情、一大怪物戦記よ」

「何ぃ！？」

由一は瑞穂の手から著書をひったくると、ぺらぺらとめくり出す

「つか、あんた字読めたのね」
「ああ、汚いが何とかな、だが“け”と“も”が難しい」
「うっさいわね」

瑞穂の前、頁を開くたびに由一の身体が震え出す、一体どうしたことか

「な、何よ……？」
「いやあ」
短い時間で何度も読み返し、由一はようやく口を開いた
「面白ぇな、これ、実物は本当に居るのか？」
「あ、うん、一応壬生川家の当主よ、まんまだけどね」
「そうか……にしても、犬とか、M当主って……」
「まんまよ」

しばらく顎に手を当てて、由一は散らかった部屋の中を見回し、それからうなずく

「よし、これちょっと貸してくれないか？」
「え、ええ？　何すんのよ……ていうか書きかけなんだけど」
「なーに、悪いようにはしねえって、あ、続きはもちろん書いてくれよな、俺ちょっと行くところが出来たんで、しめしめ」
それだけ残して、由一は急いで小屋から出てゆく

仕事を取られて、今どきしめしめて、と瑞穂は口を尖らせる
「何なのよ、もう……」
仕方ないので、小屋を出て、瑞穂は近くの和菓子屋へと復興支援（大人買い）に行こうとして、ふと空を見上げた

日が沈みつつある秋空に、花火が舞った

「救難信号！」
それは天に向かって打ち出された、京都守護団の、信号弾であった
貞光が壬生川家にもたらした発明品はいくつかあり、そのうちの一つがこの、簡易式携帯型単弾大筒“子筒”である
その携帯性の高さと、独特の発砲音、絹雲にも似た軌跡を引くことにより、瑞穂が正式採用して、緊急信号用にと京都守護団の全員に配布したものだ
瑞穂は駆けながら、薙刀を持ってこなかったことを今更悔やむ
（……信号弾の放たれた場所は、恐らく桜もちノ田近辺ね……）
唯一の幸運があれば、それは鉄衛門と月見がその周辺を警戒しに見回っている時間帯であったことだ
守護団詰め所にいた人員には待機を命じ、瑞穂はたったひとりで京を駆ける
人外の脚力を活かして屋根から屋根へと飛び移り、小袖を翻して、瑞穂は京の外れ、空き地に作られた田の前に着地した
「うお、瑞穂！？」
眼前には、あわや下敷きになるところの鉄衛門がいた
「……鉄？　え、もしかしてあれ、鉄の子筒？」
「ああ、いや、やったンは俺じゃないが……」
瑞穂は怪訝そうな顔で、桜もちノ田を見つめた
春前に苗床、肥料にあぜ作りなどを整える大事な時期であり、大量の苗を作ったばかりだというのに
田はまっさらだった

「……」

苗を植えた形跡すらなく、ただなだらかなあぜが水に漬かり、真っ直ぐに引かれていた

その近くには、京都守護団の団員である三人が血を流して倒れていた、いずれも今まで生き延びてきた強者揃いであるが、抵抗した後はない

「鬼ですよ、きっと鬼の襲来ですよ！」

そう言って薙刀を構える月見の傍には、子筒が落ちていた、おそらく早まって信号弾を打ち上げたのは月見の仕業だろう

「まだ息はあンな」

鉄衛門は守護団の面々の状態を確かめ、安堵の息をつく

「……そりゃー、殺したりはしないでしょうよ、月見、これは鬼の所業じゃないわよ」

「え、何を言うんですか！　現に守護団の方が倒れているんですよ！？」

鉄衛門はもう気づいているだろう

瑞穂は奥歯を噛みながら、苗床の残らず消え去った田を見て、拳を握った

犯人は知れている、だから、瑞穂にはどうすることも出来なかった

瑞穂は人間の業を甘く見ていた

その日から17の田畑は、昼夜を問わずに盗難、酷いところでは襲撃すら受けた

鬼ではない、盗賊、傭兵崩れ、それに自分たちが守る存在である町人たちの、飢えからくる死に物狂いの強盗である
とてもではないが、守護団にそれらを追い返しきることなど、不可能であった

それから数ヶ月の出来事は、瑞穂にとってはまるで悪夢のような現実であった

作物を作れば作るほど、本来配るはずであった対象に奪われ、数の少ない守護団では全ての田畑を確保することが出来ず、弱くて貧しい女子供は飢える一方であった
守護団の士気は落ちに落ちた、何しろ守るべき相手が襲ってくるのだ
季節を待てば、収穫し、分配し、翌年に繋げられる肥えた土壌がまた出来上がるというのに
瑞穂も表に出すことはないが、内心でははらわたが煮えくり返るような怒りと幻滅に爆発してしまいそうだった

いわく、人間は、自分の事しか考えない

今までの京都復興頭が、瑞穂のように食料を自足することを良しとしなかったのは、こうなることを見通していたのかもしれない
先見の甘さが浮き彫りになり、京都の治安は再び荒れ、そして守護団の意気は下がった
そしてついに、最悪の事態が起きた

四月の終わり、死人が出た
畑を守ろうとして、たったひとりで寝ずの番をしていた男が、町人ら十数人に殴殺されたのだ

男の名は、毘沙門会の鉄衛門と言った

犯人も捕まらず、集まってくれた団員一同に頭を下げる喪主を遠くから眺めながら、瑞穂は葬式場の端っこで腕組みをしてつぶやいた

「……あたいは、もう、どうすればいいのさ……」

自分は無力で、人間が憎かった

＜25年5月　壬生川家＞

そんな折、意外な出来事があった

柚子が髪退治を提案してきたのだ

失意の底にいた瑞穂は、全ての元凶が朱点童子であることを再認し、その案を受け入れる

不思議と、自分が暗闇に沈むたびに、柚子が力強く、輝いて見えていた

瑞穂は合間を縫って、何かに突き動かされるように、柚子の物語を書き続けた、なぜだか、そのたびに心の奥が強くなっていける気がした

その頃にはもう、認めざるを得なかった

柚子は壬生川家にとっても自分にとっても、間違いなく必要な存在になっていたことに、改めて瑞穂は気づく

髪相手に門陣を挑む時になっても、瑞穂にはもう恐れはなかった

自分にとってはもう、柚子しかいなかったのだ

その月、壬生川家は見事に髪を打倒せしめた

＜２５年６月　守護団詰め所＞

さらに団員が減り、怪我人も増え続けた守護団にて、瑞穂の部屋を訪れる男がいた
「あ、小町、いたいた、最近見ないから心配してたぜー」
由一だ
「ええ、ちょっと髪切りにいってたのよ」
振り返らずに、机に向かいながら瑞穂が返事をする
「ふーん、髪型変わったようには見えないが、まあどうでもいいな、これよこれ」

由一は瑞穂の前に、見覚えのある本を置く
それは、以前に由一が瑞穂の下から持ち出した、柚子の物語の序章であった

「そういえば、すっかり忘れていたわね……」
「おいおい、しっかりしろよ小町、団長はお前なんだから、朝メシ食って起きとけよ？」
「分かってるわよ……」
だが、詰め所に来れば否応にも鉄衛門のことを思い出し、気分は暗くなる
守ろうとしてた人間を傷つけられず、結局は抵抗せずに殺された愚かな鉄衛門が、悔しくて仕方なかった
そんな人間は殺して、鉄衛門が生き残ればよかったのに

「顔、怖いぞ」
「……悪かったわね」
深いため息をつきながら、瑞穂は筆を置き、顔全体を揉む
「それでな、その物語、出家したオヤジに見せてきたらアホほど気に入ってな、京全体に発行することになったぜ」
「……は？」
「手始めに公家、その後、文字を読めない人たちのために、お伽草子みたいな簡略化した唄を、市中のあちこちで広めるんだ、これは良いぞ」
「いやちょっと待って、由一、あんた……？」
突然のことで戸惑う瑞穂の手元から、書きかけの物語を由一は取り上げる
「お、もう最近のまで出来ているじゃねえか、いやあすごいよな、半神で手の届かない存在だと思っていた壬生川家が、まさか、あんな……」
肩を震わせて、由一が笑いを噛み殺す
「……由一、あんた、確か元公家の人間だったわよね、伏見道場継ぐ前の名前って」
「藤原」
言うまでもない、壬生川家と両雄を担う、都の最高権力者の一族だ
藤原由一は、まだ事情を飲み込めてない瑞穂に、にやりと笑いかける
「これは、ベストセラーになるぞ」
かくして、柚子のお話改め柚姫物語は、このようにして世にお目見えしたのであった

短命の呪いを受けた神族・壬生川家の風俗習慣を余すところなく克明に書き綴った柚姫物語は、公家に価値のある芸術作品として珍重されただけでなく、いわば日本では初となる、親しみやすく可愛らしい主人公によるキャラクター小説として、庶民にも広く知れ渡った

英雄譚であり、思春期の少女の在り方を描いた成長記であり、また浮世離れしたお伽話でもある“柚姫物語”は、ついには時の帝の耳にまで届いた

＜２５年７月　王宮＞

瑞穂はまったく訳が分からなかった

なぜ自分がここにいるのか、なぜ柚姫物語がこんなにもヒットしたのか、なぜ柚子がこんなにみんなに愛されるのか

最後の疑問だけは、答えが言えそうな気はしていたが

案内されるがままに平安京の中を進み、気が付いた時には瑞穂の前には帝がいた

（……何だか、緊張するわね……）

礼式に則って、瑞穂はその場にひざまずく

帝の態度は、一武家に対するものとしては、極めて丁重であり、彼は壬生川一族に惜しみのない感謝の念を、雅な言葉と共に告げて

きた

「……は、はあ」

今更そのようなことを言われても困るが、相手は偉い人なので、瑞穂は適当にうなずく

とても若く温厚そうな帝は、さらには柚姫物語の主人公でもある、柚子に会ってみたいという要望を瑞穂に頼み込み、貴族に慌てて止められていた

帝が武家の娘に頭を下げるなど、あってはならないことである

その願いに、瑞穂は首を振った

「出来ません」

前代未聞であった

「彼女はもう、外に出られるような身体ではありません、あの子は今まで、本当によく戦ってきました」

瑞穂は帝に対して、そう言い切った

もし連れてきたのなら、公家たちの私兵や検非違使を守護団の指揮下に置いても良いと条件を出されても、瑞穂は断固として良しとせず、宮廷を後にした

壬生川の屋敷に戻った瑞穂が見たのは、使者からの手紙を読み終え、行くと言ってきかない柚子の姿だった

＜京の都の帰り＞

7月の頭の出来事だった
「まったく……どうして屋敷で寝てないのよあんた、あたい一人で十分だって言ったのに」
「ご、ごめんなさい……」
夏色に輝く木漏れ日を浴びながら、瑞穂が悪びれる柚子に娘を叱る母親のような表情を見せる

ふたりは、時の帝との謁見を済ませて、屋敷に帰る途中であった

「大体、御車も断るなんて、どういうつもりなのよ、あんた自分の身体のこと分かってんの？」
「だって、歩いていたかったんだもん……」
首の後ろで結んだ包帯で、両腕を吊っている柚子は、屈託のない笑みを浮かべる

「夏の風って、気持ち良いね、何だか元気になってきそう」
普段より顔色がよく見える柚子に、瑞穂が口の端を上げてつぶやく
「柚の花は大半が6月に散るのよね」
「う、うぅ……瑞穂さんの意地悪……」
「何を今更、てか、あんたMなんだから喜びなさいよ」
じゃれてくる子犬を振り払うように、瑞穂が肩をすくめる

「Mじゃないって言っているのにぃ……そ、それにしても、どうしたんだろうね、帝さんは、わたしたちと一回話してみたかった、なんて」
その理由を本当は瑞穂は知っていた、だが、視線を逸らす
柚子には隠しておきたかった、それが、自分にとってのプライドだった
自分と柚子はライバルなのだから
「選考試合で、前から気になってたって言ってたわね、でもこんな

犬当主が珍しいのかしらね」
「うぅ……また話を戻すぅ……」
怪我人に対しても容赦ない毒舌を発揮する瑞穂に、柚子が唇を尖らせる

そんな街道を歩く騒がしい二人の元に、どこからか青い実が転がってきた
「あ、瑞穂さん、瑞穂さん、あれあれ」
「あたいはあんたの腕じゃないんだけど……」
瑞穂は小石大の実を拾い上げる、眼前に掲げると、柑橘系の良い香りがした
「ありゃ、夏ゆずじゃない、今年は早いわね、うちの当主の生まれ変わりかしら」
「ま、まだ生きてるよ！」
夏ゆずの小さな実の向こう側に、日焼けした農民の少女が見えた

「ん？」
瑞穂はもしかして、と気づく
「あ、これあなたのかな？」
自然な笑顔を見せる柚子に、少女は少しだけ怖気づく
怖いものに遭遇したような怯えた目で、柚子たちを見る
「あ……そっか、そうだよね」
柚子の笑顔が、少しだけ寂しそうなものに変わった
「まあ、あたいたちは壬生川一族だしねえ」

かつて自分が何の疑いもなく、守ろうと決めていた人間であったしかし、今の瑞穂にはもう、何が正しいのか何が善なのか、分からないでいた
そんな瑞穂がそっけない態度で、少女に向かって青い実を放る
少女は受け止めきれずに、地面を転がってゆくゆずを追いかけ拾

い上げて、それからこちらを振り返った

「それじゃね、来年もいっぱい実るといいね」
無邪気に微笑む柚子に向かって、意を決したように少女は走り寄ってきた

「これ、あげる！」

差し出されたゆずを見つめて、柚子は目を丸くする
瑞穂もまさかと思う、外見の記述はしたが、まさか柚姫がこの目の前の本人だと分かるはずがない
「え、ええっと……」
「……もらってあげなさいよ」
少女の熱心な目に、つい瑞穂が助け舟を出してしまう
「え、で、でも手が」
柚子の両腕は吊り上げられている
少女はその包帯の隙間に、ゆずを押し付けた

「あげる！」

「あ、うん、あ、あの、ありがとう」
戸惑う柚子に、少女は頭を下げ、叫ぶように甲高く言う

「ありがとう、柚姫様！」
瑞穂の心に、波が起きた

少女は頬を真っ赤にして、あっという間に去ってゆく少女の後姿を、思わず見つめる
「柚姫様て……」
今まで京都を守ってくれてありがとうなのか、自分たちの町を救

おうとしてくれてありがとうなのか、あるいは言葉自体にそう意味などないのかもしれないが

瑞穂は、今の今まで忘れていた
自分が守ろうとしていたものは、何だったのか

「な、何で、わたしのこと、知っているのかなあ……」
知っていたはずだ、当たり前のことだった
人間はとても弱く業が深い、だがそれだけでは、ないことも
「……まあ、落とすと困るし、あたいが持っててあげるけど……って、何で果物泣いてるの！？」
思わず瑞穂は大声を上げた、ついつい笑ってしまっていた

え、と柚子は顔を上げる

「な、な、泣いてないもん、泣き虫はもう卒業したよ！（；д；）」
「思いっきり泣いているじゃないの！」
今までまるで無くしていたような心が、柚子を見て戻ってきたのだ
「あ、う、うぅ……うぅう……」
涙を隠すことが出来ない柚子が、そのまま唇を震わせて、泣き続ける

「だ、だって……嬉しくて、泣くなんて……初めて、だもん……あ、ああっ、ダメっ、ゆずはわたしが持つぅ！」
子供のように駄々をこねる柚子に、瑞穂が苦笑を漏らす

「あんた……落とすでしょ……」
「お、落とさないよっ！」

純粋で、無垢な少女を見て、瑞穂はようやく思い出した

人間は優しくて、温かくて、そして、健気なのだった

瑞穂はその後も、作物を育て続ける旨を守護団の皆に告げ、新たに仲間に加わった公家の私兵や検非違使の中の精鋭と共に、これからも京を守り続ける事を改めて誓うのであった

翌年に収穫された芋類等、食料の盗難が極めて少なかったのは、もしかしたらこれも柚姫物語がくれた、勇気の産物なのかもしれない

なお、鉄衛門を殴殺するよう町人を先導したと思わしき、きらびやかな羽衣をまとった元服前と思われる少年の行方は、未だに知られていない

これは、瑞穂の知るところではない物語

第十話－1　「格別」　１０２５年８月前編（前書き）

瑞穂　１才７ヶ月
ほたる　１才４ヶ月
竜子　９ヶ月

月見　６ヶ月
虚空　２ヶ月

第十話－1　「格別」　１０２５年８月前編

＜真夏の壬生川家＞

一際暑い夏の真昼、ほたるの当主就任の儀が、つつがなく行われた
先月、柚子(ゆずこ)が死せると同時にその指から外れ落ちた当主の指輪を
受け継いだのは、ほたるであった
十代目当主となったほたるが、壬生川(みぶがわ)家の居間に座していた

「十代目、当主……」
ほたるは自らの指にはめられた、死ぬまで外れることのない加護
の指輪を撫でる
「こんなに綺麗ですのに、悲しい装飾品なのですよねえ」

「でも意外だったわ」
居間で独り言をつぶやいていたほたるの元に、水浴びから戻って
きた竜子(たつこ)が髪を拭きながら、顔を見せる
「あらおかえりなさい、竜子さん」
「まさか、貴方が当主を受け継ぐなんてね」
「そうでしょうか？」
竜子はすっかり、自分が次の当主になるのだろうと思っていたのだ
しかし、ほたるは仮にも柚子に並ぶとも劣らない戦果を誇る、香(きょ)
家(うけ)過去最強の弓使い
そのほたるが当主になることに異存はなかった
「でもそういえば確かに、瑞穂(みずほ)様にも言われましたの、ついに壬生

川家の影の当主が表舞台に!?　って」
　どうやらほたるにも、その自覚はあるようだ
「……当主になっても、相変わらず」
「うふふ」
　ほたるが微笑みながら、竜子の頭を撫でようとするが、竜子はそれを一歩引いて避ける
「何」
「よしよしして差し上げようかと」
「やめて、子ども扱いしないで」
　ツンと横を向く竜子に、ほたるが口を尖らせる
「あら……先月は、あんなに可愛らしかったのに」
「……」
　竜子はそのまま無言で、自分の部屋の方へと立ち去ってゆく

　残されたほたるは、うーんと頬に手を当てる
「年頃の女の子の扱いって、難しいですのねえ」
　悩む1才4ヶ月の当主に、用事を思い出して戻ってきた竜子が、居間に顔だけ出して告げる
「そう、当主様、私来月交神致しますから」
「あらまあ」
　手をポンと合わせて、ほたるは顔を輝かせる
「良いですの、その当主様、って……もう一度、おっしゃってもらえません?」
「……私に足りない遺伝子を持った神、“光無ノ刑人”に決めたから、それじゃ」
　ほたるのお願いも華麗にスルーして、竜子は部屋に帰ってゆくむう、とほたるは少し拗ねていたが、それでもしばらく経つと、徐々に顔には笑顔が戻ってきた

「……私の周りにも、頼れるお方がいっぱいるみたいですね、あり

がとうございます」
ほたるはそうして、抱いた柚子人形（まだ持っていた）に向かって微笑みかけるのであった

＜道場＞

月見（つきみ）と虚空（こくう）は、犬猿の仲であった

屋敷で顔を合わせれば、月見がまず突っかかり、そして虚空が反発し、たちまち口喧嘩に発展する
具体的には、廊下ですれ違う際にどちらも避けず肩がぶつかり、月見が「年少者が譲るべきではありませんか！？」と言いがかりをつけ、その言葉を虚空が「度量の狭い女じゃのう」と鼻で笑い、そういった具合でたちまち喧嘩が巻き起こる

両者ともはっきり言えば短気のため、ふたりはいつまで経っても蝸牛角上の争いを続けていた
例えば八月の初旬、選考試合を間近に控え、月見が道場で薙刀を振っていた昼の話――

「は……ハァ、やっ、えぇい！」
代々続く臥家（がけ）でも珍しく背丈の小さな月見は、薙刀術の扱いが一向に上達しなかった
それでも、人一倍の努力家である月見は術の訓練だけに逃げることなく、ただ黙々と日々を薙刀の修行に費やしていた

真面目にやれば報われる、は彼女の性分であった

何時間も占拠していた道場に、足音が近づいてくるが、一心不乱に汗を流す月見は気づかない

「なんじゃ、まだやっておったのか」

道場に入ってきた虚空の小さな声に、月見の耳がぴんと反応する

「何ですか！　まだまだ道場は空いているじゃありませんか！」

月見の言う通り、壬生川家の稽古場は、軽く家族全員が稽古できるくらいの大きさである

「じゃがな、余の槍の真価を試すには、他に人がいてもらっては困るのじゃ」

「後から来て何ですかその言い草は！　大体、あなたが槍の稽古をしているところなんて、一回も見た、こ、と……」

虚空に怒鳴る月見の声が、尻すぼみになってゆく

月見は汗に濡れた顔を、肩にかけた手ぬぐいで拭くと、再び虚空を見る

それはそれはとても可愛くて、愛嬌のある顔立ちをしていた

「ね、猫……！？」

「ン？」

虚空の頭の上にひっついていた黒猫が、ミャーンと一声鳴いた

猫は座布団のように虚空の頭上に座り込んでいて、なかなかシュールな光景である

まるで引き寄せられるように、月見はふらふらと猫に近づく

「ね、猫じゃないですか、どうして、どうしてコクワガタさん……ま、まさか、食用に！？」

「余はそのようなものは食わぬよ、下賤な」

いつもの虚空の毒舌も、黒猫に魅了されている月見にはあまり効力を発揮しない

「猫は愛いからな、イツ花が振り回していたのを余が引き取ったの

じゃ」

「し、信じられない……コクワガタさんに、猫を、いや、動物を可愛いと思う心があるだなんて……！」

月見が虚空の頭に手を伸ばすが、黒猫はその手を見るなり、ぷいとそっぽを向いてしまう

「う……」

「何かを誤解しておるな、余は猫を可愛いなどと思った事は一度もありはしない」

「じゃ、じゃあ何で自分だけ猫に好かれているんですか！　ずるい！　猫泥棒！」

「……余は、猫の生き方そのものに尊敬の念を抱いておる、集団でなければ生きられない動物がこの世には多い、犬だけではない、人間や鬼すらもそうじゃな」

虚空の語る言葉に、なぜか頭の上の猫までうんうんとうなずいていた

「じゃが猫は異なる、単独で生息し、あらゆる肉を食らうのじゃ、それに脚が速く、木を登り、泳ぐことすら出来る、余ですら一人で生きてはいけぬが、猫にはそれが出来る」

人間は人間、猫は猫だろうと、月見は猫に見とれながら思う

「まあそなたには、分からぬ話だろうがな」

「わ、分かりますとも！　ボクは戦術家を目指しているんですから！　そうですよね、猫って凄いですよね、可愛いんですもの！」

「……そなたは、無知浅学じゃのう」

頭の上の猫まで、ため息をついたように思った

「あなたが変な話するのがいけないんじゃないですか！　何が“あらゆる肉を食らう”ですか！」

髪の毛を逆立たせて怒る月見を、虚空は上から下まで眺める

その挙動に、月見はなぜか無意識に胸元を押さえながら後退する
「な、何ですか……！」
「そなたの頭には、何が入っておるのじゃ、マタタビか阿呆が」
「な、何ですってー！」

虚空はおもむろに、月見の腕を掴む
月見の脳裏に忌まわしき記憶が蘇った
「きゃーーー！」
「な、何じゃ！」
至近距離で悲鳴を浴びて、練習用薙刀を掴んだ虚空が仰け反る
月見は、はっと我に返る
「え、ちょっと、あれ、薙刀……？」
「重心が合っておらぬのじゃ」
虚空はポキリと薙刀の柄の先端部を少しだけ折り、それを月見に返した
「頭を使え、そなたの学んだ薙刀術は、体格に恵まれた輩が作り出したものじゃろう、無理な動き、無駄に長い薙刀のせいで余計な隙が生まれておる」
「え、えええ、えええ！？」

確かに虚空の言う通り、現在壬生川家で使っている薙刀士の指南書は、かつての臥家である蘭（らん）と道明（みちあき）が改良したものであった
なぜ一目見ただけでそれが分かったのか、月見は驚くを通り越して何だか悔しくなってきた
「な、何でコクワガタさんが、そんなの知っているんですか！　ロクに稽古もしてないくせにっ！」
「稽古はしておる、勘違いすな」
月見の言葉を、虚空はすっぱり切り捨てる

そうして、静かに語りだす
「三代目当主、初子（はつこ）という者がおった、その者は、古めいた槍指南の原書を解読し、独自に改め、現在に至る槍使いの礎を築いたという、知っておるじゃろうな？」
「も、もちろんですよ！」
そこまで凄い人だとは、知らなかった
「では、その偉業を達成したのが、まだ2ヶ月才になったばかりの小娘だということも、知っておったのじゃな」
「……え、ええ、もちろん」
月見の語尾が小さくなった
「余の一ヶ月年下よ……未だにあれほどの偉才は、壬生川家には出ておらぬ」
そういえばと月見は思い出す、戦記で見知り、月見の尊敬する薙刀士・蘭ですら、5ヶ月年上の彼女に何一つ勝てたことはなかったのだと
「余は三代目の才知を超え、過去も含めた壬生川家の頂点に立つ……そのためには、当主の座はしばし無用じゃ、カカカ」
面白そうな遊びを発見したと、笑う虚空の上で、黒猫が得意げに鳴いた

そこで、部屋に帰ろうと背を向ける虚空を、月見が呼び止めた
「あ、ちょっと、コクワガタ、さん」
「何じゃ、稽古を終える気になったか」
虚空と猫に睨まれて、月見は戻ってきた怒りの感情と共に、尋ねる
「違います！　じゃあ、これで慣れたら、奥津ノ薙刀の柄も折れば良いんですね……って、あれはお母さんも使うんでした」
「……良いじゃろう」
「え？」
反射的に聞き返す月見に、虚空が再びつぶやく
「あれはもう、そなたの物じゃ」

虚空のいつもの冷たい声が、道場に響いた
黒猫が被さるように、低く鳴いた

＜京都守護団・詰め所＞

稽古場代わりに使っている寝所の奥、客間において、瑞穂は使者と向き合っていた
公家から参ったような、ご機嫌伺いの使用人ではない
それは、かの帝からの使者であった

「……守護団の全権を譲れとは、大きく出たわね」
使者「……」
親書は帝の名ではあるが、筆跡は帝のものではない
瑞穂はその奇妙な文に、ひとつだけ心当たりがあった
ついに帰ってきたのだろう、地方に棲みつく祟り神の群れを討伐してきた、かの京都最強の武士衆が
庶民に慕われてた柚子が亡くなった直後の事だ、タイミングが良すぎる
帝の名義で送られたその手紙は、武士衆がすでに帝をも掌握しているという、確固たる証拠であった

「パパなら、悩みながらも譲ったでしょうね、月見が今の復興頭だったら、喜んで譲渡したかもしれないわ」
瑞穂は手紙を畳み、机の上にゆっくりと置く
そして、使者に告げた
「でもあたいは残念ながら、会ったこともない人に仲間の命を預けられない、それに、壬生川一族よりも上手に出来るのなら、それを

証明してほしいわ」

その後、瑞穂がしたためた手紙は、以下のような内容であった

“最も武勇に長けた衆こそが、京都守護団に相応しいと思われる
ならばこそ御前試合にて、自分たちを破る事が出来れば、その時は全権を委任する”

相手の武家衆は、この瑞穂の申し出を二つ返事で承諾したという
こうして、壬生川家当主の知らないところで、京都の命運が密かに賭けられたのであった

第十話－2　「軽蔑」　１０２５年８月中編

＜ほたるの部屋＞

選考試合の前日、ほたるの部屋には瑞穂（みずほ）が訪れていた

１才７ヵ月でありながらいまだに若く瑞々しい瑞穂は、腕組みをしたまま難しい顔で、向かい合ったほたるにつぶやく

「ていうわけなんだけど、あたいは出場できないから」

「そうですかぁ……困りましたのねぇ」

「あんたの息子がいるでしょうが、それで四人ぴったりでしょ」

「そうなんですけどねぇ……」

頬に手を当てて苦笑するほたる

虚空（こくう）の才能の見定めがつかなかったのは、ほたるも瑞穂も同様だ

月見（つきみ）や竜子（たつこ）の実力ならある程度知れているが、滅多に稽古もせず家に篭っている虚空の素養は、計り知れない

「あたい、またすぐ戻らなきゃいけないからさ、今のうちに色々頼んでも良い？」

「ええ、構いませんの」

京都復興頭と壬生川（みぶがわ）家当主が、まるで腹の内を探るように微笑みあう

そこで、ほたるの部屋の戸が開いた

「あら？」

ほたるが向くと、そこには書物を片手に竜子が立っていた

「……ん」
竜子はヨウと手を挙げる瑞穂を見て、再び戸に手をかけた
「取り込み中みたいね……私の用事は大した事ないから、また後で来るわ」
「あ、悪いわね、えっと」
瑞穂が何かを言う前に、竜子はさっさと行ってしまう

ほたるがぽつりとつぶやく
「竜子さんは、しっかりしてらっしゃいますのねぇ……」
皮肉でもなんでもなく、心からそう思う
「本当ねぇ……何よあいつ、すっかり貫禄出しちゃって……何か腹立つわね、誰が育てたと思っているんだか」
口では毒を吐きながらも、瑞穂は笑っていた
しかし、続く足跡によって、その笑顔が固まる

ガタガタッと音を立てて戸を開けたのは、月見だった
「あ、本当に来てましたね！　お母さん！」
「……それに対して、こいつは」
思わず頭を抱えてしまう
「あら、どうしたんですの、月見さん」
「だって、最近全然お母さん帰ってこないんですから！　何しているんですか、もう、子を放っておくなんてどんな親ですか！」
きゃんきゃん喚く月見に、瑞穂が手を振る
「ああうるさいわね、もう、あたいは今壬生川の当主さんと大事な話してるんだから、あっちいってなさい」
「ボ、ボクの話は、大したことないって言うんですか！？」
「時と場合をわきまえなさい、って言ってるのよ、あんたはいつまで経っても成長しないんだから」
「してます！　お母さんがボクを見てないだけです！」
「もう、何でもいいから、あっちいってなさいよ……」

ため息をつく瑞穂に、月見が下唇を噛む

「……なんで、ボクじゃ」

「ん？」

聞き返す瑞穂に、月見は猛烈な勢いで怒鳴った

「ばか！　ばかばかばか！　お母さんなんて、京都で勝手に死んじゃえば良いんです！」

叩き壊すような勢いで、戸を思いっきり閉めて、月見は出てゆく

舌打ちして、額に手を当ててうつむく瑞穂に、ほたるが尋ねる

「……よろしかったんですの？」

「別に、大したことじゃないわよ」

「でも瑞穂さん、お体の方も、もうすぐでは」

「……そんなことないわよ、あたいには月見より大事な事があるって、それだけだもの」

あの子もいつか分かってくれる、とは思わなかった

分かって欲しいと願うのは、子を放った母親としての甘えのような気がして

そっぽを向く瑞穂に、ほたるはそれ以上追求しなかった

瑞穂はこの日も壬生川家に泊まることなく、すぐに京都に戻っていったのだった

＜選考試合当日＞

こうして、ついに選考試合の当日が、曇り空と共にやってきた

「朝ですのよ」

壬生川家当主ほたるが、いつも通りの笑顔で息子を揺り起こす
「……うむ」
頭を押さえながら、虚空がゆっくりと起き上がる
朝が弱いのか、雀鳴く庭に、ぼんやりとした目を向けていた
「良い朝ですの、うふ」
「……うむ」
虚空の返事は遠い
「虚空さん、昨夜も夜更かししてましたのね？」
「……うむ」
ここぞとばかりに、ほたるがささやく
「本日は選考試合ですのよ、虚空さんももちろん出陣なさいますのよね？」
「……うむ」
「うふふ、ご期待してますの」
「……うむ」
ほたるは虚空の肩を優しく撫でると、再び部屋から出てゆく

その空いた戸の隙間から、一匹の黒猫が入り込み、虚空の膝の上に近寄ると、一声にゃーと鳴く
しばらくしてから、虚空は気がついた
「……うむ？」
膝で遊ぶ猫を見下ろしながら、虚空は自分が何だか不用意な一言を漏らしてしまったような気がしていた

＜玄関にて＞

不本意ながら予想していた通りであり、やはり驚かれた

「ええー！　出るんですかコクワガタさん、選考試合に！」

「……うむ」

出陣準備を整えて玄関に向かうと、先に支度を済ませていた月見に大声を浴びせられ、虚空は静かにうなずいた

「どうして！　何で！」

六代目当主の墓から引っこ抜いてきた桃木の槍を持ったまま黙り込む虚空に、月見が不審そうに眉を潜める

「……もしかして、ようやく極楽浄土に行きたいと思ったんですか？　今さら改心しても無駄だと思いますけど」

黙っていれば、酷い事を言う

「死後の世界など、興味はない」

「じゃあどうして……ハッ、次期当主になるための、ポイント稼ぎ!?　意地汚い！」

「……そなたは、まことに救いようがないのう」

虚空がため息をつき、月見が髪を逆立たせたところで、玄関に穏やかな声が届いた

「あらあら、おふたりとも早いですのねぇ」

「遅れたわね」

壬生川家の両美人が場に見えると、八月の熱気も和らいでゆくようだ

月見が竜子の腕を取って、若干甘えを含んだ声色で語りかける

「だってお姉様！　この人が選考試合に参加するだなんて、絶対何かたくらんでいるに違いないじゃないですか！」

「……暑いから」

従弟をさんざんこけ下ろす月見に、密着されている竜子が視線を逸らす

「もう良かろう、きょう一日という条件で余は同行を認めたのじゃ、第一人間相手では、余の槍術は十分な実力を発揮出来んからの」
そうつぶやく虚空に、ほたるがニコニコと微笑む
「うふふ、そうですのね、約束ですものね」
「約束……何ですか、もしかして！　やっぱり、次期当主の座ですか！？」
「暑いってば」
竜子の腕を振り回す月見に、ほたるが違いますよと手を振る
「それがですね、うふふ……」
ほたるが月見の耳元に口を近づける
「え、え……え、ええ……！」
その衝撃の内容に、月見の縛って上げてある髪も少しずつ垂れてゆく
「……行かないってごねてたら、もう朝起こしてあげないよ、ってほたる様に言われて……？」
「……何じゃ」
「……コクワガタさん、毎朝ママに起こされているんだ……」
「まだ、余は3ヶ月じゃからな」
「……キモいです」
「……」
黙りこむ虚空を置いて、女性たちがずんずんと先にゆく

選考試合はこうして、弓使いほたるを中心とした女性陣、拳法家竜子、薙刀士月見、そして、初となる虚空が加わり、様々な思惑が絡み合う京の都へと出陣してゆくのだった

＜京の都・瑞穂＞

瑞穂は相変わらず詰め所にて、黙々と毎日の報告書に目を通し、
日々悪くなる京の都の現状に頭を抱えている真っ最中であった

部屋の中にいた男――由一が、瑞穂に声をかける
「なぁ小町」
「何よ、今忙しいのよ」
顔も上げずに瑞穂が答える、どうしても人手が足りない
「お前、選考試合行かなくていいの？　今回負けると、お前たち守護団に関われなくなんだろ？」
「そうねえ……まぁ、でも、なるようになるでしょ」
瑞穂は選考試合の使者からの話を、前もって守護団の格隊長たちには話を伝えておいたのだった
由一は報告書に目を通す瑞穂の横顔をじっと見つめていた。
「何よ」
「いーや別に……」
そんな煮え切らない態度がこの日はなぜだか、気になった

瑞穂は書類を置き、由一にため息混じりで言う
「悪かったわよ、巻き込んで」
自分で言って、言い訳のようにも聞こえた
「時間がないんだもの……もう」
年を取ると人間、臆病になると言う
自分の場合は追い込まれて逆に、自棄を起こしてしまったのかもしれない、違うと信じたいが

由一は窓から外を眺めて、つぶやく
「……まぁいいさ、勝っても負けても、僕はうまく立ち回ってやる」
「……そうね、結局あんたの人生だし」

逆光で藤原由一の表情は見えなかった
遠くで鼓が鳴る
高く詰め所まで届くそれは、選考試合開幕を告げる大鼓だ

第十話－3　「決別」　１０２５年８月後編

＜選考試合開幕＞

控え室でお喋りをしていた壬生川（みぶがわ）の皆に、出番が回ってきたことが告げられる
「それじゃあ頑張りましょう！」
人一倍張り切っているのは、今年3月の選考試合で一人置いてけぼりを食らっていた月見（つきみ）である
そんな月見を、ほたるは微笑ましく見つめる

「わたしも、準備良いわよ」
後ろの方で退屈そうにしているのは虚空（こくう）だ
「早く終わらせて、屋敷に帰りたいのう」
「何ふてぶてしいこと言っているんですか、このマザコン引きこもりさん」
「……」
黙り込む虚空に背を向け、月見が嬉しそうに竜子（たつこ）の腕を取る
「お姉様、ほたる様、円陣組みませんか！　円陣！　勝つぞーおーって！」
聞こえないフリをして、竜子が舞台へと足早に上がってゆく
そんな月見に、虚空がニヤリと笑いつぶやく
「……疎まれているのも分からず、まこと愚かな女じゃのう」
「……」
結果、一勝一敗

ほたるが二人の間に入った
「さ、お二人とも、頑張りましょうね」
微笑みながら、ふたりの肩を抱いて段上へと上がってゆく

試合開始前、竜子がふとつぶやいた
「……ここに集まっている人たちって、みんなお母さんのことを知っているのね」
「そうですね、人気者ですの」
ほたるは感慨深く微笑む
自分たちがよく知っていた人がもてはやされるというのは、なんだかくすぐったい気分だった
しかし、月見は見た
「……」
髪の隙間からのぞく竜子の瞳は、まるでぞくりとするほど暗く濁っていた
「あ、あの、お姉様……？」
思わずその裾を引く
「何？」
竜子が月見を見下ろしたときには、その目は普段の輝きを取り戻していた
「あ、いや、何だろう、見間違いだったんですねきっと！」
「……試合相手が来たわ」

第一回戦の相手は、帝都防衛軍
剣士と弓使い、ふたりの大筒士で構成された彼らは、正真正銘の京の守護者である

周囲を包む、異質な緊迫感に気づいたのは竜子だった
前回の乱痴気騒ぎのような盛り上がりとはまた違う、意味ある視

線が自分たちを見つめていた
すがるような、それでいて蔑むような視線
竜子は拳を固め、帝都防衛軍に向き直った
「よろしくお願い致します」
大将に一礼をする
相手はこちらを一瞥しただけだった
竜子は長い髪を金色の飾り紐でまとめると、静かに構える
自分は彼らに負けない、負けるわけにはいけない理由があるのだ
柚子のことを一番愛しているのは、だって自分のはずだから

帝都防衛軍の面々は強かった
現人神に最も近いほたるや竜子の一撃を巧く捌き、致命傷を避けている
化け物相手ではなく、彼らは人との戦いに慣れていた

「ゆくぞヒトよ！　神族に名を連ねる我が槍を喰らうが良い！」
虚空が桃木の槍を掲げ、防衛軍の大筒士に意気揚々と挑みかかる
おお、と女性陣が思わず注目したところで、
桃木の槍が大筒士の頭に当たり、ぺしっ、と情けない音を立てた
「……へ？」
思わず月見が、タイヤキの中にアンコが入ってなかったときのような顔をした
「おや」
本人さえも、信じられない、という声を上げる
身を強ばらせていた大筒士は、頭に槍を載せたまま思い出したように大筒を持ち上げた

だが直後、鷹のように飛び込んできた竜子の飛び蹴りを腹に食らい、場外まで勢いよく吹き飛んでゆく

竜子が息を整えるように足踏みをする
「まぁ、さすが竜子さん」
ほたるはもう、虚空の攻撃を見なかったことにしているらしい

「おかしいのう」
「おかしいのはあなたの神経ですよ！」
首をかしげる虚空に月見が怒鳴る
「やはりヒト相手だと巧くいかぬものかのう」
「明らかな鍛錬不足です！　家に帰ったらボクが指導してあげましょう、素振りも足りなければ足運びも全然なってないですよ！　なってなさすぎてどこがなっていないのか分からないくらいなってないです！　一日１８時間シゴいてあげますよ！」
水を得た魚のようなに勢いづく月見に、虚空が眉をひそめる
「よく分からんが、気でも触れたか？」
「正気です！」
「そう思い込んでも、幸せにはなれんぞ」
「何がですか！　きいいいい！」
地団駄を踏む月見の傍で、軍配が上がった
規定時間による、試合終了、結果は壬生川一族の有効勝ちである

「……あなたたち、いい加減にしなさい」
拍手に沸く広場にて、
竜子の押し殺した声に、月見と虚空はびくっと肩を震わせた

～～

二回戦の相手は、過去に何度か対戦経験もある大原野魔術団だ
「行きますよ！　＜春菜＞です！」

「滅びるが良いヒトよ！　カッカッカ！」
「調子に乗るんじゃ……うん！　その意気ですよ虚空くん！　戦闘に集中戦闘に集中！」
月見と虚空はマジメに戦い抜き、一同は無事勝ち進んでゆく

他の者たちとは、気色が違う男が現れる
三回戦目、巧緻な胴丸を着た男が、ほたるの前に歩み出た

渡辺「やあ、壬生川家の皆、我らの留守中をご苦労だったぞ」

差し出された大男の手を、ほたるが取る
「あらあら、よろしくお願いします、えっと」
首をかしげるほたるに、それぞれが名乗る

渡辺「拙者、一条戻り橋で羅生門の鬼の腕を切り落とした猛者、渡辺！」

自己主張の激しい武士に、多少引き気味のほたる
「私はほたるです、川に住みますの、ところでお侍さんは好きですの蛍？」
流れるように話題を変える
そのあまりの手並みに、拍子抜けする武士
「蛍ってゲンジボタルとヘイケボタルと言うではありませんか、あれって不思議だと思いません？　どうしてそんな名前がついているのか」

渡辺「は、はぁ」

「お腹が発光するから、光源氏さまの名前を頂き、ゲンジボタルと

名づけられたんですの、ヘイケボタルは後からそれに対比するように命名ですって、面白いですのね」

渡辺「へ、へぇ」

うふふと微笑みながら豆知識を披露するほたるに、渡辺は間抜けな顔をさらす

「どうしてお腹が光るから光源氏さまなのでしょう？　可笑しいと思いません？」

渡辺「そこなのか！？」

成り行きを見守っていた月見が、つぶやく

「武士さんが、当主さまに翻弄されてる……」

「……あの人は無敵だから」

へらへら笑っているほたるを眺めながら、竜子が腕を組む

やがて舌戦に飽き飽きしていた虚空が前に一歩進み出て、生意気な目つきで渡辺を見上げる

「のう、お主ら、地方で鬼を退治していた衆と聞くが」

渡辺「うむ坊主、サインか、サインが欲しいのか」

小生意気な少年が、大男を見上げて臆せずに告げる

「余はたかがヒトと話す口は持たぬのでな、さっさと始めぬか、凡庸なニンゲンよ」

紐が引きちぎられるような音が、聞こえたような気もした

行司が慌てて軍配をあげる

「第三回戦、はじめ！」

渡辺「拙者たちは、何十年も技を鍛えあげてきたのだ！　そなた等若造に髭切りの太刀が躱せるか！」

ゆけっ、と渡辺が手を振ると、胴丸の名札に卜部、碓井と書かれた武士たちが虚空に襲いかかる

だが虚空は、カカカと笑う

「甘いわ！　余の立ち位置は後列、そなたら剣士の届く間合いではない！」

「そんなことで威張らないでください！」

諦めて竜子に斬りかかる剣士たち

ふたりの攻撃を危なげなく一手に捌く竜子を見て、開始早々追い込まれた渡辺が口を一文字に結ぶ

渡辺「こうなったら、拙者の最後にして究極の術……！」

「何じゃ、＜ツブテ＞でも吐くか？　ん？」

青白い光が、一直線に虚空に伸びる

会場に稲光が落ちた

渡辺「＜雷獅子＞！」

雷術の最大奥義であった

雷光が舞台を焼き尽くした後、月見が虚空を見る

すると、少年はぴくぴくと痙攣しながらのびていた

「ちょ、ちょっとコクワガタさん！？」

月見が慌てて駆け寄ると、虚空は口から黒い煙を吹いた

「かっかっか……このような技、児戯よ……」

「こんなときまで強がり！？　いや思い切り死にそうですよ、心なしか髪がチリチリに……！」
　とりあえず＜春菜＞を唱えてやるが、しばらく戦線復帰できなさそうだ

渡辺「ふ、ふはは！　どうだ、参っただろう！　参ったと言えば命だけは助けてやろう！」

「く、何てB級悪役の匂いがする台詞を！　低脳で傲慢で虫並の礼儀しか持ち合わせてないコクワガタさんですけど、お姉様方に雷撃を放った報いを味わせてあげます！」
　心底、虚空のことをどうでも良さそうに粋がる月見の肩に、ほたるが手を置く
「まぁまぁ、月見さんは回復術に専念していてくださいの」
「あ、あれ？　当主さま？」
　事無く微笑むほたるを見て、月見が呆気に取られる
　その近くで、武士のひとりを雷の盾代わりにしていた竜子が、掲げていた黒コゲの男をぽいと捨てる
　渡辺が叫んだ

渡辺「お、おおおお卜部ぇぇぇ！？」

　名を呼ばれた男が火傷を負いながら、親指を立てる

連合乙「渡辺さん……良い、雷撃でした」
渡辺「死ぬなぁぁぁぁ！　く、貴様らよくも！」

　怒りに燃えた渡辺の、その眉間をほたるの雨の矢が叩いた
　水風船を割ったような音を立てて、渡辺が真後ろに倒れる

連合甲「わ、渡辺さぁぁぁぁん！」
渡辺「く……頼満様、お先に、参り、ます……」

それだけ言うと、渡辺は口から血を吐いて気絶した
そんな演出に、ほたるが手を叩いて喜ぶ
ほ「面白い方々でしたね」
竜「……」
腕は良いとして、あんな連中が都の最後の切り札なのか、と竜子は思う
何はともあれ、こうして一同は決勝戦まで駒を進めた

～～

金時「ぐぁっはっはっは！　よくぞここまで勝ち上がってきた！」

竜子がとりあえず最初に思ったのは、
（……男の人の壊し屋の衣装って、悲惨なのね）
だった
黙り込む竜子を気圧されていると勘違いしたのか、金時は調子に乗って続ける

金時「所詮お前らが倒した渡辺らなど、頼満四天王の中では最弱！　鬼ワラにも劣る木っ端侍どもよ！」

「そんなのが四天王の一人て、どれだけ人材不足」

金時「この我輩の木槌の前に、なすすべもなく倒れるが良い！　ぐぁっはっはっは！」

聞いちゃいない

おまけに竜子の脇から月見が首を突っ込んでくる

「何を言っているんですか！　あなたなんてお姉様の拳で鉄拳制裁ですよ！」

金時「ほほう、だが我輩は……三歳で熊を倒したぞ？」

にやり、と笑う金時に、月見が竜子の腕に絡みつきながら怒鳴り返す

「お姉様なんて、生後二ヶ月で鬼を退治してます！」

確かに事実だ

金時「我輩は昼飯を茶碗7杯は食う！」

「お姉様の跳躍力は屋根から屋根まで飛び移ります！」

出来ることは出来る

金時「腕相撲全国大会で優勝した！」

「お姉様のパンチ力はきっと世界一です！」

それは知らない

竜子は月見をたしなめる

「それは良いから、早く試合を……」

金時が木槌をその場に置き、むん、と筋肉を誇示する

ミシミシと聞こえてきそうなほど鍛えられた浅黒い肌を見て、月見は少しだけ顔を曇らせた後、弾かれたように叫ぶ

「あ、お、お姉様のほうが！」

金時「何だ？」

余裕げな笑みを浮かべる金時
男と無表情の竜子を見比べて、月見は告げた
「お姉様のが、綺麗」
ささやき声の波紋が広がった
観客と、金時の手下と、審判が大きくうなずく
まるで子供のように金時が顔を真っ赤にして言い返す

金時「負けてないぞ！」

「いや負けです」
「うむ、同じ生物とは思えんな」
「さすがに、ねぇ」
キッパリ
「え、えっと……」
珍しく困惑に目を丸くする、壬生川家一美人の呼び声高い竜子

金時「ええい！　こうなったら我輩の力を見せてやる、おい行司！　早く試合を始めるぞ！」

決勝戦は金太郎本舗
その冗談のような衣装とは裏腹に、破壊力は本物であった

＜詰め所＞

遠くで鼓が鳴る
本日二度目のそれは、選考試合の終了を天高く響かせていた

「……ん、」
瑞穂は机から顔を上げる
夕日が目に飛び込んできた
三日続きの徹夜のせいか、集中力が切れた一瞬の間に、眠ってしまっていたようだ
「誰も、怪我してなきゃいいけど……」
頬をこすりながらつぶやく、結果よりも先に浮かんだのはそれだった

瑞穂は机の空の湯飲みに気づくと、急にノドの渇きを意識する
「お茶……と、甘いものも貰ってこよ」
立ち上がろうとして……膝に力が入らなかった
違和感が芽生える
「……あれ」
夕日が和紙に染み込ませた朱墨のようにぼやける
湯飲みに視線を落とすと、その輪郭が淡くなる、ただの緑になる
疲れているのかな、と思う
先ほどから粘着性の油のようなものが、脳の片隅にこびりついていて、瑞穂の思考力を圧迫する
何か、覚えのある感覚だ
技力を使い果たした後などに、寝不足の朝で都を駈けずり回ったような倦怠感を覚えることもあったが、今の状態はそれよりもさらに重い
重い、そう、重いんだ、と気づく

重い耳が、戸の開く音を聞いた
「あ、何だ起きてたのか」
気まずそうに手に毛布を持って、由一が部屋に入ってくる
「いや、これは、8月とは言え、一応っつーか念のためっつーか…

…ってか、瑞穂、お前顔赤くないか？」
「……え？」
「ん？」
瑞穂の声に、由一は怪訝そうな顔をする
「どうしたよおい、寝ぼけてんのか？　じゃあ目を覚まさせてやろう、よく聞けよ、選考試合の結果が届いたぞ」
嬉しそうに由一が言う、隠し事の出来ない武士だ
「……どうだった？」
「優勝だってよ」
本当は言いたくてたまらなかったのだろう
「ともあれ、これで瑞穂小町率いる守護団は存続、だな、へっへっへ、僕も鼻が高い」
由一の声が、遠い
瑞穂はわずかに微笑んだ
「そっか……良かった、良かったわね」
由一も笑う
瑞穂は机の上で開きっぱなしだった報告書を閉じて、窓に目をやる

時が来たんだ、と悟る

「へそのお、ってあるじゃない」
「は？」
「赤ん坊って、産まれてくるときに、お母さんと繋がっているのよね」
「いきなり何言い出すんだオイ」
重い手をよろよろと持ち上げて、胸の前で組む
手を少しずつ下げてゆき、下腹部の辺りで止める
「巧く言えないけれど、凄いわよね、お母さんと赤ん坊は、ひとつのいきものから分かれるって、巧く言えないけれど、それってどうしようもなく、親子ってことよね」

由一には分からないだろう、けれど、分かってもらえなくても良い
分かってもらえないことが、良い
自分たちは人間ではない、けれども、決して強いいきものではない
いのだと、思ってくれれば良い

「竜子は上手くやるでしょう、けれど……あたしの娘はきっと、迷惑をかけてしまうと思う……だけど、そんなときは言ってよね、”これがあの瑞穂の娘か”って」

由一が瑞穂の異変に気づく

瑞穂はゆっくりと、柔らかい動きで下腹部を撫で続ける

「そう言ってくれたら、きっとあの子は救われる……あたしがそうだったように、だって、あの子とあたしは……」

瑞穂は目を閉じて、かすれた声を上げた

由一が人を呼ぶ

何十人の医者に診られた瑞穂は、やがて壬生川の屋敷に帰された
八月の終わりの、雨が強い夜だった

＜壬生川家＞

床につく瑞穂の横に、ほたるが寄り添うように座っていた

「きょうは、朝からずっと雨が降り続いてて、良い気持ちですの」

ほたるはいつものように微笑む

瑞穂は口を尖らせた

「……変わってるわよ、あんた、あんなに来るなって言ったのに」

倒れて以来、瑞穂は京都守護団の人員に一切の見舞いを許さなか

った
知人はおろか、家族にすら会いたがらない
そんな瑞穂の態度を、ほたるは穏やかに見透かした
「瑞穂さんが本当に嫌なら、もう来ませんの」
「……嫌だって、言ってるのに」
瑞穂は寝返りを打ち、ほたるに背を向ける
「良いではないですの、最後まで、意地を張らなくても、うふふ……」
ほたるはいともたやすく、最後、と口に出来る
ただ降り続ける雨のように、何にも気負いしない
「……」
ふたりとも、何も言わない
黙ったまま、雨の音を聞いていた
穏やかに、静かに残り少ない時が流れる
「……柚子が、あたしより先に死んでよかった」
くぐもった声は、ほたるに届いただろうか
少し遅れて、ほたるが言った
「老いることは、恥ずかしいことだったり、悲しいことでは、決してありませんの」
流れる水のように、ほたるの声は淀みない
「……でも、寂しいこと、よ」
ほたるはかすかに笑う
「そうですね」
その同意の声が聞けて、とりあえず満足した瑞穂は告げる
「少し眠たくなってきたから、休むわ……あんたも、家の仕事、山ほどあるんでしょ」
「きょうはお洗濯物が乾かないから、少し手持ち無沙汰ですの、まるで雨って子供みたいですのね、元気が良いと嬉しいけれど困りものです」

うふふ、と笑いながら、ほたるは部屋を出てゆく
おやすみなさい、という声に返事をせず、瑞穂は目を瞑った

～～

後ろの襖が開く
浅い眠りから覚めて、瑞穂は体の向きを変えて振り返った
「竜子……？」
「きょうの薬よ」
竜子が無機質な声を上げる
いつも表情がはっきりしている竜子ではないが、普段に増して硬質的な印象を受けた
「え、ええ」
最初の方こそ薬を飲むのを嫌がっていた瑞穂だったが、竜子の有無を言わさぬ強引さに根負け、ついつい流される形で一日三回薬を届けられていた
押し負けたのは、実直な竜子の中に彼女の母親の面影を見つけたからだ

竜子に背中を支えられながら起き上がって、瑞穂は和紙に包まれた薬を受け取る
「きょうは、お水持てる？」
「……ちょっと無理め」
「そう、良いわ、持つから」
竜子は瑞穂の細くなった手首を掴んで、口元に運び、包みを開くよっぽど誰かを献身的に介護する練習をしていたのだろう、竜子の動作は実に手馴れていた

薬を飲まされ、布団の上でまどろんでいた時、ふと竜子がつぶやいた
「月見は、まだ来てない、のね」
その言葉に、眠りかけた意識が覚める
「……見てないわね」
瑞穂が臥せってから、一度も月見は母親の顔を見には来なかった
同じ屋敷に暮らしているというのに
雨音が部屋に響く

「瑞穂、聞いてくれる？」
「……何よ、あんたが珍しいわね」
仰向けのまま、瑞穂は竜子を見る
前髪に隠れた竜子の目は見えない
「瑞穂、お母さんの物語を京都に広めたよね」
「ええ……って、柚子物語なら屋敷のみんなにも見せたじゃない」
瑞穂の言葉を受け、竜子は平坦に語る
どこからか、ミシリ、という音が聞こえた
「瑞穂、お母さんを私だけのものにはしてくれなかった、のね」
「ん？」
「瑞穂は私に酷いことをしたわよね……」
竜子の言葉の意味が分からず、瑞穂が眉をひそめる
その時、竜子の持っていた湯飲みにヒビが入った
竜子はその器を冷めたまなざしで置き、続ける
「瑞穂は、私からお母さんを、引き剥がしたのよ」
「……何、言ってるの？」

普段、理路整然としている竜子が、うわ言をつぶやく
「わたしだけの、ものだったのに、悪いのは、瑞穂なのよ」

一言一言を区切って、恨み言をうたう
「竜子……あんたおかしな夢でも見たの、って」
竜子はゆっくりと身体を倒して、瑞穂に近づく
なぜか言い様のない圧迫感に身体を押された瑞穂の、その耳元に
静かにささやく
「あなたは私からお母さんを奪った……だから私は、あなたの大切なものを奪う……」
「大切な、もの……？」

瑞穂の脳裏に、とっさに浮かんだのは……

「守護団の権限は……武家に返したわ……」
とても嘘には聞こえなかった
驚愕する瑞穂の首を、竜子がゆっくりと、我が子を抱くように掴んだ
「……静かに、皆が、来るわ」
「たつ、こ……あんた……？」

竜子が弱くもなく強くもなく、瑞穂の首を絞める
まるで、今だけは生かしてやる、と言うように

「……あなたは、私にとってお母さんがどれだけ大切だったのか、分からないでしょうね、自分の娘すら愛せないあなたには」
「ちょっと……冗談なら止しなさいよ……」
その言葉に、竜子は目を見開いた
「何が、冗談なの……」
腹の底から搾り出すような、押し殺した声だった
竜子の眼窩に、暗い光が見える
この子は、こんな眼をしていたか……？
人形のようにどこを見つめているのか分からない眼が、確かに瑞

穂を刺す

「瑞穂、あなたは……お前は、お前は、私の中のお母さんさえ奪った……とっても大切な、いつも優しくて、私を守ってくれる、お母さんを、ニンゲンなんかに、あんな生きてるだけの屍たちにやった……お前のせいで、お前のせいでお母さんが、汚れる……！」

「竜子、あんた……」

瑞穂は竜子の目を、怖いと思った

この瞬間、瑞穂は竜子を完全に誤解していたのだと気づく

柚子が死んでも泣かず、とうの昔に覚悟を決めた強い娘なのだと、思っていた

しかし、竜子は、本当は……

「……身体、辛いでしょう」

思い出したようにその声色が変わり、妹を労わる姉のように言う

竜子は瑞穂の首に手を当てながら、その髪を静かに撫でる

長く大きな指が、瑞穂の頬に触れる

「……今まで、ずっと誰にも言わず、健康度のことを隠して、ニンゲンのために頑張っていたのね……偉いわ、瑞穂……私は、あなたのことを時には尊敬さえしていたのよ……」

微笑を浮かべながら、竜子は瑞穂の唇を軽くこする

底無し沼のような目が、瑞穂を捕らえて離さない

「……だけど、あなたは最後に私たち壬生川家より、ニンゲンを選んだのよね……それも、最も愚かな手段を用いて、人間を救おうとしてみせた……馬鹿な女……」

竜子が笑う
雨の音が遠くなる
まるで、その瞳の闇に心を引きずり込まれたように、瑞穂の世界から音が消えてゆく

「こんな、真似をして……あの子がいったい、どう、おもうと……」

竜子が瑞穂の首から手を離し、薬の包み紙を取り上げた
微笑みながら和紙をくしゃりと握り潰し、小さな炎を浮かべ手のひらの中で燃やす
その口が、小さく動いた

「おやすみなさい、瑞穂……いい夢を、見るのよ」

それから数日後、瑞穂が布団の中で眠るように死んでいたのを、イツ花が発見する
枕元に二行の書置きが残されていた

「今あたいが思っている事を、そっくり朱点童子のヤツにもいつか言わせて…」
「“まだ死にたくない、もっと生きていたい…”ってね、頼んだわよ…」

壬生川　瑞穂　享年1才7ヶ月

それを読んだ竜子は、あの日の眼で静かに頷く

第十話－3　「決別」　１０２５年８月後編（後書き）

出陣・選考試合（ほたる・竜子・月見・虚空）
病死・瑞穂

第十話－４　「鴻鵠」　１０２５年９月前編（前書き）

ほたる　１才５ヶ月
竜子　１０ヶ月

月見　７ヶ月
虚空　３ヶ月

第十話－４　「鴻鵠」　１０２５年９月前編

＜壬生川家＞

午後未だ日が高い屋敷の居間、ほたるが形だけの仏壇の前で、黄金色のりんを二度叩く

チーン……チーン……

それから目を閉じ、ゆっくりと手を合わせる
柚子（ゆず）が死んで、後を追うように瑞穂（みずほ）も亡くなってしまった

たった二ヶ月で二人の大事な友人を失ってしまったほたるは、少しぼんやりとしたまま、空いた襖から覗く秋の空を見上げる
しばらく、そうしていた

何か用事があったのか月見が声をかけにきても気づかずに、空を仰いでいた
白昼夢に耽っていたほたるは、はたと思い出す
「そういえば……壬生川（みぶがわ）家三人娘も、残るはわたしひとりになってしまいました」
由々しき事態だと思う
「これは、早急に対策を立てなければいけません の……」
もっと他にやることは山ほどあっても、どうでもいいことだけに情熱を燃やすほたるである

～～

廊下で、月見（つきみ）が竜子（たつこ）を見つけて駆け寄る

「あ、あの、お姉様！」

「……月見」

「お姉様、今その、平気ですか！？　稽古しませんか！？」

視線を所在無くさまよわせながら、声量だけは勇ましく尋ねてくる

「私、これからちょっとほたるに話があって」

「あ、そうですか……」

がっくりと肩を落として、回れ右する月見

その背中に、竜子が静止の声をかける

「お待ちなさい」

口調は柔らかいが、その目は笑っていない

「月見、あなた都に行っているでしょう、もうあの人たちには関わらないように言ったはずだけど」

ぴた、と月見の足が止まる

「う、さすがお姉様、鋭い洞察力……！」

「いや同じ家だから」

月見は竜子の胸元を掴みかかる勢いで、ぐいっと顔を近づかせる

「で、でもあのボク、本当はあそこの団を継ぐ予定だったんですよ！　お母さんが、あの人が勝手に武家の人の返したりしなければ！」

瑞穂が亡くなってから、月見は母親のことをあの人と呼ぶ

竜子は月見の肩に手を当てて押し、少し離す

「月見、あの人たちに関わってはいけない、寸暇も惜しんで稽古をなさい」

「でも！　あそこの人たちすっごい困ってて、ボクが行くと喜んで

くれて、だからその……」
まだ7ヶ月の少女の細い両肩に手を置き、竜子は少し身をかがめて告げる
「月見、あの人たちは私たちに比べてとても長生きなの、分かるでしょう？　私たちとそう変わらないように見えても、もう何十年も生きているのよ……そんなに生きているのだから、もうきっと満足なはずよ」
「そう、かもしれないです、けど！」

「〝燕雀いずくんぞ鴻鵠の志を知らんや〟」
詠う竜子に、月見が目を丸くする
「何ですかそれ！」
「燕や雀に、私たち大鳥の心は分からない……彼らと共に生きるのは、月見にとって不幸な事だわ」
「す、すごい、やっぱり物知りなんですねお姉様って！　ボクも頑張ってお勉強します！」
竜子が口元を綻ばせる
「ええ、もっと強くなって頂戴……母親のように、壬生川家をないがしろにすることのないように、ね」
「は、はい！」
月見は敬礼の姿勢をして、居間へと向かう竜子を見送る
単純な妹は気づかなかった、竜子の目が一度も月見を映してはいなかったことを

～～

仏壇の前でほたるが考え込んでいると、音もなく竜子がやってきた
「ねぇほたる」

「あら竜子さん、わたし考えましたの、どうかしら新三人娘？」
無表情で突っ立っている竜子に、ほたるが無邪気に話しかける
どうやら昼間から、ずっと三人娘のことを考えていたようだ
「新三人娘ではお名前が重複しちゃいますね……それでは、三人官女だなんてどうでしょう、わたしと竜子さんと月見さんですの」
「……ほたる、娘？」
竜子の冷静なつぶやきに、ほたるが拗ねる
「まぁ、つれませんのね……わたしだって、まだ1才5ヶ月ですのに」
娘どころか幼児のようにそっぽを向く
「どうでも良いのだけど……」

「あ、良いこと思いつきましたの」
竜子の言葉をさえぎって、ほたるが居間からぱたぱたと出ていった
それからすぐ、黙って待っていた竜子の前に戻って来る
「うふふ」
小手のようなものを両手にはめて、見せびらかしてくる
よく見れば手があって、口があって、目の代わりに黒曜石が縫い付けられており、てっ辺からは髪の毛が生えていた
まさか本人の髪ではないだろうな、と思いながらも竜子はほたるを眺める
なぜか妙に嬉しそうだ

「それは一体……」
「いつぞや見せたではありませんか、腹話術ですの」
こっちが柚子人形でこっちが瑞穂人形ー、と告げてくる
「三人娘もわたしひとりになってしまいましたが、こうすればほら、あの通りみたいに元通りですの」
ほたるはそういいながら、左手に付けた瑞穂人形を動かす
「瑞：何ワケの分かんないこと言ってんのよ、ほたる」

昔見たが、やはり巧い
声帯模写をどのように行っているのか分からないが、もし家族でなければ騙されてしまってもおかしくないだろう
「楽しいですの、ね、柚子さん」
右手に付けた柚子人形の手（おそらく小指と親指にはめて動かしているのだろう）を器用に動かしながら、頷かせる
柚子人形もよく出来ていた
「柚：うん、やっぱりみんなでいると、賑やかだよね」
竜子が、動揺した
「……それは」
声がかすれていた
そんな竜子の様子を、一人芝居に熱中しているほたるは気づかない
「そうですのね、みんなでいるととても楽しいですの」
左手がうなずく
「瑞：楽しいわね、アカデミー楽しい賞ノミネートね！」
右手が手を振る
「柚：うんっ、世界はひとつだよね、夢が広がる未来予想図っ」
ほたるが笑う
「まぁ、万博みたいですのね」
瑞穂と柚子の性格が明らかに違っていたが、その光景は竜子の中の懐かしい記憶をくすぐった

竜子は瑞穂の人形を叩き落とす
「瑞：ギャッ」
律儀に瑞穂の声で、飛んでいった人形の悲鳴を演出する
「柚：ちょ、ちょっと竜子さん、いきなりどうしたの」
竜子の顔の正面で、忙しなく手を動かす柚子人形
そんなただの人形に、竜子はゆっくりと手を伸ばす
「あら」

その声で、竜子は我に返った
慌ててほたるを見ると、現当主はねこじゃらしのように微笑んでいた
「竜子さんの無防備なお顔、なんだか久しぶりに見た気がしますの、うふふ」
ほたるは柚子の声で続ける
「柚：竜子さん、笑うと可愛いもんね」

「違う！」
気がつけば、怒鳴っていた

きょとんとこちらを眺める、ほたると柚子
「あ、いや、違います、あの、私は可愛くなんてゼンゼン……って、そうじゃないわ！」
顔を赤くして狼狽する竜子を、不思議そうに見る
「どうかしましたの？」
竜子は自分の髪をもてあそびながら、うつむく
「べ、別に、何でもないわ……止めてよもう、見ないで、」
「柚：どうしたの竜子さん？」
思わず叫んだ
「ひゃん！」
悲鳴を上げたあと、竜子が口元を押さえて、少し後ずさりする
ほたるはやはり笑っていた
「うふふ」

竜子は歯噛みして、拳を握る

「……私、今から交神の儀に入るから、誰も近づかせないように、それだけ言いに来たのよ」
「あらあら、それはそれは付き合わせてしまいましたね」

「別に、良いけど……」
そう言って、竜子は髪で顔色を隠しながら、まるで逃げるように部屋を出てゆく
ほたるはその後ろ姿を、微笑みながら見送る
「……うふふ」
それから仏壇の前に落ちている瑞穂を模した人形を拾い、ホコリを払いながら左手にはめる
「瑞穂さん、大変な目に合いましたのね」
手元の人形に、笑いかける

ほたるはしばらく、その場に座り込んで人形劇を続けていた
暗くなってもずっと、居間でひとりきり人形劇を続けていた

第十話－5　「後顧」　１０２５年９月後編

＜交神の儀＞

竜子（たつこ）の正面に、頭に桔梗を三本生やした女が座る
「それでは竜子様、バーンとォ！　交神相手を選んでくださぁい」
「光無ノ刑人様でお願い致します」
「はい、それではただいまァ」

薄暗い一室が光に包まれた
眩しさに目を閉じた後ゆっくりと開くと、儀礼の間の壁は取り払われ、八畳の部屋は眩い光の海で木の葉のようにたゆたっていた
その小さな島に、ゆっくりと小船が近づいてくる

船頭役を務める女神・速瀬ノ流々が導く船に、男が乗っていた
「……神格の高い神は、登場も派手なのね」
格式高い登場に、竜子が呆れたようにつぶやく
光の海を流刑させられた光無ノ刑人が、女神に手を引かれ、儀式の間に降り立つ

刑人「壬生川の娘か」

白装束に白い目隠しを巻いた美丈夫が、ゆっくりと竜子の前に座った
「はい、その前に」
竜子は手を挙げて、流々を指す

「……その暗そうな女性は、ずっと居られるのですか」
流々「私帰りもお送りしますので」
なぜか不機嫌そうに言う
「…天界も、下っ端は大変そう」
流々「鎮守ノ福朗太様の娘だからって調子乗るんじゃないよ」
濡れて張りついた髪の隙間から、思いっきりガンつけてくる
刑人「……流々よ、あまり強く言うな、慣れない役目を頼んだ私が悪かった」
流々「いえ、光無ノ刑人様を面責する心積もりはありません」
目の見えない刑人を良いことに、流々は竜子に中指を立てる
竜子は刑人に向き直り、三つ指ついて頭を下げた
「光無ノ刑人様、お頼み申し上げます」
刑人「……一夜限りとは言え、契りを結ぶのだ、何なりと言ってくれ」
「私の肌身、鬼との戦いで傷ついております故、見られたくありません、どうかその女神をご退室願い上げます」
流々「ちょっとぉっ」
流々が思わず声を上げた
刑人「それで私を選んだか、なるほど……しかしそれでは、私が不手際してしまうかもしれんが、良いか?」
「はい」
光無ノ刑人の紳士な心遣いに、竜子はうなずく

刑人「そうか、では流々外してもらえるか？」
流々「え、こっから帰って、また来るの……？」

「ご心配及びません」
竜子が無表情で言う
「事が済みましたら光を打ち上げます、なので、遠く離れて待機してて貰えれば」

流々「何かそれ、余計面倒な気がするんだけど……」
ぶつくさ言いながらも、流々が船を操る

流々が遠ざかってゆくのを見ると、竜子は静かに着衣を脱ぎだした
肉食動物を思わせるしなやかな四肢は透き通るように美しく、光の海の輝きを浴びた髪はきらきらと雫のように光った
そのふとももに隠し彫りされている入れ墨は、生涯誰にも見せる事のない竜子にとっての親子の絆とも呼べる代物
先月に自ら刻み込んだもの
――小さな、白柚の花であった

刑人「きっと、美しい娘なのであろうな……」

そのつぶやきに応えるかのように、
どこかから流々の「すっごい醜女ですよ刑人様ぁ、騙されないで～！」という叫び声が流れてきたとかこなかったとか

＜虚空の部屋前＞

竜子と別れて道場に向かうはずの道を引き返しながら、月見は思い出していた
「そうですよ、すっかり何か忘れていると思ったら、コクワガタさんに稽古をつけてあげるんでした！」
胸の前で拳を握り締めながら、ずんずんと香家の部屋に向かう

すると、虚空の部屋から何か話し声が聞こえてきた
「……？」
月見がいぶかしんでいると、それはうら若い女性の、どちらかといえば新芽のような女の子の猫撫で声のように思えてくる
月見の歩調が少し早まった
「コクガワタさん……修行もなさらず一体、部屋で何を……！」

部屋の障子を、漁師の一本釣りのように豪快に開く
「ちょっと何しているんですか！　って……本当に何をしているんですか！？」
部屋の光景はだいぶ月見の予想と違っていた

机の前に座る虚空の背中に、月見より小さな半裸の少女が抱きついて、虚空の頭の上に自分の顎を乗せてにゃーごにゃーご言っていた
ベタベタで、甘々な光景だ
まるで恋人同士の真っ最中な現場だ

「にゃ……なわばり荒らし！？」
振り向いた少女が、月見に高い声で怒鳴る
「あなたこそ何を勝手にうちに入ってきているんですか！　は、もしかしてコクワガタさん、あなたが買って来たんですか……？」
心底軽蔑のまなざしで、虚空を見つめる

散らかった部屋で、虚空が面倒そうに月見を向く
「こやつはただの猫じゃ、気にするな」
ニッコニコの美少女に頭を撫でられながら言う虚空に、説得力はない
「そんな勝手な言い分、気になるに決まっているじゃないですか！ってどこかで見た気がしますねこの子！」
言葉の途中で月見は、少女がどこかで見たような面影を残していることに気づいた
少女がフーッと月見を威嚇する
「虚空ちゃんと楽しく過ごしているんだから、早く出ていくニャ！」
「な、何ですか」

ふたりの騒々しい女の子に挟まれた虚空が、読んでいた書物を閉じ、ため息交じりにつぶやく
「月見よ、こやつは以前の黒猫じゃよ」
「へ」
牙を剥く少女をよくよく見れば、浅黒い肌にはうっすらと体毛が生えていて、黒髪の隙間から二本の耳がつんと元気良く伸びているどちらかというと、今まで気づかなかった月見の方がすごい

「ほ、本当だ！　猫じゃないですか、猫、猫娘！　きゃー！」
「ちょ、ちょっと寄ってくるにゃっ、触るにゃ触るにゃぁぁ！」
迫ってくる月見の手を引っかいて、少女は虚空の背中に隠れる

月見は残念そうに口をへの字に結ぶ
「良いじゃないですか、ちょっとくらい……減るものじゃないんですし……」
「……それよりもお主は、なぜ猫が人間の形をしているのか、気にならんのか」
眉間を押さえながら、虚空

「は、本当だ、どうして喋ってるんですか！？　おまけに人間みたい！」
突っ込む気も失せたのか、虚空は淡々と語る
「……こやつの名は、福招き美也じゃ、聞き覚えくらいあろう」
「そ、それって神様の名前じゃないですか！」

虚空の袖にしがみついて、月見を睨み続けている少女――美也が口を開く
「そーよ、丁重に扱いなさいニャー」
「……耳」
時折はねる黒耳を眺めながら、魅入られたように月見がつぶやく
「……尻尾」
取り付かれたように手をわきわき動かす月見に、美也がびくっと怯える
「こ、虚空ちゃん、ちょっとあの人どこかにやって～～」
「知るか」
抱きついてくる美也の顔を手で押し返す、神様にも平等に冷たい男だ

「それで、何用じゃ月見」
「は、そういえばボク、何しに来たんでしたっけ！」
腕を組み出す月見
虚空は天井を見上げながら、つぶやく
「……竜子のことか」
「え、お姉様？」
驚いたように顔を上げる月見に、虚空が視線を逸らして舌打ちをする
先回りしたつもりが、失態だった
「……違ったか、忘れるが良い」
「お姉様がどうかしたんですか、ちょっとコクワガタさん！」

虚空の口から竜子の名が出て、月見は少しだけ動揺していた
それがなぜか、虚空にはその理由が分かっていた
分かってはいたのだが……

「そうじゃな……」
口元をさすりながら虚空は思案する
「コクワガタさん、お姉様がどうかしたんですか！　教えないとその緑の髪を引きちぎって坊主にしますよ！」
こうなったときの月見は本当に引かない
「坊主は困るが……」
「あたしあの子嫌いニャー」
そこが定位置であるとばかりに美也が虚空の背中に抱きついて、言う
「まるで夕子様みたいな目をしているのニャ！」
夕子というのは、天界の女神ナンバー2、太照天夕子のことだろう
「め、女神様みたいに、綺麗ってことですか！？」
「黙れ阿呆娘」
髪を尖らせて拳を振り上げる月見に、虚空が辺りを窺い、それから月見に尋ねる
「あの娘の様子、何かおかしいとは思わぬか？」
「何か、って……」
「余はおぬしらと違い、あの者に何の感情も抱いておらぬ、であるからして、恐らくこの憶測は間違っておらんと思うが……あやつは変わったじゃろう？」
「……」
月見も少し、心当たりがあった
ただ、それをどこか月見は認めたくはなかったのかもしれない

押し黙る月見に、虚空は重く告げる
「……まぁ、余には関わりのない事であるがな」

そう言って、虚空は美也を背負いながら、再び机に向かおうとする
その手を、月見が掴んだ
「あの」
誰にも見せた事がなかった、それは月見の気弱な顔だった
虚空の指を、まるですがるように握る
「……」
鋭い虚空の眼に、不安に揺れた瞳が映る
「最近、お姉様が何だか、妙に優しいんです……こんなことは、初めてで……」
「……ふむ」
「声色が甘くて……変なんです、まるで何かを隠しているみたい……」
きっと、今まで誰にも言えなかったのだろう
憂慮をその小さな身体に押し込めて過ごしていたのだ

母親と仲たがいをしたまま会えなくなって、その悲しみを振り切るようにひたすらに修練に打ち込んでいたのだ
それでも、唯一の心の支えであった姉の様子までも狂ってきて、屋敷に居場所がなくなって

考えてみれば、不憫な娘だと思う
彼女の心細い声を聞いて、虚空は思わず助勢を申し出てしまう
それが自分らしくない行動だと、わかっていても

「……そうじゃな」
頭の上で寝息を立てる猫少女・美也は置いといて、虚空は顎をさする
「月見、あやつのことは余に任せてみるか？」
「えっ」
その途端、月見が仰け反りながら後ずさってゆく

少しだけ、不服そうに虚空は言う
「何じゃ」
「いや、でも、さすがにそれは……いくらなんでもコクワガタさんに任せるというのは……」
首を振りながら、信じられないものを見るような目で虚空を見つめる
そのテンションの急変についていけず、虚空は疲れたように半眼で月見を睨む
「……何じゃ」
「いやだって、人のために箸すら持ち上げるのも惜しむようなあなたが……！」
「……」
たまに同情をすれば、この言い草だ
虚空が頭をうなだれたのは、はたして寄りかかってくる美也の重みのせいだろうか

こうして、壬生川家の予兆に包まれた一ヶ月は終わりを迎える
神がたむろし、ますます化け物屋敷と化してゆく壬生川家を嘆いたのは、恐らく今回名前の出ていないイツ花ひとりであったろう

第十話－5　「後顧」　１０２５年９月後編（後書き）

交神の儀・竜子×光無ノ刑人

第十話－６　「仙窟」　１０２５年１０月前編（前書き）

ほたる　１才６ヶ月
竜子　１１ヶ月

月見　８ヶ月
虚空　４ヶ月

第十話－６　「仙窟」　１０２５年１０月前編

虚空（こくう）の部屋に月見（つきみ）が駆け込んできたのは、十月初旬の出来事だった
月見が襖を開けると、虚空は全てを察したような目でため息をついた

「当主さまの様子がおかしいんです……！」

虚空はほたるから離れ、今はかつての玄輝（げんき）の部屋に一人と一匹で暮らしていた
美也に毛繕いされながら、虚空は本をめくる
「……知っとるよ」
だからこそ虚空は、ほたるから距離を取ったのだ
「最初は、またいつもの遊びかと思っていたんです、当主さまって、っていうか香家の人ってやっぱりどこかおかしいから、そっとしておいたんですけど……」
「……」
月見が虚空の腕を引っ張りながら、涙声で続ける

「それが、ずっと、人形に話しかけているんです……！」
「そうじゃな」
「それも、一日中ですよ！？　ご飯も食べないで、ずっと、お人形遊びだなんて、それがもう二週間です！　どうしたんですか当主さまは！」
ほたるは日増しにやつれていっている
素人目の月見が見ても分かるほど、まるで柚子が生きていた頃のほたるとは別人のようだ

「余に聞かれても、答えられることはないが……」
虚空は顎に手を当て――真剣な顔がおかしいのか、笑いながら頬を引っ張ってくる美也を無視し続けて――黙考する

月見は力なくうなだれた
「コクワガタさんにこんなことを相談しても仕方ないのは、毛ほど役にも立たないのは分かってます……でも、ボクはもうどうすれば良いんでしょうか……」
「……そうじゃのぅ」
藁にもすがる月見を前に、虚空は黙って宙を見つめていた
言葉も出ない少女と、かける言葉を探す少年――その間でじゃれる猫娘
「そなたは、この頃は……特に、笑わんな」
「……え、何ですか？」
「いつからじゃろうな、この屋敷から笑い声が途絶えたのは、いつかは煙たがっていたが消えると消えるで風情がないものじゃのう」
突然関係ないことをつぶやき出した虚空――首元を幼女にひたすら甘噛みされている少年を、月見はマジマジと見つめる
「コクワガタさんは……そんな良い雰囲気のキャラでしたっけ」
「そなただけじゃの、変わらんのは」
「あなただって、そのぼやーっとした顔も性格も毒舌だって来た当時から全然変わってませんよ！　すこぶる腹立ちます！」
「そうか……余はこれでも、昔よりは分別が付いたと思うのじゃがな」

美也に背中を軽く引っかかれながら、虚空はため息をつく
「月見よ、昔は楽しかったと思うか？」
「な、何ですか」
黒猫に弄ばれ続ける虚空が、じっと月見を見つめる
「過去はいつだって楽しいものです、そんなの当たり前じゃないで

すか！」
「……ふむ、確かにそうじゃな」
「本当に当たり前ですよ！　この色白変人！」
勢いそのままに立ち上がって、月見は拳を握る
「もういいです、はぐらかすばっかりで！　コクワガタさんなんかに話したボクがバカでした、自分で何とかしますよコクワバカさん！」
「……」
コクワバカ？
虚空は眉間にしわを寄せて黙る
「はぐらかしているつもりはないのじゃが、その前に…」
虚空はぐいと美也の首根っこを掴んで、立ち上がる
「みゃー？」
そのまま猫娘を部屋の外に追い出し、パシ、と戸を閉じる
部屋の向こうからかりかりかりかりという音と、悲痛な鳴き声が聞こえてきた
「鬱陶しいわ」
「うわーん、虚空ちゃん追い出さないでよー！」
人型なのだから普通に襖を開けてくればいいんじゃ……と月見は思う

虚空は珍しく苛立たしげに、壁の杉柱を叩く
「来い、寝太郎、木実！」
何度かが叩いていると、まるで柱が腫れるように膨らんでいった
「早く来ないと屋敷に火をつけるぞ阿呆共が」
すると、月見の見ている前で柱から枝が伸びてゆく
それらはまるで真水に落ちた朱墨のように薄まりながら広がり、気が付いたときには二人の人間の形となって現れていた
ほんの一瞬で、男と女とその中央に枝の生えた囲碁盤が虚空の部屋に実っていた

「な、何ですか！？」
目を丸くする月見に構わず、女は唇を尖らせる
木実「あらぁ寝太郎さま、私まだ打ってないのに二手ですよ、もー」
寝太「すべては夢の中のこと……」
囲碁盤を虚空が思いっきり蹴り上げる
白黒の碁石が部屋の中に散乱し、そこでようやく女――お地母ノ木実は気づいたように片手を上げた
木実「あらこんにちは虚空くん、相変わらず白いね」
「何をのん気に人の屋敷の柱の中で五目並べなどやっておる、あの黒猫を連れてとっとと天に帰れ」
戸をひっかく音が、まるで可哀想な少女の泣き声のように聞こえてくる
木実「でもこの屋敷、神を呼び込むほどの奉納点の薫りが強くて、居心地良いんだもの」
「知るか」
木実「ほらブドウあげるから」
お地母ノ木実が柱に手を当てた場所からツタが伸び、瞬く間に天井を覆い尽くすと、そのツタから何房も青紫の果物が垂れ下がってゆく
木実「ね？」
「……今すぐ戻せ」
月見が虚空に耳打ちした

「あ、あの、この人たちって、神様、ですよね、何でこんなホイホイと登場するんですか？」
「余は物心ついた時から神に語りかける事が出来た、寝太郎、早くその二人を連れてゆけ」
「え、ええ！」
虚空の声にも、木霊ノ寝太郎はぴくりと動かない
「寝ているのか、こやつ……」

お地母ノ木実がくすりと笑う
木実「あらいけないわよ虚空くん、ちゃんと”お父さん”って言わないとね」
「……月見、蔵からまさかりを持って来い、良い薪があるぞ」
寝太郎と木実は、蕾がしぼむように柱の中に戻ってゆく
それと同時に、廊下の声もなくなったようだ

虚空はため息をついて、一切後片付けをしていかなかった寝太郎たちを恨む
「やかましくて敵わんな…」
「……昔からずっと人間離れした変人だと思ってましたけど、コクワガタさんやっぱり人間じゃなかったんですね」
「そう思ってもらっても構わんがな」
虚空はいまだ垂れ下がるたわわな果実に指を触れる
神が去っていった時と同じく、ツタは少しずつ柱の中に沈んでゆくやがて、最後のブドウが水面に溶けるように吸い込まれていった
「え、えええ！？」
それは虚空の力の片鱗であった
「望めば、枯れ木に花を咲かせるぐらいの芸当は出来る、そなたもだがな、もはや壬生川家とはそういう者たちなのじゃよ、人間の幸せなど叶わぬと知れ」
虚空は左右に目を走らせ、それから月見を見た

切れ長の瞳が、月見を嘗める
「……何ですか？」
虚空は月見に寄る
「な、何近づいてきているんですか！」
「月見よ、余は助言というものはあまり好きではないのだ、じゃがお主は格別に阿呆じゃ、見ているとこちらが不安になってくる、言わせてもらうぞ」
虚空は少し息を吸い込んで、月見をそっと抱きしめる
突然の事態に、月見は顔を真っ赤にしていたが、虚空が放った言葉はそれ以上に衝撃的な意味を持っていた
「ほたるの変貌は竜子の仕業じゃ、お主に出来ることは何もない、あの娘はもはやお主の手に負える相手ではないのじゃ、深入りするな、死ぬぞ」
「……あ、あなたは、一体何を知っているって言うんですか……？」
月見は虚空の胸元を押し、離れて自分の体を抱く

「忠告はしたぞ」
「そんな、お姉様はそんな人じゃありません！　もしそうだったとしても、何か考えがあるんです！　決まってます！」
部屋を出て戸を後ろ手にしめて、月見は荒い息をつく
その額には秋も半ばだというのに、雨露のような汗が浮かんでいた
肩が優しく撫でられる

「ひっ――」
廊下、身をよじって振り向いた先には、微笑を浮かべる竜子（たつこ）
微塵も気配を感じなかったのに
「何をそんなに驚いているのかしら」
「お、お姉様、ど、どうしてコクワガタさんの部屋の前に」

本当に聞きたかったのは、どうしてではない
いつから、だ
「最近ずいぶん彼と仲が良いみたいね、何を話していたの月見」
どこまで聞かれていたのか、月見の心臓が焦りに心拍数を増す
「仲が良いだなんて、ちっ、違います！」
「……そう」
能面のような微笑を続けながら、竜子は月見の腰に腕を回す
大胆な素振りも、まるで自分を縛り付けるためのもののように思えて、月見は己を恥じる

そうだ、目の前に優しい竜子がいる
そのことだけで月見は、自分を取り巻く全ての悩みから開放されてゆくのを感じた
自分には竜子がいる、それは何て心強いことなのだろう
「そういえば貴方、今月元服の儀だったわね、おめでとう月見」
虚空は竜子が近くにいたからこそ、誰にも聞かれないようにあんな助言を与えてきたのだろう
だがしかし、深入りしないというのは月見にとっては姉を見捨てる事も同然だ
「お姉様、ボク、お姉様には感謝しているんです」
「……なぁに、急に」
風も冷たくなってきた壬生川家の廊下を、竜子とふたり、歩く
「だからお姉様が何をしていても、ボクはそれがお姉様に必要なことなんだって、思うことにします！　ボクはもうお姉様に心酔してますから、何でもして欲しいことがあったら言ってくださいね！」
最後まで竜子が間違いを犯すはずがない、と月見は思う
竜子の手を振り解いて、月見は少し離れて頭を下げる
「ボク先に出陣の用意をしてきますね！　お姉様はどうかごゆっくりなさってください！」

竜子のことが例え信じ切れなくても、その奇行すらも竜子を形作るものの一つなのだと思えば、月見は少しだけ楽になれる気がしていた

すがって生きていけば幸せになれると考えていたのは、昔のことだもう自分は元服した、これからふたりで少しずつ変えていけばいいのだ、そうしていつか竜子の心の支えになれたら良いと思う

すべてが竜子の手のひらの上だと分かっていても、月見は今はそれで良かった

第十話－７　「傀儡」　１０２５年１０月中編

＜壬生川家・居間＞

「皆様、お庭のモミジが色づき始めましたよ！　モミジの紅に負けないよう、心もバーンとォ！燃やしましょ」
満面の笑みを浮かべて、イツ花が告げる

壬生川家の居間、隙間風が吹くほどに人口密度が薄い
「そうそう！　漢方薬の蛇鞭毒ってのが新しくお店に並びましたァ！　ジャベンドク、って言うんですよ、それにしても毒だなんて何だかチョット怖いですね！」
静まり返っている屋敷に、イツ花の能天気に明るい声だけがやたらと響く
その光景は、控えめに言っても相当怖い
しかしよく見れば、居間の机の上に何かが居座っていた

「あと一つ！　宗教部門への今までの投資が大きく報われる時が来ました！」
手を叩き、頬を緩めるイツ花
その視線の先に入るのは、湯飲み二つに立てかけてある腹話人形
ほたるが作ったやや目つきの悪い瑞穂人形であった

「壬生川家のご先祖様の霊をお慰めする、壬生川家のための神社が来月には完成するそうです！　社の名前は“永久に輝け、そして安らかに眠れ、壬生川の御魂よ神社”です！」

ひたすらに明るく明るく、イツ花は瑞穂人形に向かって喋りかける
「う〜ン…ちょっと名前が長いですかね？」
イツ花が眉間にしわを寄せて問う
瑞穂人形は、あたしゃそんなの知ったこっちゃないわよ、とばかりにあらぬ方向を見つめ続けていた
イツ花の笑顔が徐々に引きつりだす
先ほどから見ないようにしていた机の上の書き置きが、嫌でも目に入ってくる
ほたるは筆をほんの先端しか使わず、その上に墨をケチるので、繊細というよりは何とも薄っぺらい印象を受ける
そんな書体で綴られていた一行

『イツ花さん、ちょっと出陣してきますね。瑞穂さんをよろしくお願いします（はーとまーく』

最後のマークがさらに薄情感を演出していた
「や、やっぱり、御魂神社とか簡素な方が、あの、呼びやすい、です、よねぇぇうわぁぁん」
イツ花の笑顔が崩れ、まるでたっぷり砂の詰まっていたアサリを噛んだように悲痛な表情に切り替わる
「う、うっ……ど〜して私にお見送りをさせてくれないんですか！　私って交神（こうしん）の儀しか役に立たないンですかッ！　うわぁん瑞穂さまァ〜」

起きたら屋敷に誰もいなかったというのは、壬生川家に七年間仕えてきて、初めての仕打ちであった
起こしてすらくれなかったなんて

＜親王鎮魂墓＞

「今月は最後の一個の時登りの笛を持ってきて、最下層まで攻略する気満々で今ボクたちは親王鎮魂墓（しんのうちんこんぼ）にやってきています！」

「誰に言っておる」

あさってを向いてハキハキと言う月見に、虚空が怪訝な顔を向ける

四人――ほたる、竜子（たつこ）、月見（つきみ）、虚空（こくう）がやってきたのは、呪われた古墳であった

ほたると竜子が先をゆき、その後ろ姿を見失わない程度の距離を保ちながら、月見と虚空が付いていく

「ふむ……何とも、外はまことに魑魅魍魎だらけじゃのう」

選考試合を除けば本来は今回が初陣の虚空が、桃木の槍をかつぎながらつぶやく

「４ヶ月才で初陣って相当遅いですよね！　もしかして壬生川一族史上、最大の引きこもりじゃないですかコクワガタさん！　壬生川オブ引きこもり大賞！」

なぜか嬉しそうに言う月見に、虚空がぐったり返す

「余は知らん、ほたるに言え……そもそもじゃな、月見」

「なーんでーすかー？」

「お主、なぜ前で竜子らと共に行かぬのだ？」

先導する竜子とほたるに合流せずに、いつまでも虚空の斜め後ろを月見は歩く

虚空の傍にしおらしく居るのは、珍しくて仕方なかった

「そ、それは……」

月見が奥津ノ薙刀を抱えて口ごもる

「もしやお主……！」

若者とは思えない枯れた仕草で虚空が宙を仰ぎ見、疲れたように首を振る
「……いや、少し気持ち悪い想像をしてしまった……余が悪かった、許せ」
「何だかすっごい失礼な妄想をされた気がします！」
髪を逆立たせて語調を荒げるが、それでも虚空の近くから離れようとしない
「余はまこと珍妙な者に好かれるのじゃな……虚空とは、何もないという意味じゃが、何もないからこそ隙間に入ってこようとするのじゃろうか……！」
「あなただって初めて壬生川家に来たばかりの頃は、よっぽどキッツいキャラだったじゃないですか！　何今さら常識人ぶってっていうか、大体好いてませんから！」
「……それは瑞穂の教育の賜物じゃろうな、忌々しい」
性格も矯正されるほど強烈な“訓練”を、叩き込まれたらしい
「そういえばコクワガタさん、あの人とお姉様には、相当痛めつけられてましたよね、本っ当に良い気味でした！」
「人間とはよく分からん生き物じゃ、些細なものにこだわり、時に大事を見失い、そして屋敷に来たばかりの純粋な神の子の未来を奪おうとする」

しみじみ語りだす

「コクワガタさんって自虐ネタ結構似合いますね」
「こういうのは皮肉と言わんか！？」
叫ぶ虚空に、月見が意外そうな顔を向ける
「えっ、コクワガタさんも、皮肉とか言ったりするんですか？　この世のことなんて全てお見通し、余に恐ろしいものなど何もないガッハッハって顔をして！」
「そんな事は無い、まぁ何事も“やってみて出来なかったと思った

ことがない”から、そんな風に見えるのじゃろう」
虚空の物言いに、月見は口元に手を当てて微かに笑う
「何ですかそれ、今までバカだバカだ言ってましたけど、まるで子供じゃないですか」
「お主の言っている事はよく分からんが、そういうものじゃろう？」
大真面目な言葉に、月見は思わず微笑みをこぼした
「……ボク今まで誤解してたかもしれません、コクワガタさんって、もしかして、ものすっごく単純な人なんですね」
「は？」
無防備に間抜けな顔をさらした虚空の背中を、月見が強く叩く
「な、何じゃ？」
「この月見おねーさんに単純って言われるようじゃ、ダメですね虚空さん！　あはは」
「……阿呆の考えは分からんが、そろそろ鬼らが現れるぞ、用心せいよ」
「分かってますよ！　バカにしないでくださいこのカマキリ人間！」
「余は怪人か？」
「あなたは雄だから、雌にバリバリ食われて死にますね今月辺り」
「よく分からんが、お主がそれを言うと殺人予告にも聞こえるのだが……」

「……後ろは、騒がしいわね」
「そうだね、仲が良いよね」
竜子に微笑みかけるほたる
鬼の巣窟の中、左手に雨切り弓を持ちながらも、壬生川家の十代目当主は右手に柚子（ゆずこ）の人形をはめていた
ニコニコと微笑むほたるの手首を引きながら、竜子

「そういえば先ほど、一気に金色館に飛べる仕掛けを見つけたのだけれど、虚空の成長のためにも本筋を通っていこうと思ったから言わなかったの、良いよね？」
「うん」
「そう、良かった」
月見と虚空が駆け寄ってくる、もうじき四面の階段に到着する
竜子は振り返って、はにかみながらほたるの手を取った
「じゃあ行きましょう、お母さん」

かくして四人はさほど苦戦するわけでもなく、土偶器を打ち倒し、封の間、奥に潜むアガラ封印像を竜子の拳が破壊した

今月の目的は四本目の髪の打倒

一同は金色館に足を踏み入れた……

第十話－8　「柱屈」　１０２５年１０月後編

＜金色館＞

全面が金箔に覆われ、眩いほどの輝きを放つ館の中に一同は侵入する
ほたる以外の三人は、初めて訪れる迷宮
消えた火はすでに五つ、時登りの笛がまだ残っているとは言え、先へ続く道を見つけない事には安心が出来ない

「ふうむ、あやつらがおどろ大将らか」
柱の影から見上げると、赤黒い巨漢の鬼たちが遠くをうろついているのが見えた
天魔大将に比類する格を持つ剛鬼である
「甘く見ると、今月誰かが死ぬかもしれんの」
「今からボス二連戦なのに、誰が甘く見るんですか！」
虚空（こくう）の傍で月見（つきみ）が怒鳴る
「そうじゃな」
こうして一同は白鏡と黒鏡の術を唱え、鬼たちを巧みに交わしながら、奥へ進む階段を探し始めた

金色の館に、黄川人（きつと）の声が響く
『そういえばこの古墳の伝説はまだ話していなかったけれど、今の君たちにぴったりかもしれないね』
どこから聞こえてくるのか分からないその声は、空虚に楽しそうだ

口をへの字に結んで辺りを見回す月見に、竜子（たつこ）が「気にしない事よ」と告げる
『チョット長くなるけど、まぁ退屈しのぎにでも耳を貸してよ』
「奥へ進む道もまだ見つからんことだしな」
虚空が相槌を打つ

『じゃ始めるよ、１００年ほど前、当時の帝にはよくできた弟がいたのさ、そりゃもう優しくて、強くてカッコ良かった、要するに出来の良い兄弟ってやつだね』
出来の良い兄弟
黄川人が意味深に付け加えたその言葉は、柚子と瑞穂か、あるいは竜子と月見か
『弟は民衆に人気があった、だからそれを妬んだ兄に無実の罪で捕らえられ、ここに生き埋めにされたんだ』
「……酷い事をするものね」
感情の篭ってない声で竜子がつぶやく
ちらりと虚空が竜子に目をやるが、幸家宗主の顔はいつもと変わらず涼しげだ

『本人はなぜ自分がそんな酷い目に遭わなきゃ分からずじまい……生きながら地中深くに閉じ込められる気分が想像できるかい？　少しずつ飢えで起きるのが苦しくなり、意識が朦朧としてくる……白濁する視界の中、次第に自分が生きているのか死んでいるのかも分からなくなるんだ……』
黄川人の声に熱が入る
『誰を恨めば良いのかも分からなくなり、安穏と生きている輩、この世の全てが憎くなる……そりゃもう、物の見事にたたったねェ！　で、時の帝が大慌てで造ったのが、この馬鹿げた大きさのお墓ってわけサ、アハハ……もちろん見ての通り皆目、効果はなかったけどね』

無言で歩く壬生川（みぶがわ）一族の胸中をよそに、黄川人は笑う
『今さら立派な墓を造られたって、素直におネンネなんかできっこないに決まっているのにね、恨むなってほうが無理がある！　アハハハハ……だから　ボクが鬼にしてあげた！』
「悪いのはあなたじゃないですかっ！」
月見が叫んだため、声に気づいたおどろ大将たちがズンズンと迫ってきた
走って逃げながら、虚空は顔を押さえてため息をつく
「おぬし……」
「だ、だって！」

そんな光景を見ていたのか、黄川人が静かに続ける

『この奥で眠っている男は、日頃は人のいい物静かなヤツなんだ、ところが君たちみたいに仲良くじゃれあってる家族を見ると、なぜか虫酸が走るらしくてね……』
「誰が仲良しじゃ！」
「そうですよ！　決してボクたちは仲良くなんてありません！」
走りながら怒鳴る二人
少しの間、妙な間が空く

咳払いのような音が聞こえてきた
『……仲良くじゃれあっている家族を見ると、なぜか虫唾が走るらしくてね、途端に暴れだしてボクでも手がつけられなくなる』
その時、竜子が部屋の中央に光る床を見つけ出す
「……もしかして、これ？」
階段ではなく奥へと進むのは、途中にあった転送装置だったのか
「さ、さすがお姉様！」
「どうりで見つからないわけじゃったな」
時登りの笛を使い、すでに時計の炎はあと三つ、ボス戦を含めた

ら髪に挑む時間はもうギリギリだ

急いで金色館内部に飛ぶ直前、黄川人の声が耳に届く

『兄弟に裏切られるのはカクベツ堪えるものなのサ……』

ふと、竜子が思う

もしかしたら、瑞穂（みずほ）も今頃鬼になって白骨城（はっこつじょう）を徘徊しているのかもしれないわね、などと考えたが、くだらないことだとほたるの手を引きながら、すぐに忘却した

＜鎮魂の間＞

鎮魂の間に入ってすぐ、奥に一体の像が安置されているのが見えた

鎮魂墓に納められたよりしろは、親王をかたどった埴輪だ

「ふむ、盗掘にも遭わず今まで生き延びたか」

虚空が不用意に近づく

「こんな地中深くまで墓を荒らしに来る、根性のある犯罪者なんて居ませんよ、何匹鬼を相手にする気ですかその猛者は！」

「しかし、とある山登りはそこに山があるから登ると言う、ならば、盗掘師も墓があるなら盗まずには居られまい」

「ロマンで漁っているわけじゃないと思いますがあの人たちは」

月見も呆れる

虚空は恐らく本気で言っているのだ、何ともツッコミ辛い

近くで見ると、埴輪は古代の剣を構えた一人の英霊を模していた

黄金の鎧に覆われた青銅の肌を持つ兵士、その面相はまるで憤怒

の形相だ
　これがかの崇良親王を祭った像だろう
「殺した人間を時代が守護神扱いしてもな、確かに殺された当人は良い迷惑であろう」
　顔をぺたぺた触っていると、親王の像の目がぎょろりと虚空を見た
「コクワガタさん！？」
　振るわれた刀を、虚空は背後に跳躍して避ける
「寝起きの悪い王じゃ」
　目つきの悪い男に顔を触られていては、それは怒るというものだろう、と月見は思う
「近づく者全てを殺戮する祟り神と化しているわ、もうダメね」
　竜子が有罪を告げるようにつぶやく

　親王は両手を掲げ、巨大な咆哮を上げる
　段々とその体躯が膨らんでゆく、まるで見上げ入道だ
「お、大きな方だったんですね！」
「良い身分で生まれた者は、恨み方まで派手じゃのう」
　戯言を口走るふたりの前で、山をも分断出来そうな大刀を構えた親王が、歯の間からうめき声を漏らす
　不気味な重圧感に押される一同の横、竜子がスッと前に出る
「兄に裏切られたのはさぞかし悲しかろうが、今の貴公はただの鬼の手先、ただの障害」
　拳を固め、竜子が地を蹴る
「行くわ」
　崇良親王の矛がギラリと輝き、竜子は虎のように襲い掛かる

　竜子は親王にまとわり付くように懐に入り、＜石猿＞を詠唱する
「涼さかや・猿に弾ける鬼の爪……」
　月見がそれに続き、密閉された鎮魂の間に二人の呪言が反響する、

虚空はそんな二人を眺めながら仁王水を振り撒いた
親王が荒々しく矛を振り回し、その一列攻撃で前にいた竜子や月見の体が切り裂かれた
「月見下がりなさい、前は私一人で十分よ」
「は、はい……！」

嵐と竜の戦いが始まった
猛然と暴風は矛を振り乱すが、気流に乗る竜には掠りもしない
緩急をつけて飛び回りながら竜は次々と術を唱える、＜石猿＞に＜梵ピン＞、そして＜春菜＞や＜速鳥＞、親王は彼女を打ち落とそうと暴れるが、暴れるほどに竜子は涼しい目でそれを避ける

やがて、皆の打撃が少しずつ崇良親王を削ってゆく
金色の鎧が剥げ、緑の肌がむき出しになると、親王は苦しげな声を出す
親王「だれか……」

竜子が命じると、ほたるの弓に神気が集まってゆく
親王「だれか俺を止めてくれい…」

「……」
放たれた水の矢が、親王の身体を貫き、跡形も無く吹き飛ばした

親王の消えた後を眺めていた月見の頭を、叩く
「あ、ごめんなさいお姉さ……」
「何をやっておる、竜子ならほたると共に先に行ったぞ」
月見が思いっきり虚空の足を踏みつけてきた
「な、なんじゃおぬし！」

「何でもないです！　別にお兄さんに裏切られてこんなところに閉じ込められて鬼にされたあの人が可哀想だなんて、誰も思ってません！」

肩を怒らせて、奥に進んでゆく

「全部言っているではないか……」

奥の扉を開き、古墳の最深部へと足を進める

＜奈の印＞

最終階に待ち構えていたのは、先ほど崇良親王についての伝説を語っていた黄川人――朱点童子（しゅてんどうじ）であった

「やッ、早かったね」

「弱かったから」

竜子の短い言葉に朱点童子は笑う

「弱かったから、か、そりゃ結構だ、君たちもずいぶんらしくなってきたじゃないか！」

「……」

朱点童子は両手を広げながら、その場に浮かび上がる

「勝手に神の子に奉り上げられたあげく、人間の恨みまでかって、おまけに目の前で親を殺された赤ン坊……その子が最初に覚えた言葉が“復讐”だ、どう育ったかは想像できるだろ？」

彼が話しているのは、神が人間界に送った子の話だ

「アハハハ…それにその子はね、なんと本物の神の子だったんだからチカラは有り余ってた！　天界もこれには焦ったんだろうね、強

靭なだけがとりえの鬼を選んで、その体に閉じ込めたのサ」
そしてそれは、彼自身の話であった
話が現在に繋がった

「あそこから出るのは大変だった……蘭（らん）、以蔵（いぞう）、夢見（ゆめみ）、鈴鹿（すずか）の四人だったかな、君たちが来てくれなければ、まだボクはあいつの中だろうね」
「……そうか、朱点、おぬしは……」
言うなれば、神に仇なした反逆者
朱点童子は手を挙げて、大地に描かれた陣の封印を開く

「だからボク、君たちには感謝すらしているんだよ！」
異質な緑色の光が広間を包む
沼のような陣から這い出してきた蛇は、青銅の鱗に包まれた兵器のような髪であった
薄く開いた四つの眼が、先頭に立つ竜子をねめつける

七つ髪、四番目の龍である
壬生川一族は構えた

三回のボス戦を越えた後の髪戦は、熾烈を極めた

髪は＜赤地獄＞を放ちながら、執拗に十代目当主ほたるを狙う
しかし壬生川一族は早々に三回の＜石猿＞を唱え終わると、対髪戦用に練り上げた戦術に基づき、今度は＜梵ピン＞及び力士水の使用に移る
四人が一つの個体のように、誰もが誰かを補いながら勝機を積み上げてゆく
個が消え、一族はただの刃となった

七つ髪の頭を竜子の必殺の蹴りが砕く
「しぶといわね」
１９４７のダメージを受けても崩れない七つ髪に、ほたるの連弾弓が突き刺さった
七つ髪はまだ、倒れない
はちきれそうなほどに巨躯を脈動させながら、四人を押しつぶそうともがく

半年ほど前に初めて髪に挑んだ壬生川家とはもう、何もかもが違っていた
狩るのは一族であり、狩られる獣は龍であった

「おやすみなさい」
七つ髪の胴を、竜子の飛天脚（ひてんきゃく）が断ち切る

闇に崩れてゆく龍を背に、壬生川の竜が髪をかきあげる
二度の奥義を放っても尚、彼女の瞳には冷淡な色が宿っていた

こうして、
常に過去最強であることを証明し続けてきた壬生川一族は、七つ髪を打倒した

七ツ髪を討ち取った！
残る髪はあと３本！

第十話－8　「枉屈」　１０２５年１０月後編（後書き）

出陣・親王鎮魂墓（ほたる・竜子・月見・虚空）
元服→月見　七ツ髪・打倒

第十話－９　「烈日」　１０２５年１１月前編（前書き）

ほたる　１才７ヶ月
竜子　　１才

月見　　９ヶ月
虚空　　５ヶ月

第十話－９　「烈日」　１０２５年１１月前編

太陽はまだ高い
霜月とは、神無月の「かみ」に対して「しも」を表す対義語なのだと言う
虚空（こくう）はそう母親から教わった
ほたるは言った、自分は物知りだった虚空のお爺ちゃんから、様々な言葉を習いましたの、と
居間から、霜が降りるにはまだ早い庭を見下ろしながら、虚空は思う
「余は、ほたるから何を学び取ったのであろうな」
月見がいないだけで、ずいぶんと屋敷は静かに思えた、足元にじゃれつく美也を無視するのも慣れたものだ

虚空は自分の事を人間だと思ったことは、一度もない
神々の棲まう国で生まれ、下界に降りても尚、彼には神の声が聞こえた
人ならざるモノの領域を超えた虚空が、そうではない人たちと心を通わせることは出来ない
虚空の心は壬生川を離れ、彼が家族と思う人はこの世界にはいない、ただ“利害の一致した仲間”がいるだけだった
ただ、ほたるが言ったあの男に、自分でも似ているとは感じる
壬生川家五代目当主、壬生川以蔵（みぶがわいぞう）
朱点童子（しゅてんどうじ）の名を騙った鬼を討ち取ったがその呪いは晴れず、次々と戦友が死に絶える中、修羅界に身を堕としてまで死後、白骨城で鬼を狩る鬼斬り以蔵
戦記を読み解くと、五代目がどれほど壮絶な人生を歩んだかと身

震いする

「……奴は独りで死に、独りで鬼を斬る」

自分も同じだ、自分には感情の機微がない

誰にもすがらず、大事なものもなく、独りで生きて独りで死ぬのだ

虚空を呼ぶ声がした

～～

足の指をちろちろ舐め始めた鬱陶しい美也の背を踏みつけつつ、振り返る

「ほたるか」

足元から蛙のつぶれたような鳴き声が聞こえるが、特に気にはならない

「うん、どうしたのこんなところで？」

ほたるが妙な声色を使って話しかけてくるのを、虚空は何の感慨もなく受け止める

「何もしておらんよ、ただ庭を見ておった」

「そっかぁ」

傀儡を操るように、竜子（たつこ）がほたるに施した呪の正体は、かつて虚空にも見えていた

首にまきついた赤い糸のような術だ

しかし、今はその痕跡すらもない

「さっきわたしね、竜子さんに子供を引き取って欲しいって頼まれたんだ」

「ほう、来おったか」

「ううん、まだだけど、もうすぐかな？」

相手はただの人間ではない
例え無防備だとしても壬生川家十代目当主を相手に、これほどまで強力な術を施す事など、一体、どれほどの狂気があの者の心を渦巻いているのか
「だから、うん……ちょっと、行って来るね」
「ああ、達者でのう」
ほたるは伏せ目がちな瞳を上げて、しばらく虚空を見つめていた
技の風を極めた術の天才が創ったその呪いは、虚空にも解くことは出来ない
ただ、ほたるが自力で術を破るのを待つしかないのだ

去ってゆく母親の背を眺めながら、つぶやく
「余には、関わり合いのない事じゃがな」
竜子がほたるをどうしようと、虚空にとってはどうでもいいことだった
壬生川家を訪れてから少しずつ、上流から下流に水が流れるように、虚空の現世への興味は失せてゆく

虚空――その名は徐々に、彼自身となりつつあった

＜儀礼の間＞

「当主さま、ついに商業部門のすべての店が最高の品揃えになりました！　武器や防具の供給も安定！　もう商業部門への投資は必要なし！　大丈夫！　ゼンゼン心配いりません！」
早口で呪文のように唱えるイツ花に、ほたるが目を丸くする
「えーと……良い武器が沢山手に入るようになった、ってことです

の？」
「ええ！　早速月見さまが都にお買い物に行かれてるようです」
さすが瑞穂（みずほ）の娘、行動が早いと、ほたるは感心してしまう
「そしてさらに今月は、光無ノ刑人様から新しいご家族を預かって参りました！」
「うふふ、嬉しいことですの」
手を叩いて喜ぶほたるを、イツ花はあれれ？　と見つめる
「あ、あの、当主さま？」
「何ですの？」
「あ、いえ、何でも……ああそうそう！　おめでとうございます！　男のお子様です！」

竜子と刑人の子、幸家（こうけ）の跡継ぎは久しぶりの男子となった

「あら、男の子ですか」
「先ほど光無ノ刑人様が直々に届けてくださいました！　というわけで！」

イツ花が襖を開くと、浅黒い肌をした赤い髪の少年が、かわいらしく一礼する
顔を上げると、品の良さそうな垂れ下がった大きな瞳に、緑色の意思の強さが宿っていた
ニコニコと微笑むほたるに、少年がもう一度頭を下げる

少年「初めまして！　ぼく壬生川家のために力を尽くします！」

久しぶりの、本当に久しぶりの性格の良さそうな少年を見て、ほたるは目を細める
（竜子様には全然似てませんけれど、でも可愛い子ですの）

少年の名はその真っ赤な髪から取った烈（れつ）
そして職業は、幸家の男子が代々受け継いできた剣士となった

「はい！　ぼく頑張ります！」
「久しぶりの、正統派な子で私もちょっと安心しますの」
「はい？」
「あ、いえ、こちらの話ですの」
手をぱたぱた振るほたるに、イツ花が苦笑しながらつぶやく
「まだオッパイを欲しがられて、ちょっと困っていますけど」
「あーもう！　何でそういうこと言うのさー！」
イツ花さんのばかー！と口を尖らせるそんな態度も、少し安心してしまう

「って……まだ、オッパイ？」
もしかしてこの場合、私が……？
そんなことが頭をよぎり、さすがに微笑みが強ばってゆく
このままでは１８禁になってしまう

「も、もう大丈夫だよ！　真に受けないでよお母さん、もー！」
「え、ええ……それは安心しましたの」
「あはは」
ころころとめまぐるしく変わる表情が豊かな、そんな少年であった

第十話－１０　「劣位」　１０２５年１１月中編

＜出陣＞

「あれ虚空さん、六代目の槍はどうしたんですか？」
先に門を出て待っていた虚空を見つけて、道具袋を背負った月見が小走りで駆け寄る
「桃木の槍は置いてきた、元々あれは身に着けておれば技や心の成長速度が上がるというもの、攻撃力のために持っていたわけではない」
「なるほど、レベルアップする事にボーナスポイントが入るんですね、あの福の効果は」
「……要はそういうことじゃが！」
ざっくりまとめる月見に思わず怒鳴る
桃木の槍よりも一回り大きな槍を肩に担ぎなおし、虚空は話を進める
「武具はそれぞれに合った物があるからのう、これは余のために作らせた唯一品、さばえノ槍よ」
「あ、お姉様出てきました、おねえさまー！」
その言葉をまるっきり無視して、月見は玄関に向かって大きく手を振る

虚空は何か言いたそうな顔をしていたが、やがて諦めたように月見の視線の先を追った、何とも自分のペースで進む娘だ
「なかなか出てこんな」
「当主さまとお喋りしてますね」
今月の出陣は三人で行う、ほたるは烈の訓練のため在邸だ

遠くから覗けば、玄関でほたると竜子（たつこ）が仲良くお喋りをしているように、見えた
何となく、虚空と月見は黙ってしまう
早朝、１１月の風は冷たく乾いていて、冬の訪れを感じる

「……先に行くか」
「あ、でも」
「すぐに追いついてくるじゃろう、行くぞ」
「ちょっと、引っ張らないでくださいよっ！」
「おぬし」
「何ですか！」
「力弱いのう」
「ほ、放っておいてください！」
「本当にそれで力を入れておるのか？　余より４ヶ月早生まれじゃろう」
「だから何だって言うんですかっ、かの佐和（さわ）さまと三代目や、夢見（ゆめみ）さまと五代目だって４ヶ月差でしたよ！」
突然以蔵（いぞう）の名が出てきて、虚空は思わず月見の手首を離した
「ふぎゃ」
勢いづいた月見が、顔から地べたに突っ込む
「しかし余は幸家（こうけ）の人間ではないしのう、どうしたそなた面白い顔をして」
「こ、この……急に離すからぁ！」
泥を飛ばしながら薙刀を振りかぶる月見、その髪は当然尖っている
（……面白いな）
ムキになる月見の印象が、自分の尾をひたすら追い続ける犬と重なってくる
「む、むっ」
月見は薙刀を振り下ろそうとする体勢のまま固まる

「は、お姉様！」
「楽しそうね」
穂先を掴んでいた竜子が、肩越しに微笑む
「もう用事は良いんですか！？」
「ええ、待たせて悪かったわね、参りましょう」
「はい！」
元気良く返事をする

「……」
そのふたりの後を、虚空は気乗りしない顔で追う

＜九重楼への道＞

道中、月見から交代で運んでいる携帯袋を受け取り、虚空は眉根を寄せる
「……ん？　やけに水が多いのう」
袋を覗き込む、力士水や仁王水だけではないようだ
「のう、月……」
顔を上げると、月見はもう竜子の横に並んでいた
その横顔は、幸せそうだ
「……ふむ」
まぁ良いか、と携帯袋を背負いなおす
七天門に続く道を立ちふさぐ鬼を切り、三人は八起苑を越え、九重楼（くじゅうろう）への門を開いた
暗闇の塔に光が差し込む

「あのー、コクワガタさんー！」

「何じゃ」
竜子の袖にじゃれつきながら、月見が遅れて付いてくる虚空に声かける
「何でひとりだけ離れているんですかー！」
「後方からの奇襲を警戒しておる」
「こんな序盤で何を言っているんですか！」
しれっと答える虚空に、月見が叫ぶ

「行くわよ、月見」
「あ、でも」
「来なさい」
駆け寄りながらも、月見はふと気づく
もしかして、虚空と竜子の仲は険悪なのだろうか
確かに考えてみれば、屋敷を出て以来ふたりは一言も口をかわしていない
「どうしたの、わたしの顔をちらちら見て」
「あ、いやあのえーっと……」
急に、居心地の悪さが這い回る
「何でもないですよ！　あは、あはは」
「……何と古典的な誤魔化し」
後ろからそんな虚空のつぶやきが聞こえてきた

階段を登る塔内部、虚空が竜子に並んだ
「竜子よ」
「何かしら」
窓から降る陽光に反射して、鴉の羽のように長い髪が輝く
「今月は三人じゃが、それでも髪切りか？」
「ええ、勿論」
竜子は迷いなく言い切る

「風神雷神を倒し、さらにあの龍か……やれやれ帰りは遅くなりそうじゃな」
「期待しているわ、虚空」
「余にその術は効かぬぞ」
「何の事？」
「余はまだ出陣三度目じゃ、あまり無理をさせるなよ」
槍を抱えて、今度は虚空が先に歩いてゆく

竜子の脇に身を寄せながら、月見が思う
（ぼ、ボクが、シリアスな雰囲気に耐え切れないだなんて！）
もしかして骨の髄までギャグ担当になってしまったのではないかと、不安になる
三者三様の思いは、塔を行く

＜風雷の間＞

雷電「おっ、来た来た」
太刀「おーっ、来たな来たな！」

細い橋を渡っていると、まるで子供のようなはしゃいだ声が聞こえてきた
「何じゃ？」
「歓迎されてます、よね……？」
「……」
竜子を先頭にし、その後ろで虚空と月見が怪訝そうな表情を浮かべながら付いていく

雷電「何だァ、どうした元気ねーなオイ、元気がなきゃ何にも出来ねーぞ！」
太刀「元気ですかーーッ！」

「の、ノリノリっ！？」
「……な、何と鬱陶しい奴らじゃ」
初めて見る変態相手に、さすがの虚空と月見もたじろぐ
雷電五郎と太刀風五郎は、己の筋肉を誇示するように空中でポーズを変えながら、高笑いをする
正直言って、あまり戦い相手ではなかった

雷電「ワッハッハ！　さて元気も出たところで」

「ボクたちも読者も置いてきぼりですよ！」
（……読者？）
竜子が内心首を傾げる

雷電「どうだい、朱点には勝てそうかい？　まッ、わしらにゃ関係ねェけどよ」

月見の怒鳴り声も意に介さず、独特のペースで話を進める

太刀「どんどん強くなるおまえたちを見るのは、けっこう楽しいぜ！　な、五郎！」
雷電「おうよ！　お前も五郎だけどな！」
太刀「ワハハ、違えねェ」

在りし日の力斗（りきと）を知らない一同は、ぐったりしながらその三文芝居を眺める

「……あ、ここにも」
特に竜子はまったく聞かず、枝毛探しで時間を潰していた
「緊張感ないのう」
「ほ、ホラホラ、来ますよお姉様、虚空さん！」
太鼓を担いだ雷電五郎が、風袋を持った太刀風五郎が笑いながら嬉しそうに吼える

雷電＆太刀風「さッ、今日もおけいこだ！」

戦いは当然、竜子の番から開始する
「＜石猿＞！」
死地に身を置いても変わることのない冷静さで、竜子は続けざまに＜梵ピン＞を唱える
虚空が仁王水を振りまき、月見が力士水を口に含む

太刀「ほォれカマイタチ！」

数条の刃が三人を切り裂く
続いて雷電五郎がその鋭いツメで竜子を狙うが、身を翻す彼女に触れることさえ出来ない
「＜梵ピン＞……さあ、行くわ」

雷電「オイ五郎！　こいつツメが当たらないゼ！」
太刀「じゃあお前は落雷だ！　吹っ飛べ竜巻攻撃！」

竜巻と落雷の同時攻撃に、一族の体力は根こそぎ奪われてゆく
これにはさしもの月見も膝をついた
「く……＜春菜＞です！」

焼け焦げた脚を押さえながら、顔を歪めて呪歌を読む
「無事か月見」
無意識に虚空は、月見の元へと駆け寄っていた
「な、なに珍しく気遣ってるんですか！　だだだだいじょうぶに決まっているじゃないですか！」
月見は脚をさすっていた左手を前に突き出した
行け、の合図
前では竜子がひとりで、二人の五郎を相手にしている
「ボクの心配は良いですから、お姉様を」
こんなときにまで、月見は竜子の身を案ずるのか
さばえノ槍を握りなおし、虚空は雷神に飛び掛った
「誰がおぬしのことなど心配するものか！」
今の行動は何と人間じみていたことか、虚空は恥じにも怒りにも似た感情を吐き出すように跳ぶ
「うおおおおおおお！」
虚空の槍は雷電五郎の胸に深々と突き刺さる

雷電「ぐおう」

雷電五郎が身じろぎ、太刀風五郎が虚空の怒号に目を向けたその瞬間、二柱の神は竜子を見失った

太刀「む、あの娘ッ子どこに消えた！？」

虚空が槍を引き抜き、血を撒き散らしながら雷電五郎の体から飛び退く
苦しむ雷電五郎の巨体に、影が落ちた
「ここよ」
太陽を背負って、高く高く跳躍した竜子が雷電五郎の顔面に必殺の飛び蹴りを叩き込む

紫の神が消滅する、と思ったのもつかの間、雷電五郎は踏みとどまっていた

雷電「根性があれば何だって出来るーー！」

最後のあがきにと無茶苦茶に放った雷光が、うずくまって術を唱えていた月見に直撃する

「月見！？」

「月見！」

竜子の拳と虚空の槍によって直後、雷電五郎は霧となった

ふたりは注視するが、月見はぴくりとも動かない

最悪の事態を、想像してしまう

太刀「油断は禁物だな、ワッハッハ！」

大口開けて笑う太刀風五郎

竜子は拳を振るわせる虚空の肩を掴む

「今は戦の最中よ」

怪我の度合いを確かめるのも、治癒を施すのも終わってからだ

「分かっておる」

竜子と虚空は太刀風五郎に挑みかかる

「臨――！」

「死ねえええええええええ！」

太刀風五郎が露と消えたのは、それから3ターン後だった

虚空は月見を抱き起こす

「月見……平気か」
動かない
「そんな阿呆な事があるか、おぬし、何故目を開けない……神の血脈があのような雷撃で途絶えるものか！」
頬を張るが、月見はまるで棄てられた人形のように力なく
「息は……まだ、あるな……しかし、このままでは」
竜子は髪をかきあげる
「仕方ないわね、二人で挑むのは難しいわ、戻りましょう」
淡々とした、いつも通りの冷静な声色
何一つ、動揺をしていない、少しだけ落胆している竜子の言葉
「……くっ！」
虚空は奥歯を噛み締めた
あれほど月見に慕われていようとも、竜子は何も感じないのだ
母を縛られても、何の感情も浮かべなかった虚空が、目を閉じる
何故、月見の笑顔が裏切られたと思うだけで、空だった自分の心に怒りや憎しみが生まれるのか
「……そうじゃ」
記憶の奥に、引っかかっていた糸をたぐる
虚空は月見を寝かせて、落ちている携帯袋を掴んだ
「もしかしたら……」
狼狽する虚空を、竜子は冷めた目で眺めている

力士水、仁王水の奥にあった水は、養老水だった
出てきた養老水は、全部で六本、それらは商業の発展により都で売り出されたものであった
その数に、虚空は思わず笑みを浮かべた、安心が声となってこぼれる
「月見、おぬしは何をそんなに心配しておったのか……」
これだけあれば、月見の健康度はたちどころに回復する
虚空は、嬉々と養老水を携帯袋に詰めながら姉に褒められる光景

を思い浮かべているであろう月見を想像しながら、その口に妙薬を運ぶ

しばらくして、月見は目を覚ました
月見は辺りを見回して竜子を見つけると、抱きつくようにしてその腕に駆け寄った
「……ご、ごめんなさい！　虚を突かれました！」
開口一番、月見は竜子に頭を下げる
竜子は一瞬だけ怪訝そうな表情を見せたが、すぐに微笑みながら首を横に振った
「あなたは良く戦ったわ、月見、そう堅くならずに」
「はい……」
今度は虚空が突っ立っている番だった
所在無げに槍と薙刀をそれぞれの手に持って、ふたりのうわべだけの――いや、竜子のうわべだけの慰めの言葉を聞いていた
「とにかく……まず戦闘中は、自分の体力を優先なさい」

ふたりの会話が途切れた頃、虚空がつぶやいた
「では戻るぞ、支度をせい」
「えっ、髪切りは？」
「……何を言っておる、先ほど重傷を負ったばかりで――」
竜子が月見の目を覗き込みながら、彼女の髪を撫でた
「……大丈夫なの、月見」
「は、はい！　全然平気です！」
上気して、月見が頷く
虚空は槍を掴んだ手に力を込める
「では、参りましょう、五本目の髪退治よ」
竜子は長い髪を後ろに流して、美麗に微笑む
「はい！　あ、虚空さん薙刀ありがとうございます」

「うむ」
月見は虚空から薙刀を受け取り、それから不思議そうに虚空に問いかけた
「虚空さん、何怒っているんですか？」
「……余が？　怒っておる？」
「ええ」
「何を阿呆な」
「……そうですよね、うん、よーし髪退治頑張りましょう！」
えいえいおーと腕を突き上げる、妙に元気な月見の後姿を見つめながら、虚空は静かにため息をついた
それは認めたくないが、確かなものとして自らの胸中を満たしているようだった
その心は紛れも無く、人間のものであった

第十話－１１　「七花八裂」　１０２５年１１月後編

＜無の印＞

長い橋を渡って、三人は曼荼羅のような文様の描かれた床の上に乗り込んだ
その途端、まるで地震のように足元が大きく揺れる
「うわ」
二畳ほどの丸い床は、浮遊しながら徐々にその高度を下げてゆく
「わ、罠じゃないですよね」
「恐らくね」
しばらく下っていると、やがて一同は金色の魔方陣が描かれた地へと到着した
浮遊台から降りると、前には朱点童子（しゅてんどうじ）が待ち構えていた

「やッ、今回は途中で帰っちゃうんじゃないかって、心配してたよ」
「帰りません！」
「元気が良いねまったく、さてそれじゃあ今月は、物語の核心に迫っていこう」

朱点童子は片目を瞑り、人差し指を立てる
「薄々気づいているんだろ？　既に君たちの力は神を超えようとしている」
「そうじゃな」
その力を常々実感している虚空（こくう）が、しっかりとうなずく

にんまりと笑いながら、朱点童子
「そう、ボクやキミのように……不思議だね、人と神が交わるとその子の力は神をも遥かに凌ぐ」
「……」
「天界のヤツらはそれを承知でボクを消すために、君たちを利用したってワケ……それしか手がなかったんだよ、要するに神なんてその程度の存在なのサ」
朱点童子のこの言葉は、後の虚空を大きく動かすこととなるのだが、それはまだ先のお話である

「アハハハ…ところで君たち！　仮にボクを運よく倒せたとしたら、次に消されるのはどこの誰かな？」
確信を持った口調に、月見（つきみ）が口を結びながら一歩下がる
「よーく考えてごらん、わかるだろ？」

その不気味なささやきが広場にこだましたその瞬間、金色の魔方陣が輝き出す
消え去った朱点童子の代わりに姿を現したのは、雷雲に覆われた青翠の龍だった

六ツ髪に向かい合う、三人の壬生川（みぶがわ）一族
この時点で健康度は、幸家（こうけ）の竜子（たつこ）が７９、臥家（がけ）の月見８２、香家（きょうけ）の虚空９４である

初手、六ツ髪が＜石猿＞を唱え出す
続くのは竜子、彼女が先手を奪われるのは稀な事で、額にはわずかな油汗が浮いていた
「……＜石猿＞」

鋭く風を切って印を結ぶその有様にも、疲れが目立つ
一度失われた健康度は、気合や根性では乗り越えられるものではない
「＜石猿＞行きます！」
技力だけは祖霊丹で回復したものの、健康度の戻りきらない月見が声を張り上げる
虚空の後、髪は再び石猿を唱え、こう着状態が続いた

竜子の梵ピン、月見、虚空の力士水の後、髪が唱えたのは＜萌子＞だった
「……何ですって」
さすがの竜子もこれには震えた
石猿の上からでも重い一列攻撃を叩き込んでくる龍が、攻撃力を倍加させた脅威
７００の生命力が一瞬で奪われるかもしれない恐怖は、竜子の記憶を揺り起こした
爆炎に焼き尽くされる母親、その光景がフラッシュバックする

「……月見、虚空、わたしは龍に合わせて術を唱えるわ、貴方達が仕留めなさい」
竜子の唇が＜石猿＞の呪歌を紡ぐ
「おぬし、何を考えておる」
槍を構え、六ツ髪の髭に狙いを定める虚空が、抜かりなく呟く
竜子の目はただ龍を見据えていた
「＜石猿＞に対し＜梵ピン＞、＜萌子＞に対して＜石猿＞、わたしの敏捷を凌駕しない限り、龍は私たちに致命傷を負わせる事は出来ないわ」
その瞳が輝きを取り戻す
壬生川最速の竜子が結ぶ六芒星が、碧色に光る
今だけは、彼女は鬼に立ち向かう壬生川の勇士だった

虚空も前を向く
「……良かろう、参るぞ髪よ！」
六ツ髪が応えるように、高く鳴いた

月見が六ツ髪の鱗を抉るように斬りかかる
虚空が幾度も龍の巨体に小さな風穴を開けてゆく
ふたりを挟んで、六ツ髪と竜子はめまぐるしい速さで術を唱え続けた
ただひたすらに必殺の機会を窺う六ツ髪を、神経をすり減らしながら竜子が追い詰めてゆく
＜石猿＞に＜梵ピン＞、＜萌子＞に＜石猿＞、＜萌子＞に＜石猿＞、寸分の遅れもない

「拳法家には拳法家の戦い方があるのよ」
三人で髪に挑んだこの舞台で、竜子は初見の強敵に正確無比に対応していた
虚空は改めて思い知らされる
（この女は、紛れも無く術の申し子じゃな）
柚子の娘にして、瑞穂に師事を受け、ほたるの技を継ぐ者――
いつしか、竜子は口元に薄ら笑いを浮かべていた
瞳に先ほど虚空が見た輝きはもはや無く
「……朱点を消した後、わたしは神をも消してみせるわ」
それはまるで、朱点童子・黄川人に瓜二つの鬼のような笑みだった

月見の双光蘭斬（そうこうらんざん）が止めとなり、六ツ髪は崩れてゆく
灰と散りゆく龍の影を、竜子がどんな気持ちで見つめていたのか、虚空には分からなかった

＜香家の部屋＞

「お母さん、きょうは何の訓練をしますかー？」
「ん～……そうですのねぇ」
ほたるはを手を止めて、顔を上げた
竜子から引き取った烈は、くりくりとした大きな目でほたるを覗き込んでいる
「人形作ってらっしゃるんですね」
「ええ、やっと完成なんですの」
微笑み返す
ほたるが今作っているのは、柚子(ゆずこ)人形、瑞穂(みずほ)人形に続く第三弾、その名もほたる人形である
一ヶ月間かけて完成させる大作であり、今までの技術の集大成でもある
「では烈(れつ)様は、道場で素振り」
「ま、また素振り、なの……？」
ほたるはニコリと微笑み、烈にうなずく
「日が落ちるまで、ね、うふふ」
お母さん忙しいのよ、と言わんばかりの反論を許さない笑みである
「……何かお母さんって、指示が大雑把じゃないですか？」
「後で見に行くから、サボっちゃダメですのよ、さ、行ってらっしゃいませ」
「ううー」
烈は小さな肩を落としながらも、ほたるの言う事をよく聞き歩いてゆく
ほたるは目を細めてその背を見送ると、再び人形に針を通す

「……十一代目当主」
ふと、部屋の窓からほたるは空を仰いだ
雲ひとつない晴天、青く澄んだ空が広がっていた
「私は、この命であなたの明日を灯しましょう……」
雨は降りそうにもない、それだけが残念だ
ほたるの指から裁縫針が零れ落ちた

「出撃隊が帰還されました、戦果は…
当主様、あのォ、ちょっと顔色が…ああッ！」

～～

竜子が部屋の障子を開いてくる
「ほたるが呼んでいるわ」
「……分かった」
虚空は書から目を離して、立ち上がる

かつて過ごしていた香家のほたるの部屋に、虚空はやってきた

ほたるは布団から身を起こしていた
痩せた母親の姿を見た途端
虚空の魂が、わずかに疼く音がした
弱ったその姿は、自分がいくつもの決断を先送りにしてしまったからなのだろうか、とふと思う
もしもっと様々なものを背負えたならば、あともう少しくらい、彼女は生きられたのだろうか、などとと
（……余は何を考えておるのじゃ……）
自分はおかしい
数ヶ月前から、そう、全てはあの娘のせいで、心が乱されているのだ

立ちすくむ虚空に、ほたるが微笑みかける
「あら、来てくれましたのね、虚空様」
わずかに、驚いた
「……おぬしは」
「どうかしましたの？」
「いや、なんでもない」
首を振りながら、虚空は母親の前に対座する
「うふふ、おかしな虚空様ですの」
微笑むほたるは、正気のようだ
極楽に足を突っ込んだためか、はたまた竜子の情けか

ほたるは頬に手を当てながら、ゆっくりと唇を動かす
「それより、私、困ってますの……」
「……ふむ」
「このまま私が死んでしまったら、竜子様がどうなってしまうか、心配で心配で……よよよ……」
「……急に、なにを」
言い出すかと思えば

ほたるは竜子に何をされていたのか、覚えていないのだろうか
「竜子様は甘えん坊ですから……甘えられる人がいなくなったら、今より困ったことになっちゃうと思いますの」
「なにを、言っておるのだ」
虚空は自らの声が、やけに遠く聞こえたと思った
「あやつは、おぬしを……」

「私は竜子様のことを、愛しているんですの」
その言葉
虚空は思わず聞き返す
「……は？」
ほたるは含み笑いだ
「うふふ、もちろん、虚空様や、月見様や、烈様のことも、ですの」
「一体、どういうことじゃ……先ほどから、何を言っておる？」
まさか、再び術に魅入られているのだろうか
危惧してしまう
「みんながみんな、幸せになれた良かったんですけどねえ……そういうわけにも、行かないみたいなんですの」
憂慮するほたるは、眉尻を下げながら苦笑する
「柚子様に頼まれたからとは言え、やっぱり私は当主には向いてなかったと思いますの……ずっと、誰かを陰ながら支える立場なのが、性に合ってましたの」
「誰かとは……竜子のこと、か？」
「あら、虚空様のことでもありますのよ」
「しかし、おぬしは……」
虚空が言葉を千切る

（去ってゆく余のことを、止めなかったではないか）

それを口に出すのは、女々しいことのように思えたのだ

しかし、ほたるは感じ取ったに違いない
「だって、虚空様はひとりで生きられるじゃありませんか」
淑やかに口元を手で隠し、笑う
「神様、なんですものね」
「ほたる……」
皮肉めいた口調ではなく、それはまるで我が子を自慢するような響きがあった
ほたるはあまりにも優しすぎる
でも、と、ほたるは静かに首を振る
「まだ、おひとりでは生きられない人も、いらっしゃるんですの」
「……それが、竜子のこと、か？」
あの竜子が？
魔王然とした姉を思い浮かべて、虚空は目を瞬かせた
しかし、ほたるの言葉は違った
「竜子様が進んでゆくのは、きっと恐ろしい道ですの……誰にも関われなくて、誰も関わらせようとはしませんでしょう……私が心配なのは、月見様ですの」
「……月見、だと？」
誰よりもしぶとそうな娘であるのに
「あの方は、そうですね……かつての瑞穂様みたいに、危うさがありますの」
「……」
虚空は言葉を詰まらせる
そんなことは言われるまでもなく、わかっていた
確かに、わかっていたのだ
ずっと、ずっと、目を逸らしていただけで
「ねえ、虚空様」
ほたるは童女のように微笑みかけてくる
「月見様のことが、お好きなんですよね？」

虚空はこの屋敷に来て初めて、頭が真っ白になるという体験をした

「は？」

ほたるの声が耳鳴りとなって脳に響く

「余が、あの娘を？」

「違いますの？」

「何を……」

大体、好きというのは、一体どういう意味なのか

猫を愛しているように、月見のことを思っているとでも言うのか

「余は、ただ……」

微笑むほたるに、並べ立てる

「あやつを見ておると、胸の辺りがむかむかして、なんとも気になってきてじゃな……放っておけぬというか、目を離すと何やら心が騒ぐというか……」

「あらあら」

「常にきゃんきゃんと騒いでうるさく、じゃが、傍におると退屈せぬのも事実であるが、あやつの顔など見慣れておるし、顔を思い浮かべたところで……何とも、苛々がこみ上げるばかりじゃ」

「まあまあ」

うふふ、と楽しそうなほたる

その態度に、虚空は抗弁する

「なぜ笑っておるのじゃ、ほたる」

「虚空様は神様ですから、知らないのかもしれませんが」

ほたるの笑みが深くなる

「人の世では、それを“恋”っておっしゃるんですのよ」

殴られたような衝撃が、額から後頭部へと抜けていった

「……ばかな」

虚空が揺らぐ
「それでは、それでは……ここしばらく、あやつのことばかりを考えてしまっていたのは……」
「恋、ですの」
「あやつを邪険に扱う竜子の態度を不快に思っておったのも……」
「恋、ですもの」
「ばかな……」
何度でもつぶやく
ばかな、と
まったく、馬鹿げていた
自分があのような娘に、焦がれるなど

（ほたるめ、逝く直前になんという呪いを……）
言わなければ、気づかなかったかもしれないのに
それは呪だ
間違いなく人を縛る術の類であった
自分と月見の間に、逃れられようのない“縁”が生まれてしまったのだと感じる

ほたるは静かに頭を下げてきた
「月見様のことを、お頼み申し上げますの」
「……」
虚空は歯噛みする
まだ、完全にほたるの言葉を信じたわけではないが
月見をこのまま竜子の道具のようにしておけないのは、確かだ
様々な境界の間で揺れながらも、虚空はほたるに従ったようなずいてしまった
「……良かろうて」
ほたるが顔を綻ばせた
「これでようやく、肩の荷が降りましたの」

障子が静かに開かれた
「……話は終わったようね、邪魔するわ」
「竜子！」
振り返った虚空は思わず身構えた
そんな虚空を無視し、竜子はほたるの枕元に端座する
「ほたる、持ってきたわ」
彼女が手にしていたのは裁縫道具、それに人形だ
金色の髪に小麦色の肌、ほたるを模ったもののように見えた
「それを一体どうするつもりじゃ、竜子」
「……」
竜子は疎ましげに、虚空を見やる
そうして紅唇を開く
「ほたるの墓に入れるのよ」
「なっ……」
絶句する虚空に、ほたるが口を出す
「ほらほら、そんな言い方じゃ誤解を招きますのよ、竜子様」
「……別に、どう思われようがいいわ」
「もう、竜子様ってば……これは、私がお願いしましたのよ」
後半は、虚空に向けて言った言葉である

「……どういうことじゃ？」
竜子はほたるを利用していただけではなかったのか
「私、もう細かなお仕事ができませんの……ですから」
ほたるが微苦笑する前で、竜子は針を動かし始める
しばらく、黙々と
「……ここはどうすればいいの？　ほたる」
「あ、そこはですね……」
ほたるが竜子に縫い物の仕方を教えているようだ
虚空は眉をひそめる

あの竜子が、ほたるには素直に従っていた

「そうそう、今のうちに仰っておきますの」
ほたるが竜子と虚空を交互に眺める
「次の当主様は、虚空様にお任せしようと思いますけれども」
「……余か？」
「……」
竜子は眉ひとつ動かさず、人形に糸を通す
「構いませんの？　おふたり様」
念を押されて、虚空は首肯した
「構わぬが……」
当主の指輪があれば、技の力が著しく高まるのだ
竜子がその家宝を容易に諦めるとは思えなかったが
しかし、竜子はつぶやく

「……ほたるの決めたことなら、構わないわ」

竜子の声色は、いつもとまったく変わらない
「あらあら、竜子様ってば、私を信頼してくださってますのね……嬉しいことですの」
「別に、そんなんじゃないわ」
「うふふ……それでは、私が死んでしまう前に、頑張ってお人形、完成してくださいね」
ほたるが幸せそうに竜子の膝を撫でる
竜子はされるがままだ
「言っておくけど……これは、貴方のわがままなのだからね」
「うふふ、ありがとうございますの」
「……貴方がわたしのわがままに付き合ってくれたから、ただの、お礼よ」

その姉妹の姿を見つめながら
虚空は気づいていた
ふたりの間には、虚空には計り知れない、とても複雑で深い親愛の情があるのだ、と

ほたると竜子に背を向け、虚空は部屋を出る

もしかしたら――
これまでずっと、ほたるは術にかけられたフリをしていただけだったのだろうか
あるいは本当に竜子はほたるを母親の身代わりにしようと思って、ただ術が途中で切れてしまっただけだったのだろうか
それとも、ほたるが自ら進んで竜子の心を癒そうと思いあぐねた結果、ああいった人形劇などという行動に出たのだろうか

虚空にはわからなかった
裏表を持ち、素直ではなく、非常に面倒な、ある意味で似たもの同士とも呼べるこのふたりの関係が、どういったものであったかなどと

ただひとつだけ言えることがある

それは――

「竜子を本当の意味で止めることができたのは、ただひとり、ほたるだけじゃったということか……」

母娘の縁ではなく、家族の絆ではなく
ただ、その大海のような情け深さだけで、ほたるは竜子の人としての心を現世に繋ぎ止めていたのだろう

逆を言えば、それはつまり――

～～

その夜、容態が急変したほたるを、皆が看取った

「人生の至福の時なんてあったとしても一瞬ですの、だから目をそらしちゃダメ、見逃しちゃダメですよ」

壬生川ほたる　享年1才7ヶ月

泣きじゃくる月見や烈を背に
ほたるの指から抜け落ちた指輪を、喪主であった竜子は大切そうに拾い、虚空の手のひらに乗せた
「さあ、これはきょうからあなたのものよ……虚空」
「……ああ」
ただひとつの真なる壬生川当主の証を握り締め、虚空はうなずく

四本の髪を断った雨使いの人生は、こうして幕を閉じた
安らかに眠るその亡骸には、柔らかく微笑む三人の人形が添えられていたという

〜〜

その夜、寝ずに線香の番を行なっていた竜子の背に、虚空は告げた

「余は月見と添い遂げる、一切の邪魔は認めぬぞ」

ゆっくりと竜子が振り返る

――その眼

まるで楔から解き放たれた災厄のように、凍りついていた

六ツ髪を討ち取った！
残る髪はあと2本！

第十話－１１　「七花八裂」　１０２５年１１月後編（後書き）

出陣・九重楼（竜子・月見・虚空）　六ツ髪・打倒
初見・烈→剣士　訓練・ほたる→烈　老死・ほたる

第十一話－1　「逸病」　1025年12月（前書き）

竜子　1才1ヶ月
月見　10ヶ月
虚空　6ヶ月
烈　1ヶ月

第十一話－1　「逸病」　１０２５年１２月

＜１１月の終わり＞

「余は月見（つきみ）と添い遂げる、一切の邪魔は認めぬぞ」
亡きほたるに誓ったのだ
今更引き下がることなど、できるわけがない

そう宣言した虚空（こくう）の前、竜子（たつこ）はしばらく無表情であったが
少しずつ、その口から微笑が漏れる
「ふ、うふふ」
「……なんじゃ」
虚空がいぶかしむと、竜子は口元に手を当てて笑っていた
爆笑していた
「何を言うかと思ったら、あなたには無理よ」
「何故お主にそのような事が言える……さてはまさか……！」
竜子が既に月見をその手中に収めていたとすれば、その自信も頷ける
あるいは、人の心を縛る新たな術を創作していたのかもしれない

虚空はいくつかの攻撃術を思い出しながら、竜子を睨む
その一方で、竜子が物分りの悪い幼児を諭すように、ゆっくりとつぶやく
「だって貴方、月見に嫌われているでしょう」
「……」
至って単純な理屈だった

あまりにも単刀直入な言葉に、虚空は思わず言葉を失う
「あの子は強情よ、本気なら巧くやる事ね」
「お主、何を」
「……私の邪魔をしない限り、月見の事は好きにすれば良いわ」
裏を返せばそれは、竜子の領域に虚空が足を踏み入れれば、容赦なく叩き潰すという警告であった
ほたるの部屋に、ひゅるりと奇妙な声が聞こえた
蒼い頭をした蝙蝠が、くるりと廻って踊るように竜子の肩に着地する
「……そう、市街に、ご苦労様、お小夜」
蝙蝠が再び、ひゅると鳴いた
羽黒ノお小夜
交神表にも名を連ねる神のひとりだ
この女は一体、神を使役して一体何を企んでいるのだろうか

「おぬし、月見をどうする気じゃ」
「別に……何もしないわ」
「月見はあれほどおぬしを慕っておるのじゃぞ」
「……私にはどうでもいいことよ」
竜子はほたるの欠片も消えたこの部屋を、まるで他人のような眼で見回した
そして、吐き捨てるように言う
「私は、あの子の紅い色の髪が、死ぬほど嫌いなの」

＜１２月、居間＞

日々冷たくなる冬空の下、穏やかな微風が屋敷を撫でる
そんな壬生川家の庭では、黒猫が兎を追っかけまわしていた
全身から燐光を放ちながら雌猫が飛び回り、逃げ惑う兎の耳をかじったり引っかいたりして遊んでいる
両者とも八百万の神であり、人智を超越した力を持つ異能の存在なのだが、傍目から見たらただの畜生にしか見えない
何柱の神が居座っているのか、もう正確に分かる人はいないだろう
下界の高天ヶ原と化した屋敷に、本日は新しい風が吹き始めていた

＜告白その1、恋文＞

月見の机の上にあったそれは、一枚の折りたたまれた紙であった
「……ム、汚れ！？」
自身の思考回路のように理路整然と片付いた部屋に、ぽつんと置かれた手紙は目立った
「って違います違います、これは手紙？　どうしてボクの部屋に」
月見はためらいなく、手紙を広げると、その内容に目を通す
「うわ、字ヘタですね……なになに……」
その一句を、つっかえながら月見が読み上げる

「かくとだにえやはいぶきのさしも草　さしもしらじなもゆる思ひを」
平安時代の遊び人、藤原実方の歌った恋の句であった

当時都で口説き文句として使われていた……かどうかは定かではないが、燃えるような恋心を綴った詩である
三度読み返してから、月見は首をひねった

「……よく分からないですね、あ、イツ花さーん！　何かボクの部屋にこんなものがあったんですけどー！　きっとゴミですよゴミー！」

失敗

＜告白その2、花言葉＞

道場で熱心に稽古している月見の元に、虚空がやってくる
「のう月見」
「あ、虚空さん、手合わせませんか？」
「いや、余は良い……それよりもな、少し話があるのじゃが」
「はい？」
額の汗を手の甲で拭って、月見が顔を上げる
「お主、受け取ってくれるよな」
虚空が差し出したのは、小ぶりな菩提樹の枝だった
赤ん坊のような小さな黄色い花が、枝の先にいくつも咲いていた
「本来は初夏の花じゃがな」
花言葉は結ばれる愛、そして結婚
愛し合っていた夫婦が死別した時、それぞれ樫と菩提樹になっていつまでも寄り添って行き続けた物語から取られた、花言葉である

「へー」
月見は菩提樹の枝を受け取って、笑う
「きれいな花ですねー」
月見は菩提樹の花言葉を知らなかった

失敗

＜告白その3、烈＞

稽古場から戻ってきて、月見は部屋でいまだ未修得の＜梵ピン＞の術書をめくっていた
「月見お姉さんー」
そこへ、1ヶ月才の烈が笑顔で抱きつく
「あれ、烈(れつ)くん、どうかしました？」
「うん、あのね」
月見もその可愛らしい笑顔を見ると、ついつい微笑んでしまう
烈は能天気な目玉焼きのように笑う
「月見お姉さんのことが、好きだってー」
「ええ、ボクも烈くんのこと好きですよ」
柔らかな髪を撫でると、一瞬だけ烈が怪訝そうな表情をした、何か頼まれていたような気が
「うん！　あれ？」
でも深く気にせず、月見にじゃれつく

失敗

＜再び居間＞

庭では、先ほど茶色の兎をいたぶっていた黒猫が、今度は一回り

大きな白兎に追い掛け回されていた

それはそうとして、虚空は居間の中央に座り、真剣な顔をして目を瞑っている

「……巧くいかんな、今宵は冷える」

前三つの作戦、紛れもなく本気だった

「あのような娘、容易く篭絡できると思っておったが……」

お涼「坊や、そういうことをマジメに考えている時点で寒心するわ」

いつの間にか斜めの位置に、寒気がするほど綺麗な女性が座していた

こうも次から次へと現れると、もう驚く心もなくなってしまった

冬になったから下界に降りてきたのだろうか、などと虚空が思う、通りで冷えるわけだ

氷の彫像のような女性、月寒お涼は、虚空にとって祖母にあたる女神だった

「おぬしは確か……ほたるの母であったな」

月寒お涼が首をひねると、氷の装飾品が透き通るような音を立てた

お涼「ほたる……誰だったかな」

「ま、まぁ良いが」

お涼「それよりも坊や、想い悩んでいるのなら、自らの口で言いなさいな」

「最近は、縁結びの領分にも手を出したのか？」

お涼「そんなんじゃないわ……くしゅ」

月寒お涼はクシャミをすると、身を震わせて洟をすする

お涼「冷えるね、坊や」

「お主がそれを言うのか！？」

お涼「そう、私がちょっかいを出すのは、ただ面白そうだから玩弄

しているだけだわ」
「そっちの方がタチが悪いのじゃが……」
　ほたるの母でありながら、ずいぶんとザックリした性格らしい
お涼「だから坊や、迷わずコクりなさい、人の命は雪のように短いのだから」
　虚空を底冷えする視線で撫でると、月寒お涼は装身具を鳴らしながら立ち上がる
お涼「帰るわ、飽きた」
「早」
お涼「六ツ花お暇するよ」

　月寒お涼が屋敷の中に声をかけると、やがて同じように青白い女性が姿を見せた
　しかも烈と手を繋いでやってきた
六ツ「あら、もう戻っちゃうのね……」
　雪の結晶を思わせる儚げな女性が、烈に向かって微笑む
六ツ「残念だけど、お姉さんもう帰らなきゃ」
「うん、六ツ花御前さん、ばいばーい」
六ツ「ええ、烈くんまた遊びましょうね」
　六ツ花御前の頬がわずかに上気しているように見えた
お涼「相変わらず好きね、壬生川の元服前の男子」

　相変わらずというのはどういう意味だろう、神の中で自分たちはそんなに有名なのだろうか、と虚空が眉根を寄せる

六ツ「……ええ、あっちの緑髪の子もまだ許容範囲、ウフフ」
　二人の氷の女神は連れ立って庭に下り、どうするのかと思えば、かつて六代目当主・伽子と英雄、翠らが作った池に向かう
　枯れ葉の浮かぶ池に足を浸けると、その姿が光の粒となって水面に吸い込まれていった

「……あの池は、天界と繋がっておったのか……」
神の国へと続く道が我が家の池だと知れたら、先祖は一体どう思うのだろうか
確実に埋め立てる決意を固めながら、虚空は烈を向く
「そういえば烈よ、月見を知らんか」
「お姉さんなら、今月は交神の儀って言ってましたよ？」

一瞬、意味が分からなかった

「ぬあ、しまったあああ！」
「え、え？」
「いや何でもない、違う、何でもない事があるか！　こうしてはおれん」
初めて見る虚空の狼狽した姿に、烈は目を丸くする
幼い弟を残して、虚空は交神の間に駆け出した

しかし虚空を待っていたのは、今まで見た事がないほど強力な結界だった
儀礼の間の戸を開こうとしても、頑丈な戒めによって襖はビクとも動かない
「……これは、一体」
中に居る神が邪魔されまいと、外界と中を遮断したのかと虚空は一瞬思ったが、そうではない
交神の儀は、元々何者かの手によって厳重に守られていたのだ、儀式が決して中断されないように、恐らく初代から今までずっと
虚空の中にずっと引っかかっていた、朱点童子（しゅてんどうじ）のいくつかの言葉が思い浮かぶ

――不思議だね、人と神が交わるとその子の力は、神をもはるかに凌ぐ

――天界のヤツらはそれを承知で、ボクを滅ぼすために君たちを利用したってワケ、それしか手がなかったんだよ

核心に迫ってきたような確信があった

ここから先は砂を積むほどに慎重に考えねばならないだろう

それはさておき、

「く、月見！　相手は誰じゃ、何故だか無性に悔しいぞ、阿呆がっ！」

虚空は中に聞こえないと分かっていても、何度も襖を叩き続けた

ちなみに月見の交神相手は、月光天ヨミという名の伊達男だった

「闇にわたしの光を……」というヨミの言葉に月見はまんざらでもなかったらしく、終わってからも「月と月のめぐり合いです♪」などとしばらくの間、上機嫌に鼻歌を歌っていたという

その時の虚空の心中は如何なるものだっただろうか

第十一話ー1　「逸病」　1025年12月（後書き）

交神の儀・月見×月光天ヨミ

第十一話－２　「愛着」　１０２６年１月前編（前書き）

竜子　１才２ヶ月

月見　１１ヶ月

虚空　７ヶ月

烈　２ヶ月

第十一話－２　「愛着」　１０２６年１月前編

＜居間・総集＞

一年の計は元旦に有り！と記された掛け軸が、今年も壬生川家には飾られていた

六代目の言いつけを律儀に守りながら、イツ花は静閑とした居間を振り向いて、少しだけ顔を曇らせる

こんなことはわき目も振らず屋敷に仕えて以来、初めてだった

元日、誰もいない居間に、掛け軸が揺れた

イツ花は静かに目を閉じる

１０１９年、初めての元日は初代当主と共に、彼の三人の子らと本来なら、もう一人加わるはずだった少女の命は、親よりも先に摘まれてしまった

１０２０年は幸四郎率いる第一回大江山隊が敗北した、翌月の元日だった

幸運にも死者が出ることはなく、戦い続けた壬生川家における数少ない休養となった

１０２１年、二度目の討伐隊が敗北するも、あの元日はとても賑やかなものだった

今でも庭を走り回る元気な三代目の姿が、イツ花のまぶたの裏に浮かぶ

１０２２年の正月に、四代目当主は亡くなった
朱点の作り出した新たなる迷宮に潜り、そのまま血まみれで帰ってきた

１０２３年に壬生川家は復興を果たした、気丈な六代目の努力のおかげだった
掛け軸を見れば、あの時代の活気が蘇ってくるようだ

１０２４年は都で久しぶりに、餅と白雪祭りが開催された
竜子（たつこ）が生まれたのがその年の１１月、あれから色々な事があった

１０２５年、柚子（ゆずこ）と瑞穂（みずほ）とほたるが揃い、毎日が騒動の連続だったあの年
たった一年前だとは思えないほど、壬生川家の様子は変転してしまった

１０２６年、再び目を開けても、そこには誰も居ない

「……今は辛い時期でしょうが、皆様、頑張ってください」
人がもがき生きて、死んで、受け継がれて、それでもまだ壬生川家は続いている
それこそがまるで奇跡のような出来事なのだ

「バーンとォ……乗り切ってくださいね、十一代目当主様」
七年間仕え続けてきたイツ花は、手を合わせて祈った
決着へと進む壬生川家の明日を、来年のこの日が来ないことを切に願った
神ではなく、イツ花はかつて壬生川家に生きた英霊たちに拝んでいた

＜一方、蔵にて＞

「ゲホゲホ……まったく、蔵の管理が当主の仕事だとは、誰が抜かしたことか」

開け放った蔵から綿飴のように膨れ上がる埃に咳き込みながら、虚空（こくう）は天気の良い外へと這い出した
年明けにしては珍しい陽気に思わず空を仰いで、顔をしかめる
忌々しいのは、ぴーちくぱーちく歌って踊る神たちだ、手伝わせようとしたらものの見事に断られた、まるで話が通じない

鳳あすかは「そんなことより鈴女ちゃん、ボクと今度お茶でもどう？」と、虚空を完全に無視して言った
春野鈴女は「えー、お友達からなら、別に良いけどー？」とまんざらでもなさそうな顔で言った、きっとここ最近がにわかに暖かいのは、この娘のせいだろう

色気づいた神たちにも我慢ならないのは、この際置いておくとしよう

「虚空お兄さんー、蔵のものは全部出しちゃって良いんですよね？」
「うむ、頼んだ」
壬生川家が七年間集めた財宝や珍品、名品に武具が押し込まれている蔵だ、これは大仕事になるだろう
今月2ヶ月になった烈(れっ)もよく働いてくれている、虚空もひとまずは身体を動かすことに専念した
ドタバタと、荷をひっくり返す音が庭に響く
大小様々な鎧兜、刀、薙刀、弓矢、大槌、手甲、大筒の残骸が次々と並べられる
どれも埃を被り、あちこちが傷だらけで、年老いた品物だらけだ

「おおー、大槌……うわっ、重ぉ」
赤く光る不動ノ大槌を持ち上げようとして、烈はしりもちをつく
「そいつは、後で竜子で呼ぶかのう……む、今度は何をしておる烈」
「大筒だー！」
砲身のわずかに曲がった大筒を構えてはしゃぐ烈に、虚空は嫌な予感を感じて制止する
「止せ烈、それは欠陥品じゃ」
「え、ええー？」
火縄には赤玉による着火が完了していた
「おぬし、」
すぐにそれを捨てろ、と言おうとした瞬間、凄まじい音を立てて大筒が四散した
辺りに焼かれた木片や鉄が散乱し、虚空は思わず顔を手で隠した

「きゅー」
間近で爆発音を聞いた烈が、目を回してその場に倒れる
「無事か、烈……ぬお！」
もくもくと煙が上がって詳しくは見えないが、どうやら木片のいくつかが積んであった大筒の山に飛び火したようだ

このままでは引火して、さらに被害が拡大する
これはマズいと、＜芭蕉嵐＞で何かも吹き飛ばしてやろうと思いついた虚空に、怒鳴り声が届いた

「ちょ、ちょっと！　この音は何ですか、敵襲ですか爆撃ですか！？」
煙の向こうに、稽古着の月見の影が見えた
そういえば月見に何か言うことがあったような、記憶がふと脳裏をよぎり、行動が一瞬遅れた
このまま風の術を唱えれば、月見（つきみ）に直撃――
「いかん、月見、大筒が爆発するぞ！」
「へ」
迷っているうちに、大筒は虚空と月見と烈を結んだ三角形の中間地点で爆発した

先ほどの十倍以上の煙が上がり、耳鳴りが響いて何も聞こえない
虚空が濃い煙の中自分の着物を見下ろすと、煤けて青色が茶色になってしまっていた
烈は無事だろうかと目をこらすと、煙の隅でぴくぴくと動いている物体がある、さすがに神の息子はあのような火力ではくたばらない

「月見どうじゃ、暖かくなったか」
粉塵に声をかけてみるが反応はない
もっとも、言葉の意味が分からなかったのかもしれないと虚空は考え、改めて告げた
「今は冬じゃろう、薪代わりにしては大層なかがり火じゃと思うが、どうじゃ」
真っ白な闇の中から、胸倉を掴まれた
「な、に、が、暖かくなったか、ですか！　あんなに大筒並べて、燃やしたら爆発するに決まっているじゃないですかこの常識知らず

！　バカと煙！　ていうかバカ！」
「何を言っておる、火薬なんぞ燃やすわけがなかろう」
「いやだって現に！」
虚空が月見の手を外し、周囲にふぅっと息を吹くと、煙が徐々に晴れてくる
「悪いが月見、イツ花を呼んで来るのじゃ、烈を看てもらおう」
「え、うわ烈くん、どうしたんですか！」
「今気づいたのかおぬし、抜けておるな」
「何で虚空さんはいつも通りなんですか！？」
ようやく耳鳴りが収まってきた虚空の耳に、何か嫌な音が聞こえる

まさかと思い振り向けば、今度は蔵の中だった、まだ残っていた
半分近くの大筒に引火していた

「……三度目、か」
「え？」
駆け出そうとしていた月見が振り向くのが見え、虚空は耳を塞いだ
本日三度目の轟音が、壬生川家を揺るがした

ゆっくり細目を開くと、意外にも蔵は頑丈に生き残っていた
「蔵払いのつもりが、これではお蔵入りのままじゃな」
しかし中を覗き見ると、そこはしっかりと火災現場後の様子だ

出し切っていなかった茶器や刀、兜などひしゃげて、運良く破壊を免れた防具も真っ黒に焼け、これでは手入れして売り出すのも面倒だろう
唯一の例外は九代目の得物・不動ノ大槌ぐらいだ、さすが炎の属性武器、何ともない

「最悪、金物屋送りじゃな……やれやれ」

「ううう……これ、なんですか、もうっ」
蔵の入り口から噴出した爆風を免れたらしく、月見が真っ黒な顔を着物の袖で拭いていた
「月見、顔が煤けておるぞ」
鼻の頭を指差して笑う虚空に、月見が髪の毛を逆立たせて怒る
「虚空さんもですよ！　こんな大掛かりなことして人をからかって楽しいですか！　もう！」
「それはいいが、烈が」
一方、低い体勢ながらも爆風を全身に被った烈は、うっかりすれば炭と間違えてしまいそうな黒コゲっぷりであった
「は、あああ、イツ花さーーん！」
慌てて屋敷に飛んでいく月見

残された虚空は、月見が戻ってくるまで消火作業を続ける、さすがに＜真名姫＞ではなく、低級術＜白波＞である

小火をあっという間に消し止め、手持ち無沙汰で何となく蔵の中を眺めていた虚空は、ふと妙なものに気づいた
蔵の床は乾いた木で作られており、その下は高低の差はあれど土台であり、つまりは土だ
その床の隙間から、わずかに気流が発生していたのを、虚空は見ていた
「なぜ土から風が漏れるのだ」
虚空の知る限り、この蔵は一層構造であった
「ふむ」

黙考している間に、月見がイツ花を連れて戻ってきた
「烈くんしっかり！　幸せなことを思い出すんです！」
「バーンとォ、私にまっかせてください！」

蔵の入り口に立っていた虚空が、月見を呼ぶ
「月見、烈には回復術を施しておいた、後はイツ花に任せるがいい」
「え、ええー」
「参れ」
有無を言わせぬ口調というか、いつもながらの身勝手さというか、そんなもので月見を呼びつけ、虚空は蔵の中、中央に仁王立ちする
「今度は何ですか、ボクに何をしようって言うんですか」
「そう訝しむでない」
虚空は場所を変えながら、何度も足元を強く踏みつける
「なりますよ！　思えば初めて会ったときからッ！」
「何の事じゃ、それよりも……ここが良い、月見、この床を思いっきり踏みつけよ」
「何かスッゴイ嫌な予感がします！」
「まぁ当たると思うが、はよせい」
律儀に月見は、言われた通り焦げた床を思いっきり踏み砕くすると直後、鋭い音を立てて月見の身体が真下に消えた

階下から、まるで木箱の山をぐちゃぐちゃに倒すような音と、月見の「ふぎゃあ」という叫びが聞こえてくる

「ほう……」
虚空が後を追ってその隙間から下に降りると、何か柔らかいものに乗っかり、柔らかいものが「むぎゃあ」と呻いた
「隠し部屋か……火薬の匂いは、せぬな」
「ちょ、ちょっと、どいてくださいよ！　髪には触らないでくださーいー！」
「ああ、これは髪か、体毛かと思った」
「こんな濃くて長い毛がどこにあるんですか！　って、何を言わせるんですかぁ！」
「分からんが、ほらどいたぞ」

小さな火の玉を眼前に浮かべ、虚空は薄暗い蔵の地下を見回す

蔵より一回り小さい室内には、大量の大筒の部品が積み上げられていた

「いてて……って、あれ、ここは一体……？」

「どうやら壬生川家の秘蔵らしいのう、十一代目当主たる余すら、その存在が知らされていなかったとはな」

虚空は眺めながら考える、少なくとも大筒の倉庫と化しているということは、七代目以降に使われていたものだろう

一代限りで途絶え、その後誰にも受け継がれずに忘れ去られたのかもしれない

しかし、と虚空の部屋ほどもある空間を見渡す

これほど大掛かりな隠し部屋を、誰にも知られずに作ることは果たして可能だろうか、誰もがこの部屋の存在を認めていた時代があったと考えたほうが、自然なのではないか

そう思うと、自ずと答えは浮かんできた

「これは、貞光（さだみつ）の時代のものか……」

柚子と瑞穂はこの床の存在を知ってはいたが、さほど重視していなかったのだろう、ほたるもまた同じく、竜子にのみ口伝し、忘れていたのかもしれない

隠されていた事に、特に意味はなかったのだろうか

「虚空さん、こっち何かおもちゃがいっぱいありますよ！　うわあこの木馬可愛いですね！」

「ふむう」

変わり者で有名だったほたるの父――つまり自分の祖父が木製玩具を作っていたのは確かに意外ではあったが、それだけのために蔵をこしらえるのは不自然ではなかろうか

オモチャに夢中になっている月見を置いて、虚空は封の閉じてある箱を片っ端から開いた

「もしこれが余であったなら、このような無駄なことはせん……己の失敗は恥ではないからな、貞光も恐らく別の目的が……」
いくつかの朱の首輪も見つかったが、これではないだろう

「月見、そちには何か見えんか」
「え、何がですか？」
振り向いた虚空の目に映ったのは、木馬にまたがって遊ぶ月見だった
「……」
「あ、いや、だって乗ってみたくなるじゃないですか！　な、何ですかその目は！」
「いや何も言っておらんが……ん」
虚空が見咎めたのは木馬の視線の先、大筒の残骸の奥に押し込められたように置かれていたつづらだった
「こんなもの、先ほどはあったか……？」
顔を赤らめて木馬から降りた月見と共に、そのつづらを引っこ抜き、慎重に蓋を開く
近年開けられた形跡は、ない

「開くぞ」
「は、はい」
つづらを開くと、そこには一冊の古びた書物が納められていた
「……本？」
無言で取り出し、虚空はその題を読む
「“壬生川家秘聞録（みぶがわけひぶんろく）”、聞いた事がないな」
「秘聞録って……壬生川の日誌は違いますよね」
「うむ、実録壬生川戦史は、余がほたるの跡を執筆しておる……」
虚空はちらと秘聞録をめくると、そこに記された常軌を逸した内容に眉をひそめた
「……これは」

「え、何ですか？　楽しい話ですか？　ためになりますか？」
「いや」
虚空は本を閉じ、自分の懐に押し込む
まるで御伽噺だ
壬生川家秘聞録に記されていた内容は、天地創造の頃より至る神と人間と朱点童子・黄川人の話のようだ
「信じられない話ではあるが」
虚空は確信した、貞光はこの著書のためだけに大掛かりな仕掛けを用意したのだろう
そして、そのことに未だ気づいた者はいない
「月見、この地下のことは決して口外せず、竜子にも言うな」
「……は、はい」
虚空の瞳にただならぬ光を感じて、月見は珍しく素直にうなずいた

それから虚空はふと天井を見上げて、思い出したように呟く
「そういえば、きょうは元日であったな」
「そうですね、ボクはずっとお稽古してましたけど」
煤だらけの月見がそうつぶやく
「おぬしに言う事があったのを、忘れておった」
「う、今度はなんですか？」
思わず顔をしかめる月見

虚空は相変わらずの、のんびりとした調子で、月見に言った

「のう月見、余と結婚せんか？」

内容と口調がまったく合っていない
なので月見は最初何を言われたのか分からず、しばらく目を瞬かせていた
「……は、はい？」

何とか、それだけを搾り出す

虚空はまるで決められたことのように、言い切った
「余の妻になれ、月見」
静けさに包まれた肌寒い地下、虚空と月見は見つめ合う
それは実に虚空らしい、単刀直入な告白の言葉であった

ただし、言い出すタイミングや場面などを別にすれば、の話であるが

第十一話－3　「恋着」　１０２６年1月後編

＜出陣＞

玄関に腰掛けて雪の降る外を眺めているのは、虚空（こくう）
「春女は帰ったか」
背骨を突き刺すような寒さに、虚空は何度か身震いした
「現世とは何と生き辛い場所じゃろうか、こんな過酷な環境に、よくヒトは耐えられる」
手を擦り合わせてわずかな暖を得る

神とは冷暖自知を凌駕した者たちだ、凌駕したつもりで失っているのかもしれない
自分の身もいつかは、凍てつく寒さを感じなくなってしまうのだろうかと思う

それはそうと、
「遅いのう、烈（れつ）と竜子（たつこ）」
虚空は先ほどから自分と微妙な距離を取って、軒先に落ち着き無く立っている月見（つきみ）に語りかける
「え!?　崩れ落ちかかっている都の道具屋が庶民のお給金一年分の茶器をいつでも買い取る資金があるのは、やっぱり謎で許せませんか!?」
「いやそんなゲーム的なお約束は気にせんが……」
虚空は心配そうな表情に見えなくも無い、いつもよりは嫌味な輝きが弱まった視線で、たわ言を並べる月見（つきみ）を眺めた
「どうした月見、何やら、」

「うるさーい！　死ねー！」
「むむ？」
顔を真っ赤にして叫ぶ月見に、虚空が怪訝な顔を向けた

何じゃ？　とか、どうした月見？　とか、虚空がまるで子供に向かい合ったように月見に尋ねる
ふるふる震えていた月見は、握り拳をお腹の前に固めて怒鳴る
「何でそういう顔をそっちがするんですかもう！　ズルいです！　人面獣心、極悪非道です！」
「人面獣心、極悪非道……」
繰り返してみる、さすがに遺憾だ
思い返して、首をひねる
「そなたの申した矛盾を一蹴したことが、そんなに悪かったか？」
「……」
月見の髪の毛が、猫の尻尾のように逆立つ
「そのような事実を月見が断固許諾出来ず、まさか認可した者をも激烈に非難せしめるとはあに図らんや、つい余も空言をはいてしまったが、月見が事態をそのようまで重く見ているなら、余もしばし真剣に熟考してから返答を致したいと思うが、どうじゃ」
月見がキッと虚空を睨む
「納得してくれたか？」
そのツリ目に、ぶわっと涙が溢れた

「うわぁあぁぁぁん！　虚空さんのバカー！　嫌いだー！　イジメっ子ぉー！」

屋敷の外へと、薙刀を抱いて全力で去ってゆく
取り残された虚空は、ひとりつぶやいた
「……これは一体どういう事か」
最近、月見が虚空に当たるときの罵声が妙に厳しい気がする

そういえば今月、蔵の中で婚約を申し込んだ時も大変だったと思い出す
「まぁ、感情の起伏が豊かなのは、人間である証拠か、良い事じゃな」
しんしんと降り続ける雪を見ながら、うなずく
壬生川（みぶがわ）紋の和傘を差した影が、門から入って来るのが見えた
虚空は無意識に、立てかけておいた槍を掴む
「ただいま」
軒先で傘を閉じ、竜子は着物についた雪を手で払う
「さっき何か……泣きながら月見が都の方へ走っていったけれど」
「ああ、余もよく分からん」
「そ、そう」
何やら可愛い声を上げて、竜子は部屋に上がろうとする
すれ違う瞬間に虚空の全身を嫌な感覚が撫でた
「竜子……？」
「ん」
けだるそうに竜子が髪を揺らし、振り向く
目が合っただけで、虚空の背中に汗がにじむ
とても寂しい目をしている
「……来月、力を借りるぞ」
竜子はうなずく
「ええ、私もあの人には聞きたい事があるしね……出立の準備は終わっているから、水浴びだけ済ませて来るわ」
虚空の警戒などまるで気にせず、竜子は木偶のように歩いていった
眉根を寄せて、思わずつぶやく
「あやつ……あのままでは、鬼と化すぞ」
もはや身体半分、彼岸へと足を踏み入れているようにも見受けら

れた
何とかせねばな、と思う
ふと、こめかみに手を当てて、虚空は苦笑した
「慣れない心労を抱いておるな、これが当主という名の重さじゃろうか」
これが今まで自分の心にはなかった、責任感という感情なのかもしれない、槍を再び玄関に立て置く
竜子の事、月見の事、更に来月、自分の元服の儀による決着、気苦労は絶えない
「じゃが、段々と面白くなってきたな、血が沸く」

後ろから、金物の鳴る音がした
「虚空お兄さん、烈準備整いました！」
「ぬ」
見れば、そこには皐月人形がいた
ぶかぶかの鎧を着込み、重さに頭と不安定な兜を揺らしている若武者が、ニッカリと笑う、腰の長物もまるで背丈に合っていない
「……おぬしも、存分に阿呆じゃのう」
「ええっ！？」
初陣の烈の鎧をやれやれと脱がしながら、虚空はようやく当主の名の実感を感じ始めていた

それは思ったより、面倒なものであるらしい

＜鳥居千万宮＞

烈の後に竜子が現れ、紆余曲折あったが何とか月見も戻ってきて、

一同は鳥居千万宮へと足を進めた

「ぼく、お兄さんお姉さんたちの足手まといにならないように、頑張りますね！」

「うむ」

先頭の虚空に続いて、身体もまだまだ成長段階の烈が果敢に着いてゆく

虚空の技を間近で見て、少しでも稽古の足しにしようと健気な心であろう

「死ねい！」

迷宮序盤の低妖相手に槍を振るう虚空に、烈がひっきりなしに感嘆の声を上げる

首を刎ねれば「凄い！　まさに神業！」だとか、胴を貫けば「その槍さばきは天下一品ですね！」やら、まるで太鼓持ちのようだ

「カカ、烈も励むのじゃぞ」

単純な虚空は、すぐに口元を緩めてしまう

「はい、お兄さんみたいに強く眩く聡明になれるよう、頑張ります！」

烈は烈で邪気がないから、二人は巧く回る組み合わせなのかもしれない

そんな男たちとは打って変わって、深刻そうなのは後ろの二人だ

月見が暗い顔しながら、少し前を歩く竜子につぶやく

「あ、あの、お姉様……」

「ん」

「お姉様、結婚ってどう思いますか！？」

思わず、竜子の足元がふらついた

戦場でいきなり何を言い出すのだろうか、この娘は

何とも言えない表情――目と眉と口が平行線で出来たような仏頂

面――の竜子が、どうと聞かれてもね、と答える
「ボク、今何だか人生の岐路に立っている気がするんです」
「は、はぁ」
特に深刻な話ではなさそうだ
「こんなことを相談できるのはお姉様だけなんですっ、ボク一体どうしたら良いんでしょうかっ」
「どうも……何も」
困ってしまう、いや別に困りはしないが
ずっと屋敷を竜子が留守にしていたため、二人が顔を合わせるのはこれが一ヶ月ぶりとなる

「……私に、何か言えって？」
竜子は眉を寄せたまま、背丈の低い妹を眺める
「は、はい、ボクその、正直、五里霧中のような」
「……何があったの」
「虚空さんに、結婚せぬか、って言われたんですっ！」
「へ」
本日二度目、竜子の顔が戯画となる
「……好きにすれば良いじゃないの？」
「べ、別に全然好きじゃないですよ！　あんな枯れ木男！」
確かに父親は木霊ノ寝太郎だが
「じゃあ断ればいいわ」
「そ、それは、その、なんというか……で、でも、同じ家なのに、ボクよりずっと年下なのに結婚だなんて……い、いけないっ、セクハラですっ！」

「うーん」
よく分からない
どうすればいいのだろう、と髪を後ろに流しながら考える
月見の助けになればいい、とは思わず、ただの暇潰しだ

「……そうね月見、あなたもし朱点を退治して寿命が戻ったら、何か、やりたいことはあるの？」
「えっ、やりたいこと、ですか……？」
「ええ、もしも普通の人と同じように生きられるとしたら、何かしたいことはあるのかしら」
「……どうだろう、考えたことありませんでした」
寒色の青い鳥居を潜り抜けながら、一同は奥へ奥へと進んでゆく
もしかしたらこれが、壬生川一族が歩む最後の鳥居千万宮なのかもしれないと、ふと竜子は思う
「ボク、戦う以外の事は何も出来ません」
ぽつりぽつり、と月見が語り出す
月見が京で生きる道を奪ったのは、他ならぬ竜子である
「……生きてさえいれば幸せになれるとは、私は思わないわ」
「はい」
「幸せは、掴み取った人間にのみ与えられる特権よ、生きたいように生きればいいわ」
少し戸惑ったように視線を伏せた後、月見は短く、はいと頷いた

月見が思い出したように、尋ねてくる
「お姉様は、朱点を退治した後に、やりたいことがあるんですか？」
竜子は少し間を置いて、静かに答える

「……わたしは、あるわ」

～～

一同は稲荷ノ狐次郎を解放し、最奥へと到達する

「あれ、これ何ですか？」
幼いまなこが見つけたのは、一番最後の鳥居をくぐる直前だった
朽ちた屏風と行灯の置かれた部屋に、うずたかく土が積まれていた
「お墓、みたいですね」
「何でこんなところにあるんでしょうか……あ、月見お姉さんは物知りだからきっと答えてくれると信じてます！」
「え、えーと」
助けを求めるように視線をさまよわせる月見に、竜子が声をかける
「ただの狐の墓よ」
それで納得がいった月見と烈から、竜子に賛辞が送られるのを、少し離れて虚空が見ていた

（おぬしが烈の母親であることを止めた時点で、おぬしもお紺とたがわぬがな）

鳥居の先の魔方陣を越えれば、そこはかつて六代目当主が敗れた未の印だった

＜未の印＞

四人が広間を見回しても、中に朱点童子（しゅてんどうじ）・黄川人（きつと）の気配はなかった
その代わりに、人間の侵入者を許さない大蛇が、地響きとともに印よりせり出してくる

「う、うわ、うちの屋敷より大きいですよ！　食べたら何ヶ月かかるんだろう……」
「中身毛髪ですから食べられません！」

場違いなことを口走る烈の前、首吊り縄に似た龍がゆっくりと鎌首をもたげて、白い舌を動かしながら四人を見下ろす
その三日月型の目が竜子を睨んで、黄土色に瞬いた

「いきなりとは、無礼ね」
三ツ髪の＜光無し＞を避けた竜子が、＜石猿＞を結びながら叫ぶ
「虚空、月見、烈、術を封じてくる髪のようよ……固まらないようにして、神酔酒は使わないですぐに決めるわ」
「分かっておる！」
続けざまに虚空月見の＜石猿＞が完成し、続いて烈が皆に力士水を振りまく
幾度と無く繰り返してきたこの布陣が、破られた例はただの一度もない

散開して龍に立ち向かう壬生川一族の各々から、金色の神気が立ち上る
二度目の大蛇の＜光無し＞が飛ぶが、狙われた竜子は黒髪をなびかせながら悠々と避けた
「＜梵ピン＞」
「……力士水じゃ！」
壬生川で唯一の＜梵ピン＞使いに続いて、虚空が全員の攻撃力を数十点引き上げる

三度目の攻撃倍化が完了したところで、月見が息巻いた
「よし決めました！　残る迷いは戦いの中で振り切りますっ！」
「何のことじゃ」
「う、うるさいですよいじめっ子っ！」
虚空のちゃちゃに顔を真っ赤にして怒鳴り返しながら、月見が舞うように薙刀を振り切る
「双光蘭斬（そうこうらんざん）ッ！」

抉った十字傷から、汚れた緑色の血飛沫が噴水のように巻き上がる
「……は、これちょっと気持ち良い！」
「言っておる場合か！」
「たまには良いじゃないですかっ、ってきゃああ」
大蛇の睨みを受けて、月見どころか彼女をかばおうとした虚空まで
でも＜光無し＞をまともに浴びてしまう
頬を染めた月見が虚空に何かを言う前に、十一代目当主ががなる
「おぬし阿呆か！　余まで巻き添えにするな！」
「なっ……ちょっと待ってくださいよ！　誰も助けてくれだなんて
言ってないじゃないですかこの自意識過剰っ！　べーーだっ」
「きっ、貴様っ」
ふたりの言い争いをつんざいて、一筋の流星が三ツ髪にぶち当たり、その巨体を揺るがした
「あなたたち……死ぬ？」
鳥のように舞い降りた竜子が、髪をかきあげながら冷めた口調で言い放つ
「ぐっ」
「うう」
顔を真っ赤にして、ふたりは押し黙る

「引導を渡すわ、虚空、月見、時間を稼ぐのよ」
一度奥義を放ったばかりだというのに、汗ひとつかいていない竜子が告げる
三ツ髪は力を溜めて、どうやら最後の一撃を放とうとしている様子だ
「今度はしっかりやれよ、月見」
「分かってます……今度こそ守ってくださいよねっ！」
おや、と虚空が気づくよりも早く、月見が駆け出した
奥津ノ薙刀を構えて、横一線に振り抜く
「たあああああああっ！」

ざんっ、と血が飛び散る
続けざまに、跳躍した虚空が大蛇の脳天に槍を落とした
「――虚空落雷撃(こくうらくらいげき)じゃ！」
敵陣に走る強烈な閃光、滝のような稲光が龍の全身を貫く
黒煙の中から現れた三ツ髪が渾身の力を集めた一撃は、月見から狙いを外れて、その後ろで熱心に力士水をかけていた烈を直撃した
「うわああ！」
吹き飛ばされてガレキの中に埋もれる烈
「む、烈！」
「烈くん！」
烈の回復を優先しなければ、と虚空が＜円子＞を唱えだした直後、一筋の光が三ツ髪を砕いた

竜子が奥義・飛天脚(ひてんきゃく)によって、龍にトドメを刺したのだった
（……息子の命よりも、龍を討つ事が大事なのか、竜子よ）
黒い灰となって滅び去る三ツ髪の前で、こちらに背を向けたまま竜子は佇んでいた
月見とふたりで烈を介抱しながら、虚空は胸を痛める
（おぬしは崩れ落ちる髪を見ながら、何を思うのじゃ）
出陣の前の、あの孤独な目を思いだしてしまう

ため息をつくと、そばに月見の顔があった

「……あの、虚空さん」

ふたりで烈を抱き起こすと、月見が虚空に小声でつぶやいてきた
「ん」
薄暗い広間で、朱点童子の描いた印のぼんやりとした緑色の明かりだけが灯っていた

月見の表情は、よく見えない
問い返す
「どうした？」
「あの、」
闇から緊張感が伝わってくる
何やら重々しく、月見が頭を下げた

「ふつつか者ですが、よろしくお願いします」

ぎこちない声で、そう静かに告げてきた

「……む？」
しばらく虚空には、その言葉の意味が分からなかった

恋多き臥家（がけ）の新たな、願わくば最後の恋の始まりであった

三ツ髪を討ち取った！
残るは一本のみ！

第十一話ー3　「恋着」　１０２６年1月後編（後書き）

出陣・鳥居千万宮（竜子・月見・虚空・烈）　三ツ髪・打倒

第十一話－４　「夜昼」　１０２６年２月前編（前書き）

竜子　１才３ヶ月

月見　１才

虚空　８ヶ月

烈　３ヶ月

第十一話－４　「夜昼」　１０２６年２月前編

白梅の蕾も膨らみ始める二月の頭、虚空（こくう）と月見（つきみ）のささやかな祝言が壬生川屋敷（みぶがわ）の一室にて行われた

「豪華絢爛という訳にはいかんがな」
「別にいいですよ、こんなご時世ですし……」
けぶった月夜に、行灯の明かりがゆらゆら揺れる
虚空の部屋でふたりは、机台を挟んで向かい合う
中央に酒、銀盤の上に菱餅

「でも何だか不思議ですね、こういうの」
「ん」
「虚空さんとまさかこんな風になるなんて、全然想像もつかなかったっていうか……壬生川一族が結婚だなんて、何だか変ですよね」
「ふむ」
虚空は酒瓶を掴むと、部屋の戸を開けて縁側に腰掛ける

「思えばそなたとは、顔を合わせればケンカばかりしておったな」
「そうですよ……どうして、結婚しようだなんて、言ったんですか？」
「ん」
虚空は瓶を掴んで豪快に口に含む
その様子だと普段からよほど飲み慣れているのだろう、未成年どころか今月８ヶ月才のくせに
「月見が放っておけなかったからよ」
「……何ですかその、野良猫や野良犬が可哀想だから飼ってやるか、

みたいな言い草は」
旦那に習って、月見も杯盤に清酒を注ぎ、口をつけてみる
口内が焼けて、すぐにむせた

「くく」
虚空は口の端を吊り上げて笑う
むー、とうなりながら、月見は頬を膨らませた
「恋仲になれると良いがな」
「え！？」
「わしらじゃよ」
「いや分かってますけど！」
どこか虚空が上機嫌に見える、酔っ払っているのだろうか

「朱点を退治し、余らの役目が終わった時、な」
「え、ええ」
餅を食みながら、月見が虚空の細い横顔を眺める
切れ長な瞳が月を見上げ、白い肌が桃色に染まっている様は、月見から見ても妙な色気があり何故だかドキドキしてしまう
「全てに決着がついたら、その時は子でも産むか？」
「な、な、な――」
月見が見ると、虚空は月を背に笑っている
「夢のある話だとは思わぬか、月見、余は新しい世界をそなたと歩んでみたい、そなたが居れば退屈せずに済みそうじゃ」
「……こ、虚空さんが、そ、そこまで言うなら、ボクも別に良いですけど……」
「くく、愉快じゃ」
酒をあおりながら、虚空はそう言って笑っていた

しばらく、無言が続いた

縁側に座る虚空の横顔を、どれくらい眺めていただろうか

「さて、寝るか月見」
虚空が空になった瓶をトンと置き、立ち上がる
「え、ええ」
酒瓶と餅を片付けながら、じわり、と背中に汗が伝う
ついに来た、それはそうだ、結婚を引き受けてしまったのだから
「今宵は温いな」
「そ、そうですね」
生返事を返しながら、月見の心は気が気ではない、何せこれから並んで寝るのだ
布団と布団を並んで敷く、その間は少しの隙間、ちょっと近すぎるかと思い、もう少し引き離そうと引っ張る
「何をしておる」
せっかく少しずつ空けた隙間を、虚空が一気にくっつける
「こ、虚空さん……！」
空気読んでくださいよこのクワガタっ、と心の中で毒づくが、虚空にはまったく通じない
「灯り、消すぞ」
「は、はぃ……」
消え入りそうな声でうなずく

並んで布団に潜ると、指先に虚空の腕が触れて、思わず月見は手を引っ込める
何故だろう、置かれているこの状況が妙にこそばゆくて、どうしようもなく緊張してしまう

「……」
明日からも、毎日こうなのだろうか

もしかして、自分の決断は早まってしまったのだろうか
虚空の寝息が聞こえてきた
完全に自分に気を許しているその穏やかな息遣いに、竜子（たつこ）の言葉が浮かぶ

『……生きてさえいれば幸せになれるとは、私は思わないわ、幸せは、掴み取った人間にのみ与えられる特権よ』

虚空は悪い人ではない
自分より４ヶ月年下でありながらしっかりしているし、いつも一生懸命だ
口喧嘩が絶えなかったのだって、彼が真剣に自分のことを考えてくれていたからだ
頼りになるし、度胸があって頭も良い
たまに……優しいときもある

それに何より、どうしてそうなったのかわからないが、虚空は自分をとても想ってくれている

「……」
明日もう一歩、歩み寄ってみようか、と思う
照れずに心を委ねれば、もっと良い事が待っている、虚空にはそんな力があるように思えた
「……う」
虚空が寝返りを打ったため、月見のすぐ近くに顔がある
まさに目と鼻の先、唇を伸ばせば触れてしまいそうな距離
「だけど、だけど……まだ、こういうのは、もう少し慣れてからっ……」
涙目になりながら、慌てて反対側を向く、走って逃げなかったのは成長と言っても良いだろう

こうして新婚初夜、少女の眠れぬ夜は更けてゆく

＜翌日・虚空元服の儀＞

元服の儀を済ませた虚空が、普段と変わらない武士の袴姿で、冷えた木目を裸足で踏みつけながら旧月見の部屋を訪れる

「月見、ここにおったか」
部屋の引越しも済み、がらんどうとなった臥家（がけ）の部屋である、ひのき箪笥の置かれていた畳の後が青い
「あ、こ、虚空さん？」
部屋の柱を濡れ雑巾で拭いていた月見は、慌てて振り返る
「何じゃその目のクマは、どうかしたのか」
「い、いえ……あはは」
手をパタパタと振り、乾いた笑顔で応える新妻さん

「それよりも、もうじきそなたの子が来るそうじゃぞ」
「あ、もうそんな時間ですか」
水を張った桶に雑巾を浸けると、手がかじかむ
「何をボーっとしておる」
虚空が月見の頭を軽く小突いた
「べ、別に好きでボーっとしているわけじゃないですけど、そ、それよりも虚空さん！」
「ん？」

裾で手を拭き、妙に真剣な目つきで、立ち上がる

「ボク、昨夜考えたんです、せっかく結婚したんですし、意識から変えていったらどうかな、なんて……」
「ふむ」
「そ、それで、その第一歩として、まずお互いの呼び方を改めてみたらどうですか！？」
「呼び名」
はて、とイマイチ納得できなさそうな顔で首をかしげる

そこにもう一歩、月見が踏み込んだ
「た、例えば……そ、そう、旦那様と、お前、とか……」
踏み込んで、自爆した
耳まで真っ赤に染めて、震えながら悶える新婚・月見
「別に何でも良いが……そうじゃな」
虚空が平然としているので、月見のやってしまった感は数倍に膨れ上がる
「あなた、あんたぁ、お前さん、どんなのがいいですか！」
「うーむ……」
「こ、ここは趣向を変えて、こーちゃんとか、こーくんとか！　ね、ねえこーくん！」
「む、むう……」
今さら後には引けない月見の勢いに、徐々に虚空が押され始める
月見自身はもう泣き笑い状態だ
無言が怖いので喋るしかない

「分かりました、じゃあボクは、“あなた”、って呼びますね！
虚空さんはボクのこと、“月見”って呼んでください！」
「いつもと変わらないではないか」
「い、いつもより愛情を、込めて、です……！」
「わ、分かった」
反論したら噛みつかれそうな月見のトンガった目に、旦那も思わ

ずうなずいてしまう
勢い余った月見に肩を掴まれながら、虚空は苦笑いを浮かべる
「な、何ですかその顔は！」
きょう一日でもう一生分の赤面体験を済ませたような月見が、虚空に食って掛かる
「妙な事を考える娘だと常々から思っておったが、ここまでとはのう」
「きー！　う、うるさい、ばかっ、“あなた”ったらもうっ！」
勢いで、小さく虚空の頬をぺち、と叩く
少しだけ、ホンの少しだけかわいこぶってみたのが、間違いだった
「……」
あの虚空が頬に手を当てて、驚愕していた
先ほどの自爆とは比べ物にならない、本物の気まずさがやってきた
「……」
「……」
羞恥に俯きながら、消えてしまいたい、月見が心底そう思う
「ああ、まあ……」
虚空が何かを言いかけた時、ばたばたとした足音がやってきた
「月見お姉さんー、お子様きましたよー」
「れ、烈（れつ）くん！」
年下の弟がまるで神様の使いに見えた
感受性豊かな少年は、そんなふたりを見て首をかしげる
「竜子（たつこ）お姉さんはまた京都に行ってるみたいで……あれ、どうかしたんですか？」
「い、いえ！　何でもないんです！　さ、さあ虚空さんも一緒にいきましょう！」
思わず虚空さんと呼んでしまってから、ぎこちなく旦那の手を取

ろうとする
「ああ、余は立ち会えんな」
「へ、どうしてですか？」
伸ばした手が宙を掴む
虚空は庭を眺めながら、しれっと答えた
「余は今月、交神の儀を行うからな」
その瞬間、月見の髪の毛が一気に逆立った
＜交神の儀＞
「さって、今月もバーンとォ！　元気に参りましょーって、どうしたンですかその頬！」
「いや、なんでもない……何故泣くのか、自分も行なったではないか……」
真っ赤な手形のついた頬を、二の腕に歯型の浮かんだ右手で押さえながら、虚空が暗い顔でつぶやく
「そういえば、竜子の姿を知っておるか？」
「きょうは朝早くから、京の都に参りましたよォ」
「ふむ、そうか」
顎をさすりながら、相槌を打つ
「まあ、それはよいが、こたびの交神の儀な」
虚空は神様一覧表をイツ花に突き返して、告げる
「太照天昼子じゃ」

「わ、ついについに昼子様と交神なさるんですネ！」
イツ花は日のような笑みを浮かべながら、手を叩いて喜ぶ
「天界１０８柱の頂点に座する、火の女神じゃな」
そうですよォ、とイツ花がまるで自分の事のように、誇らしそうに微笑む
「良いですね良いですね、うらやましいッ、イツ花も昼子様と交神したいのにッ！　きい！」
笑顔もつかの間、アブない事を口走りながら、自分の膝をバシバシ叩く年齢不詳の巫女
「喜んでおるのか怒っておるのか」
「良いンです、お勤めですからッ、イツ花耐えます！」
「そうか」
涙を拭いてキッと前を向くイツ花と、凄くどうでも良さそうな虚空

「というわけで、昼子様をお呼び致します、がその前に！」
「まだ何かあるのか」
段々疲れてきた虚空に、イツ花が続ける
「実は太照天昼子様を選ぶと、イツ花の踊りはご覧になれませんけど、よろしいですか？」
「何も問題無いな」
理由も聞かず、キッパリとうなずく
「あ、あの……何故だ！　とか聞いてくださらないンですか？」
「……何故、だ」
この上なく面倒そうに尋ねる仏頂面に対して、イツ花はもじもじしながら、
「だ、だってェ、昼子様に舞を見られるなんて、恥ずかしいじゃありませんかァ」
そういうレベルの問題なのか、というかそれなら今まであっても無くても同じだったのか

虚空の眉が釣り上がる
「……もう、気は済んだな？」
「は、はい、それではただいまッ」
虚空の押し殺した声に、慌てて立ち上がるイツ花

イツ花は神楽鈴を振り上げ、天に向かって呼びかけた
「それでは、昼子様、後はバーンとォ、お願いしますッ！」

イツ花が部屋から退出して間もなく、儀礼の間の戸が封じられた
事の最中は身動きが取れないため、お互いの無事を配慮しての処置だろう

やがて、天から一筋の光が降りてくる
押し潰されそうなほど強い光と思いきや、身に触れれば実に柔らかく、心地良い
小さな八畳の部屋を照らす、どこか懐かしい陽光に、虚空の心が掴まれた
まさか、ほたる……いや、これが、母というモノなのか……？
魂すらも、無条件に屈服しそうになる

そんな光明を背負い、太照天昼子は虚空の前に姿を現した

昼子「私でお役に立つなら……」

たおやかな声と共に、部屋の中に日向の薫りが広がった
日輪の遣いが畳みの上に降り立った直後、その首元に銀刃が突きつけられる

虚空ではない、その者は下界よりも高天ヶ原に近いこの部屋において、背後から幻のごとく忽然と現れた

「ついに現れたわね、昼子」

京都に出かけていたはずの竜子が、刀を手に微笑む

一体この部屋のどこに隠れていたのか、女神の目すらも欺いて

「手荒な真似をして悪いが、これより幾つかの問いに答えてもらうぞ、壬生川の一族を生み出しし者、太照天昼子……いや、イツ花よ」

威厳と知性を兼ね備えた壬生川二強の瞳が、昼子に鋭く突き刺さった

第十一話ー5　「昼欺」　１０２６年2月後編

＜月見の子供＞

月見（つきみ）と烈（れつ）が居間で待っていると、やがて静かに戸が開かれた
現れた自分の子供を見て、月見の顔がぱぁっと輝く

「初めまして……母さん……」

鮮やかな緋色の髪を後ろで縛った、目の大きな少年だ
母親から受け継いだであろう金色の瞳と言い、肌の色こそわずかに違うが、月見によく似ていた

月光天ヨミの子、名は左京（さきょう）、臥家（がけ）の伝統通り薙刀使いである

「左京……」
ぼんやりと、何とも生気のない目で中空を見上げ、つぶやく
「……京の、東側」
「あなたの名前ですよ！？」
「ああ……そうだった……よろしく」
月見の勢いあるツッコミにも動じず、ゆっくり頭を下げる

「でも良いなー、左京は、こんな綺麗なお母さんがいて、羨ましいなー」
並べば烈と左京は同じ赤髪同士、まるで兄弟にも見えた
「え、ええ？　そんなぁ」
ついつい顔が緩んでしまう新妻

左京はぽんと、手を鳴らす
「烈くんは……コウノトリから生まれたのか……」
「違うけど！」
そういう意味ではない、と声を張り上げる
「ぼくのお母さんは、すぐ死んじゃったんだ、ほたるお母さん」
「……」
烈の明るい声に、知らず知らず月見の笑顔も曇ってしまう
ぼけーっとした顔で、左京がうなずく
「そっか……じゃあ、俺の事をお母さんと思ってくれても……いいよ」
「思えないよ！」
まるで烈の声に殴られたようにぐわんと上体を傾けて、変な姿勢で固まる左京
「……青天の、霹靂」
「いやそんなに驚くことじゃないでしょ！」
晴れ渡った空に突然起こる雷の意、である

月見は笑みを浮かべながら、すごい子が来ちゃったな、と困ったような嬉しいような思いを抱いていた

（……早く、虚空さんにも紹介したいな、ボクたちの子）

何やら仲良さげな少年ふたりを眺めながら、ついつい虚空のことを思っている自分に気づくと首を振る

（……ってダメですっ、簡単に許さないんですからっ、あんな浮気者っ……べ、別にボクだって求められたら精一杯……ってそんなわけないないっ、何言ってるんですか月見っ！）

ぼーっとした息子の前で、彼の訓練も忘れ、ただ悶々と頭を巡らせる新婚の月見であった

＜対昼子・続＞

一方こちらは緊迫した雰囲気

「私に憑けていたお小夜なら、まだ京で惑っているわ」
羽黒ノお小夜だけではない
壬生川に集まる神の全てが一族を監視しているのだと、竜子はとうに気づいていたのだ
だからこそ、昼子の目すら眩ませた
昼子を見据えて、虚空が問いただす

「朱点童子を産んだのは、片羽ノお業という天女であり、その半神の赤子をいかなる事情があったのか知らんが、大江山京の象徴として祭り上げたのもまた神の仕業じゃろう、それを京の帝に襲わせたのも神の指図ならば、その戦乱で生き延びた朱点を復讐の芽が育つまで放っておいたのも神じゃ、まことに馬鹿げておろう」

昼子の首元に押し付けられている白刃が鈍く輝く
状況は2対1、依然として話の主軸を掴むのは壬生川（みぶがわ）一族

「挙句の果てに、闘争の火を掲げた朱点童子を仕留めきれず鬼の身体に封印し、それを人の子らに襲わせておる、呪いをかけられた我らを救ったのも手のうちか、無責任にも程があるぞ」

重々しい虚空の言葉も、昼子にはまるで風のように通り過ぎてゆくだけのようだ
仮にも、天界第二位の氷ノ皇子級のふたりに挟まれ、背後から刃を向けられているというのに

「おぬしらは信用が置けぬ、父と母を殺された少年の呪いなど本当は解けたのじゃろう、朱点童子は当時半分の力も出せなかったと申しておった、そなたならそれが出来たろうて、なのに何故しなかったか、そして復讐に手を貸すなどと言ったのか」

虚空の舌が緊張に乾いてゆく
問いただしているのはこちらなのに、追い詰められている気さえしてくる

「……朱点の計画を逆に利用したのじゃな、短命であればどんなに力をつけたところで、自分たちの邪魔になることはなく、先祖の怨みを晴らすべく朱点を殺すまでひたすら戦い続ける、更に勝手に増えることもなく、完全に自分たちの管理下における、実に都合が良かろう」

ふと目を向ければ、竜子もまた奥歯を噛みしめていた
髪の間で朱点童子と対峙した時のような、緊迫した雰囲気が肌に刺さる
この後に及んでも、昼子はまだ口を開かない
竜子が目で虚空に問う
腕の一本でも頂いて見せようか？
せっかちな娘だ、昼子も恐ろしいが竜子も並んで恐ろしい
その刃が鳴る前に制止し、壬生川の当主として虚空は昼子に尋ねた

「絶望の暗闇の中では、針の穴ほどの希望が太陽にも見える……余

は今一度問おう、おぬしは果たして針か太陽か、答えよ昼子、壬生川をどうするつもりじゃ？」

虚空の言葉に、昼子はそこでようやく、ええ、と呟いた
イツ花の姿をしていた頃と変わらない声だ
昼子はすぐに顔を上げ、潤んだ瞳で虚空を見つめた
潤んだ瞳？

「えーっと……喋りたいんですけど、この刀が怖くてなかなか喋れないんですよォ、ううん、ちょっとどけてもらいませんかァ？」

胸の前で両手を組んで、うるうるとした目で虚空にお願いする太照天昼子
これしきの事では、虚空と竜子のペースは崩れない、が
「……竜子」
しぶしぶと、竜子は刀を腰に下げた鞘にしまう、それでも後ろを取っている事に変わりない
昼子は安堵のため息をつくと、天を仰ぐ

「ふぅ、ううん、怖かったァ、夕子ちゃ～～ん」

「……夕子？」
「太照天昼子に名を与えた神であろうが」
「それは分かっているけど……」
これが本当に、あの太照天昼子？というムードが満ちていた
思わず脱力しそうになるが、この機会を手放すわけにはいけない
「おぬしらの浅はかさなどに興味はない、単刀直入に聞こう、朱点童子を倒せば短命と種絶の呪いは解けるのだな？」

昼子は朗らかな笑顔で、胸を張って答えた

「はい、それはもう、バーンとォ！」
即答だった

「……いまいち信用に置けんな」
公明正大すぎて、逆に怪しくなってしまう

「あ、じゃあじゃあ、もし治らなかった時は女神の子何人でも持ってって良いですから、交神し放題ですよ、し放題、えへへ、よッこの果報者ッ」

「治る、のね？」
怖い女が昼子の首を掴んで、囁く
「そうでーす、うわーん」
こんなやり取りは、いつも見ているような気がする
これではあまりにもイツ花ではないか
「……何とも、調子が狂うな」
「馬鹿」
頬をかく虚空に冷たい一言が飛んだ

「あんまり睨まないでくださいよォ、天界の事情も色々複雑で、一枚岩じゃないんですよネェ、壬生川一族を良く思わない神様も一応いることはいるんですよ」
「貴女の正体、私には分かるわよ……私と同じ匂いがするもの」
「竜子さまみたいな美人に同種って言ってもらえるなんて、光栄ですね」
竜子の方を向いて、昼子が微笑む
それはとても皮肉だとは思えなかった、なんせ正体はあのイツ花なのだ、いかにもイツ花が言いそうなことである

「質問はまだ終わっておらんぞ昼子、大江山京を襲った侍が鬼とな

って儂らの前に立ちふさがった、捨丸じゃ、あやつは女神の命令で働いていたと言っておった、風神と雷神の両者もそうじゃ、壬生川を鍛える事が使命のように申しておったな」

初めて昼子が目を逸らした

「……チッ」

舌打ちした、絶対に舌打ちした

「……」

「あ、アハハ、そんなこと言ってましたかァ！　あの骸骨と偽ドリフ！」

竜子に睨まれて、昼子は後頭部に手を当てながら乾いた笑みを浮かべる

「赤猫お夏はおぬしが現れたのは最近であると言っておったわ、一気に天界を掌握したそうじゃな、それも相当強引な手法で」

「……や、やですねェ、猫の言う事なんて真に受けなくたって」

「まああのヘタレはそうじゃが……氷ノ皇子は、全てを知っておったぞ」

「どちらの方でしたっけ～？」

さすがに無理がある、そのごまかし方は

虚空は嘆息した

「ここまで言えばもう良いじゃろう、神たちのやることは矛盾だらけじゃ、その中でも昼子、おぬしは本気で朱点童子を殺そうとしていない、本気で退治しようとするならば、朱点童子を鬼の中に閉じ込めた時点で、神ごと常世の沼に沈めてしまえば良かったろう」

相手がイツ花ならば、正面から聞いてしまえばいいのだ

「朱点を捕らえようとしているのか、あるいは救おうとしているのか、おぬしは」

昼子はふっと肩の力を抜いて、微笑んだ

「意外とスルドいですね、虚空さま、っていうか何かカンニングしてますよね、ズルーい」

「おぬしはいちいち茶化さないと話せないのか……」

昼子はその場に正座して、背を立てふたりを見上げて声を張った

「黄川(きつと)人は私の実の弟です」

どこからか、ざわめきが聞こえてきた気もするが、風の音だったろうか

顎をさすりながら、虚空もまた腰を下ろす

「……ふむ」

「弟の責任は私が取る、と言いたいのですが、残念ながら私が黄川人に倒されるわけにはいかないのですよ、私が囚われてしまえば、天界は地上を見捨て、この世は間違いなく朱点童子に滅ぼされてしまいます」

どこか幼さの残る顔立ちを引き締めて、昼子は続ける

「私はそのために壬生川一族を迎え、その道しるべとなるべく、皆様とご一緒に生活して、共に笑い、泣き、喜ぶ事にしました、それが黙っていた事への償いになるとは思えませんが、私が皆様と生活した9年間は嘘ではないのです、これが太照天昼子の心の内です」

人心を操る術があるとするならば、それはまさにこの言葉そのも

のだったろう
　虚空は揺れた、しかしまだ認めはしなかった

「信じたいのは本心じゃが、余は壬生川を背負う身、そなたの言う事を素直に聞くわけにはいかん、万に一つがあってはならんのだ」
「うーん、ではどうしましょ？」
　昼子は困ったように柔和な笑みを浮かべた、楽しんでいるようにも見えたのは錯覚だろうか
　そして次の瞬間、八畳の部屋の均衡が崩れた

「太照天昼子のいうことに、偽りは無し」

　いつの間にか、目を離したわけでもないのに、気がつけば部屋は雲の上に浮かぶ一艘の舟と化していた
　紺色の天ノ羽衣を纏った女神が、黄金の星の輝きを帯びて降りてくる

「……太照天夕子」
　もうひとりの太照天、その力は天界で唯一昼子に比肩する

「この子がいたからこそ、朱点童子もこの屋敷には手出しできなかった、昼子は神も人も、そして壬生川のそなたたちも共に救おうとしています」

　昼子よりもよっぽど凛然としている、こちらが天界一位と聞いた方がよっぽど信じられそうだ
　中腰になり柄に手をかけた竜子の殺気を、能天気な驚き声が散らした

「わっ、夕ちゃんいつのまに！」

「……夕ちゃん？」
「……夕ちゃん」
呼ばれた本人は慣れているのか動じず、正座する昼子の肩に手を置き、この世の全てを見透かしたような瞳で壬生川当主を見た
「朱点童子はそなたたちを脅威だと認識しています、もし朱点童子を倒したあとに、昼子の言葉が偽りだとわかったなら、そのときはどうぞ反旗を翻してくれてもかまいません」
言っている事は非道だが、無茶ではない
「私達が朱点童子を倒せなかった以上、彼の者を退治したそなたたちを止める術はありません、天も地も滅ぼすがいいでしょう」
虚空と竜子は大空の下で視線を合わせた
竜子は小さくうなずく、それで虚空の腹は決まった
「……分かった、全てが終わり絶望が残ったその時は、そうさせてもらおう」
「そのときは、真っ先に私の首からさしあげましょう」
夕子は乳飲み子に血を分けるように優しく、さしあげましょう、と告げた
これが天界を統べる女神の度量か、虚空の手のひらにじわりと汗がにじんだ
もうひとりの主神は、破顔しながら夕子の首に抱きついていた
「夕ちゃんってば、やっぱり頼りになるゥ！」
「昼子、暑苦しいからやめなさい」
眉も動かさずに夕子

「うぅぅ、天界でまでこんな扱い……ッ」
着るものだけは立派になった昼子が、その場に崩れ落ちてさめざめと泣く

ふと、思いついたように竜子が尋ねた
「そういえば……朱点童子に力を授けたのは、氷ノ皇子っていう話よね」
まだ少しぐずりながら、昼子が立ち上がる
「そうみたいですねェ……あの人もお優しい方ですから」
「……もしかしたら、術を教え込んだのも、彼なの？」
「多分そうだと思いますよ、何柱か堕ちた神様から知識を見通したのもあるんでしょうけど、秘術や禁術と呼ばれる類はあの人から吸収したんだと思います、それがどうかしたンですか？」
「いえ、十分よ」
「……」
夕子の視線を薄く微笑んでかわす竜子

「でも、そなたたちが仲違いをしないでよかった」
「……何のことだ？」
「昼子にもしものことがあれば、かれらがそなたたちのことを許さなかったでしょうから」
「ふェ？」

急に名前を呼ばれ、昼子が神らしからぬ声を上げながら小首を傾げる

「見せませ」

雲の間から、滲むように人の形が現れた

「……何じゃと」
舟を囲むように、右から、左から、前から後ろから、次々と高位の神が姿を見せる、今までまったく気づかなかった
「これは一体……」

驚愕する虚空と竜子の目には、見知った顔もあった
燃える大男、立派な鬣を蓄えた獅子、団扇を持った女、竜の姉妹、その数なんと男神十柱、女神九柱、総計十九柱
壬生川一族たったふたりに対して夕子は、朱点童子を封印した十九の神を宛がうつもりだったというのか、正気ではない

「……光無しノ刑人」
「話は聞かせて貰った、そなたらの道に光ある事を祈ろう」
その中の烈の父――竜子の交神相手は、両手を合わせて軽く頭を傾けた
照れながら、昼子が嬉しそうに自慢する

「私って、結構人望……じゃなくて、神望はあるみたいなんですよォ、えへへ」

「……」
調子に乗るな、と頭を叩くものはいない
均衡などは、最初からなかったのだと、虚空は今さら気づいた
元よりすべて、夕子と昼子の手のひらの上だったというわけか
「……してやられたわ、篭絡されたのはこちらか」

「あ、それで、それはそうとどうしますか虚空さま」
神々の見守る中で、昼子は唇に人差し指を当てながら、あっけらかんと尋ねた
「何がじゃ」

慣れない心労感にけだるさを覚えながら、虚空は昼子を向いた
「交神の儀、もう始めちゃいます？」
虚空だけではなくて、何柱かの神まで噴いた
「……それでは、我らはもどりましょうか」
「そうね」
竜子と夕子が首肯し合う

「ちょ、ちょっと待てっ」
夕子が手を叩くと、天ノ浮舟だった部屋は、八畳間に元通りとなっていた
どこからか、声が響く
「べっつにィ、減るもんじゃないしいーじゃーん、あーあアタシもやってみたかったなァ」
「お手並み拝見いたしましょ、ね、皆様」
「ハンダキ！　ハンダキ！」

外野の声にたまらず虚空が叫んだ
「あやつら、ひょっとして見ているのか！？」

「すべては夢の中のこと……」
「やかましいわ寝太郎っ！」
部屋に残されたのは、いつしか二人だけとなり、

「うふふ、一度はしてみたかったんですよォ、うふふ、台詞が流れちゃったらもうキャンセルは出来ませんからねェ」
「ちょっと待てっ、余には、妻がっ」
虚空に昼子のニッコリとした笑顔が覆いかぶさる
「良い子が、生まれますように」
天界の鏡から十九柱＋夕子に見守られながら、新妻とではなく家

政婦と子を成すという前代未聞の事態に、

（……スマン月見！　だがこれは決して浮気ではないのだ、浮気ではない！）

虚空は心の中で月見にわび続けるのであった

第十一話ー5　「昼欺」　１０２６年2月後編（後書き）

交神の儀・虚空×太照天昼子
初見・左京→薙刀士　訓練・月見→左京

第十一話－６　「客神」　１０２６年３月前編（前書き）

竜子　１才４ヶ月

月見　１才１ヶ月

虚空　９ヶ月

烈　４ヶ月

左京　１ヶ月

第十一話－6　「客神」　１０２６年3月前編

三月、それは草花が芽吹き、新たな命が結ばれ出す生命の季節
そんな久々な明るい書き出しが表すように、壬生川家もまた軽暖の候を迎えていた

賑やかな声に誘われ、虚空は居間の戸を開けた
「ん」
「あ、虚空お兄さん、こんにちはー」
交神の儀を済ませてすっかり男前になった9ヶ月才の虚空に、まだあどけない烈が笑顔を向ける
「……どうも」
部屋の中では、顔を突き合わせて、烈と左京と家政婦が本を並べていた、月見は居ない
「神術の勉強か、殊勝な心がけじゃな」
壬生川家にはいまだ＜卑弥子＞使いがいない、それだけではなく＜梵ピン＞の術すら竜子以外は誰も使えない有様だ
虚空も月見も技の火が絶望的に足りない、情けない話だがそれだけに新世代のふたりには期待がかかる

「そういえば左京」
「……母上の旦那さん、何ですか」
額に矢が突き刺さったような衝撃を受けて、少し揺らめく
「そ、それは、月見にそう呼べと言われたのか？」
半笑いが浮かぶ、そこまで自分のことを恨んでいるのか
左京はしれっと答えた
「いえ……特に意味は」

息子？の頭に拳骨を落としながら、続ける
「おぬし先月に月見から奥義を授かっておったな」
「……うん」
頭をさすりながら、ぬぼーっと左京、本当に生きているのだろうかこいつは
「そうか、月見はもう奥義が使えぬ身か、あい分かった」
決戦に向けて双光斬（そうこうざん）や鏡返（かがみがえ）しを失ってしまったのは、少し痛いな、と虚空は眉根を寄せる

「じゃあ、左京くんお勉強続けようか、早くツッコミ上手にならなきゃね！」
「……日進月歩」
気のせいかとも一瞬思ったが、虚空は神妙な顔で烈の広げていた本を覗き込んだ
週刊京美人＝デキるツッコミ大全＝、著者・瑞穂（みずほ）
「何をしておる！」
「うわあ」
思わず机を蹴飛ばす、烈が身をよじって避け、その際に飛んでった雑誌が左京の顔面に当たった

そこに家政婦の静かな笑い声が重なる
「おかしいですね」
「おぬしの存在がな！」
巫女装束姿の夕子に、虚空が食って掛かる
「何故おぬしがここにおるのじゃ！」
見て見ぬふりをしていたというのに
「あ、何だかイツ花さんが用事があるからって、その代わりにイツ花（か）さんのお姉さんが来たんだってー」
痛む鼻を押さえながら、左京が「寝耳に水……」などとつぶやく
「イツ花の、姉じゃと？」

ねめつけるような目つきで睨んでも、夕子は白々しく微笑む
「はじめまして、夕花でございます」
「そんな頭にギンギンした金飾りをつけた巫女がどこに居る！」
「天冠をつけて家事をこなすのは、骨でした」
こいつ、あくまでもシラを切り通す気か

「あい分かった、ふたりで話そうぞ」
夕子の肩を掴んで立たせる、怖いもの知らずの虚空である
そんな当主を、尊敬の目で見つめる少年たち
「なるほど、こういうことなんだね、虚空お兄さん！」
「……深い、真髄」
「何のことじゃ」
烈と左京が、先ほどの頁を誇らしげに開いて見せてくる
「イツ花さんが、きっと必要になるからって、ぼくたちにくれたんだ！」
「そんなものはよい、稽古をせい稽古」
「してるよ？」
「違うわっ、武道のじゃ！」
襖が震えるほど怒鳴って、居間を後にする

虚空は夕子の首根っこを掴みながら、廊下に引っ張っていく
巫女服に天冠、目元に怖い紅を塗った夕子が、ほうきのように引きずられながら微笑む
「虚空さまも、日増しに月見さまに似てまいりますね」
「きさまいつから壬生川家を見下ろしていたっ」
夕子と月見は直接の接点がないため、そういうことなのだろう
「いつから……なにから、なにまでです、ふふふ」
「おぬし、ひょっとして楽しんでいまいか……」

神相手に気勢を張る愚かさを悟りつつ、つぶやく

「昼子に家事をおしつけられて、ほんとうに迷惑しています……今夜はふきのとうで何品か作ってみようと思います、山菜の美味しい季節になりました」

その割にはやたら楽しそうだ

引きずっていた虚空の手を抜けて、夕子が立ち上がる

「あなたに昼子から言伝があります」

正面に立つと、夕子は虚空よりも背が高い

「……なんじゃ」

懐から一枚の手紙を取り出すと、夕子は厳かな調子で読み出した

「“当主様！　先日の交神の儀で昼子様のお顔をご覧になって、さぞビックリなさったでしょ！？”」

驚くほど口調と内容が合っていない

「“イツ花の正体は、な、なんとォ！　天界の頂点に立つ太照天昼子だったとは！　だまされたああ！　なーんてね、へへ、けっこう似てたでしょ？”」

流れについていけず、黙って聞いている虚空

その拳が徐々に震え出す

「“あそこまでマネるの大変なンですよ、私、前から昼子様に憧れてて、髪形から声色まで一所懸命研究してマネっこしてるンです、だいたい1番偉い神様がこんなトコで大根切ったり、フンドシ洗ったりしてるわけ――”」

話の途中でその紙を引きちぎる虚空

「やかましいわっ！」

「……最近のそなた、すこし度量が狭いですね、寿命が縮みますよ」

「茶番に付き合ってられるか！」

虚空は周りに誰もいないのを確認すると、咳払いをしてから家政

婦2にツリ目を向けた
「よもやきさま、皆に余計なことを喋ったりしていまいな？」
「余計なことと申されますが、どのようなことでありましょう」
冷笑と無表情の中間のような顔をする夕子に、声を殺して怒鳴る
「交神の儀に決まっておろう……！」

「交神の儀がどうかしたんですか？」

戸が開き、不機嫌そうな顔が現れた
口から内臓が飛び出るかと思った
「つ、月見！？」
「……なんですか、まるで二股の大根を見るような目で、ボクが自分の部屋に居ちゃいけないんですか」
何故ここに、と尋ねようとして気づく、臥家の部屋の目の前だった、きょうの自分はどうかしている、気が抜けすぎている
月見はやけに冷たい目で、虚空と夕子をかわるがわるに見つめる

そしてため息
「……ほどほどにしてくださいよ」

「待て、おぬしは何か全力で勘違いしておる、こやつはイツ花の代わりに来た家政婦じゃ」
無意識に早口で弁明していた
「はじめまして、イツ花の姉の夕花ともうします」
「あ、これはこれは初めまして……って、あれ？　何だかどこかでお会いしたことがあるような……」
それはきっと神様一覧表だろう
「それにしてもすごい美人さんですよね、虚空さん」
「……そうじゃな」
何故余に振るのだろう、と虚空

視線が刺さる刺さる
「うちの当主さんのような色情魔には、注意してくださいね夕花さん」
「なっ――」
虚空が月見の手を掴んで、呼び止める
「月見、誤解と何度も言っておるであろう！」
「何ですか、離してくださいよ、ボクは決戦に向けて修行しなきゃいけないんですよ、お姉様の足手まといになるわけにはいけないんです！」
「月見、話を聞けっ」
焦れた虚空の声を払いのけ、月見は道場の方へと駆けてゆく
そんな少女を追いかけて、虚空もまた夕子を置いて走り去ってゆく
「……」
確かに昼子の言う通り、人間とは感情が多彩で面白い生き物なのかもしれない、と夕子は思う
喚きながら離れてゆくふたりを、遠い目で眺めながら、夕子はふと庭に視線を落とす
「……？」
縁側から、よっこらせ、と這い出てきたのは実に晴れ晴れとした顔の昼子だった
夕子が白い目で見つめる中、砂だらけの割烹着の埃を払い落としながら、満足そうにうなずく
「これだから、人間って面白いンですよね！　うんうん、ふたりの恋の行方は一体ッ」
ひとりで身体をくねらせる昼子に、あなたも十分面白いですよ、とは言い出せない夕子であった

～～

道場へと続く道すがら、虚空は月見の細い肩を掴んで、こちらを振り向かせる
「何ですか焦っちゃって、離してくださいよ」
「鍛錬には余も行こう、それよりもじゃ、おぬしは何を怒っておる」
ツンツンと髪を尖らせて、月見がそっぽを向く
「別に怒ってないですけど、やましい気持ちがあるからそう見えるんじゃないんですかっ」
「そんなものあるかっ！」
「どーだか、大体あなたは昔から手の早い人でしたし」
「初めて会った時のことなど、まだ覚えておるのかおぬし」
呆れたようにつぶやく、つい最近指摘されるまですっかり忘れていた

今度は妻が犬歯を剥いて掴みかかる
「なっ、なんで簡単にすぐ忘れちゃうんですか、そういう大事なこと！」
「過ぎたことなどもう良かろう、先月の件も忘れろ」
「どうでもよくなんてありません！　て、ていうか別に先月のことを気にしているわけじゃありませんし！」
犬も食わない夫婦喧嘩が、徐々に加熱してゆく
「あまり怒ると眉間にしわが出来て、竜子みたいな顔になってしまうぞ、ほれ」
「ちょっとちょっと、ボクのお姉様のことバカにしないでくださいよ！」
「誰もそんなこと言ってなかろう、部屋に戻ってこい、月見」

月見が左京を連れて臥家の部屋に引っ越したのは、つい先週のことである

それでもまだむくれっ面の月見に、虚空が嘆息を漏らす
「交神の儀など、空しいものよな、所詮余らは半端な存在だと思い知らされる」
「そんな、なに急に真面目な顔して……」
月見は真剣な表情で手を振り上げる
頬を張られると思い、一瞬目を瞑った虚空の横顔を、妻がそっと撫でた
「……月見？」
予想外の展開に、なかなか言葉が出てこない

「やましい気持ちがないなら、堂々としていれば良いじゃないですか……もう、不器用な人なんですから、昔から……」
月見は虚空の胸元に顔をうずめながら、ささやく
「交神の儀は仕方ないことですし、ボクだって人のこと言えません……ただ、ちょっと冷たくしたかっただけなんです、ごめんなさい」
虚空は静かに月見を抱きしめる
「……別に気にしとらんよ」
華奢なくせに柔らかな娘だ、ほのかに花の香りが漂う
「相手が昼子さまだなんて、妬けちゃうじゃないですか……相手が悪いですよ……」
相手は悪かったな確かに、と虚空は胸の中で反芻する

まるで人が変わったように、可愛らしい上目遣いで新妻が虚空を見上げる
「……あ、そういえばあの、どんな人だったんですか、昼子さまって」
「ぬ」

足の小指をぶつけたような表情に変わる虚空
「きっと、おキレイな人だったんですよね、天界で一番偉い女神さまですもんね」
陽だまりの子犬のように微笑む妻

「……そんなことはない」
「そ、そうだったんですか？」
「ああ……粗野で下品な女じゃ、喋り方は変であるし敬語もまともに使えん、選んだ１０７人は後悔しておるという噂であるし、余がつい最近１０８人目に加わったわ、そんなことよりも月見」
昼子の笑い声がどこからか聞こえてきたような気がしたが、無視した
「は、はい？」
嫌な予感でもしたのか逃げ腰の月見の頭を撫でながら、虚空が告げる
「おぬしがそこまで気にしていたというのなら、よし分かった、今からふたりで交神の儀をやり直そうぞ」
穏やかな顔をする旦那に、ついに狂ったか、と月見は一瞬思った

虚空が手近な部屋に無理矢理月見を引き込んでゆく
「ちょ、ちょっとぉ！」
なんとも異様な光景である

「そういう意味じゃありません！　バカっ、色狂い！　この英雄さまっ！」
先祖に失礼な言葉をはきながら、虚空の顎に掌打を食らわせたりして、必死に抵抗をする
「なんじゃ、気にしておったんじゃろう、照れるなおい」
顔を真っ赤にしながら、月見は無骨な手に着物の帯を取られまいともがく

「誰も照れてなんていません！　あなたはまたひとりで寝てくださいっ」

にやにや笑う旦那もまた、人の話は聞かない人種のようだ

「月見、好いておるぞ」

「こういうときに言う台詞じゃないですよそれぇ！　っていうか稽古するんですよ今から、ねえ、ちょっと聞いてます！？」

がらり、と戸が閉められた

「ちょ、ちょっと、本気ですか！？　こんな真昼間から、ちょっとぉぉ、いやあああああ」

というわけで、ふたりは3月一杯交神の儀を行った……とは、いかない壬生川一族であった

第十一話－7　「荒神」　１０２６年3月後編

＜出陣＞

玄関、月見（つきみ）が屈んで、左京（さきょう）の頭をわしゃわしゃと撫でる
「それじゃあ、お母さんは出陣してきますからね、今回は誰も指導できませんから、左京もちゃんと薙刀のお勉強しているんですよ」
「はい……母上」
「この前みたいに、一日中居眠りしていたら、＜雷電＞ですからね！」
「……朱点を倒した暁には、冬眠、というものを……してみたい」
ボーっとした顔でうなずく息子の後ろ髪を、手首に巻いていた飾り紐でまとめてやる

その様子を眺めていた虚空（こくう）が、つぶやく
「月見、本当に母親なのじゃな」
「何言っているんですか今さら！」
左京の肩に手を置きつつ、月見は虚空をたしなめるように睨む
「ボクとあなたの子なんですからね、自覚持ってくださいよ」
「ううむ」
そう言われても、虚空と左京の歳の差はたった８ヶ月である、もっとも、そんなのも今さらかもしれないが

「まあ左京よ、月見の次くらいに可愛がってやろう」
月見にすねを蹴られ、しばらく悶絶する当主
「もう、いらないことばっかり言って……それじゃあ、後はよろし

くお願いしますね、イツ花さん」
「はァい」
見送りに来たイツ花が、ニコニコニコニコと頭を下げる
「……留守は任せたぞ、い、イツ花」
「勿論、任せてくださァい」
何故だろう、その太陽のような笑顔が、きょうは凄まじく白々しいものに見えてしまう

「不安だ」
「え、どうしたんですか？」
「何でもない」
言えるわけがない、虚空は床に寝せていた槍を拾う
「あ、そうそう、虚空さまァ」
「何じゃ」

「来月は、あなたの子供が来ますから、怪我なく帰ってきてくださいネ」
イツ花のウィンクを浴びて、軽い眩暈が襲ってきた

「あ、そうですね、来月はそっちの番ですもんね、ああ楽しみです新しい子」
月見が爽やかに笑い、腕まくりをして薙刀を掴む
バレてはいない、バレてはいない、たぶん
「あ、ああ、そうじゃな、カハハ……」
「……父上、脂汗が」
笑顔の眩しい女性陣に挟まれて、笑うしかない虚空だった

一方、壬生川屋敷の門前にふたつの人影があった
「あ、竜子お姉さん、おかえりなさーい」

「ただいま」
屋敷に戻ってきた竜子と、一足先に身体をほぐしていた烈が、鉢合わせたのだった

庭石に腰掛けて遠くを見つめる美女、その傍で剣を振る少年
「ねえねえ、竜子お姉さん」
「ん」
「これから行く流水道って、どんなところなの？　大きな水たまりなんだっけ？」
「そうね」
「困ったなあ、ぼく水って苦手なんだよね、ゆらゆらしてて気持ち悪くなるや」
照れたように笑う

竜子は腕を組み顎に手を当てて、目を細める
「……」
それからすぐに虚空と月見が来たため、竜子が何かを言う前に四人は出発した
目的地は忘我流水道、最後の髪切りである

＜忘我流水道＞

壬生川家、通算四度目の忘我流水道
二度目となる竜子は1才4ヶ月、続いて月見が1才1ヶ月、そして虚空9ヶ月、烈（れつ）4ヶ月となる、まだまだ皆、現役の盛りだ
天界の母たる昼子とも交わるほどに力を高めた一族は、入り口付

近で少し烈が遅れていたが、それはともかく、鬼たちを斬り捨てながら奥へと突き進む
真名姫が棲まう、人魚の瀑布へとたどり着いた

「ウフフ…やっと私にも事情が飲み込めたわ」
滝つぼ近くの浅地に寝そべりながら、敦賀ノ真名姫は悟ったように微笑んでいた
一同の中で一番威勢の良い月見が、前に進み出て薙刀を掲げる
「とうとう観念しましたか、人魚さん！」
「昔あなた方の家族を押し潰したことは、水に流して、ね、ホラ」
「なに巧いことを言っているんですか！」
滝を手のひらで指して笑う真名姫に、月見が食いつく

「あなたたちって、あの姉弟のこと、何も知らないで戦ってたんでしょ？　ちょっとかわいそうかもね」
「姉弟……ですって？」
一体どうしてこの人魚が心変わりを果たしたのか、虚空は口元に手を当てて考えていた
「……よもや、昼子の口ぞえか？」
真名姫は何も言わずに微笑を浮かべると、まとっていた肉を瞬きの間に脱ぎ捨てる
「いいわ…私に勝ったら、私くらいは本物の味方になってあげる」
骨の槍を両手に、真名姫は異形の姿となり飛び跳ねる

かつて四代目当主・蘭（らん）を含む、大江山討伐隊を殲滅した人魚も、恐るべき速さで成長を遂げた一族の前には、骨も形無しであった
月見の薙刀に両断され、真名姫は光の粉となりながら告げる

「こんど朱点に会ったら、真名がこう言ってたと伝えといてくれる？」

人間に迫害された不遇の人魚は、全てを許すような柔らかな声色をしていた

「あんたの不器用なとこけっこう好きだけど、私裏切るから」

まるで子供のように軽い、裏切る、という言葉
虚空には真名姫の心の中まで、計ることは出来ない

「そのかわりあんたが負けてボロボロになったら……あんたが私にしてくれたように、体中の傷をなめて膿を吸って、一緒に大声上げて泣いたげる」

あの朱点童子が本当にそんなことをするのだろうか

「だいたいそんな感じで伝えといて！　じゃ、また会いましょ」

真名姫はそう言うと、赤い首輪を自ら外した
その瞬間、水中の深くから青白い魂が、天へと立ち昇ってゆくのが見えた

「……うわあ、すごい、水が澄んでいくよ！」
烈がはしゃいで声をあげる
「では、行くか」
「は、はい」
虚空の号令で、皆は迷宮の奥へと進み出す
最後尾の竜子が真名姫の捨てた首輪を拾い、密かに懐に入れたのを、見ていたものは誰もいなかった

＜永久氷室＞

道中、虚空が月見の手を握り、つぶやく
「おぬし、寒そうじゃな」
「いやあなたに言われたくありませんけど！」
二の腕と胸板がむき出しの虚空、槍使いの衣装は確かに冷えそうだ

「竜子が平気なのは、確かにおかしいと思うな」
「お、おかしいってそんな言い方……」
ふたりが後ろを振り返れば、美脚をあられもなく露出している拳法家がいた
「身体には気をつけるのじゃぞ」
「え、ええ、どうしたんですか、何か優しくて気持ち悪いですよ」
「乳の出が悪くなったら、困るしのう」
何もないところで、月見がコケた
「床は滑る、気をつけろ」
「ち、違いますよ！　ていうか出ませんよそんなの！　左京もうそんな年じゃないでしょう！」
「ああそうか、確かにな」
「何しれっと答えてるんですか、っていうかあなたこの前からセクハラが酷いですよ！　このむっつり助平！」
「ううむ……」

紅こべ大将やおどろ大将を切り伏せながら、長い一本道を進む
しばらくして、今度は月見が虚空にささやく
「それより、どう思いますか、さっきの真名姫さんの言葉」
「あれか」

取れかかっていた頭の布を結び直しながら、虚空が答える
「同類憐れ見ているのかもしれん、鎮魂墓の神や千万宮の狐の話からすれば、朱点童子は死者を鬼神として蘇らせる力があるのじゃろう」
「死んだ人を……」
「そうして、己の手駒を増やしておるのだろうな」
「でも、真名姫さんの話じゃ、あの人は元々神様みたいですよね……どうして、朱点童子の味方なんてしていたんだろう」
後半は独り事めいていたが、虚空はふうむとうなり、つぶやく
「神には色んな奴がおるからな、情にほだされ、朱点童子に肩入れしたものも居るのじゃろう」
「うーん」
月見は何だか納得できない顔だ
「ここに居るあやつも、そのひとりじゃろうて、もはや、ぶつかるしかあるまい」

＜冷泉の間＞

あらゆる覚悟を決めたような目で、氷ノ皇子は立ちはだかっていた
「昔、乳飲み子をある所で拾った、私はほんの気まぐれで育ててみることにした」
四人を前に、決して勝機のない戦いであったとしても、氷ノ皇子は譲らない
「しかし困ったことに私は男、泣きじゃくる赤子を目の前にしても乳のひと雫も出るはずもなし、だから試しに血を与えてみたのよ…

…赤子とは生きることに関して、容赦のないものよな、まだ私にわずかに残っていた熱い血潮の、最後の1滴まで吸い尽くしおったわ！」

氷ノ皇子の前髪から氷雪がこぼれる
壬生川の夫婦が寄り添うように長物を構え、その少し後ろで烈が刀を抜いた

「私の体が氷より冷たくなったとき、あの子は自分の脚で立ち上がり、ここから出て行った…」

竜子が一歩前に踏み出し、氷ノ皇子に向け、拳を突き出す

「朱点……、私のかわいい息子よッ！」

子を守る父の戦か、虚空のこめかみを汗が伝った

梵ピンひとつに力士水三回、壬生川一族はのっけから勝負を決めに来た
「悪いが、道中で時間を食い過ぎた、おぬしにかまけていては仕事が果たせん」
虚空は邪悪に怒鳴る
「ここはひとつ、奥義も手間もかけずに破らせて頂く！」
「こしゃくな」
虚空の突き出した槍を氷ノ皇子は半身で避ける、そこに月見の薙刀が迫った
「奥津ノ薙刀です！」
瑞穂から受け継がれた薙刀の一撃を、脇に抱えるように受け止める、槍と薙刀を抱えた氷ノ皇子に烈のトツカの剣が翻る

「多勢に無勢でごめんなさい！」
烈の太刀が氷ノ皇子の左腕を斬り飛ばした
「く」
周囲を取り囲まれ、孤立無援と化した氷ノ皇子は叫ぶ
「あれの心、おまえに酌めるか！　人にも神にも、姉にすら裏切られたその心を！」

目を見開き、怒号を飛ばす
壬生川秘聞録に記された、それは朱点童子の過去

「産みの親に見捨てられ、育ての親、お紺にも首を絞められて、この地に捨てられた赤子の手足は腐りかけ、十にも満たない総身を怨恨が生きながら鬼と変えた！　これでも朱点をさいなむか！」

朱点童子・黄川人の身に重なった不幸は、あまりにも壮絶だった

片羽ノお業と人間の男の間に生まれた、ふたりの子供、それらは新たな象徴として崇められ、大江山に作られた都に奉られた

しかしやがて、次第に勢力を増してゆく大江山京を良しとしない帝によって兵を送り込まれ、あえなく新都は滅ぼされた、父と姉は殺され、女神たる母は夜盗じみた兵に捕らわれ、見世物小屋に売り飛ばされた、ここで朱点の足取りは一時途絶える

「人と恋いをした天女が悪いのか、欲にまみれた人間か、弱さを認めぬ女か、赤子を拾った私か、それとも運命に振り回されたあの姉弟が根源か！　ならば生きるために鬼を喰らうそなたらも同類ではないのか！」

次に現れた時、赤子だった朱点童子はお紺という名の女房に引き取られ、しばし安寧の日々を送るが、荒れる一方の京の生活に困窮したお紺によって、心中を強いられた

目覚めかけていた力で一命は取り留めたものの、死体と間違われ川に棄てられた朱点童子は、氷ノ皇子の住まう冷泉の間にまで流れ着いた、そこで朱点童子は数年の年月を重ね、術の手ほどきを受けながらついに眠っていた血を開花させた

その足で父であり師匠たる氷ノ皇子を打ち破ると、鬼の総本山と化した元大江山京に旗を掲げ、神に戦いを挑み、そして昼子率いる神々に敗れた、醜い鬼の身体に封じられながら朱点童子は着々と人と神を滅ぼす算段を練ってきた

この戦いは、一体誰が悪いのか

「私は引かぬぞ昼子、誰もが罪人ならば、せめて私は子を守る愚か者でいよう！」

氷ノ皇子の雄叫びに、冷泉の間が揺れ動く
その迫力に気圧され、足を止める烈と月見の間を、虚空が跳ねた
「余の知ったことか！」
虚空が氷ノ皇子に衝突した
豪槍山嵐を氷ノ皇子の腹に突き刺し、ひねりながら袈裟の奥へと抉り込む
「弱き者は、そこで息子の死ぬ様をしかと見ておれ、我等はずっとそうしてきた」
氷ノ皇子が血のような呻き声を吐いた
そして虚空の槍が、氷ノ皇子の身体を粉砕した
力を持って力を破る、それが壬生川家のたった一つの道理であった

竜子が打倒した氷ノ皇子の、切り飛ばされた左腕を拾い上げる
虚空も月見も、それを見ていない
何をするかと思えば、竜子は腕をおもむろに口に運んだ
「え、竜子お姉さん！？」
もはや氷像でしかないその塊を咀嚼し、竜子は飲み込む
「不味い」
「そりゃ！」
「行くわよ」
左腕をかじりながら、人間離れした美しさで竜子が進む

いよいよ、最後の髪戦だ

＜逸の印＞

氷ノ皇子の覚悟に押されたというわけでないが、口数の少なかった壬生川一族を迎えたのは、氷の柱の上に腰掛ける朱点童子であった

中空を見つめるその眼差しが、なぜだか今は母を待ち続ける置いてけぼりの幼児のように、頼りなさげに見えた
一同が着いても、朱点童子は空虚に佇む

「朱点、氷ノ童子の話は聞こえていたろう」
「聞いてたよ」
がらんどうの声でつぶやいた
「真名姫さんの言葉は、届きましたね」

「ああ」
朱点童子は、何もない笑みを浮かべた

「飽きた人形がふたつそろったら、捨てる前に人形同士ぶつけて、戦わせて遊ぶのサ、壊す手間が省けるし、自分でやるわけじゃないから、さほど心も痛まない」

虚空は眉根を寄せる
この子供は全てを悟って、それでいて全ての愛を拒絶している

「それに飽きたとは言え、かつて愛したオモチャ同士の殺し合いだ、興奮しないわけがない、ククククク……退屈しのぎとしては最高の見世物サ」

朱点童子の口元が裂けた
もうこの子供は、破滅以外を何も望んでいない、果たしてそれは真名姫の見限りがきっかけであったのか、それとも生まれながら既にこうであったのか
虚空と朱点童子の目が合った、朱点童子はにやりと笑う

「ボクたち鬼と君たち人の戦いには、ゼンゼン似てないよね？　そう思わないかい？」

朱点童子は指を鳴らした

朱点童子の姿が消えると同時に、青い光が魔方陣から吹き出した
現れた氷の龍は、戦闘開始と同時に極大の雷光をばら撒いた

＜五ツ髪戦＞

虚空どころか竜子まで度肝を抜かれた
五ツ髪が放った＜雷獅子＞は一同の体力を６割奪い取ったのだ

「＜春菜＞……！」
「ボクもご一緒します、＜春菜＞！」
早めに回復を済ませなければ、一掃されてしまいかねないほどの威力であった
「ならば＜石猿＞じゃ！」
「じゃあぼくは仁王水っ」
「烈くん、＜石猿＞くらい覚えなさいってあれほどー！」
怒鳴り声が飛ぶ
「ごめんなさーい！」
と、無意識に頭を下げた烈らに、再び＜雷獅子＞が浴びせられた、今度は四人全員の体の水が４００弱削られた

この時点で、竜子虚空月見が７００越えの最大体力に対して、烈の体力は６００台前半であった
即ち、二度連続で＜雷獅子＞が来ては、若武者の命は無い

「……＜春菜＞！」
「はるなー！」
なかなか攻撃に転じられないが、この調子ならばそうそうに負けないだろう、もっとも他に隠し手を持っていたら別だが
「仁王水ーっ」
「そろそろ、攻勢に回らせて貰おうか！」
三度の防御増加を終え、虚空が力士水の蓋を開けて皆に振り掛ける

氷の龍は口を大きく開け、更に雷鳴を呼び込んだ
回復し切れてない壬生川一族の傷を、再び＜雷獅子＞が焼き尽くす、全員に４００のダメージ

「……堪らないわね、＜春菜＞」
膝をつく竜子、＜春菜＞で持たせるのが精一杯だ
もし、＜卑弥子＞が使えていたならば、この苦戦は無かったのだろうか
術士を自負する竜子は歯噛みした
「はーるーなー！」
竜子、烈共に回復術が特別優れているわけではない、体力はまだまだ不十分だ

月見、虚空も治癒の手助けをしようと＜春菜＞を詠唱し始めた時、ついに五ツ髪が牙を剥いた
行動順を飛び越えての、連続＜雷獅子＞が来た

怒涛の稲妻が一同を蹂躙する
虚空の全身を電流が突き抜けてゆく、気を抜けば魂もろとも奪われそうな威力であった

「……みな、無事か？」
雷が止んだ、薄目を開いて周囲を確認する、竜子は片膝をつきながらも立っている、さすがだ、月見は薙刀に寄りかかって荒い息をついていた、では烈は――
烈の姿は、どこにもなかった
「烈っ！」
虚空は叫んだが、返事はない
「しっかり、して、ください……っ！」

月見が泣きそうな声で虎の子の大甘露を使用した
出来れば朱点童子とまみえる時まで残しておきたかった、最後のひとつだった
「……もっと、早く、使っておけば、あ、あああ！」
「まだ戦いは終わってないわ……＜梵ピン＞」
一気に体力を回復させ、竜子が立ち上がり術を結ぶ
「月見、泣くのなら去れ」
虚空は槍を手に、力士水を頭から被る
「戦えぬ者は要らんぞ」
「だ、だだ、誰に言っているんですか！　年下のくせに生意気な！」
怒鳴って、月見は薙刀を構えた

そのふたりに、今度は五ツ髪が頭から肉弾戦を仕掛けてきた、術力が切れたならば良いのだが、そうでなければもうチャンスは多くないだろう
幸い、重ねた＜石猿＞のおかげで傷は軽い、虚空と月見は連なって駆け出した

「千切れ飛べえ！」
まずは虚空、９２４のダメージ

「双光蘭――って無いんだった！　じゃあ月見斬ー！」
続いて月見の薙刀が青龍の髭を切り飛ばす、６９３ダメージ

揺らぐ五ツ髪に、竜子が跳んだ
数々の髪を葬り去った必殺の蹴りが、五ツ髪の頭部を吹き飛ばす
「貴方で、最後……ッ！」
飛天脚（ひてんきゃく）、２３５８ダメージが氷の龍を崩した

滅び去る最後の髪に重なるように、朱点童子の声が響いた

「やっとカギがそろったね！　約束通りボクの庭へ招待しよう、入り口はもう見えてるはずだ」

虚空と月見が魔方陣の端で倒れている烈を見つけ、駆け寄ってゆく

「ボクの庭は小さくて粗野だけど、山や川もあって景色は折り紙付き、新しい家も庭の片隅に建てたんだ、そこが目的地、キミたちとボクの最後の決戦場というわけサ」

決戦場、つぶやいて竜子が空を仰いだ

「なるべく早く遊びに来てくれよ！　母さんとふたり暮らしでちょっと寂しいんだ」

少し、違和感を感じながら、竜子もまた烈の元へとゆく

全身に極度の火傷を負っていた烈であったが、回復術と三つの養老水のお陰で、死地を脱する事ができたという

その一方、京の都のすぐ傍で、今まさに地獄の蓋が開かれようとしていた

五ツ髪を討ち取った！

ついに七本の髪が揃った！

第十一話ー7　「荒神」　１０２６年3月後編（後書き）

出陣・忘我流水道（竜子・月見・虚空・烈）　五ツ髪・打倒

第十一話－8　1026年4月1編（前書き）

竜子　1才5ヶ月

月見　1才2ヶ月

虚空　10ヶ月

烈　5ヶ月

左京　2ヶ月

第十一話－8　1026年4月1編

真名姫が天界に戻ったこの月、ついに地獄への扉が開いた

それからまもなくして、巨大な赤い印の中から、今までとは比べ物にならないほど凶暴で頑強な鬼たちが溢れ出た

手練の侍をも腕の一薙ぎで吹き飛ばすその怪力に、京の都はまるで蜂の巣をつついたような騒ぎとなり、壬生川(みぶがわ)屋敷の前には連日多くの人が詰め掛けてきていた

＜同時刻、壬生川会議の間にて＞

外の喧騒も届かない影の落ちた部屋、まだ正午前だというのに日当たり悪く、室内は薄暗い

「ふむ」

虚空(こくう)は手元の記録を静かに閉じる

前御三家、柚子(ゆずこ)、瑞穂(みずほ)、ほたるの跡目を継いで、この場に居るのは新三家

「それでは、おふたりの腹も決まった、ということでよろしいですね？」

1才2ヶ月の臥家(がけ)の娘、月見(つきみ)が両隣に座る姉と夫を仰ぐ

勝気な母親に似て、ずっと落ち着きの無かった少女が今や母、口うるさいのは相変わらずだが、努力と共に磨いたその武芸のように、意思の強い芯が確かに通っていた

「ええ、望むところよ」
肩にかかる髪を払って、竜子（たつこ）がうなずく
その隙間から、朱色の飾りが覗いた

「私の覚悟は、証明する必要もないでしょう」
机の上には、先月までの武録、それに＜卑弥子＞の術書、そして帳面
先月の終わり、竜子は朱の首輪を身に着けた、その甲斐あって、彼女は＜卑弥子＞や＜雷獅子＞を含めた全ての術を修得するに至ったのだった

「＜卑弥子＞があれば、戦いは楽になると思いますけど……でもやっぱり、ボク心配です」
不安げな顔をする月見に、竜子は首を振る
「体に変化はないわ」
３００を越える技力を持つ、幸家（こうけ）宗主は薄く微笑む
体の火を除く全ての資質で母親を凌駕した彼女は、１才５ヶ月になっても、その空気をも変えてしまうような美貌に衰えはない

「では、これにて話し合いは締める」
壬生川当主が、十分な間を取って、ふたりに続けた
「これが、最後の御三家会議じゃ」
「ええ」
朱点を倒したら家を出る
竜子はそう言った

人並みの命を得て何をするつもりなのかは分からないが、月見は離れることは哀しいことではないのだと思っている
彼女はきっと、幸せを掴み取りに行くのだろうから

「イツ花が、もうじき余の子が着くとか言っておったな……そろそろ、余は外のやかましい連中の相手をしておくか」
虚空が立ち上がって、無愛想な顔をさらにしかめて呟く
「当主の務めですよね、頑張ってください、十一代目！」
月見の声援を受けて戸を開く虚空、日の光と春風が部屋に差し込んでくる

「あしらってくれるわ」
逆光の中から、不敵な声が届く

先代当主が指輪を託した人は、こんなに立派になりました
声に出さずつぶやいて、月見は１０ヶ月才になった旦那に、行ってらっしゃい、と手を振った

～～

術書の復習をするという竜子と別れて、月見は怪我人の元に向かう
「月見」
その途中で、ふいに姉に後ろから呼び止められた
「あ、お姉様、お勉強しに行ったんじゃ」
「少し、いいかしら」
「どうかしましたか？」
向かい合うと、月見は見上げる形になる
そういえば虚空はいつの間に竜子の身長を抜いたのだろう

「今まで、ありがとうね」
「え、え？」
そう言い出した竜子は、半ば信じられないことだが、どうやら照れているように見えた
「貴方と虚空の助けがあって、ここまで来ることが出来たわ、今まで迷走したこともあったけれど、あともう少し」
まるで、九代目当主が生きていた頃のような微笑みだった

戸惑って言葉が出ない月見に、竜子は告げる
「先祖の、ううん、母さんのために、朱点童子を倒す……それが、私の永久不変の願い、もう少しだけ、手を貸して頂戴」
「そんな、ボクこそお姉様に助けて貰ってばっかりで、お互い様ですよ」
快活に笑う月見に、そういえば、と竜子が首を傾げてみせた
「気になっていたのだけど……どうして貴方、あの子と結婚したの」
「え、ええ……」
竜子の意外な発言に、月見は少し焦る

「さ、さすがにもう照れるような時期じゃないですけど……ほ、ほら、人の気持ちって簡単に移り変わるものなんです、偉い歌人さんも言ってますよっ」
「そうねぇ」
納得したようなしてないような声を出して、竜子はじゃあね、と去ってゆく

「……ずっと、変わらない想いもあれば、変わるものもある、か……本当に、あと少し」

去り際に、何かをつぶやいていたが、それこそがいつもの竜子の

ため、月見はあまり気にしない

「烈くん、寝てますかー？」

月見が声をかけてから、烈の部屋の戸を開く

と、中では烈と左京が腕相撲をしていた

「ぐ、ぐぐぐぐ……左京くん、本気でやっているよね……！？」

「……うん、かなり」

右腕一本の烈相手に、左京が両手で挑みかかっている

「ちょっと何しているんですか！」

月見が組み合うふたりを引っぺがす

「え、腕相撲？」

「見れば分かりますから！」

ちなみに今月の烈は重傷人である

「ていうかすごいんだよ左京、腕相撲やっててもぼーっとしているの！」

「してない……春眠暁を覚えず」

「そんなの嬉しそうに発見しなくていいから、寝てなさい！」

月見に怒鳴られて、しぶしぶ布団に入る烈

「月見お姉さん、怒りんぼー！」

「……怒りんぼー」

「黙って寝てなさい！　っていうか、何一緒になって言っているの、左京っ」

慌てて布団に潜る烈、その前で月見が息子の耳を引っ張る

「痛い痛い……」

母親の手を解いて、赤くなった耳を撫でながら、左京がまぶたを閉じる
「痛い……痛くて、眠い……」
「キミの頭の中はどうなっているんですか……」
ため息をつく、次世代がこんなんで大丈夫だろうか
でもそういえば、虚空が来た当初も自分はそんなことを言っていた気がする、と月見は思い返す
それどころか、自分も……

「ねね、そうだ月見お姉さん」
「は、はいはい？」
５ヶ月になってもまだまだ幼く目を輝かせている烈が、布団から少しだけ顔を出して言う
「この前の龍を倒したから、朱点童子の秘密基地が出てきたんでしょ？」
「え、ええ、そうですよ」
秘密基地て
「ぼくも怪我を治したら、即助太刀するから、それまで我慢しててね！」
にっこりと笑う、若き剣士

「……そのためには、しっかり寝て、体を休めないとダメなんですからね？」
「あっちゃあ……そう言われちゃうのかぁ」
舌を出してから、烈は再び布団に潜る
月見は＜寝太郎＞の術をささやこうかどうか迷ってから、まあいいか、と左京に向き直る
「さ、烈くんの休む邪魔しちゃダメですよ左京、戻りましょう」
「……部屋で、二度寝」

「あなたは少しは体動かしなさい！」
ずーるずーると息子の首根っこを掴んで、月見は烈の部屋から出てゆく

～～

庭は、桜木が桃色の彩りを加えていた
今年は時期が遅いのか、満開にはまだ遠いが、それでも圧巻の美しさである
「さ、どうぞ」
休憩がてら居間にやってきた竜子にと、まるで待ち構えていたように夕子が茶を差し出した
「……貴方、まだいたの」
「……」
割烹着がなかなか様になってきている
でも割烹着が似合う神様というのはどうなのだろうか

渡された緑茶をすすりながら、竜子は庭に目を向けた
「去年は、月見が来た翌月だったかしら」
虚空がまだ産まれていなかったため、女だけの花見であった
「竜子様が“お母さんの娘でよかった”とおっしゃった月ですね、昼子の記録にも残っています」
「何しているのあの人」
思わずこめかみを押さえる竜子
先ほどから庭池があったはずの場所にこんもりと土が被さっているのが、妙に気になってはいるが、それはともかくとして
「あ、夕花さん、来てらっしゃったんですね」
「……こんにちは」

臥家の母子に無言で頭を下げる夕子
「今、お茶いれます」
「あ、どうぞお構いなく、っていうかボク手伝いますよー」
月見は台所へと消える夕子の後を、小走りで追っていく

やがて、五人分の湯飲みと茶菓子を持って、ふたりが出てきた
「……多くない？」
「ボクと左京、あの人と烈くん、それと夕花さんの分ですよ」
月見は左京に、烈が起きていたら誘ってくるように言いつけると、並べた桜餅に手を伸ばして頬張る
「うわ、甘くて美味しい、これ夕花さんが作ったんですか？」
「ええ、がんばりました」
竜子並に表情が読めない夕子が、心なしか誇らしげに見える

左京と入れ替わりで、今度は長袴を着飾った珍しい出で立ちの虚空が帰ってきた
「やれやれ、やかましい奴らじゃったわ」
「おかえりなさい、あなた」
どっしりと居間に腰を下ろした虚空の湯飲みに、月見が急須を傾ける
「結局、どうしたんですか？」
「どうもこうもないわ、邪魔だから蹴散らしてやった」
「け、蹴散らして？」
「おうよ、すぐに朱点など打ち倒して見せると言ってな……というか、余の湯飲みから茶が溢れておるのじゃが、熱い、熱いぞっ」
「は、ごめんなさい、呆然としちゃってました」
慌てて布巾を取り、虚空の袴にこぼれた茶をふき取る月見

「……なんか」
その様子を眺めていた竜子が、淡々とつぶやく

「貴方たち、ちょっと気持ち悪いわね」
「何がじゃ！」
「何を言い出すんですか！」
息もピッタリ、すっかり夫婦の貫禄だ
「いいえ、充分おもしろいものですね、こういうのは」
「面白がるなっ」
フォローしたつもりの夕子にも怒鳴る

「……呼んできた」
「おはようございまーす」
屈託なく微笑む烈を見て、月見が左京に尋ねる
「今度は何してました？」
「……部屋の中で、超素振りしてた」
「ちょ、ちょっと左京っ！」
アイコンタクトする間もなく裏切った弟に叫ぶ烈
「……烈くん、そこに座ってしっかり体休めなさい」
「は、はい……」
月見の結んだ両房の髪がピンと逆立っているのを見て、烈はうなだれて少し離れたところに座る

ふと気づいて、虚空は居間の面々を見回した
「……壬生川家、全員集合ではないか」
いつ以来だろう
「……初めて見た、揃ったところ」
「珍しいな、記念に幻灯屋でも呼びつけるか？」
「そこまでしなくてもっ」
本気で言っているように見える虚空に、とりあえず月見が突っ込む

「桜も咲いたのだもの、たまにはね」
一番の欠席者がしゃあしゃあとつぶやく

竜子の言葉に、皆が自然と庭に目を向けた
「桜、綺麗だね、すごい桜色お祭り！」
「余も、見るのは今回が初めてじゃな……いいものではないか」
寝息を立て出した左京以外の、初めて桜を見たふたりが口々に述べた
雪のような花びらが、壬生川家の庭に降り注いでいる
「この桜が咲くのは、今年で9回目ですね」
「9回目……」
何か言い表せないような感情がこみ上げてきて、思わず月見は桜木に見とれてしまう

「桜が人の生き血をすすって生きる妖樹ならば、とてもこうまでは育たなかったろうな」
烈が首を傾げる
「何それ？」
「儂らは外で血を流し過ぎておる、あれにやる分などもう残っておらんよ……それも、これまでじゃがな」
そう言って、虚空は茶を噛みつくように飲む

「そろそろお時間です、みなさま、庭へ」
突然夕子が立ち上がり、一同に庭に下りるように促す
「え、なになに？」
「……時間？」
「はい」
疑問を浮かべながらも、夕子の無言の勢いに押されてしまう

縁側でわらじを履く虚空がふと見上げると、太陽の輝きがいつにも増して、強まっているように見えた
庭に立つ一族に、太い光が注がれる

「おりてきます」

夕子の言葉で幾人かは察していた、恐らく壬生川屋敷の周りに集まっていた人にも見えるだろう、この陽光は

「……眩しい」

先ほどまで寝入っていたはずの左京まで、目を擦りながら庭に下りてきた

光が、埋め立てた池のあった辺りを照らすと、そこに花開くように立派な泉が湧きあがった

「せっかく潰したというのに……！」

金色の風が吹くと、六分咲きだった桜が、次々と開花してゆく

「うわ、綺麗！」

「……あの池、余計な事を」

手加減も容赦もない神の御力だ

見上げても果ての見えない天から、一筋の光明が下りてきた

それを囲むように数多の偉大な獣たちが武器を掲げているのが薄ぼんやりと見える

きっと神々が祝福してくれているのだろう

神の血を引く一族には見える、白金の中心に小さな子供の姿があった

近づけばそれは、影がなくなるほど眩い光に包まれていて、やがて光が吸い込まれてゆくように幼子の中に集まっていった

「いらっしゃいましたね」

烈や左京は手のひらで顔を覆い、指の隙間からわずかに細目を開けていた、竜子はいつもと変わらず平然と立っていて、月見は虚空の腕を知らず掴んでいた

「ああ」
虚空の視線の先には、幼いながらも温かな光に守られた長い髪の少女がいた

「あちらの子が、あなたさまの生きた証です、どうぞ名を付けてあげてください」

空を切り取ったような青い髪の少女は庭に降り立つと、ゆっくりと瞳を開く
理智的な蒼い瞳が、無邪気に微笑む

「初めまして、パパ、ママ、向こうでふたりのことたくさんきいたのよ」

第十一話ー9　1026年4月2編

名前はもう決めていたのだ
「“美月(みつき)”良い名じゃろう」
虚空(こくう)は月見(つきみ)に笑いかけた
「おぬしの名をもろうてみた、悪くないと思わんか？」
「な……さ、さすがに、それは恥ずかしいですよ……！？」
虚空の胸倉を掴んで突っかかるかと思いきや、そっぽを向いて口を尖らせる月見
その程度で済むのは慣れてきた証拠なのかもしれない
「美月、おまえは白い肌じゃが、余の母ほたるによく似ておる、弓使いとして修行を積むが良い」

太陽から生まれ落ちた月の子ははにかむと、
「はい、どうぞよろしくおねがいします」と大きく頭を下げたのであった

居間での団欒は、美月も加わってまだ少し続いた
「どうも……俺は左京(さきょう)だ……」
「あなたがおにいちゃんね！　どんな人かずぅっと想像してたんだから！」
美月は左京の元に駆け寄り、義理の兄の頬をむぎゅっと掴んだ
「顔をよーく見させてね、よーく、よーく……」
「……」
顔をこねくり回して遊ぶ少女、されるがままの少年
「変な顔ー、わははは－」

自分でタコ入道のような面構えにしておいて爆笑する
無垢なること、この上ない

「ぼ、ぼくは烈、よろしくね」
「こちらこそ、よろしくおねがいしますっ」
左京をぽいと捨て、飛び跳ねるように頭を下げた後、美月はにっこりと笑う
「じゃあ烈くんはちょっと強そうだから、トクベツに、みつきお抱えのお侍さんにしてあげる！　お喜びっ」
「え、あ、う、嬉しいなーハハー」
胸を張る美月に、思わず棒読みの烈

「……さすが虚空と昼子の子ね、まるで女虚空」
「感心するな竜子！」
「でも、昼子さまのお子様にしては、ずいぶん、なんていうか、フアンキーな子ですね」
「ぐむ……そ、そうじゃな」
眉根を寄せる月見に、先ほどの烈同様奇妙な声しか出ない虚空である

こうして、一家は新たな家族、香家伝統の「弓使い」の美月を迎えたのであった

竜子が部屋に戻ると、夫婦は子たちを連れて道場で稽古をつけることにした
烈も加わりたがっていたが、虚空が迷わず眠らせ、夕子に世話を押しつけてひたすらに汗を流した
月見左京らの組み手が終わると、夕食前には本気カルタを楽しん

だ、その名の通り無論一切両親が手を抜かないため、行った部屋の畳が何枚か駄目になり、不慮の事故により左京の左手の骨が砕けた――すぐに＜円子＞で治療されたが

夕子が作ったいつもより何倍も豪勢な晩御飯を終えると、虚空は左京と、月見は美月を連れて風呂を楽しむこととなった

久しく姉とも湯を共にしていない月見は順番を待っている間いつになく嬉しそうで、それを見て不用意に「じゃあ今度は余と入るか月見」と風呂上りに発言した虚空が嫁の手によって浴槽に数分沈められていた

その夜は、虚空と美月と月見、三人で並んで布団を敷いた

「わーいわーい、かわのじかわのじー！」

心から嬉しそうにはしゃぐ美月を見ると、ふたりの顔にも自然と笑みが浮かぶ

ちなみに左京が居ないときはまたどこかで転がったまま寝ているのだろうが、それに関しては特に誰も気にしていなかった

「寝るぞ」

「うん、みつきパパと寝るぅ」

美月が潜ったまま転がって虚空の布団に入り込んでゆく

月見が行灯の明かりを吹き消した時に気づいたが、美月の体はまるでほたるの燐光のように薄い光に包まれていた

「ねえ美月、お母さんのところにおいでよう」

娘を取られてか、はたまた娘に旦那を取られてか、月見が拗ねたようにつぶやく

「かか、美月は余が良いと言っておろうが」

「うん、いくー」
ごろごろと転がる美月、無言で背を向ける虚空
「……あのね、これナイショよ、みつきってヒロインなのよ」
美月は母親の胸元に抱きつきながら、嬉しそうにささやく
「ヒロイン？」
声に出さずに勝ったと言いながら、月見は娘を抱く
「うん、上でみんなが言ってたの、みつきは特別な子だから、だからみんな優しくしてくれたのよ、昼子おばちゃんも、あなたはヒロインなのよ、って」
「そっか、それは良かったですね」
月見はまなじりを下げて美月の髪を撫でる

「みつきもパパママに会っておもったんだよ、アイしあっているふたりの間に産まれたって、この家でみつきが初めてなんだってね、ふふふ」
「う、うん……そっか、そういえば左京の頃はまだ結婚してなかったんでしたっけ……」
「だから、美月、すごいうれしいんだよ、ナイショだからね」
「うん、お母さんも嬉しいですよ、美月に会えて……」
目と目で見つめ合って、お互いに軽く吹き出す

「おやすみなさい、ママ」
「ええ、おやすみなさい美月」
手と手を取って目をつぶると、すぐに美月は寝息を立てた

幸せが目に見えるものならば、触れられるものならば、目の前の子供がまさにその物だっただろう

静かに、虚空が身を起こした
「寝たな」
「はい」
「発つぞ」
月見は美月を起こさないように組んでいた手を優しくどけると、その柔らかな前髪を撫で、それから起き上がった

音を立てないように気遣って遅れる月見に対して、虚空が手早く着替え手荷物を整える
ふたりは、毛布を抱き込んで涎を垂らしながら「ししまるは、おうまさん役よ……」と寝言を言う美月をまたいで、部屋から出た

静まり返った屋敷に、月明かりが差し込んでいた
温もりに名残を惜しむ時は終わった、ここから夫婦は武士となる

「……いいのね」
玄関で待っていた竜子にうなずくと、虚空と月見は昼のうちに準備しておいた携帯袋と武具を拾う
「昼間に出陣すると、京の人たちもうるさいとは言え、最後の出陣にしては何だかちょっと地味なものですよね」
「そうね」
「闇に紛れてというのも、風情があると思うがな」

結局、2ヶ月才の左京は家に残すことになった
初陣の者が修練を積むような場所ではないだろう、と

全て三人で決めたことだ、重傷の烈を置き去りにするのも

三人が門から出ると、外にはイツ花と夕子がじっと佇んでいた

「おぬしら、見送りか……」

「どうか、御武運をお祈りしております」

「屋敷のことはご心配なく、わたしたちにお任せください」

「ああ、今まで通り、頼んだぞ」

十一代目当主の言葉に、二柱の太照天は堅くうなずいた

「あ、左京がどこで寝ているか知りませんが、見つけたら布団をかけてやってください、もう4月とは言え、夜は冷えますから」

月見の心配そうな口調を聞いて、竜子が少し笑った

「貴方、今から地獄にゆくのに、そんなの」

「い、いいじゃないですかお姉様ぁ」

「そうね、良いけれどね」

三人は道の先を見つめた

ついに、決戦だ

「イツ花、例の景気付けに、頼んでも良いか？」

「例の……？　あ、ああ、アレですネ！　アレ！」

虚空の申し出に顎に指を当ててから、思いついたイツ花はパッと顔を輝かせる

「近所迷惑にならない程度にお願いしますね」

「はァーい、それでは、」

イツ花は月見の忠告などまったく無視して、拳を握り渾身の力で叫ぶ

夜を照らすように希望のように

「当主様、とっつげきィィィィ！！」

声は風となり、船を走らせる
黄泉へと一隊は歩み始める、目指すは朱点童子の首一つ

三人の果てしなく長い一ヶ月の、それが始まりであった
壬生川一族　かく戦えけり

第十一話－１０　１０２６年４月３編

最後の迷宮「地獄巡り」を攻略するにあたって、御三家が定めた鉄則はふたつ
ひとつは、烈(れつ)を外した三人きりで攻め入ること
ひとつは、この一ヶ月の間に、攻め落とすこと

復興支援の途切れた京の都に漢方薬は乏しく、低下した烈の健康度を万全に戻すことは出来なかった
屋敷で最大値より大幅に下がっている体力などの能力は、例え戦場に出て養老水を使い、健康度を回復させたとしても、元には戻らない
そして若武者の完治や左京の成長を待たず、後者を強行したのは、竜子(たつこ)だ

竜子には、４月以内に何としてでも出陣しなければいけない理由があった

地獄の穴と呼ばれる赤い印、ここから悪鬼が涌き出てきたのだろう、その中央にある階段の前で、竜子は立ち止まる

「ちょっと待って、飲んでからゆくわ」
「ああ」
手甲を脱いで、竜子は腰に下げた道具袋から粉薬を取り出す
「お姉様、お水です」
「ありがとう」

月見から水を貰い、薬を飲み干す

竜子の寿命が近い、恐らく天命は来月か再来月まで
この戦いは夫婦にとって、姉の命を救う戦いでもあった

「お待たせ」
バサラの拳を装着し、竜子が休んでいた虚空に告げる
「では行くか」
「はい」
未知の場所に入るという緊張感が、三人の間に走った

まるで本当に地獄まで続くのではないかというほど長い階段が、一同を出迎えた

「あやつめ、出だしから意地の悪い男じゃ」
「帰りとか、想像したくないですね……」
この長さを登るのかと思うと、進む気が削がれてくる
長く長く下りたところは、土と岩がむき出しの牢屋のように無骨な小部屋であった
虚空が一歩足を踏み入れた途端に、あの声が聞こえてきた

「大江山で鬼の朱点に敗れた屈強な武士の数は知れず……彼らを神は見放した」
姿は見えないが、確かにあの男の声がする
「なのに力もないはずの赤子になぜ救いの手を差し伸べたのか、不思議に感じたことはないかい？　つまり君たちの始祖だけがなぜ特別扱いされたのか……神の気まぐれ、それとも同情？　いいや、違う……」

「そんなの、ボクたちがトクベツだからですよ！」
売り言葉に買い言葉、月見が叫ぶと声が反響した

「……次の機会に秘密を教えてあげるよ、時間はたっぷりある、ゆっくり答えを考えるといい」
拭い去りようのない胸騒ぎを残して、朱点童子の気配が消えてゆく

「……ここからが、地獄か」
虚空のつぶやきを竜子が拾う
「鬼の呻きや呪詛が、他とは比べ物にならないわね」
耳障りな雑音が四方八方から、頭の上からも地面からも染み出してくるような気がして陰鬱になってくる
「朱点の庭、風光明媚な場所だとは思っていなかったけれど……」
「山も川もあって景色は折り紙付きとか言ってたくせに、何が折り紙ですか、地獄草紙がいいところですよ」
平安時代に地獄について書かれた書である
「巧いことを言ったと思うな」
しゃがみ込んで携帯袋を漁りながら、冷たい声で水を差す虚空
「……て、何しているんですか」
少し盛り下がる月見
「おぬしらは今のうちに休んでおけ、ここから先は恐らく歩き通しじゃからな、余は忘れ物がなかったか再確認しておく」
あ、じゃあお願いしますね、と壁にもたれて休む竜子の傍に寄っていく月見

携帯袋（３０／３０）
養老水７つ、神明丹４つ、七光の御玉２つ、有寿ノ宝鏡１つ、万金露３つ

仁王水3つ、力士水7つ、引波の御守1つ、神仙水1つ、そして朱の首輪1個

大甘露は使いきってしまった、時登りの笛が無いというのが不安ではあったが、様々な神の話では地獄巡りの内部に秋の枯れ葉ほど落ちているとか

「こちらは済んだぞ、って何をしておる!?」
見れば、月見が竜子の横髪を両房、自分と同じようにツーテールにして遊んでいた
「は」
「……」
腕組みして黙って目を閉じている竜子
何があった竜子、妙に機嫌が良いのか単に相手をするのも面倒なのか
「でもボクみたいにくせっ毛じゃないから、持ち上がらないものですね……」
「では、頼んだぞ竜子」
「ええ」
月見が結んだ髪を一撫でほどく竜子、それを見て「ああっ」とか「羨ましいっ」だとか声がする

それから、壬生川一の術士は順々に歌を詠む、＜速瀬＞と＜みどろ＞
地獄を一ヶ月で制覇するためのカギは、竜子と神明丹であった

＜黄泉坂＞

細く長い一本坂を有寿ノ宝鏡で照らしながら、三人は駆ける
その途中に鬼を見つけて、虚空は拍子抜けしたようにつぶやいた
「なんじゃ、あれは無限鳥居にいた飛空大将ではないか」
「そう、みたいですね」
不意の接触により交戦となれば、やはりその正体も飛空大将であった
「こんなところで時間を潰すわけにはいかんな」
瞬殺し、槍を青鬼の体から引き抜きながら漏らす虚空の前で、竜子が聞いたことのない術を唱え始めた

「……吹き飛ばす……鬼は黄泉路の……たびのわけ……」
わずかに風が流れたように思えた
顔を上げれば、先ほどまでひしめいていた鬼たちは、いまや数をその半分としていた

「＜野分＞、鬼を暴風で押し流す術よ」
「おお、そういえば余も覚えておったが、そんな術であったか」
「……」
見れば、一本道がずいぶんと通りやすくなっている
「でも、消えた鬼はどこまで行ったんでしょうか、明らかに先の方には居ませんよね」
「壁の中にでも飛ばされたのではないか」
「ええ！？」
一族は＜寝太郎＞で鬼たちの動きを止めながら、足早に黄泉坂を下りきった

＜賽の河原＞

坂を抜けると、そこは一面広々と川が横たわっていた
砂利だらけの河原の先も、三途の川の果ても、共に霞んで見えない
「川、か、渡るしかないのかのう」
「ここに居る敵を全て倒したら橋が出現！　とかだったら激しく腹立ちますね」
「そんな時間稼ぎをされると、困り果てるな」

自らの＜白鏡＞と＜黒鏡＞を覗いていた竜子が、怪しい影を見つけて声を上げた
「どうやら、桟橋があるようね」
「ほう、渡しが居れば良いが」
「どこの地獄に渡し舟があって、船頭さんがのんきに居るって言うんですか」

居た

笠を被った婆が三人の姿を見つけて、気味の悪い声で笑う
「ヒヒヒ……来たね、おまいさんたち」
「えー……」
渡る手段が見つかったというのに、心外そうな声を出す

小船に乗っていた船頭が、物言わぬ目でじっと一同を見据えていた
「この船に乗れば、朱点の元に行けるのじゃな」
死臭漂う婆はねめつけるような目で虚空を見た後、かけた歯を剥き出しにうめく
「三途の川を渡りたきゃ、命かお宝置いてきな」
「命か、誰の分でも良かろうな」

虚空の言葉に、婆が粘着質の笑いを見せた
「ならばそなたの命を頂くぞ」
槍を婆に向けて、虚空は告げた
ガラが悪いですよあなた！　などと後ろから聞こえる
「さすが生きたまんまこんなところへ来るだけあって、欲の皮の突っ張ったヤツじゃ」
婆の図体から殺気が吐き出された

相手は脱衣婆と三途の渡しの二体だ
「ちょっと、船頭さんまで相手なんですか！？」
後列に下がりながら月見が叫ぶ
「殺さなければ良かろう、手加減せいよ、特に竜子な」
「……善処するわ」
「おいッ」
初回から＜梵ピン＞を唱える竜子に対して、婆は＜矛折り＞で迎えた
「ヒヒヒ……醜女が、いい気になるのではないぞ」
いやらしく笑う婆を見て、竜子のこめかみに血管が浮かぶ
「……ウフフ」
「殺すのではないぞ！？」
虚空が慌てて、再三に釘を刺す
三途の渡しの攻撃力は高く、狙われた月見が重そうに受け止めていたが、それだけでは決して臥家（がけ）の達人は倒れない
「力士水節約のため、斬ります！」
「わざわざ言わんで良い！」
月見の奥津ノ薙刀が船頭を切り裂くと、続けて虚空が横一列貫通攻撃により、二体まとめて大ダメージを与える
一方では竜子が＜梵ピン＞を囁き、婆が＜みどろ＞をがなると、

竜子が＜速鳥＞を歌い、さらに＜梵ピン＞を放つ
「……朱点の犬の、餓鬼風情が」
「お姉様、口元笑ってますよ！」
隣から来る重圧に耐え切れなくなった月見が突っ込む

「よし、こちらは片付いた」
穂先に刺さった船頭をゴミのように捨て、虚空は次なる獲物を睨む

脱衣婆は焦れながら＜春菜＞を使い出した
そこに三人の猛攻が畳みかかる
老躯は為すすべもなく沈む

戦いが終わった直後、三人のふところに、１０５００点もの奉納点が転がり込んできた
「うわ、経験値が凄い！」
思わずはしゃぐ月見の横で、参った参ったと白旗を上げていた婆が笑う
「ヒヒヒ…さあ、お乗り、ただしこの渡しに戻り船はないよ」
「元気そうじゃないの」
竜子が手刀で脱衣婆の首を飛ばす
月見が悲鳴のようなものを叫んだ
それでもまだ笑っている首だけの鬼を見て、竜子は舌打ちした

虚空が倒れていた船頭を力ずくで引きずり起こす
「早く漕げ」
「ふたりとも、どっちが鬼ですか！？」
三人の中で唯一の良心が声を張り上げた

船頭は無表情で船に乗り込み、櫓を取る

「まずは第一関門通過、と言ったところね」

一個目の神明丹を小船の上で食みながら、竜子がつぶやく

この時、時の火の三つ目が消えた

第十一話－11　1026年4月4編

＜三途の川＞

船で三途の川を進んでから数分後、虚空（こくう）が酔った

「ぐぅぅ……なぜ、なぜ揺れるのだ、船よ……忌々しい……」

青ざめた顔を船のふちから出して、思い出したように怨念を吐いていた

その背を揺すりながら、月見（つきみ）が心配そうに付き添う

「ちょっとぉ、大丈夫ですか？　お水飲みます？」

「……むぅぅ、こういう役割は……本来は、そなたや意外性のある竜子（たつこ）じゃろう……なぜ、余が……」

よく分からないことを言い出した

と、船頭がおもむろに首を180度回転させて、こちらを振り返ってきた

「な、なに？」

さすがに驚いた竜子に、四角い口を開く

「どちらに落ちたいデスカ？　氷雪針地獄？　ソレトモ、血の池地獄？」

「どちらかに落ちないと、いけないのね？」

船頭は答えない

「じゃあ血の池地獄がいいです！」

月見が元気よく手を挙げた

「ま、まて……月見、もしや、池とついているということは、また

船の可能性も……」
「血の池地獄です！　だって氷雪針地獄なんて、氷に雪に針ですよ、冷たいのと寒いのと痛いのがいっぺんにやってくるんですよ！」
「わ、分かったから、揺する、な……」
そういうことに決まった、夫婦の愛が通じたのだと月見は思う
その瞬間、三人の乗っていた船が消え、足元に黒い穴が空いた
「へ」
一同は先ほどまで川のあった場所に、どこまでも落下していくこととなった

薄れる意識の中で声がする
「これから君たちが渡る真っ赤な水たまりが血の池サ、橋の中ほどで色っぽいお姉さんが、熱烈な歓迎をしてくれるはずだ」
色っぽいお姉さん、熱烈な歓迎
「あんな柔らかい腕を巻き付けられたら、たいていの男は我慢できずに一発で天国行きサ」
たいていの男は……
「おや？　地獄から天国に行けるなんて、儲けモンかな？　アハハハ…」
天国に……
「許しませんよ！？」
「うおう」

月見は寝起き様に、近くで座っていた虚空の頬をわしづかみした
「な、なんひゃ！」
「あなた、浮気はダメですよ、ボク泣きますよっ」
虚空の目の色が変わったのを見て、月見は引っ張った頬をバチンと離す
しばらく虚空が痛みにもんどりうった
「月見も聞いたのね、朱点の声」
「朱点の声……？　はっ」
月見が辺りを見回すと、景色は一変していた

＜血の池地獄＞

「って……うわ、この臭い」
「血の池地獄って言うからには……やっぱり、それでしょうね」
薙刀を拾って起き上がり、顔をしかめる月見

相翼院のように島と島が桟橋で繋がれているが、一番の違いはその池の色だ、もちろん名の通り毒々しいまでの赤である
そして、漂ってくるのは、むせ返るほどの死の臭い

「う、今度はボクが気持ち悪くなってきました……」
「かかかか、情けないな月見！」
先ほどの仕返しにと月見の髪を引っ張りながら、虚空が起き上がる
「痛い痛い、うわ元気になってます」
朗らかに笑う虚空は地面を踏みしめながら、何度もうなずく
「まったく、地に足がつく、というのはすばらしいことじゃ、誠に良い言葉じゃ、やはり壬生川は足元を固めて生きていかねばならぬ」
「はいはい、分かりましたから行きましょう」
髪をえいっと奪い返しながら、最近月見も覚えてきた

なにやら良いことを言っているように見えて、虚空はその実かなり適当に生きている
「うむ」
それはそうと満足げにうなずく当主

三人はまた歩き始める
今居る場所は、血の池地獄の1界という場所らしい
「何界まであるんでしょうね」
周囲から沸き立つ臭気に嫌な顔をしながら、月見
「それは分からないけれど、どこかで朱点の手の者は現れるでしょうね」
「色っぽいお姉さん、と称しておったな」
「……男の人はお好きですものね、そういうの」
「その目はやめんか！」

騒がしく、血の池地獄を進んでゆく
その途中にいくつか宝を見つけ、用心深く＜光無し＞を使用して開けてみたが、時登りの笛は見つからなかった

「いよいよ時間が迫ってきているわね……」
2界に突入し、ある程度進んだところで、ようやく初めて見る敵が現れた
尻子玉大将の色違い、軽快な動きの赤い河童である
「強いんでしょうか、あれ……」
声をひそめる月見の前に、竜子が進み出た
「さあね、＜野分＞」
「お姉様、早っ」
まともに戦う気などゼロである
河童が次々と血の池に吹っ飛ばされてゆく
なんて身も蓋もない術なのだろう

「今は何よりも時間が惜しいからのう」
「いつまで続くんでしょうね、血の池地獄は」
「あまり長居したい場所ではないな、少し辛い」
「えっ、あなたにもそんなデリケートな部分があったんですか！？」
本気で驚いている
「当たり前じゃろう、竜子であるまいし」
「……まあ、平気だけどね」
「お姉様の場合はほら、そういうの屈強な精神の為せる技なんですよ」
「余の場合は何じゃろうか」
「単純、ほら、クワガタさんですし」
その不敵な顔、母親そっくりだと、虚空、竜子は思った

「酷いな、余の愛が伝わっておらんのか」
「ちょ、やり返したいからって、そういうこと言い出すのは卑怯ですよっ」
「何がだ、やましいことなど何もない」
「ってお姉様どうして離れていくんですかぁぁ」
「……うすら寒くて」
体を震わせて、自らの両腕を抱く
「儂らの傍にくれば暖かいぞ、燃え盛っておるからな」
「今度は気持ち悪くなってきたわ、私も血にあてられたかしら」
それにしても緊張感がない

沈黙はそれほど長く続かない、やりこめられていた月見が声を上げた
「あ、でもここ終界って書いてますね、三番目で終わりなんですね」
「そうね、＜野分＞」
瞬く間に半数の鬼が消える

それでもまだ多かったので、竜子は再び＜野分＞を唱えた
消費技力は一回たったの１４、実に効率的だ
「それにしても、左京はともかく、烈くんは怒ってますよね、何も言わずに置いてきちゃいましたし」
「家に凱旋したら、刀を持って襲い掛かってくるやもな」
「そ、想像しがたいですね……」

そんなことを言い合いながら、三人は開けた場所に出た

墨の壷と書いてある小さな島がひとつあり、橋はそこで終わっているようだ
「何かあからさまに、確実にボスですよね」
「色っぽいお姉さん、ね」
一同が進むと、足元がわずかに揺れてきた、どうやら振動は池の中から伝わってくるようだ

水面に赤い泡が浮かんだ

「何か出るぞ、伏せろ！」
血飛沫が巻き上がった
屈むのが一瞬遅れた月見がまともに血を浴びて、その場にくるりと倒れた

血の池の中から浮上してきたのは、屋敷ほどある巨大などくろであった、その眼孔や耳孔から奇妙な赤い触手が伸びている

「何……？」
どくろの金色の目玉が、ぎょろりと三人を睨む

中から出てきたそれは、虚空や竜子が自分たちが小さくなったの

ではと錯覚するほどに、あまりにも大きなタコであった

＜大八手戦＞

「ぺっぺっ、うー、血が口に入ってぇぇ」
顔をしかめながら、月見が起き上がる

グロテスクな八本の触手を蠢かせながら、大八手は先手に術を唱えてきた、＜夢子＞という命中率を下げる術である

「……地味だけど、やられると困るわね、＜仙酔酒＞！」
竜子の後に、月見と虚空が同時に＜石猿＞を使う、なるべくなら限りある道具は抑えて仕留めたい
大ダコの腕が＜梵ピン＞を唱えていた竜子の生足に巻きついた

「ん……っ」

そのまま一気に逆さ吊りに持ち上げられた
空中で何度も振り回してくる
「ああっ、お姉様っ」
月見が薙刀で触手を何度か斬りつけるが、大八手は竜子を掴んで離さない

「大丈夫……攻撃力は、低いわ」
腕を殴打して逃れようとする竜子だったが、弾力のあるそれはいとも容易く拳を跳ね返した
「ちょっとあなた、このままじゃお姉様があられもない格好に……」
「分かったから、あんまり嬉しそうに言うな」

抗弁してくる月見を後ろに置いて、虚空は駆け出す
目標は頭だ、そこが一番脆そうだ

「く……屈辱……」
大ダコの腕は竜子の体を縛り上げながら、その巻き付けを徐々に強めてゆく
胸元や太ももも、二の腕に股の間、竜子の肢体が少しずつ軋む
布が捲れ上がって半裸姿となった竜子は、身動きも出来ずに顔を真っ赤にしていた

「サービスのつもりでそんな格好か、太っ腹じゃな」
「……」
川に浮かぶ大ダコに虚空が飛び乗った
後方から月見の力士水の効果が届き、その槍が風を巻き起こす

「豪槍山嵐ッ」
竜巻のような一撃が大八手の脳天をねじり回した

墨を吐きながら叫ぶ大ダコであったが、意地でも竜子を離さない
それどころか先ほど以上に竜子を強く振り回すこととなった

「……もういいわ」
血の気の失せた顔と扇情的な格好をしていた竜子が、諦めたようにつぶやく
すると直後――
巨大な爆発が竜子を襲った

「え、ええ！？　お姉様！」
右手が真っ黒に焦げた竜子が、腕の縛りを解いて島に着地した
竜子を巻き上げていた大八手の腕から、焼けた肉の匂いが漂って

くる

「ウフフ……あの距離で＜七天爆＞を浴びれば、たまらないでしょうね……」

そう笑う竜子

密着状態から印を結び、自爆覚悟で爆炎を放ったのだ

ほぼ相打ちのはずなのに、彼女の放つ雰囲気は勝者のそれだ

「……腹減ってきたな」

タコの腕をかわしながら突き続ける虚空が、そんなことをつぶやく

新鮮な焼きダコの匂いがしている

「＜梵ピン＞……月見、やってしまいなさい」

衣服を整えながら、竜子が命じる

「はい！」

奥津ノ薙刀から放たれた斬撃が、弱った大八手にトドメを刺した

再び大量の経験点を得た三人は応急処置を済ませると、黒い霧になって消えてゆく大ダコを背に、前へと進んだ

すぐに、更なる地下へと続くであろう深い穴を発見する

「また落ちるんですね……」

「そうみたいね」

げっそりとつぶやく月見に、竜子がうなずいた

「もう時間的な余裕はないな、これからより一層急がねばならんようじゃ」

「外は今、昼なんでしょうか夜なんでしょうかね」

もう何ヶ月も地獄に居るような気がする

一同は桟橋の中央に空いている暗闇に落ち、新たな地獄を目指した

残る時の火は、あと四つ

第十一話－12　1026年4月5編

＜亡者砂漠＞

三人は落ちた亡者砂漠の中で、何故ただの砂地が地獄と呼ばれるかを知った
冷える、体の芯から熱が奪われてゆくようだ
薄墨色の砂粒は凍っているのではないかと思うほど、冷たく、光も届かない極寒のこの地に来て三人の口数は激減した

墓場のような砂漠は見渡す限りに広かった
その上、かつて一族が苦戦した金色館のように、地形と地形が不思議な力により複雑に繋がっている

「……この、開けてある宝箱」
「先ほどもここを、通ったということじゃな」
白い息をはき出しながら、虚空が＜白鏡＞と＜黒鏡＞を唱えた
進んでいる、という確かな手ごたえを得られないこの状況は、三人を著しく疲弊させた
時登りの笛も、いまだ手に入らない

「何だか、イツ花さんのお味噌汁が恋しくなってきましたね」
寒さに震えながら、月見が笑う
気丈な笑みだ
「余は熱燗が良い」
道しるべは無いが、とりあえず北東の方角を目指すという方向で、三人は足を進める

亡者とは、死人であり、執念に取り憑かれている者のことだ
砂漠につけられた亡者の名は、こうして足掻いている壬生川一族の事なのかもしれないな、と虚空は思った

＜一方、壬生川家では＞

御三家が出陣した後の壬生川家に、ちょっとした騒動が起こっていた

「やっぱり、おうちの中にはいないみたいよ！」
「そうですか、ありがとうございます」
「んもー、みつきたちにしんぱいかけるなんて、だめなおにいちゃんね！」
腰に手を当てて、頬を膨らませる美月
「となると、やっぱり向かったんでしょうネェ」
居間には、夕子、イツ花、美月、それに眠っている左京の四人がいた
つまりは烈を除いた壬生川家の全員である

三人が自分が置いていったことを知ると、烈は大層落ち込んだ
左京や美月の言葉も聞き入れなくなるほどに

烈は生まれた直後に、自らが母親と信じたほたるとの別れを体験している
親との生活をほとんど体験していないのは、当時すでに父を失っていた翠以来であった、今思えば烈の笑顔はまるで張り詰めた糸の

ように危ういものだったのだ
　1ヶ月児がひとりきりの部屋で何を思っていたのか、知る由も無いが

　少年が何よりも恐れるのは殺されることではなく、遺されることだった
　自分だけを置いて周りの環境が変わってゆくことが恐怖だった
　虚空と月見が夫婦となって自分から離れていったことすらその一端を担っている
　それに気づいたのはイツ花だけであったろう

　かくして、烈は屋敷を抜け出し、刀も満足に振るえないほどの重傷で三人の後を追った

　夕子がイツ花に目で問う
　何柱かの神に捜させましょうか？　こどもの足では地獄まではたどりつけないでしょうが、放置していた場合いのちに関わるかもしれません
　イツ花が微笑みながら、かぶりを振った

「じゃあ美月ちゃんは、おねえちゃんと一緒に、お利口さんに待ってましょうかァ、烈さんはタフそうですし」
「うんー、昼子おばちゃん、みつき押し花つくってみたいの」
　その申し出に、美月が目を線にして笑う
「アラアラ、わたしはイツ花おねえちゃんだから、間違えちゃいけませんよォ、桜の花、集めてこないとね、イツ花おねえちゃんも手伝うからネ」

　あくまでも譲らないが、イツ花の目元はすっかり緩んでいる
　まるで初孫が出来た初老の婦人のようだ

そんな壬生川屋敷の空気を変える様な、凄まじい音が玄関の方から聞こえてきた

「ひ、昼子おばちゃん……」

美月がイツ花にしがみつく、今のは門が乱暴に開けられた音だ

「鬼はこの家には侵入できないはずですが」

「はず、じゃなくて出来ないンですよォ、ちょっと見てきましょうか」

イツ花と夕子が共に席を立つ

「みつきもいくよー！」

三人が玄関に赴くと、人間の気配が近づいてくる

大勢ではない、鎧の音が鳴っているのを聞くと、侵入者は武士のようだ

戸が開かれ、美月がイツ花の後ろに隠れる

そこに正座していたのは、青年だった

「押し入った無礼は詫びます」

青年が包帯の巻きついた顔を上げた

「あらあらァ……痛そうですネェ」

イツ花が見ただけでも、青年は頭と右肩とあばらの骨にヒビが入っているはずだ

着ている鎧は乾いた血が張り付き、腰に下げている二本の鞘のうち一本は空だった

青年はたったひとりだった

「僕は、京都守護団の由一、お力添えを……」

息を切らしながら、由一はかすれた声で言う

「市街に鬼が入り込んで、もう、動けるものはほとんど」

イツ花と夕子が顔を見合わせた

「出てくる鬼は四月の初めで止まったんだが、京の鬼を追い出しきれないんだ、阿部の手の者も帝都防衛軍も、もう相当やられちまって……」

当主たちが地獄に侵入したから止まったのだろう

京都の隊長が、地上の切り札とも言うべき壬生川一族の元に訪れたということは、恐らく本当に抜き差しならない状況なのだろうが

「あのォ、頼ってきてくださったところ、申し訳ないのですがァ……」

イツ花がおずおずと切り出すと、青年はしばらく呆然としていた

「壬生川に残っているのは、女と子供だけ……？」

夕子がうなずくと青年は自らの寿命が終わったかのような顔をして、それから乾いた声で喘ぎながら笑った

「そうか、鬼の首を取りに行っているんだものな、僕はどうにかしていたみたいだ……なあに、壬生川のように、僕たちも出来ることをやるだけさ、邪魔して悪かった」

イツ花の後ろに隠れていた美月が、顔を出した

「あ、あの」

「壬生川の子か……」

外見年齢で８才ほどの青髪の美月が、由一の目を見つめながら言った

「みつき、たたかえるよ」

太照天がふたりがかりで止めた

「いやいやいやいや」

「いやいや、それは……」

少女には、助けを求める声に応えることは、熱が出た家族を看病

するように、当たり前のことだと思えたのだ

「ちょっと行ってくるね」

困っている人を助けたいというそれだけのために、美月はぴょんと玄関に下りて、わらじを結び出す

「美月ちゃん、本当の戦なんですよ！　いっぱい血が出たりめちゃくちゃ痛かったりするンですよ！　このお兄さんみたいになるんですよッ！？」

「爪が剥がれ、皮膚が裂かれ、肉がえぐられますよ、それに０ヶ月児の出陣などきいたことがありません」

座っている由一の顎元までしか背がない美月が、振り向いて微笑む

「うん、心配かけてごめんなさい、行ってくるね！」

その血は９割以上が神のものであるし、何と言っても太照天昼子の娘だ

生半可な鬼ではその神格に傷すら付けられないだろうが

話から取り残されていた青年が、我に返ってつぶやく

「この子が、僕たちを救ってくれるのか……？」

「そんな子に戦わせたら多分何か法律に引っかかりますよッ」

廊下の方から、声が届いた

「じゃあ……俺も行く」

現れた赤髪の少年もまた、子供だった

「……話は全て、大体聞かせてもらった」

「どっちですか！？」

顔つきも声もまったく違うのに、青年はその少年の中にかつての友を見た
「きみの母親は？」
「……月見」
「月見？　じゃあきみのお婆ちゃんは……」
「瑞穂」
思わぬ名を聞き、拳を握り固めると、青年は立ち上がった
「ありがとう、きみたちと、きみたちの先祖たちに感謝する」
気がつけば、青年の傷もほぼ完治していた、唱えたのは左京の＜お零＞だ

美月が眠そうな目をこする左京に抱きつく
「おにいちゃん、ありがとう！」
「……美月に、良い格好を見せたかっただけだよ」
そう言うと、左京は震える手で美月の頭を撫でた
左京もまた、これが初陣なのだ

「もう、ふたりとも……怪我したらと～ってもニガいお薬出しますからネ！」
むくれながらも見送るイツ花に手を振りながら、目の前の人を見捨てられないという一心で、美月と左京もまたそれぞれの戦場へと向かった

＜修羅の塔＞

砂煙の向こうに、巨大な塔が見えた

それは奇妙な形と色をしていた、遠目から見ても禍々しい筋が何本も表面に走っているのが分かり、全体は肉の中身のような薄紅色をしていた

足の感覚はとっくに無くなっていた
それでも歩いてこれたのは、自分たちはひとりではないからだろう

「……朱点の住処か」
「……やっと、来ましたね」
霜で固まった砂を踏み砕きながら、一同はようやくその塔の巨大な扉の前までたどり着いた
虚空がその扉に触ると、まるで本当に生きながら地獄に来たかのような、おぞましさが指先から全身に駆け巡った
扉は気持ち悪いほど生暖かい
もう二度と、生きては戻れないかもしれない

目を閉じて深く息を吸うと、虚空はゆっくりと扉を押し開けた
暖気が外に流れてくるその時、再び声がした

「そういえばこないだ何か約束をしたね、あぁ…そうそう、君たちの出生の秘密についてだったかナ？」
「そんなもの、聞いたところで迷わぬぞ」
「知らないほうが幸せってコトも、世の中にはたくさんある、アハハハ……だから話したいんだ」
壬生川の皆をどこからか見下ろしながら、今頃きっと朱点童子は笑っているのだろう

「ズバリ言おう！　朱点童子を殺すためだけに生まれた、もうひとりの朱点童子、それが君たちの始祖の正体サ！」
その内容は、太照天昼子の言っていたものとわずかに違っている

ように思えた

「この計画が耳に入ったときはさすがにボクも焦ったよ、とうとう天界も捨て身できたってね、だからもうひとりのボクが育つ前に、例の呪いをかけたんだ、先手必勝ってわけサ」

もうひとりのボクが育つ前に、ということは、すなわち……

「アハハハ……殺すまでは考えてなかったよ、ボクはそこまで残忍じゃないし、楽しみが減るのはイヤだからね」

笑い声が引き潮のように遠ざかってゆく

朱点童子の言葉に踊らされるつもりはないが、虚空はしばらく沈黙していた

今までずっと、両親を失った不遇な赤子に、神が救いの手を差し伸べたのだと思っていた

朱点童子を討つための、復讐の力を授けてくれたのだと、思い込んでいた

「齟齬があると思っておったら……そういうことか、昼子め」

赤猫お夏やお業が言っていたことが、ようやく繋がった

つまり、玄輝の代からすでに壬生川は第三の存在であったのだ

お輪か源太のどちらかが、神だったのだ

生まれた玄輝（げんき）は朱点童子の力を秘めていたが、短命の呪いによってその才覚は目覚めることが無かった

「なんということだ……」

昼子は刺客を立てた自らの計画の失敗を知ったが、呪い憑きの方が都合が良いと思ったのだろう

だから呪いを解かなかった、何というしたたかさか

あやつは不運に見舞われた赤子に、解決策を示し、その方向性を

少しだけ導いてやれば良かったのだ、全ての罪を朱点童子に被せて

「森羅万象、昼子に仕組まれた茶番であったか……」

この瞬間、朱点童子が言っていた真実が虚空を襲った
そんなことのために、玄輝を筆頭にした一族２３人が死に絶えたのか、朱点童子ひとりを止めるためだけの昼子の計画のために
一族だけではない、京の人間はその何百倍もの被害が出ている

「竜子（たつこ）！　そなたは何も感じぬのか！」
「あ、あなた、何を怒っているんですか？」
怒鳴りながら肩越しに振り向く虚空に、竜子は冷めた目を向けた
「私にはどうでもいいことだわ」
「おぬしの母とて、昼子の被害者ではないか！　ひとがたのように命を散らされたのだぞ！」
「……そうね、でもどうでもいいわ」
「なぜそこまで達観できるのじゃ！」
虚空はもはや掴みかかりそうなほどの勢いだ
「だって、母さんに会えたのは、私が壬生川に生まれたおかげだもの、生まれ出でたことに恨みはないわ」
竜子のその言葉には重みがあった
そう、月見がなぜ竜子を慕っているかが、分かるほどに
「貴方少し冷静さを失っているわ、朱点に惑わされるのはやめなさい」
扉に拳を当てながら立ちすくむ虚空の肩に手を置き、竜子がささやく
「そうですよ、いよいよきっと多分ここが最後ですよ！　気力振り絞りましょう！」

目の前にそそり立つ赤黒い塔の名は、修羅の塔と言った

虚空は何度か顔をこすると、槍を手にうなずく

「……わかった、面倒は全て朱点を斬ってから済ませよう」

修羅の塔に踏み込んだ壬生川一族を待ち構えていたのは、まだ見ぬ強大な鬼であった

第十一話－１３　１０２６年４月６編

＜修羅の塔＞

その塔は、外見だけではなく、内部まで狂気の様相を呈していた
血管のように入り組んだ通路は粘膜のような物体で出来ており、
歩くたびに不安定な床から染み出した粘液が足元を朱に汚す

「うーわー……最悪、最低、何ですかこれ、きー、不気味ですねっ、もうっ」
嫌悪感を隠そうともせず、月見（つきみ）が叫ぶ

「元気じゃな……」
中は妙に蒸し暑い

「いや、そうでもないですけど……」
虚空（こくう）のため息に、月見もため息を返した
空元気も元気のうちとは、誰が言ったのだろう

竜子（たつこ）はというと、いつも通りに＜野分＞を唱えていた
周期的に膨張と収縮を繰り返すこんな道にいても、マイペースを保ち続けている
恐ろしい精神力だ

「これで、いいわ」
竜子の合図で、探索を開始する

そんな気味悪い塔内で、最初の幸運が訪れた
1界の最初の宝箱にて、ようやく時登りの笛が見つかったのだ
「ひとまずは、助かったな……」
「そうですね、あとは火が残り一個になるときを待って、使いましょう……」

その次に、最初の不幸がやってきた
「む」
地形が切り替わった瞬間に、初めて見る鬼との接触を許してしまったのだ
現れた悪羅大将によく似た鬼の名は、茨城大将と言った
目の前に現れた白面の豪鬼は、先端に三日月型の刃がついている月牙という武器を振り回し、月見に叩きつけてきた
「な、何ですって!?」
薙刀で受け止めながらも、月見は大きく吹き飛ばされた
「なんと……まるで髪のような怪力じゃな……」
一撃で２２０のダメージを貰い、月見はよろよろと立ち上がる

竜子がお返しにと殴りつけるが、大将どころかお供のバサラという小鬼すら一撃では倒しきれない
「面倒ね……」
「竜子、＜梵ピン＞を使え」
「……分かったわ」
よもや、雑魚にまで術を使わされるとは

そうこうしている間にも、月見が次々と攻撃を受け、体力を消耗させてゆく
「く、＜円子＞です!」
月見の体力も一旦は持ち直すが、何と言っても多勢に無勢、その体力が再び奪われるもの時間の問題であった

虚空は敵の数を少なくすることに躍起になった
＜梵ピン＞により強化された槍で、バサラを前後まとめて貫き、葬る
三人はたかが通常戦闘に死力を振り絞らねばならなかった
この茨城大将たちは大八手よりよっぽど恐ろしい相手に見えた
何度目かの攻撃で、ようやく大将の首を刎ねる

「ええい、度し難い……！」
虚空が荒い息をつきながら、思わずその場にしゃがみ込んだ
いくら当主とは言え、その実は竜子よりも7ヶ月年下の若造
スタミナ不足は明らかだった
「疲れますね、これは……」
蠢動する奇妙な床を気持ち悪がっている場合ではなかった、月見もまたその場に座り込む

竜子は本日二個目の神明丹と、薬を飲み込み、つぶやいた
「何だかこの壁……まるで、生き物の腹の中みたいね」
「や、やめてくださいよぉ」
思わず月見が腰を上げた
「朱点童子の趣味か……一刻も早く、四肢をバラバラにしてやりたいものじゃ」
「なら、進みましょう」
竜子の言葉に、うむ、とうなずいて起き上がる

そう言った矢先にまた絡まれた
それも今度は、背後からの奇襲である

「しまった……！」
動きを＜寝太郎＞で固めた鬼の横を通り抜けていた時に、無慈悲にもその術が運悪く切れてしまったのだ
あるいは鬼に朱点の加護があったのかもしれない
先ほどと同じ構成だが、前回との違いはバサラが次々と＜牛頭丸＞を唱えてきたことだ
一発ではそれほど痛くない土術も、何度も何度も一族を繰り返し襲えば致命傷と成り得る

「ハァ……ハァ……くっ」
ようやく月見の番に回ったとき、月見はその場に膝をついて、崩れ落ちる寸前であった
こんなところで引き返すわけにはいかない

「引波の、御守！」
血がにじむ指先で、月見はお守りを高く掲げた

早々に竜子の＜卑弥子＞で傷の手当てを済ませ、簡単に包帯を巻きつけた三人は、再び足を進めた
竜子は場所が変わるたびに何度も何度も＜野分＞を唱えた

～～

2界へ登ると、そこは腸のようにうねっている一本道であった
竜子の技力の消耗は激しい
＜野分＞に＜白鏡＞、＜黒鏡＞、さらに＜速鳥＞に＜寝太郎＞まで唱えている

神明丹を最も効果的に使うには仕方がないことであるが、徐々に
竜子の足取りが弱ってゆくのが、目に見えて分かり、見かねた月見
が竜子にいくつかの術の分担を提案した

「……そう、じゃあお願いね」
竜子の言葉から覇気が失われてゆく
その瞳の輝きが鈍っていないのがまだ救いだが、疲れは隠せてい
ない
もしかしたら、自分も似たような表情をしているのかもしれんな、
と虚空は思う

～～

全ての鬼を避け、一同は3界へと登った

今度の階層は先ほどとは異なり、全ての壁が取り払われた大部屋
となっていた
ここで三度目の茨城大将の軍勢が襲い掛かってくる

「くっ……」
竜子が歯噛みした、今回は＜野分＞を唱える暇がなかった
時登りの笛の入手によって時間的な不安が解消されたことは不幸
中の幸いではあったが、それにしてもこうも連続して戦闘に入ると、
悠長なことも言ってられなくなるかもしれない
敗北すれば、その時点で全てがおしまいなのだ

無事、退けられるだろうか

「＜石猿＞！」
決して見くびらなければ、所詮は体力の低い鬼だろう
そう覚悟を決めた竜子たちをあざ笑うように、現れた鬼は次々と逃げ出した
「なっ」
鬼は縦横無尽に跳ねまわる
そのうちの一匹、蛇喰らいという名の蛙が転進し、体当たりをしてきたかと思うと、次の瞬間にその体が爆発した
自爆してまで壬生川の戦力を消耗させようというつもりなのか

「鬼も笑えぬことをするのう……」
飛び跳ねる鬼たちを、虚空が次々と串刺しに仕留める
まるでもずの速贄だ
列攻撃可能な月見と虚空が連携して攻撃を仕掛け、それを竜子が＜卑弥子＞で補佐した
「はぁ……はぁ……」
茨城大将の頭部を渾身の力で吹き飛ばした虚空は、その場に立てた槍にもたれかかりながら、荒い息をつく
その顎から汗が流れ落ちた
すかさず、竜子が＜野分＞を唱えていた

「……もう、一匹たりとも近寄らせないわ」
「……そうしてくれると、有難いな」
養老水を飲み、一息入れると、一族は這うように歩みだした

～～

急な階段を駆け上がると、４界は再び一本道であった
竜子が＜野分＞を連打して、茨城大将の姿を完全に消滅させる

「行きましょう」
そう言って一歩を踏み出した瞬間
竜子が貧血でも起こしたように、足取りを崩した
「お姉様っ」
「……大丈夫、平気よ」
月見の手を借りて、竜子が立ち上がる
その顔にまるで死相のような疲労の色がにじんでいたのを、月見は見ないフリをした
「……きっとあと少しです、参りましょう」
「ええ」

～～

５界の大部屋で、一族は二本目の時登りの笛を入手した
これで急く必要はなくなった
「月見、おぬしも休め……移動術は余が唱える」
「まだ、大丈夫ですよ、ボク、前半休んでましたから」
「休め、いいな」
強く言い聞かせると、月見はそれ以上反論してこなかった

つまりは皆、限界が近い

～～

一本道の6界で、月見が熱に浮かされたようにつぶやく
「もしも、この戦いが終わって」
あれほど拒絶していた不気味な道も、もうとっくに気にならなくなっていた
そんな余裕がないのだ
「朱点を倒して、全てが終わったら……何十年も、生きられるんですよね」
「そうじゃな」
「何だか、ちょっと、怖いですよね、そんなに生きて、何するんでしょうね」
ふたりとも、足がおぼつかない
「……猫でも飼うか、黒猫以外のをな」
「……いいですね」
「余は、旅がしたいな……行ったことのない場所へ、行ってみたい」
「……ひとりで行ってくださいね、ボクは左京と美月とお留守番してますから」
「……冷たいな」
壬生川の屋敷を出発したのはいつだったろう、もう何年も昔のことのように思える

「何十年経っても、退屈などせんよ」
「……えっ？」
「どんなときでも、おぬしが退屈することはない」
「……」
「月見の生涯は、余が見届けるからな」
「……」
通路の鼓動が、心臓のそれと重なる

月見は思った

ひょっとして虚空が自分を選んだのは、自分が“先に死ぬ年上”だったから、なのではないか、と
遺される立場と知っている虚空は、かけがえのない時を、その一瞬一瞬を、今までずっとそれでも良いと過ごしてきたのだろうか
虚空の精悍な横顔から、その心は読み取れない

「あなた」
「……ん」
「戻ったら、お背中流してあげますからね」
短く、返事が返ってきた
「……おう」
最後の階段が見えた

旅路の果てだ――

＜修羅の塔7界＞

7界に上がってすぐ、朱点童子の声が聞こえてきた

「ご苦労さん！　あと一息で頂上だ、さあ、あとは後ろにある柱の間を真ッすぐに進むだけ、ただし、そこを過ぎればもう帰り道はない……まッ、お互いここまで来たら今さら後戻りなんてできやしない、そうだろ？　アハハハハ……」

後戻りなんて出来ない、まったくその通りだ
最後の確認にと、虚空たちは携帯袋を整理した

携帯袋（２６／３０）
養老水３つ、七光の御玉２つ、万金露７つ、時登りの笛１つ
仁王水３つ、力士水４つ、神仙水１つ、朱の首輪１個
その他、たすきや飾り、茶器等、合計４つ

神明丹は使いきってしまった
能力を強化する秘薬は手に入るたびに使っていたが、目新しい武具はひとつも入手できていない
だが、この先に何が待っていようと、三人は如何にして朱点を倒すかだけを、考えていた

「竜子、おぬしはずっと今まで不愉快で、薄気味の悪い女だと思っておった」
「……お互い様ね」
「じゃが、今だけは、おぬしがここに居る事が、何よりも心強い」
「……」

脚も、その腕も、もう傷だらけだ
だというのにより美しく見えるのは、彼女が真の武人なのだからだろう

修羅の塔頂上、７界の最奥にあったのは、紅色の印であった
ここを下りればもう、そこには朱点童子がいる

壬生川の大敵が君臨している

「＜石猿＞三度から入るぞ、月見は後衛、余と竜子が前に出る、壬

生川が味わった苦しみの分だけ、朱点童子の身を刻め」
「ええ」
「はい！」

自分たちの双肩には、壬生川の歴史と、未来と、そして京の命運が賭けられているのだ
虚空は印への一歩を踏み出しながら、告げた

「勝とう、そして、終わらせるぞ」

第十一話－１４　１０２６年４月７編

＜終界＞

三人は深淵を真っ直ぐに進む
闇だ、そこにあるのは一寸先すら見えない、完全なる暗闇だ
そんな局面に置かれても、傍には仲間がいた
「……長いですね」
「そうじゃな」
そんな他愛のない会話で、救われる
ひとりではないのだ
朱点童子は、ずっとこの暗闇で、光が見えない胎児のように過ごしてきたのだろうか

やがて、道が開けた

＜胎の間＞

「ここが、目的地ね」
たどり着いた大広間で、竜子（たつこ）が辺りを見回す
修羅の塔中心部だけあって、おぞましい臭気の発生源なのだろう
それはあまりにも濃く、ただ立っているだけでも息苦しい

内壁は脈動するように動き、三人はここが本当の地獄なのだと確信した

「あの、あれ……」

月見（つきみ）が指差したところに、およそ場違いな光景があった

女がいた

壁に張り付けられるようにして、手足を鎖で縛られており、その肢体は疲れきっているようだが、れっきとした女だ

「まさか、これも朱点の罠……？」

「いや……ただの人間ではあらぬようじゃが」

朱点童子の息がかかっているようなら、それはもう虚空（こくう）には判る

巫女装束をした乱れ髪の女は、ゆっくりと近づいてくる一同に気づくと、その汚れた顔を上げた

「あッ……」

正面から見たその女の瞳に、かすかな光が灯った

「おまえたちは、まさか……！」

その時、洞内に甲高い笑い声が響いた

「やあ、久しぶり！」

暗がりから現れた宿敵が、女の隣に並び、片手を上げる

桃色の狩衣を着た、血のような赤い髪の少年

「朱点童子！」

狂言師のように両手を広げて、歌うように朱点童子は声を張った

「長きイバラの道を自ら選び、ここまでやって来た君たちの意気地、いやあ実にすばらしい！」

朱点童子の本体が、そこに居た
こうして対峙すれば分かる、圧倒的な存在感、肌が焼けつくほどの殺気
こんな者が、人間の世界に生きていてはならない、理屈ではなく、本能として心からそう感じられる
「……やはり、死ななければならんな、おぬしは」
「よく言われるよ」
虚空の視線を、朱点童子は冷笑を持って受け止めた

「君たちの地道な努力に敬意を表し、今日は特別にボクたちの秘密をひとつ教えてあげるよ」
「……」
隙さえあれば、竜子はいつでも朱点童子の胴を貫く気でいた

「今まで倒してきた鬼や魔物たち、なかなか手ごわかったろ？　同じ術を使う奴までいた……偶然だと思うかい？　ククク」
だが、もはやこの鬼の王は、貫手で心臓をもぎ取ったとしても、とても死にはしないだろう
虚空や月見もそれを分かってか、今はまだ動かない

「さあ紹介しよう！　その強さの源だ！」
朱点童子は女の髪を掴み、無理矢理顔を上向かせた
「京を滅ぼすボクの夢のために、いろんな鬼や魔物をいっぱい産んでくれた……我らが母さんだ！」
「うッ……」
女は朱点童子の手から逃れようと、身をよじって、横を向いた

「……そうか、その女であったか」
「おやぁ、ボクの母さんが君たちの知り合いの誰かに似てたかな？」
虚空の心中に去来したのは、怒りではなく、全てに対する納得で

あった
この後に及んでも、まだ真実を探求し続けている虚空は、自分で自分を笑う
「くくく……」
「アハハハハハ、ハハハ！」
善と悪に分かたれた少年の笑い声が、この塔の最上階で重なった

朱点童子が手を広げると、三人の頭上に合戦場の光景が映し出された
京での戦、そこには左京と美月の姿があった、幼いながらも周囲を鬼に囲まれ、それでも果敢に戦っていた

地獄巡りの入り口近くで、烈がたったひとりで鬼を相手に刀を振るっていた

「君たちがここでボクから逃げたら、その時は京討伐隊を出陣させるって決めていたンだけどな、残念だけど来てくれて嬉しいよ！」
「左京（さきょう）、美月（みつき）ちゃんまで……そんなことは、絶対にさせませんよ！」

京討伐隊――
朱点童子の言っているのは、あの茨城大将たちのことだろう
あれだけの数が大挙して都に攻め入れば……

「どうだい、君たちには家族と京の存亡がかかっている！　アハハ、少しずつ“やる気”出てきただろう？」
目が濁っている
氷ノ皇子が言っていたような、運命に翻弄された赤子の面影は、そこにはなかった

「おぬしを討つことに、もはや一抹の迷いすら無い、産まれた事を

詫びながら死ね、その前に殺してやろう」
朱点童子は口の端を釣り上げて笑うと、地面に手足を沈み込ませた

「さーてと、母さんの前だ、今日はイイとこ見せないとな！」
それと同時に、女が蛇に飲み込まれるように、大地へとずぶずぶと呑まれてゆく
これでお互い、死闘を妨げるものは、もう何もない

「……お母さん、絶対に帰るからね」
「言うまでもない！」
世界と、命と、誇りを賭けた、最後の戦いだ

朱点童子「い～く～ぜえッ！！」

「……来い」
竜子が静かに吠える

三人は己が魂を血に託し、朱点童子に挑む

地面に描かれた真紅の梵字から、彩虹の光が溢れ出てくる
大振動が大広間を襲った
「え、これって……髪！？」
かつて七度あった光景の再現に、月見が足を取られながら叫ぶ

「アハハハ！」

烈震と共に現れた朱点童子は、巨大な白龍を引き連れていた、その最後の龍の頭の上で哄笑する
「く……髪付きか！」

「まさか卑怯だなんて言わないよな、そっちは三人がかりだぜ？」
なんという憎々しい顔なのだろう
「……二匹、か」
「でも、まったく想定していなかったわけでは、ありませんからね！」
月見の言葉は決して負け惜しみではない
壬生川一族は現に、かの風神雷神を何度も撃破している
というよりそれは、昼子の仕込んだ相手ではあったのだが、今だけは感謝しなければならないようだ
あとは、朱点童子がどれほどのものか、だ

「月見、竜子、朱点童子にだけ心血を注げ！」
「泣かしてやりますよ！」
八ツ髪はもう、完全に無視だ、風雷の間もそうして各個撃破で勝利してきた

「当たり前でしょう」
竜子が底冷えのする声で、答えた
「……貴方が止めても、私は朱点を狙うわ」
何度か見たことがある、竜子の心のタガが完全に解放された目だ
「……余は止めぬよ、存分に暴れるがいい、そのためにこの長い地獄を我慢してきたのじゃ」
小僧ひとりを殺すために、ここまで来たのだ
戦いが始まる

虚空の戦い方は、徹頭徹尾、後の先に尽きる
「涼かさや・我に弾ける鬼の爪……岩となり・矛も剣も折れにけり……＜石猿＞！」
柚子が生きていた頃から、世代が変わり、圧倒的な攻撃力を持って先手で叩き潰すのではなく、虚空は相手の行動を見極めてから切り返すのを、旨とした
これは、虚空が同じ槍使いであった三代目当主から戦術を学んだ事が、起因していた
だがこの戦い方は、大江山を制した蘭（らん）の戦い方によく似ている
あの時の相手は外見こそ違うが、中身は朱点童子だったのだ
「ククククク……」
朱点童子は龍に乗りながら、笑っている
「余裕じゃな、＜石猿＞！」
果たしてこの戦法は、髪を始末し続けた虚空の戦術は、再び朱点童子に通用するのだろうか
「ボクも＜石猿＞！　これで三度目です！」
複数相手に英雄猛毒刃（ひでおもうどくじん）があればと、一瞬だけ思わずにはいられなかったが、あれはもはや月見の技ではないのだ
それはそうと、三度＜石猿＞が、かかった
緊張感に、目が眩む

八ツ髪の番に回り、虚空は考えていた
これまで戦ってきた龍は、実に多種多様な攻撃を仕掛けてきた
攻撃術をしてくる髪、回復を唱える髪、＜萌子＞で攻撃力を高める髪、通常攻撃が非常に重い髪
だが、それらの対抗手段は塗り絵を潰すようにひとつひとつ導き出せる
つまり、髪を放置することは、この場合は必然だった
どう考えても朱点童子の方に注意すべきだろう

オロチの付け込む隙が、そこにあったのかもしれない
後列に向けて、八ツ髪は緑色に目を光らせ、＜寝太郎＞を繰り出してきた
「な」
まったくの予想外の方向からの搦め手に、月見がその場に声も上げず、崩れ落ちた
恐ろしい事態だ
「……」
竜子の番が巡る
もしここで＜仙酔酒＞を使ってしまったら、三度唱えた＜石猿＞の効果が帳消しになってしまう
だが使わなければ壬生川（みぶがわ）一族で動けるのはたったふたり
「アハハハ、こいつの＜寝太郎＞はよく効くだろう？　すぐに治した方がイイと思うけどな」
「……抜かせ！」
竜子の指が光る、紅色の＜梵ピン＞の輝きである
「竜子っ！」
起こすべきだ、何としてでも起こすべきだったのだ
「ざ～んねん、じゃあこっちの、番」
朱点童子が唱える言霊に、厳つ霊がその手のひらから飛び散り、大広間を紫に染める

「全力で抗いなよ……極楽も・地獄も武王の・雷切の……獅子の心に　裂けぬ空なし……！」

魔王のように笑いながら、朱点童子は手加減無しの＜雷獅子＞を放った
避けられない
質量を持って暴れ狂う電光は、この世の終わりそのものであるようにも思えた

虚空らの目を、耳を、手足を、脳髄に至るまでを執拗に焼き尽くす雷が収まってもまだ、目の奥に火花がちらついていた

「へぇ～、やるネェ……凡庸な言葉だけど、この術を喰らって立っていたのは、君たちが初めてだよ」

虚空と竜子は、それでも膝をつかなかった

「……さすがに、言うだけのことはあるわね」

龍の頭に乗り、遥か上から見下ろしてくる朱点童子を、竜子は睨む

「……何が、氷ノ皇子に、倍する力じゃ……見くびるなよ、化け物が！」

朱点童子と戦い始めてから、まだ7手目の事だった

第十一話－１５　「地獄変相」　１０２６年４月８編

行動不能状態の月見（つきみ）に、八ツ髪が尾を叩きつける
しかしその一撃は幸か不幸か、強固な神術によって護られた月見には届かなかった
「＜春菜＞！」
月見の行動順がスキップされ、次の虚空（こくう）は全体回復術を唱えただが、このままでは圧倒的に回復役が足りない

「竜子（たつこ）、神仙水を使え！」
「……そうね」
竜子は今の雷撃により、わずかに冷静に戻りつつあった
道明鏡返（みちあきかがみがえ）しも無い月見の補助術の効果が切れるのは仕方ないが、そんなことを言っていられる場合ではない

「う、うぅん……気持ち悪い……」
かぶりを振って、月見が起き上がる
その顔色は蒼白だ
これで今、＜石猿＞三度に＜梵ピン＞一回、ただし月見は無防備状態
たとえ朱点童子が＜雷獅子＞を放ってきたとしても、三人がかりで回復に専念すれば、充分に持ち直せる

「君たちはこう考えているンじゃないかい？　“もしかして、このまま巧くいけば朱点童子を打ち倒せるのではないか、我らには神々のご加護がついている！”ってね」
「……おぬしを倒せると思っておるさ」

「ククク、君たちに天運なんてものは、最初ッからないんだよ」

朱点童子は狂気の笑みを浮かべながら、光を放った
目を閉じてもまぶたの裏を突き刺して、その閃きは三人の脳に侵入した

「え、何が」
自らの手を見下ろしながら、月見がつぶやく
その異常に最初に気づいたのは、竜子だった
「……術が、使えない」
竜子が茫然自失に朱点童子を見た

これは、危険過ぎる

「ククク、いいねその表情！　まるで、食い扶持を減らすために母親に冬の山中に置き去りにされた、少女のようだよ！」
三人の術が封じ込められ、神仙水は、もう無い
「……貴様！」
これから壬生川一族は、数少ない携帯袋の中身を頼りに、戦わねばならなくなった

「……くっ！」
今もっとも恐れる事は、神仙水が尽きて、＜仙酔酒＞が唱えられないこの状況で、八ツ髪に＜寝太郎＞を使われること
その時点で、一族は“詰まれて”しまう
神経が焼き切れるような焦燥感
ならば……

「力士水です！」

月見はあえて、それを使った
圧倒的な破壊力を誇ったあの五ツ髪ですら、三人の前にたった三発で敗れ去ったのだ
朱点童子の前に、長期戦は、無用！
八ツ髪は、＜石猿＞の切れた月見に向けて、岩盤を砕くような頭突きを仕掛けてきた
「ああっ！」
強烈な衝撃に月見が吹き飛ばされる
だがもう、竜子も虚空も振り向きはしない

『朱点童子ッ！』

呪いによって封じ込められたはずのふたりの体から、神の力が示現されてゆく
何年も何代も脈々と受け継がれてきた朱点童子への怨恨がそれを後押しする

「砕けなさい……奥義――！」
竜子の身体が空を駆け、彼女は一筋の翠の光と変わった

朱点童子に、竜子の百烈拳（ひゃくれつけん）が無数に降りそそぐ
残像が残像を残し、上下左右、前後から朱点童子を叩きのめしてゆく
腹に、頬に、胸に、腕に、鳩尾に、首に、喉に、背に、顔面に、
竜子の拳が突き刺さり、それらは容赦なく朱点童子の身を殺いだ
そして最後の一撃は回し蹴り――

吹き飛ぶ朱点童子の先に待つのは、虚空

「貴様の雷鳴、返すぞ！」

虚空落雷撃（こくうらくらいげき）――！

敵陣に走る強烈な閃光が、朱点童子を迎え撃った
いかずちが怨嗟の声を響かせながら大地を駆け抜けて、悪鬼と龍を切り裂く

暴れ狂う雷の余波によって修羅の塔最上階の壁が破れ、外から寒風がなだれ込んできた

地面に着地した虚空と竜子は、共に身を崩す
長旅による疲れが、当主たちの体を蝕んでいる
だが、好機は今しかない
瓦礫の中から朱点童子の笑い声が漏れた、まだ生きている

生きているのなら、するべきことはただひとつだ
竜子が跳躍した
「飛天脚（ひてんきゃく）！」
空中から飛来する竜の爪が、朱点童子の体を貫き真っ二つにへし折る

「ち……八ツ髪！」
そこに八ツ髪が大きく口を開き、獰猛な牙を剥いて大量の氷柱を吐き出してくる
三人が身体を切り刻まれて、その着物を真っ赤に染めた

「まだ、まだ倒れません！」
立っているのがやっとのはずの怪我でありながら、月見は顔を上げ、力士水を掲げた
まだ終わらない、激昂の連続奥義は続く

「豪槍山嵐、吼えろ！」
当主の放った二発目の落雷撃
それは、朱点童子を断ち、その左腕を消し飛ばした

「グ……ッ！」
初めて、朱点童子の顔に苦悶の表情が浮かんだ
四度目の奥義にして、その攻撃が朱点童子の核を捉えたのだ
竜子が更に追い討ちを仕掛けた
「はあああああ！」
もう健康度は１７しか残っていない
ここから先は身動きするのにも命を削らなければいけない領域だ
だが竜子は視界を血に染めながらも、怯まずに朱点童子に打突を叩き込んだ

朱点童子は壁にぶち当たり、その場に身を崩す
同じく、雷撃により吹き飛んだ八ツ髪は、倒れたまま身動きしない

およそ二分にも満たないであろう騒乱が収まり、静寂が訪れた

「……ふう」
「……ハァ、ハァ……」
死力を尽くした
それはまさに、燃え尽きる寸前の蝋燭の炎だった

ともすれば気を失ってしまうような命の喪失感の中で、三人は立ち続けた
月見が口火を切る

「やった、のでしょうか……」
その瞬間

八ツ髪がむくりと鎌首をもたげ、その口から大量の岩石を吐き出してきた
「ぬお！」
感覚の薄れていた三人を巻き込んで、土砂は壬生川一族を呑み込んだ
槍をその場に突き刺して虚空が抵抗するが、それもかなわず流されてゆく

「ちょっと“期待”しただろう？　でも“無駄”なのさ」
後ろから、朱点童子の声がした

振り向いた虚空が見たものは、胸の中央から剣を生やして目を見開いている月見の姿だった
朱点童子が刀を引き抜くと、少女の小さな体から血が吹き出た
返り血を浴びた虚空の顔が真っ赤に染まる
月見は支えを失った人形のように、ゆっくりとその場に崩れてゆく

虚空は絶叫した
「月見――貴様あああああああああ！」
当主の指輪を突き出す
十一代目壬生川当主の背後から、猛将の英霊が出現し、朱点童子に向けてその一太刀を浴びせに襲い掛かる
その先祖の霊を、朱点童子は真一文字に分断した
「手ぬるいね」
柄の無い刀を右手一本で弄びながら、朱点童子は笑う

「そろそろ本気、出しなよ」

圧倒的だった
何度突いても、殴っても、朱点童子は平然と冷笑を浮かべていた
この男はどうやったら死ぬのだろうか、とすら思えてくる
八ツ髪の火炎を身に受け、煙に吹き飛ばされ、氷に刺されても、
何度でも虚空と竜子は立ち上がった
「……貴様……」
泥にまみれ、虚空は何度でも起き上がる

この深い地の底には、神の奇跡など起こりはしない
喉が裂けるような雄叫びを上げて飛びかかった竜子を、朱点童子
は切り伏せた

「ちッ、弱すぎる」
ついに虚空は、独りになった

心のどこかで、虚空はどこか竜子に憧れていたのかもしれない
自身が気づかないほどにそれは小さな感情であったが
だが、竜子が負ける場面など想像できなかったのだ
いつも凛然としていて、誇り高く、神威を帯びた姿の竜子を、虚
空は純粋に美しいと思っていたのだろう

その彼女が今は、朱点童子に頭を踏まれながら、野良犬のように
伏せっていた
あれほど美しかった髪も血に染まり、面影すらない

なるほど、ここは地獄なのだと思う

最愛の妻は、羅生門に棄てられた死体のように、片隅に丸まって

いた
酷い有様だ
虚空は腹をくくった

『人生の至福の時なんてあったとしても一瞬ですの、だから目をそらしちゃダメ、見逃しちゃダメですよ』
母親の言葉が、蘇る

間違いない、自分の死ぬべき場所は、ここなのだ
己の死地を知り、虚空は朱点童子を見た

「余は命を捨てるぞ」
死に場所を求める、鬼となろう

目を閉じ、再び開いた時、虚空のその瞳は真っ赤に染まっていた
間合いを詰めた朱点童子の刀が虚空の腹に突き刺さり、虚空は血を吐いた
だが、微塵も力は失わぬ
虚空の手が刃を握り、引き寄せた

「我が命をくれてやろうぞ、朱点童子」
もう一方の手のひらが朱点童子の首を掴む
虚空は指先に渾身の力を込めた

これで終わることとなっても、悔いはない

滅びの間際で何者かに肩に手を置かれ、虚空は朱点童子から引き剥がされた
自分と朱点童子の他に、誰がいたというのか
先ほど、鎖に捕らえられた女かと思ったが、それは違った
鬼気に染まりゆく目が捉えたのは、髪の長い女だった
竜子だった

「月見を連れて、出なさい」
何を言っているのか、分からなかった

いつのまにか虚空の傍には、辛うじて呼吸をしている月見がいる
竜子は腕を真っ直ぐに伸ばし、先ほど奥義の乱発で破壊した光の漏れている外壁を差していた
朱点童子が竜子に斬りかかるが、竜子はそれをかわし、朱点童子を弾き飛ばした
とても半死人の身のこなしとは思えない

「屋敷に帰りなさい、あとは私がやるわ」
「何を……」
竜子が復活したのなら、ふたりがかりで挑めばあるいは今度こそ朱点童子を倒せるかもしれない、とそんなことを告げる虚空に、竜子が首を振った
一切の生を拒むように
「月見を頼んだわ」
血で濡れた竜子の髪は、彼女が自身があれほど忌み嫌っていた朱点童子の髪の色に染まっていた
まだ戦おうとしていた虚空の胸を、竜子が押した
その手は、ずっとするほど冷たかった

「竜子……？」
彼女がなにをしようとしているのか、虚空にはわからなかった
竜子が片手で放り投げてきた月見を、虚空は思わず両手で抱きとめる
自分にまだそんな力が残っていたことが信じられなかった
そこに八ツ髪が、火炎を吐き出してきた

「足手まといなのよ、貴方たち……いきなさい」

虚空の身体が、見えない力に強く押される
修羅の塔から吹き飛ばされ、視界が開けた
肌を刺す冷気に今さらながら脳が覚醒した
階下に広がっているのは、亡者砂漠だった

「竜子おおおおおおおおおおお！」
虚空は月見を抱いたまま、砂漠へと落下してゆく

“生きなさい”

竜子の言葉が脳裏に焼きつく

次の瞬間、塔が轟音と共に揺れた

「私は朱点童子になりたかった」
朱点童子に背を向けたまま、竜子はつぶやいた

「貴方がお紺の魂を捕らえたように、私にもそれが出来るのだと思った……だけど、私には力が足りなかった、氷ノ皇子から奪った術だけでは、それは完成しなかったわ」

竜子の髪が根元から赤く染まってゆく
肌は黒みを帯び、知性的な瞳が火のように紅と変わった

「母さんと永遠にふたりで生き続けるためなら、私は何だって出来るわ、貴方を殺して、その血肉によって私は新生するの」

新たな朱点童子の誕生に、修羅の塔が震えた
朱点童子と八ツ髪を前に、竜子は笑うと、持っていた朱の首輪を愛しそうに撫で、自らの首にはめた

「へぇ～、そうか……“死”って意外と柔らかかったのね」
この時、竜子の内腿に彫られた白柚の入れ墨が、静かに散る

それは、人であった壬生川竜子が、死ぬ瞬間だった

「“まだ死にたくない、もっと生きていたい”　そう呻きながら死になさい」
朱点童子・竜子を見て、朱点童子・黄川人が笑った

「やあやあ、今度の出し物は、それなりに楽しめそうだね」
強大な力の衝突が起こった

この戦いの結末を知っていたのは、三柱の神だけだった
氷ノ皇子は、気が狂うほど戦うふたりの朱点童子のために、鎮魂の歌を詠った
太照天夕子は、竜子が敗れたのを知ると、そっと目を閉じて彼女のために祈った
太照天昼子は、魂を奪われまいと自害した彼女のために、庭の片隅に小さな墓を作った

それは闇のような瞳をした、もうひとりの朱点童子の物語だった

壬生川の物語に、戻ろう

月見を背負いながら、どこをどのように歩いたか、虚空は覚えていなかった
ただ、皮が裂けるまで開かない修羅の塔の扉を叩いたのは覚えている
道中に鬼は一匹もいなかったし、何度もつんのめって月見を落とすまいと顔から地面に転んだが、一度も痛いとは思わなかった
地獄を辿りながらずっと家族のことを考えていた

槍を忘れたと気がついたのは、黄泉坂を登っていた頃だ
それまではそんなことすら忘れていた

倒れるたびにもう二度と立ち上がれないのではないかと思うほど
の疲労が襲ってきたが、背中の重みが最後の最後で虚空の足を動か
した

虚空の耳に、月見の遠い声が聞こえたような気がする
「もう大丈夫です」や「降ろしてください」や「眠い」や「帰りま
しょう」だった
どれが幻聴でどれが本物だったのだろうか
地上へ出る、長い長い階段を登った

帰るのだ、と、ぼんやりと思っていた
身体の芯から疲れ切っていた
今になってようやく、家に帰れるのだ、という想いが湧く
月見と一緒に帰るのだ
月見と一緒にあの暮らしに戻るのだ
地獄から生き延びて、もう少しで人間の世界に帰れるのだ

虚空の肩から垂れた月見の腕が、揺れた
「あなた」
耳元でくぐもった声が聞こえた

「ボク、良いお母さんになりたかったんです」
夢を見ているのだろうか
虚空は月見を背負いなおし、もう少しで地上に帰れるぞ、と告げた

「あなた」
外が見えた、薄明かりが漏れているのを見ると、今は夜なのだろう
駆け上るような気持ちで、虚空は一歩一歩を刻んだ
その足が、土を踏む

「できるだけゆっくり、きてくださいね」
まってますから、と月見が言った

「月見、外に出たぞ」
風がふたりを撫でた
耳が痛いほど静かな夜だ

「ふたりで、帰ろう」
月が雲に隠された暗い夜だった
月見はもう、何も言わなかった

軽い
魂の抜けた体は、あまりにも軽かった
死にたかった

亡骸を背負いながら、虚空は泣いた
その名を何度も呼びながら、死にぞこないは泣き続けた

壬生川　竜子　享年1才5ヶ月
壬生川　月見　享年1才2ヶ月

壬生川　虚空　生還

第十一話ー15　「地獄変相」　1026年4月8編（後書き）

出陣・地獄巡り（竜子・月見・虚空）　討死　竜子・月見

初見・美月→弓使い

第十一話外伝前編　「窮達」　１０２６年２月～

一月、睦月に話は遡る

死の臭い立ち込める都の外れ、カラスと鼠に紛れて人間が忍ぶように暮らす小路を、ひとりの女が長い髪を揺らしながら悠然と歩く

「死者の声は……聞こえないわね」

まとっている唐衣は貴族のように上等な品物ではないが、その全身からは気品と神々しささえ感じられた

その女の名を壬生川竜子（みぶがわたつこ）という

その横を飛び回る、一匹の蒼い蝙蝠

「タっちゃん、そりゃお蛍の十八番だってば、いくらなんでも人間にゃ聴けないよ」

低位の神・羽黒のお小夜は、とある霊山の近くで夫と小さな宿を営んでいたが、泊まる山伏泊まる山伏に次々と手を出してはそれがバレて、嫉妬に狂った男たちに全身を墨で真っ黒に塗られ、生きながら火あぶりにされ、その後供養されて天に昇ったという壮絶な逸話を持つ女である

「あたしもさ、出会いと別れを司るとか言われてるけど、死んだ人の分まで面倒見きれないってばさ」

出会いと言っても、木曽ノ春菜とは正反対の、他言できないよう

な“陰”の出会いに連なる神であった
その彼女が言っているのだから、本当に芽はないのかもしれない

「タっちゃんに合うようなイイ男なら、いくらでも探してあげられるんだけどねぇ……あたしもやる気出ないし、怨みに溺れて死んだ人間の霊、だなんて、見つかりっこないわさ」

ほたるに施した呪いは、様々な要因により途切れてしまった
竜子が作り出した術はただでさえ不安定だったが、それ以上に壬生川の一族に効果を及ぼし続けることこそが凄まじく困難なのだかといって、柚子のことをよく知らないものにこの術は効かず、現に月見にですら無駄であった
瑞穂の書いた物語を読んだだけの市井の住人などでは、話しにもならぬ

ならば、と竜子が考えたのは、柚子そのものを現世に復活させることだった
結局のところ、それが一番喜ばしい

「……母さんを蘇らせるにも、まずは実験が先よ」

怨霊に限れば、朱点童子は何人もの死者を神として奉り、再生させている
九尾吊りお紺、金色館の悪霊、他にも様々な死者をだ
朱点童子がこの世の生き死にすら干渉できるというのならば、壬生川に出来ないはずがない
竜子は死んだばかりの人間を探して、京を日々練り歩いていた

「こんなこと手伝ってあたし、昼子様に睨まれちゃうのやだなぁ」

お小夜が竜子の横に浮かびながら、大きくため息をついた
竜子は懐から奉納点の玉を取り出し、お小夜に手渡す
「私の監視が仕事なら、私を補佐するのもお役目のうちよ、小夜」

１０点の光を胎内に宿しながら、お小夜が目を丸める
「ばっ、監視が仕事だなんて、何を言っているのさ、分かんない、お小夜意味分かんない、それすっごい理解不能！」

竜子は髪を指で梳く
「……こんなことなら、虚空の腕を切り落としてでも、当主の指輪を手に入れておくべきだったかしら」
足元にまとわりついてきた魑魅を蹴りながら、竜子はぼやいた
あれがあれば術の開発ももう少し巧くかもしれなかったというのに

「朱の首輪があるじゃないかい、身につけたら朱点童子の力が手に入るんっしょ」
「その代わりに鬼になったら元も子もないわ……最後の手段ね」

「うっ……」
路地街が急に息苦しくなってきて、お小夜は顔をしかめた
この都を絶えず流れる人間の濃い陰気は、神にとっては猛毒のような代物だ
竜子は自らの水鳥のような髪を撫でた
泥の池に小石を投げ込んだように波紋が広がり、その髪を中心に淀んだ気が晴れてゆく

「……あんた本当に人間？」
邪気が苦手なところも、陰気に耐え切れないのも、本当によく神と似ている
神と違うのは、それらを調伏する術を竜子が持っていることだ

地上で壬生川の一族に一切の弱点はないのだと、お小夜はつくづく呆れる

「癖気の原因は、あの子ね」
口元を押さえた竜子の目に、やせ細った少女が見えた
竜子も竜子だが、こんな朽ち切った道にたったひとりで居るのは、不似合いだ

「ねー、あんた何をしているのさー？」
隣を見れば、お小夜が人間の格好に変化し、少女に大きく手を振っていた
しかし、蒼い髪と翠色の髪をしたふたりの女性を見て怯えたのか、少女は来た道を慌てて駆けてゆく

「うわ、ショックだわさ」
「……あの子、装いが違うわね」
これほど荒れ果てた都にいながら、ボロ布ではなくはなだ色の着物を身にまとっていた
少なくとも武家以上、もしかしたら公家の娘かもしれない
竜子は眉をひそめる
「気になるわ」

「まぁどうせ、ロクな出会いじゃないんだろうけどね」
お小夜は背中から蝙蝠の羽を生やしながら、自嘲した

羽黒のお小夜が運ぶのは、お互いの身を滅ぼすような出会い、そう決められているのだ

＜屋敷にて＞

高い塀で囲まれたその屋敷は、泉大路では有名なさる姫の住処であった
竜子は背の高い門をくぐる
空は黒い、この風なら時期に雪が降るだろう
お小夜はそれを見通して、一足先に壬生川屋敷に帰っていった
神であろうが羽が濡れては飛べぬのだ

屋敷に立ち入ってまもなく、中年の下人が竜子が呼び止めた
壬生川よりも二回りほども大きい屋敷を眺めていた竜子の元に、次々と奉公人が集まってくる
竜子は責め立ててくる男たちの声を聞き流しながら、この時勢に、まだこれほど多くの者を雇っているとは、よほど高貴な身なのか愚か者なのか、と考えていた
前者でも後者でも、竜子にとっては構わない
屋敷の奥から、かすかに生薬の匂いがする

「貴方たちのあるじに用があるわ、どいて」
幾人かは、その竜子の言葉に縛られ、身動きが取れなくなる
先ほど、家に駆け込んだ少女が、屋敷の板木の廊下からじっと竜子を見ていた

「……春眠をむさぼりて悔なかりけり・水母の袂にて暁を覚えず……」
呪を囁くと、竜子の回りで騒いでいた男たちが、立ちながら意識を失った
手を払うと男たちは、再び元の仕事に戻ってゆく

玄関には諏訪神の木彫りの神像が二柱、向かい合って配置されていた
魔よけの竜であろうが、それは神の系譜に名を連ねる竜子に何の効力も発揮はしなかった
竜子は、悠々と土間に上がった

奥の間に、一人の女性の気配があった
幽明を漂うような風が、そちらから流れてくるのを感じると、竜子はこの屋敷が“アタリ”なのだと悟った

「お邪魔するわ」
薄襖を開くと、長い黒髪の女が布団の中で身を起こし、ぼうっと小窓から空を眺めていた
この屋敷の異変に気づいているのか気づいていないのか、寝床で薬の入った椀を抱えながら、ちらりと竜子に目を向けた

「こんにちは、綺麗なお人」

瑞穂（みずほ）が居た

「……貴方、どうして」
瑞穂は小首を傾げて、驚きに固まる竜子に尋ねる
「お迎えがいらっしゃいましたのね、どうぞ、連れていってくださいまし」
雪が降るような、儚い声だった

そこで気づく
よく見れば彼女の髪は黒いし、瑞穂よりも年を取っていた
少なくとも３０代は越しているだろう、竜子には人の年はよく分

からないが
なぜ瑞穂と見間違えたのだろうと思いながら、竜子は告げる
「私は竜子、残念ながら、貴方の命を奪いに来たのではないわ」

「まあ」
やつれた顔をした瑞穂は、少し残念そうな顔をした
「その逆よ、貴方に生きる望みを与えにきたの」
竜子は悪い気を含んだ瑞穂の顔色を眺め、続ける
「辛病ね……もってあと三ヶ月、女の盛りでこの世を去るのは、口惜しいでしょう」
「あの」
「一人娘を遺して、死にたくは無いでしょう」
「……」
屈んで、竜子は瑞穂の肩に触れた

その途端、瑞穂の体からわずかに黒い霧が漏れた
それは呼吸を乱す陰の気であったが、竜子は一撫ででそれを祓ってみせた

「私と貴方がこうして出会うのも、神に定められた運命なの」
蝙蝠娘が運んだ、黒い出会いではあったが、嘘ではない
屋敷の中で、再び黄色い風が吹き出した
人が放つ邪気だ
「私は別に、何も……」
見えざるモノが見える竜子には、その言葉は本心ではないと知れた

「……そう」
竜子は瑞穂の傍に、足を伸ばして座り込んだ
「今年の桜も、綺麗に咲くでしょうね」

見知らぬふたりが、雪の降りそうな空を見上げる
「貴方の娘、様子がおかしかったのだけれど、何か知っている？」
「……さあ、存じかねます」
「ふうん」
嘘を言っている様子は無い
あの少女のことは、しばし置いておくか

「……陰陽の道に身を置いた、母方の遠縁は仰いました」
瑞穂は椀を置いて、目を伏せながらつぶやく
「壬生川は、この世の劇薬、まやかしであり、人の手に余る大いなる存在、天災のようなものだ、と……どうして私に、冬が訪れるのを止められましょうか」
下を向く瑞穂の目に、怯懦の色が浮かぶ
「私の一族のことを、知っているのね……それなら話が早いわ」
部屋の片隅に、柚子物語があった
それだけで、異人のような髪の色をした竜子の正体を気づくというのは、ずいぶんと頭の良い娘なのだろう
竜子には、都合が良い

「貴方の願いを言いなさい、私はそれを叶えてあげましょう」
死期の迫った人間に囁かれるには、それは過ぎた花蜜であった
壬生川にはその力があり、彼女には願いがあった

瑞穂の顔を持つ女はある花の名前を告げ、それが自分の名だと言った
「夫を待っています、何年も」
身ごもった彼女を置いて、大江山の討伐に向かい、それから戻ってきていないのだという、今から九年も前の話だ
産まれた娘に、一目会わせてやりたいのだと彼女は言った

「……聞き遂げましょう」
竜子はそう言って、薄く笑った
お小夜の運んだ出会いは自分にとっては、間違いなく幸運だったのだ

この女の三ヶ月の命、有意義に使わせてもらおう

瑞穂と言葉を交わし、また来ると告げた
去り際竜子は奉公人を縛った呪を解きながら、あの娘と再び視線を合わせ、ふと気づいた
「……」
昔の自分によく似た目を持つあの娘、私たちの先祖、玄輝と同じ年に産まれたのだ、と

その日から竜子の屋敷通いは続いた
その横顔はまるで、恋した姫の下に通う公家の若者にも似て熱心だった

竜子は瑞穂の部屋に赴き、薬を渡し、それから色々な話をした
竜子の前に理はなく、一切のこの世の摂理は竜子に意味を為さなかった

時に竜子は琵琶を弾き、瑞穂を喜ばせることもあった
雪の積もったある日、余興だと言って、庭に見事な桔梗の花を咲かせてみたこともあった

だがしかし、そんな竜子の言動は全て“いかにして人間は鬼へと変貌してゆくか”の過程を観察することに目的があった

その経験は実に有用だ

女が寝所に篭るようになって半月、信濃の諏訪の神に所縁を持つ公家のひとつであったその屋敷は、完全に没落していた
煩かった奉公人も今では殆どが辞め、残ったものとて行き場所がない下郎ばかりだ

竜子は微笑みながら、横たわる瑞穂に囁いた
「……今に会えるわ、もうすぐ、もうすぐだからね、貴方」
恋慕の情は、人を最も容易に鬼へと変える

「あ……ああ、会いたい……会いたいわ……」
そう言った彼女の口からは、濃い鬼気が漏れた

望みは、口に出せば人を縛る呪となる
いまや瑞穂は彼女自身の言葉により逃れられない戒めを科せられていた
こうして屋敷は、次第に魍魎の跋扈する妖異な物へと変貌してゆくのであった

2月に竜子は、昼子から秘術の在り処を聞き出す
氷ノ皇子
彼に会えば、そこで瑞穂の背を押す術は完成し、柚子をこの世に生き返らせる手はずが整うのだ

第十一話外伝中編　「鞭撻」　１０２６年３月～

・二月某日

陰の気を蓄え始めてから二十日と八日後、被験者は日の光を疎ましく思うようになる
食事は肉や生魚を一日二回、生臭い物ほど好し
知能は著しく低下してゆき、簡単な読み書きも困難になった、改善の余地有り

・二月某日

ある破れ寺で手に入れた物語によれば、肉体の死後、魂が手近な霊験あらたかな物（神木や真言書、蛇や狐狸等）に取り憑いた存在を鬼と定めてある
以上の事柄により、依り代は樹木で彫った人形とする
母さんの体を模した木人形であれば、生前と変わりない美貌になるでしょう

・三月某日

女の額に双角が見られるようになった
光の角度で見え方が変わるように、時に老婆、時に童女と変化が増してきた

固定の方法を研究中
鬼白痴の予防策も構じねばならない

あばら屋のような屋敷の廊下に座りながら、竜子（たつこ）は壬生川（みぶがわ）家から
持ち出した＜卑弥子＞の術書を眺めていた
そよそよと風の流れる真昼間、女はまだ眠っている時間帯、である

「千代に……千代に……」
人差し指と中指で印を切りながら、言霊を唱えるが、その呪文は
唇の中で霧散してしまう
「……やっぱり、ダメ、ね」
何十回試してみても巧くいかないと、さすがに気持ちが少し沈む

こんなとき、竜子はよく遠くを眺めた
宙をさまよう記憶が、楽しかったあの頃を呼び覚ます
ふと、その目が廊下の向こうからやってくる小さな影を捉えた
女の娘だ、呼び名はひなげしといったか
ひなげしはいつも、刺すような視線で竜子を見る

「……なあに」
九年前に当主を亡くしたこの家は、外部との付き合いを極端に減
らしていたためか、少女も年の分より人見知りが激しかった
そのまとっている雰囲気から、少女が痛々しいほど緊張している
ことが分かった
見ず知らずの他人に自分から話しかけたことなどないのだろう
ひなげしは憮然とした顔で、竜子の手の届かないところから、摘
んだ野草を差し出してきた

背の伸びかけた、ヨモギの葉だ

「草？　ああ……」

竜子はわずかに微笑んだ

初めて出会ったとき、怯えて逃げ出した少女を思い出す

「そう、それを摘んでいたのね」

少女は竜子のことを、宮廷薬師か医道に通じた学者だと思っているのだ

「お母さんに？」

竜子の言葉に、ひなげしはこくんとうなずいた

古来より薬草として知られる蓬の葉であるが、鬼と化す母を止める効用は、ない

それでも、竜子にはひなげしの心中がいじらしく思えた

「あとで、渡しておくわ……喜ぶと思う、きっとね」

ひなげしの君の小さな手のひらが泥に汚れていた

お供も連れず、このようなやんごとない身分の子供がひとり、山から摘んできたヨモギだ

竜子はそれを受け取って、手近な下人に鉢と手ぬぐいを持ってくるように呼びつけた

少し距離を縮めてくれた姫に、微笑む

「お母さんの病状、良くなると良いわね」

ひなげしはわずかに緊張の糸を緩めて、あどけない表情をあらわにした

「そうだ、ヨモギのお礼を上げるわ」

竜子はひなげしの手を引き寄せ、下人が持ってきた手ぬぐいでその小さな手のひらを拭いてやる

手ぬぐいに赤色が咲いた

「手、切れているわね」

ひなげしも気づかなかったようだ、元々農作業などしたこともないのだろう、餅のように柔らかな皮だ
竜子は口の中で小さく呪を唱えた
「……さ、これで平気ね」
その＜泉源氏＞により、ひなげしの傷は完治していた
ひなげしは夜空にふたつの月を見たような顔で、竜子を見た

「お礼は、これよ」
竜子は懐から一本の短刀を取り出した
飾りは銀、色は紫、子供の手でも充分に扱えそうな小刀である
戸惑うひなげしの手に握らせ、竜子は薄く微笑む
「並の鬼なら裸足で逃げ出すような、強力な護法がこめられているからね……刺せるかどうかは、貴方の勇気次第だけれど、危険に合ったら迷わず使いなさい」
１０にも満たない少女は、分かったような分からないような顔で、ただ竜子の言葉に押されてうなずいた

それからひなげしは竜子を慕って、よく話しかけてくるようになった
女の相手をするのは大抵真夜中なので、時間の余った竜子はそれに応じて、和歌や琴を詠って遊びに付き合っていた
笑顔の裏で、竜子はこう思う

自分の母親を刺せば少女も新たな鬼となろうな、と

３月、竜子たちは忘我流水道へと出陣した
その迷宮の奥深くで、氷ノ皇子の肉を喰らうと、竜子の脳裏に無

限の知識が流れ込んできた
死人の声を聞き、それを鎮め、またはそそのかす秘術、人の命を弄ぶ禁忌をついに竜子は手にしたのだった

そして、きたる四月一日
美月がやってくる前の日の、晩である
猫の爪のような弓張月が美しく光る、雲のない夜であった

屋敷の屋根の鬼瓦の上に、竜子が立っていた
月の明かりに照らされ、すっくと背を伸ばしたその御姿は、天女か月の民にも劣らない美しさを称えていた
その翠石のような目は細められ、向かい合う二人の影を捉えていた
魔都と化した京の真夜中に、屋根の上で相対する相手が人間のはずがない
「何者」
誰何した竜子に、小さい方の影が怒鳴った

「アンタ、今までホンっっっっっトに、好き勝手やってくれたわね！」
少女の声だ
竜子の肩に止まっていた蒼い蝙蝠が、ひっ、と跳ね上がった
「ちょ、ちょっとタっちゃん、あれは」
「……知り合い？」
動揺するお小夜から視線を横に動かせば、少女は足を踏み鳴らしているようだった

「お小夜！　離れなさい！　早く！」

少女の命令に、短い悲鳴を上げて羽黒のお小夜は空に向かって勢いよく飛び立っていった

「……せっかく、一緒に余興を楽しもうと思っていたのにね、邪魔をする貴方たちは何者」

黙っていた方の女が、そこで口を開いた

「あ、わたしたちは、」

「私は下諏訪竜実！　それでこっちのおねえちゃんは上諏訪竜穂！」

少女が一歩前に踏み出すと、月明かりに照らされて、怒気に染まった表情が見えた

先月、太照天昼子を囲っている中に居たな、と思い出しながら、竜子は腕組みをした

「もう！　おねえちゃんがグズグズしているからここまでなっちゃったんじゃない、ともかく！　うちの一族から般若を生み出すわけにはいかないのよ！」

頭から生えた二本の鹿の角が、バチバチと火花を散らし、その闇を一瞬青く染める

そこで竜子はようやく得心した

確かに、この屋敷は諏訪の祭神を信仰していた、それを遡れば行き着くのはこの二柱となる

「なるほど」

納得はした

「……それで？」

促すと二柱が語気を強めた

「だ、だから、」
「だーかーらー！　アンタは今すぐこの屋敷にかけた変な呪を解いて出て行きなさい！　そうじゃなきゃ私たちがアンタをブッ飛ばす！　っていうか殺すわ！」
会話の余地が残されているのかどうか
「た、たつみ、」
「大体、アンタ私たちと同じ名前からして腹立つのよ！　竜の品位がさーがーるー！」
喚く竜実に、竜子は大きく嘆息した
「……で、どうするのかしら、相手をしてあげても私は構わないけれど……私を傷つければ、朱点童子に対する秘密兵器を害したことになるのよ」
言外にある、昼子が黙っては居ないだろう、という声を読み取って、竜穂が声を上げた
「それは、」
「それはお門違いよ、この屋敷は元々諏訪が守護するところ！　アンタの行いは冬の海に身を投げて“この身が壊死したのは海のせい”とほざくようなもの！　今すぐここから立ち去りなさい、小娘！」
外見は少女だが、言葉には威厳があった
さすが五爪の竜だ
お小夜とは格が違うな、と竜子は少しだけ相手の自信に関心する
竜子は天を仰いだ
月の綺麗な夜だ
「……いいわ」
軽く拳を握る

邪魔者は、誰であろうと乗り越えると、瑞穂と死別した時点で決めたのだった

「こんな夜に竜と舞うのも、雅な趣向だわ」

夜空を駆ける翠の流星を捉えきれず、竜実は歯噛みした

「なんてやつなの！」

そう言った矢先、竜実のわき腹が猛獣に齧られたように、抉り取られた

「竜実！」

「大丈夫、おねえちゃん……ムカつくけど！」

燐光が瞬き、一拍の間も置かずに竜実のあばらが再生する

ただし健康的な肌はへそまでむき出しになってしまった

「天つ神とは不自由なものね」

諏訪屋敷の塀に佇みながら、竜子は髪をかきあげた

「地上で、それも邪の気が支配するこの都において、貴方たちの力はあまりにも……そう、哀れだわ」

竜実と竜穂は同時に手のひらから吹雪を放った

猛烈な勢いで竜子を包み込んだ冷気は、彼女の髪の一撫でで消え去ってしまう

一瞬のうちに印を結んで放った竜子の＜芭蕉嵐＞が、竜実と竜穂の体を乱暴に切り裂いた

「なんてインチキなの！　あんなのほとんど朱点童子じゃない！」

手のひらであらわな部分を押さえながらの竜実の声に、竜子が口

の端を釣り上げた

「お望みなら、こんな真似も出来るようになったわ」
竜子が宙に人差し指で描いた輪は、実像を帯び、すぐに黒い首輪となった

「それは……まさか」
「わ、ちょっと、おねえぇちゃぁん」
竜実が眉を下げて、竜穂の背に隠れる
竜子が作り出した黒の首輪は、禍々しい妖気を放っていた

「これが何か、分かるわね」
千切れた竜穂の衣が、ツタが絡まるように再生してゆく
「……分かります、口に出すのも忌まわしい、あの首輪ね」
朱点に何人も同胞が捕まえられたのだ、竜穂の嫌悪はもっともであった
もしあれに朱の首輪と同じ妖気が込められているのなら、捕まってしまえば竜穂もまた、大鬼に変化させられてしまうことになる

「分かるのなら、そこをどきなさい……二匹の竜を使役するような驕奢な趣味はわたしにはないのよ」
「それはなりません、あなたは私達に障りました、相応の無礼はさせてもらいますよ」
竜穂の目が紫色に光る

「千年生きて水龍となっても、蛇心は失わず、か」
諦めるような声と共に竜子は右の拳を突き出し、本格的に構えを取った
これから諏訪姉妹は本性を現し、全力で壬生川の子を叩き潰しにかかるだろう

竜子もまた、己の邪魔をする者には容赦をしない
緊張の糸がまさに今途切れるという直前だ

絶妙の間に声がした

「双方それまでだ」

先に動けなくなったのは、竜子だった

「……お小夜」

闇に紛れて、空からはらはらと蒼い蝙蝠が降ってきた
お小夜はその場にぶっ倒れながら「大変だったんよ、竜の姉妹様より位が高くて、タっちゃんを止められそうな神様探すの、ああマジ疲れたマジ翼折れるかも」といったニュアンスの言葉を息も絶え絶えに呻いた

竜穂も竜実も、闖入者に睨まれて、体を強ばらせていた
さすが出会いの神だ
竜子は思った
その人選は大正解だ、そして竜子にとってはこれ以上にない苛立たしい再会だ

やってきた風の神は、全身に雪のような真っ白な羽を生やしていた男だった
「まったく、元気そうだな竜子」
竜子はそっぽを向いて、悔しそうに呟く

「……父さん」

鎮守ノ福朗太、竜子の実の父である

福朗太の乱入により、その場は無事収められた
「お前らが本気を出して勝負したら、都が鴨川に沈むぜ」
その言葉で竜穂と竜実は慎むしかなく、屋敷の始末は竜子がその場で奉納点を払って解決となった
結果的には、竜子が奉納点で屋敷を買った、ということになる
竜子の格が諏訪姉妹を上回っていた、という点を配慮した福朗太の計らいであった

「死んだらアンタの命、絶対に拾ってやるからね、そして私達とまた勝負しなさい！」
そんな捨て台詞を吐いて、姉妹は帰っていった

屋敷の全てはこれで、竜子に任せられたのだ
しかし、竜子の表情は晴れなかった
「……興が削がれたわ」
「タっちゃん、もしかしてお父さん苦手？」
夜も深まり、屋敷の庭に降り立ちながら、お小夜に竜子がぼそりとこぼす
「……すこし、天つ国に居るときに、厳しくされただけよ」

それよりも、と竜子は荒れ庭に寝かせていた人形を取り出した
「魂を引きずり出して、この木人に憑霊させなければならないの、お小夜、持ってきて頂戴」
ほとんど人間と変わらぬ人形をお小夜に担がせて、竜子は屋敷へと歩きながら続ける
「恐らく、術を唱えている最中は私は無防備になるでしょうから、その間は、貴方に私の身を護ってほしいのよ、濃い陰の気が物の怪

を呼び込む可能性があるから」

それに、と呟いてから、

「……私は、朱点のように不死身ではないしね」

「それなら、アタシより福朗太様に言った方が良かったんじゃないのさ」

「バカね、あの人の羽のそよぎなら、鬼女ごと吹き飛ぶわよ」

「なるほど……って、それならアタシは!?」

「貴方くらいが、一番都合が良いの、お願いよ」

「うーん……」

うなっているお小夜を置いて、竜子は廊下に上がり、女の部屋を目指した

第十一話外伝後編　「竜子」　１０２６年４月～

「苦しい？　でも大丈夫よ、すぐ楽になるわ……」

醜悪な塊となった“それ”に、竜子（たつこ）は優しく微笑みかけた
自らの首に朱の首輪を巻きつけ、撫でながら、生臭い息を吐く半死人に囁きかける

「今、楽にしてあげるからね……ふふふ」

竜子は真言を唱えだした
言葉だけではなく、音階までも意味があるその秘術は、煙のように女の体に巻きついてゆく
陰の気に染まった魂を、はらわたのように引きずり出す術である

「うーわー……命を奪う術とか、エグいさねえ、ホント」

妖気の海にお小夜は顔をしかめながら、辺りを見回す
「諏訪の守り神もいなくなっちゃったし、次から次へと童鬼が集まってきそー……」

竜子は夢中で呪詛を歌い続けている
魂はどんな形なのか、どんな色をしているのか、どんな物なのかが、早く知りたくて仕方ないのだ、それさえ知ることが出来れば、母親の魂をこの世に呼び戻す糧となりえる
早く早くと願う竜子の心が、術の完成を確かなものとしてゆく

一方、お小夜は庭に現れた首切り大将を惑わせ、目を見えなくさせて退散させていた

低妖とは言え、彼女のように若年の神では一刀両断、とはいかないものだ

突然の物音がして、竜子は思わず顔を上げた
音は、屋敷の中から聞こえてきた
竜子は思案する
あらかじめ屋敷に居る者は全て寝かせておいたつもりだったが、妖怪でも入り込んだのだろうか
廊下の板を踏む音が聞こえる
ぺたり、ぺたり、と近づいてくる
「……」
しかし、途中で術を投げ出すわけにはいかない、自分に残された時間はあとわずかなのだ

部屋の戸が開いた
濃い闇の中、立っていたのは屋敷の娘、ひなげしだった
「……どうしてここに」
術を唱えながらも、二つ目の口があるかのように、すんなりと声が出た
「お、おに……！」
戸を開いたことを後悔するような、怯えきった声
ひなげしは寝巻きの帯にあの竜子が渡した短刀を差していた
そうか、あれの護法が術の効き目を弱くしたのだな、と竜子は独り合点した

「そうよ鬼よ、ここには鬼がいるわ」
竜子はそう言って微笑む
自分の歌に自分の声が被さるというのは、とても奇妙なものではあったが、今は気にしている場合ではない

娘の声に反応したのか、布団の中で物の怪がむくりと動いた
ひなげしは恐怖に身を竦めながらも、ゆっくりと短刀を抜いた
女が死ぬか、娘が死ぬか
お小夜は庭で、次から次へと現れる妖怪たちの相手をしている

「刺さなければ、貴方が死ぬわよ」
ここ三日弱らせるために肉を与えてない女は、もう飢えも限界近いだろう
「刺せば今度は、貴方が鬼になるでしょうけれどね」
竜子は思わず口の端を釣り上げた
こんな趣向が見られるとは思わぬ余興だ、先ほどの諏訪姉妹の比ではない

「さあ、どうするの」
竜子の歌が響く中、女がもがいて、布団を跳ね除けようとする
ひなげしが叫んだ
「お、に……お、鬼！」
次の瞬間、ひなげしの刀が竜子のわき腹に突き刺さった

歌が止んだ

「……どうして」
自分を見上げるひなげしの目に映っていたのは、長い髪をした鬼だった

「悪鬼め、母上様を、苦しませないで！」
刀を腹に刺したまま、竜子はよろめいて後ろに下がった

ひなげしはすぐに母親へとすがりついた
「母上様、母上様、お体が痛むのですか……！？」

娘に微笑む母親の顔は、人間のそれだった
大丈夫です、少し嫌な夢を見ていただけなのですよ、そう言う母親に、ひなげしが「お薬をお持ちしましょうか？」と尋ねていた

竜子は奇妙な既視感を感じる
何だこれは
竜子の脳裏に流れたのは、一年前、まだ自分が正常だった頃の記憶だ

なぜ、こうなってしまったのだろう
目の前の光景、母親を介抱する娘は、柚子と自分であり、瑞穂（みずほ）と自分だった
竜子は腹に刺さる刀を抜き、投げ捨てた

「私は倒せないわ、ひなげし」
その時分かった
女が瑞穂に見えていたのは、この既視感のせいだったのだ
瑞穂を殺したことは、自分の中に悔恨を遺していたのだろうが、もはやどうでもいい
娘は母親をかばうようにしていた

「救いなんてこの世には無いのよ、貴方の母は死ぬ、私に刃向かった貴方も死ぬわ」
竜子は薄く微笑んだ
「私は知っているわ、奇跡も、救いも、何も起こらないことを」
信じていた神ですら、自分たちを手のひらの上で弄ぶだけだったのだ
こんな都で、一体、母親以外の何に救われるというのか
「だから、無駄な抵抗は止めなさい、信じるに足る幸運なんて、無いのよ！」

叫ぶ竜子の目に留まったのは、部屋の隅にある柚姫物語だった
腕を振り上げた体勢のまま、竜子は固まった
どうしてこんなところに、そんなものがあってしまったのか
嫌だ
竜子の顔が歪む
「母さん、どうして……」

柚子(ゆずこ)が望むだとか、柚子が悲しむだとか、そんなことだけはずっと考えないようにしていた
くだらない、死んだ人間に意思も願いも有りはしない
ただ、もう一度会いたかったのに
全てを棄てて、殺して、滅ぼしてでも
なのに
竜子は血がにじむほどに強く握った拳を胸元に引き寄せる

母親の見ている前で、たかが母娘を殺せないだなんて

力無きものは衰滅する、それがこの世の掟だ
柚子だって死んだ、それは彼女が朱点童子よりも弱かったからだ
でも、だからこそ、そんな世の理を変えようとしたのではないか？
竜子は惑う
そして、その時点でもう彼女に鋼の意思はなかった

あまりにもくだらない、偽善だ
娘が母親を懸命にかばっているというだけで
適うはずもない相手に勇気を振り絞って立ち向かったところで
家族を想う深い絆の一端を垣間見たところで
それで竜子が彼女たちを許す理由になどはならない
それが壬生川の歩んできた道であっても

「……っ」

だというのに
目の前の親子はあまりにも弱々しくて
気がついた以上、竜子の心は急激に冷めた
その胸にあった灯火は、消えてしまったのだ
なにを犠牲にしても母親をもう一度蘇らせたかったというのに
彼女を待つ自分が自分でなくなってしまったら、幽鬼のような柚子と亡霊の竜子が湿った笑い声をあげるだけの虚無が遺されるだけだろう

いわばそれが竜子の分水嶺
人としての、最後の矜持であった

「……生きていたって、良いことなんて、何もないと言うのに！」
竜子は母子に向けて、腕を振り下ろす

屋敷を出て、都をお小夜と並んで歩きながら、竜子は呟いた
「……やっぱり貴方が運んできた出会いは、最低だわ」
冷め切った心は、もう何もかもがどうでも良くなっていた

「はいはい、あたしもそう思うしね」
そう言って、ひゅるりと舞ったお小夜は天へと帰ってゆく
それっきり、竜子は彼女ともう二度と会うことはなかった

羽黒のお小夜が運ぶのは、お互いの身を滅ぼすような出会い、そ

う決められているのだ

〜〜

翌朝、ひなげしが目覚めたのは自分の布団の上だった
「あ、あれ」
驚いて、飛び起きる

すごい夢を見ていたような気がする
そういえばと寝巻きを見れば、先日お姉さんから貰った短刀を、しっかりと帯びている
恐る恐る抜くが、使った形跡も何もない
ひなげしは首を傾げていたり、起床の手伝いにきた使用人に不思議な夢の話をしてみたり

しばらく彼女は気づかなかった、その小さな机台の上に一枚の書き置きが残されていたことを

そこには、母親はひなげしの摘んできた薬草で、すっかり病状を回復させた事、もう生きるのに何の不自由もないという事、お代は充分に貰ったので自分は屋敷に帰るという事、そんな麗句が書き連ねてあった

その末尾に、小さく、
母親を大事にね、と付け加えられていて、ひなげしは思わず指を文字でなぞっていた

＜四月、屋敷にて＞

柚子の墓に手を合わせて、竜子は目を閉じる
「……やっぱり聞こえない、か」
首に巻いた朱の首輪がゴツゴツとしていて、やけに気に障る

「あと少しで、そちらに参ります」
竜子を呼ぶ声がする、あれは月見の声だ
これから壬生川御三家の会議が始まり、地獄へと出陣するだろう
母が死んでから、途方もなく長かった
一年は長すぎたのだった

「……もう犠牲にするものは、私の身だけです」
自分と瑞穂は救われることはなかった
その代わりに、あの親子は救われたのだ、きっと
「……では、また」
自分の人生も、そこで終わる

あとは、終わらせるだけだ

＜胎の間＞

滅びの間際で、何者かに肩に手を置かれ、虚空（こくう）は朱点童子から引き剥がされた
自分と朱点童子の他に、誰がいたというのか
先ほど、鎖に捕らえられた女かと思ったが、それは違った
あまり動かない目が見たのは、髪の長い女だった
竜子だった

「月見（つきみ）を連れて、出なさい」
何を言っているのか、分からなかった

いつのまにか虚空の傍には、辛うじて呼吸をしている月見がいる
竜子は腕を真っ直ぐに伸ばし、先ほど奥義の乱発で破壊した光の漏れている外壁を差していた
朱点童子が竜子に斬りかかるが、竜子はそれをかわし、朱点童子を弾き飛ばした
とても半死人の身のこなしとは思えない

「屋敷に帰りなさい、あとは私がやるわ」
「何を……」
竜子が復活したのなら、ふたりがかりで挑めばあるいは今度こそ朱点童子を倒せるかもしれない、とそんなことを告げる虚空に、竜子が首を振った
一切の生を拒むように
「月見を頼んだわ」
血で濡れた竜子の髪は、彼女が自身があれほど忌み嫌っていた朱点童子の髪の色に染まっていた
まだ戦おうとしていた虚空の胸を、竜子が押した

その手は、ずっとするほど冷たかった

「竜子……？」

彼女がなにをしようとしているのか、虚空にはわからなかった

竜子が片手で放り投げてきた月見を、虚空は思わず両手で抱きとめる

自分にまだそんな力が残っていたことが信じられなかった

そこに八ツ髪が、火炎を吐き出してきた

「足手まといなのよ、貴方たち……いきなさい」

虚空の身体が、見えない力に強く押される

修羅の塔から吹き飛ばされ、視界が開けた

肌を刺す冷気に今さらながら脳が覚醒した

階下に広がっているのは、亡者砂漠だった

「竜子おおおおおおおおおおお！」

虚空は月見を抱いたまま、砂漠へと落下してゆく

“生きなさい”

竜子の言葉が脳裏に焼きつく

次の瞬間、塔が轟音と共に揺れた

「私は朱点童子になりたかった」

朱点童子に背を向けたまま、竜子はつぶやいた

「貴方がお紺の魂を捕らえたように、私にもそれが出来るのだと思った……だけど、私には力が足りなかった、氷ノ皇子から奪った術だけでは、それは完成しなかったわ」

竜子の髪が根元から赤く染まってゆく
肌は黒みを帯び、知性的な瞳が火のように紅と変わった

「母さんと永遠にふたりで生き続けるためなら、私は何だって出来るわ、貴方を殺して、その血肉によって私は新生するの」

新たな朱点童子の誕生に、修羅の塔が震えた
朱点童子と八ツ髪を前に、竜子は笑うと、持っていた朱の首輪を愛しそうに撫で、自らの首にはめた

「へぇ～、そうか……“死”って意外と柔らかかったのね」
この時、竜子の内腿に彫られた白柚の入れ墨が、静かに散る

それは、人であった壬生川竜子が、死ぬ瞬間だった

「“まだ死にたくない、もっと生きていたい”　そう呻きながら死になさい」
朱点童子・竜子を見て、朱点童子・黄川人が笑った

「やあやあ、今度の出し物は、それなりに楽しめそうだね」
強大な力の衝突が起こった

真の自由を手にした朱点童子・竜子は吼えた

八ツ髪に拳を叩きつけると、その一撃で龍は破裂する
「……これが、最期の戦いよ！」
生まれて初めて、壬生川から、母親から、神から、責任と重圧から解き放たれた竜子は、この世の全ての制約を振り切って跳ねた

男と女の朱点童子は、全身全霊を尽くして戦った
「＜雷獅子＞！」
「……＜雷獅子＞」
叫びをいかずちに変えて放ち、相手を消し炭にしようと戦った

死にたいと願いながらも、死ねないからふたりは戦った
朱点童子が自らの赤髪を抜き、それに妖気を込めると、たちまち巨大な龍へと変化する
「キミにもこれが出来るかい！？」
少年の笑い声に、朱点童子は不敵に微笑む
「私は七本の髪を全て討伐した女よ」
次の瞬間、彼女の髪がうねりながら伸び、七頭の大蛇となって龍に咬みついた
天地神明を超越した力で、亡者砂漠の上で何日も戦った

笑いながら、朱点童子は戦った
男も女もどうすれば相手が自分が死ぬのか分からないから、限界を超えてもなお怯まなかった

朱点童子が腕を振るえば、血の池地獄が氾濫し、氷結針地獄の山が歪んだ
理性も意識も真っ白になる恍惚の中、ふたりは泥土のように戦った

全力疾走を永遠に続けるように、朱点童子は戦った
朱点童子が叫ぶ
「楽しいね！」
口から溢れた炎がもう一方の朱点の右半身を焼き尽くす
極炎に焼かれながら、朱点童子も笑う
「壊れそう！」
互いが融けてゆく
気分が高ぶる
痛みも苦しみも何も感じなくなって、ただただ全能感に満たされた
こんなに気持ちが良いのは、初めてだ
ああ、もう何も考えられない
あらゆる呪縛を振り解いて、ふたりは戦い続ける
何日も何十日も続く戦いの中、自分は相手であり、相手は自分となる
「……母さん！」
「母さん……！」

気がついた時には、女は男の腕の中に捕らわれていた

「アハハ……掴まえた、このまま殺すのはもったいないよ」
男は大口を開けて笑いながら、女に叫んだ
「やりたいことなんて、もう何も無いんだろう！　このまま一生殺して殺され続けようよ！　自分の全てを受け止めてくれる相手がいる！　こんなに楽しいことはないよ！」
朱点童子の声が、まるで自分が言っている声のように聞こえる

女の顎を両手で掴んで、高々と持ち上げながら、男が歌う

これは、あの魂を引きずり出す秘術だ
まさか、自分が使われるとは思ってもみなかった
意識が戻る

ここは地獄の底だ
朱点童子も殺せない
しかし、救いはある、女は思い出す
光も届かない、こんな地獄の底ですら、救いはあるのだ
誰も助けてはくれない
救いは己の中にしかないのだ

「ずっと、守りたいと思っていたけれど、結局は守ってほしかったのよ……母さんにも、瑞穂にも、ほたるにも、私は守ってほしかったんだわ……ふふふ……」
女もまた、男の顔を掴んだ
「朱点、哀しいわね」
「ボクは寂しくないよ」
「私は辛かったわ」
女は男にゆっくりと口付けた

歌が止む
笑う
女は男の口内に、唇を重ねたまま火炎を噴き出した

「あああああああああ！」
臓物まで焼かれる痛みに、男が悶えるのを見て、女は高々と笑った

「あはははは！　あはははははは！」

笑いながら、女は自らの首を手刀で斬り落とした

終幕を待たずに暗転する劇のような最期だった

一つの物語は、こうして終わった
それは闇のような瞳をした、もうひとりの朱点童子の物語だった

第十一話ー16　「傍白」　1026年5月前編（前書き）

虚空　11ヶ月
烈　6ヶ月

左京　3ヶ月
美月　1ヶ月

第十一話－１６　「傍白」　１０２６年５月前編

＜壬生川武録記＞

お久しぶりです、美月（みつき）です
今月はあたくしめが父に代わって、武録を記すこととなりました
大丈夫です、読み書きは昼子おばちゃんにキチンと教わりました
敬語もばっちりでございますです、うふふ

なんでも、今月は反動でめいっぱい明るくしなきゃダメらしいんです、昼子おばちゃんが今月の初めにいなくなる直前にそう言ってきました
そうしなきゃ耐え切れないそうです
なにがなの？って聞いても、うすら笑うだけで答えてくれなかったまあ、大人の事情は置いておきましょう
目標は三日坊主です、三日持てば美月は偉いと我ながら思いますそういうわけで、よろしくお願いします

～～

パパがママを連れて帰ってきてから、もう一週間
美月が話しかけても、パパはずーっとボーっとしています
お昼からお酒ばかり飲んでいるダメ人間になってしまいました
由々しき事態、です
例をお見せいたしましょう、これは先日の会話のひとつです

「パパ、おひるまっから、そんなにお酒呑んでばっかりいたら、とてもダメよ！」
「……そうじゃな」
パパはそう言って、杯を持ったまましばらく空を見上げていました

でも美月は知っています
独りでいるときにパパは、たまに誰もいないところに向けて空になった器を差し出しています
注いでくれるのを待っていました
ママがいなくなって、すごく寂しいんだと思います
美月も本当は寂しいです、だってまだ1ヶ月才なんだもの
だから早く、パパに元気になってほしいと思います
精のつくものを作ってあげようかと思ったら、烈(れつ)くんに「それは意味が違うから止めた方が良い」みたいな事を言われてしまいましたダメ人間なんて言って、パパごめんなさい、とにかく美月も頑張ります

〜〜

頑張ることにした美月は、毎日、都に通うことにしましたひとりじゃ危ないと言って、お兄ちゃんも一緒です
割と暇です、うちの左京(さきょう)兄
先月、ふたりと沢山の人で守った都は、もうすんごいボロボロです
我が家の押し入れの奥に入っているお布団の比ではありません

由一おじさんの言うには、遷都をする案もあるそうですが、それは難しいらしいです
こう見えても京はものすっごい結界に守られているそうなんです

美月が「え、これで？」的な軽率な発言をしてしまったら、おじさんは苦笑していました

それはともかく、左京お兄ちゃんは本当に無口です
たまに、口の上唇と下唇がくっついたのかな、と心配するほど無口です
「それでね、夕花さんが言うには、美月の弓はもう指で射るんじゃなくて、飛べ、と思ったら飛ぶんだって、すごいよねっ、想像力の問題なんだってさ」
「……」
「だから、美月は弓を構えて、あれとあれとあれに当たれーって思えば、それだけで当たっちゃうんだってよ、ほたるさんの代がそうだから、美月もそうなんだってー、なんか色々楽しくなってきちゃうよね」
「……そうか」
これです
美月が十回くらい話しかけて、ようやく相槌を打ってくれます、いわば美月の独壇場です
何でそんなに眠いんでしょう
夜更かし？　徹夜で何しているの？　人には言えないこと？　ひょっとして毎日お月様の形が変わるのは、お兄ちゃんが動かしているんでしょうか
なるほど、眠いのも仕方ないです
誰でも、人には言えない苦労があるというものです

美月は都に隠れている鬼を退治しているときに、お兄ちゃんに言ってあげました
「大変だね、でもちゃんとした仕事だものね、頑張るのよ」
「……ああ？」
そう言って、お兄ちゃんはうなずきました、頑張れ左京お兄ちゃん

〜〜

都の人は、美月に結構厳しめです
お兄ちゃんがグレた烈くんに誘拐されたので、きょうは美月ひとりです

美月は京の都を歩き回るのが、好きです
都には色んな男の人がいます、たまに女の人もいます
家を壊された男の人や、家族を鬼に討たれた女の人、娘を失って美月に構ってくれる人もいます
美月が壬生川の家紋を身につけているのを見ると、途端に物凄い勢いで怒ってくる人も大勢います
よく石を投げられます、罵られます、男の人が数人がかりで美月をさらって身代金を請求する計画もあったそうです、由一おじさんとそのお付の人が言っていたのが聞こえました
美月はとても強いのに、みんな外見で判断するみたいです
都の人はなんだか、パパみたいにどこか遠くを見ています、だから嫌われても守ってあげたくなります
これって母性本能？　やっぱり美月は一人前の京美人なのね！
少しヒロインっぽさを、前面に押し出してみました

ある人が言うには、都がこんな風に荒れたのは、壬生川（みぶがわ）と朱点童子が戦争を続けているから、だそうです
由一おじさんは、朱点童子は都を壊したいんだけど、壬生川がそれを守ってくれているんだよ、と言っていました
美月はともかく、みんな仲良くすればいいのになあ、と思いました、楽観的です、美月も都のみんなも頑張れ頑張れー

よし、たくさん書きました
正確には、これでぴったり三日分です、思い出しながら一気に書いたのはナイショです
美月偉い、超偉い、壬生川平和賞を授与される夢を見ながら寝ます、明日起きたら作ろう、賞状を自分でむなしいと思ってはいけないゾ、美月

というわけで、おやすみなさい！

第十一話－17　「暴虐」　1026年5月後編

＜虚空の部屋＞

生きている事が奇跡としか思えないほどの、大怪我だったらしい
月見(つきみ)を背負って壬生川門(みぶがわ)前で倒れている虚空(こくう)を発見したのは、イツ花(つか)ならぬ大照天昼子(いい)だったという

今ではこう思う
この命は、月見が最後に囁いた遺言によって、繋ぎ止められたものなのだろう、と
これも、ひとつの呪いの形なのだ

しかし、命以外の全てを失ってしまった
喪失感は虚空をその名たらしめる
もう彼には、なにも、ない

虚空は酒の無くなった瓶子を畳に投げると、重い腰を上げて、障子を開いた
あれから一週間も経っていないのに、こうして屋敷をうろつきまわれるくらいにまで体は回復してしまった
何かの冗談か、と思う

「いっそ、全てが夢であればな」
この全身の痛みがなければ、そう思い込めたかもしれない

「あ、パパ！」

台所からひょっこりと顔を出したのは、青い髪の一人娘だ
「あ、なに、またお酒？　もう、これで終わりだからね！」
美月（みつき）はそう言うと、一本の瓶を棚から取り出して、虚空の胸元に押しつけてきた
「もう買い置きなし！　これから都に行ってくるけど、買ってきてあげないもんね！」
「……都に、行くのか」
虚空は暗い顔で、瓶子を受け取る
「やっぱりぃ……反対？」
まだまだあどけない上目遣い
やはり甘えたい盛りの年頃なのだと思う
「……ああ、人間などに手を貸しても、仕方の無いことじゃぞ」
「そう言われても、困っている人を、見過ごせないし……平気平気、みんな美月のコト好きだから、優しくしてくれるもん、美月ちゃんとっても人気者なのよ」
そう言って、まだ1ヶ月才の美月は明るく笑う
作り笑顔のようには、見えない
「そうか」
頑張る美月を見るのは、辛かった
「……術書はよく学んでおくのじゃぞ」
自分の部屋へと引き返す虚空の背に、お大事にねー、と娘の声が届く

美月を見るたびに、月見の笑顔が脳裏にちらついた
一生懸命生きて、他人のために働いても、死んでしまえばどうしようもないだろう
本当に、どうしようもない
槍も投げ出して逃げ帰ってきた自分だけが生き残った、どうしようもないことだ
悲観的になっているな、と思う

部屋に立ち入ろうとするとき、ひとりの娘が虚空を、後ろから呼び止めた
「……何じゃ、四夜子」
緩慢な動作で振り返れば、柱の影に隠れて、幼子が目を臥せっていた
「あ……あの……烈さま、が……」
「何じゃ」
「その……うぅ、だ、大丈夫……うん……」
黙って眺めていると、なぜか涙ぐんだり、決意を固めたりする

巫女の格好をしたこの紫の髪の娘の名は、葦切四夜子、れっきとした水神のひとりである

「……おぬしも、難儀なことじゃのう」
五月の初めに目を覚ました虚空は、まずイツ花を呼び寄せた

地獄で新たに知った事実の追及であり、この期に及んでまだ手の内を全て明かしていなかった神と、半死半生ながら今一度勝負をしようと思ったのだ
だが、そこに現れたのは少女だった
美月に連れられた葦切四夜子は震えながら、昼子様がどこに行ったのか自分にも分からない、自分は何も分からないままここに連れてこられたのだ、と言った
その時すでに、イツ花と夕子は人柱ならぬ神柱を残し、姿を消していた
ふたりの太照天だけではなく、屋敷から神という神も、また
虚空が出来ることは、もう何も無かった

「別に、取って食ったりはせぬ」

それでも本当に少しだけだが、もしかしたら、と口を割らせようとしたこともあった
「……取って、食われるんですか……私、貝だけに……っ」
その結果が、これだ
殻を剥奪されて、見知らぬ屋敷に仕えさせられた四夜子は、決して虚空の一定以上の範囲内には近づいてこなくなった
「……余に、何か言うことがあったのではないか」
食事の支度や炊事洗濯をしてくれるだけ、まあマシと言えなくもない
「あ、それが……あの、烈さまが、その……」
「……」
仕方なく、待つことにした
縁側に腰掛けて酒を煽る虚空に、四夜子が途切れ途切れに言ってきたのは、つまりはこういうことだった

烈が左京（さきょう）を連れて、ふたりで紅蓮の祠に出陣した

「そうか」
虚空はうなずいた
言い終わっても、四夜子はその場から離れようとしない
「まだ何かあるのか」
「え、えと……は、はい、その……」
段々腹が立ってくる
自分には何も出来ないだろうと、こんな童を身代わりに置いたイツ花も、その手のひらの上で踊らされている四夜子も、それと同類の自分も
「早く言うが良い」
「烈さまが……その、こ、“虚空のバーカ”って伝えるように、って……ひっ」
無言で立ち上がった虚空から、悲鳴を上げて逃げてゆく四夜子

「……くだらん」
虚空は酒を片手に自分の部屋に戻った

それからしばらくして、ふいに右手の指輪が重く感じ、何度か外そうと思ったがそれは強く虚空の指に食い込むばかりであった
今思えば、烈に言及されたとはいえ、竜子（たつこ）の幸家（こうけ）に連なる血だと教えたのは、自分のただのうさ晴らしだったのかもしれない
出生の秘密を知った少年は、母を二度亡くしたのだ

愚かな男だな、と我ながら笑った
諦めて、浅い眠りにつくことにした

＜紅蓮の祠＞

一方その頃、
「ぐわはははははは！」
大口を開けて、刀を掲げながら笑う烈、もうそれは爆笑の域に達していているように見えた

先月、御三家に置いてけぼりにされた烈は、慌てて追いかけたものの、大量の鬼と戦っているうちに月が暮れてしまった
竜子と月見が死んだことを知り、さらに竜子が自分の実の母だと虚空の口からぽろっと聞かされた烈は、色々紆余曲折して挙句グレた
面白いほど非行に走った
しかも形からだ、出されたご飯にはとりあえず「こんなマズイ飯が食えるかよ！」とことごとく言うし、極悪非道と背中に刺繍して

いる
あと言葉遣いが汚くなった

面白いな、と思っているのは左京
「どうだい左京、今度は虚空お兄さんを、いや、あの、こ、虚空を置き去りにしてやったさ！　ブワハハハハ！」
「……そうだな」
全くもって、悪になりきれない男だと思う
本当にあの母親の息子なのか、とも思う
薙刀を担ぎながら、ふと気づく
「……そういえば……俺、これが初陣か」
さすがに眠そうにするわけにはいかないので、薙刀を構えて、それなりにやる気を出してみた
別に捨て鉢になっているつもりはない

「よーしそれじゃ左京！　図に乗ったつもりで、ぼくについて来いっ！」
図に乗っているのはお前だ、と思うが、面倒なので口には出さない
「……美月も頑張れ、って……言ってたけどな」
妹の前で格好良く見せるだけの経験を積んでおくのも、悪くはないだが、何となく、しらけてしまうのだ
「……」
烈も美月も、何も分かっていないんだよな、と思う
戦いも町に行くのも、そう熱くなることではないのだ
淡々とこなせばいい
人は人、自分は自分だ

「あん？　どうした左京？」
「……いや」
言うと怒るのは分かっているので、口には出さない

分かっているのは、恐らく、父一人なのだろうと思う
腹を立てるようなことも、悲しむようなことも、母が死んだときにすらなかったのだから、ないのだろう
「……美月、無茶してなきゃいいけどな……」
左京は張り切る烈のあとを、まるで老人のようなくたびれた足取りで、着いてゆく

＜壬生川屋敷＞

屋敷は死んでいるように静かだった

虚空はほとんどの時間を、寝ているか、本を読んでいるか、酒を飲んでいるかのいずれかで過ごした
家事が済めば、四夜子は自分の部屋に貝のように閉じこもってしまう
美月が帰っていなければ、この屋敷は人の住んでいる気配すらなかっただろう

「……」
考え事をするには、山の中のように適している

次第に美月は都に泊まるようになり、帰ってくるのも二日や三日に一度となっていた
別段、どうということでもない
都に居るほうが楽しいのだろう
美月の勝手だ、と虚空は思う

「……血に酒が入ると、栄養素が体中に行き渡りにくくなり、傷の治りが遅くなる、か」
それも自分の勝手だ
少年がたったふたりで、迷宮に挑むのは、血沸き肉踊る冒険だろう
少女がその選ばれた者の力で、困窮した都の人を鬼から守るのは、これ以上ない英雄的で美しい行為だ

「余が、止めるようなことではあるまいに」
酒を食らいながら、ひとりごちる

厠に立った帰り、玄関の方から物音がした
真夜中、犬も寝静まる時間である
「……何じゃ」
寝巻きのまま様子を見に行くことにした
イツ花の在住ならともかく、今屋敷にいるのは自分と四夜子のふたりなのだ、簡単な鬼の侵入も許してしまうかもしれない

夜目を利かせながら、体を揺らすと、玄関で小さな影がうずくまっていた
駆け足をしているような、荒い息遣いがした
「……美月か？」
暗闇が震えた
影は衣擦れの音を立てながら、起き上がった
「あ、ぱ、パパ……起こしちゃった、ごめんね、あはは……」
毎日酒に溺れていた虚空ですら気づいてしまうほど、その笑い声はまったく気持ちが入っていなかった
様子がおかしい

いっそのこと、気づかなければ良かったのだと思う

「何か、あったのか」
虚空の問いに、再び美月が震えた
「え……ううん」
それきり、美月は黙った
夜に目が慣れてくる
虚空は思わず目を見張った
「……美月、おぬし」
「あ」
美月の衣の帯が無く、はだけそうな前が手で押さえられ、白い足が露わになっていた
その紺色の小袖は、泥で汚れていた
「ころんじゃった」
その細い首には、青痣が見えた
鬼の仕業では、ない
誰も居ない暗い屋敷の玄関で、痛みに耐えてうずくまっていた美月の顔が、虚空の頭に火花のように浮かんだ

視界が赤く染まった

虚空は玄関に飾ってあった刀を掴むと、藁草履を履いた
その腕を、美月が掴む
「パパ、どうしたの、パパ、やだ、勘違いしないでよ」
抑揚のない声で、美月が言った
「放せ」
口から出たのは、我ながら寒気のするような声色だった

「どこにいく気なの、パパ！」
「首を刎ねてやるわ」
「やめてよ、そんなの、美月、なんでもなかったんだから！」
ふざけるな、と言いたいのを堪えた

「放せ」
虚空は力ずくで美月の細い手を振り解こうとするが、美月は放さなかった
「やだ、やだ！　だって放したら、今まで壬生川がやってきたことが、全部むだになっちゃうもの！　そんなのダメなんだから！」
美月が叫ぶ
「パパに、人を殺してほしくなんて、ないもの！」
やはり人間がやったのだ

虚空が美月の肩を掴んだ
「誰に殴られた、どんなやつが相手じゃ、夜盗か、武士崩れか」
「蹴っ飛ばして逃げてきたんだから、本当にたいしたことないんだもの、へっちゃらよ」
言い張っているだけではなく、それは誠のことだろう
人間が美月をどうにかしようなどと、蝶が虎に害をなすようなものだ
だが、バカな子だ
月見に似て、あまりにも優しすぎる
彼女は口を割りはしないだろう
「そうか」
虚空は正面から美月の目を見た

空の青を切り取ったような瞳の中に、中にと入り込んでゆく
その目が水晶玉のように、夜の光景を映し出していた
都からの帰り道だ、藪の中を走る細い道を美月が歌いながら歩いている、そこへ草むらの中から突然男が現れた、叫ぶ美月に、襲い掛かる影が見えた、影はみっつ、よっつ、いつつ……凶刀が瞬いた
突然、その映像がぶれた

「や、やだぁ！」

美月が虚空を突き飛ばした
「やめてよ……パパ……」
美月は顔に手を当てて、その場にしゃがみ込みながら、すすり泣いていた
声も立てず、まるで大人のような、痛々しい泣き方だった

愕然とした
壁によりかかりながら、虚空は我に返って、そんな娘を見つめる
自分は一体今、何をしようとしていたのか

手から刀が落ちた
「美月」
これ以上、失うのか
抱き寄せようとした、その手がはねのけられた

「……温かくして、寝るか」
美月はまだ、しゃくり上げていた
気の利いたことなど、何も言えなかった
「……美月は、何も心配しなくていいからな」

空虚な言葉だ

その時、ようやく虚空は気づいた
自分は地獄で確かに死んでいたのだ
泣く美月を見ながら、月見の呪は残酷じゃな、と虚空は思った

烈と左京は五月の終わりに、鳴神小太郎を打倒し、意気揚々と屋敷に戻ってきた
烈は奥義燕返(つばめがえ)しを編み出し、左京もまた充分な経験を積んだので

あった

第十一話ー17　「暴虐」　1026年5月後編（後書き）

出陣・紅の祠（烈・左京）　訓練・虚空↓美月

第十一話－１８　「左傾」　１０２６年６月前編（前書き）

虚空　１才
烈　７ヶ月

左京　４ヶ月
美月　２ヶ月

第十一話－１８　「左傾」　１０２６年６月前編

＜道場＞

槍先が宙に舞う
虚空の突き出した槍を半身に避け、烈がその先端を木刀で叩き切ったのだった

「燕返し！」

切っ先の返しが、虚空の目にも捉えられなかった
得意げに言うだけのことはある、と虚空は槍を引きながら思った

格子窓から日の差し込む道場で、観覧していた美月が手を叩いた
「烈くんすっごーい！」
「へへっ」
木刀を掲げて、烈はあどけない笑顔を浮かべた
「すごいな、それは」
「でしょー！　ぼくが考えた奥義なんだよ！」

照れて頭をかいていた烈が、突然我に返る
「ま、まあ、これで虚空も安心して隠居できるね」
腕組みしてそっぽを向きながら、不機嫌を繕ってつぶやく
竜子の風の遺伝子と、柚子の火の遺伝子を完全に継承した烈は、歴代の幸家の中でも非常に高い資質を開花させていた
特に、史上二人目となる＜梵ピン＞を習得したのは、大きいことだった

「烈くんかっこいー」
「ふっふーん」
きゃいきゃいと美月がはしゃぐ横で、左京（さきょう）が漏らす
「……鏡返（かがみがえ）しの、模倣か？」
「ち、違うよ！」
「え、パクリなんだ」
美月がショックを受けたようにつぶやいた
「違うからホント、ホントに違うから！　ホントに！」
その様子に背を向けて、虚空は先の折れた槍を槍柵に立てる

「あ、虚空、今月は美月の初陣だったよな？」
「そうじゃのう」
思案を巡らせるように道場の天井を眺める虚空に、烈が乱暴に言う
「じゃあ親王鎮魂墓にいこうぜ、あそこなら中ボスも沢山いるし、余った時間でおどろ大将狩りも出来るし」
「分かった」
烈が壬生川の方針に口出すようになってから、約一ヶ月が経った

若さゆえか浅慮な部分もあるが、幸家の人間だけに、分不相応というわけでもないようだ
動機はともかく、自立したのは良い傾向なのだろう

「よーし！」
美月は兎が跳ねるように立ち上がると、壁に掛けられている薙刀を掴んだ
「なんだ」
「左京お兄ちゃん、稽古しよ、美月たちも稽古！」
「……えー」
全身の隅々から面倒臭ぇというオーラを放ちながら、左京が渋々起き上がる

「左京、美月に負けたら一ヶ月、昼寝禁止だぞ」
「死ぬ死ぬ」
「いや死なないでしょ！？」

左京が選んだのは、虚空一閃という名の薙刀を模した木長刀であった
「……名前が面白いから、買ってきた」
左京は虚空を見て、口元を綻ばせた
「虚空一閃」
「……何度も言わんでいい」
左京も、意外と子供っぽいところがあるようだ
「よーし、いっくぞー」
道場の真ん中に陣取り、美月は薙刀を大きく掲げる
「まるで箒を振り回す乱暴者みたいだ」
虚空も同感だ
左京は悠長な動きで、美月に薙刀を向ける
烈がはやし立てる
「美月ー、薙刀の使い方なんて、知っているの？」
「うん、おととい、ぽんと自警団の人に習った！」
自信満々に言う
そーかすごいながんばれ、と烈が片言な言葉で応援する

「かっくごー！」
その時、上段に構えた美月が、左京に一歩左足を踏み出す
打ち払う
樹皮を無理矢理へし折るような鋭い音
直後には、左京がこてんとその場にひっくり返っていた
「は？」
「ぬお？」
目を疑う光景だった

「美月流薙刀術ー！　わはー、って、あ、あれ？」
事情が飲み込めないのは美月も同様だったらしく、薙刀の先で左京の足をつつきながら、首を傾げる
「お、お兄ちゃん？」
わざと負けてくれたと思っていたのだろう

烈が静かに＜お零＞を唱えると、左京はまるで何事もなかったかのように立ち上がった
薙刀を拾い、つぶやく

「油断した」
気まずい空気が流れた
「だからって、２ヶ月児の一打をまともに浴びるなよ、油断しすぎだよ」
「……もう一回」
「う、うん」
何だか悪い事をしたような気になりながらも、美月は薙刀を再び構える

今度は左京から仕掛けたが、美月に足を払われ、体勢を崩したところでその横っ面を鞭のようにしなる一撃で弾かれた
一本アリ、である

「よ、よわっ」
言った直後、烈がしまった、と口を押さえた
「……」
「……」
やっちゃった感が道場に漂う
「え、えっと、それじゃあ明日の出陣の準備しよっか？　ね、ね、

ね」
「もう一回……もう一回だ」
その目に静かな闘志が灯ってゆく
「ほ、ほら、薙刀って男女不平等な部分があるしね！　オトコノコが圧倒的に不利なんだって、よく聞くもんね！」
「……俺は本職の薙刀士だ」
「う、うん……みつきゆみつかい……」
美月のフォローは、逆効果だったようだ

それから、慎重にかかってきた左京の小振りを打ち払い、美月は左京の胴を薙ぐ
再戦に継ぐ再戦、美月は一本を取り続ける

「……こうなったら……双光斬を解禁するしかあるまい、悪く思うな……」
「え、えええぇ？」
虚空はため息をつきながら、道場を後にした

～～

何度も何度も、左京がぶっ飛ばされ続け、ついに日が暮れてしまった
道場の土間に腰掛けながら、左京はうつろな目で裏庭を眺めていた

「……」
時折、腫れた横顔を手で押さえながら、ひとりで笑っている
離れて見守っていた烈と美月は、何だか寒気がしてくるようだ

「さすがにショックだったんだな、妹に完膚なきまでに負けるのは」
初陣前の、それも別職の娘に叩きのめされたのだ
ぼくだったら立ち直れないだろうな、と烈は他人事のように思う
「お、おにいちゃん……」
美月がほろりと涙を流した

その横を、とととっと小さな使用人が通り過ぎ、左京の元に駆け寄ってゆく
「あ、あの……これ……」
四夜子が小さな体をさらに縮こまらせながら、左京にお盆を突き出す
「……」
「その……ほら、あの……美月さまは、太照天さまの、お嬢様でいらっしゃいますし……」
「……うん」
左京は湯飲みを受け取り、湯気立つ緑茶を一口すすった
暖が骨身にしみるようだ
「元気、出してくださいね……ほら……うん、大丈夫」
「……うん」
緑茶が少ししょっぱく感じた、初夏の夕暮れだった

第十一話ー１８　「左傾」　１０２６年６月前編（後書き）

第十一話－19　「右月」　1026年6月後編

＜早朝＞

虚空（こくう）は朝早く起き出し、蔵の中で槍の見定めを行っていた
薄暗い蔵の中にも、小鳥のさえずりが響いてくる
そんな穏やかな朝とは裏腹に虚空の表情は陰鬱だった

「……とりあえず一番まともなのは、このさばえノ槍と言ったところではあるが……」
堅いし長い、その上重心も安定している、まさに職人の作り出した名槍と呼べるだろう
だというのに気に入らないのは、あの剛槍山嵐の感触を覚えているからだ
手首をひねるごとに巻き起こる旋風
この屋敷にも少なくない属性武器と呼ばれる神器の一種だが、あの槍はもう無い

地獄に置いてきた
違う、忘れて逃げてきたのだ

もしかしたら、あの槍こそが虚空の想いそのものであり、覚悟や生きるための意志であったのではないかとも錯覚してくる
どの道この手には残らなかった
「桃木の槍と……念のために、二本持ってゆくか」

今さら髪もいない墓で、まったくの手間になりそうではあったが

カビの生えたような思いでいると、どこからか鋭い風切り音が聞こえてきた
顔を上げて耳を澄ませば、それは道場の方からだ

槍を抱えて外に出て、そちらに向かってみると、庭で赤い髪の少年が舞っていた
勿論左京ではない
鞘から抜き放たれた白刃は、朝日に反射してきらめきながら、見えない標的を古寺の障子のように破り捨てている
と、そこで烈(れつ)が虚空に気づいたようだ

見られているのが恥ずかしいのか、鞘に刀を納め、額の汗を手の甲で拭いてぶっきらぼうに口を開く
「何」
わずかに息が切れていた
評する
「早いな」
「あんたには、もう見えないでしょう」
烈は表情を変えず、邪見に言う
「出陣前に、疲れ切る、なんてことはしないよ、もうぼくは子供じゃない」
「ああ」
内心で静かに認める
確かに虚空には烈の剣さばきはもう見切れない
彼の母親の体術を、最後まで見切れなかったのと、同じくらいに
「美月(みつき)はともかく、左京(さきょう)が起きるまではまだだいぶかかるでしょ、それまでここにいるよ」
「分かった」
素直にうなずく
稽古相手になろうか、と考えてみたが、それこそ烈の歯牙にもか

からないかもしれないと思い直した

烈に背を向け、その代わりというわけではないが、胸中でつぶやく
（慢心するのは構わんが、それが崩れても尚、不敵で居られれば良いがな……）

自分にはできなかったから

＜親王鎮魂墓＞

「初陣！　初陣少女・美月！」
「……よく分からない」
「次陣！　次陣少年・左京！　世界を導く、一筋の光！」
「指差されても」
騒がしい一派である上、正確に言えば美月も左京もこれが初陣ニ陣目というわけではない
「昔の人はすごいよね、こんな大きなお墓作って、よっぽど愛されていたんだね、ここに眠る王子様」

それはそうと、初めて家族全員で出陣したことが嬉しいのか、美月はいつも以上にはしゃいでいる

「違うって、二度と出てこれないように奥深くに魂を閉じ込めたんだよ」
「悪いなー！　昔の人！」
「……だから、もう死んだのさ」
「あ、そっか」

「え、納得するの？　美月」
美月を中心に、和やかな雰囲気が広がる
だが、迷宮の奥であまり団欒しているわけにもいかない、一同は足を進め始めた
「美月、危なくなったらぼくが守ってあげるからな」
「うんっ」
満面の笑みで烈にうなずく美月に、左京が皮肉げな眼差しを向ける
「……じゃあ、危なくなったら俺は守ってもらおうかな」
「……左京、お前」
「どうかこのひ弱な兄を御守りください美月サン」
「何かそれスゴイ嫌だぁ！」
ふてくされている左京を、美月が笑いながら睨む
軽足大将や黒ズズ大将のうろつく地下を抜けて、すぐに四面の階段にたどり着いた
四方から抜群の連携攻撃を仕掛けてくる土偶器を、烈や美月が楽々と葬り去る
「……いやあ、さすが、お強い美月サン」
「お前、これからもそのキャラで行くことになるぞ……」
「……へへへ」
薄ら笑いを浮かべて、左京は肩を竦める
「お、おにいちゃんが腐ってゆく……」
冷や汗をかきながら、難なく土偶器を仕留めた美月が何だか悲しそうにつぶやいた
～～

実際のところ、
美月の成長は常軌のそれを、全くもって逸していた

先導する若者たちを、虚空は緩々と追いかける
（……太照天の力、イツ花があんな阿呆だから侮っていた、というわけではないが……）
馬鹿げている才能の前には、何かもが空しくなってしまいそうだ
左京が絶望するのも無理は無いとまで思えてくる、何と言っても、美月はたった数戦で左京の最大体力を追い抜いた
それどころか……もしかすると……
（いや、さすがに親馬鹿か？）
今まで、門司（もんじ）と伽子（とぎこ）、瑞穂（みずほ）とほたるなど、年長者をあとから来たものが能力の面で上回る事態はいくつかあったものの、ここまで極端な例は初めてである

「……迷路とか、面倒の極みだな」
「あ、じゃあこうでっかい金槌で、壁を叩き壊していくってのは計り知れないナイスアイデアじゃない！？」
「……はいはい、面白い面白い」
「うわ何かおにーちゃん冷たいっ」
泣き真似をして、美月は一生懸命場を盛り上げているようにも見える

左京に出来て美月に出来ない事が何もなく、美月に出来る事が左京に出来なくなったとき、一体彼は何を思うのだろう
それすらも、血筋の一言で片付けられるだろうか

（……案外、もしかすると、美月のあの性格まで、左京は煩わしく

思っているのかもしれないな）
　考えすぎだとは思うが、虚空はそう思わずにはいられなかった
　烈の＜白鏡＞と＜黒鏡＞により迷路を抜けた一家は、アガラ封印像を易々と打ち倒し、金色館に足を踏み入れた

～～

　おどろ大将を狩り進みながら、四人はとりあえず親王の待つ鎮魂の間を目指す
「館の部屋の中心にワープゾーン、っと」
　手元の鏡に目を落とす烈の横で、美月が左京の体調を気遣っていた
「お兄ちゃん、怪我とか、平気？」
　素直な優しさを、左京は拒んだ
「……自分の心配、しな」
「あ、うん、分かった、ごめん」
　笑顔を取り繕う美月に、左京が舌打ちをする、惨めな思いだろう
　虚空は知らずにため息をついていた、それに気づいて、やはりため息をつく

「烈、あれのようじゃな」
「あー、そうだな」
　広間の立ち並ぶ広間の影に、丸い床が青白く発光しているのが見えた
　全員でその装置の上に乗ると、わずかな浮遊感と共に、見知らぬ空間に転移が完了した
「鎮魂の間、だね」
「おう、ぶった切ってやんよ！」
　意気込むほどの相手ではないだろうが、初めてボスに挑戦する烈

と美月は瞳を輝かせる
左京は相変わらず、後ろの方で面倒臭い面倒臭いとうなっていた
「いっくっぜー」
「おうー」
美月が烈の口調を真似して、黄色い声を上げる

騒がしい闖入者に気づいて、親王が音も立てず見上げるほどに巨大化し、剣を振りかぶった
兄を祟り、憎悪を胸に鬼として蘇った崇良親王が、壬生川一族に襲い掛かる

虚空は戦闘のさなかだというのに、弟を屠った兄のことを考えていた
烈が＜梵ピン＞を唱え、左京が＜石猿＞を唱え、美月が力士水を振りまく
優秀すぎる弟を持ったが故の、兄の愚行、意識したつもりはないが、自然と左京と美月を見てしまう
（もしかして、月見も余にそんな感情を抱いておったのか……？）
そんな素振りはずっと見せなかった
いや、本当はただ虚空が気づかなかっただけなのかもしれない、もう二度とは戻らない
親王の矛が迫ってきて、虚空の意識は戦いへと引き戻された

「ぐっ」
さばえノ槍を立てて矛を受け止めたものの、その時の衝撃によって背中を壁に強くたたきつけられてしまう
「え、パパ！？」
声を上げはしないものの、烈が虚空を一瞥する

衰えているのか、鈍っているのか、もうこの程度の攻撃が避けきれなくなってしまったことに、虚空も自嘲を禁じ得ない

「美月、余に構うな」

「う、うん……連弾弓（れんだんきゅう）！」

美月の放った三連射が親王の頭を貫く

（鬼には、容赦なし、か）

このあどけない青い相貌をした少女が、樹木ほどに大きな鬼に致命打を放てるのだ

人も我らを恐れるはずだ、と肯定してしまう

その昔と言うほど過去ではないが、虚空は槍の開祖となった初子を天才であると認め、追い抜こうと努力をしていた事があった

しかし、目の前にいる娘は、そんな周囲の様々な小さな想いを全て呑み込み、存在していた

人が壬生川を思うように、左京や烈や自分もまた、美月を異質であると感じているのだ

本当に朱点童子を討てるのは、美月のような特別な存在でしかなかったのかもしれない

力任せに放った親王の矛を細い刃で流し、烈が叫ぶ

「燕返し！」

烈が親王の手首を切り落とし、続けざまに胴を薙ぐ

そして、鬼の眉間を美月の矢が割った

陶器を鈍器で粉々に砕いたような澄んだ音が響き、親王はうめき声を上げながら黒い砂と泥の塊へと崩れてゆく

「やったーっ」

美月が人差し指と中指を立てながら、明るく笑う
最後まで前に出てこなかった左京が烈の肩を叩いて、何かをつぶやく
烈は形容しがたい複雑な表情をしながら、美月を労っていた

7ヶ月の烈、対して、2ヶ月の美月
そのふたりの素質の溝は、もはや対岸も見えない広大な川へとなってしまっていたのかもしれない
無邪気に笑う美月は初陣で、ついに烈の最大体力をも上回ったのだ

第十一話ー19　「右月」　1026年6月後編（後書き）

出陣・親王鎮魂墓（虚空・烈・左京・美月）

第十一話ー２０　「真名」　１０２６年７月前編（前書き）

虚空　１才１ヶ月
烈　８ヶ月

左京　５ヶ月
美月　３ヶ月

第十一話ー２０　「真名」　１０２６年７月前編

竜子と月見が討ち死にし、暗くなった我が家を立ち直らせたのは
美月の無邪気な明るさだったというのに
今度はその美月自身の類稀なる才能によって、一家の心が離散し
てしまうかもしれないことになるとは、皮肉なものであった

真昼間、蝉の声が鳴り響いている
「……うーむ」
虚空は扇子を扇ぎながら、うだった声でつぶやく

烈は元服の儀を辞退してまで道場で剣を振り、左京はどこかで昼
寝でもしているのだろう、美月はまたいつものように京へと出かけ
ている
悲観に暮れるでもなく、その事を虚空は淡々と認める
居間の対面に座っている大柄な武士を含めて

渡辺「ふむ……若造、まことにあの時の坊主か、面妖なものよなあ」

壮年の大男はそう言って、太い眉を寄らせて難しい顔をする
坊主と若造の区別が付かなかったものの、虚空は静かにうなずいた
「昨年の、夏の選考試合以来であったな」
「フハハハ、春の試合はお主らが出てこなかったお陰で、存分に稼
がせてもらったわ！　いやまったくありがたい」
「まあ、物価も上がる一方であるしな」
「それにしても、ぬし、前に会ったときに比べて、何か、こう、情
熱を失ってはいまいか？」

「死地を体験すれば、落ち着きもするわ」
適当に流し、虚空は卜部渡辺連合の大将に来訪の意図を尋ねる
「まさか、礼を言いに来たわけではなかろう」
「うむ、しかし礼も言いに来た」
「……そうか」
無駄に律儀な男は、無駄に頭を下げ、それから口を開く
「拙者は帝からの使いで参った、壬生川（みぶがわ）が朱点との決戦に敗北したとの風説が流布してな、真偽を確かめに訪れたというわけだ」
渡辺はひとりで大仰にうなずき、何も言わない虚空の態度を察して続ける
「本当の事なのだな」
「まあ、な」
人間相手にそれを認めるのは、少しばかりこたえたが、虚空は首肯した
「なるほど、分かった、帝にはそう伝えよう……にしても何だな、壬生川の神通力も有限なのだな、そなたのところの娘が金時に力比べて負けて、大層悔しがっていたぞ」
一瞬、何を言っているのか分からなく、虚空は聞き返した
「……美月が負けた、じゃと？」
「うむ、もう少しで帝都防衛軍が百人抜きされるところだった、寸前で武士の名誉は保たれた」
「よく分からんが、九十人近く小娘に抜かれた時点で、名誉も何も残ってない気はするが……」
額に汗をかく渡辺に、ふと虚空は気になっていたことを尋ねてみた

「そういえば、都には阿部清明という男が、おったな」
「ああ、清明さまだな、拙者らの実質総大将よ」
「都を陰陽の陣で守っているのも、やはりそいつか……強いのか、その男は」
「ああ強いぞ、恐らくぬしと同じくらいには強い」
「人間が、か……」
神の中でも特に高位の者の血を受け継いだ虚空と、同等の力を持つ人間が居るというのは、にわかに信じられる話ではないが
「……その者は、朱点童子を退治しには行かないのか？」
「無理だな」
渡辺は断言した
虚空は更に尋ねる
「動けば、不都合でもあるのか？」
「それもあるのかもしれないが、清明様は何より鬼を撃退は出来ても、倒すことに長けてはおらん、斬り殺すなど出来んお方だ」
疑惑に眉をひそめる虚空に気づいたのか、渡辺は笑いながら言った
「人の世には制約が多いのだ、なあに、もしもぬしらが再び敗れても、いざとなれば拙者ら頼満四天王が鬼が島に挑んでみせよう！」
そう胸を張る渡辺は、何度か鬼と切り結んだこともあれば、切り札の＜雷獅子＞の術すら使いこなす猛者ではあった
しかし、あの地獄の深さを、潜った事のないものは知らないのだ
「まあ……いずれまた地獄に攻め入る時が来るだろうが……」
虚空は濁しながら、視線を落とした
〜〜

渡辺が帰ってから、虚空は手持ち無沙汰に屋敷をうろついていた
部屋に帰って術書を読み解こうと思ったが、どうにも落ち着かなかった
烈も葦切四夜子も、屋敷には居ないようだ

「帝の耳にまで届いているとは、これはもう京中に広まっておるのじゃろうな」
結局は、庭の見える居間のいつもの縁側に腰を下ろし、虚空はあぐらをかいた膝の上に頬杖をつきながら、つぶやく

「美月が襲われかけた一件も、そのせいか」
鎮痛な面持ちで思う、自分は一体何をしているのか
「一刻も早く朱点童子を退治しなければ、都はあの茨城大将の攻撃により滅びかねない、それは分かっておる……じゃが、む？」

水音が聞こえて、そちらに顔を向けると、池から波紋が広がると同時に長い黒髪がぱっと咲いた
一瞬の出来事だった

息継ぎをするように頭を上げ、浅黒い肌をした女が顔を出す

真名「ぷはぁ、やーっと出てこれた……もう、あいつらったら、ほーんとしつこいんだから」

見た顔だ、そうそう忘れることも出来そうにない
美しい顔立ちの娘は池から体を引き抜くと、虚空を見つけて笑顔で手を振ってきた

「久しぶりね、元気していた？　元気……ってこともないか、変な

こと聞いちゃってごめんね」
「……ああ、余らのことを、知っておるのか」
姉と妻を失ったことを言っているのだと気づき、虚空は思わず居住まいを正した
この痛みは未だに慣れない
「ええ……あの子も、酷なことをするわよね、痛み分け、かな」
濡れた髪を絞りながら、敦賀ノ真名姫は困ったように微笑んだ
その容姿がなぜだか竜子の痛ましく俯く面影と重なって、虚空は嫌な事を思い出して目を伏せた
「まあ……そういうことじゃ」
「よし、こんな感じかしら」

対して真名姫は子供のように笑うと、虚空の見ている前で腕を一振りして、装いを新たに、見慣れたイツ花の巫女服へと変えた
正直言って、その褐色の肌には少しも似合っていなかったが、憑き物の落ちたように笑う真名姫の表情は、美月のように澄んで、見ているだけで気持ちがほぐれてゆくようだった

「四夜子の代わりに、今度は私の番、朱点に約束したように、負けてボロボロになった傷をなめて、一緒に大声を上げて泣いてあげようと思ってきたんだけど……」

真名姫は虚空の前に立ち、その頭を優しく撫でてきた

「心の傷までは、なめてあげられないの……ごめんね」
「……」
されるがままで
どうすれば良いのか、虚空には、よく分からなかった

～～

その夜は、真名姫が白身魚の刺身を食卓に運んできた

虚空、烈、左京の三人が顔を突き合わせていれば、寡黙な食事となるのがいつものことだが、この日は真名姫が美月のように、それよりも何倍も自然に場の空気を綻ばせていた

歌いながら、真名姫が次々と手料理を持ってくる

「にんぎょ、の、おっさっしっみー」

箸を付けかけた虚空が、思わず切れ端を落としたのを見て、真名姫は笑いをかみ殺しながら訂正をした

「もー、嘘に決まってるでしょ、ウフフ、せっかく綺麗に治った私の肌を、もう誰にもあげたりしないわよ」

「出されても食いたいとは微塵も思わんが……」

うめき声も、真名姫はまったく意に介さない

「あら、烈くん、何だか箸が進んでないみたいじゃない」

「う、うん」

青白い顔の烈は、どうやら真名姫の骸骨姿がトラウマになっているらしいのだが、当人はまったく気づかない様子で片目を瞑る

「烈くんも左京くんも、食べて元気になってね、でないと＜真名姫＞よ」

烈が箸を取り落として、怖ぇ、とつぶやいた

（何だか馴染んでいるようで、その実は少しも馴染んでいないのではないじゃろうか）

他人に物怖じしない真名姫自身の楽しそうな姿に、ほたるを連想せずには居られない虚空である

「美月ちゃんは、どうしたの？」

邪気なく尋ねる真名姫の言葉に烈と左京が顔をこわばらせるが、彼女は気にせず続ける

「きょうは帰ってこない？」

「そうであろうな、京に泊まりじゃろう」

「どして？」

「夜更けに鬼が都に入り込んだ折に、京の戦力では抗いきれない場合、いち早く助太刀をするためのようじゃな」

真名姫は、まったく理解できない、といった呆けた顔をしていた

「人間のために……？　どうしてかしら……」

「そうしたいからじゃろう」

事もなく言う虚空に、信じられない、とつぶやいた

神に利用されて、姉妹に翻弄された壬生川のために、真名姫は本物の味方になってあげると言ったが、その範疇に人間は含まれていないようだった

人間の私利私欲によって死ぬより苦しい痛みと共に肉を刻まれたのだ、当然のことだろう

戸惑う真名姫の様子を眺めながら、虚空もまた、胸中に問いかける

（……何故、じゃろうな）

そうしたいから、なのだろうが、それ以上虚空の口からは何も言えなかった

虚空自身も分からないのだ

第十一話－２１　「真直」　１０２６年７月中編

壬生川家には、様々な人間が訪れた
虚空が好む好まないに関わらず、人は屋敷を訪れてきた

～～

臥蛇丸の代から懇意にしているという、ある漢方屋の小間使いが
「先生が、ウチで一番高い薬だけど、どうせ鬼に奪われるくらいなら百倍マシだ、って」と言って、紙包みを持ってきた
虚空はそれを受け取った

～～

幻灯屋の親爺が持ってきたのは、京でも美人で名高かった初子と、その腕に抱きつく佐和が納まっているツーショット写真であった
ニコリともせず、堅物な口調で「この写真には霊力が宿っている、肌身離さず持っていたお陰で、三度の鬼の襲来から、こうしておれは生き残ったのだ」と言いながら、それを巾着に入れ、虚空の手に押し付けてきた
どうしようもない
虚空はそれを受け取った

〜〜

ある日、こんな手紙が壬生川家に届けられた

『日ごろは一方ならぬご厚意を賜り心から感謝いたしております
英雄（ひでお）様のご家族の皆様　ひとえにご自愛ください』

謝辞と結びの言葉だけで書かれた、奇妙な手紙であった

宛名はなく、差出人を示すような目印も何もない、それはそれだけの話だった

英雄の記念像に、三年間毎日欠かさず献花する女が居ると、どこかで聞いたことがあったな、と虚空はふと思い出した

〜〜

それらの声は、壬生川の生きてきた歴史だった
夏が暮れてゆく
風鈴の音色が屋敷に響き渡る

〜〜

門を叩き、敗北した壬生川家を励ます声は、日々聞こえてきた

烈（れつ）は単純でその気になり、美月と共に都に出かけたりするが、左京は相変わらず眠り続けていた

一方、真名姫は本気で怒りながら、虚空に言い切った
「そんなのは、どうにかして生き延びたい人間の浅知恵なのよ！」
壬生川家に朱点を倒してもらわねば困るのだから、お涙頂戴ですがり付いてくるのは、当たり前なのだ、と
いかにも朱点童子が言いそうな、うがったようにも取れる言葉だが、何十年も騙され続けてけてきた人魚の娘が言うと、それは真実なのだとも思える

虚空は何も言わず、縁側で物思いに耽る

いつしか、酒を手にする事はなくなり、
代わりに空を見上げる時間が増えた

～～

烈が都からの帰りに、幼い娘とその母親から貰ったと言って、ヨモギの草を片手に握り締めて帰ってきた
「何でも、鬼になる病も、たちどころに回復する……って当人たちは信じているみたいだったよ、良いところの姫さんみたいだったけど」
まったくの善意をむげには出来なかったのだろう、そう言う烈の表情は複雑であった
虚空はそれを受け取った

～～

ある日の夜分遅くに、美月（みつき）が帰ってきた
出迎えた虚空の前には美月ともうひとり、バツが悪そうな由一がいた

さすがに深夜に少女をひとりで帰すのは忍びなかったのか、都からわざわざ送り届けてくれたのだろう
疲れていたのか、美月はすぐに屋敷の奥へと去ってゆく
後には大人ふたりが残された

「すまないな」
「いえそんな、まったく構いませんっすよ」
十代半ばにも達していないような少女に頼りきっているのを情けなく思うのか、あるいはそれを相手の父親に見られた事が恥ずかしいのか、顔を赤くして由一は玄関から出た
「それじゃあ、これで失礼します」
「のう、おぬし」

思わず、玄関から出たところで、引き止めてしまった

「はい？」
声をかけたあとに、少し迷う
虚空は彼のような男が、哀れに思えて仕方がなかったのだ
命をすり減らして、民を、何の見返りもなく、守っているというその男が何を考えているのか、唐突に知りたくなった

「おぬしは、何故京都を守るのじゃ」
「え、ええ……？　そう聞かれても、困るんですけど……うーん」
由一は少しおかしそうに、つぶやいた
「もしかして、アリが象に立ち向かうように見えちゃってたり、します？」

「人が鬼と戦うように見えるな」
「馬鹿なんですよ、死んだ好きな女のため、って今時流行りそうもない、まあこれは俺の理由ですけど」
遺されたものの、寂しい笑顔だった
「美月ちゃんは、必ず守ります、死にたくはないけど、あの子のために死ぬなら仕方ないかな、って間際に思えそうな気がするんですよ、なんか、良い子ですよね」
「馬鹿な」
穏やかに聞いてなどいられない
虚空は問いかけた己の行動を後悔していた
由一が、京都守護隊がどんなに守りたいと思っていても、あの茨城大将が攻めてきたら都は絶対に滅びる定めなのだ
どうしようもない、虚空が地獄の底で見た軍勢は、人間の力で太刀打ちできるようなものではない
黙っている虚空に頭を下げ、由一は屋敷に背を向けた
「帰って一仕事があるんで、失礼します」
「……ああ」
そううなずく虚空の胸には、絶望があった
美月の力を持ってしてでも、茨城大将をたったひとりで葬ることはできないだろう

真っ暗な夜、月のない闇の中、虚空は由一の去っていった方向を眺めていた
誰もが、自らの命を削ってまで、戦い続けている
ならば生き延びた自分はどうすれば良いのか、死ねなかった自分にあと何が出来るというのだ

虚空は熱帯夜の中で、寒気を覚え始めた自らの体を抱く
月見の亡骸を背負いながら、ただ空を見上げていたあの夜のことを思い出す
虚空は屋敷を出て、門の前に立ちすくんでいた

気づけば、異常に暗い闇の中に、一対の赤い光が浮かんでいた
虚空の瞳ですら見通せない暗闇の奥、何かが潜んでいた
ほたる火ではない
とすれば、その正体は――

「鬼……か？」
夜の帳を引き裂いて、虚空の目の前に何かが突き刺さる
虚空は一瞬たりとも反応ができなかった
眼前でしなる槍が自分を狙ったものだったなら、虚空の命はなかったろう、そう思うと脳が冷えた
「何者、だ……？」
並の相手ではない

再び闇に吸い込まれたかのように思えたその言葉には返事があった
ノドを潰された者が発するような声――男だ

「――虚空よ」
不自然なほど深い暗黒の闇も、この鬼が放ったものだろうか

それにしても、強い――

これほど離れた距離で対峙しているというのに、冷や汗が流れ落ちた

死にかけのこの命を奪略しに来た死神であろうか

美月の笑顔が、浮かんだ

ここで彼女を遺して死ぬわけにはいかない――

自分が完全に徒手だったことを思い出し、虚空は投げつけられた槍を握る

手に張りつくような感触があった

その瞬間、失っていた右手を取り戻したかのような、全能な整合感が走った

それはまさに剛槍山嵐

地獄で無くしたもうひとつの半身である

「なぜ」

お前がそれを持っている

虚空の言葉をさえぎるように、鬼が声を撒いた

「イツ花と夕子が朱点童子の地獄に蓋をしているが、それもじき破られる……もって葉月の終わりまで」

葉月――八月、つまり、来月

赤い光に射られながら、虚空は槍を掴む

「決めるのはおまえだ、十一代目当主」

「貴様は一体――」

尋ねるも、闇の帳から返事はない
死神のような気配は、とうに去っていたのだ

一体なんのために現れたのか
あれではまるで、ただ槍を運んできたかのようなものではないか
虚空は息をついた
ずっと呼吸を止めていたのだと気づき、額の汗を拭う

雲の切れ間から、ゆっくりと月の光が差し込む一夜

手の中の槍を見つめ、思う
剛槍山嵐
これさえあれば、自分は再び立ち上がれるだろうか
虚空は己に問いかける

彼は気づいていない
あるいはそれすらも、男の背を押す最後のきっかけでしかなかったなどと

地獄で失ったはずの熱情、情動、心火、真情が我が魂と成り
虚空の心身に嵐が宿りゆく

心の奥底に沈んでいた終極の願いが鈍く光る
それは今までも、これからも、その先も
永久に変わることのない全ての壬生川一族の大願――

家族を、命を救うための、戦い

～～

翌朝、
美月は朝日が昇るよりも早く起き出し、身支度を整えた
軽い食事を取る前に道場で一汗流すのが、美月の日課であった

そんな、道場に向かおうとしている途中のことだった
裏庭に人影が見えたような気がした
烈がこんなに早く起きるはずはない、左京に至っては思いつきもしなかった、真名姫だろうか、美月はなんとなく気になってそちらの方に向かう

あっ、と思わず声をあげた

しっとりとした紫色の空気の墓地の中に、虚空が立って、両手を合わせていた
「パパ」
虚空は目を閉じて、ある墓の前にいた
彼は美月が隣にいっても黙祷を続けていた
月見（つきみ）の墓の前で

声をかけることがためらわれて、父親の横で、美月もまた両手を合わせた
今はそうしなければいけないのだと、なぜか思った

並んで触れ合った腕から、父親の体温を感じながら、しばらくそうしていた
朝の空気を吸い、頭の中が澄み渡ってゆくのを感じる
穏やかな気持ちが肺から全身に循環する

小鳥が鳴く声が聞こえる
その直後、美月の腹が鳴った

「あ」

そういえば、まだ朝食前だった
美月は恥らって頬を赤く染めながら、隣の父親を見上げた
虚空が目を開いて、落涙していた

奥歯を噛み締め、目の下を黒く腫らし、怒りとも悲しみともつかない顔で、ただその真剣さを瞳の奥に浮かべながら、泣いていた

思わず、美月は息を止めた

「美月」
その声は、凛々しかった
「は、はい」
気圧されながら、うなずく

その頭を、虚空の大きな掌に撫でられた
再び見上げれば、虚空の口元には笑みがあった
そうと分からないほどに小さいが、それは確かに笑顔だった

「俺の屍を、越えてゆけよ」

二五の墓の前で、美月は父親からそう言われた
その真摯さに、美月は思わず首肯した
父親の手は優しかった

その言葉の意味を美月が理解するのは、もう少し、先の話だ

第十一話－２２　「愛子」　１０２６年７月後編

＜地獄巡り＞

瘴気発する地獄の入り口の前に、ふたりの女性が並んで座していた

どちらも目を瞑ったまま、まったく身じろぎしない
よくよく見ればその女性らは全身からわずかな燐光を放ち、この世の者ではないことが分かるだろう

その片割れ、大照天夕子がゆっくりと口を開く
「来るでしょうか、あの方々は」
もう何千、何万回とも繰り返した問いだ
そして、昼子の回答も変わらない
瞑目したまま、昼子は相貌を崩して笑った

「来ますよ、きっと。明日をバーンとォ、信じましょ」

＜壬生川家＞

三日三晩、虚空（こくう）は一睡もせずに道場で槍を振り続けた。

一滴汗を流すたびに、筋肉が軋み、頭の中の霞が晴れてゆくような思いがした
覚えている限りの鬼を斬り、脳髄に潜む朱点童子を何度も何度も貫いた

もう二度と負けはしない
誰ひとりとして殺させはしない
我が身、地獄に朽ち果てようとも

想うたびに、虚空の指輪は輝き、槍はその威力と速度を増した
熱火を浴びて鈍く輝く鉄の塊のように、虚空は生き返り続ける

そして、四日目の朝、

～～

屋敷を夏の風が通り抜ける
烈(れつ)と左京(さきょう)は先に待っているだろう、虚空は多少急いで戦衣装をまとう

衣裳部屋から出たところで、弓使いの格好の美月(みつき)が柱を背にして俯いていた

「どうした美月」
「あ、パパ」
美月は浮かない顔をしていた

前に両手で抱えていた弓を握りながら、虚空を上目遣いで見上げ、
「……う、ううん、ほら、わたしが出発しちゃったら、京都の人大丈夫かな、って」
「それは心配いらんじゃろうが」
虚空は右肩を回しながら答える
肩口の締め付けがキツくなっていた
たった三日の修行ではあったが、体躯が変わるほどの成果があったということとか
三日と言っても寿命５０年の人間に換算すれば三ヶ月に相当するのだから、そういうものなのかもしれない

そんな虚空の裾を、美月が握る
「でも、あのね……ホントは、そうじゃなくて」
「ん」
水色の長い髪が、虚空の腰前で揺れる
「なんか、その……ちょっと、最近、お兄ちゃんたちが怖いなあ、って」
「……ふむ」
「この前、かるた取りで遊んでたときも、なんか美月に本気で、目がこわくて」

美月は優しく、才能に驕ることはない
美月はまだ、たったの３ヶ月才だ
本当なら誰からも甘やかされてもおかしくない年だというのに、ふたりの兄からはもうライバルとして扱われている
虚空は美月の頭を撫でた

「すまんな、美月」
「……べつに、美月は戦いが好きなわけじゃないのに」
「ああ……辛い思いをさせているな」

自分が腐っていたことに対するツケが、この美月の様なのかもしれない
しばらく美月の頭を撫でていた

意を決した虚空は、かがんで目線を合わせ、美月を抱き寄せようとして、
拒まれるように、美月に両肩を押された

顔を上げた美月は、はにかんでいた

「ううん、平気、わがまま言ってごめんなさい、美月、鬼を倒すのに手加減なんてしないんだから」
弓を片手に、歯を見せて笑い、ありもしない力こぶを作ってみせた
「美月、先にいくね、パパもいつまでもちんたらやってちゃだめよ」
虚空を置き去りにして、美月はあっという間に廊下を走ってゆく

化かされたような思いがした
親が子の気持ちが分からないように、子も親の気持ちは分からないのだ

娘の背を眺めながら、虚空は肩から力を抜く
「まったく……敵わんな、あれには」
美月の後ろ姿に、月見の背中が重なって見えた

美月は強い、この屋敷の誰よりも
屋敷を夏の風が通り抜ける

虚空の髪を夏の風が揺らす

「遅いぞー！」
門から出た虚空に、烈が不満の声を叩きつける
美月の様子を横目に伺うと、左京に組みついて煙たがられながらも、彼女は楽しそうに笑っていた
思わず苦笑する、負けるわけにはいかないな、とも

「烈よ」
「あん？」
「今月の行き先は俺が決めても良いな？」
張りのある声が出た
烈は一瞬だけ目を丸くして、それから、面食らいながらうなずいた

「う、うん、そりゃ……当主は、あなたなんですから」
「カカ」
笑ってしまう、皮肉げな顔つきが口元からこぼれた
とまどう烈に、虚空は粗暴な笑みを見せた
「そうじゃな、忘れておったよ、本当に長い間、忘れていた気がするよ」
剛槍山嵐を肩に担ぎ、虚空は先頭を歩く
虚空の髪を夏の風が揺らす

向かった先は、相翼院が天女の小宮
朱点童子・黄川人の実母、片羽ノお業の住まう屋敷であった

〜〜

四神の像を瞬殺し、一行は鬼子母の間へと足を踏み入れた

葉月を迎える前に、虚空にはどうしてもやらなければならないことがあった
それは朱点童子を抹殺するために必要不可欠な儀式だった
見渡す限りに蝋燭の灯る禍々しい部屋、息子を失った悲しみに泣き続ける母の怨念が充満した空間に、虚空は立ち入る

「すまんが、これより先は、何があっても手助けは無用で頼む」
左京と美月は素直に首を縦に振る

普段は納得しなさそうな烈も、なぜかこの時ばかりは押されたようにうなずいた
虚空の力は、烈が把握していたよりも、その何倍にも膨れ上がっていた、今や別人にも思えるほどの実力である
もはや、烈が口を挟めるような相手ではなかった

三人を部屋の入り口で待たせて、虚空はひとりで中央へと進み出る
槍を手に、その名を呼ぶ

「お業よ」

女は虚空の呼び声に応えた
蝋燭の煙が渦巻き、室内の中心に集束してゆく
白煙は人の形を取り、丸みを帯びて女となり、色彩を浴びて神となった

片羽のお業はそうして、虚空の前に姿を見せ、母親の顔で微笑む

お業「もう来ることはないと思っていたわ……こんな私に、なんの用かしら」

「おぬしには、聞きたいことが蝋燭の数ほどある」
槍を翻し、虚空はお業の首元に穂先を突きつけた
「俺と共に来い、今からその首輪を割る」
「……」

正面から叩きつけられたその言葉を聞いて、お業は目を閉じた
そして、かぶりを振る
「……もう、どうしてやるのがあの子のためなのか、私には分からないわ」
「親にできることなど、たかが知れているよ」
「あの子に家族を殺され続けたあなたの言葉なんて、信じられるとでも思って!?」
お業に強く睨みつけられる
虚空はその視線を、凛と見返した
「黄川人のことを未だ想う心があるのなら、もう、あやつを止めてやれよ」
寂然としたその声に、お業は絶句した

その瞬間、虚空の瞳から憎しみが完全に消え失せていたからだ
鏡のように澄んだ目にあったのは、憐憫の情
氷ノ皇子やかつての太照天昼子のような、覚悟を決めた者の目
かつてのお業と同じ、大切な者を守るための目

「……あなた、」
「ゆくぞ」
それ以上の言葉はない、お業は静かに正体を現す

低く槍を構えた虚空の前で、お業はゆっくりと火喰い鳥へと変容してゆく

完全に変容しきった後、親と親の一騎討ちが始まった

炎をまとい、片羽で縦横無尽に飛び回るお業を、虚空は地に足をつけて狙い打つ
雉を打ち落とす射手のように、次々と竜巻を繰り出す
風を操る神が気流を乱され、お業は思うがままに羽ばたけなくなる
そこへ剛槍山嵐の巻き起こした風が直撃した
続けざまに容赦のない二撃目、三撃目、大嵐に翻弄される蝶のごとくお業は地に落ちた
舞い散る羽が蝋燭の炎に焼かれて溶けてゆく
もはや勝負とは言えないほどの、一方的な暴虐であった

虚空は槍をつきながら、伏せたお業に歩み寄る
見下ろしながら思う、壬生川は本当に強くなった

「……」
柄を回し、虚空は槍をお業の首めがけて突き落とす
五寸釘が木の幹を割るような音と共に、朱の首輪が割れた

お業の体から、光の粒が抜け出てくる

魂が解放されようとしているのだ、その見上げた輝きに、虚空は目を細めた
虚空の耳元に、ささやくようにお業の声がした

「天界に戻れなくなって、いろいろ辛い目に遭ったけど……あの人を愛したこと、あの子たちを産んだこと、私、一度だって悔やんだ

ことないわ、それだけは信じてちょうだい……あの子たちのこと、
頼むわね！」

憑き物が落ちたような、心根の優しい声だった

虚空は黙ったまま、うなずく
自分とて、たとえ失った今でも――

第十一話ー２２　「愛子」　１０２６年７月後編（後書き）

出陣・相翼院（虚空・烈・左京・美月）

第十一話ー２３　１０２６年８月１編（前書き）

虚空　１才２ヶ月
烈　９ヶ月

左京　６ヶ月
美月　４ヶ月

第十一話－２３　１０２６年８月１編

＜壬生川会議の間＞

「朱点童子に、弱点はない？」
烈（れつ）は思わず尋ね返した
「ないわね、無敵よ、ホントかわいくないでしょ」
褐色の肌を持つ人魚姫が、口を尖らせてそう言う

当主の間にて、最後の壬生川会議が開かれていた
列座しているのは烈、虚空（こくう）、真名、それに妙齢の女性
虚空はその女を見やった

片羽のお業が十一代目当主の視線に気づいて顔を上げる
それから、おもんばかりながら曇り顔で続けた

「私にはもう計り知れないよ、剣も術も誰に習ったか知らないけど、天下無双ってのはああいうことを言うんだろうね」
先月の終わりに解放されてから、お業は自らの意思で壬生川（みぶがわ）を手助けしてくれていた
大照天二名の不在により、数々の大罪への処罰は今のところうやむやにされているという
今のお業は、償いか、罪滅ぼしか、あるいは開き直ったようにも見える
少なくとも双翼院に篭っていたときよりは楽になれたようだ

虚空は顎をさすりながら、目を伏せた

「確かに……あの力は、筆舌に尽くしがたいものがあったわ、美月を擁する今となっても、六分の勝ちも望めないじゃろうが……」

虚空は再びお業を見た

「のう、お業。いっそのこと、おぬしが黄川人を説き伏せ、そなたら二人でどこか遠い異国にでも去るというのはどうじゃ」

「え……」

「おいおい、なに言ってるんですか虚空さん」

お業が何か言うよりも早く、烈が眉をひそめて口を挟んだ

「駄目かのう」

「ぼくたちの呪いはどうなるんですか」

「それは、まあ、うまいこと……ならんか、そうか」

虚空は部屋に飾られてある十の額縁を見上げた

初代から続く、壬生川当主の幻灯図である、あまりにも多くの人が死にすぎた

虚空は、宣言する

「今月、壬生川家は朱点童子を討つべく、地獄へと出陣する」

＜虚空と烈＞

会議が終わり、それぞれが立ち上がる

「さ、お義母さま、少し早いですけど、お夕食の準備をいたしましょ」

「え、あなた今なんて？」

「いえいえ、なんでも……ウフフ、さ、参りましょ」

真名がお業の肩を押して、部屋から出てゆく

その後に続こうとする烈を、虚空が引き止めた
「烈、おぬしは少し残れ」
「な、なんだよ」
烈はまるでしかられた子供のような目で、隣に座る

そんな弟を、虚空は怪訝な顔で眺めていたが、すぐに、ああ、と納得した
「なんじゃおぬし、なんぞ叱られるようなことでもしたのか」
「してないって！」
その割には、烈は落ち着かない様子だ

虚空は辺りに人の気配がないことを確認すると、烈に告げる
「今までずっと申し訳ないと思っていたよ、烈、そなたの母親の件じゃが」
「……なんだよ、改まって」
「ずっと黙っていて、申し訳なかったと思っておる、許せよ」
「相変わらず、えらそうな……」
烈が半眼で、呆れ気味につぶやくのが聞こえた

「……別に、もういいですよそれは、誰が母親でも、ぼくが壬生川家の人間であることに代わりないんだし……ほたる母さんだって、優しくしてくれましたよ」
「そうか」
「……それに」
相変わらず言葉の少ない虚空相手に、焦れるように、烈は横顔を赤くして続けた

「月見お姉さんも、虚空さんも、親切でしたから……ぼく、絶対に月見お姉さんの仇を討つよ」

若い烈の熱情を、虚空は眩しく思う

美月に一度自信を砕かれても、烈はくじけなかった
烈は自身の刀と、今まで積んだ鍛錬と、そしてなによりも壬生川としての血を信じている

「交神の儀、させてやらんですまんな」
「いいよもう、神様は」
話を変えた虚空に付き合って、烈が笑った
「京の人たちの中にも、可愛い子たちは居てさ、この前言ったかな、良いところの姫さまが健気で可愛らしいんだ、まだちっちゃいんだけど……って僕よりは年上か、あはは」
そう言う烈は、9ヶ月才よりももっと幼い顔をしているように見えた

当たり前のように人が好きで、そのことに何の疑問も抱かないこの少年のような人物こそが、壬生川の当主であるべきだと、虚空は黙しながら思っていた

＜美月と左京＞

どうやら美月には、知らず知らずに肝心な場面を見てしまう能力というか、そういう不思議な特性が備わっているようだった

それが彼女自身の力なのか、太照天から受け継いだ血の力なのかは分からない
あるいは単純にケタ違いなまでに強力な知覚能力によるものなの

かもしれない

この日、美月は道場の前に居た
神々の世界も含めて、この浮世で美月に敵うものは、もうどれほどもいない
真名は、朱点童子を除く三強を、太照天昼子、壬生川美月、そして壬生川虚空と称した
そのためなかなか相手も見つからず、ひとりで修練を積むことが多い美月だったが、彼女はそれを与えられた使命なのだと享受していた

出来なかったことがまだ何一つなく、ただの一度の挫折も味わったことのない美月だからこそ、まだ見ぬ朱点童子との決戦は恐ろしかった
勝ち続けてきた自分が負けたとき、そのときに失うものは計り知れない量だと美月は思う
そう考えるたびに不安にかられた
美月は、この双肩に乗った責任と向かい合うためには、体を動かし続けるしかないのだと確信していた

道場の中には、左京が居た
普段から寝ぼけたような顔をした兄が、道場で何をしているのかと思えば、一心不乱に薙刀を振るっていた
思わず、隠れてしまう

「お、お兄ちゃん……どうして」
左京といえば、ものぐさの代名詞のような人物であったはずだ
その兄がまさかひとりで稽古しているだなんて、美月はなにか見てはいけないものを見てしまったかのように、緊張したまま物陰に張り付いていた

薙刀が空を切る音が、止んだ

「美月」

「ぎ、ぎく」

「……そんな分かりやすい声は、あげなくていいから」

面倒くさそうに言う左京の前に、美月はバツが悪そうに笑いながら、姿を現した

「のんきなものだな、お前は……」

「え、えへへ……」

後頭部に手を当てながら曖昧に笑う

それから悪いかもしれないと思いながらも、尋ねずにはいられなかった

「あ、あの……ところで、お兄ちゃん、なにをしているの」

「……みりゃわかるだろう」

仏頂面で左京（さきょう）が告げる

正直に言うと分からなかった

不思議そうに首を傾げる美月に、左京はため息をついた

「まったく……どうしてこんなのが、妹なんだろうな」

責められている気がして、美月は思わずうつむいた

「う……ごめんなさい、物分りが悪くて」

左京はさらにもう一度嘆息した

「……俺の信条は、がんばらないことだった」

「う、うん」

そっぽを向きながら、左京は小さい声で語る

「月見の母さんも……もちろんその前の代の、みんなだって死んだ……俺は、頑張るやつは早く死ぬんだと思ったよ……だから、絶対にがんばらないんだって誓った、もしそのせいで自分が死ぬでも、俺は構わない、楽に生きようと思ってたんだ」

「うん……」
左京の言葉に、美月はうなずく
「だけどな……美月、お前を見ていると、段々腹が立ってくるんだ」
そう言いながら、左京は手にしていた薙刀を美月に渡してきた
戸惑う美月の前で、左京は新たな薙刀を取り、続ける
「お前は、がんばらない俺の分まで頑張っている、いつかそのせいで、危険な目に合うかもしれないと思うとな……いいか、美月、父さんが言わないから、俺が言う……お前は、頑張りすぎだ、少しはその荷、俺によこせ」
「おにいちゃん……」
左京の口元が、少しだけ緩んでいるように見えた
「出来の悪い兄かもしれんがな……妹ひとりぐらい、守ってやるよ、だからちょっと付き合えよ」
「……うん」
美月は思わず微笑んだ
体の奥がじわりと熱くなり、薙刀を強く握り締めた
「お兄ちゃんって……案外、熱血だったんだね」
「……ほっとけ」
嬉しくもなさそうな顔で、左京はそうつぶやいた
道場に、薙刀が打ち合わされる音が響く
家族の心に触れるたびに、美月は自分が強くなるのを感じる

その晩、六人揃った食事時に、地獄巡りへの出陣が告げられた
壬生川大敗の陣から、４ヶ月後の八月のことだった

第十一話－２４　１０２６年８月２編

屋敷の庭では、決して美しくはない菖蒲が、その管のような花穂を薄茶色に染めていた

それは世話を勤め上げているお業と真名姫が、ともに植えたものであったが、一体どうしてこのような地味な草ともつかないような花を選んだのか、人の心は掴めども、その深い侘び寂びまでも理解することは、まだ若い美月（みつき）には無理な話であった

かたや美月は、まさしく芍薬のような美貌を顕然させつつある珠のような汗を垂らしながら、薄絹を身に着けたままの美月は、両手にいっぱいの瓢箪筒を抱えていた

そのどれもが一本で京の町に蔵が建つほどの値打ち品であったが、美月に与えられた指示は「一切を惜しむべからず」の、文字通り蔵出しだ

出陣の準備である

美月の後ろから、物憂げに左京（さきょう）がやってくる

右手に二枚の御守を握って、さも働いている風であった

だが、駆け回る美月はそんなことなど気にせず笑う

「お兄ちゃんと一緒に用意だなんて、初めてで、ウキウキするね！」

「……そ、そうか」

持った御守の軽さが、左京の胸を重くする

「嬉しいな、えへへ」
「……お前は、そのうち、悪い男に捕まりそうだよ」
「庄屋のおっかさんが言ってたんだ、働かない男を旦那にすると、働いたときの喜びはひとおだって、そういうことなのかな？」
「やめなっ、俺をそういう目で見るなっ」
「でも美月はわかるよ、そういう気持ち、短い命ほど、輝くってことだよね」
「……お前のそのプラス思考が、俺を不安定にさせるんだ」
頑張るな頑張るなと自分を戒めつつも、早足となり、今度は御守ではなく瓢箪を抱えてしまう左京だ

美月はその様子を見て、笑顔に華を増す
「ありがとね、おにいちゃん」
「……やめろ、そういう甘い声を、俺に向けるんじゃない……」
「えへへ」
守ってやると言われたことがそんなに嬉しかったのか、美月の顔は緩みっぱなしだ
「……正直、後悔している、が」
二の句は継がない

妹に懐かれる気分は存外に悪くない、などとは、言ってはならないもし口に出してしまえば、この利発な美月は、その笑顔と色香を十分に活かすに違いないからだ
今すぐにそんなことはないにしろ、知恵がつけば、処世も巧くなる薙刀で完膚なきまでにのされただけならまだしも、私生活の手綱まで奪われては、非常に生き辛くなること間違いないだろう

「……くそ、俺は腐っても、臥家（がけ）の者だということか」
思わず舌打ちが漏れ、それを満面の笑みの美月が咎めた
「お兄ちゃんは腐ってないよ、やればできるんだもんね！」

「……そういうことを、ぬけぬけと」
「えへへへ」
「……笑うな、俺を見て、笑うなっ」
口調を乱し、左京は頭を抱える

その時、ふたりが立ち話していた外廊下から見える位置にある、道場の戸が乱暴に開かれた

けぶった熱気がもやのように噴き出してくる

眉をひそめた左京の視線を追い、美月もそちらを向くと、現れたのは、袴を履いただけの姿で水飛沫を浴びたような多量の汗を流す、壬生川(みぶがわ)家現当主であった
鍛え抜かれたその痩躯は、人の身ではあらず、熱気とともに立ち上る香気と燐光は神にもっとも近しい男の証だ
呼吸を乱すその険しい表情は雄雄しく、自然とふたりの子らは息を呑む

「美月、準備は済んだか」
その壮烈な顔をつたう汗粒を目で追いながら、美月は二度うなずく
「う、うん、パパ、あとこれだけだよ」
「左様か」
瓢箪を軽く持ち上げる美月の肩を、軽く叩いてくるその虚空(こくう)の手は布越しでも熱かった
「余は水浴びをしてくるが、烈が起きたら支度をさせろ、半刻で出るぞ」
「う、うん、汗拭いて、お水飲んで、ちょっと休んで、さらにお水飲んで、軽くなんかつまんで、お水飲んでねー！」
「いや、水飲みすぎだろ……じゃなくてあの、父さん」
「うむ？」

世話焼きの美月の言葉を遮り、左京はつぶやくように尋ねる
「……烈（れつ）、どうしたのさ」
「あやつなら、のびておるよ、中でな」
平然と虚空は言う
「最後の稽古のつもりで、思う存分相手をしてやったからな、余も烈も楽しんだぞ」
「楽し……」
「烈くんも……？」

ふたりが道場を覗き込めば、穴あきだらけの床の間に、大の字にひっくり返って、折れた木刀を握り締めた上半身裸の烈が倒れていた

「お前たちも撫でてやれんで、済まんな、思ったより烈が腕をあげていてのう」
「……い、いやいや」
「……出立の準備、続けようっと」
足早に虚空を追い越し、左京と美月は最後の支度へと取り掛かる
「……ふむ」

虚空は神々のすまう天空を見上げ、どこからか自分を見守ってくれているはずの大いなる力を感じながら、ゆっくりと歩みを進めた
誰もいなくなり、風の突き抜ける廊下に、少年の血を吐くようなうめき声だけが、残る

「両断殺（りょうだんさつ）……ぼくは……必ず……」

〜〜

出立の準備は済んだ
虚空の選別による道具袋の中身は、以下の通りである

養老水６　神明丹４　七光の御玉２　仁王水３　力士水６
引波の御守２　神仙水７

計３０個

朱の首輪は不要であった

＜出陣＞

一族四名は、藍色の戦装束に身を包み、屋敷の門前に集合を果たした
壬生川虚空、以下、烈、左京、美月の最後の家族四人だ

彼らを見送るのは、二柱の神、お業と真名姫
「もう、あたしたちが言えることは、ただひとつだよ」
俯き顔の天女は、彼らの顔を見ることはできず、それが彼女の変えられぬ性分なのだろうと知れた
「あんたたちの、好きなように、やっておくれ」
自らの息子を火中に投げ込むような心持なのであろう
その母親の言葉を、真名姫が継ぐ
「もう、ここまできたら、やるだけやるんだよ、悔いのないようにサ」
彼女の表情は、お業とは対照的に、晴れ晴れとしたものだった
「そうだな、悔いは飽きた」
「ウフフ」

ただ、浮かぬ顔をした烈が、たったふたりの見送りに、不平を漏らす
「一世一代のいくさだっていうのに、なんだか、いつもと変わらないよなー」
「……やることは同じだから、斬って落とす、それだけさ」
「それにしたって、都の人はなにをしてんだ？」
美月が朗らかな笑みで、親指を立てる
「やっぱり、一大事だからねー！　由一おじさんたちも、都の警備を厚くしているらしいし、そりゃもちろん美月も、家に閉じこもって絶対に戸を開けないように！　って堅く言いつけておいたよ」
烈は渋い顔で納得した
「まあ、そりゃそうだよな……」
「……果報は寝て待て、じゃあないけれど、扉を閉め切ってりゃ、終わる話だからね」
「ぼくたちが終わらせる、んだけどな」
烈は腰に帯びた刀に手を当てながら、強くうなずく

少年から青年に差し掛かった年である彼の首に、虚空が腕を絡める
「よくぞ言うた、烈、その通りじゃ」
「こ、虚空さん」
わずかに怯える烈から、侍女に視線を転じる虚空
「見送りなど、必要はない、この戦いは、我らだけが知っておればいいのだ」
虚空は烈から手を離し、腕を組む
「この怪異がみなの記憶に残るとは思えぬよ、人の世にとっては、たかだか八年の出来事であるぞ、そんなものは一本の木が成るよりも短いのじゃ」
「それは、そうなのかもしれないけれど、でも、今を生きている人は……」
一番人間と接してきた美月は、弓を抱えて抗弁をしようとした
「人の世に悲しみは多い、それは化け物に限った話ではなかろう」
蒼い目をした当主は、神と人の狭間で道理を説く
「ひとつのはやり病、ひとつの朝廷の没落、ひとつの戦、所詮はその程度の悲劇よ、無論、一己の命はそれぞれに計り知れぬ価値があることは認めようが、人は必ず死ぬ身であるがゆえ、物語は歴史に埋もれるであろう」
その声は、天に、地に、神に語って聞かせるかのように、圧倒的な威厳を称えていた
烈も、左京も、美月もみな、聞き入っていた
「だが、壬生川にとっては違う、否、壬生川だけが違うのだ、この八年、一体どれほどの人が死んだか、どれだけの悲しみが屋敷に降ったか、どれだけの血が流れたか、余の指輪には、しかとその時が刻まれておる」

初代当主・玄輝（げんき）から脈々と受け継がれてきた当主の指輪には、大小さまざまな瑕があった
それらを思い出すことは虚空にはできない、だが、思いを馳せることはできる

「聞け、壬生川の一族よ、そしてこの声が高天原に届くのならば、神もまた聞くが良い」

虚空は真名姫より槍を受け取り、天を突きながら声を張る

「我らは人のため、神のために戦うのではない、我らは我ら壬生川を救うために戦うのだ、我らの目的は朱点童子・黄川人打倒ではなく、壬生川一族の無念を晴らすことなのだ、願いも、夢想も、信愛も、全てを受け継ぎ、志半ばで散華した一族がため、余はこの槍を振るう
――壬生川の生き様をとくと見よ」

しん、と空気が静まり返る
お業も、真名姫も、ただ頭を下げていた

それはまるで、尊きものを前にした人間のように

菖蒲の花言葉は、信ずること
もはや人にも、神にも、壬生川を信じる以外に、手立てはない

壬生川屋敷の門がゆっくりと開く
空から注ぐ日輪の光が、その瞬間、世界の色を塗り替えた

桜の花びらのような黄金の輝きが、空から舞い落ちていた
夏の蒸し暑さもとんと感じないため、そこはまるで金色の海の底に立つかのごとき、不思議なところであった

剛槍山嵐を担ぐ虚空が立ち止まると、異変に気づいたその家族も次々と、足を止めた

地獄巡りへと延々と、地平線の向こうまで続くかのような、砂利道が伸びていた
その路傍であった
夏草も伸び切って、脛に突き刺さるような青々とした雑草畑の中である

男神、女神、問わず、数多の神々が、いた

異装をまとい、手に矛を、あるいは三味線を、御魂を、剣を、芭蕉扇を、瓢箪を持ち、
それぞれが意志の強い目を伏せ、あるいは頭を下げ、ただじっと

こちらを見つめ、列を為し、
居住まいを正し、微笑み、歯を食いしばり、口惜しげに、穏やかに、押し黙り、
炎に身を包み、鹿のような双角を生やし、黄金の簪をつけ、飾り布を頭に巻き、
葬列のように、結納のように、死者を送るように、生まれてきた者を祝福するように、

立ち並んでいた

みなが、壬生川の道を妨げぬように路辺に退き、
砂利の上に神仙水を、養老水を撒き、行く先を清め、
その中には地に根を生やした木霊ノ寝太郎や、不安げにこちらを見る葦切四夜子や、他にもいくつもの見知った神々が何柱も列していた
天空の神が一同に介したような、実際はそうでないにしても、凄まじい光景であった

息を呑み足を止めた家族の中から、たったひとり、男が進み出た
壬生川十一代目当主だ

かつて、三人で進み、
ふたりで戻り、
たったひとりで帰ってきた道を、
虚空は、八百万の神に見送られながら、威風堂々と、歩く

「見送りご苦労であるぞ」

その道の真ん中を、背筋を伸ばし、胸を張り、凱旋するかのごとく

「壬生川家、出陣じゃ」

それはまるで産声のようであった

壬生川一族最後の一ヶ月が、始まる

第十一話―25　1026年8月3編

＜地獄巡り・入り口前＞

“地獄巡り”とは、言ってしまえば、ただの地下回廊である
古典の中に存在している地獄との係わり合いは、一切無い
深く、深く、穴を掘り、深く、深く、穴を掘り、そうしてできたあまりにも巨大な竪穴の中を、神術と数々の鬼の力を使い、朱点童子・黄川人が作り上げたのは一国に匹敵するほどの大迷宮であった
この魔窟が地獄と呼ぶべきにふさわしいのは、その深玄さによらしめることが少なくはない
、だが、それが総てではない

真っ赤な目を持つ鬼が、ひしめいていた
空気も生気も澱んだ薄暗い地下にて、あまりにも多い鬼が、今なお、腐った死体から湧き続けるように、増え続けているのだ
雲霞のように数だけならば、対複数戦闘に長けている壬生川の敵ではなく、火葬に付すこととなるだろう
しかしだ、その軍勢の一匹一匹が、戦勝点何万という神々に並ぶほどの武勇を生まれ持つ戦神となれば、話は大きく違ってくる

半端な強さではない

相手の強さが見極められる程度に練磨した戦士であれば、その鬼と向かい合った瞬間に、自らの腹を裂くがために刀を抜きかねないほどである

茨城大将に限って言えば、かの者は各洞窟において十二分に守護者を果たせるほどの実力を持ち得ていた
実際に、虚空が初めて彼らと対峙したとき、たった三度の茨城大将との接触で、恐怖と傷痕を身体に刻み込まれたのだ

そういった、これまでの迷宮がまるで遊戯場に思えるほどの、質、数、ともに、ズバ抜けた悪鬼の連中を、
決して外には、人の住む里へとは下りさせないために、地獄に蓋をしている、ふたりの神がいた

白無垢姿のふたりであった

「ほら、来たじゃァありませんか」
眼を瞑ったまま、昼子は自慢げに言う

双星のようにまったく同じ姿勢で、半折しとねに胡坐をかき、指を組み、全身から神気を放っているのは、大照天夕子だ
「……ずいぶんと、お時間が、かかったような気が致しますけれどね」

ふたりは草の禿げた盆地にて、地獄巡りへと続く地下階段を挟むようにして、座っていた
まるっきり無防備な姿で、本麻一枚隔てた地に、腰を下ろしていたのだ
あらゆる生き物をかしずかせ、どんなに願ったとしてもその面持ち見ることも叶わない、天界の最高神が、である

「来たぞ、昼子、夕子」

その開けた空間には、澄み切った空気が流れていた
にごった瘴気が、この二柱の力により、昇華されているのだろう
「一日千秋の想いというものは、ずっと、忘れておりましたからねェ」
「……この身に変わってからは、そうでしょうね」

突如として隊列を乱すように、壬生川（みぶがわ）のひとりが駆け出した
「夕子ちゃんー！　昼子おばちゃんー！」
美月（みつき）が丘に咲く一本のひまわりを見つけたような顔で、手を振り、歓声をあげた
その勢いのままに抱きつこうとするのを、虚空が片手で制す
「いかんぞ美月、やつらは術の詠唱中である、触れてはならん」
「ええー！　でも、なにも唄っていないよ！」
「あれはああいうものなのだ、烈（れつ）、左京（さきょう）、持ってろ」
美月の膂力に顔をしかめた虚空は、ふたりの少年に命じる
「はいはい美月、今、壬生川の偉い人とお空の偉い人が、話すところだからね」
「子供はあっちに行っていような、ほら、蜜飴やるぞ、好きだろ」
美月のか細い両腕を抱くように、烈と左京が４ヶ月才の少女を拘束する
「やーだー！　夕子ちゃんと、昼子おばちゃんに、挨拶するー！」
そんな駄々っ子を、烈が「帰ってきたら、ゆっくりできるからね、ね」となだめすかしている

虚空（こくう）が、瞳を閉じた大照天たちの前に歩み出ると、彼女らの息遣いがわずかに乱れているのに気づいた
「持って、今月の終わりまで、と言っていたな」
「そうですね」
まるで他人事のようにうなずく夕子であったが、夕刻の涼しさを称えた美貌にも、わずかに陰が差していた

「まァ、昼子“おねーちゃん”たちも、結構シンどいんですよォ」
「わざわざ強調せんでもいい」
口には出さないが、壬生川の一族にとっては、まともな幼児であろうともみな、年上なのだから、不老不死の神を相手にすれば「おばちゃん」ですらまだ甘い表現だと虚空は思う
いや、口には出さないが

「不眠不休に、ご飯も抜き！　それにお昼のあとにゴロゴロできませんしィ、近所の猫に餌をあげようとしたところを捕まえて、お手てをプニプニすることもお預けなんですよォ！」
「おぬしは、本当に……」
目を瞑ったまま語気を強める昼子を前に、虚空は頬をかくどうしてここまで、図太い神経を保っていられるのかが、わからない
「まァまァ、ここはとにかく、任せてくださいね」
「信用はしているが、信じられんな……」
「やることはキチンとやってますよォ」
下唇を突き出す昼子
「カマトトで大嘘つきの女の言うことだからな」
「それに関しては、否定はできませんね」
虚空の言葉に、夕子が横から茶々を入れる

「まァそんなことは、いいんですがァ」
天界第一位の女神は、にこやかな口調と裏腹に、力技で話を修正する
「わたしたちは今、地獄巡りの入り口にのみ、強固な結界を張っています」
「のみ？」
「ええ、七大迷宮はおろか、この周囲すら護ってはいません」
「そうでもしなきゃ、いくらわたしたちの力でも、大挙して押し寄

せてくる鬼を防げませんからねェ、なので通るときには、一旦結界を解除しますよー」

虚空は戸惑う

「しかし、それならば、他の神はどうしている？　おぬしらより格が落ちるとは言え、全ての神々で協力すれば」

「あ、気になりますかァ？」

「気になる、というか……そういう次元の問題ではない」

決戦を控えた今だというのに、昼子はまったく動じていなかった

「神は来ませんよ」

夕子が短くつぶやく

「どういうことだ」

壬生川屋敷の前で、整列していた神々を思い出しながら、虚空は尋ねた

「いやァ、あはは……なんででしょうねェ」

昼子は苦笑いしていたものの、それがなにを意味するのか虚空にはわからない

嘆息とともに、夕子が付言した

「言うなれば、わたしたちは神々に見放された、ということですね」

「神望があったはずなんですけどねェ、わたしってば、あはは」

「朱点童子の争いには、もう天界は一切関与しないと、三ヶ月前に決められました」

他人事のように、夕子が告げた

暴れていた美月まで、言葉を失いかけた

「そ、それって……ぜ、絶交？」

烈と左京の腕から抜け出し、不安そうに尋ねる美月に、夕子が首肯した

「そのようなものですね、今までにも色々、昼子には前科がありま

して、それらが積もり積もりまして、ついに押さえきれなくなったのですよ、もはや昼子を慕っていた一部の神ですら、個々の意志は派閥によって統一されてしまいました」

「……確かに、後ろめたいことは、山ほどありそうだが」

冷ややかな眼差しを感じたのか、昼子は再びごまかすように笑みを漏らす

「壬生川計画において、新たな朱点童子を生み出してしまったために、昼子の地位が失脚してしまったのが、要因のひとつです」

その意味を理解できたのは、虚空ひとりである

地獄の底で鬼となって果てた彼女のことだ

「四ヶ月前の、壬生川大敗の陣において、朱点童子・黄川人の圧倒的な力を目の当たりにし、討伐派の神々までもが希望を失ってしまったのが、要因のひとつです」

夕子は淡々と、事実を述べてゆく

「黄川人の実母である片羽ノお業や、その手助けを行なっていた敦賀ノ真名姫を、一時的にではありますが、開放したのも、要因のひとつでしょうね」

「えー、あれもそうだったンですかねェ」

昼子が首をひねるのを見て、烈が呆れていた

「本当に、積み重ねだったんだな……」

「……罪状、重なり合わせて火あぶりの刑、みたいだね」

「いや、他人事ではないのだが、お前たち……」

虚空は頭を抱えてしまいそうだ

「一応、謀が得意な昼子ちゃんで通っていたはずだったんですけどねェ、最近失敗続きで、ホトホト参っていますよォ……そもそも、ずーっと今まで富くじが連続的中するみたいに、マグレ続きで来れたんでしょうか？」

「いや、それは知らんが」

つまり、あの見送りは、葬礼だったのだろうか
別れを、つまり、あれでやるべきことを果たした、とばかりに、神々は天に帰ったのだろうか
そうだとしたら、なんという、いや、それが神々なのだ
今さら自分の価値観と照らし合わせても仕方がないのだと、虚空は首を振る

「まぁそれは知りませんが、もともと、昼子は古き神からは、嫌われておりましたからね、たとえ朱点童子が存在していなかったとしても、いずれは天界から放逐されていたことでしょう」
「……鬱陶しいからか」
「それはありそうであるな」
「あはは、またまたご冗談を」
姿も隠せず、耳も塞ぐことのできない昼子は、もう笑う以外に道がないようだ

「新参者が疎まれるのは、どの世界でも同じことのようです、それが優れているものならば、なおさら」
夕子の声に落胆の色はなく、彼女は書に描かれた物語を読むように話していた
「しかし、昼子が嫌われておるのはわかる、が、なぜおぬし、夕子までここにいるのだ」
これまで淀みなく語っていた夕子の声が、一瞬だけ途切れた
「……そうですね、奇妙ですね」
「聞くところによれば、お前は昼子を引き取り、大照天の名を与えたのだと言うが、まさか母心ではあるまい、正義感にかられて、己の危険を顧みずに人々を救うのだとでも言うのか？」
「いえ、それも違いますね」
夕子はそれでもやはり口調を変えずに、口を開く

「今の私をたやすく葬り去れるあなた方に、このようなことを言うのも含めて、ですが、私は楽しんでいるのです」
間髪いれず、昼子が水を差す
「あ、別に夕子様が高度な被虐性愛者だってわけじゃないですよォ？」
「おぬしは少し黙っていろ」
「……別に誰も思っていないから」
「蛇足だよ……」
「ひぎゃくせいあいしゃ？」
「つまりですね」
口々に昼子をとぼしめる一同の後に、彼女を完全に無視した夕子が、怨霊のような嘘泣き声を背景に続ける
「どちらが勝つかわからないこの戦が、私にとっては、この上ない興なのです、民草や神々、自分の死さえも、熱狂天の心と同じように凍りついた私には、善や悪もなく、面白いか面白くないか、でしか物事を判断できなくなりましたから」
「そうか」
それは恐らく真実なのだろうと、虚空は感じた
「そうは思わない神も多い、それはそれだけの話です、しかしいまだ義侠心を抱えている神の何柱かは、人々を救うために地上に降りているようですけれども、私にすらおぼろげにしか感じ取れませんね」
「少なくとも、この辺りにはいない、か」
アテにはしていなかったが、天界の神々からの支援を受けられないという事実は、壬生川の決意に一層の深刻さを加えていた
「まだ、なにかありますか」
夕子の問いに、虚空は静かに首を振った

「いや、もう行こう、そなたたちのたくらみは、戻ってきてから、ゆっくりこやつらに聞かせてやってくれ」
その言葉にわずかな違和感を覚えたのは、美月だけであった
だが、昼子に呼ばれて、すぐに気が逸れる
「あ、そうそう、美月さま、美月さま」
「はーい？」
「ちょーっと、ナイショ話があるンですが」
「え、なになに！」
イツ花の口調そのままに、昼子が美月を呼ぶと、ひょこひょこと少女が歩み寄る
その耳元になにかをささやく昼子の様子を眺めながら、虚空はふと、思いつく

「夕子」
「はい」
味方のいないこの状況、無防備極まりない姿で座す夕子は、黄昏のような深々とした表情のまま返事をした
「結界は、すぐに解けるのか」
もし、自分たちが負けてしまえば、ふたりの神は鬼に蹂躙されてしまう運命となるのだろうに
それでも目を瞑る夕子に、一切の恐怖はないように思えた
静かに沈み往く日のように、ただ自分の役目を全うしているかのようだ
「可能です、張り直すのに、少し手間がかかるだけですね」
「それ、もしかしたら鬼が漏れるんじゃないの？」
「ええ、そうでしょうね」
「ま、まずいんじゃ、っていうかそもそも、ふたりはどうやって身を守っていたんだよ」
烈の疑問はもっともであった
草原に若い女が目を瞑って腰を下ろしているのだ、鬼は地獄巡り

の中にしかいないわけではない

しかし、夕子は押し黙っている
「それでは、美月さま、頼みましたよォ」
「うん、任せて！」
悪巧みが完了したらしい昼子が、烈の質問を拾い上げた
「切り札というのは、誰にだってひとつは、残っているものですからね」
烈は怪訝そうに、昼子と夕子と虚空を交互に見た

その中で回答したのは、やはり昼子であった

「お守りくださるのは、第四の朱点童子、とも言うべき方ですからね、バーンとォ、平気に決まっていますよ」

首をひねる烈に対し、虚空は解答を知っている
夏にのみ、現れることのできる鬼
そして、壬生川の歴史において、朱の首輪を身に着けた人物はたったのふたりしかいない

「ま、もう少し、できれば最後の最後まで、隠し通しておきたかったのですけれどね、もうあの子にバレちゃいましたから、思う存分働いていただくことにしました」

確かに、神も人も頼れない以上、その力は昼子にとって最後の砦なのかもしれない
しかし、手駒の尽きかけた策士というのは、虚空にとって哀れなものに見える
そのために、己をも死地に身を置くのだから、これはまさに血戦なのだ

「では、もう行くぞ、昼子、夕子」
虚空は槍を担ぎなおし、地獄巡りへと続く通路の前に向き直る
「はァい」
「ええ」
壬生川当主の横に、御三家の若き戦人が並ぶ

「覚悟は良いな、烈、左京、美月」

それぞれ、手に持つは刀、薙刀、弓
幸家、臥家、香家の初代の得物である

「準備はできているとも」
烈は意気揚々とうなずく
「……まあ、いつでも」
「美月は頑張るよ！」
三者三様の表情であったが、そこに悲壮感はない
これは復讐のための戦いではなく、自分たちの生を勝ち取るための戦いなのだと、理解しているからだろうと、虚空は信じていた

「それでは、行きますよォー」

昼子と夕子は目を開く
そして、同時に柏手を打った

「当主さま、ご出陣！」

壬生川一族の身体は吸い込まれるようにして、地獄巡りの中へと消えてゆく
虚空は視界が移り変わるその瞬間
翠色の長い髪をした、浅黒い肌の男を、見たような気がした

「死なねぇ程度に、頑張ってこいよ、子孫」

それは、あのときの、悪鬼修羅――

～～

静まり返った草原に、夕子のつぶやきがそよぐ
「やはりあなたは、最後の最後まで、大嘘を貫き通すのですね、昼子」
どこかで必ず朱点童子・黄川人が聞いているとしても、言わずにはいられない夕子であった
「てへへ」
昼子は相変わらず、笑っていた

やがて、どこかから、鬼の雄叫びが轟き、
修羅・以蔵（いぞう）は、くたびれた顔で、槍を背負い直す

「頑張ってくださいね、元当主さま」
「頼りにしています」
口々にかけられる励ましに、以蔵は口をへの字に結ぶ

「次に生まれ変わるときにゃ、もう少し女運のマシな人生を送りたいもんだぜ……」
それが第二の遺言とならぬことを、今は切に願うのみだった

第十一話－２６　１０２６年８月４編

＜黄泉坂＞

壬生川（みぶがわ）一族の、討伐隊の面子は以下の通りである

壬生川虚空（こくう）　１年２ヶ月才　槍使い
壬生川　烈（れつ）　９ヶ月才　剣士
壬生川左京（さきょう）　６ヶ月才　薙刀士
壬生川美月（みつき）　４ヶ月才　弓使い

非常に若い布陣となっている
だが、彼らがかつての猛者たちに引けを取っているわけではない
何よりも、その体に流れる神の血は、ますます色濃いものとなっているのだから
幼い美月が優れた術をいくつも習得しているのは、その生まれながらの神格によるものだった
壬生川家最後の四人が、今、黄泉坂を下ってゆく

入り口で出会った修羅の正体について、四人が議論を交わす暇もない
彼らの行く手を塞ごうと、次々と飛空大将が飛来してきたからだ

天井近くからこちらを見下ろし、距離を取る鬼に、烈が叫ぶ
「刃が届かないよ、ちょっと！」
「というわけだ、頼むぞ左京」
釈然としないものを感じながら、蒼い肌の鬼の前に、左京が進み出た

「……いや、虚空サンは、届くんじゃないんすか」
うめきながらも、薙刀を腰の後ろに当て、体ごと何度か回る
赤い髪が、ひらりと翻る

壁を滑る水のようによどみなく、左京は左右に身体を振りながら、鬼に近づいてゆく
飛空大将が無防備に近づいてくる左京にと、急下降とともに月牙を刺してくる
そのふたつの体が交わった瞬間に、飛空大将の首は空を舞っていた
「道明鏡返し（みちあきかがみがえし）……」
偉大な祖々父の名を冠した奥義だ
大将を葬り去られたことにより、壊走してゆく鬼の群れを、虚空たちは見送った

「やったね、おにいちゃん！」
「……ああ」
左京はそっぽを向きながら、うなずく

自分の技が通じるのは、この辺りまでだと悟っていたからこそ、左京は進んで前衛となった
苦労するのは好きではなかったが、今だけは技力を使い果たしても、健康度がいくら減って、岐路を辿れないとしても構うまいと、左京は思っていた

朱点にトドメを刺すのは、自分ではないと、そう感じていた

それが臥家（がけ）の定めなのだ

飛びぬけた才覚を持った、四代目当主や八代目当主と、自分は違う臥家の宿命に反発し、その役目から抜け出そうとしたものもいたし、自分もかつてはそうあろうとした

だが、今はもう、違う

「……早く行くぞ、みんな」

「うん！」

「……別に、美月ひとりに言ったわけじゃないが」

妹を守る、などという、気恥ずかしい誓いによるものではない

ただ、虚空や、烈や、美月が、全力を発揮するために、誰かが礎とならねばならないのなら、それをするのは自分しかいないのだ

それが、脈々と受け継がれた、臥家の役割であり、今はただその役割を、遵守するだけである

そしてそれは、なによりも――

（……化け物みたいなやつとまともに切り結ぶよりは、よっぽど楽そうだしな）

本心ではなかったが、その嘘は自分をも騙し通せそうなほど、都合が良かった

そう、これはあくまでも楽な人生を追いかけるための、礎

（……派手なことは、派手なやつに任せるだけさ）

左京は静かに、＜寝太郎＞を詠いだす

＜賽の河原＞

四人は悠々と黄泉坂を下りきった

開けたその場所は、小石が敷き詰められた河原であった

「どっかから、水の流れる音が聞こえるね」

「まずは、渡しを見つけなきゃいけないんだっけ」

「うむ、そうじゃ」

左京が＜速鳥＞を唱え終わったのを確認すると、歩きにくい足場に注意しながら、四人は桟橋を見つけるために北へと向かう

迫り来る鬼を薙ぎ払いながら進んでゆくと、やがてひとつの炎も消えぬうちに、美月が声をあげた

「あ、渡し所が見えたよ！」

「……まことか？」

疑うわけではなかったが、虚空がいくら目を細めても、河原の向こうはかすんでいるばかりだ

「いくら美月でも、まさかそんなー、鳳や大鵬じゃないんだから」

「あ、烈くん信じてないねー！　もー！　ばっちり見えているのに！」

頬を膨らませた美月の後ろから、左京が複雑そうな顔をして、腕を組む

「……本当だと、思うな、それ」

「そう、なのか？」
「……えーと……いや、おい美月、重いから、な」
美月が嬉しそうな顔をして、左京の腕に絡みついていた
生まれたときから、ずっと自分ひとりで何でもできていた無敵の少女だ
人にかばってもらったり、甘えさせてもらえるのが、よっぽど嬉しいのだろう

「まさか、左京、お前……」
虚空がその美月の笑顔を、まるで特別なもののように錯覚する
「虚空さん、なんか目が怖いんだけど」
「兄妹で、よからぬ事を企てているのでは、あるまいな？」
「早まらないでくれ……！」
「もしそうだとすれば……貴様……」
「ちょっと、虚空さん、第十一代目当主さーん！」
後ろから羽交い絞めにしようとしてくる烈を引きずりながら、恫喝のような声をあげる虚空

幾多もの鬼を葬り去った生き神の迫力に、現実と眠りの世界の狭間で暮らしているような左京も、さすがに動揺を隠し切れない声で、懸命に否定する

「い、一体なにを言っているのか、わからないが……ない、そういうのは、きっと、ないから」
「いや、でもさ、虚空さんも月見おねえちゃんと、うおわあ！」
「それとこれとは、話が別だ」
烈を力ずくで振りほどくと、虚空は鋭い目でふたりを交互に睨む
「左京よ、俺の娘に手を出すというのなら」
戦々恐々とした雰囲気が辺りを包む中、美月ひとりがじっと河原の先を見据えている

「それ相応の、覚悟はあると、示してもらわねばならぬな」
左京だけではなく、なぜか烈まで一緒になって許しを請うように両手を合わせていた
そこには、猫を前にしたネズミのような必死さがある

「……この俺に勝つことができれば、認めてやろう」
烈と左京はそれぞれ胸の中でつぶやく
(美月は、生涯独身なんだ……なんて父親だ……)
(どうして俺は、美月の目の良さを擁護しようなどと思ってしまったのだろうか……)
左京は己のうかつさを呪った

以前、道の遥か向こうから手を振っていた美月に気づかず、無視してしまったような形になって、そのせいで勝手に落ち込んだ彼女に、逆に説教をしてしまったときのことを証言しようとしただけで、どうしてこんな窮地に追い込まれてしまうのか
他のものは知らなかったが、月見が亡くなった今となっては、美月こそが虚空の戦う理由の主要を締める存在なのだ
同じように月見の息子のはずの左京ではあったが、男親の一人娘に比べれば、その重要度はいささか落ちてしまうようだった

少年ふたりを震え上がらせていた恐怖の当主の袖を、無垢なる少女が引っ張る
「ねえねえ、ほらパパ、見てみて!」
「美月、俺は今、大事な話をしておるのだ」
「そんなのここで話すことじゃないと思うよ、パパ……そんなことよりも、今は他にやることがあるでしょ」
「む……」
生まれて初めて、娘に呆れられてしまい、虚空は唸る
彼女のたしなめるような口調に、美月が自分の手を離れつつある

ことを、思わず実感してしまう
「ね、それより、ほら、あったでしょ」
川べりを散策しているかのような気さくな笑顔に、なぜだか虚空は圧倒されてしまう
(助かったか、ぼくたち……?)
(これから困ったことがあったら、なんでも美月サンに相談するべきだな……)
ささやきあうふたりに構わず、美月が指差した方向には、渡し所があった
虚空の目からでも、その小船ははっきりと見えた

「ああ、あったな」
「うん!」
美月の目は道の先だけではなく、未来までも見通しているかのようで、ともすれば獣心に囚われてしまいそうな虚空の心に言い知れない安堵を与えてくれたのであった
今に限って言えば、烈と左京の心にも、言い知れない安堵を与えてくれていたのだが

脱衣婆は今までの門兵の法則に当てはまらず、四人の前に立ちふさがった

「三途の川を渡りたきゃ、命かお宝を置いてきな」
黄色い乱杭歯を剥き出しにする婆
所詮はこの場所が地獄なのだと強調するため、朱点童子・黄川人によって作られた、心なき舞台装置としての鬼だ
その骨ばった指が虚空を指す

「命か、お宝か」

虚空はあさぎ色の羽織を畳むように腕を組み、顎に手を当てた
桟橋の上に背を丸めながら立つ老怪に、目を据える
「家族の命も、余の宝も、差し出したぞ、それでも、まだ飽き足りぬというか」
婆はくぐもった声で笑う
「出さぬか」
「もう出したがな」
「さすが生きたまんまこんなところへ来るだけあって――」
「欲の皮の突っ張ったやつじゃな……やれやれ」
脱衣婆の言葉を遮る嘆息とともに、虚空は退いた

当主を守る左右の仁王のように、烈と左京が、前に出る
「さて、さて、ここは任せてもらおうか、虚空さん」
決して、虚空のご機嫌取りというわけではない
「なぜ俺まで……？」
「強くなるため、さ！」
烈は目の色を変えて、嬉しそうに刀を抜いた
そうして、一番手に＜梵ピン＞を唱え出す
（やはり継いでいたのか、竜子の血を……）
虚空はその様子を見守りながら、先ほどの騒動もどこへやらで、感嘆していた

記憶に残る竜子の像が、烈と重なり、しかし9ヶ月才の青年は一歩、いや二歩及ばない
竜子の戦績は、一族の中でも比類なく抜きん出ていた
彼女は壬生川において、七つの髪全てを打倒してきた唯一の将だ
その苛烈極まる生涯の最後の戦が、地獄巡りであった

歴代一位を誇る戦勝点取りと比べてしまうと、素質の勝る烈ではあったものの、まだその力は伸び足りない

「それならば、任せよう」

虚空は＜石猿＞を歌い、若き力を見定めようと刮眼する

「まあ……この日で、いさかいが終わりだと、思えばね……」

月見に比べて体格の勝る左京は、ふつノ薙刀を振り回す

彼が母親に比べて勝っているのは、体の能力と、なによりも所持している奥義の数々だ

息子に譲ったために双光蘭斬（そうこうらんざん）や道明鏡返しなどを使うことのできなかった月見に比べて、その瞬発力は高い

だが左京は、忘我流水道で取得してきた奥津ノ薙刀を振るうことのできない、男性だ

加えて、臥家の弱点である打たれ弱さ、すなわち６００に満たない体力が月見同様に尾を引いている

それでも、左京があくまでも臥家の役割を遂行しようと望む限り、それは致命的な欠陥とはならないだろう

臥家の真価は、その優れた回復の技と、堅実な技力なのだから

（この戦の最中に、こやつらが、どこまで伸びるか、であるな）

現時点での隊の術力は、竜子が生きていた４ヶ月前に劣っている抜きん出ているものがあるとすれば――

「＜春菜＞だよ！」

技や心はともかく、体においては虚空に勝るとも劣らない能力値を持つ、この娘だ

ほたるの雨切り弓を手に、若き美月は懸命に兄たちを支援する

彼女の体力は８００を上回っていたが、その耐久力に比べれば攻

撃が不得手であった

この幼き討伐隊は、優れた属性武器を持っていたとしても、扱いこなすことが難しいのだ
技が特に伸びるのは、８ヶ月才から１０ヶ月才の間であり、美月や左京はまだ達しておらず、烈はその過程を駆けている最中のためだ

まさかあの朱点童子を、虚空ひとりで殺し尽くせるとは思えない
雑魚との戦闘で苦労することは、目に見えていたが、それでも、虚空はある企みを抱いていた

（この一ヶ月で、どれほど……）
今度の戦は、三人ではなく、四人なのだ
それは、些細な素質や経験の差など飛び越えて、埋めてしまうほどの大きな違いだ

＜梵ピン＞によって切れ味が倍加された烈の剣が、鬼を叩き割る
技量で母たちに劣っていた少年らは、それでも、脱衣婆と三途の渡しを打倒せしめた

「よくやった、烈、左京」
砂利を鳴らしながら歩み寄る虚空に、烈は鞘に刀を納めながら照れた笑みを浮かべ、左京はそっぽを向きながら術の消費による疲弊のためか、ため息をつく

この分なら、きっと、上手くいくだろう
虚空は伏した渡しを掴み起こしながら、彼に命じる
「さあ、早く余たちを連れて行くがいい」

虚空の体から虹色の神気が立ち上り、川に波紋が広がる

「氷雪針地獄へと」

かつて攻略したのは、血の池地獄であった
そちらを選べば、門番もなく修羅の塔へとたどり着けるのかもしれない
だが、虚空は朱点童子・黄川人を打ち倒すために、三人をさらに練達させる必要があったのだ

そして、それだけでもなく、
昼子、夕子のため、
京のため、人のため、
虚空は一匹でも多く、地獄に棲む鬼を殺し、災厄を絶とうとしていた
朱点童子・黄川人が滅びた後、鬼たちがどういった末路を辿ることになっているのか、それがわからなかったからだ

二兎を追う、無謀な試みであった
時計の火がひとつ消える

第十一話－27　1026年8月5編

＜鬼・回想＞

白骨城――
狂ったような飢餓に襲われ続けた真夏の夜のことであった――

「あなたは、自分の名前を覚えていますか？」

眩しいものは、そう言った

「俺に名は無い」
鬼は素直に答えたが、しかし眩しいものは首を横に振る

白骨城で生まれ、何者の顔も知らず育った鬼は、眩しいものにわずかな懐かしさを感じる自分自身に戸惑っていた
月明かりに照らされ、映える真っ白な骨が世界の中心だと思い込んでいた鬼に、光は問いを投げかける

「あなたは鬼に身をやつしていながら、なぜ鬼を斬るのですか？」
「それは……」
「なにか理由がおありなら、お聞かせ願えますか？」
眩しいものの言葉は、鬼を震わせる

「俺は……」
述べられるはずがなかったのだが

乾いた血の張りついた手を握り締めようとするが、長く伸びた尖
爪が邪魔をし、それもままならぬ
しかし、拳を固めた記憶があるのなら、己は生まれたときから鬼
ではなかったということになる
一体どういうことか

修羅となったのは――
鬼が憎かったから――
その頭領を八つ裂きにするために――

鬼はうめく
「拘ることを呪と呼び、怨むことが罪だというのならば」
戦場ヶ原に風が吹き抜ける
時は夏、白骨城が外界と繋がるこの季節、湿った熱風は鬼の臓腑
に染み至る

「人は鬼にはならずにいられない。だってそうだろ、たった一人の
ガキが生きているだけで、あまりにも多くの嘆き、苦しみが世に溢
れかえるんだ。葦の生え場もないほどに戦場ヶ原に魂が満ちる前に、
オレが斬らなきゃいけねーんだ」

「ならば、斬りますか」
「あ？」
眩しいものの輪郭が、徐々に人の形となってゆく

目が光に慣れたのか――あるいはそれは、光と真っ直ぐに向き合
うことができたからなのかもしれない

「あなたをこの地に縛る呪縁を、今からわたしが断ち切りましょう。
そうすれば、四季に関わりなくあなたは外に旅立つことができまし

よう」
「……へえ」
巨漢と化していた鬼の身体はいつしか、光とその目線を並ばせていた
誰かが言っていた声を鬼は思い出す
「で、代わりに、オレになにをさせようってんだ」
「アハハ」
声を立てて笑う眩しいものは、嬉しそうに手を叩いた

「あなたには、“あらゆること”を行ってもらいます。人にも神にも為せない、万事を……あなたこそがわたしたちの最後の手であり、あなたが倒れたその日が、神都に神の絶える日です」
「……」
修羅は思わず黙り込む
そうだ、確か彼女は言っていた
『この女に気をつけろ』と
相違ない

「最初から、オレをこうするつもりだったんじゃねえだろうな……」
自由に使役することのできる朱点童子――
怨みと情と憎しみでそれを作るのが、太照天昼子が壬生川家を生み出したそもそもの目的だったのだとすれば辻褄が――いや、さすがにそれは邪推だと思いたかった

＜氷雪針地獄＞

「やあ、ここが地獄の三丁目、有名な針の山サ、手軽な散策にはもってこい！」

「頂上には接待係が、君たちの到着を今か今かと首を長くして待ってるよ」

「いやいや、待ちくたびれて首どころか体まで長くなってるかもね？　アハハハ…」

どこからか黄川人の声が響いてくる

「接待係か」

「首と身体が長いということは……蚯蚓の鬼かな」

「……あいつ、首あるのかな？」

氷と雪と針、並べて描いて俯く左京（さきょう）

「痛いもののオンパレードじゃないか……」

げっそりとした顔をする左京の背を、美月（みつき）と烈（れつ）が叩く

「大丈夫！　氷は美味しいんだよ！」

「ハリは身体に良いんだよ！」

「雪は……あまり見たことがないからなんとも言えないけれど、その三つが組み合わされると凶悪な物体になるんじゃないだろうか……」

「まあ、ワラジには辛いかもしれんな」

＜白鏡＞を覗いていた虚空（こくう）が術を解き、道順を肉眼で確認する

吐く息が白いどころではない
人の身で堕ちたならばたちどころに指先が凍りつき、ヒビ割れてしまうかのような凍土地獄の様相であった
忘我流水道の地下に匹敵するほどの冷気だが、今の壬生川家にとっては耐え切れぬほどではなく、それよりも殺意を秘めて伸びている針山のほうが危険に見える

「念のために＜清水＞を唄っておくか……左京」
「はいよ」
烈が鯉口を切る
「虚空さん、ここの鬼も全員斬っちまいますか？」
「ふむ……」
顎に手を当てた虚空は、しかし首を横に振る
「あれに見えるは飛空に天魔……どう思う？　美月、人にあれらが討てると思うか？」
「多分！　でもきっと、絶対大丈夫だよっ、束になってかかれば鬼の十匹や千匹なんてっ」
「ずいぶんと数に開きがあるが……そうじゃな、平気であろう。我らは我らの役目を果たそう」
「あいよっ！」
＜速鳥＞を唱え、一同は狭い道の山を登る

＜銀の穴＞

かじかむ手の冷たさも、心の臓を凍らせるような極寒の地も、もう決して虚空たちの歩みを止めることはできない

時の炎の盛りだけに気をつけて、四人が上り詰めた先は、銀の穴という断崖であった
中央に空いた巨大な穴の前に、木片が立てられている

「ねえねえ、お父さん、あれ」
「……立て札じゃな」
「明らかに、なんか……」
長物を地に突き立て、烈に告げる
「烈、その札を刻め」
「おう！」
鞘から刀を引き抜くとともに、斜めに斬り落とす

その看板には、「ようこそ地獄旅館へ」とあり、その続きには「歓迎　壬生川家ご一同様」とあった

そのとき、凄まじい風が穴から吹き出してくる
伴い、地響き、やがて飛び出すは巨杉と見まごう青い巨虫――

「接待係さん！」
「おお、本当に体が長くなってやがるよ！」
風に揺らされる前髪をわずらわしそうに撫でながら、左京が半眼でつぶやく
「ありゃあ、仲居も手が足りないことはなさそうだな……」
「違うな左京、あれは全て足であろうが」
「……そうか、じゃあ茶運びにも使えないな」

山ほどもある巨大なムカデ――大百足がうねりをあげ、鋭い牙の生えた口をむき出しこちらに飛び掛ってくる！

だがその豪快なぶちかましを、虚空はなんとたった一本の槍で受

け止めた
　衝撃波が波紋のように辺りに広がってゆき、虚空の足が地にめり込むも、当主は一歩も下がらず
　それから、巨石にでも頭を打ち付けたような反動に大百足は背をくねらせ、壬生川の一同からわずかに距離を取った
　そうして威嚇するように再び唸り声を上げるも、その端から青い血が噴き出ていたのだ

「先手は我であったようだな」
　交差の瞬間、斬りつけた虚空の山嵐の一撃――３０３のダメージ
「じゃあ次は、ぼくが行くよ！」
　烈が負けじと叫ぶ

　対大百足戦の始まりである

　烈は口早に＜梵ピン＞を唱える
「こんな虫相手に＜石猿＞なんて必要ないでしょう、ねえ虚空さん！」
　その発言に不服を申し立てる代わりか、大百足は距離を保ったままその数多い足を器用に組み替えて印を結び、放つは火の雨＜赤地獄＞である

「きゃー！　身体が暖まるぅ！」
　無数の炎のつぶてと共に悲鳴とも歓声ともつかない声があがり、壬生川討伐隊はそれぞれ２００前後のダメージを浴びる

「……寒い道中を憂慮してくれたのかな、良い接待係じゃないか」

そんな左京は全体回復の最上級術＜卑弥子＞を詠い、一同の火傷を完全に治療し尽くす
続く美月が力士水を全員に振り掛けたところで、壬生川家の一手目が終了である

「それじゃあ、行くとも！」
獰猛な笑みをみなぎらせて、烈が豪快な構えで刀を振り上げ、空中を絡み合うように蠢いている巨虫に向かって跳ぶ
「おおおおおおおおお！」
烈の斬撃が百足の腹を直撃する！
５９３のダメージが瞬き、大百足はさすがに苦悶の叫び声をあげた

「俺の優先順位は支援と決めていたけれどな……修めた武芸を披露する場を設けてもらったと思うべきか」
左京は薙刀の柄の端を持ち、舞うような足取りから助走をつけて一気に振り上げる
そうして高い位置を飛び回る百足の尾を分断する
さらに複雑に暴れる大百足の脳天に、美月の矢が見事深々と突き刺さった

絶叫とともに反撃の＜赤地獄＞が放たれる
「それはもう、一度でいいよっ！」
眉根を寄せて、弓を持ったまま頭をかばう美月の横、火の雨降り注ぐ氷雪針地獄を壬生川の当主が不敵に駆け、跳躍した

「それにおぬしの面も長く眺めたいものではないからの」
虚空は槍の柄を鞭のようにしならせて、大百足の顔面を強烈に殴りつけた
それは美月の射った矢の尻をさらに押し込むための一撃であった

額を割られた巨虫の血がやはり雨のように辺りに撒き散らされるが、汚れることを嫌ってすでに飛び退いていた虚空他、壬生川の侍たちには一滴もかかることはない
烈が＜春菜＞で先ほどの炎術のダメージを帳消しにすると、左京が前に躍り出た
「案外しぶといんだな……じゃあ、そろそろ今月の俺の見せ場、もらおうか」
左京の薙刀が二陣の風を生む
双光蘭斬（そうこうらんざん）が大百足の下半身を更に分かち、足の数を減らすことに成功する
「まだ死なないのか、本当にしぶといな――」
と、口元をゆがめたそのときだった
今にも挑みかかろうとしていた烈、槍を肩に担いでいた虚空、状況を見守っていた美月、そうして先ほど放った奥義の疲労で額に汗をかく左京
四人全員が、まともに大百足の術中に落ちる

大百足が鳴いたのだ
常世の夜に見入られるお覚悟を……、と鳴いたのだ

それは幸運ではなかった
ただの立ち位置の問題であり、さらに言うなれば前回の敗走から
虚空が学んだ、致命傷を避けるための隊列であった
すなわち、知恵であった
美月がただひとり、免れていたのだ、

「み、みんな……」
烈が、左京が、そして虚空までもが、本来瞳の意思が輝いている
べき場所が穴ぼこと化していた
初めから目のない空洞であったかのように、がらんどうとなって
いたのだ
見たことのない家族たちの姿に、美月は底冷えするものを感じて
いた
「ど、どうしちゃったの、そんな……」
鍔鳴りの音に美月はハッとした
刀を逆手に構えた烈が、骸骨のような顔で美月を見ていた

「や、やだ、そんな……正気に戻ってよ！　烈くん」
美月は両手を合わせて、真摯に祈る
「仙酔エビスさま、お力を貸して……」
酒の匂いのする風が、四人の間を吹き抜けた

「不愉快じゃな……」
虚空はまるで酔ったように回る頭のこめかみを押さえながら、奥
歯をかみ締める
図に乗っていたつもりはなかったはずだ

ここは朱点童子の本拠地なのだと知っていたつもりだった、だが、まだ用心が足りなかったのだと思い知らされた

心細さに目元を潤ませていた美月の表情が、ぱっと華やいだそのときの光景が、まぶたの裏に焼きついていた

愛娘に少しの間でもそんな顔をさせてしまっていた自分に腹が立ち、虚空は烈火のごとき怒りの術を選ぶ

「誠に不愉快じゃ……勉強代として代金を払おうではないか……受け取るが良い」

虚空は指を絡ませ、唇の端から詠う

「……死地堕つろ、天災此処に、白旗紅染まりけり……」

細めた目をわずかに開き、虚空は術を練り上げてゆく

もはや大百足の＜赤地獄＞も小雨ほども構わない

虚空の凛とした歌声に、烈のそれが重なる

左京の＜春菜＞の後、美月の鈴の音のような美しい歌声が絡まった

三重歌、＜七天爆＞――

「炎とは、こういうものである」

８６５のダメージが大百足を炎上させた

虚空たち四人は、養老水に丹を使用し、わずかな休憩を経たのち
銀の穴を飛び降り、亡者砂漠に立つ
火ふたつさまよい、一本の時のぼりの笛を入手したところで、つ
いに眼前に見えたは修羅の塔
地上から――天上から巨大な震動が響いてこようとも、その足は
止まらず
朱点打倒、そのただひとつの目的に向かう

第十一話－２８　１０２６年８月６編

＜地獄巡り入り口＞

ついに彼らは現れる
茨城大将である

地獄巡りに嵌められたフタを突破するために黄川人が取った策は、その穴を無数に開き、植物の茎を通る管のように、地上と地獄とを繋ぐという方法であった
巨大な地響きの後、昼子と夕子の周囲に十や二十を越えるほどの穴ぼこが出現したのだった

「お、おい、これマズくねーか？」
以蔵（いぞう）も思わずのけぞった

震動は断続的に続く
なにかが、大量の何者かが地下より迫ってきている気配を察知し、雑兵を蹴散らしていた以蔵はうめき、その直後――
穴と同じ数の茨城大将が――穴から飛び出てくる

昼子、夕子、そして以蔵の三名を取り囲むように土を突き破り、土砂を撒き散らしながらそれらが吼えた
冥府の番人の骸骨の首をはねていた以蔵は、槍を構え直し、やはりうめくより他ない

「なんてこった」
やつらは円陣を組み、こちらににじり寄ってくるのである
地獄を抑えていたつもりが、いつのまにか自分たちは地獄に縛られてしまった
なにも言ってこなかったが、恐らくは黄川人にしてやられたのだと、以蔵は唇を噛む

今や二十のうちひとつに過ぎぬ穴を護っている昼子と夕子は黙し、座したまま、目を瞑り何も語らぬ有様
鬼たちの力が今までの相手とは比べ物にならぬほどの強者と悟り、額に汗をかく以蔵である

「地獄の底から槍を取り返したときにも見たけどよ、こいつァ肝が冷えるっつーの」

以蔵ほどの男――今や日ノ本最強の称号を朱点童子・黄川人と二分するほどの男だ――が睨みをきかせても、やつらはまったく怯まぬのだ
距離を取ろうにも、辺りを囲まれ、さらに、昼子と夕子を護衛している以蔵には、下がることはおろか、満足に駆けることすらできなかった
いわば足に枷、だがその手に槍がある以上、以蔵に行うべきことはただひとつ

「まあ結局、斬るしかねーんだけどな！」

見える限り、同時にかかってきたのは三匹の茨城大将
腹を突き破り、柄で横っ面を叩き、拳で顎をかち上げて、膝で顔面を砕く

だが、茨城大将は並の鬼ではないのだ、耐久力があまりにも高すぎる
四合切り結んで……始末できたのは、ようやく一匹！

「冗談じゃねえ！　相手にしてられっかよ！」

振り返り、以蔵が見たのは、炎獣や犬じものに突かれ、あるいは喰われ、焼かれている姉妹の姿だった
彼女らは無抵抗でまるで鳥の餌のようにただじっと呪文を唱え続けるばかりであったのだ
そのあまりにも痛々しい姿に以蔵は内臓を抉られるような衝撃を受けた
あの強く凛々しい昼子がなぜじっと身を耐えているだけなのか、混乱しながらも＜印虎姫＞を放ち、彼女らを救い出す

「おい、大丈夫かよ、昼子、夕子……」
夕子はこめかみから血を流しながらも語らず、昼子は口元に笑みを浮かべて呪を謡いながら異なる声色でつぶやく
「大丈夫ですよォ、わたしたちは、しぶといんですからァ」
「だからって、オイ！」
穴から大量に羽ばたいてきた縁切りの群れ、前後から迫り来る茨城大将、それら全てを以蔵は己を中心とした＜芭蕉嵐＞で吹き飛ばし、ひとまずの時間を稼ごうとするものの、やはり茨城大将は仰け反らず、ならばと打突でようやく突き放す
早くも、息が切れてきた
ひとりでは無茶だ、守り切れるはずなどない
弱音が漏れる、しかし、昼子は大丈夫なのだと、微笑を崩さない

肩から、頬から、その高貴な肌から紅い血を流し、それでも一念になにかを信じているようだった

「私たちがこの場を戒めることにより、結局彼ら鬼は地獄を離れることができませんから」
「そうは言ってもな！」
槍を振り回し、飛び掛り、月牙を打ちつけてくる茨城大将を相手に、以蔵はこの上ない立ち回りを見せる
見せるもののそれでもまだ足りぬ
足りぬしわ寄せが昼子と夕子に傷痕を刻む
「このままじゃ、お前らが無事じゃ済まねーだろうよ！」

言ったじゃないですかァ、と昼子は血を垂らして、にたりと笑う

「葉月の終わりまでは、持ちますってネ」
その言葉の意味を戦いながら噛み砕いたときに、以蔵は血の雨を降らせながらも愕然としていた

（ありゃー、結界のことじゃなくて、お前らの命のことかよ――！）
神も鬼も人も朱点も、なんという壮絶さであろうか

＜修羅の塔1界＞

ついに彼らは現れる
茨城大将である

凍る寒さの砂漠を越え、火ふたつさまよったところで壬生川（みぶがわ）の面々は塔に辿り着く
巨大な石扉を押し開けると、中からは死臭のような篭った風が吹きつけてくる

左京は顔をしかめて、袖で口元を押さえる
それから平然としている面々を眺めて、不機嫌そうに――こんなところで上機嫌でいられる者が家族には居てほしくないだろうが――つぶやいた
「……ひどい臭いだ……」
梅雨時の夏よりも湿った空気が包み込み、粘着質な液体が滴る壁面や通路、修羅の塔の不快感は今までの洞窟と比較にならなかった

初めて足を踏み入れる左京は抵抗感があって当然なのだが、その一方、烈（れつ）は平然としていた
「別に、戦うのにそんなの気にしないよ、見えなかったり、うるさかったら困るけど」
「……烈は本当に、刀を握るともうそれだけになっちゃうんだな……バカになるんだな」
「この場では悪いことじゃないと思うけどさ！」
刀馬鹿から妹に目を向ける
「……美月（みつき）は、どうなんだ」
「うん？　ゼンゼンなんともないよ？」
「……なぜだ」
「美月の退魔の力ってのやつかな」
人間にとって匂いや味を判断する能力は、危機回避能力の一端であると言われている
有毒な臭いや危険な食べ物を見分けるための術だが、果たして、と烈は思う

「そうか、美月にはもう、気分を害する必要がないのかな……」
神に近しい美月にとって、人間の毒物など意味をなさないのだろう
「ええー、でもそれなんだか美月ちょっと寂しいよー、みんなと同じようにみんなと同じものを体験していきたいなあ」
「……まあ、普通の人になれたら、な」
鼻声で美月の蒼い髪を撫で、左京（さきょう）は＜白鏡＞を唱え出す

暗鬱な記憶を蘇らせて、嫌な気分に浸っていた虚空（こくう）は、それでも若い三人を眺めながら、小さくため息をついた

「まったく、楽しそうにしおって」
悪いことではない
だが、ここに辿り着くまでの疲労感と辿り着いてからの悲壮感に囚われて塔を登っていた以前の自分と比べてしまうと、なにやら複雑な心境になってくる
匂いやらなんやらで騒ぐ余裕など、あったかなかったか
若さゆえか、あるいはまばゆいばかりの輝きを持った少女の存在か

それはそうと、亡者砂漠の途中で手にした時登りの笛を、虚空はありがたく思う
だが足りぬ、一本ではまだまだ足りぬのだ

「それでは、烈、左京、美月、これよりな……最後の訓練を開始するぞ」
虚空の宣言に、三者三様の反応を返す若者たち
「えっ？」
「……えー」
「おー」
烈は驚き、左京はあからさまに嫌そうに眉を潜め、美月はなんだか楽しそうな顔で弓を持っていない方の腕を突き上げた

二兎を追う無謀な試みかどうか、まだやってみなければわからない

生き物の内臓の中のような塔の中で、騒がしくしている三人を背に、虚空は作り出した＜黒鏡＞の中から、茨城大将の影を索敵する

「ゆくぞ」

槍を床に突き刺すと汚濁が跳ね飛ぶ

それから印を結び、虚空は呪を唱えた

「春眠をむさぼりて悔なかりけり、水母の袂にて暁を覚えず……」

辺り一体を白い霧が包むと、茨城大将の動きがぴたりと止まり、立ったままびくともしなくなったのだ

術が決まったのだ

すると、虚空は槍を手に足を滑らせるようにして駆け、さらに槍の穂先を茨城大将の首に一気に埋め込む、そして真横に薙いで鬼の首の半分を千切る

振り返り、いまだ身動きを止めている茨城大将を親指で指しながら、突然のことに呆気に取られている若人たちに告げた

「これより、我らは目に入った全ての鬼衆を殺すぞ」

え？　と誰かが漏らし、虚空の背後、茨城大将が首から血を噴出しながらゆっくりと傾いてゆき、だが、足で踏みとどまった

「行け」

指図するよりも前に、動いている者がいた

烈が虚空の横を疾駆する

腰の鞘から刀を引き抜きながら、抜いた刃で茨城大将の頸部を斬る、その一撃は残った首の八分までを切断した

そうして烈は横に飛び退く、後に続く矢道を妨げぬよう

残った二分を貫いたのは、百発百中を越え、百発で千も万も中てる神の腕を持つ美月だ

威力、精緻さともに、人の能力と弓の性能を遥かに超えた技――
神通力は、例え楊枝を打ち出したとしても巨石を割るであろう
その矢は硬皮も剛骨も射砕き、ついに鬼の首を散った牡丹の一輪へと変えた

「……え？」
その様子をぼーっと眺めていたのは、ただひとり、出番のないままだった左京であった

「暗殺じゃ」

虚空は槍の先の血を振り払って、威風堂々と宣言した

「＜くらら＞で先手を取ってから、茨城大将のみを集中攻撃し、確実な一手目での勝利をもぎ取り続けるぞ」

かつての虚空ならば、決して講じることはなかったであろう作戦――まるで竜子が使いそうな詭計である――には、彼の決意が現れているようであった

「修羅の塔1界より6界まで、斬りながらゆくぞ」
脈動する不気味な塔の中で、その声が鐘のように響く
「時と丹と命の続く限りな」

「そういうの、結構好きさ」
烈が燃えた目で拳を握り締める
「強くなれるなら、大抵のことはやるからね、ぼくは歓迎だよ」
「美月もやるよ！」
遅れまいと手を挙げる美月

「美月が強くなって、おにいちゃんやパパを助けられるなら、いくらでも強くなるもん！　任せといて！」
「なにを！　ぼくだって負けないぞ！」
術や体力に優れている香家の美月に比べて、烈の強みは他にある
母である竜子から、更には祖母である柚子から受け継いだはずの、幸家が持っていた圧倒的な攻撃力――
だがそれは、いまだ開花せず

この面子で朱点童子を完殺し尽くすための、虚空による結びの秘計が、まだ成就していないのだ

「頼むぞ、烈」
「え、ぼ、ぼく？」
烈は少し目を丸くしたが、すぐに顔を引き締めた
「わかった、任せてよ、虚空さん」
そのときの烈は、もっと幼かった頃の、使命に心を躍らせていたときの瞳をしていたと虚空は思った

「烈くん、頑張ろうね！」
「おう！」
手をがっちりと組み合う美月と烈を、左京はずっと遠巻きに眺めていた

「……えー」
左京は携帯袋の中身を覗き込み、深いため息をつく
「……疲れそうだ……」
燃える烈や自己犠牲の塊である美月と比べて、今でも煮えきらぬ、なんとも人間臭い態度を貫く左京、まるで老人のような六ヶ月才であった

かくて、壬生川討伐隊は、塔を駆け上がる

〜〜

くららで後ろを取って、先制攻撃で茨城大将を殺し続けること――

およそ二十六回

四人の中での唯一の＜梵ピン＞使いである烈が最先手の場合、＜梵ピン＞を唱え、続く虚空が茨城大将の背後にいた雑魚――バサラや羅生門、炎獣などである――ごと貫き、より多くの経験点を勝ち取る型

あるいは思わぬ会心撃により手の空いた美月が、茨城大将の背に隠れる鬼を撃ち、虚空が引導を渡す型

さまざまな勝利の方式を得て、四人は着実に経験を積んでいた

無論、二十六回全ての戦いが大成功というわけではなかった

新たな笛を得た3界にて、烈と左京、ふたりの攻撃が茨城大将に避けられる事態が起きた

「げっ」
「……しまった」
調子に乗って、中ボスに奥義など使うのではなかった
左京は自分ひとり凹んだ疲労度に暗く後悔し続けるばかりだ

値千金の一手を与えられた茨城大将が選択したのは、一味の一匹、まさに獰猛な獣といった風貌の鬼――羅生門の生気を吸い取り、己の力を倍加させることであった

「なんと、そのようなことまでするのか」
決め手の一撃にと、槍を突き立てようとする虚空だったが、その槍が刺さらない
「難いな」
防御力が倍加しているらしい
だとしたら、当然――
「攻撃力もか……」
身の毛がよだつ
「美月っ」
息の根を止めろ、という意味で叫んだ烈の声を振り切り、しかし美月は術を唱えた
「わかっているよ、女の子は度胸と愛嬌だもんね」
うふん、と片目を瞑り、美月はその桃色の唇から呪を吹いた
「くくらら＞！」
この場面で？　という男三人の心の声が聞こえてくるようだったが
美月の術は、しかし、思わぬ結果を招いた
茨城大将が美月の術に飲み込まれ、見事、身動きを止めたのだった

「なんと」
「え、えええ」
「……すごいな……」

拍手するしかない
あとはもう、どうとでもできる、動かぬ茨城大将を刻み殺すだけだ

「えへっ」
若いからこその柔軟な発想か、あるいは天性の才能か
美月の笑顔の裏に潜んだ戦の才を今は頼もしく思うばかりである

～～

4界、5界、6界

それは、立ちはだかる茨城大将を全滅させた界である
あだし野の大群に襲われ、泣くほど痛い太刀風、芭蕉嵐の乱れ撃ちにより、慌てて引波の御守を使用し、逃げ出したこともあったものの、四人は総勢二十六匹の茨城大将を始末した

経験点だけではなく、思わぬ副産物も、あった

ひとつは女性専用体防具――聖霊の衣
もうひとつは、トツカの剣を遥かに上回る斬れ味を誇る剣――鬼切り丸、である

極光の輝きを放ち、角度により様々な色へと移り変わり続ける神秘的な衣に袖を通したのは、もちろん美月であった
「わーい、きらきらして綺麗ー！」
両腕を広げながらくるくると周ると、彼女の衣に流れ星が舞った

新たに手に入った装いに満面の笑みを浮かべ、はしゃぐ少女は非常に自然体であった
「……おー、似合っているな」
「うむ、良いな」
兄バカ、親バカに背を向けて剣を振っているのは、烈である
「鬼切り丸、か」
重心を確かめるように非常にゆっくりと構え、烈は水平に刀を立てる
「なんだか、まさに茨城大将や、朱点童子を斬るために生まれたような、名前だよね」
蛇くらいを一撃で始末するほどにまで腕を上げた烈が、感慨深くつぶやく
「良い銘じゃな、鬼切り丸か、げんを担ぐわけではないが、嫌いではない」
嬉しそうに舞う妹の姿を、左京はまだ楽しそうに――といっても表情はあまり変わっていないが――眺めていた

「でもさ、こういうの、一体誰が鬼に持たせているんだろうね」
「今までの七迷宮であれば、打ち捨てられた人々の財宝を勝手に漁っていたのじゃろうと推量できるが……地獄巡りか、まあ、恐らく朱点童子・黄川人の仕業じゃろうの」
「えっ、なんのためにこんな強力な武具を……ぼくたちに塩を送っているって？」
「そんなに気の良い童ではないわ」
虚空は失笑して、口元を吊り上げる

「餌に釣られて欲張る餓鬼を、畜生地獄に叩き落すための財宝であろう、それでいて、たとえ我らが手に入れたとしても、どうでも良いと思っておったのじゃろう」
「つ、つまり？」

虚空はさらりと言い放つ
「性悪、ということじゃ」
その言葉を飲み込みながら、烈は鬼切り丸を鞘にしまう
「なんかぼく、虚空さんの言うことを初めて完全に理解できたような気がするよ」
「かか」

左京はまだ妹の見目麗しい晴れ姿を讃えていた
せめて今だけは、と

もう少し休んだら、四人は再び上に向かうのだ

かつて、四ヶ月前に虚空が辿った道だ
この先にあるのは、敵のいない7界
そして、最後の敵が待つ最上階――終界

どちらからともかく、深い息をついていた
虚空も、烈も、言葉を紡ぐことを止め、静かに、美月の生き生きとした笑顔を見つめることにした

もうジタバタしても仕方がないから
挑むしかないのだから
時登りの笛三本を使い切るほどに力を蓄えた自分たちには、もう他にやるべきことがなかったから

せめて今だけは、
この地獄で、綺麗なものを見つめていたかったのだ
己が守るべき大切な笑顔を、しかと目に焼きつけていたかったのだ

それこそが、彼ら男たちの戦うべき理由なのだから――

	最大体力	技力
虚空	867	164
烈	764	140
左京	582	232
美月	836	137

携帯袋（30／30）

大甘露2つ　七光の御玉2つ
仁王水3つ　力士水5つ　神仙水7つ
その他、たすきや飾り、茶器、装備、有寿ノ宝鏡等、合計11個

以上

健康、忠心、ともに――問題なし

第十一話ー29　1026年8月7編

＜回想・出陣前＞

むせ返るように暑い道場の中、出陣当日の早い朝のことだった
虚空（こくう）に叩きのめされた烈（れつ）は、寝そべっていた
一体いつのまにかこれほどの実力差が開いたのか、理解できなかったが、それが虚空の真の力なのだろうとも思っていた
そんな烈に、虚空が告げてくる

「強さとは、一体なんじゃろうな」
「……なんですか？」
「弱いものが死に続ける中で……今まで、何度も何度も、壬生川（みぶがわ）の人間は己に問いかけてきたのじゃろうな」
「……強さ、ってまあ、色々ありますよね」
烈は仰向けになって、天井を見上げたまま、黙考する

「様々なものが、ある、じゃが、俺はつまるところひとつに収束すると思っておる」
虚空は木槍を立てかけると、烈に背を向けて腕組をした
烈は思う
年の功というわけではないが、自分は今から虚空ほどの激動を生きることはできない
何もかもを失い、年長者として、新たに守るべきものを手に入れ

て、更なる強さを得た虚空を越えることはできないのだろうかと、烈は不安に思う
虚空はもう、とっくに自分の知っている虚空ではなくなってしまったのだ
まさか、ただの一度も敵わずに負け続けるとは、今でも信じられない

烈は熱に浮かされながらも、血の気の冷えた頭でこう答える
「……戦って、勝ったほうが強い、負けたほうが弱い、じゃないですか」
「一対一なら、それも間違いではない」
虚空が締め切っていた道場の戸を開けると、外気と場内のぬるい空気が混ざり合い、わずかな涼気がやってくる
「虚空さんはぼくより強い、そういうことでしょう」
「いや、違うのだ」
虚空は外の日差しに目を細めていた
「強くなければ弱いということではない、壬生川の人間は皆強いのだ」
「……」
この人はなにを言い出したんだろう、という目で、烈は仰向けになりながら首を傾けて虚空の後ろ姿を眺める

「俺が烈に勝てるのは、ただ単に俺が烈の癖を知っており、それの対処、返しを熟知しているだけじゃよ、じゃが、だからといって俺が烈より強いということにはならぬのじゃ、なぜなら、強さとはすなわち、“なにができるか”であるからな」
きょとんと寝転がる烈に、虚空は言葉を噛み砕く
「先々代の当主が討伐隊、柚子（ゆずこ）、瑞穂（みずほ）、ほたるを思えばわかる、補助術、技力、それに術の抵抗力に長けた瑞穂、体力も高く、非常に優れた水の技を誇り、自らも止めを刺すことができた弓使いのほた

る、そして、壬生川家史上、最大の攻撃力を持っていた柚子、誰もが強く、そうして、誰もが弱かったのじゃ」

虚空の言葉に、烈は疑問を抱かざるを得ない

「……弱い？　その人たちが、弱かった？」

「瑞穂の攻撃力は貧弱そのものであった、ほたるの守りの稚拙さはお粗末なものであり、柚子に至っては、その火薬のような攻撃力と引き換えに命中率が低く、勝負を賭ける場面での一手はいつも博打のようなものじゃった」

「……」

そりゃまあ、欠点を上げれば、そういうものだろうけどさ、と烈は口に出さず思う

「俺は確かに術も使え、打たれ強く、幼い頃から鍛錬を続けてきた槍術は、雑兵程度なら一蹴するだけのものとなっておる」

「こ、今度は自慢？」

「じゃがの、俺ではまだ足りぬのだよ」

虚空は腕組をして、烈に向き直る

「全てを切り伏せる、圧倒的な破壊力……前回の朱点童子討伐隊には、それが足りていなかったのだと、俺はそう考えるのじゃ」

烈はゆっくりと身を起こし、木刀を拾う

「……美月は？」

「あやつは俺と一緒じゃよ、なにもかもが優れておるが、かといって戦局をひっくり返すような技があるわけではないのじゃ、厳しい見方じゃが仕方ない、美月は若すぎる」

四ヶ月才といったら、虚空にとっては選考試合に一度出陣しただけの頃だ

「……えーと、じゃあ、左京」
「やつはいかん、ポンコツじゃ」

ひどい
烈はいつでも眠そうにしている三ヶ月年下の少年の顔を思い浮かべ、同情する

「母親の月見も、瑞穂をさらに上回るほどに才能のない女であったがの、左京も然りじゃ、月見は年の功と努力で才の欠片もない己が身を磨いておったものの、左京はその上に怠惰ときておる、最近やる気になっておるとはいえ、到底は間に合わん」

ひどすぎる
左京には聞かせられないな、と烈は苦笑いをする
「じゃが、＜卑弥子＞を覚えられたのは、やつにしては僥倖じゃな、ようやく使い道が出たというところじゃ」
臥家の人間は、最後まで土の才に恵まれていた
朱の首輪を装着した究極の全術士、竜子に継いでの、二人目となる使い手なのだから

「烈、おぬしの生まれは幸家なのじゃ」
「……う、うん」
「代々、壬生川家を統率してきた本家、二代目当主幸四郎、三代目当主初子、五代目当主以蔵、六代目当主伽子（とぎこ）、力斗、九代目当主柚子、そして、竜子、その血を唯一引いている男なのじゃよ」
そういわれると、妙にプレッシャーを感じてしまう
烈は木刀を握り、首をひねる
「烈、おぬしは強い、間違いない、俺が保障する」
「……でも、虚空さんには、まだ今月に入ってから一度も勝ててないよ」

「馬鹿を言うな、おぬしが決着をつける相手は俺ではあるまい」
「……まあね」
「拳で龍を砕いた竜子が、刀を持った姿が、おぬしなのじゃ」
「そこまで言いますか」
虚空に褒められて、烈はどうしてだか気恥ずかしさを感じてしまう
「おぬしが決着の一太刀を放つその瞬間には、俺が全力でおぬしを守る」
「……」

「烈、朱点を斬れ」

～～

修羅の塔最上階、七界
その奥まったところにある紅色の文様の前に立ち、烈は腰に帯びた刀に手を当てる
決して人に向けることはできないと確信するほどに禍々しいまでの斬れ味を持つ妖刀――鬼切り丸
自分がこの刀を手にしたのは、定めなのだと烈は感じていた

わずかに緊張をしているらしき左京、それに意気込んでいる美月、相変わらずなにを考えているのかわからない顔の虚空、それぞれの横顔を眺めて、烈はともに歩みを進める
並び立つ彼らが、自分に力をくれる

「……烈、俺は全力でお前を助けるからな」
「ん？　う、うん」
どうしたの左京、と烈が尋ねるよりも早く、左京は視線を前に向けながら続ける
「……一歩も動かずに、術を唱え続けるからな……覚悟しろよ、俺は逃げ続けるからな……」
「左京、キミ、この期に及んで」
そこまで自分を貫かれると返す言葉もない、烈は頬をかく
完全な人間に戻った世界で、一番幸せになれるのは左京なのかもしれない

眉を吊り上げた美月が、拳を握りながら告げる
「美月も、力士水の雨を降らしてあげるからね！」
「あ、ありがとう、でもさ、ふたりとも、一番は自分の身なんだからね」
「わかっているよ！」
「ああ……俺は、なにがあっても危険を冒さないと誓おう」
「左京はちょっと、冒険したほうがいいと思うけどさ！」
というノリもそのままに、一同は印の中に足を踏み入れる

＜終界＞

家族、手と手を握り合う暗闇、虚空が烈に告げた

「壬生川の明日を、掴むぞ烈」

烈は大仰にうなずく

「わかっているよ、虚空さん」

＜胎の間＞

「やあ」

朱点童子・黄川人を、烈は初めて見る

生物の胃の中のような気味の悪い広間の様相も、毒のような臭気もまったく気にならない

烈は朱点童子・黄川人を見つめていた

（こいつが……壬生川家の、宿敵……）

とてもそんな風には見えなかった

桜の色を纏う鬼の子は、肉の色をした椅子に腰をかけて、頬杖をついて佇んでいた

その奥に、囚われた女性がいることも気づかず、烈はこれから天運武運を賭けて戦い抜く相手の顔を眺めていた

（……壬生川のご先祖様に、短命と種絶の呪いをかけて、ぼくの母さんや、おばあちゃんや、そのずっとずっと前からの人たちからもずっと恨まれ続けている……）

朱点童子は、烈を見ていない

烈と年の頃が変わらないような少年は、やあ、と片手を挙げる

「初めまして」

妙に耳に残る独特な調子の声だった

その目は討伐隊最年少の少女、美月に向けられている

「はい、初めまして！」

美月が場に似つかわしくない礼儀正しさを発揮し、腰を非常に美しい角度に折る

その後頭部を、半目の兄が小突く

「誰に挨拶しているんだ……」

「えっ、あっ、でもご挨拶はキチンとしなさいってパパも！」

美月は虚空を見上げるが、虚空はなにも答えなかった、そりゃそうだ、と烈は内心でうなずく

なんといっても、あの少年は――月見さんの仇なのだ

そりゃ怒るよな、と烈は思う

自分もまた拳を握り締めているのだから

いつも目を尖らせて、厳しく怒っていた月見の、ふとしたときに零す笑顔が目の裏に浮かぶ

月見の穏やかな死に顔を、烈も今でも覚えている

「知っているかナ、ボクの母さんが産んでくれた子らを、必死に地獄から出さまいとけなげに身を削っている人たちのこと」

「もちろんだよっ」

美月はグッと拳を握る

「京の街を守ろうって、頑張ってくれているんだよ！」
朱点童子は失笑する
「じゃあその傍らに、一匹の鬼がいたことも知っているかナ？」
美月はきょとんとして、首を横に振る
「じゃあそれが、君たちのご先祖サマ――五代目当主サマだってことにも、気づかなかったんだね」
アハハハ、と朱点童子の哄笑が広間に響き渡る

烈や美月が虚空を見るが、依然、虚空は表情を顔には出さない

「奴らは、救われなかった魂までも利用して、自分たちのために操り、それを“切り札”なんて大層な名前をつけて、匿っていたんだよ、さすがのボクも気づかなかったナ、そこまでするとはさ！」

すると、烈の見ている前で朱点童子は凶暴な面構えへと変貌する
その金色の眼は明王のように尖り、真っ赤な髪は乱雑に蠢き、狩衣に描かれた龍の柄から、青白い気が立ち上る
小さな体躯から放出される景色が歪んで見えるほどの強大な神通力に、烈は足で不気味な地面を踏みしめた
気を抜けば吹き飛ばされてしまいそうな重圧である

「神々に踊らされる、ボクと君たち、まるで、双子のようだね」

遥か地上のほうから微震が伝わってきて、塔がわずかに揺れ動く
人々を守るための戦いが激化してきているのだ、あちらも終局を迎えようとしているのかもしれない

「さあ、人間の存亡でも、地上の平和でも、何でも好きなモノを勝

手に賭けて、踊り明かそうゼ！」

蠢動とともに、朱点童子の足元が徐々に競り上がってくる
土煙があがり、朱点童子の腰掛けていた椅子が実は真っ白な龍の鼻の先だったのだと、烈たちは知る

「どうせあいつらにも、ボクたちにも、朝なんか永久に来ない、時間は、いくらでもあるんだ！」

朱点童子の眼が龍のそれへと変貌する
烈はようやく気づいた
朱点童子は美月を見ているか？　否、朱点童子は最初からなにも見えてはいない

憎悪か、憤怒か、獣心か、悪意か、暴虐か、邪念か、
あるいはその全てを称えて、個を個とも認識せずに、ただ自分を滅ぼそうとやってきた壬生川の人間を見据えているのだ

これが、朱点童子・黄川人
災いの渦にして、天地神明の破滅を誘う禍津日神

朱点童子は刀を手に、八ツ髪の頭の上で立ち上がる
それが戦いの合図

「さッ、お祈りは終わりだ！　かかってきな！」

＜決戦＞

朱点童子は術攻撃を好む
敗戦の経験は皮肉にも、戦術を思索する上でなにものにも代えがたい価値を持った

前回、＜石猿＞三手から入ったのは、遅すぎたのだ
今回では、＜石猿＞は一度までとし、その後は力士水や＜梵ピン＞を適度に使い、状態異常は即座に回復し、後はひたすらに朱点童子、八ツ髪の攻撃を耐えるのだ
そうして、一瞬で決着をつける
これが虚空の採った策である

それが正しいのか、間違っているのか、すぐにわかる
その結果が、数十手後に、出るのだ

壬生川は同じ相手に二度負けたことはない
その自負が、虚空にはある

初手から朱点童子は甲高い笑い声をあげる
「そういえば、ちょっと思い出してきたよ」
朱点童子は十一代目当主、壬生川虚空を指差す
「こないだも、遊びに来た人じゃないか君は、そんなにここが気に入ってくれたなんて、嬉しいねェ……ククク、どうだい、あれから

健勝かい、一緒にやってきた“お仲間”さんたちは元気かナ？」
虚空は地に唾を吐き、朱点童子を冷徹な瞳で見返す
「竜子も月見も死んださ」
「おンやァ」

笑う朱点童子と虚空の間で、見えない神力がぶつかり合い、あるいは散ってゆく

「貴様には本当にいろんなことを教わった、勝つためには何をすべきか……どれほどのものを捨てねばならないのか」
虚空は剛槍山嵐を地に突き刺す
「朱点童子・黄川人、もはや我らの物語は終わるのじゃ、決着をつけるぞ」
「今だっ」
そうして、虚空の横から顔を出した美月が、力士水ではなく、紫色の玉を掲げた
「え？」
「……どうして、それなんだ……？」
次々と疑問の声をあげてきた兄たち

「約束したから！　私も混ぜてくださいねェ～って言われてさっ」
美月は笑顔で答える

「七光の御玉！」

真っ白な光が大広間を包み込む

地獄の果て、胎の間に、朱点童子と向かい合うようにして、ひと

りの神が現れていた
天界最上位の神であり、美月の産みの母、太照天昼子の来臨である

現れるなり、頭からドクドクと血を流していた血まみれの昼子は、
空蝉の姿ながらもにこやかに手を振った

「あらァ、まァまァ～、黄川人くんお久しぶりですねェ、元気していましたかァ、ちゃんとご飯食べていましたかァ、風邪など引いておりませんでしたかァ～？」

こんなところまで来ても、相変わらずの調子である
彼女を見て、朱点童子もまた目を細める
突然の再会にも驚愕の動揺はないようであった

「しつこくボクを裏切り続ける姉さんじゃないか、久しぶり、大江山決戦での逢瀬以来かナ？」
朱点童子が醜い鬼の身体に封印された戦いのことである
だが、昼子は悩むそぶりとともに頭に手を当てて、首を傾げてみせた
「そうでしたっけ、そんなことありましたっけ、まァまァ、そんなことは良いとしてですねェ」
昼子は笑顔で手を打つ
「黄川人、私は今でもあなたを救う気でいるのよ」
ふたりの会話を聞いて、烈と左京が反発するような叫び声をあげた
朱点童子は沈着、ただ口元の笑みを深くするのみ
「へェ～、どの面下げて信じろと言うのか、ボクにはまったく理解ができないけれどネ、もし本当にそうなら」
朱点童子は壬生川の連中を指差す

「今すぐそこの中途半端な生き死人たちを皆殺しにしてくれたら、少しは話を聞く気になってあげられるけどネ」
烈が怒鳴るが、その声もふたりの世界には届かない
「ううん、それではだめ」
相変わらず、太陽のようににっこりと笑い続ける昼子
「それでは、また同じことの繰り返しよ、ようやくここまで来たンだもの……エヘヘ、黄川人も神々も、それに人も救う最後の一手が揃うのよ」
「やれやれ、相変わらずえげつないことを考えているみたいだね、姉さんは、それでボクはどうすればいいんだい？」
肩を竦めて笑う朱点童子に、昼子は両手を合わせて頭を下げた
「とりあえず、死んでくださいナ」
満面の笑みの昼子が手を振ったその瞬間、＜七天爆＞を遥かに上回る火炎の渦が朱点童子を飲み込んだ
胎の間が真っ赤に照らされ、壁という壁がこげて真っ黒に染まってゆく
その炎に背を向けて、姉妹の再会絵図を灰燼に化した昼子は、微笑みながら今度は壬生川に頭を下げる
「というわけですのでェ、当主様、バーンとォ、頼みますねェ、いいですか、いざとなったら指輪が当主様を守ってくださいますからねェ！」
「うむ」
炎と昼子の影が消えると、黒い煙の向こうからこちらに紅色の霧が噴射されてくる
完全に油断していた面々は、虚空も含めてまともに烈火――八ツ髪の吐き出したものだ――を浴び、一同は１７０前後のダメージを

食らってしまう

頭の中の困惑も疑問も全てが吹き飛んでしまうような炎に、烈は我に返る

そうだ、全ては戦いの後だ

朱点童子は火の粉を払いながら、衣の衿を整える

「まったく、死ぬのはどっちだか、って話だよナ、万全の炎ならともかく、これっぽっちじゃ焚火にもなりゃしないよ、姉さんも、ああなっちゃもうおっしまいだね」

３１５のダメージを平然と受け止めた朱点童子を前に、四人は各々の武器を構えた

そうして、当主が告げる

「＜石猿＞から入る、後のものは支援術を続けろ、ただし左京は＜卑弥子＞を詠え、一時たりとも途切れさせるな、一族の誰かが倒れたら貴様のせいだと心せよ」

「父さん、怖いんだが……」

着物の裾が黒ずんでいる左京が、苦みばしった表情とともに顔を引き締める

「……ボンシャラヌサ　ピンヴダラ　シャザリワプラヌ……＜梵ピン＞！」

烈の身体から立ち上った神気が、一族の闘志に火をつけてゆく

力士水のおよそ二倍の強化を可能にする＜梵ピン＞は、この戦いになくてはならない術法だ

「……卑弥が世は　千代に八千代に……すゝきばの　まもりとなりて　茅の絶むまで……＜卑弥子＞」

土の匂いが薫ると、討伐隊の傷がみるみるうちに癒えてゆく

未熟な左京の術力では大甘露ほどの効力はないが、それでも＜春菜＞に比べれば二倍に近い治癒力を持つ術である

六手目が終了し、再び順番は美月に巡る
「力士水だよ！　存分に味わってね！」
ビンのフタを開けると、力士水が宙を舞い、まるで雨のようにそれぞれに降り注ぎ、その身体へと加護をもたらす
そうして、再び回ってきた八手目――
龍の上に立つ朱点童子の、その左手が青白い火花を花火のように散らしていた

「来る」
虚空のつぶやきに、烈もまた刀を握り直す手に力が篭った
話に聞いていた、朱点童子の必殺技

「極楽も　地獄も武王の　雷切の……」
朱点童子の手の中に生まれた悪意は、一気に膨れ上がり、指の隙間から漏れた電光によって朱点童子の笑顔が青白く染まる
童子は右手を突き出し、そうして呪を結ぶ
「……獅子の心に　裂けぬ空なし……！」
――手のひらから、雷が放たれる
人々の希望を喰らう龍は、咆哮と共に飛翔し、そして、生者を蹂躙する
朱点童子の＜雷獅子＞だ

美月すらたまらず悲鳴をあげるほどの稲光が、四人の身体を徹底的に痛めつけた
開戦の狼煙となるその豪雷は、壬生川の面々に３５０の数値を越

える威力を叩き出した
虚空も烈も美月にも、深刻なダメージであるが、それ以上に、左京にとっては指先まで引き裂かれるような激痛であったろう
最大体力５８２のうちの、３５０ダメージ
差し引き残り――体力は２００弱である
だというのに、左京は声をあげなかった

「左京！　しっかりするんだ、左京！」
連打で倒れるのは間違いない、それどころか、八ツ髪の追撃ですら危うい体力だ
痛みに顔をしかめながら烈が揺らすが、しかし左京は動かず目は閉じたまま、その様子を見た虚空が、彼の症状に気づく
「早々に、＜寝太郎＞か……」
「えっ」
美月もだ
その場に倒れ、＜雷獅子＞によって火傷を負った身体を無防備に晒し、苦しそうな寝息を立てていた

「そんな、美月がこんなにあっさりと、術にかかるなんて……」
痺れる己の身体を抱きながら、烈がうめく

八ツ髪にやられたのだ
朱点童子の術の直後に、＜寝太郎＞が討伐隊の後列を無力化したのだ

「正義は勝つって、まーだ、信じてるのかなあ？　アハハハハ、ハハハ……ボクは信じてるよ、だから、今回もボクの勝ちさ！」

一族の体力は傷ついたまま、左京と美月は術に囚われた
第二次朱点童子決戦、九手が済んだところであった

いまだ壬生川討伐隊は、朱点童子に一太刀も浴びせてはいない

第十一話－３０　１０２６年８月８編

続く行動順を勝ち取った虚空は、迷わず神仙水を振りまいた
先に治療するのは、父のひいき目を持っていたとしても、さすがに左京からである

「まったく、このポンコツが……」
「……雷撃を浴びて目覚めたら、父さんの不機嫌そうな舌打ちが目の前にあったときの気分が……わかりますか……」
左京は頭を振りながら起き上がる

「虚空さん、一個目の大甘露、使うからね！」
あとで怒らないでね！　といった声に、虚空は当然とばかりに首肯した
「＜光無し＞対策のためになるべく多く取っておきたかったが、そんなことも言っておられん」
もし＜春菜＞を唱えたところで、次に＜雷獅子＞が来たらおしまいだ
虚空は次に、まだ自分の近くで呆けている左京を蹴り飛ばし、命ずる
「左京、美月を救え」
「……わ、わかってる……」
復帰した左京は、美月に神仙水を使う

こうして、とりあえずは手当てが済んだのだ
＜雷獅子＞、＜寝太郎＞ひとつずつにこれだけの大騒ぎだ、先が思いやられる

だが、烈は仲間たちを見回し、確かな手ごたえを感じていた
自分の唱えた＜梵ピン＞、それに美月の振りまいた力士水一度、
その分だけ、自分たちは進んでいるはずなのだから

朱点童子が残像をも残さぬ速さで移動し、その刀を何者かに突き立てる
「とりあえず、叔父としての“ご挨拶”かナ」
標的は、美月であった
それも＜石猿＞が水に流されたばかりの
「これはどうもご丁寧にっ」
対する美月は朱点童子の刀に脇腹を裂かれながらも、下唇を噛んで耐え忍んでいた
我慢強さは美月の美徳の一つである

朱点童子は後方に大きく飛び退き、再び龍の上に収まった
その踊るような剣術が美月に与えた傷は、１９２のダメージ、血は流れたが浅い
聖霊の衣に身を包まれた美月の防御力は、朱点童子の刀すら弾き返すのだ

「美月、平気か」
「ちょっと熱いけど……でも、ゼンゼン大丈夫、雷のほうがずっとビックリするよ！」
「左様か」
「まあびっくりしたことには……違いないけど……」
「ともあれ、＜石猿＞はいらぬ、烈（れつ）よ」
わかっているとばかりに、烈はもう唱えていた
「本日二度目の……＜梵ピン＞！」
「美月も続くよ！」

赤の波動が四人を包み込む中、力の雨が降り注ぐ
こうして、＜梵ピン＞二回に、力士水二回
前回に猛攻を開始したのは、それぞれ一度ずつを使った辺りであった
今はもう、その二倍の強化がかけられている
時と共に失われてゆき、＜寝太郎＞の一鳴きで水泡に帰す、そんな砂上の楼閣のように計り知れない価値を持つ強化術だ
速く速く生きてきた自分たちが、今こそその速さが試されている場面なのだ

「物は試しか」
虚空は剛槍を振り回し、その穂先に小さな雷光を宿す
虚空の蒼い目が鈍く輝いた
身体から金色の霊気が立ち上る
非常に高度な練気法だ、心の火を燃やし、技の火、水、風を混ぜ、体の風と合わせ練り上げる

「すげぇ……」
「パパ……」
烈や美月すら息を呑むほどの迫力
その成就を阻止しようと、龍が炎を吐き出した
「うおっ」
隊士や息子が猛火に押し流されようとも、虚空は決して態勢を崩さぬ

槍の先端に灯った雷火が膨張し、蒼球と化し、その珠から漏れ出た雷が床や虚空の肌を焦がしてゆく
部屋には再び雷気が満ちた
朱点童子の＜雷獅子＞に匹敵するだけの神霊力を一点に集めて放つ、虚空の奥義――

「敵陣に走れ、落雷撃（らくらいげき）！」

山嵐は雷槍となり、朱点童子に迫る
地面をズタズタに引き裂きながらジグザグに駆けた迅雷は、八ツ髪と、朱点童子の身体を見事に突き抜けた
樹の幹が割れるような音が響き渡る
「ふッ」
鋭い呼気を吐き出し、虚空が槍を払うと、紫電の残片が霧状に舞い、すぐに溶けて消えた

苦悶を上げて身をよじる龍、その頭上で煙を上げて後ろに倒れこもうとする朱点童子が、傾いたまま奇妙な角度で停止した
震えていた朱点童子が、筋力ではない異質な動きで起き上がる、その顔にはいまだ笑み

「そういえばこんな味だったかな、血って」

朱点童子の唇の端から紅が垂れる
それを親指の腹ですくって妖しく舐め取る朱点童子へのダメージは、９７１
微々たるものだと断じるのも厭わぬ虚空
「まだか」
虚空は渾身の奥義の手ごたえに不満足の表情を崩さない
せめて壬生川討伐隊の一巡以内に、朱点童子をしとめ切れるだけの破壊力を――
「まだ、程遠い」
虚空は機運を手繰る

左京が＜卑弥子＞を唱え、美月の刀傷と、龍の炎による炎症を癒す
続いて、烈へと下された指示
三度目の、＜梵ピン＞
未だ、攻撃許されず
「……虚空さん」
「烈」
ふたりの視線が交わる
烈は首肯する
「わかった」
烈に虚空の考えは読めない
だが、それでも、揺るぎない事実がある
もはや虚空は、全幅の信頼を寄せるに足る、壬生川家当主なのだ
強いとか、弱いとかは、今はもういい
彼が望むなら、もう烈が考える必要はない
烈は刀を握る

鬼切り丸
そうだ、鬼切り丸だ
やはり定めだったのだ

天啓が閃き、烈の心はついに少年のそれを脱却する
烈は解を得たのだ
心のよりどころが見つかったのだ
烈自身ですら、己が境地へと辿り着いたのだと悟ることに微塵の躊躇もなかった
“なにができるか”が強さの証だというのなら、己は虚空の命令に従おう

こうして、烈は最終決戦にて、ついに変わる
幸家（こうけ）の魔人、祖々々々父の名を受け継ぐために変わる

鬼切り烈へと変わるのだ

当主の振るう一本の刀へと、少年の精神は変容してゆく
これほど名誉なことはない
「……＜梵ピン＞」
烈の瞳が刃のごとく研ぎ澄まされてゆくのを、誰が気づいたろうか

「たった一度の抵抗を最後に、亀のように首を竦めたまま、死ぬのかい、腰の刀は飾りかァ？」
少なくとも朱点童子は若き鬼切りにまったくの無頓着であった
彼の興味の大半は姉の娘、美月と、死地を脱した壬生川の当主、虚空に注がれているようであったからだ
誰も、朱点童子の挑発には乗らない
左京は事実亀のように身を竦めていたし、虚空は隊の長として打ち合いを望んでいるわけではない
烈は言葉を聞いてはいたものの、その的外れな妄言に毛ほども心は波立たぬ
そうして、美月があかんべいをした
「美月が持っているのは弓だもん！」
「おや、そうかい？　お嬢ちゃんは刀じゃなくて良かったネェ」

蝋に火の種、咲くように
右手に、神雷宿りたる朱点童子が、笑いながら美月に告げる

「こいつは太刀とか長物が大好物だからね、使わないんだったらサ、今すぐ手放したほうがいいゼ」
美月の表情に怯えの色が混ざるのを、朱点童子は愉悦の表情で見下ろしていた

彼の言葉と共に、
＜雷獅子＞が戦場を駆け巡った

青の閃光、轟音、烈震
そして、脳が激痛によって支配される

たったの一撃で、やはり左京の意識は遠くなる
間髪入れず、美月は己の唱えられる最大の回復術、＜春菜＞を詠う
「おにいちゃん……」
大甘露の使用は、虚空に許されなかった
さらなる不幸を招きいれぬための次善の策を、美月は快諾したわけではなかった
「助かって……」
だが、虚空の岩のような形相が、美月に決断を促した
美月もまた、父を信じているのだ
歯がゆさと信頼が混ざり合い、美月は複雑な表情で呪を詠いあげる

龍が動く

八ツ髪が狙うのは、左京――ではなく、烈、＜石猿＞に守られているはずの烈
雄雄しき龍の猛った尾は、一念に高ぶり続ける烈を叩き潰す
＜雷獅子＞によって重症を負い、弱っているところにトドメのような一撃である
術によって護られているはずの烈に、２６９のダメージ
烈の重防具が砕かれる音が響いていた

虚空は惑った

顔には出さないが、惑っていたのだ
誰を助けるべきか
当主として、皆の命を預かるべき者として、決断せねばならない時がある
逡巡は、龍の跳ね上げた岩が地に落ちたその瞬間までであった
虚空は指を二本立て、口元の前に構えて、詠う
＜円子＞を詠う
「命ある限り、戦い抜くのだ……烈」
烈に詠う

続いて、ようやく左京の番が訪れる
＜雷獅子＞の後に＜春菜＞を一回唱えたきりの一同である

ここで＜卑弥子＞を唱えて、死地を脱却、というわけには

いかなかった

は

左京よりも、朱点童子が早かった
残酷な事実だが、朱点童子のほうが、早かったのだ

このとき左京は、己の修行不足を呪ってはいなかった
自分の命を案じるだけの余裕もなかった
（美月……！）
死を司る青が、朱点童子の右手に集まってゆく
その輝きに照らされながら、ただ、妹の無事だけを祈っていた
左京が振り返ったときに見た美月は、やはりこちらを見つめていて

口元に手を当てて、目を大きく見開いていて、まるで自分を心配するような顔で
（……お前だって、刀傷、浴びたんだぞ）
なんだよその顔は、と左京は思っていた
左京に似つかわしくはない話であったが、偽りではない
左京は死中において、美月が助かればいいと、それだけを願っていたのだ

朱点童子の、連撃
＜雷獅子＞の、連打である
災禍の皇子の桃色の唇が、呪とは異なる別れの言葉をつぶやいた

「サ・ヨ・ウ・ナ・ラっとォ」

真っ青な光が、暴れ狂う獅子と化して、鎖から解き放たれる

同等ではない、まるで虚空の落雷撃とは同列には扱えない
命を削って放つ虚空の奥義に比べ、＜雷獅子＞を撃つ朱点童子のなんと涼やかな顔か

縦横無尽に駆け巡る獅子の爪には、逃げ場も無し
牙は壬生川の心臓に深々と突き立てられた

獣王の咆哮は、全てを灰燼に帰してゆく――

煙が晴れたとき、左京と美月はまだ立っていた

美月は朦朧とした表情をして、焦点の合わない目を胎の間の中央に浮かべながら、ぼたぼたと全身から血を垂らし、烈に肩を支えられて、立っていた

左京は出血の激しい左の側頭部を手で押さえ、薙刀を杖代わりにし、手の爪を全て剥がされたかのような形相をして、前後不覚の有様で、立っていた

それぞれ３６と、７８の体力が残っていた

もう、ためらってなどはいられない
ここで烈は最後の大甘露を使う
「ぼくたちは……負けられないんだから……」
さすがの虚空も止められなかった
２５手目にして、壬生川討伐隊は、大甘露を失った

左京は一心不乱に、まるでそれだけしかないように、＜卑弥子＞を唱えだす
祈るべき神も、願うべき神も、もういない
だから、左京はがむしゃらに唱える
救うのは自分だ、助けるのは自分なのだと
「この年で……妹殺しの咎なんて――背負って、たまる、かよ……」
左京は＜卑弥子＞を詠う

そうして、美月の番が回ってくる
「＜石猿＞を使うんだよ、美月」
美月の細い肩を掴む手を、「もう大丈夫」と、振り解かれ、ひとりで立つ彼女を不安そうに見守る烈が、そう言った
「俺も……烈に、賛成だ……」
術に心血を注ぐ左京が、薄目を開けながらそう言った
美月は、ここがまるで戦いの最中であることを忘れたかのような顔で、振り返り、虚空に許しを請うような目を向ける
虚空は、うなずく
「好きにせよ」
美月は我が意を得たりとばかりに、頬肉を緩める
「うん」
父ならきっと、そう言うと思っていたのだろう

聖霊の衣の袖から伸びた、戦いの傷痕が色濃く残る紅色の手が、紐を掴んでいた
それは無地の携帯袋であった
「美月ももう、これ以上、みんなが傷つくのを、見ていたくないよ」
その中から力士水を取り出し、美月は強化の雨雫を垂らす
「だから、美月も、今は我慢するから」
美月が心優しい娘だというのは、疑う余地もない
しかし、この期に及んで倒すべき朱点童子に感情移入し、情けをかけるほど愚かな女でもなかった
美月は全力で事に当たっていたのだ
彼女は最初から、朱点童子を殺す気でかかっていたのだ
そのために自分がすべきことを考えて、美月もまた、力を溜め続けていた
賢しく情の深い美月といえども、壬生川の無念は知っている

無論、申し訳ないという気持ちは絶えず、ある
朱点童子にすら、持ち合わせている
だが、それは別の話だ
今だけは、己の心も美月は我慢を続けていた
ただ今だけは、必滅の権化と成る覚悟を、美月は抱いていた

三度の＜梵ピン＞、そして、美月が使い続けた三度の力士水
「虚空さん」
歯を食いしばり、美月の覚悟を甘んじて受け入れた烈が、それを悟る
「強化限界だ」
命の危機をも物ともしない美月の最後の一手によって
ついに、訪れたのだと
「待ち侘びたぞ」

第十一話－31　「極楽往生」　1026年8月9編

八ツ髪が悠長に煙などを吐き出す
呼吸が思うようにはいかなくなり、目から涙が零れるが、先ほどの＜雷獅子＞に比べればまるで悪ふざけのような痛みだった

そうしてついに、虚空（こくう）の出番がやってくる

だというのに、虚空は自ら挑みかかりはしなかった

彼を打ち倒す役目は、もはや虚空のものではなかったのだ
虚空の傍らには、十一代目当主を凌ぐほどの高みに上りつつある、ふたりの子らがいたから
壬生川美月（みつき）、それに、壬生川烈（れつ）
槍使いの虚空では決して手に入らない、熾烈な奥義を習得せし子ら
虚空は彼らに、壬生川の明日を託す

傷ついた討伐隊の面々に、虚空が行うべきは、静かに瞑目し＜春菜＞
「我らの想いを、剣に込め放て、烈」

怪鳥のような叫び声を上げて、朱点童子が立ちはだかった
「そうは問屋が卸さないってもんサァ！」
なんと、朱点童子が狙いを定めたのは、今まさに奥義を打とうと力を溜めていた烈であった
ずぶりっ、と肉と骨を分かつ異音が軋る
朱点童子の刀は、鎧の砕かれた烈の腹に深々と突き刺さっていた

虚空の脳裏に、月見（つきみ）の刺された瞬間が思い起こされた
「――」
声にならぬ叫号を虚空が発する
もはや、烈には＜石猿＞の効力も切れていたのかもしれない
「烈……！」
「烈くん！」
朱点童子が刀を引き抜くと、烈の下腹から水芸のように血が噴き出た
その一撃は、烈の体力を半分近く奪うほどの威力があった
ゆっくりと、烈が膝をつく

だが、その目は生きていた
笑いながら、距離を取ろうと跳躍する朱点童子
その童に、烈は真顔で告げる

「……今度は、ぼくの番だ……」

まるで身体に傷ひとつないかのような洗練な動作で、烈は立ち上がる
両足でしっかりと地を踏みしめて、烈は刀を抜く
腹に力を込めると、臓腑に残っていた血液が押し出されるようにして零れる
ここまでが、本当に長かった
途方もなく待ち続けた
これまでに比べれば、今一時の肉体の損壊など、とても気にならなかった
烈の両腕から再び金色の神気がほとばしる

「おっと、剣比べかい？」

嘲う朱点童子に、烈は構えながら首を振る
「違うよ」
烈の真っ赤な短髪が、いつのまにか肩に垂れるほどに伸びていた
その赤髪の隙間から、烈の目が緑色に光る
「これは、ぼくたちの、思いの丈だ」
下段から一気に振り上げた烈の刀が、風を生む
まさに一閃
逆袈裟の太刀筋は、敵前列を切り裂く真空の風となり、朱点童子の狩衣とその背後の障壁を引き裂いた

真空源太斬（しんくうげんたざん）

烈が復活させたその奥義は、しかし、朱点童子の中核には届かなかった
口笛を吹く朱点童子は、斬撃によって破壊された修羅の塔の壁面を背に、斬られた己の衣装を見下ろして、おどける
「大したモンだね、短い人生で修行して、その結果がコレかい？大したモンだよ、ホンットにサ」
斜めに狩衣が裂かれていたが、それも朱点童子の指の一撫でで元に戻ってしまう

一方、刀を振るった反動で、烈は大きく態勢を崩して、再び膝をついていた
だめだ、圧倒的に威力が足りない
さらに奥義を振るったことによる代償で、烈は血を吐いた

「烈……無茶するからだ……」
むせこみながら、烈は脳内で左京（さきょう）に言葉を返す

（ここで無茶しなければ、どこでするっていうんだよ）
刀を握る手に力が篭る
（まだだ……まだ、ぼくの力は、こんなもんじゃないはずだ……）
少し前の、＜梵ピン＞を唱えたときの自分の感覚を思い出そうと励む
（力んじゃダメだ……腕力じゃなくて、神通力で朱点童子を断つんだ……）

朱点童子に笑われたって、構わない
何度雷撃を浴びたって、諦めたりしない
最後の一太刀が、朱点童子を斬罪することができるのなら

（ぼくは刀だ……鬼を斬る、刀なんだ……）
烈の目が再び澄んでゆく

「ったく……絶対に、死なせないからな、お前も、だよ……」
四度目の＜卑弥子＞の使用によって、左京の術力もついに底が見えてきた
だが、もし術力が切れてしまったそのときは、魂を削ってでも家族を守る心積もりであった
生きている限り、彼らが必ず何とかしてくれるはずだ

一方、烈が刺される光景は、美月の心を大きく強く揺さぶっていた
なぜだか見えてしまったのだ
母、月見が、朱点童子に胸を貫かれて、かかしのように崩れ落ちる姿が
それは虚空の心を透かしたのか、あるいは幼い頃に遠見を行ったためであったか

ただ、天真爛漫に生きてきた美月の、初めて家族を失うかもしれないという動揺が、心の平行を崩させた

「だめだよ、そんなの」

美月は目の端に涙を浮かべる

大甘露が尽き、＜雷獅子＞を打ち込まれれば回復に手一杯、もうあとは強化術が徐々に切れるのを待つのみだ

あるいは前列の虚空と烈が＜寝太郎＞に掛かってしまえば、今までやってきたことの全てが無駄になってしまう

ようやく辿り着いた、勝機が、潰えてしまう

誰かが、死んでしまうかもしれない

「そんなの、絶対、だめ……」

美月の血は覚醒する

少女の蒼い髪が床を覆うほどに広がり、伸び、その目は黄金の輝きを発する

美月、齢四ヶ月才にして、ついに、戦いに目覚める

彼女の放つその神気

太照天昼子の血を受け継ぎ、そして、太照天昼子を、遥かに凌駕せしめるものであった

「ママ、美月に、みんなを守る力を、頂戴、今だけは、人間を止めるから、美月、今だけは、お願い……ママ！」

美月の髪が大河のようにたなびいた

燦爛と耀く姫は、星を射落とすように弓を引く

神童と詠われた朱点童子ですら、覚醒した美月の絢爛な才気に目を奪われるほどである

「――こいつは、姉さんの」

朱点童子の仰天する様が、美月には止まって見えた

「連弾弓（れんだんきゅう）――！」

ふたりの視線が交錯し、朱点童子がまたなにかよからぬことをつぶやこうとしたその時、その首に、まず一の矢が突き刺さる

音を越えた光の速さの一撃は、９２４のダメージを与える

射抜かれた朱点童子が八ツ髪の頭の上から転げ落ちるのが、美月の目にゆっくりと映る

音も色も消えた世界で、美月は腕の腱が引きちぎれても構わないと思うほどに強く、強く、弓を引き絞った

二の矢が、朱点童子の左肩を貫き、その腕を根元から弾き飛ばした

ダメージ、９３８

心臓の鼓動だけが、痛いほどに耳の奥に響いた

胸が苦しい、腕が軋む、息が詰まる、口の中は血の味しかしなかった

だが、美月は構わず矢を番えた

もしこの命が果ててしまっても――

三の矢は落ちてゆく朱点童子の、その胆に刺さり、そして光の粒を撒き散らしながら爆ぜた

総計２４７２のダメージが、朱点童子を襲う

美月の髪が舞った

朱点童子の背後の壁が、音を立てて崩れてゆく

左京がよろける美月に駆け寄ってきた
「美月、お前……」
霧雨のように細かな髪が散り、美月の髪は元の長さへと戻っていた
左京が顔を歪めたのは、それが理由ではない
「おにいちゃん……美月、やったよ……でも、もう……」
たった一度の奥義で、美月の両腕は血まみれになっていた
しばらくは、箸すらも持てそうにないと、美月は残念に思う
「美月……美月……！」
左京が珍しくうろたえていた
見たこともないような真剣な顔をした兄の腕に支えられ、美月はなぜだかはにかんでいた
「おにいちゃん」
今までありがとう
心の中から湧きあがった思いに、美月は蓋をする
この場で告げてしまっては、それが遺言になってしまうような気がしたのだ

その直後、壬生川一族を炎が包み込む
八ツ髪の火炎の吐息だ
左京が必死に美月をかばおうとするが、時は遅し、美月はまともに灼熱の炎を浴びてしまう
目を閉じようとする美月を、左京が必死に揺り起こす
左京は必死に＜卑弥子＞を連打する

その一方で、ひとりの少年が“気”を溜めて、奥義の準備へと入っていた

誰が信じられるだろうか

その神気が、先ほど決死の奥義を放った美月を、更に上回るほどの気勢であったなどと

「焦るね、さすがにこいつはサ」

右手で自らの頭を掴んでいた朱点童子は、壬生川討伐隊の中で天を貫くほどの“気”を高め続けている少年を見て、思わず舌打ちを漏らした

その姿、美月の矢によって首をはねられ、左腕を根元から千切られた面妖な状態であった

手に持つ首が、せせら笑う

この程度では、まだ死なないのだと

だが間違いなく痛手を受けているであろうことを、虚空は看破していた

朱点童子は何気ない顔で頭を首の上に乗せ、左腕ともども元通りに復元させたが、一射が竜子の飛天脚に匹敵するだけの威力を持つ美月の奥義“連弾弓”を全段食らったのだ、平気でいられるわけがない

夜明けの光は、差し始めていた

たった一度の奥義で、美月が闇を払ったのだ

虚空、月見、竜子らが成し得なかったことを、やってのけたのだ

だから、あと、もう一押し

それもまた、信じるしかないことだった

朱点童子が弱っている姿など、誰も見たことがなかったのだから

虚空は美月の奥義が与えた痛手を信じ、さらにこれから烈が放つ

であろう奥義の威力を信じる

だが、易々と命を差し出すような朱点童子ではない
鬼の皇子もまた、こちらを確実に葬り去るために、芽を潰そうとしてくるのだ
「未来を奪われるのは、慣れているンだろう」

雷雲のように電荷じみた“気”を己の体に溜め続ける烈
朱点童子は、その彼に再び狙いを定めた
右手の刀の斬れ味は、先ほどの烈でとうに保障つき

「また一からやり直しなよ」
朱点童子もまた、その奥義に見覚えがあったのだろう
だから、烈を止めようと刀を構えながら、龍の頭から飛び降りた
「烈ッ！」
左京が叫ぶ

今の烈は完全に無防備だ、ここで烈の急所に剣が突き刺されば――
烈の落命は、免れない――

「アハハハハ――」

それどころか、烈はすでに一度朱点童子に刺されている――
烈は身動きを取れない――

朱点童子の剣が踊る――

――しかし、烈は虚空に守られている！

「なんだってェ！？」

光が瞬いた

朱点童子の目論見を、壬生川当主が阻む

“自軍への攻撃を無効に！”

「“無敵陣虚空（むてきじんこくう）”」

朱点童子の腕一本の突きを、虚空が剛槍山嵐の柄で受け止めていたのだ

軋みをあげるも、決意を秘めた剛槍は折れぬ

「なんてこった」

虚空と朱点童子が組み合うようにして面と面を付き合わせる

互いに、獰猛な笑みを浮かべている

「おしまいじゃ、朱点童子・黄川人」

虚空の背に、炎上する山の煙のように黄金色の燐火を放つ烈が見える

彼の周囲には、地獄の底だというのに、幻の草花が芽吹いているのだ

朱点童子は、思わず刀を手放し、後方へ飛び退く

「退散、退散」

逃さぬ――

「行けェ、烈！」

烈が刀を一気に抜き放つ――

「烈くん！」

「斬っちまえ！」

美月と左京がその背を押す――

「壬生川の明日を――」

烈は強く大地を蹴り、跳躍し、刀を大上段に掲げ、吼えた

「掴むんだあああああああああァ――！」

振りかぶった鬼切り丸を、烈は朱点童子の脳天に叩き落とす

少年と少年が交差したその刹那、光華が溢れた

朱点童子の頭に打ち下ろされたその一太刀は、朱点童子ごと床まで切り裂き、

と　　まら　ない

地響きすらなく、足元が消失する感覚

烈の一太刀は

修羅の塔の終界を砕き、

七界を断ち、

六界を割り、

五界を四界を――三界　二界　一界を両断する

烈の一太刀は、修羅の塔をも断獄する

轟音とともに真っ二つに割れてゆく修羅の塔の、その一界にまで
天井と足場ごと落下し、粉塵が巻き上がり、あまりの衝撃によって、
さすがの虚空も体勢を崩した
真っ赤な霧のような塵芥により、一寸先も見えなかった
耳鳴りが収まらない

朱点童子はどうなった

やがて、少しずつ血煙が晴れてゆく
虚空の視線の先には少年の背――

地面の上におわんを被されたような様相となった修羅の塔一界――
――もとい終界の広間の中央に立ち、神気の霧散した烈がゆっくりと
刀を鞘にしまう

鍔鳴りの音を仕舞に、彼の奥義が完成する

そして――
朱点童子・黄川人が、断末魔を上げながら砕け散る――

烈両断殺（れつりょうだんさつ）――

少年は４２２６の威力と共に、ここに朱点討伐を成し遂げる

生き残った茨城大将どもは瓦礫に潰されて、残らず絶命し果てていたようであった
蜘蛛の子が散るように、鬼どもがどこかへと逃げてゆくのが見える
薙刀を地面に突き刺した左京が、なんとか美月を抱きかかえていた
「無茶するぜ……マジで……」
「でも……すごいよ、おにいちゃん……」

誰の顔も、塵に塗れてひどい汚れだったが、壬生川の一同は生きていた
皆、無事であった

烈は刀を腰に下げ、額の汗を拭いながら、清々しく笑う

「できたよ、虚空さん」

ああ、と虚空もまた満足げにうなずく
朱点童子の妖力が絶たれることにより、瓦礫の下敷きとなった八ツ髪もまた、激しく蠢きながら土の中に還ってゆく
崩壊して左右に分かたれた修羅の変わり果てた塔跡を背に、朱点童子の体力を一人で奪い去った少年は、精一杯の誇らしげな表情で、拳を握った
竜子に見せたいような、若武者の晴れ姿であった

「我らの、勝ちじゃな」

烈はおろか、虚空でさえ知らなかったひとつの事実がある

両親から授かった遺伝子により、成長値が定められる数値の総称

――素質

壬生川の歴代素質値、

第三位、虚空

第二位、美月

当然のように続いたこの順位の先を、烈はおろか、虚空でさえ知らなかったのだ

第一位が烈であり、美月をも遥かに上回る点数を叩き出していたということに

烈は本家一番の剣士などではない

烈は、壬生川最強の男であったのだ

第十一話ー３１　「極楽往生」　１０２６年８月９編（後書き）

出陣・地獄巡り（虚空・烈・左京・美月）

第十二話ー1　1026年8月10編（前書き）

虚空　1才2ヶ月
烈　9ヶ月

左京　6ヶ月
美月　4ヶ月

第十二話－１　１０２６年８月１０編

ついに戦いは終幕へと至る
七年に及ぶ悲願が今ここに果たされるのであろうか
それはまだわからない

一族がこれまでに積み重ねてきた軌跡
それにより、神と人と鬼を巡る物語は、新たな結末を産むのだから

これより先は、壬生川一族の選び取った戦記
すなわち、掴み取った結末である

＜戦いの終わり＞

蕩然としていた広間に、灰が舞い散るように、朱点童子・黄川人の残骸が光を放ちながら消えてゆく
それに伴って、朱点童子の霊力で動かされていたであろう八ツ髪もまた、地の底に沈んでゆくのだった
それらの光景は、今までの鬼と化した神々たちと、同じ馴れの果てである
着衣までも消滅してしまうと、胎の間から完全に朱点童子の気配が消え去ったことを、虚空は間違いなく嗅ぎ取る

この世の悪が滅び絶えてしまったかのように、辺りへと静寂の帳が降りた

今になって、じわりと汗が背筋を伝い落ちた

（終わった、のか？）

腰から力が抜けて、ようやく虚空（こくう）はゆっくりと構えを解いた

「……疲れたぜ……」

左京（さきょう）が深いため息をつき、それがまるで一同の気持ちを表現しているようだった

美月（みつき）などは感動の面持ちで歓声をあげるのかと思いきや、彼女までも夢心地にいるかのような顔で、自分の肩をさすっていた

「……なんだか、すごかったね、烈（れつ）くん」

「ああ、うん」

烈は己の刀が引き起こした天変地異のような一撃を思い起こす

皆に支えられての奥義だ、あれほどの威力はこれからの人生で二度と出せないであろうと感じられた

しかし、とにかくひとつだけわかっていることがある

「でも、良かった」

烈は傷だらけの面々を眺める

左京は術力が枯れて、まるでひなびた大根のような顔をしてその場にしゃがみ込んでいた

美月は両腕をかばい、それらはまだ満足に動かないようで、時折苦しそうな顔を見せているようだった

そして虚空もまた、常人ならざる精神力により平然を装ってはいるものの、朱点童子の剣を受け止めた奥義によって、健康度を著し

く低下を招いていた
それでも、良かった
「みんな、無事で」
烈の素朴な一言に、美月もまた笑みを返す
「……うんっ」
その笑顔で、ようやく四人の間に流れる雰囲気が、緩和したような気がした
「そうか……終わったのじゃな……」
虚空もまた、目の前の光景を実感することができるようになった
壬生川一族の悲願が、今ここに果たされたのだと
初代当主から続く、7年に及ぶ戦いが、終わったのだ
胸に思わず熱い想いがこみ上げてくる
指にはまった当主の指輪すら、熱を持っているようだった
「当主になるのだと決意し、地上に降りて以来、不断の覚悟で励んできた結果が、ようやく実を結んだというべきか……」
「……それって、まるで父さんが大層な人みたいな言い草だけどさ……」
左京の白眼に、烈が口を出す
「虚空さんは立派な人だよ」
「おい……どうしたんだよ、烈、父さんの昔を描いた武録を、お前も見ただろ……」
仲間の裏切りに会い、左京は烈を睨む
「おかしなことを言うんじゃな、左京よ、俺にやましいことは何一つないぞ」

「本人はそう思わなくても……」
口内で言葉を濁す左京を横目に、虚空は表情を柔らかく崩す
「しかし、これで一人きりの帰路に付かず済む」
そんな風に言い合う男たちを、美月が幸せそうに見つめていた

やがて、胎の間に光が満ちる
そう――
囚われていた神の、解放である

朱点童子に磔にされていた女神が、解放されるのだ
彼女の手枷、足枷が外されると、女神は壬生川一族の前に跪くようにして、倒れた

長い黒髪を持つ妙齢の女性は、烈に肩を貸してもらい、立ち上がる
○「ありがとう……やっと終わったんだね……」

彼女の声は、岩に染み入るかのようなほどに、濡れていた

「朱点からふたつの呪いの話を聞かされてからは、毎日が地獄だった……朱点を倒すためにあの子を生んだこと、何度後悔したか、できるなら、代わってやりたかったよ……でもあたしたちは死ねないから……それにいつかこんな日が来るって、心のどこかで期待してた……」

壬生川の一族は、そんな女神の述懐を、四者四様の表情で聞いていた

「ああ……信じてよかった！　よーく顔を見せとくれ！」

雨の上がった空のような顔で微笑む女神は、なにかに気づいてハッと息を呑んだ

「あッ……そっか……そうだよね……」

烈や美月が問いかけるが、女神は「ううん」と首を振る

「あたしのあの子は、もうこの世にはいないんだね……あたしったらバカだね、頭ではわかってたつもりなのに……そっか……そうだよね、だから代わりにおまえたちが、ここにいるんだもんね」

この女神こそが、初代壬生川当主――
壬生川玄輝の母、お輪である

太照天昼子の命を仕り、地上に下り、侍の男、源太と一児を設けたその後、鬼朱点に囚われ、息子には短命と種絶の呪いを、そして自身には永遠の闇と、鬼を産み出し続ける宿命を与えられた女神なのだ

「そうだよね……でもおかげで……自分の血を分けた子孫の、こんなに立派な姿を見ることができた！　いつか、うちのヒトやあの子に、あの世で会ったとき、胸を張って報告できる！」

女神の顔が再び華やぐ
そうして彼女は、ひとりひとりの壬生川の子たちの頭を撫でて、

抱きしめてゆく
母のぬくもりに包まれる彼らを、お輪は柔らかな声でねぎらった
「本当にありがと……きょうまで、よく頑張ったね」

フハハハ
アハハハハ
フハハハハッハハハ

魂が凍りつかされる、そんな信じられぬ声だった
弛緩していた筋肉が、岩と変わったかのように動かなくなる

「いいねェ、生き別れた母親とその子孫の感動のご対面！　あぁ…
…泣かせるねェ……ちょっとくさかったけど、幕間の寸劇としては
悪くなかったよ」

「ばかな」

間違いなく、朱点童子・黄川人の気配はなかったはずだ
一体どんな芸当か
よもや、本物ではあるまい
そう、思いたかった
だが無理であった
もう壬生川は災いから目を逸らすことができない

例え、悪夢のような現実だとしても

「さーてと、役者も揃ったところで……第二幕の始まり、始まりィ！」

災禍の皇子は嘲う

こっちだよ！

こーっちだよォ！

＜転＞

そのとき、お輪の腹の中になにかが滑り込んだ
それが一体何であるか、気づいたものはいなかった
後ろに倒れた女神の胎が膨らむ、その瞬間まで――

「あッ……」

目を背けたくなるような光景とともに、お輪の面持ちが強張ってゆき、
破裂するかのように、彼女の表情が崩れた

「ギャあああああ……！！」

身重の女神は絶叫と共に、しばらく指先まで痺れたかのように痙攣していたが、それも終わると、今度は不敵な笑みを見せたではないか

「へへへへ……ここは、暖っかくていいや」

その声には、この世のものとは思えぬ血なまぐささが滲んでいた
お輪は――いや、もはやお輪と呼んで良いのかすらもわからない女神の顔をしたものは、細くて白い指先で、自身の腹を愛おしそうに撫で回す
そうして面をあげて、こちらを睨んでくる

「さあ、どうだ!?」

朱点童子はあがく
生き残るために、ではないだろう
ひとりでも多く、一族を道連れにするために、だ

「ボクを殺せば、この女も一緒にお陀仏だわよン」

壬生川たちは包囲の輪を広げざるをえない
目の前のものがなんであるのか、まだそれを一同が完全に理解しえていないのだ
いや、認めたくはないと言ったほうが正しいのかもしれない

「あーら、どーしたの？　かかってこないのかしら？　じゃ、こっちは勝手に、戦闘準備をさせてもらうゼ、ハハハ……」

しまった、と思った者もいた
ここで攻撃を仕掛ければ良かったというのに
彼らは目の前の光景に目を奪われ、千載一遇の好機を逃してしまう

お輪の身体はみるみるうちに変身してゆく
柔らかな肌を突き破り、鋼鉄のような皮が全身を覆った
白魚の指は龍の爪と化し、その体躯は数倍に肥大した
まるで産卵を待つ女王蟻のような怪物が、そこに誕生した

奇怪な化け物のその胸の中心に、お輪の首から上だけが生えているのだ
苦悶に耐えるような表情で、女神は固く唇を結んでいた

「弱点は、ここだわよ、さッ、遠慮なくグチャグチャにして～ン」
どこから声を出しているのか、わからなかった

朱点童子の三本指が、生えたお輪の顎を撫でる
お輪は目を見開いて叫ぶ
「斬れッ！　この鬼を殺してッ！！」
その瞬間、まるでお輪を後ろから抱くような位置に、朱点童子の首が生える
皇子のひどく安らいだ表情は、今こそが至福のときだと物語っているようであった
「そんなひどいコト言うなよ、母さん……ふたりで力を、合わせてさあ！　こいつらを、ぶち殺してさあ……！」
お輪の頬に顔を寄せて、朱点童子は愛を囁くように艶やかに目を閉じる
「その後でまた、優しく抱いてくれよ、母さん……ボクのこと、愛してるって、言ってくれよォ……」
「は、早く！！　迷うな！！　ヤれッ！！」
「みんなで、地獄に堕ちようよ！　ねッ、母さん……」
朱点童子は高々と跳ぶ
みんなとは、一体誰を指すのか
神か、人か、壬生川か、それとも、己か――
否、
その、全てだろう
朱点童子・黄川人は、新たなる異名を持った

阿朱羅――
阿朱羅の眼が、一族を貫いた

＜第二戦＞

一族は再び武器を構える
だが、彼らは満身創痍だ
虚空も烈も美月も、奥義による反動で満足に立ち回ることなどできそうになかった
左京もまた、技力の枯渇が見えている

対する変身後の朱点童子――阿朱羅は、動きこそ鈍重だが、その邪悪な気配はまったく衰えていない
烈の両断殺は、阿朱羅の縁や怨念を断ち切ることはできなかったあれだけの技を放っても倒すことが不可能だったという事実が、壬生川の肩に重くのしかかる

虚空ら四人はそれでも、阿朱羅を倒すより他ないお輪を犠牲にしてでも、だ

そして、そんな壬生川一族にお輪も運命を賭けた

お輪は、自らの命を託した！
全員の体力技力を全回復！！

――しかし阿朱羅がそれを阻む！
――狂った光が、託した命を掻き消した！！

「君たちに教えてあげる、これが最期の言葉だ」

阿朱羅は傷ついた壬生川の面々に、下腹部の目を開く

「短命と、種絶の呪いについて――」

阿朱羅は語る

「最期に言おう……ボクを倒せば、呪いは解ける――と、君たちは思っていたのだろう！　だが、それは間違いだ！」

阿朱羅が跳躍し、壬生川一族の陣形の中心に降り立つ

「ボクを倒し、そして、君たちの当主の命を生贄として捧げることにより、悲願は成就されるのだ！　神の連中がそれを黙っていたことは、ボクにとって好都合だった、なぜなら――！」

阿朱羅が右手で烈を、左手で左京を掴む
虚空は槍を構え、気合を放つ

「貴様――」
一族を高々と掲げ、阿朱羅は早口にまくし立てる
「なぜならば、それこそが君たちの気概を仕留めるのに足る呪いの言葉であったからサ」
「ばかめが」
あざ笑うのは十一代目当主虚空

「それしきのことで心を揺らがすものが、一族にいるはずがないであろう、元よりこの命、壬生川の御家のためには惜しくはない」
そうだ
自分の命は４ヶ月前に失われたも同然
今更何を惜しむことがあるか

虚空は呼気と共に、槍を前に突き出し、阿朱羅の足に刺す
思った通り、阿朱羅の動きは鈍い
これならば、お輪の加護が失われ、さらに手傷を負った一族でも仕留めるのは不可能ではない――
そう、虚空は思っていた

しかし、烈や左京はただ苦しそうに呻き声を発し、必死にもがいているばかり
あまつさえ美月など、弓を構えることをやめ、阿朱羅と虚空を交互に見比べているのだった

「どうしたのじゃ」
阿朱羅は腕を振り回し、握ったふたりの少年たちを地面に叩きつけた
「ぐあっ」
「く……」
彼らは広間を転がり、止まったその後に、腕の力で状態を起こし

てつぶやく

「だってさ……そんな、そんなのって……」

烈はどうしようもなさそうな顔で刀を握り締めながら、もう一方の指で地面の砂を掴む

「アイツを倒したら、虚空さんが、死んじゃうってことでしょう……そんな……」

まるで呪いで縛られたかのような形相である

「馬鹿者が、あやつの妄言に惑わされるな！」

その叱咤も、烈たちにはさほど効果を持たなかった

「父さんは……それでいいかもしれないけど……俺たちの気持ちは……」

「左京！」

その間にも阿朱羅の暴虐は続く

「アハハハハ！」

阿朱羅は地面からいくつもの岩石を呼び出し、それらを次々と天に浮かべ、壬生川へと降り注がせた

土の術法＜魔王陣＞をまともに浴びた面々は這いつくばったまま血を吐く

「なぜそうなるのじゃ……」

片膝を突いた虚空は、やはり腕から血を流す美月に問いただす

「美月……おぬしは、このような争いを、終わらせるのではなかったのか！」

「そうだけど！」

美月が金切り声をあげる

「でも、パパがいなくなるのは、イヤだよ！」
「甘いことを言うでない！　ここであやつを殺せねば、また同じことの繰り返しじゃぞ！」
「それでもッ――」

阿朱羅は再び呪を唱えていた
大地を突き破って現れた水流はやがて大津波となり、術とは思えぬ迫力をかもし出す
水の術法＜真名姫＞が四人を襲い、全身の骨をバラバラに砕こうと荒れ狂う
痛みや、息苦しさ、高ぶった感情などが、壬生川一族の判断力を奪う

「ここで朱点童子を討ち取らねば、全てが水泡に帰すのがわからんか！」
虚空は、目の端に涙を浮かべる美月の聖霊の衣の衿を強く掴み、引き寄せた
「一族の悲願を晴らすときは今じゃ！　私事に気を取られてどうする！　戦え、美月！　戦ってやつを打ち倒し、生き延びろ！」
「パパの命と引き換えなんて、美月はイヤだよ！」
「美月！」

薙刀を持ってはいるものの、攻撃する意思など残っていない左京が、立ち上がりながらつぶやく
「でも……嘘かもしれないよな……アイツの言ったことが真実だって確証がどこに……」
視点が揺らぐ
阿朱羅が笑う
「ボクは呪いをかけてやった本人だぜ？　ボクより神連中を信じるってほどおめでたい頭を持っているンなら、どうぞやってくれよ！」

おおっぴらに胸を突き出す阿朱羅から、左京は見えない力を感じたように気圧される

阿朱羅の発言を受けた左京は、できるのなら本当に虚空が犠牲になるとしても、阿朱羅の首を獲る、そのことで烈や美月に恨まれるとしても、構いやしない、そう考えていた
だが、どうしてなのか――
いざとなって、身体が動かないのは

そうとしているうちに、阿朱羅は指に炎を点す
「きっと後悔するよ」
小さな火はやがて巨大な炎となり、ついには不死鳥へと化けて一同に迫る
火の術法＜鳳招来＞は力強く羽ばたくと、火炎の羽を撒き散らしながら、壬生川の身体を焼き焦がす

阿朱羅が今までに使うことのなかったその強力な術の連打に、誰もが真っ赤な顔をして、辛そうに喘いでいた
その中でも、奥義を放ったばかりの烈と、体力の上限の低い左京の傷は深い

「ならば、俺ひとりでも――」
虚空の槍が阿朱羅の爪と激突し、火花を散らす

だが虚空といえど、たったひとりで阿朱羅に敵うはずがない
それでも己の運命を知り、自らが死ぬとわかりながら槍を振るう父親の姿を、美月は滲む視界の中に納めていた
ああ、どうして涙が出てくるのか
美月にはその理由がわからない

もっと他に、なにか方法はなかったのか
両手両膝をついてうずくまる美月はやがて、天に祈り出す
空の見えない地獄の底で、今も呪を唱え続けているふたりの神に
問う

「教えて、昼子おばちゃん！　本当に、もう手段はないの！？」

泣きながら叫ぶ

「みんながみんな助かって、無事に帰れる方法はないの！　美月たち、そのためにがんばってきたんだよ！　なのに、なのにさ――」

美月をかばおうと走った烈が志半ばで倒れ、すぐに左京がその後を追った

「おにいちゃん、烈くん……」

虚空が死闘を繰り広げ、美月はその光景をただ眺めることしかできない
もう、敵わない
阿朱羅が腕を振るい、虚空に新たな傷を刻むたびに、お輪が自分もまた斬られているような顔で辛そうに目を瞑っていた
これが、阿朱羅の望みなのか

「どうして……」
こんなことを、望んでいるのか
「教えて……昼子おばちゃん……」

みんなで、地獄に堕ちようよ――

阿朱羅の声が耳に強く残って離れない
やはり、もう、答えはひとつなのか
美月は力の入らない腕で、背負った弓を構え、精一杯引き絞る

「阿朱羅を、討つしか……ないのなら……」
目の端から涙が零れ落ちる
だが、それでも、
それでも美月は――

番えた矢を放つその瞬間に見えたのは、巨大な眼と、その不気味な瞳から放たれる魑魅魍魎を内包した光であった
真っ向から浴びてしまっていたのだ

そうして――
美月の意識も潰える

「美月！」

もはや半死半生の体となった虚空の叫び声が、虚しく響く

～～

なぜ、昼子は答えなかったのか
一体、地獄巡りの入り口で、なにが起きていたのか

茨城大将が取り囲むその中心
真っ赤に塗りつぶされた光景がある

高々と無数の槍に突き刺された太照天昼子の屍が掲げられている
その脇に、太照天夕子の骸が打ち捨てられていた

もはや門番の失せた地獄からは、雲霞のごとく鬼が涌き出ている
葉月の終わりが近づき、以蔵は昼子と夕子の前で、力尽きたようにうずくまっていた

地獄の蓋が開いたそのとき、密かに阿朱羅の手により、迷宮の鬼たちが解き放たれたことを虚空や以蔵は知らない
その中には、番人としての役目を与えられた、元天界の神々も含まれていたのだ
七迷宮の化け物たちは、一斉に進軍を始めた

もはや神や人に対抗するだけの戦力は残っていない
京都炎上の報が届く時もまた、近づいていたのだ

第十二話―2　1026年8月11編

以蔵（いぞう）は再び暗闇の中にいた

幾度となく味わった絶望の底である
願っても、望んでも、どうしようもないことがあるのだ
死力を尽くしても、叶わないことなど山ほどある
それが、現実であり、世間なのだ
壬生川（みぶがわ）と言えど、その掟から逃れられはしない

母を救えず、家族を救えず、
妹を救えず、子を救えず、
昼子も救えず、夕子も救えず、
人も救えず、仇も討てず、

灼熱の自責に焼かれ、この身に残るものはなんであろうか
憎しみか、怒りか、いや、この際なんであっても構わない

茨城大将の何匹かが身じろぐ以蔵に気づく
以蔵の眼光が真っ赤に染まっていた

「力が手に入るなら……なんだって……」

それがどんなに浮世の理から逸脱したものであっても

その正体が、正気を失わせ、死に至る呪いであっても

「構わねえ……オレは、鬼を、斬る……」

以蔵の髪が揺らめく
軋む肉が弾け飛ぶ
男は再び鬼と化すのだ
その結末がどうなったとしても、もう、獣となった以蔵には理解できないだろう
鬼の屍の山の上で、永遠に戦い続け、そして果てるのなら僥倖だ

戦場ヶ原に、生暖かい風が吹いていた
そのとき、どこからか自分を呼ぶ声がした

＜胎の間＞

同時刻――
壬生川の希望、美月（みつき）を奪われた虚空（こくう）は、ひとり阿朱羅に立ち向かっていた

虚空は健康度を燃やしつくし、最後の力を振り絞る
それは寿命であり、魂であり、命そのものだ
美月が、烈（れつ）が、左京（さきょう）が倒れた今、戦えるのは虚空ただ一人であった

だからこそ、虚空は阿朱羅を討たなければならない
「地獄に堕ちるのは、俺と貴様じゃ」
虚空と阿朱羅の神気が交じり合い、地獄の底に風を呼び起こす

そんな虚空の決意を、阿朱羅が嘲う
「今さら、勝てると思っているのか？」
「だが、やらねば皆が死ぬ」
虚空は運命に抗う
「情けない真似はもう見せられん」
「意地で命を落とすなんて、くだらないねェ」

阿朱羅の腕を、地面を転がって避け、虚空は肩口に槍を刺す、効いている気がしない

「ぬしが言うことか、黙って眠っていればよかったのじゃ」
「無念を遺したくはないンだよ」
「人のような言葉を抜かすな、貴様の進む先にはなにもない」

阿朱羅の放つ青白い稲妻と、虚空が最後の力を振り絞って打ち出す紫の落雷撃が、空中で激突し、それぞれ反発して巨大な火花を散らす
最後の一撃はわずかに虚空が勝る、だが、そこでもう虚空の健康度は底をついた

「虚無！　結構じゃないか、この世界の原初の姿に戻るだけサ、人も神も、またそこから始めればいい」
「付き合ってられぬ、そんなものはひとりでやれ――」

それから二合三合打ち合ったばかりで、虚空は膝をつく
元々朱点童子の太刀筋は力任せの無茶苦茶なものであったが、今の阿朱羅はそれに増して原始的だった
両腕を振り回してくるだけの攻撃は、竜子のように洗練された拳術とは打って変わって、軌道を読みやすかったが、傷ついた虚空はそれさえもかわしきることはできない
未だに槍を握る手に力は戻らない
粋がったところで、限界、という言葉が鬼のように虚空に囁く

地上と地獄、それぞれの場所で、壬生川の新旧当主が終わりを迎えようとしているのであった
阿朱羅が巨漢を揺らしながら迫り来る

「どんなに強がっても、ひとりでボクは倒せないよ」

そう、阿朱羅は正しい
ひとりでは、阿朱羅を倒せない
たったひとりでは、決して
倒せない
ただし、

ひとりでは――だ

ひとりなのか？

虚空は己の指に目線を落とす
自分の生きてきた意味
壬生川一族の――

全ては、ひとつの線に集約してゆくようだった

「俺はひとりではない」

昼子はなんと言っていただろうか
どっちみち、打つ手はもう他にない
諦めたり、自棄になる気はなかったが、虚空はゆっくりと右手を掲げた

「貴様にはわからぬか」

阿朱羅は首を傾ける

「何が？」

虚空は大きく深呼吸をしてから、朝の日差しを眺めるような目で阿朱羅を見据えた

「俺の身体に流れる、壬生川の血が」

虚空の右手が蛍のように輝く
だから、虚空は握った右手の拳を阿朱羅に向ける

「……そうか、昼子め……全ては、この日のためにあったのじゃな」

白昼夢を見ているかのような虚空の態度に、阿朱羅は高圧的な口調へと変わってゆく
「なにを言っているンだ？」

「阿朱羅――」

虚空は右手の――
当主の指輪を、突きつけた

「滅ぶのは、貴様じゃ」

当主の指輪から光が溢れて――
お輪が目を見開いた

ついに――
――門が開いた

＜再び以蔵＞

生暖かい風が吹いていた

○「足りぬぞ、以蔵」

反射的に顔をあげると、そこには幻があった

以蔵はそれと同じものを、白骨城の夢残ヶ原で見た

いや、夢の中でも、うなされるほどに見た

「なんだってんだよ……」

邪魔すんなよ、と以蔵は言いたかった

茨城大将たちがなぜか遠巻きに自分たちを見ている

「今さら、幻が、オレの決意を蝕むのか」

以蔵はよろめきながら立ち上がる

その以蔵に、薙刀が押し当てられる

それはまるで、彼女を屠ったときと真逆の光景だ

漆黒に銀糸が縫いこまれた着物を纏った彼女は、ゾッとするほどに美しい

薄い光を放つ幻は、口の端を吊り上げる

「鬼を殺すために鬼と成り果てるなど、無意味だ」

疲れていた、以蔵はひどく疲れていたのだ

「元はアンタの呪いだろ……」
「俺が託したのは、壬生川の明日だ」
そう言うや否やだ
茨城大将たちに、着物を翻しながら、女は二陣の刃を放つ
「え？」
まさに光の閃きのような薙刀さばきであった
それとともに少し遅れて、鬼たちが斜めに傾いてゆく
辺り一面だ
見渡す限り、三十はいただろう
その、全ての鬼が――
神業どころの騒ぎではない
一瞬で二桁の茨城大将を仕留めるなど、神にすら出来ぬ所行だ
だが、以蔵にはその奥義に見覚えがあった
創作者の名前とともに、あまりにもよく覚えている
双光蘭斬（そうこうらんざん）――
一面を血で埋め尽くしながら、肝が冷えるほどに妖美な女は振り返る
「以蔵、今まで、よく頑張ったな」
なんで
鬼を斬ってんだ？
幻がよ

以蔵の声なき問いに、蘭（らん）は獅子が唸り声をあげるようにして笑う
「……まさか、蘭姉、なのか……？」
蘭は首を振る
「違う」
所持している薙刀や、見慣れぬ衣装などはともかく
その緑色の髪や錆色の瞳、それに不遜な態度はまさに、記憶の中の――
戸惑う以蔵に、目の前の彼女は吐き捨てるようにして言った
「俺は、戦神壬生川だ」
は？
やはり疑問の声は喉で詰まってしまう
一体なにを言っているのか、わからない
ここが茨城大将に囲まれた中だということも忘れて、以蔵は蘭に見入った
蘭はなぜだか決まり悪そうに咳払いをすると、改めて言った
「久しいな、以蔵」
その声は、確かに、紛れもなく共に大江山を討伐した蘭のものであり
なぜだか、以蔵は全身から力が抜けてゆくのを感じる
「マジかよ……信じらんねえ……」
口調までも昔のように戻り、以蔵はその場に倒れこんでしまいそうだった
懐かしさからか、あるいは、安らぎか、崩れ落ちそうな以蔵に、蘭が肩を貸した

以蔵の手首を掴む蘭の手は、ひんやりとした感触だ
冬場はずっと寒い寒いと言って、首を縮めていた蘭の仏頂面が目に裏に浮かんだ

蘭も鬼となっていたのか
自分のように、昼子に囚えられて
生前の彼女を思い出せば、確かに朱の首輪を装着していたと言われても、納得できるような気がした
「なんだよ、もっと早く来てくれよ……」
「助けてもらっておきながら、文句を言うな」
「いや、あんまりこの状況、助かってねえ気がするんだけどよ……」
今は鬼の姿は見えなくとも、地獄からすぐに増援がやってくる
それに、昼子や夕子も動かなくなってしまった
だが、ふたりならば、あるいは――

「心配するな、おい」

蘭が空に向かって恫喝したその瞬間であった
雲の切れ間から、光が降り注いでくる

光点は明滅を繰り返しながら近づいてきて――
そうして、地上に激突し、派手な音を立てて、粉塵を巻き上げた

もうもうと舞う土煙の中から、むせ込みながらひとりの女が姿を現す
どう見ても人間に見えたが、だが、違う

「ゲホゲホゲホ……うぅ～、初めて地上に降りてくるから、ユメ着地の方法がわかりませぇん～……ゲホゲホ」
「夢姉ェ！！」

以蔵の声が裏返った

大声で呼ばれた女は、しばらく目を瞬かせていたが、着物の裾を払うと笑顔で手を挙げた

「あ、久しぶりですぅ～、いっくん～」

「軽くね！？」

以蔵は思わず怒鳴り声を出してしまって、それからすぐに頭を振る

「違ぇ！　わかんねーよ！　全然わからねえよ！　どうなってんだよ！」

地団駄を踏む

「夢見（ゆめみ）、昼子と夕子の手当ては任せるぞ」

「はぁ～い」

水色の髪をなびかせてパタパタと騒がしく走る夢見は、やはり壬生川の正装ではない着物をまとっていた

それはまるで、言うなれば、神が見につける羽衣のようにも見えた

「聞けよ、オレの話！」

「俺は地獄の穴を塞ぐ、以蔵、悪いがもう一働きしてもらうぞ」

「ぶん殴っぞ！」

「今は時間が惜しい」

軽くあしらわれて、以蔵は腹が立つのを通り越して、途方に暮れた

こうなったら、昼子と夕子の回復を待つしかない

しかし、たとえ神だとはいえ、死なないというだけの話だ

喋れるようになるまで、相当な時間がかかるかもしれない

「わかったよ、わかったよ……どうすりゃいいんだよ」

以蔵は頭をかきながら、蘭に問う
「決まっている、俺たちの役目は、地獄の鬼を殲滅することだ」
「あーはいはい、そうかいそうかい」

なぜだかやさぐれつつある以蔵に、蘭がつぶやく

「約五年ぶりか、朱点討伐隊が揃うのは」
「あ？」
以蔵は記憶の断片を拾う
蘭の言葉と照らし合わせ、辺りを見回しながら肩を竦める

「ンだよ、ひとり足りねーじゃねえ……か……」
声が枯れた

無表情で、土の上に正座して、夢見とともに＜円子＞を唱えている少女がいた
土の加護が色濃い髪の毛を後ろで縛ったその少女は、以蔵の視線に気づくと、上目遣いでこちらを見つめてきて、小さく頭を下げた
鈴鹿（すずか）だった

「お久しぶりです、以蔵兄上」
五年前とまったく変わらぬ澄ました顔で、瞳で、以蔵を見据えていた
頭の中が、真っ白になる

「……」
鈴鹿の臨終の有様が、以蔵の頭に思い出される
意味もなく、以蔵は叫びだしたい衝動にかられた

う、うあああああああああああ

身体が燃えるように熱い
「お前、鈴鹿、お前……」
「はい？」
「お前、お前……」
「何ですか？」

何食わぬ顔で聞き返してくる鈴鹿は、まるで本物そのものでというか、偽者だと疑う発想すらなく混乱している以蔵は――

「……故障、直ったのか……」

振り絞るようにして、そううめくことしかできなかった

＜大江山付近＞

かつての都から、京へと侵入を果たすために、彼らは潜んでいた
薄暗闇の森の中、鬼たちの鋭く紅い眼光がいくつも明滅する
百か、千か、それとも万を越えるか
おどろ大将の軍勢を率いて、一番槍を務め上げるものが、先頭に立ち、機を待つように瞑目している

朱点軍の最高戦力のひとり――
氷ノ皇子である

「ほお」
彼がゆっくりと開いた口から、真っ白な冷気が漏れた
「ぬしらが止めにきおったか」
壬生川を除く人間では、決して敵わないであろう彼に立ち向かうは、神々

全身から燐光を放ちながら、男は道を塞ぐようにして立っていた

「ずっと前から、てめえは気に食わなかったんだ」
力斗(りきと)である
刀を腰に下げたまま、力斗は拳を構えて、地に根を張るようにして足を広げた
「おい、力斗……なにをしているんだ、拳法家の真似事か」
「ちげえよ、ああいうやつは、殴り飛ばしてやらねえと気が済まねえんだ」
「憂さ晴らしにお付き合いするために、下界に降りていたわけではありませんがな」

力斗の後ろから、ふたりの神が現れる
それぞれきらびやかな衣装を見につけており、非常に位の高い神であることが知れた
氷ノ皇子か、それ以上か

「後ろの奴らは、任せていいか、道明(みちあき)、貞光(さだみつ)」
「元から、僕たちはそのために来たんだ」
「ククク……」

緊迫する空気に水を差すかのように、底冷えするような笑い声が辺りに轟く

「天界で改良に改良に改良に改良に改良を重ねた……この大筒“禍津日”にて、撃ち滅ぼしてくれましょうぞ……クク……」

「ま、またすごい禍々しい名前をつけるね、貞光、いや、ていうか、神様がカラクリ兵器で戦うのはどうなんだろうな……」

おどろ大将たちに向けて照準を構える貞光の隣で、道明は首をひねる

その一方で、氷ノ皇子と力斗は拳を交えている

天界第一位の男神と互角に勝負を繰り広げる力斗は、一体どのようにしてその力を手に入れたのであろうか

「天で話を聞いてりゃ、グダグダグダグダ抜かしやがってよォ！」

力斗の身体は木々をすり抜け、緑色の光となって氷の皇子の腹に、横っ面に、次々と拳打を叩き込んでゆく

氷ノ皇子ですら防戦に手一杯なほどの威力と勢いで

「息子のため息子のためって、女々しいんだよテメエ！」

力斗のその蹴りが氷の皇子の守りを破る

樹木に背中を打ち付けられた氷ノ皇子は、そのままの態勢で冷凍攻撃を放つものの、力斗の手のひらに弾かれてしまう

「熱いな……おまえたちの心は……」

「あの朱点童子が間違った道に進むとわかってンなら、畏まってねえで、全力で止めろよ！」

嵐のように迫る力斗の無数の拳撃は、氷ノ皇子の手さばきを悠々と越え、氷塊を削るように氷の皇子の身体を刻んでゆく
力斗の渾身の打突とともに、どんっ、と強烈な音を立てて氷ノ皇子が背にしている樹木が割れた
氷ノ皇子の身体がくの字に折れる

「それこそが私の血、私の命……昔、私が人間に、くれてやったものよ……」

力斗は再び右腕を振りかぶり、怒鳴る

「息子をぶん殴るのが、親父のやることじゃねえのかよおおお――！」

放った拳は、氷ノ皇子を叩き砕く
水晶が割れるような音とともに、氷ノ皇子の身体は無数の破片となって、弾け飛んだ

「自らが与えた熱い血潮が、こんなカタチで、再び自身に戻り来るとはな……アハハハ…これでは、どちらが親か、わからぬではないか！」

氷ノ皇子はこうして、天界へと昇ってゆく

「アハハハ……ハハハ……愉快千万じゃ！　二百年ぶりに、腹の底から、笑ろうたわ！　アハハハハハハ……」

氷ノ皇子の笑い声を背景に、ふぅ、と力斗は息を抜く
「……ったくよ……親父なら、もっとしっかりしろっつーんだ」
「悪かったな」

「あん？　なにだが？」

ようやく刀を抜く力斗に、道明はため息をつく

「娘というものは、難しいんだ」

「ハッ、そういやお前んとこはまぁた喧嘩してたんだってな、うちの柚子はそんなことまったくねえぜ、俺の教育が良かったんだろうな！」

「力斗に自慢されると、なぜだろうな、ふつふつと血が滾ってくるよ」

「ハハッ、いいじゃねえか、これからひっさびさの戦だ、思う存分楽しめよ、なあ、貞光」

肩を組む力斗と道明が貞光のほうを向くと、彼は地面に片膝をついて大筒を肩に担いでいた

大筒の筒口に光が収束する

すぐに大筒から、目も耳も聞こえなくなりそうなほどの光が溢れた

爆風で、力斗や道明の前髪がめくれ上がる

衝撃波が周囲の木々をなぎ倒し――そうして、全てが収まったときには景色は一変していた

「ククク……」

大筒から発射された光の粒子は山の根元を抉り、地形すら変えて、おどろ大将の陣の一部を完全消滅せしめていた

貞光はゆっくりと立ち上がると、満足そうにうなずく

「これも全て、ほたる殿のお力添えのおかげ……ククク、満足ゆく仕上がりになりましたな、おや？」

その首根っこがふたりによって掴まれて、貞光は宙ぶらりんの態勢のまま振り返る

「……貞光、地上はてめえの実験場じゃねえんだからな」

「……とりあえず、その大筒はしまっておいてくれ、都が滅ぶ」

「……ククク」

貞光は笑いながら、大筒を背負い直すのであった

＜京の都上空＞

日暮れの空に一匹の獣の笑い声が響く

「アハハハハ……み～んなみ～んな、焼けちまえッ！　焼けちまえッったら、焼けちまえーッ！！」

朱点童子・黄川人によって解放された鬼、赤猫お夏である

お夏は心から楽しそうに空を翔る

その後ろにはおびただしい数の、何百、何千といった天魔大将たちが群れを成していた

猫は群れを作らない動物であったが、今回ばかりは違うようであり、それよりなにより、大勢の手下を率いたお夏の表情はやけくそ気味ではあったが、綻んでいた

空から京を焼き尽くすのが、彼女らに与えられた役目である
上空からの雷撃と発火を人間たちに防ぐ手立てはない

「晴銘だが平明だか知らないけどサッ、ごリッパな名前しちゃって！　人間のくせに神様を調伏できるとでも思ってンのかね！」

お供を連れて気を多くしたお夏の口は軽い
眼下に都が一望できたところで、お夏は止まって両手に炎を宿す

「あんな青びょうたんが護っている都なんて、ハッ、あたしの火種でみ～んなみ～んな――」

その刹那である
空から落ちた一筋の光が、お夏に激突する
お夏が驚く暇すらもなかった
なにが起きたのかもわからず、お夏の身体は破裂した

それが一振りの槌によって行われたということに気づいたとき、お夏の魂は天界に昇っていた

「えっ、えっ、えっ……あぁ、ヤだヤだ！　退屈な天界に逆戻りするのは、イヤ、ニャアア～～！！」

お夏が解放される様を、身近で目撃した流星――少女は、ふっとため息をついた

「よかった……わたしにも、できた……」

宙に浮かぶその女の頭が、後ろから小突かれる

「あうっ」
「なぁに今さら、かわいこぶってんのよ……天を砕き、大地を砕き、海を砕く天下御免の破壊神が」
「わ、わたしそんなんじゃないよう～、守護星って言われているんだよぅ」

腰に手を当てて一ため息をつく赤毛の女は、薙刀を背負ったまま、向かい合う天魔大将のおびただしいまでの数を眺めて、今一度ため息をつく

「あーやだやだ、神様になってまで働かされるなんて……あたいは、早く帰って踊りと小唄のお稽古の続きしたいわね」
「そんなこといわないで……み、瑞穂、ってば、みんなの命がかかっているんだからね」

照れながら口ごもる柚子（ゆずこ）に、瑞穂（みずほ）は怒声を返すただし、その顔は真っ赤である

「あ、あ、あんたね！　言うならもっとスッと言いなさいよ！　余計に恥ずかしいじゃないの！」
「みずほっ！」
「なによ！」

互いに頬を染めて睨みあう神の間に、穏やかな女性が割って入る

「ああ、仲良きことは素晴らしきかな……ですが、うふふ、おふたりとも、じゃれあうのは上でもできますし」
「下界に落とすわよほたる！」
「まあまあ、瑞穂様、まあまあ」

菩薩のような微笑を浮かべながら、ほたるは両手を振る

「でもですね、ご先祖さまたちも頑張ってらっしゃることですし、私どもがサボっているわけにはいかないと思いますの」

「あ、あんたってば、相変わらず口が減らないわね……」

瑞穂は痛いところを突かれたとばかりに勢いを失い、代わりに真剣味を帯びる

「まあね、わかっているわよ、行きましょう、柚子」

「もちろんっ、瑞穂っ」

「うふふふ、いいですのね、こういうの、懐かしい感じがしますの」

「あんたはホンットに鬱陶しいほどマイペースね……」

「それが、ほ、ほたるの、いいところだよねっ」

「きゃっ、柚子様にそう呼ばれるなんて、なんだか恥ずかしいですの……あっ、幻灯屋さんを呼んで私たちの晴れ姿、納めてもらいたいですのね、ちょっと京へ参りましょうか？」

嬉しそうに目を細めて頬を染めるほたるに、瑞穂が怒鳴る

「あんたが一番不真面目なんじゃないのー！」

「いやですの瑞穂様……そう仰られてしまいますと、私としても頷かざるをえないですのに……」

笑みに影を落とすほたるに、柚子が拳を握りながら励ます

「み、認めちゃだめだよほたるっ、がんばっ」

「だあもう、付き合ってられないわっ」

叫び、瑞穂は薙刀を構え直す

三柱の神は、圧倒的な物量を要する鬼たちに立ち向かってゆく
そして、一向に引けを取らない

夕焼けに照らされた三つの星が、空に瞬く
その輝きとともに、人々は奇跡を仰ぎ見た

＜都・大内裏＞

その頃、都の最大戦力にも等しい阿部晴明は宮城に呼び出されていた

万を越える鬼の軍団が帝を狙って、京に行軍しているのだ
都を守護する命を与えられていた晴明は、京を守る結界を縮め、帝の周辺、すなわち、大内裏に限定することにより、より結界を強固なものとして維持するのだと、宮仕えの大臣から指示されたのだ

そのことに色々と思うところはあったが、とかく、晴明はその命令を承る
恐らく、京に住む民は、守護隊ごと根絶やしにされるであろう
だが、幼き帝は生き残れるかもしれない

いくつか気になっていたのは、迷宮の奥深くに住まう神の成れの果てが動き出すかもしれないという話だった
晴明四天王の総力を結集しても、さすがに神には力が及ばないであろう

だから、もし本当に鬼の親玉が攻めてきたのなら――

そのときは、人が滅びるときだと、晴明は確信していた
離れの一室で一心不乱に呪を唱えていた晴明の元に来客が訪れる

それは誰であろう、幼き帝だった

さすがの晴明でも、帝を無下に扱うことはできない
丁重にご用件をお尋ねすると、供をわずかに従えただけの無用心な帝は言った
「空が真昼のように明るい」と

晴明は眉をひそめる
すでに時刻は夕闇に差し掛かっている
帝に促され、詰所を出た晴明は、空を見上げる

そうして、それを見た――

あれは、そう、いつだったか
大江山に光が落ちて、悪鬼が鬼の身体に封じ込められた日と同じ光景だ――

まるで星々が落ちてくるような絶景が広がっていた

輝く天の川が、架け橋となって地上に降りている様は、光の虹のようだった
その橋を渡って、威光を帯びた何柱もの神々が大地を目指して歩

みを進めているのだ
美しい女神も、雄雄しい男神も、皆が意思の強い瞳をして、定めを背負っているのだと容易に知れた
見上げるだけで、晴明ですら、菩薩樹の根元に抱かれているかのような、絶対的な安堵を感じられたのだ

帝が興奮気味に喋っているのを、晴明はどこか遠くに聞いていた
京の人々もまた、その神たちについて、想いを馳せているのだろうだが――

晴明が驚愕していたのは、それだけではない

何者なのだ

あの者たちは

晴明は神たちの容貌に、誰一人として心当たりがなかった

それもそのはずだ
彼の耳には、京の人々の熱狂的とも呼べる歓声が聞こえていない
地鳴りすらも引き起こすほどの興奮が届いていない

神の社から降りてきた神々の中から、三つの光が枝分かれし、こ

ちらにやってくる
鮮輝をまといながら現れた三柱の神は京の都の真上で停止した
薄い慶雲に乗っているのは、全て女神だ、どれもやはり見たことがない

長い髪の両の房を顔横で結んだ女神は、麗々と舞いながら、指先から碧の雫を京に降らせていた
まるで色のついた慈雨のようであったが、その正体は＜春菜＞や＜卑弥子＞と同種の術である
舞いながら彼女は、鬼に襲われた町人の傷をたちどころに癒している
女神が打ち水のように手のひらから珠の水滴を振り撒くたびに、人々は欣喜した

そこでようやく、晴明は彼らが紛うことなき救いの主であることを知った

天つ宮から地上に降り注ぐ虹彩
火と水と風と土に護られし、一騎当千にも等しき彼らの光輝なる名は

壬生川氏神一族――

玄輝自在父
伊織観音母
臥蛇丸大聖
夏海御珠姫
のの香勝利姫
日之本幸四郎
普賢ノ巻絵
佐和天遊子
初子大如来
戦神蘭
運命糸夢見
清乙女鈴鹿
門司大三元
山ノ神伽子
英雄晴天王
翠白山天
力斗降三世
道明賢文聖
摩多羅貞光
守護星柚子
高千穂瑞穂
慈母胎ほたる

以上、
二十二柱の神々であった

第十二話－3　1026年8月12編

＜胎の間＞

胎の間で、阿朱羅は滅び行くものたちの光景を眺めていた
宙に炎を浮かべて、その中に場面を映していたのだ
自らの配下が次々と破れ、滅び去ってゆく有様を見つめながら、
火に照らされた阿朱羅に浮かんでいた表情は、なんと笑みである
己の力がみるみるうちに弱まってゆくのを感じながらも、阿朱羅は笑っていた

「どこを見ておる」
虚空（こくう）の突き出した槍が、阿朱羅の頬を裂く
「貴様の相手は、この俺だ」
阿朱羅はやはり笑っている

この世のものとは思えぬ残忍な笑みを浮かべた彼は、妖艶な声で述べる

「どうやら、ボクにも最期の時が近づいてきたみたいだ」

あるいはそれは、歓喜の微笑みであったのかもしれない

＜都＞

初子は回復の術を唱えながら、全体の状況を逐一確認していた

「道明さんが大江山を征伐し、南へ向かっていますね、柚子さんの部隊は空を制圧した後に、各拠点に攻め込む手はず……京の町の守りは人々も奮闘していてくれますことですし、伽子さんと私たちで十分でしょう、地獄巡りを攻略している蘭さんもさすがの手腕といったところですね」

目を細めれば、離れている場所で起きていることが手に取るようにわかる

「あとは、朱点童子の呪いなどの術を解く役目のお父様方が、どれほどで終わるか、ですねー」

初子は計画の首尾に満足そうな面持ちをしていた

総勢二十二柱に以蔵を加えた、壬生川氏神討伐隊による朱点童子打倒計画の全指揮を初子は担当していた

言うなれば昼子に代わる勤めであった

氏神だけではなく町人からの信頼が高かったこと、几帳面かつ大胆な性格、そして何よりも初代当主の孫娘という血統の近親さが評価されての抜擢である

一癖も二癖もある氏神連中に言うことを聞かせる役目は、臥蛇丸や幸四郎ではすんなりとはいかないであろうし、かたや蘭ではどうしても傲慢に聞こえる物言いになってしまう

雲の上に立つ初子の役目は、戦闘の指揮だけではない
初子は思う存分に踊りながら、人々を励まし、力づけ、その気力を奮い立たせる

「みなさん頑張ってください、この戦は必ず勝ちます、私たちを信じてくださいね」

町のみんなに声が届かなくても、彼らを守ろうというこの想いは伝わるはずだと信じて、初子は告げる
彼女が第二の太照天昼子となる日も近いのかもしれない
初子大如来のそばでは、巻絵（まきえ）が目を瞑り座禅を組んで術を唱え続けている

「……あおまきがみ、あかまきがみ、きまきがみ……むにゃむにゃ……（、・ω・、）」

地上では阿部晴明が結界を縮小していたが、そのときにはすでに普賢ノ巻絵が京全体の防壁を固めていたのである
茨城大将の攻撃にも数発耐え切れるほどの、神の守護壁だ

このふたりの神の存在で京の都はほぼ万全といったところだが、そこにひとりの射手が加わったところで、その守りは完璧へと進化する
初子の家臣のようにそばに立つ女神が、光の矢を打ち出す

「……ターヤー！」

佐和（さわ）天遊子である
壬生川家の奥義、連弾弓を生み出した人物だ
弦を描いて強襲する空飛ぶ鬼たちを、佐和はことごとく打ち落と

してゆく

「悪霊退散……悪霊退サーン……サーン、サーン、サーン！」

態勢や手順に囚われない自由な射法で、彼女はやってくる全ての鬼を近寄らせようともしない

その射程範囲は都全域を覆い、侵入した悪鬼を射殺すのもまた、彼女の役目である

「ウーフフフ、どう、どうだいはっちゃん！　見てる？　ちゃんと見てる？　ウチ活躍しているよ！　すごい？　すごいデショ！」

「ええ、すごいですよ佐和お姉さま、その調子で頑張ってくださいね」

「ウン！　ウチ、はっちゃんのためだけに頑張るヨ！」

「人さまと一族の方々のためにも頑張ってあげてくださいね」

初子のあしらい方も慣れたものだ

聞いているのか聞いていないのか、久しぶりに初子と戦場に出られたことが嬉しいのだろう佐和は、興奮して狙いの曖昧な矢を四方八方にばら撒く

気分が乗れば乗るほど威力を増していくその不思議な性質により、佐和は更なる戦果を積み重ねてゆくのだが、やがてそれにも我慢ができなくなったようで

「ね、ネエはっちゃん！」

「は、はい？　なんですか？」

弓を投げ出した彼女に手を握られて、初子は思わず踊りの足を休めることになる

「チューしよう！　今しよう！」
「え、あの、こ、ここ、都の上空ですよ？」
「血を見たらさ、思わずサ！」
「そ、そんな、獣じゃないんですから……」

初子は思わず胸元を押さえながら下界を見下ろした、今も何千人単位で自分たちの動向に一喜一憂している民がいるというのに
しかし乱心した佐和の目は渦を巻いて、とても言葉が通じそうな感じではない
初子に懐いている誰もがそばにいないこの状況を、チャンスと思っているのかもしれない

「か、帰ってから、ホラ、それならいいですから、ね？」

聞き分けのない子を説得するような辛抱強い態度で、引きつった笑みを見せる初子を、佐和は押し倒す

「きゃあ」
「キャハー！」

こんなことをしている場合ではないというのに
めくれ上がった初子の素足が、空に向かって伸びる
女神の乱痴気騒ぎに、下界の人々たちは歓声をあげていたに違いない

「ちょっと、あのですね、佐和お姉さま、こ、こまりますよ、みんなみてらっしゃいますよっ」
「みんなってドコのどいつサ！　ウチにはモウはっちゃんしか見えないケド！」
「京の都のみなさんですっ！」

節穴の目を持つ佐和に初子は抵抗しながら叫ぶ
とかく、良くも悪くも相変わらずどたばたしているふたりを横目に、巻絵は人知れずため息をついていた
（なんだかここ、居辛いでしゅ……（´・ω・、））
自分も父親の部隊に志願すればよかったなあ、と

＜羅城門＞

闇は濃くなり、かがり火が辺りを照らす宵の暮れである
都の正門を警護していた人々は、地響きとともに迫る巨大な像を見て、悲鳴をあげ、逃げ出していた
憤怒の形相でやってくるそれは、たった一体で京を壊滅させられそうな代物だった
親王鎮魂墓が金色館の最奥から、人々の阿鼻叫喚を求めてやってきた鬼

崇良親王――

元より神ではないこの祟り鬼は、今や朱点童子の憎悪を受けて、更なる体躯の増長を促されていた
その上、全身から絶えず稲妻を放ち、手下の土偶器、封印像をぞろぞろと従えて進軍し、とても人間の近づけるような存在ではない

たとえ刃を交えようとしても、踏み潰されて絶命するのが落ちであろう
怒りの明王となり、門のような大きさの剣を振り回しながらも、親王は「誰か、俺を止めてくれい」と叫んでいた

その足元、京の都に差しかかろうかという平野である
対比してみると小指ほどの大きさの人間が、へらへらと笑って手を招いていた

「まあまあ、人生ってのはさ、意外と楽しいこともいっぱいあるもんだよ、怒ったり恨んでばかりじゃもったいないよ」

ははははと笑う男は、大魔神の雷を浴びながらも爽やかに笑う

「今からだって、楽しむ方法はあるんだよ、例えば、そうだね、神となって天界に昇るとか、どうかな？　不老不死だよ、綺麗な神様もたくさんいるんだよ、中でも柚子ちゃんとか、初子さんとかね……ふふふ、やったね親王さん」

鬼は動けない
軽く足の小指に手を添えられているだけなのに、一体どのような呪か、まったく足が前に進まないのである
だから崇良親王は躊躇せず、手のひらを思いっきり地面の上の男に叩きつけた
ずどぉん、と手が大地に沈み込み、確かな手ごたえを感じたその瞬間だった

「一体なにを遊んでいらっしゃるんですか、英雄（ひでお）さん……まったく……」

新たな神が親王の眼前にゆっくりと降りてくる

「いやあ」

手のひらが徐々に押し返されてゆく
英雄は片腕で、親王の屋根のように大きな手のひらを持ち上げているのだ

「倒すだけっていうのも芸がないじゃない？　だから説得してみようと思ったんだけど、ダメだね」
「それに、あなたの相手は崇良親王ではありませんよ」

翠（みどり）は散弾型の大筒を肩に担ぎながら、辺りをくるくると飛び回る土偶器や、封印像の群れを指差す

「いやー、神さまの世界でも下っ端ってのは世知辛いよねー、翠ちゃんー」

その言葉とともに、英雄はひょいと親王の手をどかし、後方に大きく跳ぶ
なにもない空中に手を伸ばすと、そこにはいつのまにか薙刀が顕在化していたのである

「わたくしをあなたと一緒にしないでくださいまし、英雄さんの位が低いのは、途中で壬生川家を出奔したからですわ、まったく、馬鹿の考えることは天才にはわかりませんわね、どうしてここにいるんですか？　あなたはもう壬生川の人間ではないんでしょう？　土に還らないんですか？　わたくしがして差し上げましょうか？」
「そ、そろそろ許してくれたっていいじゃないか、ミドりん……はは、いつもに増して手厳しいね……」

翠が舌打ちしながら弾丸の雨を降らせる
もちろん英雄を狙いから外しているというわけではないのだが、慣れた英雄は巧く立ち回り、辺りには次々と陶器の割れる音が響き渡る
そうして、親王がちょろちょろと走り回る二柱の神にぎょろつく目を向けたところである
突然の高笑いだ

「アーッハッハッハッハ！」

羅城門の上に立ち、槍を掲げた女性の声であった
彼女は神々の参列に加わっていた女神のひとりである
京の人々にも届くような大声に、人間だけではなく、崇良親王までも目を向けた
翠はイラつきながらその神を振り返り、しかし英雄は嬉しそうに手を叩いて合いの手を入れた

「人の命は、皆が花！」

伽子のその声は、京の都を覆う暗雲を払う破邪の言葉である

「それぞれに咲き誇る、立派な花々を！　散る前に摘み取ろうという、悪逆非道なその行為、天が許そうとも！　神が許そうとも！　このあたしが許さないよ！」

よっ、山ノ神伽子ー、と英雄が叫ぶ
そう仰る伽子さんも神様ですけどね、と翠が水を差す

「六代目当主・壬生川伽子、この世にはびこる悪を抹殺するため、

正義の豪槍推して参るー！」

そう放つと、伽子は羅城門から飛び降りながら、槍を振りかぶる
てえええええええい、と気合一閃
親王の右腕がずるりと落ちて、地面に激突し、砕け散った
伽子は赤ら顔で振り返り、槍を振り回し、怒鳴る

「ひーくん、ミドりん、いくよ！　奴らに神の力を思い知らしめて
やるでござるのさ！」
「よし頑張れ伽ちゃん！」
「うん、頑張る！　任せてっ！」
「やれやれですわ……」

馬鹿たちの芝居から目を背けてかぶりを振る翠
もう二度と彼らと討伐隊を組むことはないのだと思っていたけれ
ども、なぜだか今は気持ちの高ぶりを抑えられなかった
崇良親王の魂が解放されるのは、それから間もなくの出来事

＜地獄巡り入り口＞

一体、昼子はこの計画をいつから考えていたのか
以蔵は頭を抱えてしまいそうになっていた

黄川人を倒し、人々を救い、天界を統一するために

昼子は壬生川一族を生み出したのだ
そのことはもうわかっている

だが、そこから先だ

人の心を持った新たな神々の誕生は、人間にとって決して悪い影響を及ぼすことはないだろう
彼らは人の絆というものをよくわかっているし、その上、人間として生きた記憶も抱えている
もし古の神々が一族を排除しようとしても、それは到底不可能だなぜなら、壬生川一族は全員が全員、朱点童子の力を所持している
昼子ひとりにすら手を焼く古の神では、束になったとしても敵わないだろう

以蔵の口から、悪態が漏れた
「イツ花のヤロー……」
なんという老獪さ、そして、智謀なのか

昼子にとっては、天界一位の座はどうでもよかったに違いない
己らの地位に固執する神々は、だからこそ昼子の計画に気づけなかったのかもしれない
壬生川もまた、死んだものが神として蘇るなど、予想の範疇の外だ

そして、黄川人を騙すために、自分がいたのだ
壬生川一族が氏神として天に昇っていることを悟られぬように、
以蔵は最後まで存在を秘匿される囮として

「なにが、切り札だ……」

まさか、黄川人も思うまい

たったひとりならまだしも、己を討つために、以蔵を含めた、２０数人もの朱点童子を増やすなどという暴挙
もはや大バクチなどという次元ではない
身捨てだ

だが――
夢見（ゆめみ）と鈴鹿（すずか）の治癒術を浴びていた昼子は、万全の調子ではないにしろ、見た目ではわからぬほどに回復し、身を起こせるほどになっていた
そんな昼子を問い詰めると、彼女は鈴鹿に背を支えられながら、まったく悪びれない顔で笑う

「いやァ、思い切って、バーンとォ、やっちゃいましたァ」

そう、はにかむのである
以蔵はもちろん納得がいかない

「でも、なんで蘭姉とか、こんなに強いんだよ、遺伝子が極端に優秀だったってのか？」
「違いますよォ、神様の実力と遺伝子の優劣はまるで関係がありませェん」

昼子はイツ花の口調で指を振る

「だって、真名姫さまと百足お銀さまのおふたりの実力はまるで反対なのに、遺伝子による奉納点は真名姫さまのほうが勝っておられるでしょ？　そういうことですよォ、天界に上った壬生川の氏神さまのお力は、全員が全員、人と神の合いの子、寿命が無制限となっちゃあ、こりゃ弱いはずがありませんもの」
「真名姫はともかく、百足お銀ってのは知らねえが……もう何にも

隠し事はねえだろうな……？」
「よせ、以蔵、今は鬼どもを斬るのが先だ」

蘭にそう肩を掴まれてしまっては、もうなにも言えなかった
この力配分もまた、壬生川を神として天に昇らせた理由なのだろう

これが昼子の策謀
天も地も壬生川も黄川人も救うための、手段だったのだ

「ンで、次はどーすんだ」

そう尋ねれば、近くにあの鈴鹿の涼やかな顔があった
思わず飛び退いてしまいそうだった
鈴鹿はゆっくりと以蔵の頭に手を伸ばしてくる

「お、おい……」
「……以蔵兄上、角が生えていらっしゃいます」
「……あん？」

ひんやりとした手で撫でられたそれは、鬼であった頃の名残だ

「え、ホントですかぁ？　どうしたんですかいっくん、まさかタンスの角に頭をぶつけたとかっ」
「どんな状況だよそれ、滅多にねえから」
「……」
「いつまで撫でてんだよお前は！」

さわさわと繰り返していた手を、以蔵は跳ね除ける
まったく、緊張感のない彼女らに、これまでの壬生川のシリアスさを教えてやりたい気分であった

「遊んでいる場合ではないぞ、俺たちはここで茨城大将を殲滅するのだからな」
「遊んでいるのはオレか！？　オレなのか！？」
「ユメは旦那さまのためにお仕事頑張るって決めたんですからぁ、いっくんもちゃんとまじめにやってくださぁ～いぃあぅぅぅぅぐむぅぅぐぅぅぅ」

夢見の頬をぎりぎりぎりぎりと引っ張る以蔵が、目を吊り上げて囁く

「おーおー全力で頑張ってやらぁ、つーかユメ姉ここ数ヶ月のオレの働きっぷりを読んでこいやてめえ」
「兄上、少し性根が凶暴になりましたか？」
「ああ、鈴鹿も白骨城に引きこもって数年昼子に好きなようにこき使われ続けていたら思いっきり腐ると思うぞ」
「あまり想像つきませんが」

鈴鹿は以蔵の皮肉に眉根を寄せてから、つぶやく

「お元気そうで、なによりです、安心しました」

以蔵は思わず口ごもる
なんてことない言葉でも、鈴鹿が言うとその意味合いがまったく違うのだ
鈴鹿の死を見取った自分にとっては、とても重い、万感の気持ちが込められた声に思えたのだ
以蔵の胸を感情の波が走る

「……べ、べつによ」

その瞬間だ、１０２２年の6月にせき止められていた涙が、今、
ようやく頬を流れたのは
鬼となっていた以蔵が、今こそ、人に戻り、神になれた気がした

「……どうかしましたか？」
「なんでもねえよ！　見るんじゃねえ！」

そう叫んでから、以蔵は目元をこすり、槍を取る
地獄から鬼は、まだまだ湧き出てきていた
だが、その鬼たちの抵抗が弱々しくなってきていることに、以蔵
はまだ気づいていない

＜鳥居千万宮＞

狐美姫の間を選んだのは、この地が朱点童子ゆかりの場所である
からだ

蝋燭の火を囲んで、四人の神が座禅を組んでいた
右から順に、臥蛇丸大聖、夏海（なつみ）御珠姫、そして、のの香（か）勝利姫と
日之本幸四郎である
顔を上げた臥蛇丸の面が、炎によって白く照らされる

「初子くんは巧くやっているかな」
「大丈夫だよ～、どこかの娘さんと違ってにゃ」

臥蛇丸がのの香に半眼を向ける

「うちの巻絵は心優しく真面目な女子だぞ、嘲りは許さんからな」
「……どうせのの香、“え？　巻絵ちゃんじゃなくて、うちの子のことだよ～、なに勘違いしているの～、キャハハ”とか言うつもりなんでしょ」
「なっ」
「えへ」
「はは……」

唖然とする臥蛇丸、舌を出して微笑むのの香、そんな兄姉たちを眺めながら、展開が読めていた幸四郎は乾いた笑い声をあげる

「兄上ってば、いい加減もう七年くらいの付き合いなんだから、この子の冗談くらい軽く流す技を見に付けなさいよ」
「そうそう～、そんなんじゃこれから何百年経っても、ず～～っと胃痛で悩まされるんだからね～」
「人って成長するから人っていうのよ、いくら偉くなったからって神様って地位にふんぞり返って歩みを止めたら、人以下よ」
「お兄ちゃんの考えが凝り固まったら、古い神さま方みたいに、粛清しちゃうんだからぁ～」
「な、なぜそこまで言われなくてはならないのだ、毒蛇のようだな……しかも、俺をからかったのの香にまで……」

術の最中だというのに、心が乱れて乱れて仕方がない
四人は雑談をしながらだったが、朱点童子の呪いを解く儀式を執り行っていた
この日のために技力を高め続けてきた四人である

「まあまあ、みんな、次はどこを解こうか？」

幸四郎が割って入るまで言い争いは終わらない
ここにいる皆は、臥家、香家、幸家と呼ばれる家柄のそれぞれの先祖だ
さすがに子孫たちの前で恥ずかしい姿を見せられない彼らは、普段は自重もしているのだが、今は思う存分楽しそうに罵詈雑言を吐きあっていた

「鳥居千万宮、相翼院、九重楼ときて、えーっと、大江山は誰か攻めているんだっけ」
「お前がそんな調子でどうするんだ夏海……幸四郎の孫の孫が向かったはずだ」
「孫の、孫……そういう風に言われちゃうと、急に自分たちのトシを実感しちゃうよねぇ～……」
「なに言ってんのよ、のの香、あたしは別に若い子ぶって昔の自分にしがみついたりしないわよ、みっともない」
「え～、なっちゃんだめだよ～、それって潔いんじゃなくて、諦めているだけなんだからね～、だから今度一緒に、柚子ちゃんとか瑞穂ちゃんとかと、お茶飲みにいくにゃあ」
「えー、面倒臭いわねえ……あの、やたらおどおどしている子でしょ、ああいうのあたし苦手だわ……」

のの香の誘いに眉をひそめる夏海
ため息をつく臥蛇丸

「どうもこうも、緊張感がないな……」
「そうですねえ、まあそれがお姉ちゃんたちの良いところだと思いますが、そろそろ白骨城が倒壊する頃ですね、次は紅蓮の祠にしましょうか」

「うむ、ならば協力しよう」
「あたしたちもやるわよ、ののの香」
「はぁ～い」

四人は次々と迷宮をあるべき姿へと戻してゆく
朱点童子の呪いを、薄皮をはぐように、一枚一枚解いてゆくのである
各地の悪霊を鎮め、それにより朱点童子の力を封じ込めるのが目的だった
言うなればこれは、大江山の朱点童子解放による魔物たちの鬼力倍増の、真逆の行い、つまり弱体化である

全ては、朱点童子打倒のため
地獄の底で、今まさに阿朱羅と向かい合っている子孫のために

「もはや、朱点童子は詰められている」
「あたしたちの包囲網が完成しているものね」
「初子の計画にぬかりはないよ」

紅蓮の祠の邪気が霧散し、残りは親王鎮魂墓と忘我流水道の二箇所である
現在、朱点童子の力は恐らく、手足をもがれた程度には弱化されているに違いない
ののの香は一同に向けて片目を閉じると、存外に真摯な声で告げる

「あとは、彼次第、ってことだね」

神のみすらも見守りし戦いの終幕が近づいていた

魔人以蔵　奉神完了！

第十二話－４　「俺の屍を越えてゆけ」　１０２６年８月１３編

黄川人の短い生涯は、不幸そのものであったと断じるに躊躇はない
彼は赤子ながらに父を目の前で殺され、母と引き離される
大江山京の出来事である
覚えてなければただそれだけの話であった悲劇は、黄川人が朱点童子の力を秘めていたことによって、後の惨劇へと変わる

都を落ちた赤子が次に現れるのは、京の外れの神社であった
そこで彼はひとりの女性に拾われる
ひと時の幸せの時間は、だが、長くは続かなかった
幼き知恵がゆえに引き起こした事態は、彼から親のぬくもりを完全に奪い去る

その後、赤子は天界から離れた神に助けられるのだ
この時点で黄川人は、実の両親を殺害した人を恨み、そして人の弱さを憎んでいた
神切を為したことにより、赤子の姿から幼生へと生まれ変わった黄川人は、人を滅ぼそうと決起する

黄川人の暴虐を阻止したのが、大江山京で死んでいたはずの姉であった
少年は生き残った肉親にさえ裏切られる
幽冥の封印の中、彼は人を恨み、また、人に恋した天女の罪を恨み、さらに己を封印した神々を恨み、信じていたはずだったのに自分を裏切った姉を恨んだ

水無しでは生きられぬ花のように、彼は恨むことを己に科した
少年の脆弱な心には、世知の陰鬱は重すぎたのだ
いつから彼は、光を見ることを止めてしまったのだろうか
ただ怨嗟を重ね、破壊を求めるだけの鬼神と成り果ててしまった
全てを実行に移すだけの力が少年にはあったことだけが、唯一の
例外だった

そうして黄川人は、壬生川（みぶがわ）一族に出会う
己と同等の不幸を背負い、それでもまだ、光の道を歩む彼らを見て
朱点童子が今思うことは、一体なんであったろうか

＜天界＞

そこは天界の太照天昼子と夕子のみ座することを許された主神の
間である

星星の輝きよりもまばゆい帳や、万の黄金を集めて固めたような
様々な家具、言に尽くせぬ美しさで飾られた部屋に、人間じみた神
がいた
彼は腰掛に深くもたれかかり、眉根を寄せて目を瞑っている
彼のたたずまいは、この部屋に似合うとは世辞にも言えない
その者、今や太照天を凌ぐほどの位を得たであろう壬生川の初代

当主であったが、そんなことはお構いなしに暇そうにしていた

「……」

ひときわ派手な格好をした神の前に、控えめな着物をまとった少女がやってくる

「どうしたんですか、お父様、悲しそうな顔をして」

「……いや」

顎に手を当てて、玄輝（げんき）はうめく

「俺も下界に行きたかったな、と思ってな」

「駄目ですよ、お父様はここでじっとしてくださらないと」

「あとどれくらいだ？　早く遊びにいきたいぞ」

「天と地が滅ぶまでです」

「それは禁固って言うんじゃないのか！？」

さらりと言い放つ伊織（いおり）観音母に、壬生川自在父は唾を飛ばしながら叫ぶ

伊織は汚いものを見るような目で一歩下がると、さらに忠言を述べてきた

「加えて、あまり自由に喋らないでくださいね、昨今の物語上、雰囲気が壊れますので」

「Σ」

「ですので、いいから黙っていて座っていてください」

「お前までそういうことを言うのか……」

「臥蛇丸（がじゃまる）さんや夏海（なつみ）さんやのの香（か）さんや幸四郎（こうしろう）くんもまったくの同意見ということですが」

あれほど個性の強い神々が異口同音するとは、よほど玄輝にじっとしていてほしかったのだろう

「力をつけた馬鹿が暴走すると、朱点童子みたいになっちゃいますからね、わたしが見張っていますから、そこにいてください」

「しかし暇で……」

「じゃあもう寝てください」

「さっき起きたばっかりで……」

「ワガママばかりですね、あ、岩になってみたらどうですか？　考えるのを止められるそうですよ」

「なん……だと……」

風当たりが強すぎる

いくら一ヶ月で死んでしまったとはいえ、玄輝が天界に昇ってからずっと世話をしてくれている間この調子なのだから、そろそろ怒りが解けてくれても良い頃ではないかと思う

お手上げだ

「ヽ（ ゜∀ ゜）ノ」

「それもやめてください」

「∀ ゜）ノ……」

「NGです」

手でバツ印を作られてしまう

八年の間に、壬生川の家風も変わってしまったものだと、玄輝はしみじみ思う

「……なあ、伊織」

「ダメです、で、なんですか？」

「否定から入る会話を止めて欲しいと言おうとしたが、それすらも否定されてしまった……いや、あの、少しは父親を、敬ってほしいのだが……」

なんといっても、この壬生川家の初代当主だ

「全てが始まったのは、源太お爺さまとお輪さんのおかげでしょう」

きっぱりと告げる伊織に、玄輝はわずかながら抵抗の色を見せた

「え、ええー」

だが伊織は気にも止めない

「お父さまは過程です、朱点童子討伐のために生まれた捨石であり、子を為すためだけの種馬です、価値があるのはお父さまではなく、その血だったのです」

聞き覚えがある

「それオープニングのときにも言われたなあ！」

「ですから、ほら、形の上と他の人が見ている前だけは敬愛して差し上げますから、とっとと寝てください」

「だから、起きたばかりで……」

「桝田省治先生の鬼切り夜鳥子の三巻を買ってきてあげましたから、これだけ読んでいてください」

「なぜ三巻から！　いや確かに三巻は独立して読めるが……！」

「はい、どうぞ」

「お、おお……これが俺屍2のシナリオ構想の礎となる物語か……楽しみだ……」

玄輝がおとなしくなると、伊織は今度は遠くを眺めるような目で宮殿の天井を見上げる
そうして、軽いため息

「お父さまもですけど、あちらの方も目を離せませんのに」

彼に厄介事を任せてしまったことを、いささか心苦しく思いながら、伊織は首を振る

「せめて、禍根を残すことだけは、しないようにしてほしいですね……」

鬼切り夜鳥子を読み始めた玄輝の横で、憂いを帯びた顔をする伊織である
泉のほとりに立つ彼女を思い、伊織はじっとしていられなくなり、部屋の掃除を始めた
死してなお、さらに憂慮が深まるとは思いもよらなかった伊織である

＜地獄再び＞

阿朱羅は己の体から徐々に精気が失われてゆくのを、実感していた
先ほどまではできていたことが、もうできなくなってきている

地面に叩きつけた爪が土砂に及ぼす影響が少なくなってゆき、印を結んだ＜雷獅子＞の威力はもう、まるで初陣の幼子が放つ＜雷電＞のようだ
見る影もない

その代わり、突き出される槍の威力は相対的に増している
あれほどの死に体であった虚空(こくう)が、今や魔王のごとく立ちはだかっている

こりゃもうだめだ

阿朱羅はもう完全に諦観の有様だったのだ
いや、そうではない
それだけが心を許せる友であったかのように、黄川人はいつだって諦観の想いの傍にいた

殺しても殺しても殺し続けても、希望を失わずに
いつだって壬生川は立ち上がってきた
それが一体どれほどの苦難の道のりか、今まで観察し続けてきた阿朱羅にすら想像がつかない
彼らはまさに、朱点童子を討つためだけの猛毒であったのだ
だが、それでも悪くはない
自分がしてきたように、これから圧倒的な力によって握りつぶされるのも、嫌ではない

虚空の槍が迫り来る
どんなに斬っても突いても焼いても、最後まで折れることのなかった槍だ

阿朱羅の爪と虚空の槍が打ち合わされる

舞台の幕は下がり始めている

「ボクの命を仕留めたときが、君の魂が失われるときだよ」

役者はとうにいない

「ああ、そうして、呪いが解ける日じゃな」

照明ももう落ちた

「自己犠牲で一族を救うのが、そんなに気持ち良いのかい、消滅したら終わりだろ？　なにも残らないんだゼ」

それでも芝居を続ける自分たちは滑稽だろう

「俺の生きてきた証は残る、貴様にも子ができたら、わかるであろうよ」

気づいていないのは、演者だけだ

「いなくても、思い描くことはできるよ、そんなものは何の救いにもならない、暗澹たる未来だ」

気づいていないのは、阿朱羅だけだ

「俺も昔はそう思っていたよ、じゃがな」

虚空の槍が阿朱羅の腹を抉り、血を噴き出させる

地中のような闇の中で、踊り続けていた阿朱羅だけが、ずっと、耳を塞いでいたのだ
なにも見ず、なにも聞こえず
だが、ついに舞台から引きずり下ろされるのだ

「ひとりで生きてゆくなどつまらぬぞ、関わってゆけば、世界も変わる」
「ああ、そうか、じゃあ来世では仲良くしてくれヨ」

阿朱羅は露ほども思っていない顔で笑う

「真っ当な頭を持ったらな」
「せいぜい頑張ってみるとするよ」

阿朱羅の傷は深く、もはやその弱りきった力は茨城大将をも下回るかもしれない

あと少し

そして、限界は唐突にもたらされた

倒れたのは虚空だった――

零れ落ちる水が、ぷっつりと途切れるように、呆気のない幕切れであった

美月（つきみ）は暗く小さな視界の中で、倒れてゆく父の背を見た

「パパ……？」

＜再び天界＞

「ああ、やっぱりここにいたっすか」

鼻に傷を持つ赤髪の男は、くたびれたような調子でつぶやいた

雲の上の空の端の泉のほとり

透き通った水の底を見下ろせば、そこからは地上の様子が一望できるのであった

たとえ目的地が地中深くの地獄であっても、見通すことができる

「一応、見張りの俺っちに断ってもらわないと、困るっすよ、そういう規則になっているっすから……って、まあ」

門司（もんじ）は肩を竦めて、深い息をついた

「別にそんなの、気にしているわけじゃないっすけどね、ただ、心配は、心配っすから」

泉に足首を浸かって、ひとりの女性が立っていた
彼女は思いつめたような顔で、下界の様子を見守っていた
瞬きすることも忘れたような女性は、しばらくした後に、門司を振り返った

「巻き込んでしまって、すみません」

小さく頭を下げた月見に、門司は曖昧な笑みを浮かべて手を振る

「別に、俺っちのほうは、それよりどうっすか、もう気は落ち着いたっすか？」
「……まあ」

月見（つきみ）は深刻な顔でうなずく

「そんなに討伐隊に入りたかったっすか」

門司の言葉をかみ締めて、月見は苦しそうに俯く

「……いえ、その、お母さんの言い分ももっともだと思います、それより、ご迷惑をおかけしました」

月見に天界待機が言い渡されたのは、八月の初めである
無理もない、彼女は下界に未練が多すぎる
監視役として急遽天界に呼び戻されることになった門司は、彼女の世話をしていたのであった
無茶を言う年下の女の子を相手するのは、慣れているといえば、確かに慣れていた
暴れていた月見を取り押さえるのは一苦労だったが、ようやく彼

女もおとなしくなったようだ

「……ボクが行っても、あの人の決断を鈍らせるだけだと思いますから」

「月見っち……」

月見は両手を握り合わせて、頭を垂れる

「あの人は、もうここには来ませんよね……ただ、それだけが、理解できなかっただけですから」

それは祈りだ、月見の祈りだ
死して神となり、誰もが祈る
門司も同様に、祈り続ける日々を送った
手助けすることを禁じられた鬱憤に、祈るより他なかった
娘の無事を、成長を、そうして、安らかなる死を
臓腑が引き裂かれるような心の痛みに、堪えることなど叶わぬような苦悩に、それでも祈るしかないのだ

壬生川の辛苦は死してなお続き、死してさらに増した
だからこそ、月見は心より祈っていたのだろう

「あの人は、勝ちますよ、それは、本当です」

神となったその名は、天女月見
門司は後頭部をかき、彼女にかけるべき言葉を探し出す

「……強いっすね、月見っちは」

悲しみを内包して、それでも気丈に振舞う月見は、もはや門司の

器では及ばなかった
さすが、心の強い臥家の子孫と言いたいところだ

「あの人との別れは、もう、済ませましたから」

月見はそうつぶやいて、やはり祈り続けた

神は、十一代目当主と朱点童子の戦いには関与しない
それが最後の壬生川の誇りだろう、と、
壬生川会議で延々話し合わされて、そう結論づけられたのだ

だが、月見は最後まで信じている
あの人は一族の呪いを解くのだと
それはすなわち、虚空の消滅を意味する

それでも、月見は虚空の決心を微細にも鈍らせないために、祈っている

「……虚空さん」

悲しみの連鎖を断つために、祈り続ける

＜そして地獄の底＞

一時は覚悟を決めた阿朱羅が、足を引きずりながら歩を進めてくる
その顔には、失望の色がありありと浮かぶ

お前でも駄目だったのか、と

最後の勝負を決めたのは、人の身と朱点童子の身という、大本の差であった
人間としての極限にまで達した虚空の、そこが限界であった
神の力を帯びながら、血と肉と骨に縛られる定めの、そこが彼岸であった

虚空の身から、意思が失われゆく
全てが、流れてゆく
世界から色が薄れてゆく
虚空に阿朱羅が近づいてゆく
響く足音は、この世の終わりを知らせる地鳴りだ
ざく、ざく、と地をこそぐように
一歩、また一歩
阿朱羅がにじり寄る

その後ろで、二人の男が土を掴んでいた
血の垂れた指が、地を掻く

「ふざ……けるなよ……」

遥か遠くから声がするようだ

「……その人に……手出しは、させない……」

起き上がろうとしているのだ

武器も持てぬような有様で
息も絶え絶えに、左京（さきょう）は指から＜ツブテ＞を放つ
最後の技力を徒労に変える

烈（れつ）は立ち上がろうともがく
だが、やはり阿朱羅の行く手は阻めず
鬼切丸の重みが煩わしい

「ダメ、パパは、私が……」

そして、ついに阿朱羅の手が虚空にかかった
美月は肘をついて上半身を起こす
片手を伸ばしても、届くはずがない
阿朱羅の輪郭がぼやけて見える
その鬼腕に、虚空の首が掴まれた
美月の髪が逆立つ

「止めて――」

虚空の物言わぬ体が、高々と掲げられた
まるで首吊り死体のように、父はうなだれている
美月は目を見開き、願う
誰か、誰でもいいから

――祈る

力を貸して
阿朱羅を倒すためではなく
虚空の首が軋む
家族を助けるための力を

――祈る

祈りは聞き届けられたか？
そんなものには、意味がない
今までだって、そして、これからも

そこにあったのは、ただの、明確な意思
恨み、つらみ、そして“殺意”

腕が阿朱羅の足を掴んだ
誰のだ？
誰でもない
腕は地中から生えていた
人の腕ではない
からからという音を立てる、白骨化した手だ
それがしっかりと阿朱羅の足を握り締めていた
腕が引かれると同時に、阿朱羅の身体が地にめり込む
思わず阿朱羅は虚空を取り落とす
どさりと地面に落ちると同時
姿を現す

骸骨だ

「一緒に、地獄に、堕ちましょう」

白骨化していた体に、真名姫のように、肉が宿る

艶やかな黒髪が芽吹くようになびいた
指が阿朱羅の足の肉を抉る
阿朱羅の顔に、戦慄が走る
彼女こそ、鬼だ
鬼を殺す真の鬼だ

朱点童子・壬生川竜子（たつこ）――

裂けた口が絶頂の微笑みを浮かべる

「ウフフ、ねえ、朱点童子ィ」

彼女は待っていたのだ
数ヶ月地中に潜み
たった一度のこの瞬間を

「そんな」

阿朱羅のつぶやきはそこまでだった

「欲しいのなら、くれてあげるわ、私の魂よ、ぶつけ合ってみたら、どちらが砕けるのかしらね」

まるで口を封じるように、竜子は動く
竜子の身体は竜巻と化す
地底からの跳躍は、阿朱羅の身体を貫いた
満を持した渾身の一撃だ
阿朱羅の下腹から胸へとかけて引き裂いた竜巻
中空で風が四散する
浮かぶ竜子は、片方の腕に何かを抱きながら、高らかに笑う

「ウフフ、堕ちるのは、私と貴方だけで十分だわ」

抱えていたのは、お輪である
羊水のような液体に濡れながらも、同化する直前のような綺麗な身体で気を失っていた
母を奪われた阿朱羅は、絶叫する

「あああああああああああああ」

黒髪を乱して竜子は、哄笑する

「アハハハハハハハハハハハ！」

その笑い声とともに、竜子の髪が白く染まってゆく

「母さん、母さん！　母さァん！」
「どう！　あなたにも私の気分が少しでも味わえたかしら！」

阿朱羅の身体はみるみるうちに縮んでゆき、元の少年体へと変貌する
竜子もまた、肉の鎧が剥がれてゆく
顔面の半分が骸骨に変わりながら、竜子は笑う

「さあ、虚空……残りは貴方に“あげる”わ……アハハ、これで終わりにしなさい、さあ、“いきなさい”、虚空！」

変わり果ててゆく竜子の、檄に
虚空は立ち上がれず
されど、槍にすがりつきながら

腕を掲げた
「死人がよく口を開きおる」
竜子は頭から地面に勢いよく落下した
どさり、という大きな音に、虚空は振り向きもしない
「本当に、手を焼いたぞ、朱点童子・黄川人よ、まことに長い、人生を賭けた我らの戦いであったな」
未だ驚愕覚めやらぬ黄川人に
虚空は右腕を突きつける
「今一度、壬生川を救え、英霊」
当主の指輪が光を放つ
これまで以上の光の輝きが、辺りを純白に染め上げる
涙が溢れるような、あるいは、笑みが零れるような
そんな光の決壊だ
召還された猛将の霊が、黄川人に迫る
振り下ろされた太刀が、黄川人を幾重にも刻む
壬生川源太の乱斬りだ
その刀は、黄川人を形作っていた生命の糸をついに断ち切った

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7910w/

はてしない物語＝壬生川一族、かく戦えけり＝

2011年11月28日08時48分発行